光と闇の楔

薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇の楔

【Ｎコード】
Ｎ３０９７Ｒ

【作者名】
薫

【あらすじ】
太陽系、第三惑星、地球。しかし人類の愚かさのために一度ほぼ死滅したともいえる星。その災害ののち、四億年の歳月をかけてよみがえったあらたな惑星。
以前は話の中や神話の中のみに存在するといわれていた、神々、妖精、精霊など。
それらが存在する世界となった新たな地球。
かつてとはまったくことなる形式のもとによみがえった地上で繰り広げられる日常。そんな中、世界の情勢に陰りがみえかけて・・・？

※番外編のほうで主人公の正体はネタバレになっております
注意：客観的視点を目指しておりますので、そのあたりが苦手な方はご遠慮ください

４／２０：レイアウト設定がわかったので行間間隔１７５％に設定しました。背景も目に優しい色（薄緑）に設定しました
４／２７：※規約改定により追記：自身のＨＰ上にもＵＰする予定です

はじめに

こんにちわ。薫とかいて「かお」といいます。
以後お見知りおきのほどをよろしくおねがいいたします。
前回、試しにこれの番外編を投稿してみましたがそれの本編の投稿をしてみたいとおもいます
まず、お話に関しての注意事項ですが、
番外編でもちらっと触れていますが、主人公は「人」ではありません。
というか私がおもいつくお話はほとんどその系統です。
一般的に主人公最強?のお話になりえるかとおもいます
そのあたりが苦手な方は閲覧をお勧めいたしません
また、いつも番外編で投稿したような形式を自分のＨＰではおこなっておりますが、
こちらではいろいろと検討した結果、まえがき&あとがきは極力避けていこうとおもいます
以上を納得した方のみ今後ともよろしくおねがいいたします。

光と闇の楔～プロローグ～（前書き）

こんにちわ。とりあえずプロローグです
のんびりまったりと打ち込み＆更新していきたいとおもいます
・・ルビはなぜか失敗するのでルビなしで・・・

光と闇の楔～プロローグ～

どくん。
何が、というわけではない。
だけども確かに、『世界』が揺れた。
『世界』が揺れるなどあり得ない。
だけども確かに『感じた』のも事実。
「王！王！主よ！今の揺れは…っ！」
とにかくも『王』に確認をしなければ。
ゆえにこそカツカツと足音を鳴らしながらも真っ白い宮殿の中を駆ける数名の人影。
彼らのきている服はツギハギのない一枚の布のようにもみえなくもない。
腰のあたりで様々な色の紐のようなもので結ばれており
各自上半身にていろいろと着崩しているのが
見て取れる。
彼らの『王』であり『主』が鎮座しているのは宮殿の最深部。
否、この『世界』の中心部でもある。
滅多とあえるものではなく、ごくわずかな者たちのみが謁見を許されている。
どこまでもはてしなく続くかのような天井を突き抜けるような巨大な扉。
その扉には様々な文様が刻まれており細かな細工が施されている。
一人がその扉に手を当て何かをつぶやくと同時。
ほのかに扉がひかり、ぽっかりと一部分のみに道を開く。
「「王！！」」

真っ白い空間。
その奥に薄いペールのようなものがありその先に彼らの『王』が常

に鎮座している王座がある。
彼らとて『王』に直接目通りできることなどめったにない。
いつもこの謁見室を通して『お言葉』を受けている。
唯一といえば『王』の側近が例外中の例外で『王』の玉座に近づくことを許されている。

いつもならここで自分達がはいったときに何らかの反応がある。
しかし
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
今日にかぎってその反応がまったくない。
と。
ゆら。
玉座のあるベールの中で人影が動くのが垣間見え
あわててその場に膝まづくものの、そこから出てくる人影を目にし思わず目を見開く彼ら達。
「長！」
そこからでてきたのは彼らの長であり、そしてまた『王』の側近たるもの。
「おまえたち……」
こころなしか何か顔色がわるいような気がするのは気のせいか。
ふわり。
風もないのにふわり、と背後のベールが揺れる。
その奥にある王座。
そこに常にすわっているはずの…人影は…みえない……

「う～ん。平和」

光と闇の楔　～プロローグ～

吸い込む空気がここちよい。
「さて。と。うるさいやつらにみつからないうちにとっとといきますか」
きらり、と太陽の光に反射してその髪が一瞬銀色にと光る。
よくよくみれば銀色のような灰色のようなそれでいて白髪のようなそんな髪の色。
長い髪を後ろで一つにたばね、さらにたばねた髪を紐で結び背後に垂らしている女性が一人。
肌の色は曇りのない透き通ったまでの肌色。
服装もシンプルなれどおそらく上質な布で作られているのであろう。
しわ一つなくそれでいて上下の服が質素ながらも女性の容姿にしっくり溶け込んでいる。
整った顔立ちと深い青い瞳は見た人を一瞬虜にするほどの容姿の持ち主。
なれどその服装ゆえかぱっと見た目にはその容姿がさほど目立っていないように傍目には垣間見える。
「まずは、ギルドにいかないと…ね」
ここで生活してゆくためにはまずはギルドにどうしても登録しておく必要性がある。
そのために『首都』にやってきたのだから。
大きくのびをしながらも、
その腰に似合わない長剣をさしている女性はそのまま街のほうへとむかってゆく――

光と闇の楔～始まり～（前書き）

本編開始です

光と闇の楔～始まり～

光と闇の楔　～はじまり～

「Ｔｈｅ　ｅａｒｔｈ　ｄｏｅｓ　ｔｏ　ｒｅｌｉｅｖｅ　ｎａｔｕｒｅ　ｗｉｔｈ　ｐｕｒｅ　ｗａｔｅｒ　ｌｉｇｈｔ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｄａｒｋ　ｈｏｗ　ｍａｎｙ　ｏｔｈｅｒ　ａｎｄ　ｓｅｅｉｎｇ　ｔｏ　ａｌｌ　ｌｉｖｅｓ　～♪」

道行く人が首をかしげる。

おそらくは旋律にのっていることから何かの歌、なのであろう。

王都テミス。

光の主神を神と仰いでいるテミス王国の首都。

この世界はいくつかの国に別れており、その国々が様々な神々を信仰している。

闇の神、竜の神、精霊の神、そして光の神。

精霊の神とは精霊王達のことを指し示す。

闇の神とは俗にいう『魔王』を指し示している、といわれている。

この世界には精霊、魔族、神族といった多々の種族が存在する。

そしてその中に『人』という種族も含まれる。

人という種族はその他の種族とことなり命の期限もみじかくまた力もよわい。

しかしゆえにこそ他者と力をあわせて道を切り開き、

今では大地に様々な国々を設立するまでに至っている。

他の種族がその本能に忠実という特性からいえば人、という種族はそれにあてはまらない。

しかし共通するのはすべての種族には『心』がある、ということ。

しかし…そのことを『人』という種族はおざなりにしているのも…

また、事実。

「あ、あった♪」

見た目十代前半のかなりの美少女、だというのに
なぜかすれ違う人々はあまり気にも留めずに目的地にとたどり着く。
白き石が敷き詰められている道。
白は神々の色の象徴、としてこの国ではあがめられている。
それゆえに建設物などに使われている石も主に白。
石の形をそれぞれに整えそれらをくみ上げて基本、家々は建てられている。
石のみでは強度不足に不安があることからそのつなぎに特殊な土が使われる。
もっともそれらをこなすのは専門職ともいえる技術をもったものたち。
基本、それぞれの専門職につくものはそれぞれがとある組織にと登録している。
その組織を一般的にギルド、と呼び称す。
建設にかかわる職人たちが所属するギルドは建設ギルド。
商人などにかかわるギルドを商人ギルド、などなど。
そしてまたそれぞれのギルドを統括し育成するのがギルド協会本部。
統括している、とはいえそれぞれ各自が独立しているのがこの組織の特徴。
何かがあれば本部のほうから手助けを願うことができる、という形をとっている。
もっともそれぞれのギルド組織には位置づけ、というものがあり実力ごとにその等級が示される。
等級は各自のギルド組織に統一されており、
一番したの等級がG等級、別名、Gランク、と呼び証される。
また、最高級の等級所持者は〇星、といった形でも呼び証される。
もっとも、普通に暮らす人々にはそれらはあまり関係ない、といえ

ばそれまでなのだが。
扉の前には獣の頭のような形をした模様がかれている看板がかかっているその建物。
ギィ。
お目当ての建物をみつけその出入り口の扉をかるく押す。
建物にはいってすぐにいくつかの机と椅子があり、
幾人かがそれぞれ椅子に腰掛けて座っているのがみてとれる。
ちらり、と入り口から入ってきた人物を幾人かがかいまみるものの、
そのまますぐにその視線を元にと戻す。
出入り口からはいってきた人物はどうみても子供。
そのわりに体にあわない長剣が腰にさされているようであるが。
なんだ、ガキか、というような声もちらりと耳にはいってはくるがそれを意に介することもなく
そのまま建物のなかにと足を踏み入れる。
いくつかの椅子、そして机が置いてあるさらに奥。
カウンター式の机のその奥に幾人かがせわしなく動いている。
そちらに近づいてゆくと受付係りと思われる女性がにこやかに
「いらっしゃいませ。ギルドへようこそ。本日は何のご用件でしょうか？」
接客用の笑みを浮かべてやってきた『客』に対して問いかける。
「すいません。ギルドへの登録を申請したいんですけど・・・・・」
ここにやってきた目的はギルドへの登録。
ゆえにこそ単刀直入に用件をいう。
「お客様はギルドのご利用は初めてでしょうか？」
みたところ目の前の客の少女はどうみてもまだ十代のように垣間見える。
となれば大体の見当はつくがとりあえずこれも職務であり規約のひとつ。
それゆえに目の前の少女にと問いかける。

「あ、はい」
「それでは、まずはじめからご説明いたします。お時間はよろしいでしょうか？」
「はい。大丈夫です」
「では、こちらへどうぞ」
このままたったまま説明をしていればほかの客の迷惑にもなりかねない。
ゆえに初心者などに対してはそれようの部屋が用意され、
今後のこともあるがゆえに丁寧に説明がなされる規則となっている。

そのまま案内されるがままに別室へとギルドへと足を踏み入れた少女は移動してゆく――

「ようこそ。ギルドへの登録申請、ありがとうございます。
まずギルドの仕組みをご案内させていただきます」
担当者となっている人物。
黒いローブに身を包んだ男性が時間をおかずに部屋にとやってきて、対面にとすわり説明を開始する。
ギルドへの登録、といってもすぐに登録されるわけではない。
ギルド登録は基本、信頼が第一。
何しろ身分を示す身分証明書の役割をも果たすのでそうほいほいと登録発行はしてはいない。
とはいえ最低ランクについてはあまり審査することもなく登録は可能。
「お客様はまず何のためにギルドへの登録を申請なさいましたか？」
それによって説明する内容がまたかわってくる。
「えっと。学校協会に通いたいのですけど、なにぶん、身内も誰もいなくて・・・・・」
うそではない。
身内、といえるものはいない。

家族に近いモノたちはいれども、彼等にたよるきなど毛頭ない。
そもそも、そんなことをすれば本末転倒。
まちがいなく問題になるのは明白。
そんな少女の返答に動じることなく、
「わかりました。それでは一番簡単なギルドへの登録をまずはじめにお願いいたします。
　とはいえ、こちらの登録は試験を要します」
試験の内容はごく簡単。
いくつかの依頼がある中から自分ができそうな依頼をみつくろい、それをこなす、というもの。
人はそれぞれ得意分野、というものがある。
特にこの世界においては人それぞれ、種族それぞれに分野は分かれている。
「あ、はい」
とりあえず説明はおとなしくきいておくに限る。
それがたとえ知っていることであったとしても規則は規則。
いいつつも目の前にすうまいの紙をざっと広げてくる紙、
といっても獣の皮を薄く延ばして乾かした簡易的なものと、
草を特殊な方法で溶かして乾かして作成したもの。
紙の種類も多々とある。
繊維質が多いい草木などが紙の生成には重宝され、中にはかなりの高額取引がなされているものもある。
今目の前に並べられた紙は一般の人々も簡単に手にはいり、
また作成できる品々の部類にはいる紙ではあるが。
「はい。名前は…ディアさん、ですね。年齢は・・・十三。確かに。仮登録は完了です」
目の前のギルド登録申請にきた少女。
この世界において、十三、という年齢は成人したとみなされる歳となる。
ゆえに、保護下のもとに生活していた子供たちはそれ以後は大人と

しての自覚と自立を促されることとなる。
とはいえ所詮はまだ子供。
庇護がなければ生活は立ち行かない。
親や保護者といった存在がいる子供たちならばいいが孤児などといった存在に対してはまた話は別。
それぞれが国、個人で経営している孤児院と一般に呼び証される施設は余裕がない。
ゆえにこそ十三という歳となれば施設からでていかざるを得ない。
保護を失った子供ができることなど限られている。
知識がある子供はギルドへ赴き自分の今後を決めることもできるものの、
知識のない子供は悪意あるものの餌食となる。
それらを防ぐために国などが未来を担う子供の保護を優先的に執り行っているのがこの世界の実情。
「それでは、この中から自分がやってみよう。という依頼を選んでください」
はじめから依頼をこなせる、などとはおもってなどいない。
これは当人にきちんと責任があるか否か、を見極めるもの。
自分で先を決めることができなければこの後、ギルド員としてもやっていけない。
その場合はどこかの別の要請施設に託す、という方法をとる形となっている。
「じゃあ、これを」
ひとつほど目につく依頼を迷わず選ぶ。
「薬草採取、ですか。ディアさんは薬草に興味がおありですか？」
「あ。はい。独学ですけど。自分でいろいろとつくってみてるので」
なるほど。
親のいない子供にできることは限られている。
が、薬草などは普通にどこにでも生えているものから特殊な場所に生えているものまでさまざま。

しかしその組み合わせ次第によっては毒にもまた精巧な薬ともなる。
それに何より、『術』も使えずお金もない子供にとってまず無難な選択、といえば選択。
人は生きている限りどうしても怪我や病気、というものに対して無縁ではいられない。
自分でどうにしよう、とおもいたてばおのずとどうしても一番初めにまず薬草に目がいくのは道理。
中にはそんな素人の独学で世の中にでた効果な薬もあるのだから一概に独学、といえどもあなどれない。
下手に知識があるものより、
何もしらない自力で知識を得たもののほうがよい結果をもたらすこともある。
そんな今までの経験上、少女の言葉に思わずうなづく担当者。
「しかし。この薬草採取にたいしては注意事項がいくつかあります。それでもよろしいですか？」
「はい」
どうやら意見はかわらなそうである。
まあ、薬草が生えている場所は『生息地』とは離れており問題はないといえばないのだが。
それでもそこに生息しているとおもわしきものの相手があいて。
「それでは、注意事項の説明を開始いたします・・・・・・」
少女・・・ディアが選んだ依頼内容について、
しばし担当者から説明がなされてゆく様子がその場において見受けられてゆく――

「しかし、それにしても・・・・・・」
歳のわりに落ち着いている子供は今までも幾多とみている。
無理をして大人ぶっている子供、そしてまた大人の中でそだったがゆえに甘えることなく育った子供。
しかし今回申請にやってきた子供は今までのどの部類にも入らなか

ったようにおもう。
淡々とした受け答えは逆をいえば大人よりも落ち着いていた。
何よりも独特の雰囲気。
よくよくみれば目鼻もしっかりとととのっておりかなりの美少女だ、というのに。
当人がもつ雰囲気なのかはたまた服装がどこにでもあるような服であったがゆえか。
はたまた、限りなく銀色に近いようにみえた白に近い灰色の髪のせいなのか。
そこにいて当たり前、というような雰囲気をもっていたのも事実。
一人で採取にいく、といって出かけていったが気にはなれどもなぜだか大丈夫、という不思議なまでの確信もある。
「まあ、ああいう子もいる、ということでしょうねぇ～」
十人十色。
人それぞれ。
とはいえいつまでも先ほどの子供にかまってなどはいられない。
彼らをまつものはまだまだ幾多といるのだから。

光と闇の楔～出会い～（前書き）

サブタイトルにはあまり意味ありません

光と闇の楔～出会い～

光と闇の楔　～出会い～

あ～・・・なんか、どっちも騒がしくなりかけてるし。
いつまでも庇護下のわけにはいかないというのがわからないのであろうか。
あのものたちは。
それでなくてもここ最近はどうも甘えがでてきているようにどちらも感じられた。
勝手に行動するものも多々とでてきていたのも事実。
手を差し伸べるだけでは成長がない。
時には突き放すことも大切。
本来ならばどうにかしなければならないのだから。
「さて。と。ここね」
そんなことを思っていると、やがて目的の場所にとたどり着く。
目の前に広がるは鬱蒼とした森とそれに続く山。
山、といってもいくつかの山が連なっている程度でさほど大きなものではない。
山そのものの高さもさほどなく、街道さえきっちりとほどこしてありさえすれば山越えも可能。
もっとも、この山の周辺には街道、といった本格的な街道は整備されておらず
基本自然にできた獣道が街道代わりとなっている。
ほのかな暖かい風がふわり、と周囲には漂っている。
そのことがとてもうれしい。
「……あ」
かさり、と森に足を踏み入れるとほぼ同時。

風にのり間違えようのない『怒りの波動』が伝わってくる。
どうやらこの波動は森の奥のほうから来ているらしい。
「……ほっといてもいいけど……」
きになるのは別の波動。
怒りの波動とともに戸惑いと悲鳴のような波動もまた感じられる。
「……まったく……」
思わずため息がこぼれでる。
その波動から何が起こっているのか簡単に予測はつく。
とはいえこのまま見て見ぬふり、というのも好ましくない。
「なんでいつもいつも……」
ぶつぶつ文句をいいつつも、『波動』が感じられた方向へと彼女は足を進めてゆく……

『るぐおおおっ！』
雄たけびが周囲に響き渡る。
見上げれば周囲の木々よりも大きな巨体。
緑色の鱗におおわれたその体。
その口から相手を威圧するような雄たけびが発せられる。
「…く……」
まさかこれほどまでとは。
たしかに相手は『竜』。
自然の力が具現化した生き物、とすらいわれている存在。
しかしまだ目の前の生体はさほど歳を重ねていないはず。
そもそも人の姿にもなれなければこちらに話してくる様子もない。
その背後のほうでは一回りくらい小さな同じく緑色…こちらは新緑色、といったほうがいいであろうか。
同じような生体が地面の片隅に小さくなりつつねそべっている。
必死で何かを抱き込むようにしているのが垣間見える。

あれを手にいれれば生活は安泰。
噂を耳にしてここまでやってきた。
ゆえにひくわけにはいかない。
ばさっ。
目の前の竜がその背の翼を羽ばたかすと同時に周囲に突風が巻き起こる。
しかし突風、といってもさほど強いわけではない。
そのことがさらに目の前の生体がまだ若いということを物語っている。
まだ若い竜相手ならばどうにかなる。
そう世間一般ではいわれている。
だからこそあきらめない。
否、あきらめきれない。
目の前に魅惑されてやまない『お宝』があるのだからなおさらに。
構えている剣を構えなおし、
「どりゃぁっ！」
勢いをつけてそのまま目の前の竜にむかって走り出す。
対峙している竜もまたその長い首をおもいっきり伸ばし大きく息を吸い込む。
竜の吐きだす攻撃と男の剣技。
それぞれが今まさに解き放たれそうとなったその刹那。
「やめなさいっ！！」
その場に第三者の声が響き渡る。
思わずその声のほうを振り向けばこの場にいるはずのない少女が一人。
片手をその腰にとあてて自分達のほうを鋭い視線で視ている様が見て取れる。
「女！邪魔をするなっ！」
『るうぉっ！』
しかしやめろ、といわれてはい、そうですか。

というわけにはいかない。
ゆえに攻撃をそのまま繰り出そうとし……
『双方とも、やめなさい！といってるでしょぅっ！！』
きいっんっ。
頭に響くような重い声。
頭におもいっきり打ち付けたような痛みを感じ攻撃の手が思わず止まってしまう。
竜のほうも同じであるのかその手を頭にあてて何やら悶えている様が見て取れる。
「あなたたち。何考えてるの？何のための言葉があるわけ？」
冷めた声がそんな彼らに対して向けられる。
人間にそういわれる筋合いはない。
ゆえにこそ竜語にて、
『邪魔をするな』
そういうものの、はたからは竜が何かほえているようにしかとらえられない。
「まったく。そりゃ、まだ若い竜が人の言葉を話せないのはわからなくもないけど。
　脳内に直接言葉を伝える方法もあるでしょうに。それとあなたっ！」
「な…」
いきなり何やら声をかけられ思わず言葉に詰まってしまう。
というかどうしてこんな場所にこんな少女がいるのかすらも皆目不明。
見たところ十代そこそこ、といったくらいであろう。
その青い瞳が静かにそれでいて鋭く竜、そして男を見据えている。
「あなたも何かんがえてるわけ！？そもそも、子供をもつ竜族に対して攻撃しようとするなんて。
　あなたは世界を混乱させたいの！？」
少女の言葉の意味がわからない。

「お…俺の邪魔をするなっ！」
声がなぜかかすれるがそれでもゆずれない。
というかこんな少女にせっかくの金儲けの手段を邪魔されたくはない。
「うるさいっ！そもそも、あなた、自分が何をしてるのかわかってるわけ？
　そもそも、竜族の成長過程とかわかってないでしょう！？
　それと、そっちも！家族を攻撃されていきりたつのはわからなくもないけど。
　そんな怒りの波動をうけた子供がどうなるかわからないわけじゃないでしょぅっ！」
目の前の少女の言葉に思わず目を見開いてしまう。
確かに頭に血がのぼっていたのは事実といわざるをえない。
えないが…いわれてみれば確かに、それに対してまったく考えていなかったのも事実。
「あなたも！いきなり家族を攻撃されて怒らないものがいるはずないでしょう！？
　何のために考える心をもってるわけ！？あなた馬鹿？」
「なっ！馬鹿とは何だ！馬鹿とはっ！」
「馬鹿は馬鹿、よ！あなたはなら、自分の家族がいきなり理不尽な攻撃をうけて冷静でいられるわけ？
　それとも何？まさか人間以外の生物の感情面なんか関係ないっていうわけ？
　そんな傲慢な考えが破滅や壊滅をもたらすのがどうしてわからないのっ！」
どんな生物にも心はある。
それは声にだせない生き物にしても然り。
しかし『言葉』が通じないだけで『人』という種族は他の種族をないがしろにする傾向がある。
それは思い上がりである、と『人』はなかなか認めようとしない。

その結果どんな結末を迎えることになるのか、などと考えもしない。
「金儲けの邪魔をするなっ！」
相手のいいたいことがわからない。
ゆえにこそ思わず口調を荒くする。
「……は～…あんた、ちょっと修行してきなさい」
「……なっ……」
いつのまにやってきたのか目の前にきていた少女が無造作に男の体に軽く触れる。
その刹那。
ぐらっ……
男の意識はそのまま暗闇の中にと沈んでゆく。
「まったく。いつの時代も傲慢なやつがでてくるというか進歩がないというか。
　そもそも、あなたも。冷静に対処しないと子供が大変なことになるでしょうに。
　そうしたらどうするつもりだったわけ？」
どさり、とその場に倒れた男をちらり、と一瞥しただけで今度は目の前にいる竜にと話しかける。
ただ、家族を害しにきた存在を排除することしか頭になかった。
そのあとのことを考えていなかったのも事実。
何ものだ？
というかいま、この目の前の少女は、今、何をした？
ただ、少女の手が男の体に触れた。
それだけで男は今その場に倒れているのがみてとれる。
そしてまた、少女の視線はまっすぐに自分にそそがれている。
ゆえにこそ戸惑いを隠しきれない。
どうやら口調的に自分達竜族の在り方を識っている。
そんな感じをうけなくもない。
しかしそのことはあまり一般的に人間達には知られていないはず。
「そんなことより。ほら。怒りの波動を直接にうけたその余波をど

うにかしないと」
戸惑う竜をそのままに、竜の背後にいた小柄な竜のほうにと少女は足をすすめてゆく。
敵意は感じられない。
というか体がなぜか動かない、否、動かせない。
「まったく。あなたもこまった伴侶をもったものね。あなたのほうは平気？」
そんな戸惑いにあふれた竜をそのままに、小柄な竜のほうへ近づき話しかける。
『きゅおぉ……』
あなたは……
伴侶たる彼から発せられる波動から子供を守ることで必死だった。
その力のすべてを子供を守ることにそそいでいた。
そんな中、目の前に現れた一人の少女。
しかしどうみても普通の人、とは到底思えない。
彼女の雰囲気は人のそれ、とは言い難い。
周囲の自然に当たり前のように溶け込んでいる、そんな雰囲気。
頭に血がのぼっている彼のほうは気づいていないようであるが。
「よく頑張ったわね。あなたにまとわりついている『負の気』をとりあえずとり除くわね」
ふわっ。
目の前の少女がそういうと同時に優しい風が体を覆う。
それとともに先ほどまで悩まされていた『負の力』が霧散されていくのを感じ取る。
「子供のほうは大丈夫みたいね。まったく。まだ形勢されていない時期によくない気にあてられたら。
　どんな結果になるのかわからないわけじゃないでしょうに。
　あなた、子供に枷を背負わすきだったわけ？」
いまだに立ちつくしている竜に対して呆れた口調で問いかける。
下手をすれば破壊を好む生体として誕生させかねない愚かな行為。

竜族の誕生は周囲の環境、そして自然界の気の動向による。
自然の気が満ちている箇所で彼らは誕生し、そこそこの自然の力を具現化した存在として誕生する。
両親がたとえば地の力をもっていたとしても、
子供を産み育てた箇所が水の加護が多い場所だとすれば、
おのずとその子供は水属性の力をもつ竜として誕生する。
しかしそれは裏を返せば自然の気が乱れているところで誕生したものはその周囲のとおりになる。
つまりは、戦乱の中で負の力に満ちた箇所で生まれた竜は戦乱を好む竜として。
破壊と殺戮の気が充満している中ではそのような竜として。
そしてまた、まだ形勢されていない竜族の幼体は周囲の『気の変化』に敏感。
先ほどのように怒りの波動といったような『破壊』に近い気を間近でうけたとすれば、
その子供が誕生したときにその効果は劇的に表れる。
常に気がたかぶり、理性的に物事を考えることのできない竜として誕生しうることもある。
竜族は生まれながらにそのことを本能的に知っている。
だからこそ母親たる母体となった竜はそれらのことから我が子を必死で守り抜く。
自身の力のすべてをこめて。
子供が健やかに誕生してほしい、とおもう親心はどんな種族でもかわらない。
「そもそも。あんな人間にはいられないようにどうして周囲に相談して結界はってもらってないわけ?」
至極もっともな素朴な疑問が少女の口より発せられる。
普通、子供が生まれる時には周囲の自然と協力して簡易結界もどきを張り巡らせるのが定番。

「…まあ、まだわかいからそこまで気がまわらなかったのかもしれないけど……」
少しは考えてほしいものである。
というか周囲も周囲。
どうしてそのことを注意しなかったのやら。
「あなたたちもどうして注意しなかったわけ？」
その言葉をうけて周囲の木々がざわり、と揺れる。
『ぐるぉ……』
女…言霊使い…か？
はっと我にと戻り、そんな目の前の人間の少女にと問いかける先ほどまで戦闘体勢にあった竜。
言霊使い、と呼ばれる人間がいるのは知っている。
しかし人の中でその存在はまれ。
ほとんどが自然とともにあるエルフなどといった存在に限られている。
そうきいている。
言霊使い。
文字通り、その言葉に力を込めていうことにより相手の存在とわずに意思を疎通させることができるもの。
そしてその言葉に力をこめることにより相手の動きなどを止めることも可能といわれている。
「そんなことより。あなたはそこにすわりなさいっ！
　そもそも自分の家族を窮地においこんでどうするのよっ！」
いわれて思わずその場に座り込む。
自分が座ろう、とおもったわけではない。
むしろほぼ反射的に座ってしまった自分の行動に驚きを隠しきれないのも事実。
「まだ若いからって言い訳はきかないんだからね？わかってるの？」
相手のいいぶんはまさに正論。

それはわかっている。
わかっているが…どうして人間の少女に説教されなければいけないのか……
竜たる彼にはいまだに理解不能……

どうして。
どうしてこんな。
ただ自分は普通に生活していたのに。
やっと子供ができてこれから家族で生活してゆく。
そんな矢先。
いきなりの襲撃。
目の前にあるのは惨殺された大切な家族。
そして目の前にはいきり立つ人々。
理由は簡単。
ただ、お金というものがほしいがための強硬。
ゆるさない。
ゆるせない。
家族をかえせ。
子供をかえせ。
そして…平和な生活をかえせ。
「……はっ！？」
「目がさめた？」
頭の中がぐるぐると回る。
確かにさっきまで自分は家族をころした人間達に対して……そこまでおもってふと気付く。
「どう？すこしは理解できたかしら？他の生き物も同じような感情をもっている、ということに」
そこまでいわれてようやく意識がはっきりしてくる。

たしか自分はお金ほしさに竜に挑んでいった。
竜族の卵、そしてまたその鱗や牙はかなりの高値で取引される。
まだ年若い竜ならばつけいる隙がある、そうおもって挑んだのは自分。
いきなり家族を害されそうになった相手の気持ちなど微塵も思わなかった。
しかし今の自分かそれがわかる。
「…いま…のは……」
自分の手をゆっくりとみるとそこには見慣れた手。
さきほどまでの自分の手は人あらざるものであったはず。
「あんた…今、この俺に何を……」
考えられるのはただ一つ。
目の前の少女が自分に何かをしかけた、ということ。
「ただ、別の視点から感じる夢をみせただけよ。大地の記憶を元にして、ね」
大地にはこれまでの生の営みにおける様々な記憶が刻まれている。
今、彼が垣間見ていた夢はそのうちのひとつ。
すべての感情、すべての願い、それらすべてを大地はうけとめいきづいている。
「あんた…言霊使い…か？」
他の記憶を見せるなど普通はできない。
だがしかし、一部の能力をもつ者であるならばそれは可能だ、と彼とて聞いたことがある。
もっとも、実際にそれを経験したことがあるかどうかは別として。
「自分の過ちがわかったなら、彼らにきちんとあやまりなさい。
　それとも、何？自分の過ちすら認められないようなそんな小さな器しかもちあわけてないわけ？」
先ほどまでの自分ならば相手のことを考えるなどまったくしなかったであろう。
だけども自分はわかってしまった。

否、我が身のことのように経験してしまった、といっても過言ではない。
先ほどまで自分が夢の中にしろ意識の中にしろ。
経験していたのは『自分自身が竜となり人に虐げられ復習する』、というものだったのだから。
人は自分が経験しなければ他人、もしくは他者を思いやることをどうしてもないがしろにしてしまう。
しかし経験を重ねなくても思いやりの心、というものは誰でももちあわせている。
それを表にだすかまた感情のかなたにおいてゆくかは人それぞれ。
ふと起き上がるその視線の先に
何やら座りこんだ竜といまだに体を丸くしてかがんでいる竜の姿が目にはいる。
目の前の竜が攻撃してきた理由。
それはいたって簡単。
卵を奪い、そして彼らからうろこや牙を奪い取ろうと、命を断とうとしたにほかならない。
生きるため、という理由ではなくただお金がほしいため。
楽をしたいがため。
お金がほしいのならばまっとうに働けばいい。
また、牙や鱗がほしいのならば話しあいによってもらいうけることも可能。
なのに実力行使、とばかりに『殺す』方法を選んだ。
ここにいる竜の家族は人に害をもたらせたわけではない。
逆をいえば竜が住みついた森や山は生き生きと活性化する。
人に害をもたらした生き物ならば人は『害あるもの』として駆逐しようとする。
しかし…ただ楽しみだけにまた『他者』を殺すもまた人、という種族。
心の持ちようによって人は自然の一部になることも、また自然と反

発する生き物になる。
そして…自然と反発してしまった生き物はやがて自ら自滅の道をたどる。
もっとも、そのことに気付かず自滅してゆく輩は少なくない。
「しばらくきちんと話しあいなさい」
話しあえ、といわれても。
どういっていいのかすらわからない。
そもそも、目の前の竜は人間の言葉が話せるのか否なのか。
しかし人の言葉は理解できているであろうことくらいは憶測できる。
「……もうしわけない……」
目の前にいる竜からは先ほどまでの殺意がまったくもって感じられない。
自分が『夢』をみていた間に何があったのかはわからない。
『……私のほうこそ申し訳なかった』
自分がきちんと対策をとっていなかったのがそもそもこの結果を招いた。
相手だけがわるいわけではない。
ゆえにこそ目の前の男性の脳裏にそのまま言葉を念波に変えて話しかける。

しばし、竜と、そして男の話しあいが森の一角において見受けられてゆく……

光と闇の楔～入学試験と仮入学～（前書き）

一人称でやれば楽なんですけどあえて客観的な視点から挑戦しております・・

光と闇の楔～入学試験と仮入学～

確かに自分達で考えて行動することは大切。
しかしやはり上の判断を仰いで行動したいのも事実。
実際、かの判断に間違いなど今までなかったのだから。
「……いったい、どちらに……」
……まずは、魔界側に確認してみて、それから精霊界等。
もしかしたらお一人で外交にいかれたのかもしれない。
そんなかすかな期待をこめつつも、しばし殻の『王座』をながめてゆくいくつかの影……

光と闇の楔　～入学試験と仮入学～

「しかし…あんた、いったい何なんだ？」
先ほどのことといい、わからないことばかり。
いくら話し合ったとしても完全に和解できるはずもなく。
相手のほうもこれ以上かかわることにより子供に影響がでるのを懸念した。
結果としてそのまま男性を連れて間にはいった少女とともにその場を後にした。
正確にいえばほぼ強制的にその場から連れ出された、といっても過言ではない。
さらさらさら。

目の前にはさらさらと流れる小川。
「私は私。ならあなたは自分が何なのかいえるの？」
そんな男性の言葉にさらっと言い返す。
「まあ、いきなり攻撃をしかけたあなたをこの森の自然が許すはずもないし。
　迷いたくなかったら私と一緒に森をでたほうが得策だとおもうけど？」
事実、森の守護ともいえる竜族に手をかけようとした人間を自然が許すはずもなく。
そのままほうっておけば間違いなく男性はこの森で下手をすれば息絶える。
それゆえにこの男性を伴ってとりあえず目的の場所にとやってきているのだが。
「さて、と。これくらいかな？」
目の前で起こったことが理解不能。
少女が大地に手をつけて何やらつぶやいたとおもうと周囲に茂る薬草がいきなり生い茂った。
その光景を目の当たりにしてしばし呆然としつつも少女に語りかけた男性に対し、
さらっといいきっている目の前の少女。
たしかに伝え聞く『言霊使い』の能力は他者の能力などに影響を及ぼす云々、とは聞いたことはある。
そんな唖然としている男性を尻目にさくさくと生い茂った薬草を採取している少女の姿。
「よし。終わりっと。それじゃ、いきましょうか。おじさん」
「おじ…俺はまだ二十代だぞ！？」
たしかに無精ひげなどをはやしているがまだ二十代なのにおじさん呼ばわりされたくはない。
「なら無謀者さん？」
たしかにお金に目がくらんで竜族に挑んだのは事実。

ゆえに、ぐっと思わず言葉をつまらす。
「いい大人なんだから、もう少し思慮深くなることを私としては勧めますけどね」
どうも最近は目先の欲などにおどらされるものが増えているような気がする。
だからこその忠告。
青い瞳に太陽の光に反射するかのような銀色に近い髪の色。
このような髪の色などみたことがない。
だがしかし、目の前の少女の言葉に対して言い返せる材料が男にはない。
「お金が必要ならそれなりに自分でどうにかしないと。
　小さな子供でもそれくらいはわかってるとおもうんですけど」
ぐさっ。
さきほどから目の前の少女は耳に痛いことばかりいってくる。
「そういうあんたはいったい何を……」
「みてわかりません？薬草採取です。ギルドの依頼をうけてるんです」
事実、彼女はギルドの依頼をうけてここにきた。
そのことに嘘偽りはない。
「さて。採取完了。それじゃ、森をでましょうか」
「あ…ああ」
何だかはぐらかされたような気もしなくもない。
「…そういや、あんた、名前なんていうんだ？」
今さらながらにそういえば目の前の少女の名前をきいていないことに気付いて問いかける。
「女性に名前をいきなり聞くより、まずさきに自分がなのるのが礼儀ではないですか？
　そんな行動をとっていたら永久に伴侶をみつけることすらできませんよ？」
「なっ！大きなお世話だっ！」

いきなり、伴侶、ときたものだ。
たしかに自分には彼女はいない。
しかし目の前のしかも先ほどあったばかりの子供にそんなことをいわれたくはない。
「わめいてないでいきますよ。それともこの森の中で迷って餓死します？」
「なっ！お、おいっ！」
男が叫んでいる最中、そのまますたすたと歩き出す少女をあわててておいかける。
彼とて理解はしている。
いくら鈍い自分でも森全体が入ってきたときと異なり
雰囲気がまったく異なっているということくらいはきづいている。
そしておそらくは、目の前の少女のいうとおり、
少女とともにいなければ自分は森からでることはできないであろう。
それは直感。
すたすたと先をすすむ少女をあわてて追いかける男の姿が、
森の一角においてしばし見受けられてゆくのであった……

「はい。登録を確認いたしました。それでは学園の入学試験の内容をご案内させていただきます」
入学試験をうけるにあたりギルドで一つの依頼をうけ、その品を先刻ギルドへと持ち込んだ。
その依頼中に一人の男性と知り合ったりもしたのだがすでに森から出ると同時に別れている。
男からしてみればいろいろと聞きたいことがあったのだが、
少女の姿を見失ってしまったのだから仕方がない。

少女はそこに『いた』のに男性が気づけなかった、というのを別として……

ギルド協会が経営しているこのギルド学校協会。

学校の背後に協会、がついているのは同じくギルドが経営しているからに他ならない。

つまりはギルド協会の一端であることを物語っている。

もっとも、判りやすい名前にしたほうがいいだろう、というのでこの名称になっているのだが。

今、彼女…ディアがいるのは学校ギルド支部の出張所。

いわば出先の機関のような場所。

冒険者ギルドからこちらにきたのはつい先ほど。

ギルドの受付から案内状を渡されここにきた。

「どの学科がいいとか特にありますか？」

「いえ…特には……」

ギルドが経営している学校は様々な分野に及んで学科をかまえている。

「それでは総合科が無難ですね。学校の説明はおききになりますか？」

「はい。おねがいします」

周囲には数名、同じ目的で説明をうけている人々の姿が目にとまる。

中にはすでに成人しているような人も見受けられていたりするがそれはそれ。

それは別に珍しいことでも何でもない。

「それでは、それぞれの学科の説明をしたいとおもいます」

今、彼女達がいるのはとある一室。

簡易的に並べられた机といす。

その椅子に座り目の前の教壇らしきものにたっている人物の説明をきいている状態。

「それぞれの学科にはギルド同様、ランクがあります」

こちらは、A～Dクラスと分かれるようにとなっている。

一般的にＡクラスはそれぞれが得意分野として極めよう、もしくは資格を取りたい人達が在籍している。
簡単に説明するならば、建築業を行いたいものは、建築家のＡクラス、ということとなる。
もっとも、Ａクラスにいけるのはすでに基礎ができているものたちに限るのであるが。
逆にＤクラスの場合は基本的な基礎知識から教えをこうことになる。
そして、今、ディアが説明をうけた総合科、とは言葉通り、様々な学科を総合したもの。
簡単にいえば浅く広くそれぞれの知識を学ぶ学科でもある。
そこから自分が興味を抱いた学科を選考し、別の学科に移籍することは可能。
この場にいるそれぞれがそれぞれにあるいみ判りやすい格好、といえば格好をしている。
一人はローブを全身にまとっている男性。
一人はその筋肉質から体力系？の仕事につきたいであろう、そんな人物。
ちなみにどうみても年齢は成人年齢を超えているようにみえるのはおそらく気のせいではない。
そして一人はおそらく十代後半くらいであろう。
それでいて分別を踏まえたような表情をしており、
凛とした姿勢を崩さないままに説明を聞きいっている。
ちなみにその手元にはしっかりと、『世界の歴史』という題名の本が握られている。
一人、これといって特徴のない格好をしているのがディア。
とはいえよくよくみればその容姿も他のものよりも格段に勝っているのだが。
なぜか周囲に溶け込むようにほとんど目立っていない。
「まず、みなさんには試験をうけていただきまして、それから仮入学、となります。

そして仮入学後の試験を得て、学校への入学を許可いたします」
そうほいほいと受け入れるだけの余裕が組織にあるわけではない。
ゆえにこそふるいはかけられる。
といっても、
この試験に合格しなかったものは補助的な役割を果たしている場所
にと優先的にはいることができる。
もっともそちらのほうは実技を伴いながらの実習ということになる
のだが。
簡単にいえばそれぞれの希望分野の技術師などの元で見習いしなが
ら学ぶ、という形になる。
もっとも普通に入学してもそれを希望すればその方法をとることも
可能ではあるが。
試験の内容はごく簡単。
全体的に均一された問題に記入するのみ。
世界史。
妖精学。
魔聖学。
薬草学。
魔科学。
総合学。
これらが主な科目となり、総合学は様々な職業などの基本に対する
質問などが問われている。
だいたいこの試験において今現在、
自分がどの分野における知識をもっているのか簡易的にではある
が把握が可能。
自分が何をしたいのかわからないものなどは
よく今現在の自分が最も知識があるであろう部門にいきかける。
もっとも、それから向上心を発揮すればいいがそのまま現状にあま
んじていては先はない。
総合学においては様々な特殊職業などのことにも触れられている。

自分が今どのあたりにいるのか、自分自身をしるのもまた大切なこと。
簡単な説明がなされた後、それぞれに試験の用紙が配られる。
ちなみにこの用紙には特殊な薬品と魔術が使われており、偽造などができないようにとなっている。
この部屋から持ち出したりすれば紙ごと燃える仕組みとなっている。
また、何かに書きうつそうとしても同じく、紙は燃え上がる仕組みが組み込まれている。
ようはどんな内容の試験が出たか詳しく外に漏えいしないがための処置。
とはいえまったく漏えいさせてはいけない、というのではなく。
どんな内容だったのかくらいならば、
細かいとこまで詳しくなければ第三者に受験者達が話すことは可能。
そんな形なのでいうまでもなく機関の一つとして今までの傾向と対策を用いた学院もまた用意されている。
大概はそこに通い、そして本格的に試験をうけるものが多数なのだがそれにはどうしても資金がかかる。
資金力のないものたちは
ギルドから出された試験的な依頼をこなして学校への入学試験の許可を得るしかない。
ギルドは大概誰にでも平等にその門をひらいている。
生きとし生けるものの可能性、というものを開くために。
「それでは、今から試験を開始いたします。できた人から退出してもかまいませんが。
　一応制限時間というものはありますのでご了解ください」
基本的な説明をしたあとにこの場にいる全員を見渡し別の職員が書類の束をもって部屋にと入ってくる。
配られる必須科目は一度にすべて。
自分の得意な分野から片づけてゆくのもよし、ゆっくりととりくむのもよし。

ちなみにきちんと休憩時間、というものも設けている。
ギルドの協会学校の試験は基本、いちにちがかりで執り行われる。
ゆえに問題をなかなかとけないものがいた場合は真夜中にまでおよぶこともある。
「それでは、はじめてください」
時間をどうつかおうがそれは各自の自由。
が、しかしその試験中に参考書などを読んだりする行為があった場合はそっこく失格となる。
まあ、それでも失格となっても再び挑戦する権利は剥奪されていないのだから再挑戦すればよいだけのこと。
「…さて、と。どうするかなぁ～……」
一番無難なのはCクラスに滞在するようにしむけ…もとい、計算すればいいだけのこと。
しかし、ここで数年ものんびりとやっていたらどこから話しが漏れるかわからない。
確か今までにも半年、もしくは一年くらいで卒業したものもいたはず。
「やっぱり。あれくらいがちょうどいい…かな？」
うん。
そう一人ごとをいいつつも一人納得しおもわずうなづく。
「…すこし、あそんでみますか…ね♪」
ふと面白いことを思いつき思わず笑みを浮かべるものの、そんな彼女の姿に誰も気づかない。
「さて…と。どれだれの存在がこれの解釈、できるか楽しみね♪」
ふふ。
それに何よりもきちんと【彼ら】が役割を果たしているのか見分ける基準にもちょうどよい。
この世界で共通している文字と、かつてあった文字。
それらを組み合わせて問いの意義と答えをかきこんでゆく。
「あまり時間早くても目立つし…しばし、のんびりとしておきます

か」

どうせまだ昼時にまでは時間がある。

昼時に合わせて試験用紙を提出すればよい。

部屋の前で様子をみている監視係りに気付かれることなく、

しばしほほ笑む少女の姿が見受けられてゆく……

光と闇の楔～幕間～（前書き）

次回から本格的？にお話しが再開されます
今回はその幕間劇のようなもの
なお、打ち込みストックはこれまでですのでのんびりと打ち込みしだい次回投稿させていただきます

光と闇の楔～幕間～

光と闇の楔　～幕間～

かつてこの世界は疲弊し、壊滅状態へとむいていた。
そのとき世界…惑星全体を大災害が襲い…否、星そのものが震撼した、というべきか。
星の鼓動はその星上の生命をことごとく一度無と化した。
そして新たに創りだされた理。
自分達だけの種族だけが滅ぶのならばいざしらず、他の命までをも道づれにしたかの種族。
自分達のみが正しい、とどうしてそう思えるのか。
それでなくてもそれで滅亡の道をたどっていった存在達は数しれない、というのに。
そして…それらの過ちを繰り返さないためにとあるものたちが生み出された。
否、彼らは罰をうけている、といったほうがいいのであろうが……
「伝道師…ねぇ。しかしなんでそんなたいそうな人がこんな王都に？」
「何でも今世界中がおかしいだろ？そのために知識の協力をもとめたんだそうだ」
世界中にそう数はいないとされる【伝道師】。
その知識の豊富さは誰もが憧れを抱く存在であり、もっとも神に近しいもの、とすらいわれている。
実際にまちがいなく彼らは神の加護をうけているのであろう、というのは世界中の常識の一つともなっている。
そんな人物がやってくる、という噂が真実だ、と判ったのはつい先日。

ゆえに話題にものぼる、というもの。
「ま、たしかに。最近世界の様子がおかしいのは確か…だな」
ここ数年、いやしばらく一段と魔物の数が増えている。
そして本来、
世界の理が正しく起動していれば存在するはずのない生き物の姿すら見受けられ始めている。
「やはり、あれかねぇ？天界と魔界の地上介入…が原因、なのかねぇ？」
ある国では天界のものが地上のものへと手をかしている、とまことしやかに噂されている。
そしてまた、とある国では魔界のものが地上のものと手をむすんでいる、などと。
それもすべては眉唾のようで、それでいて現実味を帯びているのも事実。
実際にここ最近、たしかに世界情勢はかなり悪い。
「ゾルディが異様に出始めているのも原因の一つ、だろうなぁ」
「だな」
おもわずそんな会話をしつつも黙りこんでしまう。
ゾルディ。
この呼び名を知らないものはこの世界にはいない。
それらは様々な存在の【負】の【心】が一定量を超えることにより生み出される命。
その容姿はさまざまでその【核】となった心のよりどころにと依存する。
普通ならばそれらが生まれたときにどこからともなく魔界より魔物があらわれてそれらを喰らう、のだが。
その結果、それが生み出された後には下手をすれば何ものこらない、という現状すらおこりえる。
「ほらほら。あんたたち。何暗い話ししてんだい！」
どっん！

そんな会話をしている男たちの前にどんっと置かれる山もりとなっている皿に盛られた野菜料理。
皿には色とりどりの野菜がもられているが、主に緑色の野菜が多い。
栄養が高い、ということもありロッコリ、という野菜が主にふんだんに使われている。
ロッコリはこのあたりでは定番の野菜の一つでゆでても煮ても焼いても重宝する野菜の一つ。
ちなみに生でもたべられるしその花はすこし甘みをおびており、ちょっとした甘味にもなる。
ゆえに庶民の味方、としてかなり普及している野菜の一つ。
「他にもお客がいるんだから、あんまりしんみりとした話しをするんじゃないよ。」
　こういう場では明るい話題をするもんさ！」
そういいつつも、先ほどまで話していた一人の男性の肩をばんばんと叩く恰幅のいい女性。
彼らが今いるのは王都の中にある、とある食堂兼宿屋。
ちょうど大通りから少し入った先の中通りの位置にあり、
ギルド案内場もこの建物の中にと設置されている。
ギルドそのものはそれぞれの部署によって建物の位置が異なっており、
こうして案内場のようなものがなければ迷うものが出てきてしまう。
この宿は主にギルドに登録しているものたちがよく利用することから中に案内場が設置されている。
「まあ、そうかもしれないけど。あ、そういやよ。ルードのやつがさ、竜退治あきらめたらしいぜ？」
宿の女主人の言葉に苦笑しつつも、ふと思い出したように話題を振る。
「というかあいつ、本気で竜退治にいってたのか！？」
たしかにあの場に竜がいる、と教えたは教えたが……
しかしあれは酒の席での話しで本気にするとは思わなかった。

ゆえにこそ思わず呆れ口調で叫んでしまう彼の気持ちは判らなくもない。
「……あいつ、この町というか王都を破壊させるつもりだったのか？」
「たぶん、危険性、まったく考えてなかったんだとおもうぞ。オレは」
「「……は～……」」
あきらめてくれてよかった。
いや、本当に。
たしかに、かなりの金額になる、と教えたは教えたが……
まさかほんとうに実行に移すなど。
少し常識にあてはめて考えればわかることであろうに。
いくら相手がまだ若い竜であろうとも、その威力は絶大なもの。
…下手をすれば森の加護をうけているであろう竜の機嫌を損ねれば、このあたりいったいの農作物の収穫は数年以上にわたって見通しがたたなくなってしまう。
それほどまでに竜、そして自然界とのつながりは深い。
それがわかっているからこそ二人しばし見つめ合ったのちに盛大にため息を吐き出す。
と。
カラッン。
建物の出入り口の扉が開かれ、その上部につけられている鈴が音をならす。
「あれ？ジーク達じゃないか。こんなところで何してるんだ？」
それと同時にはいってきた男性が、
ふと店の中…食堂を兼ねている一階で食事をしている二人に話しかけてくる。
「おお。ラッキ～じゃないか」
「ラッキーいうなっ！俺の名前はラック、だっ！」
そんな人物の姿をみとめ、そんな声をかけている、ジーク、呼ばれ

た男性に対し、
そんな彼にとすかさず突っ込みをいれている男性の姿。
ちなみに彼は古代言語より何を考えたのか、
親が幸運、ということを示す、ラッキー、という言葉をもじり、ラック、という名を与えられている。
しかしその意味をしるもののほとんどは彼のことを【ラッキー】と呼ぶ。
名前、というものはそうそうかえることなどできはしない。
…まあ、偽名をつかえばそれはそれですむのであろうが。
「まあまあ。二人とも。それよりめずらしいな。お前がここにくるなんて」
彼はこういった場所にあまり顔をだすことはしない。
ゆえにこそ先ほどまでジークと呼ばれた男性と話していた別の男性が問いかける。
「ん？まあ、な。ちょっと興味がある話しをきいたんで…ちょいと人探しさ」
？？
「「人探し？？」」
そんなラッキーことラックの言葉に思わず顔を見合わせる男二人。
「そうか。ついにお前にも春がきたかっ！」
「ちがぁうっ！ルードからちょっと気になる話しをきいたんでな」
つい先ほどまで話題になっていた人物の名前がでて思わず目をぱちくりさせる。
ラックとルークはいわゆる幼馴染であり、いろんな意味でこの町ではかなり有名。
猪突猛進、思いこんだら一直線型のルークに、情報収集に余念がない慎重極まりないラック。
この対局、ともいえる二人が親友の立場なのだから世の中よくできている。
「おまえらも聞いたことがないか？…どっかの田舎からでてきた旅

人ってところかとおもうんだが」
彼らの耳にもはいっていない、となる森からでてすぐに別の場所にいった可能いもある。
少なくとも。
もっとも、
彼がどんな人物だったのか詳しく相棒から危機だせていればそれは杞憂だとわかったであろう。
「そもそも、何でさがしてるんだ?」
「それがさぁ。どうもルードのやつの様子がおかしいから問いただしたら。
あいつ、森の中で【言霊使い】にあったらしいんだよ」
言霊使い。
文字は言葉を現す、というがまさにその通り。
言葉に力を込めることにより、相手の存在を問わずに意思を疎通させることができるもの。
そしてその言葉に様々な力をこめることにより数多の現象を起こすことができる、とすらいわれている。
「おいおいおい。じゃあ、何か?この町には伝道師だけじゃなくて言霊使いまでいるってことか?」
普通はあり得ない。
そもそも、特殊な能力をもっているものは国に属するか様々な機関に属しているか。
中には席を持たない根なし草的なものもいるにはいるが。
「ま、森の外でわかれたらしいけどな」
そういいつつも肩をすくめるラックの台詞に。
「そうか。…ってちょいまていっ!
まさか、ルードのやつ、森にいったのか!?あの例の森じゃないだろうな!?」
果てしなく、あの森であってほしくない。
「いや。あの森にいったんだったら今ごろこの町は火の海か大混乱

じゃないか？」
竜に喧嘩を売りにいったと仮定する。
もしそうならば、
竜の激怒をかい、その竜の怒りの負の波動でゾルディが生み出されていなければおかしい。
そして間違いなくその生み出された新たな脅威は手近に存在している街を攻撃する。
だからこそ普通の人は竜にちょっかいなどかけないのだが……
しかし世の中、お金に目がくらみ後のことなどかんがえないものなど多々といる。
ゆえにこそそういった事例はなくならない。
「ま、言霊使いにあったっていうのも当人の勘違いかもしれないしな」
事実、話しをきけばいきなり消えたとか何とかいっていた。
普通の人がいきなり消えるなどできるはずはない。
何らかの術をもちいるものならばそれは可能であろうが。
しかしそんな術がつかえるようなものの話しなど今までこの周辺ではきいたことすらない。
「そういえば。噂にしかすぎないけど。ある組織が竜の卵を高額で買い取ってるとかいう話し。
あれってどうなったんだろう？」
ふと、竜の話題になりそのことを思い出し何となくだが口にだす。
「ああ。あれならその組織の一員とおもわれるやつが近くの村に潜伏してたのを捕えられた。
って話しをきいたぞ？しかし本当に竜を戦闘員にできれば勝てる奴はなかなかいないだろうけどな」
たしかに。
戦力に竜族を用いればそんじょそこらの術師などでは太刀打ちできない。
かといって竜を葬るほどの術を使える術師もそうそういるわけでは

ない。
よくて【意思を疎通していうことを聞いてもらう】くらいならばどうにかできるであろうが。
しばし、たわいのないそんな世間話をしつつも、
二人から三人になった彼らはそのままその場にて話しこんでゆく――

彼らが話しこんでいる同時刻。
とある見渡しのいい大地にさあっと風が吹き抜ける。
と。
とっん。
ふわり、とどこからともなく再び風が吹き抜けその場にたたずむ一人の少女。
「さて…と。あのこがこっちにいるって大姉様からきいたんだけどなぁ～」
この地にくるのも久しぶり。
滅多とあまりいききはしないがこのたびは特別。
「何かまたわけてもらえないかな～」
この地で再び命が失われる可能性があるらしい。
その魂をすこしばかり融通してほしいのもある。
自分の【世界】はかつて分けてもらった魂でだいぶにぎわってきてはいる。
やはりもともとある成分に合わせての進化になっているにしろ。
それでもかつてこの地に住まうものたちが開発した装置はダテではない。
その仕組みを把握しているからこそ世界の改革も進んだ。
「とりあえず。クイーンの代替わりがそろそろあるらしいし。それまでにはどうにかしたいしね～」
代替わりどきには何かしらの影響が数多の【世界】に及ぶのは周知の事実。

だからこそそれに備えたい。
水色の髪がふわり、と風になびく。
「…とりあえず。ここの彼らに気付かれないようにあの子と接触はたさないと…ね」
ゆらっ。
そうつぶやくと同時に水色の髪に水色の瞳をした少女の姿は瞬く間にかききえる。
まるで今までそこに少女がいたのが嘘のように……

「う～ん。二の姉様が来てるのはわかってるけど……今はなぁ～……」
気配でわかった。
しかしあちらをほうっておいてもいいのだろうか？
そんな思いがふとよぎる。
まあ様々な核ともいえるモノを創りだしているのでそうそう混乱はおこらないであろうが。
かといってあまりうろうろされて【彼ら】にみつかるのはよしとしない。
「とりあえず、入学試験の結果もわかったことだし。…少し話し合いにいきますか」
とりあえず目標にしていたCクラスに振り分けがきまった。
明日からすぐに授業が開始される。
とりあえず必須科目を習った後に旅にでるのが一つの目的。
このままほうっておいて各自の対応と反応を見極めるか。
それともさくっと片づけるか。
一番いいのは一度大規模な災害なり、争い等が起これば【悪意】をこれ以上広げることもないであろう。
今は平和であるがゆえにどうしてもよからぬことを考えるものたち

がでてきているのは一目瞭然。
ならばこのあたりですこしはお灸をすえても問題ない。
「代替わりまでどうにかしとかないと。それこそ余波でほとんどの生命体が危険になるしなぁ～」
それは確信。
それでなくても【次代】が生まれたときの余波ですら大規模な災害がおこった。
…まさかそのままあれが直撃する、とはおもってもいなかったが……
所詮自分達は【クイーン】の中にて生きているにすぎない。
そしてまた、クイーンもそれ以上の【意思】の一つとして存在しているに過ぎない。
それがわかっているからこそ万全をきしておきたい。
「そういや、大姉様が今度話しがあるとかいってたけど…なんだろ？」
考えていても仕方がない。
ふわり、ふわりとたゆたっていてもどうにもならない。
しばし【内部】より【外】を眺めつつも、意識を再び外へ。
できうれば、かつてのような判断をしないですむことを望みたい。
しかしそれはすべて【かれら】の行動次第……

「……代替わり？」
何だかものすっごく不安になる言語が伝わってきたのは気のせいか。
おもわずベットに腰かけつつも頭に手をやり再度確認するために問い返す。
あ～、そういえば今日は月がきれいだなぁ。
そんなことをふと思う。
おそらく現実逃避をしたくなるのは自分だけではないはずだ。

それだけは彼とて確信をもっていえる。
『おい。尚人（ナオト）。現実逃避すなっ！』
きぃんっ。
そんな彼の魂に直接語りかけられるようなその言葉に思わず頭がいたくなる。
「つうかっ！意思から教えられてた代替わりの影響って馬鹿になんなかっただろうがっ！
　そもそも、他のやつら、代替わりのことについてしってるのか！？」
『いや。それとなく調べてみたら知らないみたいだ』
「・・・・・・・・・・・・・・・」
おそらく、彼らが知らない、となればまちがいなく、天界、魔界、そして精霊界とも知らない可能性が高い。
否、確実に知らされていない。
そもそも自分達という【存在】はこの【存在】として【創りなおされた】ときにそれらの知識だけは埋め込まれている。
以前、他の意思の元にいったとき、その代替わりのときに恒星ごと消滅した、という話しも聞いている。
「・・・やばくないか？それ？」
『非情にまずい。というかおそらく最近、負の力が増してきているのもそれの影響なんだろう。
　どの【界】にも【意思】がいない、ということは【大地】にいるお前達のほうで意思と連絡とれないのか？』
「むちゃいうな。意思が気配けしてたら誰にもわかるはずないだろ？」
かつての同志であり仲間からの通信。
この存在になる前の名前で呼ばれるなどもはや仲間以外にはありえない。

それほどまでに長い長い時が経過している。
そもそも、意思は世界そのもの。
ゆえにここそこの惑星そのもの、といっても過言でないようなそんな存在を
どうやって探し出せ、というのだろうか。
たしかにあの性格からしてどこかに器の姿を模して姿を現している可能性はかなり高い。
というかむしろそれは確定事項。
しかしそれがどこにどのような形で姿を模しているか、などとは当然誰にもわかるはずがない。
「他の伝道師達は？」
『それぞれ連絡中だ。大姉上どのからもその伝達があった』
「…まじかよ……」
は～……
その伝達をきいておもわず盛大にため息がでてしまう。
「……【サン】が動いてる。というのは間違いないようだな……」
『……だな。とりあえず、【アース】を探し出すのが先、だな。
【マーキュリー】達もおそらく動き出すだろうしな』
なんだかしばらくゆったりしていたのにどうやらこのたびはゆっくりとはできないらしい。
「…わかった。とりあえず近いうちにテミス王国のほうにいくから。それとなく調べてみるわ」
『たのむ。こっちも天界のほうをもうすこし調べてみる。精霊界のほうのやつらもそういってたし』
「わかった」
ふっ。
必要最低限の会話をかわした後に【つながり】を断ち切る。
彼ら…【伝道師】がもちえる能力の一つ、【仲間同士の繋がり】。
彼らは基本、

一つの意思のもとにくくられていることからそれぞれが魂の意思のみで会話することが可能。
「…なんだかなぁ～……」
また、もしかしたらたくさんの死をみることになるのかもしれない。
以前、【次代】が誕生したときなどはこの【世界】に巨大隕石が降ってきたらしい。
…その結果、何がおこったのか。
かつて平和な世界でそのとき判っていた世界史を嫌でも習っていたがゆえに知っている。
そしてまた、【魂】となってその光景を直接【視】せられた。
「……ま、ここの【意思】が簡単にくたばる…とはおもわないけどな……」
簡単にあきらめるようならばあのときあんなことはしなかったはず。
そのまま静かに消滅をまったはずである。
【今の理】が成立していることから何らかの手をうってくるのは目にみえている。
「…もしかして、きえたの、このため…か？」
それもあるのであろうが、おそらくは。
依存症がではじめた【やつら】に対するけん制であろう。
このたびの情勢はどうなるのか。
そんなことをおもいつつも空を見上げる。
かつてそこにあったはずの月はかつての月ではない。
今、この世界には【二つの月】が存在している。
ほんとうにここが生まれ育った自分達の惑星なのか？とふと思ってしまう自分がいる。
しかしそのきっかけをつくってしまったのがほかならない自分なわけで……
「あ～。考えててもしかたねぇ。とりあえず寝よう、ねよう」
考えていてもしかたがない。
それゆえにそのまま布団にもぐりこんで横になる。

王都テミスにいけば何か現状の様子くらいはわかるであろう。
聖なる結界が施されている場所でどのくらいの【負】がたまっているか。
それだけでも見極める必要性がある。
もしかしたら自分達が動く必要性があるかもしれない。
しかしそれはあくまで【指令】が下されたとき。
今日もまたかつての惨劇の光景を反復する夢をみるのであろう。
それでもどこかで平和だったあのときの光景を少しでも思い出したい。
二度と、取り戻せない【普通の人間】であったときの自分の夢を……

光と闇の楔～幕間～（後書き）

メモ帳にかいてコピペしてるのですが、ここの横文字制限がいまいち把握できてません・・・（汗

光と闇の楔　～授業開始とクラスメート～（前書き）

今回は授業内容でこの世界の成り立ちと仕組みをば

光と闇の楔　～授業開始とクラスメート～

誕生してはほろんでゆく生命と文明。
繰り返される命のリレー。
そしてまた、誕生もあれば滅亡もある。
すべては表裏一体。
何ごともいらないものなどないのだから……

光と闇の楔　～授業開始とクラスメート～

「はい。それでは今日からCクラスに編入してきたディアさんです」
教室にはいり正面にある教壇に向き合い、
正面をみつつ横に控える少女を紹介するこのクラスの担任教師。
ざっと部屋の内部を見渡せば数十人がそれぞれ机に座り正面をみているのがわかる。
今、ディアがいるのはこの部屋…Cクラスの教室の一つ、C組A、と呼ばれる場所。
Cクラスに振り分けられた存在達の中でも最も成績が優秀とされたものたちが集う場所。
つまりは少し頑張ればもう一つ上のクラスに編入することも可能なレベル。
年齢、そして種族は様々。
大体が何らかの目標をもってこの場にやってきている。
ギルド学校協会。
別名、ギルド学園とも呼ばれているこの地。

だいたい、〇〇学校〇〇支部、という形でくぎられている。
ちなみに、この場はテミス王国にある学園、ということもありテミス支部、といわれている場所でもある。
「ディアです。よろしくおねがいします」
とりあえずぺこり、と教室を見渡しながらもかるく頭をさげるディア。
長い髪は後ろで一つに束ねてくるっとひとまとめにしてあるので頭を下げても髪がたれることはない。
「それでは、ディアさんはあいているあの席に。それでは、さっそくですが授業を開始します」
使用する教科書などはすべてギルドより貸出されるがゆえに購入する必要はない。
もっとも、筆記具などに関しては各自で購入する必要があるのだが。
いわれるままにあいている席にと座る。
ディアの座った席は後ろから三番目、窓際ゆえに窓から外の景色が垣間見える。
「それでは、本日はこの惑星の成り立ちを説明いたします」
全員が席についたのを確認し、先ほどディアを生徒達に紹介した教師が教壇にたつ。
本日の授業はこの惑星の成り立ち。
そしてまた、周辺の惑星などの成り立ちについて。
「この惑星ができたのは今から五十億年前、といわれています。
そして同時期に太陽、そして様々な惑星もできた、といわれております」
太陽が形勢されるとほぼ同時に太陽の周囲を回る惑星もまた誕生した。
「そして、今、私たちがいるのが太陽系、第三惑星、と呼ばれる惑星です」
きゅきゅっ。
教壇の後ろにある白いボードにいくつかの文字、そして絵を書き込

んでゆく教師。
「さて、それでは質問です。これまでこの惑星上における悲劇はどんなものがあったでしょうか？
　答えられる人は手を挙げてください」
「はい」
「はい。ルナさん」
一人の女性が手をあげ、その女性を指摘する。
「一般には、恐竜絶滅、そして古代滅亡、そして科学滅亡、があげられます」
「はい。よくできました。そう。今ルナさんが指摘したとおり。
　かつてこの惑星上に巨大隕石が衝突し、
その当時反映していた恐竜、と呼ばれる巨大生命を滅ぼした。
　というのはまあ、絵物語などで語られる真実ですね。
　今いる竜族などといった生命体はかれらのゆかりがあるのかもしれませんね」
この地には様々な種族が存在している。
竜族、とよばれる種族もまたしかり。
「私たちが考えなければいけないのは、科学滅亡。
　これは私たち人類が引き起こした最悪の悲劇、といえるでしょう」
自分達が生まれるはるかな昔。
その当時栄えていた人類が生み出した文明。
その文明が開発した兵器。
その兵器によってこの地上における生命がことごとくに死に絶えた。
その事実はいまだにつきることなく語り継がれている。
もっとも、その結果、
地上の生命すべてが死に絶えてしまい、始めから生命誕生がやりなおされたのであるが。
「それでは、今、この世界がある理由を誰か説明…はい。アルナさん」

アルナ、と呼ばれた灰色のローブを着込んでいる男性が指摘されて席を立ちあがる。
「はい。この惑星の神が生命をいつくしみ、あらたな理を創りだしたからです」
「はい。よくできました。
　これから説明するのは今、アルナさんが説明されたこの世界の理について、です」
惑星の神、とよばれる存在。
それは惑星そのものの意思に他ならない。
そしてまた、各自の惑星においてもそれらの意思は存在している。
惑星と心を通わせる存在達にいわせれば、誰しも意思の声をきく素質はある、とのこと。
しかしその声を確実にきける存在はほんの一握りに過ぎない。
「今から約四億年前、この地上の生命はすべて死に絶えました。
　それが俗にいう科学滅亡、です。星の神はこのことをとても悲しみ、
　そして二度と同じ過ちを人類がしないようにそれぞれの【理】を創りだしました。
　そして、その【理】のもと、世界は再構築されました」
きゅっきゅっきゅ。
いいつつも再び白いボードに今度はいくつかの円を書き込んでゆく。
「まず、今私たちがいまいるこの地上、俗にいう【地界】、と呼ばれる地。
　そして天空にある【天上界】、そして精霊達が本来すまう【精霊界】。
　霊獣たちが住まう【霊獣界】、そして魂達が集う【霊界】、死者が集う【冥界】。
　そして闇の力を糧とする種族の住まう【魔界】。そして妖精達が住まう【妖精界】。
　基本はこれらの界によってこの世界の【理】は成り立っていま

す」

それぞれに繋がる【門】があり、その【門】を通じ各【界】には移動ができる。

もっとも、【門】にと繋げる術もあるにはあるがそれはかなりの精神力を要する術でもある。

「基本的には、光の神は天上神、そして闇の神は魔王、もしくは魔神、と呼ばれています」

その呼び名は多々とある。

各地においてその呼び名は様々。

「そして、この地における生命の営みにおける原点ともいえる元素を司っている精霊達。

精霊王を起点にそれぞれ、様々な精霊達が存在しています。

妖精王に関してはお伽噺にもありますので、知っている人は知っているでしょう。

女王がティターニア様、王がオヴェロン様。一般的に私たちにもなじみるある方々ですね」

きゅっきゅっきゅっ。

それぞれの円を描いた場所に各界の名前を書き込んでいき、

その横にそれぞれ説明した内容を書き込んでゆく。

「地の大地を司っている精霊王はノーム様。空気を司る精霊王はシルフ様。

そして火を司る精霊王様はサラマンダー様。水を司る精霊王様はウンイディーネ様。

この方々も各地によってその姿などが様々な形で伝わっていますが、

基本、彼らのような精霊には元の形がなく召喚したものの希望にあわせて姿をかえる。

というのが一般的な定義となっております」

中には自分好みの姿をしている精霊もいるのだが、一部の存在のみにしかそのことは知られていない。

ゆえに一般的な感覚ではそのように認識されている。
「あと、気をつけなければいけないのは妖精族に関してです。
妖精達は基本、好奇心旺盛の種族ですが。妖精の中にも少しこまった性格なものがいることです。
万が一、その妖精、ライネックを召喚した場合、
はっきりいって術者を含め、周囲の安全は保障できかねます。
もしあなた方が将来、召喚師などになりたいのであれば
そのあたりのことは詳しく修学してください」
ライネック。
別名、不吉な鳥、ともいわれているこの妖精はかなり性格に問題がある。
ゆえに別名、邪悪な妖精、とすらいわれている。
「それと、要注意な精霊が他にもいます。
見た目はかわいらしい仔馬の精霊、ケルピーです。
彼らはその見た目で自分にまたがった存在をそのまま水にひきこみその肉体ごと喰らいます」
ぱっとみため、真っ白いかわいらしい仔馬であるがゆえに出会った存在達は瞬く間に気を許す。
大体水辺に生息していることが多く、気をつけていれば問題はない。
ないがそれでも毎年多少からずとも被害がでているのは否めない。
もっとも、その精霊を使役する方法もあるにはあるのだが、今はそこまで説明する必要はない。
「では、次に。先ほど出てきた古代滅亡にかかわりがあることです。
四億六千五百万年前に起こりその当時反映していた恐竜を絶滅させた巨大隕石。
今のこの【理】においては
この地上に落下してくるまでにそういった類なものは消滅するようにできています。
はい、それではその理由を…そうですね。ディアさん、いけますか？」

かつてこの地上を闊歩し反映していたといわれている巨大生命体。
しかしその進化に人類の手が加わっていた、ということはあまり知られてはいない。
もっとも、今をいきるものたちはとある理由でそのことを知ってはいるのだが。
しかしその存在達もそのとき宇宙より飛来した一つの隕石によってその命の幕を閉じた。
巨大な隕石落下が引き金となり急激な天候の変化がおこった。
そして、その変化をいきのびた存在達が次なる世代へとその命をつないだ。
…もっとも、その命をつないだ存在の先に
再び自らの手で破滅を招く、などとは思ってもいなかったであろう。
「はい。隕石は宇宙空間を渡ってきます。引力の関係でこの惑星にひきつけられますが。
　今のこの惑星における引力の定義はかつてと異なり、
　惑星外においてはその定義が適応されないからです」
名指しされたがゆえに無難な返事をかえすディア。
「たしかにかなりまとめていうとその通りではありますけど。
　今、この惑星上には月が二つ、ありますね。その月にもまた精霊が宿っています。
　月の精霊神、または月の女神、ともよばれている彼女達ですが。
　彼女達とそして各【王】達がこの地球のすべてを
　外部からの【破壊】に備えて結界をほどこしているからですね。
　一節にはそれぞれのこの太陽系における各種の星の神々とも連携をとっている、
　ともいわれています」
いいつつも、さらにボードにいくつかの円を書き込む教員。
そしてぐるっと教室を見渡し、
「今までに話題にのぼった存在達すべて、
　それらは心のありようで視れてまた出会える存在ともいえます。

この地にいきるものたちすべてには【力】があります。その【力】を正しき方向へと導いてこそ、

各自、【生きている】といえるでしょう。

午後からはその力の定義ともいえる召喚術に関して教えます」

召喚術、といえどもその落差はかぎりない。

上位にいけばいくほど、『神』に近しいものを召喚できる、とすらいわれている。

…いるが、いまだに『神』を召喚した、という話しは一度も聞かない。

よくて【王】どまり。

「それと同時に、魔法と精神術との差を平行して実戦的に行いたいとおもいます」

精神術、とは文字通り、自らの精神…つまり魂のうちにと眠る力を駆使した術のこと。

そしてまた、魔法、とよばれるものは分けるといくつかの種類に分類される。

ひとつは、自然の力を借りておこなう自然魔法。

精霊達の力を借りておこなう精霊魔法。

ちなみに、自然魔法に関してはどちらかというと一般的にはなじみはない。

つまりあまり普及していない術でもある。

そしてまた、異なる存在より力を借りて駆使するのが白魔術、そして黒魔術、とよばれるもの。

白魔術は名前のとおり、聖なる存在達から力を借りて駆使するもの。

そしてまた黒魔術は魔なる存在より力を借りうけて駆使するもの。

しかしその魔なる力はときとしてもろ刃の刃となりえることから

これもまたあまり普及していないのも事実。

精神力の弱いものがその力を利用しようとするならばまちがいなく

その力に飲み込まれ、

悪くて魂そのものを喰われることとなる。

喰われた魂の再生は不可能。
そのまま、その【力】の糧になる他はない。
逆にただ蝕まれただけの【魂】ならば冥界においてその魂の浄化、
というものがうけられる。
そして浄化が終わった魂はあらたな【生】をうけるべく転生の輪の
中にとはいる。
必要不可欠でない限り、転生後にかつての記憶が残ることはありえ
ない。
「それでは、次に、天界の仕組みにうつりましょう」
詳しく説明するわけではないが
ざっとした大まかな仕組みのみ教えることにより各自の自覚が芽生
えることもある。
かつてこのことをきちんと教えなかったがゆえに勘違いした存在達
が多発した。
ということにも起因している。
天界、というだけでそこにたどり着けば不老不死になれるなど、
かつてはばかばかしい信仰があったりもした。
たしかに、不老、ということにはかわりはないが、何ごとにも不死、
というのは存在しない。
この惑星とていずれは【死】を迎える。
それは誕生したからにはさけられない出来事。
魂の生死のバランスは転生署、と呼ばれる天界のとある組織によっ
て管理されている。
それはどんな種族においても平等に管理されており、またそれゆえ
に大変な職場でもある。
命をないがしろにするような存在がでたりすればそこより処罰がか
せられる。
一般の人々はその処罰に来訪するものたちを【処刑者】と呼んでい
たりするのだがそれはそれ。
しかし大概は彼らが出向くことはなく、ほとんどが魔界よりの使者

によって処罰はかせられる。
魔界に住まうものたちの好物は【魂の負】ともいえるもの。
それゆえに負の心にむしばまれたものを好んで喰らう。
もっとも、普通に生活しているかぎり、そんな彼らに目をつけられることもなければ、
魔界に存続する存在達としても
地上の存在達と同様に普通に生活している限りそのようなものは滅多と喰らうことはない。
「まず、天空には天神の元、様々な神々が存在しています。
雷神ゼウス様、そして海神ポセイドン様など。
ゼウス様に関しては主に天神の代理としても活動なさっておられるらしいです。
海神様については天界にいつも存在されているのではなく、
通常はほとんど各界の海域に存在しておられます。
私たちになじみのある神々としましては、秩序と繁栄を司る神、ヴィシュヌ様がおられます。
運命を司る神のノルン様。愛の女神イシュタル様。戦いの神、アテナ様。
知識の神、オーディン様等など。
他にも様々な神々が存在しています。
これについては配布されてある【天界の書】を参考にしてください」
配布されている教科書については様々な界について説明がなされているものもある。
詳しくはかかれてはいないが基本的なことはそれに書かれているがゆえに
大まかの仕組みは理解できるようになっている。
ちなみにそれらの神々を元にした物語なども一般に出回っていたりするのだが。
「神々は気まぐれでもあります。万が一、神々に関係するような出

来事に巻きこまれることがあれば、
　まずいえることは相手の機嫌をそこねないこと。これにつきます」
かつて機嫌をそこねて国が一つまるごとほろんだという記述ものこっている。
…もっとも、それを行った神は処罰をうけているのだが。
しかしそれは一部の存在にしか知られていない事実。
カラ～ン、カラ～ン……
しばし世界の成り立ちや仕組みなどを説明している最中、外より鐘の音が鳴り響く。
この鐘は昼どきを合図にしており、一般的にこの世界に用いられている時を告げる鐘の音。
時を刻む細工物もあるにはあるが一般にはあまり普及していない。
だいたいそれらをつかっているのは特殊な職業についているものがほとんど。
特殊技術を要する品をつくる場合にはそれを悪用しないようにお目付け役の妖精が使わされる。
妖精の要請をうけて精霊がその品に加護を与えることにより、
その品は初めて起動することが可能となる。
加護がつかない品はいくらつくってもただの置物にすぎずに絶対に稼働することはない。
「休憩時間にはいります。次は大陸についての説明にいきますね。各自予習をしておいてください」
ずっと内容を頭にいれようとしてもどうしても人の脳には限界がある。
適度に休憩しつつ学んだほうが覚えやすい、というのもある。
これは一般的なことで中には逆に一気に覚えたほうが能率がいいものもいる。
人の能力は十人十色、誰しもが同じではない。
ゆえに基本的に一刻ほど学びしばしの休憩の後にと次の授業にはい

るようにとなっている。
「…大陸…か……」
クラス担任の言葉をきき、ふと窓の外を見上げる。
普通の存在にはみえないが、空には別の大地が存在している。
いわゆる別次元、とも天界、ともいわれているその地。
地上からは認識されることはなく、逆に天界からは地上を認識することは可能。
もしも今のこの世界で惑星の外にいこうとするならばまちがいなくその天界との壁にと阻まれる。
万が一外に出れるとすればきちんと【許可】を取らなければ外にでることはできない。

かつてこの惑星に住まう者たちは、この場をこう呼んでいた。
太陽系第三惑星、地球。
銀河系、と呼ばれていた
約十万光年の直系をもつその銀河を構成する約二千億個の恒星と呼ばれる星の一つ。
それが太陽と呼ばれしもの。
そして太陽系、とは太陽の重力の影響によって構成されている天体の集団のことを指し示す。
太陽を中心とした惑星の数は数個。
そして三番目の惑星が地球、とよばれしもの。
水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星、冥王星。
一時期は一部の惑星が太陽系から削除されたりもしたが基本はこの認識でかつては通っていた。
もっとも、これ以外にも太陽系を中心とした惑星はあといくつか存在している。
そして太陽系が位置するのは、それが存在している場。
つまりは銀河系、とよばれしものの中心から2万8千光年辺りに位置に存在し、

銀河系の端の位置にと存在している。
しかしそれらの知識はすでに過去のもの。
今はそのことを知る存在はごくわずか。
かつての人類は惑星の外にまでその知識を伸ばそうとその手を広げた。
結果として自分達が住まう惑星そのものを壊滅させるまでに至ってしまったのだが……
それまでは表にでてくることなく意識のみで存在していた各種の【意思】達。
話し合いにより姿を【固定化】することにより、『命』の幅を広げることにした。
一度人類の手により、
そしてまた星の意思により地上が壊滅してしまったこの地上は一度すべて浄化され、
そして新たな歴史を刻んでいる。
かつては空に一つしかなかった月は二つとなり、
そしてまた空には【天界】という特殊な場所が創られた。
地上においては基本的には六個の巨大な大陸を中心に成り立っている。
個々たる大陸もまたあるにはあるが。
大陸の構成具合は至って単純。
北極点と南極点、とかつていわれていたこの地球における磁場の拠点。
そこを中心として二つの大陸があり、そしてそれを取り囲むようにして四つの大陸がある。
そしてその中心にそれぞれ二か所、中央部分に特殊な大陸が存在している。
それが今の地球の在り方。
種族もかつてとは比べ物がならないくらいに存在している。
もっとも、一度死滅してしまう前に人類が滅亡させてしまった様々

な種。
それらについても再び【命】を与えられて存在していたりするものもある。
そして自然においても然り。
砂漠地帯もあれば山脈地帯も多々と存在している。
そして一番かつてと異なっている部分はどの大陸においても必ず火山帯がある、ということ。
かつてを生きていた記憶をもつ【伝道師】達からしてみれば今の世界はまさしく、
かつて彼らがよく娯楽として活用していた『異世界』というのにあてはまるかもしれない。
それほどまでにこの地球は様変わりした。
それは当時でいうところの西暦、二千五百十一年のこと。
そしてまた、人類が新たな兵器を開発したのが二千十一年。
それから五百年をかけて人類は宇宙に進出していこうとした。
否、していた、というほうがいいのであろうが。
しかし突如として襲った『滅び』に彼らは死滅した。
彼らがつくりだした【兵器】とそして【ネットワーク】ともいえるブログラムシステムの暴走で。
その暴走が数名のただの考えのないものたちが創りだした悪意あるウィルスブログラムによるもの。
というのは今の時代をいきているものたちのほとんどは知らない。
否、知るよしもない。
すべての現象において精霊、そして妖精の加護を加えることにより【生命体】達の行動範囲が狭まった。
もっとも、【地震】【噴火】といった出来事については、
そのことがおこる事前に精霊や妖精達から生き物達に伝わるようになっている。
大陸にはそれぞれその大陸を治める神々がおり、その神々のもと神託が下る仕組みとなっている。

ゆえに人々の信仰も様々。
中には信仰を重要視して戦争にまでいたることもあったりはするが、その場合には天界より介入があり、大規模な戦争にならないように管理されている。
…もっとも、それでもやはり人、とは愚かなのか自分達の信仰が一番。
とばかりに愚かな行為を繰り返しているのではあるが……

「ねえねえ。ディアさんっていったわよね?ディアさんは将来、何になるかきめてるの?」
そんなことをおもいつつも窓の外をみていたディアにと話しかけてくる一人の少女。
見た目はおそらく十代後半くらいであろう。
淡い栗色に近い茶色い髪とそれよりも少し薄い瞳をもち少しウェーブのかかった髪が印象深い。
「え?私?えっと……」
「私はフラウ。よろしく」
「え。あ。よろしく。
私はとりあえず資格をとったら旅の商人みたいなのをやろうかな~とはおもってるけど」
にっこりとほほ笑みかけてくるその少女にとりあえず聞かれたことについては答えるディア。
「旅!?この世情なのに!?」
実力のあるものですら旅をするのは今の時世はかなり危険といえる。
それでなくても最近は、ゾルディとよばれし魔物が増えている、というのに。
「薬を売って旅をしようか、とおもってるの。各地の様子をみながら」

「薬？ディアさんは薬の調合とか得意なの？」
「まあ、そこそこ」
たしかに旅人や冒険者などに旅の商人の需要は高い。
しかしそれは需要が高いということは、それだけ外が危険である、ということ。
「何かアテがあるの？」
アテ、とは身をまもる手段が何かるのか、ということ。
それでなくても目の前のディア、という少女は見た目、かなりかわいい。
かわいい、というかよくよくみればはっきりいって美少女の部類に入るのは疑いようがない。
そんな女性が一人旅をしていればまちがいなくゴロツキなどの餌食となる。
「ま、ね」
「う～ん。でもまだ時間はあるんだし。それは危ないから考えたほうがいいとおもうけどな～」
苦笑しつつもこたえるディアにうなりつつも腕をくみしみじみつぶやくフラウ、と名乗った少女。
「そういうフラウさんは？」
「私？私は家族の後をついでお店をつぐつもり。それでここにきたんだ～」
店を継ぐにも資格は必要。
この総合科ならば様々な資格を選択することが可能。
だからこそこの科を選んだ。
ここにくる存在達はそれぞれに自分の将来を考えてやってきている。
中にはとりあえず、という目的でくるものも多々といるが。
それでも学ぶ気がないものはまず入学などしない。
「お店？どこにあるの？」
「この王都から南に数十キロ離れた場所にある小さな町なんだけどね。

　その町の学校よりこの王都のほうが設備や選択科目が充実してるからここにきたの」
たしかに、地方の学校ならば細かな科目などが削られている場合が多々とある。
それは人員などによる影響なのだが。
その地区にあわせた科目を選択し基本、ギルド協会は運営している。
「ならしばらくは寮生活？」
「うん。ディアさんは？」
「私も寮だけど。だけどギルド寮のほうね」
とりあえず入学がきまったときに寮の手続きは行っている。
一般寮とギルド寮の差は、ギルドにて学費を工面するか、しないか、基本この二つにつきる。
ギルドにて依頼をうける予定、もしくは確定の生徒はギルド寮のほうにと所属することになる。
一般寮のほうはその半面、何か依頼、もしくはアルバイトなどをする場合は許可制となる。
そしてまた、ギルド寮のほうには門限はないが、一般寮のほうはしっかりと門限が定められている。
その門限などを破った場合、それなりの罰がかせられる。
あまりに門限をやぶるものなどは最悪、学校を退学させられるおそれもある。
退学させられたとしても再び試験をうけて入学できなくはないが、やはりそれなりに監視役はついてしまう。
また、普通よりも倍の修学量がかせられる。
「そうなんだ。とりあえずこれからよろしくね。ディアさん」
くすっ。
初対面だ、というのにかなり人懐っこい。
それゆえにくすり、と笑みを浮かべつつ。
「こちらこそ」
かるく手をだし握手を交わす。

と。
から～ん…から～ん……
休憩時間の終わりをつげる鐘と、そしてまた同時に次なる授業開始の鐘の音が鳴り響く。
がらっ。
それと同時に教室の前の扉が開き、次なる授業担当の教師が教室の中にとはいってくる。
「はいはい。鐘がなりましたよ～。それぞれ席についてくださいね」
ぱんぱん。
手をたたき、ばらばらと席をたっていた生徒達がそれぞれの席にともどってゆく。
全員が席にもどったのを見届けたのち、
「はい。それではこれから地理学に入りたいとおもいます」
いいつつも、きゅっ、きゅっ。
正面のボードに世界の地図を簡単にと記してゆく。
上下に一つづつの大きめの大陸。
そしてそれをかこむような四つの大陸。
そして中央にある一つの大陸。
細かな大陸などはどうやら記してはいないらしい。
「それぞれの大陸には精霊達が直接治めている地もあります。
いい例が闇の精霊の治めている地は年中闇の中、という形ですね」
いいつつも、とんっと大陸の一つの一点を指差し説明する。
いくつかの箇所でそれぞれの精霊が直轄的に治めている場があり、その場についてはその精霊の恩恵が大きく得られる。
精霊が直接存在している【場】については惑星にとっても大切な【場】でもあるのだが。
その事実は普通の存在達には知られてはいない。
その精霊が直接治めている地にでむき、精霊の加護をうけよう、とおもう輩も少なくない。

もっとも精霊もきちんと性格を見分けて加護をあたえるかどうかは選ぶので最近は悪用されていない。
かつてはそれらを決めずに誰でも加護をあたえており、その結果かなり混乱したこともあったりしたのだが。
今ではきちんとそれなりの【盟約】ができてそのような出来事は起こっていない。
ぱらっ。
地理学、と書かれている教科書を開き、その表紙をちらり、とみる。
この配布される教科書にはその科目ごとを担当する教員の名前が記されている。
ちなみに○○所属の○○教師、ときちんとどこに所属しているのか、というのまで明記されている。
この教科書には特殊な術がかかっており、その名前のところのみは、担当がかわったときなどは術をかけなおすことにより名前が一斉に変化する。
つまりは、一冊でも名前を変更すればおのずと同時記入された名前が変更される、という仕組み。
名前の書き込みは術によって行われているのでできる事柄。
地理学を示した教科書には様々な地理に関して大まかな説明がなされている。
その土地の習慣や宗教、そしてその地における名産品や観光名所等など……
このご時世、観光めぐりをするようなのはかなりのお金持ち以外にはいないのだが。
それでもやはく生き抜きに観光にでかける存在達も多々といる。
知っているのと知らないのと、ではやはり違う。
だからこそ、基本的なことはこの学校でもきちんと教える。
入学時期が一致していないゆえに、それまでに修学していない事柄などもありはするが、
基本、様々な試験の結果からその能力を判断し、

卒業できる値になればたとえそれが入学一カ月であろうが、数日であろうが卒業許可は与えられる。

…もっとも、そういう存在は入学試験のときに判るので、そのまま卒業資格が与えられるのだが……

この世界の主たる地理についての授業内容が生徒達にどんな影響をあたえるかなど、誰にもわからない。

ただ、わかっていることは知ることにより、生徒達の選択の幅がひろがる、ということ。

何も生活するのはここ、テミスでなければいけない、という決まりはないのだから……

光と闇の楔　～授業開始とクラスメート～（後書き）

副題が違ってたので訂正です（気づくのがおそくなりました・・・

光と闇の楔　～召喚授業～（前書き）

ようやく本編？に近い授業内容。
主人公に仲良し？さんが加わります。いわば学園内部での仲間になる予定です

光と闇の楔　～召喚授業～

今日は久しぶりの召喚の儀式。
といっても毎度のことながらかなり暇。
そもそも【契約】上、本当の召喚、とは言い難い。
だけどときどき掘り出し物、ともいえる存在達もいるから面白い。
…だけど、ここ最近はちょっと上層部のほうが混乱してるから…おもいっきり楽しめないかな？
…そもそも、お母様は何を考えて何をしてるんだろう？？
所詮、私たちのような下っ端がわかることではないにしろ。
だけども、少しでも役に立ちたい、というのは本音。
だって私たちがいるのはすべてはお母様あってなんだから。

――ティミ心の独白。

光と闇の楔　～召喚授業～

広い球体のような何もない部屋。
周囲にあるのは球体状の部屋に合わせていくつか設置されている座席の数々。
その中央に刻まれている何かの模様。

「はい。それでは、これより召喚の授業を開始したいとおもいます」
午前中は世界の仕組みや地理、そして神々の定義などの授業。
そして昼休みを経過して連れてこられたのがこの空間。
どうやら学校の地下に位置しているらしく、
それでも空中に明るさを保つべく術がかかっているがゆえに暗くはない。
ざわざわ。
どうやらクラス共同授業らしい。
一学年二クラスによる共同授業。
「ここは仮そめの召喚の間です」
たしかに中央に描かれている模様は召喚の魔方陣のようではあるが。
そのことにこの場にいる幾人が気づいているであろう。
「ここではみなさんに召喚、という感覚を養っていただきたいとおもいます。
　みなさんは、生まれながらに人には霊力と魔力、共にあることを御存じですね？」
こくっ。
何かあったときのためにこの場には二名の付き添い教員が出向いている。
それ以外に数名の教師の姿もちらりと目にはいるが生徒達のほうに近づいてくる気配はない。
この世界にいきているすべての生命体には二つの恩恵がかけられている。
すなわち、魔力。
それは自然界における力を自分のものとして借り受けることとして発動するにあたり必要な力。
霊力。
それは生まれながらの魂が用いる力。
霊力が強いものほど肉体における【気】の活用方法も広くなる。
気、とは魂と肉体が重なり合うことにより使うことができる力の一

つ。
しかしほとんどのものは当然のことながらその力を使いこなせることはできはしない。
もっとも、修行の上、その使用方法を習得することは可能ではあるが。
それは人それぞれ。
修行しても習得できないものもいれば、あっさりと習得できるものもいる。
教師の言葉にその場にいるほぼ全員の生徒がうなづく。
魔力をもっていても普通はその肉体と魂の内部に封じられているがゆえに
まず滅多と暴走することはあり得ない。
基本、術を学ぼうとするものは体内にあるその【力】を認識することからはじめてゆく。
そしてゆっくりとそれを表にだすことにより、
そして初めて精霊達に願い請うことによって初めて術として形を成す。
その方法は産まれや育ちにもよるが
生まれによっては生まれながらにそれを無意識で行える種族も存在している。
「ここでは、みなさんに召喚魔法とはどういうものかを経験していただくために
仮初めの召喚をしてもらいます」
本格的な召喚はかなりの精神力と魔力を使う。
しかし、術者とそれに呼応する存在が始めから同意していればそういう仮そめの召喚、という方法も可能。
「あくまでも仮初めの召喚です。ゆえに召喚呪文は比較的単純です。
みなさん、これからいう言葉を暗記してください」
「Ｊｅ ｐａｒａｉｓ ａｖａｎｔ ｄ' ａｐｒｅｓ ｌｅ ｃｏｎｔｒａｔ ｄｕ ｇａｒｄｉｅｎ ｄｅ ｍｏｉ ｃｏｎｔｒａ

ｃｔｅｚ」
一人の教員から聞きなれない旋律の言葉が発せられ、
「意味は、我、契約の代行者、契約に従い我が前に姿を現したまえとなります。
　召喚の正式な言霊が覚えられないのであれば、意味を現す言葉でも結構です」
次にその意味を説明する。
この世界でこの言語を正確に発音できるものはごくわずか。
しかし正確に発音することによりその威力も増す。
この言語がかつては何語だったのか知っている存在は今ではごくごく限られている。
「はい。何か質問ありますか？」
簡単な説明をしたのちにいつものようにと生徒達に問いかける。
ぐるっと生徒達を見渡しても戸惑ったような感覚しかうけない。
まあそれもいつものこと。
いつも質問があるか、ときいても戸惑うばかりでいつもは挙手すらなかった。
「はい」
そんな中、一つの手を挙げられる。
「はい。そこのあなた」
しかし今回はどうやら勇気ある生徒がいるらしい。
それゆえにそんな挙手をした生徒へと視線をむける。
「ここにいる全員が召喚するとなると時間がかかるとおもうのですけど……」
今まで気づかなかったが挙手をした生徒の髪の色はとても変わっているのがみてとれる。
銀色のような灰色のようなそれでいて白色のような、そんな髪の色。
様々な種族を視てきたがこのような髪の色は初めて目にする。
エルフ…かな？
おそらく雰囲気的にエルフ族なのかもしれない。

その発せられる雰囲気というか空気が完全に周囲となじんでいる。
そこにいるのにそこにはいない、そんな錯覚すらうけてしまう。
「そうですね。ですけどこれは大切なことなので午後からの授業はこれ一本となります。
　召喚の後、儀式の終わった生徒達は
　あちらで様々な召喚に関しての注意事項をうけることになります」
みれば少し離れた位置に別の教師がきており、
いつでも行動できるように準備が整っているのがみてとれる。
今回のこの目的はあくまで召喚、というわけでなく。
各自に自らの力を認識してもらうこと。
召喚はまず二の次。
自分の力を認識しないままに力を行使することは後に悲劇をうむことがある。
そのための授業。
「それでは、今から名前をいいますので、呼ばれた生徒は前にでてきてくださいね」
ざわざわざわ。
そういう教師の言葉に生徒たちのざわめきがおおきくなってゆくが、
「……う～ん……時間切れになってほしいなぁ……私にまでまわってこなければいいけど……」
先ほど質問した少女がおもわずぽそり、とつぶやいた台詞は、
ざわめく生徒達の声にかき消され、当然誰の耳にも届いてなどはいない……
「はいはい。それでは開始します。みなさん、とりあえずリラックスしてくださいね。
　失敗しても問題はありませんから。何が問題なのかは後に教えていきますので」
ぱんぱん。
ざわめく生徒達をおちつかせるべく、手をたたいて整列させる。

「それでは、みなさん、列に並んでください」
いわれればそれに従うより他にはない。
興味ある生徒達はこぞって早くに示された場所に並んでゆくものの、やはり中にはゆっくりと行動しているものもいる。
やはり誰もが一番目、というのは緊張するのかどうしても尻込みしがち。
数列に並びつつも授業の行く末を見守る生徒や教師達。
「それでは、始めの人、さきほどの言葉通りに行動してください」
今回、授業で行う召喚はあくまで仮召喚。
つまりは普通ならばそれに応じた精神力などが必要とされるが、今回のような仮召喚においてはその意思のみが優先される。
「はい。それでは魔方陣の中にはいりましたね。
　ではさきほどの言葉を反復してください。判らなければ確認してくださいね」
促され、異を決して一人の生徒が魔方陣の中にと足を踏み入れる。
おっかなぴっくりしてしまうのはしかたがない。
誰しも初めての経験は戸惑いがつきもの。
ゆっくりと足をふみしめ、床に書かれている模様…すなわち、魔方陣の中央にと移動する。
そして、ゆっくりと深呼吸し、
「我、契約の代行者、契約に従い我が前に姿を現したまえ」
意味不明な旋律の言葉よりも判りやすい言葉を選択し、ゆっくりと恐る恐る言葉を発する。
が。
しぃ～ん……
言葉を発しても何も起こらない。
一番目、ということもあり成功するとはおもってはいなかったが、やはり反応がない、というのはどうしてもうなだれてしまう。
「はいはい。自身の中の魔力をまず引き出して、それから願うように。

あと、心をこめて言葉を紡ぐことを忘れずに」
そんな生徒に対して補足説明をしている教師。
しかし、心をこめて…といわれてもよくよく意味がわからない。
「とりあえず、もう一度」
「は、はいっ」
いわれてもう一度挑戦するがやはり反応はないまま。
「どうやら心をこめての言葉が苦手なようですね。そのあたりの説明はあちらにて説明がなされます。
とりあえずあなたはあちらに移動してください。それでは、次の人」
がくっと頭をさげつつも、とりあえずぺこり、と頭をさげて部屋の端にいる別の教師の方にと足をむける一番目の生徒。
いわれるままにとそちらのほうにと移動する。
みれば、次の生徒が同じように言葉を唱え、何もおこらないのが見て取れる。
「とりあえず、ある程度人数がたまってから教えはじめるから。それまでは瞑想、してて？」
教師にいわれ、そのいわれるままにと瞑想を開始する。
この世界においておおまかな存在達がそれぞれ独自の瞑想の仕方をこなしている。
というのもいきていゆく上で
瞑想するのとしないの、とでは確実に『自然』との繋がりがかわってくる。
そしてそれは逆をいえば生活においても生活水準をあげることにもつながるのである。
たとえば水に対して相性がよく、瞑想し水にたいしてより近くその感覚を近づけることにより、
術などつかわなくてもその水が危険かどうか、というくらいは判断できるようになる。
町の中で住まう存在はそういった特技はあまり必要とはされないが、

小さな村などで生活している存在達にとってはそれは生きてゆくための必要事項。
頭の中をからっぽにし、自分の内部を見つめるように想像をめぐらせる。
どれくらいそのようにしていたかわからないが、
「はい。それではある程度人数がたまりましたので、説明を開始しますね。
　まず、あなた方は言葉を発するとき、何を基準としていますか？」
まずはそこから。
言葉に心をこめて言葉を紡ぐ、というのは簡単なようで結構難しい。
言葉、というものは簡単でそれでいて奥深いもの。
特に人づきあいの中では時におうじて虚言もまた必要となる。
生徒が十五名程度集まったことをうけて言葉に関しての授業をはじめる教師の姿。
そんな彼らの姿を端目のほうでみつつも、
「はい。それでは、次」
魔方陣の授業のほうは相変わらずそのまま授業が継続して行われている。
今のところ挑戦した生徒達はほぼ達成できていない。
それでも根気よく教える教師もまた大変といえば大変。
しばしそんなことを繰り返すうちに数刻が嘘のようにと過ぎ去ってゆく……

いったい生徒達の何名が挑戦しているであろうか。
失敗した生徒達は魔方陣からでて魔力の流れの指導をうけている様子が目にとまる。
「はい。では次」
あ、この子は確実に召喚できるな。
そんなことをふとおもう。

何しろ格好からしてもどうみても術師に違いない。
教師やディアがそう確信している最中、指摘された生徒が魔方陣の中にとはいってゆく。
「我、契約の代行者、契約に従い我が前に姿を現したまえ」
ディアがそう思っているとやはり、というべきか対象の魔方陣が淡くひかり、
魔方陣の中央にたっている人物を中心に光の柱と化してゆく。
その中においてはおそらく確実に魔方陣による召喚が成功しているのであろう。
あろうがハタメからはその様子がみえなくなっているのはどうやら仕様らしい。
…この方がたしかに助かる…けどねぇ。
そんなことをおもいつつも、やがて魔方陣の光がおさまり、先ほど言霊を唱えた生徒が歩み出る。
「はい。それでは一人目の成功者、ですね。
あなたはあちらへいって召喚についての説明をうけてください」
「はい」
召喚が成功した生徒は基本的なことができている、とみなされ、
召喚に関しての細かな注意事項を習うことになっている。
細かな注意時点、などというのは召喚、というものはいろいろなものに応用ができる。
興味本位で様々な分野に手をだせば自分の命どころか周囲にも影響を及ぼすことがある。
下手をすれば一つの村などを壊滅させる場合もありえる。
それゆえにそのあたりの注意事項などをも教えるのが教師の役目。
しばしそんな授業の進行状態をみつつも、……何となくいやな予感がして仕方がないディア。
失敗した生徒達は自らの魔力の制御がいまだによくできてない模様。
どうやら召喚の儀式はおこないたくなかったのだがそうもいってられそうになさそうである。

ゆえにため息をつかざるをえない。
そんなディアの心情は何のその、
「はい。それでは、次」
やはり、というか当然のことながらディアの順番が回ってくる。
「……やらないと、だめですか？」
「当たり前ですっ」
ダメもとで棄権したい旨を伝えたのだがいともあっさりと却下されてしまう。
「…しょうがない」
ため息まじりに魔方陣のほうへと歩き出す。
できれば参加したくなかったのだがこればかりは仕方がない。
というか参加型にしてほしかった、本当に。
そんなことを思いつつもディアはため息とともに魔方陣の内部へと足を踏み出す。
できれば参加したくなかったのだがこればかりは仕方がない。
というか参加型にしてほしかった、本当に。
そんなことを思いつつもディアはため息とともに魔方陣の内部へと足を踏み出す。
魔方陣にはいると同時、淡く輝く光が周囲に立ち込める。
「…やっぱり気づくわよねぇ～……」
思わずため息とともにつぶやくその台詞は光の洪水にのまれて誰にも聞かれてはいない……

まず、驚いたのは光の洪水。
今まで魔方陣に足を踏み入れただけで光を発生させた生徒はまずいなかった。
何となく躊躇していた理由がわかったような気がする。
たしかに今まで確実に成功させている生徒がいない以上、目立つのが嫌な性格なのであろう。
「ふむ。あの子の雰囲気がなせる技、ですかね？」

無意識のうちに自然と同化しているような生徒である。
ゆえにこそこの反応はさほど珍しくはない。
しかしここまで光が強い、というのも今まで様々な生徒を教えてきたが初めて。
この光はいわば【力】の具現化、といったようなものであり、ゆえにあまりに光が強いと、
本来ならばわかるはずの内部の様子が視られない、という欠点をもっている。
「内部の様子が視れないのはもったいないですねぇ～」
こういった始めから反応を示す場合、もともと魔方陣の中にはいった対象者が、
精霊達と何らかの繋がりをもっていることを示している。
もしかしたら元々何かの精霊と契約を交わしているのかもしれない。
「ふむ。あとから聞いてみる必要性がありますかね？」
そんなことをおもっているうちに、さらに光の洪水が輝きを増してゆく。
その神秘的なまでの光景に、
その場にいる誰もがおもわずそちらのほうをぽかんとした表情でながめている様が見て取れる。
それは幻想的、といっても過言ではない。
光の洪水は魔方陣を中心として渦を描くように周囲を舞っている。
…ここまでの反応を示す可能性としては二つ。
魔方陣の中に入った少女が精霊としごく相性がいいか、
はたまたその相性がゆえにこの【地】の守護精霊を呼び出したか、
そのどちらか。
普通の呼びかけでは、協会が契約している精霊が姿を現すことになっている。
しかしそれ以上の繋がりを持てた場合、
ごくまれにこの【地】…すなわち、王都の守護精霊が姿を現すことがある。

魔方陣召喚を担当している教師…召喚術担当教師、フィテア＝ハルモニア。
彼女、フィテアがこの地に赴任してからそういった生徒をみた数は片手で足りるほど。
つまりはごく数名しか今までいなかったのも事実。
それらは大概血筋から王都の加護を得ていたがゆえに召喚されていたようではあるが……
ふむ。
あとであの子の入学許可証を確認してみますか。
もしもきちんと後ろ盾などがある場合ならば確実に書類でそのあたりのことはわかるはず。
そんなことを思っている最中、光が一気に部屋全体に広がってゆく。
あまりのまぶしさに思わず目をつむるり、次に目を開けたときには先ほどの光の洪水はどこへやら。
目の前には先ほど魔方陣の中にはいった生徒がゆっくりとでてくるのが見て取れる。
「あ、あの？とりあえず終わりましたけど……」
はっ。
出てきた生徒にいわれ、はっと意識を取り戻すフィテア。
「はい。お疲れさまでした。すばらしいですね。魔方陣があそこまで光輝くとは。
　それだけ世界と意識を同調できている、という証でもあります」
いいつつもその場に残っている生徒達を見渡し、
「みなさんも今みて判りましたように。世界と意識を同調させる。
　すなわち自然と心を通わせることにより小さな現象でも大きくなりえることがあります。
　これらは自然とともに生活していくに従い自然と身についたりするものでもありますが……」
そこまでいって先ほどまで魔方陣の中にいた生徒にと視線をむけ、
「あれだけ光の渦ができていたのでありましたら召喚は成功した模

様ですね。
　中が視れなかったのが少し残念ではありますけど。
　とりあえずあなたもあちらへといってください」
いいつつも、いまだに一人しかいない召喚成功者。
そんな生徒に注意事項を説明している教員のほうへと視線をむける。
「あちらで説明しているのは、予備知識担当のビブリス＝ヘナメネ教師です」
「…先生。今まで先生、名前なのってませんでしたよね？」
目の前の生徒にいわれてみれば今さらながらに名乗っていなかったことを思い出す。
「そういわれればそうですね。
　とりあえず教科書に書かれているので問題ない、とはおもっていましたが。
　一応自己紹介しておきますね。私は召喚術を担当していますフィテア＝ハルモニアといいます。
　ほとんどの生徒が今教えをうけているのが、魔力霊力担当のティーケ＝リューメン教師。
　そして、召喚に関しての予備知識等を担当しているビブリス＝ヘナメネ教師。
　あと、こちらの補佐役として今回参加している教師がラケシス＝パルテノーネ教師、です」
「？先生。パルテノーネ・・って、もしかしてあの、パルテノーネ家ですか！？」
そんな説明に一人の生徒が驚愕の声を漏らす。
「あの、とは何を示しているのかは大体予測はつきますが、そのおそらくはパルテノーネ家ですね」
だいたい何かしらに精通している場合、
その家名は聞かないことはまずない、というほどに有名な家名。
様々な分野に精通しており、何かあった場合、かの家系のものが出向くこともしばしば。

しかしほぼすべてにおいて一定の技能を治めていなければその家名を名乗ることはできはしない。
大体は才能がある場合、そのまま養子縁組されて家名を名乗ることになっている。
ゆえにいろいろな意味で憧れの家名、ともいえる名前である。
「今の光の洪水からしてどなたを召喚したかは予測がつきますけど。
しかし、あなた、エルフ族ですか？」
「まぁ、そんなものです。エルフ族ではないですが」
ラケシス、と紹介された教師が先ほどまで魔法陣の中にはいっていた生徒…ディアに問いかけるものの、
そんな彼の言葉に少し微笑みながら言葉を濁すディア。
確かにディアはどの種族にも属さない。
種族…という部類に入るのかすら不明である。
しかしそれをいう必要性はさらさらない。
ゆえにこそ言葉を濁す。
「とりあえずあなたは合格ですので、ビブリス教師のほうへいってください。
それでは、次なる生徒、前にでてください」
いろいろと聞きたいことはあれども今は授業の真っ最中。
ゆえに、その話しをうちきり、そのまま授業を再開する。
いまだに何やらざわめいているものの、どうやら教師の一人の家名により、
さきほどの現象はあまり詳しく触れられないことにほっとする。
そのまま、示されたとおり、
予備知識を担当している、という教師のほうへとディアは足を進めてゆく――

「ふむ。ひさしぶりに世界とのつながりが深い生徒が入ってきたよ

うじゃな」
ディアが予備知識を担当している、という教師の元にいくと、
にっと笑みをうかべながらもそんなディアにとはなしかけてくる白いひげを生やしている一人の男性。
ぱっと見た目にもかなりの年齢を重ねているようにもみえなくもないが、
その体付をみてみればそこいらの軟弱な若者よりも引き締まっているのがみてとれる。
「あなた、すごいわね。術師希望なの？」
きらきらきら。
さきほど召喚を成功させた生徒がそんなディアに対して興味しんしんで問いかけてくる。
「いえ。違います。ただ私はちょっと精霊達とは相性がいいので……」
そんな生徒に対して苦笑しながらも否定の言葉を紡ぐディア。
そもそも何かを極めるためなどにここにはいったわけではない。
あくまでも旅をしていく上で
必要な身分証を必要としたためにはいっただけのディアにとってそのあたりは重要ではない。
「そっか。いいな～。私はケレス。ケレス＝アストレア、よ。よろしく。あなたは？」
「私はディア。家名はないわ」
事実、家名、なんてものはない。
しいて言うならば昔呼ばれていた【アース】といった程度であろう。
もしくは、通称の【三の姉】もとい、【ブラット】。
数多な命がはぐくまれたことからつけられた名称。
しかしそれを説明する必要性はこの場においては全くない。
というかその他の存在に対しても説明する理由はさらさらない。
「アストレア家、といえばたしか精霊術で有名な、あの？」
たしか彼らは火の王と契約をしているともっぱら有名。

事実、彼らの家系は主に火の術を得意としているらしいが。
「まあね。ここを卒業したら私は火の精霊王様の試練をうけて儀式を行うことになってるの」
「ふ…ふ～ん……」
儀式、と聞いて思わずどう反応していいのか戸惑ってしまう。
…まあ、【人】相手にさほど無理難題はおしつけないとは思うが…かの性格はかなり気まぐれ。
それがわかっているからこそ戸惑わずにはいられない。
しかしそれを知っている、と知られてもまた面倒。
ゆえにこそ言葉を濁すしかない。
「まあ、同級生同士の交流は後からゆっくりとしてもらうとして。
とりあえず、ちょうどいい機会なので精霊達についての説明にはいりますぞ？」
そんなディアとケレスの会話を遮り、
にこやかに笑みを浮かべつつも教師であるビブリスが会話に割ってはいってくる。
「この王都の守護精霊のことは知っておるかの？お穣ちゃん達？」
「はい。この王都の守護精霊は、ティミ様です」
各、主要といえる王都にはそれぞれ守護精霊がついている。
ここ、テミスの王都の守護精霊は、ティミ。
その守護精霊の名前をもじり、王都の名前がつけてある。
それは精霊にたいして最大限の敬意を示しているのに他ならない。
ケレスの返答に満足しうなづきつつも、
「そう。そのティミ様は主神様の導きによってこの地をおさめられている。
ティミ様がた、守護精霊様がたの保護があるがゆえにこの地は安定している、ともいえる。
もっとも、ここに住まう存在達が間違った道を歩んだ場合、
彼らは時として我らを裁く立場でもある」
世界の理に従い、生きること。

それが盟約。
それに背いた先には破滅が待ち構えている。
各個人にむけられたものから、国全体にむけられたものまで範囲は幅広い。
もっとも、小さな反抗
…すなわち、ゾルディ程度の存在が生み出される結果の行動ならば精霊達は動くことはしない。
「この大陸を守護しているのが火の精霊王、サラマンダー様じゃな。
そこのケレス嬢ちゃんもよくご存じの火の精霊王様じゃ。
精霊様方の力は強大。とはいえ強大な力をもつ精霊達の存在はさほど多くはない。
先ほどの召喚術は仮契約をしているのが精霊であるがゆえに、協会が契約している精霊がでてくるようになっておったが。
召喚には様々な応用が必要になってくる。今からこれを説明するからの」
いいつつもこの場にいるディアとケレスの顔をみつめてふむ、とうなづき説明を開始する。
「召喚。とは文字通り、自分とは異なる力をもつ存在を自らの意思と力にて呼び出す術じゃ。
心を正しくもっていればその心に応じて正しき存在が召喚されるが、
時としてそれは破壊をもたらすものを召喚してしまうこともある。
つまり、じゃ。
自分が正しい、とおもっていてもそれがたとえ邪悪にまみれた心だった、としよう。
人、とは周囲の環境によってその善悪が分かれてしまう。
他者を殺すのがいとわないのが正義とまかりとおっている場で育ったものにとっては、
それが正義、となる。

しかしその心はたしかに当人からしてみれば正しくはあっても、世界の理からすればかけ離れておる。

ゆえに、召喚されるものは【悪意】あるもの、になってしまう」

普通にそのあたりに生きている動植物などには当てはまらない。

知力をもっている種族にのみ当てはまることがら。

普通に生きている存在にとっての絶対は弱肉強食。

そしてその繋がりは世界の繋がりを維持している。

どの存在がかけても成り立たない、世界の【理】。

しかし、【知力】をもってしまったがために、その世界の【理】を無視してしまう存在も多々といる。

かつて、人類がその果てに一度、この地を滅ぼしてしまったように。

そのときのことは今の世において【科学滅亡】として歴史上示されている。

「つまりは自分がよかれ、とおもっていても逆によくない結果を生み出すこともある。

それが心というもの。そして召喚術というものはその術者の心が確実に反映される術でもある。

先ほどのような仮契約をすでにしている存在を呼び出す術ならば問題はない。

ないが自分の力で呼び出す場合には注意が何よりも必要じゃ。

ここまではわかったかの？

お穣ちゃん達？」

強い力は時としてその存在の人格すらをもむしばんでゆく。

そして周りが見えなくなり取り返しがつかなくなってしまう。

かつてはそれをとめる術をもたなかったが、

今ではそれらを食い止めるための存在が生み出されている。

しかし彼らは確実に被害がでてからでなければ動くことはしない。

彼らが動くこと、それだけで【理】の波動が乱れてしまうがゆえの行動。

こくり。

相手の言いたいことを察してうなづくケレス。
ディアもとりあえず肯定の意味でうなづいておく。
それ以上、詳しく説明するならば天界と魔界も同じような仕組みで成り立っている、ともいえる。
光があれば闇があるように、心のありようも様々な形をもっている。
だからこそ、一定量に達した場合、その力を別なものに変換して生み出されるように、
新たに【生命体】は創りなおされた。
一度、自らの中で誕生した生命達の記憶は【意思】はすべて把握している。
だからこそ、それらを元にして新たに創りなおした。
ただ、それだけのことなのだが。
それをしっている存在はかぎりなく少ない。
「さてと。では次に妖精族の召喚方法…これはまあごくごく簡単、じゃな。
妖精達に関してはそのあたりよくいるからの。
一番簡単なのは近くにいる妖精に呼びかけ、そして目的の妖精に連絡をとってもらうことじゃ」
風の妖精、花の妖精、樹の妖精…視えない存在には視えないが、視ることができる存在はこの世界は妖精や精霊、といった存在であふれかえっているのがみとてれる。
そして視えない存在達にとってもそれは常識中の常識。
だからこそ、授業の中でも、妖精達が一般になじみがある。
として紹介されている。
そしてまた、
召喚術をつかえるほどの存在になれば視えないにしろその存在を感じることくらいはできる。
…もっとも、そんな妖精の王達はいくら一般になじみがある、とはいえ
まずお目にかかれることなどないのではあるが……

しばしそんな召喚に関しての細かな注意点や問題点、
そして要領などがケレスとディアにと説明されてゆく。
そんな最中、他の生徒達はといえば魔力等を担当しているティーケ教師より説明をうけ、
あらたに召喚の儀を行うべく挑戦を再開しているのであるが……

そんなこんなで数刻が経過していき……
結局のところ、本日の授業中に召喚術を成功させたのは、ディアとケレスの二人のみであった……

光と闇の楔　～召喚授業～（後書き）

今回でてきた人物名（教師名）：

召喚術担当：召喚術担当教師、フィテア＝ハルモニア

召喚予備知識担当：ビブリス＝ヘナメネ

魔力霊力担当：ティーケ＝リューメン

臨時担当：ラケシス＝パルテノーテ

総合科Ａクラス所属。ケレス。ケレス＝アストレア

総合科Ｃクラス所属。ディア（一応主人公）

今後はあとがきにて教員、そして同級生などのクラスメートの名前をだしていきたいとおもいますv

それでは、また次回にてv

光と闇の楔　～同僚者と資金ぐり～（前書き）

今回はケレスがでばってます。
あと、あとがきでこの世界の通貨設定を出したいとおもいます

「…何、この空気……」
思わず体を抱きしめる。
こんな空気など感じたことはない。
ゆえに体が震えだしてしまう。
まるで体全体が底なし沼に引き込まれてゆくようなそんな感覚。
底なし沼にはまったことがあるのか、といえば答えは否。
しかし感覚的にそう表現したほうがこの空気はしっくりくる。
それほどの空気が今、この屋敷の内部には漂っている。
「……は～……これはどうやら、【呪】……ね」
そんなケレスとは対照的に額に手をやりため息をつきつついっているディア。
……どうやら今回の依頼については依頼とは別に何かがありそうである……

光と闇の楔　～同僚者と資金ぐり～

「……あれ？ケレス？何でこっちに？」
授業も終わり、本日より暮らすことになる寮へと手続きにとやってきていた。
それはいいのだが……

どうして彼女が目の前にいるのかがよくわからない。
本日、召喚授業でたまたま一緒になった同じ総合科のしかも特待生ともいえるAクラス。
そのAクラスに在籍している彼女がここにいる理由がいまいち把握しきれない。
それゆえの問いかけ。
基本、総合科はすべての科目における文字通り、総合修学の場であることから、
そのAクラスに選ばれた、ということとそのものがその能力と知識の高さを物語っている。
「あ。ディアもここの寮生なんだ。これからよろしくね！」
にっこりとそんなディアにほほ笑みかけてくるケレスであるが。
「…なんで、しかもアストレア家の家系ともあろう人がこっちの寮？」
どう考えてもギルド寮にはいるような金銭的な問題をかかえているとは思えない。
…いや、可能性としてはあるにはあるが…
それでもAクラスにおける授業料は他のクラスと異なり果てしなく高い。
「ああ。それは、我がアストレア家の家訓よ。
『自分のことは自分でしろ。親をたよるな。自立しろ。』…だからよ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
つまり、まだ子供だから、といって容赦はせずに、自分で自分の生活費と学費をかせげ。
とおもいっきりいっているようなもの。
ゆえにディアが思わず無言になるのはおそらく誰にも責められないであろう。
ふと、どこか遠くをみつつ、

……それ、ぜったいに影響うけてるし……
そんなことをおもいつつ、彼女の家系のものたちに何となく申し訳ないような気持ちになってしまう。
ちなみに、特待生に選ばれている生徒達は国から学費を免除されるのであるが、
かのアストレア家はそれすら辞退している。
「……何というか、がんばって……」
そういうより他にない。
「でも、ディアもここの寮かぁ。ねえねえ。ギルドでパーティー組まない？」
まだ成人していない彼女にとって資金を稼ぐ手段はやはりギルドに依存することになる。
「他にもいい人いるとおもうけど？」
そもそもこのギルド寮には様々な事情で資金を稼がなければいけない生徒達がいるのである。
ちなみに生徒だけでなく普通の人も対象となっているこの寮。
生徒は比較的、学生料金、ということで寮の代金も割安にはなっているが、
それでも収入源がほぼなきに等しい生徒にとってはかなり割高。
…大概は、国に援助を申請し、出世払い方式を取り入れるのだが……
ゆえに身よりのない存在達も一応は学校に通える仕組みになっている。
ちなみに良心的なことに
学費等におけるギルド協会にむけての国からの援助に対しては利息は一切付かない。
何でも未来への先行投資を兼ねているらしい。
しかし、当然、ディアもその制度にたよる気はない。
そしてまた、ケレスも家訓によりその制度が受けられない。
ディアとしてはそこそこぎりぎりで生活して目立たなくしたいのが山々なのだが……

「だって。今日の召喚授業で召喚術を成功させたのディアだけでしょ？」

さすがに二人しかいなかったこともあり、今日の授業中に互いを呼び捨てにするようになっている。

もっとも、ディアからしてみれば誰かに敬称をつける、というのはある特定の存在に限っていたので、

どうしても呼び捨てになってしまう傾向があったがゆえさほど気にしてはいない。

何よりも名前で呼ばれる、というのはかなり新鮮味をもっていてディアからすれば少しばかりこそばゆくも面白い。

「召喚が扱える、ということは他の術もある程度はできるってことよね？」

にっこり。

それはほぼ確信。

それゆえににこやかにほほ笑みつつも聞いてくる。

「まあ、使えなくはないけど……」

「と、いうわけで。一緒にパーティー組みましょ？同い年みたいだし」

下手に詳しく説明するのが面倒なので見た目の年齢だ、とは言ってある。

それに何よりもギルドに登録したのもその年齢。

「…私、一人がいいんだけど……」

というかそのほうが楽。

というよりは面倒事は避けたい。

「何いってるのよ！一人より二人のほうが資金繰りはかなり楽になるのよっ！

そ・れ・に！学生がパーティーを組んで解決したらその依頼料は倍もらえるのよっ！」

普通に依頼をうける場合、それが数名のパーティーを組んでいてもその金額は変わることはない。

が、しかし、学生も扱える依頼はといえばその定義は異なってくる。
学生証を提示することにより、その依頼完了時の成功報酬。
それが三人まで文字通り、依頼金額のまま、各自へと支払われる。
つまりは、それだけ学生に対して依頼を出す方も率先して協力し、
未来において様々な分野で活躍してほしい、という人々の期待が込められている。
ゆえに、一人で解決するよりは、確実にパーティーを組んだほうがはるかに効率がよい。
何しろ一人当たりが手にする成功報酬の金額は同額もらえるのだから。
その紅き髪をさらに情熱で紅く染め上げるがごとくに熱演するケレス。
彼女の家系を示すかのごとくにその髪の色は燃え盛る炎の色。
能力に応じて炎の高さを示すかのようにそれぞれ各個人の髪の色、
そして瞳の色は異なっている。
ケレスの瞳の色は青。
橙色の髪をもつ存在はかなり高濃度な炎を操ることが可能。
つまり、紅色の髪に青い瞳のケレスは、かの一族の中では中位の位置に属する実力となる。
もっとも、常に黒いローブとフードで全身をほぼ覆っているのでその容姿はフードを取らなければ確認のしようがない。
「……は～…わかった。わかったわよ……。だからそんなに熱くならなくても……」
どうやらあきらめる様子はなさそうである。
「大変だねぇ。お嬢ちゃん」
くすくすくす。
寮の手続きを行っていた寮担当の事務員がそんなディアにと声をかけてくる。
「さあさあ。そっちのお嬢ちゃんも。手続きにきたんだろ？
そこで熱く語ってないで。この用紙に必要事項を記入しておく

れね」
いまだに何やら熱く語りそうな様子をひしひしとみせているケレスににこやかに注意を促し、
新たな入寮受付用紙を差し出す事務員。
ちなみにこの用紙はとある動物の毛によりできており、簡単な防水、防火の恩恵がかけられている。
何かカスミをつかんだかのような、ふわり、とした感覚のような手触りの品。
「は～い。というわけでこれからよろしくね。ディア！」
「あ…うん……」
よかった。
まず始めに一人部屋がいい、と申請しておいて……
彼女よりも先に申請にきており、相部屋か、もしくは個室がいいか、という問いかけに、
即座に個室で、と答えていたのが功を奏した。
なんとなくだが次に彼女が提案してくることがありありと予測ができる。
ゆえにこそ、そのことに安堵するディア。
案の定、というべきか、どうやらケレスはディアの部屋希望を聞いてくる。
「私は個室を希望してるから」
すでにもうその手続きも済ませてある。
その手続きが完了したときにケレスはこの場にやってきた。
「なんだ～…ディア、個室にしてたんだ。まだだったら相部屋希望だったのになぁ～……
　ね？変える気ない？」
「ない」
即座にそれだけは否定する。
…何しろ会いに来る可能性がある以上、これだけは譲れない。
…あの授業の後にきちんと口止めしておいたので大丈夫だとはおも

うが……
そんなことをおもいつつも、ケレスの誘いを一刀両断にしているディア。
はたから見れば仲のいい友達同士がじゃれあっているようにかみえないが。
水面下ではあるいみぎりぎりの駆け引きを行われている、といっても過言ではない。
「あ、なら、すいません。部屋を彼女のとなりにしてもらえますか？ダメなら正面で」
「いいよ。ついこの間、部屋はあいたからねぇ」
ケレスの希望にあう部屋がどうやらあいているらしい。
いくらギルド直属の寮だ、といえどもそう近くがあいているとは滅多とないはず。
「そんな近くの部屋同士が空いてるなんて、何かあったんですか？」
気になったのでひとまず確認。
「ああ。このあいだ、部屋を借りてたグループの子達が亡くなってねぇ～……」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
どうやら彼女達は部屋の主かいなくなったがために新たな主として認められたらしい。
喜んでいいのか何なのか。
何ともいえない空気が二人の間を包み込む。
「なんで、なくなったんですか？」
「さあ？何かの依頼をうけにいって、
それから亡くなった、と本部から連絡があったっきりだからねぇ。
あ、品物とかはそのまま残ってるから、そのままつかってもいいよ？」
事務員の背後にいた別の人物がそんなセレスの問いかけに答えるかのように振り向きざまにこたえてくる。

亡くなった人の生活用品を勝手に使ってもいい、といいきるこの寮の管理人はあるいみ強い。

「ああ。でも生活用品、といっても家具くらいしかのこってないよ？さすがに他の品はきちんと処分してあるよ？」

「で…ですよね…あはは……」

もしかしたら部屋の主が亡くなったその状態のままの部屋にいれられるのかもしれない。

そんなことをふと思ったケレスは思わず乾いた笑いを挙げていたりする。

いくら何でも部屋の以前の主が使っていたそのままの状態で次に引き継ぐはずもないのだが。

しかし、この世の中、何がおこるかわからない。

しかもそういった場所がいい！

という存在までいたりするのだから趣味はそれぞれ。

「ま、みたところ、お嬢ちゃん達は先に荷物とか運び込んでないようだし。ちょうどいいでしょ？」

普通は寮にはいるときは先に手続きを済ませておくものである。

そもそも、拠点となるべき場所を先に確保しておかなければ色々とこまる。

ゆえに普通は先に手続きを済ました後に入学試験を受けるのであるが……

ディアの場合は別に入れなければそれはそれでかまわないので当日やってきた。

ケレスの場合は初日がおわってから自分の住み家はみつけるように。

と家をでるときに父親から言われていたので従ったまでのこと。

その言葉に従わなければ死んだ方がまし、というほどのお仕置きがまっている。

そのことを長年、実家で過ごしていた彼女は十分に承知している。

だからこそ、学校がおわり寮への入寮のために手続しきにきた。

「うん。不備はないようだね。それじゃ、これからの長い学園生活、

がんばっておくれね」
ギルド協会学校。
正式名称が長すぎ、また言いにくいこともあり、通称【学園】とほとんどのものは呼んでいる。
二人に割り当てられたのは二階の端にあたる部屋。
どうやら隣同士の部屋らしく、
鍵をうけとりはいってみればたしかに家具などがそのまま設置したままになっている。
どこかいまだに生活の匂いがただよっているのは、
つい最近までこの部屋で誰かが生活していた証であろう。
割り当てられた部屋は基本的には二部屋に別れており、台所の奥にお風呂があり、
そしてその奥に寝室兼ちょっとした部屋が存在している。
一人ですむには広すぎず、かといって狭すぎず、といった空間がそこにはある。
ぐるり、と部屋を見渡しつつも部屋の様子を確認してゆくディア。
と。
「…うん？あれ？」
気配をたどれどもあるべき場所に気配がない。
ゆえにこそ、何となくだが嫌な予感がしてくるが、まあ自分がヘタに介入する問題でもない。
そもそも、各自の問題はそれぞれが解決しなければどうにもならない。
「とりあえず。二の姉様には拠点を伝えておいたほうがいい、わよね？
　何だか一の姉様のほうはあわただしいみたいだし」
大姉様と何やら最近いろいろとやり取りを交わしているらしくあわただしくしている様は知っている。
まあ何かあれば自分のほうにも話しはむかってくるはずで。
「さて。と。しばらくのんびりとしますか」

まずしなければならないのは部屋の隔離。
傍目にわからないように、中の様子が普通に見えるように少しばかり細工をほどこす。
「さて。次は掃除だけど……」
のんびりと時間をかけてやるべきか、それとも一気にするべきか。
のんびりとやるのもまた一興。
そんなことを思っている最中。
「ディア、いるっ！！」
ドンドンドン！
大きな声とともに部屋の扉をたたく音がおもいっきり聞こえてくる。
気のせい、とすましたいがおそらくそうもいかないのは嫌でもわかる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
さっきの今。
という言葉が思わず浮かぶのはおそらく気のせいではない。
「……何？ケレス？」
このままほうっておいたら他の存在に迷惑がかかるのはほぼ間違いがない。
ゆえにため息をつきつつもしかたなく扉をあける。
「初仕事よっ！」
「……は？」
目の前のこの人物はいったい何をいっているのであろうか。
ディアにはその意味が皆目不明。
ゆえにこそ思わず唖然、として言葉をもらす。
「だから、初仕事だってば！ここに来る前に仕事をうけおってたのよ！
　大丈夫！パーティーも可、とかいてあった仕事だもんっ！」
「〜〜〜〜〜……」
きっぱりと目の前で言い切るケレスの言葉に思わずその場にて無言

になってしまうディア。
何といっていいものか。
こちらの意見などは皆目無視、である。
だからこそ無言にならざるを得ない。
しかし悪意がないのはその表情からしても一目瞭然。
だから余計にタチがわるい。
「…まあ、いいけどね……」
こういう人物はほうっておいたらとことん暴走してまう傾向がある。
それを修正するのもまたおもしろくていいかもしれない。
そんなことをふと思いたち、
とりあえず立ち話しも何なので部屋の中にケレスを招き入れ、
台所にある椅子に座り話し合いを開始してゆく――

「それで？何の依頼をうけたわけ？」
とりあえず互いに向き合うようにと机を挟んでお互いに椅子にと座る。
「あ、これおいしい」
何も出さない、というのも何なので簡単な紅茶をひとまず出しているディア。
出された紅茶を一口のみ、そんな感想をもらしているケレス。
「あ。それなんだけどね。ディアは資金繰りのアテはもうきめた？」
ギルド協会学校に入学したとはいえあくまでもそれは仮入学。
本日の授業は仮入学における授業の一環。
本格的に入学するためには今から十日以内に決められた授業料を治める必要性がある。
ほとんどの存在は国の援助などを利用する手続きを行っているのだが、
ディアもそしてケレスもいろいろな事情からその手続きはおこなっ

ていない。
すなわち、自力でその資金をかせがなければ入学は取り消し、もしくは保留、となってしまう。
「まあ、まだといえばまだだけど」
とりあえず無難な返事を返すディア。
たしかに決めてはいない。
いないがいろいろな方法はいくらでもある。
だがそれをあえて言う必要性もないのでいうきもない。
「今日、ちょうどギルドに帰りによったらね。いい依頼があったのよ。
黒晶貨（ラクリスタ）で2枚。ね？いいでしょ？」
「…学生にそこまで払う依頼って……」
何だかものすごく何かがあるかもしれませんが、何かあっても責任はとりませんよ？
というような依頼のような気がするのはおそらく気のせいではないであろう。
ちなみに、今現在、この地上…否、この世界で流通している貨幣は、一般に水晶貨といわれている。
普通の水晶よりも頑丈で、そしてまた特殊な方法でなければ精製はできない。
そして特殊、とはいえ水晶であることから透き通っており、太陽の光にかざすとその内部にとある球体のようなものが浮かび上がってみえる。
色によりその価値がわかれており、銀、金、黒、白、赤、緑、青、紫の計八種類ほど存在する。
紫の水晶貨が五枚に対し、青の水晶貨が一枚。
青の水晶貨二枚に対し、緑の水晶貨が一枚。
緑の水晶貨五枚に対し、赤の水晶貨が一枚。
赤の水晶貨二枚に対し白の水晶貨が一枚。
白の水晶貨十枚に対し、黒の水晶貨が一枚。

黒の水晶貨十枚に対し金の水晶貨が一枚
金の水晶貨百枚に対し銀の水晶貨が一枚、となっている。
それぞれの水晶の色別ごとに呼び方があり、
今、ケレスがいった黒晶貨の呼び名はラクリスタ、と呼ばれており、
そして基本的に一般に扱われる通貨を【水晶貨（クリスタ）】と呼び称している。
普通に生活するのであればまず白水晶貨が十数枚もあれば確実に季節一つくらいはのりこえられる。
余談ではあるが、日常的にほとんどが、色もしくは通称で通常取引されている。
つまりは、黒水晶貨、二枚、というのはかなりの大金といえるのだが。
「なんでそんな大金をギルドの依頼、しかも学生向けでもだしてるわけ？」
当然といえば当然の疑問。
「それがね。術がつかえる人限定なのよ。そのために報酬も高くなってるみたい」
たしかに術者を限定するのであれば報酬がたかくてもおかしくない。
おかしくはないがやはり普通に考えてもたかすぎる。
「とりあえず依頼の内容は、『放置された屋敷の探索と浄化』なんだけど」
「……なるほど……」
浄化。
その言葉をきき思わず苦笑してしまう。
つまりはその場には何らかの要員がある、ということ。
少しばかり歪みが起こっている、といったところか。
「とりあえず、これを完成させれば一年分の学費はどうにかなるしっ！」
一つの依頼で一年分の学費が稼げるのはとてもたすかる。
ゆえにこそ成功報酬の額だけでこの依頼を受けることを即決したケレス。

たしかに、学校の一年間の授業料は一黒五白。
「私の炎の浄化だけでもこころもとなかったけど。ディアも手続きしてなかったでしょ？
　きいてみたらしてないって受付の人がいってたし。だからこの寮であえてよかったわ」
援助をうける手続きをする受付のものに一応、ケレスは確認をとっている。
その結果、ディアもまた受付を済ませていないことをしり、後から探し出そう。
そう心にきめていた。
ここ、ギルド寮でぱったりあえたのはケレスにとっては幸運であったといえる。
「やっぱり早めにこういうのは済ましておいたほうがいいとおもうし。
　というわけで、明日、さっそく目的の場所にいってみない？」
場所は王都から少し離れた位置に存在しているとある丘。
その丘の一角にかつてはどこかのお金持ちが所有していたといわれている屋敷が存在している。
今回の依頼はその屋敷に関してのもの。
「どうせ、いや、といってもきかないんでしょ？別にいいけど。暇だし」
それに何よりも『何がたまっている』のかも興味がある。
【彼ら】が動いていない以上、さほど問題視するようなものでもないであろうが、
小さなきっかけでも大事になりうることがある。
「よかった！じゃ、明日、さっそく一緒にいきましょうね！きまりね！
　…それはそうと、この紅茶、どこの紅茶？」
飲んだことのない味である。
のどにするっとはいりながらも甘みがほんわりとのこり後味もよい。

「ちょっとね」
「ふ～ん。…ま、誰かからもらった、ってところかな？じゃ、また明日ね！ごちそうさま！」
必要なことをいうだけいって紅茶を飲みほし、そのまま部屋をでてゆくケレス。
そんなケレスの後ろ姿を見送りつつ、
「…なんか、面白い子に懐かれたかな？」
ふとおもわず笑みがもれいでる。
まあ、懐かれるのは今に始まったことではない。
…それが他の存在のように依存しすぎなければいいのだけれど。
そんなことをふと思いつつ、
「そういや、この紅茶、この辺りでは普及してないんだったわね～」
かちゃかちゃと、しみじみつぶやきつつも、
コップを片づけてゆくディアの姿がしばし見受けられてゆく――

「ここ、かな？」
「でしょうね」
昨日の話しあいのとおり、
本日二人がやってきているのは王都から少し離れた位置にと存在しているとある丘。
「だけど、ディアってそのあたりの妖精たちとも話しができるのね。話しをきいてくれてたすかったわ」
様々な【命】にはそれに宿った形がある。
精霊にしろ、妖精にしろ。
そして、ディアがおこなったのはここに生息していた木々に話しをきく、というもの。
みんな素直に教えてくれたおかけで二人は迷うことなくこの場にと

たどり着いている。
太陽が昇りかけた時刻に出発し、今現在、太陽は上空から半分の位置くらいまで移動している。
女性二人のあるいみ二人旅。
いろいろな意味で危険といえば危険なのだが、なぜか危険な生物などは一度もよってはこなかった。
それゆえにケレスは珍しいこともある、と不思議がっていたりするだが。
何のことはない。
ディアと一緒にいることにより、ケレスの気配も周囲に溶け込むように操作されているからに他ならない。
しかしそのことにケレスは気付かない。
「とりあえず、中にはいりましょ」
「……そうね」
おもわずふと顔をしかめたディアの様子にケレスは気づいてはいない。
ケレスはどうやらこの気配に気づいてないようね。
そうはおもうがこれぱっかりは経験しなければ判らない感覚なのかもしれない。
特に、ケレスのような環境でそだった存在（もの）には。
ギィ……
屋敷の周囲の木々は手入れがされていなかったためかすべて枯れ朽ちている。
本来ならば放置された場合、雑草などに埋もれて形も見えなくなったりするのだが。
この屋敷に関してはそれがない。
そもそも周囲に草一本、生えてはいない。
あるのはすでに年月がたったであろう、枯れ朽ちた木々の残骸のみ。
ぽっかりとこの場のみが周囲の自然より切り離されたように存在している。

しかしここでたちどまっていても仕方がない。
そのまま鍵もかかっていない…鍵があったらしいがそれすらもすでにぼろぼろになっており、
以前誰かがはいったときに朽ちたらしく入口の扉の前にほぼ錆ついた鍵らしきものが転がっている。
鍵のかかっていない玄関らしき扉をゆっくりと開く。
ぬるっ。
それと同時に中から何ともいえない生ぬるい、といったほうがしっくりくるかのような感覚をその身にうける。
「…何?この感覚…?」
こんな感覚は今までにうけたことがない。
ゆえに戸惑いの声をあげるケレスに。
「…とりあえず、中にはいりましょ」
知ったからにはどうにかしたほうがいいであろう。
しかしそれを言葉に表すことなく、
戸惑いの表情をうかべているケレスをそのままにするっと扉の中にとはいるディア。
「あ、ディア。まってよ!」
そんなディアにあわててついてゆくケレス。
扉から入ると外の空気とはあからさまに異なっている。
扉の外と中、たったのそれだけであきらかな違いがある。
「……何?この空気……」
そんな空気というか気配というか、
とにかく得体のしれない何かを感じ、おもわず体をだきしめているケレス。
無意識ではあるが体が小刻みに震えているがそのことにケレスは自分でも気づいてはいない。
まるで体全体が底なし沼に引き込まれてゆくようなそんな感覚。
底なし沼にはまったことがあるのか、といえば答えは否。
しかし感覚的にそう表現したほうがこの空気はしっくりくる。

それほどの空気が今、この屋敷の内部には漂っている。
「……は～……これはどうやら、【呪】……ね」
そんなケレスとは対照的に額に手をやりため息をつきつついっているディア。
やはり、というか予測はついていた、というか。
この感じではここ最近、というわけではなさそうだけど。
そうはおもうが、気になるのは別のこと。
「……なるほど。呼ばれた…かな？」
くすっ。
感じる気配に覚えがありおもわず場違いながらも少しばかり笑みが漏れる。
そんなディアのつぶやきは、屋敷の内部の気配に気圧され聞こえていない。
「ケレス。とりあえず自身に聖風の結界まとったほうがいいわよ」
聖風。
風の属性に位置する術の中でも、魔の瘴気などに有効なもの。
簡単にいえば自分自身の周囲に清らかな風の気流を常に発生させる、という代物。
通常の存在などは瘴気に充てられただけでその肉体といわず器を壊してしまう。
そう。
外にあった木々のように。
あれらは枯れた、のではなく瘴気によって喰われ意味を無くしたものだ、とディアは理解している。
「え？あ、うん。…ってやっぱり、ディアって術のことにも詳しいんだ」
「ま、いろいろとツテがあるし」
嘘ではないが事実でもない。
ツテがあるのは事実であるし、そのツテから聞いたり教えてもらったなどともいってはいない。

しかしそんなディアの言葉の裏にケレスが気づくはずもなく、誰からか教えてもらったか習ったのであろう、そう彼女の中で結論づける。

「わかったわ。…風の精霊よ。我が意思に答えたまえ……」

ふわっ。

ケレスがそういうと同時。

ケレスの体の周囲に微量な風の流れが出現する。

その風はケレスの体全体をまとわりつくように絶えず流れて風の膜のようなものをその場にてつくりだす。

「あれ?ディアはかけないの?」

「まあ、私は慣れてるからね〜」

というかこの程度でどうこうなるわけがない。

この程度のものならば普通の存在でも精神力だけでどうにかなるもの。

しかし、あえてケレスに術をつかわせたのは彼女がこの手のものに免疫がないであろう。

そう判断してのこと。

「とにかく。気配が濃く感じるのはこっちだし。いってみましょ」

「え、あ、うん」

…なれてるって……

そういえば、さいきん自然界においても何かがおこってるって噂できいたっけ?

ディアの慣れてる、ということばに以前小耳にはさんだ噂をふと思い出す。

何でも、一夜で森が全部枯れただの何だの、という不可思議な話し。

嘘かまことか、それはわからない。

あくまで人の噂は噂。

噂はときとして真実をもねじまげて伝わることがある。

それをケレスは教育の一環として一応習っている。

実際に、わざと噂を流し、数日でどこまで変化するのか、という実

験を両親にさせられたこともある。
ゆえに噂の信憑性、というのをケレスはあまり信用していない。
「だけど、この雰囲気…いったい、何なのかしら？」
ディアの後ろをあわててついていきつつも、正体不明の感覚にただただ首をかしげるケレス。
ケレスはこの気配の正体をしらない。
この気配は、一般に、【呪】と呼ばれるものの一種である、ということを――

光と闇の楔　～同僚者と資金ぐり～（後書き）

この世界における流通通貨：

貨幣ルート：水晶貨。＜クリスタ＞（日本円ルート換算で示しています）

銀水晶貨＜シルクレスタ＞＝日本円単位百万円。

金水晶貨＜ルドクリスタ＞＝日本円単位一万円。

黒水晶貨＜ラクリスタ＞＝日本円単位千円。

白水晶貨＜ホワクリスタ＞＝日本円単位百円。

赤水晶貨＜レッドクリスタ＞＝日本円単位五十円。

緑水晶貨＜リンクリスタ＞＝日本円単位十円。

青水晶貨＜ブルークリスタ＞＝日本円単位五円。

紫水晶貨＜プルクリスタ＞＝日本円単位一円。

水晶貨＜クリスタ＞＝日本円単位一銭。百枚につき紫一枚。

※物々交換も可

光と闇の楔　～呪の発動と浄化、そして……～（前書き）

これ以後、ときど～き特殊な言語が出てくることがたびたび起こります。
それらについては簡単ながらも一応簡潔に文章の中で補足説明としていれる予定です。
世界設定などこの段階で詳しくだしましたら完全に内容のネタバレになりますので、
あえてしばらくは別口としては出しません。
そのあたりは何とどご了解ください。

光と闇の楔　～呪の発動と浄化、そして……～

呪。
知識としては習ってはいた。
しかしそれを目の当たりにすることは今回が初めて。
だからこそ、畏れと恐怖を抱いたのは仕方がないのかもしれない。
しかし一緒にいたはずのディアをみればまったくそんな様子はさらさらみえなかった。
…彼女、いったいどんな力をもってるのかしら？
ふと、昨日の召喚の儀式のこととといい、気になることはいろいろある。
だけどもおそらく聞いてもはぐらかされるような気がひしひしとするのは間違ってはいないと思う。
自分の能力のすべてを誰か第三者に教えたりすればそれを悪用する輩もでるかもしれない。
そしてその結果、まわりめぐって教えたものに罰がむけられる可能性がかなり高い。
世界は、様々な神々によって身守られているのだから――

ケレス＝アストレア　～初めての依頼についての感想日記より～

光と闇の楔　～呪の発動と浄化、そして……～

「……何、このまとわりつくような嫌な感じ……」
ねちりとまとわりつく、何かの感覚。
おそらく風の結界を纏っていなければ正気を保てないような気がする。
それゆえにおもわず歩きつつもつぶやくケレスに対し、
「ああ。ケレスはこういうのは初めて？ま、説明するよりも視たほうが早い、けどね。…きたわね」
何でもないように淡々と答え、目の前の暗闇を見つめているディア。
ディアの言葉と同時、歩いていた屋敷の廊下部分の闇がさらに濃さを増し、
やがてそれは一つの塊のような形をとる。
そしてそれを目にしたとたん、なぜか確信する。
この【闇】は意思をもっている、と。
「生き物の念が生み出し存在。負の心の結晶体。…【呪闇（カオス）】、よ」

【呪闇（カオス）】。
それは負の心が生み出したあるいみ悲しい存在。
生み出されたそれの意思はいたって単純明快。
生み出されたその意図のままにと行動する。
それ自身が浄化されるその瞬間まで。

【呪】には様々な種が存在する。
よく近いもので間違われるのが【呪（のろい）】や【呪い（まじない）】
それらは別に誰もが扱える分野であるものの、しかし呪いに関しては術者にもその影響は及ぶ。
呪いに至っては、自分とは異なるものに簡易的に請うことにより成果が発せられるもの。
ゆえにほとんどそれをつかっても影響はない。

だがしかし、【呪闇（カオス）】という存在は別。
それらが生み出されたときの感情のままにと行動する。
それ自身が触れるすべてのものを飲み込んで。

「この屋敷がこのまま残ってる、となると。この屋敷に関してのモノ、でしょうね」
周囲の木々もこれの影響をうけて喰われた、のであろうことは容易に予測できる。
そもそも、ディアには、これの中には幾多の存在が捕えられているのが【視えて】いる。
「くるわよ。気をつけて」
「え！？」
ディアの言葉の意味がわからない。
ゆえに何が、と聞き返そうとする間もなく、
ぶわっ！
二人の周囲…否、二人の全身を取り込むように目の前に闇がいきなり突進してくる。
突進、というかいきなり包み込んできた、というほうが正しいか。
いきなり視界、という視界が真っ暗な闇にと包まれる。
「え？え？何？何、これ！？ディア！？」
周囲を見渡しても、そこにみえるのは…果てしない、闇。
横にいたディアの姿も見えない漆黒の闇。
いきなりのことで混乱し正確な思考が回らないケレス。
人間、誰しもいきなり暗闇に放り出されれば多少なりとも動揺してしまう。
その心構えがまったくできていなければなおさらに。

――許さない。
――なぜ。裏切った。
――なぜ、我らを殺した。

――なぜ、我らは死んだのに【おまえ】はいきているっ！

それと同時、脳裏に響くような深く、深く絶望しきった声がどこからともなく聞こえてくる。

――すべてが滅べばいい。

――滅べ。死ね。そして滅びを広げ絶望にさいなまれるがいいっ！

「いやっ！！」

意識をはっきりたもっているのも苦しいほどの強い殺意と悪意。
おそらく風の結界を身にまとっていなければ
まちがいなくこの悪意に簡単に飲み込まれてしまっていたであろう。

――すべてに絶望と、そして滅びと死を……

脳裏に響いてくる声と同時にさらに周囲の闇が濃くなってゆく。
何、何これ？何？何なの？

すざましいまでの殺意。
それらは周囲の闇全体から発せられているのが嫌でもわかる。
ここまでの悪意にみちた殺意を今だかつてケレスは知らない。
だからこそ混乱せずにはいられない。
しかし、彼女は気づいていない。
彼女が混乱することは、そこに【負の心】が誕生してしまうことであり、
そしてその心は【それら】がすぐに付け入るすきになってしまうことを。
じわじわとケレスの張っていた結界すらをもむしばむように、
ケレスの周囲を舞っていた風すらもがだんだんと暗さを増してゆく。

「…や…や…いやぁっ！」

だんだんと周囲に闇が迫ってくる。
それと同時に何かに自分自身が蝕まれているような、そんな感覚。
意識そのものがどこかに抑え込まれるような、そんな感覚。
それに対し、恐怖を感じていたその刹那。

――哀れなる心　打ちひしがれた結晶よ　その思い我がひきうけよう　哀れなるものよ　我がもとへ――

「Une chose a nomme la pensee je la sympathie
d'un coeur a deprime cristal
l'autre place a nomme
la sympathie a notre cause」

ケレスの耳に聞きなれない何かの旋律が聞こえてくる。
それはとても哀しくもそして慈愛に満ちた旋律。
しかしその旋律が何を意味しているのかケレスには判らない。

――哀れなる捕らわれの魂よ　番人の元へ導きゆかん――

「Je le mene a la cause du garde
l'ame de tomber miserable
dans mains de l'ennemi et ne vais pas」

言葉に意味を込めて必要な旋律を紡ぎだす。
この言語はこの世界の【理】をよりよく導きだすためのもの。
その本当の意味を知っているものはごくわずか。

それと同時。
闇の中に光が発生し、周囲の闇全体が光の洪水にと見舞われる。
それは先日の召喚の儀式のときに垣間見た光景によく似ている。
しかしあのときと異なり、周囲には小さな小さな光の粒がいくつも舞いつつ光の洪水をうみだしている。
「…な…何？いったい……」
いきなり闇に包まれたとおもったら今度は光。
いったい何がおこったのかケレスには理解不能。
光の粒はやがていくつもの形を成して、それらははじけるようにとかき消える。
「…な…なんなの？いったい……」
光が形を成したものがはじけたかとおもうと
今度は目もくらむような眩しき光がケレスの感覚そのものを貫いてゆく――

「ケレス。ケレス……」
ふと名前を呼ばれてぼんやりと目をあける。
「…あれ？ディア？…え？」
自分はいったいどこにいるのであろうか。
たしか先ほどまでいた屋敷はこれほど朽ちてはいなかったはず。
屋敷の内部はしっかりしていたと自分では記憶している。
なのに今いる自分はまさに廃墟ともいえる場所としかいいようがない。

ぱっとみた目にとびこんできたのは壊れた壁に間取りの残骸。
しかも確かにさっきまできちんと天上などもしっかりしていたはずなのに
青空が壊れた天井部分からかいまみえている。
しかし周囲を見渡してみれば壊れた窓から見える外の景色は来る時と同じもの。
違っているのは朽ちた木々が立ち枯れているのではなく完全に折れているくらいであろう。
「え?…ここ、どこ?というか何がどうなったの?というか、今までの…夢?」
そんなことをふと思い、ケレスは思わず口にするものの。
ぞくり。
すぐさまそれは夢ではなかった、と自覚する。
何よりも体…そして自らの魂があれは現実だった、と訴えている。
それに夢にしてはあまりにうけた悪意が生々しかった。
触れただけでまずまちがいなく発狂してしまいかねないほどの悪意。
理由はない。
ただ、彼女の魂がそう直感的に判断した。
あの【闇】はそういうものであった、と。
たしかに、アストレア家に生まれた以上、誰かに疎まれることなどはあったが、
あれほどまでの悪意をうけたことはない。
「よかった。どうやら精神異常などの副作用は起こしてないみたいね」
結界を纏わせていたがゆえに大丈夫だとはおもったが、それでもやはり人の心は弱いもの。
本当ならばケレスに任せようかともおもったが、どうみても混乱し取り込まれそうになっていた。
近づいた生きている存在、すべてを取り込むことのみがあれが存在していた意義。

それほどまでに哀しい…悪意。
それがあの【呪闇（カオス）】。
本来、この場にはまともな屋敷など存在していなかった。
しかし、突如としてこの屋敷は出現した。
ゆえにこそ内部捜索の依頼がギルドに出された。
どうして壊れていたはずの館がいきなり再生したのか、という原因を追及するために。

【――さまよいの館】
そう呼ばれている館の存在は確認されているだけでいくつかある。
それは館の中にはいった存在、生きた存在すべてを飲み込む存在。
飲み込み、魂ごと…喰らう。
喰われた魂はその館の核の一部となりさらなる贄を求めだす。
世界各国からしてもその存在は非常に危険、とされている。
しかし、その現物を目にしたものは皆無であり、ゆえに伝説上の話だ、ともある一部ではいわれている。
誰も目にしたことがないのは、目にした存在達はすべては取り込まれているからであり、
そしてまた、それらは文字どおり、世界中をさまよっているからに他ならない。
そしてその力が増してゆくごとに、それらが移動する【界】の幅もまた広がってくる。
もっとも、【天界】にまで達する前に精霊達がその存在そのものを消滅させているのだが。

だからこそ、ここに現れた【館】が【さまよいの館】だと人々は気付かなかった。
元々この場にあった館に同化してしまったがゆえに気づくのが遅れた、ともいえる。
その証拠に以前、この館を調査しにやってきていた存在達はことご

とく屋敷そのものに【喰われて】いた。

「浄化の言葉を唱えたら、こうなっちゃった。みたらケレスが倒れてたから。大丈夫？」

いまだに混乱しているであろうケレスにむかい問いかけるディア。

ケレスが混乱しているのはおそらくこの場の様子にもよるものである。

そう理解しているがゆえに完結に説明する。

もっとも、普通にあったはずの建物が目覚めればいきなり廃墟になっていた。

そんな現実を目の当たりにすれば誰もが混乱しても仕方ないのかもしれない。

浄化、と言っているが実際はそんな生易しいものではない。

捕らわれていた魂をすべて解放し、そしてそれらの魂を浄化するためにあらたな場所にと導いた。

しかしディアからしてみればそれを説明する気はさらさらない。

そもそも、本当はあまり目立ちたくないのが本音なのだから。

「浄化…？」

そういえば遠くなりかけた意識のスミに何か旋律のような響きをきいたような気がしなくもない。

「…あの歌ってディア？」

「歌？…まあ、そんなところかな？それより、体調、おかしくない？立てれる？」

ふと気付けばどうやらケレスはディアに膝枕なるものをしてもらっている今の現状。

蝕まれかけていた魂はすでに浄化され終わっている。

その余波にていままで目覚めることなく眠っていたケレス。

そんなケレスを動かすわけにもいかずにこの場にて座り込み、

ケレスに膝枕して目覚めをまっていたディア。

「うえぇっ！？ご、ごめんっ！」

いわれて初めて自分がどんな格好をしているのか把握し驚愕の声をだし、
あわてて起き上がりつつも謝罪の言葉を紡ぎだす。
「気にしなくてもいいわよ。まあ、私も失念してたし。人の心ってけっこう弱かったりするのを」
混乱し正常な判断ができなくなったものがアレにすぐに飲み込まれてしまうのは容易に予測はつく。
しかしアストレア家の血筋、ということもあり大丈夫であろう、とおもっていたのも事実。
「…もしかして、まだケレスって契約の儀、一つもすませてないの？」
「…ぐっ……」
さらっといわれたディアの言葉におもわず声を詰まらせてしまうのは仕方ないであろう。
連続していわれたケレスにとっては痛いところを付いた問いかけにより、
さきほどの人の心が弱い云々、というディアの台詞は奇麗さっぱりケレスの中では問題視されていない。
普通、術を使うものは様々な精霊と契約を交わし世界とのつながりをより深めている。
が、しかし……
「……うちの家、儀式するのがフォボス火山、なの……」
フォボス火山。
これは地上でももっとも危険な場所、ともいわれており、常に地下よりマグマが噴き出している火山を示す。
そして火の精霊王サラマンダーが拠点を置いている場所でもある。
そこにたどり着く為には水、もしくは火の術をうまく利用しなければその熱さから人は焼け死んでしまう。
ほとんどのもの達からは聖域、とすらいわれている場所。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

つまり、まだやってないのね？」
どうりで気配が薄いはず。
ゆえに呆れ半分に問い返すディアであるが、そもそも今まで他の精霊と契約していなかった。
その事実に呆れずにはいられない。
水の精霊なり風の精霊なりそのあたりにいる存在に少しばかり声をかければすむこと。
それをしていない、というのはそのことを教えられていないのか、はたまた自力で気づけ、ということなのか…
おそらくは後者であろうと確信がもててしまうのは、かの性格を誰よりもわかっているからに他ならない。
わかってはいるがやはり呆れてしまうのは事実なわけでおもわずため息をついてしまう。
「…だ、だって！私、水の術、苦手だし！そもそも私の術だとあっという間に蒸発するしっ！」
傍目にもディアが完全に呆れているのが判り、ほとんど必死で言い訳をする。
そもそも水の結界を張ってもすぐに蒸発してしまう。
彼女自身が未熟だ、といわれても仕方がないとはおもっている。
そもそもいまだにケレスは精霊との契約も成功した試しがない。
ゆえにいまだに簡単な契約すら行えていない。
もっとも、契約なしで施行できる術に関してはケレスはほぼ習得してはいるのだが……
その呼びかけ方法が間違っているかもしれない、という可能性についてケレスはまったく気づいていない。
「この近くに確か湖があったわね。ケレス。そこの精霊と契約の交渉してみたら？」
「え？湖の精霊！？…私なんかの話し、きいてくれるかなぁ？」
この丘の近くに小さな湖が存在している。
ゆえにケレスに対して提案するディア。

すくなくとも水の加護くらいはもっていたほうがいいであろう。
特にこれからも自分の傍にいるつもりならばなおさらに。
それに何よりこれから世の中はどうなるか、ディアですら予測がつかない状況になっている。
おそらくそれらに関しては近いうちに連絡が入るであろう、とは確信しているディアであるが。
そんなことをディアが思っていると知るよしもなく、
ディアっていろいろなことに詳しいけど。
まあ、動植物の声が聞けるみたいだし、そのあたりの関係なのかしら？
そんなことを思いつつも、ディアの提案した事柄におもいっきり動揺を示すケレス。
いくら小規模な湖、とはいえそこに住んでいる精霊ともなるとそこそこ実力のある精霊のはずである。
つまりは、【主】がいる場所においては【主】を無視して契約が履行されることはない。
ゆえに、まず先に【主】と話しあうことが必要不可欠。
これもまた、世界の【理】の一つ。
力を求めるものがその力におぼれないようにするための枷の一つ。
「ま、私も口きいてあげるから。…せめて下位の精霊との契約くらいはしとかないと」
うまくしたら個人に対しての守護精霊になることもある。
下位に位置する精霊とて人より格段にその【力】は上。
精霊と契約しているか、いないか、によっても扱える術の威力が異なってくる。
契約を交わしている。
ということは世界の【理】に背くことなく従います。
という同意を示したと同意義としてみなされる。
ゆえに簡単な術などは願っただけで発動が可能となる。
「それより。何がどうなったのか知りたいんだけど？」

このままではどうもなし崩し的に水の精霊との交渉を押し付けられそうな気がひしひしとする。
ゆえにこそ何やら話題が自分のことにそれてしまっていたが、もともとここには屋敷の調査と浄化にきたはず。
何があったのかケレスは判らない。
おそらくディアは理解しているはず。
当事者として自分自身も知る必要性がある。
それゆえにちょこん、とディアと向き合うようにすわり、じっとその瞳を見つめ返すケレス。
「まあ、説明する、といっても難しいことじゃないんだけど。
　そもそも、ケレスは【呪】の種についてどこまでしってる？」
それによって説明の仕様もかわってくる。
「どこまで…って、生きとし生けるものに害する可能性がある種もいれば、
　未来を指し示す種もある、ということ…くらいかな？」
そもそも、【呪】という種に関してはいまだによくわかっていないというのが定説。
生き物の【念】というか【思い】がその種に変化する、ということは長年の研究の結果証明されている。
「さっきのあれは、触れてわかったとおもうけど。人の思念から生まれたもの、ね。
　それも、相手に対する恨みから発したもの。
　その恨みの対象者がいなくなってもそのまま成長をつづけていっていたようだし」
もう少し王都に近ければ間違いなく、王都の守護精霊が対処を施したであろう。
しかしこのあたりに通常近づくものは滅多といない。
それでもそんな場所に【移動】してきた、ということはおそらくここの【廃墟】に染みついていた気配からであろうことは容易に予測はつく。

この今は廃墟とかしている屋敷ではかつて非道な実験を行おうとした人間がいた。
それは魔と契約し自らの力を駆使し権力を握ろうとした。
が、しかしそのような存在を精霊達がだまって見逃すはずもない。
そもそも、契約した魔も勝手な行動をしたことでおとがめを受けている。
世界の【理】に反して自らの欲のために行動しようとしたその人物はそのまま【部屋】の中へと押し込められた。
しかしその欲の深さは果てしなく、この屋敷そのものに【念】として染みついた。
その【念】にひかれて、【さまよいの館】はやってきた。
「おそらくかなりの数の生命体を取り込んできていたはずよ。あの様子だと。
まあだけど、【念】を核として成長した【呪闇(カオス)】とて元々は念には違いないし。
消すこともその成り立ちさえ判っていれば簡単なのよ」
ちなみに精神力、もしくは霊力のみでそれを消しさることもできる。
それはどの存在にもいえること。
しかし大概の存在はそれを発揮することなく、その【闇】にと呑まれてしまう。
あれに自分達が入室することになった先住者達が取り込まれていた。
というのはケレスには説明しないほうがいいでしょうね……
そんなことを思いつつも言葉を選びながら説明するディア。
「ここまではわかるかしら?」
「…ごめん。意味不明……」
「あ~……。ともかく、簡単にいえば屋敷の姿をしていたのは、アレが獲物をおびき寄せるためであって。
元々ここは廃墟であった、これはわかるわよね?
依頼内容が復活した廃墟の調査と浄化だったでしょ?」
確かに。

ケレスがギルドでみつけてきた依頼はそのようなことが書かれていた。
昨日、そこまでディアに詳しく説明したっけ？
ともおもうが、ディアのことなのであれからギルドに確認しにいったのかもしれない。
そう思い一人納得する。
「たしかにそう、だけど。おびきよせる…って、そんなことも可能なの？」
「その核となっている思いの強さが強ければ対象者に対して現実的な幻をみせることくらいは簡単なのよ」
幻、と表現しておいたほうがおそらくわかりやすいであろう。
実際に館そのものはかつての姿を模して具現化されていたに他ならない。
地にしろ建物にしろかならずその【記憶】の痕跡はのこる。
その痕跡をよみこみ、具現化された建物。
それが先ほどケレスとディアが玄関の扉をくぐってはいった屋敷の正体。
「詳しいのね。ディア」
「伊達に動植物と話しができるわけじゃないってことよ」
本当は別の原因があるのだが、話す必要性がないのでそのあたりは黙っておく。
ディアからしてみれば本当は手をだすつもりなどさらさらなかったのだ。
おそらく、あちら側からしてみれば自分がどこにいるのか、というのを予測をつけてくるのは必然。
…しばらくは大人しくしときましょう。
そんなことをおもいつつ、
「まあ、ここに存在していた【呪闇（カオス）】は浄化したし。
その結果、ここの屋敷も元の姿にもどったわけなんだけど」
とりあえずさらっとごまかし簡単にと説明を締めくくる。

「浄化？あの旋律みたいなのって、ディアが？何なの？あれ？」
「ん～、まあ、【戒めの旋律】ってところ…かしら、ね？」
それはかつての悲劇を起こしたものたちへの戒め。
二度とそんなことがないようにと、新たに創られた【理】の一つ。
いくら当時、それぞれに完全なる個々の意思がなかったとはいえ協力したのはまちがいようのない事実。
ただ、あるだけであるがままに存在していた。
その結果、人類の暴走を手助けしてしまったのも事実。
だからこそ、【戒め】の言葉というものが新たに創りだされた。
その事実を知るものは【世界】を動かす上層部の一部のみ。
それらはすべて【意思】により創りだされたもの。
そして……
「さて、と。こんなところで座りこんで話してもなんだし。
とりあえず湖にむかいましょ？それに。早くしないと日が暮れるしね」
いくら何でも女性の夜間の二人歩きはあまりに危険。
それこそいろいろな意味で。
「む～…なんだかよくわからないし。なんかはぐらかされてるような気がする……」
今のディアの説明をうけてもはっきりいってさっぱり意味がわからない。
そもそも、戒め、とはいったい何のことなのだろうか？
そうはおもうがこれ以上、どうやら聞いても答えてもらえそうにない。
その口調からそう判断し、
「…たしかに。とりあえずここを出ましょうか」
壁もあってなきがごとしの廃墟にずっと居座ることは、襲ってください、といっているようなもの。
おそらく脅威となるモノがいなくなったこの場には
今まで近づくことのなかった存在達がやってくるであろう。

そしてその中に人に害を与えるものがいない、とは絶対に言い切れない。
ここは精霊の加護がない場所。
加護のある場所ならばそういった存在は近づくことは許されない。
「まず、湖にいきましょ？うまくすれば、王都の近くの泉まで運んでもらえるし…ね？」
にっこり。
いまだに何だか納得していない表情のケレスをたたみかけるようににっこりと笑みを浮かべるディア。
というかディアとしてもこの場に長居はしたくない。
…いつ、ここを【探索】されるとも限らない。
「…う～……いかないと、だめ？」
「だめ。たぶんだけど。ケレスは自分が火の属性と相性がいいから躊躇してるんでしょうけど」
ケレスの性格はその属性からきているもの。
属性、とはこの世界に存在する様々なものに生まれつき与えられている【能力】を指し示す。
今現在、その属性をもたない生命はこの世界には存在していない。
そのようにあらたに生みなおされた（・・・・・・）。
詳しくは語られてはいないがそのあたりのことは、伝道師達が様々な場所において伝え広めている。
それこそ言葉をうまく扱い広めているので、属性は別名、神々の贈り物、とすらいわれていたりする。
…実際は異なるのだが……
属性をもっている、ということは、世界、しいては神々にあなたがたは認められて存在していますよ？
という定義だ、と言い伝えられている。
それは動植物などにおいても同じこと。
このままこの話しはうやむやで終わらせて、早めのこの場を立ち去りましょう。

そう決意し、
「さ、いきましょ。ケレス。早くしないと日が暮れるしね」
空を見上げた後に再びケレスの瞳をひたり、と見つめる。
「…は～……仕方ない。たしかに。先に湖の精霊と話したほうがいい…のかなぁ～……」
ここにくるまでの時間を考えれば今から急いでもどっても、どう考えても途中で日がくれる。
道中、盗賊などがでない、とも限らない。
夜に活動する人を喰らう生物も多々といる。
精霊とうまく話しがつけば、精霊の機嫌によってはそのまま王都に送ってもらえることもありえる。
そういった知識だけはケレスは嫌、というほど実家にて叩き込まれている。
しかし、今までも精霊の存在だけは感じることはできるのにどうして認識ができないのか。
それゆえにケレスは今まで契約、という行為ができていない。
そんなことで卒業した後に儀式が耐えられるのか、という疑念もあるにはあるが、
何しろ儀式を行う相手が相手。
たとえ魔力や霊力が欠片ほどしかなくても絶対に認識できる、というほどの聖なる存在。
「…たしかに、水、だけははやく習得しないといけない…のはわかってるのよね……」
ぶつぶつ。
おもわず愚痴を漏らしてしまう。
昨日の精霊召喚に関しては、もともとギルド本部が契約を妖精と交わしていたがゆえに、
生徒の呼びかけに応じて仮召喚されただけに過ぎない。
召喚の魔方陣で立ち上った光の奔流はディアが行ったものとはかけ離れていた。

それだけでも、ディアが精霊達と相性がいい、というのは容易に想像つく。
それに何より、ディアは間違ったことをいっているわけではない。
水はすべての命の源、ともいわれている原初の海ともいえるべきもの。
母なる大地の次に生命の母、といえるであろう。
ゆえに回復術なども水を媒介とすることによりその威力が格段に増す。
自身の中の水を感じて操ることは可能なのだがどうも水の精霊の力を借りて術を発動させる。
というのがいまだに成功できていない。
すこし考え方をやわらかくすればどうしてできないのか、
というのは誰でもわかりそうな小さなことなのだが、
ケレスはまったくそのことに気付いていない。
それがわかっているからこそのディアの提案。
直接に精霊と交渉し、その姿を実際に視ることにより気づかされることもある。
すべては、一つの【意思】の元に繋がっている。
それがこの【世界】の【意思】が新たに【定めた理】の基礎、となっているのだから……
「考えていてもしょうがない。か。
どうせ遅かれ早かれ、水の精霊の誰かとは接触しないといけないんだし」
どちらにしてもいずれは接触をもたなければならないのは事実。
ならばそれが今日でもいつかわからない未来でも同じこと。
「わかったわ。じゃ、いきましょ。湖に」
くよくよ悩むのは自分の趣味ではない。
ゆえにこそ様々な疑問は頭の隅にと押しやり、意識を変える。
このおもいきりのよさ。
それがこのケレスのよい点であり、また欠点でもある。

そんなケレスの様子をほほえましくみつつ、
「じゃ、いきましょうか」
互いにそんな会話を交わしつつも、二人の少女は瓦礫と化した廃墟をそのまま後にすることに――

二人が目指すは、丘のふもとに位置している小さな湖。
その湖にはその湖を守護している守護精霊がいる、というのはまことしやかに噂されてはいる。
いるが、その姿をいまだかつて実際に目撃し拝んだものは…だれもいない……

光と闇の楔　～呪の発動と浄化、そして……～（後書き）

次回は精霊がでてきます。

光と闇の楔　～契約と特別講師～（前書き）

今回は後半部分にて伝道師の尚人、登場！番外編の主人公！
彼には苦労してもらいましょう

光と闇の楔　～契約と特別講師～

「……あ～…面倒だなぁ～……」

先日の会話がどうしても脳裏から離れない。

そもそも、他の【場所】にいる仲間からも芳しい情報ははいってこなかった。

「それに意思がどちらからも姿をけしていれば…なぁ～……」

おそらくどうしてそのような行動をしたのかはなんとなくだが予測はつく。

最近、代替わりが近いことによる銀河系の内部における【理】が多少なりとも乱れている。

それによりこの惑星にも影響を及ぼしているのであろう。

ここ最近は以前とくらべ、勝手な行動をとる各界のものが増えている。

しかもそれらほとんどが【王】に判断してもらおうとする依存症に陥っていたようでもあった。

「ま、自分は自分の役割を果たすだけ、なんだがね」

いいつつも、ゆっくりと上空から大地へと下降してゆく一人の青年。

黒い髪に黒い瞳。

しかし全身を同じく黒いローブとマントで覆っているのでその容姿は覗きこまない限りわからない。

「さて。伝道師。鈴木尚人（すずきなおと）のお仕事の開始、だな」

生身で空を飛んで移動してきたその青年はそんなことをつぶやきつつも、

そのまま何事もなかったかのように王都に続く門をくぐってゆく――

テミス王国の首都テミスから数キロ離れた位置に存在している小さな丘。
丘、といってもちょっとした森のようになっており、
ここは魔の森、ともいわれ近づくものはあまりいない。
山、ともいえないちょっとした高さなのでほとんどのものが、丘、と呼んでいる。
その中ほどに問題の建物はあったのだが。
「でも、なんで魔の森の外に湖があるの？」
それも丘を下りてすぐの場所にあったりする。
それはかつてそこには町が存在しており、その街が消滅したときにできた窪みが湖になったものなのだが。
その事実は一般的には知られていない。
機密文書としての歴史書の中に記されているのみ。
それは禁術を行おうとした記録でもあるのであまり公にできない内容であるがゆえにそういう処置がとられている。
誰しも好奇心、というものはもっている。
そのことをしり、万が一再び過ちを起こすものがいないように、との配慮をも兼ねている。
「まあ、新たな湖ができるのはそう珍しいことじゃないでしょ？」
事実、必要とあらば、自然界に請い願い、その願いが聞き届けられると精霊がつかわされる。
そしてその精霊の加護のもと、あらたな【場】がつくられることはしばし。

もっとも、それが私利私欲のためなどであれば願った時点で何らかの自然界からの罰が科せられる。
一般的な例は私利私欲目的をした存在に対してゾルディ、もしくは魔が襲撃を開始する。
魔の好物は存在達の欲望などといった感情。
その感情に支配された肉と魂は彼らにとってはあるいみ美味。
ゆえに勝手に地上界にでむきそのように仕向ける魔もいるにはいる。
だがしかしそういう輩は魔界の上層部にあたる存在達がきちんと処罰をかしている。
どうしても手におえない場合は彼らの【王】に対応してもらっているようではあるが。
「滅多にない、とは教えられてはいるけどね」
そうほいほいと願いをかねえていては努力を怠ってしまうのが目にみえている。
ゆえにどうしても自分達の手では無理、と判断された場合のみ、それらの【奇跡】は起こされる。
「そういえば、この森って、きたときとまったく雰囲気かわったわね」
ここにきた当初は昼間だ、というのに薄暗く感じていた。
しかし今は普通の森のように木々の隙間からは太陽の木漏れ日が大地におとされている。
「まあ、負の力は仲間を呼び込むからね」
害をあたえるしかない念にまみれた建物があったがためにこの森全体がその力に覆われてしまっていた。
しかし問題となっていた力を取り除いたことにより、この森は本来の姿を取り戻している。
「あ、みえてきたわよ」
ケレスの問いにさらり、と答えつつも、視線の先を指し示す。
そこには木々の間からきらきらと太陽に反射しきらめく湖がうっすらと確認できる。

「…み…湖の精霊…か……」
精霊、という存在は人の身からすればかなり崇高なる存在である。
ゆえにこそ緊張せずにはいられない。
精霊の怒りを買い、不幸になった存在は数知れない。
そういったことを知っているがゆえに緊張せずにはいられないケレス。
「ま、かたくならなくても。気楽にいきましょ」
話しているうちにやがて森を抜け、湖のふもとにとたどり着くケレスとディア。
きらきらと太陽が湖面に反射し、ときおり魚の跳ねる音とともに水が跳ね上がる様子が見て取れる。
二人がいる位置においては背後の木々が湖面に写り込み、ゆらゆらと木々が揺らめくように垣間見える。
「さて、と。ついたみたいね。とりあえず、契約の儀式をする前に、ここの精霊に願わないとね。
いまだにまだ契約したことがないっていってたけど、とりあえずやってみてくれる？
もし私にわかる間違いがあるのなら指摘できるし」
大体の予測はつくが横を振り向きつつもケレスに話しかけるディア。
「え。あ、う、うん」
ここまできたらやるしかない。
ゆえにこそ、すっと両手を重ね合わせるようにして祈る格好をとり、そのままその場にゆっくりとしゃがみこむ。
「我、火の眷属の加護をうけし血脈のものなり　我はここに願う
儀式の許可を今、ここに」
両足をついて正座のような格好をしつつも、手をあわせて祈りをささげる言葉を紡ぎだす。
本来ならばこのとき、【神聖語】ともいえる言語をつかえばより確実に効果はある。
ということは知ってはいるが【神聖語】は意味と、そして言葉がき

ちんと一致していなければ発動しない。
つまり、少しでも解釈などが間違っていればそれだけで何事もおこらない。
ゆえに、大概普通の言葉で【願いの言葉】を紡ぎだす。
精霊などによる何らかの加護をもつ属性をもっている存在は必ずそのことを相手に告げる必要がある。
自分はあなたに危害を加えるつもりはありません。
という意味合いをこめて自身のもつ力を先に示す意味合いをもつ。
しかし、やはり、というかいつものごとくに自らの周囲に魔方陣らしきものは一つも発生しない。
もしも願いが発動したのならば周囲に陣が浮かび上がる。
いつものこととはいえやはり何ごともおこらない現象を目の当たりにすれば哀しくなってしまう。
自分ははっきりいって才能がないのではないであろうか。
ここ数年はそんなことすら本格的に思ってもいたりする。
それでもそれ以外の才能だけは誰にも負けまいとして様々な知識だけは身に付けたつもりではある。
「…あ～。ケレス。あなた、何に対して願ってる？」
実際に願いの言葉を紡ぎだすケレスの姿をみて懸念が確信へとかわるディア。
一応確認のために一番【儀式】における大切なことをきいてみる。
「何…って。もちろん、天界に対して」
何をいっているのだろう。
そんなことを思いつつも、ディアの問いかけに対して当然のようにとこたえるケレス。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・やっぱし・・・・・」
どうも根本的なところが間違っている。
天界に対して願っても何もおこるはずはない。
そもそも、天界と地上はたしかに繋がってはいるが自然界における

様々な事柄を統治しているのは精霊達。
ゆえにこそ、きっぱりいいきったケレスの言葉におもわず脱力してしまうのは仕方がない。
「天界と自然界はまったくの別もの。この地上における自然を治めているのは精霊王よ」
精霊王、ユリアナ。
彼女を筆頭にして様々な精霊王達が存在し、さらにその下に個体名をもたない精霊達が存在する。
天界における自然などは天界に生活している精霊達が創りだしている。
つまり、それぞれにそれぞれの役割がありきちんとかれらはその役割を分担している。
そのことになぜか人々は気づきにくい。
「精霊王。もしくはこの世界そのものに願わないと。ちなみに、天界はあくまでも天界であって。
　世界の一部にすぎないんだから、天界がかかわる願いの儀でないかぎり願っても意味ないわよ？」
もっとも、世界そのものに願われてもいちいちそんな【声】をきいていたらどうにもならない。
だからこそ、各分野においてそういった存在達がいる。
「え？天界が世界の中心、なんでしょ？」
「中心？違うわよ。この世界そのものが中心であり。
　天界はあくまでもその世界の中の一部にすぎないの。それは魔界や他の界においても同じこと。
　そしてこの地上で自然界ともいえる現象を治めているのは精霊達、つまりは精霊王よ」
そして精霊達は様々な場所の守護をも兼ねている。
もっとも、さらに詳しくいうならば、
この【世界】に関してでいうならばこの【世界】が中心なわけであり、

太陽系規模でいう中心はあくまでも太陽が世界の中心となる。
そして、太陽系をも抱擁する星の海単位で考えるとなれば中心は銀河の中心。
すなわち、【マァト】が治める場所となる。
今をいきる存在達は【外】にでる術をまずもたないのでそこまで詳しく説明する必要性はない。
だからこそ簡潔に説明する。
「え？だけど、天界には神々がおられて……」
「……神々をつくりだしたのもまたこの世界。そして精霊を創りだしたのもまたこの世界、よ？
　この世界がなければ彼らは存在すらしていない。だから天界に祈っても意味はないの」
なぜか、神、というだけで万能、と思い込むらしくほとんどのものがそういった勘違いをしているが。
しかし、術をつかう存在がそんな勘違いをしていては、正確な本質がつかめないどころか間違った力の使い方をしてしまう。
それでも思い込み、というものは恐ろしいもので、誰しもその思い込んでいる事柄が間違っている。
と認識しようとはしない。
「まあ、だまされた、とおもって。天界に祈りをささげるのでなく。精霊に対して願いをささげてみて？」
「……まあ、どうせ今までいくらやっても成功しなかったんだから、ダメもとでやってみるけど……」
天界が世界の中心ではない、といわれてもピンとこない。
しかしいままで天界に祈りをささげても何も現象は起こりえなかった。
幼いころから今のいままでずっと。
だからこそ、ダメモト、とばかりにその意識を切り替える。
ゆえに再び目を閉じて祈りだす。
半ば信じてはいないがやらないよりはまし、という気持ちで……

懐かしいとても温かな気配。
いつもは常に傍で抱かれているような感覚がより強く感じられた。
そしてそれに合わせて感じるのは何かを願う【心】。
その心は愛しき気配の近くから感じられる。
ゆえに意識を外にとむけた。
たゆたう身にて外を視るのはかなり久しく行っていない。
周囲を【視】てみればどうやら湖面の近くに二つの人影らしきものが見て取れる。
一人は何か願いの儀式のようなものを行っている。
どうやら人間の少女が先ほど感じた【心】の持ち主なのであろう。
そして、その傍にたたずむもうひとつの人影。
人、の姿はしているが……
「……Ｅｓｔ　ｉｌ　ｐｏｕｐｏｎｎｅｚ？」
間違えるはずがない。
周囲の自然とまったく同一の気配をもつ存在などいるはずもない。
おもわずつぶやくその言葉がきこえたのか、ゆっくりとその手を口元に充てているのが視てとれる。
このまま姿を現さないわけにはいかない。
おそらく何かの意味があるのであろう。
口元に手をあてているのをみれば黙るように、との指示のはず。
ゆえに意識を表にむけて、自らの意識そのものを実体化し湖からその姿を現すことに――

「私を呼びましたか？人の子よ。私の名前は、クロエリア。この地を守護する湖の精霊」
いきなり、といえばいきなりのことで驚いた、というより他にはない。

願いをむける意識をかえただけで体全体が温かな光に包まれたような感覚をうけた。
その直後、手前のほうから聞こえてきた静かな、それでいて威厳にあふれた声。
「……嘘……」
目の前の事実が事実だと信じられない。
ゆえにおもわず茫然としつつもつぶやくケレス。
茫然としているケレスの目前には湖の上にふわり、と浮かぶ水の羽衣のようなものを纏っている、
一人の少女が浮かんでいるのがみてとれる。
見た目の年齢はおそらく十前後であろう。
しかしその肌も体もすべてがどうみても水で形成されており、どうみても人、でないことを物語っている。

――湖の精霊。

目の前に浮かぶ人の形をしている存在は確かにそういった。
ゆえにこそ信じられない。
そもそも、声が聞こえることは多々とあってもその姿を【他者】にみせるなど普通は考えられない。
ゆえに茫然としてるケレスは気付かない。
ケレスの背後にほほ笑みながら、
そっとその口元に手を当てて人差し指を突き立てているディアの姿があったりするのだが。
目の前でいまおこっている現実がつかみきれないほどに確実にケレスは動揺していたりする。
「ほら。ケレス。願いがあるんでしょ？しゃきっとしないと」
くすくす。
ぽんっといまだに半ば茫然としそのままの姿勢で固まっていたケレスの肩ほぽん、とたたき声をかけるディア。

「人の子よ。願いの心は届きました。儀式の許可を、ということのようですが。
　加護の儀式を願うのですか？」
みたところ、火の加護をうけている一族の人間の子供のようではあるが。
いまだに精霊との加護の契約を結んでいないのは一目瞭然。
そのことに対してふと疑問に思う。
そもそも、あの御方がいるのならば簡単にしていても不思議はない。
ないが、それをしていないところをみると何か理由があるのであろう。
そう即座に判断し疑問を打ち捨てる。
そして、黙っているように、と動作で示されている以上、
目の前の人間の少女に疑念を抱かせることなく対応しなければいけない。
ゆえにいつもとる口調で、儀式を行っていたケレスにと問いかける。
「え、あ、は、はい！」
もっとこういう場合、願う言葉はある、というのは頭ではわかっている。
理性ではわかっているが混乱し、きちんと働かない思考ではそのことに思い当たらない。
ゆえに正直な簡潔な言葉を紡いでいるケレスの姿。
「では、私があなたに水の加護を授けましょう。あなたに水の恵みと加護があらんことを……」
そんなケレスに対して、湖の精霊が言葉を発するとほぼ同時。
ケレスの周囲に青い光があふれだす。
「Ｌ' ａｒｒｉｅｒｅ　Ｋｕｒｏｅ. Ｄｉｆｆｉｃｕｌｔｅ（クロエリア。御苦労さま）」
そんな彼女…湖の精霊クロエリアに対してディアがねぎらいの言葉を紡ぎだす。
何かディアがいっているように聞こえるがその意味はケレスにはわ

からない。
光はやがてケレスの体内に吸い込まれるようにときえてゆき、
やがて何事もなかったかのように光は収まってゆく。
「私はいつでもここにいます。何かあればまたおいでなさい。人の子よ。
……Ｍｅｒｃｉ　ｐｏｕｒ　ｍｅｒｅ，　ｍｏｔｓ」
滅多に直接あえる存在ではない。
ゆえにこそいまだに茫然とし意識がままならない人の子の様子を確認したのちに、
ふかくその場に頭をさげる湖の精霊クロエリア。
自分の身に何がおこったのか今いち理解できていないケレスはそんな精霊の様子に気づかない。
否、気づけない、といったほうが正しい。
おそらく人と行動を共にしている以上、あまり深く追求すべきではない。
ゆえにこそ再び頭をさげて、
「では、私はこれで」
いってそのまま、その姿の形成をとく。
それと同時、水の塊に一瞬のうちに変化し水は何事もなかったかのように、
ぱしゃっ。
音とともにその形跡を跡形もなくかき消してゆく。
あとには状況理解ができず、
茫然とどこか現実から離れた場所に意識をとばしてしまっているケレスの姿が
しばしその場においてみうけられてゆくのであった……
ぼ～……

「大丈夫？ケレス？」
いまだに夢見心地。
ゆえにこそ苦笑しつつも問いかける。
「え？あ…え～と……」
「ほら。しっかりして。クロ…でなくてここまで送ってもらったのは判ってる？」
何だか信じられない。
湖の精霊と直接あってしかも加護の契約までしてもらえた。
なんだか夢をみているよう。
意識がどこか心あらずであったのは間違いようがない。
「…え？あ、あれ？私、いつのまに戻ってきてるの？」
ふと気づけばいつのまにやらテミスの町の入口にとケレス達は立っている。
「どこまでぼ～としてたのかしらね。ふふ」
いいつつも、すっと町からでて少し離れた場所を流れている川をそっと指し示す。
それだけでなんとなく予測はついた。
おそらくは、あの湖の精霊が水を通して自分達をここまで送ってくれたのであろう、ということに。
だけどもそのあたりの記憶がテミスからしてみればあやふやで、何がどうなったのかいまいち理解しきれていない。
「ほら。もう日も暮れかけてるし。ギルドへ急ぐわよ。状況の説明が必要、でしょ？」
「え、あ、う、うん」
何か今日はいろいろとあった。
「依頼はきちんと報告を終えるまでが仕事。これは何においてもいえることよ」
「わ、わかってるってば」
いわれなくてもわかっている。
わかってはいるが…もうすこしこちらの動揺も察してほしい。

何しろ姿を形勢できる精霊に直接会えた。
姿を自力で形勢できる精霊はかなり力があるといわれている。
しかも固有名詞をもっていた、ということは精霊の中でも実力が測れる、というもの。
上位精霊に属していないであれども、おそらく、中級精霊には属しているであろう。
そんな精霊に加護を直接与えてもらえた、というその事実がいまだにケレスの中で信じられない。
ケレスの心の葛藤はわからなくもない。
だからこそおもわずほほえましく見つめるディア。
「さ、いきましょ」
ほほえましく身守る視線をむけながら、ケレスを引き連れ、
依頼をうけたギルド支部へとディア達は報告のためにと足をむけてゆく――

「そうですか。【呪】の種でしたか……」
ここで間違いを指摘しても意味はない。
そもそも、そのように人々の中で認識されている以上、別に問題はない。
呪闇（カオス）、と詳しく説明すればおそらく大混乱になるのは請け合い。
だからこそ、【呪】の種が発生しており、
ゆえに屋敷が再生していた、とそのあたりはごまかしをかねて説明している。
【呪】ならば人などが消えてもおかしくはない現象が起こりえる。
【呪闇（カオス）】の発生は、時として町一つのみこむほどの被害を生み出すことがある。
そんなものをどうやって浄化したのか、ときかれれば目立つこと請け合い。
ゆえにただの【呪】として報告している。

捜査員が事後確認のためにむかってもおそらく真実は判らない。
嘘はいっていない。
事実をきちんと説明していないだけ。
いまだに何やらぽや～とした感覚が抜けないケレスの様子をみて、呪に充てられたのであろう。
そう勝手に判断しそれ以上は突っ込んでこないギルド受付の職員。
受付にことの顛末などを説明したのはディア。
ディアの説明はたしかに筋がとおっており、普通ならば疑いようがない。
そう、普通に考えれば…の話しだが。
よもや学生が国家危険視レベルの【呪闇（カオス）】をどうこうできる、などとは嘘でも思うはずもない。
「とりあえず、確認のために捜索隊が向かうことになるとおもいますが。
　そのあとで成功報酬は支払われることとなります。たしかお二人は学園の生徒でしたね？」
一応、ギルドの身分証にその旨が記載されている。
「まだ完全に生徒、ではないですが。まだ諸費用を支払ってないもので」
少し遠慮勝ちにいうそんなディアの台詞に、
「なるほど。それでこのたびの依頼、ですか。それでは今回の報酬で学費を支払われる予定ですか？」
「え。あ。はい。私も彼女も今回の報酬で一年分を支払うつもりではあるんですけど……」
そのことはこの依頼をケレスからきいたときに一応確認している。
ゆえにこそケレスの変わりに説明するディア。
「それでは、こちらのほうでそのあたりの手づづきは行いますので。よくあることですからね。
　もっとも、一年分の学費を一気に…というのはあまりおられませんよ？」

普通ならば分割払いして学費を支払う生徒が主。
今回のような破格ともいえる成功報酬はかなり珍しい。
この依頼をみつけてきたケレスはあるいみ幸運だった、といえなくもないが。
だがしかし、相手が相手でもあった。
報酬につられてアレに飲み込まれていた存在は一人や二人ではなかったというのをディアは知っている。
「では、それぞれに白水晶（ホワイトクリスタ）貨五枚づつ支払うことになりますね。
　寮のほうへ結果が出次第をいれておきますので。そのときに報酬を取りに来てください」
依頼を達成したからといってすぐに報酬が支払われるわけではない。
特にこのたびのような調査目的に対する依頼ならばなおさらに。
普通の依頼ならば事後確認は必要ないのだが、
このたびの内容が内容でもあるだけに慎重をきわめているらしい。
慎重にならざるを得ない理由はギルド側からもあるのだが。
何しろこの依頼をうけた冒険者たちが…今までですでに七名も行方不明になり、
そして数名の死亡が確認されている。
かろうじて闇から逃れられたものもまた、間近にてかの【気】をうけたことにより、
肉体がそのまま浸食されていき、瘴気によって肉体そのものが朽ち果てた。
その魂はそのままひきづられるようにかの一部となっていた。
学生も引き受け可能な依頼レベルにしていたギルド側はそういった細かな事情を知らなかった。
もっとも、知っていたら国をあげて問題に取り組んでいたであろう。
「わかりました。では手続きのほう、よろしくおねがいします。ほら。ケレス、かえりましょ？」
「え？あ、うん」
ディアの説明を横できいていたが理解できない専門用語がかなりで

てきていた。
ゆえにあっけにとられたのも事実。
「ディアって…博識、なのね」
だからこそそんなことを言わずにはいられない。
そもそも、儀式に関しても、天界でなく世界、もしくは精霊に願うなどとは想像もできなかった。
「ま、いろいろと情報ははいってくるから」
どこから、とはいえないが。
その気になれば情報程度ならばこの世界であるかぎりディアに判らないことはない。
「とりあえず、寮にもどりましょ。…寮の片づけも必要だし…ね」
「あ…そういえば、そうね……」
片づけなども自分でやらなければいけないのをおもいだし思わず沈んだ声をだすケレス。
まあ、必要最低限ともいえる家具がそのまま部屋にのこっていたのが不幸中の幸いといったところか。
前の住人のお下がりとはいえ金銭的に苦しいことにかわりない。
だからこそ、すでにその持ち主がいないのであればありがたくつかわせてもらおう。
そうケレスとしては割り切っている。
互いにそんなやり取りを交わしつつ、二人はギルド寮へと戻ってゆく……

ざわざわ。
「はい。みなさん、静粛に」
今日は朝から全校生徒が集められた。
協会が誇る巨大な施設、複合施設。

その中にある収容人数は五人超えくらいまでなら余裕ではいるほどの部屋。
いつもはここに様々な運動用具が並べられているのだが、今日はそれらすべてが片づけられている。
学校に出向いたところ、全員集合するように、との通達があった。
ゆえに、今現在で【学園】に通っている生徒はこの場に全員やってきている。
もっとも本日休んでいたり、またまだきていないものなどはこの場にはいないが。
この場に集まった生徒の数はおよそ百八十名。
この学園の特徴として何も朝から授業をうけなくてもよい、というものがある。
つまりは学びたい選択科目のときだけ通学する、という手もつかえる。
そういった存在達は大概何かの他の仕事などをもっていたりするのだが。
そういう存在達のことを考えてこの仕組みが取られている。
声を響かす魔道具を仕様しこの場にいる全員に超えが聞き取れるように注意を促す声が聞こえてくる。
「今日はみなさんに重大なお知らせがあります。
　このたび、以前から申請していました、特別講師が来られることが決定いたしました。
　ゆえに本日の授業はその特別講師による緊急授業となります。
　みなさんにはこれから、それぞれ自分が座る椅子を用意していただき会場作成を行ってもらいます」
つまり、どうせ座るのは生徒達なのだから、生徒自身に椅子を並べさせよう、というもくろみ。
たしかに別の部屋に椅子が安置されているのは知っている。
いるが生徒を動員してまでする必要性があるのだろうか？
そんなことを思った生徒が多数いたらしく、何ともいえないざわめ

きが部屋全体に広がるものの、
それにはまったくきにもとめず、
「申請が通りましたのは、みなさんも御存じの、伝道師様ですっ！」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
次に紡がれた言葉に、一瞬、し～ん、と会場内部が静まり返り。
そして。
『えええええええ～～～！！？？』
次に驚愕の声が部屋全体を覆い尽くす。

伝道師。
その言葉をしらない存在はこの世界ではまずいない。
神々の代行者だの、世界の代理人だの、あげくは聖なる具現者、など呼び方は様々。
伝道師は神々にすら対等に言葉を交わせる立場にある、という噂すらある。
事実、そうなのだが。
つまり、普通の存在達にとってはまさに雲の上、否、神様的存在。
それが伝道師。

「さあ。みなさん。伝道師様のお話しをきくために、みなさんで会場を作成しましょうっ！」
『うぉ～～！！』
「……なんか、ここまで騒ぐ必要はないとおもうけど……」
おもわずそんな生徒達の様子をみておもわず引いてしまうディアの気持ちはおそらく間違ってはいないであろう。
そもそも、いつのころからか彼らの伝承が誤まって伝わっていたのは知っている。
知ってはいるが…
ここまで勘違いしているということに、実際に視るのと知るのとで

はかなり差があることを改めて認識する。
冷静なのはディア一人のみでその他の生徒達は嬉々として指示されたとおりに動きだす。
「……とりあえず、自分の椅子くらいはもってきますか……」
何もしないと逆にどうやら目立ちそう。
ゆえにため息をつきつつ、ディアもまた椅子が収納されている部屋へと足をむけることに――

協力すれば大きな会場も短時間で完成する。
それはまさに協力することの大切さをしっかり物語っている。
一刻もしないうちに会場の準備は整い、それぞれ学年、そしてクラスごとに別れて席についている。
生徒達の視線は段差が一段高くなっている本来ならば舞台演説などに使われる場所。
時には演劇などにも使われるが。
そこに置かれた一つの教壇にとそそがれている。
「それでは、本日、はるばるかなたからおこしくださいました。伝道師様の登場ですっ！」
わ～～！！
盛大な拍手と歓声。
そんな様子を舞台の端からながめて、いつもながらかるくため息をいている一人の男性。
いつも深くかぶっているフードは今は外されており、ローブのみを纏っている姿をとっている。
その黒い髪と黒い瞳。
歳のころならば
そして黒いローブが彼その存在を異質の存在かのように逆にその存在感を引き立てている。
毎度のことながらこの扱いにはまずなれない。

そもそも真実を教えても信じてもらえない、というのはこれいかに。
もう説明するのも、誤解をとくのも疲れきった。
ゆえにもう疲れることはしないことにした。
ギルドの関係者の案内をうけ、ため息をつきつつも、それでいて役目は役目。
そうわりきり、そのまま舞台の端からその中央に置かれた教壇へと進んでゆくその男性。
その姿をみて、さらに歓声がひときわたかく響き渡る。

ふと、何となく気配を感じた。
それはほんとうの、ちょっとした勘というか慣れ、というか。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
おもわず目をぱちくりしてしまうのは仕方がない。
絶対に。
しばしその場に硬直する伝道師、と紹介された男性の目には、あきらかにここにいるはずのない存在の姿をみて完全に固まってしまっていたりする。

そんな彼の様子に気づき、
「くすっ」
小さく笑い声を洩らす。
どうやらこちらに気付いたようね。
そんなことをおもいながらも思わず笑みがもれるのは仕方がない。
しかしこんな場で叫ばれるのは困りもの。
ゆえに、右手をかるくあげつつも、左手を口元にもっていき人差し指を突き立てる。

……ここ、ギルド協会学校の生徒の集まり…だったよな?

だったよな？な？
誰にともなくおもわず自問自答。
しかし、視線の先にはいるその姿は間違えようもなく、というか雰囲気からして絶対に間違いようがない。
相手もこちらに気づいているらしく、
しかも動作で黙っているように、と指示をだしてきていればもはや疑いようがない。
しかもかるく手を振っていたりするのだからたまったものではない。
つまり確実に自分の感覚と勘、そして考えが間違っていないことを明確に物語っている。
な…なんだってこんなところに【意思】がいるんだぁぁ！？
おもわず表情にはださないものの内心、驚愕の叫びをあげる彼の気持ちはおそらく間違ってはいないはず。
そんな彼の動揺と混乱など知るよしもなく、
「こちらの方が今回、我らの呼びかけに応じてくださいました。伝道師の一人。ナオト様です」
ナオト、と呼ばれた男性が動揺しているのにまったく気づくことなく生徒達にむかって説明する職員達。
「…天界、魔界から消えたとおもったら……」
先日の仲間との会話はどうやらあながち間違ってはいなかったらしい。
ゆえにおもわずぼそっとつぶやく彼の気持ちはおそらく、事実を知る存在からすれば間違ってはいないであろう。
・・・あとで、きちんと説明をもとめるっ！
そう心に強く決意し、
「ええ、と。ただいま紹介に上がりました。とりあえず伝道師をしています、ナオトと申します」
かなり動揺しつつもその動揺をおしころし、いつものようにとりあえず始まりの挨拶を紡ぎだす。
声が震えていないのは長年の経験のたまもの、といえよう。

伊達に四億年以上生きているわけではない。

伝道師。
今はいつのまにやら噂が一人歩きしゆがめられた事柄が真実として一人歩きをしているものの、
その本質はかつて過ちを犯した人々の慣れの果て。
過去の記憶をもち、そしてこの世界の【いきとしいけるもの】達が再び過ちを起こさないように導く役割をもった存在。
が、そんな真意をきちんと把握しているものは…ほとんど、いない……

光と闇の楔　～伝道師：佐藤尚人～（前書き）

今回は、ほとんどどちらかといえば、伝道師の佐藤尚人が幅をきかせてたり（自覚あり
ちなみに、これをうちこみしている最中、突発的短編?を打ち込みしてＵＰしてみました

き…きになるっ！
というか仲間に連絡しようとしたらものの見事に阻まれたっ！
つまり黙っているように、と念を押されていることに他ならない。
目の前にはかなりの人数がいる、というのにどうしても意識はそちらに向かってしまう。
…というか、まさか、お仕置き…ということは…ない…よな？
いや、ありえるかもしれない。
そうおもうと絶対に失敗というか無様な行動はみせられない。
そもそも、こういった【伝える】ことも自分達の存在意義の一つ。
…できうれば、今回はにこやかにマグマの中に放り込んだりしてくれないことを祈るしかない……

伝道師。
それは遥かな太古より今に至るまでの歴史を正しく伝える存在。
そして自ら死ぬことが許されない存在。
この世界の行く末を見守り続け、導くようにさだめられしもの。
道を正しく修正するもの。
彼らに関してはいろいろと言い伝えがのこっている。

彼らがいつからいたのかは誰もしらない。
だがしかし、かつて神々と接触をもった存在がいうには、
神々が誕生したときにはすでに存在していたらしい。
そういう逸話も残っている。
事実はおそらく伝道師達しか知りえないことなのであろう。
興味本位で深く追求しようとした存在達はなぜかこぞって記憶喪失
になったり、
もしくは廃人同様になったり、極端に臆病になったり、とそれぞれ。
そんな彼らに対して、伝道師達はなぜか憐れみの視線を送っていた
らしい。
何がおこったのかなどとはおそらく当人達しか知りえないことなの
であろう。
ゆえにこそ、彼らに詳しく追及するような挑戦者はまったくいない。
それでも、伝道師が神々にも近しい存在、と思われているのは事実。
ゆえにこそ神々に出会うことはできなくても、一番身近な存在。
それこそが伝道師。
そんな存在が今、生徒達の目の前にいるとならば誰しも興奮しても
仕方ない。
ないが…そんな当事者である伝道師はそんな興奮した生徒達の熱気
よりも気にかかることがあり、
彼らの様子はまったく気にもとめていない。
「どんな話しをしてほしい、という話しは事前に聞いていなかった
が。
　こちらでテーマをきめて話しをしてもいいのですか?」
とりあえず今の現状が現状。
ゆえに確認をこめて今回の招待者に対して問いかける。
「はい。伝道師様にすべておまかせいたします」
いつもなら任せられても何を話せばいいものか。
そう彼…佐藤尚人は悩むのだが、今回に限っては別。
ナオトがそんなことを思っているとは露にも知らず、答えた側とす

れば、
目の前に伝説ともいえる伝道師がいることに舞いあがり、
かの御方が何を我々に話してくれるのであろうか。
という期待感で満ち溢れていたりする。
「判りました。それでは、この世界の仕組みと成り立ちについてみなさんにお話ししましょう」
少しでも真実をしっている存在が増えれば今後の対策にもつながるであろう。
かといってあまり詳しいことまでは話せない。
しかし保険は大切。
そう判断し、話す内容を頭の中でまとめてゆく。
そんな彼の様子をちらり、とみつつ、
「それでは、今回特別講師として招かれた、伝道師を務めているナオト様の講演会を行います」
場を進行すべく、進行係りの役目をおったギルド員が言葉を発する。
それと同時にぴたっと再び会場内が静まり返り、全員の視線が壇上のナオトにとそそがれる。
こほん。
軽くせき込むようにして気合いをいれ、
改めてこの場に集められている生徒やギルド員達をぐるり、とみわたし、
「さきほど紹介をうけました。伝道師のナオトといいます。
　このたびは、未来を紡ぐみなさんへ何か伝えてほしい、という要請をうけてやってきました。
　どのような話しをすればよいのか、協会からの指定もありませんでしたので、
　本日はこの世界の仕組みなどについて正確なことを話したいとおもいます」
ほぼ直立不動な姿勢でそんな彼らにと話しかける。
内心はかなりどきどきしているのであるが、そんな様子をみせれば

どうなるか考えるだけで恐ろしい。
この話題を選んだのには理由がある。
なぜか文献などには偏った知識しか乗っていない。
人は認めたくない種族なんだな、とつくづく思い知らされる。
いくら自分達、伝道師が真実を伝えても、
その事実はいつのまにかすりかえられて都合のいいようにと解釈されてしまう。
「まず、これだけはみなさん、覚えていてください。
　自分の行動がどのような結果をもたらすか考えて行動するように。
　これはかなり重要です。ただの快楽や興味本位で行動した結果、取り返しのつかないことになることがあります」
そう、今の自分達のように。
「みなさんは、みなさんが住まうこの大地が、空間に浮かぶ球体、と認識していますか？」
大地が丸みを帯びている、というのは高い位置などからみた地平線にて誰でも理解はできる。
その問いかけに少しばかり首をかしげるもの、？マークを完全に浮かべているもの。
そして認識しているがゆえにうなづくもの、様々な反応をみせる生徒達の様子が壇上からでもはっきりわかる。
「この世界で今では通貨、として使われている【水晶（クリスタ）貨】。
　それに埋め込まれている青き球体こそ今みなさんが暮らしているこの大地の外からみた姿です」
青き水晶、とまでかつてはいわれていた惑星、地球。
当時、まだ普通の人として暮らしていた自分達はその価値がわかっていなかった。
それがあって当たり前であり、失ってはじめてわかった大切なもの。
ナオトにいわれ、それぞれが水晶貨をだしつつ天上にかざす生徒の姿がちらほらと垣間見える。

たしかにすべての水晶貨には【地球】の姿が埋め込まれている。
太陽の光などにかざすときらきらとそれはそれは幻想的なまでに美しくはえる。
「今から四億年前までは、人類はこの地をこう呼んでいました。太陽系、第三惑星、地球。と
　これはニホン、という国で使われていた言葉ですが、他の国では、アース、ともいわれていました。
　それ以外にもいろいろといわれていましたが、基本、皆同じ意味をもっていた、そうおもってください」
数多な命が生息してこその、命の球…ゆえに、地球。
そう表現していた者もいた。
いいえて妙だ、とそれをしったときには感心もしたが。
「しかし。その後の科学滅亡により、この大地は死滅しかけました。
　そのとき、それまで自ら動くことをしなかった惑星の意思そのものが自ら動かれました」
それまでは自らの子供たちの自主性にまかせていた。
だがしかし、このままでは自分もまた消滅してしまう。
そう判断し干渉することにした【星の意思】。
「そして、世界は変わりました。それまで、この地上には天界や魔界、様々な世界は、お話し上。
　空想上のものでしかなかったのですが、【世界】はあえてそれらを設定し、
　そんな【界】にそれぞれの役目をあたえ、この【星】を管理させることになさったのです」
ざわざわ。
天界などが存在していない世界。
そんなことがありえるのか。
ゆえにこそ、それらが当たり前である今の存在達からしてみればそれは信じられない事実。
「【世界】はすべての【理】をつくり、そしてそれぞれの【意義】

をも設定なさったのです。
　みなさんは、どうして、光と闇がある、とおもいますか？光があるからこそ闇が認識できます。
　逆に、闇があるからこそ光もまた認識できます。どちらがかけても、その認識はできかねますよね？
　すべては表裏一体。そのことを目にみえる形で【理】として設定なされた世界…それが、今の世の中です」
すべては【星の意思】によって創られた。
それぞれの【界】自体も星の意思の代弁者、といって過言でない。
「例をあげますと。魔界、ですね。彼らの存在意義は、【生物】が発する【負】の心の浄化、です。
　彼らはやみくもに生物を襲うわけではありません。きちんと理由があってのこと。
　彼らは【心の闇】に反応するように、そう【創られ】ているのです」
そして、【喰らう】ことによりその肉体を浄化し魂を指定された場所に送る。
それが彼らに課せられた使命。
力あるものが弱者を虐げる。
その結果、世界が疲弊しないように創りだされたあらたな仕組み。
「共通した目的があれば人々は種族を超えて協力し合うことをまず考えます。
　それもまた考えられた理の一つ、です」
そう伝道師たるナオトから説明されてもいまいちよく意味が理解できない。
負の浄化、というのはいったいどういう意味をもつのか。
それがいまいち把握しきれない。
「かつて、世界は同じ大地に住んでいる、というのに人々がいがみ合い、そしてその結果。
　この大地に住まうすべての生きとしいけるものを死に至らしめ

る道具をつくってしまいました。
大地の恩恵も忘れ、そして自分達の欲望のままに行動したわけです。
しかし、今の世界には、それを止めてくれる方々がおられます。
道具などがあらたにつくられ、それに加護がうけられないばあい、その道具が仕様できない。
それが行き過ぎをとめており、かつての過ちを繰り返さないように念には念をいれられているのです」
加護をうけなければたしかに道具はまったくただの置物にすぎない。
それが生まれたときから当たり前であった人々にはその意味することがよくわからない。
「…まあ、あなた方は産まれたときからこの【理の世界】でいきておられますから。
そういわれても、実感はわかないとはおもいますけどね。
しかし、今の私の言葉は頭の隅にでもいいので覚えていてください」

新たな【理の世界】。
そう、彼ら伝道師達は今の世界をよんでいる。
かつての地球をしっているからこそそう区別するために誰ともなくいいだした。
【人】は干渉せずにほうっておいたら何をするかわからない、とは【意思】の言葉。
すべてがすべてでないにしろ、たしかに自分達が自分達のすまう地を傷つけていたのは疑いようがない。
この世界においてもかつての科学的根拠は通用する。
実際に、炎を燃やすためには酸素が必要であり、息をすれば二酸化炭素も発生する。
しかし今のこの世界においてそれらを構成しているすべての元素や原子にも【心】が付け加えられている。

目にはみえなくとも、それらの意向に沿わない場合にはどんなことがあっても様々な現象は起こりえない。
さすがに普通の一般の存在達に視えるような形にはなっていないにしろ。
しかし、今をいきるものたちに、元素や原子といったかつての説明をしても意味不明。
そもそも、何をいっているのかすらわからない。
何よりもそれらを形つくるべく、かつてはなかった特殊な素粒子がこの地上には存在している。
そしてその素粒子には【役目】が与えられており、ある一定の理を反した場合、
その素粒子が対象物を言葉どおりに粒子と化してしまう。
瘴気などに冒された動物などが倒されたときに消滅してゆく現象がこれにあたる。
理論と理屈をしっていればその現象も理解できるが、
ほとんどのものはそんなものが動いている、などとは思わない。
余計な知識はさらなる混乱をうむ、そのことは歴史からして物語っている。
だからこそ、そこまで詳しくは説明しない、教えない。
あまりに詳しく教えすぎてそれらを追求しようとしてかつてのような破壊兵器を創られてはたまったものではない。
…もっとも、その破壊兵器すらをも暴走させるキッカケをつくってしまったナオトからしてみれば、
危険になりえるかもしれない知識をおいそれと教えるはずもない。
今の【世界の理】基礎となっている元が何なのかをわかっているのは彼ら、【伝道師】のみ。
それはかつて彼らがまだ【人】として生きていた時代、
様々な種族の中で言い伝えられていた神話や伝説。
それらを元にして今の仕組みは創られた。
新たに再生された大地に創られた者達はかつての記憶をもったもの

たち。
肉体は滅んだものの、その後のことを考えて【意思】がそれらの魂を止め置いておいたに他ならない。
その他の生物や植物に関してもまた然り。
そもそも、この大地にいきていた存在達の【記憶】のすべてはいいかえれば、【意思】の一部。
ゆえにその存在における構成もすべてはほんの一部にすぎない。
それらをあらたに構成しなおすなど【意思】にとっては当たり前にできることであり……
今現在、この惑星に存在している様々な魂は新たに誕生したものもいれば、
かつてこの大地にいきていたものたちもいる。
魂における【思い】がいろいろな理由で強い場合は、【冥界】にてその魂の記憶は浄化される。
魂の消滅事態、普通は滅多と起こることはない。
すべての魂がその【生】をより正しく生きるためにこの【世界の理】は存在している。
しかし、愚かなことにそういった事実をしってしまうと努力を怠るものがでてきてしまう。
必要最低限な知識の提供。

――それが、彼ら、【伝道師】に課せられている役目の一つ。

「おそらくみなさんには今、私が説明したことは完全に理解できないでしょう。
ですが、これだけ、は覚えていてくださいね。
この世界そのものは、すべて、母なる大地の意思の元にあるのだ…ということを」
内容と言葉を選んで一通り説明した。
少し多めに息をすいこみ、最後の言葉を紡ぎだす。

「さて。それではここからは質問時間にしたいとおもいます。
…みなさん、質問があればどんどん挙手をして聞いてくださいね？」
これもまた彼らの役目の一つ。
もっとも、あまり詳しいことは言えない、という事実もあるが。
質問があればしてもいい。
といわれても、相手は神にも近いといわれている伝道師。
ゆえに、はい、そうですか、という生徒はまずいない。
しばしちょっとしたざわめきが会場内部をうめつくす。
……げ。
ふと一人が手を挙げているのに気付き一瞬硬直してしまう彼の気持ちはおそらく誰にも判らない。
「…では、そちらの御方、よろしくお願いします」
つい敬語になってしまうのは誰も責められないであろう。
しかし、彼がそう敬語をつかった、というその一点は幸運にもこの場にいる他の存在は気づいていない。
すっと手をあげているのは一人の少女。
さきほどからナオトが意識していた存在。
「伝道師、という役割についてあなたはどう感じていますか？」
椅子を立ち上がりつつも真正面を見据えてその問いかけを紡ぎだす少女。
ふわりと風もないのに少女の髪が揺れたように感じたのは気のせいではない。
青い瞳がナオトをまっすぐに見つめている。
その言葉の意味はおそらくこの場では、少女とナオトしか判らないであろう。
「伝道師になるのはどうしたらいいのか、という問いかけを言葉濁してるのかな？」
「だけど、役割についての感想もたしかにきいてみたいよね」
「あの子、かなり根性すわってるね～。伝道師様に堂々と質問でき

るなんて」
などとそんな少女が質問したのをうけて他の生徒達がそんな会話をしていたりする。
直接会えることすらままならない、とまでいわれている存在。
それが【伝道師】。
ゆえに恐れ多くて直接質問する勇気は普通はもちえない。
…そう、普通、ならば。
「…今の、質問にお答えします。この役割は自分達に課せられたもの。
投げ出したりはできない役目なのは魂において身にしみています。
私たちの役目はかつての悲劇を繰り返さないために少しばかり手助けをすること。
――いつか、かつて私たちがおこなったことが起こりえないための役目。そう思っています。
みなさんはよく伝道師になるためにはどうしたらよいのか。という質問をされる方々がおられます。
ですが、伝道師、というのはあくまでも役目の名前。
…一度、なってしまえば二度と元に戻れない可能性がある、そう思っていただいたほうが正しいです」
いくら産まれかわろうとも。
魂に課せられた罰はそうそう消え去らない。
自分達の至らない考えや欲や好奇心。
そういったものから起こしてしまった行為に対しての罰。
遥かな時を経過してもその罪はいまだに薄れることはない。
自分達は罪人である。
そう説明したこともかつてはあった。
しかしその意味が曲解され幾度も伝わり、もはやもうそのことじたいをいうのはあきらめた。
何しろ神々ですらそう間違った解釈をしてしまっているのだからた

まらない。
…まあ、彼らからしてみれば、自分達の名付け親、でもある伝道師を悪しく思いたくない。
というのがあるのだが……
「今ので質問の答えになっているでしょうか？」
内心びくびくしながらも、質問してきた少女にと問いかける。
「はい。ありがとうございました」
そのままかるく笑みをうかべそのまま席につく少女の姿。
「さて…他には、質問ありますか？」
ほっと旨をなでおろしつつも、改めて周囲を見渡しつつナオトはしばし問いかけてゆく――

「勇気あるね～。あなた」
席にすわり、両脇にすわっている別の生徒から声をかけられる。
「そう？だけど聞きたいことはきかないと。後悔しない？」
行動せずに後悔する、そういう存在達はざら。
しかしその後悔の念は後々ふくらみ、とりかえしのつかないことになってしまうこともありえる。
「でも、今の質問の意図は何だったの？」
「さあ。何でしょう？何だとおもう？」
ふふ。
そんな両脇にいる生徒達にかるく笑みを還して答えを濁す。
今の質問の意味はいたって単純。
彼らがきちんとその罪を認識しているか、このひとことにつきる。
彼らが起こした罪はあまりにも大きい。
下手をすればこの惑星だけでなく他の惑星そのものも巻き込みかねなかった罪。
十分に反省しているようではあるが、まだまだ償っている、とは思えない。

――ゆえに、まだ彼らをその束縛から解く気は…さらさら、ない。

一人が質問したのをうけて勇気をだした他の生徒達もまた質問を開始しはじめる。

しばし、生徒と伝道師による質問と回答、といった光景がこの場において見受けられてゆくのであった。

王都に伝道師を迎えた。

ということもあり、講演会が終わった後もいろいろとあった。

それまでは生徒のみに対しての講演だったが午後よりは国民にむけての講演会も執り行われた。

まだ入学したばかりの生徒達はその会場周辺の人々の誘導、に充てられた。

ゆえに本日の授業はなく、日がくれ各自それぞれ自らの拠点へと戻って行った。

ディア達も例外ではなく、のんびりと椅子にこしかけ寮の一室で目をつむっていたその矢先。

「……あら。いらっしゃい」

来るのはわかっていた。

ゆえにこそ気配が出現したほうにむけて声をかける。

自分を探しているのはわかっていた。

だからこそ、繋いだ。

「もう少しはやく探そうとする、とおもったんだけどね～」

くすくすくす。

ゆえにこそこの場に現れた人影にむかってくすくす笑いながらも話しかける。

「…あいかわらず、ですね。…おひさしぶりです。御無沙汰してお

ります」
確かに歓迎会がある、というのを断って用事があるから、と退出した。
気配が完全に断たれているが学生の席にいたことからアタリをつけてうろうろしていた。
刹那、足元が揺らいだかとおもうと、いきなりこの場にたっていたのだが。
しかしその程度のことでもはや動じることなどない。
声が投げかけられて呼び寄せられたということを瞬時に理解する。
「まあねぇ。とりあえず、座って。ナオト。あ、皆には私がここにいる、というのは秘密、だからね？」
くすくす。
何かいたずらを思いついたようなその笑みに逆らえるはずもない。
相手が多少混乱しているのがわかるからこそあえてこの場に呼び寄せた。
「……天界も魔界も大混乱になってますけど……？」
さらっといわれて、それでも知っているであろうがいわずにはいられない。
…もっとも、それに対して答えがかえってくる可能性などほぼないが。
「依存症が出始めてる以上、彼らにはしっかりしてもらわないとね。【楔】が緩みかけてる証拠だし」
世界のありよう。
そして、その世界の【楔】としている存在達。
目の前にいるのは昼間、ギルド協会が主体となり行った講演会の主。
伝道師、佐藤尚人。
いつも深くかぶっているフードは今はさげられており、その顔が普通にさらけだされている。
そんな彼に対し、ごく自然に振舞っている少女…ディア。
「それはわかっていますけど。…何も貴方様自らうごく必要は……」

自ら動けばそれは【世界規模】となる。
それがわかっているからこそ戸惑いは隠しきれない。
しかし、今回のことはそれほどまでのことである、とも自覚している。
だからこそ、ナオトの思いとすれば複雑きわまりない。
「あら?自分のことは自分で。私はそう、あなたたちにも教えた、わよ?」
それは他の子供たち、にもいえること。
そういわれればナオトとて言葉もない。
たしかにその通り、なのだから。
「…また、何かされる、のですか?」
「さあ…ね?ま、情勢によってはそう、かもねぇ～」
…どうやら確実に何かしでかす気のようである。
しかし…ナオトには、そんな目の前にいる少女の姿をしている存在を止めることなどは…できはしない。
深夜。
すでに人気のなくなった王国内の一角のギルド寮の一室において、しばしたわいのない二人のやり取りがつづいてゆく――

「ねえねえ!昨日、ちゃんとねられた!?」
「私はねられなかった～!」
「ふっ。俺なんて夢の中に伝道師様がでてこられたぜっ!」
「「「え～!?ずる～い!!」」」
ざわざわ。
昨日の出来事の余韻がいまだに町全体を覆い尽くしている。

昨夜、他にも用事があるとかで、すでに招かれていた伝道師はこの町には滞在していない。
それでも彼らにとって雲の上と認識されている影響は確実に町全体を覆っている。
そしてまた、ディアの在籍するギルド協会学園のこのクラスにおいても…その雰囲気は健在。
「…なんかにぎやかねぇ～……」
おもわずそんなクラスメート達の姿をみてつぶやくディア。
ディアからしてみれば何をそんなに興奮する必要があるのであろうか、とうのがある。
「仕方ないんじゃないのかな？だってあの！伝道師様がみえられたんだし」
一人、騒ぎの輪の中にはいらないディアを気遣い声をかけてきているのは、
初日、ディアに話しかけてきた淡く茶色いウェーブ少しかかった髪とそれよりも少し薄い瞳をつ少女。
初日にフラウ、と名乗ったその少女もまた騒ぎの輪の中にはいっていない。
「かれらにサマづけいらないとおもうけどね。その役目がら」
「ディアさんってかわってるわね～」
初日から彼女は少し周囲と浮いていた。
正確にいうならばそこにいるはずなのに、いない、というか、いて当たり前…というか。
そんな雰囲気をもっているからこそ気になった。
そして昨日。
皆が躊躇する中、率先して質問していた目の前のクラスメート。
だからこそまたフラウは声をかけていたりする。
伝道師に対してものおじせず、かといって他者を見下したようでもなく。
傍にいて何だかとても心地がよい。

それは近くによればよるほどその感覚がつよくなる。
「それより。フラウさん。何か用？」
「え？あ、うれし～。名前でよんでくれるんだ。
　ううん。ただ、皆が騒いでるのにディアさんだけが一人でまったりしてたから」
一度の紹介で名前を覚えていてくれたこともうれしくおもう。
「それに、ディアさんって精霊達に好かれてるでしょ？周囲の空気、違うもん」
「まあ、好かれてる、といえばそう、かもね～」
実際は好かれているという部類ではないのだが、どちらかといえば甘えられている、というほうが正しい。
「家の仕事がら、精霊達とは昔から付き合いながいんだ。うちの一族って。
　ディアさんみたときからおもってたけど、そこまで自然と一体化してる人って初めてみたし」
近くによればよくわかる。
ディアの気配が自然のそれと完全に一体化している、ということが。
「まあ、職人とかは精霊の加護がなければどうにもならないからね～」
初日にて実家の家業を継ぐとフラウはいっていた。
そして店を経営するにあたり、品々には精霊達の加護がついている。
それを見極められるかどうか、もまた経営者の手腕の一つ。
「自然の気が多ければそれだけ加護を多くうけているってことなんでしょ？
　何かこつとかあるの？」
「ん～。こつ、ねぇ。しいていえばすべての声に耳をかたむけるってこと、くらいかしら？」
いつも声は聞こえている。
悲鳴もあれば懇願もあり、感謝の言葉もあり声は様々。
「まずは、自然界の気を確実に感じられるようになること。そうす

ればおのずとわかるわよ」
カラ～ン、カラ～ン……
がらっ。
「はいはい。鐘はなりましたよ。みなさん、席についてくださいね」
授業開始の鐘の音とともに、教室の扉がひらき、クラス担任教師がはいってくる。
「はい。それでは、みなさま。おはようございます」
『おはようございます』
教壇にたち、クラスを見渡し朝の挨拶を担任と生徒が互いに交わす。
「はい。それでは、さっそく点呼を取りたいとおもいます。みなさん、元気よく返事をしてくださいね」
出欠席の確認。
しばし、その確認のためのやりとりが教室内に響き渡る。
「……さて。ナオトにはしっかりと口止めしといたけど……
ま、仲間達だけには連絡してもいいけど彼らにも黙ってるように、とはいっといたしね」
とりあえず彼らが知っていることにより不都合はない。
もしこちらの意見をきかずに行動したりすればどうなるのか。
それは彼らが身をもって経験しているはず。
それでもうっかりと口を滑らせる気配があったりすれば、【昏睡】させればいいだけのこと。
「とりあえずは、ここに通いつつ、世界情勢も視て回る、そのほうが無難よね……」
拠点はとりあえずできた。
かといって、最低でも一年、ここにずっといては意味がない。
かといって多々と姿を成すのも赴きがない。
ここはしばらく、学園生活とそして世界情勢の視察。
それらを同時にやってみるほうが効率的にも、暇つぶし的にも面白そう。
ディアがそんなことを考えている最中、やがて点呼が終了し、

「はい。それでは本日の授業を再開したいとおもいます。
　本日の授業は、薬草学、です。みなさん、薬草学の教科書を出してください」
いわれるままに、それぞれが机の上に教科書を机の上に出し始める。
薬草学。
それはこの世界にいきるものにとってはまさに必需品、ともいえる知識。
様々な効果がある草花の効用を習い、そしてそれを把握すること。
そうすることにより、より生活の幅がひろがってゆく。
うまくすればその知識をもとに一人で生活してゆくことすら可能。
しかし、中にはそういった知識が完全でなく擬態している存在に命を奪われてしまうものもいたりする。
ゆえにこそそのあたりのことはしっかりと学ぶ必要がある。
病気を治そうと薬草をとりにいき…その薬草にたべられてしまったりしたのでは意味がない。
また、薬草をとってきたはいいものの、それが毒の成分を含んでおり逆に死を早めたりする。
そんなことがおこらないためにもきちんとした知識は必要。
ゆえに、一番世の中でしっかりとこの手の研究が進んでいるのも…
また、事実。

のんびりとした学園生活がこれよりどうなるのか、すこし楽しみつつも空をみあげるディア。
その心のうちを知っているものは…おそらく、誰もいない……

光と闇の楔　～伝道師：佐藤尚人～（後書き）

次回からは普通の学園生活&冒険？がはじまります

光と闇の楔　～ククル村での依頼～（前書き）

そろそろ主人公が人でない表現がちらほらと～
ま、前回の伝道師とのやりとりでももうばらしてますけどね・・・・

光と闇の楔　～ククル村での依頼～

「ぎゃ～！！」
「先生の鬼ぃぃっ！」
教室内に誰、というまでもなく、生徒達の悲鳴ともいえる叫びが響き渡る。
「はいはい。みなさんがきちんとこれまで勉強してきていたら問題ありませんよ～。
　新しくはいってきた転入生の大まかな現状をしることにもなりますしね」
にっこり。
昼休みがおわっての爆弾発言、とはよくいったもの。
教室にはいってきた担任がＣ－Ａの生徒達にいった台詞はまさに生徒達からすれば死刑宣告にも近い。
学生にとって抜き打ちテスト、とはそれほどまでの意味をもつ。
ここ、総合科Ｃ組Ａ担任教師、ヘスティア＝アルクメーネ。
淡い金色の髪と緑の瞳をしている見た目二十歳代にみえるものの、その実はゆうに百歳をこえている。
特徴的なのは髪に隠れてみえにくいが人族とはことなるその耳の形。
常にいつもバンダナをしているのでわからないがそこにはかわいらしい猫耳が存在していたりする。
耳があり、尻尾がある他はほとんどその容姿は人と変わりがない。
彼女達のような種族を獣人族、と簡単に呼びまとめられている。
人とは異なり数百年単位の寿命をもつものから、数年足らずの寿命の種族まで種は様々。
彼女の笑みは生徒達からは『悪魔のほほ笑み』とすら言われている。
彼女の指導は…かなり、厳しい……

「…だから、ここがこうなって……わかった？」
とりあえず手元にとある資料をもとに説明する。
「うん。すご～い。ディアさんって先生よりわかりやすい！」
ディアの周囲には数名のクラスメート達が集まっている。
昨日、みなさんの知識がどこまでなのか改めて確認したいとおもいますので、抜き打ちテストを行います。
と告げられ、そして唐突に試験が開始された。
そして先ほど、その答案用紙が帰ってきたのだが……
なぜにあんな高度な問題を！？
というのが生徒達の意見の大半。
高学年で習うべき問題すら含まれていたりしたがゆえに、結果は散々。
そんな中で唯一といっていいほどにディアのみが高得点を所得していた。
だからこそ先生にきくよりは……ということでディアに聞いているのだが。
担任に聞きに行けばまちがいなく、夜遅くまで特別授業が開始されてしまうのは請負。
伊達に薔薇の悪魔、ともいえる担任教師、ヘスティア＝アルクメーネに習っていたわけではない。
何しろ必要とあらば家までおしかけてきて延々と補習授業を行うこともある。
だからこそ絶対に担任には聞きに行きたくない。
それはこのクラス担任の性格をしっている生徒からしてみれば絶対にくつがえせない事柄。

ちなみに、この世界で普及している紙は、木材加工などに使われた木くずなどが仕様されている。
もしくは他のものをつくるために加工された植物の皮など。
ここ、ギルド協会にて使われている【紙】はその中でも特殊加工がしてあるもので、
その製法も独特。
防水、防火に優れており、傷もつきにくい、という長期保存にはもってこいな紙。
もっとも、通常の授業で使われる教科書と異なり、生徒達が習ったことを書き込んでゆく紙はべつもの。
そちらは基本、【再生紙】が使われている。
この世界においては紙はさほど高級品ではないが、さりとてものすごく安いものでもない。
普通の人々にも手にはいるような手頃な価格で売買がなされている。
「世界の仕組みって…なんか複雑……」
幼きころからは、常に天界にいる神々が自分達を見守っている、そうきかされていた。
そして魔界に住まうものは、人を堕落させる、とも。
「ま、人は自分達の都合のいいように解釈するからねぇ」
事実、今の魔界において人間界などに侵略する、というようなことをするものは滅多といない。
ちょっかいをかければそれなりの処分をうけることを彼らはしっている。
だがしかしその処分を甘くみてあくまでも自分の欲望のままに行動するこまったものもいるのも事実。
「だけど、門か～……門の番人もいろいろといるの？」
「門の番人、というか門そのものが意思をもった命、だからね」
各界を隔てる【門】。
その門に意思があることをしっている存在はごくわずか。
「ソトーはまあ、気まぐれだし」

「ソトー？」
ふと思わず漏らすディアの言葉に、先ほどまでディアに授業でわからなかった場所をきいているフラウ。
至極丁寧、そして教師よりも判りやすい説明に自然とディアの周りにはクラスメート達が集まってきていたりする。
「あ、何でもない。まあ、【門】にかかわることはまずないから気にしなくてもいいとおもうけど」
ふいに名を呼んでしまったことに気付いてとりあえずさりげなく何でもない、とこたえるディア。
彼らがその名を知るよしもない。
普通に暮らしているかぎり、【門】とかかわることはまずない。
もしも主従契約を求めて界を渡ろうとするのならば話しは別、だが。
界を守護し、隔てている【門】。
別名、次元の守護者、ともよばれている存在。
【ソトホース】という名ははっきりいって知られていない。
おそらく名前だけで表現してもまず誰もが何を示しているか答えられないであう。
「そういえば、次の休みはディアさんは何をするの？」
「私は当然、依頼をうけるつもりだけど」
先日の一件でたしかに学費はどうにかなったがさきだつものは一応必要。
とはいえいまだに学費を差し引かれた報酬は二人ともいまだに受け取っていない。
廃墟というか瓦礫と化した元屋敷が完全に安全であるかどうか、が判るまでは支払い延期となっている。
「そういえば、ディアさんはギルド寮、でしたね。ご両親は…」
「そんなのいないけど」
実際に、ディアには両親、と呼ぶべき存在はいない。
まあ、家族に近い存在ならば多々といるのだが。
「あ、す、すいませんっ！」

自分が家族がいるから、と誰もが平和に暮らしているわけではない。
そのことを判っていたはずなのに、知らないうちに相手を傷つけてしまったかもしれない。
そうおもうとフラウは自分自身が情けなくなってくる。
知らないから何をしてもいい、というわけではない。
知らない、知ろうとしないことは最大限の罪である、そう両親からも教え込まれている。
「さて。と。とりあえず今日の授業でわからなかったってところはこのあたり？」
「え。あ。はい」
抜き打ちテストの後にあった補習授業。
その授業の意味はよくつかめなかった。
教師の質問にさらさらと答えていたディアにダメもとできいたところ判り易く説明してくれることになった。
ゆえに、今彼女はディアに説明をうけているのだが……
「資格試験だけうけて、さくっと卒業するってわけにもいかないしね～」
それは本音。
しかしそのためにはかなりの資金も必要だし、逆に目立つことにもなる。
「精霊達に好かれている、というだけでいろいろと知識ってもらえるものなんですか？」
ディアのどこか笑いながらいうそんな台詞に対し、疑問におもっていたことを問いかける。
この先日やってきたディア、という少女は他の生徒達の目からみても異彩を放っている。
滅多とあうことのないエルフ族と感覚的に雰囲気がよく似ている。
ゆえにこそおそらく精霊の加護をうけているのであろう、とは何となく予測はしているのだが詳しくはまだ聞いていない。
「ま、時と場合によるでしょうけど」

ディアはどうして自分が詳しくわかるのか、彼女達には説明していない。
しかし何となくではあるが、雰囲気が完全に周囲の大気と同化していることもあり、
ほとんどの生徒達がディアは精霊の加護をうけているのであろう。
そうかってに勘違いしていたりする。
ディアとしても勘違いを訂正する理由がないのでそのまま勘違いさせたままにしていたりする。
そういえば、あの男性は言霊使いと勘違いしてたわね。
そんなことをふと思う。
まあ、あたらずとも遠からずなのでそれはそれで問題ない。
「じゃ、私は今日はこれで。また判らないことがあったら何でも教えれる限りは教えるから。それじゃ」
いまだに多少ざわめく放課後の教室を後にするディア。
明日、このギルド協会学校、通称学園はお休みの日。
希望があれば補習授業をうけることもできるが、大概のギルド寮に属する生徒は休みを利用して依頼を探す。
ゆえにディアとて例外ではない。
そもそもゆっくりしていたら、またケレスが問答無用で共同依頼を受けよう、といってくるのは目にみえている。
だからこそ今日は寮には戻らないことをすでに寮の管理人には告げてある。
「ディアさん、きをつけてね～」
「休みあけに、またね～」
ひらひらと手をふりつつも、クラスメート達に別れをつげて教室を後にするディア。
「さて…と。今日はこのまま、ギルドにいきますか」
とりあえず荷物は学園をでてしまえばいい。
ちょっとした空間を繋げることにより、荷物の出し入れは自由自在。
もっとも荷物などなくてもディアはまったく構わないのだが、それ

だと不振がられてしまう。
それゆえの処置。
「ま、探しに行くっていうのも嘘じゃないし」
実はすでに登校する前にめぼしい依頼は引き受けている。
ギルドは基本、一日中誰かが常に常務しておりいつでも依頼のやり取りが可能となっている。
とっん。
人気のない場所を確認し、【移動】しゆっくりと大地に降り立つディア。
はたからみれば、町の一角でその姿がかききえ、そしてその次の瞬間。
数キロ離れた位置にいきなり虚空から出現した、といっても過言ではない。
実際はその姿をただ、あるべき場所を【移動】しただけなのだが……
「やっぱり、懸念したとおり、寮の前で張ってるのよね～、ケレスは」
ふと確認して視たところ、案の定、というべきか。
寮の前でしっかりとディアがもどってくるのを待ち構えているのが視てとれる。
とはいえ、所詮【視る】という行為は相手に気付かれるはずもなく。
近くで直接見ている、というのではなく遠くに離れていても確認できる、それが【遠見】の能力ともいう。
しかしディアが扱っているのは一般に知られているその能力にはあてはまらない。
もっとも、第三者がみた場合はまちがいなくその能力を有し使っている、と勘違いするであろうが……
くすくすくす。
なかなか戻ってこないディアのことが気になるらしく、
寮の管理人に話しをきいて騒いでいるケレスの姿が視てとれる。
ゆえにおもわずくすくすと笑ってしまう。

そのままギルドへとかけいゆくケレスの姿も確認できるが、
ギルドは依頼人などに関しての情報は決してもらさない。
逆をいえば依頼をうけたものの情報をも漏らすことはない。
何よりも信用が第一の組織。
それはいかなる理由があろうとも決して覆されない掟。

「ずるぅぅっいっ！」

せっかくまた一緒に行動しようとおもったのに。
というか絶対にあの子は普通の子じゃあないっ！
そう確信しているがゆえにまた一緒に仕事をしようとおもったのに……

しかし、いくらまてどもくらせど寮にもどってくる気配がない。
念のために寮の入口で授業がおわりずっとまっている、というのに。
一緒にかえろうかともおもったが、Ｃ－Ａはなんでもテストの補習授業中とのこと。
ケレスも悪魔のほほ笑み、と呼ばれている教師のことは話しにくいたことがある。
まちがいなくそれを知らずに出向いていれば別のクラスであろうがなかろうが、
確実に巻き込まれていたであろう。
周りの生徒がとめたのでケレスは巻き込まれなかったに過ぎない。
まてどもまてどももどってくる気配はなく、
まさか、とおもい念のために管理人に聞けば依頼をうけるので戻ってこない、とのこと。
ゆえにこそおもわずケレスは叫んでしまう。
どうして自分に声をかけてくれなかったのだ、と。
確かにまだ知りあって数日ではあるが、他に一緒に行動できそうな相手がいないのも事実。
だからこそ、まっていた、というのに。
「こうなったらギルドへ直行よっ！」

ギルド、もしくはまだ学園にのこっているかもしれない。
そんな期待を込めてそのまま走りだすケレス。
しかし、ケレスは知るよしもない。
すでにディアはこの町からかなり離れた位置に移動している、ということを……

さわさわ。
周囲に風の精霊の幼生達がまとわりつく。
それにあわせて風が優しく吹き抜ける。
毎回おもうけど、ほんとうに生まれたての子供たちはとてもかわいい。
汚れのない純粋なる心をもっている。
どうしてこのような純粋な心をもった子供たちがすこしづつかわってしまうのだろう、
と思うディアの気持ちは彼女なればこその気持ちであろう。
「ほんと、毎回産まれたてのこはどの子もかわいいんだけどね～」
周囲の影響もあるのであろうが、それでもやはり素直に育ってほしい、と思ってしまうのは仕方がない。
「まあ、私もただず～～とみてた、だけでもあったしね」
ときどき手助けをしてはいたが、それはあくまでも、少しのみ。
環境変化などにおいて手助けをしていたのみ。
ここまで干渉するきっかけとなったのはやはり人類が何をかんがえたのか世界、
否、あのまますすめばまちがいなく宇宙空間をも崩壊させかねない兵器をつくりかけていたため。
カナメ達の行動はたしかに遊び、では済まされない結果を招いたが、しかし開発途中の真空原子爆弾の開発をつぶしてくれたのはあるいみ助かった。

どうして自分達の首をしめるようなものをつくりだそうとするのやら。
ほんとあのときばかりはほとほとあきれて、人類のみを消滅させるのも考えていたけども。
それでも過ちにきづいてくれるのをねがっていた。
…結果、地上すべての生き物がまきぞえになってしまったけども。
「しかし、きちんと管理されてないと暴走してしまうっていうのもさみしいものよね……」
下手に知識などが進化したためなのか、はたまた彼らの思考が問題なのか。
「…ま、他のところも同じような輩はいるみたいだし。
　というかよそはもっと問題おおきくなってたりするようだし」
実際に聞いたところでは惑星そのものをかき消す兵器なども開発されてしまった場所もあるらしい。
この場所とその場所はかなりかけ離れているのでそこの科学力ではここまでたどり着くことはできはしない。
しかし、知的生命体として進化した生命体はどうしてそのような思考になってしまうのであろうか。
それが悲しくて仕方がない。
中にはそんな思考をもたずに平和にくらしているものもいるらしい、というのに。
今歩いている道には一部のみに薄く切りそろえられた石が敷き詰められており、
段差などがないように舗装されている。
王都から離れた場所はまだそういった道の整備はできていないところも多々とあるが、
交通手段がほとんど馬車、もしくは馬のこの世界において道のよしあしはかなり重要。
中には飛竜、と呼ばれる種族に請い、契約を結び飛行手段を得ているものもいるはいる。

だがそういったものはごくまれにあたる。
しっかりと舗装されている道には草などは生えていない。
これらは草木の精霊と土の精霊達にそれぞれ【依頼】しているからに他ならない。
彼らはきちんと約束さえまもればそれぞれの場所にてその役割を果たす。
「さて、と。あ、みえてきた、みえてきた」
ゆっくりと歩く先に小さな村がみえてくる。
ちょっとした柵でぐるり、と周囲を囲まれたその村はこの世界ではよくある光景。
家の数は数十件にも満たない、小さな村。
こんな小さな村でも一応、表街道の道筋にあたるがゆえに旅人、もしくは冒険者などの足がかりとなっている。
「えっと。依頼主は、ククル村の村長から…と」
一応、うけている依頼書を再び確認。
この依頼書は依頼をうけたときに証明書、として発行される。
さらに説明するならば、ギルドにある依頼書事態を特殊な術により別の紙に文字のみを複製、したもの。
この紙には上から書き込みすることができないようにきちんと細工が施されている。
そしてまた、依頼を完了したときには依頼主からとある場所に拇印を押してもらうことにより依頼完了となる。
依頼によってはその場で報酬をうけとることもあるが、それは依頼内容にしっかりとかかれている。
つまり、ギルドでの支払いか、依頼者の支払いか。
前払い金がある、なし、そのあたりの細かなことまで依頼をだすときには求められる。
基本、何も書いてなければ、すなわちギルドのほうで支払いがなされる、とみなされる。
依頼主は依頼が完了した後に近くのギルド支部におもむき、その金

額を支払えばいい仕組み。
簡単にいうならば依頼をするときにはある程度の手付金をはらっているがゆえに、
ギルドが一度は立て替え払いをしておく、という仕組みとなっている。
そのような仕組みをとっているのは、依頼をしてもうけるものがいなければ、
お金だけはらったのに誰も依頼をこなしてくれない、という自体を防ぐため。
「おや？こんな場所にかわいらしい女の子が一人で何か用事かい？みたところ冒険者かい？」
村の出入り口にあたるらしき場所に一人の男性がたっており、近づいてきたディアにと声をかけてくる。
「はい。ギルドから依頼をうけてきました」
「ほ～。では君はその若さで精霊の声をきくことができるのか」
村長がギルドに依頼をだしているのは村人全体が知っている。
だからこそおもわず感嘆の声を漏らす。
今回の依頼はどうしても精霊の声をきけるものでなければ遂行不可能。
ゆえになかなか難しい…とはおもっていたのだが。
しかも容易できる金額が金額。
ゆえにほとんどあきらめていたのも事実。
「まあ、一応。すいません。村長さんの家はどちらでしょうか？」
「ああ。はいって一番大きな屋敷だからわかるとおもうよ。あ、ちょっとまってて。
　お～い！ルカ！この子を村長の家に案内してやってくれ！」
ふとちょうど近くを歩いていたとおもわれる一人の少年を名指しし大声をあげる見張り番。
「何？カイおじさん？あれ？お客さん？めずらしいね～」
ここ最近、この村に立ち寄る冒険者などはまずいなかった。

ゆえにおもわずじろじろとその場にいるはずのない少女の姿をながめる少年。
歳のころはおそらく十かそこらくらいであろう。
くりっとした瞳に淡い青色の髪。
この世界において人族の髪の色や瞳の色はその当人が最も得意とする属性によってきまっている。
属性は自分で選べるものではなく産まれたときからきまっている。
それは母親の妊娠期間中にどれだけ自然の気をうけたか、によってきまってくる。
ゆえに特定の属性をもつ子供を授かりたい場合、それらの属性の強い場所に移動して生活することもある。
「こんにちわ。案内、お願いできるかな？」
そんなルカ、と呼ばれた少年の目線にあわせるように少しかがみ問いかけるディア。
見たこともないその髪の色と整った顔立ちにどきまぎしつつ、
「う、うん。わかった。お姉ちゃん、こっちだよ」
顔を多少あからめつつもディアを案内しようとするカイ。
「ルカ～。お嬢ちゃんが美人だからってへんなことかんがえるなよ～」
「おじさんっ！きちんと案内するよっ！さ、いこっ」
「では、失礼します」
にこっ。
そんなたわいない村人同士のほほえましいやり取りをながめつつもほほ笑みかえし、村にと入るディア。

村の規模的にはさほど大きくはないが、村の端にはちょっとした農牧がなされているらしく、
牛の声が村の中にひびいていたりする。
基本、放牧形式をとっているらしく、いつもは村の中にある柵の中

に牛達はいれられている。
そして村の中心には水路がほられており、ちょろちょろと水の流れる音が響いていたりする。
ところどころに放し飼いの鶏が遊んでいる様子がみてとれるがそれが何ともほほえましい。
「ここだよ」
村をはいってしばらくいくと他の建物とは異なる大きな建物がみえてくる。
建物の形は王都の石つぐりのそれとは異なり、ここでは木で建てられたものが主流。
「村長～。お客さんつれてきたよ～」
ドンドン。
やがてその建物の前にくると扉をどんどんとルカが叩き大声で家主に呼びかける。
「なんじゃ。ルカ。そんなに大きな声をだして」
いつもこの少年が元気がいいのはわかっているがゆえに苦笑しつつも姿を現す。
おっとりとした顔に白いひげをはやしており、
いかにもどこかの御隠居、といった雰囲気を醸し出している初老の男性。
「お客さん」
「はじめまして。ククル村の村長。ギルドの依頼をうけてまいりました」
ぺこっ。
とりあえずでてきた人物に対してかるく挨拶。
「なんと！あの依頼をうけてくださったのですか！？いや、ありがたい。
ルカ。御苦労じゃったな。まずはこんな狭い家ですが中にどうぞ。依頼の内容をお話ししますので」
「はい。失礼します」

とりあえず案内してくれたルカに改めてお礼をいい、村長に促されるままにディアは家の中にとはいってゆく――

「いやぁ。もう半分、あきらめかけていたのですわ」

ずずっ。

「いただきます」

ヒノキにて彫り造られた机の上に置かれたコップが二つ。

相手がコップを手にしてお茶をのみだすのをうけて、ディアもまたコップを手にとる。

この地ではお茶葉も生産しており、少し離れた位置に茶畑も存在している。

生産、といっても量は微々たるもので大量販売にまではいたっていない。

「それで、依頼内容は詳しくかかれていませんでしたけど。精霊達の声がきけるものが必須条件、とありましたが？」

詳しくは依頼主まで、という依頼であったゆえか、はたまた報酬金額がすくなかったがためか。

どうやらかなりの日数をギルドの中でほうっておかれたらしい。

つまりは誰もいままでうけるものがいなかったらしく、受付にもっていったところ、

もうすこしで依頼受付の期限がきれるので延長するかどうかを依頼主に確認するところだったらしい。

たしかに精霊達の声を聞けるものが必須条件、の割りに報酬金額は青1であった。

ゆえにほとんどの冒険者達が見向きもしなかったのだが。

何しろ依頼内容の詳しいこともわからない、依頼金もわずか。

しかも内容が精霊の声がきけるもの必須条件。

やっかいごとかもしれないのにそれでいて報酬が低すぎる、そう判断された結果見向きもされなかった。

「う。うむ。それがほんとワシらにはどうにもならんのじゃよ。
　ここから少し離れた場所に小さな森があるんじゃが…あ、森、といっても林みたいなものでな。
　それがあるときからいきなり中にはいれなくなってのぉ。
　その中心には泉があっての、まあ何かと頻繁に利用していたんじゃが……」
泉に家畜を連れていき水浴びさせたりもしていた。
しかし、ある日突然、森の中にはいれなくなった。
否、はいれるははいれるのだが、はいったとおもうと霧のようなものに包まれ、
そのまま気づけば元の出口に戻されてしまう。
「感の強いものは精霊達が何かを訴えている、とはいうんじゃが…どうにもできんしの。
　それで、ギルドに依頼をしたわけじゃ」
とはいえ小さな村の収入は限られている。
村人たちで話しあいどうにか集まったお金。
それが【青水晶（ブルークリスタ）貨】一枚。
依頼更新にかかるお金もないことから半ばあきらめているところに、ギルドからディアがやってきた。
「判りました。とりあえずそこの精霊達に話しをきいて。そして問題を解決、それでいいんですね？」
「おお。やってくれるか。いや、ありがたい」
「そのためにきましたし」
それに何よりそういう状況になっているのも気にかかる。
誰も傷ついたりしていないことをみても何かがあるのはわかるのだが。
直接いってたしかめたほうが実際に判りやすい。
「では、その森に案内していただけますか？」
「う。うむ。では準備ができしだい、案内するとしましょう。本当によろしくおねがいいたします」

「ま、できるだけのことはやってみます」
何が起こっているのか大まかのいくつかの予測はつく。
だけども歪みが発生している気配がないことから何となく原因は絞れるがそれを今あえていう必要性はない。
「さて…と。それでは、ご案内いたしますじゃ」
「はい。よろしくおねがいいたします」
とりあえずお茶のお礼をいい、村長に連れられて目的の問題の森まで移動することに。
周囲にたゆたう精霊達が何やら困ったような反応をとっているのが視てとれる。
村から離れあるくことしばし。
やがて視界の先にちょっとしたぽっかりと草原の中に位置している小さな森らしきものがみえてくる。
「あれが問題の森ですじゃ」
「わかりました。それでは私はこれからいってみますので。村長さんは村でまっていてください」
「よろしくおねがいします」
「ま、いってみないと何がどうなっているのかわかりませんし」
実際におそらく判らないものは調べてもわからないであろう。
…霊感の強いものがいればどうにかなったであろうけども。
そんなことを思いながらも、案内役の村長とわかれ、ディアは問題の森のほうへと足をむけてゆく。

どうしよう。
どうしたらいいの?
ねえ、なかないでよ?
――私たちの声、聞こえてないの……
――なかないで?迷い子よ……

森にはいると同時に聞こえてくる困惑した、それでいて戸惑いの【声】。
「やっぱり。迷子…か～……」
予測はしていたとはいえおもわずため息。
「…さいきん、こういった迷子おおくない？というか何やってるのかしら？導天使達は……」
おもわずつぶやくディアの言葉の意味はおそらく誰にもわからない。
導天使。
それは人の生死を案内する、といわれている伝説上の存在。
実際にはその存在は実在するのだが、人々はその存在を確認したことはない。
ゆえに、伝説、といわれているのだが。
そして魂は選別されあるものは冥界に、あるものはそのまま輪廻の輪へ、と振り分けられる。
この森にはいったとたん、出口に戻されていた、というのもあながちうなづける。
迷い子は基本、下手な扱いをすればその質が一気に変化する。
それに始め悪意がなくてもときとして他者を脅かす存在にも変化することがある。
それが【迷い子】。
「さて、と。行き場をうしなったまいごさんはどこにいるのかな～」
ディアの声に従い、ディアの周囲に様々な光の粒のような球が発生する。
――こっちです。
――こちらです。
――うれしい、お母さまがやってきてくれた。
――もう、あの子、大丈夫だね。
周囲に飛び交う光の球からはそんな【声】が語られていたりするのだが。
「どっちのほうの迷子かな？」

迷い子には二種類が存在する。
輪廻の輪の中にはいれなかったりした場合と自分がいくべき器の場所を見失ったもの。
冥界に送られる魂の迷子は今のところ発生していない。
そちらのほうはきっちりとそちらにいくまで案内役がつき従うようになっている。
そのまま精霊の子供たちに案内され、ディアは森の中をすすんでゆく。
どうやら今回のこの現象を起こしている原因となっている存在は、この森の中心にある泉にいるらしい。
迷い子にはその魂に安らぎと光を。
そうすることによりかの迷いは断ちきられ、自分のゆくべき場所へと移動することができる。
くすんっ。
くすんっ、ぐすっ、ぐすっ。
ここ、どこ?
ねえ?ここ、どこなの?
小さな、小さな泣き声がきこえてくる。
小さな泉のその一点。
小さな女の子が一人、その場にうずくまり泣いている。
特徴を示すならば少女の姿は全身が透き通っており、何も身にまとっていない。
その色も特徴的で淡い光のような一色のみ、で形が構成されている。
「はじめまして。迷子になっちゃったのかな?ん?」
周囲にはそんな幼子…迷魂を心配して精霊達がふよふよと飛び交っている様がみてとれる。
そんな中心にいる幼い姿をした【魂】に近づきゆっくりとはなしかけるディア。
かの【幼い魂】を守るために精霊達はこの森への侵入を拒んでいた。
汚れのない魂が染まらぬように。

『…だぁれ？ここ、どこ？ねえ、ここ、どこなの？』
わからない。
わからないこそ泣きたくなる。
自分は母親のもとでゆっくりとしていたはず…なのに。
あのあたたかなゆりかごはどこにいったの？
状況がわからないのだからもう泣くしかない。
「何かのハズミで器からとびだしちゃったのね。大丈夫、きちんとかえれるから」
ゆっくりとなきじゃくる魂をなでる。
この行為はおそらくはディアでなければできないであろう。
もしくは霊力のつよいもの。
それ以外の存在では魂に触れることすらかなわない。
「よく、ここまでがんばったね。だけど、もう、大丈夫……」
そっとなきじゃくる魂を抱きしめる。
それと同時、抱きしめられた幼子の魂がきょとん、としたような表情となり、
やがてぎゅっとディアの体にしがみつく。

――闇は安息。その安らぎと深遠に抱かれ魂は眠り、そして未来を照らす光に満ちて新たな生へと転化する。

「……おやすみなさい。そして目覚めたときには…あなたの生を大切にいきてね」
ディアの言葉とともに幼子の魂の周囲に光と闇が同時に出現し、それはそのままその子供の中にと吸い込まれ、
ふわっ。
腕の中、にこっと小さな少女がほほ笑むと同時、光につつまれその姿は解けきえる。
自分の行き先を見失っていた哀れな魂。
あのまま魂が自分のゆくべき場所にたどり着けなければ、母親は悲

しみにくれることとなっていたであろう。
胎内にいるはずの子供に魂が宿っていない、など普通は思うはずもない、のだから……
「胎内から飛び出た迷い子…かぁ。ほんと、最近どんどん歪みがひろがってきてるわよね……」
ふぅ。
普通は滅多とありえない出来事。
しかし絶対にない、とはいえない現象。
「ま、仕事は解決したし。しばらくゆっくりとのんびりしてもどりますか」

先に子供を還したこともあり、詳しいことを知る必要性がある。
ゆえにその意識をこの場に同調させ
何があったのか確認してゆくディアの姿がしばし見受けられてゆくのであった――

光と闇の楔　～ククル村での依頼～（後書き）

さらり、と流した魂の迷い子編。こういうこともありますよ～という形。
ちなみに、この迷い子さん、後々、ディアにかかわってきたりします

光と闇の楔　～日常にある光景～（前書き）

さてさて。今回は副題と内容がほぼ噛み合っていない自覚あり・・・

「…まいご、ですか？」
「ええ。どうやらあの森には行き先を見失った幼子の魂が迷い込んでいたようです。
　それでその魂を守るために森の精霊達が生き物をよせつけなかった…と」
村にともどり、とりあえずどうしてあのような状況になっていたのかを説明しているディア。
汚れのない魂はすぐに影響をうけてしまい、時と場合によればそんな魂を悪用しようとする輩すらいる。
だからこそ精霊達は子供を守るためにと、森になにものも入れないように細工した。
「ほ～。そういうこともあるのですか」
「あるんですよ」
説明されてもよく意味がわからない。
わからないが、実際に解決した、といわれて村人を森にいかせてみれば普通に入れた。
おそらく嘘ではないのであろうが、しかし……
「あなたは魂ともはなせるのですか？」
「普通、だれでもその能力はもってるはずなんですけどね～。なぜか忘れられてるだけで」
その気になればすべての存在がその力をもっている。
ただそれを必要とせずに忘れてしまっているに他ならない。
自然が常にそこにあり、常に彼らに対して呼びかけているように。
「それはそうと、これはお約束の報酬、です」
「あ、そんなにいりませんよ？」
「いえ、これは約束ですので……」

ただ、魂をあるべき場所にかえしただけでこれほどもらうのは心苦しい。
「なら、今日のお昼をおごってくれるので、チャラにしませんか？」
「しかし…。それではこちらの気が…それにいいのですか？」
「別にたいしたことしたわけでないですし」
「いや、しかし、約束は約束で……」
そもそも、たったのあれだけでこの村の全財産ともいえる金額をもらうのはかなり心苦しい。
どちらにしても依頼書に完了の拇印さえもらえればディアとしてはいいのだから。

しばしそんなディアと村長によるやり取りが村の一角において見受けられてゆく……

光と闇の楔

～日常にある光景～

「み～つ～け～た～っ！」
何やら不穏を纏った声が聞こえてくるのは気のせいか。
おそらく気のせいではないのではあろうが、
しかしその声の主が誰かわかっているからこそ思わずくすり、と笑ってしまう。
「何騒いでるの？ケレス？」
のんびりと休憩時間ということで校庭の隅に位置している裏庭のとある一角。

ほとんど人気もよりつかないその場所にて木によりかかるようにしていたディアが、
何やら息をきらせつつも険しい表情でいってくるケレスに対して問いかける。
「騒ぎもするわよっ！何一人で依頼うけて、しかも！しかも！ずっとまってもかえってこないしっ！」
ギルドに問い合わせてもどこにいったかは不明。
おそらく学校が始まる前、つまりは昨夜までにはかえってくるであろう。
そうおもって張っていたがそれも無駄となった。
ならば、と部屋にもどりすぐに戻ってくればわかるように注意していたはず。
仕方なく翌日もまた休みかな？とおもい学校にきてみればディアはすでに登校しており…
これで騒がないほうがどうかしている。
さすがにＡ－ＡとＣ－Ａクラスの位置はかなり離れており、
途中の休憩時間に教室にいくことができなかった。
ゆえに昼休みに問いただそうと教室にいってみれば…ディアはとっとと教室からでていった、とのこと。
食堂にも姿がみえず、かなりの時間探しまわっていたケレスとすれば騒ぎたくなる、というもの。
――それでは、また。
『またね』
先ほどまで会話していた精霊がふわり、とその場から離れてゆく。
もしもこの場に精霊の姿が視えるものがいるならばその姿が大地にとけてゆく様子がわかったであろう。
「私とパーティーくんだんじゃなかったの！？」
さがすことしばし。
ようやく裏庭のほうでそれらしき姿をみたかも、という話しをききようやく見つけたケレス。

すでに休み時間の残りはほぼなきに等しい。
「あれは、あのときだけ、でしょ？」
「何いってるのよっ！一緒にうけたほうが資金面的にも能率いいのにっ！」
「いやでも、私、一人のほうが楽だし」
そもそも、あのときは勝手にいつのまにかケレスが契約していたがゆえに仕方がない、と思ったのも事実。
「それに、今回は学生向けの依頼ではなかったしね」
希望をすれば一般向けの仕事も受けられる。
そのかわり失敗したときの違約金がかなり高くなりはするが。
ディアの台詞はうそはいっていない。
「それより、それをいうためだけに私をさがしてたの？もう昼休みおわるのに？」
「そういうディアはこんなところで何してたのよっ！」
「秘密♪」
ただ、報告をうけていただけだ、といっても意味がわからないであろう。
それにわざわざ人に教える必要性はさらさらない。
「せっかくお昼を一緒にたべながらいろいろと問い詰めようとおもったのにっ！」
「…はやくたべないと、時間ないわよ？教室でたべれば？」
その手にお弁当をもっていることからどうやらまだ昼ごはんは食べていないらしい。
「ディアはもうたべたの？」
「ん～、まあ……」
その質問には言葉を濁しておく。
そもそも、ディアからしてみれば別にものを食べなくてもよい。
しかし、人としている限りは何かたべないと不振がられるのもわかっている。
ゆえにここでのんびりと報告をうけていたのだが。

当然そんなことをケレスが知るはずもない。
「あ、そろそろ教室にもどらないと。ケレスももどって早くたべたほうがいいわよ？」
「だ…だれのせいだとおもってるのよぉぉ～～！！」
すくっと立ちあがりながらも、ぽんっとケレスの肩に手をおきつつ、校舎のほうにと歩いてゆくディアにむかい思わず叫ぶケレス。
別にディアがケレスと約束していたわけでもない以上、それは誰の責任でもない。
しいていえばケレス当人の責任である。
しばし人気のない校舎の裏庭にケレスの叫び声が響き渡ってゆく……

「はい。それでは本日は魔術についての授業を行いたいとおもいます」
午後からの授業は主に魔術と精霊術の実技。
魔術担当、ラケシス＝パルテノーネ。
先日の召喚授業のときに何かあったための待機職員としてあの召喚の間にいた教師の一人。
「魔術、といっても今回行うのは精霊魔術です」属に精霊術、ともいいますね。
　これは日常的に必要不可欠な術であり、また簡単な術ならば誰でも使用することができます」
大きな威力のものはそれなりに請う必要性があるが、小さい威力のものは普通に扱える。
「たしか、先日の召喚授業で成功された生徒がいましたね……
　ああ、たしかディアさん、といいましたね。前にでてまずはお手本をみせてあげてください。
　そうですね。何の術でもいいですので」
いきなり指定されておもわずきょとん、と首をかしげるしかないディア。

「先生、私、はいってまだ数日もたってませんけど？」
ディアの意見も至極もっとも。
だがしかし、
「召喚術が使用可能ならば他もできるでしょう？」
にっこりと有無をいわさずディアを再び使命してくる。
たしかにできはする。
するが……
どうやら断れそうになさそうな雰囲気をみてとり、再び盛大にため息をつき、
「…なんだってまだ新入生な私に何もかもやらせようとするんでしょう？」
目立ちたくない、というのになぜゆっくりさせてくれないのやら。
そんなことをおもいつつも、
しぶしぶながらも手まねきされている以上ゆっくりと前にとでてゆくディアであるが。
「それでは、ディアさん、みなさんにわかりやすいように示してください」
どうやらいっても無駄のようである。
「…は～。わかりました。とりあえず、Ｌｕｍｉ？ｒｅ（光よ）」
ぽっ。
前にでてきたディアが言葉を紡ぐとともにその指先にちょっとした光の球が出来上がる。
大きさ的にはさほど大きくなく親指と人差し指をくっつけて円を描いたくらいの大きさ。
本当ならば言葉はなくてもいいのだが、いかんせん人の目がおおすぎる。
何よりもこの教師に目をつけられれば後々かなり面倒なことになるのは請負。
パルテノーテ家の家系のものは属性すべてに耐性があり、ゆえにその筋ではかなり有名。

それ以外の様々なことにも精通しており、知識の賢者、とすらいわれている一族の一人。
そんな人物に目をつけられれば面倒なことこのうえない。
「ほう。ディアさんは光属性なのかな？」
「いえ、そのあたりにいた光の幼生に頼んだだけです」
自然界にもそのあたりに精霊の幼生達は多々といる。
それに少しばかり声をかければこのような現象は誰にでも起こせる。
「なるほど。精霊の子供…か。精霊の声がきこえるわけだ。ならばあのときの現象もうなづけるな」
一人何やら納得しているようであるが、まあだいたい精霊の声が聞こえるものは、
精霊の好意もあり術の威力が格段に増すことがある。
妖精でなく幼生、その意味を悟り、横でうなづいているラケシス教師。
「しかし、それでは実演にならんな……普通に使うことはできないのか？」
「私はいつもこの方法ですので……」
「ううむ……」
自らの力でではなく、力を借りての現象の具現化。
たしかに悪くはない、ないが普通はほとんど精霊の声を聞くことができない。
ディアの実力をみてみたかったが、いつもこの方法で使用している。
そういわれればもともこもない。
逆をいえばこの方法だと自分の属性も得て不得手も関係ない。
ゆえに生徒達の見本にはなりはしない。
「仕方ない。それではディアさんは席にもどって、では次はラーク君！」
ディアを仕方なく席にと戻し、次なる生徒を使命する。
「え、は、はいっ！」
ラーク、といわれた緑の髪の人物が緊張した面持ちでたちあがる。

「それでは、ラーク君。さきほど私がいったとおりに何でもいいから実演してみるように」
「は、はいっ！我は情熱の熱き炎にねがいたまわらん　【火球（ファダー）】！！」
こちこちになりつつも言葉をはっし、その直後、ラーク、と呼ばれた少年の手から、
ちょっとした炎の球…のはずなのだが、まるで柱のようなそれが出現する。
「おいっ！」
どおんっ！
刹那、彼の目前にちょっとした炎の球が出現しそれはもののみごとに一直線にむかってゆく。
…はずなのだが、彼が発した炎の球が生徒達の座っている席にたどり着く前。
すなわち、教壇と机との間にていきなり何かにさえぎられたかのようにと爆発する。
「……威力というか術は場所を考えてつかうように……」
念のために教壇側に術を隔離する結界を張っていたがゆえに被害はなかったが、
もしも結界をはっていなければまちがいなく教室は火の海と化していたであろう。
「は…はいっ。す、すいませんっ！」
【火球（ファダー）】。
それは初期たる初期の炎の攻撃術の一つ。
炎の精霊に請い願うことにより発生するちょっとした光の球体を飛ばし対象に着弾する。
ちなみにアレンジ具合によって対象がいくら動こうが追尾することは可能。
この世界で一番よく使われる術が火と水であることからもっとも普及率が高い術の一つ。

しかし今のように威力の指定などを願わない場合、時として威力がヘタに増すことがある。
今のはその典型的な例、であろう。
おそらく今の術で威力が異様にたかくなったのは、精霊の言葉が聴こえる。
という生徒がこの場にいるからであろう、とラケシスは結論ずける。
基本、精霊達はそういった存在が大好きで何か手助けできないか、そう思い願ってもいないのに勝手に集まる傾向がある。
ゆえに、そんな中で自分達に願いの言葉が向けられて、
威力の調整も何もできなかったのであろうことは簡単に予測可能。
「…ディアさん。すまんが精霊達に威力をはりきらないようにいってもらえますか？」
そのことに思い当たり、おもわずコメカミを抑えつつも、席に戻っているディアにと話しかけるラケシス。
「あ、はい」
その言葉に素直にうなづくディア。
たしかに、自分を慕って集まってきているのは事実なわけで否定できない。
自分の先ほどのアレはすこし相手が考えているものとは異なるが大きくみればおなじようなもの。
それに何より気配を感じて周囲の精霊、もしくは幼生達が集まってきているのも事実。
「Ｎｅ　ｌ' ｅｘａｇ? ｒｅｚ　ｐａｓ　ｂｅａｕｃｏｕｐ?」
いいこだからしばらくおとなしくしててね。あまりむりしないようにね？
その意味合いをこめて言葉を紡ぎだす。
ここには先ほど産まれたばかりの精霊達も存在する。
ゆえに静かに優しく語りかけるディア。
「まあ、今のがいい例になったとおもうが。術の威力は精霊の加護の具合で決まる、といっても過言でない。

今はたまたまというかそこのディアさんが精霊の声が聞こえる、ということで、

おそらく精霊達がこの場に異様に集まってきているがために起こった現象だ」

精霊達が完全に気配を隠していたから気づかなかったが、よくよく感じてみればかなりの数の精霊が集まっているのがわかる。

伊達にラケシスとてパルテノーネ家の家名を名乗っていない。

「…しかし、精霊の気配をも完全に隠してるとは……」

精霊達が率先して気配を隠しているのか、またまたディアがそうしているのかそれは判断つきかねない。

しかし、精霊と相性がいいのはどうやら間違いないようである。

こういった生徒がごくまれに現れるので教師はやめられない。

原石も磨かなければただの石。

そんな原石達を磨きあげて世界にはばたかすのが何よりも自らの使命だ、とラケシスは感じている。

「先生？」

おもわずつぶやくラケシスの言葉をききとがめ、横にいたラークが首をかしげて問いかける。

「ん？あ、ああ。すまん。ではもう一度」

「は。はい。我は情熱の熱き炎にねがいたまわらん　【火球（ファダー）】」

ぽっんっ！

今度は先ほどとはうってかわり、かわいらしいちょとした拳程度の炎の球体がその場に出現する。

「よし。それでいい」

今度はあえて出現した炎に干渉しその場にとどまるようにと細工しておく。

「これらはまず日常的に基本的につかっている術だ。しかし初期であるからこそ毎日の鍛錬は必要。

この感覚を完全に自分のものとすれば上位の術も夢ではない」

相手が上位の精霊であろうと基本的に精霊達に請い術を発動させる

ことには変わりがない。
だからこそ日常的に使われている火と水の術は術の会得鍛錬に持ってこい。
「よ～し、それでは今から順番に名前を呼ぶのでそれぞれ挑戦してみるように」
おそらくざっとみたところ、このクラスの大半は自分の力のコントロールは身についているらしい。
しかしいまだにその力の奮い方がわかっていない生徒もいるのがみただけでわかる。
力を完全につかえる存在と、そうでないものの判断は纏っている【気配】で容易にわかる。
例をあげればディアの気配のそれが完全に周囲と一体化し気をつけてみていなければまちがいなく、
そこにいても身落としてしまうほどに周囲に溶け込んでいる、という具合に。
もっとも、ディアは特殊中の特殊なのだが当然、そんなことをラケシスが知るよしもない。
しばし、ラケシスの指導のもと、
それぞれの生徒が術を発動させるべく四苦八苦してゆく様子が、
総合科Ｃ－Ａの教室にて見受けられてゆく――

「ねえねえ！精霊の声ってどうきくの！？」
先刻の授業がおわり、なぜかディアの周りにはクラスメート達があつまってきていたりする。
ゆえに戸惑わずにはいられないディア。
先刻の授業でどうやらディアが精霊に好かれやすい、というのがわかったがゆえに集まってきたらしいが。
好かれやすい、というよりはどちらかといえば甘えられているとい

うのが正解なのだが……
「ど、どうって。普通にしていれば自然と聞こえるはずなんだけど？」
そもそも、産まれたときはすべての存在が彼らの声が聞くことができる。
なのに成長に応じてその【耳】を閉じてしまっているのは他ならないそれぞれ各個の責任でもある。
そんなものがあるはずもない、きこえるはずがない。
そういった概念を大人達が子供に無意識に伝えることにより、
子供たちもまたそのようなものなんだ、とおもい、【声】から耳を背ける結果となっていたりするこの現状。
それをどうこうとやかくいうつもりはないが、
だからといって声がきこえる存在を特殊だ、とおもうのはどうにかするべき事柄。
ゆえにディアとすればそう答えるよりほかにない。
「もしかして精霊の声がきこえるってことは他の声もきこえるの？」
どうやら集まってきているクラスメート達は好奇心の塊のようでいろいろと質問してくる。
そんな様子をみてくすり、と笑いながらも、
「まあ、普通の自然界の声は大体きこえるけど」
その気になれば聞こえないものなどはないが、それはあえていわずに無難な説明をしておくディア。
「え～！いいな～。私も動物さんとかと話したい」
「それは獣使いの能力開花させたらできるでしょ？」
そんな一人に別の生徒が突っ込みをいれていたりするが。
「だって～。あこがれるじゃない。動物さんたちとはなせるのって。植物とかとかもさ～」
「で、食事のときに生野菜とかがでて、たべられる前の心境を彼らから聞かされるてもいいわけだ」
すこしばかり夢見がちになりかけているその生徒に少しばかり釘を

さしておく。
『そ…それは…そういうのって…きこえるの？』
ただ話せれば楽しい。
そういうことしか考えていなかったらしく戸惑いぎみにディアにといかけてくる生徒達。
「きこえるわよ？中にはたべられたくないからないてるものもいたりするし。
　ああ、動物とかなんかは食材にするためにさばかれるとき何ともいえない叫びをいってたり……」
「いやぁ！…わたし、今のままでいい……」
能力は良い面もあれば悪い面もある。
それらすべてに対して覚悟してこそ能力を得る資格がある。
「まあ、慣れれば自分できく声ときかない声は分別して聴こえないようにすることもできるけどね。
　だいたい能力が開花した当時は全部の声をききながら生活することになるんじゃないのかしら？」
実際それで精神の安定を狂わした存在もいたりする。
…表ざたにはなってはいないが。
それらの存在達は良い面のみを考えて能力をえたがためにそういう状況に陥った。
様々な声が聞こえる、ということは様々な悲鳴も聞こえる、という同意語に気付かなかった。
そして、能力の開花が進むにつれ、自分が望むわけではないが他者の心の声すら聞こえるようになってくる。
これもやはり自分でコントロールが必要なわけで、人の心の闇を聞いてしまった存在は大概立ち直れない。
そういう試練を乗り越えたものが【共鳴】能力を得ることができる。
共鳴、とは文字通り、すべてのものに共鳴しその心を通わせる能力。
その能力は別名、心の証明、ともいわれているもの。
つまりは心の強さを証明するものであり、その【共鳴】の能力をも

つものに悪いものはいない。
そして彼らは精霊達にも好かれる存在となる。
しかしその能力の保有者は世界中で今のところ数名ほどしか確認されていない。
「ディアさんの能力って、やっぱり共鳴、なの？」
「私のはそれとはまた別。ただ精霊達に好かれる性質なのよ」
好かれる、というか慕われる、というか甘えられている、というほうが正しいが。
しかしその言葉にウソはない。
「ディアさんのもつ雰囲気がそうさせるのかな？」
「たしかに。ディアさんってなんかそこにいても自然に完全にとけこんでるしね」
実際に目の前にいるのにときどきそこにいないような感覚に陥ってしまう。
そしてまた、傍にいると何だかとてもここちよい。
まるで、母の腕に抱かれ眠っていた赤ん坊のときのような心地よさがそこにはある。
すべてを包み込む…何かわからない雰囲気がディアにはある。
説明されないまでもその場にいる全員がそのことを感じ取っている。
「さあ？」
そんなクラスメート達にほほ笑むだけで正確な回答をださないディア。
かれらの言葉はあるいみ的確。
しかし彼らはそのことには気づかない――

「Le départ qui a fendu lumière ouverte, et obscurité du sommeil,
et l'enfant de l'atome est de bout et est maintenant nouvea

ｕ　ｉｃｉ」
――（光よはじけ闇よねむれ　原子の子供たち　新たな旅立ちを今ここに）――
ふわっ。
何やら周囲で騒ぐ生徒達に関係なく、先ほどから気になっていたがゆえにある言葉を紡ぎだす。
先ほど新たに生まれた精霊の幼生達を言葉とともに送り出す。
この場に感覚の鋭いものがいればディアの周囲に温かな気配が濃縮したのがわかったであろう。
しかし、いまだに別の話題で盛り上がっている生徒達は気付かない。
「？今の言葉、何？」
「その旋律の言葉ってよく精霊達に語りかけるときに使われる言葉だよね？
　だけどかなり難しくて今ではほとんど使う人はいないってきいたけど」
そもそも、発音などが少しでも異なれば用をなさない。
この言葉でなくても他の言葉で代用できるのだからわざわざこの言葉を使用する必要性もない。
ゆえにあまりこの言葉は一般的には使われていなかったりする。
「まあ、今はほとんどこの言葉は使われなくなってるけどね。昔はある場所でよく使われてた言葉なのよ？」
嘘ではない、嘘では。
この言葉が母国語であった国はたしかに存在していた。
…もっとも、その国がある公式を見つけてしまったがために武器開発が進んでしまったのも事実だが……
「ディアさんってどこからそんな知識もらってるわけ？」
「やっぱり精霊さん達からいろいろと教えてもらえるの？」
まだ年齢的にも十三、という年代のはずなのに知識が豊富。
しかも知りえないことまでよく知っているっぽい。
ゆえにこその疑問。

「知ろうとおもえば誰でもいろいろと知ることはできるものよ？」
そう。
それだけの覚悟があれば誰でも知ることは可能。
かつて人類がおこした罪に目をむけるかどうかはそれぞれが決めること。
いまだに伝道師達がきちんと説明してもその事実を捻じ曲げて伝えるほどに人は愚かな行為を繰り返している。
一部にはきちんと歴史を伝えようとするものがいても、周りがそうさせていない。
それが今の今までずっとつづいている。

真実はそれぞれがきちんと見つめ、そして答えをみつけなければいけない、というのに……

光と闇の楔　～日常にある光景～（後書き）

次回は資格試験の予定・・・

光と闇の楔　～資格証明書と授業～（前書き）

前半でさらっと試験はながしますvええ。
いやほんと、さらっと……
だって試験内容をずらずら～と書いても意味不明でしょうし…
いえ、きちんと薬学における試験問題、というのはありますよ？
あるけど…わざわざ、試験問題をみたい、という人はいないとおもうのですよ……

光と闇の楔　～資格証明書と授業～

「ディアさん。そこまでいろいろわかってたら先に資格とればよかったのに」
「ん～。でも外からの試験だと試験料高いし」
教科書にのっていることよりも詳しく物事をしっている。
長命である精霊達からいろいろと知識を得ているがゆえにおそらくいろいろと知っているのであろう。
そう判断してはいるが疑問はつきない。
「まあ、学園にはいっていれば試験料は無料となるからねぇ」
高い学費も伊達ではなく、基本、必要な各技術などに関する試験は無料で参加できる。
ちなみにこのギルド協会学校の基本卒業資格はそれぞれの分野において最低でもC級所得をすること。
級、とはそれぞれの分野において免許のような制度を指し示す。
ちなみに、S級が免許皆伝、といわれている高みであり、
それ以外は、A級～G級までそんざいしている。
C級以上を獲得していれば大概のところで働くことは可能。
ちなみに自分で店などを持ったりする場合は最低でもA級所得は必要となってくる。
「まあ、先に資格だけとっても学校をでていなかったら雇わないところも多々とあるし。
　お給料面でもひびいてくるみたいだしね」
ギルド協会学校…通称、学園を卒業しているかいないか、で初任給も異なってくる。
ギルドそのものに関しては学園に通おうがどうしようが、基本実力主義の社会なので関係ないのだが……

しかし普通は冒険者などを生業にするとしても実力がなければご飯もたべられない。
生死の境を日々いきる冒険者などとは異なり、
普通の仕事を持ちたい、とおもうのは、おそらく間違ってはいない。
中には知識がなければ冒険者として生きていかれないから、といって学園に入学する輩もいるにはいるが。
入学する理由は、ひと、それぞれ。
「はいってまもない生徒でも検定はうけられるからうけてみたら？」
「そうね～」
Ｃ－Ａの教室の一角においてたわいのない会話が見受けられてゆくある日の光景――

光と闇の楔

～資格証明書と授業～

『薬学免許試験、Ｃ級』
ぱらぱら。
かきかき。
何ともいえない静まりかえったここちよいまでのほどよい緊張感が周囲に張り詰める。
「すごい人ね～」
思わずディアがそう思うのは仕方がない。
この場には本日の試験をうけるすべての存在が集まっている。
本日ここで行われるのは薬学免許、と呼ばれる品。

薬の調合から危険物とみなされる毒草など。
つまりは草花における知識とその応用が試される場所。
この場には様々な種族の存在、及び年齢の幅もはてしなく広く集まっているのがみてとれる。
まあ年に二度しかない試験。
ゆえにその力の入れようもわからなくもない。
ないが周囲がそれぞれに精神集中や再度の知識確認などをおこなっている最中、
そんな同じ受験者達をみているディアはかなりその場からういている。
しかし浮いているはずなのにその雰囲気もまた完全に周囲に溶け込んでおり違和感を感じさせない。
ギルド協会学校に入学してはや一月。
試験がある、というのをきき申し込んだ。
本来ならばある程度の下の級から挑戦するのだが、いきなり上の級にいってもいいのだが、
無難に中ほどの試験をうけることにしているディア。
時間とともにこの試験会場となっている場には特殊な結界が張られ、不正行為などがあればすぐにわかるようにとなっている。
ずらり、と並べられている椅子と机。
そしてすべてを監視するためにと会場内部を飛び回る球体。
この球体はとある術で構成されており、
その球体に写り込んだ光景をそのまま別の場所に転写することが可能。
つまりは、離れていても見張りができる、という代物。
その威力は術者の力加減一つできまる。
「まったく同じ日に試験、というのも何よね～……」
その他の技術や他の資格に関してもこれらは同日に執り行われる。
すなわち、様々な資格を要したいものにとっては数年かけてそれらの資格を所得することとなる。

ゆえにほとんどのものが自分に必要な資格だけ所得し他は見向きもしないのだが……

会場となるのはギルドが保有する試験会場となるべく施設。

この施設の中には様々な特殊技能などの実技を身につける施設も存在する。

特質すべきはこの建物そのものに精霊の加護がつけられており、

ちょっとやそっとの攻撃などをうけてもびくともしない、ということであろう。

建物の形とすれば基本の建物は四角の形に建てられており、

二階建の白いレンガ造り、中身は木材で内装が施されていたりする。

そして囲むように建てられている建物の中心にひときわ目立つこの世界でも珍しい、

四階建ての建物が位置しており、試験はこの四階建ての建物の中において執り行われている。

広さ的にはすっぽりとちょっとした商業区くらいははいる広さをもち、

この建物だけでひと区画締めている、といっても過言ではない。

東側にギルドが経営している学校があり、西側にはこの施設が存在するテミスの首都の構造。

そしてここからは王城がよく見え、斜め正面にお城が位置している形となっている。

今、ディア達がいる部屋はその四階建ての建物の二階の一室にあたり、

内部構造をしいてあげるならばいたって単純極まりない。

何しろがらん、とした空間に椅子と机がこれでもか、というほどに並べられているのみ。

正面と背後にはちょっとした段差が設けられており、そこに教壇らしきものがあるにはあるが、

基本、この部屋そのものは何もない、といって過言でない。

あるとすれば部屋を支えるためにある数本の柱、くらいであろう。

「それでは、試験を開始いたします。みなさん、準備のほどをお願いします」
この試験会場を担当しているであろう試験管の言葉に従い、それぞれが出していた品々を片づける。
この部屋に集まっている受験者達の数はおよそ百名と少し。
正確にいうならば百八十六名、という人数がこの部屋の中には存在している。
まさしく老若男女問わず、異種族問わず、というギルド本来の概念がよくわかる顔ぶれ。
「それでは…試験、開始っ！」
数十名に及ぶ試験管がそれぞれの受験者に試験用紙を一人、一人手渡していき、
いきわたったことが確認されたのをうけ、本日の試験が開始されてゆく。
この薬学試験は数種類の科目に別れており、
合格するためには全部の科目を最低でも八十点以上取らなければならない。
ちなみに、まだこれはC級試験なので所得点数が低くても合格範囲になっているのであり、
A級、そしてS級となれば全科目を百点以上求められる。
A級資格にいたっては問題が百点満点のように造られているため、
基本満点でなければ認められない。
そしてS級にいたっては
五百点満点という中でどれだけの点数が平均してとれるか、でS級の中でもランクがきまってくる。
ちなみに、S級にもランクがあり一番最高峰はS級十位、と呼ばれている。
この資格所得者は各国々にも数名しかいまだに存在しておらず人々の憧れの的、ともなっている。

試験管の開始の合図をうけ、会場内はさらに緊張感に満ち溢れてゆく――

「……なんというか、ディアさん、あなた、
　始めから卒業資格試験うければよかったかもしれませんね……」
おもわず感心したような呆れたような声が苦笑まじりに紡がれる。
総合科C組A担任教師、ヘスティア＝アルクメーネ。
前日の試験結果を手に思わず苦笑まじりにディアを呼び寄せ話しかけていたりする。
「でもこのたびの試験内容、そんなに難しくはなかったとおもいますけど……」
ディアからすれば内容はいたって単純であった、としかいいようがない。
もっとも、成分分析などといった内容も出てはいたりしたのだが。
ディアが入学してからそのようなことはいまだに教えてはいない。
C級とはいえ世の中に通用する資格であることにはかわりない。
合格者は十人試験をうけて一人受かるか受からないかというレベル。
そんな中で満点合格者、というのはかなりマレ。
その報告をうけたときには、ヘスティアはかなり驚いたものである。
もっとも自分が担当しているクラスから満点合格者がでた、というのはかなり誇らしい。
誇らしいが・・・まだ、ディアは何しろ入学して一月足らず、というのもわかっている。
薬学に関してもいまだ詳しく教わってはいないはず。
「ギルドからの報告によれば、昔から薬学などには通じていたようですね」
「まあ、基本的なことは」
そんな担任の台詞にあえて答えるわけでなく、かといって否定する

わけでもなく笑みをむけてかわすディア。
「とにかく。おめでとうございます。ディアさん。薬学C級、免許所得、です」
試験を突破した、という免状とそれに伴う免許。
ちなみにこの免許はカード式になっており、色によって区別されている。
ちなみに一枚のカードですべての免許所得具合がわかるようになっており、
新たに資格を所得した場合、一番始めに手にしたカードに上書きされる形で更新される。
「そのカードは一生、あなたの資格を証明するものになります。
　無くしたりした場合は再発行になり再発行手数料がかかりますので気をつけてくださいね」
「はい」
裏に名前と資格内容がかかれており、表にはシンプルに『資格所得証明書』という文字が記されている。
このカードもまた特殊な方法でできており、
普通のカードではなく術により練り上げられた特殊製法な板でできている。
弾力性があるが絶対に折れることはなく、またしわがつくこともない。
大きさ的にはてのヒラサイズより少し小さめくらいで、持ち運ぶのに不便はない。
大体の存在はこれらの証明書は小銭入れ、もしくはカード入れなどといったモノに入れている。
この世界で普及している財布はこれらカードが入るような構造になっているものが多く、
ゆえに小銭入れとして普及している入れ物もカードをいれる場所が別につくられている。
大概はカードとお金を別々にしている者たちが大半なのだが。
理由は簡単。

お金はとられても問題ないが、身分証明ともいえるカードを取られた場合、後が面倒であるがゆえ。
もっとも、この身分証明ともいえるカードは当人以外のものが悪用できないように、
個人情報がきちんと守られるようになっている。
すなわち、当人の『気』により文字が浮き出るような仕組みとなっているのである。
ゆえに他者が使用しようとしても、そこには何もかかれていないカードのみが示される。
当人の『気』をカードに入れ込む方法はいたって単純。
うけとったときにカードを手にし自分なりに自分の気を入れ込むようにするだけ。
気をいれこむ、という方法がわからなければ、額にしばしあてていればよい。
それだけでカードに組み込まれている術が持ち主として登録する形式がとられている。
「カードに情報をいれる仕組みは…説明するまでもないみたいですね」
登録が完了すればカードの色が銀色から金色にと変化する。
ディアがカードを手にとり瞬く間に色が変化したのをみてとりヘスティアは再度苦笑する。
「これからのあなたの活躍に期待してますね」
「はい。ありがとうございます」
朝の朝礼どき。
教室の前にと呼び出され、試験合格を告げられた。
ゆえに教室の中はちょっとした騒ぎになっていたりする。
よもやC級資格の合格者がクラスからでるなど誰もおもってはいなかった。
実際にこのクラスからはいく人かの試験をうけたものはいるがC級を受けたものはおらず、

よくてD級どまり。
C級合格は彼らの学年からすればかなり珍しく、あるとすればA組在住の生徒が成し遂げるくらいであろう。
「はいはい。それでは、次なる合格者の授与式にうつりますよ。
名前を呼ばれた人は前にでてくださいね？」
とりあえず一番先にディアを呼んだのは他の生徒達にもはっぱをかけるため。
しばし、先日の試験合格発表をかねた、資格授与式がC－Aの教室にて執り行われてゆく……

「そういえば。ディアさん、C級試験ってどんな内容があったの？」
好奇心と興味、そしていずれは自分達もうけたい資格。
ゆえにこそ休み時間にディアの傍にいき問いかける生徒達。
「このたびの試験内容？そんなに難しくなかったわよ？
たとえば、水の幼生と相性のよい精霊の幼生の数をのべよ。幼生達の記号でも可能。
幼生達と卵達の因果関係を示せ、という問題とか」
ちなみに、卵、という表現はいまだに自我をもたない自然界の中にある様々な因子のことをいう。
記号、とはそれらのことを示すのに使われている文字通り、『記号』。
かつてはそれらのことを『元素』または、『原子』と呼んでいた。
今の世ではそのような呼び方はされていないが。
相性のいい、というのは結びつく可能性がある因子のことを指し示す。
卵達が結び付き、二つ以上から構成される物質に変化した場合、各個に意思が生まれ幼生、となる。
それらの幼生達は同種、あるいは異なる種と結合することにより幼

生、という個体を形勢する。
その結びつきに必要な力は別なところにあり、様々な要素が含まれる。
今、ディアが上げた問題はそれらの要点を踏まえて説明せよ、というもの。
ちなみに電気を帯びた卵や幼生はまた別なる生命にと進化する。
そこまで詳しく試験にでるとすればそれはA級以上の試験に限られるが。
ゆえにそこまでディアは説明するつもりはない。
きかれているのはこのたびの試験内容、なのだから。
「…その、卵やら幼生やらの仕組みが今いちよくわからないのよね……」
教科書にものってはいる。
いるがいまいちつかめないのも事実。
「まあ、感じ取られれば一番てっとり早いけどね」
実際に【感じる】ことさえできれば難しく考える必要性はまったくない。
そもそも自然界には常にどこにでも【卵】達は存在している。
ただ、普通の目では視えない、だけで。
「たしか、上級向けの教科書に一覧がのってたとおもうけど……」
それらの一覧を伝えたのは他ならぬ伝道師達。
かつて彼らが普通のように使っていた元素記号を用いた一覧表。
水素やヘリウム、といったその概念はわからないまでも、そういうものなんだろう。
という認識でこの世界には広まっていたりする。
別にそれらを知らなくても生活に支障はないわけで。
しかしそれらを詳しく知ることにより生活の幅が広がるのもまた事実。
それらを生涯の研究対象としている者たちもいるにはいるが。
「判らないなら、ヘスティア先生にきいてみたら？きっと喜んで教

えてくれるとおもうけど？」
おそらくまちがいなく嬉々として教える様子が目にみえる。
ゆえにいたずらまじりにそんなことを提案するディア。
彼女の性格はちらり、と確認しただけで完全に把握している。
ゆえにこそのディアの台詞。
「…いや、それ提案したらクラス全体巻き込んで補習授業になるとおもう……」
そんなディアの台詞をうけて別の生徒が突っ込みをいれる。
おそらくそれは間違いないであろう。
というか向上心があるのはいいこと！
といって嬉々としてそれらのことを教え始めるのは目にみえている。
ディアからしてみればまだ習い始めて一月ではあるが、
この教室から【訊いた】内容からしてもおそらくそれは間違いない、
と確信がもてる。
「たとえば、水の幼生はね……」
「いや、ディアさん、説明いらないから、いらないからっ！」
「聞き始めたら絶対に終わりがないぃ～～！」
何ともわきあいあいとした会話がディアの周囲にて繰り広げられる。
と。
から～ん、から～ん……
「あ、次の授業開始！」
「たすかった～」
「いや、きいてきたのはあなたたちなんだけど……」
ディアが詳しく説明しようとするとちょうど休憩の終わりと次なる
授業開始の鐘の音が鳴り響く。
ゆえにほっとした表情をうかべるクラスメート達。
そんな彼らにおもわず苦笑せざるを得ないディア。
こういうやりとりは何だかほんわかしていてとてもここちいい。
「なんか、ひさしぶりにゆっくりしてるって感じよね……」
おもわずぽつり、ともらすディアの気持ちはおそらく本音、なので

あろう。
基本、彼女は【彼ら】を常に身守っている立場、なのだから……

「さて。と、今日の依頼は…と。んで、またケレスがいるわけは…と」
おもわず苦笑してしまうのは仕方がない。
授業がおわり、いつものようにギルドにいこうとしたところ、学校の門の前で待ち構えられていた。
「一人で依頼うけようなんてずるいんだからっ！」
どこがずるい、というわけではないであろうが。
ケレスとすれば一人より二人で依頼をこなしたほうが能率もよく確実に資金が手にはいる。
それゆえにディアにまとわりついている。
「ケレスも一人で依頼うけたほうが楽じゃない？」
「だって、ディアとだったら薬草とか探すのはやいしっ！」
自分一人だとどこに生えているとかは大まかなところしかわからない。
しかし、薬草採取の依頼などにおいては、ディアは周囲の自然達からその位置を聞くことが可能。
ゆえにたしかに時間節約、といえば節約にはなるであろうが……
しかしディアからしてみれば一人のほうが楽、というのがある。
何しろ他者の目があれば活性化させることもできない。
多少成長を早めさせ力をあげることにより元通りにしておきたいディアからすれば他者の目はないほうがいい。
何しろ自分が力を使うところはあまり見られたくない。
まあ、離れていてもその気になればそれらは可能なのではあるが。
やはりそれはそれでのり、というのもも大切にしたいディア。
「まあ、いいけどね……。今日、私はヒギエアの根の採取依頼をうけるつもりだけど」

めぼしい依頼はすでに目をつけている。
この依頼は継続依頼がでており、ちなみに報酬金は一本につき水晶貨１０枚。
ちなみにこの金額は通常生活するための生活費の二分の一にあたる。
普通に生活していくうえでほぼ水晶貨二十枚あれば一日余裕をもって過ごすことが可能。
…もっとも、宿にとまったりした場合はそれでは足りないが。
ヒギエアの根。
ヒギエア、という植物の文字通り根であり、しかしヒギエアの花はいわば食虫植物。
大きさによっては人の子供、もしくは大人ですら簡単に消化吸収してしまう。
基本的にそこまで大きなヒギエアは人里近くには存在していないが。
その根には滋養強壮の効果があり、様々な用途に重宝されている。
ちなみに、根だけでなく草木の部分も乾燥させることによりちょっとした薬になりもする。
ゆえに根の採取をかねてうまくすれば花の部分も売れることもあるがこちらのほうは自力で乾燥させて持ち込んだほうが手取り的には高く引き取ってもらえる。
授業がおわり、そしてその放課後依頼をうけて報酬を得る。
という行動を基本的にディアは毎日のように行っている。
ちまちまと依頼をこなしていてもいまだにギルドのランクが上がったわけでなく。
ちなみに、ギルドのランクを上げるためには必要なポイント、というものがあげられる。
通常、ディアが受けている依頼における所得ポイントは低いものが多い。
ゆえにいまだにギルド自体のランクは上がっていない。
今のディアのギルドにおけるランクは青。
先日までは紫だったのだが、資格を所得したことによりランクが一

段階あげられた。
ギルドのランクは資格にも左右される。
資格を所得しているかいないか、により受けられる依頼の幅もまた異なってくる。
基本ポイントは元となっている通貨の仕組みと似通っており、ゆえに次なるランクにディアが上がるためには、千ポイント必要となってくる。
それでも日々、毎日こつこつと小さな依頼をこなしていけばいずれはギルドのランクも上がるであろう。
「そういえば、どこでとるつもり？」
「霧の森」
「……え？」
さらっといわれたディアの言葉に思わず絶句するケレス。
「たしか、その森ってこの前から迷いの森、ともいわれてない？」
なぜか森にはいってても奥までいかれず途中までいくと森の出口付近に戻されてしまう。
常に森全体に霧のような靄がかかっており、以前からその霧は有名であったが最近はより濃くなっている。
「大丈夫よ。今そうなってるのは竜の卵があるから、だし」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それって、大丈夫じゃないじゃないっ！」
さらっといわれたディアの言葉におもわず叫んでしまうケレスは間違っていない。
絶対に。
竜の卵がある、すなわちそこには竜が存在している、ということに他ならない。
「大丈夫よ。こちらが敵意なければ」
それに何よりもディアからすれば知り合いである。
以前しっかりと釘をさしていることからまた馬鹿なことをするとは思えない。

しかしケレスはそんな事情など知りはしない。
「彼らがいるのは森の中心付近だし。ヒギエアは森の滝付近に生えてるし」
竜が住まう森である、とわかっていこう、というその根性がケレスからすれば理解不能。
ゆえに、
「……ディアってこわいものあるの？」
呆れ半分に問いかける。
「あるわよ？」
怖い、というかみつかったら延々と説教をかましてくれるので苦手、というほうが正しいが。
まあ、怖い、といえば怖い部類にはいるであろう。
「私の知り合いなんて、私がすこしいろいろしただけで、一日といわず数日間、説教まがいなことといってくるし」
それも延々と。
そんな暇があるなら仕事しろ！
と幾度叫んだことか。
おもわず遠い目をしながらそんなことを思い出す。
「…いや、それ、怖いの意味が違うとおもう……」
そんなディアの言葉におもわずつっこみをいれているケレス。
しかしディアの様子をみていても、おそらくいっても無駄なのであろう。
そう判断し大きくため息をつき、
「……あぶない、とおもったらすぐに森からでるのは約束してよね？」
「だから、あぶないことなんてないってば」
「……ディアのその根拠のない自身はどこからくるのかしら……」
互いにそんなやりとりをしながらも、二人はギルド支部へむかって足を向けてゆくのであった……

光と闇の楔　～資格証明書と授業～（後書き）

ちなみに、こそっと補足。
卵、と呼ばれている物質（？）は現実世界でいうところの「原子」や「元素」です。
ついでに幼生、とよばれている物質（？）は「分子」です。
つまりは、水「Ｈ２Ｏ」とかならば幼生、になり、ただの水素「Ｈ」ならば卵、という形ですｖ

光と闇の楔　～竜との邂逅～（前書き）

みなさんは覚えているでしょうか？初期にでてきた竜さん家族Ｖまさかまた出てくる、と思ってた人は…いる、でしょうね。
何しろ私の書くものだし。
というわけで、いってみるのです♪

光と闇の楔　～竜との邂逅～

うろうろ…
うろうろ、うろうろ……
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
くすり。
おもわずその様子をみてくすり、と笑ってしまうのは仕方がない。
このひとがこんなにうろたえてるなんて久しぶりにみる。
あとは…
もうすぐ、もうすぐね。
私たちの赤ちゃん……
寝そべる腹の中に抱え込んでいる小さな卵。
本当ならばもっと時間がかかるとおもったけど、ある一件以後魔力が異様に高まっていった。
おそらく周囲に満ちる力の影響であろうけど。
だけども、初めての子。
どんな子がうまれてくるのは私もたのしみ。
だけど、うまれたら生まれたでやんちゃになるんでしょうね……

光と闇の楔　～竜との邂逅～

「…すごい、霧……」
森に一歩足を踏み入れると一寸先すら見えない霧の濃さ。
「そう?でもこの霧はこの森そのものが発生させてるものだから他

意はないとおもうけど」
前回ここにきたときに、念のために森にそうお願いしておいた。
そもそも普通は彼らが行わなければならないことなれど、まだ年若いがゆえにそこまで気がまわらなかったらしい。
しかし守るべきものがいるのにそれでは困る。
ゆえにそのあたりはしっかりとお灸をすえるように、とも言っておいた。
「…いったいどんな育ちかたをしたらそこまで自然のことを判るようになるのよ……」
「普通は誰でもわかるはずなんだけどね～。ただ、目をそらしてるだけで」
目をとじ、耳をふさいでみえるものをみえなくしている。
そのことに気付けば価値観が変わるはずなのに。
命とは何か。
その答えがそこにある。
「とりあえず、滝のところにいきましょ。川のせせらぎがしてるからこっちが上流ね」
「…だから、なんでわかるかなぁ～……」
ディアにいわれても納得いかないケレス。
精神を集中しても漠然としたことしかわからない。
今進んでいるのもかろうじてディアの姿を視界にとめながら進んでいるに過ぎない。
足元すらもおぼつかないほどに霧が濃い、というのに
なぜかディアの周りだけはそんな気配がないように感じる。
実際に、一寸先すら見えないはずなのに、ディアの姿はしっかりとケレスの視界にはいっている。
見失えばまちかないなく迷子になるか、もしくは噂どおりに森の出口に飛ばされる。
そう確信がもてるがゆえにディアの姿を見失わないようにあわててついてゆくケレス。

あるいてゆくことしばし。
やがて川のせせらぎがきこえてきて、森の中を流れる川にとたどり着く。
「さて。これから上流目指してあるくわよ」
「川の周囲には霧はないんだ……」
川の周辺には先ほどまでの濃い霧は発生していない。
といってもそれは川のある部分とその両脇の一部分のみで、
木々が生い茂り始めている場所からは先のみえないほどの濃い霧が立ち込めている。
しいていえば霧の中に静かに川が流れている、と表現したほうがしっくりくるようなそんな景色。
しかしこれならば迷いようがなさそうである意味ほっとする。
ディアは気にしていないようではあるが、ケレスからしてみれば、一寸先も見えない、
というのはかなり神経質になっていたりする。
そのような濃い霧が大量発生する場合には何らかの要員がある、ということを
教育の一環として幼いころより教えられているがゆえであろう。
自然に発生した霧と意図的に発生させている霧とではその用途はまったく異なる。
前者は自然界の日々の営みにて自然に起こりえるもの。
しかし後者は何かしらの意味があってなされるもの。
大体、何かを隠したりする場合に後者はよく使われている。
もしくは他者の命を守るために周囲の自然がそのように仕向けていたり、など。
とりあえず緊張していたこともあり、この川の空気はとてもここちよい。
ゆえに無意識のうちにほっと息をなでおろしつつも、大きく息を吸い込むケレス。
「さ、滝はもう少し上流よ、いきましょ」

「ディアってここにきたことあるの？」
「周囲の自然が教えてくれてるけど、ほんとなんできこえないのかしらねぇ？そのほうが不思議だわ」
「…私はディアのほうが不思議よ……」
本気でいっているっぽいディアの言葉に脱力せざるをえないケレス。
そもそも自然の声、すなわち草木の声をきけるものなど、ケレスからすればエルフ族くらいしか思いつかない。
しかしディアはその一族ではない、という。
だから余計にわからない。
わからないが、実際に聞こえているようなのでそのようなものなのだろう、と納得するしかない。
「とりあえず目的の場所はもう少し上だし。のんびりといきますか」
別に時間指定をされているわけではない。
学校がおわりこの場にきてはいるが、ここで夜をあかしても別に不都合はない。
そもそも攻撃をしてくる輩はここには存在していない、のだから。
「…そうね。ここで野宿するのも癪だわ……」
いろいろと聞きたいことはあるが、あまりのんびりしていれば完全に日がくれてしまう
というかこんな霧の濃い中で夜を明かしたくはない。
万が一、敵意をもったものがいてもこの霧の濃さでは相手の姿もみえはしない。
互いにそんな会話をしつつも、二人してててくてくと川の上流へと足をむけてゆく――

「…って、何これぇぇっ！？」
「さて、ついた。っと。？ケレス？何騒いでるの？」
思わず目前に見えた光景に叫ぶケレスに、きょとん、とした表情でいっているディア。
「ディア！これをみて何ともおもわないの！？」

これ。
というのは目前に広がっている光景。
川の上流にある滝壺にきたはいい。
いいが、なぜその滝壺の周囲にぴっしりと、しかも自分達の身長に近いほどの高さを誇るヒギエアが群生しているのか。
それが聞きたい。
切実に。
そもそも、こんな大きくなるまでヒギエアが放っておかれることはまずあり得ない。
特に人が住まう場所が近くにあればなおさらに。
目の前にはびっしりと、
ちょっとした大人顔負けくらいの高さを誇る、朱色の花を壺状にした花々が咲き乱れている。
ちなみにその壺状の花の下にはいくつもの蔓があり、それらがうねうねとうごいている様がみてとれる。
「あら〜。力が濃いせいか成長もはやくなってたのね。
　あのね。あなたたちの根がほしいんだけど、わけてくれない？」
「ちょっと！ディア！ちかづいたらあぶな……」
しゅるんっ。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
近づいたら危ない。
そういいかけたケレスの言葉をさえぎるようにして、ディアの言葉をききとげ、
その場にいるすべてのヒギエアの花達がその蔓に自分達の根の一部をもって自然に差し出してきていたりする。
その光景をみておもわず固まるしかないケレス。
ちなみにこのヒギエア、自分の意思で動くことができ、幾多の根を足のように動かし移動する。

「ありがとう。だけどあまり無意味に他の命をたべたらだめよ？
　あなたたちはここの気だけでもいきられるんだから」
こくこくこく。
にこやかにいうディアの言葉をうけてか、
それぞれのヒギエアの花がまるでうなづくように花をこくこく上下させていたりする。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや、まって、ちょいまってっ！今の、何！？何なの！？」
「え？ただ会話してるだけ……」
「ど…どこまでディアは非常識なのよぉぉっ！！」
緊張していた自分の気持ちはどこにある、というのだろうか。
ヒデギアの根を取る場合、すくなからずともその花のもつ溶液にて少なからず怪我を追う覚悟をしなくてはならない。
…花々が自ら率先して根をわけてくれる、など今まできいたことも見たこともない。
ディアからしてみれば、別に会話して分けてもらうのは当たり前。
ゆえにケレスの叫びにただ少し首をかしげ、
「へんなケレス」
「へんなのはあなたよぉぉっ！」
どうも彼女と一緒にいれば予想外のことを経験するような気がひしひしとする。
そんなことを思いつつも叫ぶケレスの声は滝の音にむなしくもかき消されてゆく……

「…も、つかれた……」
何がどう、というわけではない。
かろやかにヒギエアの花達と会話しているディアをみていて精神的にどっと疲れた。
ゆえにその場から少し離れ、疲労の色もこくおもわずつぶやくケレ

ス。
と。
「るぐおおおっっっっっっっ！」
森の中、場違い、ともいえる雄たけびが周囲に響き渡る。
「ひっ！？」
「あら？」
その声をきき、体を震わせるケレスに、ふとその声をきいて花々との会話を中断し顔をあげているディア。
「何うろたえてるのかしらねぇ～。とりあえず、いきますか。じゃあね。みんな」
このまま放っておいてもいいのだが、いかんせん。
かかわっている以上、ほうってもおけない。
それに感じる波動からしても無視はできない。
ゆえにその場にいるヒギエア達に別れの言葉をかけて、声のしたほうへと歩き出す。
「う～ん…前、私が直接手をかしたからかしらねぇ～……」
そうとしか思えない波動がそちらのほうから感じられる。
「いや、いやあの！ディア！どこにいくつもりよっ！」
それでなくても先ほどのヒギエアの一件で茫然としていたというのに、
何やらまたまた常識外の光景を目にしてしまいそうでおもわずつっこむケレス。
「ちょっといってくるわね」
「いや、ちょっと、って、ディア！まってよ！こんなところにおいていかないで～！！」
何しろここはヒギエアの群生地。
いくらカレラが大人しい、といっても居心地がいいわけではない。
しかも軽く自分達くらいの大きさのヒギエアがいくつも群生していれば逃げたくもなるというもの。
いつ、自分をエサ、と認識されるかわかりはしない。

すたすたと歩きだすディアをあわててておいかけてゆくケレス。
この周囲には霧は発生してないようであるが少し森にはいっただけでやはり霧は濃くなる一方。
そんな中でディアとはぐれればケレスは自分が迷う自身がしっかりとある。
迷うだけならいいが、あんな巨大なヒギエアが群生していたような森である。
あとどんな肉食系の植物などがいるかわかりはしない。
ディアならば相手と【話す】ことができるようなので回避できるようではあるが、
はっきりいってケレスはそれらとコトを構えたくはない。
そもそも、こんな中で火の術を使えばまちがいなく自分にとぱっちりがきてしまう。
そのあたりの常識はいくらケレスとてわきまえている。
水の加護をえた、とはいえ精霊達を敵にまわせばどうなるのか、考えるだけで恐ろしい。
ディアいわく、この森は精霊達が住みついている森、とのこと。
だからこそ下手な行動はさけるべき。
ゆえにあわてディアの後をケレスは追ってゆく。

「……さて、と。時間は…急いだほうがいい？」
ふわっ。
周囲の木々がディアにこたえてくる。
どうやらなるべく早く急いだほうがよさそうである。
「るぐぉぉっっ！」
それと同時再び森の中に響き渡るちょっとした雄たけび。
それを雄たけび、といっていいのかははなはだその叫びの意味がわかっているディアからすれば疑問だが。
どの種族にしてもどうして自らの胎内ではぐくまない親、というのはうろたえるのかがわからない。

自分達があわてふためいてもどうにかなるものでもないであろうに。
すっと手をかざし、すっと手を横に振る。
それと同時にサァっと晴れてゆく濃い霧の海。
霧が晴れたその視界の先にちょっとした大きな塊の姿が二つほど目にはいる。
「クレマティス。何騒いでるの。そっちのアルニカが半ばあきれてるわよ？」
くすり、と笑みをうかべつつも視界に入る二つの大きな塊にと言葉を投げかけるディア。
視線の先には森の木々よりも大きな何かの塊…よくよくみればそれが生き物だ、と理解ができる。
びっしりと体全体をおおっている鱗に体半分ほどのシッポ。
後ろ足二本にて大地に下半身を下ろすとともに座りこんでおり、その両手は所在なさげに虚空をさまよっている。
緑の艶のある鱗は周囲の自然にあるいみ溶け込んでおり、じっとといていればさほど違和感はないであろう。
『汝は……』
どこか聞き覚えのある声。
ゆえにその声のしたほうを振り向けば、少し前、この森にやってきた少女がそこにいる。
ゆえに戸惑いの声を出す彼の気持ちはおそらく間違ってはいないであろう。
「あれだけ『どうしよう、どうしよう、どうしようっ！』って騒いでたら嫌でもわかるって」
そう。
目の前のこの森に住まう、若き竜…緑竜のクレマティス。
さきほどの雄たけびは彼のもの。
正確にいうならば雄たけび、というか一人パニックになって騒いでいた、というほうが正しいが。
「こんにちわ。アルニカ。どうやら卵が孵る、みたいね」

みれば緑竜のつがいの竜である黄緑色の姿をした彼女がかかえている卵に変化がみられている。
卵の殻にヒビがはいってはいれどもそれ以上は進んでいない様子。
完全なる力不足。
卵から竜の幼生が孵るためにはその幼生にあった【力】が必要不可欠。
力が足りなければ孵ることはできはしない。
『おひさしぶりです。…すいません……』
直接に【力】に触れて理解してしまったがゆえに恐縮してしまう。
何よりおそらく彼女がここにやってきた理由も理由。
自分達の【力】だけでは産まれることのできない我が子。
すなわち、あのときの【力の余波】にて自分達よりも格上の存在として誕生するであろう。
それは確信。
このまま卵から孵ることができなければ、いずれ卵の中で子供は死んでしまう。
とにかくひたすらに自らの力を卵にそそいではいたが変化はあまり見られなかった。
そのせいでつがいとなっているクレマティスが半ば混乱し叫んでしまったのだが。
それがいいのかわるいのか。
とりあえずその叫びのおかげでどうやら子供が死ぬようなことにはならなそうである。
しかし頼ってしまうのはやはり心苦しい。
だからこそ謝らずにはいられない。
「いいのよ。…あ～。この前の私の影響、かしらね。とりあえず、このままだと子供にも影響悪いし」
いいつつも、すたすたとうずくまっている黄緑色の竜のほうへと歩みよるディア。
ディアがその傍にいき卵に手をふれたとほぼ同時。

「もう、ディア、はやい…って、竜!?」
ディアを追いかけてきていたケレスがその姿を目にし思わず叫ぶ。
ケレスの目の前には森の木々よりも大きな竜が二体。
しかも一体の傍にディアはどうどうと近寄っていたりする。
大きさ的にいえば竜族の中でもかれらは小さい部類にはいるのだが、
そんなことはケレスにはわからない。
ゆえにその場にて硬直してしまう。
さもありなん。
通常、竜と相対したときには、まちがいなく人のほうが部が悪い。
しかもよくよくみればうずくまっている竜の方は何かの球体のようなものを抱いている。
すなわち、それが意味することは……
「って、ディア!あぶないわよっ!」
そこまでおもい、はっとする。
よくよくみればディアはその球体に手をそっとおいているのである。
この行為ははっきりいって竜を怒らせるのには十分すぎるほどの行為。
ゆえに顔色を真っ青にして叫ぶケレス。
「あら。ケレス。大丈夫よ…さて、と。『めざめなさい』」
竜語を使い、目覚めを促す。
ディアが触れた卵はまるでそれに呼応するかのように、
ピシッ…ピシピシ……
静かに殻が割れる音が小刻みに震えるように響きだす。
先ほどまで、いくら両親たる竜がいくら力を送ってもまったく反応しなかった、というのにも関わらず。
ピシ…ピシッ…バキイッンっ。
「ぐるわっ!『おおおっ!』」
「く~っ『まあっ』」
卵の殻が一部完全にはがれおちたその瞬間、二匹の竜が同時に声を発する。

ケレスには何か相手が吠えたように感じ、ディアには彼らの言葉がありありと理解可能。
「…ぴきゅっ！」
卵の殻からゆっくりと真っ白い…というかほぼ透明に近い小さな体が顔をのぞかせる。
かわいらしい声をだしているのは御愛嬌というべきか。
「……ぴゅっ？」
きょろきょろ。
ちょこん、と一か所割れた卵の殻から顔のみをのぞかせている様は何とも愛らしい。
『ほらほら。アルニカ。こまってるから手助けしてあげないと』
くすくすくす。
無事に孵ったことにほっとして温かな目でみていた母たる竜…アルニカはディアの言葉にはっと我にと戻り、
コッツン、コンコン…パリッ。
残りの殻をその前足部分の爪にてゆっくり器用にはがしてゆく。
「…え…え…？」
一方のケレスは何がおこったのか理解不能。
というか…あの、卵から顔をだしているかわいらしい物体は何！？
そんなことをおもいつつその場にしばし硬直していたりする。
『あ～。やっぱり、黄竜だったわね。…この前の影響かしら？
あのまま何ごともなければこの子もあなたたちとおなじ緑竜になったでしょうにね……』
気配でわかっていたがゆえに直接みればしみじみ納得してしまう。
さほど力を込めたつもりはなかったがやはりまだ固定されていない魂への影響は強かったらしい。
まあここしばらく後継者が生まれていなかったので問題ない、といえば問題ない。
『……そのほう、我らの言葉、はなせたのか？…言霊使い、ではなかったのか？』

どうやらいまだに勘違いしていたらしく、戸惑い気味に声をはっしてくる父たる竜。
『私は一度も言霊使いだなんていってないし。それよりアルニカにねぎらいの言葉かけないと。
　どれだけあなたはつがいである彼女に迷惑かけたのかしらね～』
あのときにしろ、今にしろ。
あまりうろたえたりするのは子供の誕生に悪影響を及ぼす、というのに。
竜族の誕生は周囲の環境、そして自然界の気の動向による。
自然の気が満ちている箇所で彼らは誕生し、そしてその自然の力を具現化した存在として誕生する。
子供も然り。
両親ともが育っている子供は【卵】としてまずその形を構成し、
そしてその中でゆっくりとその個体の形をつくってゆく。
そのときに影響するのは周囲の気そのもの。
そして誕生するときの気もまた子供の個体に大きく影響を及ぼす。
特に根本的な本能、ともいえる性格面、について。
親たる竜がうろたえていたりした場合、そのままの性格をひきついでしまったりする、という性質をもつ。
育っていくうえでその性格の修正はできはするが、いざ、というときその性格がどうしても表にでてしまう。
『まあ、今回は私がここにいるからそういうのはなくて、ほんとうにまっさらな状態のままみたいだけど』
裏も何もなく、何ものに汚されてもいない、純粋な魂の個体。
これからの日々の中でゆっくりとその個性を身につけていくであろうその幼生。
「とりあえず、無事に生まれたみたいだし。このままここでこの子育てる？それとも竜の里にいく？」
とりあえず念のために確認いれておく。
もっとも、この子供のことが竜族の上層部にわかれば嫌でも迎えに

くるであろうが。
「って…ディア！さっきから何…は！？まさか、あなた竜語まで理解できるの！？」
さきほどから何やらディアがぐるぐる唸っていたような気がしてはいたが、
何となくだが竜の様子から会話しているようにとれなくもない。
ゆえに、はっと我にと戻りおもわずさけんでいるケレス。
「え？ケレスははなせないの？」
「はなせるわけないでしょうがっ！！」
いったいこのディアはどこまで常識外れなんだろう？
そんなことをふとケレスは思ってしまう。
あまりの事実に目の前に脅威ともいえる竜がいる、というのをきれいさっぱり失念しているのがケレスらしい。
「くぴ～！！」
きょろきょろ。
ぴょっん。
完全に殻からでてきた竜の子供。
大きさは手の平にすっぽりと収まる程度。
その形は両親の竜と同じ形をしてはいるが色が異なる。
両親の竜達は緑と黄緑、一般にいう緑竜、という一族にあたる。
たいして産まれたこの子供はといえば、透き通るまでの真っ白い竜。
本当に背後が透けてみえるのでは？というほどの透明感をかもしだしている。
そんな小さな竜の姿にくりっとした黒い瞳がぱっちりと見開かれ、
ぴょんっと飛びつくようにディアの手の中にもぐりこんできたりする。
そのまま手の平にこすりつけるように、ぴ～ぴ～いいつつも完全に甘えている様子。
『あらあら。まあ仕方のないこね～。申し訳ありません』
『？さっきから、何かおまえおかしくないか？』

そんな様子をみて申し訳なさそうに謝る母竜アルニカに、
意味が判らずに首をかしげている父竜クレマティス。
そもそも、名乗っていないにも関わらず、ディアが名前を呼んでいる、という時点で予測がついてもいいであろう。
しかし、アルニカはともかくとしてクレマティスはいまだによく理解していないようで、
その長い首をすこしばかりかしげていたりする。
『そういえば、この子の名前は考えてるわけ?』
いろいろと彼らが名前を考えていたのは知ってはいる。
しかし同じ一族として産まれてくるであろうことを前提にしていたこともしっている。
それゆえの問いかけ。
『しかし…なぜ、我らの子が黄竜として……』
竜族の中でも一番位が高い、といわれている一族。
自分達のような緑竜から生まれた、などと今の今まできいたことがない。
かといってこの地の【気】が自然界そのものともいえる【世界の気配】ともいい難い。
世界の気配をより強くうけたものが黄竜として誕生する。
それは竜族であればどんな存在でも知っている事実。
産まれた瞬間から、その存在のありかたを理解し、そしてその仕組みをも理解する。
それが竜族。
しかし力の扱いはそれぞれ個々に負かされているがゆえに成長具合はそれぞれ異なる。
『・・・・・・・・・・・・クレマティス。あなた、ほんと~~にきづいてないの?』
そんなつがいである彼の言葉におもわず呆れた声をあげているアルニカ。
彼らが竜語で話している間、ケレスからしてみれば何をしているの

か、話しているのか理解不能。
ただわかるのは、目の前に竜族がいて、しかも真っ白い竜か産まれた。
さらにディアが竜語を使い竜達と会話している、ということのみ。
「まあ、その話題はおいといて。騒がれたくないし。しかし久しぶりに見たわねぇ。黄竜の子」
たしか以前産まれたときは一万年ちょいくらい前だったはず。
今は長をやっている彼女が後継者が生まれない～と嘆いていたのは知っている。
よくよく考えてみてみれば黄竜が生まれるときは毎回自分が関与しているような気がしなくもない。
「シアンに連絡とるならしておくけど。それともあなた達でしばらくここで育ててみる？」
どちらにしても長として教育をうけることになれば家族団らんの時間はあまりとれなくなるであろう。
「まあ、私とすれば性格が固定されるまでは両親の元で育ったほうがいいとおもうけどね」
かつてのときはなぜかディアが面倒をみるハメになっていたりしたが、このたびはきちんと両親が存在している。
普通の人の言葉で話しているはずなのになぜかその意味はすんなり、と二匹の竜の心にと響いてくる。
『…なぜ、そこで長の名が……』
戸惑いの声をあげるクレマティスをそのままに、その答えには笑みでかえし、
「ケレス。何そこでかたまってるの？こっちにきたらいいのに？」
いまだに、この場、
すなわち森の木々が一角途切れたその木々と広場との間にて固まっているケレスに声をかけるディア。
「かたまてっ・・って。ディア。なんであなたはそんなに平然としていられるのよぉぉっ！！」

先ほどのこととといい、今といい。
ケレスからすればはっきりいってもはや考えが追いつかない。
というか現実逃避をしたくなってしまう。
そんなケレスの叫びはただただ、静かな森の中に響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～竜との邂逅～（後書き）

さらっと流した花の根回収と、竜とのフラグ（まて
ちなみに、産まれた竜は水晶のような色彩をしている、とおもって
くださいｖ
完全に透明でなくすこし不透明っぽいドラゴン形体、ですね。
うごいてなければガラスの置物、としてもまかりとおります（笑

光と闇の楔　～課外授業と襲撃未遂？～（前書き）

今回もまたまた副題と内容がかみあっていない自覚あり。
戦闘シーン、詳しくいれたほうがいいのか悪いのか……
でもそれいれたら鮮血シーンとかちょこっとグロテスク？シーンとかも加わるし…
まあ、しばらくさらっと流す予定（あくまで予定
そろそろ敵さん？側の一つの付随がちらほらとでてきますv

光と闇の楔　～課外授業と襲撃未遂？～

「……なんか、ディアといたらわけがわからなくなってくるわ……」
先日も出向いた先で泉の精霊に出会う、という経験をした。
今度は今度で竜との邂逅。
ゆえにこそケレスとしてはそういわずにはいられない。
「そう？別に問題はないとおもうけど」
「おおありよっ！」
ここまで力があるのに今まで誰にも気づかれていなかった、というのも気にはなる。
しかし両親がいない、といっていたのもありそういう子供は多々といることから、
そういうこともありえるのかもしれない、と思いこもうとする。
が、しかし、そんな状態でどうやって自然と会話を成り立てることができたのかが理解不能。
一人で大自然の中で生活し、自然と語らって生きていたわけではあるまいに。
「さて。そんなことより、ヒギエアの根を換金にいきましょ」
町にかえるとき時間がかかるであろう、というので緑竜のクレマティスが近くまで送ってくれていたりする。
何でも子供をたすけてくれたお礼、とのことらしい。
たしかにそのまま帰路についても真夜中過ぎるのは目にみえていたので
あえてその言葉に甘えているディアとケレス。
ディア一人ならば別にそのまま移動すればいいのだが、ケレスもいるのでそうはいかない。
一緒に移動することはできはするがあまり目立つ行動はさけておきたいのが本音。

「……なんか、今日はどっとつかれたわ……」
何か今日は信じられないことが連続して続いた。
ゆえにほぼ寮の部屋に戻るなり倒れ込むようにして眠るケレスの姿が見受けられてゆくのであった――

光と闇の楔　～課外授業と襲撃未遂？～

「う～ん、課外授業、か～」
そういうものがある、というのは知ってはいたがおもわず笑みが漏れてしまう。
「実戦しなければわからない、という先生達の意向、らしいけどね」
これまでの知識をもとにして自分達で薬草などを採取する実戦的な課外授業。
今、ディア達がやってきているのは王都から少しはなれた場所にあるとある草原。
この草原は様々な草花が咲き乱れており、中には薬草などといった草木も存在する。
ちなみにこれは総合科Ｃ組全クラスが参加しているがゆえに人数はかなり多い。
それぞれ引率の教師がついているものの、王都の外は町の中とは違い危険はつきもの。
突発的な出来事に対応する能力を培う、という意味合いをももって

いる。
総合科ならではの実戦授業。
ちなみに組ごとにどの場所に出向いて授業を行うかが決められている。
ディアが在籍しているC組は王都から少し離れた位置にあるちょっとした草原がその場所に指定されている。
A組ともなるとすこし難易度が高い位置にある場所が指定されており、
生徒達からは『悪意の場』、とすらいわれているのだが。
A組に在籍できるほどの実力があるのだから何があっても自分達で多少の対処はできてあたりまえ。
そういう解釈のもとにその場所は指定されているらしい。
今ディア達がいる場所はちょっとした開けた平原のような場所であり、
その先には生い茂る森が垣間見えている。
王都に続く道は裏街道、と呼ばれており、道をよく知っているものが利用する程度で、
基本的に利用する存在達は限られている。
平原、といっても生い茂る草木はちよっとした子供以上の高さがあり、
中には大人くらいの高さのものもある。
ゆえに視界的にはかなり悪い。
この中で指定された薬草などをいく種か見つけること。
それが今回の授業の目的。
「…なんというか、実戦的、よね～」
誰ともなくそんなことをつぶやく気持ちはおそらく全員の生徒に共通することであろう。
この場には当然のことながら人に害を加える生き物も多々といる。
それらを避けつつ、目的のものを探し出す。
いわば、サバイバル。

まあ、A組のように切り立った崖の上などに目的の品があったりするのでない以上、楽といえば楽なのだが。
気をつけるべきは、人をエサとして認識している生き物達や、触れれば毒を喰らう生き物達。
中には小さな体でもその毒で体を溶かし、自分の餌とする生き物もいる。
そういった自然界の生き物にも気をつける術を磨くこと。
それがこの授業のもう一つの目的。
生活していくうえでそういった危機意識はとても必要となる。
だからこそ実戦的にそれらを学んでいくしかない。
知識だけでしっているのと実戦で学んでいるのとでは実際に出くわしたときに対処の仕方がまったく異なる。
「はい。それでは、みなさん、それぞれ探索を開始してください。
　ここにはパイルスネークなどもいますので十分気をつけてくださいね」
パイルスネーク。
毒を相手に注入し相手の肉体を溶かして喰らう雑食性の蛇。
「先生！そんな危険な生物のいるところでどうしろって！」
「大丈夫ですっ！周囲の危機管理把握、習得に役立ちます！」
「どんな危機管理ですかぁっ！」
生徒達から何ともいえない批難の声があがっていたりするのだが。
まあ、生徒たちの気持ちはわからなくもない。
まだ魔獣の生息地に戦闘の実戦、といって駆り出された授業よりはまし。
そう以前の実習をうけている生徒は半ばあきらめモードに陥っていたりする。
「一人で探すもよし。協力しあうもよし。それでは、解散です。
　ただし、あまり遠くにいかないようにしてくださいね」
この先の森はあまり治安的によろしくない。
なぜか地理的に排除しても排除しても夜盗や盗賊といった輩が拠点

を構えてしまう場所となっている。
まあ、周囲にさえぎるものも邪魔をしてくるものもいない裏街道。
悪いことをする場合、これほど便利な場所はない。
しかしそのせいで魔物もまた多々森の中には生息しているのだが……
「みんなまじめね～」
わらわらと判れては、さらにはそれぞれ話し合いチームを組んで必要な薬草を探す生徒達。
そんな様子をのんびりと眺めているディア。
そもそもわざわざ探さなくてもどこに何が生息している、などと周囲の気配に耳を澄ませばすぐにわかるであろうに。
だからこそディアからしてみれば不思議でたまらない。
「…ディアさん、はやくしないと時間がたりませんよ？」
そんなディアを心配して引率してきた教師の一人が声をかけてくるものの、
「ですけど、先生。どこに何があるのか、皆が教えてくれるので急ぐ必要はないとおもいますけど」
それは本音。
「皆？」
「ここにいるすべての植物達が教えてくれてますけど？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ディアさん。あなた、言葉がわかるの？」
植物などの声をきける存在はごくまれ。
中にはそのような存在がいるのは知っている。
エルフなどがその例にあたることも。
しかしそれを実際に目の当たりにするのは数年に一人いるかいないか、の割合。
だからこそ、戸惑い気味に問いかける。
「わかりますよ？」
「……なるほど。ですけど他の生徒には教えないでくださいね。勉強になりませんから」

声が聞こえてしまう生徒に試練、といって行動するようにいっても無駄、というもの。
逆にそのことを知り他の生徒達が探し出す努力をしなくなる。
というのがもっともな懸念事項。
一人ならばまだいい。
それは個人のもつ特性であり能力なのだから。
「は～い」
別にディアとて彼らの手助けをする気はさらさらない。
完全に困っていれば話しは別だが。
努力するということはいろいろな意味で生きる意味となる。
「さてと。みんな、あそこに生えているアレ、気づくことができるかな～」
まさに気分は身守り気分。
示された薬草の一つはとある種族の花の中に紛れて生息するもの。
しかしその擬態は完ぺきで専門職にしているものですら身間違いみおとすこともしばしば。
だからこそ面白い。
どれだけの人数がそれに気づくことができるかが。
「…ディアさんの性格もかわってますね……」
アレ、というのに思い当たり、横にいる教員がおもわず苦笑する。
「それより、ディアさんも声がきこえるのは仕方ないですけど。きちんと品物はそろえてくださいね？」
「わかってます。それでは、いってきます」
「はい。きをつけて」
声が聞こえる生徒に何を気をつけて、とは言い難いが。
何しろ声が聞こえる、ということは危険すらも声で判断できる、ということなのだから。
それがわかっているゆえに苦笑まじりにディアを送り出す。
そんな教師との会話をかわしつつ、ディアはひとり、ふらり、とラムダ平原、と呼ばれるその地に足をむけてゆく。

ぴゅ？
『あらあら。どうしたのかしら？クリス？』
「びっ」
きゃいきゃいと無邪気に母親の周囲をとてぽてと走りまわっていた。
いまだにまだ自力で空を飛ぶことはままならない。
飛ぶときには風の精霊に願い体を浮かしては練習しているが。
誕生した直後に直接【触れあえたた】ことにより一応力だけは満ち溢れている。
ゆえに世界の異変も直感的に感じ取ることが可能。
「ぴっ、ぴゅっぴ～」
ふわっ。
クリス、と名付けられた幼子の声をうけ、ふわり、とその体を風の精霊達が包み込む。
『あらあら、遠くにいってはだめよ～？』
父親たる存在は、竜の里に出向いていっている。
我が子のことを連絡するために。
ゆえに今現在は子供二人とお留守番。
産まれたばかりで遊びサカリな我が子をみつつ、ほほ笑みながらも声をかける。
そんな彼女の視界の先で、ふわり、ふわりと竜の幼子は風にのってとある方向にむかって飛んでゆく――

ぽてっ。
「ぴゆるっ？」

何か飛んできたとおもったら。
それゆえにその姿をみておもわず苦笑してしまう。
「あらあら。一人でここまできたの？二人が心配するわよ？」
「きゅ、きゅ～」
ぽてっと空から風にのるように落ちてきたのは小さな半透明の生物。
その生物はすりすりと手で受け止めたディアの手の平の中で
まるで甘えるようにごろごろと体を摺りつけかわいらしい声を出し
ていたりする。
「風の精霊とあそんでて、ここにきたの？」
「きゅるっ！」
くりっとした大きな瞳をくりくりさせて、ディアの言葉にこくり、
とうなづく。
その様子ははっきりいって抱きしめるほどにかわいらしい。
「…ディアさん、何？そのこ？」
いきなり何かおっこちてきたのはわかったが。
ディアがさきほどまでもっていなかったはずの小さな物体もどきが
とてもきになる。
ゆえにディアの近くで採取していた他のクラスの生徒が声をかけて
くるものの、
「竜の子」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
は？』
さらっというディアの言葉に思わずその場にいた全員が唖然として
口をぽかん、とあけてしまう。
いきなり竜の子、といわれても納得できるはずがない。
というか竜なんて存在はまず普通にいきていて滅多にお目にかかれ
るものではない。
そんな竜の…子？
ゆえに、さらっといわれても実感がもてないのも事実。
「いやあの、何冗談……」

一人がそういいかけたその刹那。
「ぴぎゅ～！！」
先ほどまでとは異なる、何か声に固い色を含んだ叫び声をあげる竜の幼生。
「あらら。だから風の子達はつれてきたのね」
どうしてまだ若い黄竜をこの場につれてきたのかそれを視てとり瞬時に理解する。
そんな会話をしている最中、ふと空気がゆらり、と一瞬揺らぎ、そしてそれと同時に平原の一角の景色がぐにゃり、と歪む。
「な…なんですか？あれは？！」
ありえない景色に引率していた教師の一人が気づき思わず叫ぶものの、
次の瞬間、歪んだ景色の中から黒い闇が噴き出してくる。
そしてその闇は瞬く間に異形の姿をした生き物へと姿をかえる。
その頭はライオンで体は獅子、その尾は蛇。
その色彩のすべては漆黒。
「…な！？堕ちたキマイラ！？」
その姿をみて驚愕の声をあげる教師達。
キマイラ。
この世界の中でもかなり獰猛な魔獣、とされている生物であり、通常攻撃などでは傷もつけられない。
もっとも、こちらから何か仕掛けないかぎり、相手も攻撃してくることはないが。
が、しかし、基本、キマイラという種族は肉食。
ゆえにお腹がすいていた場合、生き物は彼の餌と認識される。
キマイラの種族にも様々な形をしたものがおり、
その容姿が入り混じっている数がおおいものほど力が強い、とされている。
しかし、目の前に現れたキマイラはその普通の魔獣ではない。
どうみても【堕烙】しているのが見て取れる。

堕烙、という現象は魔獣だけにとどまらない。
様々な生物においてその現象は存在する。
いまだにその理屈は証明されていないものの、【悪意】ある【気】に取り込まれることにより、
それの手足となり、また破壊と殺戮だけを好む存在へとなりかわる。
実際は【ゾルディ】となるべく【意思力】が普通に生きている生き物へと入り込んで産まれる存在。
そのままその魂そのものが蝕まれて誕生する。
一般に【ゾルディ】として区別されるそれらとは異なり、物理的ダメージをなかなかおわすことができない。
それらを消滅、もしくは駆逐する方法はただ一つ。
より強い精神力をもって攻撃すること。
しかし普通の存在達は近づいただけでその【気】に充てられ気がふれてしまう。
下手をすればそのままそれの手足として操られる可能性もある。
普通はこんな場所にこんな存在がいきなり現れる、などありえなのだが……
「なぜ、こんなところに堕烙者が?!」
引率してきていた一人の教師が思わず叫ぶ。
実際にこんな場所に現れることは滅多とない。
それらが現れるのは基本、戦場に近しい場所に今までは限られていた。
それだけではない。
それが出現した文字通り、空間の歪みらしき場所からはどす黒い霧のようなものが噴き出している。
「まさか…瘴気!?」
魔界に存在している、といわれている瘴気。
この地上に出てくることはまずないはずなのだが……
「ぴぎゅっ!」
その気配をうけて警戒したように身を震わせる竜の幼生。

「あらら～。あっちとこっちの歪みがでるなんて、ほんっと役職は何してるのかしら……」
それらを管理しているはずの部署に対し思わずつぶやくディア。
そんなディアの言葉の意味はほとんどパニックになっている生徒達にはきこえない。
「先生、皆を安全な場所に誘導してください。それと風の結界を」
「え、ええ。みなさん、授業はいったん中止です！！」
教師達の悲鳴に近い声が響き渡る。
それとは対照的に淡々と述べているディア。
「まったく。歪みを担当してる部署は今度お仕置きが必要よね……」
それぞれの界にそれぞれ、世界がまじりあわないための部署がある。
門の管理とは別にどうしても世界に綻びが生じることがある。
それらを管理するための部署なのだが。
ばたばたとあわてつつも生徒達を呼び寄せている教師達とはうらはらにのんびりとそれをみていっているディア。
「きゅ、きゅきゅきゅ～？」
そんなディアにきょとん、とした視線をディアの手の平の中から向けてきている竜の幼生。
「やってみる？できるかな？」
「きゅ～！！！」
ディアの言葉をうけて、嬉しそうに甲高く鳴く。
その声が何ともこの場にはそぐわない。
それほどまでにかわいらしい声。
「ディアさんも早く避難を……って、え？」
ディアにも避難を呼びかけた教師が感じたのは膨大なまでの自然の気が集まる気配。
そして、次の瞬間。
「ぴみゅ～！！！」
竜の咆哮。
本来ならばそう呼ぶべきなのであろうが、小さな体から発せられた

その声ははっきりいって小鳥の鳴き声のようなもの。
しかしその咆哮と同時、ディアの手の平の上にちょこん、と座った竜の幼生から光の息が発せられる。
光の息は周囲を覆い尽くそうとしていた瘴気をことごとく光の中にかき消してゆく。
これは黄竜の属性だからこそできる技。
他にできる竜族は光の属性をもつ一族に限られる。
光により闇を打ち払う。
薄い瘴気などならば他の存在、すなわち人族なども可能であろうが、魔界から漏れ出た瘴気はかるく人の精神程度くらいは蝕んでしまう。
「…え?あの、ディアさん?その…いきもの?…何?」
おもわずそれを目の当たりにして目を点にして問いかける教師の言葉は
おそらくこの場にいるすべての存在の思いを代表しているであろう。
「竜の子供です。風の精霊とあそんでておちてきたみたいで」
嘘ではない、嘘では。
まあ、知り合いとかそういったことは一切説明していないだけ。
「さて…と。私はあちらのキマイラとすこしばかり遊ぶとしますか」
いいつつも、懐に竜をいれてかるくとんっと大地を踏みしめる。
念のために固まっている生徒や教師達に不可視の結界を施しておく。
「…どうやらこの気配。あいつらの手のもののようね～」
というか本当に何をしているのやら。
それゆえに思わずあきれた口調でディアがつぶやく。
以前からその活動がわかっているというのに今まで捕えるられていない。
自分が動けばさくっと解決するのはわかっているがそれだと意味がない。
それゆえに任せていたのだが……
ちなみに問題となる組織は実は、天界、魔界ともに存在していたりする。

それぞれがそれぞれ、それが世の中のためになる、と思い込んでいるがゆえにタチがわるい。
まあ長らくつづく平和の中でそんな勘違いをする生命がでてくるのは想定内。
しかしそれらを取り締まれない組織、というのもなさけなくもある。
「さて。すこしばかり遊んでもらいましょうかね♪」
くすっ。
とりあえず自分の姿は第三者の目からしてみれば普通にたたずんでいるようにしか見えないように仕向けてある。
ふわっ。
そういいつつも手をすっと頭の上にとかざすディア。
その手に突如として透き通った剣のようなものが出現する。
その剣はディアの身長ほどの長さを有し、片刃のそれは太陽の光を反射し七色に光る。
虹幻刀。
誰ともなくそう呼ばれているそれは、魔界、天界においても共通している武器の一つ。
武器など使わなくとも関係ないがやはりこう形に示したほうがわかりやすい。
という理由で創っている武器の一つだったりするのだが、その事実はディアしか知らない。
この刀、この世界、すなわちこの地球上に存在しているすべての属性を秘めている。
すなわち、この刀一つでどんな存在も無に還すことも、生み出すこともできるすぐれもの。
「さ、少しばかり遊ばせてくれるかしらね？」
くすっ。
目の前にはその脅威を本能的に感じ取り、ぴたり、と動きを止めた【キマイラ】の姿。

黒き塊がキマイラの口から発せられ、それが着弾した場所は瞬く間に死に絶えた大地となる。
その塊をかるく飛び上がりかわしつつ、くるっと空中にて一回転。
そのままキマイラの背後に位置し、
「Ｕｎｅ　ｏｕｖｅｒｔｕｒｅ（始まり）」
かるく言葉を紡ぎだす。
ディアの言葉をうけてキマイラの影響で死に絶えかけていた自然が瞬く間にと蘇る。
それと同時、ディアとキマイラの周囲をやわらかな光が包み込む。
そこは何も存在していない空間、といっても過言でない。
この場にはディアとキマイラ、その二つの姿しかどこをみてもみあたらない。
ふわふわとゆらめく光の空間。
まさにそう表現するしかない不思議な空間。
この空間は外界に影響をおよぼさないように精神世界面において張り巡らせたもの。
ここに干渉できる存在はそれぞれの上位たる存在のみ。
「ま、気配は完全に周囲のそれにしてるから、気づかれることはないし」
とりあえず、これから相手の動向をしることもできるはず。
組み込まれた【気】からこれを創りだし操る輩の意図を読み取ることは可能。
動きを活発化させているのはディアのもくろみ通り、ともいえるのだが。
「とりあえず、面倒なことになるまえにさくさくっと解決しておきたいしね」
それはディアの本音。
できうるならば代替わりの前に懸念事項は省いておきたい。
相手が【誰】かわからずに、相対することになったキマイラは…あるいみ、哀れ、としか言いようがない。

しばし、ディアとキマイラによるちょっとした剣舞と攻防がその場において見受けられてゆく……

ディアとキマイラがとある特殊空間に入り込んで戦っている同時刻。
「…いったい、何がどうなっているのかしら？」
「みたところ、ディアさんが周囲の自然にお願いしてる…というところ、かしら？」
何が何だかわからない。
わからないが、まがまがしい気配をはなっていたキマイラは今はそのなりを潜めている。
自然の気が濃くなっている空間に閉じ込められている、というのは何となくわかる。
おそらくその前で佇んでいるディアという生徒が自然に語りかけて何かしてもらっているのであろう。
そうでなければこの現象は納得できるものではない。
そもそも、あんな堕ちたキマイラを抑えられる存在は、自然界の精霊達をおいて他にはいない。
「というか。先生。あの生徒は自然の声が聞こえるんですか？」
「どうもそうみたいね」
「もしかして【言霊使い】、ですかね？」
「ああ、その可能性もあるかもしれませんね」
何しろ先日、滅多と手にはいらないヒギエアの根をかなりの量とってきた。
そうギルドから報告があがってきている。
ヒギエアの根はその採取の方法がかなり難しいことからそう簡単には採取できない品。
しかも一緒に行動していた別の生徒の報告によれば、ヒギエア達から根を差し出してきたらしい……

さすがに量が多いのでギルド職員が不思議に思い問いかけたらしいのだが。
当人はただ首をかしげるだけで、一緒行動していた生徒がかわりに説明した、とのこと。
その報告は一応、教師達に届けられている。
基本、協会学校に通う生徒達が依頼をうけた場合、何らかのことがあった場合を考えて報告をあげることを義務としている。
同じギルド協会、という組織の中であるがゆえにできる事柄。
もしこれが別の組織の中であれば、個人情報にかかわることなので、と断られるであろう。
しかし、もしも目の前で佇んでいる生徒が【言霊使い】ならばそれらのことも説明がつく。
そして今の現象も。
【言霊使い】の能力をもつ存在は自然界のすべてにおける生命と心を通わせ、
ときとしてその言葉をもってその行動を縛ることすら可能とされている。
能力の高いものはそれぞれの精霊王ですら意思を通わせ力を借りうけることができる、といわれている。
目の前の少女がどこまでの力をもっているかはわからない。
わからないがすくなくとも一般的にいわれている言霊使いの能力はもっている、ということであろう。
何しろ竜の子供すらなついているようにみえた。
いきなり竜の子供です、といわれた時には目が点になりはてたが。
もしも彼女が能力をもっているならば、
その気配を感じて自然界にもっとも近い気をもつ竜がよってきても不思議ではない。

彼らは気付かない。
その考えからして根本的に間違っている、ということに。

しかし、ある可能性がまったく考えられない以上、
ディアが【言霊使い】であることは、その場にいる全員の暗黙の了解として認識されることとなる……

光と闇の楔　～課外授業と襲撃未遂？～（後書き）

さくっと戦闘シーンは削除。いや、ディアはあるいみ楽しんでますし。
まあ、どちらにしてもいくら堕ちた存在にさせられてしまったとはいえディアにとっては子供の一人、ですし。
ゆっくりと戦いつつもむしばまれた魂の浄化をもおこなってます
その事実は当然、誰にも気づかれてはいませんが
襲撃？といってもあまり襲撃になってないな……

光と闇の楔　～【門外】よりきたる者達？～（前書き）

そろそろ複線というか設定さんがちらほらと出てきました。
初期の敵さん？の概要がちらっと見えかけてますｖ

「…やつが消滅した？」
かなり力あるやつを送り込んだはずだとおもったが。
その意見に思わず耳を疑ってしまう。
「人間はそこまで力をつけているのか？」
「いや、気配からして精霊達がかかわったらしい」
「…ちっ。忌々しい精霊どもが」
彼らが動かなければ自分達のもくろみは達成される、というのに。
そもそも、それぞれの界にわかれて各自が管理しているなどとぬるすぎる。
一つの種族がすべての世界を治めてこそ正しき姿になろう、というもの。
「まあいい。いずれは我がショゴスがすべての界を支配するには変わりない」
「御意」
闇の中、低く重苦しい声がしばし姿もないまま紡がれてゆく……

「まったく……」
目の前に横たわる物言わぬ塊。

すっと手をふるとその塊は瞬く間にと炎に包まれ、
後には何事もなかったかのような床がその場にあらわれる。
「毎回、毎回、あなた達は何をやっているのですかね？いくら温厚な王とて考えますよ？」
それは本音。
さらり、と金の髪が風もないのにたなびく。
金色の髪に金色の瞳。
その容姿は見ただけですくんでしまうほどに整っているがどこか威圧感がただよっている。
「しかし…ルシファー様……」
「しかし、も何もありません。今度きちんと職務をこなさなかったら降格、ですからね」
「・・・・はい・・・・」
降格。
それは彼らにとってもっとくも屈辱的なこと。
しかし手をわずらわせてしまった以上、それも仕方がないのかもしれない。
そもそも、補佐官である彼女を出してしまったことこそが彼らにとっては敗北にあたる。
「では、私はこれで。まだ仕事がのこっていますので」
それだけいってその場からかき消える。
「…さすが、我らが王の信頼を一身ににない、補佐をされているだけのことはある……」
非情なまでに容赦せずに、有無をいわさず無に還す。
「我らも見習わなくては……」
その場にいたすべてのものがそのつぶやきに思わず同意する。
彼らの王の治世をよりよく導いてゆくためにはどうしても力、は必要なのだから。

「は～……表裏一体、とはいえ、こっちもこっちで……」

おもわずうんざりした言葉を漏らしてしまうのは仕方がないであろう。
絶対に。
「ティア様？」
「何でもない。それより、きちんと職務はこなしてもらわないと困ります。
　というかここまで反旗メンバーに入り込まれる体勢に問題ありまくりでしょう？」
目の前にはすでにびくり、ともうごかない人影がいくつか存在しているが。
それらはすべて光の拘束によってしばられている。
「ほんと、あまりにひどいと全員、降格して入れ替えもありえますからね」
それは本音。
その言葉にその場にいる全員がぴくり、と反応する。
「は～…、ま、私はまだ仕事がありますから。それでは後の始末はあなた達にまかせますからね。
　い・い・で・す・ね？ゼウス」
「はっ。お手数をおかけいたしました」
「ほんとにね～」
あちらにしろ、こちらにしろ。
表裏一体、とはよくいったもの。
ほぼ同じようにコトを起こすなど、申しあわせたわけでもないというのに。
「それで、補佐官ティア様。王には、何と……」
「まあ、それはあなた達の今後の働きによるわね」
そもそもわざわざ説明する必要などはないのだが、それはあえていわないでおく。
そのまま固まる彼らをそのままにその場をあとにしてゆく黒い髪に黒い瞳の少女が一人……

「う〜ん、なんだかね〜」
ふと先日の出来事を思い出した。
それゆえにおもわずそんなことをつぶやくディア。
呼び名は様々。
今名乗っている名前も一つにすぎない。
それらのこともあり出てきたのもある。
昨日のキマイラ出現。
それはこの王都を今現在、騒がしていたりする。
原因が判明するまでは一人で行動しないように、と国からお達しがでている始末。
「ショゴスとホテップ、同時に行動開始してるみたいだし……」
まあそれはそれで手間が省ける、というべきか。
それをうけてどちらの世界もあわただしく動きだしているらしい。
ここは彼らに動いてもらい
せっかくだから各界にも危機感をもってもらい連帯感を強めてもらうのも一つの手。
どちらにしても、彼らがここ、テミス王国を視野にいれているのは疑いようがない。
理由は単純。
この国は光の主神を仰いでいる。
光への希望が強ければ強いほど、絶望したときの闇はより濃くなる。
光と闇は表裏一体。
ゆえに少しでも力をつけるためにとより強い光を闇に変化させようと彼らは頑張っている。
もう片方にいたっては、闇を光にかえようと頑張っているのだが。
どっちもどっち、とはディアの意見。
まあ、その内情をしればおそらくはほとんどの存在達が同じような思いを抱くであろう。
「って、きいてるの!?ディアさん!?」

「え？あ、ごめん。何だっけ？」
「…もう……」
昨日のキマイラの一件について話し合っていた。
何しろ堕ちた存在を目の当たりにするなど一生に一度あるかないか、という経験。
まず出会えばまちがいなく死に至る。
そんな状況だったというのに生還したのは、目の前にいるディアの力ゆえだ、と彼らは理解している。
だからこそ登校してきたディアを教室にて待ち構え質問攻めにしている生徒達。
「もう。それで、いったい何がどうなったわけ？
　ディアさんが何かした、というのは何となくわかるんだけど」
何やら外をみつつ意味のわからないことをつぶやいていたが、その意味は彼らには判らない。
「別にどうってことないわよ。ただ、あるべき姿に還るようにしただけよ」
そう。
あの個体はあるべき姿に戻して還した。
魂はあのまま輪廻の輪にもどり、新たな生へと赴く。
気になるのはそれから読み取った知識のこと。
何を考えているのか『彼』を利用して子供たちを動かそうとしている節があるらしい。
そんなことをすれば自分達の首をしめるだけ、というのにも気づいていない、というのが情けなくもある。
「あるべき姿って……」
「本来、命は目的をもって産まれてるから。そのあるがままの姿にもどしただけよ。
　…この世界に命をうける、というのは必ず意味があるのよ？」
そのように【設定】した。
魂達がよりたかくその高みにゆけるように。

から～ん…から～ん……
「あ、鐘がなったわよ。はいはい。皆席につかないと」
根柢の理から説明してもいいが、おそらくそれをいっても理解不能であろう。
それに何よりどうしてそこまで詳しいのか、と疑われても面倒なことになる。
ゆえに鐘がなったのをうけていまだに何か聞きたそうなクラスメート達に対してかるく手をたたき、
それぞれ席につくようにうながしておく。
と。
がらっ。
「みなさん、今日は自習といたします。
…あ、ディアさん、すいませんがディアさんはちょっときてください」
「はい」
クラス担任のヘスティアが入ってきて、クラスを見渡しつつも席につくようにうながし、
本日の授業が自習になったことを告げてそのまま教室を後にしようとし、
扉をくぐる直前にディアにと声をかけてくる。
ディアとしても別に断る理由はない。
というか一緒にいったほうがクラスメート達の追求から逃れられる。
ゆえに素直にそのまま、ヘスティアについてゆくことに。

「……あ、あの、先生？」
おもわず素直についてきたはいいものの、いったいこれはどういうことなんだろう。
何だかおもいっきりどこかでみたことがあるような気がする。
もうひしひしと。
連れてこられた場所はなぜか王城の一角で、

さらにそこにずらっと長ったらしい机がいくつも並べられており。
そしてその正面にどうみてもこの国の確か皇子らしき姿が見て取れるのは気のせいか。
よくよくみれば今現在の各ギルド協会の長達もこの場に出向いてきているらしい。
ディアが彼らを知っている、というのはあまりに不自然なのでそれを顔には微塵にもださないが、
それでもどうしてこのような場に自分がつれてこられるのやら。
ものすごく気になることにこの王都の神官長までいたりするのがかなり気になる。
…たしか、ホルスとの邂逅どきにたまたま顔合わせした記憶がおもいっきりある。
…願わくばまだあのときは彼は見習いだったので忘れてくれていることを願うばかり。
まあ、あのときと髪と瞳の色が異なるのでそうそう判りはしないではあろうが。
「すいません。おそくなりました。昨日の一件に一番詳しい生徒をお連れしました」
「いや、先生、私も詳しくないですけど……」
というかそういうことにしてはいる。
ゆえにヘスティアの台詞に思わず突っ込みをいれるディア。
「ごくろう。ヘスティア＝アルクメーネ氏。みなさん、とりあえずそちらの子が先ほど説明した生徒です」
ギルド長がその場にいる全員をみわたしそんなことをいってくる。
ちなみにギルド長はぱっとみため、どこにでもいるような年配の男性。
ギルドの長は数年に一度ある各長達の議会において多数決にて決められる。
「ティアさん。とりあえずあなたはそこに座ってください」
「は…はぁ……」

なんかこういう会議はおもいっきりひさしぶりだな……
顔ぶれからしてもそんなことをふとおもってしまうディアはかなり余裕がある。
普通ならばいきなり王城につれてこられ、さらには重鎮らしき人々が集まっている最中、
どうみても重要会議っぽい場にひっぱりだされれば混乱し取り乱しても不思議ではない。
しかしディアには担任の言葉に突っ込みをいれる余裕すらあったりする。
普通ならばありえない。
そのような教育をうけている存在ならば話しは別だが。
ディアが席につき、その横にヘスティアが並んで座る。
「さて、これで一応全員そろったわけだ。…では、今わかっている報告を」
「はっ！王都警備主任今現在の報告をこれに」
「は！」
皇子の横にいる人物はおそらくこの国の国王であろう。
その人物が全員をみわたし会話を促す。
そしてその人物を補佐するように会話を促す様子からみても、今声をはっしたのはおそらくこの国の宰相。
…まさか、ティミまで呼ばないでしょうね……
思わずこの面子をみてディアは内心顔をしかめる。
王都を守護している守護精霊のティミがこの場に出向いてきた場合。
ついうっかりと彼女が口を滑らす割合は…かなり高い。
まあそうなったらその部分の記憶を少しばかりいじるつもりではあるが。
「先日、ギルド協会よりの報告をうけまして【界の歪み】が発生したことが判明しました。
　その場所は今では精霊達のおかげで閉じられてはいますが、王都の近くに発生した。

この事実が何よりも重要でありまして、目下、天界などにも確認中です」

地界における歪みは他の界においても管理している。

「魔界のほうからの連絡は？」

「つい先ほど、報告がはいりました。

何でも世界の在り方に反旗を唱えている組織が無理やり行った可能性が高い、とのことです。

かの組織のことは彼らも把握してはいますが完全な証拠がつかめずに手をこまねいているそうです」

彼らはその信念のもとに行動している。

その思いにはまったくもって邪念はない。

それこそが正しい、と思い込んでいるのだからタチがわるい。

それを知ってはいるがこの場で口をはさめば間違いなく目立つ。

というか一生徒にしか過ぎないディアがしっているのはかなりおかしい。

ゆえにただ傍観者に徹するディア。

「魔界警備隊よりの連絡ですと、彼らはどうも地界への進出を図っている節がある、とのことです。

すでにいくつかの国に彼らの間者が送り込まれている可能性も否めない、そうです」

事実、うまく上層部にはいりこみ、戦争を引き起こそうとしている勢力もある。

「ふむ。さいきんの世界の不安定な世情はそれも関係しているのか？」

「あ。失礼。今神託が下りました。天界からの報告です。

天界のほうも今回の一件は重要視しているようです。というか、どうも天界のほうからも【世界の歪み】を無理やりにつくった勢力がある…とのことなんですが……」

ざわっ。

光の教壇の神官長の言葉にその場にいるほとんどのものがおもわず

ざわつく。
さもありなん。
天界より無理やりに地上に出向いた輩がいる可能性があるかもしれない、というのだから。
彼らは人とはことなる概念をもっている。
自分達が絶対、と思い込んでいる輩も多々といて、ゆえに時として地上を混乱に貶める。
がくっ。
その言葉に思わず脱力してしまうディアは何も間違ってはいないであろう。
……また同じようなことしてるんだ……
毎回、毎回、進歩がない、というか何というべきか……
「…つまり、下手をすればこの地上が天界と魔界の戦乱の場になる可能性がある…と……」
『ううむむ……』
その言葉の意味を悟り、つぶやく国王の言葉にその場にいるディア以外の全員がおもわず腕をくみ考え込む。
まず普通に考えてそんな戦いに巻き込まれれば普通の人はまず生きてはいられない。
絶対に。
「…精霊界に協力を仰ぐことは？」
「それがいま、精霊界はなぜかあわただしくなっているらしいです。理由はわかりませんが」
それぞれの界と交渉をしている外界外交長官がその意見に口をだしてくる。
「まずは、【門】にその管理を徹底してもらう、というのが一番先、かと」
一度開いた道はどうやらすでに互いに閉じられている模様。
これ以上の道を創られないために、世界を隔てる【門】へ話しを通しておくことは必要であろう。

門に意思があるかどうかはいまだに意見がわかれてはいるが、
それなりの意思はある、というのが一般的な意見。
「…では、伝道師達にその旨を連絡して……」
「ですな」
伝道師達ならば【門】の場所にも簡単にたどり着ける。
「まあ、外界からの侵入者がありえるかもしれない、というのはまた議論するとして。
　昨日の堕者の存在のことに議題をうつろう。
　何でも課外授業どきに堕ちたキマイラが出現した、ということらしいが？」
外界とのごたごたはあまり人に聞かせるものではない。
それにまだ不確定な情報でもある。
完全に判明するまで人々を混乱させないために情報は漏らさないほうがいい。
ゆえにとりあえずその話題をひとまずおいておき、昨日の話題にと議題を切り替える。
「はい。私たちにはどうにもならなかったのですが。
　こちらにいる生徒が精霊達に頼みどうにかことなきを得たようです」
ヘスティアの言葉をうけて、その場にいる全員の視線がディアにと向かう。
「ディアさん、申し訳ないけど説明してもらえる？…緊張してるかもしれないけど」
ディアが先ほどから黙りこくっているのをうけ緊張している、と勘違いし
戸惑い気味にディアに話しかけてくるヘスティア。
「説明っていっても…あまり説明するようなこともないんですけど。
とりあえず。
　えっと、はじめまして。
　今、ヘスティア＝アルクメーネ教師より説明がありました、デ

ィアと申します。
　所属は総合科C組Aクラスです。先日、たまたま課外授業に出向いていたところ、
　界の歪みと堕ちたキマイラに遭遇しましたが、そのあたりの精霊達に頼み、
　あと異変を感じ取ってやってきていた竜の子供の協力もありその歪みの訂正はなされたようです」
とりあえず目立つことは極力避けたいがとりあえず席をたち、かるく服のスソをつかみかるく挨拶。
そのあと、簡単にその場にいる全員にむかい説明する。
「竜の…こ？」
「はい。たまたま風の精霊と遊んでいて異変を感じ取ってきたらしいです。
　まあ竜族は自然界の分身、といっても過言のない存在ですから」
戸惑いの声をはっする国の重鎮らしき人物の言葉をうけてにこやかに答えるディア。
普通の生徒ならばかたまって返答に困るであろうに、目の前の少女にはそれがない。
「……はて？」
何かどこかでみたような？
そんなことをふと神官長がおもうがそれがどこだったのか思い出せない。
まあ、彼が以前あったときとは髪と瞳の色が異なるのですぐに気づく、ということはないであろうが。
「なるほど。貴殿は自然とその…心を通わせられるのですかな？」
「私の周囲はみんなそうですけど……。なぜか学校に通うようになってそういう人達はあまりいない、
　というのに少し驚いているんですけどね」
嘘ではない、嘘では。
最後の言葉は多少心底心外だ、というようにとりあえず付け加える。

そんなディアの言葉に。
「ふむ。貴殿はエルフ族とかかわりが？」
「まあ、かかわりがある、といえばありますけど。でもエルフ族ではありませんよ？」
「そうか……」
ギルドより出されている少女のギルド登録申請書には詳しいことが書かれていない。
しかし受付した人物によると親はいないみたいなことをいっていたらしい。
ならば親を亡くした子供がエルフ達に育てられていても不思議ではない。
そう判断し、
「では、貴方も詳しいことはわからない、と？」
「まあ、界の歪みなんてものは滅多とおこりませんし。私のようなものがわかるとおもわれます？」
そもそもいまだに成人していない子供に意見をきこう、という他力本願がどうかしている、とおもう。
たしかにディアの言葉には説得力がある。
よもやいまだに十三になったばかりくらいであろう少女が歪みを治せる、とも誰もおもわない。
「あいわかった。とりあえず参考までに当事者に来てもらったわけだが。
しかし、精霊達の声をきけるとは、そなた、国に使える気は……」
「ありません」
さくっと国王の勧誘をさらっと却下。
「…理由をきいても？」
「国に使える意味がありませんし。私は私の好きな用にすごすつもりです」
というか自分が一国に仕えた・・・としったら精霊王達が起こす反

応がかなり怖い。
やれ、我らが主を国に縛り付けて…などと、ある存在などはまちがいなくいいだし騒ぐ。
それはもう確信がもてる。
「そんな勧誘をするより、
　みなさんが自然の声に耳をかたむけるようにしたほうがはるかに早いとおもいますけど」
この場でディアのもつ気配に気づいているのがいったいぜんたい何人いるであろうか。
いくら多少離れているとはいえその気配が完全に自然界のそれである、と
よくよく観察すればわかるであろうに。
しかしこの場でそのことに気付いたものは一人たりとていない。
「そう簡単に自然の声がきこえれば苦労はせんよ……」
ぽそり、と重鎮の一人が世間知らずの子供が何をいう。
というような意味合いをこめてつぶやいていたりするが。
その言葉をききとがめ、
「では、とりあえず大森林に一人で何ももたずに数年間そこで自給自足をしてみたらいかがですか？
　嫌でもわかりますよ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・それは、死ね、といってるのと同意語では・・・・」
にこやかにいうディアの言葉に別の人物がおもわずつっこむ。
「あら？あそこはたしか、自然に優しい人達はよろこんで迎え入れてくれますよ？
　もっとも少しでも邪な考えとかもってたら問答無用で排除しようとしますけど」
にこにこにこ。
「…ぐっ……」
たしかにそう噂されている。

しかしあの大森林に出向いて無事にもどってきた存在など…彼らは一部のものしかしらない。
そのときですら精霊達の案内をえて、の状態だったはず。
ゆえににこやかにそういう少女の言葉にただうなるしかない。
大森林。
それは竜の里を取り囲む森林であり、
迷いこんだらまちがいなく死を意味している、ともいわれている巨大な森。
近くに大きな気が集まっていることもあり、それに反動した気が集まっているのも事実。
ゆえにかなりの魔獣が滞在している森でもある。
「…まあ、まだそなたは若い。気がむいたら是非とも国のことも考えておいてくれたまえ」
他の国にその才能をもっていかれるのはかなりきつい。
そもそも自然の声をきける存在は、魔術師十数個隊より大きな働きをもたらす。
何しろ自然に直接語りかけ、時には精霊達ですら仲間にできる存在。
その中でも【言霊使い】、と呼ばれている存在はかなり貴重な存在、といわれている。
「説明をありがとう。もうよろしいぞ」
「では、失礼します。あ、もう戻ってもいいですか？なんだか疲れましたし」
「仕方ない。ヘスティア＝アルクメーネ。彼女を寮までおくっていってさしあげなさい」
「は。わかりました。ギルド長」
確かにこんな場にいまだに歳若い少女がいることだけで精神的に疲れるであろう。
ディアの言葉をうけてそう判断し、国王がちらり、とギルド長にと目配せをする。
その目配せをうけ、上司命令、としてディアの担任であるヘステア

にと申しつけるギルド長。
「では、ディアさん、いきましょうか」
「はい。先生。それでは、みなさま、ごきげんよう」
とりあえず席をたち、その場にいる全員に再びかるく頭をさげてかるく判れの挨拶をかわし、
そのまますたすたとヘステアにつづいて会議会場を後にする。
ディアとともに城の回廊をあるきつつ、
「しかし。ディアさん、慣れてましたね。ああいう場の雰囲気に」
「あ～、まあ、ああいうのはよくありましたから……」
「よく？それは…？」
「まあ、いろいろ、です」
やれ会議だの何だの、執務だの、伊達に日々過ごしていたわけではない。
というかたかが人がもつ覇気などディアにとっては赤子同然。
ゆえにのまれる要素はまったくない。
会議が常に盛りあがるつれて中には力を使おうとする存在達も多々といた。
ゆえにもうそれは慣れっこといって過言でない。
…まあそういった存在にはしっかりとお灸をきちんと据えておいたが。
「しかし、何がおこってるのでしょうかね……」
「ま、何かが起こっているのは事実ですね。私は静かに過ごせればそれにこしたことはないですけど。
　ですけど、降りかかる火の粉ははらいますよ？先生？」
「……その火の粉、というのがかなり気になるのは私の気のせいかしら？」
にっこりと無邪気なまでの笑みを浮かべていいきるディアの言葉に、なぜか脳裏に嫌な予感がよぎり思わず問い返しているヘスティア。
目の前の少女がどこまでの力をもっているのかわからない。
しかしおそらく言霊使いの能力をもっているのは疑いようがない。

そんな少女が降りかかる火の粉は払う…という表現をする、ということは。
下手をすれば精霊達をも巻き込んで行動しかねない。
もっとも、精霊達がそれに力を貸すかどうか、という注釈がつくが。
しかし何となくだが精霊達は彼女には喜んで力を貸しそうな気がひしひしとする。
それは直感。
それはおそらくディアがもちえる気配から漠然とそのことを無意識的に認めているからに他ならないのだが。
しかし、ヘスティアは知るよしもない。
その気になれば…というか彼女が動けば精霊王達がこぞって自分達も動く！といってそれぞれに行動をおこしかねない、ということを……

光と闇の楔　～【門外】よりきたる者達？～（後書き）

そろそろ天界、魔界の組織さんの概要がちらほらと。
まえぶりでてきたのは、魔界の組織さん達。
ディアがぽそっとつぶやいていたのが組織の愛称（まて
次回で組織メンバーの一人との接触になって、それから精霊王、かな？
何はともあれ、ではまた次回にて♪

光と闇の楔　～間者と観光と……～（前書き）

ちらっと世界が崩壊?する前の文明のお話がでてきたり。
暇つぶしには便利だとおもうのですよ。
ＤＶＤボックスシリーズ・・・

※日を追うごとに東日本の地震の被害状況が判ってきて何ともいえない気持ちです・・・
亡くなられた方々にお悔やみと、また見つかっていない方々が一刻もはやくできれば無事に見つかりますように・・・
被災地の方々は大変でしょうがまけないでほしいです・・・・

光と闇の楔　～間者と観光と……～

「……と、いうわけで、お前がいけ」
「……はぁ……」
まあ別にいいけど。
というか、この人達、毎回おもうけど何かんがえてるんだろう？
まあ自分は自分の好きなように生きているわけで別にそれはどうでもいいけど。
することもないのでとりあえずやってるだけだし。
「おい！きいてるのか！リュカっ！」
「あ～。はいはい。んならちょっと地界にいってきま～す」
「まったく…忌々しい精霊の結界がなければ我らでもいけるというものを……」
まあ、そりゃあ敵意丸出しでいったら間違いなく断られるでしょ。
そもそも、門にあっさりと戻されるのがおち。
なんでこう熱血漢で生き急ぐのかなぁ～。
まあ何かに熱中できる、というのはあるいみいいのかもしれないけど。
のんびりまったりと生きていくほうが楽とおもうが。
「とりあえず、いってきま～す」
そういえば久しぶりの【門】だな。
うん。
ソトに何かお土産もってってやるかっ。

…〜

真っ暗な空間。
暗い、というよりはそこには何もない、しかし意識をむければそこには何もかもがある。
「やっほ〜。ひさしぶり〜。ソト〜」
目の前に突如として現れた鈍く光る銀色の門らしきものに向かい声をかける一人の青年。
特徴的なのは人族とは異なり少しばかり尖った耳、そして背中には四枚の羽がなぜかついている。
『なんだ。ひさしぶりだな。リュカ。また外界観光か？』
自らを愛称で呼ぶ存在などほとんど限られている。
ゆえに名前を呼ばれて意識を浮上させ、そこに見慣れた姿があるのに思わず苦笑してしまう。
「うん〜。なんかさ〜。リーダーにいけっていわれたし〜」
『…おまえ、あいかわらず流されてるな……』
さらっと何でもないようにいうその台詞にただただ呆れるしかない。
しかしその呆れは本気で呆れているわけでなくどこか面白みを含んでいる。
「え〜？だってさ。せっかく生きてるんだから。流されるままにすごしたほうが楽だもん〜」
『・・・それでよく間者がつとまるな……まあ、主もわかってていってるんだろうが……』
そこには銀色に輝く、見上げればどこまでも続くような巨大な門しかない、というのに。
どこからともなくそんな声がリュカ、と呼ばれた青年にと向けられる。

「え～？だってたのしいよ？主様って。あの考え方、俺、好きだし～」

突発的な考え方が彼はとても気に入っている。

ゆえに本来ならばどこにも属することがないだろうな～、とおもっていて

もかの願いだけはきちんと聞いている。

『…まあ、いい。それより地界にいくのなら主もおられるだろうからよろしくいっといてくれ』

「え～？あ～。なんかそういえば魔界からいなくなった～とはきいてたけど。地界にいってるんだ～。

　ってことは天界のほうも同時にいなくなったのかな～？ほんと、毎回面白い行動するよね～。主様って」

だからこそ面白い。

かの元にいるからこそ永い生を退屈せずにすごせている。

かつて知り合った時に即効お願いし倒したことは、

今の彼にとっては遠い日の記憶でありつつい先日のようにも思いだされる。

『…面白い、ですむおぬしはほんと、大物だよ…では、門を開くぞ？』

「は～い。あ、これ。ソト、お土産～」

『ほぉう。…ん？…なあ、リュカ？なんでこれ、なんだ？』

そこにはちょっとした箱のような物体が差し出されていたりする。

彼が誕生する以前に地上に存在していた人類達が生み出したとある物質。

「おもしろかったよ～。前、暇だ～、暇だ～、といったら主様がくれたの～」

何でも自分の中で【うまれた】ものはすべて記憶しているので新たに創りだすのも可能らしい。

そもそも、それをきいて昔の人がみていたものがみてみたい、といったのはほかならぬ彼自身。

『…古の人類の遺産、それはわかる。わかるが…なんで【魔法少女もの】…なのだ？』
それはわかる。
わかるが、なぜにいろいろあるなかでこの選択なのだろう。
思わずうなってしまう彼の気持ちはおそらく間違ってはいない。
それに何より、永い時間暇でしょうから、これおいとくわね。
といって主よりこれらの再生機ともいえる品物も置かれているので理解はしている。
いるが…いったい主は自分に何を求めているのかがよくわからない。
そのときに置かれた品というのが…なぜか恋愛ものだったりした。
おもわずそのことを思い出しどこか声に哀愁をただよわせつつも目の前にいるリュカにと問いかける。
「なんとなく？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おぬしは我に何をもとめてるのだ・・・・』
「え～？だってさー。門をひらくときにこう、何か呪文をとなえてパッパラバ～、とかたのしそう？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・も。いい。とにかく、開くぞ？』
これ以上はなしていたら何かどっと疲れる。
この疲れもまた心地よいのではあるが。
「は～い。あ、それ続きみたかったらいってね～。他にもお笑い大全集ＤＶＤボックスとかあるよ～」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・ほんと、おぬしの頭の中を一度解剖してみたいわ……』
たわいのないやり取りをかわしつつも、
音もなく目の前の門が左右に開かれる。
それと同時にまばゆき光が辺りに満ち溢れ……
「じゃ、いってきま～す。お土産はイナゴのつくだにでいいかな～？」

『・・・おぬし、我がものをたべても意味がないのをいっていってないか？ん？』
「あはは～」
いつものやり取りといえばやりとり。
そんな会話をしつつも、青年は開かれた門の中、すなわちまばゆきまでの光の中へと足を向けてゆく……

「お～、すごいすごい」
久しぶりに踏みしめる大地。
おもわず感心してその場にたたずむ青年はおもいっきり周囲から浮いている。
さすがに王都テミスの首都だのことはある。
ゆえに感心してその場に立ちつくして周囲をきょろきょろしばし眺めることしばし。
「うん？そこのもの、何か用か？さっきからずっと立ち止まっているが？」
さすがにずっとその場に立ちすくんでいるがゆえに、町の入口を守る門番に不振がられて問いかけられる。
「あ～。すいませ～ん。いや～、さすがにすごいな～、とおもいまして」
黒い髪に紅き瞳。
ついでに少しばかりとがった耳。
背中の羽は折りたたまれており、服装についている飾り、とも見えなくもない。
「うん？その姿、めずらしいな。魔界のものか。観光か？」
その姿から普通の人族ではないことをさっし、とりあえず問いかける。
何しろ先日のこともある。
警戒するのにこしたことはない。

基本、兵士になったときにそのあたりの知識は彼らとて叩き込まれている。
ゆえに人目でだいたいどの界に属するものかくらいはわかるようでなければ門番はつとまらない。
「はい～。光の神殿にでも参拝しようかな～って」
そんな門番の警戒心とはうらはらに、のんぴりとした声が目の前の青年から発せられる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・魔族が珍しいな」
何だか目の前の青年と話していたら脱力してしまう。
そもそも、闇に属するものが光の神殿に参拝、など…まあ、中には変わりものがいるのはしっているが。
まあ、闇に属している、とはいえ
そこに住まうものたちが全員悪意をもっているわけではないことを彼らは知っている。
「とりあえず、決まりは決まりだ。所属と名前をたのむ」
「はい～。ひとまず所属はテケリ・ショゴク。名前はリュカ。あ、これギルド証です」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・たしかに。
というか、魔族でギルド員？」
「え～？魔界にもありますよ～？ギルド協会～」
実際、どの界にも実はギルド協会は存在している。
「いや、それはしっている。いるが…おまえ、…これをみるかぎり、天界とかのギルドにも所属してないか？」
兵士が呆れているのは別の箇所。
ギルド証には所属しているギルドの界も記されるのであるが…
裏書きをみれば、そこには【天界冒険ギルド】【魔界冒険ギルド】【精霊冒険ギルド】等……
「おもしろそ～だからいろいろな世界をまわってるんです～」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ほんと、

かわってるな・・・・。
　まあ、面倒事だけはおこすなよ？」
「は～い」
まあこの世界にも探究心が強い輩は多々といる。
しかし…各界にわたり、冒険ギルドに登録している存在は・・・おそらく数えるほどしかいないであろう。
そもそも、他の界においては
根本的にそこにある【気】が異なるので対処方法をしらなければすぐさまに命を落とす。
もしも、魔界の事情に彼が詳しければ、彼が所属している、という名前に心当たりがあったであろう。
しかしそれは彼が所属しているギルド名なのであろう、そう勝手に解釈していたりする。
ゆえにさらっと所属する組織の名前を出したにもかかわらず、何ごともなく町へ入る許可が下りる。
「さ～てと。とりあえず資金が必要だからな～。もってきた魔石でもうって、おいしいものたべよ～」
何だかとてもその場ににつかわない、というか何というべきか。
容姿的にはかなり目だつのだが、その行動がどこをどうみてもまるで田舎者。
しかし容姿から魔族であることは疑いようがない。
が、魔族の容姿を完全にしっている存在はごくわずか。
まあ変わった種族、と大概の存在達は捕えておりさほど問題視されていない。
ゆえに少しばかりの好奇心と、
何だかかわった人がいる、という不可思議な視線が彼にとしばし向けられてゆく。
魔族、とひとくくりにしてもその種族の種類は多々とある。
彼…青年、リュカが所属しているのは鵬翼種、という種族。
年齢によってその翼の数が増えてゆく、という種族なのだが、滅多

とお目にかかれない。
なぜならば彼らの翼は実は様々な病状に劇的な効果を発し、ゆえにかつては乱獲されたこともあるほど。
ちなみに彼らのもつ血はあらゆる毒を無効化する効果をもつ。
それもまた乱獲された原因の一つ、といわれているが事実そうなのだから仕方がない。
もっともそういう経緯もあり、
もともとは地界に住んでいたのだが魔界にその身を彼らの種族は移したのだが。
「こんにちわ～。すいませ～ん、品物うりたいんですけど～」
とりあえず一番近くで【魔力】を強く感じる店にと足をむける。
その店は裏通りに位置しており、ぱっとみため判りにくい位置にあるものの、
力の流れを視るものからすればその位置は一目瞭然。
「おや。いらっしゃい。…うん？めずらしいね。ダークエルフ…いや、違うね？何の種族だい？」
はいってきた青年をみておもわずじっと相手を見極める。
ここにこれる、ということは何らかの紹介、もしくは自力で力の流れを見極められるものに限られる。
「秘密ですよ～。あ、買い取りおねがいしたいんですけど～」
でできた恰幅のいい女性の言葉をさらっと受け流し、にこやかな笑みを浮かべつつも用件を切り出す。
「品物はなんだい？」
「これです～」
ごろっ。
いって懐にいれていた袋より手の平にのる程度の大きさの水晶玉のようなものを取り出しその場におく。
色彩は赤と銀。
「おや？これはめずらしいね。魔石かい？しかも…ほおう。火属性と雷属性…かなり質がいいね。

これ、どうしたんだい？」
「ここにくるまでになんかおそってきたやつからもらいました～」
まあ、【森】を抜けるときに襲いかかってきたのでかえりうちにしだたけなのだが。
「ふむ。大きさもそれなりだし。なおかつ透明度もいいね。火属性はよく出回るけど透明度もいいことだし。
火の魔石で白1。雷のほうは珍しいので黒1でどうだい？」
魔石はいろいろな場所にて使用され、ゆえに交換ルートがかなり高い。
とはいえその制度はピンからキリまであり、透明度が高ければ高いほどその効果は高いとされる。
地界…すなわち、人間達が暮らしているこの地上においては滅多と透明度の高い魔石はまずとれない。
透明度がたかい魔石を求めるならば他界に出向き手にいれたほうが能率がよい。
しかし他界にそうほいほいと誰もかれもがいかれるわけではない。
そもそも、界を隔てる門にたどり着くまでまず命を落とす。
ゆえに、ときおり訪れる他界のものが売りにくる魔石はかなりの高級品、として取り扱われる。
「それでいいです。今無一文なので～。
あ、あとこのあたりでおいしいものがたべられる宿しりませんか～？」
とりあえずそれほど長居をするつもりはない。
まあ、黒一枚…すなわち、黒水晶（ラクリスタ）貨一枚もあればしばらく困ることはない。
「ああ、それならルワールの宿がいいよ」
ルワールの宿。
種族を問わず、お客様は神様ですの精神をもっている宿屋で従業員の態度も評判がよい。
低料金にて宿屋を経営しており、その設備からしても採算はとれな

いだろう、とは誰もがいうこと。
しかし、その宿は最高峰のランクに位置している銀の資格の保有者、ルワールが経営している。
つまり、彼の趣味の延長線上にて経営されているので設けとかは二の次となっている。
冒険ギルドにおいて最高峰を保有しているルワールの名前を知らないものは滅多といない。
ゆえにそんな人物が経営している店でごろつきがからもうなどすれば…結果はいわずともない。
ちなみに、その店の経営方針のもう一つが、目には目を、葉には葉を。
やられたらやり返すのは正当防衛であり、すべての責任は客にあり。
そうきっぱり公言していたりするのだからすこしばかりかわっている。
何しろ宿帳に記載するときに署名をするのだが…そこに小さくそのことが記載されており、
文句をいったりする客がいればそれが動かぬ証拠となり、有無をいわさず客が責任を追うこととなっている。
何しろ、【上記の旨を納得しすべてを守るものとする。署名をもってここに記す】とこれまたご丁寧に、
宿泊名簿帳にかかれていたりする。
つまり、宿に泊まるために記載する、ということはすなわち、何かあった場合責任はすべて自らがとります。
と書類にて宣言しているようなもの。
ゆえに公式的に書面がある以上、客の立場ははてしなく弱い。
そもそも、それをほとんど読まず、確認せずほとんどのものは普通に署名してしまう。
…まあ、始めのころはそれで幾度か役人の手を煩わせていたらしいが、
今ではもはや周知の事実となり、ちょっかいをかけるような馬鹿は

いない。
「はい。じゃ、これが代金だよ。ああ、そうそう。最近なんか物騒らしいからあまり夜は出歩かないほうがいいよ？」
何があるかわからないので一応、夜間外出を控えるように指示が国民すべてに出されている。
「ルワールの宿か～…他は何かありますか～？」
あの場はあまり居心地がいい、とはいえない。
というか万が一、ルワール当人とかちあわせたら面倒なことこの上ない。
おそらく気配を隠していてもこちらの実力を知り警戒してくる、もしくは面白がって挑んでくるであろう。
それにあまりぴしっとした部屋は好きではない。
むしろこじんまりした部屋のほうが彼の好み。
「そうさね。なら……」
しばしたわいのない会話が店の一角において見受けられてゆく……

「お～」
紹介された宿は自分の好みによくあっていて思わず笑みが漏れ出してしまう。
建物的には大きくもなく小さくもなく。
裏路地にひっそりと存在しているこの地においては珍しい木製の建物。
「うん？なんだ、客か？めずらしいな？まだ酒場はひらいてないぜ？」
はいってきた青年をちらり、とみてカウンターの後ろにいた男性がそんな青年にと声をかける。
ここは酒場を兼ねており、夜はちょっとした冒険者たちやゴロツキたちのたまり場となる。
「いえいえ～。とまりにきました～。部屋あいてますか～？」

のんびりと、のほほんといいつつも、カウンターのほうにちかづいてゆく。
「あいてはいるが…うん？兄ちゃん、珍しいな。魔族か？」
この地に魔族が入れるのはかなり珍しい。
この地は守護精霊ティミの加護のもとになりたっている。
すなわち、はいれる存在は邪気がないもの、に限られる。
その邪気、とは【この国に害を及ぼす可能性】を示している。
まあ、些細ともいえる悪事程度は害に及ばず、ということで加護結界の範囲外とはなっているが。
「あれ～？よくわかりましたね～？あ、もしかして気配よめます～？」
よくよくみればこの店のマスターなのであろう。
人族のようであるがよくよくみればどうやらエルフらしい。
ゆえにこそちょこと首をかしげつつも問いかける。
そんな彼の言葉に対し、
「まあな。というかあんた、かわってるな～。魔族でそこまで気が整ってるやつは初めてみたぞ？」
普通、どこかしら【気】に淀みがあるもの。
それはどんな存在においてもいえること。
しかし目の前の客にはそれがない。
まるでそう、完全に固定された気配のような感じをうける。
「僕を一目で魔族ってみるあなたもそうとうなものですよ～。普通はきづかないんですけどね～。
　なんかよくダークエルフとはまちがわれてますけど～」
まあ、色も多少黒いのでそれはそれで仕方ないのかもしれないが。
あと彼のもつ独特の雰囲気としゃべり方であろう。
…どこか話していたら気がぬける、そんな特有の話し方。
「…あ～、まあその雰囲気と話しかたじゃなぁ。で？とまりたいって、魔族のあんたがなんでだ？」
「あ～、一応観光のつもりなんですけど～」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
いや、今、なんて？」

今、目の前の魔族は何といったであろうか。

なんとなく聞き間違いのような気がしてもういちど確認する。

「ですから～。観光をかねて～」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あんた、かわってるってよくいわれないか？」

ここまでのんきな魔族は今まで一度もみたことがない。

ゆえにおもわずこめかみを押さえつつも問いかける。

「よくいわれてますよ～」

「・・・だろうな。しかしそんなんでよく生き残れてるな・・・あんた……」

こんなのんびりとしていてよくもまあ、弱肉強食を地でいく魔界でいきていけているものである。

ゆえに思わず感心してしまう。

まあ、暮らしているのは魔界でないのかもしれないが、それにしても…である。

「適応能力だけ、はあるらしいんですよ～」

へらっ。

にこやかにさらっといわれれば、そういうこともありえるのか、そう納得するしかない。

「…まあ、こちらとしてはきちんとお金さえはらってもらえればいいんだが……
　しかし、あんたかわってるね～。魔族でここまで人あたりがいいヤツは初めてだよ」

大概の魔族はほとんど嫌われている。

まあ元々もっているその性質とその性格もあるであろうが。

まあ、中には笑みを浮かべながらもさくっと非情なことをする輩もいるにはいる。

そういう輩が一番厄介であることは疑いようがないのだが。

「え～。だっていろいろといくのに面倒ごととかおこしたら自分が楽しくないじゃないですか～。
　やっぱり、おいしいものをたべて、まったりのんびりといきるのがたのしいでしょ～？」
「・・・・・・・・・・・・実力があるからこその台詞、ととらえるべきか？ううむ・・・」
どうもこう調子がくるってしまう。
どちらにしても客商売。
問題を起こさず、面倒ごとをおこさずに過ごしてくれればそれにこしたことはない。
それに何より先日の一件のこともある。
何かあったときに実力があるであろう客がいてくれるのはかなり心強い。
「それで、部屋はあるんですか～？」
何だか話題が完全に本筋からそれている。
ゆえに再度といかける。
「うん？ああ、すまんすまん。代金は青水晶貨（ブルークリスタ）一枚だ。
　二食付きだとこれにさらに水紫晶貨（ブルクリスタ）一枚、だな」
「あ～、じゃあ、二食付きでおねがいしま～す」
いいつつも、とりあえず懐から赤水晶貨（レッドクリスタ）一枚取り出して手渡し、
「何日になるかわかんないのでひとまず先払いしときますね～」
「お。兄ちゃん、気前いいね～。そんな大金どっから？」
「さっき魔石をうりまして～」
先ほど魔石をうったときにとりあえず細かく貨幣は崩してもらっている。
ゆえに、わざわざ大金を出してお釣りをもらうようなことはしなくてもよい。
わざわざ細かいものでもらった理由。
その理由はしごく簡単。
大金をおいそれと出していればまちがいなく面倒なことになるから

に他ならない。
彼とすればあまり面倒なことにかかわりたくないのが本音。
ゆえに細かなお金で魔石をうったお金を受け取った。
「…なるほど。納得。ま、部屋は二階だ。これが鍵、な」
何しろいくらのんびりしているように見えても魔族は魔族。
つまりは魔界にいくことすら可能。
とすればこの地上にある魔石よりも格段に純度の高い魔石を手にいれることくらいは可能のはず。
魔界でとれる魔石は最低なものでもこの地上でとれるものより格段に質がよい。
それをうったとなるとしばらく遊んでいても暮らしていけるだけのお金にはなったはず。
目の前の青年の台詞に一人納得し、部屋の鍵を手渡す。
「夕飯がほしけりゃ、好きな時間におりてこい」
「は～い。ありがとうございます～。しばらくお世話になりますね～？」
いいつつも、ぺこり、と挨拶。
「…なあ、あんた、ほんと～～～に魔族か？」
魔族は大概、他の種族を見下している節がある。
まあ全員が全員、とはいわないが。
しかし相手に簡単に頭をさげる存在など…はっきりいってきかない。
「仲間にも～。かわりものっていわれてますから～」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・納得」
どの種族にも変わりもの、というものはいるものである。
ゆえにそれで納得する。
こんな商売をしていれば
いろいろな存在に出会うがゆえにそれだけで納得してしまう要素がある、といえるのだが。
とりあえず宿帳に名前を記載し、そのまま青年…リュカはそのまま

自分の泊まる部屋へと移動してゆく――

「リーダーも無茶いうよね～。だれがきちんと道を閉じたのか調べてこい、なんてさ～。

　そりゃ確かに普通の精霊程度ならばあの道をふさぐのは容易ではない、と認識してるかもしれないけど～」

ほんと、理解してないからそんな勘違いしてるんだよね～。

そんなことをおもいつつも一人ぶつぶつつつぶやく彼の台詞は何も間違ってはいないであろう。

あむあむ…ごくん。

「や～。やっぱりこっちのたべものはおいしいよね～。うん、味付けもいろいろあるし」

とりあえず、部屋を確保し問題の場所にいってはみた。

そのときに感じたのは精霊の力ではなかった、ということなのだが。

「あれってやっぱり主様の力だよね～。ということはここにいるのかな～？主様？」

いるのなら久しぶりにあってみたい、というのもある。

というか面白そうなことをしているのならぜひともその仲間にいれてほしい。

自分が組織のリーダーより命じられたのは、道の状態。

何しろ足がかりとしようとしていた【道】が突如として閉じられてしまったのである。

ゆえに上のものたちの狼狽はかなり激しい。

「そもそもさ～。いろんな命を贄にしてつくった【仮初めの道】なんてすぐに閉じられるのわかりきってるのに～」

まあわざわざそれをいう必要もする気もないのでいわなかったが。

そもそも組織にはいったのも昔馴染みに誘われて、彼が敬愛している【意思】に確認してみたところ、

そのまま入って様子をみてほしい、といわれたのでそうしてるだけ

にすぎない。
「ティミに聞けばわかるかな～？」
この地を守護している守護精霊、ティミ。
彼女ならばもしこの地に【意思】が滞在しているのならば知っていても不思議ではない。
「お、兄ちゃん、いいたべっぶりだね～。というか虫系がすきなのかい？」
「お野菜とか虫系統が大好きなんですよ～、種族的に」
「…あ～。そういう系統なわけ、か。ま、たっぷりとたべとくれ」
「は～い」
何やら周囲が騒がしいがリュカにとってはどうでもいいこと。
先ほど何か因縁をつけてこようとした相手がいたが、ちょこっとその【精神】に力を加えただけで、
なぜかしばらく大人しくなったりしていたりもするが。
まあ、絡んでいた相手がいきなり、その場に硬直し放心状態になれば驚く、というもの。
しかしリュカはそれに対してまったく異もかいさずそのまま食事を続けていたりする。
周囲にいたほかのゴロツキ達はといえばそれがリュカの行ったわけのわからない何かの術。
そうとらえ、リュカに手をだそうととていた存在達はなりをひそめていたりする。

まあ、あたらずとも遠からず、ともいえるが。
そもそも、リュカが行ったのは術でも何でもなく、彼のもつ力の一つ。
彼はその身の発する超音波にて人の精神を狂わすことができるのだから……

光と闇の楔　～間者と観光と……～（後書き）

さて、最後の超音波云々、でわかったとおもいますが。
彼の元の種族は蝙蝠、です（爆
かつての大異変のときに変異した種族なんですよ～
まあ大災害を生き抜いた種族、でもあるんですけどね・・・・・

光と闇の楔　～集いし存在達と接触と……～（前書き）

今度は静岡で地震です・・・
知り合いが心配でメールしたらさきほど無事、と連絡があり一安心。
でもまだ余震がつづいてるそうです・・・・

光と闇の楔　～集いし存在達と接触と……～

「外界？」
「あ～…あまり知られてないというか、間違った認識つたわってるみたいだからね～」
ふとしたはずに話題に上った魔界や天界、そして精霊界。
何しろ今この王都は先日、近くに魔界との道が開いたかもしれない、というので大騒動と化している。
「基本的には、この地は一つの惑星なわけ。そしてその惑星の中に様々な界が存在してるの。
　まあ、この界の区分けは教科書にものってるとおもうけど」
とりあえず首をかしげている目の前のクラスメートにひとまず説明を開始する。
「本来、様々な界を移動するためには、【門】を通る必要性があるんだけど。
　ときどきその門以外にも道が開けることがあるの。
　もともとかつてはそんな門などはなかったからね。門が誕生したのは今から約四億年ほど前らしいし」
実際にありはしたがそこまで確実な意思を持たせてはいなかった。
どちらかといえば傍観的な立場に位置する存在だった。
それを各個たる意思にしたのはかの出来事以降。
まず先に【門】を固定化し、そして様々な【界】を設定した。
「基本、どの界においてもまああまり暮らしぶりはかわらないからね」
よく天界などでは遊んでくらせる、とおもっている存在達が多々といるが実はそうではない。
天界とて地上界と同じく生命の営みがある。
彼らの寿命も永遠ではない。
天界人にしろ魔界人にしろ平均的な寿命は数百年から数千年、とい

ったところ。
当然世代交代、というものも存在する。
もっとも、一部の存在に関してはそういうものは存在しないのだが。
上位の存在達とて世代交代、というものは存在する。
もっとも、彼らの場合、その記憶を受け継ぐことでその名前ごと引き継ぐことになるのだが。
「…ディアさん、どこからそんな知識えてるわけ？」
「え？自然界の存在ならば誰でもしってる常識よ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そんなもの？」
常識、といわれても知らないものは仕方がない。
しかしそうきっぱりいわれれば、そうなのか？ともおもってしまう。
どう頑張っても彼らには自然界の声、というものはいまだに聞くことができないのだから……

光と闇の楔　～集い

し存在達と接触と……～

「う～ん。やっぱりメイブツのニパはおいしい」
とりあえずもう一度調べてはみた。
ならば情報収集するしか他にはない。
とはいえ情報収集、とは名ばかりのような気がするのはおそらく誰のきのせいでもないであろう。

彼の組織のメンバーがいればまちがいなく、突っ込みをしているかおもいっきり怒鳴っているであろう。
何しろ先ほどからどうみても聞き込み、というよりたべ歩きをしていればなおさらに。
この首都テミスにやってきて二日目。
別に急ぐわけでもないのでこうして様々な店を回りつつ、彼曰くの聞き込みをしている青年…リュカ。
「…って、あれ～？」
とりあえずひさしぶりにやってきたこともあり、きょろきょろしているといつのまにか街並みを外れてしまったらしい。
王都、といえどもやはり暗部は存在している。
つまり、人気のない場所ではどうでもいいような輩はどこの世界にもいるわけで……
「ようよう。兄ちゃんよ～。なんかはぶりよさそうだね～」
「お兄さんたちに分けてくれないかな～？」
いつのまにやら前後に数名、人間の男たちがリュカを囲んでいたりする。
変わった格好のいいカモがいる。
彼らの認識はその程度。
彼との実力の差をまったくといっていいほどにわかっていないのはあるいみ幸運なのか不幸なのか。
「お～！今回ひさしぶりのおいはぎさん！？おいはぎさん！？
　さいきんさ～。いきなり襲いかかってきたりする馬鹿ばっかと遊んでたから久しぶり～」
リュカからすれば人間達がこのようにして行う、いわば『おいはぎ』行為はとても珍しい。
何しろ魔界においてそのようなことをすればまちがいなく命のやり取りとなる。
つまり、相手の実力をきちんと読み取ること、それこそが魔界において生活してゆく統べとなる。

しかし、こういった平和な世界にすごすものたちはその根底のことができていないわけで……
何やら気のぬける声でそれでいて目をきらきらさせつつもそういわれては黙っていられるはずもなく。
「に～ちゃん、自分の立場、わかってるんか？」
おもわずにやにやと笑みを浮かべてそんなことをいっているどうみてもゴロツキA、としかいいようのないその男性。
まあ腰に短剣を差しており、簡単な皮鎧を身につけているところをみるとおそらく冒険者か何かに登録しているのであろう。
もしくはそのように偽造しているか、のどちらか。
「大人しくだすもんだしたほうが身のためだぜ？」
この周囲には人気がない。
つまり少々騒いでも表通りの商人達の掛け声にかき消されておそらく悲鳴すら届かないであろう。
「あ。こんどはミクの実発見～。んでは、僕はまだたべ歩きがのこってますので～」
「って、無視するなっ！てめぇ、ほんとうに自分の立場わかってねぇなっ！」
くんくんととある匂いをかぎとりにこやかにほほ笑みながらもその場を立ち去ろうとしているリュカ。
先ほどから声をかけているゴロツキ男性がさっと手を挙げると同時に数名の男たちがリュカの周囲を取り囲む。
「に～ちゃん。すこしばかりイタイメにあわないとわからないようだな。…すこしかわいがってやれ」
『へいっ！』
どうやら男がリーダーらしく、子分とおもわしき男たちに指示をだす。
それと同時、彼らがそのまま一斉に飛びかかり……
「あ。こっちからだ～」
ごっんっ！

『…ってぇ〜〜っ！？』
たしかにどこをどうみても田舎者？としか思えなかった青年を取り囲んでいた。
そして一斉に襲いかかろうとした。
そこまではいい。
いいが、どうして自分達は仲間同士でおもいっきりぶつかり合いをしなければならないのか。
何のことはない、その場からするっとリュカが移動し彼らの包囲網をすり抜けただけなのだが、
そんな些細な事実にすら気づくことなく、
「くっ！てめえら！何あそんでやがるっ！」
せっかくみつけたカモである。
何しろ先ほどからけっこうな量をかいぐいしており、まだまだお金をもっている、と踏んでいる。
だからこそこっそりと後をつけて機会をうかがっていた。
「てめえも！とっととだすもの…」
いって腰にさしている短剣を抜き去り、リュカのほうにむけようとする。
が。
「……ん〜、面倒なんだよね〜…ま、自分達だけであそんでてね？」
いいつつも、そのままひらひらと手をふりながらその場を後にしてゆくリュカ。
「くっ！にがすかっ！まて！やろうども！にがすなっ！」
どうやらすんなりとは逃がしてはくれないらしい。
「……は〜、面倒」
とりあえずこのままとわりつかれてはせっかくのたべもののもおいしくなくなる。
ゆえに。
「Ｕｎｅ　ｖｉｓｉｏｎ（幻影）」
ぽつり、とつぶやきパチン、と指をならす。

「ん？てめぇ、ようやく観念しやがったなっ！」
目の前にはあいかわらずの笑みを浮かべているかわった容姿の青年。
「てめえら！やるぜっ！」
いいつつも青年のほうにむかい部下達に声をかける。
が。
「…な！？何てめえら、誰にむかって…！？」
「なっ！？まて！まちがえて…ちいっ！」
リーダーの男の声をかわきりに、仲間がいきなり斬りかかってくる。
そしてまた、他のメンバーもまた仲間に斬りつけているのがみてとれる。
しかし、彼らの目からしてみれば、まちがいなく、笑みをただただ浮かべている青年を攻撃しているに過ぎない。
そう、彼らの目には互いが互いに青年、にみえているのだから……

『ぎゃぁ～～～～……』

「ん～？何かきこえたかな～？」
もぐもぐ。
うん。やはりこの実は凍らせてたべるにかぎるっ！
一方、そんな彼らをさくっとその場にのこし、表通りにもどり露店より凍れる実を買いその場でたべているリュカ。
「あ～。おおかた、ごろつきどもがさわいでるんだろうさ。しかし、兄ちゃん、いいくいっぷりだね～。
　きにいったよ。どうだい？これも？」
「おお！それはカシオの実！いやぁ！こんなものまであるんですねぇ～。さすが王都！」
差し出されたのはちょっとした両手で抱きかかえるサイズほどの実であるが、
皮をむいてたべればひんやりとした食感でほとんどのものが虜になる果物の一つ。

「いや～。ひさしぶりにきたかいがありました～。おじさん、いい仕事してるね～。
　どこからこれら仕入れてるの？今、聖都との取引ってどうなってるの？」
カシオの実は主に聖都、とよばれる都がある国にて栽培されている。かの地以外ではここまでの甘さと冷たさがでないらしく、ゆえにかなりの高級品の一つとされている。
「ユグルとの取引かい？まあ、たしかにこれはユグルからの輸入品だけどね。
　最近なんでかユグルの民がよくくるんだよ。そのおかげで品物がこうして豊富に手にはいるわけさ」
「なるほど～」
ユグルの民。
聖都、と呼ばれる都がある大陸の民のことをそう呼び称す。
聖都とはこの世界のほぼ中心地にある大陸の中心にある都のことをさし、
そしてまたその地に住まうものは、天界、魔界人にもっとも近しい能力をもっている。
一節に聖都の民が天界人、闇都の民が魔界人、といわれているが。
この世界に存在している巨大大陸の中心にある、惑星の一からしてちょうど裏表の位置にと存在している大陸。
そこには直接、魔界、天界につづく道がある、とされており、どちらかの世界に夢を抱く冒険者などがよく訪れる。
が、無事に戻ってきた、という話しはあまりきかない。
もっとも、交渉次第にて案内人を雇えれば他界に入ることは可能なのだが。
あむっ。
丁寧にわざわざ皮をむいてきってくれた店主から実をうけとり、あむっと一口。
ひんやりとしたここちよさと甘さが口の中にとけいり何ともいえな

い味わいに浸ってしまう。
「……リュカ？こんなところで何やってるの？」
彼がそう果物のおいしさに浸っていたその最中、背後から彼にとっては聞きなれた…
それでいてもっとも畏れ、そしてもっとも敬う存在の声が聞こえてくる。

気配から数名、やってきていたのはしってはいたが。
というか相変わらず、というべきか。
おもわず苦笑してしまう。
ふと感じた力の気配。
ゆえにどこにいるかはすぐに理解ができた。
それゆえに、
「リュカ？こんなところで何やってるの？」
ふと見慣れた姿は、相変わらず、といっていいのであろう。
露店の店主に何やら果物を斬ってもらいおいしそうにほうばっている。
その姿からして彼がかなり実は歳を得ているなどほとんどの存在は想像だにしないであろう。
そんなことをおもいつつも、とりあえず彼がここにいるのは大体予測はできる。
事後確認の意味をもかねて少女…ディアは視線の先にいる人物にと声をかけたのだが……

「あ～！あれ～？」
「あれ～、じゃ、ないでしょ？…あ、すいません。この子、何かおかしなことしませんでした？」
背後を振り返り、目をぱちくりさせて叫ぶ青年…リュカの言葉をせいし、あきれつつも、
背後にいた少女…ディアはそんなリュカを横目にひとまず露店の主

人に話しかける。
「ん？なんだ。嬢ちゃんの知り合いかい？」
見た目どこかの両家のお嬢様っぽい子と、どうみてもかわった容姿の青年の接点がおもいつかない。
しかしこの世の中、どこでどう繋がりがあるかはわからない。
ゆえに、すこしばかり首をかしげつつも、目の前の話しかけてきた少女に問いかける露店の主人。
「ええ、まあ。このこ、このあたりの常識とぼしいですから」
まあ嘘ではない。
というかたしか彼のここの常識は以前にきた千三百年前でとまっているはずである。
「ひどっ！とぼしいって何～！？」
「事実でしょ？リュカ。今のここの常識わかってる？」
「え～？前とあまりかわらないんでしょ？」
「・・・・・・・・・・・かわってる、のっ！」
まあ、人前でいつもの呼び方をしない、というのは称賛にあたりはするが。
さすがに千年以上もたつと人間達の間の常識も文化レベルも異なっている。
以前にきたときと同じような感覚でいられては、絶対に問題が起きかねない。
そんな二人のやり取りをみつつ、どうやら仲がよさそうなおそらく友人系統かな？
そう捕え、
「まあまあ。そうだ。お嬢ちゃんも何かかわないかい？」
「…おじさん、商売上図、ですね。そうですね～。では、そちらとそちらをもらえますか？」
「……かうの？」
というか目の前の存在が物をたべる、というのがいまいち幾度みてもよくわからない。

というかまったく食べなくてもいいはずなのだが……
「はいよっ！あ、これおまけだよ。しかしそっちの兄ちゃんもだけどあんたも美人さんなんだから、
　このあたりにたむろしてるゴロツキたちにはきをつけなよっ！」
おそらく二人そろって歩いていたら絶対に目立つ。
それゆえの忠告。
「大丈夫ですよ。この子も私も一応は強い部類に入りますから」
「……一応？」
さきほどからディアの言葉に横からおもいっきり突っ込みをしているリュカであるが。
そんなリュカの言葉はことごとく無視されていたりする。
「さ。リュカ。これもってね」
「ええ～！？僕、荷物もち！？」
「いいじゃない。か弱い乙女に物をもたすき？」
「どこがかよわいんですかぁ？！」
「…リュカちゃん。そのあたりのことはよぉぉ～く話しあいましょうか？」
にっこり。
すかさずおもいっきり否定の言葉を叫んだリュカにたいしにこやかにほほ笑みつつも話しかけるディア。
ちなみにその目はまったくといっていいほどに笑っていない。
「……すいません、すいません。僕がわるかったです…もちます、もちますよ～……」
すぐさま身の危険を感じ、素直にディアの買った荷物をうけとり、そのまま両手で荷物をもつ。
「ま、ちょうどそろそろお昼だし。そのあたりで何かかんたんに時間つぶしながらでも話しはききましょっか」
「…はい～…。あ、おじさん、どうもありがとうございました～」
「いいってことよ～。兄ちゃん、今から尻にひかれてたら大変だね～」

やり取りをみていてもどうみても女性のほうが立場は上。
というか完全にあしらわれているのがみてとれるがゆえに、ほほえましくもあり面白くもある。
世の中、やっぱり女は強いよな。
うん。
そんなことをおもいながらもリュカ、と呼ばれている青年に同情心を覚えつつも声をかける。
「……さからったら大変なんですよ～」
「あははは。ま、どこの女もつよいってことさ。ま、がんばんなっ！お。これもサービスしといてやる！」
何やらひさしぶりにほんわかとした男女のかかわり方をみたような気がする。
ゆえに露店の主人は気前よく、他の売り物をも手渡してくる。
「ありがとうございます。さ、いこ。リュカ」
「……前がみえませ～ん～」
「リュカはそんなの関係ないでしょ？」
「……主様、ひどい……」
ぽそっ。
そんなディアの台詞に思わずぽそっと文句をいうリュカ。
しばしたわいのないそんなほのぼのとしたやり取りをかわしつつ、リュカとディアはひとまずその露天商の場を離れ、別の場所へと話しをするために移動することに。

「でも、びっくりした～。やっぱりソトがいったとおり。主様、こっちにきてたんだ～」
目の前にいるディアにむかい、手元にあるホットミルクをのみつつ問いかける。
「あ～。ソトホースがいったのね。で？リュカがここにきたのはこの前のあの道のこと？」
今、二人がいるのは表通りに面しているカフェテラス。

ちなみに二人がいるのは外通りにめんした位置であり、外の景色を見ながら食事がたのしめる、としてなかなか評判の店でもある。

二人のそんな会話は普通に通りを歩いている人々のざわめきで当然だれも気にはとめない。

そもそも、かなり目立つ容姿のものが二人いる、というのに誰も気にはとめていない。

ディアのもつ雰囲気が完全に周囲ととけこんでおり、ゆえに傍目からは一人の青年がのんびりと飲み物を飲んでいる。としかうつらない。

「うん。主様もわかってるとおもうけど。あれを確認してこいって〜。

　馬鹿だよね〜。そもそも他者の命で簡易的に創った道なんて長持ちするわけないのにさ〜」

リュカの台詞はもっとも。

しかしそれを知らない輩のほうが多いのもまた事実。

「というか、警備隊は何をしてるのかしらねぇ？…ベルゼブとかにお仕置き必要かしら？」

「…僕、ベルちゃんに同情するよ……」

本気でいっていることを悟り、どこか遠くをみながらもおもわずつぶやくリュカ。

「それはそれとして。主様はどうするつもりなのさ〜？」

とりあえず聞いておくことは聞いておきたい。

それによって自分のとるべき行動もまたかわってくる。

「それがね〜。そろそろ代替わりが始まるのよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え゛？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

何かひたすらに聞きたくない言葉がきこえたような気がするのはきのせいか。

否、気のせいだ、といってもらいたい。

「まあ、そのせいで活発に歪みも起こりえてるのはわかってるけどね。

　無意識のうちに影響うけてるんでしょ。様々な生命達は」

「あ〜……たしか、今の代替わりとなるべく器というか姫君はどこかの星にいってるんでしたっけ？」

たしか、どこかの星に普通の人として暮らしていると聞いたことがある。

「ちょうどその星が歪みだしていたからという理由でそこに送られたらしいけどね。

　まあ、そこの星…というか星系もどうやら落ち着いたらしくて。

…まあまだ正確に大姉様から話しはきてないけどね」

基本的に大姉様、とディアが呼んでいる存在達に一番始めにそれらの情報は伝えられる。

そもそも、【姉】達の存在がありこうしてディア達が存在していられるのもまた事実。

「なのでさくっととりあえず上も下も、面倒なことしてくれかねない輩は静かにさせとこうかとおもってね」

「なるほど〜。なら僕はそれとなく上のほうに情報流す程度でいいのかな〜？」

すでにもう慣れたもの。

別に情報を伝える程度ならば彼にとって痛くもかゆくもない。

「…ま、ここに上から使者がくるみたいだから、彼女ととりあえず話してみて」

「…ん？」

ディアがそういうと同時、リュカはふとした気配を感じ思わず首をかしげる。

が。

「…あれれ〜？」

すぐさまその気配に気づき、おもわず首をかしげるリュカの姿がその場において見受けられてゆく――

ふわり、感じる風がここちよい。
「やっぱり地界の風は上と違って味があるわよね」
思わず本音がもれいでる。
「というか、門の彼、なんか唸ってたけど、どうかしたのかしら？」
【門】を通るとき、なぜかいつもと異なり雰囲気が少しばかり違ったような気がしたが。
まあそれは気のせいなのかもしれない、そう思い直し
「さて…と。たしか、地界のギルド証は……」
ぴらっ。
懐から幾枚かのカードを取り出しひとまず確認。
本来ならば一枚でいいのだがいちいちわけているのには理由がある。
そもそもすべて同じ容姿で行動するわけにはいかない事情が彼女にはある。
ふわり、とやわらかな金の髪が風にたなびく。
その長い金色の髪は一つにくくられみつあみ状にしてたばねられている。
服装はいたってシンプル。
どこにでもいるような簡単なちょっとした何かの金属らしき鎧…といっても、
胸部分と肩部分、そして腰部分のみの…であるが、とにかくそんな鎧を身にまとい、
腰にはちょっとした小さな袋がくくりつけられている。
特徴的なのはその背に背負った大きな剣であろう。
太陽の光に反射してきらめくその姿はまるで伝説上の鉱石でつくられているかのような錯覚をうける。
…事実、そうなのだが、よもやそんな代物をどうみても十代後半の少女が手にしている…とは誰もおもわない。
「まったく。上も上よね。そもそも上からも何ものかが無理やり道を開いたとほぼ同時期に、

どうやら魔界のほうからも道を開いた可能性があるからそこも調べてこい、なんて」
ぶつぶつ。
どうしてしかも自分が出向かなければならないのであろうか。
上層部いわく、ある程度の実力のあるもののほうが正確な情報が判りやすい。
とはいっているが。
たしかにそれはわかっている。
いるがそれとこれとは話しは別。
文句をいいつつもしばしあるいてゆくとやがて町に続く関所もとい、門が見えてくる。
王都テミス。
王都、というだけのことはあり町全体が城壁というか壁にと覆われており、
出入りするためには町に設けられている東西南北の門を通るしかない。
そして一番表門、とされているのが南の門。
すなわち彼女が今向かっている門なのであるが。
「うん？冒険者か？」
「はい。これがギルド証です」
門番に先ほど用意しておいたギルド証を受け渡す。
「ふむ。念の為に所属をお願いできるかな？」
「所属ギルドは今のところありません。名前はアテナ、です。見ての通り戦士です」
その背に大きな剣を背負っていればどうみても剣士か戦士、としか見えないであろうが。
「ふむ。流れの戦士、か。しかし、戦女神の名前と同じとは、いい名をもらったな」
「よくいわれます」
そんな兵士の言葉ににこやかに笑みをかえして答えておく。

「よし。とおれ。しかし問題だけはおこすなよ？」
「はい、わかっています」
そのままギルド証をうけとりかるく挨拶し、そのまま少女…アテナと名乗った少女は町の中に足をふみいれてゆく。

「…あら？」
ふと何か見覚えのある姿を目にしたような気がする。
おもわずそれゆえに足をとめる。
町に足を踏み入れてしばし。
ふと何か見慣れた姿…というか懐かしい姿を目にしたような気がして思わず足をとめる。
気のせい？
とはおもうがやはり気になるものは気になる。
ゆえにもう一度、来た道を引き返してゆき――
「……あら？」
そこに本来ならばこの場にいないであろう存在の姿を目にしおもわず目を丸くする。
しかしすぐに笑みをうかべてそちらのほうへと歩き出す。
「…ひさしぶり。リュカさん」
「あれ～？何、何～？気配感じたとおもったらやっぱりアテナちゃん～？」
その場にはもう一人の人物がいたりするのだがそれには彼女は気付かない。
カフェテラス、と呼ばれているらしきその場にて椅子に座り何やら飲み物を飲んでいる人物。
人物、といえるかどうかは不明だが。
その容姿はかつてみたときと寸分変わりがないので間違えるはずもない。
さらにいえばその雰囲気を忘れようもない。
ゆえにこそ確信をもって話しかける。

案の定、というべか彼女が話しかけると相手は目をぱちくりさせつつも、
…あいのかわらず笑みをうかべ、間の抜けた声にて返事をかえしてくる。
「……リュカさん、そのちゃん、はやめてくださいっ！」
あいかわらずの『ちゃん』づけ。
ゆえにおもいっきり抗議の声を発する彼女の気持ちは判らなくもないであろう。
「え～？僕からすればアテナちゃんはアテナちゃんだよ～？だってさ～？ち～さいころ面倒みてたの僕だよ～？」
「くっ！」
それをいわれてはもともこもない。
たしかに忙しい父達のかわりに面倒はみてもらっていた。
いたが、そのときのことを持ち出されたくはない。
「それより～。なんでわざわざ戦いの女神のアテナちゃんがこんなところに～？」
大体の予測はつくが、それを微塵に顔にだすことなくにこやかに問いかける。
そんな彼…リュカの言葉に。
「それはこちらの台詞です。リュカさん、あなたこそ、どうしてこんなところにおられるのですか？
　たしか、今は主の命をうけて魔界に潜入してる、とおききしてますが？」
一応そのように伝え聞いている。
どのような役目か詳しいことまでは知らないが。
「あはは～。おしごと～。僕はただ、このあいだひらいた道を調べにきただけだよ～？」
どうもこの彼と話していたら脱力してしまい相手の気配にのまれてしまう。
それは昔から彼女…アテナはよく身にしみてわかっている。

いるが。
「道？ああ、例の、やつ、ですか。あ、すいません。私にもコーヒーをお願いします」
いつのまにかそのままあいている椅子にとすわり、相席しているアテナ。
しかしその横にいるディアにアテナはまったく気づかない。
あ～…主様、完全に気配を周囲と同化されてるから気づかないんだ～
ほんと、アテナちゃん、まだまだ子供だよね～
それに気づき、思わずそんなことをおもうリュカ。
本来ならば気づかなければいなけい立場なのに気づいていない。
そのことがまだまだ彼女が未熟な女神だ、と物語っている。
「ま、まだアテナちゃんは産まれて二千年だしね～」
リュカは産まれてこのかたすでに齢一万年は当に超えている。
実際はもう二万年すら超えている。
ゆえにいまだ二千年足らずのアテナは子供という認識しかない。
「その、ちゃん！はやめてくださいっ！」
「え～？さみしくてないては、そしてこまらせよーとしてわざわざ水を寝具にかけたのはどこのだれ～？」
「む・か・し・の・話しはしないでくださいっ！！」
どうもこのリュカ相手だと自分のいつも保っている性格がおもいっきり壊れてしまう。
ゆえに思わず叫び返す。
「あはは～。だめだよ～。アテナちゃん～。そんなに大きな声をだした皆におどろかれるよ～？」
たしかに先ほどから叫ぶアテナを何ごとか？とちらほらとみている存在達の姿が目にとまる。
まあ、大概は、なんだ、男女の痴話げんかか、でほほえましくみていたりするのだが。
リュカ、そしてディアの座っている机にやってきたこの女性。

正真正銘、天界に属しているそれも一応は高位神の一人、戦女神のアテナ、その当人――

しかし、よもやこの場に神が降臨してきているなど、当事者達以外誰もしるはずもないのであった……

光と闇の楔　～使途の役割？～（前書き）

めずらしく？一人（？）の登場人物がしばらく出張ってますv
でも彼の出番もとりあえずここで一区切り～
こういう仲間（部下？）もいますよ～という意味合いで彼はだしてますので。

「だからって何で僕が面倒みることになるのかな～」
澄み渡った空を眺めつつ盛大にため息がでてしまう。
「たのむっ！他にまかせられる人がいないんだっ！」
「…でもさ～？ゼウス。僕だって暇じゃないんだよ～」
「ティア様の許可はもらった！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・主様…僕にどうしろっていうのさ・・・」
補佐官ティアの許可をもらった、ということはすなわち主の許可をもらった、と同意語。
というかそもそも主と補佐官は同一。
目の前の彼はそんなことを知るよしもないが。
「…ま、いいけどね～。最近はまったりしてるんだし」
天界の中においても彼ほど自由気ままな存在はいないであろう。
目の前には、先日産まれた、という小さな幼女が一人。
しかしどうして赤ん坊の世話をしなければならないのか。
「ま、いっか」
どうせ暇だし。
そう結論づけ、産まれた女神の世話をすることにきめるリュカ。

彼のいいところはあまり悩まない、流されるまま…という点、なのかもしれない……

「では、リュカさんもあれの捜索にこられたのですね？
　私は先ほどきたばかりなのですが、何かわかりましたか？」
自分で先に確認する前にまずおそらくすでに現場確認をしているであろうリュカにと問いかける。
よもやこの町で育ての親であるリュカにあうなどアテナは思ってもいなかったが。
ゆえに情報を得ようとリュカに対してといかける。
「あ～。アテナちゃん、前もいったけど、先に人の話しき～てたら先入観で感覚にぶるよ～？
　ん～、まあいいけど。情報交換といこうか～」
ちらり、と前をみれば無言で自分のことはいうな、という視線がむけられている。
まあ、彼女はティアマトの姿を見知っているがゆえに結び付けて考えてもおかしくはない。
…まあ、アテナの性格上、それはありえない、とはわかっているがおそらくそれは念のため、というところなのだろう。
「僕のほ～は～。あっちのほうで意味のない他の血肉をつかった贄で道こじあけてたみたいだね～。
　あ、でもこっちの世界で精霊達の力もあってもう道は完全に閉ざされてるよ～」
正確にいうならば、精霊、というよりは主様によって、だけど。
しかしその言葉を口にすることなくいつもの口調でアテナにと説明するリュカ。
「そう、ですか。こちらのほうの天の道についてはどうにか閉じることができたのですが。
　こちらもまた無理やりに捕えた存在達の力を流し込んでこじ開

けたようです。
　まったく、警備隊の不手際をどうして私が後始末しないといけないんでしょうか……」
そもそも、きちんと見回りをしていれば防げたはずである。
ゆえにアテナのぼやきもあながち間違ってはいない。
第三者からしてみれば、彼らは実はとんでもない会話をしているのだが。
しかしそのことに気付く存在はこの場には存在しない。
なぜならば彼らは周囲のことを一応気遣い、情報交換をするにあたり、天界語にて話していたりする。
この言語、普通の人々が聞いても何か意味のわからない言葉にしか聞こえない。
ゆえに会話の内容がいくらとんでもないこととといえどもその異様さに気づくものはまずいない。
「あはは。なら最高責任者のヴィ～ちゃん、今ごろ騒いでるでしょ？」
そんなアテナの言葉をきき、
ふと天界の秩序を担っているとある女神のことを思い出し笑いながらいうリュカ。
「…ヴィシュヌ様をそう呼ぶのは天界広し、といえどもリュカさんとティア様くらいですよ……
　まあ、そのようですね。というか最近はいろいろとお忙しいようです」
天界の秩序と繁栄を司っている、女神ヴィシュヌ。
そしてまた地上の秩序と繁栄管理、という立場をも兼ねている。
最近は秩序が乱されていることもあり、いろいろと動き回っていることは一応は知っている。
そしてそれはディアもまた知っている。
しかしそれは与えられた役目である以上、しっかりとこなしてもらうより他にはない。

「まあ、とりあえず現場みてみる～？あ、できたら天の道のほうの案内もおねがいしたいな～」
どうせならばどこに開いてどのようになったのか自分の目でみたほうが報告もしやすい、というもの。
「おねがいします。ではそのあとであちらのほうに移動しますか？
リュカ様とならば転移も可能ですし」
本来、天界人はそうそう地界にかかわることはあまり許されていない。
彼らの力があまりに膨大である以上、かかわれば必ずどこかにひずみが生じる。
しかし、天界にかかわりのあるもの同士ならばそんな制約などあってなきにひとしい。
主様はどうなさるんだろ？
そうおもい、ふと視線をディアのほうにリュカが向けると笑みを浮かべてうなづくディア。
ディアとしても天より開いた道を確認するのは早いほうがいい、とはおもっている。
感覚ではわかっているものの、実際に目にするのとでは意味が違う。
そんな二人の視線によるやり取りにまったく気づくことはなく、
「あ。せっかくですし。リュカさん。ここの名物、おしえてくださいませ」
にこっと何ならまったく任務とは関係ないことをお願いしているアテナ。
「あ～、いいよ～」
…伊達に、リュカに育てられているわけではないこのアテナ。
このあたりの食い意地…もとい、好奇心旺盛なところもどうやら譲り受けてしまっている。
まあ、育てている最中、
いろいろと連れ回していたのでそれは仕方がない、といえば仕方がないのかもしれない……

テミスより遥かに北に下り、さらには大海を隔てた大陸にある王国。
ヴルト王国。
沈黙の邪神を主神、としてあがめており、基本は何においても不干渉。
あるものは隠居したものたちが住まう地、とすらいわれている地。
ちなみに、他の神にウルド、という神がいるがその神とこの町とは関係はない。
「う～ん、ヴルトゥームをあがめる地かぁ～、で、ここにできたわけ？」
とりあえず簡単に情報交換を行い、なおかつ少しばかり観光を得て問題の場所に移動してきている彼ら達。
「この地はせんだって国王が代替わりしたようですね。
…まあ、その人物の考えが…言わなくてもおそらく察しているでしょうけど」
のんびりとしながらもいうリュカの言葉に苦笑しながらも答えるアテナ。
「ここは基本、いつも静かな地でもありますからあまり監視する必要もないんですよ」
一応、何かあったときのために天界より地上を監視する役目のものはいる。
この地を守護している精霊は邪神ヴルトゥームを尊敬しており、それゆえにこの地の守護にとあたっている。
ちなみに名前がなかったこともあり、無理をいってその名前の一部をもらったという尊敬ぶり。
その事実をリュカ、そしてディアは知っている。
もっともそのあたりの細かな事情までアテナは知るよしもないが。
「まあねぇ。守護している精霊が精霊だし。とりあえず道の場所にいってみよっか」

ちらり、とディアのほうをリュカが確認してみると
少しばかり離れた位置に移動していっているのがみてとれる。
話しでもきくのかな？
そんなことを思いつつもわざわざ主様の存在をアテナに教える必要もないか。
そう思い直しアテナにと問いかける。
「はい。リュカさんの意見も聞かせてくださいね？」
たわいのない会話をしつつも、先日開いた、という【道】の跡地へと二人して足をすすめてゆくことに――

「…で？何がどうなったわけ？」
とりあえず知ろうとおもえば知ることかできるがひとまず当事者にきくのが一番てっとり早い。
ゆえに、何やら話しこんでいるリュカとアテナから少し離れ、この場の守護精霊を呼び出しているディア。
「…いやあの、何で母様がこられてるのですか？」
しごくもっとも、といえばもっともな台詞であろう。
いきなり何かにひっぱられたかとおもったら目の前にいるのは信じられない存在だったりするのだから。
「魔界のほうから干渉があったみいだからね～。でも手だしはしてないようだけど？いつものように傍観？」
基本、彼らは手だしはしない。
特に彼は。
何があろうと自己責任、その考えで落ち着いている。
まあ天災や災厄などに関しては多少の加護をあたえはしているが。
「まあ、そそのかされようがどうなろうがとりあえず当人の責任、ですし」
実際にそこまで干渉していては成長がみられない。
他者の意見をききそれをどう取り入れるかはそこにいきるものたち

の生き方次第。
ディアの目の前にいる存在は、うっすらとした体付き的には全体を薄い灰色の毛でおおわれており、
まるっこい体にちょこん、とした瞳が二対ついていてぱっとみため、かなりかわいらしい。
見た目のとおりにその毛並みはふわふわで抱きしめていればまちがいなく眠気がおそってくるほど。
「まあ、ルゥトならそういうとはおもったけど。とりあえずやっぱりあちらからの干渉、ということで間違いないわけね？」
とりあえず今一度確認しておく。
「というか、母様がその気になれば何もかもわかるのでは？」
その疑念は至極もっとも。
そもそもその気になればすべてを見渡すことも可能であろう。
「で、どうして母様がこんなところに？」
「内緒♪」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
にっこりとそう言われればそれ以上突っ込みようがない。
ゆえに思わず無言になってしまうその気持ちはおそらく間違ってはいないであろう。
「ま、とりあえず。何があってもルゥトは基本的に不干渉、でいいのかしら？」
「はぁ。ま、そのつもりです。基本的にここにすまうものたちに任せてますから」
何がいいたいのかわからないが、とりあえず基本方針は変えるつもりはない。
ゆえにとりあえず問われたことだけは答えておく。
「わかったわ。じゃ、もうもどっていいわよ？」
「はあ。それでは失礼します？」
どうしてこんな場所にわざわざ出向かれてきたのかもわからないが、

何がききたかったのかもわからない。
しかし自分がそこまで追求する立場のものではない、そう判断し、そのままその姿を周囲の中にと霧散させる。
この地、王都トゥールにおける守護精霊ルゥト。
かの精霊は基本、本当にこの地におけるものたちに関しては不干渉、を管理をまかされた時より貫いている。
かの元となった存在はとある動物。
あるとき邪神であるヴルトゥームに助けられ、そしてその身を死して精霊へ、と願った存在。
邪神、とよばれていても、かの別名は隠居神。
…つまり、神々の中でも俗にいう、ひきこもり神…である……
何しろ天界の仕事に疲れましたので私は魔界に隠居します、といって魔界に転居した変わりものの神なのだから……

「う～ん。これ、つかわれたひとたちの命、どうなってるの？」
「ほとんどが無理やりに引き出されていましたからね。ほぼ即死です」
本来、自らのもつ力の容量はかぎられている。
限界ぎりぎりまでその力を引き出せばそれは死を意味する。
普通は生活してゆくうえでそれらを上手に操りながら生きていくものなのだが。
第三者の手により無理やりにその力を引き出されてしまえばそうもいかない。
「虐殺と力の略奪、どっちがいいのかな～」
どっちもどっち、というような気もしなくもないが、
後者のほうはすくなくとも幾度も痛い思いはしなくてすむ。
何しろ一定の力を無理やりに引き出され略奪された場合、精神の防衛が働くのか基本的には意識を失う。
もっともそれが自らの意思でおこなっている場合はそういったこと

は起こりえないのだが。
「どちらも犯罪ですっ！」
のんびりといったリュカの声におもわず声をあらげるアテナ。
そもそも、他者の意見を無視した行為は【理】に反する行為。
すなわち、世界にむけての反逆行為、とも捉えられる。
自らが生きるために、という理由ならばそれは【理】に反することにはならない。
が、そうでないのならば話しは別。
「うん。やっぱりここからはいってきたやつは王都の中にはいってったみたいだよ～？」
「やはり、ですか。私もそう思いました。
しかしここは私のようなものがはいっても情報がなかなか得られなくて……」
まあ、基本静かな国であることは疑いようがない。
そもそも、ある犯罪、といえばちょっとした喧嘩程度。
もっともその喧嘩で家一件くらいは簡単に破壊されるようなことも多々とあるにはあるのだが……
全体的にのんびりとはしているがこの町に暮らすかぎり、弱いものはいきていかれない。
ゆえに基本的に強いものがあつまって今の城下町を作り上げていたりする。
何しろこの地を守護している精霊が基本的に不干渉、というのもあり、
よく多々と町を魔獣がおそってきたりもする。
ゆえに強くなければこの地ではまず生き残れない。
そして、強さは時としてその個人がもつ特有の気配にも敏感になる。
いくらアテナがその神気を隠していようとも、常人でない、というのは感覚でわかる。
もっとも隠しかたがヘタ、といえばそれまでなのだが……
「まあ、アテナはね～。とりあえず町の仲にはいって情報あつめて

みよ～よ～」
「はい。すいません。おねがいします。リュカさん」
「…前はリュカおに～ちゃんっていってたのにな～」
「ですから！昔のことはいわないでくださいっ！！」
おに～ちゃん、おに～ちゃん、といってまとわりついていた二千年前のことが懐かしい。
ゆえにぽそっとつぶやくリュカに顔をまっかにしてどなるアテナ。
何とも寿命が長くても百年とすこし、力を駆使しても数百年、という存在達がきけば気の遠くなる話しであろう。
淡い金の髪の持ち主に漆黒の髪の持ち主。
対照的、といえば対照的な容姿の男女はそのままヴルド王国の首都バルトへと足を踏み入れてゆく。

「しかし、毎回おもうけど、ここって変わってるよね～」
ここにくるたびに思うこと。
すなわち。
「…まあ、どの世界からも集まってきてますからねぇ～……」
この町というか国の特徴の一つ。
それぞれの【界】になじめないものがなぜか集中してこの国にはあつまってきていたりする。
理由は単純。
この国があがめている神に問題がある。
何しろ天界の神だというのに隠居して魔界の神の地位に一応ついている神など聞いたことなどない。
光の属性だというのに闇にも属している。
ゆえに邪神、ともいわれているわけなのだが。
しかし、ここに一つ問題があるといえばある。
「…この国のひとたちってお祭り騒ぎが好きだからね～……」
間違いなく、他国と戦いを始めようとおもいます。

とでも上から発表されれば、やれひさしぶりに暇つぶしができる、と逆に騒ぎかねない国民性。
いや、絶対にそうなる。
そもそも、以前もそれで地上が大混乱になったことがあったりしたのだからそれはもう確信がもてる。
そのときのことを思い出し、ふとどこか遠くをみつめつつもつぶやくリュカ。
「…あのときは、沈め…もとい鎮めてこいっていわれて…大変だったな～……」
まあそれをほぼ一人で成し遂げた彼も彼だが。
いつもは物静かな国民が何かがあればおもいっきりはじける。
それはまあよくあること。
しかしよくあること、だけですませられないものがこの国にはある。
それでも今まではこの大陸のみでの戦いだったりしたのでまだマシ、といえばマシなのだが……
「でもやはり、一人より二人のほうがいろいろと情報はきけますね」
「ん～。まあ、異なる気配のものが二人いればお仲間、という認識ができるんだろうね～」
そもそも種族というか属性から何もかもがリュカ、そしてアテナは異なる。
そんな二人が共に行動していれば、彼ら…
この国の存在達と同じような流れ存在、という認識になっても不思議ではない。
彼らは基本、よそものには冷たいが、仲間だ、とおもったら気をゆるす。
ゆえに先日、一人でアテナがここにきたときにはあまり情報は聞き出せなかったのだが。
そのせいかアテナ一人で聞き込みしたときよりも世間話をいろいろと聞かせてもらえているこの二人。
「しかし、まだ彼らのもくろみはわかりませんね～」

「まあ、もし戦争はじめるのなら先にここがお祭り騒ぎになるからわかるとおもうよ～」
毎回のことながら戦争を始めるときこの国は完全に国をあげてのお祭り騒ぎとなる。
命を何だ、とおもってるんだろう？
そうリュカがおもっていたりするのだが、おそらく命の大切さをわかっているものたちは、
皆同じ思いを抱くであろう。
この国の主たる存在達にとって、戦争とは世界に自分達の存在を知らしめる。
そんな意味合いをもっている。
とはいえそんな意味のないことで巻き込まれるほうとしてはたまったものではない。
「とりあえず、今のところの状況はわかりましたわ。私は一度あちらに戻ります。
　リュカさんはどうなさいますか？」
「ん～？僕～？ひさしぶりにここにきたからもうすこし見回ってからにするよ」
このたびはまだテミスにしか訪れていなかった。
せっかくここまできたのだからやはり名物とかはたべておきたい。
「くっ。判りましたわ。それでは、私はこれにて。いろいろとありがとうございました」
アテナとてリュカとともにいろいろと見て回りたいのは山々。
されど早く報告をもってかえらなければ、それでなくても自分の仕事が山のようにたまっている。
それゆえに、少しばかり悔しさを顔にだしつつ、ひとまずお礼をいっているアテナ。
「使途のお仕事、お疲れさま～」
そんなアテナに対してにこやかに答えているリュカ。
何らかの役割、もしくは役目をもって別の【界】にやってきた存在

のことを通称して【使途】と呼ぶ。
それらは彼らの【王の使い】、という意味合いをこめて使われ始めた言葉なのだが。
ちなみに、伝道師達もまた【使途】という認識がされている。
これはどの界においてもほぼ共通した呼び方なのでひとくくりにして表現するのによく使われる。
とりあえず、アテナを町の外にまで送り届け、完全にこの場からいなくなったのを確認し、
「…んで、結局主様には気づかなかった…と。主様、わざと自分のことといわなかったでしょ？」
自分の横にいつのまにかやってきているディアにとりあえずわかってはいるがといかけるリュカ。
「ん～。というか、いまだにあの子、気配探知が苦手のようね」
「いやいや。主様が気配完全に同化させてたら絶対にわかんないってば」
さらっというディアの台詞に思わず突っ込む。
そもそもこの姿ですら仮のものでしかないのである。
それがわかっているからこそ突っ込まずにはいられない。
「ま、せっかくここにきてるんだし。そのあたりで何か飲みつつでも話しましょ」
「そ～いえば。主様。学校にかよってるらしいけど、今日はどうしてるの？」
「あっちにも姿、あらわしてるけど？問題ないわよ？」
「…きいた僕が愚かでした……」
その気になればいくらでもその姿をどこにでも表すことが可能、というのは知っている。
知ってはいるがどうしても目の前にいればそれを失念してしまうのは仕方がない。
実際に、ディアは今こうしてリュカともにいるにはいるが、同時刻、きちんと授業もうけていたりする。

よもや同一の存在が同時に二か所、存在している、とは誰も夢にも思わない。
ディアにとってはその意識を広げるだけなのでさしてまったく問題はないのだが。
この【地】にいる限り、あるいみディアに不可能はないのだから……

「とりあえず、確認してみたけど。やっぱりまた戦争おこすつもりみたいよ？」
こじんまりとした小さな食堂。
時間が時間なので客の入りはまばら。
その食堂の奥の一角に腰をおろし、それぞれ飲み物を注文しくつろいでいるディアとリュカ。
当然アテナは天界に報告にもどっていったのでこの場にはいない。
「あ～。でもなんでまた？いきなり？」
何となく予測はつくがまあ、彼らのやりそうなことである。
というか確かリーダー達も似たようなことをしようとしておもいっきり失敗してたけど。
そんなことを思いつつも、気にはなるので問いかける。
「面白い…もとい、困ったことに神託のような形でささやきかけたみたいよ？
　ほんと。あきれた挑発というか提案にのって戦争をしかける…相変わらずといえばそれまでだけど。
　どうして毎回、毎回知的生命体達はそういう思考におちいるのかしら？」
あっさりとだまされるような上司がいれば下のものとしてはたまったものではない。
しかし現実にそうなっているのだから情けないにもほどがある。
どうでもいいが下手に知恵をつけたぶん、愚かなことをする行為はどの種族にも当てはまる。
それゆえに呆れ半分に半ば本気でそんなことをつぶやくディア。

彼らの思考まで干渉していない。
ゆえにこそあきれずらはいられない。
「あ～。なんかわざわざ戦争しかけるっぽいの？何かんがえてるんだろ？ここの国王？」
リュカの至極もっともな意見はただただ風にと流される。
「ま、いいんじゃないかしら？身の程をしるきっかけにもなって。
まあ、全体責任でもあるしね。上の暴走をとめられなかったのは下のものの責任でもあるんだし」
何やらさらっと恐ろしいことを聞いたような気がするのは気のせいか。
「え？あ…あの？主様？…とめない、んですか？」
というか彼女のことだからてっきり止めるか…ともおもったが。
だがしかしこういうときの彼女の性格は伊達に長年付き合っているわけではない。
リュカとてよ～～くわかっている。
「あら？面倒なことをしでかしそうな子供たちをしつけられて、なおかつ反抗期な子供たちをしつけられて。
一石二鳥、でしょ？」
にっこり。
そうほほ笑むディアの目は心底楽しそうにほほ笑んでいたりする。
「……主様…鬼……」
ディアの言いたいことはわかる。
わかるが、さらっといわないでほしい、それが本音。

というか、どうして毎回、毎回、主様と直接あったら面倒事に巻き込まれるんだろうな～…僕……
そう、リュカが内心思ったのは…おそらく間違い…否、気のせいではないであろう……

光と闇の楔　～使途の役割？～（後書き）

そろそろちまちまと神々や魔界関係の名前がではじめてます。
彼らの名前の由来はそのうちに伝道師たちの会話でやるつもりなので今はわざと説明ははぶきます

※お気に入り登録してくださったかた、また読んでくださっている方々、ありがとうございますv

光と闇の楔　～フォボス火山での儀式～（前書き）

ようやく精霊王さん達がでてくる回に突入開始ｖ
といっても長さ的に精霊王は今回になるか次回になるか…打ち込みしてみないと不明です・・・・

光と闇の楔　～フォボス火山での儀式～

「えええええ～！？」
なぜか実家からいきなり連絡がはいってきたとおもったら。
どうでもいいが幻影珠に映像ごとはめ込んでおくってきてほしくはない。
そもそも、この珠が一ついくらするとおもっているんだ、うちの親。
そんなことをおもいもするが、送られてきた内容が内容である。
『あなたも水の精霊と契約し加護をいただいたそうじゃない？
　ならやっぱり卒業するのをまたなくても契約の儀はすませられるとおもうのよ』
にこやかに珠から浮かび上がるようにいってきているのは見間違えようのないほどに知っている人物。
「…ほんと、どこから情報をすぐさま得るのですか…お母様……」
この母親はいったいどういうツテをもっているのだろう。
ゆえに通じない、とわかっていてもおもわず突っ込みを入れるケレス。
常々そんなことをふとおもってしまうケレスはおそらく間違ってはいないであろう。
『次のお休みの日にむかえにいくからね～』
「って、えええええ！？」
わ、私の意見はぁぁ！？
文句をいうよりさきにどうやら時間が切れたらしく、ぷつっと映像が途切れ、
その場にころん、と転がる内部に光がきらめく不思議な水晶玉のようなものが取り残される。
「い…いつも、いつも子供の意見きかずに何でも物事をきめないでぇぇ～～！！」
これが子供の意見、でなく他者の意見、にも当てはまるのだからタ

チがわるい。
そういうケレスの叫びは…ただただ、風の中にととけきえてゆく……

光と闇の楔　～フォボス火山での儀式～

「…は？」
昨日の一件のときもこちらに姿を【模して】いたから何か実家から連絡がきた、とは知ってはいる。
いるが、おもわず目が点になってしまう。
結局のところ、アテナは天界にともどり、今後の対策を話し合うことにしたらしく、
そしてまたリュカはリュカで魔界にもどり、天界からの道のことに関して組織に報告するとのこと。
まあそうするように指示をだしたのはほかならぬディアなのだが。
「だから。この間の精霊の加護がなぜかお母様に知れてて。
　それでもって卒業前に儀式うけろっていう連絡だったのよ」
いや、まあそれはきいた。
いきたが、だがそれよりも。
「・・・・いや。私がききたいのは、それをいいにわざわざこのクラスにきたの？」
わざわざA組の彼女がC組にきていることが信じられない。
というかたしか今A組は授業中のはずなのではないだろうか？

Ｃ組は本日の授業はなぜか自習、となっているので問題がない、といえば問題ないが……

「ヘスティア先生にいったらいいっていったし」

今、Ａ組はＣ組の担任であるヘスティアの担当する授業中。

一応ケレスは教師に許可をとりなぜか授業中にこの場にやってきていたりする。

「……ヘスティア先生、何かんがえてるのかしら？」

きっぱりとそういわれおもわず呆れてしまうディア。

事実、許可をしているからこそここにケレスがいるのであろうが……

とりあえずここにケレスがやってきた理由はわかった。

どこの教師が授業中に抜け出してもいい、と許可するというのであろう。

「で、何で私にわざわざその話しを授業を抜け出してまでいいにきたの？」

わかったが。

問題はそこ。

そもそも話しならば寮にもどってからでもいいような気がする。

もしくは授業がおわってからか。

何となくだがとある可能性がしてしまいなかったことにしたい。

切実に。

だけども聞かなければおそらく彼女はいきなり話しだしてしまうであろう。

これはもう確信。

「何いってるのよ！ディアにもフォボス火山にいってもらうからよっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

何となく予測はついていたというか何というか。

目の前の彼女はほんとうに意表をついた行動をしてくれる。

ゆえにこそおもわずきょとんとして再度問いかける。

しかもおもいっきりさも当然、とばかりに力説してくれている。
周囲の生徒はといえば、
「ええ!?あの死の火山に!?」
「ディアさん、あなたのことはわすれないわ」
「あ。火山帯でとれる金剛石をよろしく～」
何やらとてつもなく無責任、ともいえるような会話がなげかけられてきているが。
さすがに自習時間中にいきなり、
『ディア!?いるっ!?』
といってがらっと扉を開き教室にはいってきていきなりディアの真横にいったケレスはかなり目立つ。
ゆえにクラス中の注目の的になっていたのも一つの理由、であろうが……
「何で私が一緒にいかないといけないわけ?」
そもそもどうして自分が一緒に行かなければならないのか。
わざわざ出向いていけば自分に一番近い彼らはおそらく間違いなく気づいてしまう。
そうなったら今後のことにも影響がでかねない。
…とくに、かの性格を考えればなおさらに。
「何いってるのよ!?私とディアは一心同体でしょ!?」
「いつ一心同体なんて話しになったわけ!?」
「今っ!!それにバーティー組むってそういうことよっ!」
「いや、違うからっ」
出会ってまだそれほどたってはいないがケレスの性格は大体把握している。
…こ、この子…ヴリトラと出会ったら意気投合しそうよね……
ふとそんなことを思い思わず最近であっていないかの存在に思いをはぜる。
思いこんだら一直線。
しかも周囲を巻き込んで。

…ヴリトラの系統の魂でなかったとおもうけど……
ふとそんなことすら思わずおもってしまうディアはおそらく間違ってはいないだろう。
それほどまでにかの存在とケレスの性格はよく似ている。
だからこそどこかほっとけない、というのもディアからしてみればあるのだが。
竜族の神である神竜ヴリトラ。
昔から甘えん坊でありやんちゃ。
産まれた当時はよく大地を闊歩しては焦土とかしていた。
ふとその当時のことを思い出す。
「というわけで、今日、授業がおわったらお母様がむかえにくるからっ！」
「って今日なわけ！？」
いや、今、たしか休みの日に迎えにくるとかいってなかった？この子？
そうディアがおもっていると、
「お母様の休みの日に迎えにくる、イコール、それは休みの日に火山につれてくってことなのよっ！
　つまり、差し引き計算しても今日には必ずくるのよっ！
てことでディアも先生にお休みの許可とってるからっ！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「って、もう決定事項！？というか勝手に人の休暇願だしたわけ！？」
ほんとうに意表をついた行動をしてくれる。
だからあきない、というか面白い。
人の心のうちまではディアとてわからない。
のぞこうとおもえばできるであろうがそうはしていない。
「だから、先生がディアのところにいってもいいっていって許可くれたんだもの」
「…ケレス…人の意見きかずに勝手に……」

「だって、他に頼れる人いないしっ！あの死の火山にいくのよっ！？
　お母様のことだから絶対に私が誰か連れをつれていかなかったら一人でいってらっしゃい！
　でおわりよ！？何の準備もさせないままによっ！まだ幼い私をあの場所に放り込んだお母様よ！？」
あのときは死ぬかとおもった。
本当に。
そのときのことを思い出しながらも瞳をうるうるさせて力説しているケレス。
哀れに思った火竜の一人があの場から連れ出してくれなかったら今のケレスは間違いなく存在していない。
「ディアさん、いってあげなよ～」
「そうそう。火山帯にできるっていう水晶よろしくv」
「私は金剛石ね～」
そんなケレスの台詞に同情したのか周囲に生徒達があつまりディアにとそんなことをいってくる。
「って、水晶とか金剛石って…採取してこいってこと？」
「「うん」」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
たくましい、というか何というか。
まあたくましくなければこの学園に通えない、というのもあるのだろうが。
何か断れない雰囲気、とはおそらくこういうことをいうのであろう。
「…は～。わかったわよ……。だけど奥まではついていかないからね？」
奥までついていってサラに抱きつかれてはたまらない。
そんなことにでもなればごまかしようがなくなってしまう。
そんなことを思いつつも妥協し、ため息をつきつつも肯定の意を吐き出すディア。
「ありがと！ディア！さすが親友！私の生涯のパートナー！」

「で、結婚式はいつ？」
「新婚旅行は？」
「って、何のりつっこみしてるのよっ！あなたたちもっ！」
何やらノリのいいクラスメートがいるらしい。
ケレスのパートナー、という台詞に突っ込みをいれなぜか結婚式、とまでいいきっていたりする。
まあこの世界、たしかに同性の婚姻は認められている。
いるが…どこをどう解釈したらそういう系統に捉えられるのであろうか。
何だかここまでわきわいあいとクラスメート達と会話したのもこれが初めてのような気もしなくもないが。
しばしそんなたわいのない、それでいて騒がしい会話がＣ組Ａクラスの中で繰り広げられてゆく……

「……ねえ。ケレス…ひとつ、きいてもいい？」
「…きかないで。いいたいことはわかるから……」
ざわざわざわ。
この場にはほぼ全員、といっていいほどに学校にかよう生徒達が集まってきていたりする。
中には教室の窓からこちらをみている生徒達の姿も垣間見える。
目立っている。
はっきりいって。
今、二人がいるのは学校の正面にあるちょっとした校庭。
広さはかなりあり、何かあったときなどはこの場が臨時の避難所などに設定されている。
ちなみに国を挙げての毎年のお祭りもこの校庭を起点として開かれる。
この国のお祭りは様々な出し物などを各ギルトに所属している存在

達が技術を競い、
そしてその表現力などをも競う場ともなっている。
そして祭り最終日に行われる投票で最高点をとった存在には賞金と賞品が手渡される。
つまりかるく小さな村ならば一つや二つくらいはいるくらいの広さを誇る校庭、なのだが。
その校庭の一角になぜか紅くそびえる山がでんっと座りこんでいるのはこれいかに。
しかも、ぐるぐるとノドをならし、その紅き鱗とゆらゆらと揺れるシッポ。
「…ねえ。ケレス？あなた、竜にあったのあのとき初めてとかいってなかったかしら？」
「緑竜にあったのはあれがはじめてよっ！」
しかもあの竜は野生、すなわち人と契約し人の世界に溶け込んでいる竜ではなかった。
ディアの素朴な疑問にすかさず答えているケレス。
まあ確かに。
彼ら…すなわち先日であった緑竜のクレマティスとアルニカ夫婦と比べれば小さくはある。
あるがこんなおもいっきり人里というか町中に竜がやってきている、という事が重要。
そもそもここは王都の一角。
しかも近くにはお城もある。
そんな中、いきなり竜族の中でも気性が激しい、といわれている火竜がやってきたらどう思われるか。
当然町中はパニックなりかねない。
パニックになっていないのはおそらく火竜自体に認識を周囲に溶け込ませる術がかかっているからだろうが。
それでも町中に竜が舞いおりる、などあまり聞いたことがない。
しかも何の連絡も前触れもなく…である。

「…ねえ。ケレスのお母さんっていったい……」
「いわないで。そ～いう人、なのよ……」
まさか学校に竜をよこす、とはやりかねないかもしれない、とおもっていてもやってほしくなかった。
それがケレスの本音。
ディアがその気配に気づき、精霊達が火竜が近づいてきている、と言葉を変えて伝えなければ、
おそらくケレスは信じたくなかったし信じられなかったであろう。
しかし目の前の真実はどうみても覆しようがない。
「…まちがいなく、うちで契約してる火竜のひとりだし……」
は～……
竜の個別認識くらいはいくらケレスとてわかる。
というか幼いころから家につかえる竜の認識くらいはできなければならない。
といってできなければ食事抜き、ということもざらであった。
ゆえにもう必死で覚え、どうにかこうにか認識はできるようになっている。
この世界での竜の数え方は基本、一頭、二頭、という形となっている。
知能がほぼない龍のほうはといえば匹、という数え方になっていたりするのだが。
もっとも、わざわざ区別せずに大概の存在は一体、二体、とまとめて呼んでいたりするのだが。
ケレスが、ひとり、と称したのにはわけがある。
歳を得た力ある竜はその力において人型を成すことができる。
ゆえに、そのときのことをもかんがえて、『〇人』という呼び方をしているに過ぎない。
「じゃあ、やっぱり、ケレスのいってたお迎えって…このこのこと？」
というか竜をわざわざ迎えによこすその感覚がいまいちよくわから

ない。
まあ確かに昔、竜族と人族が仲良く共存していたときには見られていた光景ではあるが。
ここ最近はそのような光景はあまりみない。
「みたい。とにかくここにいつまでもこうしていても逆に目立つばかりだし。いきましょ」
「…私、まだいくっていってないんだけどな～……
まあ、仕方ないけど。だけど私は直接には乗らない、からね？」
直接触れればまちがいなく判る、であろう。
「？直接？どういう意味？」
「空気のクッションの上にでもすわってくわ」
「…そんなことまでできるわけ？」
本当はそのままふわり、と浮かんで飛んでいってもいいのだが、いかんせんそれはかなり目立つ。
ならば普通に乗っているように見せかけたほうがまだ目立たない。
とりあえずこのままでは騒ぎが大きくなるばかり。
それゆえに半ば仕方なしとばかりに竜の背に乗り込むケレスとディア。
「くぅおおおっっっっっ！」
ケレスが背に乗った感触を確かめた後、大きく一咆えしそのまま、ばさっ。
その力強い左右の翼をはばたかす。
しばし周囲に火竜の翼によって発生した風による砂埃が周囲に吹き荒れる。
やがて二人を乗せた竜が上空に羽ばたきその姿を点とさせるころ、
「…お～！すげー！俺、初めて竜ってみたぜ！」
「わたしも、わたしも～！！」
何やら違う意味で騒ぎだす学生達の姿が学校内において見受けられてゆくのだが。
当然、ケレスはそのような騒ぎになっているなど知るよしもないの

であった……

ごおっ。

周囲に何ともいえない熱が吹き荒れる。

フォボス火山。

別命、死の火山、といわれているだけのことはあり周囲は熱気につつまれている。

どこからともなく地下より水蒸気があふれ出しており、ときおり硫黄のにおいも鼻につく。

周囲にはときおり吹き溜まりのようになっている溶岩の窪みのようなものも存在し、

そこらかしこに様々な生物の骨が散らばっていたりする。

「あら。おそかったのね。あら？そちらの子は？」

そんな中、まったく汗もかかずにのんびりとなぜかその場に椅子などを用い、

優雅に机の上においているティーカップを手にしている女性が一人。

舞いおりてきた竜の背にのった二人の姿をてとり、そんなことをいってくる。

「…お母様、いきなり火竜をよこすなんて、もし騒ぎになったらどうするのですか？」

「あら。大丈夫よ。騒ぎになってもその子はそこいらの国の兵士に負けるような子ではないわよ？」

そういう問題ではない。

ないが本気でそれをいっている、とわかってるからこそ頭をかかえてしまうケレス。

「…お母様……」

下手をすれば宣戦布告、ともとられかねない行為である。

なのにそれを面白そうだから、という理由で毎回、毎回やられてはたまらない。

「それで？そちらの子は？」
「あ、はじめまして。私はディアといいます。総合科に所属しています」
あえて何組、とは説明せずに、ケレスの母親らしき人物にぺこり、と頭をさげるディア。
ケレスの母親、と呼ばれた人物はケレスと同じく紅き髪をしており、そしてその瞳の色もまた真紅。
対のルビーのような輝きをもった瞳の持ち主。
全体的な感じる雰囲気は温和で人あたりがいいようにみえなくもないが、
その雰囲気と性格は似ても似てつかない、とはケレスだけでなく彼女のことを知っている誰もが口をそろえていう言葉。
「まあ。ケレス。お友達ができたのね？ここにまでつれてくるなんて。
　ケレスったら一人で死ぬのが嫌だからってお友達まで巻き込むのね～」
「…お母様、死ぬのが確定ですか？確定なんですか！？」
「あら、冗談よ」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
さらっといわれおもわず無言になりつつも視線のみを交わすケレスとディア。
「まあ、せっかくなんだから。それじゃ、いってらっしゃいな。ケレス。
　かえってきたら私の特性の紅茶を飲ませてさしあげますわ」
「全力で遠慮させていただきます。お母様。
　お母様の特性、というのは様々な毒草などもブレンドされた紅茶ですので」
「あら？毒耐性をつけるのにはいいのに」
彼女が用意していたのは、トリカブトの根とスズランの根をブレン

ドしてある紅茶。
まず常人が口にすればまちがいなく死にいたる。
すぐさま解毒をしてもその量によってはかなりあやしい。
「…いつも、こうなの？ケレス？」
「うん……。なのでディアもお母様のだすものはまずたべないでね。もしくは解毒剤用意しといて……」
「あ～……」
何となくではあるがケレスがどうして一緒にきてほしかったのか納得してしまう。
たしかに一人だとまちがいなく相手のペースにのまれてそのまま何か口にしてしまっていたであろう。
おそらく家でもそのように生活していたのであろうことは用意に予測はつく。
しかしここに第三者がいることで少しは話題をそらすことができる。
「とりあえず、お母様。これより儀式をうけるために潜るのでよろしいのでしょう？」
「まあ、まあ。やる気になってくれてうれしいわ。お母さん、じゃあ、お祝いの聖水を…」
「それもいりませんっ！どうせ魔よけでなく、魔ヨセの聖水なんでしょう！？」
「あら～。せっかくのお母さんの親切な行為を……戦闘を経験させて強くさせたい母心なのに…」
「そんな心はいりませんっ！…ディア、このまま魔ヨセの香水撒かれないうちにはやくいきましょ」
このままここにいてはまちがいなく母はあの香水をつかう。
魔ヨセの香水。
それは魔獣たちが好む匂いを発しいやでも周囲にひきつける。
しかも興奮状態となっている彼らは問答無用で挑んでくる。
それでなくても溶岩地帯にはいるのにそんな厄介なものは御免こうむりたい。

何やらほのぼのとした母子のやり取りをかわし、どこか母子の会話がずれているような気もしなくもないが、
とりあえずそのままディアとともにケレスはこれ以上母が何かしでかさないうちに洞窟の中へいかないと。
そう心に決意しまずこの場からの脱出をこころみる。
そんな素直に洞窟の中にはいっていった二人をみつつ、
「あらあら。ケレスったらてれちゃって。別にお友達がいてもお母さん特性紅茶のむくらい大丈夫なのにね～」
どこか本気でずれたことをいっているケレスの母の姿が
その場においてしばし見受けられてゆくのであった……

伊達に死の火山、といわれているわけではない。
「ああ。そろそろ噴火が近いせいか」
周囲には硫黄のにおいが充満し、ときどき微弱ながらに大地が震えている。
この辺りには様々な種族の集落も存在していない。
この火山の周囲にはぐるりと取り囲む窪みのような深い断崖絶壁があり、
万が一火山が噴火しても流れ出した溶岩は大概その絶壁の中にと吸い込まれてゆく。
もっともその絶壁の果てはとある場所に繋がっているのだが。
容量を超えてその窪みより溶岩が流れ出したとしてもその前にある巨大な湖にて冷却される。
ここが死の火山、といわれているのは
人が通常でたどり着くにはかぎなく不可能に近い立地条件であることも一つの要因。
「ディア、あなたは平気なのですか？」
母親から逃げるため、とはいえ無理やりといっていいほどにこの洞窟の中に入り込んだ。

この洞窟の先は伝承では地下深くまで続いているらしい。
そしてその一番最深部に火の精霊王が鎮座している、と伝えられている。
「何が？」
「ここの空気、ですっ！水の結界を施してはいますけど、何というかこう息苦しいというか……」
水の結界だけではたしかに空気の浄化まではできないであろう。
まあ水の成分により多少毒性が緩和されることがあれども完全に取り除けるというわけではない。
「水と風の結界を同時に纏わないから」
「ど…同時？」
「そ。どうじ。まあとりあえずは体の周りに水を張り、その外に風を纏う感覚をもってみてやってみて？」
風にて毒性のある大気を霧散させ、さらに水分により空気をさらに清める。
そうすることにより人体に及ぼす影響が極端に減らせられる。
術の中に解毒などといった体に害を及ぼす成分を取り除く術はあれどもそれも完全ではない。
それらはあくまでも外部から取り込んだもの、に通用するものでじわじわと取り込むものにはあまり効果はない。
正確にいうならばちょくちょくその術をほどこさねばまったく意味がない、ということでもある。
「まあ、まだケレスには難しいかな？…仕方ないわね。風よ」
ふわっ。
そうディアがつぶやくとともに前触れもなくケレスの体全体を柔らかな風の流れが包み込む。
「え？で…ディア？今の……」
「ただ、ケレスの周囲に風の発生を促しただけよ」
「いや…だけって……」
風の発生を促す、などと風の精霊でもないのに簡単にできることで

はない。
そもそも、魔道具の一つも使ってなどいない。
それとも服の下とかにそういった道具を身につけているのかしら？
ディアの素朴な疑問はいろいろつきない。
「それより。ケレス。お客さんがでてきたみたいよ？」
「……え？…なに…あれ……」
目の前の道をふさぐかのようにうねうねとうごいている物体。
どうみても溶岩の塊、にしかみえないが、それがどうしてこうして意思をもったように動いているようにみえるのか。
「何、って。溶岩タイプのスライム、じゃないの」
「…はい？」
たしかに話しには聞いたことがある。
あるが…このちょっとした人間の大きさ程度まである個体は一体全体どういったらいいのであろうか。
ゆえにケレスの間の抜けた声も仕方がないといえば仕方がない。
通常ならば普通はさほど大きくない、というのが定説、なのだから。
「溶岩タイプの魔獣には氷の術が有効よ」
「って、ディア～！何そんなのんびりとそんなこといってるのよ～！って一体じゃないぃぃっ～～！！」
よくよくみればうねうねとそんな個体が…数体。
まだ洞窟にはいってさほど進んでいない。
にもかかわらずこの出会いはケレスにとっては予想外。
確かにこの洞窟の中には様々な魔獣がいる、とはきいている。
いるが…
「こんな大きな魔獣なんてきいたことがないぃぃ～！」
「？え？精霊王達がいる場所の魔獣たちって基本、通常の魔獣より数倍大きいのは常識よ？」
ケレスの叫びと、きょとん、としたディアの台詞が何より対照的で印象深い。
「…はい？ってそんなの初耳よぉぉ！？」

「え～？精霊達の力が強い、すなわち自然界の力もまた濃いいから自然と大きくなるんだけど……」

少し考えればわかりそうなものなのだが。

「ま、とりあえず、いきましょっか」

何やらさけんでいるケレスをみて苦笑し、ふいっと手を横にとむけるディア。

それと同時、ディアの手の平が一瞬青く光ると同時、次の瞬間。

先ほどまで何ももっていなかったはずのディアの手になぜか一振りのムチらしきものが握られていたりする。

「…ディア。少しきくけど、それ、何？」

「何、って、見てのとおり。氷の鞭」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうやってだした、というかどこにそんなものをもっていたのか。

つみっこみたいのは山々。

が、しかし。

「ほらほら。攻撃してくるわよ？」

「え・・？んきゃぁぁっ！？」

二人のやり取りをみてとり、獲物がきた、と判断した魔獣たちは一斉に二人のほうへと意識をむける。

そのまま溶岩の塊を吐き出すもの、突進しようとしてくるもの。

個体によって攻撃の様子は様々。

「さってと。すこしばかり舞いでも踊りますかね」

どちらにしてもこの魔獣たちはここに淀んだ気により生れ出た存在。

この地で命を落とした存在達が溶岩に入り込み、そして仲間を増やそうと、または同じ目にあわそうと。

そういった負の気しかもっていない輩達。

ゆえに容赦する要素はまったくない。

ぱしっ。

手にした氷のムチをかるくのばし、にこやかにほほ笑みつつも言い

放つディア。

ディアのもつ氷のムチ。
それは絶対零度の氷であり、触れたものは瞬時に瞬く間にどんな存在ですら凍りつかせてしまう。
というあるいみ究極の武器でもある。
しかし、当然、その事実をこの場にいるケレスは知るよしもない……

光と闇の楔　～フォボス火山での儀式～（後書き）

しかし最近、仕事おわって打ち込みしてたらかなりねむくなっている…

毎日更新…眠気にまけていつか途切れるかも（汗

光と闇の楔　～火の神殿と隠れ里～（前書き）

客観的にあくまでなるべく固めにしてってたらなんかメリハリないなぁ？

まあとりあえず固定的にこのお話しはやってみよう、という感じの挑戦だし……

まあ、いろいろと試行錯誤のうちの一つ、ということで……

ピキッ…バシバシイッッっ！
有無を言わさない何ともいえない音が周囲に響き渡る。
「…いやあの、ディア？それ…何？」
先ほどディアがどこからか手にした謎のムチらしきもの。
氷のムチ、とはいっていたがどうしてそれに触れただけで相手が瞬く間に凍りつくのか理解不能。
「え？だから氷のムチだってば。触れた存在すべてを氷の彫像にするだけの代物よ」
「じ…十分すぎるでしょうがっ！というか何それ！？何その最凶、最悪の武器はっ！？」
触れただけで、というのにおもわず叫ぶケレスの気持ちはおそらくまちがってなどいない。
急激に氷の彫像と化したさきほどまで溶岩の魔獣であったそれはその急激な変化に耐えられず、
しばらくすると
パキイッン…
透き通るような音をたてて木端微塵に砕けてゆく。
ちなみにこの現象は物質的な器をもっている存在であればほとんどのものに共通しておこる。
「ほらほら、さわいでないで、どんどんこいつらでてくるわよ？」
たしかに周囲の溶岩らしき塊からうねうねと溶岩スライムもどきは誕生、もしくは発生しているようだが。
だが、しかし。
「なんでそんな物騒なものもってるのよぉぉ～～！！！」
ケレスの叫びに答えてくれるものは…この場には…いない……

くるり、と回転するたびに周囲に飛び散る氷の粒。
それらは周囲の熱気とあいまってきらきらと宝石のごとくに輝いている。
「昔この現象をダイヤモンドダストっていってた存在達がいたわね～」
その光景をみてふとつぶやくディア。
まあその現象と今のそれとではかなり異なるが。
「…ねえ、ディアってもしかして、もしかしなくても、強い？」
そういえば、以前の屋敷探索のときにもあっさりと何か解決していたような気がしなくもない。
ケレス自身はよく覚えていないのだが。
「私？私は強くないわよ？だって大姉様とかにはかてないもの」
というかかの存在がいなければ自分もこうしていられはしない。
「姉？ディアって姉妹がいるの？」
「いるわよ？大姉様を初めとして私を含めて全部で十ほど」
「…大家族、なのね…」
「そうかな？私たちはけっこう少ないほうだとおもうけど」
おおい場所ではもっとたしか数があったはず。
たまたま自分達のところは生命体が誕生するほどに意思が固定されたのがその数であっただけ。
ケレスとディアの認識は根柢から違う。

しかしケレスは当然そんなことを知るよしもない。
また、ディアからしてみても自分の概念とケレス達のもつ人の概念が違う、とはわかってはいるが、
ディアの家族のような存在、というのがそういうことになるのだからそうとしかいいようがない。
「それより、そのムチ、いったいどういう仕組みなわけ？」
いきなり出現させたこととといい、おそらく魔術か何かの類の武器なのだろうが、
しかしそういった物をつくれる存在はたしかごくごく限られていたはずである。
ゆえに首をかしげてといかける。
そんなケレスに対し、
「ああ、簡単なことよ。そのあたりにまだ自我ももってない卵達が多々といるでしょ？
　それらを一つにまとめて昇華させ卵の純度をあげてそれに武器、という器を与えてるだけよ」
さらに詳しくいうならば、今でこそ卵、と呼ばれているもの。
かつては原子や分子、と呼ばれていたそれらの密度をあげて形を作り上げているに過ぎない。
つまり、小さな水の分子一つでは普通の目にとまらないが集まれば「水」という形になるように。
氷の元ともいえる卵達を創り上げて一つに練り上げているに過ぎない。
混じりけのない分、そのぶんその効果も威力も格段に異なってくる。
もっとも、この方法はディアだからこそできる技、ともいえるだろうが。
普通はそのようなことをする場合、制約がかかりかならず精霊達の許可をとる必要が発生する。
しかしディアにはそれがない。
ゆえに自在に様々なものをこうして出現させることができるのだが。

「…それってかなり難しくない？」
「そう？特定の卵達を集めてひとまとめにするだけだから簡単よ？」
「いや、それってでもやるにはたしか精霊王達の許可必要なんじゃぁ……」
たしかそのように聞いたことがある。
ゆえにそういった武具を創る存在はごくごく少数である、ということも。
「ん～。まあ、今は制約をつけてるからね～」
何しろ以前、そんな制約をつけなかったらまあ好き勝手しほうだい。
あげくはついに自分達の住まうこの地まで破壊しそうになってしまっていた人類。
だから今いる存在達にはそのようなことを起こさないために制約を設けている。
「…今、は？」
何かいますこしかわった言い回しをしなかったであろうか。
ディアの言葉にすこし引っかかりをおぼえて首をかしげるケレス。
「あ、ケレス。そっちは違うわよ？」
そんな会話をしつつも、洞窟内をひたすら地下に、地下にと進んでいるディアとケレス。
さすがに火山帯、といったところなのであろうか。
一本道でなく道は複雑怪奇に入り乱れている。
正しい道、とおもって進めば元の場所にもどっている、などということはざら。
「え？でも他の道は溶岩で通れないわよ？」
今彼女達の目の前にある道は六本。
しかしそのうちの一本以外はすべて噴き出している溶岩に覆われどう考えても通れそうにない。
「風の通り道を感じれば正しき道はわかるんだけどね。とりあえず道はこうするのよ。
ケレス、浮遊（フロート）できないんでしょ？」

浮遊（フロート）ができれば一番いいのだが。
どうやらその術はいまだにケレスは所得していないらしい。
ちなみに、浮遊（フロート）とは体を意のままに浮かせる術の一つ。
風の精霊の力をつかった術の一つで使いようによってはかなり便利。
中にはその術を用いた移動手段もあったりする。
いまだに完全に空を自由自在にその術で飛びまわれる存在が現れないのは、
全身に風を纏い間接的に空気抵抗を無くすための簡単な仕組みであるがゆえに、
移動するときにかかる様々な抵抗を無力化することまではできない。
つまり、早く飛ぼうとおもえばとべるが、それに応じて体にかかる負荷は取り除けない。
ゆえに物を簡単にうかしたり、重さを減らしたり、という具合に利用されている術の一つ。
いいつつも、手にもっている鞭をかるく地面にピシリ、と打ち付ける。
それと同時。
ピシっ…ピシピシ・・・ッ
音をたてて瞬く間に湧き出ているマグマと、さらには周囲の壁までが凍りつく。
「……さっき、ディアが慣れてないと危ないってこういうことか……」
さきほど自分ももってみたい、とケレスがいったところ、扱いになれていないと危ない。
そうきかされてはいた。
しかしそれを今まさに目の当たりにした、という感じが否めない。
そもそも、普通に地下より湧き出ているマグマまでどうして瞬時に凍らせることができるのであろうか。
どうかんがえても理解不能。
「これも一瞬しかもたないし。さ、氷がとけないうちに、とっとと

道を進みましょ」
この氷も地下より湧き出してくるマグマの熱にかかってはほんの一瞬のこと。
まあ周囲の壁の氷は少々のことでは解けはしないが。
「まあね。これに下手に触れたりあたったりしたら人間の体なんてあっというまに凍りついて。
それでもって木端微塵、よ？」
そもそも、人類の肉体のほとんどは水で構成されている。
それらの水分が瞬時に凍りついたらどうなるのか。
水で構成されている云々、というのは今いきている人類達にいっても理解不能ではあろうが。
しかし、生きているかぎり、それが精神生命体などといった生命体でない以上、命の泉は存在している。
つまり今、ディアが手にしている氷のムチはまさにあるいみ最強の武器の一つ、といって過言でない。
「…そんな物騒なもの平気でもっていないでよ……」
「あら？こういう場所を通るにのはかなり便利よ？足場ができるし」
ディアの言い分はもっとも。
もっともだがこう目の当たりにするほうの身にもなってほしい。
それゆえにケレスは深くため息をつきつつ、
「…なんか、ディアに何いっても無駄のようなきがしてきた。それよりまだ奥は見えないわね……」
すでにあれからかなりの時間歩いている。
それまでにでてきた魔獣たちはことごとく、ディアの手にしたムチにより木端微塵に氷とかて砕かれている。
何だか嬉々として攻撃しているようにみえるのはおそらく気のせい…であってほしい。
そうケレスはおもっているのだが。
「マグマの熱量が少なくなってきてるから。そろそろ中間の間にさしかかるんじゃないかしら？」

「中間の…は？」
さらっと何やら聞きなれない言葉がきこえたような気がしおもわず聞き返す。
「あら？もしかして知られてないのかしら？精霊王達がいる神殿をかねてる場所にはね。
　それぞれ中間地点のような場所があって、訪れるものたちが休めるようになってるのよ。
　たしかここは水晶の間じゃなかったかしら？」
よもやこんな火山の中に集落がある、などと誰も夢には思わないであろう。
ゆえにこそ目をぱちくりさせているケレスに、くすくす笑いながら説明しているディア。
「…ディア、あなた、どこからそんなこと詳しくきいてるわけ？」
「まあ、いろいろとあるからね。私にも」
火属性を無効化する品をもち、この地に住まうものたち。
しかしその存在はほぼ外の存在達には知られていない。
彼らは基本、ひっそりと。
自分達に与えられた役目をこなしつつ、そしてまたそれぞれの精霊王達にと仕えている。
「あ、そろそろみえてきたわよ。ほら。あの水晶の壁がみえる？」
そんな会話をしつつしばらく進むとやがて視線の先に不釣り合いなほどに一部分。
なぜかごつごつした壁とは異なり水晶のみでできた壁。
「これ？これがどうかしたの？」
どうみてもただの水晶にしかみえない。
「ほら、こっちこっち」
するっとそんな水晶の一部にディアが入り込み…
「…って、えええええ！？」
水晶の壁の中に吸い込まれるように入ってゆくディアをみておもわず驚愕の叫びをあげるケレス。

「何おどろいてるのよ？ああ、見た目にだまされてるのね。
　これは光の屈折率を利用して目くらましになってるのよ。ここにきちんと道はあるわよ？」
ぱっとみため、よくよく注意してみなければそこに穴があいていることにはまず気づかない。
複雑に水晶がその場に形成されており、ゆえにぱっと見ただけではここは水晶の結晶が現れている場所。
そうとしかとらえれない。
この穴につながる道をみつけなくても延々と進んでいけばいつかは洞窟の最深部にと到着する。
しかしこの穴の先にある集落を抜けることによりその道のりは大幅に縮小される。
この道を知っているのもはここによく通っている存在達に限られるのだが。
当然、ケレスはそんなことを知るよしもない。
「ほわ～」
まず、水晶の隙間にできた道らしきものにはいってケレスが発した言葉は何とも間抜けなもの。
「ケレス？」
「いや、だって、だってこれすごくない！？」
周囲はすべて水晶の結晶体。
それぞれが壁に生えている光苔の光に反射してきらきらと輝き、すでに地下深いというのに周囲を明るく照らし出している。
「そう？まだ等軸晶系　の鉱物がある場所のほうがいろいろと変化があって面白いとおもうけど」
そもそもここにある物質はかなり強度的には弱い。
紫水晶や紅水晶、青水晶といった結晶体とよばれし結晶がたしかにここには多々と存在している。
ゆえに様々な色にきらめきあい、ぱっと見た目は幻想的な空間、ともみえなくはない。

「まあ、こういった鉱石類は比較的、微量成分の影響を受けやすいから、こういう場にはよくあるけど」
特にここは火山帯。
水晶以外の鉱石、そしてまた特殊系統にはいる岩石なども形成されている。
「とう、じく？何それ？」
「あ～。そういう言い方は今の人達はたしかしないんだったわね～。ま、そういうものだ、というだけのことよ」
「？よくわからないけど」
かつてこの地が科学というものが発達し自然界における物質の根源が解明されていたときに使われていた言葉。
ゆえに今の時代の人々がその意味を知るはずもない。
「あ、そろそろ出口がちかいみたいよ？」
何か話しをはぐらかされたような気がしなくもない。
ディアの言葉をうけて前のほうをみてみればたしかに明らかに道の先が明るくなっている。
やがて水晶の道、ともいっても過言でない様々な結晶体がひしめく空間を抜けた先に、
ぽっかりと広がるちょっとした空間。
ところどころに置物のごとくに削られた様々な宝石類、としかおもえないようなもの。
地面や壁のところどころからつきでている水晶の結晶体。
「おや？おひさしぶりですね。こんなところにお客人とは。ようこそクリス・ヴィレッジへ」
開けた空間に抜けると同時、そんな二人にと声が投げかけられる。
「え？…え？…もしかして…エルフ？」
どうみてもエルフにしか見えないような気がしなくもない。
伝承にある妖精の姿そのもの、といってもいいのかもしれないが。
この場には人の形をした耳のとがった顔だちの整ったものたちと、なぜか羽の生えているものたちの姿がみてとれる。

「ここに人がくるなど、久しぶりですね。…え～と、そちらのか…」
ケレスをみてしみじみとつぶやき、
次にディアにと視線をむけおもわず言葉につまる話しかけてきたエルフの一人。
紅き髪に緑の瞳。
そして肌の色は少しくすんだ紅き色。
ディアのもつ気配は独特すぎて間違えようがない。
ゆえに思わず言葉につまってしまうものの、
ちいさくディアが口元に指をあてたのをみてとり、はっと我にともどり、
「と、とりあえずようこそ。我々は歓迎いたしますよ。ここは滅多と旅人が訪れることのない地。
おそらくこの地にこられた、ということは結晶、もしくは精霊王様に御用、ですか？」
ここにくる旅人の目的はどちらか一方に限られている。
ここでとれる様々な結晶体は純度がよく、それゆえに宝石類としてはかなりの高額で取引される。
また、特に水晶などは汚れをはらう効果もあり、淀みなどを浄化する目的でかなり重宝される。
ゆえによくこの地にも命知らずの存在達が一攫千金を目指してやってきていたりするのだが。
この地に訪れるものは、基本彼らが外にでたときにたまた見つけたけが人などがほとんど。
五体満足でこの地を訪れるものはそうそういない。
「え…ええと……」
話しにはきいたことがあるが、エルフにあうのは初めて。
ゆえに多少緊張気味のケレス。
「この子はサ…もとい、火の精霊王と契約の儀式のためにここにきてるのよ。
私はちょっとなんでかたのまれたので鉱物の回収…でなかった

採取」
「儀式？…ああ、どこかで感じたことのある雰囲気、とおもいましたら。
　あのアストレア家の家系ですか。母君はもしかしてアリス殿ですか？」
アリス。
アリス＝アストレア。
それはたしかにケレスの母の名前である。
「え、そうですけど……」
「なるほど。やはり、ですか。ならここまでこられたのも納得ですね。
　いやはや、アリス殿にしろあなたにしろ人にしておくにはおしいですね」
どちらも傍にいる存在が存在。
そういう意味合いをかねてそういっているのだが。
「あの？母を知っているのですか？」
ケレスとしては戸惑うしかない。
というかこの口調だとよく知っているような気もしなくもない。
「おや？お聞きになっていないのですか？以前、あなたの母君のアリス殿は、
　我らが主とパーティーを組まれて冒険されていたのですが……」
まだアリスが一人前でないから、といって旅にでていたときに意気投合して
とある存在と行動を共にしていたことがあった。
ゆえに彼らはケレスの母をよく知っているのだが。
「あ～……なるほど。たしかに彼女なら話しがあう、でしょうね……」
さきほどちらっと当人と出会ったが、それで納得がいった。
以前に話しをきいた人間がケレスの母親、すなわちあの人間。
「…主と話しがあう人間がいるなどおもいませんじたから。我々と

しても貴重、なのですよ。あはは」
「……お疲れさま……」
彼らが何をいいたいのかさとり、おもわずねぎらいの言葉をかけているディア。
「いえ、あなたさまからそのようなことをおっしゃられるとは、何ともったいない。
　おや？そちらのお嬢さんは何か茫然としてますが…？」
今の会話の意味が今いちよくわからない。
しかし本能が詳しいことを聞くな、そう告げている。
しかしケレスとしても聞かずにはいられない。
「あ…あの？あなたたちの主…って…」
「ああ、もちろん。この神殿の主。火の精霊王、サラマンダー様のことですよ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
さらっといわれてケレスとすればもはや言葉もでない。
いいや、ちょっとまって。
かなりまって。
ということは、何！？
あのお母様って、火の精霊王と知り合い！？
いや、知り合いなのは一族すべてだけど…って、えええ！？
ケレスの心情はもはやパニックといって過言でない。
「あ～。ならケレスにはちょっとお守りわたしたほうがいいかもしれないわね。
　あのこ…いえ、見た限り絶対に何か罠とか仕掛けてそうだし。
面白がって。二人して」
それはもう確信がもてる。
だからあの場でおそらくケレスをたきつけるように有無を言わさず洞窟へいくように仕向けたのであろう。
他の存在達が人間と結託していたずらをしかけてくるからどうにか

してください。
と以前泣きついてきたことがある。
そのことをふと思い出しおもわず苦笑してしまうディア。
何しろ意気投合した彼女達は互いに意見をだしあって、人間を問わず精霊達にまでいたり、
様々な実験…もとい、彼らいわくいたずらをしかけていたりする実績がある。
もっとも、そんな事実をケレスが知るよしもないのだが。
「まあ、主の性格はもはやどうにもなりませんからねぇ～…育て方としてはどうなんでしょうか？」
目の前のディアがどういった存在なのかはその気配で漠然と理解できる。
というかこの姿でこの地に幾度かやってきたことがあるので彼らとしても見知っている。
それがどうして人間の子と共にいるのかどうかはわからないが。
「あ～。なんかかまってほしかったのかいたずらはじめたのがきっかけだったみたいなのよね～」
いまだにケレスは茫然、としているのでディア達のとんでもない会話は耳に入っていない。
もしもはいっていればまちがいなく突っ込みをし、その言葉の真偽を問いただしていたであろう。
「まあ、それはそれとして。とりあえずしばらくこの子だけでも休ませてもらえるかしら？」
「それはもう、かまいませんけど。あなた様はどうなさるのですか？」
「まあ、今回用事があるのはこのケレスだし。私はただの付き添いよ」
「了解しました。では部屋を用意いたしますね」
「さて…と。ケレス。ケレスってば。何をいつまで現実逃避してるわけ？」

はっ！？
ゆさゆさとディアにゆすられてようやくはっと我にともどるケレス。
「え？あ、ディア？ええと…私……」
どうやらあまりに信じたくないことをきいたがゆえに一時的に記憶がとんでしまったらしい。
「とりあえず、ここでしばらく休んでから。ここから王の間にいきなさいな。
　私はのんびりとここでまってるから」
「え？ディアは一緒にこないの？」
てっきり一緒にきてくれる、とおもったのに。
「私はただの付き添い。大丈夫よ。ここからだと王の間までは一本道だから」
ここに入らなければ入り組んだ道を延々と下る必要があるが。
ここから火の精霊王がいる部屋までは一本の道にて繋がっている。
ちなみに罠とか仕掛けたりするのが好きな精霊王だがこの道だけはしないように、
と散々口をすっぱくしてエルフ達からもいわれていることから断念している。
あのままあの水晶の隠された道に入らなければ今度は溶岩に伴い、
様々な罠やいたずら、といった仕掛けを突破しながら地下に進んでゆくしか道はない。
あの水晶の隠された道を探し出すこと、
それがすなわち無事に火の精霊王の元にたどり着く近道、ともいえる。
まあ、それでもまったく罠がない、というわけではなく、
落とし穴程度の罠は一本道につくられてはいるのだが……
「ここからは知恵と勇気がためされるから、ま、がんばって」
「？…え、ええ……」
知恵と勇気？
ディアの台詞になかば首をかしげるものの、しかし休ませてもらえ

る、というのはありがたい。
何かどっと疲れている。
体がどうこう、というのではなく精神的に。
それがなぜか、というのはケレスにはわからない。
というか無意識のうちになかったこと、きかなかったことにしているケレスは気付かない。
ケレスは知らない。
ディアのいった知恵と勇気、という言葉にすべての意味が含まれている。ということを。
すなわち、ただの一本道ではない、ということを指し示している、ということを……

「で、うちの子を送ったから～。でもね。なんかお友達と一緒なのよ～。
　でもかわった子なのよ？なんというかそこにいてそこにいない、みたいな？」
とある場所。
開けた場所にてなぜかその場にある机と向き合った椅子。
真っ赤な椅子と机が周囲にぽこぽこ湧き出ている溶岩からみてもかなり風景に似合っている。
「そこにいて…？まあ、とりあえず。じゃあいろいろと試してみてもいいわけだ。
　アリスの子か～。話しにはきいてたけど。だけどいままで加護うけてなかったんでしょ？」
たしか今の今までいまだに他の精霊の加護をうけていなかったらしいが。
「ええ。先日とある湖の精霊に加護をもらったらしいのよ。それで早いけど試練をうけさそうとおもってね」

すでにここまで直接くるべき手段はもっている。
「数ある罠をカンパしてくるか。それとも里を経由してくるか、まあ楽しめそうではあるわよね。
　まあここで戦う以上、絶対に死ぬことはあり得ないんだけど」
「そうそう。だからしっかりと鍛えてやって～」
この空間の中においては創られたときに示された理が絶対となる。
この場における理は【死の概念の破棄】。
つまりどんな状態になってもかならず肉体から魂が抜けるようなことはありえない、という概念に基づいている。
つまり戦う場合には、傷が言えれば幾度でも再度挑戦が可能という形式をとっている。
もっともそのようにしたのはほかならぬ、彼女が何よりも楽しみたい、という理由から、なのだが。
挑戦者からしては逆にたまったものではないかもしれない。
何しろ体全体が焼け焦げようがどんな状態になろうが絶対に死ねない、のだから……
この空間を管理するもの。
それは、火の精霊王、サラマンダー。
その髪はマグマのごとくに常に燃え盛っており、その服もまた炎でつくられている。
基本、人間の形態を好み、ときおり人の姿を模して地上に赴くこともある。
そのときに、目の前の女性…マリアと知り合い意気投合した経緯をもつのだが……
「ま、サラ。私の子は結構強いわよ？おっちょこちょいだけど」
「あはは。ま、マリアの子だし、そりや、おっちょこちょいなのはわかるわよ」
ひさしぶりにからかいのある…もとい、手ごたえのある挑戦者がやってきそう。
本来の目的は契約だというのはわかってはいるがやはり暇なものは

暇。

すこしばかり付き合ってもらっても問題はないはず。

そもそも、母親がそれを許可しているのだから何も問題はない。

…ケレスにとっては悪夢、としかいいようのない会話がなされているのだが。

当のケレスはそのような会話がなされているなど…知るよしもないのであった……

光と闇の楔　～火の神殿と隠れ里～（後書き）

ちなみにこの隠れ里、別名、水晶の里、ともいいますv
　周囲がほとんど水晶に覆われている里、という意味でもあるんですけどね。
　基本の住人はエルフ族、そして妖精族、です。火竜族も滞在してますよ～（笑
　この地にいる彼らは毎回毎回サラ…つまりは火の精霊王のいたずらに頭を悩ませているのです・・・

光と闇の楔　～火の精霊王と契約の儀式～（前書き）

儀式の内容はさらっと流してます。
今回はあるいみ科学の授業のようなものに近いかも・・・

光と闇の楔　～火の精霊王と契約の儀式～

「では、互いの利点が一致した、ということで」
「わかっているとおもいますが、これがおわったら……」
「わかっています。互いに信念を貫き敵対する、でしょう?」
様子を見に行かせたメンバーからかなり実のある情報がもたらされた。
ゆえにつなぎをとり話しあいをした結果。
地界においてはひとまず共同戦線を張る、ということで合意がなされた。
「それでは…あちらのほうの仕掛けは……」
「ただいま、随時作成中です」
「「・・・ふふふふふ……」」
長年の夢。
幾多の界に別れているこの惑星を一つの界において掌握する。
そうすれば今は外にいくことすらできないがいずれは外、つまりは星空の空間までもわがてにできる。
自分達にはその力があり、またそれが世界の、世の中のため。
互いに互いがそう完全に信じ切っているのだからタチがわるい。
今、これより光と闇の共同戦線が開始されてゆく……

「んきゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
ど、どこが安全なわけ！？これのどこが！？
心の中ではげしく叫びつつも、口からでるのは悲鳴にもちかい叫び。
水晶の里、としかいいようのない場所を抜けて、そこから火の精霊王のいる部屋に続くといわれている小道。
そこに足を踏み入れたはいいものの、いきなり足元の床がぬけるわ。
さらには両脇の壁らしきばしょから炎の矢ともいうべきものがとびだしくてるわ。
さらにとどめとばかりにいきなり巨大な岩がケレスめがけて一本道をごろごろところがってきている今現在。
「あ、穴っ！…って、でぇぇっ！？」
とにかく必死で逃げている最中、床に穴があいているのをみつけ迷わずとびこむ。
が、その穴の下に煮えたぎったマグマがこれみよがしにあるのはこれいかに。
「…は～…は～…し、死ぬかとおもった……」
どうにかそのまま落下しそうになるのをかろうじてこらえ、穴よりはいでるケレス。
「と、とにかく。早く精霊王をみつけて契約の儀式お願いしないと、体がもたないわ…これは……」
これ以上様々な罠などに出会っては間違いなく体がもたない。
今の今まではどうにか運がよくて逃げ切られたが、
のんびりしていたらシャレにならないような気がひしひしとする。
しかも、壁一面に何やらおもいっきりあやしい石像のようなものがはめ込まれているのか、
もしくは彫り込まれているのかわからないが、それが異様に気にか

かる。
何となくではあるがそれらが一斉にのんびりしていたら動き出しそうな気がする。
ひしひしと。
別にそれは勘でしかないのだが、こういった勘はケレスはよく当たる。
す～、は～。
とりあえず気を落ち着かせるために大きく息を吸い込んでは吐き出し、
「よっし！とにかく、いっきに走り抜けようっ！」
ゆっくり歩いていたら絶対に厄介なことになる。
直感的にそう確信し、そのままその場から地下へと続く道を一気に駆け出す。
と。
ガコ…ガコガコ…
何やら鈍い音がしたような気がし、走りつつふと後ろを振り向けば、案の定、というか何というべきか。
壁にずらっとならんでいた石像がことごとく動き出し、しかも様々な武器を手にしてケレスのほうへとむかってくる。
「やっぱりぃ～！！」
とにかくここは逃げるしかない。
どうやら相手はさほど早く移動できないようである。
追いつかれては確実に困ったことになる。
それゆえに、必死で走るケレスの姿がしばしその場において見受けられてゆく……

「ぜ～…ぜ～…ぜ～……」
どれくらい走っていたであろうか。
ふといきなり視界が開け、ちょっとした広い空間にと体が躍り出る。

それと同時、今まさに出てきたばかりの道、すなわち入口とおもわしき場所の上部より、
がこんっ！
音がしたかとおもうとその道はあっという間にふさがれる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
もしかして閉じ込められた？
息をきらしつつもケレスがそんなことをおもっていると、
「ほぉ。よくここまで無事にこれましたね。さすがアリスちゃんの娘ね」
ころころと笑いを含んだ何ともいえない女性の声がケレスの耳にと聞こえてくる。
ふと声のしたほうをみてみると、中央に椅子らしきものがあり、そこに一人の女性が座っている。
しかしその椅子は真っ赤な溶岩で煮えたぎっており、そんな椅子に座っている女性はといえば、
その髪も服もどうみても溶岩でできている、としか思えない容姿をしていたりするのは気のせいか。
「え…あ、あの…？」
「ああ。はじめまして。というべきかしら？よく話しはきいてたから初めて会った気にはならなかったわ。
　ようこそ。ケレス＝アストレア。私がここの主、サラマンダー、よ」
「…は？」
一瞬、何をいわれたのか理解不能。
しかしよくよくかんがえてみれば確かにどうみても目の前の女性は人ではない。
というか人ならばその髪全体が炎らしきものでできているなどあり得ない。
気合いでどうにか気をおちつかせつつ、周囲をよくよく観察してみ

るケレス。
そこは開けた空間であり、周囲の壁にはごうごうと溶岩らしきものが流れ落ちている。
おそらく風と水の結界を張っていなければ熱さでいっときともこの場にはたっていられないであろう。
そして目の前にも溶岩の滝のようなものは流れ落ちており、その滝の目の前に椅子が設置されており、その椅子に座ったままでケレスに話しかけてくるその女性。
サラマンダー、と女性は名乗った。
それは、つまり……
「あなたが…いえ、あなたさまが…火の…精霊王様？」
何か想像していたのと全く違うその容姿。
てっきり、男性とばかり思い込んでいたケレス。
まあたしかに、精霊が男性体か女性体かきちんと正式に伝わっているわけではない。
もっとも、彼らからしてみればその気になれば性別をかえることは簡単極まりないのだが。
「まあ、そう呼ばれてはいるわね。たしかに火の精霊を束ねているのは私よ。
さて、アストレア家の血を引くものよ。汝は我が試練をうける気はあるかや？」
いきなり口調がかわると同時、周囲の雰囲気も一変する。
びりびりと結界に身を包んでいてもわかる熱気と威圧感。
気を抜けばそのままのまれて意識を失ってしまうであろう。
「私、ケレス＝アストレアは古の血の契約にのっとり、火の精霊王様の試験を承りたく存じます」
しかしこの威圧感は悪意あるものではない。
先日うけたような悪意あるあの干渉と比べればどちらかといえば神聖なもの。
ゆえに心をふるいたたせ、決意の言葉を述べるケレス。

「汝の心、しかと見極めたり。されば…汝、我が試練に見事耐えてみせよ」

にっ。

そういうと同時にっと口元に笑みを浮かべる火の精霊王。

それと同時、先ほどまで周囲を覆い尽くしていた威圧感が瞬く間にと霧散する。

試練。

ごく。

その言葉に違う意味で緊張する。

代々、火の精霊王がアストレアの血筋にかす試練は個人個人で異なる、と聞いている。

ときにはその人物の人柄や能力によって変化し、ときには精霊王の気分により変化する、そうきいている。

ちなみにケレスの父はなぜか頭をつかう試練を受けさせられたらしい。

ケレスの父親いわく、あれはもう一生分の頭をつかった、とかいっていたのだが。

「見たところ、けっこう強い風の結界に水の結界も張ってることだし。

これくらいは耐えられそうね。試練の内容はいたって単純。

今からこちらが攻撃するからその攻撃をかわして私のもとに一撃をくわえること、簡単でしょ？」

どこか楽しそうにいってくる火の精霊王、サラマンダー。

いや、あの、はい？

攻撃？

今、何かものすっごく聞きたくないような言葉がきこえたようながするのはきのせいか。

「アリスちゃんがいってたし。ケレスちゃんはアリスちゃんの火虎から逃げ切られれるんでしょ？

なら、これくらいも簡単でしょうしね」

火虎。
その台詞にすうっとケレスの顔色が一瞬青くなってしまうのは仕方がないのかもしれない。
ケレスの母が得意とする召喚術の一つで文字通り、火の虎。
それが数十体。
かつて実家にいたときほぼ毎日、特訓としょうされておいかけまわされていたあの日々。
しかも物心ついたころからほぼ毎日。
あるいみケレスの心のトラウマになっている術、といっても過言でない。
そうサラマンダーがにこやかに宣言したかとおもうと、次の瞬間。
ずわっ！
周囲の壁という壁から蛇のような火の細長い何かが出現し、瞬く間に部屋全体を覆い尽くす。
その数、ばっとみただけでおよそ数十。
それぞれがそれぞれその口より溶岩を吐き出し…
「…って、えええええ～！？」
こんな試練なんて聞いてない。
というかあれにあたったらいくら保護結界をまとっているとはいえ間違いなく死ぬ。
「あ。大丈夫。体がたとえ炭になっても絶対にここでは死ねないからね～」
大丈夫、じゃないっ！
にこやかにいうサラマンダーの台詞に思わず心の中で突っ込みをいれるものの、
しかしケレスはそれを口にだす余裕はない。
とにかくひたすら必死で自分にむかって放たれてくる炎の塊と、
そしてまた、大きな口を開いては一飲みしようとしてくる火の蛇。
さらには油断したら体を巻きつけてこようとしてくる蛇等。
とにかくひたすらそれらの攻撃から逃げるので必死。

こちらから攻撃をしかけたくとも相手からの攻撃のほうが早すぎて術を紡ぎだす余裕もない。
き…危険は承知でもディアからあのムチかりとけばよかった！
そう今さら思うがすでに試練は始まってしまった。
この試練を達成しなければおそらく確実に母親によるさらなる特訓とお仕置きがまっている。
せっかく実家から離れて母の特訓からのがられたのにまたあの日々には絶対に戻りたくはない。
「わ…私は絶対にまけられないのよ～！！！」
何ともいえない悲痛な悲鳴が、サラマンダーの鎮座する王の間の中にと響き渡ってゆく……

「…あれ？フォルミ様？」
ここに彼がくるのはかなり久しぶりのような気がする。
ゆえにその姿を目にとめおもわず問いかける。
「久しぶり。それよりサラマンダーはいる？」
とりあえず用件をすまさなければ。
「おられますけど。今はおそらく遊ばれ…もとい儀式の最中だとおもいますよ？
あ、もしかしてお母様に御用ですか？」
彼がここにくる理由は王か、もしくは今ここにこられているかの存在に用事がある、としかおもえない。
「…は？いやいや、ちょっとまて！？まさかここにこられてるのか！？【意思】が！？」
その言葉にひどく驚愕する。
フォルミ、とよばれたその青年の髪はひたすらに白。
肌のいろも果てしなく白く、瞳は青。
かつて彼が発見した物質を構成する粒子、その彼の功績をたたえ、その素粒子のことをフォルミ粒子、と呼んでいたかつての人類。

フォルミ粒子は彼の研究により、それまでクォーク、レプトンという分類に分けられる、
というのはわかっていたが大きさは知られていなかった。
だがしかし、彼はその大きさを突き止め、それを他のものに利用することを研究開発した。
すべての素粒子の大きさを特定し、またそれらのもつ振動状態まで突き止めた。
その結果、爆発的までに技術力だけでなく武器としての開発も広がっていったのだが。
彼はただ自分の研究をしていたにすぎないが結果として地上に最悪な結果をもたらしてしまった。
それゆえにその責任を問われ、【伝道師】の一人、として今ここにいる。
余談ではあるが力を媒介とする粒子のことをボース粒子、と呼び称していたが、
それらの力の概念を研究解読したものもまた【伝道師】の一人として存在している。
この二人が素粒子物理学を完全に解読しなければ、
おそらくかつての地上の運命はまた違ったものになっていたであろうことは疑いようがない。
「私がいたらおかしいのかしら?フォル?」
「うおっ!?」
いきなりといえばいきなり。
いきなり背後から声がしておもわず飛び上がるほどに驚きの声をあげる彼はおそらく間違ってはいない。
「って、いきなり現れないでくださいませっ!」
「あら?どこに姿を現そうと私の自由でしょ?」
確かにそれはそうである。
あるが心構え、というものがほしい。
切実に。

「それはそうと、お久しぶりです。しかし天界と魔界からでてきてこちらにこられてるとは……」
いって思わずため息をつくフォルミ。
「ナオトからどうせ連絡がいってるんでしょう？それで？とうとう宣戦布告でもしでかした？」
こちらが話さずともやはりというか案の定、というか当たり前、というべきか。
すべてわかっているらしきその台詞に少しばかり脱力してしまう。
「…いきなり本題をいわないでください。とりあえず何を考えたのかテケリとショゴスは手を結びました。
　その報告をしにサラマンダーに会いにきたのですが……」
よもやこのたびは彼らが手を結ぶなど夢にもおもっていなかった。
それはリュカがもたらした報告によってかの組織が動いたから、なのだが。
そこまで詳しくフォルミは知らない。
互いの勢力の味方を得てかの王は自分の力を過信しおもいっきり他国にむけて宣戦布告する気まんまん。
さらには精霊界などにも攻め入るなどといった無謀極まりない作戦をたてているらしい。
精霊と地界に住まう存在の力の差。
それすらもきちんと把握していないものの愚かな野望。
それでも二界による存在が加護を与えたことにより、ひとまずしばらくは【理】の断罪の処罰はかからない。
加護をあたえている、ということはすなわち、他の界のものがその行動を認めている、という保証にあたる。
いわば何かしようとするときの逃げ道のような仕組み。
どんな仕組みにおいても必ずどこか逃げ道はある。
またそのように一応設定もされている。
「まあ、そうでしょうね。とりあえず自由に動いてもらったほうがあとあと楽ではあるけど。

まあ、関係ない存在達を巻き込まないようにあなた達もきちんと行動しないとね」
さらっといわれて、ああ、そういえばこのかたはこういうかただった…
そういまさらながらに思い出す。
それゆえに小さくため息をつき、
「…もしかして、この一件を理由にそろそろ自由にしすぎている存在達へお仕置き、ですか？」
何となく、いや、それは確信。
幾度もそれを経験しているからこそわかる。
それゆえの問いかけ。
「まあね。まったく、いつになっても平和がつづくと変なことを考える存在ってでてくるのよね…
ま、そのまま反省しないようなら、あなたたちのお仲間が増えるかもね」
くすくすくす。
お灸をすえて反省しないのならば時間をかけて反省を促す他にはない。
魂ごと消滅させたのでは意味がない。
いつでもできるがゆえにそれをしない。
それがディアが決めている決めごと。
「あ、あと、ケルベロスの動向、よくみてないといけないっていってね」
「は？…冥界の番人が何か？」
どうしてここで冥界の番人の名前がでてくるのかフェルミは理解不能。
「番人だから、よ。とりあえず私がここにいることは他にはいわないように」
「…判りました」
おそらく何かするつもりなのであろう。

しかしそれに対して自分達が口出しできる立場でないことはよくよくわかっている。

しばし、伝道師フェルミとディアの会話がその場において繰り広げられてゆく――

ピシ…ピシビシ…

「や…やった…の？というか、ディア、なんという危ないもの手渡してくれてるのよっ！！？」

どうにかなった、という安心感からか逆にその怒りが別の方向にむいてしまうケレス。

試練をうけるにあたり、何かあった場合、これを投げてみたらいいわよ。

そういわれ、手渡された小さな水晶珠。

必死に逃げまくり、それでも足元からも火の蛇が出現し、足場すらなくなってきていた現状。

そのときにディアからもらった品物のことを思い出し、ダメもとで投げつけた。

が。

その水晶が火の蛇などに直撃したその刹那、部屋全体をものすごい吹雪が舞ったのはどういうわけなのか。

しかもその吹雪によって部屋全体に出現していた火の蛇達はことごとく凍りつき、

ごとり、と音をたてて床にとおち。

さらには四方の壁から流れ落ちている溶岩すら完全にと凍りついた。

あまりの威力に茫然としそうになるが、そのままその威力はケレス当人にまで及びかけ、

それから逃れるために必死で今度は吹雪の外へ逃れなければならなくなっていた。

ようやく吹雪が収まり、周囲を見渡してみれば、先ほどまでの熱気はどこにやら。
周囲は全体的にひんやりとした空気に包まれており、
この部屋全体が完全に凍りついていたりする。
一歩間違えればケレスもまたこの部屋の状態と同じく氷漬けになっていた可能性が高い。
ゆえに理不尽かもしれないが怒りの矛先がディアにと向けられていたりする。
まあそれはそれで心情的に仕方がない、といえば仕方がないのだが……
「…驚いたわ。ここまでの威力のある魔石……どうやって手にいれたの？」
心底感心してしまう。
何となく水晶が破裂した刹那。
直感的に嫌な予感がして溶岩の滝の裏へとその身をくぐらせた。
その刹那。
部屋全体を覆うとんでもない冷気。
あのままあの場にいればいくら火の精霊王とて無事ではいられなかったであろう。
それほどの冷気。
一般の人間がもてる魔石のレベルではない。
冷気が収まったのをみてとり、滝から姿を現しそして目にしたのは、
自分の神殿がことごとく氷におおわれてしまっているという現状。
ゆえにこそ驚かずにはいられない。
「友達にお守りといって渡された石なんですけど……わ、私まで氷づけになるところでした……」
もはや相手に敬意を払うどころか、疲れ切り、それすらどこか失念しているケレス。
「お友達？…まさか…いや…なるほど」
ふと異なる場所にて見覚えるあの気配がゆらぎ、すぐさまケレスの

言葉の意味を察知する。
「…なら、遊ぶわけにはいかない、というわけか～…は～……」
本当ならばせっかくアリスが丹精こめて育てたという子供の能力を観察してみたかった。
しかし今、ケレスが発した言葉から察するにあまり遊んでいては自分の立場が確実に悪くなる。
それはもう確信がもてる。
かの気配をもつ存在がその気を揺らすなどという現象がおこりえた。
すなわち、そのような可能性をもつ出来事は一つ、しかない。
水晶の里に現れた覚えのある気配。
その気配があからさまに動揺しているのがこの場にまで伝わってくる。
だけど、お母様、こられてるならここにくればいいのに。
…あとから追いかけて挨拶しないと。
そう心に固く決意し、
「ま、仕方ないわ。とりあえず、試練は合格、としときましょう。
　では、ケレス＝アストレア。汝、我が前に」
「え？あ…は…はい」
何が仕方がないのかケレスにはわからない。
自分は火の精霊王の示した彼女に一撃をあたえる、という条件を果たしてはいない。
自分が逃げることが必死であの吹雪の中でサラマンダーがどう行動していたのか、などとケレスは知れない。
ただ、ケレスからしてみればあんな冷気の中でもやはり精霊王って何ともないんだ。
さすが精霊王。
そんな間違った概念をより強くしてしまっているわけなのだが。
「古の契約により、我、アストレア家が娘。ケレス＝アストレアに加護をあたえん」
ケレスがサラマンダーの前にひざまづく。

それをうけてサラマンダーがそっとそんなケレスの頭の上に手をかざし、言葉を発する。
その刹那。
ケレスの体全体を淡い炎が一気に包み込む。
その炎はやがてすべてケレスの体内へとすいこまれてゆく。
これにより完全なる火の契約が完了したことになるのだが。
精霊王の加護の契約。
それすなわち、火の属性をもつすべての術が使用可能になる。
もっとも、いくら使用可能、といっても使う存在の力量がなければそれは宝の持ち腐れ。
つまり努力しなければ身につくことはない。
「私、ケレス＝アトスレア。今ここに確かに精霊王様の加護を受け取りました」
自分の中に新たな力が芽生えたのを確認し、形式的に言葉をはっするケレス。
そんなケレスを見下ろしつつ、
「あ〜あ。せっかく少しばかり遊べる、ともったんだけどな〜。
　なんか面白そうなことになってるみたいだし、また人になって外の世界にいってみようかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
何だか精霊王様ってこういう性格だったわけ？
どことなくその性格が自分の母親と重なりおもわず無言になってしまうケレス。
まあ、性格が似ているのでサラマンダーとアリスは意気投合しているわけなのだが……
「とりあえず、いきましょうか」
「・・・・・は？」
いきなりいきましょうか、といわれてもケレスには理解不能。
そもそも何をいっているのかがまったくわからない。

「あの？精霊王様？」
「サラ、よ。サラマンダーって名前、長いから、サラって呼んで。
　とりあえず、水晶の里にいきましょ。なんかお客もきてるみたいだし」
ここに彼がくる、ということは何か緊急事態が起こった、ということ。
ここしばらくそのようなことはなかったというのに。
大概、前もっていついつくる、と連絡が入るようになっている。
しかし今回の訪れにはそれがない。
すなわち、何かが起こった、ということに他ならない。
「お客？…もしかしディアのこと…ですか？」
しかし、ケレスは水晶の里にもう一人別の客人がやってきている、などと夢にもおもわない。
ゆえに里でまっているディアのことかとおもい問いかける。
「ディ…ア？…あ～。なるほど、違うわ。今、里にきてるのは伝道師の一人、よ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
今、目の前の火の精霊王は何といったであろうか。
伝道師？
そんな存在がどうしてこんな場所に？
離れている場所のことがわかる、というのはさすが精霊王、というより他にないが。
しかし、目の前の精霊王から伝道師などという言葉がでてくるとはケレスは思いもしなかった。
ゆえに間の抜けた声を思わずだしてしまう。
「きっと何かがあったのね。あ～。天界と魔界がらみ、かしらね？
　それにしてはあれは緊急事態でもなさそうだけど……」
姿を消したくらいならば一万年ちょっと前にもあったこと。
ゆえにそう緊急報告するようなことではない。
もっとも、このたびはどの界にいったかわからないので彼ら精霊の

うちではちょっとした騒ぎになってはいたが。
「ああ。そうそう。ここからでるときに通る道。今度は問答無用で石像達が襲いかかっていくでしょうから。
　今得た力を駆使して頑張って里までたどり着いてね？」
ふいっ。
それだけ言い放ち、突如として火の精霊王、サラマンダーの姿はその場よりかききえる。
正確にいうならば足元にある溶岩の中に解け消えるように瞬時に消えてゆく。
「…え？え…えええ！？ってどうやってもどれっていうんですかぁ！？」
いまだにやってきた道の入口らしき場所は岩でふさがれている。
つまり。
「い…岩をどけて、さらにはあの石像達を撃退してもどれ…ってこと？」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一人、取り残されたケレスはもはや茫然自失。
しかしこのままここにいてもどうにもならないのも事実。
「ふ…ふふふふふ……やってやろうじゃないのよっ！！もう、やけよっ！」
岩を炎で溶かし、そして襲ってくる石像達に対しては術で対抗、もしくは武力で対抗するしかない。
伊達に幼いころから武術をも教え込まれているわけではない、のだから……
しばし、半ばヤケになったケレスの叫びが響き渡ってゆくのであった……

光と闇の楔　～火の精霊王と契約の儀式～（後書き）

ようやく戦乱の序章に入れます……

光と闇の楔　～しのびよる混乱～（前書き）

そろそろ世界の混乱の序章に入ります・・・

「……はぁ！？」
報告をうけてまず言葉にでたのがそのひとこと。
というか、それでなくても王がいないこの時期に。
否、王が今いないからこそ、といったほうがいいのか。
「しかしこの時期に仕掛けてくるとは…王が玉座からいなくなったのを知っているのか？」
王が確かに世界を監視していなければ自由に動けるであろう。
そもそも、王はすべてを見通し、そして何かあれば修正していた。
もっとも、たしかに自分達はそれに頼りすぎていたような気もしなくはないが……
おそらくこれは自分達に課せられた試練なのだろう。
そう思わずにはいられない。
そもそも、王が失踪したのも絶対にこのたびの一件にかかわりがあるような気がする。
もうそれはひしひしと。
「……まさか、王…反旗グループに入り込んでません…よね？」
かの性格を考えるとやりかねない。
というか暇なので少しばかりはいってみてた、という一万年と少し前の出来事が頭をよぎる。
「と、とにかく。正確な情報を。そして魔界のほうにも連絡を。
　こちらの反組織ハスター・ホテップと、魔界の反組織テケリ・ショゴスとの接触状況を調べろ！」
『はっ！』
その指示をうけ数名がその場をいきおいよく飛び出してゆく。
「…はぁ。アテナからの報告では、リュカ殿が魔界に入り込んでい

るらしいが…

……それも今回の一件にかかわりがあるのか？」

王の絶大な信頼を得ているのか、彼の任務は彼らにとて知らされることは一度もない。

娘からの報告は先日うけた。

あの娘が自分を育てたリュカのことを見間違えるはずもない。

そもそも、まだ幼かった娘の教育を彼にたのんだのはほかならぬ、彼…ゼウス自身。

「さて…愚痴をいっていても仕方がない。とにかく、まずはこの報告書の山をどうにかしなければ……」

補佐官殿も姿を現さない、ということはおそらく王とともにいるのであろう。

彼女は王がらみでなければ絶対に動かないしな。

そうどこかあきらめを含ませつつも、目の前に積まれている真っ白い書類のような束を見つめるしかない。

書類、といっても実際にそれらは紙というわけでなく、どちらかといえば霊力を練られて紙状にしたもの。

この紙は神々、また神々の許可を得たものでなければ扱うことができない。

いまだ、王が戻ってくる気配はない。

ゆえに側近の役目を兼ねている自分が動くしかないのが実状。

「…は～……」

ため息をつくと幸せが逃げる、とはいつ誰がいったことだったのか。

しかし、今の彼…ゼウスはそんなことを気にとめている余裕はない。

何しろ留守の間に世界の均衡が崩れることにでもなっていたら、まちがいなく王のお仕置き…もとい、お灸がまっている。

王のお灸。

それは死したほうがはるかにまし、とおもえるほどの徹底した教育のし直し……

「ふあ～……って今日もいい天気…って…なんだ、あれ？」
いつものように朝おきて村の中央にとある井戸にと水を汲みに出た。
ひんやりとした朝の空気はいつもと同じ。
だがしかし、その視線の先にいつもと何かが違う光景が目にはいりおもわず目をぱちくりさせる。
いつもならば朝霧がかかっており、目の前すら真っ白、ということはよくあることだが。
だがしかし、今目にはいっているものは……いつもの霧とは少し違う。
何というかいつもは真っ白なのに目にはいる霧のようなものは黒いような気がするのは青年の気のせいか。
しかし、その霧のような闇の塊は確実に自分達の住む村のほうへとむかってきている。
「…！？お～い！みんな、大変だ～！！」
ぞくり、と言い知れぬ予感がかけぬける。
ゆえにまだ朝も早い、というのに村にむけておもいっきり叫ぶ。
これはただ事ではない。
そう彼の本能が直感的に告げている。
「おい、何を…って、なんだぁ！？」
「うわっ！？」
朝も早い、ということもありその声をききつけてわらわらと近づいてくる数名の村人たち。
村の朝はとても早い。

まず家畜の世話にそれから薪割り。
ゆえに寝過ごしている村人の姿は滅多にみることはない。
ここはすこし辺境の地でもあることから滅多と旅人もあまり近寄らない。
「な…何だ…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?」
…その日、正体不明の黒き霧が一つの村を飲み込み、
そこに暮らすすべての存在を喰らいつくしてゆく……

「あれ?ディア、その人…誰?」
ようやく息も絶え絶えにどうにか戻ってきてみれば、見慣れぬ人が二人、ディアの傍にいたりする。
ゆえに戸惑いつつもといかけるケレス。
そもそもこんな場所にそうそう人がやってくる、とはおもえない。
「あれ?ケレスはサラにはあってるんでしょう?」
そんなケレスの問いかけに逆に首をかしげてといかけているディア。
「サ…は?」
ディアはそういうが、ケレスは目の前の女性にあったことすらない。
何よりもこんな美人、一度あったら忘れるはずもない。
「この子…でなかった。彼女、サラマンダー、よ?ああ、姿が違うからわからなかったのかしら?
それもしても気配のそれは変えてないんだけど…
ケレス。あなた気配の読み取り訓練やったほうがいいわよ?」
いくら姿がかわろうとも、気配を変えていないのだから普通はわかる。
しかしどうやら外見にだまされ、その本質たる気配にケレスは気付かなかったらしい。
肩のあたりまである真紅の髪に真紅の瞳。
服装はそのあたりの旅人が着るような簡単なものでその腰には短剣

らしきものが差してある。
簡易的な皮製の鎧に見えるそれらは火をすこしいじり皮のように見せかけているにすぎない。
旅人、といえども身を守る術は大切。
ゆえにこの世界においては大概、簡易的な皮の鎧くらいは常に身につけているのが常識。
もっとも、それらを身につけない旅人もいるにはいるが。
「サラマ…って、火の精霊王様!?って…ディア、もしかして精霊王様と知り合いなわけ?」
「まあ、知り合い、といえば知り合いだわね」
そもそも、彼女達を【創った】のもディアなのだから知り合い、という表現はうそではない。
もっともディアとしてはそこまで説明する気はさらさらないが。
「何でそんな大切なことおしえてくれなかったの!?」
「聞かれなかったし」
聞くも何も、普通まさか一般人が精霊王達と面識があるなど到底誰も思わない。
「それに、乙女には秘密がつきものよ?」
「「…乙女?」」
にこやかにさらっというディアの台詞に思わず異口同音につぶやくサラマンダーと傍にいる別の男性。
「あら?どういう意味かしら?フォル?それにサラ?」
にっこり。
そんな二人に対してにこやかに笑みを浮かべつつも問いかけるディアの目はまったく笑っていない。
「すいません、すいません。他意はまったくありませんっ!」
そんなディアにあわてて何やら懇願しているサラマンダーの姿をしばし唖然としてみつつも、
「…?ディア。あなたまさか、あのムチ、火の精霊王様につかったんじゃぁ……」

あの威力である。
火を核とする精霊王にすら威力があるような気がする。
切実に。
今の取り乱し用からしてその可能性が否定しきれない。
そんなケレスの問いかけに、
「ああ、あれ？よくつかってるわよ？」
あまりに聞き分けのないときなどは簡易的に凍らせたりして反省を促したりもしているので嘘ではない。
「ムチ？…ああ、あんた。このカタのアレ、をみたのか……
この地となると、おそらく氷系統、か？」
伊達に長居付き合いをしているわけではない。
ムチ、という言葉だけですぐさまそれが何を意味しているのかさっし、
どこか同情した視線をケレスにむける。
「え？あ、はい。えっと・・・あなたは？」
「ああ、挨拶がおくれました。私はフォルミといいます。
ちょうどここに用事がありやってきたのですけど。
あなたがあの噂のサラと意気投合したという人間の娘さん、ですか」
当時、彼女がアリスと共に旅をするにあたり、ちょっとした話題にのぼっていた。
それ以後、二人して様々な実験を兼ねていろんな存在にちょっかいをかけだしたのだから彼らとしてもたまったものではない。
いくら、死ぬことがない、とはいえ様々な術、そして罠、あげくは毒などの実験体は御免こうむりたい。
そんな敬意もあり、アリス＝アストレア、という人間に対してはちょっとした警戒対象になっていたりする。
ゆえにその身辺調査と監視もまた含まれている。
少しでも二人からうける被害を少なくするためのあくまでの処置。
サラマンダーだから、おそらく略してサラ、と呼んでいるのはわか

る。
わかるがまがりなりにも火の精霊王。
常識的にあてはめればかなり崇高なる存在。
そんな人物を呼び捨てにするこの男性は一体？
そう怪訝に思いつつ、
「あ、ケレス＝アストレア、といいます。あの？火の精霊王様やディアとお知り合いなんですか？」
「ディア？…ああ、このかたのことですか。まあ、そうですね」
というか、あまり今回はひねった名前を名乗られていないのだな。
そんなことをふと思う。
まあ、名乗っている名前の一つにティアマトという名があることからも名前をいわれても違和感がない。
「？」
そんなフォルミ、と名乗った青年の反応に思わず首をかしげるケレス。
今の反応はディアの名前を知らなかったようにもとれかねない。
しかし知り合い、といっていることからそのようなことはまずありえない。
まあ、私の気のせいかな。
そう自分の中で自己完結し、
「あの。それで、精霊王様やフォルミさんはどうしてここに？」
それが一番きにかかる。
何よりもどうして精霊王ともあろう存在が完全に人の姿をしてこの場にいるのかすら理解不能。
「え。ええ、私はサラと少しばかり旅をすることになりまして」
ケレスがこの場にくるまでに決まったこと。
地上において不穏な気配が漂ってきていることもあり、
共に旅をしつつそれらを見極め、そして解決すること。
ディアが認識しているだけでも最近そういった事例が多々とある。
ゆえにちょうどいいので二人にそう命令…もといお願いしたのだが。

しかしケレスはそんな事情を知るよしもない。
「…火の精霊王様、と旅？いったい？」
普通の人間が精霊王、とわかっていて旅をするなど聞いたことがない。
もっとも、その異例ともいえる事例がケレスの母、アリスだったのだが。
そんなケレスの至極当然ともいえる問いかけにたいし、
「すこしばかり地上界があわただしくなってますからね。
　その点、火の精霊王であるサラならば浄化の炎もつかえますし」
彼の能力はあくまでも対象者を把握、そして分析すること。
ゆえに実戦的にはあまり通用しない。
まあその知識が役にたつといえば役に立つのだが。
「さってと。とりあえずケレスの用事もおわったことだし。
　そろそろ地上にもどらない？二人も早く旅に出発して調べたいだろうし」
そんな二人の会話に割ってはいり、にこやかにいいきるディア。
言外に早く調べに行くように、といっているのだがその真意はサラマンダーとフォルミにしかわからない。
「たしか地上までの直通の【扉（ゲート）】があったはずよね。ここ」
「あ、はい。ございます。…というか自力でも移動可能なはずでは……」
ディアの問いかけにおもわず当たり前なことを思い出し、
少しばかり首をかしげて問いかける火の精霊王ことサラ。
「私は別にかまわないけど。ケレスもいるからね」
というかディアはその気になるだけでどこにでも移動が可能。
その姿を特定の場所に【模せば】それだけで移動できる。
しかし、人という器をもつケレスはそうはいかない。
「ま、とりあえず、ケレス。外にでましょ？もう契約の儀もおわったんでしょ？」
「え？あ、うん」

何だかものすごくはぐらかされたような気がひしひしとする。
しかしいつまでもここにいても仕方ないのもじじつ。
それゆえにどこか納得しないままでもディアに連れられ、
扉（ゲート）、と呼ばれている転移の陣へと移動してゆく……

かつてこの大地には様々な生命が誕生し、そして滅んでいった。
そんな中で人、という種族は自然とともにあり、そして自ら様々な知恵と知識を身につけていった。
中でも彼らの想像力はたくましく、それぞれの現象に様々な理由をつけた。
そして世界のすべては神々の加護のもとにある、そう考え自然を敬った。
いつのころからかその謙虚な心をなくしてしまい、
自らの住む大地を壊滅させるほどの力を開発してしまったのだが。
「やはり、あらたな理をつくるときに、それぞれの神話につたわる性格を元にしたのが間違い…か？」
「いや、それはないだろう。基本的にそうでもそれぞれ各意思をもってるわけだし」
今、彼らがいるのはとある一室。
一室、といってもその足元には青く輝く球体のようなものが浮かんでおり、
彼らはといえば真っ暗な中に浮かぶ長い机に並べられたそれぞれの椅子に腰かけている状態。
かつての人類の痕跡を残すという理由もかねて、あえて新しい理にそれらの概念を組み込んだ。
正確にいうならばその仕組みを創るときに彼らにその役目がふり当てられた。
古より伝わる伝承や神話をより忠実に、それらを元にして新たな世界の理の基礎を叩き出した。

そしてそれらを元にして【意思】があらたな【理】のもとにこの【惑星】を再構築、したのだが。
古代文明は基本的に宇宙意思、マァトを信仰していた。
それはその精神がより宇宙と繋がりがあったといっても過言でない。
すなわち、よりその精神が自然に近い状態ですごせていた証拠でもある。
そしてその概念は新たな人類に受け継がれ…
それ以後、各世界の神話にところどころでてくる状態になっていた。
しかし、今の彼らはその意思が実際に存在するものだ、と理解している。
だからこそこうして状況を伝えられておもわずそんなことをぼやいているのだから。
「しかし…代替わり…だからですか。【意思】がいきなり改革しようとしだしたのは……」
「いきなり姿を消したって聞かされたときにはまた何かある、とは覚悟していましたが……」
しかし今度の一件はそんな生易しいものではない、と物語っている。
そもそも、彼らの知識で知っている現象。
当時地上で反映していた古代文明、そして恐竜、とかれらがいっていた存在達を滅ぼした原因。
それが代替わりにおける器誕生、というものであった、そう彼らは聞かされている。
そのときのことを実際に経験したものはこの場には一握りもいないが。
「地球の意思の意見はわかりましたけど。他の星達の意見はどうなってるんでしょう?
一番影響があるのはおそらく太陽だ、とおもうのですけど」
最近、黒点の発達が異様に多い、とは聞かされてはいたが。
太陽の精神状態を考えればそれも致し方がないことだ、と話しをきいて理解したのも事実。

かつてはその身を様々な物質の膜でおおっていたその役目を、膜はそのままに、
天界、という別の鎧を纏うことにしているこの惑星。
ゆえにそういった外の様子を調べることもまた彼らの役目の一つ。
今、彼らがいるのは門の狭間。
つまるところ宇宙空間と地球の狭間に位置する空間に滞在しているこの現状。
フォボス火山より寮に戻ったディアはその空間にすべての【伝道師】達を呼寄せた。
彼らの意見を聞くもくてきと、それと自分の行動に干渉しないように、と釘をさすために。
「しかし、天界と魔界の反旗メンバーが手をくむとは……
　これもまた予測のうちの一つというか確定された出来事、なのですか？意思よ？」
「あなたたち、あいかわらず口調が固いわね～。まあ別にいいけど。
　まあね。とりあえずかわいらしい反抗は反抗期のままきちんとお灸は必要でしょ？」
一人の伝道師の台詞ににっこりとほほ笑みながらもこたえるディアの様子に、
その場にいる全員が有無をいわさず瞬時に凍りつく。
彼女がお灸をすえる、というその言葉をはっしたのち。
そのとぱっちりがよく自分達にむかってくることがある、と彼らは身にしみて理解している。
それゆえの反応。
「…なあ、フォルミ？ボース？振動状態解析してそれらを破壊することは可能か？」
「それやっても精神体には意味がないとおもいますが」
「そもそも、器となっている肉体はそれで壊滅させることは可能ですけど。
　いまだに精神生命体の振動数は確定していませんよ？」

もっとも、確定していなくともそれらを今さら研究するつもりなど毛頭ないが。
そんなことをすれば下手をすれば宇宙空間そのものの定義を覆すことになりかねない。
星達にも意思があり、そしてまた星を擁する銀河にも意思がある、とわかった今ではなおさらのこと。
下手をすれば自身の研究が簡単に銀河空間そのものすら壊滅させてしまうかもしれない。
かつては研究途中で地上が壊滅的なダメージをうけ自らも死してしまったが。
しかしその研究をしていたのは紛れもない事実。
ゆえに、こうして彼らもまた伝道師、としての役割を担わされ罪を償いつづけさせられている。
まあ、暗黒物質の振動状態把握から、それを壊す概念にまでたどり着く前にあの出来事がおこったのだが。
「だけどそれだけならまだいいわ。問題は、今回のこれをさっさと片付けておかないと。
　時代の器がここにくる可能性がある、ということなのよ」
ぴきっ。
そんなディアの…否、【意思】の台詞にその場に集められた伝道師達は硬直してしまう。
「あなた達も知ってのとおり。時代となるべき意思は宇宙の歪みにも反応するからね。
　まだここは惑星、という一つの世界の中の歪みでしかないけど。
　だけどそれでも可能性としてはないことはないしね」
もうそうなってしまい、下手をすればこの太陽系ごときれいさっぱり消失してしまう可能性すらある。
たかが一介にしかすぎない星自身、何ができる、というわけではないが。

いくらそれぞれの星の意思達ですら、この自分達が位置している【大銀河】の意思には逆らえない。
自分達をはぐくんだ太陽、というそのものが銀河という名の海の一つの砂にしかすぎないのだから。
つまり、小さな砂一つがどうあがいてもあらがえようのないこと、というのは存在する。
それでも。
「ま、この星の中においては外からの来訪者以外ではどうにかなるけど。
あなた達をここに集めたのは他でもないわ。
今回の一件に触発されていろいろと行動を起こす存在がいるから。
それらを徹底して壊滅させときなさい。方法は各自に任せるから。
まあ、あまりにひどい考えであったりした場合はあなた達の仲間にするという可能性もあるけどね」
すなわち、死ぬに死ねない償いをさせられる、ということ。
「神獣界においてもたしかに不振な動きというか考えをしているものがいるようですし……」
「霊獣界になんて、自由に地界におりて騒ぎたいといってる馬鹿達もいますけど……」
いずこの界にも問題児、というものは少なからず存在している。
それらが自分の心の中で思っているか、もしくは行動に移しているか、は別として。
別の存在が自分達のおもっているようなことをした場合、自分達も我先に、
と思う輩がいるのもまた事実。
ゆえにこうしてディアはこの場に全員を【呼び寄せた】。
しばし【門】と界の狭間にてディアと伝道師達の話しあいが繰り広げられてゆくのであった……

「闇に取り込み、喰らう能力…か。やっかい…だな」
村一つが壊滅した、と話しをきいた。
ゆえにその真偽を確かめるためにこうして直接出向いてきたわけだが。
この場にのこる残留思念よりその力の波動は読み取れる。
闇の泉にのまれたものはその容姿をかえ、その闇の住人となる。
【深界】に属するはずの存在までもがどうやら表にでてきてしまっているらしい。
一体ここ最近、何がおこっているのか。
地上界だけではない。
天界においても、魔界においても、様々な界において異常事態が起こっている模様。
常に連絡を綿密にしてはいるが理由がわからなければどうしようもない。
おそらくは、王が姿を消したことと連動しているということはわかる。
魔界においても王が姿を消した、とのこと。
光と闇。
魔と聖。
それぞれの力のバランスが保たれていてこそ世界は安定していた。
そのトップが姿を消したこととこのたびの一件がどうしても無関係とはおもえない。
しかし、姿を消した、とはいえ滅んだとかでないのは嫌でもわかる。
姿はみえなくとも感じる力は淀みない。
魔界においても然り。
王が姿をけしてもその魔界の空気というか気は淀みなくいきわたっ

ている。
「しかし…深遠のものたちまでもが表にでてきているとなると…やっかい、だな……」
彼ら深遠のものたちには天界のものの力は通用しない。
ましてや魔界のものの力も通用しない。
あえて通用するとすれば精霊達の力、くらいであろう。
しかしその力は半端なく下手をすれば力のない精霊くらい自分達の眷属に変換させてしまうほどの力をもつ。
おそらくは精霊王達の助力を嫌でも仰ぐことになるのであろう。
「しかし…テケリ・ショゴスだけでなく、こんどは深遠のものたち…
どんどん仕事がたまってくな～…は～……」
おそらくきちんと報告はしなければならないであろう。
深界との道のほころびは一応修正しておいた。
おいたが……
「主様…僕一人じゃ、絶対にこれって荷が重いよ……」
いくら彼の精神年齢がとてつもなく他の神々よりも多い、とはいえこればかりは慣れない。
そもそも、今の肉体における年齢はたかがこの惑星時間に換算して二万八千ほど。
「そもそもさ～。
罪をある程度おかしたものたちを深遠のものたちに設定した主様ってどうなんだろ？だよね～」
完全なる引き金をひいた存在達は伝道師、という存在へと変化させられた。
それ以外にかかわった者たちはことごとく、
深遠の存在、もしくは悪魔などといった存在に変化させられている。
つまり、彼らもまた許されることなく罪をつぐなっている状態なのだが。
しかし伝道師達とはことなり、彼らはかつての記憶をもっていない。
この機会に一気にとりあえず徹底的にあぶり出す。

それが意思の意向。
そしてそのように意思からも彼らに気づかれることなく干渉し行動をおこすように仕向けている。
「まあ、最近、どの界の存在達も多少だらけてきていたからあるいみ刺激になっていいのかな？
　さってと。とりあえず深界にいってみますか。…話しきいてみないとどうにもなんないしね～。
　あ～。面倒。というかリーダーもリーダーだよね。
　僕がどの界にも自在にいけるってのを知ってるからってさ～」
趣味で界渡りをしている、と以前教えたことがあるせいかことあるごとに自分に話しをもってくるのはやめてほしい。
切実に。
まあそれが彼…リュカが与えられている役目に直結する内容だったりするので、
あえてそれらを受けているリュカなのだが。

ディアが伝道師達と相談している同時刻。
地上のとある小さな村。
今朝がた、突如として謎の滅びを迎えた村の中において一人ぽつん、とたたずむ一つの人影。
そんな彼…リュカのつぶやきは周囲の風にとかき消されてゆくのであった……

三者三様。
人それぞれ。
各界における存在達の思惑も各自様々。
それぞれの思惑を抱きつつも、しずかにより静かに混乱が忍び寄っている世界の現状。

しかし、普通に暮らす人々は、今、何が起ころうとしているのか、
などとまったく知るよしもない――

光と闇の楔　～しのびよる混乱～（後書き）

ちなみに、この話は一話につき１８ＫＢ～２０ＫＢ以内で区切るようにしてあります

光と闇の楔　～混乱の中のギルド協会～（前書き）

毎日閲覧に来てくださっている方々、ありがとうございます。
しかし…どうもずっと客観的視点挑戦してるけどなかなか上手にならないです……
まあ、下手だ、という自覚はありありなんですけどね。
そもそも脳内ではきちんと映像化されてるのにそれをきちんと客観的視点で文字にできない・・・
一人称にしたらものすっごぉぉぉぉく簡単なんですけどね…
ともあれ、この話しは客観的視点で最後まで突っ走りたいとおもいます。

「では、そちらの王の行方もまだ判らない…と」
『はい…よもやそちらのほうの王も行方知れずとは……』
他界を行き来するためには門を通らなければならないが、門より渡された特殊な水晶を用いることにより、隔たれた世界間での会話は可能。
しかしこれを扱うにはかなりの精神力を要するがゆえにそこいらの存在達では手だしができない。
「それで、ゼウス殿の考えはどうなのですか？」
諜報員より地界に今度は深界の痕跡がでてきた、そう報告をうけたのはつい先日。
さすがにかの地のものとなれば黙っているわけにもいかない。
彼らは時として彼ら、魔族、そして天界人すらをも取り込むことがある。
魔宮の一角。
本来ならばそこの奥深くには魔王が鎮座しており、魔界すべてを監視して治めている。
が、その魔王は今は行方知れず。
玉座の間の両隣にとある通信の間。
この間に入れるのはごくごく限れた存在達のみ。
そしてこの場にいるのはその背に漆黒の対となった十二枚の翼をもつ麗人、としかいいようのない容姿の存在が一人。
『おそらく。我が王のことです。今回のことを見越して地界にいかれている可能性も』
「なるほど。それはこちらも同じ意見です。我らが王もおそらくは地界にいかれてる可能性が高い。

そう我らもこのたびの一件で判断いたしました」
しかしそれですんなりと見つかる、とはおもわない。
それでなくてもいくら側近の役目を担っているとはいえ彼らは実際に王の素顔を一度たりとてみたことがない。
実際に取り次ぎをしていたのは補佐官とよばれる存在のみ。
それは魔界においても天界においてもいえるのだが。
「では、それぞれ。このたびの一件の調査と王の探索を兼ねて捜索隊をだしますか？」
『そう、ですね。それにそちらの反政権組織がこちらの反政権組織と手を組んだようですし。
ここは互いに常に連絡をするとして、それぞれがそれぞれの行動を邪魔しないように制約を結びましょう』
中には天界人においても、魔界人においても、界が異なる、というだけで毛嫌いしている存在もいる。
上層部が互いに不干渉、という約束をしていれば地界でぱったりとであったとしても、
そうそう混乱はおきない…はず。
そう思っての彼らの提案。
『では。そのようにしましょう。それでよろしいですか？サタン殿？』
「では、ゼウス殿。そのように……」
魔界と天界。
それぞれの通信の間において二つの界におけるあるいみ実力者トップクラスの二人が、
しばし密談を交わしてゆく様がこの日、しばらくの間みうけられてゆく――

「なんか今日はにぎやかね……」
昨日は本当にいろいろなことがあった。
精霊王の呼んだ火竜にのり首都テミスまで戻ってきたのは昨日のこと。
いろいろとディアに聞きたいことはあったがよほどつかれていたのか部屋にもどると、
そのまま倒れ込むようにケレスはそのまま眠りについた。
しかし翌日の学校を休むわけにもいかず、こうして学校に遅れずに登校してきたのだが……
「なんか今朝からあわただしいみたいよ？」
そんなケレスにとクラスメートが声をかける。
ケレスのクラスはＡ組Ａクラス。
つまりは総合科の中でも一番エリート中のエリート。
特待生ともいえるべきクラス。
ゆえにこの場にいる生徒はほとんど家名などに何かしらの意味合いをもっている生徒が多数。
そして、中には……
「昨日、天界と魔界より通信があって、それでちょっと王宮でばたばたしてるからな」
そんな彼女達に近づきながらもいってくるのは一人の少年。
淡い金色のふわっとしたすこしばかりウエーブの入ったやわらかそうな髪質。

透き通っているかのごとく緑色の、大きいというよりは少し切れ目な感じをうける瞳。
一見、人形？としか思えない少年が一人近寄ってくる。
「あら。殿下。…って、天界と魔界からの通信？」
「ああ。この俺も参加したい、といったのに。
　おやじのやつ、俺にはまだはやい、とかぬかしやがった……」
見た目の年齢はおそらく十歳。
実際に目の前の少年はつい先日十歳になったばかなりのだが。
しかし、ぱっとはたからきいただけでかなり重要ともおもえることをこんな教室の一角でいっていいものなのであろうか？
当の本人は心底悔しそうに手をぎゅっと握りしめていたりする。
「…ジュノー殿下。そう国家機密に近いことをさらっといっていいものなのですか？」
たしかに、今ジュノー、と呼ばれた少年がいったことはおそらく国家機密にも近い内容にあたるであろう。
だがしかし、
「内容も聞かされてないんだ。ただ通信があっただけで情報漏洩にあたるはずないだろ？
　そもそも、何か面白そうなことがおこるかもしれないのに
　何でおやじは早く学校にいけ！なんだよっ！」
直接通信があった、というだけでも何かかなりの出来事が起こる可能性。
もしくは起こった、ととらえるのが常識のような気もするのだが。
どうやら話しあいに参加させてもらえなかったがゆえにそのあたりのことは完全に失念しているようである。
「…この国、大丈夫なのかなぁ？…まあ、ティミ様の加護が他にも渡れば政権交代もあるか」
「おい！ちょっとまて！」
王都、といえども完全に血筋で王位は交代されるわけではない。
基本的に王位を継ぐものは、王都を守護している精霊の加護の力加

滅による。
よりつよい加護をうけたものが王位につくならわしとなっている。
今のところ常に王位を継承しているのはこの国においては三家系。
それでもまだ幼い彼が時代の王、と呼ばれているゆえんは至って簡単。
今現在、守護精霊ティミの加護をより強くうけている存在がいない。
当代国王の次に加護を厚く受けているのがこのジュノー、と呼ばれている少年なのである。
ゆえに、他に精霊の加護を強くうけている存在が現れなければ、自然と彼が次代の国王となる。
「…ジュノーてさ。いつもおもうけどだまってさえいればお人形のように清廉潔白な王子、なのにね～」
「だよね～。あの口調だし…いつも外見からだまされるのよね～」
そんな会話をききつつも他のクラスメートがそんな会話をしていたりするが。
彼がよく爆弾発言に近いものいいをするのはいつものこと。
ゆえに同じクラスでもある彼らはすでに慣れっこになっていたりする。
しかし…しかし、である。
次期国王がこれでは、たしかに民も安心してはいられない。
もう少し、秩序等をもってほしい、とおもうのは何も間違ってはいないであろう。
始めて彼が入学してきたときは、相手が王子、というのもありかなり遠慮していたが。
その思いも今やどこへやら。
すでに初期に抱いていた尊敬の欠片ももはやない。
「王宮のほうに二界から?おい。ジュノー。それは本当か?」
そんな彼にと話しかけている別の少年。
こちらはこちらで漆黒の髪に漆黒の瞳。
しかしその表情にどこか陰りがあるように見えるのはおそらく気の

せいではないであろう。
顔立ちは目立ってこれといった特徴のない顔立ちで、黙っていればまず影が薄い、とすらいわれるほど。
もっとも、それらすべては彼のせいでなく、彼が幼少時よりうけている特訓のせいで、
常に日頃から自らの気配をより無に近くしているせいでそうなってしまっているのだが。
「なんだよ。マリオ。俺が嘘つくとでも？」
「いや、そうか。どうりで父さん達も今朝からあわただしく出かけたわけだ」
マリオ、と呼ばれた少年の父は知る人ぞしる実力者。
冒険者の中で実力あるものを数名あげろ、といったらまず十人中九人は必ず彼の父親の名をあげる。
ちなみに次にあがるのが彼の母親の名前である。
つまり、彼は名のある実力もある両親の元に産まれてしまい、
その結果、幼少時より普通の子とはまったく違った育ち方をしていたりする。
この学校に入れられたのもその一環。
つまり、すべてにおいて一流になってこそ、冒険者の仲間入りになれる、とは彼の両親の談。
「あれ？たしかマリオのお父さんってさ。冒険ギルドの協会長やってなかった？」
「当人はほとんど仕事としょうして現場にでてて母さんがきりもりしてるけどな」
実際に表向きは確かに彼の父親が協会長の立場となっているが、
実質キリモリしているのは彼の母親。
もっとも実力があるから、という理由でその役目がまわってきているのも事実なのだが。
「二界より直接通信があるくらいだ。
おそらくすべてのギルド協会長に出向命令くだったんじゃない

のか？」
それもおそらく強制的に。
本来、王国からギルドに直接強制的に何かを強要することはできない。
しかし、他界がからんだ場合のみは特別措置としてその特例がみとめられている。
何しろ他界におけるごたごたはどうしても彼ら協会員達と話しあう必要性が必然的におこりえる。
王国のみだけでは対処できずとも、ギルド協会自体はこの世界すべてにおいてその勢力は流通している。
他界においても然り。
ゆえに各ギルド協会長と話すことにより、各界におけるギルド協会側へもその連絡が行き届くことになる。
もっとも、それらの判断もまた各ギルド協会長に一任されているのだが。
「…しかし、天界からの直接通信・・しかも魔界から、ともなると…
やっぱり先日の堕ちたキマイラの一件がらみ、か？」
さすがにあの一件のことはすでにもう知れ渡っている。
「その可能性が高い、かな？」
「……なんか、世の中っていろいろとあるのね……」
昨日の精霊王の性格、といい、今聞いている内容、といい。
まるでどこか夢をみているような感覚だ、とおもってしまうケレスはおそらく間違ってはいない。
がらっ。
「はいはい。みなさん、騒いでないで。授業がもうはじまりますよっ！」
彼らがそんな会話をしている最中、教室の扉が開き、担任教師が教室の中にとはいってくる。
それと同時。
カラ～ン、カラーン…

授業開始を告げる鐘の音が周囲にと響き渡ってゆく……

ざわざわ……

テミス王国首都にある国の要、ともいえる王城。

その一室において様々な人々が集められており、部屋の中は何ともいえない雰囲気に包まれている。

ざっと見渡しただけでも様々な種族がこの場にいることは一目しただけでもわかる。

しかもそれぞれがそれぞれに何らかの独特な気配をもっていることは疑いようがない。

ほのかに揺らぐ燭台の明かりが彼らの顔を照らし出す。

壁にはところどころ装飾品なのか実用品なのかわからないような武具などが立てかけられており、

長い長い机には数十名以上の存在達が向かい合い座り合っている。

「では、深界、も動き出した…と？」

かすれる声でそう声を漏らしたのはこの中の誰なのか。

それすら判らないほどに周囲の空気は果てしなく重い。

「ギルド協会に所属する各協会長の方々に来ていただいたのはそういうこと、です。

　かの界のものはその特性からどのような界のものでも自分達の種族に取り込むことができます。

　また、彼らは特定の媒介さえあればどこからでも出入りは可能、なのですから」

そう。

彼らに関していうならば、門という制限はほぼなきに等しい。

門とは異なる移動手段を持ちえている。

彼らのもつ技術、次元回廊。

初期に産まれた深界の存在がそれを作り出した、ともいわれている。

次元とはすなわち、各界のこと。
つまり、門を通さずとも移動ができ、さらに困ったことにそれの媒介になるモノはどの聖にも存在する。
例えぱ。水であり、闇であり、その媒介になる要素は様々。
「しかし。深界のものが動いた、というのは事実なのですか？」
ここ最近、かの界のものたちは静かだったとおもうのですが？
それゆえの疑問を投げかける。
確かにその意見も至極もっとも。
「しかし。かの界の中には腐食の術を得意とするものもいたはずでは…いやはや。
では我らが建築ギルドのほうでは、
魔術士ギルドのほうにすべての建設物において術を施してもらわなければいけないのでは……」
腐食の術をもつものがやってきたばあい、建物の中にいても建物が腐食し中にいた存在は捕えられる。
「しかし、このたび報告にあったのはどの種族の存在がやってきたのか、まではまだわかっていない、とのことですし……」
コーティング、ともいわれている術を施せる魔道士はさほどいない。
特殊な術であり、精霊の加護とそしてまたその建設物に宿る精霊達と協力し
それが同調することにより成果を成す。
同調がうまくいかなければ術は失敗し、まったくもって意味を成さない。
「先日の堕ちた存在については、魔界より正確な回答がありました。
あれは魔界の反組織、テケリ・ショゴスが無理やりに道を開いた結果、だそうです。
かのキマイラは彼らの実験体であろう、とのことです」
実験体。
その言葉にこの場に集まっているすべてのものたちが顔をしかめる。

つまりそのようなものを実験として創っている、ということは
大量生産もありえる、という可能性を指し示している。
そして…今の彼らの戦力でそのようなものを投入されればまちがいなく勝てない。
精霊達とて一斉にかく乱されるように攻撃されると保護をする力が薄れるであろう。
高位の精霊ならば同時期に異なる場所にその姿を示して力を発揮することができる。
とは伝えきいてはいるがそれがどこまで真実かなどはわからない。
圧倒的なまでの精霊達の力をみてただそのように伝えられているのかもしれないし、
またそれが事実だとしても本当に複数の箇所…
たとえるならば百か所以上になった場合もそれが可能なのか。
その判断はつきかねる。
「むぅ。やはり他世界混合会議を開くべきだと私はおもうのですが……」
今までこれが開かれたのは一万年と少し前だ、そう伝え聞いている。
実際にそのときのことを知るものはこの場にはいない。
いくらエルフ族などでも一万年も生きられない。
よくて数千年がやっと、である。
その当時のことを知っているのはおそらく精霊達、もしくは伝道師達くらいであろう。
神々や魔界における魔王関連の存在達はそのときのことを知ってはいるであろうが。
よくもわるくも、この場には地上界におけるしかもテミス王国に在籍しているギルド協会長達しかいない。
この地には本部があることから
ここにあつまっている協会長達が実質、各ギルド協会員達のトップ、といって過言でない。
「しかし、他世界混合会議を開く…となると民達にも不安を抱かせ

るのでは……」
そうなればおのずと様々な種族のものたちがやってくることになる。
どう考えても人間が他世界に赴き会議をするのには彼らの肉体がどうしても耐えられないのである。
ゆえに毎回会議をするときは地上界で、と制約的に決まっている。
何しろ他の界などには空気すらない界も存在しているのだからそれは仕方がないといえば仕方がない。
人の体というものは他の種族とくらべてもかなり貧弱、としかいいようがないのだから。
そのぶん、生き抜くズブトサはかけ離れている、といっても過言ではないが。
そのずぶとさが様々な方面に向けられ、良い方向にむけばいいが時には悪しき方向にむくこともある。
もっとも、今のこの世界においてはあまり悪しき方向に向かおうとするならば、
その存在は必ず天罰をうけることになるのだが。
当時、ギルド協会の本部はこの国に存在していなかった。
他の国にあったのだが、かつてあったとある出来事によりこの国に移動を余儀なくされた。
文献には当時のことは詳しくのってはいない。
文献に記録を残そうとしても、かけない制約がかかってしまう。
つまりは言い伝えとしてのこっている話しでしか何があったのか把握することはできないのである。
「それに。他界のものとの会話はどうするのですか？
　中には我々の言語を話せない存在もいるとおもうのですが……」
事実。
彼らが地上で使っている言語をつかえない存在も多々といる。
声をださずに心で会話する存在たちもいる。
「たしか。先日のキマイラの一件でとある生徒が活躍した…と報告をうけているが？学校長？」

そんな会話の中、今まで口を閉じていた国王が話題をふる。
「はい。今年入学してきました生徒なのですが。おそらく言霊使いの能力をもっているかと……
　その生徒がいうには、精霊に頼んであの堕ちたキマイラをどうにかしてもらったらしいですし」
ざわっ。
言霊使い。
その言葉にその場にいた全員がおもわずざわめく。
言葉で精霊を従えさせることができる。
すなわち、かなり高性能な能力のようである。
大体よくて草花達を意のままに操れる、というのがせきの山。
それが精霊達まで動かせる、となると、エルフ族ですらそうはいかない。
「命令か願いか、そのあたりの情報は？」
「当人は願い、とはいっていましたが。しかし願われて精霊達が動いたのは事実なのでしょう。
　実際にキマイラは消滅し、道も閉ざされたわけですし」
状況が状況だけに精霊達が手をかしたのか、はたまた彼女が願ったから手をかしたのか。
そこまでは学校長も理解不能。
しかし少なくとも自然界と心を通わせることができる能力を持っているのは事実である。
それだけは確信がもてる。
「もしも会議を開く場合、ではその生徒に協力を仰ぐとしよう。依存はないか？」
先日やってきた生徒とは一応面識がある。
自分達を目の前にしてもまったく動じることのなかったいまだ幼さののこる面影をもった少女。
おそらく何となくだが彼女ならばどのような種族とも対等に渡り合えるような気がする。

それは国王としての直感。
実際は対等どころではないのだが、その事実を国王が知るはずもない。
「では、まずは情報のまとめを……」
このままではラチがあかない。
ゆえにいろいろと意見をかわしながらもざわめく部屋をざっと見まわし国王自らが采配を促す。
しばし、王城の一角においてそんなギルド協会長達と国王達の姿が見受けられてゆく……

くしゅっん。
「？ディア、風邪？」
「ううん、何でもない」
おもわずくしゃみがでてしまった。
しかし、何というか……
おもわず苦笑してしまうディアの気持ちはわからなくもないであろう。
授業をうけつつも、収集をかけた王国側。
少しばかりきになったのでそちらのほうにも意識をむけていた。
そこでよもや自分の話題がだされる、とは夢にもおもっていなかったが。
せっかくこの地にやってきているのに彼らと顔をあわせるとなると意味がない。
逆にそれを利用してすべての懸念事項を駆逐することも可能だが。
王としての素顔は今まで誰にもみせたことがない。
ゆえにどちらの側も自分のこの姿は知らないはず、ではあるが。
しかし、髪の色と瞳の色を変えただけで補佐官として面識がある。
気配も別に変えてはいない。

まあ隠そうとおもえば簡単に隠せるが。
「…私を表にだす、というのならこの国にも協力してもらいましょうかね……」
それはすなわち、自分が通っているこの学校の生徒達をも巻き込むことになるが。
まあいい人生経験、と思ってもらうしかない。
そもそも滅多とない経験ができるのであるからおそらく文句はいわないであろう。
また、文句など有無をいわさず受け付けるつもりもさらさらないが。
【世界】には向こうとする輩達の目を一か所に集められるのはたしかに効率がよい。
そのぶん、集中していない場所で彼らがいろいろと動き回ることはもはや確定事項ではあるが。
まあ別のこの姿がバレてもそう問題にはならない。
そもそも、この姿においてどちらの王もこなしていたのは紛れもない事実。
「ディア？ほんと、どうかしたの？」
そんなディアの心情を知るはずもなく、
きょとん、とした視線をむけてきているディアの横に座っているクラスメートの一人。
「何でもないわ。フローラ」
フローラ、と呼ばれた少女は青い髪を長くのばしたぱっとみためお嬢様タイプ。
実際にお嬢様、なのだが。
「そう？ならいいけど。しかし、ああ！みたかたなぁ。ねえ、知ってる？
　夕べね。なんでかこの町に幾人かの伝道師様達がこられたんだって！」
「なんか噂になってるらしいわね……」
というか、あの子達…あれほど目立たないように、といったのに。

そう内心おもいつつも、さりげなくあまり興味がないようにこたえるディア。
そもそも、彼らを呼んだのは他ならないディアであり、ゆえにその事実を知らないはずがない。
彼らしかしらない言語で道なりに話していれば嫌でもその正体はバレてしまうというのに。
どうやらいきなりの呼び出しでそのことすら失念していたようである。
いきなり行方不明、ともいわれていた彼らの【主】ともいえる存在から呼び出しをうければ
まず間違いなく動揺するのは目にみえている。
ゆえに失念して昔の言語で話していた彼らに罪はない。
ないが、ディアからすれば目立たないように、と注意を促していたこともあり、
そのこと自体が噂になる、というのはあまり喜ばしくはない。
「でも、伝道師様達、何をしにこられたのかしら？やはり先日の一件かしら？」
「さあ？それより、先生、遅いわね～」
遅い理由は知ってはいるが、それをいうのはここではおかしい。
学校長に連れられて会議に同席をもとめられている以上、
本日、このクラスの担任がこの場にくることは絶対ない。
がらっ。
「あ、…って、あれ？」
そんな会話をしている最中、がらり、と教室の扉が開く。
はいってきたのはクラス担任ではなく服担任の姿。
「はいはい。本日は担任のアルクメーネ教師は出張でお休みです。
さ、授業がはじまりますよ。みなさん、席についてくださいね」
ぱんぱん。
いまだに席をたちそれぞれに昨夜から話題にのぼっている町の噂に
花を咲かせている生徒達に注意を促す。

そんな服担任の言葉をうけてそれぞれが自分達の席へともどってゆく。
彼らは知らない。
自分達の運命すら巻き込む話しあいが、今、王城で行われている、ということを――

「……なあ、なんか寒気がしないか？」
「…する。・・・なんか、意思の怒りかうようなこと、俺達したか？」
彼らが寒気を覚える。
すなわちその理由は一つしか思い当たらない。
長年、経験していればその感覚は嫌でも伝わってくるようになってしまった。
「……あ〝。今、ティミから連絡がはいった…俺らのこと、王都で噂になってるって……」
ふと念波により、テミス王国の首都を守護する精霊から情報がはいってきた。
それゆえにその情報をうけとったあと、無意識のうちに冷や汗が流れ落ちる。
「…マジかよ……うわ～。意思からのお仕置きはいやだ～！！」
今まで【意思】におけるお仕置きはたやすいものなど一度たりとてなかった。
時には燃え盛る太陽の中にいきなり放り込まれ、
その太陽の中で不発している元素の爆発を促すように、といわれたり。
降りしきる流星雨の中に移動させられ、
この太陽系の内部にはいってこないように全部撃ち落とすように、

といわれたり。
思い出してもロクなことはなかった、といいきれる。
ゆえにそう叫ぶ目の前の男性の切なる声もわからなくもない。
「お、おちつけ！深界にテケリ・ショゴスにハスター・ホテップのこともあるんだ！
いきなりどこかの動乱の惑星に飛ばされたりはない…はずだ！
よくて組織の中にいきなり放り込まれたりするくらいだっ！」
というか絶対にその可能性のほうがたかい。
自分達を総動員してでもおそらくあの表情からしてみても一度、徹底的にお灸をすえるつもりのようである。
そう彼的には判断した。
意思の思いはなかなか判断つきがたいが、おそらく今回はそのつもりなのだろう。
なぜかそう確信がもてる。
それゆえの台詞。
「それも十分すぎるわっ！そもそも、深界のやつらって、かつての科学力の知識もってるままだぞ！？」
「あ～…しかも、古代文明のヤツラとの知識とも合わさってるからな～……
でも、それをいうなら俺らも同じくらいの知識もってるからどうにかなるだろ？」
せっかくもちえた知識を悪用でなく活用できるものに。
というのが意思の意見。
悪用するのならば彼らの種族も罰の対象内にはいるのであろうが、彼らは主にその能力を自分達の種族獲得のためにしかつかっていない。
それ以外においては外の世界。
すなわち他の世界の地表改革や成分改革にその技術は活用されている。
もっとも、その事実をこの世界に生きている存在達は知るよしもな

いのだが……

「…ま、何かがあるのは確か、だな～……」

まだ正式に命令は下っていない。

しかし近いうちに全員に命令が下るであろう。

それがわかるからこそ…ため息をつかさずにはいられない。

どうやらこのたびの伝道師生においてはのんびりとはできなそうである。

それは、すべての伝道師達の共通した思い……

光と闇の楔　～混乱の中のギルド協会～（後書き）

神達（魔王&主神）の名前。エジプト神話から考えるとアモン（アマン）が打倒のような気がしなくもないけども。

一応、今のところわかっている古代の神話なわけですし。

だけど、あれって元々は土地神、なんですよね…なので魔王達の名前にするのは何だかなぁ・・

とおもうわけで。

なので初期に思いついたその案はすでに頭の中にはありません。

その結果、名無しのまま……

光と闇の楔　～授業と侵入者?～（前書き）

とりあえず、戦闘シーンもどきはオブラートに包んだ表現につとめてます。
まあ正確な光景は各自で脳内変換して想像してください…（他力本願
ようやく主人公の傍に力ある存在達が集い始めるところまで……

光と闇の楔　～授業と侵入者？～

「ようやく次なる長が誕生した、か。しかし……」
「ヴリトラ様？」
目の前の少女の言葉に何らかの意図を感じ取り思わず首をかしげる。
「シアン。それでその後継ぎが生まれたのはどの地においてじゃ？」
「はい。テミス王国の近く、です」
「なるほど……」
先日その近くで魔界の反旗メンバーが何か無理やり道をこじあけたはず。
ならば近くにいても不思議ではない。
「報告ごくろう」
「……何かたくらんでませんか？」
伊達に長い付き合いではない。
【自分達の神】がこのようなそっけない態度をとるときには必ず何か裏がある。
「何のことじゃ？」
・・・・・・・・・・・・
絶対に何かたくらんでいる。
…警護の兵士と、そして警戒するための警備の兵士をさらに倍以上に増やしておこう。
…また、いきなり抜け出されてはたまったものではない。
自分達の王…人の容姿をしているときのその姿は七歳かそこらの少女…にしかみえないが。
実質はこの世界ができたときから存在している、といわれている至高たる竜の神。
そんな彼女の態度に半ば確信に近いものをいだきつつ、心の中で固

く決意する竜の王たるシアンの姿が、
ここ、竜の里の奥深く、霊獣界に通じる扉の奥の神殿の間にて見受けられてゆく――

光と闇の楔　～授業と侵入者?～

「…というか、ディアさん、あなた、はじめっから卒業試験うけたほうがよくなかったですか?」
おもわず呆れつつもそんなことをいってしまうのは仕方がない。
何しろ自分達が教えるよりも、彼女が説明したほうがはるかに判りやすい。
さらにいうならば自分達ですら知らないような仕組みまで加えて説明してくれるのだから呆れる他ない。
今日は朝から王室のほうからギルド協会全体に長達の出向命令があった。
ゆえにある程度の実力あるものたちはそちらのほうに駆り出されている。
今、この場にいるのは駆り出されなかった教師達。
もっとも全クラスを補えるくらいにはきちんと教師の数はたりてはいるが。
しかし教師歴二年になる彼とてこのような利発な生徒は滅多にお目にかかれない。

Ａ組Ａクラスにおいてならばありえるが、ここはＣ組。
つまりは簡易的実力検査の結果中間地点に位置する生徒達がいるべき場所。
「え？でも普通、入学してから、それから卒業は当然でしょう？それに私には後見人もいませんし」
事実、ディアには後ろ盾になるような存在は存在しない。
ゆえに普通にこの学校に入学することにしたのだが。
どちらにしても資格は一生もの。
一度所得しておけば後々困ることはない。
以前に所得したのはこの仕組みができてすぐだったので今の時代では通用しない。
たしかに後見人もいない子供がいきなり卒業試験をうけて合格したとしても、
それは何か裏があるのではないか？
と勘繰られても仕方がない。
もしくはその合格証書が偽造されたもの、と疑われる可能性すらある。
そもそも、そう簡単に偽造などできない仕様になっているのだが、
人の噂とはそういうもの。
授業中、ディアにとある質問をし、教師達ですら知らないようなことを踏まえて説明したディア。
ゆえに教師としては苦笑するより他にない。
そもそも、卵達の原理というか精霊の卵、という存在そのものがいまだに発見されていない以上、
精霊達よりそのことを聞いていても実際にどのようなものか想像することはまず不可能。
想像することができなければそれに対して力を借りうけることもできはしない。
そもそも、力を借りる、ということは逆をいえばしっかりとイメージができ想像することが必須となる。

「そこまでの知識があってどうしてこのC組なんですかねぇ。ディアさんは……」
教師の疑問も至極もっとも。
そこまでの知識があればまちがいなくA組に振り分けられていてもおかしくはない。
「無難な場所で学びたかったですし。それにA組はたしかこの国の王子とかおられるのでしょう？」
下手に一緒に勉学していて自分のことが知れ渡ってしまえばそれこそ本末転倒。
というか下手をすれば国をあげて保護するなどわけのわからないことをいいだしかねない。
それだけはディアとしても何としても避けたい。
もっとも、そういいだした場合、
きれいさっぱり記憶操作をして自分に関してのことを消す、ということくらすはするつもりではあるが。
「あ～。たしかに。A組にはそれなりの権力や血筋の存在達がおおいですからねぇ。
　ディアさんはそういった人達が苦手、なんですか？」
「苦手、というか利用されそうになったりするのが嫌なだけです」
それは本音。
彼女のことを知ればその力を利用しようとする輩もでるであろう。
…もっとも、協力する気などはさらさらないが。
そういう輩はちょこっとお灸をすえる程度で抑えるか、
もしくは他人を巻き込もうとした時点で完全に壊滅させるか、のどちらか。
「なるほど。まあ、人はそれぞれ思うところがありますしね。
　とりあえず、ディアさん、
　今の説明をもう一度、みなさんにもわかるように説明してあげてもらえますか？」
今のディアの説明ではおそらくよく意味がわからない生徒達もいた

であろう。
自分もいまいちよくつかめなかった。
「まあ、いいですけど……。なら古の言い方をもじって説明しますね」
今の世界に昔のような人間達が発見した科学的概念はない。
原子は物質を構成する具体的要素。であり分割不可能な存在。
元素は性質を包括する抽象的概念。
素粒子は物質を構成している最小の単位。
分割不可能な性質をもつそれらに様々なものが付随し新たな命となる。
おそらく四億年前の科学的根拠を話されても今の人々にはまったくもって理解不能。

しばし、ディアによる物質とは何か、その概念。
そしてまた、精霊達の産まれる原理、といった話しが教室において繰り広げられてゆく――

ふわり。
とっん。
体全体に風を纏わせてすとん、とその場に降り立つ。
視界にうつるのはちょっとした王都を守るための門と壁。
「さて、と。たぶん間違いなく、おられる、とおもうんだけどね～」
せっかくわずわらしい、これでもか！とおもえるほどにふやされた監視の目をかいくぐってきたのである。
もしも自分の予感が外れていたらとてもさみしい。
てとてとてと。
まさに、てとてと、という表現がふさわしいような少女が一人、町へむかって歩きだす。
「うん？なんだ、お嬢ちゃん？一人かい？」

どうみても七歳くらいの少女が一人であるいていれば不審におもわれる。
それが町の中ならいざしらず、外からくればなおさらに。
「む～。外見で判断しないてください。あ、これギルド証です」
いいつつも、薄紫色をした上着の中より身分証明書にもなるギルド証を取り出し門番にとみせる。
「ほう。…ん？…お嬢ちゃん、竜族…なのか？」
そこにかかれている種族に一瞬目を丸くさせる。
本来ならば種族などという項目は当人の意思で隠せるのだが、外見が外見。
ゆえに彼女はわざとその項目だけはわかるように設定してある。
…もっとも、その種族も多少あるいみ偽っているといえば偽っているのだが。
「はい。たぶん年齢だけでいったらあなたよりかなり年上ですよ？」
にこやかにそういう目の前の少女。
真っ白い髪に金色の瞳。
薄紫いろの上着をはおり、上半身には淡い桃色の薄い服を着込み、
下半身には茶色いズボンを履いている。
さらにその上から漆黒のローブを纏っているのだからぱっと見た目、
何ともいえない格好になっている。
女の子だからスカートのほうがいいような気もしなくもないが、この姿がやけにこの少女にはよく似あう。
腰のベルトには小さな短剣がいちおうさされてはいるが、滅多とつかうことなどはない。
ローブ、といっても前で完全に止めているわけでなく、
どちらかといえば羽織っているような形で着込んでいる。
「…何か最近、かわった存在達がよくくるなぁ～……」
つい先日もかなりかわった入国者をみたばかり。
ゆえにぽそっとつぶやく入国審査をしていた門番の男性。
「変わった？他にも他種族のものがきたんですか？」

きょとん、としつつといかけるそんな少女の言葉に、
「ん？ああ、魔族なんだが、ギルド証の裏書に他界の構成員の証が……」
あれをみたときにはかなり驚いた。
まあ、人あらざるものであるからこそできるわざなのかもしせれないが。
しかし、普通の存在が簡単に他界を行き来できる、などはっきりいって聞いたことすらなかった。
ゆえにあの場ではいわなかったがかなり内心驚いていたのはいうまでもない。
「他界の？…ああ。もしかして界渡りのリュカのことですか？」
そんな裏書証をもっている存在などまず限られている。
普通はそれぞれの界において混乱をさけるために必要とあらばギルド証を登録する。
ちなみに混乱をさけるために偽名や種族を偽ることもある。
まあ、たしかにギルド登録のときに、実は慈愛の女神です、だの破壊神です、などと。
そんな肩書をわざわざ律義に申告する神々や魔界の王達などまずいない。
そもそも、そんな力ある存在達がギルドに登録している、などといったい誰が想像できようか。
「ん？なんだ、お嬢ちゃん、知り合いか？」
「ええ。まあ」
というか、お兄ちゃん、ここにきてたんだ。
そんなことをふとおもう。
ならばやっぱりここにぜったいにいるっ！
どこかそう確信しつつ、
「それで、はいってもいいですか？」
「かまわんよ。しかし、くれぐれも種族がバレナイようにするんだぞ？

中には竜族の鱗などは高級品だからといってからんでくる馬鹿どももいるかもしれないからな」

実際に、それほどまでに人の中での竜の位置はかなり高い。

その身より取れる鱗や牙などといった品々は薬にもなれば威力のある武器防具にもなる。

そしてまた、農作業で使われる道具にすら利用できる。

つまり、あるいみで万能。

もっとも、人に姿を変えられる竜族はかなりの力を要しているのでどう考えてもかなうはずもないのだが。

そんな常識的なことすらわからないバカタレ達もいるのも事実。

そもそも、人と竜の力の差においては圧倒的なまでの差がある。

それすらわかっていない輩が多いのもまた事実。

「大丈夫です。ここにきたのは人探しですから」

人、といえるのかどうかはわからないが。

何しろこちらから出向かなければいつまた会えるかなんてわからない。

そもそも、話しかければ答えてくれるが実際にやはり姿をみたい、というのもある。

昔はよかった。

まだ他の界が創られていないときは常に傍にいてくれたのに。

そうおもうとすこしばかり一緒にいるであろう他の界の存在達がうらやましくなってしまう。

「そうか。ま、無理はするなよ？」

人の姿を模している、ということはかなり力のある竜なのであろうことは予測はつく。

つくが…竜族の精神年齢だけはよくいまだに人間達はわかっていない。

数百年たっても人間の精神年齢的にはいまだに幼児並み、という存在も多々といる。

見た目が七歳程度のこの竜の少女の精神年齢がどれほどまでかはわ

からないが。
しかし、見た目と精神年齢はにかよる、そう彼ら兵士達は習っている。
ゆえにいくら強くてもその精神年齢が子供、であるならば何かおこったときとんでもない悲劇となる。
まあ、そこにいたるまでにかならず守護精霊が直接干渉しことなきを今までは得ているのだが……
「は～い。どうもです」
とりあえずぺこり、と頭をさげて、そのまま町のほうへと足をむける。
そんな少女の後ろ姿を見送りつつ、
「しかし、魔族のあの兄ちゃんといい、この前のどうみても神族といい。さらには竜族…
この前、近くに魔界からの道が開いたことと何か関係してるのか？」
自分としては平和にくらしたい。
切実に。
今まで兵士を務めてきてこれほど短期間に様々な各界の存在にあったことなど一度たりとてない。
何か、が確実におこりかけている。
しかし、それが何なのか…しがない一兵士である彼には判るはずもない……
「さって。ティミから情報を脅し…もとい、誠意ある話しあいをして聞き出しますか…ね？」
町に入ると同時、少女がにこやかにほほ笑みつつつぶやく。
それと同時…少女の周囲に光が収縮してゆくが。
しかしその現象に気づく存在達は誰もいない。
それは少女が自分に不可視の結界を張っているからに他ならない。
本来ならば、人、が神を直視する、などできないのだからして――

ビ～ビ～ビ～！！
突如としてけたたましく鳴り響く、耳につく高い音。
それと同時、各教室の教壇のよこに設置されている水晶が淡く光る。
『緊急事態発生、緊急事態発生。何ものかが侵入いたしました。
相手の素性はわかりません。繰り返します。緊急事態発生。緊急事態発生。
拘束しようとした教師はかえりうちに会いました。
教師のみなさんは生徒達から目を離さないでください』
この水晶は何かあったときの緊急連絡用のような媒介のようなもの。
この水晶の映像と音声は学園の中心部にある制御室より発せられており、
中心部においては随時、学校内部の様子を視ることができている。
それらは精霊達の協力によってそのようなことが可能、となっているのだが。
ざわっ。
その内容を聞き咎め、クラスの中がざわめく。
それはどの教室においても同じこと。
悪意あるものではない、とは断言できるが、返り討ちにあった、というのが気にかかる。
そもそも、悪意ある存在だとすれば
この王国を守護している守護精霊よりはるかに実力のあるものが入り込んだ。
そうとしか思えない。
しかしそのような存在がこんなしがない学校に侵入してくるなどとは思わない。
ならば、悪意なく純粋に何かの目的のために入り込んだ侵入者。
そう捕えれるのが筋。
しかしその悪意なき純粋な目的、というのは一番タチが悪い。
当人に悪いことをしている、という自覚がないので保護結界すらも

通用しない。
さらには一つのことを盲信しているせいか人の話しなど耳もかたむけない。
「たしかこの学校って侵入者用の結界ほどこされてなかった？」
「うわ～。まさかこれって避難訓練とかじゃないよな？」
何かどこかずれた生徒達の声がきこえてこなくもないが。
たしかにこの学校では事前連絡もなしにいきなり各種の訓練を行うことがある。
なぜかご丁寧に幻獣を召喚し学校が襲撃された、という形を疑似的に作り出すことすらある。
ゆえに幾度かそれを経験したり、
もしくは話しをきいたことのある生徒がそのような反応してしまうのは仕方がない。
「静かに！ううむ…たしかに、訓練、という可能性もなきにあらずだが……
しかし現状がわからない以上、今日の授業はひとまず中止、だな」
何しろ訓練を行う場合、教師達にすらそのことを伝えていなかったりすることは多々とある。
だから余計にタチがわるい。
訓練なのか実戦なのか、その心構えによっては行動に制限がでてくる。
つまりは、どちらにしても実戦、として心構えをしておかねばいざ、というときに対処ができない。
いまだに水晶からは警戒警報のような言葉が常に発せられている。
「…ここってそんなことがあるわけ？」
先ほど訓練云々といっていた生徒に問いかけている生徒も多数。
親がこのギルド協会学校の卒業生ならばその話しは子供に大概つたえてある。
しかし関係者がいなければそのような話しはまず表ざたになりはし

ない。
そもそも、そんなことが広まれば訓練の意味がなくなってしまう。
常に緊張感をもって行動すべし。
これがこの学校の概念、でもあるのだから。
ざわざわといまだに教室内部が騒がしい。
が。
「……先生……」
「ん？何だ？どうした？」
ふと顔をしかめて一人の生徒が手をあげる。
そんな生徒の姿に気づき、問いかける教師であるが、
「…すいません。どうも馬鹿やってるの私の知り合いのようなんですけど……」
あの子は何をやってるのよっ！
精霊達から伝わってきた光景に思わず頭をかかえたくなってしまうのはおそらく気のせいではないであろう。
「ディア？それって？」
そんな生徒…ディアの台詞にきょとん、として問いかけている別のクラスメートの姿。
「今、精霊達から映像が送られてきたんだけど。ほんっと何をしてるのかしら……
すいません、すこしばかりお仕置き…でなかった、話しあってきてもいいですか？ふふふふふ……」
そういうディアの目ははっきりいって笑っていない。
気のせいだろうか。
ディアがそういうと同時に教室の温度がかなり下がったような気がするのは。
何だかわからないままにその場にいたすべての存在が本能的に硬直してしまう。
それは存在における本能が警告する畏れ、なのだがそのことに気づくものは誰もいるはずもなく。

そういいつつも、カタン、と席をたちあがり、教室からでてゆくディアを止められるものは……
…誰、一人とていないのであった……

「む～。ああもう、面倒！というか、なんでここまでしつこいのよっ！」
『……ヴリトラ様。それは仕方ないのでは…というか無理やりにはいったのは貴方様で……』
次から次にやってくる捕獲者という名の存在達。
そんな彼らをいともたやすく受け流し、
それでも気絶だけでとどめているのはさすが、としか言いようがないが。
「だって、中にいれてほしいっていってもダメ、っていう人間がわるいのよっ！」
ティミを呼び出し、確認してみたところ、ここにおられることはわかった。
ならば、というので会いに行こうとギルド協会が経営している学校に出向いたのだが。
関係者以外は立ち入り禁止、といい門前払いをくらってしまった。
少し考えればわかりそうなことなのだが、しかし彼女にとってはそれは心外。
そもそも、どうして【母親】に会いにきただけなのに断られなければいけないのか。
母でもあり姉でもあるかの御方を自分がどれだけ慕っているのか人間達は判っていない。
だからこそ強行突破した。
それに気づいてあわててティミも姿を現し、説得しようと試みたが
今のところすべて無駄な徒労と化している。
それでも彼女がその能力の一つでも発揮したり力を解放したりすれば

こんな王都くらい瞬く間に消し飛んでしまう。
それだけは避けなければ。
そう心ひそかに決意し説得しながらも常に少女…ヴリトラと共に行動しているのは、
この王都の守護精霊たるティミ。
「くっ…まさかこんな子供にやられるとは・・・っ！」
実力者のほとんどが王宮にいっているとはいえ見た目七歳程度の女の子に圧倒的に負けている。
そのことが精神的に彼らにとってかなり屈辱的となっている。
「ああもう！次から次にっ！…面倒だからいっきにせん滅しちゃおうかな……」
それでなくても力を手加減して相手を気絶させているので疲れるというのに。
次から次へとこちらの話しをきくことすらせずに攻撃してこようとする大人たち。
『お、落ち着いてくださいませ！ヴリトラ様！そんなことしたらこの王都は消し飛びますっ！』
ぽそっといったその台詞にあわててそんなことをいうティミ。
たしかにシャレにならない。
それでなくても目の前にいるこのヴリトラは【意思】の次に実力のある存在なのだ。
それをしっているからなおさらに。
「いたぞ！侵入者はあそこだ！」
「な！？子供！？」
「油断するな！他の仲間達も攻撃一つできずに倒されてるぞ！」
何やらそんな声が反対側の廊下のほうから聞こえてくる。
みれば数名の大人たちが二人の姿を確認しこちらにむかってきているようである。
そのまま、少しばか距離をおき、口ぐちに何やらいいつつも臨戦態勢をとる大人たち。

まったく……
この存在達は何をいっているのであろうか。
おもわず呆れてため息がでてしまう。
そもそも、自分が創られた定義を彼らは知っているのであろうか。
否、知らないであろう。
ゆえに意思ある言葉を紡ぎだす少女…ヴリトラ。

『La haine de la personne me la isse; un dragon』
――我は人の憎悪が産み落とし龍

『La personne regarde en bas et l'envie et l'envahit et le pollue』
――人は蔑み、妬み、侵し、汚す

ただやみくもに創られたわけではない。
あのとき世界に充満していた【心】において【ヴリトラ（我）】は創られた。
人が人であるかぎり、そしてまた、各心が人のそれであるかぎり、その力は不滅。
産まれたときよりその存在意義もわかっていた。
自分の存在、それすなわち、当時生きていた存在達の結晶ともいえるもの。
何よりも神々達の心もまた力にと直結する。
心とは強くあり、そしてまた簡単に堕ちゆくものなのだから。

『Gyve comme la signification d'existence de ce but』
――――そのための存在意義たる枷

彼らが疑心暗鬼になるたび、逆にその力はヴリトラの力にと変換される。

『Ｍｏｎ　ｎｏｍ　ｅｓｔ　Ｖｒｉｔｒａ　Ｄｅｍｅｕｒｅｚ　ｄａｎｓ　ｌｅ　ｔｕ　ｃｏｒｐｓ，　ｅｔ　ｌｅ　ｆａｉｔ；　ｐｏｕｒ　ｓｏｕｐ？ｏｎ
　Ｂｒ？ｌｅｚ　ｃｏｍｐｌ？ｔｅｍｅｎｔ　ｌａ　ｔｏｔａｌｉｔ？　ｌｅ　ｃｏｅｕｒ』

――――　我が名はヴリトラ。汝らその身に宿りし疑心にて　その心を焼き尽くせ

いちいち相手をするのも面倒。
こうなったら手っ取り早く、彼らから自分に対する疑心を取り除いたほうがはるかに早い。
『ち…ちょっと、ヴリトラ様ぁぁ！？』
いきなり【戒めの旋律】を唱え始めたヴリトラにただただうろたえるしかないティミ。
「「な…うわぁぁっ！？」」
ヴリトラの言葉をうけ、その場にいたすべての存在達が青白い炎に瞬く間にと包まれる。
その炎には熱はない。
ないが全身を突き刺すような痛みは絶え間なくおそいかかる。
「さて、と。これでうるさい追っては……」

どくっん。

ぞくっ。
ようやく追ってがいなくなった。
そうおもい、ようやく本来の目的。

捜索を開始しようとしたその矢先。
何が、というわけではないが本能的に何かがどくん、と反応する。
それと同時、全身を突き抜けるような寒気が瞬時にヴリトラにと襲いかかる。
「ヴ・リ・ト・ラ？あなたはここで何・をしてるのかしら…ねぇ？」
それと同時、底冷えするような…まるで地の底から這い出てきたような深い、深い声が聞こえてくる。
その声はたしかに待ち焦がれていたもの。
だが、だがしかし。
こ…この口調は！？
だらだらだら……
その意味を察し、その場にただただ固まってしまうヴリトラであるがそれはそれで仕方がないであろう。
『ううう。すいません。お母様、ヴリトラ様をおとめできませんでした～……』
一方でその声をかけてきた存在の姿をみとめ、半ば泣きながらも訴えている守護精霊ティミ。
それと同時。
ドッンっ！
ものすごいまでの重圧がヴリトラの体全体に襲いかかる。
「さってと。ヴリちゃん？きちんと説明してくれるかしら…ねぇ？」
「…お姉様…ひどい……」
さすがのヴリトラもすでに涙目。
体を動かそうにも自由がきかない。
そもそもその場に完全にヴリトラは重力によって押しつぶされている格好になっていたりする。
しかもご丁寧にヴリトラのみ限定、で。
涙目で声のしたほうを振り向けば、ヴリトラが探していた姿がそこにあったりする。
するが、その目は全く笑っていない。

「まったく。神竜ともあろうあなたがこんなことろで何やってるのよ？ん？」

そう。

目の前の少女は紛れもないこの世界の神竜。

「…お姉様こそ…なんだってこんな人間の学校なんかにおられるのですか？

私、私ずっとお姉様とお会いしたかったのにっ！最近まったくあいにもきてくださいませんしっ！」

それでも重力に押しつぶされながらも抗議の声をあげる姿はさすが、としかいいようがない。

周囲にいる大人たち…すなわち、この学校の関係者達はいまだに炎に包まれているので、

そんな彼女達…いうまでもなく、ヴリトラとディアの会話は耳に届いていない。

それでなくても彼らの体はいまだに炎につつまれてその痛みに苦しんでいたりする。

その炎は彼らが疑心、という負の心を捨てないかぎり消えることはない代物。

しかし、人、というものはどんな状況であれ一度抱いた疑念や思いこみはそうそう消せるものではない。

ゆえにこそ炎の勢いは弱るどころかますます勢いを増していたりする。

この炎は精神に作用する炎であるがゆえに物質的な影響はまったくない。

つまるところ…いくら炎につつまれていようが周囲の物に燃え移る心配は皆無。

ヴリトラのいいたいこともわからなくもない。

そもそも、彼女がヴリトラに直接会いに行ったのは…すでにもう一万年以上前のことなのだから……

しばし、関係者達が炎に包まれている、という異様な光景の中、
そんな少女達の会話がその場において繰り広げられてゆくのであった……

光と闇の楔　～授業と侵入者?～（後書き）

ようやくだせた！神竜、ヴリトラ！
性格的にはかなりの甘えんぼさん。
だけど元となった感情が感情なのでかなり冷徹非情でもあります。
だけど主人公（ディア）の前では甘えん坊な女の子ｖ
ちなみに、彼女、伝道師達にも頭があがらなかったりします（笑
ちょくちょく役目放棄して脱走するので竜王達は頭をかかえている次第です
世界を再構築するにあたり、意思がその力の一部を彼女にあたえているので、
実力的にはディアの次、となっております。

光と闇の楔　～特別処置と会議決定～（前書き）

なろうにおいて。
Ｈ２３／３／２３日当日において、総合ユニークさんが千を超えました。
ＰＶアクセスは八千。（びっくり仰天
みなさん、ありがとうございますｖ
ようやく神竜も学生さんにこのたびより（？）加わって、戦乱？への道が開けかけです…
まえぶりさんで、以前にあとがきでいってた、【界】の責任者達の名前の由来。
伝道師達の相談？をちらり、とをば……

光と闇の楔　～特別処置と会議決定～

「……これは……」

現実を新たに突きつけられた。

かつての青い地球の面影はすでにない。

原初の海。

そうとしかいいようがないその光景。

いたるところから直接地表奥深くからマグマが噴き出し、厚く覆われた雲からは絶えず雨が降り注いでいる。

しかもこの雨、太陽からの有害物質などをも含んでいる。

それらがなぜか【判る】。

反省とばかりに別の惑星に飛ばされていた。

そして戻されてみればかつての母星の面影はどこにもない。

それが彼らが利益のみを追求した結果もたらされた結末だと理解する。

あるものは、ただ、利益を、あるものはただその探究心を、あるものはただ、暇だから、という理由で。

そしてまた、便利性を目指し自然をないがしろにしていたのも事実。

『あなたがた人類のせいで犠牲になった他の命には罪はありません。

彼らには受け入れてくれる惑星へと移動してもらいました。

あなたがたはこれから、この惑星のあらたな【理の楔】の監視者になってもらいます。

二度と、あなたがたのような知的生命体が愚かなことを起こさないために……』

彼らの耳にと聞こえてくるとある声。

新たな理を創るにあたり、彼らはそれぞれ話しあった。

そして、自分達の文明の痕跡をどこかに残しておきたかった。

自分達という存在がいた、という証に。
だからこそ、昔より伝わる伝承を元にそれぞれの【界】を設定した。
それでなくても彼らが生み出していた時空干渉装置により他の次元の存在もある程度は把握されていた。
それらすべての界をつなぐことにより、一つの種族のみが暴走しないように、それぞれが監視する、という制約をつけて。
星の意思より伝わってかつての文明。
彼ら人類が誕生するよりも前に栄えていた文明達の記憶。
『あなたがたの様々な思いは浄化するのに長き年月がかかるでしょう。
…なので、その思いを新たな生命として誕生させます……』
星が滅ぶ…否、まだ命にあふれていたときの結晶ともいえるそこに生きていたものたちの思い。
その思いより創りだされたひとつの生命体。
その生命体は古より伝わる彼らの伝承から、【竜】として誕生することとなった。
原初より始めに生み出されたのが竜という種族。
そう古代より伝わっていたその伝承のままに……
「…名前は、何にしようか？」
「……竜でおもいつく名……いろいろとあるが……」
「ヴリトラとか。麒麟とか？」
「ティアマト、というのもあったな。たしか…」
「いや、それは大地の基礎となった地母神の名前でなったか？たしか西アジアの」
「でもたしかあれは邪神に変化したという伝承では……」
『その生命はこの大地の楔として誕生しました。宇宙空間からの干渉をその力においてふさげるように』
有害な物質が降り注いでいては新たなかつてのような命あふれる惑星にはならない。

それゆえの措置。
「宇宙を塞ぐもの、でヴリトラ、でいいんじゃないのか？」
「「…まあ、それが無難、かな？」」
たしかに名前と神話が一致しているに越したことはない。
意見が一致しその旨を『世界の意思』こと『惑星の意思』にと伝える彼ら達。
『では、その生命体に体という器を与えることにしましょう……』
言葉が響くと同時、周囲は真っ白い光に包まれてゆく……

そして、彼らは【界】における存在達をも創りだす。
かつての神話等にもとづく様々な名前を。
そして、それにもとづき新たにそれぞれ器を得た存在達が新しき時を紡ぎだす……

光と闇の楔　～特別処置と会議決定～

「まったく……」
「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……」
この突発的な行動は昔から変わらない。
ゆえに呆れ交じりにつぶやくしかない。

「……あ〜…つまり、何か？その子は慕ってる君にあいたくて無理やり侵入した…と？」

それをきいてもはや教師達は呆れる以外他にはない。

というか目の前の生徒はどこまでいったい規格外なのか。

それにつきる。

先日はたしか精霊と意思疎通ができることが判明した。

今度は竜族に慕われている、とのこと。

目の前の少女が自分が竜だ、そういっていることからおそらく嘘ではないのであろう。

というか普通の存在にあっさりとこれでも実力に少しは自信のある教師達があっさりと負けた。

というよりよほど信憑性がある。

「だって…だって…お姉様にあわせて！といっても、関係者以外立ち入り禁止って……

わたし、わたし、あいたかったんだもんっ！」

「だからって無理やり侵入する子がありますかっ！まったく……あなたは、昔から……」

ダダをこねて大地を一つまるまる消滅したこともかつてはあった。

精神的に成長しているのかいないのか、そのあたりの判断がつきかねる。

ディア、と名乗っている生徒に怒られ、しょぼん、とし瞳を潤ませている少女からは、

さきほどまでの圧倒的な力はまったくもって感じられない。

『すいません。私が彼女を止められなかったばかりに……』

何やらこめかみに手をあて唸る教師たちにと、申し訳なくはなしかけている守護精霊、ティミ。

守護精霊ですら止められなかった、ということが少女が竜族なのだという信憑性を物語っている。

ティミは光の姿を形どり、ふわふわと申し訳なさそうに周囲を飛び交っている。

光に包まれたその姿はさほど大きくなく、大人のこぶし大程度。
飛び交うたびに周囲にきらきらと金色の光が舞い落ちている。
「とにかく、あなたはもどりなさい」
「やだ～！お姉様がここにいるから私もいるっ！」
「…迎えの要請、だそうかしら……」
おそらく伝えればまちがいなくすっ飛んでくるであろう。
そもそも役目を放棄してここにきているのは疑いようがない。
そんな彼らの会話は何のその、ディアと少女はいまだに何やら言い合っていたりする。
どうも平行線をたどっている…としかおもえないそのやり取り。
さきほどから、戻れ、戻らない、の繰り返し。
「あ〝～…ディアさん？その子とどういう知り合いなんですかな？」
そもそも、人の姿をとれる竜族と知り合い、というのが気にかかる。
というかそんな人間がいるのか、という疑問もつきないが。
「どうって、見たとおり、慕われまくってるんですよ…いつまでたっても甘えん坊でこまるんですけど……」
少女…ヴリトラからしてみれば自分に器をあたえ新たな命として創りだした【意思】を慕うのに意味はない。
というか彼女にとっては母でもあるのだからそれが当たり前といえば当たり前。
「本来、この子は霊獣界に住んでるんですけどね……竜の里を通ってやってきたんでしょうけど……」
おそらく今ごろ、側近をかねているシアンが激怒しているであろう。
少し確認して視ただけでもそれは一目瞭然であった。
どうして慕われているのかはよく分からないが。
しかしどうやら素直に怒られているのをみるところから完全に慕っているのは疑いようがない。
「ここはどうでしょう？この子にも学園で生活してもらう、というのは？
二度とこのようなことをおこさないためにも人間としての常識

を学んでもらったほうがよくないですか？」
おそらく無理やり侵入しようとしたのは、そのあたりの知識が皆無だからなのだろう。
そう予測し、学校長がそのような提案をだしてくる。
連絡をうけあわてて学校にもどった教師や学校長、理事長達がみた光景。
それは小さな女の子がディア、と呼ばれる生徒にこってりと怒られている様であった。
侵入者はその小さな女の子であり、怒っていた生徒に話しをきけば、彼女に会いたくて無理やり侵入してきた、とのこと。
それをきたときにはその場にいた全員がただただ頭をかかえるしかなかったが。
そもそも、その傍にはおろおろとした表情をしているこの地の守護精霊たるティミがいたのである。
守護精霊ですら止められなかったということはかなりの実力をその少女がもっていることを物語っている。
このたびはどうにかなったが、これからもディアがここで生活する以上、
もしくは卒業し他の場所にいったとしても同じようなことをしでかさない、とは限らない。
それゆえの提案。
「たしかに。では特別措置として入学許可をだしましょうか？」
「・・・・・・・いやいや、先生達、ちょっとまってください！？いいんですか！？いいんですか！？」
そんな教師達、しかも学校長の鶴の一声で何やらとんでもないことが決定されようとしている。
ゆえにおもわず叫ぶディアはおそらく間違ってはいない。
というかそんなことになったら絶対に文句が自分にむいてくる。
それはもう、ほとんどあきらめに近い状態で。
「しかし。ディアさんといいましたね？

この様子ではあなたがいる限り、この子はまた同じようなことをしでかさないとも限りません。
このたびはまだ怪我人だけで済みましたが、力加減によっては死者もでかねません。
守護精霊様ですら止められない力をもっていることから下手をすればかるく町一つくらいは壊滅させられる実力をもっている、と推測されます」
正確には町一つどころかこの地上におけるすべてを壊滅させるほどの実力をもっている。
「うっ…い…いいかえせない……」
事実、昔も同じようなことをしでかしているだけにディアも言い返し用がない。
そのあとの後始末にほとんどの神々、そして魔界の王達がこぞって尽力を尽くしたのは記憶に新しい。
たしかあれは四万年前のことだったかな？地球時間で。
そんなことをふと思うディア。
実際に今指摘されたようなことをすでにやったことがある実績がある以上、ディアも言い返し用がない。
人間たちの常識をとりあえず教え込んだものの、当の当人が覚える気が今までなかったのも事実。
まあ、たしかに、地界に出ていかないかぎり、関係ない、といえばそれまでなのだが……
「とりあえず、詳しくは会議によって決定することになりますけど。
ディアさん、あなたはこれ以上、その子が暴走しないようにしっかりと見張っておいてください」
「……はい……」
そういわれれば素直にうなづくより他にない。
というかおもいっきり目の前の少女ヴリトラが本気で駄々をこねれば、
こんな小さな町などあっというまに焦土と化す。

いくらディアが結界で覆ったとしてもその力の余波は必ずどこかにひずみが生じる。
「…ヴリちゃん。あとから徹底的にお仕置きだからね？」
「…ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……」
ため息をつきつつも、笑っていない瞳でヴリトラを見つめるディアの様子に、
ただただ体を震わせて謝っている少女の姿。
ふとみればどうやら教師たちは今後の対応を決めるために会議の時間帯を決めているらしい。
そんな教師たちの態度をみつつ、
…しょうがない。
どうやら決定事項は揺るぎようがない。
ならば。
そう確信しかるくため息をつきつつも、

「Comme pour la chose de mon intention, il devrait limiter le pouvoir du tu……」

――我の意思のもと汝の力を制限すべし……

ぽつり、と小さくヴリトラにむかって言葉を発するディア。
その直後。
淡く少女の姿が輝いた事実に気付いたものは精霊であるティミのみ。
その場にいる教師の誰ひとりとしてその事実にきづくことなく……
結局のところ、侵入してきた少女、ヴリトラはひとまずディアが引き取ることになったのであった……

『…すると、何ですか？成り行きで人間界の学校に通うことになった…と？』

とりあえず心配しているであろうことから許可をもらい早退し寮にもどり連絡をいれる。
目の前にはゆらゆらと揺らめく空間に映し出されている一人の男性の姿。
「とりあえずたしかに。今の常識身につけさせるのはいい機会かもしれないけど。
あ、そっちの仕事はきちんとこの子にやらせるから。仕事のみの【道】を張っておくわ」
「お…お姉様、仕事…って……」
「ヴリちゃん。あなた、仕事をほっぽってきてるんでしょう?きちんと仕事はこなしなさい!」
『…意思様のほうはいいのですか?たしか両界とも大混乱と化してるらしいですけど……』
よもや人間界に降り立っているなどとは夢にもおもっていなかった。
まあ、新たな後継者が生まれたことからその可能性も考慮していたが。
こう実際に事実を突きつけられれば信じるよりほかにはない。
ほいほいと彼女がここにいることで【道】をとおって誰もかれもがやってこられてはたまったものではない。
ゆえに、仕事のみ限定で【道】を開いておく。
「あちらは本来、それぞれの界の存在達がやらなければならないことだし。
それに、いつまでも甘やかしていては成長も望めないでしょう?シアン?」
それは本音。
何でもかんでも【王】がどうにかしてくれる。
そうおもっていると必然的に油断が生じる。
定期的にその満身創痍を砕く必要性があるのも事実。
だから今回の一件はちょうどいいとばかりにこうしてここにきているのだから。

バタン！

「ディア！今日の襲撃者がディアの知り合いって本当！？」

毎回、毎回思うのだが、ノックもせずにいきなり部屋にはいってくるのはいかばかりか。

もっとも、きちんと鍵をかけていないディアにも問題あるといえばあるだろうが。

そもそも、ディアとしては悪意ある存在にのみ反応する簡易的な鍵をつけているので、

悪意のないものは鍵のかかっていない状態としてそのまま部屋の中に入ることが可能。

「…ケレス。毎回、毎回いうけど、せめてノックくらいしてよね？」

はいってきた少女の姿をみとめため息まじりにつぶやくディアはおそらく間違ってはいないであろう。

「何いってるのよ！ディアこそそうしてほしいなら鍵かけときなさいっ！って…ディア？その子…だぁれ？」

学校内にてディアの噂をきき、本日の襲撃者が実はディアの知り合いだ、ということを聞きだしたケレス。

ゆえに襲撃の余波で運がいいのか悪いのか、とにかく授業が切り上げになったことをうけ、

急いで寮にともどり、ディアの部屋にとやってきた。

部屋にはいり、まず目にはいったのは、なぜか正座をして部屋のスミに座り込んでいる一人の少女。

歳のころはおそらく七歳くらいであろうか。

真っ白い髪に金色の瞳。

その髪の長さは肩より少し長い程度。

透き通るまでの白き肌は少女の愛らしさをさらに引き立てている。

しかも体全体をおおうような漆黒のローブを身にまとい、ちょこん、とそんな少女が座っているのである。

おもわず目をひかないわけがない。
しかもそれがみたこともない子供ならばなおさらに。
いくらここがギルド寮であり、けっこう様々な存在達が出入りするにしても、
こんな少女がここにいる意味がわからない。
一瞬、ディアの身内、ということが脳裏をよぎる。
たしか十人くらいいる、といっていたような気がする。
ならこの子はそのうちの一人なのだろうか？
ケレスがそんなことをおもいつつも、首をかしげていると、
「ああ。この子？知り合いでね。…私を慕ってやってきたみたいなのよ……まったく。
　何をかんがえているんだか……」
そんなケレスの思いを察し、ため息まじりにこたえるディア。
まあ、知り合いといえば知り合いである。
彼女を【創った】のがディア当人、というのを除けば。
つまり知り合い、という言葉は嘘ではない。
…事実を示しているわけでもないが。
「？お姉様？このにんげん、だぁれ？サラマンダーの匂いがするけど？」
そんなケレスをみて首をかしげてといかけるヴリトラ。
「ああ。ケレス＝アストレア。この寮の部屋の前にすんでいる同じ寮仲間よ。
　ちなみに学校のクラスは総合科Ａ組Ａクラス」
「？」
ディアの説明にこくん、と首をかしげるヴリトラ。
「…ヴリちゃん、そのあたりの勉強は何をしてたのかなぁ～？」
ギルド協会における学校の勉学は必須として課していたはずである。
しかしどうやら当人は意味がわかっていない。
ゆえにこそ声がすこしばかり低くなってしまうディア。
「…えええと……あ、アストレア？ああ、サラマンダーの加護をう

けている一族の人間か～。
　私はヴーリ、よろしく！」
どうやら風向きが再び悪化しそうな気配をうけ、あわてて話題を変えて自己紹介。
ヴリトラ、と名乗れば面倒なことになりかねない。
ゆえに大概、彼女は他者に自分のことを紹介するときには昔の愛称で答えるようにしている。
それは今も昔もかわらない。
まあ、神々の名前は有名で、確実に真名をいえば間違いなく結び付けて考えられる。
もっとも、中には加護を得たいとばかりにわざとその名前と同じにする輩もいるが。
特にその兆候は人間族の中に多く見られている。
ヴリトラからしてみれば、神々、そして精霊達は彼女よりあとから創られた存在達なので、
どちらかといえば妹や弟的な感覚となっている。
そしてまた、神々や精霊王達も彼女を怒らせればどうなるか、身をもって知っている。
しかしわざわざそのことを説明する必要性はこの場においてまったくない。
「…精霊王様を呼び捨て…って、ディア、この子、だれなの？」
「ん～。一応、竜族」
「…は！？」
竜族でしかも人型をとれるということはかなりの実力者ということを示している。
たしか噂では守護精霊ティミ様でも止められなかったとか何とかきいたけど…もしかして…
とある可能性に思い当たり、
「…もしかして、今日、学校を襲撃してきたのって……」
「うん。この子。なんでも私にあいにきて、門前払いされたからっ

て無理やりはいったらしいのよね……」
「…うわ～……」
どこか遠い目をしながらもぽそり、とつぶやくディアの言葉に何といったらいいのかケレスとしても言葉が見つからない。
たしかに人型をとれる竜族ならば守護精霊と比べ物もならないくらい力の差があるのであろう。
それがどれほどのものなのかはしらないが。
「…ディアってなんかいろんなものに好かれてるのね……」
慕われて、しかも無理やりに侵入、しかも騒ぎまでおこす。
そこまでいくとさすがにうらやましい、とはおもわない。
むしろ大変だ、という思いのほうが強い。
「それで、これ以上この子が暴走しないようにって、学校関係者達が私に面倒みるようにって……」
「……御愁傷様……というか、どうして人型の竜族なんかとしりあったわけ？」
「あ～、まあ、いろいろとあって……」
ディアのことである。
きっと何かのはずみでなつかれたのかしら？
その可能性はかなりある。
言葉を濁すことからおそらくそれはほぼ間違いないのであろう、そうケレスの中で結論づける。
「…ヴーリ様…というか、ちゃんのほうがしっくりくるけど……
とりあえず、私はケレス＝アストレア。ディアとはギルドでパーティーくんでるわ。よろしく」
「…パーティ？…お姉様、ずるい！私もはいるっ！」
「ヴリちゃん？あなたは、反省、という言葉がわかってるのかしら？ん？」
何だかとても面白そう。
それゆえにぱっと瞳をかがやかせてすかさずケレスの言葉に反応するヴリトラ。

そんな彼女に対してすばやく突っ込みをいれているディア。
「うう……だって、だって、だってぇぇ！いつもいつもみんな私におとなしくしてろっていうんだもんっ！」
というか彼女が暴れたらどうにもならない。
そもそも彼女のちょっとしたいたずらでもシャレにならないことがある。
……そのために、すべてのその場におけるものたちにおいて霊獣界は他の界よりもさらに頑丈に結界が施されているのだが……
「あなたは自分の役目がわかってもそうなんだからねぇ～……」
おそらくは多々とある【心】をそのまま具現化するようにして【魂】を創った結果なのであろうが。
しかし時がたってもこの幼い性格はどうやら治りそうがない。
もっとも、きちんと公私の区別をつけられるようになっているだけ多少はまし、
とおもうしかないのかもしれないが。
「…ディア、まあ、頑張って……」
どうやらディアを完全に慕っている、というのはうそではないようである。
どのくらいの力をもっているのかはわからないが、どうやらディアの意見はきくらしい。
つまりは、この見た目幼き竜族の【力のストッパー（枷）】がディア、といっても過言でない。
何やら会話だけきいていたら、目の前の少女が本当に竜、だとは信じがたい。
どうみても幼い子供が駄々をこねているようにしかケレスの目には映らない。
しかし、目の前の子供から感じる気配はあきらかに人あらざるもの。
だからこそ信じざるを得ない。
何となく先日であった緑竜と似通った気配をまとっていればなおさらに。

「それで、ケレスは何しにきたの？」
「ああ、今日のことききにきたのよ。ま、大体のことは今の説明でわかったけど。
　ま、とりあえずしばらくはここにいるんでしょ？そのこも」
この調子ではおそらく帰る気はさらさらないであろう。
「まあ、人間界の常識をきちんと判らせるために、学校長がいうには学校に通わせるっていってたわ……」
「・・はい？」
何かいま、信じられないことを聞いたような気がするのは、ケレスの耳の錯覚か。
「…なんか、ディアと知り合ってから奇想天外なことが続けざまにおこってるような気がするのは…
　私の気のせいかしら……」
ぽつり。
ディアの説明をきき、しばし呆然としつつもぽつり、とつぶやくケレスの姿が、
寮の一室においてしばし見受けられてゆくのであった……

「また、面倒なことに……」
報告をうけ思わず頭をかかえてしまったのは仕方がない。
絶対に。
そもそも、どうしてこう続けざまに問題がおこるのか。
報告をうけたとき、本気でそう思ったこのテミス国王はおそらく間違ってはいないであろう。
その場にいた誰もが同じことを思ったのだから。
「まあまあ。聞けば竜の娘さんはあの少女に会いに来ただけ、というではありませんか」

「というか、やはり言霊使い、というのは間違っていないのかもしれないな……」
基本、言霊使い達は様々な存在に好かれる性質をもっている。
わざわざおいかけてくるほど好かれている、という事実がその信憑性をより増している。
「やはりここは、会議を提案するのが一番いい、だろうな」
人型をとれる竜があの少女のいうことを素直にきいているらしい、というのが不幸中の幸いか。
しかし守護精霊ですらその力というか行動を止められなかった。
そのことはつまりは、彼ら王国内のものたちでは手のうちようがない、ということを物語っている。
ならば、各界に要請して混合会議を開き、少しでも脅威を減らしておきたい、とおもうのは仕方がないこと。
「…できれば国に属してほしかったが。危険因子が訪ねてくる可能性がある、というのは失念、だな」
「ですね～。人型をとれる竜族など、簡単に町の一つくらいなら壊滅さらっとできますからね」
しかも当人?にその気がなくてもそれは可能、そう伝え聞いている。
また、伝説では人に姿をかえたまだ精神的に幼い竜がほしいものを手にいれられず、
駄々をこねてその駄々というものが人からしてみれば洒落にならず、その反動で町が一つ滅んだ、という話しすら伝わっている。
…実は伝説などではなく、実際にそういうことがあったのだが……
その力を利用して悪用しようとする輩がでない、とも限らない。
そもそも、慕っているという少女になにかあったら激昂して何をしでかすかわかったものではない。
つまりはかなり扱いずらい存在になった、ともいえるのだが。
できれば国に属してその能力を使ってほしかった国の上層部のものたちのもくろみは
その報告をうけた段階でもろくも崩れ去っている。

「…まさか、天界や魔界のものにも知り合いがいるとかいわないだろうな？」
「あ…あはは…ま…まさかぁ……」
「いや、力ある言霊使いならば界を問わずに好かれる、ときくからな…わからんぞ……」
し～ん……
ぽつり、とつぶやく一人の言葉にその場にいる全員がおもわず静まり返る。
「…まあ、とりあえず、害をなそう、という輩が訪ねてこないことを祈るばかり…だな。
　とにかく、あの子が言霊使いである可能性というかその事実は絶対に他にもらさないようにっ！」
それをききつけた存在に少女にちょっかいをだされて【竜】に介入されてはたまったものではない。
「竜の娘っ子は何という名前でしたかな？」
「たしか、ヴーリ、と名乗ったそうですが？」
「…それって、ヴリトラ様の名前をもじったものではないのですか？
　となるとかなり高位の竜族の可能性もありますなぁ～……」
そもそも、神竜の名前に近しい名をつけられるということはその実力をも示している。
もしくはその加護をうけているかのどちらか。
「…まさか、竜王様方の娘子ではないでしょうな……」
「あ…あはは。まさか……」
いくら何でもそんな存在が人間になつく、などとおもえない。
否、思いたくない。
そうだとすれば絶対に誰もがかてない。
それこそその親たる存在か、もしくは伝説ともいえる神竜ヴリトラ以外思いつかない。
彼らは知らない。

娘、どころか、この地にやってきたのがその当の神竜ヴリトラである、ということを。
知ればまちがいなく誰もが卒倒し現実逃避をしたであろう。
それほどまでに常識から外れた出来事なのだから……

光と闇の楔　～留学生と会議の行方～（前書き）

今回は、神々＆魔の王様達がでばってます（自覚あり

「……なんというか、そちらの界も大変ですね……」
そう、としかいいようがない。
つい先ほど、霊獣界より報告はうけている。
「というか、何だって今回はこの地上界でいろいろとおこるんだ！？なあ！？」
そう叫ぶ、ナオトはおそらく間違っていないであろう。
絶対に。
そもそもどうしてこの時期なのか。
しかも自分が地上界を担当しているときに限って、である。
ゆえにナオトとしては叫ばずにはいられない。
「いや～。でも以前のときなんかは天界で大戦争、だったしね～」
そのきっかけとなった存在は今は魂を休めるためにと眠っている。
「あまりにひどくなったら毎回霊獣界にいくしな～」
眼下にみえるのは青い惑星。
かつて一度失われたかと思われたその惑星はかつてのような輝きを取り戻している。
「まあ、どんまい。ま、がんばってくれたまえ」
「てめぇ！担当の界をかえろぉぉっ！」
それでなくても彼はかなり楽をしているとおもう。
絶対に。
ゆえにのんびりといってくる人物にむかって思わず叫ぶナオトの姿。
「精霊界はでもいまだに混乱してますよ～。まあ、サラマンダーが口止めされたのもあって、
いまだに他の王達は混乱してますからね～。毎回、【意思】が姿をけすときには必ず何かありますから」

たしかに。
かの存在が姿を消すときはかならず何かがおこる。
おそらくそれを見越して姿をわざわざ消しているのであろうことは用意に予測がつくからたまったものではない。
「まあまあ。ヴリトラも意思が傍にいるんだ。まさか大地をかつてのように壊滅させたりはしないさ。
…たぶん。あのこも意思のお仕置きは嫌だろうしねぇ～」
それは本音。
というか自分達でもそれだけは絶対に御免こうむりたい。
「…大地の消滅とかになったら洒落になんないがな……」
「あ～。以前は大津波とかおこしたしな～」
「その前は大陸をけしとばしたっけ？」
「…そもそも、黄竜が誕生しなければかの地に意思がいるとは気づかれなかったのに……」
がくりとおもわずそんな会話をしつつもうなだれるナオト。
たしかに。
かの存在が生まれなければおそらくヴリトラは行動を起こさなかったであろう。
「…まあまあ。とりあえず今は、代替わりにそなえて基礎を強くしとかないとね」
「…あ～…まあ、他の界のことはその界の最高責任者たちにまかせるとしましょう。
我々は本来あるべき役目。この世界の理の楔の役目を果たしましょう」
緊急的な集合会議。
しばし、とある一角において伝道師達の話しあいが繰り広げられてゆくのであった……

ざわざわ。
「はい。みなさん、静かに」
昨日の騒ぎの噂はいまだに学校全体に喧騒をまき散らしている。
様々な噂がとびかい、根も葉もない噂までもたった一日で尾ひれがついて広まっている。
その中心人物が自分達のクラスメートだというのだからなおさらに騒ぎもおおきくなるというもの。
いまだにその噂の中心人物は教室にきていないが、
何でも職員室にと呼ばれて出向いていっているらしい。
がらり。
そんなざわめく教室内に担任がいつものようにとはいってくる。
何だかここ最近、学校生活がかなり充実しているように感じるのは、
おそらく生徒たちの気のせいではないであろう。
これまで短期間でいろいろと事件等がおこったことはほぼ皆無といってもよかった。
しかしここ短期間で様々な出来事が続いておこっている。
それは直接生徒達に関係するものから、世間に関する噂にいたるま

で広範囲にと渡っている。
「先生！結局、昨日の騒ぎはなんだったんですか！？」
クラスメートのディアが侵入してきたのは時部んの知り合いだ、そういっていた。
あのときの重く息苦しくなった教室内の空気はこの場にいる誰もが忘れてはいない。
それこそ息をするのもはばかれるまでに空気がより張り詰めていた。
人はそこまで周囲に影響を及ぼすことができるのか、ということを身をもって知った瞬間でもあった。
「まあ、とりあえず。落ち着きなさい。今日はみなさんに新しく学ぶ仲間を紹介します」
「「仲間？」」
最近、ギルドの入学試験あったっけ？
クラス担任のヘスティアの台詞に首をかしげる数名の生徒達。
ここ最近、新たに試験があった、とはきいていない。
そもそも、試験がある場合、前もって生徒達にも連絡がはいるようになっている。
それは万が一、生徒達から新たに試験をうける生徒予備軍の存在達へ情報がもれないための措置。
中には各能力によっては、【予知】という力をもっている存在もいる。
そういうものがもしも、出されるはずの問題を先に教えたらどうなるのか。
答えは簡単。
つまり不正ではいる生徒がいないように、とのギルド側の措置。
「はい。はいってもいいですよ？」
ざわめく生徒達をそのままに、扉のほうへと声をかける。
「ほら、いくわよ」
「う～。なんでいまさら勉強を～……」
「ヴリちゃんがきちんと勉強をかろんじてなかったらこんなことに

はならなかったんだけどねぇ？」
扉の向こうでは何やらそんな会話がなされているようではあるが。
あれ？
今の声…もしかして、ディアさん？
その声の主に思い当たり、数名の生徒達が首をかしげる。
しかしもう一人聞こえてきた声には心当たりがない。
事実、扉の向こうがわではそんなやり取りがなされていたりする。
ディアと向き合っている少女はもはや涙目。
うるうるとその瞳に涙をためて見上げても、まったくもってディアは容赦はしていない。
そもそも容赦する必要性をまったくもって感じない。
「ほら、いくわよ」
「あ～ん、お姉様、ごしょうです～」
ずるずる。
まさに、ずるずる、という表現がふさわしい。
首ねっこをつかんでそのまま扉からはいってゆくディア。
その姿をみつつ、
…よく竜族をあんな扱いできるな……
あるいみそんなディアに感心してしまうヘスティア。
彼女は目の前の七歳くらいにしかみえない少女が竜族だ、と知っている。
だからこそ呆れ半分、驚かずにはいられない。
クラスメート達が目にしたのは、
みたこともない少女をずるずるとひっぱって教室にはいってくるディアの姿。
そしてそんなディアにほぼ首根っこに近い場所をひっつかまれて、つまりは服の首あたりをつかまれてじたばたともがいている少女。
真っ白い髪は肩より少し長く、さらさらストレート。
わたわた手足を動かしてどうにか抵抗しようとしているのか、
その様子をみておもわずくすり、と誰ともなく笑みがこぼれる。

それほどまでに何ともほほえましいというか愛らしいというような動作にしかみえない。
先日着ていた服とは異なり、今の少女の服は黒い上下の服に身をつつんでいたりする。
スカートも履いてはいるものの、その下にはぴっちりとしたズボンもはかれており、
足元にはブーツのような薄茶色の靴を両足に履いている。
しかし何より特徴的なのはその真っ白いまでの肌、であろう。
そして薄茶色の上着を羽織っており、じたばたするたびにその上着がゆらゆらと揺れている。
「あ～ん、勉強きらい～！」
「ほら、しゃんとするっ！」
「……あ゛～。みてわかるとおり。ディアさんの知り合いで、今日から留学生としてくることになった、
　ヴーリちゃん、だ。どうも常識がかなり抜けているらしいから皆、いろいろと教えてやってくれ」
何やら漫才ともいえるようなそんなやり取りをみていておもわず魂が抜けそうになるものの、
はっと我にともどり、とりあえずこほん、と咳払いをひとつして生徒達に向き合い説明するヘスティア。
「まったく。あ、皆、ごめんなさいね。ほら、ヴリちゃん、挨拶！」
その場にしゃん、と姿勢をただし無理やりたたせ、頭をぐいっとおしつけつつも指示をだすディア。
「う～…うっうっ。なんでここにまできてまた勉強を～……
　でもお姉様のいうことだし……くすん。私はヴーリといいます。勉強はだいっきらいですのでよろしく！」
「…ヴリちゃ～ん？」
半ば瞳に涙をほぼためつつも、潤んだ瞳でそうきっぱりいいきっているヴーリ、となのった少女。
そんな彼女をじと目でみつつも注意を促しているディア。

「だって、何でわざわざ人間界においてまで勉強しないといけないのぉぉ～？
　お姉様のいじわる～、いじわる～……滅多にあいにきてくれないのにぃっ！
　こういうときだけは強制的なんだもんっ！」
「「いや、お姉様って…ディア（さん）の妹さん？というか人間界？」」
何やらヴーリ、と名乗った少女の言葉に生徒達はおもわず目を点にし、
とある言葉に関しておもわず突っ込む。
突っ込まざるを得ない、というほうが正しいが。
「霊獣界でも、どの界でも勉強は必要なのっ！
　毎回、毎回同じことをどうしていわせるのかなぁ？この子は？」
それでなくても産まれたときから同じようなことをいく度も幾度も言い聞かせているはず。
なのにこの性格はどうしてこうしてなおりそうにない。
そもそも、きちんと世界の情勢を把握しておかねば、立場上、ヴリトラはかなり困ったことになりかねない。
そもそも力を吸収しすぎて自身の力をコントロールできない状況にもなりかねない。
そのためにもきちんとどこまでが限度で、どこまでがほうっていい範囲なのか。
きちんと見極めるためにも【世界】の把握は必要不可欠。
だというのにこの性格はどうやら長き年月がたっても精神年齢的に子供なのかなかなか進歩がない。
「「いや、霊獣…界！？」」
今、さらっととんでもない名前がでてこなかったか。
ゆえに生徒達のざわめきがさらに大きくなってしまうのは仕方がない。
「くすん。だって～。最近皆あそんでくれないし～」

「あなたの立場からすれば遊んでいられないでしょう？」
「む～……」
そういわれれば反論の仕様がない。
というかそのように創りだされているのだからどうにもならない。
創りだされたその意味を嫌がっているわけではない。
遊びたい、ヴリトラとしてはただそれだけなのだから。
「というわけで、
とりあえずしばらく人の世の常識を学ばすためにこの学校に留学、という形で通うことになりました。
この子、ヴーリをみなさん、よろしくおねがいします」
「「いや、というわけでって、何が！？」」
にこやかに笑みをうかべてさらっといいきるディアの台詞にクラスメート全員の突っ込みが同時に重なる。
「とりあえず。ヴーリちゃんが暴走しないように。ヴーリちゃんの席はディアさんの横で。
とりあえず、というわけで席替えをします」
「「先生も、何がとういうわけなんですか！？」」
席替えも今初めてきいた衝撃の事実。
というか、何が『というわけで』なのか生徒達からすればまったくもって理解不能。
しばし、混沌と化したともいえる現状がC組Aクラスの内部において見受けられてゆく……

「…はぁ？地上界。それも人間界側のテミス王国から混合会議の要請？」
それでなくても、補佐官様も王も姿をいまだに見せない、というのに。
どうしてこういうときに限って面倒なことが重なるのだろうか。

ゆえに頭を抱えてしまうのは仕方がない。
「とりあえず、知識を司るオーディンにそれらを任せるとするかな……」
会議といえばどうしても知識などが必要となってくる。
下っ端の神々を送り出してもいいが、ここはやはり上層部のものをだしたほうがよいであろう。
そもそも、魔界にしろ天界にしろ王が不在の今、
地上界においても何がおこるか予測は不可能。
互いの王が玉座にいることにより、聖と魔、光と闇のバランスが保たれて地上界も安定していた。
その安定が不在の状態でどこまで保たれるのかは、いくらゼウスでも予測不可能。
「…ノルンですら世界に関する未来は視れないからなぁ～……」
運命を司っているノルン。
しかしかの神が司るのはこの世界にいきるすべての存在達に関してのみ。
世界そのものに関しての未来は見通せない。
そしてまた、未来は決まっているものではなく、絶えず変化していっている。
そのときの一番可能性のたかい未来を視て予測しているに過ぎない。
ともかく、今一番重要なのは、
「…なんだってこんなに執務がたまるばかりなんだっ！？」
まさにそのひとことにつきる。
ほとんどが補佐官や王が片づけていたその他もろもの執務がすべて彼にと向けられている。
ゆえに今や彼はほとんど執務室につきっきりの状態と成り果てている。
まあ、遊び呆けなくていい、とは彼の妻談。
彼が遊び呆けている最中、その他の執務などは彼の妻、もしくは補佐官などが片づけていたのである。

今までの罪滅ぼしをかねてやりなさい。
と妻に強くいわれればゼウスとて言い返し用がない。
「……まさか、王も補佐官様も、私がよく他界などにでむいては遊ぶ罰をあたえてるのか？
　ヘラもヘラで罪滅ぼしをかねてやれ、とかいうし……」
ぶつぶつ。
文句をいいつつも、他に誰も山となっている執務をこなせるものがいないのだから仕方がない。
そもそも、最高責任者ともいえる王と補佐官が不在の今。
側近の役割をも兼ねている自分が代理ですべての執務をこなさなければならないのである。
「…こういうとき、ロキがいたときがまだマシだったんだ…とおもえるよ…ほんとに……」
自分がロキの妻にちょっかいをかけてしまったことからかつての騒動がおこったことは今や周知の事実。
その結果、ロキが暴走してしまったのだが…間違いなく責任は、彼、ゼウスにあるであろう。
「まあ、彼の魂は今は娘のヘルが。肉体は息子のフェンリルが守ってるし。
　…ああ、はやく目覚めて天界復帰してくれないかな……」
彼がつくる様々な聖具、そして魔具などは仕事においても有効な結果をもたらすものが多々とあった。
もっとも、逆に不利になるような代物も多々とあったのだが。
「…とりあえず、他界との都合もあるだろうが、反旗組織のこともあるしな。
　なるべく早いほうがいいだろう。…それとポセイドンにも確認をとらないと…
　ああもう！なんでこうまで忙しい目にあわなければならないんだっ！」
すでにもう幾度目だろうか。

執務室に何ともいえない叫びが再びこだまする。
しかし叫んでいてもどうにもならない。
そもそも、動かないことには仕事の量はまったくもって減ることはないのだから。
逆をいえば叫んでいる時間があるのならば動け、ということ。
仕事は時間に関係なく、常に増え続けているのだから。

「……深界の存在達は、いったい何を考えているのだ？」
しばらく大人しくしていた、とおもったら。
ここ最近、動きが活発化している。
深界。
それは海底の奥深くに創られている特殊な【界】。
この世界の【理】ができる以前までの地上における技術などがそのままその【界】には伝わっているときいている。
しかし完全に詳しくは彼ら神々とて聞かされていない。
おそらく事実をしっているものは、王、そして伝道師達くらいであろう。
「しかし、地上界にまで直接でむいていった、というのが気にかかるな……
ん？ゼウスからの通信？…とりあえず、ひさしぶりに宮殿にいくか」
考えていてもどうにもならない。
それに何より旧知の仲でもあるゼウスからの通信が入ったことが気にかかる。
それゆえに、すべての【界】の【海】を見渡すことのできるとある空間において、
様々な海の様子をみていた男性は座っていた椅子より重い腰をあげてゆく。

もっとも、旧知の仲、というよりは事実、兄弟、の関係なのだが。
その事実を知る者はあまりいない。
まあ、父たるクロノスに飲み込まれたときにゼウスに助けられ、それ以後、兄弟という関係よりは、
盟友、というような関係になっていたりするのだが。
いいつつも、どこか柔和な感じをうける青年はその場から立ち上がる。
青年が小さくつぶやくと同時、その姿は周囲に満ちる【水】に瞬く間にと溶け消える。
彼の名前はポセイドン。
すべての水を操る能力をもつ、【海の守護神】、【海神ポセイドン】。
彼が司るのはすべての界におけるすべての海。
そして、彼がいるのは、それらすべての界を監視するべく創られた特殊な彼の宮殿の中の一室。
ここには主である彼しかはいることが許されない。
他のものがはいろうとするならばそのまま水に瞬く間に消滅させられる。
彼以外にこの場にはいれるものは、おそらく、伝道師、そして【王】くらいであろう。
彼が向かうは天界。
神々が住まう宮殿。
彼は知らない。
弟であり、また盟友でもあるゼウスからとある依頼というかお願いをうける、ということを……

「地上界の人間界、テミス王国より混合会議の要請がありました。
いかがなさいましょうか？サタン様？」

今、この場に補佐官や王がいない今、決定権は側近である彼にとある。
ゆえに報告にあった出来事を目の前の青年にと報告することは間違ってはいない。
「…なんで、毎回、毎回、王や補佐官様が消えたら問題がおこるんだ？なあ？」
そんな彼のつぶやきはおそらく間違ってはいないであろう。
それでなくても整った顔立ちが憂いを帯びた表情になり、よりいっそう艶を増している。
「仕方がないでしょう。王が不在の今、あなたが役目をはたさないと。
　そういうこちらとて、王や補佐官様が不在のため、品々の管理が大変なのですよ？
　私のほうは精霊、としての宰相の役目もあるのですから」
そんな彼の目の前では
漆黒の対の半透明の翼をもつ長い髪の見た目二十歳前後の青年がそんなことをいっている。
「ロフォカエ、か。精霊界のほうはどのような感じなのだ？」
「いまだに混乱のまま、ですよ。かつての騒乱の再燃か！？と各王達は混乱してます。
　それと、火の精霊王ですが伝道師フォルミ殿と旅に出られたようです」
魔界における財宝や財産、そして様々な情報などの管理を一手に任されているロフォカエ。
彼の本性は一応精霊の部類に入るのであるが、精霊界よりこちらに出向、という形でむいている。
魔界での彼の立場は役職のままの【管理者】。
一応、魔界においては三魔に使えている形を形式的にはとっている。
「しかし。サタン。王が不在の今、確かに何かがおこっているのは確実だぞ？」

長く漆黒のつややかな髪を腰より長くのばし、整った目鼻。
誰もが一件しただけでおもわず見惚れてしまうような美貌の持ち主。
その左手にはなぜか蛇がまきついており、その容姿をさらに艶やかに引き立てている。
「では、このたびの申請にはやはり、アストロトにいってもらうとするか」
「我が、か？」
というかわざわざ人間の要請に自分のような大侯爵がでるほどではない、とはおもう。
しかし、世界で何かがおこっている。
それが何かはわからないが、すくなくとも何かがおこっているというのは見通せている。
「質問者に教養学を教授することができるお主が一番適任、であろう？
　様々な界の諸事情にも通じておるし。…何より、こちら側からの審問官の役目をも果たせる」
たしかに、彼…アスタロトは魔界における審問官の役目をもっている。
もってはいるが。
「わざわざ、審問官の王がでむくことにより、世界で何かがおこっている、というのを
　人間達にも知らしめることになりませんかの？」
そんな彼らの会話に口をはさむものが一人。
その身長よりも長すぎるのではなかろうか、というほどのあごひげをもちながらもその眼光はとても鋭い。
「バァルか。しかし、我はかまわんぞ。ひさしぶりに公認で地上界にいけるのだからな」
何よりも暇つぶしになる。
それに一応は役目を追っていくのだからいつものようにさぼるわけではない。

どうどうと口実としてさばれるこの提案を断る道理は彼…アスタロトにはない。
しわがれ声で紡がれるその声にたいして、感情をともわない声でさらっと言い返す。
「では、きまり、だな。あまり大人数をでむかせては、おそらく混乱させるだろう。
　アスタロト。従者というか同行するものの選抜はお主にまかせる」
「御意に」
魔界における、重役会議。
この場にいるのは、魔王、そしてまた、大侯爵、といわれる実力ある悪魔達。

実質、魔界は彼らによって統率されている、といっても過言ではない。
そしてまた、大魔王、とよばれるものこそ、彼らが王、とよびし存在。
しかし、今、その王はその補佐官ともども行方知れず……

「会議！？」
今はそれどころではないとおもう。
切実に。
「しかし、すでに天界、魔界側からも参加する旨が報告ありましたし。
　それに何より、霊獣界からも参加するとの連絡がありました。
長自らが参加するそうです」
例外というか例外中の例外。
よもや、霊獣界の中でも実力を誇る、あるいみ上層部トップ、とも

いえる竜族。
その竜族の長が人間の要請でわざわざ会議に赴くなど。
しかし彼らは知らない。
どうして彼がその要請にこたえたのか、ということを。
まさか、神竜ヴリトラがその国に遊びに…もとい降臨してしまったから様子をみにいくついで、ということを。
「そういえば、サラから連絡があり。すこしばかり何か不穏な気配がするので、
　伝道師様が迎えにきたのをうけてしばらく地上を探索するそうです」
つい先日、そのような報告があったらしく、ようやくその報告がのぼってきたばかり。
「妖精界においては、何がおこっているのか把握するように、
　妖精王達から側近でもあるミルッヒ殿にその要請がでたらしく、彼女自らがでむくようです」
つまり、魔界、天界、妖精界、霊獣界。
すでにわかっているだけで四界もの存在達がこの会議要請にこたえていることとなる。
「……しかたありません。では、こちらからはウンディーネ。
　あなたはではもう一つの姿。水の精霊王ウンディーネの補佐官、ウィンとして参加してください」
自らが動かなければ気がすまない。
精霊王、としての立場ではなかなか下々のものが畏縮してしまって話しにならない。
ゆえに少しばかり気配と姿を変えて、同じ存在である、というにも関わらず、
一人二役をこなしている、水の精霊王。
その事実をしっているのは、精霊王や精霊神、そして各界の王、そして伝道師のみ。
「はい。精霊神ユリアナ様。その任務、しかと引き受けました」

最近、水が動いた、と報告をうけている。
だからこそきにかかってはいた。
水を司る精霊でもあるウンディーネは海を司る海神ポセイドンと密接なつながりがある。
だからこそ気になってしかたがなかった。
今回の一件はちょうどいい機会なのであろう。
様々な界のものがやってくる。
そうすればすくなくとも、何が起こっているのかくらいの目安にはなる。
何もわからずに行動しては何かあったときに対処のしようがない。
それは、永く精霊王、という立場をつとめているがゆえに身をもって知っている。
自らの意思は昔からあり、今のように実体を伴った姿で具現化することが可能となったのは、
この【世界】否、【惑星】の寿命からするとつい先日誕生したようなもの。
…あれから、四億年。
何もできずに世界が壊れてゆくのを視ていた。
そして、役目をうけたまわった。
だからこそ、今度は自分達が意思をもってうごけることがどれほど誇らしいか。
【意思】の思いに答えるためにも、自分達は存在している。
そう自覚しているからこそ、率先して動きたくなる。
「…しかし、ほんと、意思が姿をくらまされるなんて…また、何かがおこるんでしょうね……」
は～……
そんな目の前にいる一人欠けてはいるものの精霊王達三名の前で、静かにただ静かにため息を吐き出している一人の女性。
彼女こそが精霊王達の頂点にたつ精霊神、ユリアナ。
すべての精霊達の仮初めの生みの親。

彼女は【意思】にその役目を委託されたがゆえに、精霊達を生みだすことができている。
当人いわく、仮初めの生みの親、ということらしい。
つい先日、【意思】が直接精霊達を生み出したことは知っている。
だからこそ、これから何かがおこる。
というのを確信せずにはいられない。

…おそらく、再びすべての界を巻き込んだ何かがおこるのは間違いがないのであろう。
…ゆえに、ため息もつきたくなる、というものである……
そんな精霊神の心情はその場にいる精霊王達とて同じこと。
しばし、何ともいえない視線をかわしつつも、盛大にその場にいる誰もがため息をついてゆくのであった……

光と闇の楔　～留学生と会議の行方～（後書き）

悪魔達の定義は、ソロモン７２柱や、悪魔学における様々な宗教感による定義。
それらが入り混じってますので、あしからず。
神々の定義にしても然り。様々な神話や伝承が入り混じってます。
名前をみて、あれ？と思われる方々もいるとおもいますけど。
というか様々な伝承などをも入り混じっての設定ですのであしからずｖ
（いい例が悪魔における定義は様々な伝聞が混じってます）

光と闇の楔　～通称【学園】の大混乱！？～（前書き）

ようやく学園生活？らしきものに入れますよ。ええ。
まあ、混合会議はすぐさまに開催、というわけには様々な事情でいきませんしね（政治的な意味で
その間のちょこっとしたこれから当たり前になるギルド協会学校。
通称、学園の日常にいきたいとおもいますv
これすんだら会議＆襲撃ですv
今回は、ギルド協会学校の仕組みを今までわざと飛ばしていたので、
そのあたりの学年の定義をいれております。

「会議？」
これはこれはこんなときに、いや、こんなときに、だからとでもいうのだろう。
「ちょうどいい。その一件と同じくして襲撃をしかければ、我らが目的も早く各界にしめされる」
各界からの、しかも人間側からの要請で参加していた存在達が、自分達…世界に反旗を翻す存在達によって殺されたらどうなるのか。
おそらく各界とも人間側の不備をとき、また各界においてもそれぞれの界において不信感がつのるであろう。
まさに絶好に機会、とでもいうべきか。
おそらくは人間側の要請だけあってさほど実力はないがそこそこに地位があるものたちがくるはず。
ならば彼らを捉えて利用するのもよし。
「とりあえず、その会議の日程をテケリ・ショゴス側とも連絡をとりあい確実なものにするように」
これが自分達をおびき出すための罠、とも考えられる。
各界においてこの噂がどこまでひろまっているかもきにかかる。
「こういうときに我らに協力してくれていた邪神がいてくれたらかなり助かるんだがな……」
その邪神は今では魂と肉体とに分かれてとある場所で眠っている。
かの目的は世界に、というよりはとある存在にたいしての復讐であった。
しかし彼らからしてみれば目的はどうであれ、力あるものが協力してくれていた事実は疑いようがない。
天界における反旗組織グループ、【ハスター・ホテップ】

二百五十八代目たる総帥、ハスターはその口元ににやり、と笑みをうかべる。
長きにわたりいつも世界の存在達には煮え湯をのまされていた。
今こと、長年の目的をはたすとき！

…彼らは、自分達という存在のあり方すら、【世界】に翻弄されている、ということに気づいては…いない……

光と闇の楔　～通称【学園】の大混乱！？～

ギルド協会学校。
文字通り、様々な知識と技術を学ぶために創設された、ギルド協会の要ともいえる施設。
一般の人々は、正式名称が長く呼びずらいことから、通称、学園、と呼び称している。
様々な技術面に特化した学科もあれば、総合的に学ぶ学科もあり、さらには特殊方面に特化した学科も存在している。
そして、通称、【学園】の知名度をよりあげているよもおしものが……

「…学園祭？」
「正確にいうならば、協会主催、修学過程検証実技大会、なんだけどね」

先日、クラスに神話やおとぎ話でしかきいたことがなかった、人の姿をした竜族が転入してきた。
学校側いわく、臨時的な措置として留学生、という立場にして迎え入れた、とのこと。
何でもほうっておいたら今度こそまた学校に侵入され、今度は下手をするとけが人どころか死人もでかねない。
ならば人間側の常識をも知ってもらういい機会だろう、という結論に陥ったらしい。
ヴーリ、と名乗った神竜ヴリトラがクラスに転入してきて数日。
さすがにその破天荒であり、天真爛漫なそんな彼女に始めはおっかなびっくりであった生徒達も、
今ではだいぶ慣れている。
とはいえときおり、ヴーリが無意識に放つ【気】にのまれて気絶するものが多発しているのは事実なのだが。
「あ～、何か聞いたことがあるわ」
たしか報告をうけたことがあったはず。
以前、何を考えたのか暇だからといって、天界、魔界側からわざわざ生徒に扮して侵入した存在がいた。
当人達は久しぶりに全力がだせてすっきりした、とはいっていたが巻き込まれたほうとしてはたまったものではない。
しっかりと彼らの聖魔結界を張っていたがゆえに被害はなかったものの、
どちら側にも非があるということでしっかりとお灸は据えておいた。
ふとその時のことを思い出し、すこしほほ笑みながらも答えるディア。
「そうなの？なら話しははやいけど。この【学園】が様々な学科、そして階位に別れているのは知ってるわよね？」
普通なら、一学年、二学年、と呼んだほうがしっくりくるであろうが。
しかしギルドの規定でそう呼ばずに、それぞれの段階において階位、

という形で呼び称している。
下から十二階位、そして一番上が一の階位、となっている。
つまり、十二階位、と呼ばれている学年が一番下であり、一の階位、と呼ばれている学年が最高学年となる。
さらには特階位。
というのも存在し、そちらのほうはもはや研究者レベル、つまりは下手をすれば
知を探求しつくしもの…つまりは、賢者の地位にも匹敵する。
入学にあたりうけた試験における点数と受け答えにより、それぞれ個々の階位は決定される。
ディア達が今在籍しているのは第六階位。
年齢からして一番無難な位置にあたる階ではある。
なぜに、【階位】という単語を用いているのか。
その理由は至極単純。
他の【界】においても、各方面においてそれぞれ【階位】という表現で大体統一されている。
ゆえに人間側においても違和感がないように、という意味合いをこめてこの名前をとっている。
世の中にでていけばおのずと他の界のものに出会うこともあるかもしれない。
そしてそこで、いきなり【階位】というのをきいても意味がわからないかもしれない。
そのためのいわゆる慣れるための処置。
まあ、他の界にかかわるような仕事に就く場合、
それぞの界における特権階位については、別にきちんと習うことになるのだが。
「内容が内容だけに、みんな学園祭ってよんでるのよ。
まあ、それはそうとして。この祭りにおいてはすべての階位が参加する、というのは知ってる？」
「まあね。…たしか一般参加も可能、でなかったかしら？」

一人の生徒の言葉に別の生徒が突っ込みをいれてくる。
事実、この祭りともいえるあるいみ大会では学校関係者でなくても参加することは可能。
ちなみに、ギルド協会主催、である。
国をあげて…というよりは、どちらかといえば世界各国すべてをあげて、といったほうがいいであろう。
会場となる場所は地上でもどこでもなく、精霊達の協力によって創られた特殊空間。
その空間にはどの国からも自在に入ることが可能。
とはいえ、きちんと手続きを踏まなければはいることはできないのだが。
文字通り、世界各国をあげてのお祭りともいえるこの催し。
ゆえに、ギルド協会学校の生徒達は、この催しを【祭り】と呼んでいる。
希望者にはその様子を視ることができる水晶珠すら各地で売買されている。
「それで、ここにかよっているものは全員強制参加なんだけど。
　ディアさん達はどの科目に参加する？一人がいくつも参加してもいいみたいだけど」
文字通り、この祭りでは実力がものをいう。
つまり実力さえあれば、最下階位の生徒達も特階位に勝つことができる。
そしてそれは、卒業するにあたり必要な【単位】をより多く獲得できる手段にもなる。
ましてや、世界各国の重要施設の要人達もこの催しには興味をいだいており、
後ろ盾となり卒業後はそのまま国に雇われる、という生徒もすくなくない。
「ん～。私はこれ、といってないかな？技術面にしろいろいろな面にしろ」

そもそも、ディアがその気になれば何でもできる。
否、【この惑星内】で起こりえていることならば何でも、という注釈がつくが。
「お姉様、わたしもあそべるの！？」
話しをきいているだけで何だかとても面白そう。
ゆえに瞳をきらきらさせて、ディアの横からちょこん、と顔をのぞけていっているヴリトラ。
「…ヴリちゃんがでたら人間はかなわないでしょ？
それとも、力を人のそれまで落として制限してやってみる？」
いくらその姿が人のそれとはいえ、基本、ヴリトラは竜。
しかも、竜の中の竜、神竜である。
そこいらの神族や魔族なども太刀打ちできるはずもない。
「…うっ…あれは痛いからいや～……」
肉体における耐久力まで人のそれとまったく同じにされてかなり痛い思いをしたのは記憶にあたらしい。
もっとも、人の視点からみればその出来事も遥か昔の出来事なのだが。
「でも、ヴーリちゃんやディアさんは気をつけたほうがいいかも」
「何が？」
そんな会話をしていると横から別の生徒が口をはさんでくる。
「何か上の階位の人達が、最近目立ってるディアさんやヴーリちゃんをあまりよくおもってないらしいのよね」
事実、自分達ですら成し遂げられなったことをやすやすと成し遂げているディア。
そしてまた、学校に侵入をはたし、さらにはそのまま特別措置として編入がきまったヴーリ。
さらにいえばディアは王宮にもとある一件の確認のために呼ばれたことがある。
それらの要素がかさなり、やっかむ生徒達もすくなくない。
つまり、いいかえるならば、この制限のない祭りの中で彼女達に何

かしでかそう、
と邪な考えをいだく生徒もでかねないということを示している。
「まあ、周りを巻き込むようなら特定の存在の周囲の空気すべてを無くしてしまえばいいだけでしょ？」
「それか、そのまま心の闇に捉えてもいいよね？姉様！」
何やらさらっと二人からとてつもない単語がきこえたような気がするのは彼らの気のせいか。
人はすくなからずとも、おそらく確実に空気がないといきていかれない。
さらっと周囲の空気をなくす、といったディアはそのことがわかっていっているのであろう。
たしかにディアのように精霊達に直接お願いができる立場ならばそれも可能なのかもしれない。
実際は精霊達を介せずともディアは何でもできるのだが、生徒達はそうはおもっていない。
ヴーリのいう、心の闇に捉えるという意味はわからないがとてつもなくいやな予感しかしないのも事実。
「まあ、どちらにしても、子供の癇癪みたいなものでしょ？」
「人間っておもしろいよね～。なんで実力の差とかわからずにいきなり喧嘩とかふっかけるんだろ？
竜族とか他の種族とかなら本能的に相手の力なんてすぐにわかるのに。
相手が意図的にその力を閉じてさえいなければ」
そのいい例がディアであろう。
その気配はそのまま【世界】そのものであるにしろ、ばっと見た目、実力はゆえにまったくもって判らない。
わかるのは、周囲にとけこんでいる、ということくらいであろう。
「そうね～。なら私はとりあえず戦闘部門に登録しましょうか。
今の存在達の潜在的な力とかも実際にみてみたいし」
どこまで育っているのか実際に視てみたい、とおもうのはディアな

ればこそ、であろう。
直接視ることにより魂の質もまた瞬時に判る。
素質のあるものならば別な場所を任せることも可能。
もっとも、それらは当人の決意次第、になるであろうが……
「ヴリちゃんは武術部門、ね。術の仕様不可能だからそのほうがいいでしょ。
　ヴリちゃん、肉体的な武術、いくらいってもなかなか上達してないしね～」
それでもその肉体における強度から太刀打ちできるものはいないのだが。
しかし、武術に関しては注釈がつく。
たしかに、術の仕様は使用禁止、とはなっているがそれはあくまでも目にみえる範囲でのこと。
精神面に作用するような術の仕様などは禁止されていない。
今、ディア達が話しているのは先ほどの授業の終わりに教師がいった言葉に起因する。
近々祭りがあるので近いうちに担任よりそれぞれ希望する分野を調べることになる。
そう授業の最後にいって教室をでていった教師。
ゆえに教師がさったその後の教室内において生徒達が必然的にその話題に写ったのはいうまでもないこと。
「いまだに痛みにも慣れないしね～」
「む～。だって痛いものはいや～」
そもそも、彼女に痛みをあたえられるのはまちがいなくディア、もしくは彼女に連なるもののみ、である。
伝道師達はといえば彼女を精神面的にダメージをあたえることは可能なれど、
肉体的な痛みをあたえることはまずできない。
まあ、マグマの中にはいりこんでも痛みすら感じない神竜を傷つける、そんな行為はまずできない。

すくなくとも、ディアのような存在達を除けば。
しかし、会話に参加しているクラスメート達はそんな事実には気づかない。
竜も痛みが苦手なんだ、そんな認識であったりする。
まあ、その認識はたしかに間違ってはいないが、根本的に、人でもどうにかすれば傷つけられるかもしれない、という考えをもっていることが間違っている。
その事実に彼らは気付かない。
否、気づけない。
「ディアさん…戦闘部門って…そこって何でもありの場所じゃぁ…」
文字通り、実戦さながらの戦いをする場所であり、下手をすれば命すら落としかねないともきく。
大会が催されるのが特殊な空間であることから、そこで死だとしても実質的には死ぬことはないのだが。
しかし、精神的に死ぬことはときどきある。
その結果、廃人にもちかしい存在も数年の間に数えるほどではあるが誕生していたりする。
まあそれらはその個人の弱さが招いた結果である以上、さほど問題視されないのだが。
そもそも、その場を自らの力を見極めようと選んだものは前もって誓約書に同意をせまられる。
いわく、つまりは何があっても文句はいいません。責任は問いません。
つまり戦闘部門を選ぶ生徒や一般人においては自己責任においてその場を選ぶこととなる。
「そのほうがいろとろと視れて楽しいしね」
「いや、いろいろと見れるのは見れるだろうけど……」
彼らが心配しているのは別の箇所。
特殊な空間で行う以上、普通に滞在しているであろう精霊達がどう

なっているかなど、
はっきりいって知られていない。
精霊達が創りえた空間とはいえそこに精霊達が存在しているかどうかすらわからない。
つまり、常にディアがおこなっているのは精霊達に声をかけて協力をあおいでいるわけであり、
精霊達がいない状態でもしも高位の術などをかけられればディアとて何があるかわからない。
そんな心配をしていたりする。
その心配はまったくもって杞憂なのだが。
そもそも、彼女に怪我を負わすことは、
巨大な海の中に小さな砂粒以下の何かを投げ入れて、それで海が壊滅するか？というようなレベルである。
そして…つまるところ、その砂粒以下、ともいえるのが大地に生きている存在達そのものであり、
ゆえに彼らがどうあがいても勝てるはずもない。
しかしそんなこととはつゆにも知らず、心配し参加箇所をかえたほうがいいのでは？
という意味合いをこめてきいてくるクラスメート達。

そんなクラスメート達の意見にただただディアは笑みを浮かべるのみ……

「ふ…ふふふ……」
何か最近、あらたに入学してきたという第六階位の少女が最近何やら目立っているらしい。
しかも、特階位の自分達や、第一階位の生徒達すら無視したような噂と活躍ぶり。
おそらくその噂のほとんどはオヒレがついたものであろうことは予測はつく。

しかしだからこそ面白くない。
実力のない存在がまことしやかに噂される今の状況は彼らにとってはっきりいって面白くも何ともない。
自分達の実力をあがめていろいろと噂になるのならわかる。
わかるが、どうして偶然に退けられただけだ、という少女の言葉を信じるのか。
教師達、そして国の幹部達の考えにも疑問がのこる。
自分達がしっかりと現実を彼らに直接つきつけることにより、今の雰囲気はかき消えるであろう。
しかし、彼らは知らない。
噂がはっきりいって事実であり、それは別にねつ造でも、もしくは尾ひれがついてひろまった。
というわけではない、というその事実を。
彼らは触れてはならないはずの存在に喧嘩を吹っかけようとしている。
その事実を…まだ、彼らは気づいてはいない。
そしてまた…そのことに気付いていても視て見ぬふりをされている…ということも。

「ほんと、いろいろあるな～」
いつもおもうが人の想像力、というのはたくましい。
人の思いを糧として、さらには力としている彼女だからこそそれはよくわかる。
「でも、いつも思うけど…どの世界にも愚かなものっているよね～」
とりあえず本日の授業は滞りなく終わった。
ひとり、てとてとと校舎内をあるいている一人の少女。
なぜに一人なのか、という答えは簡単。
つまり迷子になっていたりするのが実情なのだが。
ディアについていこうとして、そのまま迷子になっていたりするこ

の現状。
いくら彼女とて【意思】の気配を見つけ出すことは不可能。
そもそも、感覚をむければどこにでも【意思】の気配は存在しているのだから。
彼女が一人で行動していてもディアが回収…もとい、迎えにこない理由は至って簡単。
今、彼女…ヴリトラの力はかなり制限がかかっている。
それはディアが直接かけたものであり、ディア以外では解くことすらできない。
もっとも、それでもその実力から考えればとてつもない力をいまだにヴリトラは擁しているのだが。
とりあえず自分がいないときもある。
ゆえに、ディアとしても一人でこの学園のすべてを把握させようとわざと追いかけてきているヴリトラを巻いたのだが。
そして、ヴリトラが今いるのは、一般の生徒が間違いなく立ち入ることが許されない場所。
この一角は、特階位、と呼ばれる存在達の学び場であり、
部屋によってはそのまま研究施設などもまるごとあったりする。
迷子になってというか一人になっておもわず右往左往してしまったのだが、
ティミからの報告により、とりあえず学園内部の構造などをきちんと把握しなさいとの伝言をうけ、
とりあえずいわれるままにギルド協会学校の全容を把握するためにとてとてとあるいているヴリトラ。
まあ、何か下手な行動を起こそうものならばすぐさまにディアが反応して何かしらの行動をとるのであろう。
そうでなければ、簡単に学校、もしくは国全体を一瞬のうちに壊滅できるほどの力をもつヴリトラを自由にさせておくはずもない。
事実、ディアにはディアの考えがあり彼女を一人で行動させているのだが。

どうもこの学校の上層部に位置するはずの生徒達がここさいきん、ぞんざいな態度をとっている。
そのことは知っていた。
精霊達からもその報告はうけている。
自分の力に過信し、さらには自分達だけが偉い。
そう勘違いし、力で他者を屈しようとするものが増えている。
そこにヴリトラがやってきたのでちょうどいいとばかりに一人で行動させているディア。
つまるところ…ていのいい、おとり。
さらにいえばヴリトラの性格を熟知しているディアならではの判断、ともいえるだろう。
なぜならば……
「うん？なんだ？きさまは？ここは一般人がはいれるような場所ではないぞ？」
案の定、というかディアの予測通り、というべきか。
おもいっきり上から目線でとてとてと一人あるくヴリトラに気づきそんなことをいってくる男たち。
年齢的にはおそらく二十歳を超えているであろうが、あからさまに人を卑下した態度をとっている。
「うん？あ！教諭！この子、たしか先日の襲撃してきたって噂になってる子じゃないですか！？」
真っ白い髪に七歳前後の女の子。
そんな少女はこの学校すべてをさがしてもまちがいなくヴリトラしか今のところ在籍していない。
彼らとて襲撃してきたといわれている輩の容姿くらいはきっちりと把握している。
というか本当ならば彼らが襲撃してきた輩を自分達の手で排除しよう、
そう決めて行動しかけた最中、襲撃騒ぎが終わってしまったのである。

ゆえにその久しぶりに自分達が周囲をきにすることなく暴れることができる。
という甘美な行為が排除の名のもとに規則にふれることなく実行できる。
そうおもい楽しみにしていた、というのに。
しかしその可能性をもののみごとにつぶしてくれた襲撃者。
ゆえに半ば腹立ちまぎれというのもあり、その襲撃してきた存在の情報はしっかりと集めている。
そしてその襲撃者があろうことか特別措置としてこの学校に転入してきたことを知った。
そのときの彼らの心情は、自分達の楽しみを奪っておいて何のうのうと学生になりさがっている。
ということにつきる。
襲撃者の実力など彼らにとっては関係ない。
ただ、捕獲しようとした教師達ですらあっさりと排除したという襲撃者に興味を抱かなかったわけではない。
しかしふたをあけてみればその容姿はどうみても七歳程度の女の子。
教師達が怪我をしただの、十人がかりで挑んでもかてなかっただの。
それらの噂はすべてただの眉ツバである、そう彼らは認識していたりする。
それが事実だ、と裏をとることもせず。
何より正確な情報はときとして命の有無すらきめることがある。
彼らはその簡単なことにすら気づいていない。
いな、自分達の実力を過信しているがゆえにそんなことはありえない、そう信じ切っている。
自分に向けられてくるあからさまな負の心。
悪意にみちたその心。
しかしその憎悪は逆にヴリトラにとってはとてもここちよいもの。
「おじさんたち、だぁれ？」
「「おじっ！？」」

きょとん、と首をかしげて目の前にいる三人ほどの男性にわざとらしくといかける。
こういう手の輩はだいたいどういわれれば反応するのか、ヴリトラとて長年生きているわけではない。
嫌でも知り尽くしている。
自分に憎悪をむけてきたのである。
これくらいの些細ないたずらくらいは許されるであろう。
それゆえの彼女の台詞。
「この俺達をおじさん呼ばわり、とはな。おじょうちゃん。
しかしここは一般のものは立ち入り禁止。しかし俺達の実験に付き合ってくれるなら見逃してやってもいいんだぜ？」
にやり、と笑みを浮かべて三人の中でもおそらく一番彼がリーダー格なのであろう。
さきほどから他の二人を制して話している男性がヴリトラにむけてそんなことをいってくる。
「実験？」
「噂ではきさま、竜族、というらしいが。ばかばかしい。人の姿をとれる竜など。
この世界にいるものか。その偽りの仮面をはがすべく、俺達がしっかりと教育し直してやるよ」
自分達が知りえているだけのことがすべて。
世界は自分達の常識だけでまわっている。
そう彼らは信じ切っている。
ときどきこういう完全なる勘違いをしている存在は多々と産まれてくる。
彼らは圧倒的な力を目にするまでその誤解に気づかない。
そしてその傲慢さは時として他者を巻き込む脅威にすらなる。
「教育？ああ。つまり、遊んでくれるの？いいけど。別に。
でも、おじさんたち、私に触れることができる…かな？ふふふふふ」

ぶちり。
完全に自分達を見下したように、笑みをたたただ浮かべる目の前の少女。
その様子に彼らの中で何かがきれる。
つまりは、すこしばかり手加減してやろうとおもっていたのに、この少女はてっていてきにいたぶる。
そう彼らの中で結論づけられる。
彼らは自分達が触れてしまったものに気づかない。
少女の雰囲気が先ほどとはすこしぶれたことにすら気づかない。
「遊ぶのなら、他に迷惑かかったら、お姉様におこられちゃうから、なら…この空間であそぼうよ？ね？」
無邪気な笑み。
そう表現するより他にはない。
にこやかな笑みを浮かべた少女の言葉とともに…周囲の空間が瞬く間にと闇にと包まれる。
漆黒の闇。
四方どこをみても闇だけで、そこに見えるのは彼ら三人と少女のみ。
「ちっ。まやかしを。…気がかわった。おじょうちゃん。大人をからかったらどうなるのか。
　それに他人を欺いたらどんな目にあうか身をもっておしえてやるよ……」
いまだに彼らは目の前の少女から発する気に気づくことなくそんなことを言い放ってくる。
もしも彼らが少女…つまりはヴリトラの気配の変化に気付いたならば自身のもっていた感想が間違っている。
そうすぐさまにわかったであろう。
しかし、彼らは過ちを認めることができない人種。
つまり、自分達が導きだした答えは絶対に正しい。
…ゆえに、徹底的な力の差をみせつけられないかぎりは、彼らは間違いを認めない。

その間違った知識のままにつっぱしる。
それが彼らのような傲慢な考えをもった存在達。
ゆえに、ディアは遊びたがっているヴリトラの性格を考慮して彼女がここに迷い込むように、
すこしばかり空間をいじったのだから。
しかし、彼らもヴリトラもディアにいいように扱われている、ということに気づいては…いない……

いくら彼らがヴリトラに悪意をむき出し対応しようとしても、
それは逆にヴリトラの機嫌をよくし、さらに気持ちを高揚させるに過ぎない。
なぜならば、ヴリトラの【核】ともなった【心】こそが、
かつてこの地に存在していた様々な存在達のそういった【悪意ある心】なのだから……
憎悪を向けられるたびに、ヴリトラの感覚は人間でいうならば酔っぱらったような感覚におちいる。
そしてそれはより強く、より純粋な思いであればさらに気分は高揚する。
今のヴリトラはとても機嫌がよい。
なぜならば、ひさしぶりに人よりむけられるそのような感情、なのだから。
ここしばらくはなぜか人間界に降ろしてもらえなかったヴリトラにとって。
この彼らからの提案というか遊びはまさに渡りに船、といえる。
…しかし、ヴリトラにとってはたかが遊び、でも、静寂な人の身からしてみれば、
それはまさに死刑宣告よりも険しい地獄よりもつらい現実の始まりでしか…ない……

光と闇の楔　～通称【学園】の大混乱！？～（後書き）

とりあえず、ギルド協会学校の生徒達のたちいち的なものをば。
日本とこの世界の概念であわせて説明します。
小学一年生＝第十二階位
小学六年生＝第七階位
中学一年生＝第六階位
中学三年生＝第四階位
高校一年生＝第三階位
高校三年生＝第一階位
大学生＆大学院レベル＝特階位（特級階位）
大体こんな感じとなっております。階位、に関してはわかる人はわかるとおもいますけど、
神話＆伝承などでは天界、魔界ともそういうのがあるんですよね…
悪魔とかにも・・
なのでこの取り入れです

光と闇の楔　～侵喰と大会と～（前書き）

今回、ちらっとこれまで触れていなかったこの世界（地球）に関しての暦をいれております。
元が地球にはかわりがないので現実世界の神話や伝承。
それらに基づいてこのお話しの基礎ともいえる裏設定はなされております

光と闇の楔　～侵喰と大会と～

「協会主催、修学過程検証実技大会の開催？」
もうそのような時期なのか、とおもってしまう。
何かこのたびはいろいとあってすっかりもって失念していた。
「娯楽でもありますし。どうなさいますか？長？」
長である彼のもとに出されているのは、休暇願の数々。
竜族でもある彼らの寿命は果てしなく長い。
そしてまた娯楽も極端に少ない。
ゆえに人間達などが開催する娯楽を楽しみにしている輩は少なくない。
もっとも、それは人間達に限らず、神々などにもいえるのだが。
ちなみに、この大会、実は天界、魔界、そして精霊界などでも日程を変更して執り行われる。
ゆえに長期間にわたる娯楽として様々な存在に定着しているのも事実。
…もっとも、他界の大会は実力あるものでしか視ることはかなわないが。
基本、それぞれが属する【界】の様子をみるのがせいぜいである。
いくら大会の様子を視ることのできる【水晶珠】でも他界の大会の様子までは映し出さない。
もっとも、写しだしたとしても力のない特に人間などの目では、神々や精霊達の姿を捉えることもできないであろう。
「まあ、いくのはかまわんが。しかし今の情勢が情勢だ。いくものたちはかなり気をつけるように。
　そうつたえておけ」
「はっ！」

竜族の長であるシアンの言葉をうけ、敬礼し武装している青年がその場をあとにしてゆく。
そんな様子をみつつ、
「…まさか、ヴリトラ様達まで参加する…なんてことは…あ…ありえる……
……分身を作り出して我も様子をみにいったほうが…よさそう…かな？」
自身のつかえる神とそして、あの場にいるであろう【星の意思】。
あの二人がそろった時どんなことがおこるのか、シアンとて予測は不可能。
意思のほうは問題ない。
そもそもすべての存在が彼女にとっては子供のようなものなのだから無茶はしないであろう。
しかし、ヴリトラに関しては話しは別。
何しろ気が乗ったり、さらには遊びに夢中になれば彼女は周囲をまったくかえりみない。
そのことを一番身をもって知っているのは、代々の長となる黄竜のみ。
長の地位を受け継ぐときに代々の記憶もまた受け継ぐこととなる。
次代になるべき新たな命もつい先日誕生した。
できうれば憂いに関することは自分の代でどうにかしておきたいものである。
そんなことをおもいつつも、
「……なんか、いつも我は気苦労背負ってないか？」
ぽつり、とつぶやく竜族の長、シアンの姿がその場において見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～侵喰と大会と～

いつの時代も傲慢な考えをもつものはいる。
それは種族を問わず。
彼らの考えまでには干渉しないとは決めてはいるが。
そもそも、心までは干渉していない。
自分にできることは、産まれ来る様々な命をはぐくみ、導くことのみ。
その命が間違った道に進むならば強制的に正さなければならないが。
そもそもそういった輩は自分達の罪を認めようとしない。
その結果、どういう結果になっても自分達はわるくない。
そう責任を他者にとおしつける。
たとえそのせいで自然が壊れたとしても、壊れた自然のほうがわるい、というように。
「…あらら。ヴリちゃん。遊んでるけど。ま、いっか。あの子達にはいい薬になるでしょう」
最近、かなり傲慢な考えをもつ存在達が増えていたのも事実。
それに何よりも、
「最近、ヴリトラは人間達の【心】を直接【喰べて】いないからねぇ」
心を喰らうことにより意識の共有もできる。
人間世界での常識を知らないのは彼女が最近彼らの心を喰らっていないから。
わざわざ神竜であるヴリトラがうごかずとも、【理】の中で【ゾルディ】としてそれらの心の塊、
つまり【念】は形をえる。
もしも彼女がすべてのゾルディになるまえの【強い思い】の源となる【心】を喰らうならば、

世界にゾルディ、という存在は誕生しない。
かつてヴリトラはすべてのそれらを喰らっていたが、今は気がむいたときにしか喰らわない。
ゆえに、各界のいたるところに【ゾルディ】が多発しているのも事実。
「さて、あの子達だけで満足するか。それとも全体を飲み込むか。すこしばかり観察しとくとしますかね」
あくまでも傍観者。
ヴリトラが何をするのか大体予測ついているのに止める気のまったくないディア。
彼女が今いるのは寮の自室。
その正面にはヴリトラの様子が空中にと映し出されている。
しばしその光景をみつつのんびりとつぶやくディアの姿がその場においてみうけられてゆく……

こんな子供だましな幻影をみせて。
こんな子供だましに教師達はひっかかったのか。
そうおもうと馬鹿馬鹿しくなってしまう。
やはり教師達よりも自分達のほうがはるかに実力あるじゃないか。
そう彼らの中で結論がつけられる。
彼らの目前に広がったのは、どこまでも真っ暗な空間。
その空間の中に彼ら三人と、少女のみがぽつん、と暗闇の中に浮かんでいるような景色がこの場には広がっている。
真っ暗とはいえ足元はしっかりしているのか、何かを踏みしめている感触がある。
ゆえに確信がもてる。
これは少女がみせているただのまやかしで、自分達はいまだに廊下にいるのだ、と。
そもそも、その考え自体が間違っていること自体に彼らは気付かな

い。
たったのひとことだけで別次元に空間が作り出された、などと一体誰が想像できるであろう。
彼女の正体をしっていればその予測は可能であろうが、しかし目の前の男性三人は少女が、
ただの周囲がさわいでいるだけの力のない子供、としか考えていない。
思慮にかけている、といえばそれまでなのだが。
しかし彼らは自分の考えが絶対でゆえに誰にも否定させられるはずがない。
そういう概念の持ち主。
彼ら三人に関してはギルド側もかなり手をやいているものの、
彼らが研究し発明した品々はたしかに役にたっているのも事実。
ゆえに彼らの態度についてはもはや暗黙の了解、という悪循環極まりない現状が生まれていたりする。
「俺達にこんなまやかしがつうようする、とおもってるのか？なあ？」
後ろにいる二人に声をかければどちらも同じようにうなづいていたりする。
そういい、何の気なしに一人が横に手を伸ばすが、一瞬顔をしかめてしまう。
もしもここが想像どおり、ただの幻をみせられているだけならば、
手をのばせばそこにあるはずの壁がない。
手はむなしくただただ虚空をそのままつっきっている。
一瞬不可思議におもうがたいしたことではない、そう頭の中で切り捨てる。
もしもここでもう少し思慮深く考えればおそらく彼らはこれから起こることを少しでも軽減できたであろう。
「じゃ、おじさんたち、はじめようか？私をしっかりと楽しませてくれるんでしょう？」

にこにこと邪気のない屈託のない笑みをうかべつつもそんな彼らにむかって言い放つヴリトラ。
自分達の力と知識が絶対。
そう思っている輩と対峙するのはヴリトラにとってはかなり楽しい。
そもそも、彼らがだんだんと自身の力に呑まれて恐怖してゆく様ですらヴリトラにとっては楽しくてしかたがない。
見た目が少女の姿であることからはたからみればその姿は異様、というにつきるが。
しかし子供、というものは平気で残酷な行動をするものである。
その顕著な例がこのヴリトラ。
にこやかに笑みを浮かべつつ、何の罪悪感も感じないままに様々なことを試行する。
ゆえに、一部の存在達からは悪竜神とすらいわれているほど。
「じゃ、はじめよっか？」
にっこりとつぶやくヴリトラの言葉とともに、闇の触手が人間の男たち三人の体を瞬く間にと飲み込んでゆく……

もっと。
もっと恐怖を感じ、そして自らに憎悪を抱かせて？
そう思いつつもにこやかに邪気のない笑みを浮かべたまま三人を相手にしているヴリトラの姿。
ただのまやかしだ、とおもっていた。
すこしばかり傷をつければ簡単に逃れられる、と。
また自分の力でこんなまやかしなど簡単に壊せる。
否、壊せない結界などない、そうおもっていた。
隠し持っていた武器を投げてそれを証明しようとしても、そのまま短剣はそのまま闇に飲み込まれてゆき、
次の瞬間。
「ぐわっ！？」
たしかに目の前にむけて投げたはずなのに

どうして自分の投げた短剣が自分の背後から飛んでこなければならないのか。
体にまとわりついてくる触手を振り切ろうとすればものすごい激痛が体全体に襲いかかる。
そのまますっぽりと手の肉がさけて中の赤身がこれでもか、というほどに垣間見えていたりもする。
ここはあくまでもヴリトラの創りだした精神世界面のような場所。
彼らの肉体は肉体であって肉体であらず。
つまり、彼らは精神体のみでこの場に放り出されている格好となっている。
第三者がみれば、少女とにらみ合ってびくり、とも動かない男たちの姿を目にすることであろう。
現実面というか物質世界面においてはたしかにそのような光景が垣間見られていたりする。
もしもそんな彼らに触れるものならば触れた存在も問答無用でこの空間に引きずり込まれる。
本当ならば肉体をもったままこの空間に連れてきてもヴリトラとしてはよかったのだが。
しかしそれでは面白くないし楽しめない。
なぜならば自分の力に絶対的な自信をもっているものは自分の肉体が傷つくと、
もののみごとに錯乱することがある。
簡単に錯乱状態になられても面白くない。
ゆえに精神体のみをこの場にひっぱってきているヴリトラ。
未知なるものへの恐怖ははてしない。
しかも自分に自信があったがゆえにその恐怖は計り知れない。
目の前には絶えず笑みをうかべたままの小さな少女。
ありえない。
自分達の攻撃、しかも術などすべてにおいてあたることすらなく、
さらにはその攻撃のすべてが自分達の背後からまるで自分達が自分

に向けて攻撃をしかけたようになるなんて。
空間を捻じ曲げる術があることは知っている。
しかしそれを行うには膨大な力が必要だ、とも知っている。
だからこそ、目の前の少女がそんな力をもっているはずがない。
それなのに…未知なる恐怖。
その恐怖に彼らが気づくのはあまりにも遅すぎた。
それでも残った自身のプライドがその間違いを認めようとしない。
否、認めたくない。
今までの現象はすべて、少女がみせているまやかしなのだ、そう自分自身に言い聞かせる。
体が震えているように感じるのは自分達の気のせい。
自分達はこんな少女に負けるはずなどない。
何よりも目の前の少女が自分達より力があるなど信じられるはずもなければありえるはずもない。
そのプライドが彼らをさらに窮地に追い込んでいったという事実に彼らは気付かない。
しかしいくら心をごまかそうとも深層心理の中においては確実にその恐怖はたまっていっている。
何かのきっかけで簡単に壊れてしまうほどの…純粋なる恐怖。

しばし何ともいえない男たちの叫びが空間内部に広がってゆく……

圧倒的なまでの力の差。
これは一体何なのか。
感じる激痛に、自分達の攻撃で傷つき、そして少女がおそらくやっているのであろう、
正体不明の黒い蔦のようなものに体全体が切り刻まれてゆく。
どくどくと流れる血は蔦にそのまま吸収され、ころがる手足もまた闇にと飲み込まれていっている。
激痛にさいなまれ意識を失いかけるとどこからともな強制的に意識

を覚醒させられる。
自分達は最強ではなかったのか？
自分達の知識、そして技術においてかなうものは一人もいなかったのでは？
すでに彼らに抵抗する意思はなく、
ただただ純粋なまでに畏怖を抱きその場にころがっている状態と成り果てている。
それでも四肢のいくつかを失っていても普通にたっていられるのはこの空間のなせる技というべきか。
ただ転がられては面白くない、という理由でヴリトラがそのようにしているに過ぎないのだが。
そのことに気付いた彼らの心は…完全にと壊れた。
それを見届け満足そうにほほ笑み、両手をあわせて、一言。
「そろそろ恐怖もだいぶ熟されたかな～？んでは、いただきま～す♪」
刹那、彼らのすべてを闇の口が…表現するならば巨大な獣の口が漆黒の牙をもって飲み込んでゆく……

「ねえねえ。昨日、何かがあったのかな？」
「？何で？ケレス？」
朝、学校にいくと何やらとてつもなく騒がしい。
ゆえに寮をでて共に学校に出向いて行っていたケレスが門の前でおもわずつぶやく。
せわしなく教師達が出入りしているようにも垣間見えるが、
しかし中にはどこかしらすっきりとした表情をしている者の姿もみえる。
「まあ、別に問題はないんじゃないの？町まで騒ぎになってないようだし」
事実、ここまでくるのに町はいつもと変わりない様子であった。

そもそも、問題がおこるはずなどない。
昨日、ヴリトラは自身に絡んでこようとした男たちをたしかに呑みこんだ。
しかし、それは彼らの【心】を呑みこんだわけであり、肉体をどうこうしたわけではない。
久しぶりに喰らった【感情】がとてもここちよく、ついでに建物全体にいた存在達からも、すこしばかり喰らっただけのこと。
「おいしかったよ～」
そんな二人の会話をうけて横ではにこやかに何やらとんでもないことをいっているヴリトラ。
しかし、そのおいしかった、の意味は当然ケレスには判るはずもない。
「ま、いきましょ。たしか今日は祭りの希望科目を提出する日だったわよね？」
「あ、うん……」
何だかとても釈然としないまでも、考えていも判らないものはわからない。
まあ、教室にいってから誰かにきいてみましょう。
そう自己完結し、そのまま教室にむけて歩きだすケレス。
「さて。一時消された悪意の心はいつまた発生するかしら…ね？」
ふふふ。
あの時間帯、学校にのこっているものすべての心がヴリトラによって呑みこまれた。
力あるものがその様子をみていれば漆黒の大きな獣の口が瞬く間に学校すべてを一瞬のうちに呑みこんだ。
その光景が視えていたであろう。
しかし、命あるもの、というものは生きているかぎりあくまでも貪欲。
一時きれいに【悪意】が他者の手によりかき消されたとしても時間

とともに再びその【悪意】は発生してくる。
それはそれぞれの個々の性格にもよるのだが。
そのまま悪意を知らずに平和にくらすものもなかにはいる。
しかしほとんどの確率で再びその心に悪意をもつことは今までの経験上、ディアはよく判っている。
「あと、ヴリちゃん、あまりほいほいと広範囲で食事はしないようにね？」
「は～い！」
久しぶりの少しばかり味のある食事を得られたことによりヴリトラの機嫌ははてしなくよい。
そんなディアとヴリトラの会話の意味に気づくことなく、
「ディア！それにヴーリちゃん、いそがないと間に合わないわよ～！」
そんな二人にと声をかけているケレス。
ケレスは知るよしもない。
自分が首をかしげている現象が実は、ヴリトラ達が起こしたものだ、という事実を……

「はい！それでは、各自、いろいろと考えたとはおもうが。
　アイヤルで行われる大会の希望をそれぞれ書き出して提出するように！」
アイヤルとは暦を示す言語。
この世界においては、暦ごとに呼び方があり、若葉が生えるこの時期のことをアイヤル、という。
朝、生徒達の点呼をとるためにとやってきた総合科Ｃ組Ａクラス担任、
ヘスティア＝アルクメーネが教室全体をみわたし、生徒達に言い放

つ。
つまり来月に執り行われる大会の要望を生徒達に求めているわけなのだが。
この世界においての暦は、第一月から第十二月までという形で呼び表わされる。
それぞれの月に呼び名があり、アイヤル、というのは第二月のことを暦上では指し示す。
古の地上においてはその月のことを四月、と呼んでいた地域もあったのだが
それは今を生きる存在達には関係ない。
この暦に関してのみは各界共通事項となっており、ゆえに暦に関しての問題は今のところおこったことはない。
この暦は太陽の周回によって決められたものであり、ゆえに四年に一度、
その周回軌道における暦訂正をすべく、第二アダル、というものが存在している。
その月はいつものアダル月よりも日が一日ほどながくなる。
なぜか本日、出勤してきてみればギルド協会そのものがあわただしく動いていた。
話しをきけば、昨日遅くまで学校に残っていたすべての存在達がいきなり性格がかわってしまった。
とのこと。
それまで嫌味などをいっていたものがいきなり素直になったり、もしくは扱いずらかったはずの人物がいきなり低姿勢でしかも子供のごとくに反応してきたり。
しかも人数からしてみれば数百人単位での出来事。
ゆえにその原因を追求すべく、ギルド協会が全力をあげて捜査に乗り出したのだが。
彼らに共通していることはかつての自分をかなり恥じている、ということにすぎず。

何かの副作用とかがあるというようには感じられない。
そもそもいきなり数百人単位の人間や様々なその時間帯にいた種族達が有無を言わさず同じ症状になりはてた。
さすがにこれを無視するわけにもいかず、朝から校舎やその周辺に異常がないか全力をあげて捜査していた。
しかし何の以上もみられない。
逆をいえばそれまで多少すくなからず発生していた【淀み】がきれいさっぱり消え去っていた。
しかし、少し考えればわかることなのだが、多少なりとも淀みがあった場所にいきなり清潔空間が発生した。
そこに様々な淀みが再び流れ込まない、という保証はどこにもない。
ゆえにギルド協会に所属するものはもとより、国をあげて全力でそれらの対処にまわっていたのだが。
かといって生徒たちに不安をあたえるわけにはいかない。
何より意味不明の出来事がありましたので今日は学校はお休みです。
といえばそれでなくても先日の一件のこともある。
余計な不安をあおり、さらには国の信頼をも揺るがす事態になりかねない。
生徒達の安全を確保しつつ、本日の授業は午前中で切り上げる…
あくまでも表向きの理由は、来月に開催される大会の準備、ということにして。
この時期、そういうことはよくあるのでおそらく生徒達は怪しまないであろう。
そしてまた国民達もよくあることなので授業が午前中で打ち切られても違和感は感じないはず。
もともと、大会における希望をきく予定日だったのだから問題はまったくない。
朝から何かいつもと違う様子はたしかに見受けられるが、生徒達にその真意は伝えられていない。
もしかしたらまた先日のように厄介なものが近くにあらわれたのか

もしれない。
そんな予感すら生徒達の脳裏によぎる。
しかしこの場にいる限り、守護精霊の力もあり何より安全である。
そう生徒達は知っている。
…もっとも、守護精霊の力さえおよばない輩が襲撃してきた場合、
どんな存在をもってしても迎撃は不可能であろう。
特に彼らが人、という種族であり、または普通の存在である以上、
対抗手段がなきにも等しい。
そのような輩が普通の国、もしくは町に攻め入ったという話しはあまりきかない。
しかし、ときおり気まぐれなのか小さな町や村などが原因不明の何かによって消滅、
もしくは住人全員がかき消える、という現象がおこっているということは知っている。
心の中に不安はそれぞれあるものの、今自分達がやらなければいけないことは、
全員強制参加ともいえる協会主催、修学過程検証実技大会の参加科目の選択である。
これは一度提出すれば訂正が利かない。
ゆえによくよく考える必要性がある。
自分の力をためすために別の特殊分野を選択するもよし。
他の技術者などにまじって自分の技量を試してみるのもよし。
何よりもこの大会は今の自分の力と能力を自分自身で見直すには十分すぎるイベントとなっている。
中には様々な店を開いてその売り上げ、もくしは人気を競うという分野もまたあったりする。
そもそも、大会におけるすべての出店舗はみな、大会参加者という形式をとっている。
あるものいわく、販売実習のようなもの、とはいっていたりするのだが。

しかしギルド協会学校側としても似通ったものは開催している。
それは年に一度、各階位ごとに希望をきき、生徒たちのみで実習させる、という試み。
仕入れから開発、そして販売にいたるまですべて生徒たちのみで執り行う。
異様にその実習に命をかけている生徒もいたりするのはお約束ともいえるであろう。
このたびの大会は対象は生徒達だけ、ではない。
一般参加者もいるのである。
つまり、世間において自分の力がどこまで通用するのか。
それを見極めるよい機会。
ゆえに生徒達は真剣に悩む。
自分がどの分野を選択するかによって今後の行く末を決めるきっかけともなるのだから。
それぞれが悩みつつも、第一志望、第二志望、必須志望などを配られた書類に書き込んでゆく。
必須志望は文字通り、絶対にうけたい分野を記入。
そして第一志望、第二志望などに関しては受けてみてもいいかな？とよく自分の中でも順位が定かでないものを記入してゆく。
そしてそれらの志望を総合的に集計し、それぞれ大会に参加する分野が決定する。
さすがに全世界…といっても、主に地上界のみ限定にはなるが、それでも参加者は毎年かなりの人数にのぼる。
ゆえにどうしても抽選的なものになってしまうのは仕方のないこと。
学生は強制参加なので予選のようなものはないが、
一般参加者は事前に予選のようなものがあり、すでにもう篩いにかけられている。
つまりは本戦である大会に挑んでくる一般参加者は予選を勝ち抜いてきたつわものばかり。
そんな中に生徒がほぼ無抵抗な状態で放り込まれるこの大会。

世間の荒波の厳しさをもしってもらう目的、とはギルド協会側の意見ではあるが、
毎回その苛酷さに泣きごとをいう生徒の数もすなくない。
もっとも、中には一般の人々よりも上を目指してさらなる高みを！と向上心を培う生徒達もいるにはいるが。
しばしそれぞれ、最終的な考えを自分自身でまとめつつ、
教師より配られた参加票に必須事項を記入してゆく生徒達の姿が、
この日、各教室においてみうけられてゆくのであった――

「よっしゃぁぁ！予選つうかぁぁっ！」
予選の結果は後日、連絡という形で予選参加者達には伝えられることとなる。
本戦の案内がこない予選参加者達は本戦に挑むことはできない。
そのかわり、予選参加者は優先的に観戦するための資格が得られることとなっている。
もしくは望めば無料で大会の様子を観戦するための【水晶珠】を購入することも可能。
長かった。
本当に長かった、とおもう。
そもそも、この国にきてからいろいろとあったが、ようやく国をでる口実ができた。
「戦争なんて冗談じゃないが、それいったら袋叩きだしな～」
しかし、大会のため、といえば堂々と国を出奔することができる。
「そもそもさ～。絶対にヴルトゥーム様も戦争なんて面倒なことはやめておく。
　そういうにきまってるのに、どうしてこうお祭り騒ぎ的に騒ぐのかな？」
信仰している神自体には問題はないとおもう。
そもそも、我関せず、自分は静かに隠居してます。

その姿勢が神の中でも一番好感がもてているのも事実。
前のときの国王はそのあたりの考えも神に近しい考えであっただろう。
しかし、新しき国王はなぜかその考えを他者…つまりは他信仰のものにまで強制し強要しようとしている。
それは王国の基礎たる宗教概念からしても間違っているのではないか。
そう理性的に考えればわかりそうなのに、自分達の考えが一番正しい。
そう国王から発表があり、各国に侵攻すると国民に伝えられたのはつい先日のこと。
戦争が始まるまでにはどうにか国から逃れたかったが、
その前から予選をうけていたのが功をそうした。
「…知り合いだけでも、僕の応援っていう形でどうにか国外脱出させないとな～」
しかしそれが国の衛兵達の耳にはいれば、本戦参加もおそらく破棄されてしまうであろう。
完全に徴兵が始まる前にさくっと国をでる必要性が生じている。
「…と、とにかく。まずはこの本戦案内証をなくさないように、またとられないようにしとかないと」
この証がなければ本戦に参加できない。
それだけは困る。
まだ外の世界への【扉】が閉じられた、とはきいていない。
【扉】を利用するにはどうしてもこの証が必要不可欠となってくる。
扉、とは各大陸を結ぶ道。
一番安全に各大陸間を移動できる手段として利用されている。
もっとも、普通に海路もあるにはあるが、海路はかなり時間を要する。
また、途中で何があるかもわからない。
しかし扉の利用者はどうしても制限されてしまい、身分をきちんと

証明するものがなければまず利用不可能。
しかし、大会参加者となれば話しは別。
証さえあれば何名でも利用は可能。
ヴルド王国。
邪神、と呼ばれている元は天界の神でもあるヴルトームを進行している御国柄。
そしてその首都に近いとある町の中、一人の青年がぶつぶつと今後の対策をたててゆく。
彼の名前はクルド。
オリジナルの術や細工ものをつくらせたならば、国中で右にでるものはいない、といわれている腕の持ち主。
一応、きちんとヴルド王国にあるギルド協会学校はきちんと卒業している。
在学中は上位まで組み込むことはできなかったが、今の自分の実力をためしたい。
閉鎖的な空間の中でなくその目を世界にむけていきたい。
ゆえにこっそりと予選参加していたのだから。
彼の編み出したオリジナルの術により今の国の状態は彼なりに把握している。
だからこそ、国外脱出は時間との勝負。
…はやく脱出しないとまちがいなく自分達にもそのとばっちりは確実にまわってくる。
「向かう先で一番いいのは、やっぱりテミス王国だろうな～」
何しろギルド協会の本部がある国である。
そこほど一番安全でなおかつ情報があつまってくる場所はないだろう。
その近くで家をかり商売するのもよし、もしくは冒険者となるのもよし。
そんなことを考えつつも、しばしクルドは今後の対策をたててゆくのであった……

光と闇の楔　～侵喰と大会と～（後書き）

この世界の暦の元は古代バビロニアの暦となっております。

第１月＝ニサン（三月）・第２月＝アイヤル（四月）・第３月＝シマヌ（五月）・

第４月＝ドゥドズ（六月）・第５月＝アブ（七月）・第６月＝ウルル（八月）・

第７月＝テシュリトゥ（九月）・第８月＝アラフシャムヌ（十月）・第９月＝キスリム（十一月）・

第１０月＝テベトゥ（十二月）・第１１月＝サバトゥ（一月）・第１２月＝アダル（二月）

※閏月に関しては第二月、第二アダルと区別しております。（四年に一度の割合）

光と闇の楔　～実技大会開幕～（前書き）

ようやく動乱のフラグ？にはいりはじめしたよ…
しかし、この動乱…これ第一フラグ…まだまだ先は長いです……

光と闇の楔　～実技大会開幕～

「ふ……ふふふ……」
この日をまっていた。
しかしまだ初日に行動するのは馬鹿らしい。
「観戦用の品は用意できたか？」
「はっ！」
『こちらのほうも準備は万全だ』
すべての平和ぼけしているものたちよ。
今はただ、大会を満喫するがいい。
そして大会がもりあがったそのときこそ、貴様らは真実をしるであろう。
世界のあるべき本当の姿を。
本当の支配者を！
『テケリ・ショゴス万歳！』『ハスター・ホテップ万歳！』
周囲に組織をたたえる歓声が二界において響き渡る。
さあ…宴の始まりだ。

光と闇の楔　～実技大会開幕～

新緑もすがすがしい、第二月・アイヤル。
すでにディアが学校に入学してはや二月を経過している。
ディアがこの学校に入学したのは第十二月のアダル。
そして第一月のニサンにおいて薬学免許試験、C級を所得した。
ちまちまとした依頼をこなしつつも、今のディアのギルドランクは青。
一月ニサンにて資格を有したことにより、紫から青に引きあげられたのだが、
それからギルドのランクは変わっていない。
ディアが入学してからめまぐるしく様々な出来事が続けざまにおこっているのだが。
ある教師いわく、『言霊使いは厄介事までひきつけるんじゃないだろうな？』
などといっていたりするのはここだけの話し。
「さあさあ！毎年恒例！ついにやってきました実技大会！！」
「「わ～～～！！」」
誰ともなく叫んだその言葉にその場にいる全員が熱狂的な声をあげる。
今、ディア達がいるのは、王都にある【転移の扉】と呼ばれるものを抜けた先にある広い空間。
空間、と称したのはそうとしかいいようがないからなのだが。
何しろ見渡すかぎりの真っ白い床と地平線すら見えない平らな大地。
そこにこれでもか！という様々な種族の存在達がひしめきあって集まっている。
はっきりいってここで人ごみにまぎれたら絶対に二度と連れとは出会えないであろう。
それほどまでの人の海。
この大会は約一月の間行われる。
ゆえにもはや各界に住まう存在達においては欠かせない娯楽の一つとなっている。

「ほへ～。お姉様。活気がありますね～。霊獣界はここまで熱気につつまれてませんよ～」
その様子をみつつもどこか感心した声をだしている一人の少女。
「ああ。たしかあの界は参加者がそのまま乱闘はじめるのが当たり前、だからねぇ。
　精霊界においてはそのまま力比べをかねての開会式になってるし」
そんな中、何やら第三者が聞けば卒倒するような会話をしているのはいうまでもなくディアとヴリトラ。
「？ディア？それにヴーリちゃん？何をはなしているの？」
周囲の歓声に二人の会話は横にいるケレスには届いてはいない。
「こっちの話し。そういえば、ケレスも戦闘部門に参加なんですって？」
希望箇所がどうやら同じらしく、ならば知り合いと一緒に行動したほうがいい、とはケレス談。
ゆえにこうしてディア達とともにケレスは行動を共にしているのだが。
「ええ。…お母様が、精霊の加護も儀式もおわったのだから実戦で経験をつちかいなさいって……」
その声にどこかあきらめとおびえがはいっているのはおそらく気のせいではないのであろう。
「あ～…なるほど。ま、死なないようにがんばって」
この空間内においてはたとえ一度志望しようとも復活することが可能。
この空間内においてはすべての界から遮断されており、
ゆえに肉体から魂が離れても絶対にこの場からははなれられない。
つまり、万が一、肉体から魂がはなれるようにことになったとしても、
近くを浮遊している魂を再び肉体につなぎとめればいいのである。
それでも一時は肉体と魂の繋がりが断たれた存在は再びなじむのに

かなりの時間を要することとなる。
もっとも、それがきっかけで新たな力に目覚めるものもすくなくはないのだが。
「一度死ぬってどんなものなのかしらね…あ・・あはは……」
話しにきくのはものすごい激痛が走るらしい。
肉体においても精神体…つまり魂においても。
ゆえに虚ろな目でこたえるしかないケレス。
彼女とて自分に実力がないことはわかっている。
いくら母達の特訓をうけていようとも、まだケレスは何の実戦経験はないのである。
それがいきなり、生死を問わない戦闘部門参加（強制）である。
どこか虚ろな表情をしていたとしても仕方がないといえよう。
「さて。と、あ。開会式の宣言おわったみたい。とりあえず私たちは受付にいきましょ」
各自それぞれが参加する項目の大会会場にむけて移動をはじめてゆく。
この場からはそれぞれの場所に通じる【道】が存在しており、
そして今ここの空間はこれより、観戦広場となり果てる。
それぞれの場所において各会場の映像が上空にと映し出されることとなり、
実際に会場内にはいれなくても映像として視ることが可能。
…もっとも、この空間自体が広いので迷子にならないように気をつけなければならないが。
それはこの場にいるそれぞれの自己責任、となっている。
…それでも一応は迷子案内係は存在しており、毎年、毎年かなり重労働となっている。
この空間で騒ぎをおこそうとするならば、
空間のセキュリティが反応しその存在の周囲の重力をあっというまに変化させる。
それこそ立っていられなくほどに。

もしくは周囲の生存に必要不可欠な物質が瞬く間に消失されてゆくか、のどちらか。
その結果、治安的にはまったくもって問題はおこっていない。
誰しも自らの命は大切で、命をかけてまで騒ぎをおこそう、という輩などいないのだから。
…もっとも、一部にはその命をかけてでも自分自身の理想を掲げて周囲をまきこもう。
とする輩もいるにはいるが……
ざわめく人ごみとともに、目的の【道】へと到着する。
この道にも数種類あり、観戦用の道と大会参加者用、そして控室用、看護室用、となっている。
ディア達はまだ登録を済ましていないのでそのまま参加者用の道へと足を進めてゆく。
それぞれの道に関しても一つしかないわけでなく、同じ用途の道がいくつも存在している。
ゆえにそれぞれ目的の場所に向かうための道に続いているとおもわれる行列へと参加する。
ちなみに、それぞれの道からはきちんと誘導するために柵がほどこされており、
割り込みやそしてまた、間違った道へ迷いこまないように工夫がなされていたりする。
この空間には地上界すべてからギルド協会学校、そしてまた一般参加者などがはいりこんできている。
ゆえにその人口密度はかなりのもの。
この空間の広さというか大きさは、地上、つまりは惑星とほぼ同じ。
つまり海などがある空間もすべて足場るあの空間として存在しているのである。
そんな場所であるからこそ、人があふれてどうにかなる、というようなことは絶対にない。
ちなみに特殊な道も存在し、そこを抜ければこの空間で唯一の建物

にたどり着き、
そこから他の【界】に設けられている大会会場へ赴くことも可能。
しかしその場合はきちんと審査をうけることになるのだが。
そもそも、大会に参加、もしくは観戦するにしてもそれなりの証が必要となる。
つまり、他界にいくためにはそれぞれの【界】における参加証、もしくは観戦証が必要となる。
ちなみにこの制度、相手がどのような位の高い存在だとて例外は一切認めてはいない。
「さて、と、いきますか」
とりあえず道に足を踏み入れると同時に、横にいるヴリトラにもかるく認識不可を仕掛けておく。
本来この道の使い道は、この地上にいきるすべての存在に対して起動するもの。
道の反応具合によっては相手の力、そして種族すら認識することも可能。
ディアの場合はどちらかといえば、地上そのもの、といっても過言でないので道が反応しないこともある。
ゆえに認識付加をかるくかけ、その自身の認識が人のそれであるようにごまかしておく。
そして同じような仕掛けをヴリトラにもかるくしかけておく。
これはあくまでも【道】対策なので本質的にはまったくもっ何の問題もない。
柵に区切られた道沿いをすすみ、陣にと入りその先へと移動する。
ざわざわとしたざわめきが移動したディア達の耳にととどいてくる。
そこは建物の中であることを示す如く見上げればそこに真っ白い天上が存在している。
そして視界の先にはずらり、と長くのびているカウンター。
そしてその背後に多数の人影らしきものがみてとれる。
その机の上にはちょっとした大きさの水晶が設置されており

受付をするために並んでいるものたちは、自分達の参加証をその水晶にとかざしてゆく。
それと同時、水晶から彼らのもとに大会会場の番号札が取り出される。
性格にいうならば浮かび上がってくる、といったほうが正しいのだが。
そしてその浮かび上がった必要事項は参加者がかざした参加証にと吸い込まれ、
参加証がそのまま受付終了証兼会場案内書と変化する。
会場はいくつものエリアに別れており、そこでそれぞれが勝ち抜き、最終的にそこで勝ち抜いたもの達が戦い、そして優勝者をきめる。
エリアごとに優勝した存在にも当然特典はつものの、
優勝、となればそれはもうものすごい特典がつくこととなる。
中にはその特典を用いてかつてなどは自分達の国をつくったものもいたほど。
何しろこの大会のダイゴミは、精霊王達の加護のもと一つだけどんな要望も通る、という代物。
それが優勝者に与えられる特典。
「さてと、会場エリアはわかったから…あとは、各自の順番の把握ね」
すでに登録者はわかっているので予め対戦相手は組まれている。
ゆえに参加者は自分が登録しその自分に課せられた番号を知ることにより、
それを照らし合わすことにより自分がどのエリアでどの順番で戦うか、ということを知ることとなる。
もっとも、これらの仕組みは戦闘部門とよばれているこの場や、武術部門といった戦いを特化した部門に用いられている仕組みであり、
技術的な面を表にだした場所はさらに違う仕組みとなっている。
「でも結局、ヴーリちゃんも戦闘部門に登録したのか～。武術部門

にも登録したんでしょ？」
とりあえずそれぞれが登録を済まし、ヴリトラにといかけているケレス。
いまだにケレスはヴリトラをヴーリという名前だ、と信じている。
まあ、本名をいえばいくらケレスとてヴリトラの正体が神竜であると判ってしまうであろうが。
「まあ、ヴリちゃんの力は今は人のそれとかわりなくしてるからね」
「…人のそれとかわりなくって…そんなこと、できるの？」
さらっといわれたディアの言葉におもわず問いかけるケレスは間違っていないであろう。
何しろヴーリはそれでなくても人型をとれる竜族、そうきいている。
その人型をとれる竜族の力の制限が人の手で簡単にできるなど信じられない。
というかそんな報告きいたこともない。
「力の制限ってけっこう簡単なのよ？」
「いや、それ絶対にお姉様だからだとおもう。他はむりだよ～」
そんなさらっといいきるディアの台詞に横から不満そうにこたえているヴリトラ。
まあ、たしかに彼女以外、ヴリトラの力を制御できるものはこの惑星上にはいないであろう。
「…ディアってどこまでも規格外……」
そんな二人の会話をきいていたら何だか自分までおかしくなってしまいそう。
しかし何かそれに慣れてきている自分もあるいみ怖くなってしまう。
そのうちにそれらが当たり前になり何も感じなくなってしまうことが何よりも恐ろしい。
つまりそれは感覚がマヒしてきている、ということに他ならないのだから……

色とりどり。
まさにそう表現するのがふさわしい。
「魂の色も色とりどりね～」
この熱気はとてもここちよい。
純粋なまでの好奇心と向上心がこの場には満ち溢れている。
この感情のみで向上してゆくならば大地を踏みつける行為には至らないであろうに。
どうしてもどこかで間違った道を歩んでしまう存在達。
だけども基本はこれほどまでに純粋なのだ、とこの場から発せられる気で毎年確認できていた。
さらにいうなら種族も様々。
何しろこの場は文字通り、地上界におけるギルド協会の総合大会でもある。
ゆえに地上におけるすべての種族が参加している、といっても過言でない。
まあ、竜族などといった存在達は人間達に交じって大会に参加するよりは、
本来あるべき霊獣界に出向いていきそちらで参加するようにしていたりする。
理由は簡単。
竜族と他の種族の力の差は圧倒的であり、やはり大会をするかぎりは実力が拮抗しているものと争ったほうがいい。
というのが主な理由。
中には技術面などの部門に参加する竜族などはあえて地上界側の大会に参加し、
自分の技術や表現力がどこまで他の種族に通用するのか、と見極めするために参加していたりする。
ちなみに、建造物部門で優勝したものは、名誉とそして自ら新たに会社を立ち上げることが許されている。
あとこの大会の特質すべきところは、各界においてそれぞれの部門

で優勝したものたちが、
一堂に介し、各界最高能力者決定、という名誉ある大会に参加することができる、ということであろう。
それに優勝することは文字通り、どの界においても認められた実力を誇る、といっているようなもの。
今のところ地上界からその部門で優勝した存在は人類がたったの一人。
ちなみに建設建造部門において数百年前に誕生した。
彼は今では神界にその身をおき、依頼に応じてそれぞれの界の建造物を気の向く間まに手掛けている。
「ＳＧエリアか～。とりあえずヴリちゃんも同じみたいでよかったわ」
「…いや。ぜったいにお姉様、ちょっとばかり干渉したでしょ？したんでしょう！？」
同じエリアに選ばれる、しかも知り合いが。
これほどまでに参加者がいるのに知り合いが同じエリアで戦い確率などゼロに等しい。
「あら？だってあなた、目を話したら何するかわからないじゃない」
ディアの確かにいうとおり。
彼女はたしかに熱中すると周りをみずにそのまま心のままに行動することがある。
いくらここでは死ぬことがない、とはいえ神竜としての力を発揮すれば、
この場にいる存在達は一瞬にて一度死に絶える。
そうならないようにするためには近くで見守っているのが一番手っとり早い。
「ケレスはＧＸエリアね」
かなり距離は離れているが【エリア別への道】を移動すればすぐにその場に移動はできる。
【道】とは一瞬の、転移、もしくは転送装置のようなものであり、

対象物を特定の場所に瞬時に移動させる。
「とりあえず、順番は私が十番め。ヴリちゃんが二十五番目だから。それがおわったらしばらく第一試合をのんびりと観戦してましょ？」
第一試合、とよばれる大会もかなりの数にのぼる。
いくらエリアごとに別れていても参加者は膨大。
ゆえに少なくとも第一次試合だけでかるく一エリアで五百は超えている。
その中で、ディアとヴリトラは比較的始めのほうに試合がくまれているというべきか。
「さ、ヴリちゃん。控室にいくわよ？」
「…姉様の対戦者…気の毒……」
どんな攻撃をしかけようとも、目の前のディアにはまったくもって傷をつけることができない。
そうわかっているがゆえにぽつり、と対戦相手に同情の言葉をはっしているヴリトラ。
しかし、それはヴリトラの相手にもいえるであろう。
しかし、この大会に参加しているものでこの場にいる存在達にとってはその事実を知るよしもない……

何やらびりびりとした緊張感がただよってくる。
そもそもこの場にきてまで緊張していったい何になるというのだろうか。
それよりもまだ自分自身の能力をたかめるために瞑想、
もしくはイメージトレーニングをしたほうがよほど力になるであろうに。
「とりあえずここで他の人達の観戦みてから、私たちのがすんだら観客席に移りましょうか？」
このままここにずっといても意味がない。
「は～い！」

ディアのいう観客席、とはこのエリアの観客席ではない。
ディア独自の観戦場、とでもいうべきか。
すべてのエリアの様子が見えるように映し出した空間のことを指し示す。
そこはこの空間の中心地帯である他界への道がある建物の中に存在する。
しかしディアもヴリトラも当然そこにはいるための証はすでに手にいれてある。
たとえ偽造が困難、といわれていても基本は精霊達の力を借りてつくる以上、
それらがディアに創れない道理はない。
ゆえに、ディアにはそれらの定義はまったくもって通用しないのだから……
ぴりぴりした選手の控えの間。
しばし何やら場違いともいえるディアとヴリトラの会話がその場において繰り広げられてゆくものの、
その様子に気づいた選手達は一人もいない。
なぜならば、彼女達の気配は完全の空気と同化しており、
ゆえに、空気がいくら騒いでいたとしても誰もきづくものなどいない――

「あら？堅竜族？珍しい」
ディアの番となり、大会の会場である広場にと足を踏み入れる。
目の前にと転移されてきたのは、体の一部を鱗でおおったとある青年。
青白く輝くその鱗が普通の人間ではない、とものがたっている。
「ほう。この私の相手はお前か。ざんねんだったな。人間の娘よ」
自分の実力をためすために参加した。
予選もうまく勝ち抜いたが前回のように集落のあるギルドで参加せず、

他の場所から参加したのが功を奏しようやく今年は本戦にまでこぎつけた。
その手にもたれているのは長すぎるほどの槍。
竜、とついているが彼らの先祖は基本はトカゲ。
つまりは蜥蜴が進化して治世をもった種族、それが堅竜族。
特徴はその背後にあるシッポとすこし眺めの前にでている顔。
そして何よりも全身を覆っている鱗、といったところであろう。
この鱗、堅竜族の中でも種族の違いによりそれぞれ色が異なる。
鱗の色とそして固さが個性とそしてその力を現している、ともいわれている。
この種族はどこにでもいる、というわけでなくとある特定の場所にのみ存在している。
理由は彼らの適応能力にあるのだが。
他の地域において彼らの先祖は生き延びれなかったというだけのこと。
数もそれほど多くはなく、天界側からしてみれば種族管理における絶滅危惧種族として認定されていたりする。
それらを踏まえ、今ディアの目の前にいる堅竜族の青年は人間の感覚の見た目でいうならば、
おそらく十代後半。
しかし堅竜族の成長速度は人族とはまったく異なる。
数年間は普通に大きくなっていくものの、十年をこえればある一定の力を超えない以上、
それ以上の成長はのぞめない。
その一定の力を超える手っとり早い方法は自分達よりも強いものと戦い潜在能力を引き出すもの。
それ以外では時間をかけて自然の力をとりこみ自分の力とし引き出すもの。
最近の若い堅竜族はその後者の方法をひどく毛嫌いしどうしても力のみに頼る傾向になっていたりする。

ゆえに、それでなくても数のすくない種族の彼らが極端に数をへらしていっている、
という現状を導きだしている。
しかしそれに彼らは気付かない。
注意を天界などからうけても、彼らは自分達の文化だから、といって聞き入れようとはしない。
天界とて万全ではない。
彼らがこばめば天界とてそれ以上強制的にどうこうできる権限はない。
そして、目の前の青年。
彼もまた若気の至りというべきか。
自分の力をてっとりばやく伸ばすつわものを探す目的と、あわよくば他界の実力者との戦闘。
それを望んでこの大会に参加申し込みをしていたりする。
「あら?対戦相手は見た目で判断したらダメなのよ?堅竜族のあなたならそれをわかっているんじゃなくて?」
くすくす。
彼らは基本、もともとは狩猟の民である。
中には草食の民はいるものの、基本は狩猟を主とし雑食性質をもっている。
あまり寒い場所では活動力が低下する、かなり致命的な欠点をかかえている。
まさに盲点ともいえる弱点。
竜族の鱗までとはいかないまでも堅竜族の鱗もそれなりの耐久力をもち、
一時期などは人間族にかなり乱雑された種族でもある。
また、普通に蜥蜴などから皮などをはぎ取るよりも、堅竜族からはぎとったほうが量もおおく質がいい。
…ゆえに、種族激減にかなり拍車をかけているのだが。
人間すべてがそのような愚かな考えをもっているわけではないが、

それでも念には念を。
ゆえに彼らはある程度の年齢に達すると人里におりるときには人の幻影を纏うことを強制させられる。
しかし自分の容姿に絶対的な誇りをもっている若者たちはその長老達の提案をききいれようとはしない。
目の前の青年も自分の種族、そして姿に絶対的な誇りをもっている。
ゆえに人の幻影をまとう、などといったわずらわしい行為はまったく行っていない。
「え～！それではＳＧエリア、一回戦、第十試合！対戦するは強制参加学生と、堅竜族！！
　時間制限は一時間！では、試合、開始っ！」
対峙する二人とはうらはらに進行役の声が会場内にと響き渡る。
それと同時。
『わ～～！！』
盛大なまでに観客席から歓声が発せられる。
何しろ堅竜族とは最近では滅多とおめにかかれない種族。
その力はいまだに未知数ともいわれている。
その対峙する生徒はギルド協会学校の生徒、とはいうことだが階位は示されていない。
通称、【学園】の生徒はその階位と所属している学科により一般的な存在より強いことが多々とある。
だからこそ期待ができる。
それがたとえどうみても十代そこそこの少女だ、としても。
ギルド協会学校には様々な種族の存在が通っているのもまた事実。
ゆえに見た目と年齢が一致している、とは絶対に限らない。
それを観客達はよく知っている。
伊達に毎年この大会は開かれているわけではない。
「誕生して二十年でその姿…か。少しばかり稽古をつけてあげましょうかね」
くすっ。

ディアからみての青年のそのまっすぐな心はとてもここちよい。
しかしだからこそ、おしい、とおもってしまう。
もっている力をきちんと性格に使いきれていない。
…ならば、その力を正しく扱えるような戦いをしてゆき、
自分自身でその力を引き出すように仕向ければよい。
くすくすとその場にて笑うディアの姿をみて顔をしかめつつ、
「学生？運がわるかったな。悪いが、私の目的はさらなる目的だ。
　怪我をさせたくない。棄権、もしくは辞退してくれたら助かるのだがな」
いくら何でも無抵抗の、しかもかなり弱い人族の女、しかも子供を攻撃したくはない。
むしろ弱いものに攻撃する、それは戦士たる堅竜族にあってはならぬこと。
さらにいえば今の進行役の説明では、強制参加させられているギルド協会学校の生徒であるらしい。
だからこそその提案を申し出る。
目の前の人間の少女はどうみても強くはみえない。
自分の一撃をうけただけでまちがいなく死ぬであろう。
ここでは死者となっても生き返ることができる、とわかっていてもいい気分ではない。
「あら？…まあ、まだ見た目にだまされる、というのは経験の差…なのかしら？
　なら、すこしばかり、問題ない、というのを見せてあげましょうか？」
くすっ。
先ほどまでは完全に周囲の気配と同化させていた。
その気配の方向性を少しではあるが変化させる。
びりっ。
それとともに周囲の空気が一瞬のうちに硬貨し、その場の空間のみ息苦しくなってゆく。

しかし普通に観戦している観客はその事実に気づかない。
ただ、観客たちは対戦相手がにらみ合っている、という形式にしか見えない。
ざっ。
その周囲の変化にいち早く敏感に察知しおもわずざっと一歩後ろに飛び下がる。
「…訂正、する。どうやら全力でいっても問題ない相手、とみた。
女子供に刃をむけるのは愚者のすること。しかしどうやらつわものとみた。
我は堅竜族クリーチャ一族が一子、サガ！」
「あらあら。ご丁寧に。クリーチャ、か。となるとブロスの子供の一人ってことね」
それだけですべてを把握しているディアはさすが、といえようが。
「？父をしっているのか？」
「まあね。さって…じゃ、いきましょうか？」
くすくすくす。
息苦しくも感じるが目の前の少女はまったくもって実力がわからない。
父を知っているようではあるが、父から人間に知り合いがいる、などと利いたこともない。
びりびりとした空気が絶えず肌にとまとわりつく。
しかし少女の表情は先ほどまでとまったくもってかわらない。
ただ、少女を中心とした空気が一瞬のうちに変化しただけ。
殺気も何も感じないのに、ただただ本能が行動することを畏れている。
こんな感覚はサガは知らない。
世の中は広い。
そう父がいっていたことを身をもって実感する。
しかし、しかけてみなければ相手の実力もわからない。
何よりも自分はつわものと戦うためにこの大会に父にも内緒で参加

したのだ。
まけるわけにはいかない。
つわもの、とよばれている魔界、そして天界、霊獣界におけるつわものと戦うためにも。
「いざ、まいるっ！」
声とともに、だっと走り出しその手にしているその身長よりも長い槍を構えるサガ、となのった堅竜族の青年。

今、ここに、ディアと堅竜族の青年サガの戦いが幕を開けてゆく……

「……やれやれ。ようやく仕事が一段落した……」
といってもまだまだ仕事はのこってはいるが。
「あれ？シアン様？お久しぶりです」
総合ギルド会館の受付係りである女性がつぶやく一人の青年に気づき声をかけてくる。
「ああ、ホンか。きちんと頑張っているか？」
「はい！見てのとおり、重要個所であるこの会館の案内係りを務めさせていただいております」
竜族より出向、という形でギルド協会にでむいている火竜族のホン。
火を司る竜の中ではかなりの実力をもち、ゆえに長たるシアンとも面識がある。
その属性を示すかのごとくに普段はおとなしいのだが
何かのきっかけがあれば手のつけられないほどに気性が荒くなる。
燃え盛る火を前にすると手がつけられなくなるのと同じ現象が彼女にもあてはめられる。
「でもシアン様がここ、人間界の会場にこられるなんて珍しいですね？」
霊獣界、もしくは天界ならばわかりもするが。
そもそも、霊獣界に本来所属する竜族は天界の神々にも匹敵する力

をもっている。
下位の神々くらいならば竜族にかなわない。
もっとも、長が自ら大会に参加する、という事例は今のところ…かつて一度しか起こりえていないが。
その時にはオーディンを始めとした神々やなぜか嵐乱の王ともいわれている魔界のバアル公が参加し、
かなり混沌とした大会となってしまったのだが。
その余波で近づいてきていた彗星がもののみごとに破壊された、という実例があったりする。
「うむ。すこし気になることがあってな。とりあえず各エリアへの通行証はこれでかまわんか？」
各種族の責任者などが申請すれば与えられているフリーパス証。
しかし一応検査はある。
「シアン様には問題はなさそうですし。かまいせんよ？それでは、おきをつけて。
　あ、でもくれぐれも竜の長、というのがばれないようにしてくださいね？騒ぎになりますから」
そもそも、普通に竜族の長がきているとわかれば大混乱間違いなし。
それゆえのホンの忠告。
「ああ。わかっている。では、ホン。お前も仕事をしっかりな」
「はい！」
よもやその気になること。
というのが【星の意思】と【神竜ヴリトラ】のことというわけにもいかないシアン。
シアンがわざわざ直接やってきた理由。
先日からおこっている人間界での騒ぎ。
その報告はギルドに出向している身としてホンも報告をうけている。
ゆえにそれらのことを見極めるためにもやってきたのであろうくらいにしか思っていないホン。

…時として真実を知らないほうが幸せ…ということがある、という典型的な例なのであろう……

光と闇の楔　～実技大会開幕～（後書き）

たぶん次回でようやく本格的に反乱組織がでばる予定（打ち込み容量以内ならば）

光と闇の楔　～大会開催最中の暗躍～（前書き）

襲撃、までいきたかったけど容量的に次回に回します。
ちなみに副題の暗躍はラストのほうにちらっといれてみたり。

光と闇の楔　～大会開催最中の暗躍～

「なんか暇だな～」
「まあ、この時期は仕方ないだろ？」
「たしか水晶を買ったやつがいたよな？いいな～。俺も仕事さぼってみにいきて～！」
毎年恒例の娯楽。
しかし一月も仕事をさぼるわけにはいかない。
ゆえにそれぞれ交代せいでこの時期はそれぞれ仕事をもつものたちはこなしている。
その取り決めをきめたのは誰だったのか今では誰も覚えていないが。
「…ん？あれ？…おい、あれは！？」
いつもの暇でしかない見張り。
ふと視界の先に何やら土煙りのようなものが垣間見える。
そしてまた、必死に馬らしきものにしがみついている何かの影。
「ちっ！おい！ゾルディに誰かがおいかけられてるぞ！」
「あれは獣型！いそげっ！」
真っ黒い獣の形をした、どうみても狼のようなそうでないような、とにかく異形のもの。
姿形は狼なれど、その顔が前後についており、さらには足は八本ほど生えている。
この世界にそのような姿のものは本来存在していない。
そしてまた、そのような存在は大概、忌まわしい存在、【ゾルディ】と相場がきまっている。
そのような獣に追いかけられている馬にのっている人影。
こうしてはいられない。
「前方に獣型ゾルディ発見！被災者あり！要救護者の要請もとむ！」
ばたばたばた。
町の入口をまもっている警備隊員達。

彼らは町から少し離れた場所でおいかけられている人物を救助するためにと駆け出してゆく……

光と闇の楔　～大会開催最中の暗躍～

ふわり。
槍がつかれるたびに虚空を舞う。
まるであらかじめそこに攻撃がくるのがわかっているかのごとくに。
その姿はまるで舞いをまっているかのようにかろやかで、戦っているようには到底みえない。
おもわず観客席からも感嘆の声があがっており、その優雅さに見惚れているものも数知れず。
「殺気というか攻撃のときにでる気がまったく消されていないから。だから相手からしたらすぐさまに見極められるのは簡単なのよ？」
攻撃してきている相手ににこやかにそんな指摘をしているディア。
完全にかろやかにあしらわれている。
それが嫌でも身にしみる。
たしかにサガの対している少女はその気配すら周囲に溶け消えている。
気をぬけばその姿すら認識できなくなってしまうであろうほどに。
人族でここまで周囲に気配を同化できるものがいるなどと。
やはり世界は広い。
そう強くおもわずにはいられない。

自分よりもどうみても年下の少女にあっさりと攻撃をかわされ、あまつさえ戦いの仕方の指導をうけていればなおさらに。
まるで赤子の手のひらをかえすがごとくにことごとくに攻撃が受け流されている。
さらには自分が発した衝撃派がそのまま観客席との結界である壁につっこんでゆくこともしばしば。
術を放てばそれらの術もののみごとに対消滅するかのごとくにかきけされる。
この場においては精霊に願いをこう必要はない。
この場のみ限定ですべての術にかんする約束事が一時解除となっている。
術を使用するのは個人の自己責任。
たとえそれが自分の分不相応である術だとしてもこの場においては発動する。
それで当人が倒れたり、もしくは精神に異常をきたしたりしても大会開催側としては責任を問わない。
そのように参加するにあたり契約をひとまず交わしている。
それらを納得のうえに各自こういった戦闘がある場に参加しているのだから。
「さて…と。そろそろ決着をつけましょうか…ね？これに耐えられる、かしら？」
どうやら気配を読むことが苦手なのか目測だけで動いている節がある。
ディアのほうから攻撃をしかけるつもりはさらさらない。
ないがその本能の中にある感覚を引き出すことくらいならばこの場でしても問題ないであろう。
魂事態がもっている本能をただ引き出すだけなのだから別に何の問題もない。
時としてその魂がもっている本能に翻弄される輩もいるにはいるが。
しかし引き出す存在がディアである以上、そのようなことには絶対

にならない。
何よりも自分自身の【母】に逆らえる魂など本質的にいないのだから。

ふわり、と五体に感じるこの場においてはあるべきはずではない風。
そしてまた、
「な…こ…これは…！？」
自分は一体何をみているのか。
まったくもって理解不能。
何しろサガが今、目にしているのは自分が戦っている様子。
自分はたしかにそこにいるのに自分はここにいる、という不可解な現象。
眼下にみえているのも自分ならば、今ここ、戦いの場の上空にいるのもまた自分。
そのままぐいっとまるで見えない何かにひっぱられるようにどんどんと視界が遠ざかる。
ある程度まで達した時に周囲の景色が一瞬変化する。
さきほどまで無機質なまでの空間がひろがっていたのに今、目にはいるのは緑豊かな大地。
そして眼下にみえるのは……
「…な…父上…達？」
どうして自分達の一族が視えるのだろう。
しかも自分は上空からその様子を眺めている形になっている。
やがて再び体がどんどんと上空へとひっぱられていき、視界にやがて地平線がみえてくる。
眼下にみえるめまぐるしく変化してゆく生命の営み。
そして、地平線から立ち昇る太陽。
どれだけ自分達が何かをしようと、所詮は大地の一部にすぎない。
この光景をみていればその事実を嫌でもつきつけられる。
巨大な何かに対抗するのは、まるで広い海に小さな砂を投げいるか

のような行動だ、
と意味もなく理解する。
そう、なぜか漠然とストン、と理解したその刹那。
再び精神がぐっと引っ張られる感覚に陥り、
「…は！？」
次に気付いたときは先ほどまでの試合会場。
目の前にはにこやかな笑みをうかべているギルド協会学校の生徒がたたずんでいる。
「さてと。一番の基礎は漠然とだけど理解できたようだけど。
　なら、これが仕上げ、かしら…ね？」
くすり。
意味のわからないことをつぶやくとどうじ、その手をすっと上空にと掲げるディア。
次の瞬間。
何もなかったはずの試合会場の上空に無数の燃え盛る何か、が出現する。
それはまるで岩のようでありそうでないようであり。
炎らしきものをそれぞれがそれぞれに引き連れている。
「Ｌａ　ｍ？ｍｏｉｒｅ　ｄｅ　ａ　ｇｅｎ？ｓｅ（原初の記憶）」
サガの対戦相手であるディアがそうつぶやいたその刹那。
無数の炎の塊がそのまま上空よりいたるところへと降り注いでゆく。
次の瞬間。
サガの視界は再び切り替わり、その視界にはいるのは無数の燃え盛る何か、が
大地に絶えず降り注ぐ景色。
しかしこの大地には緑はなく、殺伐とした何もないまるで死した大地にしかみえないのはどういうわけか。
そしてそれらは地下より炎を誘発し…
「…噴火…？」

そうとしか視えない光景がサガの視界に飛び込んでくる。
これが意味することはサガはわからない。
そしてまた、再び視界が切り替わる。
次の視界においては緑豊かな大地に巨大な生物が闊歩している様子。
しかし再び空より燃え盛る巨大な岩が舞いおり、その衝撃により生物のことごとくがけちらされる。
そして、もう一つ、大地にむけて堕ちてくる巨大な塊。
その塊はまるでサガがそこにいるのをわかっているのかそのままサガのほうへむかっておちてくる。
「…なっ…う…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」
そのまま、サガはそのおちてきた【隕石】の衝突へと巻き込まれてゆく……

「え…ええと…何がおこったのでしょぅか？と、とりあえず、勝者、学園生徒！」
『わ～～～！！』
サガからしてみれば様々な様子を魅せられていたのだが、実際はそれらを視て感じていたのはサガのみ。
会場においては無数の光の塊が会場となっている試合場に降り注いでいたにすぎない。
それはまるで幻想的な光景で、そんな中、立ちすくんでいた対戦相手の堅竜族。
そしてひときわ光る大きな粒がはじけたとおもうと、次の瞬間。
立ちすくんでいた堅竜族の青年はその場に倒れこんだ。
観客達からすれば何がおこったのか理解不能。
しかし青年はぴくり、ともうごく気配がない。
そのまま、茫然としつつも、そのプロ根性をみせ、勝者をつげる進行係り。
しばし、会場内に何ともいえない歓声が広がってゆく……

もしも、精神感応ができるものがこの場にいたならば、堅竜族バルドが見られていた光景を知ることができたであろう。
彼がみていたのは惑星がかつて経験したことのある記憶。
【外】よりの脅威に耐えられる力をもっていなかったころの原初たる記憶。
無数に降り注いだ隕石はこの大地に様々な物質をもたらした。
それらは降り注いだ雨にまじり、やがて生命を生み出した。
そしてそれらの生命が進化し…そして再び、隕石によりその当時反映していた一つの種族を滅ぼした。
その壮大なる星の記憶。
その記憶の一部分。
そして、その記憶を垣間見れたのは、この会場においてはごくわずか。
数百人以上いるであろう観客席の中でその光景を精神感応で視れたものの魂は、
よりその身を自然と共有している存在達。
…つまり、エルフ族、といった自然にもっとも近しい存在達のみ……

今のは確かに星の記憶。
しかしどうしてそれがこの場で視えたのか。
それが彼らにはわからない。
この空間が星の記憶を共有している、とはおもえない。
かといって堅竜族がそのような記憶を持っている、とも言い難い。
ならば対していた少女が何らかの方法をとったことになる。
しかし、人が星の記憶をみせることができる、などきいたことがない。
自分達ですら自然と意識を一体化する成人の儀にてそのことを知りえるのだから。
「…あの少女に関しては調べてみる必要性があるのかもしれない……」

人がそのような力を擁したのならば問題が起こってくる。
もしかしたらかつてあったという悲劇すらおこしかねない。
そして何より、星の記憶は人の身にはあまりに大きすぎる。
その魂からして消滅するか呑まれかねない代物。
だからこそきにかかる。
そんな代物をたかが一人の少女が第三者にも視せられることができるのか…と。

「お姉様、なんだってあのひとにあの記憶みせたの？」
控室にもどってまっさきにヴリトラがディアにと問いかける。
わざわざ過去の記憶をみせる必要性はなかったとおもう。
しかもあの記憶は彼女、ヴリトラがまだ誕生する前。
たしか以前に見せてもらった記憶では【意思】の意識が意識として固定しかけたときの記憶だったはず。
その後にみえた、恐竜達と呼ばれていたらしい生物の絶滅時にはすでに意思は意思として固定されていたらしいが。
「ヴリちゃん。彼らの種族が何かわかってるわよね？」
そのことをきちんと理解していればあの光景もすぐに理解できるであろうに。
どうもこの子はそのあたりの臨機応変がいまだによく生かされていない。
だからこそ苦笑せずにはいられない。
そんなことを思いつつも、ヴリトラに対し苦笑しつつも問いかける。
「うん。堅竜族、でしょ？」
「そう、そして彼らの種族は何を元にして創った生命体？」
ディアの質問にようやくはっととある事実に気づいて目をまるくする。
そう。
かれら堅竜族はたしかにこの世界においてある生物が進化を遂げた種族ではあるが、

その種族事態はかつてこの大地にいきていた生物を【意思】がその記憶のままに再生させたにすぎない。
つまり……
「…あの隕石で絶滅した種族の実質的には子孫…？」
「正解」
だからこそあの光景をディアは視せた。
遺伝子とそして血に刻まれた絶滅の記憶はいまでも彼らの血に根強くのこっている。
そしてそれは彼らの本能をさらに強く呼び醒ますきっかけとなる。
きっかけとなった人類の愚かさによる地上における生命の死滅。
それまで人類が絶滅においやった種族だけでなくそれまで絶滅したすべての種族を【意思】はよみがえらせた。
元々、【意思】より誕生した種族である。
意思の記憶の中にはどのようにして誕生したのか、という記憶はしっかりとのこっている。
ゆえに…それらをすべて復元、した。
他の場所に移動させ自分達の罪とそして課せられた役目をある程度理解した【伝道師】達。
彼らを呼び戻し、それらを【管理】させ、そして神々など、新たな【理】を創りだしていった。
あるものはその時代のことをこう呼ぶ。
神話創世期、と。
「血の記憶を思い出すだけでも少しはかわってくるからね。
…さて、と。ヴリちゃんの番まで屋台でものぞきにいく？」
「いくっ！」
どちらにしても今この場にいる参加者をざっとみてもさほど期待した戦いは見られないのは確実。
ならばせっかくなので参加者達がこぞって出している店を覗いてみるのも悪くない。
そんなことを思いつつも、いまだに何が起こったのか理解できずに

唖然としている他の参加者をそのままに、
控室を後にしてゆくディアとヴリトラの姿がその場において見受けられてゆくのであった……

「……こ…こんなのないぃっ！」
こんなのどう対処しろ、というのだろうか。
母の言いつけなので仕方なしくこの部門にでることにした。
したが、本戦、しかもいきなり一回戦でかなり強い対戦相手にあたらなくてもいいであろうに。
「あらあら。火の気配を感じたわりには大したことないのねぇ？
まあまだ学生らしいし、仕方ないのかしら？ほら、次いくわよ？」
「って、まってくださいいっ！というか大陸屈指の火の支配者イフリーさんに私なんかが勝てるとでも！？」
ケレスの叫びは至極もっとも。
何しろ今、ケレスの相手をしているのは大陸全体に名をとどろかしている、別名、火の支配者。
噂では他の属性も使えるらしいが大概は火のみで何ゴトも切り抜けている屈指の実力の持ち主。
そんな彼女がどうしてこんな大会に参加しているかといえば理由は至って単純明快。
「だけど防ぐことくらいはできないと？あなたからはサラ様の気配もしてることだから。
おそらくサラ様の加護をうけているんでしょう？」
相手の纏っている気配でどの精霊の加護をうけているのか瞬時に把握する。
それこそが彼女が支配者、とも呼ばれているゆえん。
よりその感性を自然に近づけさせ相手の気配にも同調させる。
それが彼女の特性。

橙色の髪に水色の瞳。
術を放つたびにその長い髪が爆風になびきふわり、とたなびく。
「ただうけてるだけですっ！実戦経験なんてありません～～！！」
ただ、加護をうけているからといっていきなり攻撃魔法。
しかも【二重円舞（ダ～ルロンド）】を放ってくるとは信じられない。
炎がいくつもの円舞を描くようにそれらが二重に重なり、しかもそれが複数同時に対象者に炸裂する、という代物。
どう考えてもたかが学生にかける術ではない。
それでもどうにかケレスが無事なのは咄嗟に水の結界を張ったからに他ならない。
これぱかりは、湖の精霊というかなり力のある精霊の加護であることに感謝してもしきれない。
おそらくそのあたりにいる普通の水の精霊だと瞬く間にこの術の力に結界は破壊されてしまっていたであろう。
それを防いだことからも、あの精霊がかなり実力のある精霊であった、といまさらながらに納得してしまう。
まあ、固有名詞がある精霊、ということでかなりの実力のある精霊だ、というのは精霊界においては常識なのだが。
そのあたりの常識は人間界などではあまり知られていない。
「さ。私をたのしませてね？界対抗戦になるまで私、暇なのよ～」
「暇だからってただの生徒にそんな技つかってこないでくださいいっ～！！」
そんな光景をただただ観客達はといえば、
「やれ、姉ちゃんがんばれ～！」
「お～！支配者なんかにまけるな～！」
「姉ちゃんの大穴に俺はかけたんだっ！」
何とも無責任極まりない歓声がケレスにむけて放たれていたりする。
この大会での観客たちの何よりの娯楽。
それは、対戦者達がどちらが勝つか、という掛けごと。

うまくすればこの場にて一攫千金。
ちなみにこの掛け、ギルドが主催しているのできちんと配分などもなされることから便利性が高い。
戦いをみて楽しめ、さらには一攫千金がねらえるというこの大会。
…ゆえに、毎年毎年、人気が陰るどころか、年に一度だけでなく数回やってはどうか？
という話題がでているのもまた事実……
戦闘部門、ＧＸエリアにおいて、しばしケレスの何ともいえない悲鳴が響き渡ってゆく……

「それでは、ＳＧエリア、二十五戦目、開始ですっ！」
いまだに一回戦の中の二十五回目。
ちなみに一回戦の戦いの総数はこのエリアのみで二百組にあたる。
そして勝ち抜いた百組が二回戦に勝ちのぼり、さらに人数がしぼられてゆき、
最終的にエリアごとの優勝者がきまり、そして各エリア対抗の戦いとなる。
「おおっと！これまた学生参加だぁ！対するは、なぁぁんとエルフ族っ！」
『わっ！』
その言葉にこの場にいる全員の観客たちが一斉に歓喜の声をだす。
エルフ族といえばほぼすべての属性に通じており、また個人個人もかなりの力を有している、ときく。
もともと戦闘に関しては静かな種族であるものの、中にはやはり戦いをこのむものもいる。
そういう存在達はこういう大会にときたま参加してくる。
ゆえに、この大会の優勝決定戦は
毎年かなり一般人の目からしてまったく付いて行かれない状況になることもしばしば。

その時には、時空の神クロノスの力を借りて、その様子をゆっくりと再生することにより、
試合の様子を他の存在達にもわかるようにしているのだが。
エルフ族がその特性における長寿であり再生能力がたかく魔力容量も多いことから術が豊富。
という特性を踏まえて、ときおり彼らと戦うためにこっそりと【深界】のものがこの大会に参加することもある。
もっともこの大会における基本事項はすべての界における存在はみな平等。
ということなのでどの界にぞくしていても大会中はまったくもって問題ない。
ときおり大会参加者達が試合をすることにより会場そのものが消失、もしくは消し飛ぶこともしばしば。
しかしそれでも誰も死ぬことがない、死ねないのだから誰も問題視などしていない。
生きているかぎり、様々なストレスなどもある。
ここはそういうストレス発散の場にもかなり最適な場、ともいえよう。
何しろどんなことをしても相手も、また自分も絶対に死ねない、のだから。
そしてまた、新しい術を試そうとしている存在にとってもかなり貴重な場。
その威力を実際に試すことができる。
その術の力に自分の肉体がたえられるかどうか、この場ならば死を恐れずに実験することも可能。
「へ～。人間界の修学過程検証実技大会にしては、少しは私も楽しめる、かな？」
相手がエルフ族。
しかも視た限りどうやら百年やそこらの若いエルフではなく二、三百歳程度といったところか。

ゆえに少しばかり楽しめそう、と相手を確認したヴリトラの顔にもわず笑みが漏れる。

「先ほどの控室から感じていた、あなた方の気配の違和感。今ここではっきりとさせてもらいますっ！」

あの場においてあれほど完全に周囲の気配と同化していた目の前の少女ともう一人の少女。

エルフである自分にすらその気配を感じ取ることができなかった。

水の集落において次期長といわれている自分が感じ取れない、などと信じられない。

ゆえに対戦相手がその問題の人物の一人であることをしったときにはこれぞ神の恵み、そうおもった。

おそらくは目の前の人物は天界関係者かその系統のはず。

エルフ族である自分の目をごまかせるのはそれくらいしかおもいつかない。

よもや魔界の存在がたかが人間界の大会に参加している、とは到底思えない。

…中には人が血を流して騒ぎ立てる様子が好きなのでときおり参加する悪魔はいるらしいが。

「うん。水の集落の後継者、か。うん、相手はわるくない。なら少しばかり楽しませてもらいましょうか？」

自らどの集落出身、とは名乗っていない。

しかし目の前の対峙している少女は自分をみただけでそう即座に判断したようである。

エルフ族の集落に関しては見た目では絶対にわからない。

よくいえばその身にまとっている加護の違い、といったところであろう。

加護の属性により、様々な集落が存在している。

一つの属性の集落もあれば複数の加護の集落もある。

それはその集落が存在している場所の自然状態にもよる事情。

「La cause de mon nom Ç' est un tu souhait……」
――我が名の元、汝望みのままに
ヴリトラがそうつぶやいたその刹那。
一瞬会場とそして観客席の間に展開されている結界がぶれる。
しかしそのブレは一瞬のことでその場にいた誰も…約一名を除き誰も気づかない。
「さて。楽しみましょうか？どこまで私をたのしませてくれる？水の民？」
ふふ。
最近まったく相手にしてくれる輩がすくなくなってきていた。
少しは楽しませてもらえそう。
水の民ならば応用はかなりきくはず。
しかもみたところ、時期集落の頭首のよう。
「……あなた、やはり普通の人間、ではありませんね？…何もの、です？」
「さあ？それもあててみるのも、長の役割、じゃないのかしら？ね？」
見た目は十歳程度の女の子。
しかし本能が告げている。
人間ではない、別の何かだ、と。
それが何か、はわからない。
気配が完全にごまかされている。
このようなことができるのは、一部の一族、もしくは天界においても特定の地位にあるものたちから。
しかも、自分をみただけで、時期長、と見抜いている。
つまりは纏っている加護とその力の濃さを瞬時に見抜いていることになる。
油断はできない。

「では…始めから、全力でいかせていただきますっ！」
このままじっとしていても相手の正体も何もわからない。
何よりも、自分を認めてもらうためには他界にも実力を示す必要性がある。
そのためにこの大会に参加した。
今の自分のこの地上界においての力を試す場、として。
初回戦から正体不明の、しかもかなりの実力者とおもわしき存在にあたったのは不運なのかそれとも幸運なのか。

水の民の種族、時期長となる少女の名は【リンクル】。
彼女は知らない。
目の前の少女が神竜ヴリトラである、ということを。
エルフ族にとって、竜族は自然にもっとも近しいというか自然そのものたる存在。
ゆえに竜族は神にも等しきもの。
そんな竜族の頂点にたつ存在が相手であるなど…当然、夢にもおもっていない……

「……まさか、ここまですんなりとうまくいく、とは」
かつて手にいれた品がこうもうまく起動するとは。
ゆえにおもらず口元に笑みがこぼれる。
始めてこの品を手にいれたときにはその効果が信じられなかった。
強制的に門を通らずに【神力】のみで他界を渡る品。
その作成者の性格をあらわしているのか、それを使用してもその波動に気づかれることはない。
否、気づかれないような仕組みになっている、というべきか。
門番であるケルベロスは眠らせた。

かの存在は歌に弱い。
ゆえにあの場にセイレーンをつれていっている。
なのでしばらくはまったくもって問題はない。
そして、管理人はといえば今はおそらく兄達と連絡をとるために監視塔にはいない。
「さて……例の魂をはやく見つけてここからでないと…自分の命も危険、だな」
この場に長居すればそのまま肉体はもとより魂も朽ち果ててしまう。
それほどまでにこの場は本来ならばとても危険な場所。
しかし目的のためにはこれはどうしても必要不可欠。
なぜならば……
「……みつけた。…これが、邪神、ロキの魂……」
この冥界の王であるヘルが大切に守りぬいているもの。
それは彼女の父である邪神ロキの魂。
彼女が冥界の主になったのはひとえに父親のため、といっても過言でない。
これをこの場から奪い去る。
そのことで彼女は自ら動くであろう。
その身がうごくたびに周囲に腐敗をまき散らすこととなっても。
それこそが自分達のもくろみ。
てれきれば三兄弟達も自分達の思惑通りにうごいてくれればなお成功したも同然。
一番いいのは思惑通りに三兄弟が動いてくれることだが、それ以外でも冥界の番人が動く。
それだけでも他界には十分な脅威となる。
「…よもや大会中にこのようなことをしでかすものがいる、とは到底おもえまい……」
冥界にもギルド協会による大会はある。
そして主であるからこそその役割を冥界の王はになっている。
その隙をついたこの作戦。

この作戦が凶とでるか、吉、とでるかそれは今は誰にもわからない

――

光と闇の楔　～大会開催最中の暗躍～（後書き）

ちなみに、水の民の時期長の名前は、水星に存在しているリンクルリッジ断崖（線構造）を元にしています。

光と闇の楔　～予想外の襲撃～（前書き）

…何話でこれ、おわるんだろう？（脳内反復は約一時間ちょいで完結）

のんびりまったり続きです（読んでくださっている方々に感謝です＼(^o^)／）

光と闇の楔　～予想外の襲撃～

「【Ａｒｒｏｓｅｚ　ｓｉｎｔｅｒ（水華）】。【Ｕｎ　ｐｈ？ｎｉｘ　ｃｈｉｎｏｉｓ（火凰）】、はっ！」

リンクルがそう叫ぶとともに、その左肩上空に花の形をした水の塊。

そして右肩上空に炎を纏った鳥らしきものが出現する。

それらの熱気にあおられ、リンクルの髪がゆらゆらとたなびき、

その瞳は炎を映し出し、紅く染まっているように垣間見える。

「対消滅、か。だけど、甘いっ！」

まったく逆の性質をもつ属性を同時に放つことにより、それらが炸裂した刹那、

対象物に対消滅という現象がおこることがある。

しかし逆の性質をもっていれば火も水もどちらも消失するようにおもえなくもないが、

それぞれがまったく同じ質量等をもっていれば同時に発現することは可能。

つまり、水の中でも炎が燃え盛り、火の中でも水が存在しているように。

「…な！？」

目の前の少女がそう叫ぶと同時、

刹那、リンクルが出現させたそれぞれの術形式の真上。

そこに一つのちょっとした小さな『何か』が出現する。

「そんな……フェスグーン（炎喰樹）！？」

霊獣界に生息し、炎を主食としている樹の生命体。

かの樹には意思があり、ゆえにそれらを従えることも可能。

しかし一定以上の力がなければそれらを使役することなど絶対にで

きない。
しかも…その上空にあからさまに、何か開かれた扉、のようなものが垣間見える。
それが意味することは、すなわち……
「【次元の守護者】にまで自在に干渉できるなんて、あなたはいったい何ものなんですかっ！？」
各界を隔てる管理をかねている【門】。
普通はありえない。
たかが一つの生命体が【門】に、しかも詠唱も【楔の歌】すら放たずに一時的にでも門を開くなど。
「あら？ただ、【窓】を開いただけで【門】はあまりこれは関係ないけど」
そう、門が管理している窓の一つを開いて、
ここの空間と樹が生息している空間を一時ほど繋げただけ。
ヴリトラにとってはいともたやすい。
しかし…普通、そのようなことができる、とは誰も夢にもおもわない。
そもそも、【門】が無数に【窓】をも管理している、と知っているものなどごくわずか、なのだから……
「おおっと！？何やら両選手、いいあらそっております！これは期待できそうだぁぁっ！」
『わぁ～～～！！』
目の前で繰り広げられている異常性。
その事実に気づくことなく観客たちは進行係りの声をうけさらなる盛り上がりをみせてゆく。
…大会は、まだ始まったばかり……

「あ～あ、ほんと、暇だな……」

毎年恒例の娯楽に参加できるものならばとっくにしている。

そもそも普通の一般人があの大会の予選に勝ち抜けるはずもない。

予選だけならばお祭り感覚で受けられることはうけられるが。

しかしそれでも参加費用はとられるわけで、結果として無駄な出費はしたくない。

というのが大概の一般人の感覚。

ある程度大きな町や村などでは集会場に大会の様子を閲覧するための大型水晶が設置されており、

そこにあつまって大会の様子を観戦することもできるらしいが。

しかし小さな村などではそういった資金があるはずもなく。

かといって各自で個人用観戦するために水晶珠を購入するにしても、

その金額ははてしない。

金水晶貨（ルドクリスタ）一枚。

一番小さな水晶珠にすれば白水晶貨（ホワクリスタ）五枚で購入できるが、

やはり小さな画面でみるよりは大きな画面でみたほうがはるかによい。

そもそも小さな画面で大会の様子をみてもたしかに面白みがかけている。

大会における熱気というかそういったものが小さな映像ではなかなか伝わってこない。

大概は普通の水晶珠と同じ大きさの品が人気ではあるのだが。

それでも金額的に黒水晶貨（ラクリスタ）五枚、という大金をようする。

まあ、一度買えば毎年同じ水晶でことたりるのだから先行投資、といえばそれまでなのだが。

先日、村の近くに発生したらしきゾルディから逃れていた旅人を保護した。
その結果、またいつなんどき発生するともわからないということで急遽見張り番が増やされた。
「しかし、偶然もあるんだなぁ」
「だよなぁ」
いまだに襲われていた旅人は目をさまさないものの、
本日やってきた旅の商人がいうには、別の村でも旅人がゾルディに襲われ、保護されているとのこと。
同時期にそのような出来事が発生するなどいままではっきりいってきいたことがない。
それも近距離で。
この時期、完全に腕の覚えるあのものはみな大会本戦に参加している。
予選落ちしたつわもの達はたしかに残ってはいるものの、
彼らは自分達の技を磨くべく、より正確に映像が見れる場所へと移動している。
つまりは、巨大な水晶映像を擁している王都、もしくは大都市へ。
ゆえに小さな町や村には今現在、そこそこの実力をもつものしか滞在していないのも事実。
そんな中で同時にゾルディの被害が発生したのはこれは偶然なのか、それとも何かの意図があるのか。
それは見張りをしている彼ら村人にはわからない。
「ん？」
「どうかしたのか？」
そんな会話をしている最中、ふと何かに気付いたようにとある方向をみて首をかしげる見張りの一人。
「いや、何かひかったような…ちょっといってみる」
ふと視界の端に何かがひかったようにみえた。
位置的にはさほど離れていない。

ゆえにそちらのほうに足をむけ、光ったであろう場所をくまなくさがす。
「…なんだ？これ？」
ふとそこに、鈍く輝いているかのような石らしきものをみつけ思わずつぶやく。
手にしてみれば太陽の光に反射しきらきらと鈍くその石は輝きをます。
一種の宝石のようにもみえるがこのような宝石は見たこともきいたこともない。
そもそも、虹色の…しかも黒い虹色に光る石、などきいたこともない。
「…まあ、とりあえずひろっとくか」
見たことがないにしても、珍しい品には違いない。
もしかしたら高くうれるかもしれないし、売れなくても子供のお土産くらいにはなるであろう。
そう判断し、彼はその石をそのまま服のポケットの中にとしまいこむ。
「あ～あ。ほんと、何ごともないというのはいいが暇だな～」
いいつつ再び大きく背伸びをする見張り役の村人。
しかし、彼は知るよしもない。
今、彼が手にした【石】が今後、どういう結果をもたらすか、という残酷な事実を……

「……な！？」
おかしい。
戻ってすぐにその違和感に気がついた。
どうして…どうして、どうして、どうして！？
ここにはしっかりと結界をほどこしていた。
ここに入れるのは血の連なった兄弟、もしくはそれ以上の存在のみ

のはず。
なのに……
「お父様！どこっ！？」
悲鳴に近い声はただただ深遠たる闇の空間にと呑みこまれてゆく。
この中心に彼女がもっとも敬愛している父親が眠っていた。
怒りに染まったその魂をこの場で癒すために。
なのにその眠っていたはずの魂が保護されていたはずの水晶ごとなくなっている。
ありえない。
だけども…これが現実。
「…まさか…お兄様のほうは！？」
可能性として考えられること。
魂を手にし…そしてその魂のなくなった抜け殻の器を悪用しようとする輩がいる可能性。
その可能性におもいあたっていたからこそ、三人で話し合い、それぞれが両親を見守ることにした。
長男が魂の抜けた父親の肉体を、次男が傷つき心を閉じてしまった母親を。
そして末っ子であり長女である自分が父親の魂を。
ここで迷っていてもどうにもならない。
ここから父親の魂が持ち出された、これはこの場に魂がないことから紛れもない事実。
「お父様の目覚めはまだ感じられないもの……」
目覚めれば自分達三兄妹には絶対にわかる。
両親との繋がりは浅くない、と自覚している。
この地、否、この界の責任者でもあるが彼女とて一人の親を思う娘にすぎない。
「…ハデスにひとまずこの場を任せて、私はお父様の魂を絶対にみつけだすっ！」
彼女の側近をつとめており、またかの戦争の責任を感じ、彼女の側

近を申し出たハデス。
まあ確かに、弟が見境なく女性に手をだしたせいで戦いになってしまったのだから
兄として申し訳ない気持ちになるもうなづける。
彼女の父親が完全に目をさますまで、彼女達家族が再び安心して暮らせるようになるまで。
それまで絶対的な忠誠を自らに誓っている冥界の統治者。
冥界での一番の権力をもっているのは他ならない冥界の監視者ヘル。
ヘルが監視者ならばハデスは冥界を統治している、といって過言でない。
冥界中心に位置する、ヘルの宮殿、エリューズニル。
その玉座たる間の奥にある特殊な空間。
そここそがヘルがすべてをかけても守りたい存在が安置されている場所。
しかしその場に今、もっとも愛する存在の魂はない。
透き通るまでの白さをもつ半身と青白く透き通った半身をもち、やわらかな髪質をもつ見た目十代そこそこの少女。
「ヴァルトニルにいるリルお兄様に報告にいかないと…っ！」
深海の孤島にいるヨムお兄様に報告をしたらまちがいなく自分も探しに行く、といいかねない。
それでは困る。
兄には母をしっかりと守ってもらわなければならない。
もしも、父を悪用しようとしている輩がいるのならば、まちがいなく力のない母を狙ってくるのは明白。
だからこそ伝えない。
否、伝えられない。
そんなことをおもいつつも、きっと涙をふきつつもその場をあとにするヘル。
ヨムンガルドの傍にいれば【アングルホダ（母）】の安全は確実に保証される。

何しろヨムンガルドは母を守るためにその体内に母を保護し、見守っているのだから……

「…かんべんしてくれ……」

がくり。

おもわずその場にて目の前の執務用の机につっぷしてしまうのはおそらく仕方がない。

それでなくても終わらない書類の束。

この時期、ほとんどのものが大会観戦のためにほとんど有給休暇をとっている。

それでも世界運営と監視に支障をきたすので一応毎年ごとに区分けして休みがとれるようになっている。

そんな中、はいってきた報告、それはこの界においては滅多とないこと。

「…というか、何か？この神界でいきなりゾルディ襲撃が多発…というわけか？」

報告間違い、聞き間違いであったほしい。

切実に。

しかもある程度の力を擁していることから察するにまちがいなく、この界の感情で誕生してしまった類のものらしい。

「…ハスター・ホテップか……」

それらを意図的に生み出せる勢力。

それはかの勢力しか思いつかない。

「どうなさいますか？ヴィシヌ様？」

秩序と繁栄を司る神であるヴィシヌ。

彼はまた男であり、女でもある。

どちらでもなれる神でもあり、またこの天界の秩序を守るべく警備隊の上司をもかねている。

先の一件といい、どうやら本格的に動き出しているらしき反組織。

大会が執り行われている空間まで入り込むことは絶対にできないであろうが、それでも油断は禁物。
「とにかく。今の時期が時期だ。この手薄な時期を狙って何かしかけている可能性がある。
　また、ゾルディに追われていたという天界人に対しても監視を強化するように」
何か話しができすぎている。
同時に、しかも同時期に幾多もの場所でゾルディが多発し、
さらにはそれに追われている天界人がいる、などと。
各町などにおいては追われていた天界人を保護したようであるが。
あまりにも話しがうますぎる。
下手をすればそれこそが敵の思うつぼ、という可能性もある。
「それと、何か不審な人物、もしくは不審な品があれば随時報告するように徹底づけるように！」
以前、ちょっとした小さな動物が実は敵の放った間者で大変な思いをしたことを思い出す。
まああのときばかりは敵にまわった仲間である彼にたいして心底同情したのだが。
まあ、彼曰くの腐りきったやつらを消滅させてやる！
という思いはヴィシヌとてわからなくもない。
ないが彼とて与えられている役目はそのまま彼の存在意義を指し示している。
だからこそ秩序を保つためにはときとして非情にならなければならないことも理解している。
「…は～……なんでこう次から次へとやっかいなことがおこるかな……」
それでなくても、つい先日、地上界に道が開いたのをうけてアテナが現状を確認しにいった。
そのときに界渡りのリュカにであったらしく、どうやら魔界側も何やら動きがあるらしい。

そう報告はうけていた。
その後、天界と魔界の勢力が結び付いた、という報告もうけている。
「…混合会議、テミス王国の提案通り、これは早めに開催したほうがいい…かもな」
もしも開催するのならば、意表をついて大会最中におこなったほうがいいであろう。
何しろ各界の代表者が一か所に集うというようなことは滅多とおこらない。
ゆえに混乱をきたしかねない。
しかし、この時期ならばほとんどの存在がギルド主催の大会に目をむけている。
目くらましにはちょうどいい。
お祭り騒ぎとただの会議。
どちらにしてもその興味はお祭り騒ぎのほうへとむけられる。
「とりあえずは、ゼウス様に相談…だな」
そもそも、ロキ様がいればこんな面倒なことにならないとおもうんだが。
というか、ゼウス様の女好きが全面的に悪いっ！
いくら年月がたとうともいまだにそのクセ…あの一件以後はかなりナリを潜めてはいるが。
どうしてもそうおもわずにはいられない。
そもそも、ロキが神界にいたときには、それぞれの部署にわたり気がむけば、
役にたつ魔法の品々を作り出してくれた。
それがどれほど貴重で重宝がられていたことか。
だからこそ、戦争のきっかけになったロキより、そのきっかけをつくりだしたゼウスを恨む声のほうが、
天界の中では圧倒的に多い。
というか百人にきけばまず百人とも悪いのはゼウス、と答えるであろう。

「本当ならばティアマト様がおられれば一番いいんだがなぁ～……」
しかし、当の補佐官は今現在、王とともに行方知れず。
おそらく王至上主義の補佐官のこと。
王とともに行動しているのだろう、というのは上層部達の一致した意見。
そしてどうやらそれは魔界においても同じことが起こっているらしい。
「ほんと、光と闇は表裏一体、というけど。
　ここまで同じようなことがおこっているとは…なんだかな…だよな……」
先ほどはいってきた報告によれば、
魔界も同じように悪意あるゾルディの被害をうけそうになった地域があるらしい。
とはいえ基本、魔界に住まう存在達はどちらかといえば戦闘好き。
中には違う考えの存在も多々といるが。
今の時期は大会によってお祭り騒ぎ状態になつているところのこの騒ぎ。
全体的になぜだかゾルディ誕生もイベントさながら状態で盛り上がっているらしい。
「…なんだかな～……」
ぽそり、とつぶやくヴィシヌの声はただただむなしく彼の執務室の中へと溶け消えてゆく……

「…なっ…！？」
そこで声をあげなかったことを自分自身でほめたい。
切実に。
そこで叫び声をあげずにとどまった彼を不審に思い視線をむけるものはこの場にはいない。
否、この場には彼しかいないがゆえに助かった、というべきか。

学校に通うことになった以上、おそらくどこかに参加している可能性は否定しきれなかったが。
しかし…しかしである。
こんな一般参加もありえる大会で、いきなり【窓】を開き、さらには霊獣界にしか生息していない、
捕食樹・【フェスグーン（炎喰樹）】を出現させるとは。
何をかんがえているんですか！？あのかたはっ！！
ゆえにその場で思わず頭をかかえてしまう。
映し出されている映像をみてみれば、樹から伸びた蔓によりエルフの少女はその霊力を吸い取られ…
正確にいうならば、樹がもつ特性からエルフの霊力がことごとく喰われているに過ぎない。
霊力は精霊力を駆使するのに必要な力であり、また精霊力の威力は霊力の威力と比例する。
そしてまた、フェスグーン（炎喰樹）の糧は【炎】。
そしてエルフの少女、リンクルはその火の属性と水の属性を持ち合わせていた。
はっきりいえば樹にとってはちょうどいい【餌】でしかない。
そのまま霊力を吸い取られ、その場にばたり、と倒れるエルフの参加者。
そして、
『おおっと！対戦相手がたおれたぁっ！これぞまさに番狂わせ！
　エルフ族にかったのはなんと学生の小さな少女だぁぁっ！』
『わぁぁっ！』
戦闘部門にとあたる、とあるエリアにてそんな会話がなされている光景が映し出されている。
「…ヴリトラ様…す…すこしは周りの目をきにしてくださいっ！！」
思わず誰にも気づかれないように、それでも心の底から叫ぶ青年…シアンは間違っていない。
絶対に。

そのまま倒れた参加者が回収保護され、次なる試合が始まる光景が映し出される。

「……参加者の控室にいくのは無理がありますし…かといって……」

かといって影を送り込むという真似をすればヴリトラの正体を周囲にばらしてしまうことに他ならない。

何しろ彼が動く、そのこと自体が彼以上の実力、もしくは地位にあるということを物語っている。

「…とりあえず、あちらからの転移道…ＳＧエリア、だったか？そこの道にいくとするか……」

かの性格を考えればあのままあの場でおとなしくしておく、とはおもえない。

その気になればすべてを見通すことは可能であろうが、

おそらく【ここ】にやってくる可能性のほうが高い。

入れ違いにならないためにも、【道】がある場所にいたほうがいいであろう。

そもそも、ここで逃せばまたいつその姿を捉えることができるか判らない。

どこまでいっても気苦労を自らしょってしまうのは彼の性格ゆえ、というべきか。

そんなことをおもいつつも、足を戦闘部門エリアからの転移道がある方向へとむけてゆくシアン。

すれ違う存在達がシアンをしっているものはほとんどものが敬意を記し頭をさげていたりするのだが。

それはもういつものこと。

まったくいにかいすることなく、シアンはその場…【観戦広間】を後にしてゆく……

観戦広間。

それはこの空間においてすべての大会の様子を意識するだけで【特定の場】のみを視ることのできる空間。

意識すればすべての大会の様子を同時に虚空に映し出すことも可能。

しかしここでこの場を利用しているものは…あまりいない。
なぜならばこの場にいるのはほとんどここに勤めているものであり、観戦する暇があれば仕事が優先となる。
そして…ここに入れる一般人ははっきりいってまずいない。
ゆえに、ここを利用できるのはごくごく限られた地位にいるものたちのみ。
そのこともあり、この場はあまり一般的にも知られていない……

「ふんっ！あまいっ！」
『おおお！でました！さすがです！やはり戦いはこうでなくてはっ！』
わっとした歓声が周囲にとコダマする。
無数に姿を現した対戦相手。
それらを手を一戦させ一撃のもとに撃退する。
周囲には肉の欠片と血が飛び散っているものの、それらはまたたくまに会場の中に溶け消える。
「下らん技をつかいおって。もっと我をたのしませんか！」
せっかく目を盗んで大会予選、そして本戦にまでやってきたのである。
楽しめなければ意味がない。
魔神シトリー。
魔界における【地獄部】を管理している、魔界における権力者の一人。
よもやそんな高位なる存在が一般参加に交じって参加しているなど誰がそうぞうできようか。
しかし、ここ魔界に関してはこういうことはよくあること。
つまりつわもの、もしくは暇つぶしで戦いたい。
とおもっている魔人、魔王や公爵達は数知れず。

ゆえにギルド協会が主催するこの大会は毎回、毎回ものすごいことになっている。
当然、魔界に位置しているギルド協会学校に所属している生徒も世間の厳しさを身をもって経験するハメになっている。
しかしさすがに本名での参加は周囲に畏縮させたり畏怖させたりする可能性があることから、
実力あるものたちは大概偽名、もしくは別名をもちいて参加している。
彼らのような実力のある存在はそれぞれいくつも名前を擁している。
それらは勝手につけられたものもあれば、その役目柄つけられたものもある。
彼の登録している名前は【ビトル】。
ちなみに彼は【獄主十二位階】という地位にあり、
一般的には地獄をおさめる君主の一人、ともいわれている。
彼が擁している軍団はおよそ六十ほど。
先ほど脳裏に念派にて報告がのぼってきたがそれはさほど重要なことではない。
そもそも、地獄でゾルディが多発するのは日常的なこと。
だから気にしない。
今はただ、
「目の前の遊戯をたのしむのみっ！」
きっぱりといいきり、そのまま大会遊戯に身をまかせる。
…彼の部下からしてはそれはそれでたまったものではないのであろう。
…が、それが魔界における今現在の現実…もとい、現状。
何しろ仕事を部下に押し付けて参加している魔王、
もしくは公爵にいたる存在は多々といるのだから……

「う…あ、あれ？ここは……」
ぼんやりと意識が浮上する。
「あ、気がつかれましたか？」
どうやらどこかに寝かされているらしい。
目にはいるのはどこまでも真っ白い無機質な空間。
そこにいくつも並んでいる真っ白いベット。
どこまでもつづくのではないか、とおもわれるそのベットにはほぼ誰かが寝ているようにも垣間見える。
「あなたは試合にまけて死に…もとい、気絶してここに運び込まれました」
いや、今、死にました、っていいかけたよね？この目の前にいる人。
そう思わず内心おもうがしかしそのことに対して突っ込みする気力もない。
その背に二枚の真っ白い鳥のような羽をはやしていることから、鳳翼族なのか、
はたまた天使の一人なのかそれはよくわからない。
どちらにしても天界、そして精霊界関係の種族であることは間違いない。
「そっか…やっぱり負けたのかぁ～……」
そもそも初戦からあんな強い相手とあたるとはおもわなかった。
それでも最後の記憶は炎に包まれて何か一撃を叩き込まれたところでおわっている。
おそらくはどうにかかの炎による攻撃は耐えきったのであろう。
それだけでも今現在の水の加護がどこまでいきるのか、という目安になった、とおもうしかない。
「…あんな対戦相手だったから、お母様…お仕置きしてこないわよ…ね？」
負けた、というのにさほど悔しくはないが、というかあんな相手に勝てたらそれこそすごい。
寝ている少女…ケレスが気になるのは、彼女の母の反応。

「…どうにか、お仕置きだけはありませんように……」
そう願いつつも、ふとディア達の結果もきになってくる。
まあ、ディアもそしてヴーリも絶対に負ける、とは到底思えない。
しかしディアに関してはこの場でどこまで【精霊に願う】という行為が通用するのかケレスとて不明。
しかし、なぜだか絶対に負けるわけがない。
というどこか不思議な確信がある。
「…SGエリアの勝敗結果…あとでみにいこっと……」
対戦相手がわかればそれを調べる手段はある。
それはサービスカウンター、というところで調べてもらうことは可能。
起き上がろうとするものの、体の節々がいたくておもうようにはおきあがれない。
「あ、無理しないでくださいね。一応、あばら骨がほとんど折れてましたから」
「あ…あはは……」
なんだかその怪我具合は教えてほしくなかった。
ゆえにおもわずその場でから笑いを上げるケレス。
この大会で怪我、もしくは再起不能状態に陥った存在、もしくは一度死んだものは必ずしも、
今のケレスと同じような感情を抱くことになる。

それらの感情を糧により強くなること、それはこの大会のもつ目的の中の一つ……

光と闇の楔　～予想外の襲撃～（後書き）

今回はようやくだせた、邪神ロキ＆アングルホダの三兄妹さんたちＶ
名前のみは神話をもとに伝道師達がつくったり、家族設定とか
もそのように意思がしてはいます

光と闇の楔　～決勝戦と【真】本戦へ～（前書き）

今回はヴリトラとディアとの戦いですが、何度も明記してますが、戦いの光景はものすっごくオブラートに包んで表現してあります。

『あ…貴方様は何を考えておられるんですかぁぁっ！！』
きぃんっ。
と頭にのみ響く念波での会話。
道を移動し中央の建物にまでやってきたディアとヴリトラ。
道を移動したその先。
そこになぜか腕をくんだ見覚えのある黒髪の青年がたたずんでおり、二人…というかヴリトラの姿をみるなりいきなりそんな念波での言葉を飛ばしてくる。
それもピンポイントで。
この場で叫ばないのは彼の理性がまだ正気であったがゆえであろう。
この場で彼が【あなたさま】など叫べばおのずと目の前の少女達が彼より上のもの。
つまりとてつもない地位にいる存在達である、と容易に推測は可能となる。
「げっ。し…シアン？」
その姿をみておもわずディアの背後にかくれるヴリトラ。
「あ～。そういえばヴリちゃんは何もいわずに出てきてたんだったわねぇ。
　それはそうと、久しぶり。シアン。元気そうね？」
そんなヴリトラの様子に苦笑しつつも、目の前にいる青年にと語りかけるディア。
「ってぇぇ！？お、お久しぶりです『…意思様…ですよね？』」
気配はかなり抑えていれどもその【気】は忘れようがない。
「私以外の誰だっていうの？」

「……は～…納得です。それでですか。すでに噂になってますよ……」
　このたびの大会で星の記憶をみせてた参加者がいるって……」
この場にいる係り員達はほとんど精神感応でその光景を視ることもでき、
また各エリアを監視している係りのものも当然、試合の光景の真実を視ていたこととなる。
ゆえに、ディアがおこなった【星の記憶】に関しては、すでに噂の的となっている。
そもそもこの場にいることから彼女達が普通の人間ではない、と物語っているようなものなのだが。
しかし認識されないように周囲の空間をごまかしているがためにそんな彼らの会話に気づくものはいない。
「あまり噂になるようなら記憶けしときましょうかね？」
「…さらっといわないでくださいまし……」
おもいっきりさらっとしでかしそうでかなり怖い。
その気になれば何でもできる、とわかっているからこそなおさらに。
それでもあまり畏怖の感情がないのは、彼もまた幼きころに彼女とあっているからであろう。
どちらかといえば母を慕う慈母の心のほうがはるかに強い。
「それより。シアン、あなたがここにいる、というのは何か用事があったんじゃないの？」
どうやらこのまま話していても終わりそうにない。
ゆえに、目の前にいるシアン…竜族の長たる彼にと問いかけるディア。
しばし、その場において誰にも聞かれないように結界をほどこしつつ、
彼らの会話が繰り広げられてゆく……

本戦へ～

『ついにやってきました、ＳＧエリア、決勝戦！
　誰が予測していたでしょう！なんと、勝ちあがってきたのは両方とも少女、
　しかもギルド学園の生徒達だぁぁっ！！』
この空間内では時間、というものはあってないようなもの。
そもそも太陽も何もないのだから時間の感覚がよくわからない。
それでも参加者や観客たちにはきちんとそれぞれのエリアにおいて就寝する場所が提示されている。
まあ、いちいち元の界にもどって休むことも可能ではあるものの。
この空間は外界と時間の流れが異なり、ここでの時間間隔と外の時間間隔はかなり異なる。
外では一月という期間ではあるものの、この場にいる存在達にとってはもっと長く時は感じられる。
つまり、一度もどって休んでこちらにもどったりすれば、肝心なものを見逃していたり、
もしくは参加者だとすれば不戦敗になっていることもしばしば。
ゆえに大概皆、この空間内で大会中は生活することが常識となっている。
ディアとヴリトラに関しては、中央の建物に移動しては休んでいたりするのだが。
『わぁぁぁっ！』
進行係りの声をうけ、観客達からたちのぼる盛大なる歓声。
さもありなん。

何しろここにいたるまで圧倒的な力においてディアもヴリトラも勝ち進んできていたりする。
対戦相手がまるで子供のように小さな少女達に翻弄されてゆく光景は視るものをさらにひきつける。
このエリアでの決勝戦に勝ち残ったのはいうまでもなく、ディアとヴリトラ。
そして勝ったものが本当の意味での戦闘部門大会本戦参加者となりえる。
つまりは、いくつもあるエリアごとの優勝者が集まり、本格的な実力勝負となりえる大会が始まるのである。
「でも、ディアもヴーリちゃんもそこがしれませんね……」
「…まあ、おふたかた、だしな……」
観客席にてそんな会話をしているケレスとシアン。

シアンに関しては一緒に行動しているときにケレスと出会い、ディアが昔からの知り合い、と紹介していたりする。
シアンとしても二人をそのままほうっておくわけにもいかず、かといって意見しても聞き入れてもらえるはずもなく。
何かがあれば自分がでてコトを治めよう、という気持ちで共に行動しているに過ぎないのだが。
とはいえ里のほうの役目もあることから、そちらには自分の影というか分身を一応おいてきてはいる。
彼ら竜族は力がある程度に達すると自らの身をいくつかに分けることが可能。
力もまったく同等のままもう一人の自分を作り出すことができるが、基本、どちらかが主導権をもつ。
この方法をもちいれば別の界などにいても、
自らの魂の繋がりで遠く離れている場所の出来事などを知ることも可能。
それは彼ら竜族が基本、その魂と肉体を自然界における力のすべて

で創られている。
ということに由来する。
他の存在でそのようなことがでるのは、まずいない。
【意思】に関しては、この大地そのものが意思の一部であることから、
その器となる肉体をどこに表そうとそれは意思の気持ち一つ。
つまり同時に無数にその器を各場所に姿を現すことも可能。
すくなくとも、もともとが惑星そのものである以上、仮初めの器は器でしかないのだから。

ケレスは一緒に観戦している人物がじつは竜族の長であるなどとは夢にもおもっていない。
ヴーリに対して、様をつけて呼んでいることから竜族である、とは検討はつけてはいるが。
でもヴーリちゃん、様づけでよばれるなんてやっぱりかなり実力あるとこの竜族なのかな？
そんなことをケレスは思っていたりする。
真実は時として知らないほうが幸せである。
そのことを十分に理解しているシアンも自分のことをケレスに説明していない。
そもそも共に行動していて同じ学校の生徒だという人物が、実は【星の意思】である。
などといったい誰が想像できようか。
混乱し、下手をすればショック死しても不思議ではない。
ディア達の初戦からエリア別の決勝戦迄。
すでに大会が始まって数日が経過している。
始めは初対面であるシアンに戸惑っていたケレスではあるが、どうみてもヴーリとの会話において彼が気苦労を背負いまくっている。
というのが嫌でもわかり、逆にし親しみがわいていたりする。

ケレスとて常識外れのディアと一緒にいて精神的に疲れることは多々とあった。
そんな中で同じような境遇の者があらわれれば仲間意識も芽生える、というもの。
二人の正体をしっているのと知らないのとでは負担がかなり異なる。
ケレスはいまだ、ディアの正体も、ヴーリ、と名乗っているヴリトラの正体も知らない。
知らないうちは知らないほうが幸せ。
そうおもい、シアンもゆえに話してはいない。
そしてその話していないことは当然、シアン自身のことも含まれる。
「…しかし、お二方の戦いか……会場が消滅しなければよいが……」
そこまでいってふと気づく。
「それは愚問、か」
そもそも衝撃に耐えうるだけの結界をおそらく【意思】は張り巡らせるであろう。
それも第三者には絶対にわからないように。
それだけは確信がもてる。
そんなシアンの心配は何のその。
「さってと。ヴリちゃん？とりあえず周囲に幻を起動させといたから。
　久しぶりに全力でやってきなさいね？」
「はいっ！」
何しろ最近全力をだせる機会はまったくなかった。
目の前の【意思】がそういうのならばまったくもって問題ない。
そもそも全力をだせなければ今の自分の状態が今いちよく把握しきれない。
ゆえにその言葉にきらきらと目を輝かす。
「じゃぁ……」
ヴリトラの言葉に満足し、にっこり微笑み。

『Ｃｏｍｍｅ ｐｏｕｒ ｌａ ｃｈｏｓｅ ｄｅ ｍｏｎ ｎｏｍ，
ｊｅ ｎｅ ｐｒｏｐｕｌｓｅ ｐａｓ ｄｅ ｇｒａｔｕｉｔｅｍｅｎｔ ｌｅ ｔｕ ｎｏｎ ｐｌｕｓ』
――我が名のもと　汝の力を解放せん

刹那、周囲に凛、としたそれでいてどこか畏れ多く、
なお懐かしいような温かな声がディアの口より発せられ、
その声は会場全体にと響き渡る。
「……なっ！？」
その旋律の意味を理解して思わず叫ぶシアン。
その声はこの場にいるすべての存在に聞こえている。
いるがその意味を理解できているものはまずいない。
「…張られているのは…時空認識？…それと……完全防壁？」
どうにか内心動揺しつつも、会場と観客席の間に新たに張られた特殊空間を見極めようと目を凝らす。
時空認識とは文字通り、第三者からみての時間の認識をずらすこと。
つまり一時間相手が動いていたとするが、第三者からみてみればほんの数分しか動いている様子が視えない。
といった代物。
この結界が張られた場合、中で何がおこっているのかまず外から認識するのは不可能。
そう、それこそ【意思】と同じ力を擁したものでなければ。
先ほどの言葉の意味と、そしてこの結界。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・カンベンシテクダサイ・・・・・・・・・・」
おもわず涙目になりつつも遠くをみつめてつぶやくシアン。
この場に彼のような立場のものがいればおそらく全員がそのようにつぶやいていたであろう。
今からこの会場で行われるのは、ひさかたぶりの母と子ともいって

も過言でない、
全力のぶつかり合い…というか全力をだした稽古、なのだから……

ドッン！
わからない。
わからないが、開始の合図とともに、文字通り、観客席、否、その場そのものが揺れた。
揺れた、という表現は相応しくないのかもしれない。
文字通り突き上げられたというか沈んだ、ともいえる感覚。
一瞬その場にいるすべてのものが何かに押しつぶされたような錯覚に陥ってしまう。
それほどまでの衝撃が会場全体を包み込む。
何のことはない。
ヴリトラがその体におけるすべての【気】を解放したからに他ならないのだが。
唯一、それを理解できたシアンはといえばただただその場にて頭をかかえるしか統べがない。
どうか、騒ぎが大きくなりませんように……
神、否、いつも願う【意思】がそのきっかけなのだからその願いは誰にいうわけではない。
そもそもその願いはおそらく誰にも聞き入れられない、というのもわかっている。
わかっているが願わずにはいられない。
それはまさに現実逃避。
ヴリトラが気を解放するのと同時、ヴリトラから発せられた闘気が闘技場全体にしみわたる。
「ヴリトラ？あなたの本気はこんな程度ではないでしょう？」
それをうけにこやかに笑みをうかべ、すっと右手をあげて指を一閃させるディア。

本来ならば言葉だけでも問題ないのだが、一応今の衝撃は観客席にも伝わるようにしてみた。
ゆえに見た目だけでも何かしたように見せかけたほうが能率がよい。
それゆえのディアの行動。
ディアが指を一閃させると同時、観客席にのしかかっていた重圧が嘘のようにとかき消える。
次の瞬間。
「きゃっ！？」
その重圧はすべてヴリトラの体にのしかかり、その場にいきなりヴリトラを押しつぶす。
「ほら、頑張らないと。まだまだ柔軟体操もおわってないわよ？」
「ううう。お…お母様、ひさしぶりの特訓なのに容赦なしですかっ！？」
「当然でしょ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
さらっとにこやかにきっぱりいわれ、そのまま涙目になりながらも硬直するヴリトラ。
しかしすぐさまに考えを改める。
…躊躇していたら、まちがいなく、殺される！
というか死ぬ目にあう！
それは今までの経験、特に幼いころに身にしみて知っている。
だからこそ。
「Ｍｏｎ　ｎｏｍ　ｅｓｔ　Ｖｒｉｔｒａ（我が名はヴリトラ）」
その重圧すべてをすべて自分の器の中にと再びしまいこみ、ゆっくりと立ち上がりつつも言葉を発する。
ぽうっ。
ヴリトラの言葉をうけてヴリトラの体全体がほのかに光る。
「Ｌｅ　ｐｏｕｖｏｉｒ　ｐｕｒ　ｍ'ａ　ｎｏｍｍ？（我なる純粋な力よ）」
このままではラチがあかない。

というか全力がまったくもって出せない。
ならば、力を簡易的に表にだしたほうがはるかに…遥かに戦いやすい。
「Ｂｒｉｌｌｅｚ　ｅｔ　ｆｏｒｍｅｚ－ｌｅ（輝け形成せよ）！」
刹那。
ヴリトラの背後、というか重なるように真っ白い、どこまでも白。
といい表すしかない巨大な竜、が出現する。
見上げるその姿は巨体で、思わず息をのむほど。
観客席にいる誰もがその姿を目の当たりにし思わず息をのむ。
『おおっと！？小さな生徒は簡易的にも竜族を召喚したっ！
　すごい、すごいとしかいいようのない戦いですっ！』
簡易的。
といったのは他なでもない。
たしかに竜の姿はそこにあれども器、すなわち生身をまったくもって感じさせない。
ゆえに竜の魂、もしくは何かの力を竜の形に変換している、とも捉えられる。
しかし竜の魂だけでも呼びだせる能力者はさほどいない。
ゆえに進行役の存在もつい解説に熱がこもってしまっている。
「ようやくその気になったわね。ヴリトラ。さ、訓練の開始、よ」
「全力でいきます！お母様っ！！」
かの【意思】を母、と呼ぶのはかなり久しぶりのような気がする。
だけども自分が全力でぶつかれるのは、
【意思】、そしてそれに連なる【同じ存在】達しかいないのも承知している。
だからこそ…楽しくてしかたがない。
何しろ全力をだせるのは本当に本当に数万年ぶり、なのだから。
…ど、どれだけ……

結界を施しているというにもかかわらずに伝わってくる衝撃派とそして爆音。
常に爆音は鳴り響いてる状態でそれとともに空気までもが振動しているのが嫌でもわかる。
おそらく完全に衝撃を殺すのではなく少しばかりこちらにも伝わるようよわざと設定しているのであろう。
それだけは容易に予測がつく。
何しろあるいみいたずら好きなヴリトラ様の性格は【意思】ゆずりでもあるのだからして。
会場となっている闘技場の上空部には七色の光の帯が常に広がっている。
それだけで世界の安定を狂わす何かが行われている、というのは嫌でもわかる。
…この場にいる存在達のほとんどはその意味にすら気づいておらず、それもまた術の一つなのだろう、という安易な考えをもって戦いの様子に見入っている。
その戦いの様子が簡易的に抜粋され怪しまれない程度に【視せられている】、
など一体誰が予測できようか。
すくなくとも真実をしるシアン以外、そのことに気づくものはまずいないであろう。
それが判るからこそ頭を抱えずにはいられない。
「？シアンさん？」
そんなシアンの様子を不思議におもいながらも少しばかり首をかしげてといかけているケレス。
たしかにディア達の戦いはすざましいのかもしれないけど、何で頭をかかえてるんだろ？
ケレスからすれば不思議でたまらない。
というか結界がほどこされているというのにこちら側、つまり観客席にも衝撃がつたわってくる攻撃。

…さすが竜族、といえるのかもしれない。
だけど、
「…そんな竜族をあっさりとあしらってるディアってほんと…規格外……」
もののみごとにヴーリからの攻撃をさらっとかわし、
時にはそのまま手をふるだけで攻撃を無効化させている。
もしくははじき返しているようにみえるのは気のせいではないのであろう。
そのはじかれた攻撃が観客席と闘技場との間にかけられているであろう結界に炸裂するたびに、
観客席側もまたものすごい揺れと轟音に見舞われているこの現状。
ゆえに不思議でたまらない。
ディアって…いったい、何もの？
それとも、言霊使いとか先生達がいってたけどその能力の一つなのかしら？
ここからは対戦者達の行動はみえても声はまったくきこえない。
ゆえにそんな勘違いをしているケレス。
ケレスが首をかしげ、シアンが頭をかかえ。
しばしそんな光景が続くものの、
ふと。
「お久しぶりです。シアン様」
突如としてシアンの横に現れた人影からいきなりシアンにむけて声が発せられる。
文字通り、その場に忽然、と姿を現したのだが、その事実にケレスは気付かない。
その姿を垣間見て、一瞬目を見開き、
「…貴殿、か…貴殿、がここにきた…ということは…まさか……」
彼がわざわざ出向くということはおそらく用件は一つしかない。
その可能性に思い当たり、これ以上厄介事がふえるのかっ！？
と思わず自分を呪いたくなってしまったシアンは間違ってはいない

であろう。
「はい。招集がかかりました。それで御迎えにまいりました」
…がくっ。
予測はしていたとはいえがくり、とそのままがくりと体全体をうなだれさすケレス。
嘘でも違う、といってほしかったがどうやら世の中、そう思い通りに運んではくれないらしい。
そんなシアンの様子に多少の同情を禁じ得ないが、ふと闘技場の方へとめをやり…
そのまま一瞬固まり、彼には珍しく一瞬目を見開く。
しかしすぐさまいつもの無表情にもどり、
「…ところ、あの、シアン様？」
目の前に視えている光景。
自分の記憶違いでなければ、あれはもしかして……
あれってどうみても、人間形態のヴリトラ様では！？
というか、何でどうしてヴリトラ様が？
…あ～、またいつもの気まぐれというか暇つぶしで今度は人間界の大会に？
などとどこか納得しつつも、それでも答えを求めてシアンにと問いかける。
「いうな。…たのむ……」
彼の言いたいことはわかる。
わかるがゆえに、どこか疲れたようにその言葉の先をさえぎるシアン。
その気持ちは判らなくはない。
そもそもこの場には何もしらない生命体達が多すぎる。
しかも自分の真横には普通の人族であるケレスがいる。
ゆえにその先の言葉をいわせるわけには断じていかない。
「……なるほど。どうしてシアン様がこんなところにおられるのか納得いたしました……」

心底同情せずにはいられない。
おそらく、霊獣界を抜け出してこの大会に参加した神竜を追ってきたのであろう。
そのことは容易に予測がつく。
だからこそその声には誰の目にもあきらかな同情の色がうかがえる。
しかし彼の目には対峙しているディアの姿は視えていない。
否、正確にいうなば、【視えるように許可されていない】。
この場に元々いた存在達、そして水晶を通じて様子を観戦している存在達。
それらに関しては【一定の条件】をつけて視えるように許可しているディア。
「？シアンさん？あの、こちらのかたは？」
先ほどまでこんな人はいなかったはず。
ふと気がついたら自分達の真横にいた見た目三十代くらいであろうか。
どこか堅い感じのする男性。
その服装はかわっており、全身すべて黒づくめ。
今まで信じがたい光景を目の当たりにしており、そのことに気づくのが遅れた自分を少し恥じつつも、
それでも疑問に思いといかける。
「すいません。ケレスさん。私は急用ができました。
…本当はこの場にのこって身守りたいのですけど…ね」
いつ結界を気まぐれでとり除くかわからない。
それはしない、とはおもいたいが、いつだって【意思】は気まぐれ。
だからこそ、やらない、とは言い切れない。
といって自分がここにいてもできることはないのもわかっている。
いるが…混乱を治めるくらいならばどうにかその身分をあかせば多少防ぐことはできるはず。
だからこそその身を分けてまでこの場にとどまったのだから。
「急用？そちらの方は知り合いなんですか？」

「知り合い、というか緊急召集のようですね」
事実、言葉通りの緊急招集に間違いない。
何しろ迎えがくるほどなのだから、何かがおこった、と確実に言える。
「もしかして我だけ、なのか？」
「いえ、他の代表者の方々も、です。…主がお待ちしております」
その言葉だけで瞬時に状況がとてつもなくあまりよくないのだ、と理解する。
何がおこったのかはわからない。
わからないが、すべての界における各種族の代表者を呼び出すなど並大抵の出来事ではない。
かの存在が招集をかけるということはそういうことなのだから。
「？」
そんな彼らの会話をきいてもケレスにはまったくもって意味がわからない。
「…とりあえず、後でおふたかたにこれ以上、無茶はいないでくださいませ。といっておいてください……」
彼女の言葉を聞き遂げてくれるかわからないが。
それでも人の友人、というのは【意思】にとっては久しぶりなこともあり融通をきかせてくれる可能性もある。
ゆえに望みは薄いがケレスに伝言するシアン。
何かにすがりたい、とおもうのは彼でなくても同じ思いを抱くであろう。
しかしその言葉の真の意味を当然ケレスは気づくはずもなく、
「よくわかりませんけど。いってきますね。そもそも、これって何やってるんだろ？二人とも？」
視ている限り、二人が何をしでかしているのかまったくもってわからない。
わかるのは地震ともおもえる地響きとそして衝撃派が会場と観客席を隔てている、

と言われている結界すら凌駕して観客席にまで響き渡っているという事。
目にうつる二人はさほど動いているようには視えない。
というかもののみごとにディアがヴーリの攻撃をかるくかわしており、
ときおり、ヴーリが会場と観客席側に設置されているとおもわしき結界の壁にぶつかってきているのが見て取れる。
そのたびにものすごい衝撃音と揺れが観客席全体に襲いかかっているのだが。
しかも間髪いれずに先ほどから轟音、ともいえる音のみが響き渡っていたりする。
おそらく二人が何かの術の攻防をしかけているのかもしれないが、その様子ははっきりいってまったく見えない。
精神面のみで執り行い、その余波が物質側にでてきている可能性も否めない。
「では、失礼します」
かなり名残惜しいが招集がかかった、ということはよほどの大事がおこったといえる。
ゆえに気をひきしめる。
「『Ｄｏｎｃ？（それで？）』Ｃｒｏｎｕｓ ａｖｅｃ ｃｅｌａ ｑｕｉ？（クロノス様は、何と？）」
「それですが……」
迎えにきたこの人の姿をした男性は、人にあらず。
ただこの場においては人の姿をしたほうが違和感がないから、という理由で人の姿をとっているに過ぎない。
疑問符を強調し、使者でもある彼にと問いかけるシアン。
言葉をかえたのは、ケレスにその意味を悟らさないため。
この場で時空神クロノスの名前をだせば間違いなく疑問視される。
それだけは避けねばならない事柄。
これからもおそらく二人はあのまま生徒、として過ごすのは間違い

ない。
ならば少しでも憂いを残すわけにはいかないのである。
そう、正体がわかってしまい地上界が大混乱に陥ることだけは断じてさけなければならないのだから。
何やら話しつつもその場をあとにしてゆく、シアンとその知り合いらしき人物を見送りつつも、
「？収拾？…何か竜族のほうであったのかな？…あ、ディア達決着ついたみたい」
ふとみれば会場の中心にくたっと倒れぴくり、とも動かないヴーリと、
そしてその真横でにこやかにたたずんでいるディアの姿が垣間見える。
それと同時、さきほどまで聞こえていた音もぴたり、とやみ衝撃派らしき振動もきこえなくなる
『おおっと！これはびっくり！何と竜を簡易召喚できるほどの生徒がやぶれたっ！
　優勝はこれまた学園のディア選手～～！！！』
今まで息をのんで戦いの様子を見守っていた進行役がはっと我にともどり声を荒げる。
次の瞬間。
『わ～～～～～～！！！』
耳をつんさくほどの歓声がＳＧエリア内に響き渡る。
こんな大会、一度もみたことがない。
それほど人々は息をのんで見守っていた。
音と光、そして体に感じる衝撃。
普通、会場と観客席は特殊な結界でそうそう衝撃は伝わってこないようになっている。
にもかかわらずに直接に感じられた、ということは中で行われていた攻撃がそれほどすざましかった。
ということを指し示している。

優勝者のみは名前を呼ぶことが定められている。
ゆえに、高らかにＳＧエリア決勝戦で勝ち残ったディアの名前が読み上げられる。
『こんな結末、誰が予測したであろうか～～！！すごい、すごすぎる大会でしたっ！
　その攻撃のほとんどが視野にはいらなかったのもまたすごいっ！
　敗れた選手ともども、どれだけの力を秘めているのか今後に期待の若手選手に、
　今一度、盛大な拍手と歓声を！！』
『わぁぁぁっっっっっ！』
実際にその会場となっている闘技場で何が正確に行われていたのか。
確実に判断し視れていたものはまったくいない。
しかし簡易的に視せられていたそれぞれの攻撃と攻防も一般の存在からすればとんでもないもの。
ゆえにこそ、収まりきらない歓声と拍手がいつまでも会場内をうめつくしてゆく……

『さて、これでＳＧエリアの大会は終わりとなりますが、
　今後はそれぞれのエリア代表者達の戦いに移ります！
　みなさん、各エリアを勝ち抜いたつわもの達の戦いをどうか楽しみにしていてくださいっ！』
ひとまず、エリアごとの戦いはおわったものの、今度は各エリアを勝ち抜いた者たちの戦いがまっている。
そしてこのＳＧエリアにおいても別のエリアを勝ち抜いた優勝者との戦いが設けられることとなる。
各エリアごとの優勝者達の戦い。
それこそが、この大会…戦闘部門における真の大会本番ともいうべきものであり、
一番盛り上がりをみせる大会の目玉、といっても過言ではない。

彼らは知らない。
自分達が大会によって驚喜しているそんな最中。
すべての界を揺るがす事件がおこっている、というその事実を……
静かに、静かにその影はゆっくりとしのびよっている、というその
事実を……

光と闇の楔　～決勝戦と【真】本戦へ～（後書き）

ようやくでてきた、時空神、クロノスの使いさんＶ
まあ、彼の使いがでてきた時点で私のかく物語。
おそらく予測がついた方々は多いとおもいますＶ
気の毒なのは誰なんでしょうねぇ（ふふふＶ

光と闇の楔　～時の狭間での緊急会議～（前書き）

今回は、ほとんど会話？のようなもの。
ちなみに会場となっているのはほんっと～～に何もない空間ですよ？

光と闇の楔　～時の狭間での緊急会議～

「いやぁ、今年の大会は見ごたえあるねぇ」
「いや、ほんと。きいたか？ＳＧエリアでは結界をも揺るがした攻撃がくりひろげられたらしいぜ？」
「まじか！？よっし！なら俺は今回はそのエリアの優勝者がいいところまでいくのにかけるぞ！」
「でもな～。その子って学生だろ？
　そこそこ上位に組み込めても、おそらく五十番以内にはいるのは無理だろ？」
この大会でいいところまで進む。
というのは五十位迄にはいる、ということを意味している。
すなわち、地上界において五十人というごくごく少数ではあるがそれなりの能力をもっている。
と地上界限定でいえば認められたこととなる。
さらにいえば上位十人、ともなれば国などがほうってはおかない。
すなくとも自らの国のお抱えにしようと動き出す。
中には国に所属して毎年のように大会に参加し、界対抗の大会に参加しようと狙っているものも多々といる。
ちなみにそれぞれの分野において優勝者をみごと的中させたものにはかなりの大金が舞い込むこととなる。
ちなみにこの大会の賭け事において的中させた金額はそれぞれの国問わず、無課税、となっている。
ゆえに庶民の娯楽としてもかなり人気が高い。
そもそも、年に一度の一攫千金を狙える場でもあるのだ。
人気がでないほうがどうかしている。
そしてそういった賭け事の収入もまたこの大会の運営費の一部とし

て見込まれている。
世の中、うまくお金は廻っている、といういい例だといえばいえるのであろう……

光と闇の楔　～時の狭間での緊急会議～

ざわざわ……
どうしてもざわめいてしまうのは仕方がない。
それぞれいつものように過ごしていた。
中には会議の最中で、中には執務の途中で。
いきなり周囲の時間が止まったかのようにぴたり、と景色ごと停止した。
そして現れたのは全身黒づくめの服装をしている男女。
正確にいうならば場所により、男であったり、女であったり、出現した容姿は様々。
しかしそのようなコトを起こせるもの。
それらは一つの存在しかあり得ない。
そもそも、周囲の【時】を停止させるなど。
普通の存在にできるはずもない。
そして現れた案内役、という存在につれられてここまでやってきた。
否、そのまま連れてこられた、というほうが正しいが。
この場には彼らだけでなく、様々な種族のものがどうやらやってき

ているらしい。
どうみても人あらざる種族の存在達の姿も垣間見える。
「…な…ヴルド国王!?」
そこに先日、胡散臭い動きをしていると報告のあった王国の国王の姿をみとめ思わず叫ぶテミス国王。
それに応じて、一部の視線がいっせいに二人のほうにと向けられる。
「人間達よ。いろいろと気持ちはわからなくもないが。今は俗世のことはひとまずおいておけ」
そんな中、少し深みのある声がその場にと響き渡る。
声の主のほうをみてみれば歳のころは見た目ではよくわからないが美丈夫な男性がその場に座っていたりする。
よくよくみれば何もなかったはずの真っ暗な空間にいつのまにか机といくつかの椅子が出現しているのが見て取れる。
その場にいつのまにかいなかったはずの様々な男性、女性が座っているのも気にかかる。
それらの人々から感じる気配は常人の比ではない。
「ほう。天界のほうからはゼウスが連れ出されたか」
そんな声を発した人物にむかい、面白そうに話しかけている青年が一人。
ぱっとみため、思わず見惚れてしまうほどの容姿の持ち主ではあるが、
あまりの整った顔立ちから逆に人ではない、と断言できる。
「そういうキサマもな。久しぶりだな。サタン。しかしお主まで連れ出されている…となると。
　これはかなりのおおごとか?精霊界からは精霊王ユリアナが連れてこられているようだしな」
少し先にすわっているおっとりした雰囲気をもつ白き髪をもつ女性をみつつ爆弾発言。
ともいえる言語を発しているゼウス、と呼ばれた人物。
いやあの、ゼウス?サタン?それに…ユリアナ?

人間界に属している各国の王達、そしてまた各種族の代表者達はその言葉に思わず黙り込む。
真実なのか嘘なのか。
しかしこの空間と、そして自分達が連れてこられた経緯。
周囲の時間を完全に止めて自分達をここまで連れてきた【力ある存在】。
もしも彼らの想像がただしければそのようなことができる存在…否、神は一人しかいない。
それらの名前は彼らにとって有名すぎる御名。
ゆえにこそ戸惑わずにはいられない。
もしも真実だとすれば自分達はいったいどのような崇高な存在の前にいる、というのだろう。
まったくもって意味がわからない。
しかし人間、いきなり突拍子もないことに直面するとその思考力は一時的にマヒし、
正確な判断ができなくなる。
そして例外にもれずこの場にいる人々もまたそのような現象に陥っていたりする。
「しょうがないじゃない。クロちゃんから連絡がはいったんだし。
本当は意思様の一件でそれどころではないような気もするんだけどね～。
だけどクロちゃんが臨時招集をかけたってことはかなりの大問題がおこったってことだし」
事実。
かの存在がすべての代表者に対して臨時招集をかけるなど普通はありえない。
とすればそれをせざるを得ない何かがおこった、とおもうしかない。
「反旗組織達の繋がりのことか？」
「それくらいの些細なことでは招集かけないでしょ。普通。
それより、クロちゃん、いつまで黙ってるの？

いい加減にこのたびの招集のいみ、教えてくれないかしら？」
いまだにその場に達すくしている人々、そして各種族の代表者達を
そのままに、
何やら話しをすすめている三人の姿。
ユリアナ、と呼ばれた女性の言葉と同時。
ぐにゃり、と彼らのいる闇の空間が一瞬揺らぐ。
そして次の瞬間。
闇の中から一つの人影らしきものが出現する。
文字通り、闇の人影、といっても過言でないその姿。
しかしその姿は視る者によってその姿は人それぞれ。
中には美青年にみえるものもいれば、羽をはやした生き物にみえる
もの、
または獣の姿にみえるもの、など、視えている容姿も人様々。
「あいかわずだな。【定まらぬ存在】」
目の前の存在の別名。
その呼び名を知っているものはほんのごくわずか。
「サタン、か。その呼び名をしてくるとはひさしぶりだな。
　さて、みなさま、突然の召喚、まことに申し訳ない。しかし事
は急を要する事態がおこった」
定まらぬ存在。
その呼び名通り、彼には決まった姿、というものは存在しない。
しいていうならば相手の望み通りの姿に見え、そして形をとれる、
という特性をもっている。
「…時、を管理している貴殿が、急を要する…とは……」
目の前にいる【定まらぬ存在】の正式な役職は、【時空神】。
つまり、時間を管理している神であり、
神々や魔王の中で唯一、過去、そして未来に干渉することが許され
ている存在。
過去とは【意思】の記憶の中に存在しており、
その記憶の中に入り込むことが特定の条件のもと許されている。

そしてまた、今現在においての出来事から導き出される【未来】。
これもまた【意思】の中で夢の状態で万全と確定されている。
しかしそれはあくまでも現段階においては意思の夢にすぎず、未来を変えることは可能。
運命神ノルンは未来を予知することはできても、介入することはできない。
そして、時空神クロノス。
彼は唯一、その手段をもちいている神の一人、といって過言でない。
しかし常に時の狭間にその身をおいており、滅多と表にでてくることは絶対にない。
時の狭間、とは【意思】の記憶領域であり、深層領域の一部。
どの界にも属さず、一番【世界】に近い場所、ともいえる場所。
それが【時の狭間】。
「わざわざ、時空神クロノスが呼び出しをした、となると。
　このままでは未来において何かよくないこと、
もしくは破滅的な何かがおこる、ということでいいのかしら？」
しかもこの場にはどうやら各種族の代表者もいるようである。
このようにほとんどの種族を呼び出す、などと今までにありえなかった。
しかしこのたびはどうやらそうはいってはいられないらしい。
自分達が誕生してからのち四億年、一度たりとてこのような現象はなかった、というのに。
「ユリアナ。そうあせるな。まずは、初めてのものもいよう。
　そこにいるゼウス、サタン、ユリアナは我のことを見知ってはいるが。
　初めてのものたちにまず挨拶をしておこう。我はクロノス。
　時空神クロノス。今回、各種族の代表者に集まってもらったのは他でもない。
　未来においてこの地といわず世界各地において壊滅的な出来事がおこりかねない。

その対策のためにみなを呼寄せた。我はうごけぬ。対策は各自がそれぞれに頼るしかないのだ」

彼の名前は今、名乗ったとおり、クロノス。

文字通り、彼が管理しているのは、【時間】。

時間とは流れる川のように果てしなく終わりがみえないもの。

その川の流れの横からそれらを管理している存在。

それが【クロノス】。

しかし、いくら彼が時を管理しているとはいえども彼は直接動けない。

否。

動くことを許されていない。

そのように創られている。

万が一、その存在意義を揺るがすことをしようとするならば、

そのまま動くこともままらなずその場にて彼の精神そのものから石と化す。

一定時間そのままの状態で、許しがない限りは文字通り動くこともできない【石】のまま。

彼ができるのは、せいぜい特定の時を操作するか、もしくは過去、未来に特定の存在を送り込むことのみ。

未来を変えるためには、すでに動かすことのできない過去でなく、今、をかえる必要がある。

かえる必要のある過去の場合、さくっと【意思】がそれなりの対応を施している。

それでも基本、【意思】は過ぎ去った出来事に関して干渉することは滅多とない。

それはその時をいきる命がそれぞれに最善を尽くした結果だ、とわりきっており、

自らが干渉するものではない、とおもっているがゆえ。

ゆえに、いくどかの文明や生命の滅亡に関しても【意思】は直接干渉することはなかった。

そして、今に関してもその基本はかわっていない。
しかし今から起こるであろう【未来】に関してならば話しは別。
今のままならばおこりえる未来と、防ぐことのできる未来。
そのきっかけを話すことでその場にいきる存在達にて未来をつかみ取ってほしい。
そう願う【意思】の心は【母】なればこそ。
ざわっ。
クロノスが正式に名乗ったをうけて、
さらに人間界から参加というか連れてこられている代表者達のざわめきが大きくなる。
この場にいる代表者は地上界の存在達が最も多い。
魔界に関しては代表者は【暁の王】と呼ばれているサタンのみで、
精霊界からは精霊王であるユリアナ。
そして天界からは【雷神ゼウス】。
霊獣界からは【竜王シアン】。
地上界においては地上に住まうすべての種族の代表者。
そして国等がある場合はそこの最高責任者がこの場に呼ばれていたりする。
そもそも、各界において一番統制がとれていないのは地上界であり、
他の界は一つの統制のもと基本は統治されている。
地上界は様々な種族が混合しているせいなのか、文字通り多種多様な存在達がいる。
そしてその多種多様な種類の数だけ代表者がいるのも事実。
ゆえに一番悲惨な争いがおこるのもまた地上界が最も多い。
それを意識していない地上界の存在達はあるいみ強いともいえなくもないのだが……
「…時空…神!?あのやはり伝説の!?」
「いや、でもそんなことが…!?」
「馬鹿な!神は我らがヴルトゥーム様のみ!」
何やらそんな叫びをあげている各国の代表者達。

ちなみに、いうまでもなく、一つの神の名前を挙げている国王こそが、
他国に侵攻をしかけようとしているヴルド王国の国王だったりするのだが。
かの国王にとって神、とはヴルトームのみ。
他の神は神にあらず、という思想の持ち主。
ゆえにこの場においてもそんな馬鹿なことを叫んでいたりする。
いくら信仰心が自由とはいえこの場に他の神々などがいる、と理解していての発言か。
それとも、まったくもって気づいていないのか。
その事実は当人のみぞしる。
「で？わざわざ、我ら天界、魔界、そして精霊界。あげくは霊獣界だけではあきたらず。
　他の界、そして地上界における各種族の代表者達まで呼びだして。
　…いたい、何があった、というのだ？」
ゼウスの疑念も至極もっとも。
まあ天界においてはクロノスが時を止めている以上、戻っても仕事にまったく差し支えはないであろう。
ここでいくら過ごそうとも、元の場所にもどればその一瞬後にもどされるのは目にみえている。
「……ゼウス。キサマにはすっごく関連の深いこと、ではあるがな。
　先日、冥界の王ハデスより連絡が入った。
　冥界の管理人ヘルの父君、ロキの魂が何ものかに盗まれた、らしい」
「「「なっ！？」」」
その言葉の意味を悟り、思わず短い叫びをあげているゼウス、サタン、そしてユリアナ。
「…ロキ？たしか以前、天界大戦争を引き起こしたとかいう…邪神…ロキ様…ですか？」

記憶のスミにある知識をたぐりよせ、顔をしかめつつも、クロノスにといかけているのはシアン。
彼もまたこの場に呼ばれている種族の代表者の一人。
天界大戦争、と呼ばれている大戦の後、冥界、という魂の管理場所が創られた、そう伝え聞いている。
それは竜族であるからこそ、そしてまた当時から存在していた神竜ヴリトラがいたからこそ、
その事実をシアン達は知っているだけ。
普通の存在達はそんな事実などまったくしらなければ、伝承ものこされていない。
彼らの認識は、冥界、というものがそこにあり、そして死んだ者の魂はそこにいく、というくらいである。
「馬鹿な!?ロキの魂は娘であるヘルがしっかりと守っているはず!?ありえないっ!」
「…そう。きさまの女好きのせいで反逆したロキの娘が、な」
「ほんと、あなたの女好きにはあきれかえったわよね…まだ完全になおってないし……
…いっそ、意思様にお願いしてその魂ごと全部【浄化】していただいたらどうかしら?」
強い口調でしっかりといいきるゼウスに対し、
何やら冷めた視線でそんなゼウスをみつつもつぶやいているサタンに、
同じく、呆れたようにそれでいてゼウスを非難するようにつぶやいているユリアナ。
「ぐっ…っ!」
事実なだけに言い返せない。
そもそも、彼がロキの妻であるアングルホダにいいよらなければそのようなことはおこりえなかったのだから。
「ゼウスの女好きはもはや病気だろう。いっても無駄だ。娘にすら色目つかいそうになってたこの馬鹿は。

ともかく。ロキの魂が盗まれたというのは事実らしい。
どうやら族はかつてロキの創った【魔法の品】を所有しているらしい。
…我が時空を覗いて確認してみたところ、【神々の黄昏】すらももってておった……」
神々の黄昏。
それは神にとってはもっとも便利な品であり、そしてもっとも危険な品の一つ。
「な!?黄昏を!?」
「…と、なると、魂をわけているか、それとも複製したか…かなり、やっかい、ね」
魂の力だけでも邪神、と呼ばれたほどの実力をもった神の一人。
しかもその知恵においては右にでるものはいない、とまで当時いわれていた神。
絶句するゼウスとは対照的に、冷静に事態を分析しようとしているユリアナ。
伊達に精霊達の王を務めているわけではない。
常に自然と一体化しているべき存在であるがゆえに物事を広い目でみることが基本となっている。
その神具の特性は、今まさに、精霊王ユリアナが示したとおり。
神の力を複製することもできれば、そしてその魂すらを分離、分断することも可能。
自身の力をまったく使うことなく、自らの分身がつくりだせれる神具。
ゆえにかつては神々、そして魔王達などにかなり重宝されていた。
しかしそれをあまりに多様し仕事をさぼる存在がでてきてしまったがゆえに、
【王】に命じられ、封印されていたはずの品。
それが【神々の黄昏】。
しかし、先の天界大戦においてその神具はいつのまにか行方不明に

なっていた。
その神具の名前が、今ここでだされるとは……
ゆえにゼウスは信じらない気持ちでいっぱいとなり、
ユリアナはただ事でないことを瞬時にさっし、一番いい解決方法に思案をめぐらせる。
「…それだけではない。
ヤツラは、力の波動を複製し、各世界におとしたようなのだ。
ヘル達はその波動をおって回収しに出向いたらしいが……。問題は、その先だ。
盗みを働いた存在達は、天・魔に所属している反組織メンバーの存在達。
そして…厄介なことにそれぞれの【複製】はすべて形を初めてみたものが違和感のないようなもの。
にかえられるように設定してあるようなのだ……」
そして、それらを拾った様々な生命体が、そしてそれらを食べた生き物達が。
このまま突き進む未来は力に呑まれ、そしてまた力を求める輩達の血で血を洗う争い。
そこに父を求める冥界の管理人ヘルや、そして二人の兄達も加わり、すべての界において戦争といっても過言でない状況となる。
…そう、今のまま何の手をうたずに、対策も何もほどこさなければ。
確実に今のままでは起こりえる未来。
「【テケリ、ショゴス】と【ハスター・ホテップ】が手を結んだ、とはきいていたが……」
頭を抱えたくなってしまう。
というか頭を抱えてもおそらく誰も文句はいないであろう。
かつての大戦のときにも最凶の三兄妹、ともいわれたロキの子供たち。
彼らが参戦したらどうなるのか…それはおそらくこの場にいる誰にもわからない。

否、それがわかったからこそクロノスはこの場に代表者達を呼寄せた。
「…クロノス様？その、初めてみたものが望む形…とは？」
「…うむ。今のところ確認できたのは。果物。石。子供の姿。そして……」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
シアンの問いかけに今のところクロノスが確認した【欠片】の特徴をつらつらと述べ始める。
その直後。
その場に何ともいえない静寂が満ち溢れる。
石や果物、というのはわかる。
しかし、子供の姿などといったものは…簡単にどんな種族にもその欠片が入り込める、ということではないか。
「欠片には意思はない。文字通り、かつての思いのままの欠片、で間違いないだろう。
ゆえに、すべてを破壊する、という消滅させる、という思いはまだ生きているはずだ。
…そこの誰かのおかげで、な」
「…く…くどいぞ！クロノス！！」
くどくもいいたくなるというもの。
あと文句をいいたい存在はもう一人いる、が。
未来が視えていたがゆえに、ゼウスには近づけさせるな、そういっておいたのに。
いつのまにやらその忠告をきれいさっぱりと失念していたらしい。
誰でも愛するものを傷つけられそうになれば逆上してしまう。
事実、アングルホダがその力のすべてをもってしてその肉体ごと自らを封じなければ、
文字通り、悲劇はそのままおこっていたのだから。
それを知ったロキの怒りは…いうまでもなく。

ゆえに、いまだにどの界においてもロキに同情する声はあれども、非難する声はまったくない。
むしろゼウスを非難する声のほうがはるかに高い。
一部からはゼウスよりも側近の役目をオーディンに任せよう、という話しすら持ち上がっている。
まあ、身持ちも堅く、融通の利かないオーディンと、女癖は悪いものの仕事はしっかりするゼウス。
どちらがいい、といわれればどっちもどっち、といえるのかもしれないが。
ゼウスに関しては彼の妻であるヘラがしっかりと手綱を握っているかぎり、
彼は言葉通りのよき神、なのだが……
「あ…あのぉ？すいません？わたくしたちには、まったく話しがつかめないのですが……」
何やら自分達には信じられないような雲の上の会話がなされていないか？
そんな思いがぬぐいきれない。
最後のほうの欠片が各界にばらまかれた、そのことばの意味はよくわからないが。
すくなくとも、何かそれがとてつもない危険なことだ、とは判断できる。
ゆえにおそら神々本人達…であろう、彼らにむかって声を発するのは勇気がいること。
しかし話しをきかなければ先にすすめない。
ゆえに勇気をふりしぼり、といかけているテミス国王。
「…そういえば、我らだけで話しをすすめていたな。
　他の存在達にもわかるように説明しよう。とりあえずみなのもの、それぞれ話しは長くなる。
　そのまま座ってくれたまえ」
その言葉とともにその場にいるすべての存在達の背後に突如として

黒い椅子が出現する。
まったくもって意味がわからない。
というか、目の前にいる彼らは本当に伝説の神々なのか？
そんな疑問が集められた存在達の脳裏によぎる。
しかし、現実、とは時として残酷。
周囲の時を止められてこの場に連れてこられた。
それこそがその現実を指し示している。
心ではわかっていても理性でそれをみとめたくない。
それはまあ、平穏を求める心理からしてみれば当然、といえば当然の反応なのかもしれない……

しばし、時の狭間、とよばれる空間にて、クロノスによる世界滅亡につながりかねない重要事項が、
この場に集められた存在達へと伝えられてゆく……

「ううん。まったく容赦なし……」
いまだに体全体がずきずきとする。
ゆえにおもわず泣きごとをもらす。
「？そんなにはげしかったの？あの戦い？」
観客席でみている限り、そうはおもわなかったが。
しかし結界を揺るがすほどの攻撃をしていたのは確かなわけで、
術の大きさの影響で体にも負担がかかっているのかな？
そういえば、竜族って人の姿をしていてもその防御力とかは竜形態のままなのかしら？
そんなことを思いつつも、ディアにむけて泣きごとをいっているヴーリにといかけているケレス。
エリアの決勝戦も無事終わり、とりあえず観客席にいるケレスと合

流したディアとヴリトラ。
そこにシアンの姿がみえないことにヴリトラは首をかしげたものの、
そんなヴリトラにきづき、
「ああ、何か急用ができたからって。どこかにいかれたわよ？
あと、二人にくれぐれも無理はしないようにっていってたわ」
みたところ、かなりぐったり疲れているように見えるヴーリとは対照的に、
ディアはまったくもって疲れた様子の欠片も視えない。
それは表情にださないだけなのか、本当に疲れていないのか。
ケレスではまったくもって読み取り不可能。
「あ～。ク～ちゃんからの臨時招集がかかったみたいね。これから忙しくなりそうね～」
まあ、面倒なのであの品をリュカを通じてかの組織に渡したのはほかならぬディア自身。
いつ、代替わりが起こるかわからない今。
少しでもはやく不安要素は一時的にでもとり除いておきたい。
おそらく、代替わりは早くてここ数年、もしくは遅くても百年以内には起こるであろう。
微量ではあるが【宇宙】より伝わる感覚でそれは何となく判断できる。
一時反感をもつ心をつぶしておけば、百年と少しくらいは確実にもつ。
そして今までもその方法でそうすれば百年くらいは彼らは大人しく一時なる、というのを理解している。
それゆえのこのたびの行動。
巻き込まれる他の存在に対しては気の毒とはおもうが、しかし本当に代替わりの余波が及べば、
自分ごときの力ではこの地上、否、自らの【内】にいるすべての存在を守りきる自信がない。
下手をすれば大姉様ですらも消滅してしまう可能性があるのだ。

たかが小さな惑星に過ぎない自分がどうこうできる問題ではない。
だからこそ打てる手はとことんうっておく。
そして準備は万全に。
それがディアのだしている結論。
すでに伝道師達にもその【連絡】はつけている。
彼らにもまた、かの欠片の回収の役目を一応はわりふっている。
あのまま、ゆっくりとロキの目覚めをまっていてはあと数億年は目覚めない。
彼の創る品は時として大姉様にも発揮する効力をもつものがある。
彼はいわゆるディア自身が創りだした神、ではない。
面白そうなことをしている、というので他の存在達も一緒になり【魂】を創りだした特別の神。
ゆえに特殊な力を魂そのものに持ち合わせている。
当人はその事実をまったく知らない。
知っているのは、ディアと伝道師、そしてディアに連なる存在達のみ。
このたびの代替わりにおける被害状況は、すべてある意味、ロキにかかっている。
といっても過言でないのかもしれないのだから
無理をしてでも起こそうとするディアの気持ちは判らなくもないのかもしれない。

…そのまま何もせずに【太陽系】そのものの消滅をまつか、
それとも、何か手をほどこして被害を最小限に食い止める努力をするか。
どちらかを選べ…といわれれば、まちがいなく誰もが後者、を選ぶであろう。
【心】とはそういうもの、なのだから……

光と闇の楔　～お祭り騒ぎ最中の出来事～（前書き）

みてくださっている方々、ありがとうございますv
今回はちょっと独り言？をば。
某人より、「平仮名が多い」という意見をいただきました。
けど、客観的視点を目指している以上、自然とそうなるんですけどねぇ？
そもそも、漢字ばかりだと固くなる、というのがあるんですけど。
悪くとらえると、そのひと、固い小説でも読みやすいのか？と思えるところもありますが…
（あとは台詞ばかりで背景情景とかまったくないような小説も人によりけり。
　好き、という人もいれば、情景がわからないから読みにくい、という人もいるわけで）
基本、こういう小説系はオブラート。
つまり柔らかさが読みやすさ、と思っている私としては、（特にオリジナル小説に関しては）
漢字を使う場所でもあえて「ひらがな」を使うことで柔らかさを出す場合もあるわけで。
何か捉えようは人それぞれだなぁ、としみじみと納得した意見でした。
でも感想欄が炎上するのも嫌なのでひとまずさくっと削除しました。
感想とは書き手の意欲をへし折るものであってはいけない。
これはヨミテの常識、とおもうのですが、みなさんはいかがでしょう？
やはり、楽しく読むのがマナー、と思うのですよ。ええ。
んで気にいられなければ二度と読まなければよいわけで。
そもそもそれぞれにあった文章の形式とかパターンとか人それぞれですしね。

市販されるようになるレベルの作家さんになるためには、
そういった人々すべてに対応した文章力が求められますが…（笑
私はまったくそこまでのレベルにいっていない、と自覚あり（涙
書き込みした当人も思うところがあって書き込みしたのはわかりますが、
返事に困るような書き込みもまた？状態なわけですし。
特にネット上は誰でもみれることから、書き込みなどに関してもかなり注意が必要、だとおもいます。
悪意ありまくり、という人もいない、とも限りませんしね…（自己防衛は大切です
まあ、とりあえず持論？をのべましたが、ともあれいくのです

光と闇の楔　～お祭り騒ぎ最中の出来事～

「ふぅ。いつも思いますが、この時期は平和ですね～」
「いや、まったく」
ほとんどの生徒が大会に参加している。
しかも一般の腕に覚えのある存在達も。
「いつもギルド全体がここまで平和だといいんですけどね～」
いつも何かに日々追われている毎日。
特にここしばらくはその内容が異様に濃かったような気がするのはおそらく気のせいではない。
「そういえば、見回りにいったものが何かかわった植物をみかけた、といってましたよ？」
「…また、実験室のものを勝手に誰かが外にうえたのでしょうか？」
実験の成果で教室内で育てるのはまだよい。
しかし実際に外に植えたらどのように植物になるのか試したい。
そんな思考をもつ少し困った教師がいるのも事実。
そのつど、吸血植物や飛行植物、挙句は肉食植物、などなど。
そんな物騒な植物を学校の敷地内にはなってほしくない。
切実に。
「……今のうちに、燃やしときますか？」
「いや、前回の反省を取り入れてるでしょうし。だとすれば火の耐性をつけているでしょう？」
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
前回はたしかに燃やしつくすことができた。
しかし、今回は？
ゆえにその可能性に思い当たり、
「「・・・・は～・・・・」」

しばらく黙った後に二人同時に盛大にため息を吐き出す。
ほとんど人のいなくなったギルド協会学校の職員室の一角において、
教師達の会話がしばし交わされてゆく……

光と闇の楔　～お祭り騒ぎ最中の出来事～

「ヴルド国王は何を考えているんだ……」
話し合いの場においても自分達には関係ない。
しかもすべてにおいて自分達が信心している神こそが正しい。
そう言い放ち、この場を後にしたヴルド王国の国王。
この場から退出するのは個人の自由とはいわれたがそれをうけてすぐに退出するとは。
この空間から出ようとすると何もない真っ暗な空間に扉が出現し、
その扉をくぐることにより、元いた場所にもどれるようになっている。
扉をくぐると同時、止められていた時間が動き出すように設定されているらしく、
当人以外からしてみれば何ゴトもなったかのように時間は動き出す。
「この場で宣戦布告をしててゆくとは……」
テミス国王だけでなく、他の国の国王達もまたそんな彼の行動にただただあきれるしかない。
つまり自分のことしか考えていない、というのがよくわかる行動。
「まあ人間達のことは人間達に任せるとして。今はひとまず。
　ロキの魂の欠片についての話しあいが必要だな」

地上界のものが戦いをおこそうがそれはそこにいきるものたちの責任。
あまりひどいとおそらく確実に魔界より介入がはいるようにそのように理は創られている。
ゆえにさほど重要視せずに淡々とその場をなだめ、今後の対策を話し合うべく声をあげているゼウス。
「精霊達全員に伝えて、ロキの魂の波動を調べてもらって、
　それから信用できる存在達にお願いして、回収、それしかないでしょう？」
下手に力がある魂の欠片である。
それを悪用しよう、とおもえばいともあっさりと悪用できる。
欠片そのものに意思がない以上、外からの干渉にあっさりと反応する可能性が高い。
ゆえにそんな代物がある、と一般に知られるのはあまり面白くない。
回収作業をするにしても、信用できるもの達に理由を話して行ってもらう必要がある。
「神気を感じられる存在達が一番いいのでは？」
「というか、しかし、民に何と注意をするべきなのか……」
さすがにここまでくるとこの現状が冗談でなく現実だ、そう認識せざるをえない各種族の代表者達。
今、目の前に迫っている脅威。
その力は神の力の欠片、という。
それがどれほどのものなのか、はっきりいって理解不能。
地上界に住まう存在達は、他の界の存在達と比べ、基本特殊な能力があるわけではない。
限られた時を過ごし、一番軟弱で貧弱、という認識は共通している。
地上界に住まう存在達で一番寿命の長い存在は、木々といった樹木であろう。
それ以外は長くて千年がやっと。
限りある寿命。

そういった命をもつものが地上界に存在するように振り分けられている。
何ともいえない雰囲気の中、様々な種族の代表者が、
今後の対策についてしばし時の狭間たる空間にて話しあいを繰り返してゆく……

「しかし、エリア対抗の本当の意味での本戦にディアが勝ち進むとはね～……」
どう考えても信じられないが、しかしそれは現実で。
「たまたまよ。たまたま」
そんなケレスの疑問にさらっと答えているディア。
「というかお姉様にかてるひといたら、私みてみたい」
「あら？大姉様達にはまったくかなわないわよ？私だって」
そもそも勝てる気がしない。
自分達の運命を実質握っているのはほかならぬ大姉。
かの存在がなければ自分達もこのようにして存在していない。
恒星、と呼ばれる太陽が誕生し、そして自分達のような惑星が誕生した。
そして今日までその現状がつづいている。
そしてまた、そんな営みもこの【空間】からしてみればほんの一瞬の営みであることも理解している。
そんな自分達からしてみれば、自らのうちに芽生えた命の輝きはほんの一瞬の輝きに過ぎない。
こうして触れ合っていても、過ぎてみれば幻の夢。
「とりあえず、次の試合が決まるまではだいぶ時間もあるし。
　しばらくいろんな場所をみてたのしみましょ？」
「さんせ～！」
何しろケレスもこの大会に参加したのはこれが初めて。
ゆえにいろいろな場所をみてみたい、という気持ちは強い。

時の狭間にて会議というか話しあいが執り行われていることをディアは理解している。
しかしそれは彼らが今後、どうするか彼ら自身できめること。
すくなくともディアとすればこれをきっかけにロキの覚醒を早めることができればいいのだから。
自らの心の中に閉じこもっている状況は、アングルホダもロキも同じこと。
その魂をいくつかの欠片にわけ、それぞれが様々なものに触れることにより、
その心に少しづつふれてゆき、早く目覚めをうながす。
そのためにあの道具を彼らに渡るように仕向けてみた。
本来ならばあの品は実力のあるものが手にしなければ瞬く間に力にのまれ、
道具そのものに魂ごと消化吸収されてしまう。
それでは用途を成さないのでこのたびだけは、ロキに関してのみその能力が発揮しないように細工している。
他に利用しようとすればその細工は起動せずに使い手の力によってはそのまま消滅してしまう。
それは使い手の意識次第。
欲を強く願うか、それとも強い力に願うことは自分達の定義に反する。
その倫理を守るか。
その判断は彼らにゆだねている以上、ディアとしては成り行きを見守るしかない。
うまくいかない場合はそれこそすべての生命を巻き込んで対策を考えなければならないであろう。
すくなくとも、自分自身の消滅、という可能性を視野にいれてでも行動せざるを得ないのだから。
そんなディアの心情を知るはずもなく、元気よくディアの意見に賛同し、

そのままSGエリアの観客席から他の場所に向かうためにと【道】がある方向に足をむけてゆく――

「さあさあ、よってらっしゃい。大会にいくのに一人に一つ、お守りどうだい！？」

エリアごとに別れて行われる、実戦的に近い分野。

その分野における部門別大会もおわり、今からがこの大会のダイゴミともいえる盛り上がりどき。

戦闘部門が一番時間がかかる大会であり、ゆえに他の部門もほぼエリアごとの大会は終了している。

芸術部門などにおいては、それまでの作品は別の場所にと移動され、誰もが観賞できるようにきれいに並べられ設置されている。

芸術、美術部門等に関してはそれらを総合的にみて、第三者が投票を行い、

もっとも点数の高かったものが統計、五十名ほど選ばれ決勝戦に挑むこととなる。

五十名、という数は、このたびの総数エリアが二百あることから、エリアごとの大会に優勝し、さらに二度ほど勝ち進めば上位に組み込むことが可能。

しかし、芸術、美術、建築部門などに関しては、全体的な総合判断となるがゆえに、

それぞれのエリアでの大会、というよりは二百あるエリアの大会すべて、という形をとっている。

それでも全員が全員、すべての作品を第三者に委託しその出来具合を問いかけるわけにはいかず、

まずエリアごとに振り分けられた存在達の総合判断がなされることとなる。

一種の試験のようなもの。

それに勝ち進むことにより、自らの腕を発揮する場に勝ち進む権利

がえられる。
材料などは基本、決まっているものの、それでも申請すれば必要な材料は揃えてもらえるこの大会。
ゆえに今まで挑戦していなかった材料で芸術を追求した建物などを創る存在などもすくなくない。
建物、といっても人数が人数。
ゆえに手先の器用さをかなり問われる代物となる。
つまりは現物の１００文の１以下の作品が求められる。
細かくそれでいて緻密で精密な造りをしている作品ほど評価は高い。
中には普通の大きさで創りつつ、ある程度出来上がったらそのまま圧縮術を用いて、
その作品全体を小さくする参加者もいるにはいる。
作品を小さくみせる方法は参加者の判断に任せられているので各個性がよくあらわれる。
ゆえに、建造物関係、もしくは芸術関係部門においては、
それらを展示している場所が一番人の出入りが多い、とされている。
実際、大会をみにきたものたちは、話しの種に、とこの場を訪れるものが少なくない。
そんな会場に入る道の一角において、少しかわった露店らしきものが開かれている。
いつもこの場に露店が開かれることはあまりなく、それゆえに人々が思わず足をとめる。
大会が進むにつれ、直接にこの会場に続く【道】も地上において設置され直接展示会場に入り込むことも可能。
しかし【証】をもっていない存在は展示会場にははいれはすれども、他の会場に移動はできない。
彼らが身聞きできるのは誰でも自由に入ることが許されている【展示会場】のみ。
道も会場となっている建物の中にあり、
この建物は【道】を通してでなければ他には移動できない造りとな

っている。
そんな【道】からでて少しいった先に見慣れない小さな露店が一つ。
「ほう。何を売っているんだい？」
滅多にない露店に興味をひかれた展示会場を訪れた客がその露店を覗きこむ。
そこにはいたるところに様々な品が並べられており、ちょっとした小さな袋のようなものも垣間見える。
「お客さん。運がいいね。特別サービス期間中、だよ。
ずばり、願いをかなえる石。とでもいっておきましょう。
効果は願いの力具合によってかわってきますけど。
まあ、だまされた、とおもって話しのタネにいかがです？
金額は水晶貨一枚。どうでしょう？」
普通に生活していれば水晶貨二十枚で衣食住、そのすべてが賄える。
最小単位ともいえる金額、それもたったの一枚。
確かに話しのタネにはいいお土産になりそうである。
効果は別に期待などしていない。
ただ、大会の会場で話しのタネに品物をかった、という事実があればよい。
それにざっとみたところ、願いの石の形は様々。
「すべて、一枚、なのかい？」
「ええ。ただいま開店記念セール中でどれでも一枚、です。
ついでにかっていただけますと、石をいれる袋もおつけしております。
何でしたら袋にお客さん希望の文字を刻むこともできますよ？
そちらは別料金。
これもまた水晶貨一枚かかりますが」
見本、なのであろう。
露店の背後らしき場所にいくつかの大小の袋、色とりどりの袋がさげられており、

それらに様々の文字や文様が刻まれているのがみてとれる。
どうやら任意ではあるが、希望の絵柄などを袋を選べば刻んでくれるらしい。
「では、この猫型のやつを二つ、と、袋には名前を刻んでくれるかい？」
「はい、まいど～！さあさあ、他の方々もみていらっしゃい、よってらっしゃい！」
小さな露店ではあるが露店の中には最低でも三人はいるらしく、一人が売り子、そして一人が金額を取り扱っているのか金銭管理をしており、
もう一人がせわしなく袋に何やら刻み込みこんでいる様がみてとれる。
それぞれがどこにでもいる平凡な青年であり、それぞれ目立った特徴というものがまったくない。
やがて出来上がったらしく、名前を刻んでいた定員が、
出来上がったらしき袋を金銭を管理している存在にと手渡す。
そして手渡された袋の中に、客が選んだ石をそれぞれに入れきゅっと袋の口を縛りつつ、
「はい。お待たせしました。全部で水晶（クリスタ）貨四枚、ですね」
にこやかな営業スマイルを浮かべつつも、目の前の客にと手渡す露店の店員。
小さな袋の中にかわいらしいきらきらと輝く猫型の石。
さらに袋には希望通りの子供たちの名前。
選んだ袋は子供たちのイメージにあわせて花柄のもの。
袋の上部にはこれまた客が選らんだ紐が結ばれており、
かわいらしい蝶々結びが施されている。
この出来で水晶（クリスタ）貨四枚、とは話しのネタとはいえ安い買い物。
そう満足しつつ代金を支払い、子供たちにいいお土産ができた、と喜びつつその場をあとにする客の一人。
一人、また一人とその店に目をとめ品物を購入してゆく様が、しば

しの間見受けられてゆく……

「【鍵】は順調に広まっているようだな」

「はっ！」

対峙するように座っている人影が二つ。

その目の前にはそれぞれの界における状況が記載されている報告書が積まれている。

報告書、といっても【扇動者】達から報告をうけたものをまとめた資料に他ならない。

「しかし。かの力を利用して、石にあのような制約をつけるとは、さすが、だな。

　我らテケリ・ショゴスは今まで力に物をいわせてきたからな。

　ハスター・ホテップのヤツラは知力で勝負、ということか」

道具を利用したすべてを巻き込んだ陽動作戦。

範囲が広ければ広いほどその目的は曖昧になり、一番の目的を達しやすくなる。

「【印】の役目をも兼ねていますので、基本、そのままそこに移動するのは可能、かと。

　肉体ごと移動は不可能でも、【印】を目指せば精神での移動は可能、です」

そして器をのっとり、その場にて肉体を得ればよい。

それだけの力は彼らにはある。

【印】を目安にして、そのあたりのまだ形になっていないゾルディ達をとり憑かせることも可能。

魔界においてはすべてが力がモノをいう。

ゆえにどちらかといえば知力というよりは今まで力のみでコトを進めていたのも事実。

しかし時として策を講じて裏をかいたことも多々とはあったが。

「我らの一番の目的は、魔宮の奪取。そしてすべての管理を一手に我が組織の手にすること」

噂では、魔宮にはこの魔界すべてを見通す部屋があるといい、
そこにたどり着いたものは、魔界すべてを統べる力を有する、ともいわれている。
嘘かまことかはわからないが、すくなくとも、何かとてつもない力がそこにあるのは間違いないのであろう。
大魔王が鎮座しているというが、その当の大魔王は今現在、玉座にはいないらしい。
ならばこの機会を逃せば次なるチャンスはいつ訪れるかわからない。
そしてその思いはどうやら天界側のほうも同じらしく、
天界のほうも同じような言い伝えがあるらしく、ハスター・ホテップの構成員達もその力を欲している。
天界と魔界。
それぞれに異なる界ではあるが、求めているのは光と闇、その違いだけで基本は同じ。
天界側からは知識を、魔界側からは力を。
光は闇に弱く、また闇は光に弱い。
伊達に反旗組織を立ち上げているわけではない。
構成員達はすくなからずそこそこの実力をもっている。
構成員の中には使い捨てともいえる下っ端がいるにはいるが、
彼らは基本、上層部のあり方すら理解していない。
それでも、規則から抜け出して自由にしたい、と欲望を抱く輩は多々といる。
そういう存在達がそれぞれ、反旗組織に加わっている。
それは【世界】ができてしばらくして自然と出来上がった組織。
組織に身をおくことで世界の仕組みと成り立ち、そしてあり方を理解するものもいれば、
そのまま自身の欲望のまま、その事実に目をむけないままに突き進むものもいる。
そして…このたびにおける組織の上層幹部達はまさに後者。
数千年から数万年に一度、上層部の顔触れは一新される。

それがなぜなのかは、組織の存在達とて理解していないが。
理由は至極単純極まりない。
何しろ数千年から一万年。
ずっと裏から世界をみていれば、世界の【あり方】というものが自然とわかってくる。
自分達がすべて手の上でころがされていた、と判ったとき、ほとんどのものが自暴自棄となる。
そのまま完全消滅を願うもの、それでもあがこうとするもの。
それは個々の性格にもよるが。
そういった理由からも、ずっと同じ存在達が組織のトップにいた試しは【仕組み】が出来上がって後、
一度たりとて起こりえていない。
すでに布石はまかれた。
自分達の力だけでここまでこれたわけではないので多少の悔しさはあるが、
それでも、結果がともなえば後はどうとでもなる。
「すでに、種はまかれた。…さあ、我らの世界の始まりだ！」
ちょうどいい時期にいい神具が手にはいったものだ。
しかも天界側の反勢力と手をくめたのも功を奏した。
あとは、ただ、きっかけをまつのみ。
すべてに種がいきわたったその時こそ、世界は新たな歴史を刻み始める。
その光景がありありと浮かびにやり、と笑みを浮かべる彼ら達。
同時刻、まったく同じような光景が天界側でも見受けられていたりするのだが。
まさに表裏一体、とはよくいったもの。
それぞれが申し合わせたわけでもないのに同じようなやり取りをしている彼ら達。
魔界、そして天界のとある一角においてしばしそのようなやり取りが繰り広げられてゆく――

「お…おいしいっ！」
思わず顔をほころばす。
これで水晶貨（クリスタ）一枚づつ、というのは破格すぎる。
基本、この大会において料理部門などに登録している参加者達は、
それぞれその料金を一定とし第三者の投票を得て優勝を取り決める。
投票形式は至極簡単。
それぞれの店舗に設けられている【水晶珠】に自らがこの店の味ならば何点。
そう念じることにより投票したこととなる。
ちなみに、基本点数は一人あたり一店舗につき百点。
その点数を振り分けることによりその店の味などを評価する。
そしてまた、評価者であり客でもある一般人達はといえば、
どの店に評価をいれたかわかるように、このエリアに入ったときに特殊なカードを手渡される。
水晶に点を投じた時点でカードにもその情報が記載され、一人当たりが何店舗に何点いれたか。
それらが一目瞭然でわかるようにとなっている。
また、手渡されるカードは情報を共有する効果ももっており、
エリアの総合管理場、兼、試合結果一覧場に随時情報が伝わるようになっている。
管理場にいけばどの店が今現在、どれだけの点を獲得しており、
またどの店が一番人気がないのか、など一目瞭然となっている。
そしてそれらの店の位置はカードの裏に書かれている地図において、
どの店にいきたいか念じることにより、その店舗が光り位置を指し示す仕組みとなっている。
自分達のいる位置は青、そして店舗の色は赤。
色別に区別してあり、取り扱い方がわからないものにも利用できるようになっている。

また、視界がみえない存在からしても、それらの光景は直接、脳波に伝わるようにできており、
ゆえに視えなくても情報は随時把握できるようになっている。
「ここのエリアは全部水晶貨（クリスタ）一枚のところだからねぇ。
　場所によってはもっと高い場所もあるけど。私たちの収入ではこのあたりが無難でしょ？」
おもいっきり高級料理ともいえる白水晶貨（ホワクリスタ）一枚以上とかいうエリアもある。
味、そして高級食材をたっぷり使われた料理を好むか、
それとも一般に出回っている食材でより工夫し味を追求するか。
好みは客でもある評価者一人一人異なる。
そして、ディア達はといえば、当然後者。
そもそも自由になるお金にも限りがある。
ゆえにどうしても金額の安い【創作料理エリア】にやってきている今現在。
各店ともそれぞれの独自の工夫と味付けがなされており、低料金にもかかわらず、
かなり満足できる品々が店ごとに出店されている。
しかもそれらはその場で料理するもの、もしくは保存のきくもの。
店により売りだされている品は様々。
親切な場所は造り方などを一般にも公開している店もある。
ゆえにこのエリアは毎年、一般人…特に主婦層などにかなり好評をえているのも事実。
何しろ少ない食材、さらには安い食材でおいしい品がつくれる。
これほど便利で役にたつ情報はない。
中には携帯食料などを扱っている店もあり、各店とも味付けやその保存状況。
それらで勝負をかけている店もある。
この大会である程度の点がかせげた店、そして品物は大会に優勝せずとも、

うまく顧客などがつけばそのまま普通に市販することも可能。
何しろ勝手に噂は点をつけてくれる客が広めてくれるのである。
店側が何らかの広告などをだすこともなく、こういった場で認められた。
それだけでかなりの話題性にのぼる。
この大会で独自の料理を展開し、優勝はしなかったものの、一財産を築いたものも多々といる。
ゆえに参加者達も力をいれる。
その結果、料理の質も格段にあがる。
まさにいい相乗効果をかもしだしている。
「う～ん。そのあたりによく生えている薬草と食べられる草花。
そしてポイントにハーブとキノコ類を加えているのがかわってるわね」
キノコの歯ごたえが他の草花の味わいをより引き立てている。
ぴりっとした味わいのあとにほんわりと広がる甘みと、そして香り。
加えられているハーブの種類によっては、味もまたかわってきており、
たとえば春を代表する花でつくられた品はまるで春の陽だまりで食事をしているかのように錯覚に陥る。
香りとは脳に直接作用するものであり、ゆえにその効果も比較的高い。
「さっきの場所のは果物と穀物をうまく揚げてあったしね」
「人間界の食べ物っておいしいから好き～！」
ディア、ケレス、そしてヴリトラ。
それぞれがそれぞれに思ったことを口にする。
霊獣界においての食事は基本、周囲の大気に満ちた【力】ですむことから、
ヴリトラはこういった味のある食事をとても好む。
時折、自ら何かを摂取することはあっても自ら作ろうとせず、基本誰かに頼む形式をとっている。

いろいろと創意工夫、という点では
霊獣界の存在達は人間界の存在達に遅れをとっている、といって過言でない。
逆に天界などは、人間界にまけじ！と半ば意地になり品種改良などを徹底して行っていたりするのだが。
その結果、とてつもない生命が生まれていたりするのは知る人ぞしる事実。
様々な特性をいれてしまったがゆえに手のつけられなくなってしまった植物も多々とある。
どの界においても熱中し何かを極めよう、とおもう存在達は時として暴走する。
それは、人だけであらず、神や魔王、そして精霊といった存在とていえること。
「そういえば、いつもヴーリちゃんは基本、何をたべてるの？」
彼女が竜族、というのはとりあえず納得はした。
その竜の形体をみたことはないにしろとてつもない力をもっているのは明らか。
「普通は何もたべなくても周囲の気が満ちていれば問題ないからね。
だからこういった味のある食べ物ってものすっごく美味しく感じるの。
まあ、この場合はこれらの命を奪っていることには違いないんだけど」
そもそも料理する段階で、食材となったモノたちは嫌でもその命を閉じる。
それはどのような【食材】においてもいえること。
命はめぐる。
何かを食べる、ということはそれらの命によって生かされている、ということに他ならない。
そしてそれらに感謝することにより生じる【心】は【力】となり、
【感謝の念】として世界に広がる。

その念の恩恵をうけて、新たな精霊などが誕生することもある。
それらの生なる念によって生まれた存在のことをまとめて【ロア】と呼び称す。
その姿は基本となった念に忠実であり、ゾルディと対局の存在、といえる。
ロアの基本の誕生の仕方は、ゾルディと変わりない。
というか、ロアもまたゾルディと同一の存在ではあるものの、基本分けて呼ばれている。
意思が新たに設定した【理】のうちの一つが【ゾルディ】であるならば、
【ロア】、という呼び名はそのありようから新たにつけられた名称、ともいえる。
ロアもゾルディと同様に様々な生命隊が抱く、強い思いが一定以上になると生み出される。
その思いの基本となる心が大概感謝の心で作られるもの。
それが【ロア】。
基本的には同じ【理】に属するのだが、【ゾルディ】のほうは比較的【負】の方面にその用語は利用される。
今でこそほとんどのものが、【ゾルディ】は負の力の結晶、最悪の塊。
そう捉えているがそのありようは多種多様。
ただ、あまりにも負の力の結晶である個体が多すぎたゆえにその名称が負に傾いてしまっただけのこと。
「…周囲の大気っておいしいの？」
空気においしい、まずい、があるのかよくわからないが、ふと素朴な疑問をといかけるケレス。
「かなり違うよ？まあでも、やはり味のついてるほうが私は好きなんだけど～。特に甘いものっ！」
いつも悪意を主に喰らっていればときおり甘いものもほしくなる。
「そんなことより、次はどの店にいってみる？」

このまま話しを続けていればまちがいなくヴリトラは墓穴を掘る。
そう確信がもてるからこそわざと話題をかえるべく話しかけるディア。
「そうね。次は…あ、ここ！今のところ第一位になってる！いってみよ！」
手渡されているカードの裏の地図には、上位十番以内に入っている店には番号が映し出される。
今現在、どの店が一番人気を誇っているか点数をつける側がすぐにわかるようになっている。
「それじゃ、いってみましょ！」
「あ、あとで携帯食料の店にもよろうね！」
安い金額で携帯食料が買えるというのはかなり心強い。
携帯食料は様々な用途に役立つ。
特に自力で生活資金までひねりださなければならない貧乏学生には心強い味方といえよう。

大会の会場の中で不穏な空気がゆっくりと確実に広がりをみせているそんな中、
ディアとケレス、そしてヴリトラのお店めぐりは
しばしのあいだ、尽きることなく繰り返されてゆくのであった……

光と闇の楔　～お祭り騒ぎ最中の出来事～（後書き）

次回でようやく、第一回目の襲撃開始！です。
でもそれはさらっといつものごとくにオブラートに流します。
あと、ヴルド王国の各国侵攻、ですかね。
このギルド協会主催の大会をかわきりに、世の中は戦乱一直線になる予定。

光と闇の楔　～混乱は静かにゆっくりと……～（前書き）

前回、襲撃、といったのにほとんど襲撃になってない…ラストにちらり、とのみ……

光と闇の楔　～混乱は静かにゆっくりと……～

「今年はなんかかわった存在がおおいわね～」
日を追うごとに、異様にハイテンション、とでもいうべきか。
周りがおもわず引くほどの興奮状態になるものが日々増えてきているような気がする。
時にはどうやったのかはしらないが、大会会場の中に乱入した観戦者達もいるほど。
しかし、本来、会場となっている闘技場等と観客席側は結界で区切られており、
また、出入りするためにも【参加証】を持っていない存在は通ることのできない【道】のみで区切られている。
にもかかわらず、乱入した、という話しをここしばらくよく聞きだした。
まあ、毎年何かしら〝かおこるこの大会。
ゆえに参加者、そして観客たちもいつものこと、としてあまり気にはとめていない。
そもそも、何かがあれば運営側が何か対処するであろうし、
またこの空間が何かしらの反応を示すはず。
それがない、ということはいつものちょとした出来事なのだろう、
そう簡単に切り捨てる。
しかし、彼らは知らない。
その事実が運営側にも、この空間にも認識されていない、というその事実を……

…～

ざわざわざわ。

いたるところから人のざわめきが聞こえてくる。

大会が始まり、すでに会場の外では半月、という時間が経過している。

それにあわせ、そろそろ始まるであろう決勝戦にむけた様々な取り組み。

そしてまた、すでに点数があまり入らずに脱落した料理部門や美術建築部門等。

つまりは脱落した参加者達がそれぞれの町にと戻り、

大会で使用した作品の数々を実力者の許可のもと、それぞれ販売、展示しはじめるこの時期。

大会となっている会場も、そしてまた会場に行かれない存在達も一番盛り上がりをみせる時期でもある。

第二月【アイヤル】。

そろそろ月も半ば、ということもあり、咲き乱れていた花のいくつかは散り始めているのが見て取れる。

第三月【シマヌ】に入れば場所によっては雨が多発しはじめ、場所によっては暑さが厳しくなってくる。

ギルド主催の大会が行われている最中では、各国ごとの移動もあまり制限されておらず、

ゆえにこの時期に今のうちに他の大陸や、もしくは大陸の別の場所に移動する存在も多々といる。

同じ大陸内においても場所によってはまったくもって気候が異なる。
それがこの世界のありよう。
一年中寒い地域もあれば、一年中、熱い地域もある。
テミス王国はその中間に位置している王国であり、一年を通じて基本、四季は存在している。
海からも多少離れているものの、海上で毎年のように発生する嵐の直撃を受ける国の一つ。
それでも精霊達の力の加護により被害はほぼなきに等しい。
ふわり、ふわりと淡く桃色の花びらが周囲を舞う。
桜、と呼ばれるこの花は季節ごとに淡い桃色の花をつけ、ほんのひと時咲き乱れ、
はかなくそのまま散ってゆく。
かつてこの種類の樹木は自ら子孫を残すことはできなかったが、
今の地上にある樹木達は自ら子孫を残すことができる。
淡い桃色の花をつける樹が雌、そして赤い花をつける樹が雄。
受粉した花はやがて実をつけたねを成す。
種から成木になるまで長い年月を必要とするがその花の特性と色合い。
そして匂いから各界の存在達に好まれている花の一つ。
当然、このテミス王国にもこの木々は至るところに植えられており、
この時期、ちょっとした淡い花びらの絨毯を歩いているような錯覚におちいるほど。
花に覆われていた木々はゆっくりとではあるが緑に変化してゆき、
いずれはやがて今度は緑の木々が町中を覆い尽くすであろう。
町の至るところに甘酸っぱいような匂いが漂うそんな中、
路上には大会にて結果を残せずに舞い戻った参加者達がそれぞれ思うがままに露店を開いており、
行き交う人々が物珍しさにそれらの品にいろいろと手をだしている様子がいたるところで見て取れる。
「しかし、今回の学生さん、頑張るね～」

唯一、一名のみいまだに勝ち進んでいる生徒がいる。
その噂で町中はもはやもちきり。
何しろエリア別の大会を得て本当の意味での実力戦に勝ち進んだ生徒など今までほんの一握り。
それも大概は特階位と呼ばれている学校の中でも最高峰にいる存在達のみ。
しかし今回勝ち進んでいる生徒はといえば、噂では普通の学生に過ぎないとのこと。
何階位の生徒かまでの情報は流れてきていないが、すなくなくとも、十二階位以上、一階位以下、ということは判っている。
ゆえに盛り上がらずにはいられない。
やれどこかの王国の関係者だの、やれ実は別の界のものが留学してきているだの。
噂は噂をよび、大会における賭け事をさらに盛り上げている。
事実、ギルド協会学校…通称、学園から参加した生徒で今のところ勝ち残っているのはその一名のみ。
しかもエリア別の大会を突破しただけでなく、これまで二度行われた戦いにも勝ち進んでいたりする。
大会を実際に見に行った存在がいうには、まだ歳ははもいかない少女だ、ということ。
それらの事実もあり、このたびの大会における盛り上がりは異常なほど高まっている。
「魔界においての本戦はビトルという青年が戦闘部門を勝ち進んでいるらしいな」
並みいる魔族を押しのけて、今のところ連勝中、らしい。
対峙する相手はもののみごとにほぼ一瞬のうちに決着がつくと噂をきいた。
しかし魔界に住まう存在達の容姿は実年齢とは全く異なる。
それは周知の事実。
たとえば子供の姿をしていても、かるく齢一万年以上生きている存

在も多々といる。
見た目にほぼだまされる人間達からしてみれば予測不可能であるからこそ逆に楽しめる。
ギルド協会本部にいけば各界における大会の様子を視せてもらうことは可能ではあるが、
それにはかなりの大金を擁する。
各界混合大会が執り行われ、それぞれの分野における決勝戦については、
各界の【空】がそれぞれの決勝戦光景に移り変わり、誰もが【視れる】仕組みとなっている。
さすがに料理部門の決勝戦などに関しては、映像はながれるものの自分達では食べられない。
という無念さと理不尽な怒りが視ている存在達の心を占め尽くす。
ゆえに、新たに作られた【規定】にて、料理部門に関しては、見たいものは先にギルドに申請する。
という形をとることでどうにかそれらの不満を解消するに至っている。
つまり、見たい存在達には視れるとある特殊道具を授けることにより、
それを通じて決勝戦の様子を垣間見ることができるような仕組みとなっている。

「魔界の戦闘部門はそのビトル選手で優秀は決まりかねぇ～」
「地上界の優勝者はこのたびは誰になるのかね？」
「前回は竜の一族がこっそりと紛れててその竜族が優勝したよな？」

それは去年のこと。
自分の力が人間達の間でどこまで通用するか試したい、といいだした若い竜がおり、
そのままこっそりと人間界の予選に参加し、そのまま決勝に勝ち進

み、結果優勝を果たした。
優勝した後に、優勝者がじつは竜族であったとわかりちょっとした騒ぎになったのは記憶に新しい。
予想外の出来事がおこる。
それがこのギルド協会主催の大会のダイゴミともいえる。
少なくとも毎年、どこかの界においてそういった予測不能な出来事が少なからず起こっている。
噂ではかつて魔界においてそれぞれの魔王達がこぞって実力戦！とばかりに参加し、
とんでもない結果になった大会もあったらしい。
また、地上界においても各国の国王達が自分達の国の戦力が一番！とばかりに腕利きの存在達を大会に送り込み、結果として大会の場が各国対抗戦力大会になり果てたこともある。
予想外のハプニング。
それらもまた大会の楽しみ方の一つ。
ゆえにこの大会の中で何が起こってもあまり人々は動じない。
むしろ何かあって当たり前、という感性がヘタに根付いていたりする。

だからこそ…といえるのかもしれない。
その異変に対して、すぐさまに反応できなかったのは……

「き…きゃぁぁっっっっっ！」
周囲の空気を響かせるほどの悲鳴が周囲に響き渡る。
しかしその悲鳴に気付いたものはまったくいない。
「…な…どうし…て……」

迂闊だった、としかいいようがない。

よもや守るべき民がきっかけとなる品を持ち込むなど。
夢にもおもわなかった。
気がついたときにはすでに自らの存在は完全に包囲されており、
何重にも張られている結界。
周囲からの力の補充もままならない。
そんな状況で攻撃されれば、いくら自らが精霊だ、とはいえ……

「安心しなさい。あなたのかわりは我々が仮初めではありますが勤めてあげますよ？」
目の前にてにこやかに黒い、しかも自分と全く同じ容姿をしている存在がそんなことをいってくる。
何が目的なのか。
自分のフリをして、民に何を求めるつもりなのか。
自分はこの地にいきる存在達を守る役目があるのに。
だけども、力は急激にと失われてゆく。
そのままその場から先ほどまで悲鳴を上げていたはずの人影ははじけるように書き消える。
まるで光りがはじけ、周囲に溶け込んでしまったかのごとくに。
「さて…しばらく、我々が代理を務める、としますかね？
　愚かなものたちは、自分達を守護しているべきものがすり替わった、といつ気づくでしょうか？」

人々は今行われている大会のことで盛り上がっている。
その結果、感化されて騒ぎだす存在も多々といる。
ゆえに多少の悲鳴などがあがっても、誰もがこの時期のみはあまり関心をむけない、という側面がある。
何しろ【水晶珠】を覗いている【観客】達が思わず叫ぶ、という光景はこの時期よく見受けられるもの。
ゆえに、本当の意味での悲鳴や叫びは実際、見落とされがちになってしまう。

それを考慮して自衛団といった組織もそこそこの村や町などでは構成されてはいるが。
しかし、よもやその被害が自分達の住まう地を守っている【守護精霊】に向かうなど。
一体誰が想像できたであろう。
まさに盲点といえば盲点をついた攻撃。
しかしそこに住まう存在達は気付かない。
襲撃した存在がその【守護精霊】のフリをして存在している以上、彼らにはその違いがわからない。
コロリ、とその場に転がる小さな虹色の球体。
【精霊珠】、とも呼ばれているそれは、
精霊が力を失い実体化はともかくその存在すら保てなくなったときにあらわれる。
精霊そのものが珠の状態と化したもの。
基本、虹色の淡い光を放つ珠であり、物珍しさからとある販売経路などでは非常に高く取引される。
精霊を糧とする悪魔などにこの珠を奉納することにより、より強い力を借りうけることもできる。
ともいわれている品。
しかし、噂、とは恐ろしいものでこの珠のもつ本当の意味を確実に見知っているものはほぼいない。
それでも精霊界や天上界、そして魔界といった界においてはまだよい。
彼らは精霊達の存在を肌で感じることができるのだから、視ただけでその本質がわかる。
しかし、地上界に住まう、特に人間達はそんなことは判らない。
ゆえに、願いのかなう珠だのという噂がいつのまにやら一人歩きし、一つの珠だけでかなり高値で取引されている現状がある。
そして、人、とは欲にかられると何をするかわからない。
真実を知っていてもおそらくは同じ行動をしでかすのかもしれない

が。
知らないことは罪、無知であることは罪である、というまさに典型的な例。

「ん？なんだ？この珠？おお！こりゃ、高くうれそうだな！」
ころり、と町はずれに転がる小さな珠を見つけて通行人がそれを拾い顔をにやけさせる。
彼は知らない。
その珠が自分達の町を守護しているはずの守護精霊の仮そめの姿であることを。
そして…自分が行おうとしようとしていること。
すなわち、守護精霊をよそに売り飛ばそうとしている、というその事実を。
本来、簡単に守護精霊の役目を担っている精霊達はそう簡単にやられるような輩ではない。
しかし、このたびにおいては、自らが守護している地に住まう存在達が、
なぜか神気を帯びた、しかも悪意ある念すら纏っている品を多数もちこんでしまった。
悪意の念には精霊達は極端に弱くなる。
その身をもってして浄化を図ろうとするがゆえに、どうしても力が一時的にそがれてしまう。
その悪意の念が人あらざる、しかも神のものとなればその力のそがれようは並大抵のものではない。
そんなときに攻撃をうければどうなるか…結界はいうまでもなく。
「ふふ。愚かな人間よ。自分達の守りとなるべきものを自らの手で手放すがよい」

自分達が手を下すまでもなく、精霊たちが守っていた生命に自らの身を売られる。

その悲嘆はおそらく果てしない。
うまくすれば堕ちた精霊すら手にはいる可能性もある。
精霊がその心を負の心で染め上げ、あるべき姿が堕ちる。
その精霊は強力なる【災厄】として一つの存在のみで簡単に一つの国程度ならばかるく壊滅させられる。
堕ちた精霊…【堕落精霊】が作れればよし、そうでなければ守護者がいなくなるだけでもよし。
守護者がいないだけで彼らの計画はすんなりと事を進めることができる。
何ものにも邪魔されず。
仮初めに存在しているように見せかければすぐには本来の存在がいなくなったと気づかれないであろう。
どちらにしても、決行まであとわずかな期間。
それまでにいくつもの町、そして主要都市を落とせばよい。

「天界のほうはなかなか手こずっているようだが、さすがに人間界はちょろいな」
あちら側は例の品をなかなか上手に配りおえていない。
無料で配ったとしても、その力に勘づかれては兵士を呼ばれその場から退散せざるをえなくなる。
できうれば天界、魔界、そして地上界においてすべての種をまき終えて行動を起こしたかったが。
とりあえず地上界だけでも先に制圧しておいたほうが今後のためにはいいのかもしれない。
そう上層部の存在達は判断した。
そして、今のこの時期がその計画を発動するのに最もふさわしい、と。
「さて…しかし、王都、とよばれている地の精霊達は手ごわいから…な……」
王都を守護している力ある精霊達をも精霊珠に封じることができれ

ば、計画は成功したようなもの。
もっとも、それ以外の精霊などは力があってなきがごとし。
彼ら、天界人、そして魔界人にとっては精霊と対峙するなど赤子の手をひねるより簡単。
精霊達と互角、それ以上にコトを構えることができるものがこの計画に参加している。
そして、精霊達とコトをまじえることのできない力のないものたちはといえば、
種をまく陽動員として行動してもらっている。
すでに、布石はまかれた。
あとは、ただゆっくりと、ゆっくりと包囲網を狭めてゆくのみ……

「こ…こんなのが、出回っている…というの…か？」
先日の会議から戻り、時間が動き出し、その場でうけた報告。
それはまさに、さきほど時の狭間にて聞かれた事実を裏付けるもの。
あの場に長くはいられないことから、とりあえず後日、改めて代表者達が話しあう。
という約束をとりつけた。
会議が行われるのは、大会が一番盛り上がる【アイヤル】の最終日近く。
ヴルド国王は早々に退去してしまったので合意は得られなかったものの、
その他の存在達の合意はどうにか取り付けられた。
そして時の狭間から戻り、それぞれの場において止まった、否、止められた時は動き出す。
時空神クロノスが時を止めていたのは、彼らに関する周囲のみ。
とはいえあの場の時間率を少しばかり操っていたので時間をとめていてもさほど問題はおこっていない。

目の前にもってこられたのは、小さな石のはいった小さな袋の数々。
何でも天界の中に位置する町の中において突如として【堕烙者】が発生した。
ゾルディとなるべき気配はまったく周囲に視えなかった、というのに。
取り込まれてしまった天界人はそのままゾルディの贄となってしまったらしく、
堕落者を倒しても、その命が戻ることはなく、そのまま体ごと霧散し消滅した。
「…この石には、神の力により不可視結界、それだけではない……
【悪意】を増幅する力と、そして【憎悪】をあおる力……
さらには、【ゾルディ】を創りだせる力までもが組み込まれている…？」
このような代物ができる存在は一人しか思いつかない。
かつての戦いにおいて、彼はその能力を発揮して天界中、はては他界までをも恐怖に陥れた。
「…ロキの魂の…欠片…かっ！！」
そう理解するのにさほど時間はかからない。
欠片、というよりはどちらかといえばそれらいくつかの能力のみの複製の欠片、といっていいであろう。
しかし、ロキという神そのものが、自分達神々とは少し違った位置にいたことを彼らはなんとなく知っている。
一度、補佐官に聞いたことがあったのだが、彼の神格は他の神々とはまた異なって誕生している。
そう説明された。
その異なっている、という部分がどこまで異なっているのかわからないが。
目の前に持ってこられた品からは、かなり注意しないとそれに含まれている力は読み取れない。
ただの石、としか視えないのがまた怖い。

つまり、かなり実力のあると自負している自分ですら見分けることがかなり困難。
とすれば他の神々、しいては力のない存在達が手にしても見分けることはまず不可能。
そして…この品の恐ろしい所はもうひとつ。
ざっとみたところ、身に着けているものに対して知らず知らずのうちに力が染み込むよう設定されている。
つまりは手にしているだけで【堕ちる】ように仕組まれている。
そんなものが多数、出回っている、という報告は驚愕以外の何ものでもない。
「ど…どこから、この品がでまわっている!?」
「それが、わからないんです。買った存在達はほとんど、正気を失っておりまして……
元にもどっても全員、それらに関してのことは覚えておりません」
彼らがどうやってこの品を手にいれたのか。
どうにか正気にもどった存在達から聞きだそうにも、彼らはまったくその間のことを覚えていない。
正気を取り戻せ、まだ普通に戻れた存在達はまだいい。
しかし、そのまま力に呑まれ、消滅していったものも多々といる。
「…ほ…他の界とも緊急に連絡を!これらの品が他の界にも出回っているとコトだ!」
まだ天界などにおいてはそこに住まう存在達が力があるからいい。
しかし、あまり力のない存在達が住まう地にこれらが出回ったらどうなるのか…
考えただけでも恐ろしい。
顔面蒼白になりながらも、ゼウスの悲鳴に近い声が響き渡る。
「オーディン。お前にも悪いがしばらく働いてもらうぞ!」
すべてを見通す目。
目の前のぱっとみため無愛想な隻眼の持ち主にと声をかけるゼウス。

その片目には眼帯がしてあり、常にその瞳を覆っている。
そのいつもは眼帯に覆われている中の眼には力があり、
すべての真実を見通す力を持っている。
ゆえにいつもは眼帯でその瞳を覆っている。
この力は、持ち主たるオーディンでもいまだにコントロールが正確
にできず、ゆえに封印している現状。
すべてを見通すことができるがゆえに、万能の神、ともいわれてい
る神、それがオーディン。
ゼウスの次に実力がある神といわれているが、その性格はかなり頑
固。
はっきりいってまったく融通のきかない性格の持ち主。
つまり、一度きめられたら、何があっても決められたまま突き進む。
ゆえに柔軟性を伴う責任者にあたる役目はあまり彼には向いてない。
何しろ自らの過ちや間違いなどといったモノですら彼は認めない。
否、認められない。
自分に絶対的な自信があるがゆえに、そういった類のものを一切受
け付けない。
かつてその信念から他界に侵攻していき、こっぴどく【王】から叱
咤されたことがあるほど。
「なぜに我が？」
そんなゼウスの言葉に半ば心外、とばかりにいってくるオーディン。
呼びだされ、何ごとかとおもえば何かよくわからない役目を押し付
けられようとしている。
「お主のその瞳と、それと魔術、それはロキに通じるものがあるか
らな」
「というか、ロキ？あやつは今は冥界でその魂を眠りにつかせてい
るのではなかったか？」
ゼウスはロキの説明をクロノスからうけたが、オーディン達はまだ
その説明をうけてはいない。
ゆえにオーディンの言い分も至極もっとも。

「…あ？…あ、ああ。そうか。…まずは、状況を説明すべく、ユグラシドル神議を提示する」

ユグラシドル神儀。

それは主要なる地位についている神々を召喚する世界に何事かおこったときに行われる会議。

ちなみに、会議の種類によってまた重要性が異なっており、

一番、会議の招集意義が高い会議が【ユグラシドル神議】。

次に【アスガルズ神議】、そして【オリュポス神議】。

この三つの順番において重要性が位置付けられている。

本来、ユグラシドル神議の招集は、【王の補佐官】、もしくは【王】自らが招集するものなのだが、

今現在、【王】、そして【補佐官】が行方不明である以上、その権限は仮初めではあるものの、

側近であるゼウスが一応その権限を握っている。

このまま自分だけの心に止め置いてどうこうなる問題ではない。

むしろ問題の種はすでにまかれている。

ならばみなと意見を出し合い、よりよい解決方法を見出す以外に他はない。

そう判断し、ゼウスが発した言葉は、何ごとか確実におこった、としかいいようのない会議の提案。

先ほどロキの名前がでてきたことといい、何かがおこっている。

それはわかる。

わかるが、ただしばしその場にて顔をしかめるオーディンの姿が見受けられてゆく……

『おおっとぉぉぉぉ！？これは以外、以外すぎる！！二百あるエリアから勝ち進んできた挑戦者達！

しかぁぁっし！突如乱入してきたたった一人に手も足もでない

でいる！これぞ番狂わせだぁっ！』
『わ～～！！』
会場にざわめきが響き渡る。
ＧＳエリア、戦闘部門。
その場にてすでに二度勝ち進んでいる参加者達の戦いが繰り広げられていた。
しかし突如として闘技場に乱入してきたのは獣のような姿をしている存在。
どこから乱入してきたのかはわからない。
わからないが、いきなり本当に突如として闘技場の中心にまるで湧き上がってくるかのごとくに現れた。
全身を真っ黒い煙なのか、毛なのかよくわからないもので覆い尽くし、
その姿は巨大な熊のようであり、それでいて猿のようでもある不可思議な姿。
通常ならばこんな存在、この場にいるはずがない、とわかるであろうが。
そもそも、ここは【地上界】における会場。
こういった輩は他の界にならば多々といれどもこの地上界の大会において出てくるべき存在ではない。
観客たちはといえば、おそらく幻影か何かを身にまとった大会主催者側が容易したイベント。
もしくはおふざけがすぎた客の一人、そう捉えているがゆえに驚くことなく逆に盛り上がりをみせている。
だからこそ、進行役の係り員もそのノリでそんな言葉を発していたりするのだが。
だがしかし、
「……ぐっ…な、なんだ！？こいつは！？」
「…って、うわぁぁっ！？」
戦いの最中、割り込まれた大会参加者達からすればたまったもので

はない。
術を放ってもことごとくその身にまとっているであろう、黒い何に吸い込まれる。
攻撃をしかけようにも、まるでその手ごたえは煙のごとく。
しかも、黒き何かに触れると同時、瞬間的ではあるものの、生気を吸い取られたような感覚に陥ってしまう。
そしてその感覚はそのまま体内にも侵食してくるかのごとくに、彼ら自身でもわからない不安が襲いかかる。
係り員の口調から、運営側がときおりときたま参加者に内緒で容易している大戦相手、ではなさそうである。
ならば、目の前のコレは？
この場にて戦っていたのは青年二人。
しかし今はその戦いの手を止め、二人同時に乱入者に対して攻撃をしかけている。
ソレが動くたびに足元が真っ黒く塗りつぶされていっているように見えるのはどういうわけか。
気のせい、ではすませない、何か。
しかし本能がこれは危険、と告げている。
何がどう、というわけではないが。
とにかく、このままコレを放っておいたら危険だ、と。
その思いは互いに同じ。
ゆえに互いに顔を見合わせ、
「まず、私があれを術で足止めしますから、あなたは攻撃を！」
「わかった！おそらくアレは闇。ならば剣技に光を乗せてやってやろうじゃないかっ！」
光の術を用いた攻防。
これが通用しなければ、彼らに打つ手は残されていない。
『おお！どうやら二選手とも何かしかけるようです！
　これはおもしろくなってきました！運営側からサプライズ攻撃者の報告はうけていませんが！

こういうこともありえるのでしょぅ！さあ、運営側が用意した敵に彼らはかなうか！？』

完全に自分達、運営側が容易した仮初めの敵、と思い込み、そのような説明を述べている進行係り。

しかし、彼は知らない。

この【敵】はギルド側が用意したものではない、ということを。

そしてまた…同じような光景が、すべての二百あるエリアで同時に起こっている、

というその事実を……

光と闇の楔　～混乱は静かにゆっくりと……～（後書き）

今回の重要用語?

※精霊珠

精霊が一時的に力を失い、珠状になったもの。

この状態になった精霊は外部からの干渉をまったくうけつけず、また力を行使することもできない。

力が満ちるまでは基本、この状態のままである。

珠状となり、周囲よりゆっくりと力を吸収して回復を図るための措置。

なお、周囲の状況によっては、堕ちた…すなわち、元の精霊でなくなることもあり

光と闇の楔　～混乱！大襲撃勃発～（前書き）

今回、ようやく各村などの襲撃の様子をちらっと小出し。
襲撃の様子はオブラート表現であるがゆえにあえて省略。
いや、さすがに人が燃えたり、挙句は乗っ取られて味方が敵にまわったり…
という表現は、全年齢対象を目指している以上、あまり好ましくないわけで
というわけでそのあたりは、さらっと言葉のみでそのうちに説明的に流します。

※　週間ユニークポイントが６００件超えとなりました。
見てくださっている方々、ありがとうございます！

「え？そんなサプライズ的なものは今回はありませんよ？」
思わず報告をうけてきょとん、とした声をあげる。
だがしかし。
「しかし、報告にあがってきましたが。特に戦闘部門等において。
　すべてのエリアで同じような襲撃者が乱入してきた、とのことです」
ありえない。
そもそも、大会の場となっている闘技場に乱入できるはずがない。
そこには精霊達の力をもってしっかりとした結界を施しているはず。
もしも結界を超えられるものがいるとすれば、精霊の加護をうけているものか、
あるいは、精霊達よりも上の力をもつものか、そのどちらかに限られる。
「それで…被害状況は？」
「どうにか参加者達が撃退したようですが……」
その報告をきき、ほっとする。
しかし、どうにも解せない。
「とりあえず、すべてのエリアに現状確認のために職員を向けてください」
この襲撃、この地上界エリアだけでなく他の界においてもあったという。
だからこそ気にかかる。
まったく同時期に同じような出来事が、すべての【界】においておこりえることがあるだろうか。
答えは…否。
「…何がおこってるんだ…？」

ギルド協会。
この場にあつめられている責任者達の会合において今後の対策を話しあわねば。
それでなくても先日報告のあった、クロノス神からの忠告をうけて集合をかけていた。
そんな会議の最中にもたらされた、このたびの一件。
自分達側、すなわちギルド協会側がときおり、参加者達に対して大戦相手を勝手に送り込むことはあれども、
このたびはそのようなことはしていない。
話しにはあがったのだが、なぜか守護精霊ティミよりこのたびだけはやらないでほしい。
そう懇願され、不思議におもいつつも、守護精霊の懇願を聞き入れないわけにはいかず、
そのような仕組みは取り入れていない。
だからこそ気にかかる。
そして他の界から入ってきた報告も同じようなもの。
この地上界だけでなく、他の界でも同じ戦闘部門に乱入者があった、とのこと。
それらはすべて参加者達に撃退されているらしいが。
何かがおかしい。
「…これも、クロノス様のおっしゃっていたのと繋がりがあるのでしょうか？」
天界、魔界の反組織メンバー達と、クロノス神がいっていた邪神ロキの能力を秘めた何かが関係しているのか。
この場でいろいろと考えても結果はわからない。
とにかく何よりも情報がほしい。
「今後のこともあります。とりあえず警備は厳重に、と各界にも報告をだしておきましょう」
「「了解」」
大会最中に何かあれば、その責任はギルド側が追うことにもなりか

ねない。
念には念を。
それがギルド協会が今日まで続いてきている根柢にある結束。
テミス王国、ギルド協会本部の最高幹部専用会議室においてしばし
そのような会話が繰り広げられてゆく……

光と闇の楔　～混乱！大襲撃勃発～

「なんか、すごいことになってたみたいだね～」

会場にもどり、思わず素直な感想を漏らす。
自分達が料理部門を取り扱っている出店の並ぶ場所に出向いていた
そんな中、
何でも黒い襲撃者が現れ、大会最中に乱入したらしい。
満身創痍になりながらも、乱入されたときに戦っていた参加者がど
うにかそれを退けたらしいが。
聞けばすべてのエリアにおいてその襲撃者は出現したらしい。

「同時期に現れたって協会側の用意したイベントなのかな？」
そんなケレスの素朴な疑問に、
「それはないでしょ。今回はそれはやってないはずよ？」

ディアはティミがギルド協会側に懇願したのを知っている。
何でも、自分達がいるのにそんなことをすれば大変なことになりか
ねない。
という危惧からその懇願をしたらしいのだが。

それでもディアがそれを知っても止めなかったのは今回のこの襲撃を予測していたがゆえ。
というか彼らの考えは判り安すぎる。
しかもその考えをおもいっきり保護、もしくは隔離していないがゆえにおもいっきり伝わってくる。
本当に自分達の作戦内容を知られたくないのならば、常にその意識を隔離していなければ意味がない。
その【器】が【内部】にある以上、自らの意思で隔離しないことには自然とその計画は伝わってくる。
もっとも、知ろうと思わなければ知ることもないのだが。

「今回、は？なら襲撃っていったい、何だったの？」
「たぶん、ゾルディの一種でしょ？」
ケレスの問いにさらっと答えるディア。

事実、襲撃した存在達の正体は、【ゾルディ】の分野に振り分けられる存在。
ロキの魂より複製された感情により誕生せし存在。
そしてそれらは【石】の中に封じこまれ、種として様々な場所にばらまかれている。
発動条件は至って単純。
【鍵】となるきっかけがあればよし。
そして大会の最中、しかも闘技場の中にそれが出現したことにも意味がある。
ほとんどの参加者はお守り代わりに【石】を購入している。
縁起担ぎ、とでもいうのであろうか。
話しのネタにもなるし、気休めにもなる。
どちらか片方が手にしていればそれだけで発動条件のきっかけとなる。
闘技場内。

戦闘が行われるに辺り、自然とその場に満ちる闘気は高くなる。
その闘気に反応し、石に封じられていた【力】の一部が具現化しただけに過ぎない。
その結果、傍目にはいきなりその場に出現したようにみえたのだが……

「とりあえず複製、とはいえ、少しは発散になってるかしらね……」
そもそも、彼があのような行動を行ったのは何でも一人で溜め込む性格ゆえであった。
そしてそれは眠りについている状態においても同じこと。
いつまでたっても自分の中で昇華しきれない【思い】。
自分を責め、そして守れなかった自身を責め、何のための力なのか、と嘆き、
そして…一番の原因たる存在を憎んだ。
彼の魂があのままだと、彼女の目覚めもまた遅くなる。
彼女もまた、自分のせいであのような行動をとらせてしまった、と深く傷ついているのだから。
互いにすれ違っている【心】。
そんな両親をけなげにまっている子供たち。
もういい加減に解放してもいいころあいのはず。
たとえそれが【この星系の為】という意味合いが強くあったとしても。
かの心をうけてどのように捉えるのかは、それは侵食された存在達の心のありようによる。
そのままその心を昇華できればよし、さもなくばそのままその心に呑みこまれてしまうであろう。
しかし、そういった心を昇華できるほどの強き心がなければこの場、すなわち、力を求める場に参加する資格はない、ともいえる。
どのような出来事があってもその心において乗り越えていかなければ、

真の意味での強さ、とはいえないのだから。

「ゾルディの一種って……なんでそんなものが？」

ディアの完結な言葉に言葉を多少ふるわせつつもつぶやくケレス。

そもそも、かの存在がいる、ということ自体が不思議でならないのに。

どうしてさらっと何でもないようにいいきるのか、ケレスにとってはディアの言葉が意味不明。

「あら？強い思いがより強くその場にたまると嫌でも誕生するもの。

それがゾルディ、だしね。最近は負の心のほうの特性がより強く強調されてて、

害を及ぼす存在達のことをゾルディって呼んでるみたいだけど」

基本として設定した【理】は今、世間一般で通用している常識と多少ことなっている。

なぜか地上界、特に人間達に関してはそれらの【理】の捉え違いが果てしなく激しい。

まあ別段、それによって問題がおこるわけではないので基本、放置している状態なのだが。

「で……」

何やらまだ言いかけるケレスの言葉をさえぎり、

「それより。ケレス。私の順番、決まったみたいよ？」

にっこり微笑み、とある一点を指し示すディア。

そこには、ディアが次に戦うエリアとそしてその順番が記されている。

その情報はディアのもつ【参加証】にも新たな情報、として刻まれる。

「これで三回戦目、ね」

すでに二百あるエリア別の大会を勝ち進み、二度勝ちあがってきている。

すでに人数は百人から五十人まで絞り込まれ、次からの戦いが本当

の意味での、
地上界最強決定戦、ともいえる戦いとなる。
ここまで来られる存在は少なくない。
何しろ地上界の種族問わず、様々な参加者がいる中での上位五十名。
それに食い込んだディアはさすが、といえばさすがなのであろうが。
彼女を知る存在がいればそれは当然、と切り替えすであろう。
しかしこの場に彼女の正体を知る存在はヴリトラしかいない。
「お姉様、優勝するつもりなんですか？」
「ん～。それも面白いかもね～。最近、他の界の存在達もすこしたるんでるし」
活をいれるのに優勝して、混合大会に参加してみるのもよし。
そうなった場合は多少なりとも自らの気配をそれとなくごまかす気ではあるが。
今の状態では間違いなく、【役職】を持つ存在達にと気づかれる。
それではせっかく抜け出したというのに面白くない。
しばし、たわいのない会話がその場にて繰り広げられてゆくものの、
その意味が判り兼ね、ひとり、首をかしげるケレスの姿がしばしみうけられてゆくのであった……

ドッン！！
それは唐突ともいえる。
いきなりズシン、と響くような地鳴りとともに、爆発音が鳴り響く。
『な…何だ！？』

同時刻。
様々な界における町や村において突如として起こる爆音。
よもやまったく同じ時刻に同じようなことが様々な場所で起こって

いる、など一体誰が想像できようか。
場所によっては、真夜中の場所もあれば、朝早い場所もある。
それは、この惑星そのものが自転している以上、そのようなことは起こりえる事柄。
だがしかし、同時期に同じく同じことが起こっているのは疑いようがない。

それと同時。
『ぐわぁぁっっっ！』
町、そして村の中心に突如として黒い塊が出現し、
それは彼らが恐怖するのに値するほどの叫び声を高々と発する。
声の発生した原因を突き止めてみればそこに視えるのはありえない存在。
すぐさまそれが【悪意】ある存在だ、とそれぞれの場所の存在達は理解する。
「な！？どうしてこんなものがいきなり！？」
居住区にこのようなものが入り込むなどとありえない。
しかも見張りに気づかれないままに中心地帯に入り込むなど。
さらにいえば守護精霊達がいる場所においては精霊が気づかないはずがない。
にもかかわらず、これはいったいどういうわけなのか。
その姿を垣間見た存在達が抱く思いはみな共通。

地上界にて、天界にて同時期に放たれたこの計画。
魔界などにおいては発生すると同時に
その場にいた存在達がここぞとばかりにすでに戦いに突入していたりする。
精霊界においては【種】となる品が蔓延していなかったがゆえにそこまでの被害はでてはいない。
そもそも、精霊達からしてみれば、記念となる品などに興味はない。

彼らは基本、自然の気によって糧を得ている種族。
ゆえに娯楽、といってもそれぞれの感情などをうける娯楽はあれども、
品物を集めたり、という娯楽をもっている存在はごくわずか。
ゆえに、精霊界においてはこのたびの襲撃は起こりえていない。
しかし霊獣界、そして深界などにおいてもまったく同じ現象が同時刻発生していたりする。
それこそが【種】を撒いた彼ら【組織】の目的。
同時期、多発的に同時発生させることにより、本来の目標をごまかすという手段がとれる。
【組織】の存在達が狙っているのは、あくまでも中枢部。
各界における中枢たる場を抑えることにより自らの力を周囲に知らしめる。
それこそが目的。
この一度の襲撃で達成できる、とは夢にもおもっていない。
ただ、戦力をかなり削ぎそして目的を達せられればよい。
この襲撃はその目的のための布石、でしかないのだから。

「くっ！とにかく、戦えるものは武器を手にとれ！」
ぼこぼことそれと同時に黒い塊の数は瞬く間にふえてゆき、それらはその口から黒き炎を吹き出し、
その炎は周囲を黒き闇の炎で燃やしつくす。
その炎に触れたモノはことごとく一瞬のうちに朽ち果て灰と化してゆく。
悪夢、としかいいようのない現実。
この時期、戦力となる存在達はほとんど大きな町などに出向いている。
大会の様子をより詳しく観戦するために。
その隙を突かれたかっこうのこの襲撃にどんな意味があるのか。
それはその場にいきる存在達にはわからない。

一つだけいえること、それすなわち……
「これ以上、被害を拡大させるなぁぁっ！！」
町の警備を担当する存在、そしてまた、村を守る自警団。
さらには何かある可能性があるから、といって見回りを強化されていた兵士達。
それぞれがそれぞれの思いを抱きつつも、思うことはみな同じ。
すなわち、
いきなり現れた【敵】の襲撃に民間人を巻き込まぬように各自が努力するしかない。
増援を呼んでいる暇もなさそうである。
何しろ時間とともに黒き塊ともいえる様々な容姿をしている【ソレ】は瞬く間に数を増やしていっている。
『わぁぁっ！』
自分達の力が通用するかわからない。
しかし、大切な存在をまもるため。
または愛する存在を守るため、そして役目を全うするため。
様々な思いを抱きつつも、それぞれの場所にて【黒き存在】に対抗してゆく存在達の姿。
この日、各界の至るところにおいて、空が瞬く間に黒煙と暁色にと染まってゆく……

『さあ、ついにやってきました！上位五十名による戦いだぁぁっ！』
『わぁぁっ！』
会場の外においてはとてつもない攻防が繰り広げられているとは微塵も知らず、
何とものんびりとした大会進行役の声が会場にと響き渡る。

ちなみに、上位五十名と絞られたがゆえに、今まで各エリアごとにて行われていた戦いは、
この五十名、という人数をかわきりに、ＳＸエリア、と呼ばれるエリアにて全員挑むこととなる。
一日辺り、五戦づつ。
五日をかけて五十名から半分の二十五名に絞り込む。
とはいえ五日、といえども【外】とこの【会場】の時間率は異なる。
外からしてみればほんの一日にもみたない時間に過ぎない。
二十五名、ということは一人、不戦勝のものが必然的に産まれてくるが、
そのあたりのこともまた大会側は考慮してある。
すなわち、敗者復活戦。
五十番以内にはいり、それで負けたものは、敗者復活戦に挑む権利が与えられ、
そこで勝ち抜いたものはもう一度本戦に返り咲くことができる。
逆を言えば早く負ければ負けるほど、本戦に返り咲く機会が与えられる結果ともなるこの仕組み。
何しろ負けた順から敗者戦に挑む権利が与えられ、上にいくほどその戦いはずれこんでゆく。
一度目の敗者復活戦で認められるのは、一名のみ。
その一名を加えた二十六名による本戦が開催され、
そして勝ち進んだ十三名、そしてさらに敗者復活戦で復活した一名。
つまり、敗者復活戦で本戦に勝ち上がれる権利を手にいれられるものは二名のみ。
そして最終的に七名によるそれぞれ勝数による大会が行われ、
一人が残りの六人全員と戦い、その勝敗の数によって優勝者は決定する。
これはどの界における戦闘部門においても同じ仕組みをとっている。

『上位組の大会の始めの幕を飾るのは、学生ながらも勝ちあがって

きたディア選手と、
　火の支配者の異名を誇る、イフリー選手だぁぁっ！』
ディアの髪が白に近いものならば、イフリー、と呼ばれた選手の髪は橙色。
もっとも、ディアの髪の色は、白、というよりは
どちらかといえば銀色に近いような色にみえなくもないのだが。
その光り加減によっては銀色にもみえるし灰色にもみえるという代物。
ディアの瞳が青ならば、イフリーの瞳は水色。
ある意味、深い色と薄い色、との差異でしかない瞳の色違い。

「…げっ！？ディアの相手ってあの火の支配者のイフリー！？」
初戦からおもいっきりあたり、おもいっきり負けた人物である。
ゆえに思わず観客席にてその説明をきき叫ぶケレス。
「いいな～。お姉様、…というか、同じエリアでなかったら私もあそこにいれたのに……」
同じエリアでなければ間違いなく勝ち進んでいる自信がある。
ゆえにそうつぶやかずにはいられないヴリトラ。
「…来年度はこっそりと、魔界側にでも参加してみようかな……」
何やらぽそり、とシアンが聞けば卒倒しそうなことをいっているヴリトラではあるが。
「…ヴーリちゃん。それはさすがに危ないとおもうわよ？」
ヴーリが竜族とはしってはいるが、魔界においてどの程度通用するのかケレスにも理解不能。
それでなくても、ヴーリはディアにいともあっさりと攻撃の一つあてることなく倒された。
ケレスの感覚的にはディアが勝ったのはディアのもつ能力ゆえであろう。
そう理解している。

人の扱う【言霊】にかなわない者が、いくら竜族とて魔界で通用するかはわからない。
それでなくても、天界、魔界の戦いはかなり激しい、そう伝え聞いている。
「それに今はヴーリちゃんも留学生という立場ではあるけど、学校の生徒なんだし。
　来年度はどうなるのかわからないけどね」
留学の時期が一時的なものなのか、永劫的なものなのか、そのあたりはわからない。
当人が生活にあきて学校を去る、といえばギルド側としては引きとめられない。
というかむしろそれを期待しているほうがはるかに強い。
何しろ竜族をその内に保護?している、と他の国などに知られればそれが侵略の意思あり。
そう捉えかねない国が少なくとも一カ国は存在している。
そしてまた、他の界においてもギルドが不穏な動きあり、そう捉えられても不思議ではない。
今のところそのような噂になっていないのは、
シアンなどが必死に情報を抑えているからに他ならないのだが。
万が一、竜族が留学している、と知られても、その存在が存在。
理由をきいた他の界の上層部達の反応は、ほとんどがシアンに同情する、という結果となり果てる。
何しろ神竜ヴリトラが気まぐれを起こすのはよくあること。
そのたびにその都度、そのときに長の立場にいる黄竜がほとんど被害をこうむっている。
そしてまた、ヴリトラを本気で怒らせれば、【王】、もしくは【補佐官】以外にかなうものはいない。
それを彼らは十分に理解している。
ゆえに強くいえないのも事実。
機嫌を損ねでもすれば、その反動で界の半分以上が壊滅する、とい

う結果にもなりかねない。
すでに幾度かそのようなことがあったがゆえに、神竜に対しての扱いは、
各界においてかなり慎重に慎重を極めるようになっている。
…そんな暗黙の了解、ともいえる事柄を知らないのは、おそらく人類達のみ。
彼らの寿命は果てしなく短い。
他の短い生命体達はそこまで文明などを発達させていない。
文明と知力を持ち合わせ、そして命短き生命は人類を置いて他にはいない。
「う～ん。来年はお姉様さそって別の界にいってみようかな～」
「……人間が他界に入り込めたらそれこそすごいとおもうけど……」
何やら横で信じられないことをいっているヴーリの台詞にただただ呆れるしかないケレス。
しかし、ケレスは知らない。
ヴリトラがいったことは別にすごくも何ともない、ということを。
「あ、それより、ディアの戦いが始まるわよ。…ディア、大丈夫かなぁ？」
自分は手も足もでなかった。
火の支配者の異名は伊達ではない。
眼下において始まろうとする戦いを前に、ぽつり、とつぶやくケレス。
これから何が起こるのか、いまだもってケレスはまだ気づいてはいない……

どくっん。
戦いの最中、何かが鼓動した。
それが何だかわからない。

戦いを繰り広げてゆく最中、今まで以上に気分が高騰してきていたのは事実。
術を放っても無効化されるか、もしくは相殺される。
それも言葉一つで。
ぞくぞくする。
ここまでぞくぞくする戦いはいまだかつてあっただろうか。
「ふ…ふふ…あ～ははは！この私、火の支配者にここまで付いてこられる者がいるとはな！
　しかもまだ子供で！あ～ははは！」
もはやもう笑うしかない。
しかも目の前にいるのはまだギルド協会学校に所属している一介の生徒に過ぎないというのだ。
これが笑わずして何とする。
自分は強い。
そう思っていた。
他の界においても通用する実力はすでについている、と。
しかし現実はどうであろうか。
たった一人の子供にすら自分の術はことごとく無効化されている。
だけども、負けられない。
負けられるはずがない。
国の名誉にかけて、自らが得た異名にかけて。
「しかし、私はまけないっ！！！！」
術で効果が得られないのならば、別の道をゆくまで。
今までは術のみに戦術を絞っていた。
相手が子供、ということもあり、それで決着はつくだろう。
そうおもって自分自身で決めていた。
しかし、結果は予測をはるかに上回っている。
自分の術というか攻撃はまったく相手に傷一つおわせるどころか、
そもそも発動すら打ち消される始末。
ゆえに、

「火の支配者イフリー！いざ、まいる！」
今まで触れもしなかった愛剣。
それを方手に剣に炎を纏わせる。
火の支配者の異名は伊達ではない。
彼女は武器に炎を纏わすことにより、その攻撃力を各段に飛躍的向上させることができる。
しかし…それは攻撃する相手が、【普通】出会った場合に通じる技。
イフリーは気づいていない。
目の前にいる少女のもつ気配に。
その気配が【何】なのかわかれば、彼女の行動もまた無意味、と悟ったであろう……
そして、その認識不足が彼女にこれからどのような結果をもたらすか、ということを……

「…すごい……」
言霊使いの能力、まさにここに極めり、といったところなのだろう。
火の支配者イフリーが術を発生させると同時、ディアが何ごとかつぶやいたかとおもうと、
その術は者の見事に書き消える。
時には水が発生し打ち消すように、時にはまるで花火のごとくに炸裂し周囲に感嘆した声をふりまきつつ。
つまりは相手の攻撃を利用しておもいっきり見せる攻撃に変化させているのは一目瞭然。
観戦している立場のものからすればそれはそれで見ていて楽しい。
思いっきり楽しめばいいのだから。
しかし相対している側からすればたまったものではない。
自分の攻撃が通用しないばかりか、観客たちを喜ばせるためにあえてその属性を変化させられている。

そう気づけばなおさらに。
「言霊使い！…なるほど、ここまで勝ち進んできただけのことはあるっ！」
上位組の戦いより、闘技場内の台詞もまた会場内に響き渡るように設定されている。
ゆえにこそ、高々というイフリーの声も、観客席にいるケレス達の耳にと聞こえてくる。
「さあ、それはどうかしら？」
ディアからしてみれば自分が【言霊使い】であると一言もいっていない。
ただ、相手がそのように勝手に解釈し勘違いしているだけのこと。
しかしその勘違いは訂正しない。
むしろまったくする必要性がない。
能力を勝手に解釈し誤解するのは相手の自由。
誤解は本質を見抜くうえで最も弊害となる一種の束縛。
思いこみを先にもてば視えてくるものも見えなくなる。
もっとも、炎を発生させた上で、たった一言。
『（鎮火）』
ディアがそうつぶやいただけで炎が物の見事に収まったのを垣間見た以上、
そのような勘違いを抱くのは無理からぬこと。
しばしそのような攻防を繰り広げていた後、
ふと。
『ふ…ふふ…あ～ははは！この私、火の支配者にここまで付いてこられる者がいるとはな！
しかもまだ子供で！あ～ははは！』
ディアと対峙しているイフリーより何ともいえない高らかな笑い声が会場にと響き渡る。
そして。
『しかし、私は負けない！』

何か他に策があるのか、先ほどまで前に突っ張りだしていた腕をすっとその場に降ろし、
『火の支配者イフリー！いざ、まいる！』
先ほどまで術のみで攻撃していたイフリーがその手を下し、片手をその腰に差していた剣にとかけ、すちゃり、とその剣を抜き放ちディアにむけて構えなおす。
それと同時、イフリーの手にしている剣が瞬く間にと炎に包まれ、炎の刀身が出来上がる。

「な！？魔法剣！？」
それをみて思わずケレスは叫んでいるが。
「う～ん…あれ？…ん？…あれって……」
ふとイフリーのその声の中に、とある違和感を感じ思わず顔をしかめているヴリトラ。

『さあ！まいるがいいっ！！！…って…ぐ…あぁぁっっっっっっっ！！？』
炎を纏った剣を持ちつつも、にっと笑ったイフリー。
だがしかし、次の瞬間。
勝利を確信したイフリーの表情は瞬く間に苦悶の表情にと変わりゆく。
纏わせていた炎の色が赤から瞬く間に黒にと変化してゆき、
そして。
『…我、目の前の敵をせん滅せん』
イフリーの声とも誰のものともいえない声がイフリーの口より発せられる。
先ほどまでのイフリーがもっていた雰囲気とはことなり。
今のイフリーは、その全身からとてつもなく独特な気配を纏わせ、
そしてその背にはゆらゆらと揺らめく黒き炎を纏っている。
そういうイフリーの目はうつろで、どこをみているかもわからない

存在と成り果てている。

「…んんん?…なんで、…ロキの気配がしてるの?」

それから受ける気配。

その気配の元に気づき、思わずつぶやいているヴリトラ。

そしてまた。

「あらら。まあ、アレを持ってたのはしってたけど…ねぇ。

　そこまで勝利に執着してなければ問題なかったでしょうにね~」

相手が例の【石】を持っていたのは知っていた。

人、というものは先が視えないからこそ面白い。

そんなことを思いつつ、くすり、と笑いつぶやいてるディア。

ただ勝ちたいばかりに自分で決めた理ごとを破り、実力で行使しようとしたその心。

その心のあるいみ【負】の部分に【石】のもつ力が反応した。

そのまま、【勝ちたい】という思いにのり、その力が表にでてきて肉体ごと一時的に乗っ取っただけのこと。

しかし傍から見ている観客たちは何がおこったのか理解不能。

ゆえに。

『おおっと!?イフリー選手、雰囲気がかわった!これはイフリー選手の切り札か!?』

何やらまったく異なる解説が進行役から発せられていたりする。

確かに。

切り札、といえば切り札なのかもしれない。

それは当人の意思とはまったくもってない、にしろ。

しかしその事実に気づく者はまずいない。

むしろ理解しているディアとてその反応が面白いがゆえに半ば傍観の立場を貫いている。

侵食の効能をより効果的に活用したある意味、適材適所、ともいえるであろうこの一件。

「…う~ん、ここまで関係のない存在達を巻き込むようにするとは

ね。

…ま、いっか。とりあえず力に呑まれたってことは、すくなからずその思いがあったってことだし」

自らの心が弱く、力の呑まれてしまうのうでは所詮、それまでの心でしかない。

自らの意思でその【力】を退け屈服させてこそ真の【力】は得られる。

「さて。イフリーはどっちになるかしら…ね？」

どうやら面白くなりそう。

そう思い、違う意味で盛り上がる観客たちとは対照的に、

一人ほほ笑むディアの姿が、闘技場の内部において見受けられてゆくのであった――

光と闇の楔　～混乱！大襲撃勃発～（後書き）

ケレスと初戦であたった人物が、ディアと戦い、【石】の力に呑みこまれる回でした

次回で【外】にて襲撃が起こっている事実がもたらされます。

とりあえずそれで第一回目の襲撃は完了ですね。

そののち、後始末におわれる世界と、その間に元々の目的である間者を送り込んでいる組織。

さて、学生さんや関係者達にはこれから苦労してもらいましょうv

何はともあれではまた次回にて♪

光と闇の楔　～大会終幕？と新たな問題？～（前書き）

ギルド主催の大会の様子がほとんど明記されないままに、
とりあえず無難というか無事（？）に大会もこれにて完了ｖ
…この程度のオブラート表現なら年齢規制は関係ない…とおもうんですけど、大丈夫かな？
次回にてさらっと優勝者のお祝いもどき？をやって学園生活に戻ります
まあ、この大会は一つのきっかけにすぎませんからね。このお話しの中では。
とりあえずギルド協会学校に様々な種族が入り乱れるきっかけとなる出来事のとっかかりなわけですし。
（優勝者がいることにより様々な種族がよってくる）
ただいま、またまたこっそりワールドゲームの別バージョン。
第三弾打ち込み中～。打ち込み終わったらまた投稿しますｖ

光と闇の楔　～大会終幕？と新たな問題？～

『我、世界を再構築するもの』
心のどこかで自分がそのようにいっている声を感じ取る。
何がおこったのか理解不能。
より強い力を感じ、自らその力の波にのってみた。
その直後、ものすごい苦しみと痛みとともにすべてが解放された。
しかし次に気がついたときには、自分であって自分でなく。
閉じ込められている場所から自分が起こしている行動を視ているような錯覚。
否、錯覚ではない。
自分の体が自分の意のままに動かせない。
口からもれるのは自分の声のはずなのに自分の声ではない、何か。
何がどうなっているのか。
さらに見知った者たちをも自らが傷つけていっている。
どうして…どうして、どうして？
わからない。
何がおこったのか。
異形のものと対峙していた自分。
そしてその戦いの最中、気がついた新たな力。
その力もまた異形の存在が植え付けた破滅の力だったのか？
判らない。
だけども…誰か、誰か自分を止めてほしい。
このまま自らの意思でなく誰かを傷つける様子など見たくはない。
誰か…誰か、助けて……

この力は何なのか。
わからない。
だけども、とても気分がいい。
こんな気持ちは初めて。
力に酔うな。
かつて師がそのようなことをいっていた。
しかし自分はそんなことは決してない。
そのように戒めて今まで行動しそして今日に至っている。
そう、自分は…我は目の前の存在を喰らいつくすためにここにいる。
違う！
違わない。
自らの中でせめぎ合う何か。
だけども、とっても気持ちがいい。
だから、
『我、全てを破滅せたまわん』
力とは全てを破滅させるためのものだったではないか。
そう。
だから、自分は…この力を全て破滅にむけるのみ！

「あらあら……」
心の中で葛藤しているのは気づいていた。
いたがものの見事にそのまま力に呑みこまれてしまっている目の前にいる対戦相手。

「もう少し、抗うくらいの強い心くらいは持ち合わせてるとおもったんだけどね～」
彼女の心のありようによって、周囲の反応も違ったというのに。
だけども、選んだのは彼女。
そして…きっかけを与えたのも、また彼女。
だからこそ。
「その選択がどのような結末をもたらすのか、あなたはあなた自身で見届ける必要性がある」
一つの欠片が目覚めれば、それに連動するように目覚めるように【鍵】が掛けられているかの【欠片】。
彼女は自ら気づかないうちに、その【鍵】を開けてしまった。
それをどうこういうつもりはない。
ないが、人の心、というものがいかに欲望に弱いか、改めて認識させられてしまう。
ゆえにこそ、ため息をつかずにはいられないディア。
それとほぼ同時。
『が…ぐわぁっっっっっっっっ!?』
刹那、会場内、いたるところにおいて何ともいえない叫びが周囲にと響き渡る。
種を持ちえる者たち全ての【闇】に呼応し発生した様々な形をもつ【ゾルディ】達。
それらはそのまま【種】を持ちえる器を呑みこみ、【堕烙者】と成り果ててゆく。
「な…何これ!?」
いきなりのことに思考がおいつかず、思わず叫ぶしかないケレス。
「何、って、ゾルディの大量発生?」
そんなケレスにのんびりと答えているヴリトラ。
「って、ヴーリちゃん、何のんびりといってるのよ!?どうなってるの!?」
この会場でこのようなモノが発生するなどありえない。

何かがおこっている。
それだけはわかる。
一瞬、ギルド側が用意した大会用のイベントとも思えたが、どうみてもそうではない。
伊達に、【呪】や【ゾルディ】に実際に出くわしてはいない。
それらがもつ独特の【気】はケレスは嫌でも理解している。
だからこそ…確信がもててしまう。
恐ろしいことに。
会場…自分達の周囲で発生しているこれが現実のものであり、
そして…人の器を得て【堕烙者】として誕生してしまった、というその事実に。

『な…こ、これはいったい!?
　って、どうやらこの現象は全ての会場において…って、みなさん、早く避難を…うわぁぁっ!?』
さすがに進行役の係り員も突然のことに戸惑いを隠しきれない。
何よりも彼ら係り員に義務つけられている連絡用のバッチより、全ての箇所において同じような現象がおこっている、と連絡がはいればなおさらに混乱せざるを得ない。
しかし彼らは大会運営者側として観客達をより安全に避難させる必要性がある。
ゆえにどうにか理性を総動員し、
『お、おちついてください!おちついて!
　みなさん、すばやく【道】よりこの場から離れてくださいっ!』
ここから離れれば安全かどうかはわからない。
しかし、ゾルディの発生条件ならばわかっている。
【興奮】と【熱気】そして【闘気】が充実しているこの場ではより強い【ゾルディ】が発生する可能性がはるかに高い。
係り員の叫びと、観客たちの悲鳴が会場内にと響き渡ってゆく……

相手の意思がだんだんと侵食されてきているのがはっきりとわかる。
少し冷静になり、【ゾルディ】が発生してもその本質を見極めれば、それに対処する方法はいくらでもある、というのに。
どうやら観客席側にしろ、その他の会場にいる存在達にしろ、そこまで気がまわっていないらしい。
ところどころそれに気づいて対処している場所もあるようではあるが。
繰り出される攻撃をかわしながら、無とするのもだんだんと飽きてくる。
全てを【視て】みるがどうやらどこの【場所】も同じような現象に陥っていたりする。
「…唯一、汚されなかったのが精霊界のみってどうなのかしら……」
思わず本音がぽつり、と漏れ出してしまうのは仕方ないであろう。
他の界においてもすくなからずとも、
相手の思惑どおりに発生している【欠片】の現状を【視て】しまえばなおさらに。
このまま放っておいてもいいのだが。
だがしかし。
「…とりあえず、とっとと仮初めではあるけど、収束させてもらいますか…ね」
いつ、なんどき、代替わりの予兆が現れるとも限らない。
強制的ではあるが、これぱかりは仕方がない。
どちらにしても、どこで力を行使したのか、おそらく【彼ら】には理解できるはずもない。
少なくとも、自分がここにいる、ということを知らない限りは。
「ヴリトラの力を久しぶりに解放、といきますか」
会場内においては大混乱を極めているものの、闘技場の中において、すでに数十体と成り果てた異形の存在。
それらと対峙しているディアはまったく動じることなくにこやかに

そう言い放ち、にっこりと一瞬ほほ笑む。
そのまま、ちらり、と視線をヴリトラのほうにとむけるディア。

「～～～っ！？」
その視線に気づき、思わずその場に硬直する。
その視線がもつ意味。
それが判らないヴリトラ、ではない。

トッン。
ディアが異形の存在に触れると同時に霧散するかつて、【人であったはずの存在】。
しかしその姿は今は原型をとどめず、ただただどす黒い何かの塊のように垣間見える。
まるで舞うように、ディアがその体に触れるたびにそれらの体は霧散する。
その光景はかなり異様でしかないのだが、会場内における観客達は今やそれどころではない。
彼らはみな、自分達の身を守ることで精いっぱい。
何しろ、観客席のいたるところで【ゾルディ】に乗っ取られた…否、入りこまれた【堕烙者】は発生している。
それらから逃げることのみで彼らは必至。
だからこそ気づかない。
ディアの…闘技場の中にいるディアの雰囲気が完全に変わった、というその事実に。

『L'intention est mon intention tu』
――汝が意思は我が意思

ふわり。
ディアが言葉を紡ぐとともに、柔らかな空気が周囲を包み込む。
それまで騒ぎに翻弄されていた観客たちの行動も一瞬、その変化に気づき思わず立ち止まる。
あきらかに、自分達の周囲の空気が変わったことに戸惑いを隠しきれない観客たち。
しかも彼らの目の前に突如として出現した【ゾルディ】とおもわしき存在も戸惑っているように垣間見える。

『Ｌｅ　ｔｕ　ｅｓｔ　ｍａ　ｐａｒｔｉｅ，　ｕｎ　ｆｒａｇｍｅｎｔ　ｄｅ　ｍｏｎ　ｂａｔｔｅｍｅｎｔ』
――汝は我が一部、我が鼓動の欠片

全ては欠片であり、そして鼓動の欠片、ともいうべき存在。
その存在意義の力そのものに呼びかける旋律。
この旋律をもってその力を解放させるようにそのように創りだしている。

『Ｃ' ｅｓｔ　ｍｏｎ　ｉｎｔｅｎｔｉｏｎ　ｐａｒ　ｐｏｕｖｏｉｒ　ｄｕ　ｔｕ　ｊ ｉｃｉ　ｍａｉｎｔｅｎａｎｔ』
――我今ここに汝の力を我が意思のままに

どくんっ。
久しぶりにきく旋律。
すべてにおける力が呼応し熱くなる。
「？ヴーリちゃん？！」
突如として横にいるヴーリの様子がおかしくなったことに戸惑いの声をあげるケレス。
それでなくても何がどうなっているのかわからない。

ディアと対峙していた相手がいきなり異形の存在へと変わり果てた。
それだけではない。
しばらくすると、観客席にいる観客達の間からもいきなり異形の存在が現れ始めた。
そしてそのまま攻撃を始めている異形のものたち。
周囲はもはや大会どころの騒ぎではなくなっている。
辺りかまわず聞こえてくる悲鳴と嗚咽。
嗚咽もまた悲鳴にかき消され、収拾のつかない騒ぎと成り果てている。
異形と化したものが誰かを傷つけると、その存在もまた異形の存在と化す。
そんな現実を目の前に突きつけられた存在達の精神はもはや限界に近い。
人が人を押しのけ、我先に助かろうとする輩の姿も多々とみえる。
まさに阿鼻叫喚、といって過言でない。
目の前で繰り広げられている現実が現実、と認識できない。
そんな中、ヴーリを守らないと、とその気合いのみで理性を保っていたケレス。
そんな背後でヴーリの様子がおかしくなり、悲鳴に近い声をあげてしまう。
ケレスは気付かない。
今、ディアが紡いだ言葉。
それこそがヴーリ…否、ヴリトラの力を完全に本当の意味で解放する、というその事実に。
そしてまた、ディアが何か言葉を紡ぎだしたと同時、あきらかに周囲の空気が一変する。
何が何だかわからない。
「…ディアの…言霊使いの…能力？」
ケレスからしてみれば、そうとしか思えない。
何といっているのかわからない。

悲鳴にかき消され、ディアの言葉は観客席にまでは聞こえてこない。
しかし、何か歌のような旋律を紡いでいるのは何となくなぜだか理解できる。
人々を襲っていた異形の存在もその異変に気がついたのか、ぴたり、とその動きをとめている。
それが余計に会場全体の不気味さを引き立てているのだが。

…人は、極限の状態に陥ったときにその心のありようをよりつよく発揮する。
そしてその心の醜さは、【欠片】の格好の糧となり【器】と成りえる。
【欠片】に対抗するのは至って単純。
ただ、【思いやりの心】を持てば自然とその【力】は【飽和】され浄化される。
この状況の中、そのような心をもつものはごくごくわずか。
逆に恐怖に支配されている存在達に迫害をうける始末。

…本当、人、というものは、
否、どうして知性をもった存在達はこのような心を持つようになってしまうのか。
その光景を呆れつつも視ているディア。
ただ、互いに協力する心、相手を思いやる心。
それらが強くあってほしい、それだけだ、というのに。
極限の状態に陥るとその心はいまだに完全に【人々】の心に思い浮かばない。
いつかはその心が常に表にでてくること。
それがディアの…否、【意思】の願い。
そうなればこの世界は自らの【理という名の楔】の檻に入れこむ必要性はなくなる。
一番いいのは【内部で鼓動する命】すべてが助け合いの心をもちあ

わせること。
そのための、理。
そのための楔。
かつてその制約を設けていなかったがゆえに他の命すらをも破滅に追いやろうとした種族達。
わざと新たな【理】を創りだし、監視するようにしたのは、彼らの心を鍛えたいがゆえ。
だけども…どうやら、なかなかそうはうまくいかないらしい。
ならば、自分にできることをするまで。

『Ｊｅ ｌ' ａｉｍｅ ｅｔ ｃ' ｅｓｔ ｄｅｓ ｇａｒ?ｏｎｓ』
――愛し子達よ

ディアの言葉とともに、瞬間的に会場全体が水をうったように静まり返る。
さきほどまで聞こえていた悲鳴も何もかもが嘘のように。
まるでその先の言葉を誰もがまっているかのように。

『Ｄａｎｓ ｎｏｔｒｅ ｕｎｅ ｆａｃｉｌｉｔ? ｅｔ ｒｅｓｔｅ』
――我が内にて安らぎと休息を

ディアが最後まで言葉を紡ぎ終えたその刹那。
会場……否、世界における全ての【場所】。
【惑星上に存在するすべて】の場において、漆黒の闇が広がってゆく……

闇はそのまま、そこそこにいるすべての存在を包み込み、そのまま生命全てを抱擁し呑みこんでゆく。

それはほんの一瞬の出来事。
抗うことも許されず、有無を言わさず呑みこまれてゆく存在達。
闇は安息であり、そして始まり。
今、ディアが行った行動。
それは……全ての【悪意の結晶】ともいえるヴリトラの力を解放し、世界すべてに放たれていた【心】全てを一度【喰らわした】だけ。
ヴリトラの存在意義。
それは世界全ての存在達の悪意を管理し、その身をもって浄化すること。
それこそが彼女が生まれた存在意義。
彼女がいる限り、全てを破壊しくつすほどの【心】は基本、産まれることはない。
しかし、その【力】全てが発揮されることはまずない。
その力は強大すぎるがゆえに、基本、【意思】からの【解放の旋律】がなければ発揮されない。
自らの欠片の意思をも加えた旋律がもたらす意味。
それは、【意思】としての【力の欠片】の発動をも意味している。
全てを一度【内部】へと還りゆかせ、そこにて【心】を【喰らわせる】。
おそらく、呑みこまれた存在達は何がおこったのか理解不能、であろう。
その力に耐性がないものは、何がおこったか理解しないままに、一度、内部へと還りゆくしかない。
ある界においては、【光の王】の力として、ある界においては【闇の王】の力として認識されているその力。
しばし、世界は一度、一時、眠りの中に誘われてゆく……

「なんか今年の大会はいろいろと予想外なことが起こりまくりましたが……
　とりあえず、他の参加者が戦闘不能となっていますので、必然的にあなたが優勝、ですね」
「……はぁ……」
こういう場合、喜んでいいのか呆れていいのかがよくわからない。
そもそも、あの程度の戦いでほとんどの参加者が戦闘不能になり果てるなど
一体どんな精神力をしているのやら。
ゆえにディアからすれば呆れるしかない。
気絶から解放された者たちはなぜかこぞって闘志を無くしている今現在。
中にはほとんど虚ろな状態になりはてているものも多々といる。
「…と、いうか。貴方様の気をうけて無事な存在のほうがあまりいない、とおもうのですが……」
横では騒ぎの原因、というかあの現象を起こした存在に思い当たり、あわてて駆けつけてきたシアンが頭を抱えつつもぽそり、と呟いていたりするのだが。
同時期、すべての界において発生した、すべての存在を包み込むほどの圧倒的な【気】。
それは威圧感ともとれれば、安らぎともとられる不可思議なもの。
心のどこかで恐怖し畏怖しながらもその力…闇に包まれ安心したのも事実。
瞬く間に突如と出現した光に、そして闇にと全てのものが包まれていった。
そしてその闇や光が消え去った後にのこったのは、意識を失った多々とした存在達の姿のみ。
あれほどいたはずの異形の姿をした【ゾルディ】の痕跡はまったく

もって見当たらなかった。
そんな途方もないことを成し遂げられる存在など、はっきりいって限られている。
それは、【王】とも【意思】とも呼ばれている存在の仕業に他ならない。
天界、そして魔界側は【王】の力が発動したのをうけ、おそらく今後騒ぎが再び大きくなるであろう。
それらは容易にシアンからしてみても予測はつく。
だからこそ頭を抱えずにはいられない。
「多少、【在り方】としての力を会場らに放っただけなんだけどね～」
「…十分すぎます」
そもそも、本当の意味での【王】としての力を発揮したのだからかなうものがいるはずもない。
【意思】は【王】であり、ただ、その形を明確にしていないだけに過ぎない。
その事実を竜の長となるべき存在は嫌でも学ぶ。
「ロキ君の思いの欠片はまだ残ってるみたいだけど。お姉様？」
かの【力】の発動は、ヴリトラにも関係がある。
そもそも、かの力はヴリトラの力というか存在を介して発せられたもの。
「まあ、一応、彼は耐性もってるからね～」
伊達にこの【場】における【意思】達により創られた魂というわけではない。
多少の抵抗力はその存在のあり方、誕生の仕方からしてついている。
「？…とりあえず、しばらくは混乱を鎮めるために大会側としても大変ですが。
　あなたもギルドの一員として働いてもらうようにはなりますが」
ギルド協会学校の生徒は基本的に一時的とはいえギルドの一員、という扱いとなる。

しかもディアに至っては正式に一応ギルドに登録している。
ゆえにギルド本部からの依頼は基本的に断れない。
確かに今だに様々な場所で参加者、そして一般人達が倒れている現状では、
大会どころの騒ぎではないのであろう。
シアンやヴリトラの言葉の意味は、目の前にいるギルド職員には判らない。
そもそも、ギルド協会本部のほうで大会の会場で何かあったようなので緊急的に送り込まれた。
その先でみた光景は信じがたいもの。
なぜかほとんどの存在達が一斉に倒れているという不可思議な現象。
しかし、ギルド協会本部から出た直後からそのような光景は町のいたるところで垣間見ていた。
ゆえに嫌でも理解できた。
大会の会場においても襲撃があり、そして不可思議な力によってそれらの脅威が取り除かれた、ということが。
一番被害がひどいであろう…これは他界よりの報告ですでに明らかであったのだが、
とにかく他界の大会側においても一番襲撃がひどかったのは、戦闘部門における会場だったらしい。
ゆえに数名が戦闘部門の会場に派遣され…そしてそこで立っている参加者らしき人物をみつけ今に至る。
その場に立っていたのは四名。
正確にいうならば、一人は気絶しているらしく、青年の背に背負われている。
ギルドの参加証を見せてもらい、そのうちの一人が大会に勝ち進んでいることを確認した。
一人に関してはフリーパスを持っていることからどこかの種族の管理職か何かについている存在であろう。
そう判断した彼ら達。

「まあ、目がさめたら、何がおこったのかまず覚えてないでしょうし。ここにいる存在達は」

ディアの言い分は至極もっとも。

そもそもこの空間においてはそういったものはすべて【なかった】ことにできる一つの性質をもっている。

正確にいうならば、【なかった】という感覚をその身に記憶させることにより、

一部記憶を改竄することが可能。

彼らとて仲間であった存在たちを自らの手で傷つけた、という記憶を持っていたくはないであろう。

それでも心の奥底では自らが手にかけた、という記憶と後悔の念は残る。

その心をバネにして強くなるか、それとも歩みを止めるか、それは各個々の資質次第。

「ですねぇ。ここの場は特殊、ですから。しかしここにいた人々はまだいいですよ。

この会場は特殊な空間によってすべて【保護】されていますからね。

しかし、外はそうはいきません。現に……」

絶対に【死】ぬことがないこの空間においては何がおこってもさほど問題ではない。

しかし、ギルド側が主催している大会で騒ぎがおこったというのに何もギルド側が対策をとらなかった。

それが問題になってしまう。

ゆえに職員の一部をそれぞれの【界】において派遣しているギルド協会側。

ディアの言いたいことを察知し、派遣されてきたギルド職員の女性がしみじみうなづく。

予測していたとはいえ、やはりこの【会場】においては【外】の世界のような惨状となっていない。

ここでいう【外】とは普通に暮らしている大地を意味する。
この場では特殊な【理】と【約束と制約】の元、安全が保障されている生命。
しかし、普通はそういったことはあり得ない。
この空間のみが特殊、というだけに他ならない。
ゆえに、同じように攻撃をうけた各町や村などにおいてはこんな生易しい現状ではなく、
悲惨を通り越した惨状が広がっている。
ここから無事に帰路についたとしても、その故郷が無事、とは今の現状では保障できない。
それほどまでに情報は錯綜し混乱している。
とりあえず判っていることは、大きな主要都市や王都などといった場所は力ある守護精霊の力のもと、
どうにかそれらを撃退することができ、さほど被害はでていない。
しかし…守護のない小さな村や町に至ってはどうなっているのか連絡がまだ入らない以上、
確定したことは伝えられない。
「とりあえず、みなさんが目ざめたら、
　大会開始のときと同じようにみなさんを集めて説明する必要があるとおうもんですけど？」
何の心構えもなく故郷に帰り、そこで絶望した人々が取る行動。
そして…ここでは【抑えられて】いるものの、それから【発芽】する可能性のある【種】達。
ディアが先ほど行ったものは完全に浄化させるものではない。
表に出てきているものは先ほどの【力】で浄化し【喰われ】たがゆえに問題はない。
しかしそれらはまだ発芽していない【種】に関しては作用していない。
種の状態となっている【欠片】はあくまでも睡眠状態であるがゆえに外部からの干渉を一切受け付けない性質をもつ。

外部からの干渉の拒絶。
その根本的な元となっているのは、ほかならぬこの【惑星群】の元となるべき【意思】の欠片。
ゆえに小さな【第三の意思】程度の力では干渉することもできない代物。
そこまでロキに関して詳しく説明する必要もないし、またする気もない。
そもそも、彼を創りだしたときにはすでにヴリトラは存在していたので、彼女のみはその事実を知っている。
そんな思いを微塵も表にだすことなく、ギルド職員に淡々と意見を述べているディアをみつつ、
「そういえば、このたびの襲撃、全部の【界】において同時、だったみたいだね～。
　シアンはどう思う？このたびの計画、これで全てだとおもう？それとも？」
にこり。
いまだに難しい顔をしているシアンに顔をむけつつも、にこやかにといかけているヴリトラ。
ヴリトラからしてみれば今はすこぶる機嫌がよい。
何しろ【同時】に【すべての界】における【悪意】を喰らうことが許された。
久方ぶりのまともな食事といっても過言でない。
やはりこう、【世界】全体における範囲で食事をする、というのはとても心地よい。
とはいえ、滅多とこういうことが許されるわけではない。
それらが許されるのは【意思】から許可がでるか、もしくは【命令】が下った場合のみ。
このたびは、【命令】という形ではあったが、ヴリトラとしてはしごくご機嫌。
久方ぶりに、本来の自分のあるべき【存在意義】を発揮できたこと

がとても誇らしい。
この問いかけはシアンを試すものでもある。
すべての表にでていた【悪意】を喰らったがゆえに彼らの計画は把握した。
どこまでシアンが把握しているか試すための問いかけ。
「…いえ、まだ何か裏がある、そう思います。何よりも襲撃があっさりしすぎています」
そう、あっさりしすぎている。
いきなり町や村の中に【ゾルディ】が発生し、さらには【堕烙者】も多々と発生した。
【ゾルディ】に攻撃をしかけると同時にそれらの欠片が攻撃を仕掛けた相手に入り込んだ。
これまでもそのようなことは時折あったと報告はうけている。
しかし、【人の心】とは弱いもの。
突如として目の前で今まで仲間であったモノが異形の存在と変わり果てたとき、
一体どれほどの存在が正気を保っていられるであろう。
その結果、このたびの襲撃は【ゾルディ】の攻撃以上に壊滅的な被害をもたらしている。
ざっとここに移動してくるまで【地上を視た】がゆえに簡単に状況は把握しているシアン。

【黄竜(こうりゅう)】。
それは地上界といわずすべての界におけるすべての属性ともいえる自然をその身に宿す存在。
その気になれば世界のすべてが【視通せる】。
その能力ゆえに滅多と産まれない種族でもあるのだが。

ようやく新たな誕生している後継者となるべき個体もいまだに幼い。
このまま世界全体が安定した状況にならなければ、かの個体の成長

もかなり危うい。
下手をすれば【滅竜(ルース)】に変化しかねない。
【滅竜(ルース)】とは黄竜とはまったく対局に位置する存在。
すべての属性における自然界の力の具現化が黄竜ならば、それらを破壊、消失させる属性をもつもの。
それが滅竜(ルース)。
存在達が創りだした【悪意ある心】の結晶ともいえるのがヴリトラならば、
【滅竜(ルース)】はそんなヴリトラの姉妹のような関係となる存在でもある。
かの存在が誕生するきっかけは、【意思】の心一つ。
世界すべてを一度再び【無】にしようと決意したとき、その個体は生みだされる。
しかし【意思】により生み出される、という事実をシアンは知らない。
ゆえにどうしても懸念してしまう。
「とりあえず、ここの存在達を目覚めさせるのはシアンに任せるわね」
そんな二人の会話をさらっとさえぎり、にこやかにシアンに笑みを浮かべて話しかけるディア。
「…は…？あの？彼一人で目覚め…させる、ですか？」
何やら意味のわからないやり取りをしている彼らの会話にまったくついていけないギルド職員達。
ついていければそれはそれですごいものがあるのだが。
「ああ。彼は竜族なのでそれくらいはたやすいことのはずよ？
とりあえず、私たちは状況の説明をもう少し詳しく教えてもらわないと。
あ、ヴリちゃん、あなたもこっちで手伝ってね？」
「は～い！」
とりあえず面倒事…というか後始末はシアン一人でも十分に対応できる。

ゆえにそのまま、竜族、という言葉をきいて固まっている職員達を促しつつも
その場を後にしているディアとヴリトラ。
言っても無駄、というか逆らえないというのを十分に理解しているがゆえにため息一つ。
「…判りました。あ、すいません。この人間をおねがいします」
いいつつ、自らが背負っていたケレスを職員の一人にと手渡すシアン。
どちらにしろ、自分が今から行う行動を他者に見られるわけにはいかない。
もしも見られれば自らの存在がどのようなものか、嫌でも理解されてしまうであろう。
そして…自らが敬意を払っている【お二方】に関しても気づかれてしまう可能性が高い。
それだけは何としても防がねば。
ヴリトラ…まだ、神竜だけ、ならばまだいい。
しかし、しかしである。
【星の意思】であり、【光と闇の王】でもある【意思】の事が知られればおのずと混乱は必然。
この世界のありようすら問われる重要事項。
意思の本意は判らない。
しかし命じられればそれを実行するしかない。
そもそも、彼らにとって【意思】に逆らう、という考えは始めから持ち合わせてなどいないのだから――
ディア達がその場を離れてしばらく後。
会場、となっている【場】全体が今度は淡き金色の光にと包みこまれてゆく――

光と闇の楔　～大会終幕？と新たな問題？～（後書き）

日々、お気に入り件数が減ったり増えたり…展開がのんびりすぎるのかな？

まあそのあたりの自覚はありますけどとりあえず、大会完了したら急激に話しは進む予定。

この大会はあるいみキッカケ、であるからして、学園生活が平和でなくなるキッカケでもあるわけで。

ともあれ、見てくださっている方々、ありがとうございます！

光と闇の楔　～部門別優勝者と勧誘者達～（前書き）

今回もあまり話はすすんでません・・・
とりあえず、大会関係はある程度終息・・かな？

光と闇の楔　～部門別優勝者と勧誘者達～

ざわざわざわ。
いったい何がどうなった、というのだろう。
各国より正式に発せられた表明は、何でも『反逆者』と呼ばれる存在達がいるらしい。
その存在達は天界、魔界において長年、上層部とやり合ってきたらしいが、
近日、どうも互いに手を結び、その魔の手をここ、地上界にむけてきた、とのことらしい。
先日の一斉襲撃は彼らの侵攻行為である、と正式に発表された。
天界側と魔界側から正式に通達が出た以上、地上界側としても隠し通しておくわけにもいかない。
天上界側の反組織の名前を【ハスター・ホテップ】
魔界側の反組織の名前を【テケリ・ショゴス】
その二大勢力の名前が今さら、といえば今さながら全世界にと伝達された。
どうにか襲撃を逃れた人々は大きな町や王都にと身を寄せている。
そもそも、かの襲撃で家家なども壊された。
いまだに街道にでる【ゾルディ】達はいまだに類を見ないほどに増えている。
人々の心が不安になればなるほど、それらの数は増えてゆく。
まさに出口のない迷路に入り込んだかのような現状。
しかし、それでも日々は過ぎてゆく。
これからどう動くのか、何があるのか、先を見通せるものは…いない……

人、というものは弱いようでいてとことん強い。
いつまでも悲観にくれているばかりの種族ではなく、前をむいて歩くこともできる種族である。
確かに、いまだに各地を襲った襲撃の痕跡は残っている。
それでも、助かった存在達は多々といる。
少なくとも、もうダメかもしれない。
そうおもったときに、神の加護が確かに発生したのだから。
世界全てを覆い尽くした不思議な力。
一瞬、気がとおくなったとおもうと、次に気がついたときには全ての異形の存在達が消滅していた。
しかも、体を乗っ取られていたはずの知り合い達もまた元の姿にもどっていた。
これぞ奇跡、といわず何というのであろうか。
「しかし…ディア、あれでいいの？」
「だって面倒だし」
そういう問題だろうか？
思わず頭をかかえるケレス。
その場にいるギルド職員とて同じこと。
たしかにあの場において最後までディアのみが残っていた以上、必然的にディアの優勝が決まってしまったのは事実。
なぜかあの後、目覚めた参加者達はこぞって戦う意思を消失していた。
新たに優勝者を決めようとしても、自分達はまだまだ戦うに値しな

い、とみな謙遜なのか本気なのか、
とにかく全ての参加者達が辞退した。
戦闘部門だけでなくほとんどの部門でそのような出来事が今回は重なり、
仕方なく、それまでの総合結果のみでそれぞれの部門の優勝者を決めることとなったこのたびの大会。
本来ならば毎年、優勝者はギルドを挙げて祝うことにしているのだが、今の状況が状況。
今は少しでも動力があるならば、町などの復興に力をそそがなければならない、と皆が皆、理解している。
だからといって、一応、仮にも優勝者。
ギルド協会としても面子もある。
しかし学生なので辞退させてください、そういっても一応、形だけでも、というのでしぶしぶ了解したのだが。
「で、仮そめの代役をシアンさんにお願いした…と……」
何だかものすごく同情してしまう。
短い付き合いとはいえディアの正確はケレスなりに把握したつもりではある。
そんなディアの昔からの知り合い、という彼はおそらくこのようなことは幾度も経験したことがあるのであろう。
いつからの知り合いなのかディアに聞いても昔から、としかいわないので
そのあたりの付き合いはよくわからない。
よくよく考えれば自分はディアのことをまったく知らない、ということにいまさらながらに思い知る。
同じ寮に入っているとはいえ、そもそも出会いは学校の授業中。
たまたまあのとき自分と同じように召喚術が使えたのがほかならぬディアのみであった、というのもある。
「まあ、シアンはああいった類のものは扱い上手だからね」
そもそも、そうでなければ長、という立場は務まらない。

様々な問題などを解決するのもまた長の手腕一つとなる。
基本的に、竜族にも階級があり、それぞれの得意分野においてそれぞれ階級が決まっている。
それら全ての重鎮を取りまとめているのが長であり、
そして彼らの神である神竜と繋がりをもつことが許されるもの。
それから竜族の長たる、【黄竜】。
竜を神聖視している大陸においては、かの存在のことを【麒麟】とも呼ぶ。
「だからって人にマルナゲ、というのはどうかとおもうんだけど…」
大会が執り行われている会場から戻ってきたのはつい先日。
戻ってみるとその惨状におもわず唖然としてしまった。
王都テミスはまだ守護精霊の力が強かったためか、はたまた心強い兵士達がいたためか。
とにかく害はさほどなかったらしいが周辺の村や町はそうではなかったらしい。
今はとにかく、人手が何よりも足りないらしく、ギルド協会学校生徒全員が、いわばボランティア同然に、
それぞれの町や村などの復興人員にと回されている。
そしてまた、ギルドに登録している生徒達は、そのランク別に役目が割り当てられ、
そこそこ実力があるものたちは野外にぼっ発している魔獣たちの討伐を命じられているこの現状。
【奇跡】の後に一時ナリを潜めていた魔獣たちだが、時間とともに再びその姿を現しはじめている。
魔獣達…ゾルディ達の元となるのは、人の【念】。
強き思いがその形をなす。
ゆえに人々の中から不安要素が消えないかぎり、それらが少なくなることはまずあり得ない。
そして、それらの発生はより人々により不安な心を掻き立てている。

「よし…これで、ここは完了…っと」
ザッン。
ディアの言葉と同時、目の前で対峙していた見た目は猫。
しかしその大きさはちょっとした家程度よりもかなり大きい。
ついでにいえば大きく裂けた口からは絶えず牙がのぞいており、
真っ赤に裂けた口は思わずそれだけで免疫のない存在ならばまちがいなく硬直する。
ディアが手にしている剣…これもまたケレスには不思議でたまらないのだが、
どこからともなく剣をとりだしたディアが【ゾルディ】と呼ばれている魔獣に切りつけただけで、
なぜにこうまでしていともたやすく対象者が【霧散】するのか。
文字通りの【霧散】。
ディアが相手を貫くと同時、周囲に黒い霧のような存在がその対峙している体から発生し、
それらは周囲の空気に溶け消えるようにと霧散し風の中にと溶け消える。
討伐においてはヴリトラも参加したがっていたのだが、
霊獣界の混乱も地上界ほどではないにしろ多少はある。
何ものとて心の休息というか平穏はほしい。
そのときに、自分達の【神】がいるべき場所にいる、というのは少なからず力となる。
…もっとも、ディアからすれば、魔界、天界どちらにも顔を見せる気はさらさらないのだが。
そもそも、便宜上、【王】として存在するように設定していたものの、
自ら行動していたのは、【補佐官】という立場でのみ。
いずれは全てを任せてかつてのように自主性に任せたいディアからすればこれはまさによい機会。
ゆえにしばらくは様子をみるためにあえて力を貸すきも、もしくは

口出しする気もまったくない。
そのせいで、今現在、魔界、天界における側近の役目を担わされている存在達や、
それに準ずる役職の存在達はかなり大変な目にあっていたりするのだが。
もっとも、魔界においてはカーリーがその性質を生かせて嬉々として狩りを楽しんでいるようではあるが……
カーリー。
それは残虐王、ともいわれている魔界の王の一人。
彼はもっぱら戦闘を好み、そしてまた戦乱を好む。
時折、誰かまわず気にいった存在に干渉し、その力を与えることにより世界を混乱に導こうとする、
少し変わった性格の持ち主。
彼に魅入られてしまうと、種族、界を問わずに必ず残虐性が増してしまう。
むしろ理性がことごとく押し殺され、その方面のみ目立ってしまう。
もっとも、かの存在よりも力ある存在ならばその干渉をあっさりとはじくことは可能だが。
どうやらこの事態を面白がって多々とした世界の様々な存在達に干渉しているっぽいが、
とりあえず魔界の幹部達が放っている以上、別段、ディアとしても口をはさむ気はさらさらない。
「剣一つでゾルディを消し去る実力っていったい……」
目の前でいくらその現実をみせられたとしても、いまだに理解がおいつかない。
ゆえにぽそり、とつぶやいているケレス。
それぞれにギルドのランクからしてみれば中盤に位置している色をもっている二人に与えられているのは、
王都から少し離れた裏街道に出没するゾルディ達の駆逐。
いまだにギルドランクが最下位のものたちは主に町の中で復興の手

伝いなどを行っている。
戦えるものはひとまず街道の安全を確保するためにギルド協会、そして王国をあげて活動している今現在。
「ゾルディを構成している核をつけば誰にでもできるんだけどね」
そもそも、ゾルディはいくら強い念から生まれる、とはいえ、基本、それらには核、というものが存在する。
それらをはじめにつぶす、もしくは破壊、浄化することにより個体を保っていた力は瞬く間に解消される。
つまり…核を失えばどのようなゾルディでも瞬く間に形を失い、自然に還るしかない。
それは周囲の【気】の流れ、自然界にあるべき力の流れを見極められる存在であれば誰にでもできること。
しかしその誰にでもできることが今の世ではほとんどできない存在が増えているのも事実。
「そもそも、核云々っていうのがよくわからないし…というか、何でディアはそこまで詳しいわけ？」
幾度ともなくきいている素朴な疑問。
「私としたらむしろ判らないほうが不思議なんだけどね」
それに戻ってくる返答はいつも同じ。
ゆえにケレスとしてはため息をつかざるを得ない。
この手の質問はいつも堂々巡りになってしまう。
だからといって疑問が解消されるわけではない。
「さて。と、このあたりの浄化はすんだし。ひとまず町にもどりましょ？」
今の一体において、どうやら確実にこの周囲の【負の気配】は解決したらしい。
ざっと周囲を【視て】みても、そのような気配は今のところ発生していない。
周囲を見渡してざっと目につくのは、鬱蒼とした木々のみ。
ここにくるまで一つの宿を経由していることもあり、

周囲に旅人や商人、といった姿はまったくもって見受けられない。
街道の途中にあった宿においても、先日の襲撃の被害はあったらしい。
が、当時たまたまその場にやってきていた旅人のおかげでどうにか難を逃れたらしい。
そのときに追った怪我を甲斐甲斐しく宿の娘が手当をかねて世話をしているらしいが、
どちらをみてもどうやら双方ともまんざらではないらしく、
おそらくあのまま付き合いが始まりそうな雰囲気ではあった。
ふとここにくるまでに立ち寄った宿のことを思い出しそんなことを思うケレス。
そういった余計なことを思い出す余裕が生まれたのもまた、周囲から感じる何ともいえない圧迫した雰囲気が消滅したからであろう。
ゾルディが発生しているときは、すくなからずとも周囲の雰囲気、そして大気に影響を及ぼす。
どんな鈍いものでもその変化はわかる、とまでいわれているほどの変化。
不思議なことに浄化された後には、それらの空気が嘘であったかのように静まり返る。
「…というか、ほとんどディア一人で片づけたわよね……」
自分も強くならなければ、と自ら心に決めて、あえて外にでることを選んだ。
というかディア一人でいかせるのが心配だった、というのもある。
学校側としても生徒一人をいくらギルドに所属しており、大会優勝したとはいえゾルディ討伐。
などというかなり厄介極まりないことに向かわせることは忍びない。
ゆえに、町からでるときには最低限二人以上で、という制約をもうけているのも事実。
その結果、ディアとケレスがコンビをくみ、こうして目撃が報告されたこの場にやってきているのだが。

ディアにいろいろとアドバイスをもらいつつ、どうにか火の加護の名も伊達ではないよう、
多少は火の扱いができてきだしているここ最近。
それでもディアの説明は完全にケレスはよく理解できないのだが。
タマゴだの何だのといわけてもピンとこず、
ならば、原子だの元素だのといわれてもさらに意味がわからずに。
そしていまに至っている。
しいていえるとすれば、水の加護の影響で回復術が扱えるようになった、ということくらいであろう。
そんなケレスの心情を知ってか知らずか、
「とりあえず、町にもどりましょ。それとも、風竜でもよぶ？」
「…遠慮させてもらいます」
さらっと竜族を呼ぶ、などといわないでほしい。
切実に。
しかもそれが洒落ではなく実際にできるのだからさらに恐ろしい。
そもそもディアの交流関係というか交友関係はどこまで深いのか。
気になっているのは他にもある。
ディアの知り合いというあのシアン。
なぜかどうみてもお偉いさんとしか思えないようなギルド協会の存在達が頭をさげていたのが気にかかる。
もしかしてもしかしなくても、
あのシアンはかなり竜族の中でもそこそこの地位についている竜なのかもしれない。
どうしてもそんな思いが頭から離れない。
事実は、そこそこどころか竜族の中では長、という立場にあるシアン。
いまだにケレスはその事実を知らされてはいない。
ゆえに自分の思いこみだけで様々葛藤を繰り返していたりする。
たわいのないやりとり。
しかしこれが大会後、ほぼ毎日のように続いていれば嫌でも慣れて

しまう、というか慣れてくる。
それが逆に…ケレスからしてみれば怖い。
今まで恐怖の対象でしかなかった【ゾルディ】がいともあっさりと倒される様を目の当たりにし、
今までそれに抱いていた恐怖が薄れているのを自分でもはっきりと感じ取れる。
だからこそ怖くもある。
今までの自分の価値観、というものがことごとく壊れてしまいそうで。
人は、意識しないままでもどこか保守的な立場というか保守的な思考を守ろうとする傾向がある。
今のケレスはむしろその方向がよくでている思考性があらわれている、といってよい。
しかし当の当人はそれは無自覚であり、だからこそ漠然とした不安が募る。
何かのきっかけさえあればそういったことはすべて無意味だ、とわかるのであろうが、
そのキッカケをいまだにケレスはまだつかめないでいる。
「せっかくきたからこのあたりの薬草とか採取していきましょ」
一人戸惑うケレスをそのままに、にこやかに現状においてできることを提案しているディア。
生きる、という意味でいうならばディアの提案はもっとも適切なもの、ともいえる。
いえるが…その行動はディアにとって意味をなさないものであり、
ケレスを思いやってのこと。
その事実にいまだケレスは気がついてはいない。

「え～。今年の大会は何か大変なことになりましたが。
とりあえず、戦闘部門に関してはひとまず区切りがついた、と

いうことになりました。
　まだ料理部門などにおいては集計結果がでていません。
　むしろ芸術・美術・建造部門などに出店されていた作品の数々は復興にだいぶ役だっていますが」
実際に使用する際よりも小さく創られているとはいえ、簡易的に元の大きさ。
つまりは実際に使用する大きさまでに形を戻せばどこにでも移動が可能。
ゆえに家などを失った町や村などではそれらの出展作品が今回に限ってはかなり重宝していたりする。
創作料理などに関しても、基本、あまり材料費などを使わないものが多々とあったがゆえに、
復興作業を行う村などにおいてはすぐに簡単につくれる料理、としてかなり評価が高い。
その点でいけばこのたびの大会に参加していた参加者達はあるいみ高評価を得た、といっても過言でないであろう。
もっとも、その前提に村などが襲われて壊滅的な被害があったがゆえ、という注釈がつくものの。
いまだに基本的には大会期間中、ということもあり、それらの評価は、各村などに存在している、
ギルド支部に評価を投票してもらうことにより、順位をきめることにして
そのあたりの部門優勝者を決定する。
ということでギルド上層部の判断はまとまったらしい。
あくまでも大会を貫こう、とするその気概はさすが、としかいいようがないが。
伊達に全ての界においてギルド協会、という組織を普及させているわけではない、ということなのであろう。
世の中全体がいまだに落ち着いていないものの、それでもやはり日々は過ぎてゆく。

とりあえず今現在の現状を伝えるためにと本日は生徒全員がギルド協会学校にと集められている。
そもそも、この時期、第二月は大会があることもあり、基本、学生が学校にくることは滅多とない。
しかし今回、不確定要素である襲撃、という出来事が起こったがゆえに、いつものように異空間、
ともいえる場所での大会続行は不可能に近くなってきた。
そもそも、他の場所が大混乱に陥っている最中、何をのんびり大会なんて遊びをしているのか、
と批難を受けかねない。
ゆえに形式的に、しかも世間に貢献しつつ、それぞれの分野において臨機応変の措置が施された。
例をあげれば、美術建造部門や、創作料理部門等。
話しをきけば、他の界もさほど地上界とあまり変わらない現状と成り果てているらしい。
そんな最中、学生達にと説明しているのは、この学園の一応管理者であり、校長を務めている人物。
「まあ、そんな現状の中、不確定要素が加わりはしましたが、
　ひとまず戦闘部門において我がギルド協会側よりこのたび優勝者が決定いたしました。
　本来ならば正気を取り戻した参加者の皆様方にきちんと決勝として戦ってほしかったのですが、
　みなさんどういうわけかこぞって参戦を事態されたがゆえにそのような結果になりました」
正気を取り戻した参加者達は、運営側から他の場所も同じようなことがおこっている、とききき。
ほとんどの参加者が故郷、
つまりは残してきた家族や友人を心配してそのままそれぞれの場所にと戻って行った。
戻ってゆく彼らを引きとめることなど運営側としてもできるはずも

なく。
何かがあればギルド協会の支部によるように、とそれぞれに伝達してそれぞれを送り返した。
結果として、最後まで実質的に参加者、として残っていた形となったディアに優勝が回ってきたのは、
それは結果論、ともいえるべきこと。
…もっとも、かの襲撃がなくてもディアは確実に優秀できるほどの腕前はかるくもっていたりするのだが……
「それでは、大会に貢献した、ディアさん、前へ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
さすがにこのことは伝えられていなかったがゆえに思わずその場にて硬直するディア。
そもそも、自分は目立つ気などはさらさらない。
ないのにこの現状はどうにかしてほしい。
しかも、名指しをされた以上、校長が熱演している舞台の上の教壇にいかなければならないっぽい。
「…とことん、不可視認証ほどこしときましょ……」
今後、自分の容姿が目立つことになれば、面倒なことこの上ない。
ゆえに、呼ばれた以上、しかたないにしろ。
この場にいる全体に自分の容姿が認識できないようにこっそりと細工しておく。
その細工の方法は至って簡単。
自分の気配を周囲の気配と全く同じにすればよいだけのこと。
それだけで、そこにいるのにそこにいない、という認識にと嫌でも陥ることとなる。
いきなり名前を呼ばれ、しぶしぶながらもディアはため息をつきつつも、
そのまま並んでいた生徒達の間をすり抜けて舞台上にとあがってゆく……

「へ～。あの襲撃の中でも普通に動いていた参加者、ねぇ」
その報告におもわず笑みが漏れる。
予測外の襲撃ではあったがそれはそれなりに楽しめた。
そもそも、魔界において戦闘が嫌い、という存在はあまり存在しない。
ゆえに魔界側としては逆にかの襲撃は盛り上がるイベントの一つとして捉えられていたりする。
もっとも、そのイベント云々で実際に負傷者がでてしまっている以上、こうしてせっかく楽しんでいた、
というのにずるずると執務に引き戻されてしまったのもまた事実なのだが。
日々あがってくる襲撃の被害報告。
部下達がこぞってきちんとある程度報告をまとめてはいるが
それらに目を通すのは審問官の王としての役目があるからに他ならない。
何しろ被害などに関する苦情や訴えなども日々増えてきている、ときく。
面倒なことは全て部下達に任せたいのは山々なれど、しかし仕事は仕事。
そんな中、人間界での大会での出来事で興味をひかれることを聞いた。
日々仕事、ほとんどが書類作成などに追われていた彼が興味を引くのはごく当然の結果、といえよう。
さらに興味をひかれてよく調べてみれば、
その人間の代理を務めているのが、かの【シアン】というのだから余計に興味がわくというもの。
「ふむ。一度、あちらの実情を詳しく知る、という名目をもって、いってみるのも面白いかもな」
そもそも、大会優勝者に他界の存在が接触するのは多々とあること。

ゆえに自分が動いてもさほど違和感は感じさせないはず。
あのお堅いイメージの強い竜王シアンが動くほどの人物。
それだけでも動く価値は十分にある。
「よし。我は今から地上界にいって、ことの次第を自ら確かめてくる。後はまかせたぞ」
『はっ！』
尊敬する上司に信頼を向けられる。
それが彼らにとっては何よりの誇り。
魔界において全てが実力主義の中、彼らの上司たる人物は彼らの個性をかなり重視してくれ、
その能力も高くかってくれている。
他の魔王達や大侯爵、といった存在達は自分達のような下っ端はただの使い捨ての駒にすぎない。
そう捉えている輩も多々といる、というのに。
彼はそんなことはなく、自らの内部に抱え込んだ全ての存在を等しく大切にする。
ゆえに彼の部下となった存在達は主のためならば命も問わない、というような存在達ばかりとなっている。
時折、オチャメないたずらなどをしたり、いきなり行方不明になったりすることはある上司ではあるが、
彼らにとっては尊敬する主には変わりがない。
大侯爵アスタロト。
彼は４０の悪魔軍団をその内にと擁しており、いわば魔界の実力者の中で五本の指に入るほど。
その能力も希少性が高く、過去と未来を見通す力をも持ち合わせている。
運命を司る神、ノルンとは古くからの知り合いであり、それぞれが情報を用いて、
確実なる未来を予測、予見することもしばしば。
魔界においては基本、力が全て、という考えの持ち主が多々といる

中、
教養や個々の知識が何よりも必要、と現実的な考えを持ち合わせている魔王の一人。
ある存在などは、彼を知識の神などと呼び称すほどもいるほど。
それほどまでに彼の学問などに対する執念は果てしない。
それらの能力などもあり彼がついている役職は、魔界の中でもかなり重要な部署である、審問官、という地位。
その審問官の中でも一番高位である、第八位階という位をもち、別名、審問王、ともいわれているほど。
彼は優秀なものであれば種族を問わずに仲間に引き入れようとする。
それがたとえ一部では貧弱で使い道があまりない、といわれている人であろうとも例外ではない。
彼のような考えをしている魔界における実力者はあまりおらず、
ゆえに一部の他界のものたちからはかなり信頼が厚い。
「最後までのこっていて、しかもシアンを動かせるほどの人間。もしかして【言霊使い】…か。
それとも……」
竜王ともあろうものを扱える人間の存在など限られている。
かなり情報が隠されているがその人物の傍にはなんとあの神竜すらも一時傍にいたらしい。
留学生としてその人間がいるギルド協会学校へ入学しているという報告をうけたときには思わず目を丸くした。
彼がそのように驚愕の表情をするのは滅多とないこと。
ゆえにこそ、シアンを動かし、さらには神竜をも動かしたとおもわれる人間に興味がわく。
「…それに、もしかしたら……」
もしかしたら、いまだに上層部でもつかめない、【王】の行方がわかるかもしれない。
何しろユミルの水鏡ですら【王】達の行方はわからなかった。
【水鏡】いわく、かの存在達は世界そのものといっても過言でない

ので自分の力では到底見通せない、とのことらしい。
それは能力を多少なりともっているアスタロトは詳しく説明されなかっが何となく理解できる。
そもそも、彼の能力、そして運命を司る神であるノルンの力をもってしても、
王、そして補佐官達の運命はまったくもって読めない、のである。
魔界の王、そして神々の王とも同じ状況であるがゆえに、ノルンとアスタロトはあり得ないけども、
あり得るかもしれない一つの結論、というか思いを互いに抱いている。
その考えはあまりにも突拍子もないので他のものに話したことはないのだが。
すなわち。
同じような【世界そのものといえる存在】が複数同時期に存在することはまずあり得ない。
ありえるとするならば、それは一つの存在の影、もしくは分身、ということになりえる。
それから導きだされる答えは…もしかすると、光と闇。
その二つを束ねる王とは、実は同一なのではないか…という、何とも聞く存在がいれば卒倒しかねない結論。
もっとも、それらが全て事実であることを、アスタロト達は知りえない。
否、知らされてなどはいない。
予測だけでそこまでの結論にたどり着けているアスタロト達はあるいみ異端、といえなくもないであろう。

「まずは、直接あってみての話し、だな」
いいつつも、そのまま地上界に出向くためにと【門】へと移動する。

かの先で彼にとっては驚愕すべきほどの出会いと。
それに伴う驚愕の真実が待っているなど…
当然、今のアスタロトは知るよしもない……今は、まだ……

光と闇の楔　～部門別優勝者と勧誘者達～（後書き）

そろそろ本編で主人公たちとともに活躍する悪魔さんが出張ってきました

・・・天界側からはおそらく次の次くらいかな？

しかし、ワールドゲーム、うちこみしてるのはいいんですが、きがついたら５０Ｋ超え・・あれ？

・・・文字数制限上、短編ではむりそうな気配になってます（汗

光と闇の楔　～大侯爵とディアの正体？～（前書き）

ようやく、学園生活、のログ？の意味が生きてきます！
…ここまでくるのに約４０話・・ってどうだろう？
まあここまでくれば展開はかなり早い、と自覚してますけどね（いやほんと
ようやく学園を巻き込んだ騒乱？の開始です♪
※ちなみに、水晶さんの定義については、「授業と侵入者」ですでに説明してあります。

「…は？」
思わず耳を疑った。
「いや、今、何と？」
問い返すその声はおそらく自分でもはっきりとわかるほどに間抜けであろう。
「地上界側のこのたびの大会は形を変えて継続しているようではありますが、
　とりあえず天界側のほうは問題なく進行しています。
　こちら側のほうはさほど被害はなかったのですけど……
　そもそも、あの【力】は紛れもなく【王】のもの。
　気になるのがあの竜王シアン殿が人間界のために動かれているようなのです」
王が姿を消している、というのは上層部の者のみが知る事実。
しかし、たしかに全ての場所においてあのようなことができるのは【王】以外の誰もありえない。
一瞬のうちに、多々と発生したゾルディを消し去る技など、神々の誰も持ち合わせてなどいない。
しかも、全てにおける発生源となるべき心すらをも浄化して。
「視神ヘイムダル殿よりの報告ですので、間違いはないとおもわれます」
各世界を監視する立場にある神であるヘイムダルがそういっているのならば間違いないのであろう。
そして、さらに。
「…この報告も間違いない、のか？」
とある報告に目をやり思わずもう一度確認する。
「はい。ヘイムダル殿も叫んでおりました。…神竜様は何を考えておられるのでしょうか…？」

「…我に聞くな……」
久方ぶりに大人しくしていたはずの、あのじゃじゃ馬姫が動き出した可能性がある。
それだけに頭を抱えずにはいられない。
確かに、反組織が動き出したとなれば、面白いことが好きなかの神のこと。
率先してかかわろうとするのは判らなくもないが…
「……で、その神竜様に勝った人間がいる…と」
さらに何かがあるかもしれない、と詳しく調べてみたところ、神竜ヴリトラは、ヴーリと名を名乗り、
何と地上界側のギルド協会学校から生徒、として大会に参加していたらしい。
問題は、その生徒として参加していた彼女に勝ったものがいる、という報告である。
さらに調べてみれば、唯一、戦闘部門でゾルディの脅威に打ち勝ち正気を保っていたままの生徒らしい。
ゆえに、必然的に戦闘部門の優勝者になってしまったらしいのだが……
「……もしかしたら、補佐官様かもしれないな。可能性としてはありえる。
ならば、我らが【王】もまた、地上におられるやもしれん。
…急ぎ捕獲隊…もとい、捜索隊を組織したほうがよいか？」
可能性は遥かに高い。
というか、天界にも魔界にもその存在が感じられない以上、
比較的可能性が高い界は地上界、という意見はでていた。
「どちらにしても、今後のこともある。常にこちら側からも地上界に派遣員を選ばなくては。
地上界の存在達は、かの欠片を見つけ出すことはまず困難であろうしな」
何しろ欠片、とはいえ神の力をもつ代物。

それがどんな形をしているのか、手にしてみなければ判らない、というおまけつき。
魔界においては、かの力はその気になれば判りやすいほどに見つかるであろう。
魔の力が満ちている中に、神の力はひときわ目立つ。
その波動の形式さえつかめれば、という注釈はつくが。
「オーディン様を会議に参加させるという話しがありましたし。
とりあえず、先を見通す力をもつノルン様を推薦してはいかがでしょう？」
運命を司る神、ノルン。
その彼女を推薦してくるあたり、伊達に秩序と繁栄を司っているわけではない。
そのあたりの人選もこなれたもの。
「そうだな。ヴィシュヌ。ではそのようにまずは表向きの訪問目的を作らねば……」
運命を司る神であるノルンでもおそらく、【王】や【補佐官】のいる場所はわからないであろう。
が、しかし、何かの参考になるかもしれない出来事は起こった。
神竜ヴリトラに勝ったという生徒。
おそらく全てはその生徒が鍵を握っている。
しばし、天界において今後の対策と、行動が秘密裏に話しあわれてゆく……

光と闇の楔　～大侯爵とディアの正体？～

「ようやく落ち着いてきたわね～」

第二月ロイヤルから月がかわりめまぐるしく月日は過ぎていった。
その間、各界においてそれぞれ混合会議を行おう、という話しがまとまったらしく、
第４月ドゥドズの最中に会議が行われることに決定した。
本来ならば、第二月の最中に混合会議を開きたかったらしいが、ゾルディ達による大襲撃。
それにより計画はかなりずれこんだらしい。
第三月は日々発生するゾルディの残党狩りであった、といっても過言でない。
ようやく、一月が経過し、街道なども落ち着きを取り戻しはじめている。
破壊された村々や町も一月経過し、順調に復興をみせている。
それでも、いまだに大きな首都や王都、それに町などには避難民が身を寄せていたりするが。
第三月シマヌから第四月ドゥドズへ。
明日よりその第四月にと突入する。
そしてまた、ようやく協会側から明日より通常学習に戻る、と報告があった。
第四月は場所にもよるが、基本、地上界における、半球においては雨が多い。
これよりのち、赤道、ともよばれている太陽の通り道である【光の道】より北にある大地は基本、
嵐や雨といった自然現象に多々と見舞われることとなる。
赤道、と呼んでいるのは基本、伝道師達や神々、といった存在達のみ。
普通の存在達は、太陽の通り道を畏怖の念と敬意の念をもって【光の道】と呼び称している。

文字通り、その道ぞいにいれば、太陽は沈むことがない。
それはこの地…否、惑星が太陽の周りを自転しながら回っているからに他ならない。

「ほんと、何かいろいろとあったものね～」

ようやく教師達も落ち着きを見せ始めている。

「ほんと。ようやく私もゆっくりできる～！！」
しみじみと語る生徒の横で、おもいっきり共感しつつ叫んでいるヴリトラ。
「…ヴリちゃん。きちんと役目は終えてきたんでしょうね～？」
そんなヴリトラをじと目でみつつもいっているディア。
「うっ！と、とりあえず私がいなくても大丈夫そうっぽいし！
それに、ここで会議が行われる以上、私もここにいたほうがいいかもしれないって意見でたし！」
そもそもその意見をだしたのはヴリトラ本人。
それに何よりも。
「それに、学校って楽しいんだもん！口うるさい頭でっかちの輩達だけでなく、いろんな人がいるし」

霊獣界において自分にいろいろと口をだしてきていた輩は多々といた。
といっても名目上は教育係だの何だのといった名目をもっていたが。
…とくに、立ち振る舞いについての教育係とはヴリトラは相性が悪い。
自由が好きなヴリトラと、神として型にはめようとする教育係り。
それで衝突しないほうがどうかしている。

「まあ、本来の真実と伝わっている物事の誤差もわかっていいのは

いいけどね」

事実、学校で教えている出来事は、実はまったく異なっている者も多々とある。

たとえば、世界に対する伝承や、そして自然界における定義等。

真実がどのように歪んで伝わっているのか知るにはよい機会。

もっとも、全て真実を話しても、今まで同様に都合のいいように人々は解釈し伝えてゆくのであろう。

「ま、いいけどね。とりあえず私は第六月ウルルで受ける資格、何にしようかな？」

年に二度ほどしかない資格試験。

すでに第一月ニサンにおいて薬学免許試験、C級を所得しているディア。

「医学試験にしてみるかな？」

とりあえず薬学はすでにC級を所得しているので受けるのに問題はない。

医学試験をうけるにあたり、最低でも薬学免許C級は必要とされている。

今後これから起こることを考えれば、その資格をとっておいたほうが便利といえば便利。

何しろいろいろと応用がきく。

何もなければ旅の商人の資格を取りたいところだが、それはまあ次の機会にするとして。

…そもそも、いつ代替わりの影響が強くなるかわからない時期にそんなのんきなことをしている場合でない。

というのはいくらディアとてよく判っている。

「…大姉様から連絡があったけど、おそらくこの百年、早くて五十

年以内にありそう、という話しだしな～」

昨夜、大姉たる、この太陽系の主体ともいえる【恒星】とも呼ばれる【意思】より連絡が入った。

今、出ている案はいくつかある。

とりあえず馬鹿ばっかりやっている魂達を壁に加工して影響がでないように、

自分達の重力の範囲外に設置するという案。

そしてまた、それぞれの惑星や衛星のみに保護を重ねかけする案。

一番いいのは、この太陽系全体を完全に隔離してしまうように結界を施すことなのだが、

そこまでの力は今の意思達はもちえていない。

【意思】達の力は、基本、そこそこの【惑星】に生きる者たちの力を糧とする。

一つ一つの惑星ならばいざしらず、広範囲を取り囲めるほどの生命力は今現在、この太陽系には存在していない。

だからこそ、自分達の力をも分け与えて誕生した魂であるロキの協力が必要不可欠となってくる。

彼が目覚めてどのような行動を起こすかはわからない。

まあ、話しあいの結果、ここにいたくない、というのであれば別の場所に移動することも視野にはいれている。

彼の望みは家族との団らん。

それが全てであったというのをディアはより理解している。

ただ、今は悲しみゆえに周りがみえなくなっているだけ、ということも。

「…げっ!?そんなに早いの!?お姉様!?」

そんなディアのつぶやきに思わず驚愕の声をあげるヴリトラ。

今一度、完全に全ての原因となるものを浄化したとして、

それほど早くに代替わりの災害が訪れるのならば、逆に【惑星】そ

のものの力が低下しかねない。
「だからちまちまとしてるんじゃないの。そうでなかったらさくっと面倒なのでいってるわよ」
それは本音。
そもそもこんなまどろっこしいことをせずに、さくっと全てを一度完全に【昇華】し【浄化】してしまえばよいだけのこと。
それをしないのは、いつ訪れるかもしれない【災害】に備えているがゆえ。

「？ディアさん？それにヴーリちゃんも何はなしてるの？」

見た目が七歳程度、ということもあり、ヴリトラの愛称は、すでに【ちゃん】で位置づけられているこのクラス。
他のクラスの存在達からも、おおむねその人懐っこさからヴリトラはかなりかわいがられていたりする。
何しろお菓子をあげたりすれば満面の笑みで喜びを表すのだから、はたからみていてもかなりほほえましい。
もっとも、お菓子をあげるからついてきて、といわれてほいほいとついて行くこともたびたびおこっている。
なぜか邪な考えを抱いてそのような行動をしたものたちはこぞって一時的な記憶喪失と成り果てていたりするのだが。
あまり力をもたないただの存在が、神竜、ともよばれている存在にかなうはずもない。
そういったことも時々あるものの、おおむねギルド協会学校自体は平和そのもの。
この一月はほとんど生徒達もいろいろな行事や復興などにあてがわれて勉強どころではなかったが。
ようやく日常がもどってくると連絡があったのは今朝がたのこと。

「こっちの話し。そういえば、皆は第六月の試験、どうするの？」
とりあえずさらっと話題を変換するのはいかにもディアらしい。
そんな話題変換に気づくことなく、
「前回はうけなかったからな～。私たち。とりあえず何かうける予定ではあるけど。
　今のところだとどの試験がいいかもよくわからないのよね～」
「でもさ。どちらにしても、卒業までにそれぞれの分野において最低C級はとらないと卒業認められないしね」
特にここは総合科。
そういったことはかなり厳しい。

ギルド協会学校の基本的な卒業資格を取るためには、
資格試験のそれぞれの分野において最低でもC級所得をすることがあげられる。
ゆえに、学校を卒業した生徒はどこにでても恥ずかしくない知識と経験を持ち合わせている。
だからこそ、ギルド協会学校の評価は果てしなく高い。
技術や知識等に関しては絶対に妥協を許さない。
それがギルド協会が徹底して守っている事柄。

たわいのない学生らしいやり取り。
と。

『総合科C組A在籍のディアさん。理事長室までお越しください』
クラスの教壇の横にある水晶珠が淡く光り、そこから声が教室中にと響き渡る。

緊急連絡用の通信をも兼ねている水晶。
そこから放送が入る、ということは何か急ぎの用事がある、ということに他ならない。
「ディアさん、なんかよんでるわよ？」

「みたいね」
「この前の大会のことかしら？」
何しろ学生でありながら優勝した、というのはかなり珍しいらしく、様々な国などからも落ち着きはじめて問い合わせがきているらしい。もっとも、状況が状況であったがゆえに、協会側も上手にあしらっているらしいが。
「？お姉様に用事？もしかしてア～ちゃん関係？」
「まさか～。いくらあの子でもここまではこないでしょ…いや、でも、まさか……」
ヴリトラに指摘され、思わずその可能性に思い当たり。
「・・・・・・・・・うん、やりかねない、わね。とりあえず気をつけておくわ」
下手に探りをいれれば確実に気づかれる。
この国に入ってきているのは知ってはいた。
ギルド協会の本部に出向いていたことも。
しかし今日の行動まできちんと把握していなかったのも事実。
二人のやり取りに首をかしげるクラスメート達をそのままに、教室を後にしてゆくディア。
彼の性格上、ありえないことはありえない。
その可能性に思い当たり、とりあえず万全の態勢にて理事長室へとディアは向かってゆくことに。

「失礼しま…す」
がらり。
とりあえず呼ばれたゆえにやってきた。
一瞬そこにいるはずのない…否、来ていたのは知ってはいたが、まさかここで出くわすとは。
しかしこちらが気づいている、と知られてもおかしくもあり、また理事長達に気取られるわけにはいかない。

理事長室の扉を開くと、そこにいるはずのない、黒髪の美青年、
といって過言でない男性が座っているのが見て取れる。
気配を普通の人のそれとあまり変わりなくしておいて正解。
思わず心の中でそう突っ込みをいれつつも、
「総合科C組Aのディア。ただいま到着いたしました。何か御用でしょうか？」
声のもつ雰囲気もいつもと多少変えているので気づかれていない、
そう思いたい。
部屋にはいるとそこには、理事長と学校長、そして目の前にはディアはよく見知っている、
しかし表向きは絶対に知っているはずのない美青年が応接間のソファーに座っていたりする。
「ああ、来ましたね。ディアさん。とりあえずそちらにおかけください」
「え？あ、あの、授業がありますけど……」
というか、彼の横には座りたくない。
断じて。
少しの気配でもおそらく彼は気づきかねない。
それほどよく彼は自分の元によく意見を請いにきたり、もしくは知識を学びにやってきていた。
だからこそ次に行われる授業をダシにしてこの場から立ち去る機会をうかがっているディア。
「かまいませんよ。すでに次の授業担当の教師には話しをつけてありますから」
…話しはつけなくてもいいですっ！
思わずそんな理事長の台詞に内心突っ込みをいれるディア。
それでなくても、部屋に入ってきたときからこちらを探る視線がとても痛い。
というか思いっきり内部を視通そうとしているのがありありとわかる。

簡単に精霊術のように見せかけて内部が視えないように装っているのでそうは目立たない、とはおもうのだが。
「とにかく、お座りなさい」
「は…はぁ。では、失礼します」
いいつつも、真横、ではなくなるべく端のほうにちょこん、と促されるままに腰かける。
「あの？ところで？こちらの方は？」
とりあえず聞かないとおかしいであろう。
ゆえにソファーの端っこのほうにと腰かけ、目の前の理事長達にと問いかける。
同じソファーに腰かけている青年。
その整った顔立ちに長く漆黒の黒髪。
見る存在を思わず見とれさすほどの容姿と美貌の持ち主。
彼が何ものなのか、知ってはいるが知らないフリをしつつも戸惑ったフリをして問いかけるディア。
おそらく、第三者がみてもディアがただただ戸惑っているようにしか見えないであろう。
そう、表面上、においては。

部屋にはいってきた少女。
大会で優勝したという少女に会いたい、と面会を申し込んだのは先刻。
普通の面会では断られたがゆえに、仕方がないので身分を出した。
その結果、とりあえずは取り繕ってくれることが決まったらしく、その生徒をわざわざ呼び出したらしい。
ギルド協会側にとって、魔界の仮にも大侯爵、という立場にある彼の願いをないがしろにはできはしない。
それゆえの行動。
その姿を視た時に一瞬、目を思わず見開いてしまったのはおそらく誰にも気づかれなかったであろう。

世の中、似た存在は三人はいる、とはいうが、ここまで似すぎている、というのはありえるのか。
否、ありえない。
そもそも、天界側の補佐官と、
魔界側の補佐官がまったくほぼ髪と瞳の色だけ異なり同じ容姿をしているように、
人間界側にも髪と瞳とがことなるだけのまったく同じ容姿のものがいる、などと信じられない。
というかありえたら怖い。
そんな考えが一瞬のうちに彼の脳裏を駆け巡る。
そんな彼の思惑を知ってか知らずか、
「え…あ、あの、授業がありますけど……」
言葉を濁しつつも、この場から立ち去りたい感をひしひし感じる台詞を発するその少女。
確か名前をディア、といったが。
名前からもあやしすぎる。
そもそも、ティアマト様に似通った名前というのも気にかかる。
「かまいませんよ。すでに次の授業担当の教師には話しをつけてありますから」
目の前の少女にそんなことをいっているギルド協会の理事長、となのった人物。
正体を見極めようと内部を透視しようとしてみても、まったくもって視通せない。
よくよく視てみれば、精霊術か何かで全身を覆っているらしい。
当人が意図してやっているのか、それとも精霊達が率先してやっているのか。
そこまではわからないが、すくなくとも、精霊達が率先して協力しているように感じられなくもない。
もしも報告にあったとおり、目の前の少女が【言霊使い】であるならばその可能性もありえるかもしれない。

が、どうしても別の可能性が頭から離れないのはこれいかに。
「とにかく、お座りなさい」
「は…はぁ。では、失礼します」
いいつつも、真横、ではなくなるべく端のほうにちょこん、と促されるままに腰かけてくる。
「あの？ところで？こちらの方は？」
戸惑いを隠しきれずに彼のほうをみつつも問いかけてくるそんな台詞に対し、
「ああ。そういえば説明がまだだした、ね。彼があなたをここに呼んだ理由です。ディアさん。
　何でもあの大会で何があったのか、あの場で残っていた貴方に聞きたいことがあるそうです。
　この御方の名前はアスタロト様。…ここまでいえば、この御方がどなたか、あなたにはわかりますか？」
戸惑い気味な表情を浮かべているディアにと、それとなく遠慮気味に問いかけている学校長。

判るも何も、おもいっきり知っているにきまっている。
しかし、それを口にだすわけにはいかない。
それゆえに。

「アスタロト？…あれ？それってたしか、魔界の大侯爵の一人の名前ではなかったですか？
　まさか、ですよね。そんな身分ある人がこんな人間界の、
　しかも学校の一介の学生にしかすぎない生徒に用事があるなんてありえませんし」
ディアの言い分は至極もっとも。
そもそも彼のような立場にあるものならばどこからでも情報は手にいれることができる。
ここにくる理由として考えられるのは、たった一つ。

すなわち……疑われている、これにつきる。
「ええ。そのまさか、のようなのですよ。我々としても大侯爵様の願いを無下にはできませんしね。
　それで、彼曰く、後学のためにも学校を見物してみたい、と申し出されまして……」
そんな厄介な申し出しないで！ロトちゃんっ！
思わず内心ディアは叫びをあげるものの、その動揺を表にだすことなく、
「…あ、あの？まさか…その、私に案内を…とか、いいませんよ…ね？」
恐る恐る、ものすごく厄介な可能性にと思い当たり、おずおずといかけるディア。
「はい。あなたに案内を頼みたい、とおもいまして。
　大会の様子を話しながらだと時間も短縮できるでしょう？」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・
なんで変なところで気をまわすの！？
この人間！？
にこやかにいいきる理事長の言葉に思わず無言となってしまうディアは間違っていない。
絶対に。
「というわけですので、よろしくお願いしますね」
いいつつもにこやかに手を差しだしてくるアスタロト。
「私のようなものが手に触れるのは畏れ多いですから。
　あ、先生、私より先生のほうが案内をするならば……」
「いえ、彼のたっての願いでして。そもそも通っている学生に説明してもらったほうが、
　いろいろと庶民の考えもわかるのでそのほうがよい、とのことです」
・・・・・・・・・・・・・いらない知恵をもってきて言いくるめ

てるし……
彼の性格はディアとて十分承知している。
いるがゆえに、おそらくこちらを疑って逃げ道のないようにしている
るのが嫌でも理解できる。
できるからこそ、その罠にたやすくひっかかりここで正体をさらし
たくはない。
「…あの、私に拒否権は……」
「ありません。魔界との平和な付き合いのためにも頑張ってくださ
いね」
にこやかにそういわれれば、これ以上拒否をする理由がない。
そもそも、魔界の大侯爵の申し出を一介の学生が拒否できるはずも
ない。
「…わかり…ました…」
とにかく無難にここをやり過ごすことを考えましょう。
そう考えを切り替え、がくり、とその場にうなだれるディアの姿が
その場においてしばし見受けられてゆくのであった……

「…ティアマト、様？それとも、ルシファー様、ですか？」
とりあえず、というのでひとまず校舎の説明をしながらも
前後にわかれて説明がてらに校舎内を進む二つの人影。
そんな中、突如としていきなりそんなことを投げかけるアスタロト。
人はフイをつかれればどうしてもどこかで隙ができる。
それゆえの問いかけ。
「…？どなたかと間違えていませんか？」
おもいっきり確信をついて歩きながら話しかけてくるアスタロトの
台詞に一瞬立ち止まりつつも、
にこやかに、勘違いです、とばかりに言い放つ。
そもそもそんな陽動作戦にひっかかるようなディアではない。
彼らを育てたのもまた【意思】なのだから彼らの性格は嫌でも理解
しつくしている。

「いや、私の知っている方々にあなたはよく似ていらっしゃるんですよ。
　その方々は自分で自らの雰囲気を変えるのが得意でしてねぇ」
ここまで似ていて、他人のそら似、とはありえない。
伊達にどちらの界にも様々な知識を学ぶためにおしかけていたわけではない。
それはまるでキツネとタヌキのばかし合い。
しばし互いによるそんな互いを探りつつ、ごまかしあう光景が、校舎内において見受けられてゆく……

「お姉様～～！！」
ディア一人だといろいろと大変かもしれないので、竜族である貴方もいったほうがいいでしょう。
そんな余計な気遣いにより、教室からだされ、ディアを探していたヴリトラ。
その視線の先に探していた人影をみつけて思わず叫びつつも駆けりよる。
今の彼女の頭の中には先刻ディアと交わしたやり取りは奇麗さっぱり消えている。
つまり、完全に失念しているがゆえにいつものようにぶんぶん手をふりつつも近寄ってゆく。
「…げっ！？」
間が悪い、といえば間が悪すぎる。
案内をしている中、どうして授業中のはずの彼女がやってきているのかがわからない。
ゆえに思わず声をもらすディア。
そんなディアとは対照的に、走ってくるその少女の姿には見覚えがあるアスタロト。
というか彼のような立場のものならば誰でもその人間形体の姿は見知っている。

それゆえに、一瞬、口元に笑みを浮かべつつ、
「おや？これはお久しぶりです。ヴリトラ様。…で？まだシラをキリ通されるおつもりですか？
　ヴリトラ様がそのようにおよびするのは、世界広しとはいえ、決まっていますよね？」
にこやかにその場にて礼をとりながらも、目の前にいるディアにむけてにこにこと問いかけるアスタロト。
そう。
神竜ヴリトラが姉、と呼び称す存在。
それは彼が知っているうちではたったの二人。
天空神の補佐官ティアマトと、魔神の補佐官ルシファー。
しかも、様づけをしていることからしてアスタロトの中の疑念が確信にと変化する。
「あれ？って、あ～。タロちゃんだ～！ひさしぶり～！」
がくっ。
何とも間のぬけたその呼び方に思わずその場にて脱力しそうになってしまう。
ヴリトラにとっては久しぶりの邂逅、といえるのでそう呼んでしまうのは仕方がない。
タロ、とはアスタロトの幼名であり、
ゆえに犬みたいな名前だ、と散々からかわれるきっかけとなったあだ名の一つ。
そんな二人のやり取りを一瞬ほほえましく思うものの、
しかしもう少し空気をよんでほしいと願うディアの心はおそらく間違ってはいないであろう。
「ヴリちゃ～ん？もう少し、空気を読む、というのを覚えましょうね～？」
「え？え？あ…あああ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイいいっ！」
それでなくても先ほど会話していて判っていたのに、一緒にいると

ころでそう呼んだらどうなるのか。
それが判らないヴリトラではない。
ただ、きれいさっぱり失念していた、というだけなのだが。

「…さて、『Ｔｅｒｒａｉｎ　Ａｓｔａ。Ｊｅ　ｄｏｎｎｅ　ｔｕ　ｕｎ　ｏｒｄｒｅ。Ｇａｒｄｅｚ－ｌｅ　ｓｅｃｒｅｔ』――　アスタロト。汝に命ず。他言は無用。

ヴリトラの登場により、確実にこのままごまかすことは不可能、ともいえる。
ゆえにこその先制攻撃。
ズッン。
ディアの言葉とともに、周囲の空気が瞬く間に凍りついたように重くなり、
アスタロトに至ってはそのまま硬直してしまう。
刹那。
周囲の空間が奇麗に切断され、彼らと【学校空間】は確実に隔離される。
今、ディアが放ったのは、魔と聖の力を加えた力ある言葉。

まるでその場から切り取られたように、彼らの周囲は瞬く間に漆黒の闇へと変化してゆく……

光と闇の楔　～大侯爵とディアの正体？～（後書き）

…しかし、恐ろしいことに、ＷＧ・・・すでに８０Ｋ超えました…
あはは（汗
…よく短編、としてあげてた１００Ｋ以上、２００Ｋの未満になるかな？ううむむ……

光と闇の楔　～補佐官とアスタロト～（前書き）

悪魔における定義は、いろいろ参考資料を混ぜごチャにして設定しております。
つまり、おいしい所だけとって、それらをまとめて設定、という形です。
悪魔は様々な定説がありますが、神々においてはそういったのはないですし（苦笑
まあ、この話しは堕天使だの何だの、というのはまったくもって関係ないです（きっぱり断言
ちなみに、でもなぜか人間側はそのような解釈をしていることはあったりします（笑
ともあれ、ようやく今回、ディアの本当?の正体暴露（一部）ｖ（
今まで散々暴露してますが…笑

・・・そのうちに、まともに設定資料集を編集しますので、
それらをつくってから物語のラスト（最終回後）にでも人物等の設定集を上げたいとおもいます……
（今現在は、メモ帳にランダムに裏設定を書きなぐっている状態なので）

光と闇の楔　～補佐官とアスタロト～

「サタン様。混合会議に出向く人材ですがどうなさいますか？」
今はとにかく、魔界にばらまかれたとおもわれる【欠片】の回収が最優先。
とはいえ、先日の襲撃において魔界側からも【窓】を通じて地上界に漏れ出した輩も多々といるときく。
【扉】は基本、器をもっているものは通れないが、しかし裏を返せば、器のない、
すなわち、魂だけの状態もしくは精神体のみの状態でならば簡単に通り抜けられる。
移動した先で宿る器を手にいれればそれにこしたことはない。
「リュカ殿の報告があがってきたが、
　どうもテケリ・ショゴス側はまず手始めに地上界をその手にいれるつもりらしいな」
報告があがってきた、というか彼が報告をもってきたときにはかなり驚いた。
そもそも、王の命で彼らの組織に侵入していたことすらも知らなかった。
まあ、彼が単独行動をとっているのはいまに始まったことではないが。
しかし、仮にも側近の立場にいる自分にくらいはその報告はあってほしいとつくづく思う。
「うむ。とりあえずバァルとあとはアスタロト殿くらいでいいのではないのか？
　彼らとて様々な知識を得られる機会でもあることだしな」
それに何より、彼らほどの実力者ならば、自らの身を【分ける】こ

とも可能。
ゆえにこちら側、すなわち魔界側の執務が滞ることはありえない。
「おそらく、このたびの会議においても、ヤツラは何か仕掛けてくるだろう。
　それを絶対に見逃さないように」
アジトさえつかめばどうにかなるであろうに。
というか、どうやって彼らの仲間に取りいって、諜報員をこなしているのかがかなり気にかかる。
まあ、彼、リュカの実力はサタンだとてよく理解していない。
わかっているのは、【王】と【補佐官】の絶対的な信頼をうけている、ということと、
さらには、天界側の【補佐官】にも信頼をうけている、ということくらいである。
「では、アスタロト様にそのようにお伝えいたします」
魔界の中の地獄界を治めている三実力者に仕え、かの地の宰相を務めしもの。
ルキフゲ・ロフォカレ。
バァルにおいては彼の支配下になるのでさほど問題はないが、アスタロトに関しては彼の上司にあたる。
深く敬意を示し、うやうやしくその場にて膝をついた後、
そのまま声の主は瞬く間にと闇にとけきえてゆく……

光と闇の楔　～補佐官とアスタロト～

「…っ！は～…は～…は～……」

死に目をみる、とはまさにこういうのをいうのかもしれない。
人間などといった存在は息をしなければ確実に死が訪れる。
しかし、自分達魔界に住まう悪魔に関しては生命力は基本、【魔力】。
圧倒的な力と、そして魂すらをも押しつぶさんばかりのものすごい威圧感。
久方ぶりにこの威圧感を感じたような気がするのは、おそらく彼、アスタロトの気のせいではないであろう。
魔界において上級位についている彼とてまったくかなわない圧倒的な力。
魔界を統べる実力者を数名述べよ、といわれれば、まちがいなくアスタロトはその上位五名の中にはいる。
さらに、魔界の中の地獄の実力者をあげよ、といわれれば確実に三人の上位者の中に名前を連ねている。
それらの名前の中には、魔界の王たる魔神とも、大魔王ともよばれている存在の名前は存在しない。
そもそも、かの存在は魔界そのものともいわれている巨大すぎる存在であり、
その存在を実際に垣間見たものは王を補佐する補佐官しかいないともいわれている。
そして、それは天界における天空神、もしくは絶対神とよばれている王にしても然り。
その存在もまた補佐官しか実情を知りえない、といわれている。
そのまま押しつぶされるように両手をつき膝まづき、とにかく息を荒げるのがやっと。
「ロトちゃん。前からいってるけど、人をいきなり試すようなことは軽々しくしないようにね」
そんな彼にと、聞きなれた、それでいて威圧感漂う、それでいてどこか安らげる声が聞こえてくる。
全身に脂汗を流しつつも、どうにかこうにか視線をあげれば、

いつのまに場所を移動したのか、アスタロトにも理解できないものの、
真っ暗な空間にぽつん、と真っ白いテーブルと椅子が置かれており、その椅子に優雅に座りつつも自分を視ている少女が一人。
先ほどまでみていた姿はといえば、髪の色は白なのか銀色なのか不明な色であったが、
今いる目の前の少女の髪の色は金色。
金色の髪に金色の瞳。
彼の見慣れた姿そのもの。
異なるのはその服装くらいであろう。
ギルド協会側が奨励している学生用の制服を着こなしているゆえに違和感をうけてしまう。

ギルド協会側が奨励している制服は、男女問わず基本、動きやすさを重視したもの。
もっとも、基本的には服装の自由が認められているのでこれらを着ている生徒はあまりいないのだが。
動きやすさを重視している、とはいえ、上はシャツ、下はズボンに別れており、
その上に紺色の上着を着こなし、ついでに胸元には色違いのリボンがつけられている。
このリボンの色などで所属している学科とクラス、そして階位が判るようになっている。

この空間にも覚えがある。
伊達に幾度もこの空間につれこまれ、お仕置き…もとい、お説教をうけていたわけではない。
「…ルシファー様、戯れが過ぎるのではございませんか？というか、お久しぶりでございます。
…で、何でこんな人間界で人間のしかも生徒なんかやっておら

れるんですか！？」
まず聞きたいのはそこである。
そもそも、魔界において王以外においては第一の実力者ともいわれている彼女、ルシファーがどうして地上界。
しかもそこでギルド協会学校の生徒などをしているのかが判らない。
ご丁寧に魔界から姿をけしてまで、である。
彼女の行動は昔からわからないことが多いが、それでも聞かずにはおられない。
それでなくても、王と補佐官が姿をけして、審問官である自分のもとに、
様々な問題が持ち込まれているのは…記憶に新しい。
「最近、あなた達が怠惰だから、よ。最近、ほとんど職務怠慢になってるからね。
　喝をいれるのに少しばかり離れただけよ。傍にいたら甘えるでしょ？」
「…うっ……」
それをいわれればもともこもない。
たしかに最近、彼女の手を煩わすようなことが増えていたような気もしなくもない。
しかし、しかしだからといっていきなり報告もなしに突如として姿をけしてほしくないものである。
それも王ともども。
「それより、タロちゃんは何しにきたの？
　まさかお姉様に会いに来ただけ？それだと私といっしょだねっ！」
そんなディア…否、今の姿はどうみても、魔界の王の補佐官たるルシファー以外の何ものでもない。
ないが、そんな彼女の横でにこやかにそんなことをいっているヴリトラ。
「……納得しました。それで神竜ヴリトラ様までがここにこられて

いるわけですか……」
何となくそんな予感はしていたが。
まさかそれが事実だとは。
ゆえに何となくおもいっきり魂からして疲れたような気がしてしまうアスタロト。
タロ、と呼ばれることに抵抗はあるものの、もはや抗議しても無駄だ、とあきらめている。
簡単に呼び名を変えてくれるのならば、この数億年、とっくに呼び方は変わっている。
「そういえば、ロトちゃん。こんどここで混合会議が開かれるようだけど。
　サタンがあなたを派遣員の一人に抜粋してるみたいだけど…ってまだ報告はうけてないみたいね」
いくら魔界にいなくても、そのあたりの情報はたえずきちんと把握している。
「…私が、ですか？…というか、相変わらずどこにおられても状況は把握、ですか……」
どこまで力を秘めているのかわからない。
だからこそ畏れ、敬う。
どう頑張っても目の前の少女達にかなうとは到底アスタロトとて思っていない。
一時期反抗期に陥り、反逆しようとしてこっぴどく怒られたのはいまだ記憶に新しい。
いまだ声はかすれるものの、どうにか正気をとりもどしつつも、ディアの言葉に答えるアスタロト。
「リュカが他界にもテケリ・ショゴスとハスター・ホテップ側の動向を報告したからね。
　それをうけて、他界も警戒を強めて、
　さらに会議に出席する存在も実力のある存在を選んだんでしょ」
事実、【意思】の指示をうけて、リュカは今わかっている現状報告

を全ての界に行っている。
組織の仲間達に気づかれないように行えているのはさすがとしかいいようがない。
それもまた、界渡りのリュカの能力の一つでもあるのだが。
「天界側からは、隻眼の神オーディンと運命の神ノルン。
護衛に戦いの神アテナがくるみたいね。ひとまずこのたびの会議では天界と魔界。
その二界の上層部の一部のものがくることで話しはまとまったみたいだし」
精霊界からも一応参加するらしいが、
精霊に関しては常に地上界においてどこにでも具現化してもおかしくないのであえて説明ははぶくディア。
深界側からは今回の会議には参加しない、と報告をうけている。
そもそも、今の段階でかの界も自分達が常に行動すべきかどうか、いまだに意見がわかれている。
行動、とは全ての界においてある程度の生命を一度自分達の界に取り込むこと。

かの界の意義はあまり知られていないが、全ての界に危険が迫ったときに
特定の生命体を一度界に取り込み保管する役目をも担っている。
その役目をきちんと認識している存在達があまりいないのも事実なのだが。

霊獣界からは、当然のように竜王シアンが出向くことになっている。
妖精界に関しては、会議に出席できる状況ではないので断りの旨が王国にと伝えられている。
妖精達はさほど力はもちえていない。
そこに、ロキの魂の欠片ともいえる代物がばらまかれた。
その対処に今、かの一族は全力をあげている。

それゆえに会議どころではないのも事実。
妖精王達の指導のもと、必死で【欠片】を集めているのが実情。

この世界に主たる界はほぼ次の通りに分けられている。
天空にある、といわれている天上界。
精霊達が住まうとされている、精霊界。
霊獣たちが住まう、とさわている霊獣界。
使者が集うといわれている冥界。
妖精達が住まうといわれている妖精界。
様々な種族のものが暮らす地上界。
闇の力を糧とする種族の住まう魔界。
魔界においてはそれぞれの特性において別にいくつかの区分けに分けられている。
たとえば、白亜界とよばれている夜明けのこない場所。
常に灼熱を伴う暑さの熱界。
この世の様々な苦行が形をなした地獄界。
主たる実力者達が住まう、とされている静寂界。
等など。
魔界、といってもかなり広い。
そしてそれは、天界においても同じようにそこそこの特性によって呼び方が決められている。
こちらのほうは、【界】という呼び方でなく、各場所の名前をつけて区分けをしている。

「とすると、ヴリトラ様がこちらにおられる以上、霊獣界からはシアン殿、ですか。
　精霊界側からはおそらく、ウィンディーネ様が補佐係りの形式をとってウィン殿で参加のあたりですか？」
ディアことルシファーの説明をうけて、すばやく頭の中で情報を組み立て構築するアスタロト。

導きだされた答えはディアの満足いくもの。
「そ。まあ、会議まではまだ間があるでしょうけど。
　これからこの国は様々な界の重鎮ともいえる存在が集まってくるからね。
　そこを反旗組織達が狙ってくるのは間違いないし。そこをちょっぱかり叩こうとおもってね」
何やらさらっととてつもない恐ろしいことをいっていないだろうか。
目の前の補佐官様は。
叩く、という単語がでてきたが、彼女が動けばどれだけ被害が拡大するかわからない。
むしろその行動一つでこの地上界全てが焦土となっても不思議ではない。
「あと、ロトちゃん。いっとくけど、私はここでは、あくまでも人間のディア、だからね？
　補佐官だとか、そのあたりのことをいわないように」
アスタロトのことを、ロト、と呼ぶのはごく限られた存在のみ。
ティアマトとルシファー。
その二人からのみこの呼びかたをアスタロトは受けている。
もっとも、彼の中ではこの二人が実は同一人物だ、と疑念視しまくっているのだが。
実際その通りなのであるが、その事実ははっきりいって知られていない。
「オーちゃんがくるの？でも、お姉様？オ～ちゃんだと、お姉様の雰囲気に気づかない？」
ディアの説明をうけてすこしばかり心配そうにいっているヴリトラ。
彼女も彼の性格はよく知っている。
一時など、彼女を悪、として片っ端から排除しようと動いた時期もあったりした。
その都度、こてんぱにヴリトラが叩きのめしていたのは今ではいい思い出の一つ。

「あの頑固な堅物が気がついたとしても認めようとするはずないから大丈夫よ」
きっぱり断言。
それだけはきっぱりと断言できる。
かの神、オーディンは自らが信じることは信じるが信じないことは何があっても信じない。
つまりかなり頭が固い。
ゆえに堅物、として天界でもその性格は知れ渡っている。
自らが正しいとおもえば、それがいくら間違っていようとも突き進もうとするので、
彼の部下達は実際、かなり迷惑を被っている。
「まあ、オ～ちゃんの頑固さはもはやもう筋金入りだからね～。
だけどだったら私はあまりうろうろとしていないほうがいいかな？
あのオ～ちゃんのことだから、また諸悪の根源！とかいってところかまわず攻撃してきそうだし」
実際、今でもそのようなことが起こりえているのだから情けない。
自分が思いこんだことは時がたとうともその非を認めようとしない。
そのせいで実力はあるのだが、あまり主だった役職に彼はついていない。
否、つけさせてはいない。
一度、彼を実力ある役職につけたときにおおごとになったことがある。
勝手に地上界を戦乱に陥れて世界を浄化しようとしたことがあったほど。
当然、こっぴどく【王】の怒りに触れ、しばらく謹慎処分と成り果てたのだが。
それでも懲りてないのがあるいみすごいといえばすごいといえよう。
「そうなったらとりあえず、頑丈なグレイプニルの鎖でがんじがらめに拘束しましょう。

それでなくても今そんな馬鹿なことをされるのは面白くないからね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ディアとヴリトラによるとてつもない内容の会話。

横できいているアスタロトとしては生きた心地がしない。

ゆえにただただその場にて硬直するしか術はない。

「まあ、ノルンちゃんもくるんでしょ？なら未来を視通しつつ行動制限させせとけばいいかな？」

「そうね。とりあえずノルンに行動を先読みさせておいて、

それ以外の場所には動けないように制約かけとくのも一つの手ね」

その場にアスタロトがいる、というにもかかわらず、

知識の神でもあるオーディンについての対策を話しているディアとヴリトラ。

かの性格をより知っているがゆえの会話とはいえ話しの内容が内容。

自分のようなものが聞いていてもいい内容なのかすらも判らない。

そもそも、オーディン神は天界において屈指の実力を誇る神の一人。

アスタロトも屈指の実力を持ちえる悪魔ではあるが、それでも順位的には彼のほうがおそらく上。

魔界における全体的な立場、王や補佐官を除いた立場的にはアスタロトは五番目の地位にあたる。

実力からすればオーディンは上位に食い込める力をもってはいるがその性格ゆえに、

天界における上位組には数えられていない。

天界における実力者はといえば、側近代行をしている雷神ゼウス。

各界の海を束ねている海神ポセイドン。

各界を監視する立場である視神ヘイムダル

破壊と新生を司る破壊神シヴァ。

世界の光源と闇を司る光神ホルス。
この五名が実質的な実力者とそれに伴う地位にいる神々であろう。
そしてまた、天界における王もまた、世界そのもの、ともよばれる存在であり、
ゆえに比べるのも畏れ多い、とすらいわれている存在。
それを補佐している補佐官のティアマトの実力も計りしれず、
普通の神々とはまた異なる立場として認識されている。

「まあ、頑固もののオーディンは仕方ないとして。とりあえず、ロトちゃん」
「は、はいっ！」
いきなり話しをふられ、その場にて姿勢を正すアスタロト。
「あなたも会議に参加するなら、オーディンの様子に気をつけておくように。
　あの子のことだから、下手をしたら反旗組織の口車にあっさりのって、そのまま町を壊しかねないから」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・は、はぁ……」
そういわれて、そんなことはありえない。
といえない自分がかなり悲しい。
というかオーディン神とあまり付き合いはないが、それでも性格や噂話しは嫌でも耳にはいってくる。
そもそも、たしかロキが反逆したのも彼の行動の結果だったはずである。
もっとも、完全なるきっかけをつくったのはゼウス神に他ならないのだが……
「まあ、当日になったら力を封じる魔道具を渡しておくわ」
「そ・・・そこまでしますか……」
「そうでもしないと、ほんとあの子は暴走するわよ？まちがいなく」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・そこまでいわ

れるオーディン神って……」
きっぱりいわれて何となく彼女がオーディン神のことをどうおもっているのかはっきりと確信する。
だからこそため息をつかざるをえない。
彼女がそこまで確信をもっている、ということはこういったことは今までにも幾度もあったのであろう。
「あまりひどいようだと一度、人間に身をそのまま完全力をどこかに封じて
しばらく転生やらせてるのも一つの手よね……」
「でも、お姉様?前それやったら人間界で彼、おもいっきり戦争しかけまくってましたよね?」
「そうなのよね～。…一度、完全に消滅させる、というのも手かしら?」
「ん～。自我を完全に崩壊浄化させてから?そうするなら、私オ～ちゃんの魂たべてみたい♪」
さりげにとんでもない内容がまたまた繰り返されているような気がするのはアスタロトの気のせいか。
内心だらだらと汗を流しつつ、
「と、ところで。その、ルシファー様?ヴりトラ様?
あなた様方はいつまでこちらにおられるのですか?
私としましては、否、我々としましては、
ルシファー様には王ともどもご帰還願いたいのですが……」
それは本音。
というか彼女がここにいたら何がおこるかわからない。
というか何をしでかすかわからない。
そうなれば自然と審問官長でもある自分の仕事が増える結果にもなりかねない。
「時が満ちるまではここにいるわよ」
「時?」
時、という意味がアスタロトにはわからない。

ゆえにこそ首をかしげて問いかける。
「そう、時が満ちれば、全ては判るわよ」

時が満ちる。
それは、今回の反旗組織の攻撃のことではなく、代替わりにおける異変を指し示す。
しかし、代替わりはこの太陽系全てにおける災害になりかねない重要な事柄。
ゆえにおいそれといえるようなものではない。
何しろ下手をすればこの太陽系そのものすらあっさりと消滅してしまいかねない事柄が起こるかもしれない。
そんな途方もないことを話すわけにはいかないのも事実。
それに対する対処は自分達のような存在達でどうにか対処しなければならないのだから……

「さて、とりあえず、話しはこれだけ。それじゃ、廊下にもどりましょうか」
いって。
パチン。
軽く指を鳴らすと同時。
刹那。
まばゆいばかりの光が周囲を覆い尽くす。

あまりの眩しさに目を閉じ、次に眼を開いたアスタロトがみたものは。
先刻までいた場所とまったく変わらぬ景色。
つまり、ギルド協会学校の校舎の一部である廊下の一角にたたずんでいたりする。
ふと前をみれば、髪と瞳の色を変えたルシファーこと、ディアと名乗っている少女の姿が目にはいる。

「さて。それじゃ、案内の続きにいきましょうか？ロトちゃん？
　それとも大侯爵っていったほうがいいかしら？」
「…カンベンシテクダサイ……」
相手が補佐官ルシファーと理解してしまった以上、大侯爵とよばれるのも、
敬語を使われるのも心臓…もとい、魂に悪すぎる。

しばしそんなやり取りが廊下の一角において見受けられてゆくのであった……

「アスタロト様」
何だかとっても疲れた。
それはおそらく気のせいではない。
彼女に案内してもらった、というだけでも精神的に疲弊した。
ここで食事の一つでもしたいがそんなことをすれば騒ぎになるのは間違いないであろう。
少しくらい魂のつまみ食いをして力を回復させたいのは山々なれど、ここに彼女がいる以上、そのようなことをして万が一怒られでもしら命がいくらあっても足りはしない。
来客用の応接間に入り、思わず腰を深くおろしため息を一つつくアスタロト。
そんな彼の元に彼の足元の影から声が投げかけられてくる。
「ロフォカレ、か」
その声の主にすぐさま思い当たり、許可をだす。
ルキフゲ・ロフォカレ。
アスタロトに使えている六柱の上位精霊のうちの一柱でありながら、彼の組織の宰相をも務めている存在。
魔界における地獄界においては地獄の首相すらをも務めている。

闇の精霊であり、ゆえに闇を操るのにたけている。
精霊であるがゆえに精霊界とも通じており、精霊界などの情報も常にアスタロトの耳にと入れている。
闇を操る能力をかわれ、補佐官ルシフィーより財宝類の管理を一手に任されている存在でもある。
そういえば、とおもう。
先ほどのルシファー様の説明に彼がサタン様から依頼をうけて動いているとかいってたな。
そのことに思い当たり、つかれているがそれをどうにか振り払いつつも、
「何用だ？」
いつものような口調で自らの影にと語りかけるアスタロト。
「サタン様よりのご連絡事項を報告いたします。
近日この地、地上界のテミス王国で執り行われる混合会議ですが、
アスタロト様にその会議に参列していただきたいそうです。
もう一人は我が配下にもあたります、バァル・ゼブブが参列いたします」
バァル・ゼブブ。
別名をベルゼビュート、とも呼ばれている魔界における魔王の一人。
嵐乱の王とも呼ばれている悪魔の一人。
彼が選ばれた理由の一つの腕がたつことと、アスタロト達の次に知恵が回る、ということに他ならない。
何かあれば彼の能力において敵に気づかれることなく近づくことも可能。
そもそも、姿を消して追撃者を襲撃したものにつけておけばおのずと本拠はつかめるであろう。
それゆえの人選。
同じような名前でよく混合される魔王の一人にベルゼブブ、という

魔王がいるが、
バアル・ゼブブとは異なる悪魔であることは疑いようがない。
少なくとも、ベルゼブブの実力はアスタロトと同列かもしくは多少どちらかが上にあたるか否か、
というくらい実力は拮抗している。
ちなみに、ベルゼブブの別名は蠅王、ともいわれているが、
戯れに女性の姿を好むこともあり、その姿のときはドゥルジ、という悪魔の名前で呼ばれている。
ベルゼブブとドゥルジが同一悪魔である、という事実は魔界上層部の一部のものにしか知られていない。

「わかった。了解した、とつたえておいてくれ。
…それと、会議まで魔界にもどってまたくるのも面…いや、こちらのことを良く調べておく必要もある。
我はしばらくここに滞在するがゆえに、後のことはまかす」
「御意に」
影より声のみ響きわたるが、最後の言葉をきっかけに気配は瞬く間にとかききえる。
「さすがに仕事が早いな。…まあ、あちら側はあいつらに任せるとして…
……我はあの御方達のことも気になるし……すこしばかりここに滞在するとするか……」
おそらくここにいる意味は他にも何か確実にある。
ゆえにこそ、しばしここに滞在することを決意するアスタロト。

ギルド協会学校。
どうやらこの地上界においてギルド協会側の安息は…果てしなくまだ遠いようである……

光と闇の楔　～補佐官とアスタロト～（後書き）

今回は、ほとんど各界の説明や、魔界における序列？の説明とかになってしまった（汗

まあ、オーディンが参列する。というのをいれられただけで容量的にはよしとするかな？

ともあれ、次回で混合会議、です

光と闇の楔　～混合会議と襲撃と～（前書き）

なんか最近、仕事終わって打ち込みしてても疲れからか眠くなる・・・

とにかくひとまず頑張って毎日更新続けようとはおもってますが・・・

いつまでつづくかな？

光と闇の楔　～混合会議と襲撃と～

「ええ。みなさん、
　本日より、魔界特別講師としてしばらく臨時教員をしていただくことになりました。
　アシュタロス様です」

ぶっ！

思わず紹介されて噴き出しそうになってしまったヴリトラは間違っていないであろう。
横をみればおもいっきりあきれ果てたディアの姿が見て取れる。
何を考えているのやら。
いや、その考えはやすやすと想像はつく。
つくがあっさりと許可をだす協会側も協会側である。

『……タロちゃん、先生達おどしたのかなぁ……』
『それか精神感応操作、でしょうね……』

目の前にいる青年の姿をみつつもこっそりと念波で会話をしているヴリトラとディア。
そんな二人の目の前には、臨時教師、と紹介されている、昨日わざわざ協会学校にとでむいてきた魔界の大侯爵アスタロトがなぜか教壇の横にたっていたりする。
「先生！質問です！魔界の大侯爵様の名前に近い、ということは関係者ですか！？」
一人の生徒が担任の説明に手をあげ素朴な疑問を投げかける。

魔界において主に近しい名前をもつ、ということはその実力を認められている。
ということに他ならない。
ゆえに、名前の一部や似通った名をもらった悪魔などはより主に忠誠を誓う。
まさか、その当人です、というわけにもいかず、
「まあ、そのあたりはあなた達の想像にお任せします。
とりあえず、魔界からの臨時出向教師、という立場になられます。
しばらくこの学校で魔界学などといった知識の臨時教師をしていただくことになりました」

総合科C組A担任教師、ヘスティア＝アルクメーネ。
淡い金色の髪と緑の瞳をしている見た目二十歳代にみえるものの、
その実はゆうに百歳をこえているという女性教師。
その容姿の特徴をあげるならば、人族とは異なる形の耳が真っ先にあげられるであろう。
常にいつもバンダナをしており隠しているのでわからないが、
そこにはかわいらしい猫耳が存在していたりする。
彼女はいわゆる獣人族、といわれている種族の一員。
いつもは服に隠れてみえないが、そのお尻にはかわいらしいシッポが生えていたりする。
そんな彼女は教室全体を見渡しつつも、横にたっている歳若い青年について紹介していたりする。
学校長やギルド長、そして理事長などから厳重に注意された点。
それは、彼が魔界の大侯爵その人であることを知られないようにするように、との注意事項。
かといって、関係あるのか、と問われて違う、ともいえない。
ゆえに、そのあたりのことをぼかして生徒達をみていっているヘスティアの姿。

軽く百歳はこえているヘスティアですら、彼、アスタロトの美貌には一瞬呆けてしまう。
それほどまでに彼の容姿は整っている。

「ただいまご紹介にあずかりました。
短い期間ですが、みなさんに魔界学を教えることになりました。
短い間ではありますが、よろしくおねがいします」

『きゃ～～～！！』
『うぉ～～～！！』

アスタロト…否、アシュタロス、と名乗った彼がそうにこやかに言い放ったその刹那、
教室中に男女問わず驚喜に近い歓声のような叫びが響き渡る。

「……声に【魅惑】の効果があるの、ロトちゃん…忘れてない？」
「…忘れてるっぽいですよ？お姉様……」

無意識のうちにその声に含まれる魅惑効果にかかり、興奮しているクラスメート達。
そんな中、そんな生徒達とは打って変わってあきれた表情をしているディアとヴリトラ。
彼女達にはどんな術とて通用しない。
しかし、人、という種族はいともたやすく術に陥ってしまう種族でもある。

「…なんだかな～……」

…どうやら、ディアの学生生活は、これまで以上にのんびりとはいかないようである……

「しかし、オーディン、スレイプニルに乗ってこなくてもいいのでは？」
思わず呆れて問いかける。
というか、周囲を行き交う存在達が怪訝な表情でみているのに気付かないのであろうか。
この男は。
そんなことを内心おもいつつも、
傍らで馬の手綱を握っている年配の、片目に眼帯をしている男性に話しかける。
何しろ彼が乗っている馬は普通のうまではない。
八本も足がある馬、などこの地上界でははっきりいって異形、もいいところ。
下手をすれば魔獣か何かか、と捉えられても不思議ではない。
「こやつに乗らずに何にのれ、と？ノルンよ」
自らに何やら意味不明なことを問いかけてきている横を進む女性。
見た目はおそらく二十歳前後。
全身を包み込むような真っ白いワンピースを着ながらも、こちらはこちらで、
どうみても頭はライオン、体は鷲、その尾は蛇、という
こちらも地上界では滅多におめにかかれない生物。
それに乗っているその様は
はっきりいって、オーディン、と呼ばれた男性と違った意味でかなり目立つ。
「あ、あの。お二方様、とりあえず、みえてきましたよ？」

【門】である【ソトホース】の許可を得て、天界より地上界へとやってきた。
門を通過し、彼女達が降り立ったのは王都から少し離れた位置にとある聖なる泉。
かの泉は天界にもっとも近い場所、ともいわれており、
聖なる場所、として地上界では神聖視されている。
そういった泉は地上界において大陸全てに何箇所か存在し、
大概、天界から突発的に【門】を通じて移動する場合には必ずその場に降り立つこととなる。
緊急の場合は、各王宮やそこそこに建造されている神殿に設けられている、
【聖なる導き】とも呼ばれている【道】を通じて移動することも可能。

自分が護衛に選ばれたのはとても誇らしくもあるが、この二人をうまく扱わなければいけない。
そう思うとどうしても緊張してしまう。
何やら言い争いを始めそうな気配の二人にはらはらしつつも、ほっとした表情で、
そんな二人に話しかけている一人の少女。
服装からしてどこかに所属している軍人のように見えなくもないが、
見た目はどうみても十代後半の少女にしかみえないのに、その服を着こなしている、
というのをみれば少女が普通の存在ではないことをうかがわせる。
長い金色の髪はみつあみにたばねられておりより表情をきりっと引き締めているようにも垣間見える。
パサッッ。
そういいつつも、手綱をもつ手を一時緩め、背後にいる二人に話しかける。
彼女の乗っているのは真っ白い馬。

が、その背に二枚の翼がついていたりする。
つまり、彼女達一行はそれぞれがそれぞれに
どうみても通常ありえない動物に乗って移動している状態。
これで目立たない、というほうがどうかしている。
まあ、空を飛んでいる、というので十分かなり目立った一行、といえばそれまでなのだが……
「そろそろ降りて歩きに変えたほうがよさそうですね。このままではかなり目立ちますし」
そもそも、ここにくるまでもかなり目立っている。
存在そのものを認識できなくさせる不可視の術でもかければすむことなのに、
彼らはそんな簡単なことすらやっていない。
もっとも、する必要性がないというのもある。
何しろ見た目どうみても、
天界にしか生息していないような生き物にまたがっているような者たちである。
どうみても天界人、とわかるのにちょっかいをかけようとする馬鹿はいない。
逆に不可視の術をかけていたとすると、
わからないままに攻撃をしかけようとする愚か者はどこにでも存在する。
あえて姿を見せることで実力を示し、余分な争いを避ける彼らの行為はあながち間違ってはいない。
「ああ。ほんと、ほら。オーディン。おりましょ。アテナちゃんもいってることだし。
　あと！そのぶっちょう面どうにかしなさい！
　そんな怖い顔してたら町にはいる前に追い返されるわよ？」
いまだに憮然としているオーディン、と呼んだ男性に言い放つ。
「そんな失礼な輩は排除するまでだ」
「・・・・・・・・・・・・・・ああもう！そんなことしたら問題にな

るでしょうがっ！
　まったく、いつまでたっても子供なんだから。
　これはやはり、ティアマト様にもう一度教育しなおしてもらったほうがいいのかしら？」
ずざっ。
その台詞に今まで能面のようにこわばっていたオーディンの表情があからさまに真っ青に変化する。
見ているものがみればおもいっきり血の気が引いた、とはまさにこういうのをいうのであろう。
とつくづく思ってしまうほどの変化。
「い、いや。補佐官様のアレは我とて遠慮……」
圧倒的な力の前に自分は無力なのだ、と昔も今もその思いは変わらない。
「なら、もうすこしちゃんとしなさいよね。この私ですら、王都テミスは視通せないのよ？
　とすれば、可能性として、ティアマト様が潜伏してる可能性が十分にあるんだから」
「…え゛!?そうなのですか!?ノルン様!?」
何やらとてつもない重要機密を今、さらっといわなかったであろうか。
目の前のこの女神は。
ゆえに思わず驚愕の声を出す。
「あら？アテナちゃん、いってなかったかしら？
　そもそも、今、地上界における【先見】はこの私や、アスちゃんことアスタロトちゃん。
　それにユミルの水鏡でも視通せなくなるってるのよ。
　となれば、私たちが視通せない存在なんて普通はありえないんだから。
　可能性として、そこに補佐官様、もしくは王がいる、と考えるのは当たり前でしょ？」

運命を司るノルンや、未来を視通す力をもつアスタロト。
そして全てを視通す力をもつ、といわれている魔界のユミルの水鏡。
それら三つの力をもってしても、未来が視えない、というのである。
この運命を司る女神であるノルンは。
だからこそアテナは驚愕せざるを得ない。
そして、未来が視えない
または、まったく視通すことができない存在、といえば存在は限られてくる。
それは魔界、天界の王とその二人を補佐している補佐官のみ。
かの存在に限っては今まで誰もが試してみたがどうしても実力、本質、力の属性。
それらもろもろのことですらまったくわからない。
だからこそ、天界人にしろ、魔界人にしろ、彼らは王に畏怖し、そして敬う。
補佐官にしても然り。
「たぶん、王と補佐官様が消えたのは、何か意味があるとはおもうんだけどね。
　それに、昨日、アスちゃんから連絡がはいってね。テミスで落ち合うことになってるの」
同じ能力をもっている者同士、アスタロトとノルンはよく連絡を密に取り合っている。
以前、互いに直接連絡する術はないか、と補佐官に相談したところ、直接連絡するための道具をアスタロトとノルンは与えられている。
「…アスタロト殿がいるのか……」

昔、魔族は敵、とばかりに挑んでいき、
こっぴどくやられた経験を思い出し思わず顔をしかめるオーディン。
なら、神でない存在になってみて相手の気持ちを知ってきなさい。
とばかりに一万年ばかり力の本質を全部かえられて別の場所に放り出されたのは記憶に新しい。

それでもすでに凝り固まった性格はそう簡単にかわるものではない。
心のどこかで間違っている、とはわかっていても、行動するには自分のプライドが認めない。
そんな不安定な状態なまま、今までオーディンは過ごしている。
これぱかりは自分で乗り切るしか方法はないのだが。
それを乗り切ろうと彼はまったく努力していない。
力さえあれば問題がない、そう割り切っているところがある。
世の中、力だけでは渡っていけない、というのに、である。
ゆえに、力はあれどもその性格上、重要な部署に彼をつけることはできない。
それは上層部すべての存在達が一致団結して決断している事柄。

「あんまり自分勝手な行動するようだと、カーリーの実験台に差しだすからね？」
「…ぐっ。わ、わかった……」
それが口先だけではない、と実際に以前にも幾度かあったがゆえに理解してしまう。
ゆえにこそ言葉につまるしかないオーディン。
カーリー、とは魔界に存在している魔王の一人であり、別名、残虐王。
様々な殺し方を楽しむ性格をしており、ゆえに死なない検体を常に欲している。
その点、ある程度実力のある、魔界人、そして天界人などはもっともほどよい実験体。
「とりあえずこの子達を道具の形に還しましょう」
何やらとてつもない会話をしながらも、さらっと話題をかえ、
王都から少しはなれた草原にと降り立ち、そっと自らが乗っていたキマイラに手を添える。
ノルンがキマイラに手を添えたその直後、キマイラの体全身が淡い光につつまれ、

その光はやがて一つの輪となり、そのままノルンの左手首にとすっぽり収まる。
何のことはない、ノルンがのっていた生き物は、ノルンの力によって腕輪に姿を変えたに他ならない。
天界に属している生き物は基本、その姿はあれども、地上界においては実質、その器はなきに等しい。
ゆえにこうして器である形を自由にかえることはいともたやすい。
「そう、ですね。では、私も」
もしかしたら尊敬してやまない補佐官様に会えるかもしれない。
そんな淡い期待を少しばかりいだきつつも、
アテナもまたその手を自らが乗っていた翼ある馬、ペガサスにとかざす。
それと同時、アテナのかざした手の先で淡くペガサスの全身が光輝き、
次の瞬間、小さな首飾りへとその姿を変化させる。
そんな二人の行動をみつつ、やがて溜息をひとつつき、オーディンもまた同じように行動する。
彼が手をかざすと同時、光につつまれたその生き物は、やがて小さな鳥の姿へと変化する。
その鳥はそのままオーディンの肩にちょこん、とのっかるようにして止まっていたりするのだが。
「さて、それじゃ、王都テミスにむけていきますかっ！」
ノルンとしても、何がおこっているのは知り得たい。
アスタロトから緊急的に連絡があった以上、おそらく王、もしくは補佐官のことで何かわかったのであろう。
自分達が魔界、天界をすべている王が同一である、と疑っているとしっている存在は他にはいない。
否、いるはずがない、そうノルンは思っている。
実際には、ヴリトラにも、竜王にも、ディアこと【意思】にもその考えは突き抜けなのだが。

しばしたわいのないやり取りをしつつ、彼ら…天界よりの使者である彼らはそのまま、
普通の旅人の雰囲気を纏いつつも、王都へむかって足を進めてゆく
――

多世界混合会議。
世界混合会議の招集をかけたのは他ならないテミス王国側。
日程も話しあった末にようやくきまった。
しかしおおごとにしないために、それぞれがこっそりと入国する、という話しにもなっていた。
「妖精界からはこのたびは参加はなし…ですか」
「しかし、それは仕方ないでしょう。彼らはあの【欠片】を対処するので精いっぱいでしょうから」
いいつつも、自身の界においてもゆっくりとその【毒】をまき散らしている【欠片】のことを思う。
「精霊達は基本、純粋ですから、悪意といった感情には敏感なんですよ。
　しかも、アレは手にしたものが心の奥底で臨む形になりますから。厄介きわまりないのです」
いいつつも、ふ～とため息をついているのは水色の髪をしている少女。
好奇心旺盛なまだ歳若い精霊達がそれを手にし…堕ちた存在になってしまった精霊もすくなくない。
そう、たった一月にも満たない間に、である。
クロノスが強制的に代表者達をあの時の狭間の空間に呼び出ししていなければ、

おそらくいまごろはもっと被害は拡大していたであろう。
…だからこそ、忌々しい。
自分達のような精霊がそういう感情を抱くのはよくない、とはわかっている。
いるがどうしてもそう思えてしまう。
「そもそも、どうしてあのとき、オーディン、あなたは何も考えずに行動するからしかたないとして。
　ノルンのほうからもロキと接触、
　もしくはアングルホダ様と絶対にゼウスをあわせないようにできなかったのですか？」
今さらそれをいっても仕方がない。
ないが、そもそものきっかけはかの戦いの始まりともいえる事件。
今さら蒸し返してもどうにもならない。
すでにあれは起こってしまった過去。
しかしこうなっては愚痴の一つもいいたくなってしまう。
「ウィン殿。それをいっても無駄だ。そもそも、ノルンと私たちは散々忠告した。
　にもかかわらず、
　その忠告を無視してアングルホダ殿とゼウスを引き合わせたのはそこのオーディンだ」
未来が【視えた】ゆえの忠告。
しかし、まったく聞く耳持たずに行動したオーディン。
少し考えれば、女性に節操がない、というか女癖の悪い彼に引き合わせればどうなるのか。
判りそうなものだ、というのに。
「まあまあ、アスタロト殿、それにウィン殿。今さらそれをいっても仕方ないでしょう。
　それより、問題はかの襲撃に便乗してかなりの数の器を持ちえない輩が、
　こともあろうに地上界に漏れ出していることではないでしょう

か？」

混乱に乗じてしかも【窓】を使っての移動。

確かに様々な場所にて襲撃などが多発している中で【窓】を利用してもおそらく誰も気づかないであろう。

そんな神々、さらには魔界の大侯爵、ついでに精霊王の代理という存在。

彼らの会話をききつつも、招集をかけたテミスの国の王はといえばただただ黙っているしかできない。

というか彼らの会話の内容は途方もなく話しが大きすぎる。

たかが一介の人間の国でしかない自分が口をはさめる内容ではない。

「まあ、シアン殿のいうとおり、ではあるけどね。それより、シアン。

　あちら側のほうはどうなっているのかしら？」

あちら側。

というのは他でもない、【意思】と【神竜】達のこと。

しかしこの場で彼女達がこの国にいる、と人間の国の王に知らせるわけにはいかない。

知ってしまえばおそらく大混乱に陥ることは必然。

「…私に聞かないでください。…ん？」

「王！た…大変です！またまたいきなり村や町の中に異形の存在が現れ、

　突如として暴れ始めたそうですっ！しかもこの王都の中においてもっ！！」

バッン！

完全に人払いをしていたはずの空間。

今、彼らがいるのは、王城の地下にとある巨大な魔方陣の上に設置されているとある会場。

大概、多世界からの使者などがきたときにはこの場にて会議を行う。

この場に設置されている魔方陣は世界の力を現している、ともいわれ、

この魔方陣の上にいるかぎり、どの界のものでも力が完全に発揮されることはない。
逆をいえば全ての界のものが皆平等の力になり果てる、という効力をもつ。
そんな特別会議室の中、切羽つまったような声とともに一人の老人が駆け込んでくる。
この場に、このたびの会議に参加するものが全員そろい、話題を話しあおうか。
といった矢先の出来事。

見張りをしていた存在達もいきなりのことでどう対処していいのかわからない。
そもそも、どうして先ほどまで談笑していた相手が苦しみ出し、そのまま姿を変えなければならないのか。
悪夢の再現、といっても過言でないその光景。
一月がたち、その悪夢もようやく過去のこと、
と区切りつをつけて前向きに生きていこうとしていた人々。
その矢先といえば矢先の同じような出来事に、全ての存在達は一月前の悲劇を瞬時に思い出し、
そしてあまり前回の悲劇から時がたっていないこともあり・・・
『うわぁぁっ！！！！』
混乱は…瞬く間に誰が騒ぎだすまでもなく、誰もが騒ぎ、しずかに確実に一気に広まってゆく。
守護精霊がいるはずの町や村、さらには王都、といった場所においても、
その異形のものは瞬間的にその場にと出現し、周囲にあるもの全てを破壊しはじめる。
多の界ともまったく同時刻、同じようにして計画が動き出す。
その騒動に準じて…もう一つの作戦を反旗組織のメンバーは行うことにしている。

このたびの騒動はまさにその注意を別の場所にむけることといって過言でない。
どちらにしても、
「と、とにかく、民間人の安全が第一だ！」
しばし、どこの町や村ともなく、
誰ともいえない怒声と叫びと指示する声が空気を伝わり全世界に広がってゆく……

「…ほう。面白いことになってるなぁ～……」
思わずその様子を視てにやり、と笑う。
しかし、すぐさまに気を引き締める。
「まったく。ちょうど会議の時期にあわせて…か。あの国の王も何を考えているのだか……」
眼下にみえる地上界において、今、一つの国が他国にむけて侵攻を開始した。
その兆候は以前から垣間見えていた。
ゆえに注意深く監視していた。
「しかし…これは、虚をついているというか……」
そう、まさに虚をついている。
まさか、先の襲撃で避難民、として逃げてきていた民がよもや刺客や諜報員だなど、
一体誰が想像していたであろうか。
「やはり、あの国の後ろには反旗組織がついてるのは間違いない、な」
天界においても同じような行動が多々ある町で起こりえている。
いくら【欠片】に取り込まれてしまったとはいえ、普通ならばそれらの統制がとれるはずもない。
だが、だがしかし、【神々の黄昏】において複製した魂の欠片に特

殊な規定を設けたとすれば？
そう考えるとすべてつじつまがあう。
「何しろあの道具の作り手はあのロキ、だからな……」
面白そう、という理由でどんな手のこんだ代物をつくっているとも限らない。
というか手のこんでいない代物をつくっていないほうがおかしい。
「おそらく、彼らの目的はそれぞれの場所に入り込ませている【種】を一斉に目覚めさせること」
今までの調べから、ほとんどの【欠片】は【種】と呼ばれる状態でその反応すらつかむことができない。
そこまではわかっている。
しかもその種の姿は様々で、そのあたりにころがっている石ということもありえる。
より、自らが【寄生】するにふさわしい、心、もしくは力か器、
それらを持ち合わせたものが傍にきたとき、
種はその器が心の底で今一番ほしいものへと姿を変える。
ひどいものだと、種が人型をとった、という報告すらきいている。
その場合はあくまでも、それを手にした存在の心の奥底の理想像のままに。
性質が悪いにもほどがある。
バッン！
「大変です！ヘイムダル様！各町や村でなぜか一斉に【堕ちた存在】達が発生しました！
　ヴィシヌ様よりの要望により、急ぎ作戦会議室までご足労くださいっ！」
外界を眺めつつそんなことをおもっていた彼…ヘイムダルの元へとあわてた様子の人物が一人駆け込んでくる。
その背に真っ白な翼が生えているが基本姿は人のそれとかわりがない。
外界の様子を視ることができる、【水鏡】。

魔界にあるといわれている【ユミルの水鏡】とはまた異なるが、この【水鏡】は今現在のどの界の様子をただ、写し視ることが出来る。

それを通じて視神ヘイムダルともよばれる彼は、各界を常に監視し、何か異常が起こった場合、そく各界に伝達を飛ばすように心掛けている。

「やれやれ…残虐王カーリーのやつが、数多のヤツラにその力を魅入らせたわけではないだろうに」

時折、たわむれにちょっかいをだし、それゆえに残虐性をもつ存在がでることはある。

しかしこのたびの一件はカーリーの干渉はごくわずかだ、と彼とて理解している。

だからこそため息をつかずにはいられない。

「…はぁ。はやくアングルホダが目覚めて、あの馬鹿を止めてくれないかな……」

それは本音。

おそらく、欠片とはいえ完全に【ロキ】を止められる存在は世界広し、といえども、

彼の妻であるアングルホダ以外にいないであろう。

「……ヨムンガルドに誰かお願いにいってもらうかな……」

そのとき、すくなくともトールにだけはお願いできない。

何しろその姿が悪、と決めつけて幾度かトールはヨムンガルドに攻撃をしかけたことがある。

オーディンがオーディンならばその息子も息子、といったところなのだが。

そもそも、自身が親友、といってはばからないその親友の息子を攻撃するなどどうか、ともおもうのだが。

まあ、彼ら神々にとってそういったことは日常的な出来事なのであまり深く考えていないのかもしれない。

そうつぶやきつつも、ふと。

「…そういえば、ロキの魂を探しにいったはずのヘルはいったいどこにいるんだろう？」
いくら探しても、あれからの足取りがつかめない。
それが…こわい。
彼女はあるいみ純真。
ゆえに逆に反旗組織に丸めこまれない、ともいいきれない。
そうなれば…冥界側全体が少なくとも、反旗組織側に人質にとられた、といっても過言でない。
そう簡単にいうことをきく、とはおもえないが、父親の魂をダシにつかわれればどうなるのか。
それはヘイムダルとて予測不可能。
「とりあえず、今はこの事態の収拾に動くとしますか」
どうぼやこうとも、愚痴をいおうと今の状況が改善されるわけではない。
ならば出来ることからしてゆくしかない。
ゆえに、
「今いきます」

水鏡のある間から立ち上がり、作戦会議室がある建物へとヘイムダルは足をむけてゆく――

光と闇の楔　～混合会議と襲撃と～（後書き）

会議の内容もこれまたさらり、となかしつつ。
さんざん含みをもたせておいてさらっと流す、これぞダイゴミ
コンセプトは人間の国王の前でさらりと天界側における現状を暴露
している神々だったり。
次回で襲撃の様子にいけるので、ようやくヘルちゃんがだせるｖ
フェンリルがでるところまで２０Ｋ以内でいけるかな？
ともあれ、今回もあまり話しがすすんでおりません。

光と闇の楔　～撤かれる闇と会議の結論～（前書き）

??なんかいきなり、昨日なろうにおいて閲覧者が増えてる?なぜ?時期的には世間では入学式シーズンとか、そのあたりの関係なのかな?ナゾだ…

評価してくださった方がいました。ありがとうございます。

って、一人の人の評価で最高点の五点!?・・・なぜに!?

・・・この客観的視点は自分でもまだまだ精進が足りない分野、と自覚してるんですが（汗

ともあれようやく戦乱?に入れそう…って、何話になるのかな?これ……

脳内ストーリー的にはこの戦いにつられるように、

幾度もでてきた「代替わり」が発生するんですけど……

ともあれ、今回もゆくのです

光と闇の楔　～撒かれる闇と会議の結論～

「は……ははははははっ！」
これぞまさに天命、そう、まさに。
会議の最中、突如としてどこかに連れていかれてそこできいたある話し。
自分達には関係ない、そうおもっていた。
しかし、しかしである。
「世界はすべて我が王国、ヴルドのものであるっ！」
『おおおおっ！！』
旅の商人、と称するものが謁見を申し出てきたときはほんの気まぐれで許可をだした。
しかし、商人がもっていたのは、『種』と彼らが呼ぶものと、そして『これは種の発芽道具です。道具の使い手が望むとおり、種は成長し行動を起こします』
行動を起こす。
その意味がわかったときには、ほくそ笑んだ。
この時期に接触を試みてきた商人を名乗るもの。
その彼らが時の狭間と呼ばれる空間で話しにでていた組織のものだ、とすぐに理解した。
しかし、それがどうだ、というのだろう。
世界を統一するのにこれほど好機はない。
多々とある国の中、世界、否、この地上界を統治するのは我が国こそがふさわしい。
そう、ふさわしいのだ。
だからこそ、彼らも我が国に接触してきた。
「全てを我らが手に！」

『わ～～～！！！』
国民達もまた歓声をあげている。
この力さえあれば、地上界征服、さらには全ての世界の征服も夢ではない。
我が神、邪神ヴルトゥームよ。
あなたが全ての頂点に立たれる神となられる日も近い。
さあ…世界の粛清を開始しようではないかっ！

光と闇の楔　～撒かれる闇と会議の結論～

「……父上の魂が使われている…とは……」
その怒りで何もかもが凍りつく。
その紡ぎだされた声と同時に履きだされた吹雪は瞬く間に周囲のモノをことごとく凍りつかせる。
「お兄様、それもお父様が作られた【神々の黄昏】をつかってるみたいなの。
　ケルちゃんも手伝ってくれてるけど……
　私自身、お父様の作品で複製されたものと、本物と、なんて。見分ける力もってないし……」
ビシ…ビシビシ……
地面すら凍りこおりついているそんな中、
目の前の巨大な真っ黒な犬の前にたたずんでいる一人の少女。
透き通るまでの白さをもつ半身と青白く透き通った半身をもち、
やわらかな髪質をもつ見た目十代そこそこ。
一見しただけでかなりの美少女の部類に入ることは間違いないほどの整った顔立ち。

しかしその少女の足元から氷の表面上にカビが発生し、氷だというのに瞬く間に朽ちてゆく。
これが氷でなければ、そこにあるものは全て腐敗し大地に還るハメになっていたのだが。
しかし、ここは氷の大地、ともよばれている地。
その点、そういった諸事情に関してはまったくもって問題ない。
「ヨルのやつには？」
「まだ連絡してない。それにあの子が動いたら、お母様にまで影響がでかねないもの」
そう、少女の兄であり、そして目の前の巨大な狼の弟である彼に知らせれば、
おのずとその体内にいる母にも影響がでてしまう。
あの優しい母のこと、いくら今は眠りについているとはいえ余計な心労を与えたくはない。
それでなくとも、いまだにかの心の傷が癒えずに眠っている母なのである。
彼らにとって何よりも大事なのは、両親に他ならない。
「…我も父上の器を守る役目がある。…が、手助けくらいはできるであろう。
　…ヘル、無理はするでないぞ？お前に何かあったら我ら兄も、父上も母上も悲しむからな？」
何よりも大切な末っ子であり、大切な妹。
父と母より受け継いだその美貌。
しかし産まれいでたときよりその体は病に冒されていた。
体が腐食する、という病。
彼女がもちえる、聖と闇との力のバランスが保てずに起こりえた肉体のほころび。
特殊な誕生をした父である魂と、そして妻となった存在がうけついだ魂の本質。
それらの結晶、ともいえる娘に現れた能力。

混沌、といっても過言でないその力。
その力を使いこなすことができうるならば、彼女は時期『王』にすらなれるであろう。
それほどの力を抱擁していながら、ゆえに逆にその力に体である器が耐えられないのも事実。
こうして普通に過ごせているのも、
【王】が彼女に特殊な道具を通じて加護をあたえているからに他ならない。

天界大戦争。
かの戦いにおいても彼女達、三兄弟はかなり尽力した。
ほぼ世界全てを巻き込み発生したその戦いは、王の裁断によりひとまず収束した。
そして、彼らの父はその魂と肉体である器を分けられ、
その怒りを鎮め、魂の穢れを払うために特殊な空間に保管されることとなった。
その特殊な空間の管理人となったのが、末っ子である娘のヘル。
その空間は冥界、と呼ばれ、魂が集う安息の氷の大地、ともいわれている。
そして肉体である器は長男であるフェンリルが守り、
母であるアングルホダは次男であるヨムンガルドが守ることで話しはついた。
ある存在達は彼らのことをこう呼び称す。
災厄の具現、災厄の三兄妹、と。

「父上の波動に一番敏感なのは我だ。我の分身ともいえる眷属をヘル、お前に預けよう。
　本当にくれぐれも無理をするでないぞ？」
補佐官が手だしをしてこない、ということは
おそらく自分達だけで解決できる問題、ということなのだろう。

基本、補佐官や王はどうにもならなく打つ手がなくなったときのみ行動を起こす。
その行動がない、ということは自分達で何かができる、ということに他ならない。
常に誰かに頼るわけにはいかない。
自分達の問題は自分達で解決して未来を紡ぐように。
これこそが、王が徹底してすべての存在に言い聞かせている言霊、ともいわれている。
事実おそらくその通りなのであろう。
だからこそ、命あるものたちはあがく。
その先にある未来をよりよくしてゆくために。

「あまり悩むな。ヘル。かわいい我が妹よ。我とそして冥界の番人ケルベロスがついておる。
【鼻】にかけてはこれ以上の協力はないぞ？」
おそらく、これ以上、鼻がきく存在は他にはあまりいないであろう。
特に、父親至上主義のフェンリルにとって父親の波動は微量でもすぐさま感じ取ることができる。
魂を複製しているにしろ、分けているにしろ、全ては父親の一部。
ならば誰にもわたすわけにはいかない。
それら全ては父親のものであり、また彼らの父がもつべき力、なのだから。

氷の大地、ともいわれているヴァルトニルの地。
その地の中の一角にあるリンクヴィ島。
そこにある巨大な氷の神殿の一角において兄と妹の会話がしばし繰り広げられてゆく……

とくん。
いつのころからここにいるのかわからない。
判っているのは、『記憶』のためにここにある、ということ。
この星の寿命がつきるとき、この【記憶】は【マァト】に引き渡されることになる。
いわば、万が一のための記憶の保管場所。
そのために創られた。
そしてまた……
「とりあえず、今のところある程度の種族、そして知識があるもの。
それらを取り込みしたので後はしばらく静観…か？」
見上げればどこまでもありそうな巨大な柱のようなもの。
その前にて何やら話しているいくつかの影。
「ヴルド王国に滅ぼされては面白くない存在達がいる場所もたしかあったな。
あそこの存在達も一時期取り込みしておいたほうがよくないか？」
取り込む制限、というものは決まっていない。
「いや、あまり数を増やしすぎても、ここ、深界とて増えすぎれば破たんしかねない」
それでも、いずれは界に溶けることを希望する存在も多々といる。
それらの魂はそのまま、冥界にと送られ、あらたな輪廻の輪の中にはいることとなる。
そしてまた、魂の個々がもつ力は星を活性化させる源ともなる。
「この地においては、海が母なる存在。ゆえに我らはここにある」
深界、と呼ばれるより海の底深くに存在している彼ら達。
再び生命が回復するまでの手段、として彼らの住まう界は創りだされた。
それでも、その真実を知りえないものは恐怖する。
【海】に呑みこまれてしまえば二度と戻ってはこれない、と。
すくなくとも、深界でいきていけるようにこの界においてはそれぞ

れに似合った姿にと変化する。
それが傍からみれば異形にしかみえなくても、この界においてはそれが通常。
ここにおいては、魂の輝きと本質に伴った姿にその姿形は変化するようになっている。
ここはいわば、魂と様々な種族の保管場所。
万が一、地上や他の界において何かがおこった場合、
それらの界に再び生命を戻すための緊急的な避難場所、ともいえる。
彼らのことを一部では、【深きものども】とも呼び称す。
一度【深界】に在籍していた存在達は特殊な能力を持ち合わせる。
しかし元々が魂が器となりえる空間に住んでいた存在達。
どの界においてもあっさりと各種族にと溶け込むことができる。
「ノーディンス殿はどうみられますかな？」
人類を主に見守る立場であり、彼らを選抜するときには彼を通じてきめることとなっている。
そんな真っ白い瞳にウェーブのかかった白い髪をした老人にと語りかけているのは、
見た目、巨大な蛸に似た頭部の頭に無数の触覚が生えており、
鋭い鉤爪をもち蝙蝠のような羽をはやしている存在。
「クトゥルフか。ウボ・サスラの抱擁力もあることであるからして。
今しばらくは、【意思】の動向を見守るのでよいのではないか？」
いいつつも、背後に聳え立つように存在している巨大な柱のほうにと視線をむける。
その真っ白いほどの瞳に巨大な柱の中にうごめく無数の球体のようなものがうつりこむ。
【意思】が新たなに様々な【理】と【生命】を生み出すにあたり、
創りだした一つの存在。
それが【ウボ・サスラ】。
全ての命、否、生命体の源、という存在として創りだされ、また役

目を終えた生命体の体もまた、
大地に還ったのちに、【ウボ・サラス】の中へと返還される。
かの存在の中において魂は新たに組み替えられ、新しい魂として生まれ変わる。
新たな魂を生み出す存在でありながら、魂のゆきつく終焉の存在でもある存在。
それが【ウボ・サラス】。
彼の端末は他に冥界に存在しており、基本の本体はここ、深界にと置かれている。
「六の意思様から言われてここにきてはいるが。とりあえず、六の意思様の伝達をのべておくぞい？」
この場には他の場所…つまりは、太陽系に位置している他の星から派遣してきている存在も数名いる。
そんなうちの一人が口を開く。
ずんぐりとした毛深いとある場所でナマケモノ、と呼ばれている動物のような体。
そしてまたヒキガエルともおもわしき顔には顔全体を裂かんばかりの口が存在し、
どてっと大きな腹とは対照的な小さな蝙蝠の翼を一対持ち合わせている存在。
「ノーシュ様からの伝達？しかし、貴殿がここにくるのは久方ぶりではないか？
　ツァトゥグァ殿。以前はいつだったか……」
たしか、自分達のような存在達が多々と創られたとき以降のような気がしなくもない。
「ほほほ。まあそういうな。クトゥル。今は緊急事態、というのは貴殿も承知だろうて。
　他の意思様がたからも警戒するように、とお達しがでていることでな」
彼が住まうのは、太陽系第六惑星、といわれている、通称、土星。

別名をサイクラノーシュ、ともうべき惑星。
そこの意思の指示により、ここ第三惑星にとやってきている彼、ツァトゥグァ。
外見をざっと表現するならば、巨大なカエルのような存在、というのがしっくりくる容姿の持ち主。
それはここにいる存在全てが十分に理解している。
だからこそ、動いているのだから。
「とにかく、今は、代替わりがいつ何時おこるかわからぬ。
　ノーシュ様からも気をつけるように、とのお達しじゃ。
　他の意思様方も気をつけてはいるらしいが、こればっかりはのぉ～」
そう、こればっかりはどうにもならない。
自分達が気をつけていても、所詮、自分達が生きている場所は、【マァト】の中の一部にすぎない。
ゆえに、巨大な流れに逆らえるはずもない。
「いずれ、意思様達が集まり、話しあいをされるそうじゃからの。
　それから我らの行動を決めてもよいのではないか？」
実際、近いうちに全員があつまり、話しあいの場をもうける、と報告をうけている。
彼が選ばれたのには理由がある。
第六惑星において彼ほど深い知識をもっている存在は他においていない。
ゆえにこうして他の場所に使者としてよく使わされることがある。
「記憶の媒体となっているそこの存在も。全ては【意思様方】の思い一つ、というわけじゃ」
たしかに言われていることは間違いはない。
ないが、こうも面といわれていわれれば一瞬、何もいえなくなってしまう。
自分達は所詮、そのために生みだされているものなのだ、と嫌でも認識せざるを得ない事実。

「まあまあ。とにかく、それではこの会議の結論は、
　意思様方の話しあいが終わってから、にいたすかの？」
どちらにしても、今ここで話しあっても全ての場所、
否、全ての太陽系内部においてどういう結論がでるかわからない。
ならば話しあいの結果を受けて行動したほうがはるかによい。
何しろ、かつて今から四億年前。
地上をも破滅にむかわせたかの人類の愚かさは、その力をもってして、
この太陽系そのものすらをも破滅の道にまで導きかけていた。
彼らの文明の知識も全てここにはおさめられている。
そして…それらを悪用されないよう管理するのもまた彼らの役目。
ツァトゥグァのいうことは至極もっともであり、同意を示しているノーデンスのいうことも一理ある。
「ふむ。…では、ひとまずこの会議は中断、話しあいは後日、ということで」
その場にいる全員を見渡し、クトゥル、と先ほど呼ばれたものが言葉を発する。
それをうけて全員が同意の旨を示す。
「では、我らはこれにて…」
刹那。
それまでそこに闇の中に漂うがごとくに存在していた幾多の存在達が瞬く間に周囲に溶け消える。
先ほどまでのにぎやかさが嘘であったかのように、
後には巨大な柱のみがその場にて見受けられてゆく……

「しかし、面白いまでに同時期に開催してるわね」
思わずぽつり、と本音を漏らす。
別に指示をしたわけではない。
にもかかわらず、混合会議に伴い、深界側でも同時刻、まったく同

じように会議を行うとは。
ゆえに思わず笑みを漏らす。
「ディアさん？というか、どういう知り合いなの！？あの麗しき臨時教師とっ！」
何しろ相手がディアに対して至極丁寧な態度をとったのである。
それでなくても、麗しき年若い青年。
すぐさま関係に興味がわき話題に飛びつく生徒達。
ある意味、それは当然、といえば当然の結果。
彼が担当する【魔界学】は週に幾度もある授業ではなく、月に幾度、という頻度のモノ。
先日やってきた臨時教師の話題で今や学校中は持ちきり。
すでにファンクラブなるものまで作ろうとしている動きすらある。
その中で、彼が特別扱いしているとおもわしきものが二名いる、という情報は、
またたくまに生徒達の中をかけめぐった。
その噂の渦中にいる生徒の名前は、
総合科に所属している先の大会で偶然に戦闘部門の優勝を果たした生徒と、
そしてまた、別の界からの留学生、という生徒。
噂は噂をよび、やれ、アシュタルスの婚約者だの、妹だの、
中には上司と部下だの、とあるいみ本質をついている噂が飛び交っている今現在。
最近、殺伐とした暗い話題しかなかったところに、何か恋愛要素がからんでいるかもしれない、
というとっておきの話しの種が飛び込んできた、といって過言でない。
結果。
常に毎日のように質問攻めにあっているディアとヴリトラの姿は、
もはや学校の中であるいみ名物、となっている。
アスタロトがアシュタロス、と名乗って教師の仮面をかぶりやって

きてはや十日。
今現在、こっそりと集まった主要な役職につく各界の存在達が
テミス王国の中にある聖殿の中の聖なる会議場にて話しあいを行っ
ている今現在。
王都に住まう存在達はよもや今現在、
そんな会議が自分達の国の中で行われている、などとは夢にも思っ
ていない。
毎日のように同じような質問をうけていれば、ほとんど聞き流すの
も日常的となってしまう。
生徒達がヴリトラに同じように追求したところ、
「タロちゃんとはよく遊んでたの～」
にこやかにそう答えられてしまったのは記憶に新しい。
まだ産まれて間もなく自我も形成されていない状態でヴリトラに構
われていたのは一人や二人ではない。
同時期にある程度の存在を一斉に創りだしたがゆえに、それらの面
倒を一緒にヴリトラはみていた。
ゆえに、彼女の言い方も嘘ではない。
特にアスタロト達などと特定の存在達に関しては、負けず嫌い、と
いう性格もともなって、
ヴリトラにひたすら向かってきていたことから、彼女としては彼ら
は嫌いではない。
むしろゆえにかなり好意をもっている。
もっとも、彼らが大きくなり、自分にあまりかまってくれなくなっ
てしまい
少しすねている感もあるのだが。
よもや聞いた側も遊んだ、というのがアスタロト、
否、アシュタロスと名乗った教師が幼きころのことだとは思わない。
どうみても、ヴリトラの見た目は七歳程度。
対するアシュタロスのほうは二十代前半から後半の間にしかみえな
い。

ヴリトラのほうがはるかに年上であるなど、いったい誰が想像できようか。

様々な場所で世界の今後にかかわる話しあいがなされている最中、ギルド協会学校は至って平和そのものである……

「我らが【形なき反逆者】の悲願ももうすぐ達成される……」

長かった、とおもう。

なぜか代々の代表者はある程度勢力を伸ばしたのちにことごとく消されていた。

それも気づかないままに、いつのまにか。

一説には王や補佐官の制裁が下った、ともいわれているが、真実はいまだに闇の中。

かつて深界に取り込まれたことのある存在がそこから出てきて、そして組織したのがこの【テケリ・ショゴス】。

そのときにどうやったのかはしらないが、

深界よりそこで【ウボ・サスラ】と呼ばれていた存在の一部を持ち出した。

それを元にして自分達の仲間を創りだしたのが全ての始まり、そう組織の成り立ちは教えられている。

そしてまた、代々の代表者はその細胞を受け継いでいる、とも。

天界の反組織のほうは、何でも【ホテップ】という存在の細胞を受け継いでいる、ともきく。

多くの多面性をもつ神の力をもち、深界より持ち出された細胞によって創られたもの。

全てを混沌に還そう、という思想をもっているらしく、そのあたりの考えが彼らとは異なっている。

「【ハスター・ホテップ】の協力はありがたいが…
しかし、世界全てを無に還したのでは我らの意味がなくなる…
…」
望むのは全ての支配。
だからこそ、かの国の王に力を貸した。
欲にまみれた【知性ある存在】の王ほど扱いやすいものはない。
「今はまず、様々な場所に混乱、という【種】をばらまくのが先決、だな」
まだまだいくらでも【欠片】ともいえる【種】は作り出せる。
神々の黄昏があり、元とある魂がこちらの手にある以上、いくらでも増産は可能。
魂が見つかる可能性がありはすれども、それに関してはぬかりはない。
テケリ・ショゴスに伝わる秘伝の技を使えば
この地に生きている存在の力を外部に漏らさないようにできる。
それもまた、【ウボ・サスラ】とよばれし存在の細胞による力だ、と認識されている。
実際にそう、なのであろう。
詳しいことは彼にもわからない。
しかし、それを扱うことにより、確実に、どんな神や魔王、そして精霊達にすら気づかれることはなくなる。
「全ての世界は我らの手に……」
力あるものが支配する世界。
それが道理。
自分達にはそれだけの力は確実にある。
この力をもってすれば、【王】とて倒せるに違いない。
しかし、彼はいまだに気づいていない。
その考えは赤ん坊がぐずり泣きわめいているようなもの以下である、ということを。
この地に生きている以上、全ては【王】の意思の元、過ごしている、

というその事実に。
どうあがこうが、全ては【意思】の手の中で踊っているに過ぎない。
広大な大地ですこしばかり小さな粒子が反抗してもまったくもって
意味がない、ということに。

「我がユグルの民のほうはいまだに【欠片】による混乱は起こりえ
ておりません。
　そもそも、不審な波動を放つものはすぐさまにわかりますゆえ
な」
会議に参加している一つの国。
聖都、または聖地、ともよばれているユグル大陸。
その大陸より代表としてやってきているのは、
大陸の長たるユピテルの補佐を務めているマキア、と呼ばれし存在。
様々な界の代表者による現状報告。
その後に静かに口を開く、ユグルの民の代表であるマキア。
緑の髪に緑の瞳のその女性は肌の色もまた緑色。
かの民の始祖は基本、植物達が主体となる。
ゆえにどうしても植物等の特徴が体面上にも表れてくる。
常に自然と共に生活しているがゆえに、異質なものにはすぐさまに
反応する。
だからこそ、聖地、とまでいわれており、穢れも何もかの地では寄
せ付けない。
基本、植物は全てのモノを浄化する力をもちえる。
種類によってはかつては還元不可能、とまでいわれていた物資をも
浄化する力をもつ。
それはかつての出来事を教訓に【意思】が創りだした新たな種。
「ユグルの地は確かにそう、でしょうね」
その地の重要性をしっているがゆえに、しみじみうなづくシアン。
ちなみに邪な考えを抱くものもかの地はうけつけない。

否、入ることさえ許されていない。
ユグルの地を覆う特殊な結界がそういった輩を瞬く間にと排除する。
「とりあえず、では話しをまとめますが。
それぞれの国に各界の使者が滞在し、【欠片】と【反逆者】の指導にあたる。
ということで話しをまとめてよろしいですかな？」
長きにわたる話しあい。
様々な意見を出し合い、結果として、そういった話しにと落ち着いた。
表向きに何か危険なことがありますから指導にきました、というのでは何もしらない民に不安を抱かせる。
しかし、他界からの使者、となれば少し話しは変わってくる。
ときおり、世界の情勢を直接調べるため、という名目で他界より使者が訪問するのはよくあること。
その恒例行事ともなっているその【派遣】をうまく利用してこのたびの一件を見守ろう。
そう話しが先ほどどうにかこうにかまとまった。
「それと、あと気にしなくてはならないのが、フェンリル殿の分身とヘル殿の動向です。
彼らははっきりいって、父親以外はどうでもいい、という傾向にありますから。
万が一、欠片を手にしている存在がそれの受け渡しを拒んだ場合…おそろいことになりかねません」
【欠片】がどのような形をしているかそれは手にした者の心一つであるがゆえにわからない。
しかし、それの受け渡しを彼女達に拒んだ場合…どのような悲劇が待ち構えているか。
それは想像しなくてもめにみえている。
フェンリルの怒りは全てを氷と化し、ヘルの嘆きは全てを腐食させるのに十分すぎる。

その能力は地上界といわず全ての界において共通事項。
彼らはその本能から、おそらく欠片の近くまでたどり着くことが可能。
協力して探し出す…という手もつかえなくはないかもしれないが、が、しかし、彼らは基本、補佐官以外にははっきりいって心を開かない。
そもそも、どうしてかつて、両親をたすけてくれなかったのか。
と逆に全ての者を憎みすらしている。
実際、何もできなかったのは事実なのでそれをいわれればどうしようもないのも事実。
今まで欠片の行方と、それにたいする始末。
そしてまた、反組織のみに目をむけていた者達はシアンの言葉をきき、思わずその場にて口をつぐむ。
ロキの魂が持ち出されている以上、かの三兄妹達が動かないはずはない。
しかし、それを失念していたのも…また、事実。
「…では、これより。その兼に関しての話しあいに移るとしましょう……」

誰ともなく意見がで、しばしの間、
災厄の三兄妹達に関する話しあいが混合会議の中において見受けられてゆく……

光と闇の楔　～撤かれる闇と会議の結論～（後書き）

今回は、主に北欧神話とクトゥル神話さんの内容がもりだくさん？のような気が……

ちなみに、深界にいる存在達はほとんど、クトゥルさん、とおもっていただき間違いないです。

次回からようやくまともに学園生活編（？）

巻き込まれてゆく生徒達の情景、上手にうまくオブラートに表現しきれるかな？

光と闇の楔　～協会本部と打開策？～（前書き）

メモ帳さんにとりあえず１８～２０ｋｂ以内に収まるようにして、なろうでは四話以降は常に長さを区切ってます。
ちなみに打ち込みしてるのはホムペ作成ソフトさんで打ち込みしてたり。
こちらのほうは行間間設定を１７５％に設定してるので自分的には見やすいんですけどね。
やはり行間間隔設定とかあったほうがみるほうも確認するほうも見やすいです。
ちなみにこの間隔はいろいろと試行錯誤してこの間隔に落ち着いてたり

「う…うわ～～！！」
逃げても、逃げても、すぐにおいつかれる。
どうして自分がこんな目にあわなければならないのか。
「…見つけた」
「って、や…やめ…あああああっ！！」
始めてみたときにはその美貌に思わず見惚れた。
その背後にいる大人ほどの大きさの狼に気づかなければ、だが。

「……お父様をたべてる……」

ずぶっ。
何が起こっているのかわからない。
ふと気付けば少女の腕が自分の体にとのめり込んでいる。
普通ならば激痛とか何か感じるであろうに、痛みも何も感じない。

『ヘル。どうやらヤツラは食べ物の形にもしてばらまいたようだな』
こともあろうに、食材の形にしてばらまいているらしい。
それがよけいに腹ただしい。
「ほんと。お父様をないがしろにしすぎ」

基本は、魂が元となっている代物。
ゆえに、いくら物質的な形をとっていようとも、基本は魂。
つまり物質干渉を必要としない品。
体内に入り込んでいる異質ともいえる【魂の欠片】を取り出すのにさほど力は必要ない。

ただ、精神世界面、つまりは肉体、という物質に捕らわれている次元より別の箇所から干渉し、
内部にある欠片を取り出せばいいだけのこと。
傍から見れば少女…ヘルの手が男性の体を貫いているように完全にみえる。
みえるがその貫いた手からは血の一滴も流れていない。
目視的に貫いているようにみえるだけで、
実際は内部に取り込まれた【魂の欠片】を取り出しているだけに過ぎない。
しかし、人、というのは弱いもの。
自らの体がいきなり他人の手に貫かれたのを確認してしまうと、そのままその場にて気絶してしまう。
それは普通の人の感性からすると仕方のないことなのかもしれない。
が。

「……ここ他にもお父様を感じる」
『だな。…まったく、どれだけ父上の複製を創りだしたのやら……』
自分の本体は動けない。
ゆえに自らの力の一部を分けることにより、妹の手助けをしている巨狼フェンリル。
ロキとアングルホダの子供たち。
三人の子供のうち二人の姿が、様々な場所においてこれより後、見受けられてゆく……

彼らの目的は、ただ一つ。
ばらまかれた、父の【魂の欠片】の回収。
ただ、それだけ……

もろい。
とてつもなくもろすぎる。
ギルド協会主催に大会にでている存在達は何かしら心に認めてほしい、
自分の力は人より上だ、そういった心がどこかしらに存在している。
中には純粋に自分の力がどこまでのものなのか見極めるため、と称するものも多々といるが、
しかしそういった者達もまた、心のどこかで人より優位に立つことを望んでいる。
潜在能力を開花、向上させる可能性のある代物。
そういっただけで、しかも金額も安く設定しただけで飛ぶようにうれてゆく【種】達。
「しかし、精霊界のみはそれが通用しませんでしたねぇ～」
伊達に一番自然と、否、【王】に近く、それでいて【意思】に近い存在ではない、ということか。
【意思】の存在を知りえたときには、かなり驚愕したものだが。
しかしまあ、それはありえることなのであろう。
自分達に意思があるように、自分達が住まうこの惑星にも【意思】があっても不思議ではない。
しかしその【意思】が目に見える形で干渉してこれるのかどうか、は判らないが。
霊獣界においては、まさに好奇心、猫を殺すのごとくに面白いほどに品物は裁けた。
かの地に住まうものは、その名のごとく、主に【獣】の属性をもつ存在が多い。
つまりは、基本、潜在能力的に弱肉強食の考えをもつ。
常に強くありたい、とおもう種族のものが多々と住まう地でもある。

そんな中でもしかしたら強くなれるかもしれないけど、まあお守り程度ならもってもいいかな？

とおもわしき代物が手にはいるとするならば…好奇心も手伝って彼らはそれらを手にしていた。

それらがもたらす結果など考えもせず。

かの魂が手にはいり、さらにはそれを複製する道具が手にはいったのが功を奏したといえよう。

ここまで自分達の思惑通りにコトが進むなど。

「しかし…邪神ロキの怒りはすざましいな……まあ、噂にはきいていたがな」

その怒りの矛先がむけられた、雷神ゼウスに同情する気はさらさらない。

というか自業自得。

そもそも、人の伴侶に手をだそうとするからそんなことになる。

かの雷神の女好きは他界でもかなり有名。

中にはそれこそ男の中の男だ！

と逆の意味で雷神を信仰している存在達もいるときく。

「とにかく。これで一通り、主要な場所には配り終えたか？」

ざっと地図を確認し、主要たる都市や村、そして王都などをもう一度よく確認しておく。

「…ユミルの地に入れなかったのがきついが…まあ、ここまでばらまけばよし、としよう」

これからのことを思うとぞくぞくしてくる。

混乱に満ちた世界がすぐ近くまでやってきていることに歓喜すら覚える。

「世界は新たに産まれかわる。そう、我らの手で……」

かつては、様々な界というものは存在していなかったらしい。

そこにいきるものが全ての未来を決定していた。

ゆえに、力あるものが全てを支配していた、といっても過言ではない。

伝道師達はそこまでいってはいないが、おそらくそういうことなのだろう。
そう結論がでているからこそのこの計画。

しかし、彼らは知らない。
力あるものが支配していた世界など、夢物語である、ということを。
それはただ、彼らのような考えをもつものが自分の都合のいいように解釈しているだけなのだ、と。
しかし誰しも自分の都合のいい夢をみようとするもの。
…それを成そうとして行動を起こすか、起こさないかは、それは個々の自由であり、判断次第……

次々と入ってくる報告に思わず頭をかかえてしまう。
この頭を抱える、という行動はここしばらくでいったい幾度行ったであろうか。
すでにもはや数えるのもばからしい数になっている。
絶対に。
「各支部から上がってきた報告ですと。様々な場所にて狼による被害が多発している模様です」
被害にあった存在達はといえば、ほとんどが生気を抜かれたようになっており、
中には気がふれているものもいるときく。
どうにか正気を保っていた被害者の話しをきくかぎり、

いわく。
『いきなり超絶美少女が話しかけてきて、ある品を譲るように迫ってきた』
いわく。

『死んだはずの子供がせっかくもどってきたのに子供をつれていきそうになり、
その子供が目の前で消滅した』
いわく、
『わけのわからないことをいわれ、体を貫かれた。
・・・にもかかわらず、体にはまったく傷一つついていなかった』

等など。
報告によっては内容もそれにともなう結果も様々。
しかし共通しているのは、美少女、という言葉と狼、という言葉。
それから導かれる結論は一つしかありえない。
「協会側としても何らかの対策案をださなければ、不審がられるのは間違いないのですが……」
ここまで被害が出ているのに何の対策もしない、となると協会の存在意義すら疑われてしまう。
それだけは何としても避けなければならない。
しかし、しかしである。
「冥界の王ヘル様に氷の覇王、フェンリル様。このお二方にかなう、とでも？」
「・・・・それは・・・・・・・・」
おそらくその予測は間違いない。
だからこそ頭をかかえるしかない。
はっきりいって彼らの機嫌を損ねれば、国一つくらいかるく一瞬にして焦土と化す。
一瞬で氷の大地となりはてるか、はたまた一瞬のうちに全てが朽ちるか。
どちらかを選べ、といわれてもはっきりいって選びたくない。
切実に。
「とにかく。彼らが回収しているのは間違いないだろう。

こちらからはそのような場面に出くわした場合、
その品は危険なので素直に手渡すように、と指示をするしかあるまい。
…他界から、特殊な品を回収にきている使者だ、とでも支部には連絡しておくように」
時折、ここ地上界には他界の特殊ともいえる品がまぎれることがある。
その都度、その界から使者がやってきてその品を回収にあたっている。
このたびの一件はそれとはまったく異なるが、前例があるそれにあてはめることにより、
少なくとも多少の混乱は防げるであろう。
「それと。こちらは申請書、です」
分厚い報告書のような何か。
しかしその紙の質をみておもわず姿勢を改める。
その紙はこの地上界ではありえない、霊力を編み込んでつくられた紙。
つまり、最高機密扱となる事例のみがよくこういう紙にて扱われる。
ある程度の実力、もしくは指定した存在にしかそれに書かれている文字は視えないようになっている。
「ふむ……なるほど。たしかに」
そこに書かれている内容は、たしかに指摘されればうなづくしかないような代物。

地上界において、神々の気を宿した代物を見つけ出す。
それは簡単なことではない。
中にはそれらに敏感な存在もいるにはるいが、それはごくごくわずか。
魔界においては本来その界にはありえない【光】であるがゆえに、
それを目安にどうにかこうにか探し出すことが可能となっているら

しい。
しかし、地上界はそういった光も闇も混同して存在している【場】でもある。
ゆえに余計にそういった代物がばらまかれてしまった場合、見つけ出すのはしごく困難。

魔界、天界、そして精霊界より地上界に派遣員を使わして、それらの回収にあたる旨の許可願い。
むろん、地上界側とてこの申し出を断る利用はまったくない。
むしろこちら側からお願いしたいくらいの申し出。
各界におけるギルド協会本部からの申し出は、
地上界におけるギルド協会本部にとってもありがたい事柄。
「それについて、各界ギルド協会連合会議を行いたい…とあるか」
話しを敷き詰めるのにどうしても会議を行う必要性を感じたのであろう。
たしかに、どういった存在を派遣するなどその対応をどうするなど、決めるべきことは多数。
しかし、各界の協会が連携することにより、
すくなくともこの未曽有の危機を乗り越えられる可能性は高い。
何より、相手側…世界に反旗を翻そうとしているという反組織の思うがままにはさせられない。
「本部会議については、こちら側はいつでもいい、そう連絡しておくように」
「はっ」
その報告をうけ、報告書をもってきていたギルドの職員は部屋を後にしてゆく。
「さて…そろそろ我々の腹をくくる…か」
そしてもう一つ、あがってきている報告。
それは……【修学過程検証実技大会】、
通称【大会】に参加していた存在達がことごとく、種の浸蝕にあっ

ている、という事実。
つまり、実力あるものから排除しよう、という意思がありありとみてとれる。
そして…問題なのは、
「…我が学校にも偶然ながらも優勝者がいる…ということか……」
まちがいなく、彼らはその標的にあの生徒を狙うであろう。
地上界における戦闘部門の優勝者。
その大会の最中、予期せぬ襲撃者があったとはいえ、表向きには優勝したことには変わりない。
生徒があそこまで勝ち進んだことも前代未聞。
しかし、彼女はギルド協会学校の生徒なのである。
生徒を守る責任がギルド協会側にはある。
先日、竜族の小さな少女の侵入をやすやすと受け入れてしまった経験上、
今の戦力というか防御力ではかの生徒を守りきれないであろう。
「さて…どうするべきか……」
ここは、やはり恥をしのんで他の界の戦力をあてにするしかない。
子供を守るのは、大人の役目、なのだから。

「あれ？今日はヴーリちゃんとディアは？」
いつものように学校に行こうと、朝一番に迎えにきたのだが、
部屋から出てきたのはなぜか先日やってきた臨時教師。
なぜかよくこの教師は気が付いたら親友…とケレス的にはおもっているディアの部屋によくきている。
それがさらに噂話を加速させている結果となっているのだが。
傍からみているケレスからすれば、恋愛がらみの噂はまったくもってアテにはならない。
そう結論づけている。

何しろ異様なほどに当人は気づかれないよう振舞っているようなのだが、それは勘としかいいようがない。
臨時教師はディアと、そしてヴーリをかなり敬っているのが見て取れる。
どちらかといえば母に対する絶対的な信頼とそして憧れ、といったところであろうか。
自分自身も母に対してそのような感情を抱いているのでそういったところに関してのみよく勘は働く。
「姫君は本日はシアン殿が連れてもどられていますよ。
あのかたは本日は一族との話し合いがあるとかで学校はお休みするそうです」
さすがに学校内で神竜、もしくはヴリトラ様、とよぶわけにはいかない。
とはいえ、彼ら悪魔にとって力の有無は絶対な掟。
ゆえに、妥協案として、ヴリトラのことを姫、と呼んでいるアスタロト。
さすがに、ディアこと補佐官ルシファーを呼び捨てにできるはずもなく、
ゆえに、彼は彼女のことを【あのかた】もしくは、【あの御方】と呼び称している。
…それもまた、噂にかなり拍車をかける結果になっているのだが……
いきなり呼び出され…というかもう問答無用で引っ張られた。
それをとやかくいうつもりはない。
ないが、いきなり。
「今日は他の姉様達との話しあいがあるから、学校側や皆にはうまくいっておいてね」
といわれて唖然としたのはいうまでもない。
他の姉様達、というのは彼とて一概にしっているわけではないが、幾度か出会ったこともあるので何となくだが理解はしている。

…何でも王と同じく、他の惑星をすべている存在達、ということらしいが、
そこまで詳しく彼とて知らない。
この太陽を中心とした空間には十の惑星がある、ということはもはや魔界においても常識中の常識。
他の惑星にゆくことが許されているのは、各界においても実力者の中でも数えるほどでもいない。
魔界でいうならば、第一階級に属している五人、もしくは第一位に属している補佐官のみ。
アスタロトはそれらのこともあり、自分なりに必死で調べ、とある結論に落ち着いてはいるが、
それはおいそれと第三者にいえるような内容ではない。

「姉？ああ、そういえばディアって姉妹や兄弟多いっていってたっけ？
それよりアシュタロス先生、
いつも思うんですけど、どうやってこの寮にしのびこんでるんですか？
まあ、悪魔族であるらしい先生にいってもそれは仕方のないことかもしれませんけど。
ここ、一応、いまだに未婚のしかも年若い女の子が住んでいる場所だって自覚あります？」
下手な噂はディアをも傷つけかねない。
すでにやれ、恋人同士だの婚約者だのといった根もない噂が飛び交っているのが実情。
…まあ、完全に使いっぱしりのように扱っているディアをみればそういった噂はすぐに収まっているのだが。
しかし、噂、とは千里を走る、とは誰がいったものかまさに言い得て妙。
「…それは、私でなくて、あのかたにいっていただけますと助かり

ます。
　そもそも、いきなり何の連絡もなく突如として呼び出しとかされるのですよ？昔から。
　そして呼び出した揚句に大体は面倒極まりないことを命じ…もといお願いされたりとか。
　あとはいきなりどこかに飛ばされたりとか……」
思わず愚痴ってしまうのは、目の前の少女、ケレスの人柄が何となくわかったから、といえよう。
何しろあの補佐官に堂々と意見している人間の少女、などはっきりいって興味もでる、というもの。
もっとも、立場を知らないから言えるのではあろうが、それでも、あの威圧に耐えつつも意見をいえる存在はかなりアスタロト達のような悪魔にとってはまさに貴重種。

「…そういえば、ディア、他者を対象とした【転移】がつかえたっけね……
　…それは何といったらいいのか……お疲れ様？」

どういう知り合いなのかはわからないが、
この口ぶりからおそらくよくいきなり呼び出されていたのであろう。
それくらいは用意に予測はつく。
というか離れている場所にいても呼び出せるらしいディアって……
そんなことをふとおもうが、何しろディアの能力は【言霊使い】
かの能力はその言葉に乗せる力によって出来ないことはない、とまでいわれている力。
ゆえにそういうこともありえるのであろう。
それで納得してしまい、かける言葉もみつからず、とりあえずねぎらって言葉をかけるケレス。
疑問形になってしまったのは、
どういっていいかわからないがゆえにどうしてもそうなってしまう

のは仕方がないこと。

アスタロトとしても普通の呼び出しならば問題はない。
他の存在からの呼び出しとかならばまちがいなく代理をたてる。
しかし、補佐官に関しては別。
そもそもそんなことをして機嫌を損ねてお灸をすえられてはたまったものではない。
「とりあえず、学校側にはすでに影をつかって伝えてはありますけど。

あと私は自分の仕事がありますしね。
誰かここにきたときのためにここにいるように、ともいわれてますし……」
本来ならばここは、害意あるものは入ることができないようにディアはしている。
しかし、逆にそれを逆手にとり、自分を狙おうとしている輩を捕まえることも可能。
捕えた存在の対処はすべてアスタロトにまかされている。
伊達に審問官の長を務めているわけではない。
そういった輩を捉え、口を割らせるのは彼にとってはたやすいこと。
「もしかして、先生って、ディアと【契約】でもかわしてるんですか？」
それだと彼のここまでディアに対する敬意の示し方もわからなくもない。
悪魔は契約には絶対忠実。
契約、という楔が彼らの力をしばり、その契約を保護にすることは存在的に許されてはいない。
もっとも、悪魔との契約はその願いに伴いそれなりに払う代償が大きくなる。
「それより、ケレスさん、はやくいかないと遅刻しますよ？」
いわれて、はた、と時間に気づき、

「ああ!?ほんとだ。それじゃ、先生、また!」
たしかにここで長話ししている時間はあまり残されてはいない。
質問をさらりとうまくかわされたことに気づくことなく、ケレスはあわてて寮を後にする。
そんなケレスの後ろ姿を見送りつつ、
「…あの御方が、我らが王の補佐官だ、としったらあの人間はどんな反応をするのですかね」
思わずぽつり、とつぶやくアスタロト。
しかし、その素朴な疑問にこたえるものは、この場にはいない……

「…って、大姉様!?それって本当!?」
思わず叫んでしまったのは仕方がない。
絶対に。
同じようにしてその場にいる全員も驚愕の表情を浮かべている。
思えば、このようにそれぞれが形をとり集合したのはいつ以来であっただろうとふと思う。
数多と同じくできた姉妹ともいうべき仲間達。
しかしそれぞれの大地において様々な生物は進化すれども全てが破滅の道をたどっていった。
中には別の惑星に移住していった者たちもいるにはいるが。
「たしか、あの場所って。三姉と同じように進化していったんだっけ?あそこって」
「でもまだあの地は霊力が満ち溢れてたから、そのあたりが違うかな?」

伊達に広い広大な銀河ではない。
自分達と同じように誕生した恒星群も多々とある。

そのうちの一つ、ここと同じような進化を遂げていたらしい恒星群。
そこもまた、そこに住まう存在達から【太陽系】と呼ばれていた。

「そこに【器】が移動してた…かぁ～。まあ、まだ継承していない、とはいえ器は器。
　次代の【マァト】なんだし。歪みの修正においてそれほどぴったりな存在はいないでしょうね」
しみじみつぶやく、一の姉の台詞にその場にいる十名と一名が同時にこくり、とうなづきをみせる。
銀河があるからこそ自分達という意思がここにある。
そして、その銀河を構成しているさらに大きな【大銀河】。

大まかに、世界はいくつかの銀河団で形勢されている、といって過言でない。
ここでいう世界とは、文字通り宇宙のことであり、
全ての意思は宇宙の意思の元存在している、といって過言でない。
銀河とは、数百億から数千億個の恒星や星間物質などといったもの達が、
重力的にまとまってできている天体と呼ばれしものを指し示す。
時には、小宇宙や島宇宙、とも呼ばれる存在。
そしてそれらの銀河が互いにおける重力でまとまっている大規模な集団のことを銀河団、と呼び称す。
銀河団には数十個から数千個の銀河が含まれているともいわれており、
その実状をいまだに確実に把握しているものはいない、ともいわれている。
さらに、その規模が小さいものは銀河群、と呼ばれ銀河団という存在とは区別がされている。
そしてまた、
銀河群や銀河団が集まって、億光年以上の広がりをもつもののこと

を超銀河団、と呼んでいる。
それぞれの銀河にそれぞれの意思が存在し、その意思によって代替わりの仕方も様々。
中には消滅のそのときまで一つの意思のもと存在するものもいれば、定期的に自らの意思を次代に引き継ぐ存在もいる。
大銀河、とは銀河団の中のほんの一部にすぎない、どちらかといえば、
銀河群ともいうべき少数規模の銀河が形を成しているもの。
その代替わりにおける準備が今現在、ちゃくちゃくと進行している。

その意思たる器の代替わり。
ちなみに、意思を継承した存在のことを彼ら意思はこう呼んでいる。
すなわち、【クイーン】と。
これぱかりはどうしようもなく、定期的にと訪れる。
しかし、しかしである。
「…なんだって私たちが【生きて】いる間に誕生と代替わりがあるんですかね……」
思わず愚痴をいいたくなってしまうのは仕方がないかもしれない。
そもそも、運がよければ産まれてこのかた消滅までかかわらない出来事。
それが【器】の誕生と意思の【代替わり】。
自分達が存在している銀河の意思は【コスモス】。
かの【意思】は自らが抱擁している全ての【意思】の中から次代を選び後継者とする。
その後継者と選ばれてしまった意思は気づかぬまま、【後継者の試練】を与えられている、ときく。
「まさか、この中に後継者の試練うけさせられてる意思があったりして……」
冗談でふとつぶやき、思わずその場にいる全員が無言となり顔を見合わせ、

そして。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

ありえるかもしれない、しかしありえないかもしれない。

しかし、万が一、そうだとしたら、これ以上厄介事が増えるのは必然。

思わず悲鳴を上げるディアはおそらく間違ってはいない。

「えええ！？何で私！？それより大姉様とかのほうじゃないの！？」

「そうだとすれば、三の姉様が一番可能性高いかな？」

「あくまで私は皆を導く立場にいるわけだし。それに完全に導けてないものね。

その証拠に命あふれる星になったのは三の姫だけだし」

この地の命の源、ともいえる太陽の意思たる存在。

彼女、時には彼にもなるが、とにかくかの意思は自分達の子供たち。

すなわち自らの周囲を回る惑星の意思達を『姫』と呼び称す。

それは、惑星、とはすなわち母なる胎内であると同時に母なる大地でもあるがゆえ。

自らはより強く燃えることにより、抱擁している【意思】達の大地にその力を降り注ぐ。

ベテランの域に達した【意思】などは、自らが抱擁する全ての惑星群に命をはぐくむことができるらしい。

しかしそれまでの域に、まだ達していない。

それが悔しい。

何もできないままに、それでいて誕生した命が滅びゆく様を今までずっと見続けてきていた。

そしてそれは、それぞれの惑星の【意思】達とて同じこと。

「三の姉様のところの地上時間でいうところの四億年前の出来事でだいぶここも落ち着いたけど。

…まあ、人間達が創り上げかけてた時空装置もダテではなかった、ってところかな？」

かの装置の応用により、今では他の惑星にもかつては生存できなかった生命が多々と誕生している。
しかしされど四億年。
いまだ完全に進化を遂げているわけでなく、それでいてそれぞれの星の事情がかわったわけではない。
強いていうならばそれらの人類が創りだしたモノを応用し、地球、とかつて呼ばれていた【意思】であるディアが行った結界くらいであろうか。
よりつよく、界別に世界を設定したことにより、太陽からの有害な物質をよりはねのけることに成功した。
そして、それらは必要な物質のみを取り込むことにも成功している。
ゆえに、今まで以上に大姉がより強く燃え盛っても大三惑星に影響を及ぼさない。
少し離れた周囲を回る惑星達にも加護を与えるためには、昔のような活動では生ぬるかった。
ゆえに、ここ四億年、かつてよりもより高い温度と物質を常に周囲に提供するようにしている、
大姉、と呼ばれている、この星系の要でもある、彼女。
様々な名で呼ばれてはいるが、一番、【ラー】という呼び名がかの意思的には気にいっている。
かつて大三惑星において文明が栄えたとき、かの意思のことを太陽神ラー、と呼んでいたことがある。
どうやらその系統でその呼び名が気に入っているらしいのだが、それはそれ。

今、彼らが存在しているのは、何もない空間、といっても過言でない。
その足元には燃え盛る惑星と、周囲をめぐる様々な色彩の惑星群の姿が垣間見えている。
ここは、彼ら、この星系における基本ともいえる空間。

この空間からは【太陽系】の全てが視通せるようにとなっている。
意思同士の繋がりのみで構成されている、特殊な空間。
強いていうならば、地球儀の太陽系版。
「そろそろ四億年に一度やってくる彗星もあるから、それの対応も必要だし」
かの彗星は四億年に一度、この場にもめぐってくるのだが、毎回毎回、
なぜかその起動はどこかの惑星に直撃するような軌道コースをたどってくれる。
そのたびに、意思達がどうにか干渉しそれを回避しているのだが。
「…ここまで重なる、というのはやはりだれか試練うけてない？」
「いやいや。それはないから。試練うけてるとしたら、器がいたという惑星の意思じゃない？」
実際にそんなとんでもない存在が自分の中にいた、とすると恐ろしすぎる。
つまり、下手をすればその【器】を中心にして一瞬のうちに宇宙空間に還りゆきかねない実情。
そうなればおそらく、惑星における【意思】ごとすべて呑みこまれてしまうであろう。
「私のほうは、この三の姉様基準でいくところの四億年でようやくいろいろと樹木が成長してきたけど」
「十姉様。他の生命いるようなら送りますよ？」
「ん～、今のところはいいかな？とりあえず樹木や植物達の成長具合を見守ってるところだし」
すでにきっかけとなる【始めの生命】となるべき【欠片】は受け取っている。
これ以上、あまり迷惑をかけたくはない。
さくっと早く進めるために、面白い仕組みを創りだしていた三の姉に願ったのはたしかに自分達。
しかしあまり頼りすぎては自分達の存在における意味がない。

試練をうけているかもしれない、という一抹の不安をこの場にて投げかけつつ……

しばし、ここ、

太陽系の主要たる惑星の【意思】とそして惑星達を抱擁している【太陽】である恒星と呼ばれし存在。

彼らの会合が静かに執り行われてゆくのであった……

光と闇の楔　～協会本部と打開策？～（後書き）

序盤も序盤にでてきた、クイーンだの、マァトだのの説明がようやくここで正確に出てきました。

な…長かった…（自覚あり

銀河系の定義は、そういう説もあるのでそれらを利用しております。

銀河が多々とあつまって作られた大銀河の表現とか。

参考にしているのは、「現代宇宙論」です。

【マァト】、は古代エジプトで宇宙意思を示していた言葉です。

なのでそれを組み入れております。

「よっし！これで終わり～！」
せっかくお姉様と一緒にいたのに、それを邪魔するなんて！
滅多に傍にいられることが少ないのに、地上界で共に過ごせる時間がどれだけ貴重なものか。
そんな時間を邪魔してくれる結果となった彼らには手加減という言葉は必要ない。
よもや彼らとて見た目どうみても七歳にしかみえない人間の女の子にしかみえない輩に、
いきなり手も足もでずにあっさりと倒されてゆくのはおそらく屈辱以外の何ものでもないであろう。
「……ヴリトラ様。もう少し手加減いたしませんか？」
霊獣界に連れてもどるときに、ぶつぶつと文句をいっていたがゆえに理由はわかる。
わかるが、だからといって、反旗組織に操られている駒でしかない、種を植え付けられている霊獣、と呼ばれし存在達にその怒りの矛先を向けてほしくないものである。
「してるよ～？だって誰も殺してないし」
そう、一応手加減はしている。
というか手加減しなければ確実に相手の魂ごと消滅させてしまう。
そもそも、本気をだしてしまえばこんな霊獣界一つ程度あっさりと壊滅してしまう。
「……はぁ～……」
神竜であるヴリトラの気持ちはわからなくもない。
ないがこればかりは仕方がない。
霊獣界の神、としての役目をきちんと果たしてもらわなければ示し

がつかない。
神が出向いた。
その事実だけで、馬鹿な考えを抱こうとした輩のけん制にはなりえるのだからして――

「協力要請？」
思わず聞き返す。
珍しい要請もあるものだ、とおもってしまう。
「ギルド協会から、地上界におけるギルド協会側から要請があった、とのことで。
　一応、ご報告を、とおもいまして。何しろ今の時期が時期ですし」
事実、今現在、
魔界をあげて、【神々の黄昏】にて複製された【魂の欠片】の回収に全力をあげている。
何しろここ、魔界は力が全て、とおもっているものが大多数。
中には他の力をかりてでも自らの力をさらに強くしたい、とおもっているものも多々といる。
そんな輩がどういうルートで手にしたのかはわからないが、
ここしばらく、【種】と呼び称している【魂の欠片】を手にし騒ぎ

を起こしている。
この現象は、魔界にとどまらず、他の界においても共通している、とは報告はうけている。
いるが……
「なるほど。たしかに。ヤツラはこのたびの大会参加者、特に実戦に通用しうるもの。
もしくは武器関連に通用しそうな輩を狙いはじめているのは事実だな」
被害をうけた一覧を確認してみれば、
このたびの【大会】において参加していた存在達がかなり含まれている。
それもほぼ、百％の確率で。

漆黒の十二枚の翼は今はしまわれており、その場に座っているのは、女性と見まごうばかりの麗人。
彼らはその時々の気分によりその容姿は簡単に変化させることが可能。
中には男性、女性といった性別すら関係ないものが大多数。
それが、彼ら魔界人の特徴の一つでもある。
とはいえ、全ての魔界人がその特徴をもっているわけでなく、
実力があるものは自在にその姿も性も変化させることは可能なれど、
あまり力のないものたちは、それぞれが生まれもった種族の特性しか持ち合わせていない。

「いかがなさいますか？サタン様？」
今現在、補佐官がいない以上、どうしても側近であるサタンに指示をしてもらうより他にない。
「まあ、これのほうはこちら側からすればもう役目は果たしていることになるだろう。
…アスタロト殿が気まぐれでかの地に出向いているからな」

先日、かの学校に臨時教師、として入り込んだ、という報告はうけている。
一瞬、何を考えているのか、ともおもったが、彼の気まぐれは今にはじまったことではない。
それに何より、かの学校に神竜ヴリトラがいる、と判った以上、魔界側からも監視の目を光らす意味でたしかにそれは最善の方法、ともいえなくもない。
…どうして神竜ともいうべき存在がわざわざ学校に入り込んだのかは不明だが。
まあ、彼女もまたかなり気まぐれ。
可能性として、かの地に補佐官に連なるものがいるか、もしくはようやく産まれた時期竜王の様子をみるためか。

かのテミス王国の首都近くに、あらたな黄竜が生まれた、という報告はうけている。
ゆえに神竜が出向く理由とすれば一応筋がとおっている。
かの幼き黄竜はいまだに竜の里には引っ越しておらず、産まれた森にて生活しているらしい。

幼き黄竜を心配して近くからしばらく見守るために潜入したのでは？というのが下層部のもっぱらの意見であり、竜族にしてもその意見が大半らしい。
…が、彼女…神竜ヴリトラのことをよく知っている上層部の一部のものは絶対に違う。
とそれは声を高らかにきっぱりとそれだけは断言できる。
あの神竜が気をかける、なとどいう優しいことをするはずがない。
むしろ、面白がって事態をひっかきまわし混乱する周囲を視て楽しむ性格である。
しかし、それがわかっていてもいえないのは、一重に、神竜、という立場は表向きには神聖なる存在。

故に表だって抗議の声をあげるわけにはいかないのも事実。
足かせにもならないのはわかりきってはいるが、
近くに監視している存在がいるのといないのとでは分けがちがう。

「大侯爵様が、ですか？でしたら、かの生徒の護衛、という立場もそのまま任せられますね」

どちらかといえばこれ以上、魔界側から戦力を減らしたくないのが本音である。
たかが、反旗組織の一員とて、魔界の実力者たるアスタロトに簡単にかなうはずもない。
【魂の欠片】にどこまで通用するかは不明だが、そう遅れをとることもまずないはずである。

「そういえば、ベルセブブの奴は何をしている？」
「最近は、死体の処理に走り回っているようです。常に眷属を各界に飛ばしておられるようです」

一度【種】に穢された器はそう簡単に元にはもどらない。
そのままその精神ごと呑みこまれ、抜け殻となってしまう存在は大多数。
しかし、仮にも種に呑みこまれていた器。
普通の死体処理を施そうにもそれらをまったく受け付けないものもいる。
大概は、種が取り出された直後、器はその力に耐えられなくて消滅してしまうのだが……
問題は、その影響をうけた周囲の生命体。
そのままほうっておけばまちがいなく周囲に【負の気】をまき散らす結果となってしまう。
【気】にあてられた生命は一度命をおとし、新たな【ゾルディ】と

してよみがえる。

「なるほど。まあ、彼の能力ならば死体の浄化にふさわしい、といえるか？」

何しろかの能力の一つが【蠅】。

文字通り、死肉を喰らい力となす能力をもっている。

ゆえにこういったときには便利、といえば便利な力であるのだが……

「まあ、アスタロト殿には私からはなしておこう」

「はっ！」

まずは、ギルド協会側にこちらの旨をつたえるとして。

ギルド協会とコトを荒立てては意味がない。

かの協会は今では全ての界においてなくてはならない存在となっている。

だからこそ協力体制はしっかりと強固なものにしておきたい。

「…しかし、毎回おもうが、補佐官様がいなくなるとつくづくおもうよ……

いつも、補佐官様はおひとりでよくもまあ、

あっさりとこれだけの膨大な執務をこなしていたものだ……」

今まで頼り切っていたのが嫌でもつきつけられる現実。

しかし、ここで泣きごとをいっていても仕方がない。

おそらく姿をけしたのは、自分達に喝をいれるタメでもあるのであろうから。

これでできませんでした、といったら戻ってきたときにどんな目にあわされるか。

…それは避けたい。

絶対に。

補佐官ルシファーのお仕置きははっきりいって死んだ方がまし、といえるほどの代物。

だからこそ手をぬけない。

しばし、とある執務室において、
補佐官と王の側近であり補佐代理をかねている暁の王サタンの嘆き
ともいえるつぶやきが響き渡ってゆく……

「わ…私がですか！？お父さまっ！！」
思わず声が歓喜に彩られる。
「…あ～、こほん」
常々公私の区別はつけるように、といっているのに、何をかんがえ
ているのか、この娘は。
ゆえにその台詞に少しばかり大げさにせき込むように息を吐きだす。
「はっ！す、いすません。ゼウス様。そんな大切なお役目、私に任
せていただけるのですか！？」

呼び出され、何ごとか、とおもっていたら、目の前にいる父、
雷神ゼウスから告げられたのは、地上界のギルド協会側から協力の
要請。
しかも、反旗組織のメンバーがこぞってこのたびの大会参加者を狙
っているのもあり、
突発的な襲撃者などといった不確定要素もともなって偶然に優勝と
いう立場になってしまった学生。
その生徒の護衛を頼みたい、との要請らしい。
しかも、その学校にはなぜかかの神竜ヴリトラが今現在、留学生、
として滞在している学校らしく、
ゆえに滅多な存在を送り込むことができない現状。

「うむ。今説明したとおり、今あの場所には神竜ヴリトラ様が滞在
しておられる。
　滅多とした輩を使者として向かわすこともできぬしな。

そもそも、かのかたの機嫌をそこねたりでもしたら、反旗組織どころではなくなる」

それは本音。

というかこれ以上、厄介事を増やしたくはない。

「その点、お前はリュカ殿に育てられている上で、神竜殿達とは交流があったからな。

つまり、まったく知らないものをよこして警戒されるより、見知ったものを遣わしたほうがいい。

これが会議の決定だ」

彼としては大切な娘を危険とおもわしき場所に向かわしたくないのが本音。

しかし、立場がそうはいってはいられない。

「黄竜の幼子のほうはいかがなさるのですか？」

テミス王国の近くに、若き黄竜が誕生した、という報告はここ、天界にも伝わってきている。

おそらく反組織のメンバーもその報告はつかんでいるはず。

ならば行動を起こさないはずがない。

「それは、竜王シアン殿より、心配はいらぬ、と連絡があった。

ともかく、アテナ。お前は立場上は出向教師、としてかの学校に潜入してもらうこととなる。

むろん、表向きは、だか。本来の目的は戦闘部門で優勝した、という生徒と。

それと反旗組織の存在達が襲ってきたときのための護衛となる」

「は！その役目、この戦女神、アテナ。つつしんでお受けします！」

強さからすれば三番目にあこがれている神竜ヴリトラの傍にいられる。

しかも護衛もかねて。

これほど重大で、なおかつやりがいのある役目はない。

ちなみに、彼女が尊敬しているのは

一番目が補佐官ティアマト、二番目が養父リュカ、三番目が神竜ヴリトラ、の順である。

役職についている神が地上界に降りるなど滅多とないことではあるが、
今は事態が事態。
「他の国にもそれなりの存在を派遣するように手はずはしている」
しかし、いくら協会側からの要請だ、とはいえ、
一国のみに実力者を手配しては、今後、地上界における勢力のバランスが崩れかねない。
ゆえに、均等にそれぞれの国に天界側から護衛の派遣員を動員する予定ではある。
万が一、彼らの目的が世界の統一や破滅だとすれば、
まちがいなく、国、という立場そのものを狙ってくる。
つまりは、国の要ともなる王家を狙う確率が非常に高い。
それゆえの処置。
運命を司る神ノルンもこのたびの戦いの行方は視えない、といっていた。
おそらくどこかに、補佐官、もしくは王の意思が加わっているのであろう、
というのが自らを含めた上層部会議の結論。
「わかりました！…でも、あのテミス王国、いろいろと厄介なことに巻き込まれてますね？」
たしかつい先日も堕ちたキマイラが近くに現れた、というので大騒動になったはず。
そもそもその調査に自分が出向いたのだから記憶に新しい。
「…だな。近くに新たな黄竜が生まれた、というのにも関係してるのだろう」
力は力を呼び込む。
当人に自覚がなくても、無意識に力は力を引きつけるもの。

ゆえに、その近くに黄竜が誕生していることをうけても、ありえないことではない。
むしろ、こういった現象が起こっても不思議でなはない状況にかの辺りはなっている。
「では、任務のほうはまかせたぞ。我が娘、戦女神アテナよ！」
「はっ！！」

天界において、しばし父と娘のあるいみ公私混同、ともいえる会話が繰り広げられてゆく……

「…い、いやあの……」
たしかに、要請はした。
したが、だがしかし、しかしである。
「…なぜに、愛の女神であり、戦女神であるアテナ様がわざわざご降臨を……」

頭をかかえるには十分すぎる。
というか、さくっと上位神である存在が簡単に地上界に降りてくるなど聞いたことがない。
実際、霊獣界側からの協力は、ちょうどヴリトラ…もとい、ヴーリが滞在している、
というのもあり、彼女がその役目を果たします、となぜか竜王シアンより報告があったばかり。
そもそもどうして
竜王、などというこれまたかなり上位神ともいえる存在がうごいているのかがわからない。
わからないがこのたびの【神々の黄昏】によりばらまかれている【

邪神ロキ】の魂の力がどれほど強いのか。
そのことを逆に強調しているようにもみえなくもない。
実際、上位の神々などが動いている、
というのを考えれば一般のただの一存在ごときがどうにかできる問題ではないのであろう。
しかし、しかしである。
人生、いきていてまず絶対にお目にかかることすらない、ともいわれている上位神。
その神の一人がよもやこうして、しかも学校を守る、という名目の上で降臨してくるなど。
一体だれが想像できようか。
いくら天界人などと渡り合っている理事長達とてこればかりは思考が追いつかない。
テミス王国首都、王都テミス。
そこに存在するギルド協会学校、その総本山。
学校支部のほうに反旗組織が手をだしてくる可能性はあるにしろ、しかしおそらく彼らとて馬鹿ではない。
保護すべき対象はかならず本部に可まくっている、と見抜くはず。
その裏をかき、支部に生徒を移している、とも考えるかもしれないが。

「くくく。しかし、よもやアテナがくるとはな」
そんな横では面白くてしかたがない、とばかりに笑っている青年が一人。
「それは私の台詞です。というかどうして大侯爵さまがこのような場所に？」

学校に来てみてまずびっくりした。
正確にいうならば、王都にはいったとたんに、アスタロトに出迎えられたのだが。

天界より実力あるものが降りてきたことなどアスタロトには簡単に視通せる。
何より彼女は彼女がまだ幼きころ、いきなりリュカが用事ができたからお願い、といっておしつけていったことのある女神。
その波動を覚えていないはずがない。

「何。ほんの退屈しのぎでな。何より優勝した、という生徒が気になって。
　もっとも、先日、魔界よりの要請で我もまたここに残ることになったがな」
というか、補佐官様に護衛など絶対必要がない。
それはもう確信をもっていえる。
どちらかといえば後始末要員が必要であろう。
そうはおもうがそれは口にはださず、目の前にいる女神、アテナにと話しかけているアスタロト。
「なるほど。とりあえず、天界側からは私がここに使わされることになりました。
　アテナと申します。表向きには出向教師、として滞在させていただきたく存じます」
「こ、こちらこそ。…しかし、どうしましょう？
　まさかあなた様のような上位神が来られるとはおもいませんで。
…住み家を用意してはいましたが、ギルド寮を用意していたのですが……」
さすがに上位神である女神をそのような場に住まわすわけにはいかないであろう。

ちなみに、アスタロトはといえば町はずれにあるとある廃墟を魔法で直し、
そこを拠点として滞在している。

その廃墟、とはかつてディアが【呪】を浄化した建物だったりするのだが。

ギルド協会側としては、護衛をかねているというのもあり、同じ住み家のほうがいいだろう。
という判断で寮の部屋を確保していたにすぎない。
よもや戦女神当人が降りてくるなど予想だにしていなかった。
「いえ、それでかまいません。あくまでも私はここでは一教師。
それに一応、家事なども得意ですし」
母であるヘラ、そして何より、育てられたリュカにかなり鍛えられている。
リュカともに過ごしていて、家事の大切さは嫌でも身にしみている。
伊達にアテナの育ての親ともいえるリュカは界渡り、という二つ名をもっているわけではない。
幼きアテナをつれてよく他界にでむき、野宿などはざらであり、その界にしばらく滞在していたこともざら。
その都度、その場においては自給自足が当たり前。
…ゆえに自然とそういったモノが身についてしまったのは…自然の流れ、といえよう。
「…そ、そうですか。しかし…ほんと、ありえないことになっていますね…
わが協会学校、はじまって以来、ではないでしょうか？
臨時教師とはいえ、教師に魔界の大侯爵様に天界の戦女神さまを迎えるなどとは……」
そんな学校理事長の言葉におもわず、きょん、と首をかしげ、視線を横にいるアスタロトにと移し、

「……Ｅｓｔ－ｃｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ｎｅ　ｌｅｓ　ｃｏｎｎａｉｓｓｅｚ　ｐａｓ，　Ｔａｔｓｕ　Ｄｉｅｕ　Ｖｒｉｔｒａ？」
（もしかして、彼ら、神竜ヴリトラ様のことを知らないのですか）

自分達よりもどう考えても、神竜であるヴリトラが留学生、として通っている。
そのほうがかなり重大な出来事のような気がする。
というかそれに比べれば自分達などは些細なことのようにも感じる。
しかしどうもこの口ぶりから目の前のギルド協会側の人間はそれをしっているそぶりはない。
ゆえに、おもわず横にいるアスタロトにと問いかけているアテナ。

「？ｌａ ｐｒｉｎｃｅｓｓｅ ｎ'ｅｓｔ ｐａｓ ａ Ｃｅｍｏｎｓｉｅｕｒ？」
（あのおかたは教えておられないぞ）

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう。
ヴリトラにしろ、ディアにしろ自分達の正体をギルド協会側に伝えてなどはいない。
だから彼らは知らない。
否、知るよしもない。
すでにとんでもない存在を抱え込んでいる、というその事実を。
きっぱりといわれ、思わず無言になりつつ、目の前の彼らにと同情の視線をむけるアテナ。
いっていない、ということはおそらくそういうことなのであろう。
よく昔、一緒にいたずらを考えていた彼女だからこそヴリトラの思考はある程度は理解できる。
そもそも、彼女にいたずらなどを教えたのは他ならないヴリトラである。
ゆえにそのあたりの思考が同じになってしまっているのはいうまでもない。

「？何を話されて？…と、ともあれ。しかし、女神さまをそのような場所に住まわすのは……」
「かまいません。それに寮、とおっしゃいましたよね？
ギルド寮、ということは周囲の状況把握にとても役立ちます」
ギルド寮は基本、ギルドに所属しているのものみが使用できる寮。
ゆえに、様々な情報がうまくすれば手にはいる。
おそらく寮だけをざっと視てまわるだけでもかなりの量の情報収集ができるであろう。
この際、許可があるだの何だのという個人の思想は関係ない。
少しでもあやしい動きがあれば対処しなければ、【種】に対抗などできはしない。
発動する前の状態ならば回収は楽に行える。
ゆえにどんな形に変化したかわからないが、持ち主がソレを発動させる前に回収すること。
それもまた、与えらた役目のひとつ。
おそらくは、王都にはすくなからずかなりの量の種が持ち込まれるはず。
それが父たるゼウスたち、役職についている神々の意見。
「…あ～…寮、か。…ま、がんばれ」
「？」
アスタロトの頑張れ、という台詞の意味はアテナには判らない。
しかし、これで自分の仮説の一つがはっきりする可能性がでてきたな。
そんなことをアスタロトはふとおもう。
アテナの補佐官に対する尊敬度は果てしない。
たしか補佐官親衛隊や、ファンクラブなるものに入っているほどの熱狂ぶりだと聞いている。

…実際、魔界にも補佐官ルシファーに対するそういう組織はあったりしたのだが、
あるとき、その活動がばれて、こっぴどくものすごいほどの笑顔でお礼を言われたことがあるらしく、
それ以後、裏でこそこそとナリをひそめてかの親衛隊達は活動しているらしい。
…そのお礼、というのが文字通りのお礼、というわけでなく、どうみてもお灸を据えた。
としかいいようのない出来事だったりしたらしいのだが。
それは今では魔界の暗黒歴史の一つ、として数えられているほど。
ちなみに、天界でも同じようなことがあり、そちらもまた黒歴史、とまでいわれている。
気配をまったく変えずに、ただ髪と瞳の色を変えただけの姿をみて、それでアテナが彼女を補佐官ティアマトだ、と断言すれば自分達の仮説が正しかった。
と正真正銘に立証できる。
もっとも、立証できたとして、かの【補佐官】がそれを公表するのを許す、とは到底思えないが。
幾度かあったことのある、天界側の補佐官ティアマトの纏う雰囲気は、
魔界側の補佐官ルシファーとまったく同一のもの。
それを知っているのは直接補佐官にお目見えしたことのある存在達のみ。
しかし両方の補佐官に面識がある存在などそうそう数は存在しない。
ゆえに今までそのような意見がでなかったのか、あるいは外見にだまされているのか。
もしくは考えられないように仕向けられて…操作されているのか、それは判らない。

「今は竜族の子供も通っていますからね。それを気にかけて竜王様

がよくこられていますが。
　竜王様は自分が保護すべき一族のものに対しては子供にまで気を配られるのですね。
　感激しております」

ギルド協会がわの認識として、
ヴーリが竜族の子供なので、それをきにかけて竜王シアンがうごいている。
ということになっている。
事実を知らないものからみればたしかにそうみえるかもしれない。
何しろヴリトラの人の姿をとっているときの外見はどうみても七歳程度の子供。
対するシアンはどうみても大人。
大人が子供をきにかけている、と捕えられても不思議でなはい。
人、とは不思議な種族なものでいともたやすく外見にだまされ、その思考をひきずられる傾向がある。
ゆえにこそ、外見のみで判断し差別などをおこし迫害も起こす。
それが人、という種族。
しかし、人という特性はそれだけではないのも事実。
全てを認め、全てと共にあるべき能力をももっている。
常に取り込み成長する力。
それが人に与えられているもっとも基本となる力の一つ。

「「……Ｃｅ　ｑｕｅ　ｊｅ　ｎｅ　ｓａｉｓ　ｐａｓ　ｄ'ｅｘｉｓｔｅｎｃｅ　ｔｅｒｒｉｂｌｅ」」

本気でいっているらしきその台詞に思わず、アテナとアスタロトの声が重なる。
知らなき事は恐ろしき事。
彼らのつぶやきも至極もっとも。

知らないからこそそんな勘違いもいえるのであり、あるいみ平和でいられるのであろう。
それはわかる。
わかるが…知っている身としてはどうしてもいいたくなってしまう。
しかし、ここで自分達が口を滑らせたりすれば…ヴリトラにどんな目にあわされるかわからない。
にこやかな笑みをうかべたままで、お仕置きしてくる可能性もなきにあらず。
ゆえに、ぽそり、と【戒めの旋律】と呼ばれし言葉で口ずさむ。
「そ、そうですか？とりあえず寮のほうにご案内いたします。
もしお気に入らなければすぐにいっていただけましたたら別の場所を用意しますので」
すぐのすぐに用意するわけにはいかないが、すくなくともどこかの貴族達の別荘、という手もある。
相手が女神である以上、どうしても緊張しつつも言葉をはっしているギルド協会学校の理事長。
「まあ、寮が嫌なら我の屋敷にくるがいい。我の別荘もそこそこ問題ないぞ？」
かの屋敷はかつてアスタロトが自身の別荘として使ってはいたが、あきてしまったので空き家にしておいた。
その間、別の所有者ができ、結果として【呪】の屋敷となってしまったのだが。
数百年から数千年単位で地上界に出向くことはないといわれている上級悪魔にとって、
地上界や他の界の拠点は仮初めのものにすぎない。
ゆえにまっくたもって執着はない。
「遠慮しておきます。
いくらあなた様の屋敷とはいえ、魔の気を常にあびているのはさすがに疲れます」
基本、天界の空気と魔界の空気は光と闇との対局のごとくにまった

く異なる。
ゆえに互いの空気はそれぞれの界の存在達には普通はあわない。
が、ある程度の実力をもつ存在達はそういったことはまったくもって気にもとめない。
すこしばかり気分が悪くなる程度でさほど問題はない。
アテナからすれば、アスタロトは悪魔とはいえかなり格上の存在。
話しにきくところによれば、父であるゼウスと同時期に誕生したとも聞き及んでいる。
それが真実かどうか、まではアテナは詳しくしらないが。
おそらく、彼に【魅惑】でもかけられでもすれば、自分程度の実力では絶対にあらがえない。
自分の実力がわかっているからこそ確信がもてる。
「そうか。まあ気がむいたら訪れればいい」
別に強制はしない。
もっとも、間近にて補佐官の傍にいられるか、といえば
おそらく彼女は、はい、とこたえるのであろう。
そうなると、我の呼び出し頻度も少しは減るか、もしくは増えるか…これは、カケ、だな…
自分の予測があたっていたとして、天界、魔界の補佐官が同一の存在だとする。
とすれば、魔界側と天界側、どちら側からもある程度の実力者が傍にいることで、
何かしらの行動、もしくは呼び出しが増える可能性もあれば、
逆に魔界側の補佐官とはいえルシファーも尊敬しているらしきアテナのこと。
彼女に何か頼まれれば嫌とはいわないであろう。
ギルド協会本部の一室において、そんな彼らの邂逅がしばしの間繰り広げられてゆく……

光と闇の楔　～破格待遇！？ギルド学園～（後書き）

ようやく、学校に駐在？する先生達がそろいました！

光と闇の楔　～学校（協会）側は大騒ぎ？（前書き）

北欧神話さんでは、長男、フェンリル、長女、ヘル、次男（末っ子）ヨルムンガルド。
になってますが、このお話しはあえてヨムを一番の末っ子に。
理由？それは母親を守る、という理由で末っ子が無難かな？
という理由です。
…それに、彼、産まれたときには、かわいらしい小さな、ヘビ、ですし。
容姿的に、末っ子のイメージが（苦笑

すべてはあのときから狂った。
狂ってしまった。
自分の容姿が罪だ、といって攻撃をしかけてきていた大人たち。
でも、それでも、父や母が守ってくれていた。
兄も。
大切な姉をも傷つけようとする彼らから必死に生きていた。
なのに…その大人が母を傷つけようとしたあのときから。
父は自分の力が足りなかったことに悲しみ、怒り…守れなかった自分を悔い。
視ているほうがつらかった。
だけども、父から告げられた言葉は自分達も率先して力をかそう、とおもった。
…すなわち、愚かな行為をする世界を一度浄化する。
補佐官様は好きだったけども、何よりも父と母、そして家族のほうが大切だった。
戦いを始めたとき、あっさりと補佐官様より直接に、
『傲慢になってるは事実だから徹底的にやってもいいわよ。
…それで、あなた達の気がすむのなら、ね』
そういってくれたのが救いだった。
どうやら、あまり傲慢な考えをもちはじめていた彼らに補佐官様も危惧を抱いていたらしい。
その悲しみに肉体と魂が完全に浸食されそうになり、そこで補佐官様と王の力が発動した。
そして自分達に父と母を守るようにと命じられた。
命じられなくても自分達は自分達なりに立候補しようともおもって

いたし、
また他のものがその役目になったとしても、まちがいなく見守ることを選んだであろう。
『いつか、世界にその力が満ちた時、心を閉ざした彼女もまた目覚めるでしょう』
その言葉が持つ意味は何なのかはわからない。
だけども、自分は母を…自らの肉体を石に変えてその身と心を守り抜いた母。
母を守ることのみあのときからこうしてここにいる。
だけども……
「？最近、ヘルやフェン兄さん達からの報告がないのは、どうしてでしょうか？」
それがきにかかる。
定期的に必ず何の異常がなくても連絡はきていたというのに。
【門】がある空間にゆきつくまでにとある自らが存在しているこの場。
この何もない空間のことを、別名【アザトス】ともいう。
その空間のことを無明の霧ともいい、無明の海、とも呼び称す。
その海の底にどぐろを巻き大切な母の体を守っているのが、ヨルムンガルド。
ロキとアングルホダの間に生まれた次男にして冥界の王ヘルの兄であり、
氷の覇王フェンリルの弟。
そのつぶやきは、ただただ周囲の霧のような海にと溶け込んでゆく
……

光と闇の楔　～学校（協会）側は大騒ぎ？～

「ねえねえ！きいた！？また新しい先生がくるんだって！」

ここ、ギルド協会にしては連続して新たな教師がやってくる、などかなり珍しい。

これが協会本部でなく、支部にあたる学校ならばわかるが、本部に連続して教師がはいってくるなど。

はっきりいって数十年に一度あるかないか、というくらいに珍しい。

「あ～。やっぱり最近、【ゾルディ】の被害が増えてるのもあるのかな？」

生徒達には、今何がおこっているのか、詳しいことは知らされてはいない。

否、生徒達だけではなく、一般の人々にも何が起こっているのか正確なことは知らされはいない。

ゆえに、いきなり突如として増え始めた害ある存在、【ゾルディ】。

その脅威にただただ日々おびえるばかり。

何でもその【ゾルディ】を生み出しえる【種】と呼ばれるものがばらまかれた。

というのは噂で知ってはいるが、その種がどういったものなのかはいまだに発表されていない。

噂がどこまで真実なのか、人々は疑心暗鬼になっているものの、

しかし、ギルド協会や王国側が国をあげて何かを回収しはじめているのは事実。

その事実は噂となり、

あっというまに王都といわず、他の国をも巻き込んであっという間に広まっている。

実際、他国においても、ギルド協会側と他国側とで何かを回収しているらしい。
その何か、がわかれば対策の仕様もあるような気もしなくもないが。
協会側に問い合わせしても、はっきりとした返事は得られないのが今の現状。
協会側としても発表にこまる品。
何しろ、不確定物質、ともいえる代物。
手にしようとする存在の潜在意識を読み取り、そのように変化する代物、などどう説明すればいいのやら。
中には死んでしまった子供の姿を形どる【種】すらあり、
子供がもどってきた、と喜ぶ親もいたりする。
あくまで種は相手の深層心理を【摸索】するので、外見上はまず気づかない。
魂の欠片、とはいえ力は神のもの。
それくらいの模倣はたやすいもの。

「なんかさ。最近は死んだはずの人がいきなり戻ってきたりとか。
　目の前の知り合いからいきなり魔獣が出てきたりとかするんだって。
　何でもその人が噂の種をもっていたらそういうこともありえるっていう噂だよ？」

どの時代においても、またどの世界においても、人、とは噂話しが好きなもの。
ましてやそれが自分の身に降りかかるかもしれない噂ならばさらに盛り上がる。

「それより、この前は魔界側からの臨時教師だったでしょ？
　アシュタロス先生、カッコイイよね～。も、私、先生が悪魔でもいいから傍にいたいっ！」

「…悪魔との契約はあまりお勧めできないよ～？転生もあやしいかもしれないし」

この世界において輪廻転生、という言葉はしごくもはや当たり前であり、誰でもしっている事実。
命はめぐり、冥界へと魂はむかい、そして新たな生を迎える。
生命論という授業でそのあたりのことはきちんと学校内においても教えている。
中には魂を喰らう悪魔もいる習っている。
そうなれば魂そのものが消滅してしまうので来世は絶対に望めない。
もっとも、前世のことも覚えていない状態で生まれ変わっても意味がない、と捕えるものもいるにはいる。
中にはそのように伝わっていても、所詮は伝説、死ねばそれまで、とおもっている輩も多々といる。

「まあ、先生が悪魔、というのはあの美貌だからわからなくもないとして。
　気になるのは名前、なのよねぇ。魔界の大侯爵と似通った名前、というのが気にかかるわ」

似通った、というかそもそも、アスタロトの別名の一つがアシュタロスである。
あまり変わっていない、といえばそれまでだが。
名がなぜか間違った伝わってしまい、面白いのでそのまま別名の一つ、としてその名を用いているアスタロト。
「大侯爵の子息か何か、なんじゃないの？」

実際、自らの子に同じような名をつける、というのはどの種族においてもよくやっているらしい。
特に後継者となる子に自らの名を継承させる、というのはよくある

こと。

「でもそんな大物がこんな人間界のしかも学校の教師なんてやるとおもう？」

それはたしかに。

そもそもそのような大物の子息とかならばそれなりの教育係りがついているはず。

「いや、ほら。逆に世間をみてこい、とかいって放り出す親っているし」

実際、身分を隠し、民に交じることにより

より世界を知ることが必要、とばかりにその制度を用いている国もある。

その制度が魔界においても普及しているかというのは彼らにも知るよしもない。

ないが、そういったこともあり、噂は噂を呼び、今現在、ここギルド協会学校の一番の話しの種。

「前回は魔界からの臨時教師、だったから、今度は別の界からの臨時教師、かな？

　可能性として精霊が出向いてくる、ということはまずないだろうし」

そもそも、精霊が出向くのならば、ここの土地を守護している守護精霊が姿をあわしそうである。

霊獣界から誰か教師が送られてくるとすれば、留学生ヴーリの関係者になる可能性が高い。

妖精界においては…今の地上界に彼らが存在するのはかなりきついものがあるであろう。

今現在の地上界はどこといわずに、常に負の気に満ち溢れている。

妖精達はそういった気にとても弱い。
まさか死者の国である冥界から誰かがやってくるなどありえない。
となれば、ありえるのはおそらくは、天界側からの使者くらいであろう。
伊達に、ここ、ギルド協会学校の中で様々な知識を教えているわけではない。
そのあたりの基本的な知識は生徒達にきちんと教育を施している。
それがどこまで自分なりに解釈し自分のものにしているかは別として。

「でも、問題は、もしそうだとしたら。また騒ぎがおおきくなるわね～」
「だよね～」
「「は～……」」
そんな会話をしていた生徒達が思わず顔をみあわせ盛大にため息をつく。

ため息もつきたくなる、というもの。
基本的に、ギルド協会学校で教育を施している教師などは公に種族などを公開することになっている。
それは生徒達がどんな種族でぞのような経歴の人物に教えてもらっているのか、
と心配する多々といる親や、またそれぞれの分野における責任者達からの声をうけてのことなのだが。
いくら資格を保有していたとしても、周囲となじめないような教育をうけていたのでは意味がない。
様々な職種によっては種族を問わず接触しなければいけないものもある。
学校はそういった耐性の場をつける場でもある。
生徒達の個人情報は守られてはいるが、

教師達の名は伏せられるとしても経歴などは簡単に公表される。
が、この公表、というのが今、彼女達が一番気にとめている事柄でもある。
何しろ魔界のしかもある程度の実力者…名からしておそらくまちがいなく実力者。
と勝手に解釈した存在達がこぞってアシュタロスに講義を受けようとしたり、
もしくは対戦を望んでギルド協会本部に掛け合ったり、直接学校に押し掛けたり、
という事例もすでに起こり始めている。
そこに、また実力者が加われば今後どうなるのか。
それは一生徒である彼らにはわからない。
わからないが、すくなくとも平穏無事にはすまないであろう、という予測はつく。

「なんか、ここさいきん、いきなり騒がしくなったよね？」
「うん。今まで平穏で退屈だったけど、なんかいきなり平穏ってすばらしいことなんだ。
ってつくづく思い知らされてるよ」

今まで何ごともなく、何かがあればいいのに。
と毎日を怠惰に過ごしていた。
といっても過言ではない。
しかし、しかしである。
ここ最近はまさに下手をすれば命がけの事件が続いている。
それはすべてここ数カ月の間にいきなり降ってわいたかのように連続して起こっている。
三階位になるここにいたる年月になるまでこんなに連続して何か事件がおこったことなどいまだかつてない。

彼らは一般的には高学年、ともいわれている階位に在籍している生徒達。
ゆえに長くてすでに十二年以上このギルド協会学校に通っているものもいる。
もっとも、この学校は実力が全て、なのでその実力に応じて飛び階、は可能。
中には入学試験をうけてすぐに卒業試験をうけた強者も長い歴史上には存在している。
ちなみにディアが入学した階位は年相応の第六階位。
一般的にこの学校には六才のころから通いはじめるものが大多数。
孤児院などを得て入学する場合、その能力に応じて階位は決められる。
ディアの試験結果は年相応、とみなされたがゆえに、年相応の階位に振り分けられたにすぎない。
もっとも、ディアとしてはそのようにわざと調整をしたのだが。

「でも、ってことはまた明日も全校朝礼か～」
「あ～…あのながったらしい話しはどうにかしてほしいわよね。ほんと」

どちらにしろ、新たな教師がやってくるとなればまちがいなく全校生徒をあつめた朝礼、
もしくは集合がかかるはず。
ゆえにため息をつかさざるをえない生徒達。
何しろ全校朝礼などにおける教師達の話しはながすぎる。
あまりの話しの長さに時折貧血を起こす生徒がでる始末。
それでも意味のない長い話しをやめようとしないお偉いさんたちの気持ちは生徒達にはわからない。
たわいのない会話ではあるものの、
いまだ正式に発表していないにもかかわらず、天界から新たに教師

がやってくる。
という噂はまことしやかに学校全体にと瞬く間にと広まってゆく……

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
どうしてこうなってるわけ？
思わず目を点にする。
確かに話しあいのためにしばらく意識を切り離していたのは事実。
ひとまず今後の対策などについても話し合い、戻ってそのまま登校しているディア。
そもそも、戻って、という言葉はあまり当てはまらないのかもしれない。
意識をただこちらに【戻した】、といったほうが正しい。
壇上にいるのは、なぜか見慣れた女性の姿。
それでなくても先日、リュカとともに行動を共に一時したばかり。
そのときには彼女に気づかれないようにしてはいたが……
「…なんで？」
それがまず始めの感想。
天界側から何らかの対策を施すために使者が使わされるのは用意に予測はつく。
つくがわざわざ女神の中でも主要の位置にいる彼女をここに遣わす理由が今いちよくつかめない。
ヴリトラがここにいる、というのを理由にしてみても、戦女神をわざわざ地上に遣わす理由がない。
そもそも、彼女とヴリトラが共にいればどのような結果になるのか、天界側とてそれは十二分に承知しているはずである。
…もっとも、今の事情でかつてのような悪戯をしまくる、とは思わないが……

そんなディアの心情は何のその。

「みなさん。今日より、みなさんの自衛のための防衛術を教えてくださることになりました。
天界よりの指導員、アテナ様です。みなさんも知ってのとおり、今世情が世情です。
ゆえに天界側も魔界側も我々地上界の者は貧弱であることから配慮してくださり。
こうして使者をよこしてくださいました。ありがたいことです。
みなさんも今後ない機会ですので、いろいろと学んでくださいね」

というか度々あったほうがはるかに怖い。
それほどまでに、天界人と魔界人と地上人との力の差は歴然としている。
神気を抑えていても、その身からあふれる神々しさは隠しようがない。
ゆえにこの場に集められている生徒全員が壇上のアテナ、と紹介された女性に見惚れ釘づけになっている。
そこにいるだけで姿勢を正したくなるほどの気迫とそして美貌。
みるものを虜にするかのごとくの慈愛に満ちたほほ笑み。
免疫のない存在にとってはその笑みはかなり酷といえよう。
そして…この場にいるほとんどの存在がそういった免疫がとぼしいのも事実。

「…あの子…いまだに気配を隠す術…完全ではないのよね……」
緊張しているからか、おもいっきり気配を隠す術が完全に作用していない。
もっとも、始めがなめられてはおしまい、というのもあってある程度、気をはっている。

というのはあるのであろうが。
それでも、神の発する気というのは微量だけで人を失神させる効果をもっている。
それがわかっているのかいないのか。
おそらくそのあたりの力加減具合がいまだにつかめていないのであろう。
先日、調査にやってきたときは騒ぎにならないように、というのが根柢にあったがゆえに、
その気配もすべて確実に遮断し人になりきっていたようではあるが。
「防衛術…か」
たしかに戦女神である彼女ならばその対局にある防衛の仕方を教えるのにはうってつけ。
しかし、しかしである。
「よくもまあ、溺愛してる娘を何があるかわからないここに送り込んだものだわ。ゼウスも」
思わず本音がぽつりと漏れ、その場にて苦笑してしまう。
ヴリトラがここに滞在している、というのはおそらく反旗組織にも伝わっているはず。
だとすれば、彼らはここを重点的に攻めてくる可能性は遥かに高い。
もっとも、そのほうがディアにとってもかなり効率がよくて助かるのだが。
「…ヴリちゃんがもどってきたら、
あの子と一緒になって悪さをしないようによ～～くいっときましょ……」
つい昔のクセがでて周囲を巻き込む悪戯をされてはおそらく人間達はそれらに耐えられないであろう。
下手をすれば確実に死ぬ。
まだ天界や霊獣界といったその器そのものが精神であり、精神の強さが器の強さ。
となっている界とくらべ、この地上界に住まう生命体の器はかなり

弱い。
少し力を加えただけで簡単に器は壊れてしまう。
それはどの種族においてもいえること。
他界に本来生息しているはずの種族にはそれらの弱さは当てはまらないが。
神気を学校に来た時から感じてはいたので、誰か天界人がやってきているのはわかっていた。
いたがまさか彼女がきているなどとは思っていなかった。
意識をいまだに【外】にむけていたがゆえに気づけなかったというのもある。
今ここでいきなり気配を変えたりすればまちがいなく目にとまってしまうであろう。
今のディアはいつものごとくに、周囲にとけこんだ気配のままとなっている。
つまり、本来あるべき気配のままの状態でここにいる。
この場にていきなり気配を変える、ということは文字通り、壇上の上にいるアテナに気づきかれない行為。

「みなさん、初めてお目にかかります。今学校長よりご紹介をうけました。
天界より参りました、アテナ、と申します。
今後のこともありしばらくこの学園にて教師の役目をさせていただきます。
みなさんが負の心に囚われないようにそのあたりはしっかりと叩き込むつもりですので、
そのあたりは覚悟しておいてくださいね？」

裏を返せば、簡単に自分の心に負けるような鍛え方はしない、といっているに他ならない。
が、しかしその言葉の意味を完全に理解できるものはこの場におい

ては二名のみ。

にこり、と祭壇上にと登り、生徒全員を見渡しつつもそう高らかに宣言するアテナの姿。
その声は慈愛にみち、なおかつ威厳にあふれており、その場にいる全員…二名を除く、が。
ともあれその場にいるほとんどの存在がその威圧感にと呑みこまれてゆく。
そんな生徒や教師達の反応はさらっと無視し、集められている生徒にと再び視線をむけ、
ふと、その視線がとある一点でとまり、その目が一瞬大きく見開かれる。
離れていてもその雰囲気が周囲に完全に溶け込んでいる、というのは左右にいる人間達をみても一目瞭然。
髪と瞳の色は異なれど、そのような雰囲気をもつ存在など限られている。
それゆえに、

「…Ｍａｒｑｕｅ ｄｅ ｌａ ｌａｒｍｅ（ティアマト様）！？」

思わずその姿を凝視し、その場にて叫ぶアテナ。
今この場がどのような場なのか、まったくもって意識していない無意識の台詞。
無意識であるがゆえに、常につかっている【言葉】にて思わず叫ぶ。

どうでもいいが、状況を考えていってほしいものであるとつくづく思う。
そう思うディアの心情はおそらく絶対に間違ってはいないであろう。
そのまますかさずに相手の言葉を封じているディアはさすがとしか

いいようがないが。
今の短い悲鳴のような声はどうやら周囲には聞こえていなかった、
もしくは認識されてはいないらしい。
そもそも、目の前に神話とでもいうべき、伝説ともいって過言でない、戦女神がそこにいれば、
どうしてもその神々しさに皆目を奪われてしまう。
特に神気を多少解放していればなおさらに。
さらにいえば、戒めの旋律の言葉を扱ったがために理解できた存在がほとんどいなかった。
という理由もある。
約一名、その言葉をきき、一瞬驚愕の表情をうかべて目を見開き、
次の瞬間、すぐさまディアとアテナを見比べている存在がいたりするのだが。
今のアテナが発した声はまさしく、アスタロトが以前より予測していた事柄。
常に近くにいた戦女神アテナがそう断言とはいかずとも、
そう叫んだことにより予測の信ぴょう性がはるかに増した。
つまり、天界、魔界における補佐官は同一の存在である、というその予測。
となれば、彼女がつかえている【王】もまた同一の可能性がかなり大きい。
それは世界の根柢にもかかわることなので滅多なことでは口にはだせない。
ないが、それでも真理を追究したい、とおもうのは彼が彼であるゆえんでもある。

見間違い？
否、そんなことはない。

だけど、どうして？
人間にあの御方と同じ気配をもっている存在がいるなど思えない。
というかありえない。
全ての大気、世界そのものに溶け込んでいる、といって過言でない
その雰囲気をもつ存在。
何よりも憧れて憧れて、手の届かない存在。
至高なる存在、王に唯一、絶対的な信頼を得ている存在。
補佐官ティアマト。
いくらその髪と瞳の色が違えども、その姿を見間違うはずもない。
だからこそ思わず、素で叫んでしまったアテナ。
しかしそのひとことの後、なぜか声を出そうにもだせなくなってしまう。
この感覚には覚えがある。
かつて神竜ヴリトラとともに悪戯をしかけていたときに、補佐官よりお仕置きをうけたことがあった。
それは声を封じる、というお仕置きであり、念波すらも封じられてしまった。
【声】もだせなければ、動作で物事を現そうとしようとも、それすら許されなかった。
唯一できたのは、ただ頭を下げて謝ることのみ。
魔界の補佐官ルシファーも素晴らしきかた、ときいていたので会いたくはあったが、
魔界の空気はアテナには向かないから、といって
父たる雷神ゼウスは魔界にアテナをつれてゆくことはなかった。
ゆえに遠くからのみしか魔界の補佐官にはあったことのないアテナ。
もしも近くで魔界の補佐官にも合うことがあれば、同じ雰囲気をもつ存在が他にもいる。
と勘違いしていたかもしれないが、彼女は不幸にも天界の補佐官しか知りえない。
もっとも、それが不幸なのか幸運なのかは考え方は人それぞれ。

そもそも、どちらの補佐官もただ髪と瞳の色を変えただけでそのように振舞っていただけ。
神竜や伝道師達はその事実を知ってはいるが他の存在には教えてはいない。
それはいわゆる暗黙の了解。
神と魔、光と闇が実は同一、とわかって混乱しないようにと設けられている配慮。
ならばべづ別に光と闇を統べる存在を創りだせばよかったのではないか、という疑念も生まれるが。
それでは意味がなかったのも事実。
そんなことをしても、いずれはやがてかつてのように均衡が保てなくなることは目にみえていた。
だからこそ、【意思】自らが兼用することにしたのだから。

アテナが口がきけなくなっているなど微塵にも思わず、
「え、え〜。今、アテナ様からお話しがありましたとおり。
これより後、みなさんの指導をしていただくことになります。
かの御方は戦女神でもあられますことからみなさんは幸運といえるでしょう。
何しろ、上位神であられます女神さまに直接指導をしていただけるのですから」
何やら逆の意味で盛り上がり、熱意をこめて説明している学校長。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばし、一瞬の静寂の後。

『えええええ〜〜！！？？』
『うそぉ〜〜〜！？』

講堂内に生徒達の何ともいえない叫びが響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～学校（協会）側は大騒ぎ？（後書き）

…なんか今回もほとんど話しがすすんでない（涙
とりあえず、これにてアテナが教師の一員にくわわりましたv
さらっと全校生徒の前で暴露してたりしますけど、まあ全校生徒の誰をみて叫んだか。
など普通はわかりませんしね。普通は……
ようやく、騒動の要ともなる教師二人がそろったところで、学園生活の再起動v

光と闇の楔　～恐怖の発生源と原因と～（前書き）

ラストのほうでディアによる爆弾発言あり（笑
次回でようやく今まで裏で暗躍してた彼らの登場にいけるかな？
何はともあれ、今回もあまりすすんでいませんがいくので

光と闇の楔　～恐怖の発生源と原因と～

「あなたもそう思われますか？」

たまたま代表会議に出向いてきていた。
そこで同じ能力をもつ女神と出会い、意気投合している彼ら達。

「…あそこまで同じ気配の方は普通はおられないでしょう？」

話しにはきいたことのあった天界の補佐官ティアマト。
彼ら上位の神や悪魔といった魔王を育てたのはほとんどが【伝道師】達。
時折、神竜なども間にはいってはきたが、そのとき補佐官、という存在にはあっていない。
【王】は彼らに心の中に語りかけ、常にその気配を感じさせていたにすぎない。
実際に姿をみたことはない。
それでもその強大な力に守られている、と感じていて幼き日々。
魔界、天界、という場所がつくられ、それぞれの場所に自分達が移動した先で出会った補佐官。
その補佐官から王の気配の片鱗を無意識のうちに感じ取っていたのも事実。
それが意味することは当時の彼らにはわからなかった。
そういうものだ、と幼いながらに認識してしまい、今に至る。
それから長い年月とともに魔界の住人も天界の住人も充実していった。

「わたくしも以前、魔界に出向いていったときに拝顔する機会がありまして……
　その気配の類似性、というかまったく同一のものに驚きましたわ」

どんな存在でも同じ気配のものは二つとありえない。
それが複製、とかいう自身の影ですらどこかしらにそれなりに判るものがある。
しかし、しかしである。
複製という感じもうけなければ、影という感じもうけない。
まるでそこにいることが当たり前であり、常にその内部にいるようなそんな感覚を抱かせる存在。
そんな存在がおいそれと幾人もいてはたまったものではない。
感じた気配は聖なるものなれど、光と闇は表裏一体。
そのことを初期に生み出された彼らはよく理解している。

「…では、やはり？」
「…伝道師様方が、王のことを【意思様】と呼ばれていたのもありますし……」

それは彼とてきいている。
魔界の王と、天界の王。
どちらにたいしても、伝道師達は、【意思】とそう呼び称している。
それが何を示すのかはいまだによく理解してはいないが、
おそらくこの大地…否、自分達が住まうこの惑星、と呼ばれている存在に関係しているのであろう。
惑星云々、の知識は伝道師達から生み出されたばかりの彼らに教えられている。
この惑星が太陽の周囲を廻っている、ということも。
始めは理解できなかったが、そのまま宇宙空間に飛んで連れていか

れてやっと理解できた幼き日。
奇麗な球体。
そのとき、初めて奇麗、という言葉がすんなりと理解できたような気がしなくもない。
それほどまでに、真っ暗な空間に浮かぶ青き球は印象深かった。

「…私は、伝道師達が補佐官様のことをそのように呼ぶのをきいたことがあります……」

それはほんの偶然であったが。
どこかにずっとひっかかっていた。
他の存在の先は視通せるのにまったく先のよめない伝道師と、そして補佐官。
神竜に関しても然り。
【門】であるソトホースに関しては先を視る必要性を感じないので試したことは一度もない。

「…では、やはり……」
「…これは、我々の胸にだけ秘めておいたほうがいいのですかね？」
「…でしょうね……」

それは、ある日の会話。
運命を司る女神ノルンと、審問王アスタロトの間で交わされた、秘密裏の会話……

光と闇の楔　～恐怖の発生源と原因と～

「え？」

一歩足を踏み出しただけのはずなのに。
今自分がどこにいるのかがわからない。
先ほど紹介をうけ、ひとまず職員室へと戻り、校長室へと出向いていた。
校長室から一歩外にでた直後。
周囲の景色が一変し、思わずその場にて硬直してしまう。

「…あ～、まあ、あの場でいきなり叫んだのはちょっとまずかったな。アテナ」
「って、アスタロト様！？」

ふと背後から聞き覚えのある声がきこえ、思わずふりむけば、そこには案の定、
同じく臨時教師としてこの学校に勤め始めている魔界の大侯爵アスタロトの姿が。
彼としても先ほどのアテナの台詞の意図をきちんと把握すべくこうして会いにやってきていたのだが。
まさかここで自分もこの空間に巻き込まれるとは思ってもみなかった。
周囲はただひたすらに、白い、白い、どこまでも白い何もない空間。
全てが白で塗りつぶされている中で自分達の姿のみが異様に浮かび上がっている。

「あらあら。アスタロトもあの場にいたみたいね」

そんな彼らの耳にくすくすと笑いを含んだ声が届いてくる。

声はすれども姿はみえず。
その直後。
彼らの目の前の空間より一つの人影が突如として出現する。
ふわり、とまるで重さを感じさせない長い漆黒の髪。
全てを視通すかのような透き通った漆黒の瞳。
そこにいるだけで、全てを包み込み、また呑みこんでしまいそうな圧倒的な存在感。

「「……ティアマト様（!?）」」

その姿は間違えようがない。
ゆえにそこにいるはずのない存在の姿をみて驚愕の声をあげているアテナ。
先刻から、講堂で垣間見た生徒のことを聞こうとしてもなぜか声がでなかった。
それ以外のこと、関係ないことならば声にも念波も使えた、というのに。
では、やはり、先ほどみた、髪と瞳の色が違うあの人間の姿をしていたあの方が？
しかし、天界の補佐官ともあろうものがどうして地上界のしかも学校にいるのかが判らない。
ゆえにアテナの思考は混乱を極めている。
対するアスタロトのほうはすでに心の中ではあるいみ確信をもっていたがゆえにさほど驚いてはいない。

「あら。さすがにアスタロトは驚かないのかしら？」
「…わかっていわれてます？」

おそらくこの姿でてきたのは、自分が疑っているのを知っていてのことなのであろう。

その表情が面白がっているかのようにくすくすと笑っていることから用意に予測はつく。

「まあ、とりあえず。ようこそ、地上界へ。というところかしら？…二人とも、座って」

言葉と同時に、いつのまにか出現したのか、目の前には真っ白い机と椅子が現れていたりする。

「は…ははははははいっ！」

もっとも尊敬し憧れている補佐官が目の前にいる。
それゆえにどうしてこんな場所に？という疑念よりも直接声をかけてもらえた、という興奮で、
もののみごとに疑念は奇麗さっぱりと消え去っているアテナ。

「…天界の補佐官、ティアマト様。私にも用事があるとみましたが、何の御用ですか？」

大方わかってはいるが念のためにと問い返す。
すでに心構えができているがゆえに内心多少の動揺はあるものの、
それほど混乱することはない。

「そうね。とりあえず、今後の話しあい…かしら、ね？」

くすくすと悪戯が成功したかのようにほほ笑む目の前の女性からは何の意図も感じられない。
しかし油断をしていればその心の奥底まで何かに塗りつぶされてしまいかねない圧倒的な力は感じる。
カチコチに固まるアテナとは対照的に、自分が何をすべきなのか必

死で思考を巡らせているアスタロト。
この空間においてはそんな彼らの思考は全て目の前の女性に筒抜けであるのは何となくだが理解できる。

「さて…アスタロト。あなたは何か我に聞きたいことがあるのでは？」

くすり。
相手が疑念をもっているのは先刻承知。
ゆえに思考を巡らせているアスタロトにとくすりと笑い語りかける。

「…では、無礼を承知でお聞きいたします。補佐官様。
…貴方様は、王、そのものではないのですか？」

何か聞きたいことがあるのではないか。
そういわれ、意を決して問いかけた。

「…え……」

アスタロトのいっている意味がアテナにはわからない。
だからこそ唖然としてしまうアテナであるが。
そんなアスタロトの問いかけに平然と、ただくすくすと笑いつつ、

「ほぅ。そうおもった理由は何ぞや？アスタロト」

どくん。

ディア、としての口調ではない。
常にいつも補佐官、として存在していたときの口調であり、その声には力がこもっている。

常に気を強くもっていなければこの場に意識を保つことすらできないほどの圧倒的な【力】。

「気配。です。あなた方の気配はあまりにもこの【惑星】と同一すぎる」

そう。

かつて【外】よりみた青き惑星。

その気配とまったく同一なのが王と、そして補佐官。

この場で答えてもらえるなどとは思ってはいない。

しかし聞かずにはおられない。

「ほぅ。…ならば……」

刹那、アスタロトとアテナの周囲の景色が変わりゆく。

次の瞬間。

彼らの視界に突如として入ってきた光景。

それは真っ暗な空間に浮かぶ、青き球体……

「う～…何か頭に靄がかかったような……」

何か決定的な事実をつかんだというか知らされたはずなのに、それが思い出せない。

「？アスタロト様も？私も……」

ふと気付けば、アテナとアスタロトがたっているのは校長室の前。
思わず顔を見合わせ、頭を抱える。
何かがあったはずなのに思い出せない。
それがどうにももどかしい。
アスタロトの頭のどこかで何となく補佐官ルシファーに関することだ、とは理解しているような気もするが、
思いだそうとすればするほど思考に霧がかかったかのようにまったくもって思い出せない。

「そういえば、
　ゾルディが発生する条件をしっかりと伝えるように、と言われたような気もするのですが……
　私、お父様からそんな命令、うけていたかしら？」

受けていないとおもうが、だがしかし、
なぜかそれは絶対にしなければならないことなのだ、と全身全霊をもってして魂が訴えている。
ゆえに戸惑い気味ながらも、ふと今頭に浮かんだ、絶対に優先的にしなければならないこと。
その行動を口にしているアテナ。
しかしどこでそのような命令をうけたのかまったくもって覚えていない。
だからこそ戸惑いを隠しきれない。
何だか生徒達の前で演説をしてからの記憶があいまいで完全に思いだせない。

「私のほうもそのように命令はうけていますからね」

やはり、先ほど補佐官様が絶対に何かしたに違いない。
自分もまた教師になったその日に、ディアと名乗っている補佐官ルシファーからそういう命令をうけている。
いわく、何でも今の地上界は発生源がきちんと把握できていないゆえに、
逆に彼らを増殖する悪循環に陥っているから、とのこと。
確かに言われてみればその通り。
幾度も地上界、特に人間達には発生理由の原因などを伝えているような気もしなくもないが、
なぜかいつのまにかその原因は闇の中にと葬り去られ、
ゾルディがなぜ発生するのか、という疑念をもつものはほぼいない。

様々な生命体が抱く【強い思い】が一定以上になると生み出される存在。
それが【ゾルディ】。
そこそこに存在する生命体達がその強い思いに呑みこまれないように、との配慮で考えだされた存在。
それぞれが抱いた強い思いと、それらが抱く【偶像】を得て様々な形として生み出される存在。
毎回、毎回伝えたはずの真実がいつのまにか消されている事実。
それは人がもつ【嫌悪】という感情に左右されている。
誰しも、自分が抱いた悪意が形となり他者を襲うような存在になるなど信じたくはない。
心の奥底で誰かを強く憎んでいたとしても、所詮は心の中だけでのこと。
その思いが強ければ形をなしてその対象を害するなどと知らされて、誰が真実を認めようとするだろうか。
ゆえに、毎回、人間達の中ではその真実を伝えられてもまず真相が伝わらない。
伝わらないがゆえに、目の前で【異形】の存在を生み出した存在は

【堕ちた存在】と認識され、
今まで幾度も関係ない人々が真実から目をそむけた人々によって排除されている。
人という種族はなかなか自分達とはことなるモノを認めようとしない。
それが異質であるならばなおさらに。
それらを全て認めることができ、はじめて【人】として本当に生きている、といえるのだが。
どうしてもそう思えない人々が多いのもまた事実。
そしてそれは、人類だけにおよばず、知性をもった存在達全てに当てはまる。
すべてに生きる存在達がその心をみとめ、自分の中でその負の心を浄化し認めることができたとき。
始めてこの地の命は新たな段階に進むことができる。
かつては自主性にまかせていたがそれから目をそむけた結果、
周囲すら巻き込む破滅へと突き進んでいったかつての人類達。
一度ならず二度までも。
だからこそこのたび、【意思】はこの方法をとっている。
三度目の間違いを起こさせないために【意思】が思慮した結果とった措置。

「ゾルディの定義…ですか。天界でもたびたび議論にのぼる真理ですね。
　たしかに地上界はそのあたりの知識が乏しすぎるのは前々から感じてはいましたが」

だけどどうして強くそのあたりの概念を伝えなければならない、とおもうのかアテナは判らない。
それは覚えていないだけで、かの空間にて【王】に言われたからなのだが。

覚えていない以上、
漠然と強くそれを実行しなければいけない、ということ以外、アテナには判らない。

天界側でもその思いが突発的に膨れ上がり、
相手がいきなり【ゾルディ】を生み出す、ということは時々おこる。
それでもその認識がしっかりしているがゆえに、
【ゾルディ】を生み出してしまったものは自己嫌悪に陥り、また周囲もそんな当人を責めはしない。
が、地上界においては話しは別。
あくまでも【ゾルディ】は悪意ある魔獣、と認識されており、
生みだす結果となってしまった存在にも容赦はしない。
容赦しない、というよりは、その当人そのものが諸悪の根源。
とばかりにてってい的に排除しようと集団で行動してしまう。
不思議なことに一人では冷静な判断がとれるであろうに、
集団ならばどんな非道なこどても平気でやる。
人族などといった知性ある存在達が陥る最悪な行動。
あまりの悲惨さに幾度か天界、魔界、そして精霊界側から説明がなされたことはある。
あるがその説明をうけいれないのもまた地上界に住まう存在達。
もっとも、その真実の受け入れをしないのは他界のものにも多々とみうけられている。
つまり、自分達は悪くない、悪いのは相手、という認識が根強く、
他者を思いやる心、
というのがどこか欠如しているように思えなくもない。
実際、欠如している輩がそのような行動に陥るのだが。
あまりに自己中心的な考えの持ち主はやがて幾度も生みだした自らの【ゾルディ】の意思に呑みこまれ、
やがて堕ちた存在、として魂ごと呑みこまれてしまう。
真実から目をそむけているがゆえの定説。

…それこそが、まさに【ゾルディ】と【ロア】という呼び分けに現れている、といえよう。
そもそも、別の呼び名をしているが基本、それぞれの存在は同じような形で生み出される。
その生み出される感情の元、が異なる、ただそれだけの理由なのだから。

「まあ、私のほうに命じられた意味はわかりますけどね。
そもそも、今の状態では互いに疑心暗鬼が募っていますでしょうし。
それらの感情の乱れも我々にとっては好ましいですが。
ともあれ、そんな中で誰もが異形の存在を生み出した…となれば、自然と暴動になりかねません。
実際、すでにいくつかの村などでそのようなことが起こっている、と報告はありますしね」

魔界側においてはそのようなものが生み出される場合…すくなくとも、
真っ先に攻撃をうけた相手が周囲からあまりよく思われていない存在、ということが圧倒的に多い。
ゆえに逆に、裁きが下った、といって達観しているものもすくなくない。
天界においても然り。
しかし様々な種族が乱れて生活しているこの地上界においては話しが別。
いきなり理不尽なことが起これば誰かに罪を着せて心の安定を計ろうとする愚か者はどこにでもいる。
そして…それは混乱のきっかけともなりえる。

「反旗組織メンバーもおそらくそれらを狙っての行動をしてくるで

しょう」

周囲から埋めてゆく。
その混乱の隙に乗じて事を達成する。
それはいつの時代においても誰もが考える全うな戦術の一つ。

「しかし、いきなり真実を伝えても、人々が納得してくれるでしょうか？」

今の今まで納得してくれず、その意味を解釈することなくここに至っている。
しかし、今の現状でそれらをきちんと正確に伝えなければ、まちがいなく地上界は大混乱に陥るであろうことは用意に予測がつく。

「では、こうしませんか？私とあなたが【影】をいくつも作りだし、主要な村や町などに語りかけてゆく、というのは。
当然、本来、地上界の存在達が認識している姿で、になりますが」

魔界の大侯爵と天界の女神。
その両人がそろって伝えていけば嫌でも一時だけでも信じる気にはなるであろう。
まあ彼らの気に充てられて気が狂う存在がでてくるかもしれないが、それはまあそのときのこと。
そのときになって対処してゆけばよい。

「あ、それはいいかもしれませんね。神気と魔力に充てられて相手も表にでてくるかもしれませんし」

今だに【種】をばらまいている存在の特定はできない。
しかし表だって行動していればおのずと相手側から接触なり、隠れるなりしてくるはず。
彼らにとって自らの【影】をいくつも作りだすことはたやすいこと。
様々な場所に知識を伝えてゆくだけならば簡単な【影】で事足りる。

いまだに頭に靄がかかったかのような錯覚には陥ってはいるが、
今すべき優先事項は、ゾルディの真意の伝承。
なぜかそう確信しているがゆえに、
しばしアテナとアスタロトはその場を後にしつつ話しを敷き詰めてゆく……

「ねえねえ！すごかったわね！というか、戦女神さまっ！？すごすぎるっ！」

きゃいきゃい。
すでにもう話題は今朝の集会のことで持ちきり。
天界からおそらく誰か使者として地上界につかわされ、ここギルド協会学校の教師になるのでは？
という噂は数日前からまことしやかにささやかれていた。
そこに今朝の朝礼という名の集会である。
生徒達の好奇心と噂話しに火を付けたも同然。
お伽噺でしか知りえない、雲の上の存在ともいえる愛の女神であり戦女神アテナ。
まさか生きているうちにその姿を目にすることができるとは。
しかも、しかもである。
その女神に直々に教えを乞えるのである。
これで興奮しないほうがどうかしている。
そう、普通なら。

「？ディア？ディアは興奮しないの？」

ただ一人、教室の中で静かに窓際の席に座り、のんびりと外を眺めているディアの姿をみとめ、
ふと不思議におもいつつも話しかけてくるクラスメートの一人。

「シェン達は肝心なこと忘れてない？今現在、外でおこっている事情。
　ここに力あるものが集えば、確実にここも襲撃対象にされるわよ？きっと？」

ディアの言い分は至極もっとも。
すでに様々な主要都市などが襲われかけた、という報告はここ、ギルド協会にも伝わってきている。
協会が運営している学校にも当然その事実は伝わっている。
どうもこの王都は実力もある守護精霊ティミに守られている、という安心感からか、
どうもそのあたりの危機感が薄いように感じられるのはおそらくディアの気のせいではないであろう。

「え？」

まったくその可能性には考えていなかったのか、
その両脇についている茶色い耳がおもわずしゅん、と下にと下がる。
シェン、と呼ばれた彼は犬狼族（けんろう）、といわれている種族の一員。
この学校には様々な種族のものが共同で学んでいる。
当然、ディアのいるクラスにも様々な種族のものが共学している。
シェンの容姿はふわふわの茶色い毛並みをもったピン、と伸びた左右の耳に、

その手にはぷにぷにのニクキュウと四本の指。
狼を先祖にもつ彼らは独自に進化し、その容姿は人のそれと変わりがない。
お尻についたふさふさのシッポと耳とニクキュウ。
体全身が柔らかな毛で覆われている。
かの一族は仲間意識が強く、また機敏性も高い。
大概は一族の特性を生かした職につく存在が大半ではあるが、
職につくためにはギルド協会発行の資格を取らなくてはならない。
ゆえに手っ取り早くこのギルド協会学校にかよってくる存在は多々といる。
彼もまたそんな一人。
元来が人懐っこい性格のシェンであるがゆえ、耳をしゅん、とさせた様は、
どこかの子犬がうなだれたような雰囲気でもあり、
逆にこちら側が悪いことをしたような気持ちになってしまう。
…もっとも、そんな感覚に陥るのは普通の存在達限定、だが。

「…そういえば、叔父様から連絡があったわ。
　何でも今回の戦闘部門予選参加していた知り合いが、いきなりゾルディ複数に襲われたって……」

ふとディアとシェンの会話を小耳にはさみ、先日、手紙で注意を促されたことを思い出し、
顔色もわるくつぶやいている別のクラスメート。
ここ最近、今まであまり群れをなして誰かを襲うようなことはしなかったはずのゾルディ達が、
まるで何かの意思に操られているかのように特定の村や人物を襲う現象が多発している。
しかもそれがほとんどにおいて、
今年の大会、もしくはこれまでの大会ですなくかなずとも功績をあ

げた存在ばかりが襲われている。
彼女の叔父もまた、学生である姪が大会に参加していたのをしっているがゆえに、
心配して忠告をかねて手紙をよこしてきたのだが。

「魔界の使者に天界の使者、ついでに竜族のヴリちゃんもいるし。
ちなみにここの守護精霊の力ではある程度の実力ある輩がきたら防ぎきれないわよ？」

事実、ディアのいうとおり、
いくら実力があるといわれている守護精霊ティミとて、反旗組織の上層部の存在達の力にはかなわない。
もっとも、この場にディアがいる以上、滅多なことにはならない、とわかってはいるが。
しかし役目は役目。
彼女は彼女なりにこの地を守る必要性がある。
強いていうならば、ヴリトラ達が起こすであろう被害を最小限にどうにか食い止める。
それに尽力をつくすことぐらいしかできないであろうが。

「で…でも、ほら。戦女神さまもこられたし。いくら襲撃があっても、ね？」

お伽噺や物語で語られる戦女神はとても強く、それでいて慈悲深い存在。
もっともそれはかなり誇張されて伝わっている物語、といっても過言でないが。

「そりゃ、確実に勝てるでしょうけど。周囲における被害も洒落にならないとおもうわよ？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

たしかにディアの言い分は至極もっとも。
戦女神がやってきた、というのがあり、
かなり浮かれていた生徒達はその意見をきき、その場にて一瞬静まり返る。
力のある存在がいることにより、襲われる可能性。
それをまったくもって認識していなかったクラスメート達。
しかし、それは認識しなければならないこと。
世の中に出ても、どうしても実力あるものはその能力や力を妬まれ疎まれることがある。
それらとうまく付き合い、さらにはそれを払拭するのも生きてゆく上でのあるいみ修業といえるであろう。

「まあ、まずは、自分の身は自分で守る。これは一番大事だろうけど。
あとは個々との連携、かしらね？
おそらく他人の不安要素に付け込んでくるような襲撃者達なんでしょうし」

今、協会側に伝えられている内容からしてみればそのように襲撃者の概要が捉えられなくもない。
ゆえに、無難な言い方でクラスの皆に語りかけているディア。
疑心暗鬼になることは、相手に付け入る隙をおもいっきりあたえる口実になる。

「う…。そういうディアは…って、ディアにきくのは無駄かぁ。
そういえば、言霊使いって襲撃とかも無効化できるの？」

たしか大会の最中、相手の攻撃を無効化していたような気もしなく

もない。
よく見えなかったがおそらくそうなのだとおもう。
すでにディアが言霊使い、というのは暗黙の了解となっており、
勘違いしている、とわかっているディアもわざわざ訂正する必要性も感じないのでそのままにしている。
結果として、ディアは言霊使いである、と教師達にすら認識されているこの実情。
もっとも別に勘違いされていようがディアにとってはどうでもいいこと。
そもそも、言霊使い、と勘違いしその能力が持ちえる可能性がまだ確実にあかされていない以上、
様々な事をおこなっても、そのひとことでごまかしがきく。

「一応、ね。まあ、時と場合によるかも、だけど」

実際はどんな攻撃も瞬く間に無効化できる、それはディアが【意思】なればこそ。
しかしこの場にいるクラスメートは当然そんなことを知るよしもない。

「まずは、とりあえず。アテナちゃんがどんな授業をしてくれるのか、楽しみよね。ふふ」
「……女神様をちゃんづけするのってたぶん、ディアくらいじゃないの？」

しかも相手は戦女神という役職についている上位神である。
その女神をいくら何でも『ちゃん』づけはないように思う。

「あ～。彼女とは昔ちょっとした縁で知り合ってるから」

縁、というよりはそもそも彼女、もとい補佐官の親衛隊にこっそりと入隊しているアテナである。

さらにいえば、天界の神々は全て補佐官ティアマトの配下、といっても過言でない。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ええええええええええええええええええええええええええええええええ！？』

さらり、と何やら爆弾発言したディアの言葉に一瞬、教室全体が静まり返り、

次の瞬間、鼓膜を突き破らんばかりの生徒達の叫び声が響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～恐怖の発生源と原因と～（後書き）

アテナの暴走、いれようかどうしようか迷ったけど、とりあえずさくっとカット。

どちらにしても後半に出てくるし、ここでだす必要性はあまり感じなかったので。

自ら（ディア）の正体暴露した話しの内容は、

アスタロトとアテナ、二人とも完全に記憶の奥底に封じられてます。

それでも奥底に記憶があるのは事実なわけで、

そのことが今後結構便利？になってくるのはお約束

光と闇の楔　～女神と大侯爵と生徒達～（前書き）

・・・・・・・・・・なんか今日は異様に眠いです・・・・
なのでちと短め・・・話がまたすすんでない自覚あり・・です・・・
眠いのでちょっと早めの更新です・・・

じわじわとお気に入りと評価ポイントが減ってます・・・
展開がとろいし、文章力が支離滅裂だからだろうな・・・という自覚はあり（汗

布石は全てに撒き終えた。
あとは、ただ、号令をだすのみ。

「妖精界のほうはどうなった？」
「あちらは、妖精王とその女王がその身をもって結界を張りました。
しかし、そのことで妖精達の力は急激に落ちてゆくことでしょう」

事実、妖精達は王と女王の力をもってして存在していたといっても過言でない。
妖精達の力の活力でもある精気は王達の手により他の妖精達にと循環されていた。
その妖精王達がその身をもって結界をはった、ということは、
彼らはその身を封じておそらく結界を施したのであろう。
これ以上、妖精達が堕ちた存在にならないように。
精霊と異なり、妖精達は好奇心旺盛。
ゆえにこそ、力に呑みこまれる率もかなり高い。

「さて…それでは、宴の開始、といくか。あちらにもその旨を伝えるように」
「はっ！」

さて。
世界の変革の始まりの宴を始めるとしよう。

自分達の勝利を確信し、ひそかにほくそ笑むとある姿がしばし見受

けられてゆく――

「…それでは、私は精神と心を強くするとしますか」

そのほうが自分にかなりあっている。
そもそも、体力をつけさせるのは自分の得意とする分野ではない。
どちらかといえば彼自身は頭を使って行動するほうが得意中の得意。

「では、私のほうが体力づくり、ということで。
　確実にここを彼らは狙ってくるでしょうから。生徒達にもそれなりの力をつけてもらいませんと」

とにもかくにも、多少何か忘れているような気もしなくもないが、
というか確実に忘れている。
しかし、今何よりも優先すべきことは、今後の対応。
やるべきことは決まっている。
心身ともに強くならなければこれからの襲撃に彼らが足で纏いになり、
さらには敵として操られてしまう可能性はかなり高い。
いつ彼らが襲撃してくるかわからない以上、すくなくとも早めに行動を起こしておいたほうがよい。

「まあ、学校長と理事長からも好きにしていい、といわれましたし」

「…くれぐれも生徒を殺さないように、もしくは糧にしないように、とはいわれましたけどね」

悪魔の中には魂を喰らうものもいる。
実質、アスタロトとて喰らわない、というわけではない。
しかし預かっている生徒達に何かがあればそれはギルド協会側の責任となる。
いくら実力ある女神と大侯爵とはいえ協会側とてそれだけは譲れない。

「それでは、アスタロト様が内側の強化を。私が表のほうを担当いたします。
　ふふふ。腕がなりますわ。さいきん新人教育に携わることがありませんでしたし……」
「あ～…」

彼女の新人教育の様子はリュカ、そして彼女の父であるゼウスからよく聞かされている。
ゆえに彼女が担当する生徒達に対し一瞬同情をむけるアスタロト。
彼女はやるからには容赦がない。
手加減、というもを一切加えない。
そのあたりは、母であるヘラの性格を譲り受けている、といえるであろう。
校長室から職員室までに続く廊下の一角において、
【大侯爵アスタロト】と【戦女神アテナ】による今後の対策が話し合われてゆく……

「…あ、あの？これは一体？」

楽しみにしていた魔界からの臨時教師、アシュタロスの授業。
普通の教室での授業ではなく実戦的な授業を行う、ということで、
今現在、四クラスがこの場にそろっている。
何でも合同授業となるらしい。
総合科クラス合同授業。

ちなみに、ＡクラスからＤクラスまでの生徒がこの場に滞在している。
全てのクラスの組数はＡ。
つまり、ＡクラスＡからＤクラスＡまでの生徒がこの場に滞在しているこの現状。
生徒全員にグループに別れるように、と指示があり、それぞれが数名づつのグループにとわかれ、
そして全員がグループを作り終えた。
その後、なぜか彼ら生徒の目の前にひらひらと飛んできたのは一枚の紙。
何かがそこに書かれてはいるが、それが何かはわからない。
しかし何か重要なことが書かれている、というのは何となくだがわかる。
それは勘。

「…って、先生!?これってまさか契約書じゃないんですか!?」

一人の生徒がそれの意図に気づいて思わず叫び声をあげる。
ざわっ。
契約書。
それが意図する意味は伊達に学校に通っているわけではない。
誰しも悪魔学で簡単なことは学んでいる。
悪魔が行使する契約書には必ず何かの理由がある。

そしてそれに伴う代償も。
その場にいる生徒達がその声をかわきりに思わずざわめくものの、

「これから行う授業に関する契約書だ。
まあ、本当に死にたい、とおもうものは別に署名しなくてもいいが。
これから私が行う授業はそれぞれの精神と心を強くする授業。
人は軟弱な心では可能性として発狂死してしまう可能性を考慮してのものだからな」

さらっと何でもないように言い放つアスタロト。

「『授業中におけるその魂の安定の保護をうけることをここに承認せし。』
…というか、ロトちゃん、あなた、何するつもり？」

ざわめく生徒達とは対照的にいつのまにか横に移動していたのか、ディアがそんなアスタロトにと問いかける。

「…毎回思うのですけど、
いきなり真横とかに気配を消して、というか、周囲に同化してこられるのはどうかと……
と、ともかく。これから私があなた方におこなうのは、精神を鍛える授業です。
何ごとも心が弱ければどうにもなりません。心がつよくあってこそ何ごとにも立ち向かえる力となります」

ディアに対するアスタロトことアシュタロスのあまりにも特別扱いしている態度はすでにもはや有名中の有名。
ゆえにそんな二人の態度に突っ込む生徒はこの場にはいない。
そもそも噂が一人歩きしている今現在、違う意味で黄色い声をあげ

ている生徒はいるにはいるが。
確かに、言いたいことはわかる。
わかるが、だがしかし、どうしてそこに契約書などというものがでなければならないのか。

「これをみるかぎり、授業中のみ、個々の魂を保護するという制約の契約書、みたいだけど。
　まあ、別段これに承諾せずともどうせ授業は行うんでしょう？」

何となく彼がやろうとしていることはすぐさまに理解する。
そして彼の性格上、あくまでも保険、としてこの契約書を配っただけだ、ということも。
しかしここにいるのは自分だけではない。
ゆえに他の生徒のことを考えあえてといかけているディア。

「当然です」

きっぱりはっきりいいきる彼の表情はいっそのすがすがしい。
まあ別に止める必要もなければ、事実、授業の一環としてこのやり方は間違ってはいない。

「まあ、ロトちゃんにきちんと皆にわかるように説明しろっていうのが無理でしょうし。
　とりあえず、生徒のみなさん、この契約書はこれから始まる授業のいわば保険のようなものです。
　こうみえても彼、一応悪魔ですから、人が耐えられない授業になるかもしれません。
　それを考慮しての配慮みたいです。まあそれがわかってても悪魔の授業を素で受けてみたい。
　という人は同意しなくてもいいでしょうけど。この契約の効果

はあくまでもこのたびの授業中のみ、
　なので普通の生活には何ら問題はありませんよ？」

いまだにざわめく生徒達にむかってかるく説明しているディア。
静かにいっているだけなのにその声は全員の耳にととどきゆく。
何のことはない。
この場にいる全てのものに聞こえるようにと意識して紡いだ言葉であるがゆえに全員が理解しているにすぎない。

「…一応って……ひどくありません？」
まがりなりにも、第一級悪魔であり、さらには審問王の役目をもつアスタロト。
「だって、まだまだでしょ？あなたたち？」
「…うっ…」

そういわれれば言い返せない。
実際、いつになったら自分…つまり、補佐官の手を煩わすことがなく執務をこなせるのか。
と今まで散々いわれているのである。
アスタロトとディアの関係をしっていればこの光景も当たり前にうつるのだが、
傍からみれば生徒が教師を言い負かしているようにしか見受けられない。
しかもどうみても生徒のほうが優位。

「さて、みなさんはどう判断しますか？
　あ、ちなみにどうやらサインしなくても授業を中止するつもりはさらさらないみたいですよ？」

いまだに戸惑う生徒達にむかい、多少うなだれているアスタロトを

完全に無視し、
にっこりとほほ笑みつつもといかけるディアの姿がその場において見受けられてゆく。

「そこ！踏みこみがあさいっ！」
「は…はいいっ！」

希望者のみを集った特殊授業。
我先にと戦女神の行う授業をうけてみたい、という生徒達がこぞって参加した。
その圧倒的な美貌に引かれて多少浮か気分で参加した生徒達は、そんな甘ったれた考えを根柢から覆すこととなっている今現在。

「まず何ごとにも体力がなければ話しにならんっ！
全員、腕立て伏せ、百回！そこ！さぼるなっ！」
『は…ひゃぃいっ！』

見た目は温和なしかも麗しき乙女。
だというのにこの変貌ぶりは何なのだろう。
相手から発せられる【気】により逆らえる雰囲気ではない。
ぴりぴりと肌を裂くような鋭い痛みと息苦しさすら感じるのはおそらく気のせいではないであろう。
伊達に戦女神、と呼び称されているわけではない。
彼女が生徒達に教えるのは、戦術と防衛術。
しかしそれにあたり、どうしても必要不可欠となってくるのは基礎体力。

「こらそこ！ぐすぐずしているとおいつかれるぞ！」
「…って、こんなの詐欺だぁぁっ！」

何やら生徒の大多数からそんな声もあがっていたりするが。
見た目が美人な女神の授業がうけられる。
見た目どおりに優しく、手とり足とり、丁寧に教えてもらえるのだ、とおもって授業参加を希望した。
が、しかし。
ふたをあけてみれば、どこぞの国の軍隊でもやらないような徹底した基礎体力作り。
それが終われば次は戦いの基本となるべく基礎を叩き込む、とのこと。
しかも、常に息を切らさずに早く走ることをも要求され、
走りに自身があります！と教師…アテナの性格を完全に勘違いし、
いいところを見せようとした生徒達はといえば、今現在。
どうみても雷でできた狼のような生物に追いかけられていたりする。
アテナの父であるゼウスが得意とする力は雷。
その娘であるアテナもその性質を受け継いでいる。
「こらそこ！泣きごとをいっている暇があったら体をうごかせ！！」
・・・・・戦女神、アテナ。
彼女は普段はのほほんとしているようにも見えるが、その実体はといえばかなりひと癖もふた癖もある。
さらにいえば、こういった体力づくりや戦術に関して、彼女は絶対に妥協しない。
たとえそれが相手が誰であろうとも。
女神とお近づきになれるかも、という甘い考えで授業に参加した生徒達は、
しばしの間、アテナの死にたくなるほどの授業に翻弄されてゆくこととなる……

「ふむ。まあ幾人かは署名しなかった存在もいるようだが。まあいい。
それでは、授業を開始する。まあこの授業は至って単純明快。
ただ、自らの弱点を克服すべく、自らの心に立ち向かう、ただそれだけだ。それでは」

全員が全員、先ほど配った契約書に署名したわけではない。
しかしそれは自己責任。
やはり悪魔との契約、というので躊躇した生徒もいた、というだけのこと。
異種間の偏見などはそう簡単には払拭できるものではない。
ましてや悪魔の契約などといった代物はどちらといえば今までよくないイメージばかりが強調されている。
このたびの契約は契約、といっても本当の契約というわけでなく、いわば授業をうける側の命を一時的にアスタロトが預かる、という趣旨のもの。
一時的にその魂の所有者がアスタロトになることにより、
この授業中、どのようなことがおこっても署名した生徒はとりあえず死ぬことは許されない。
というか死ぬ目にあっても体があるいみ不死となっているので死ぬことはない。
そういうアスタロトの周囲にはくるくると周囲を舞っている先ほど生徒達に配った契約書の束。
その束はアスタロトの体の周囲を風もないのにくるくるとめぐっている。
「では、始めるとしよう」
いってすっと目を閉じ、手を横に突き出すアスタロト。

刹那。
周囲の雰囲気が一変し、瞬く間に周囲が灰色の空間にと呑みこまれる。

「Ｊｅ　ｌｕｉ　ｄｏｎｎｅ　ｕｎ　ｏｒｄｒｅ」
――我は命ず

「Ｃａｃｈｅｚ　ｄｅｒｒｉ?ｒｅ　ｄａｎｓ　ｌａ　ｐｒｏｆｏｎｄｅｕｒ　ｄｕ　ｃｏｅｕｒ　ｄｅ　ｔｏｉ　ｅｔ　ｆａｉｔｅｓ－ｌｅ;　ｕｎ　ｃｏｅｕｒ　ｃｏｍｍｅ　ｌａ　ｃｒａｉｎｔｅ」
――汝らの心の奥底に潜みし畏怖たる心

「Ｊｅ　ｓｕｉｓ　ｔｅｍｐｏｒａｉｒｅ　ｅｔ　ｒｅ?ｏｉｓ　ｕｎ　ｃａｌｉｂｒｅ　ｐｏｕｒ　ｍｏｎ　ｐｏｕｖｏｉｒ　ｅｔ　ｌ'ｉｎｃａｒｎｅ」
――我が力をもってかりそめに器を得て具現せよ

灰色の空間にアスタロトの声が響き渡る。
刹那、ぽっ、とアスタロトの周囲を舞っていた契約書の束が瞬く間に青白い炎に包まれる。
それと同時。

ゆらっ。

生徒達の周囲の空間が一瞬揺らぐ。
次の瞬間。

『う…うわぁぁっっっっっっっ!?』

周囲から間違えようのない生徒達の悲鳴が響き渡る。
「あらら。みなさん、それ、みなさんの心が生み出した悪夢、ですから。
それに呑みこまれないように心を強くもってくださいね～？」

生徒達が見ている光景。
それは各自が心の奥底で恐怖や畏怖を感じている事柄。
それらが自分に襲いかかる幻術のようなもの。
しかし幻術、といえど魔界の大侯爵ともいわれているアスタロトの術。
そのあたりはぬかりはない。
当然、痛みもあれば感覚もある。
幻影、といえども当人からしてみれば相手はきちんと形を持っている。
すなわち、それぞれにとっておそろしい『何か』が自分に対し攻撃をしかけてきている。
それが彼ら…生徒達にとっての真実。
一人、そんな幻術にまったくひっかかる様子もなく、のんびりと何もない空間でわめき暴れている生徒達を眺めつつもいっているディア。

傍から見れば生徒達は何もない空間でそれぞれが暴れているようにもみえなくもない。
しかし実際はそれぞれが生み出したそれぞれにとっての恐怖の対象と戦っているに過ぎない。
いきなり出現した恐怖の対象。
その対象と対峙している最中、彼らの耳にやはり先ほどと同じようにディアの言葉がすとん、と耳にはいってくる。
目の前のこれが、自分が生み出した悪夢？
この悪夢に打ち勝つのが授業の目的？

こんな授業を行い、何のメリットがあるのか生徒達にはわからない。
それぞれが今まで心の奥底で目をそむけていた出来事が悪夢、としてその場に再現されているものもいる。
「さすがに始めは個人個人にしたのね～。ロトちゃん」
それぞれの反応をみていてとてもほほえましい。
中には必死で逃げ回っている生徒の姿もみてとれる。
はたからみれば何もない空間から必死で逃げ回っているようにしかみえないのだが……

「…私たちのときには、
　それぞれがそれぞれ視えるようにされて試練をだしてこられましたからね…王は……」

幼き日。
特訓と称していきなり【王】から自分達が一番心の奥底で恐怖しているモノが実体化された。
しかもご丁寧に自分達の魂の一部をそれらにもたせて。
つまるところ、自分でその恐怖の対象者を攻撃しなければ、他の存在が攻撃すれば、
自分もまた傷つくこととなってしまう。
つまり自分の魂を自分で傷つけ自らの中に再び戻すのは問題ないが、第三者が傷つけたりすれば知らないまでも自分の力が削がれることとなる。
その恐怖に打ちかつ方法。
それは全てを克服し自分の力、として認識してしまい自らのものとすること。
そうすることにより相手の力をそげ、逆にそれを糧とすることにより自身の力を向上させることができる。

「問題は、普通の生命体にその方法が通用するか、だけどね」

放っておけば発狂する生徒も多々とでるであろう。
そのために先ほど、仮初めに契約をほどこしたアスタロト。
まあ契約をしなかった生徒はそれは自己責任。
危険性を先に説明したのに署名をしなかったのは各自の自由。
幾度殺されて心が死んでしまおうがそれは自分が選んだ結果にすぎない。
人は究極の状態にまで追い詰められれば、その本性を発揮する。
心の奥底に常日頃は秘めていた思いなどもおのずと表にでてくるというもの。
しばし、何やらのんびりと会話をかわしているディアとアスタロトとは対象的に、
生徒全員による悲鳴と叫びが周囲にと響き渡ってゆくのであった……

くたっ……

死屍累々、とはまさにこういうのをいうのかもしれない。
おもわずそんなことをおもってしまう。
恐怖の克服。
自分は母の特訓でそのあたりのことは多少免疫ができていたらしい。
心の奥底で恐怖している輩だ、といわれてもすぐさまに納得できた。
逃げ回っていてもどうにもならない、というのはディアとの付き合いの上で理解している。
よく精神を落ちつけて解決方法を探ってみれば、答えは自分の心の中にとあった。
恐怖を自ら認め、そしてそれを自分のものとする。
そんな簡単なことがなかなか出来ないゆえに破滅に向かうものも多

々といる。
怖いものは怖い、それでも立ち向かってゆく勇気。
その強い心が何ものにも勝る力となる。

「…さすが悪魔といえるのかしら？これって……」

授業中にその恐怖を克服できなかったものは、いまだにその恐怖の残像から逃れられずにいる。
次回の授業まで克服する方法を見つけ出さねば、今後ずっと夢の中で同じようなことが繰り返されるらしい。
先刻の授業時間がおわり、それぞれの生徒がどうやって教室にもどったのかよく理解すらしていない。
あまりにほとんどのものが茫然自失となっているので仕方なく、アスタロトが傀儡の術をかけ、
それぞれの生徒を教室に戻したのだが。
総合科Ａ組Ａの中で正気を保っているのはほんのわずか一握りほどの人数。

「しかし、いきなりハードな授業だったな。
　しかしあの特訓具合は父上達からよくうけている訓練とほぼ同じ、だな」

伊達に同じような特訓を毎日のように幼き日からうけていたわけではない。
一人の青年がしみじみとそんなことをいいつつ、クラス中をみわたしそんなことをいってくる。

「ウラン。それより、これで次の授業…大丈夫なのかしら？」
「いや、無理じゃないか？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

教室に全員生徒達がもどってきているものの、おそらく全ての総合科の特組は同じような状況だろう。
ゆえに思わずその場にて無言になるケレス達。
ケレス達の思った通り、ケレス達のクラス、総合科Ａ組Ａとその他のＡクラスもまた
同じような光景が見受けられていたりするのだが。
しかし、いまだに意識がきちんと戻っていない生徒達にそんなことを思う余裕は…ない……

「なぜ…なぜだ!?なぜっ!!」

なぜ、としかいえない。
倒した。
そう、たしかに倒したのだ。
なのに、なのにどうして。
いきなり現れた異形のもの。
それは自分達に攻撃をしかけてきそうになった。
ゆえにこちらとしても攻撃し、そしてどうにか撃退、結果として倒せた。
だというのにどうして。
いきなり守りたかったはずの彼女が胸を抑えてその場にうずくまらなければならないのか。
自分を抱きかかえ、叫んでいる恋人の姿はもはやかすんで見える。
あの異形のものが現れたとき、わかった。
否、判ってしまった。
あれは自分の心が実体化したものに近しい、と。

ずっと負い目を感じていた。
彼に対し。
そして自分がいなくなってしまえば彼が幸せである、とずっとおもっていた。
なのに別れられなかったのは自分の弱さ。
そんな自分は消えてしまえばいいのに、と常々おもっていた。
今日、結婚の申し込みをされてその思いが一気に膨らんだ。
その直後に現れた…真っ黒い、大きな獣。
夢の中で幾度も現れては自分を喰らい、そして守ろうとしていたまっくろい獣。
夢の中でしかでてこなかったその獣がどうして現実に現れたのか、などと彼女に知るよしはない。
わかるはずもない。
彼女が手にしているお守り袋の中にはいっている小さな石がそのきっかけになっている、などと。
その【石】こそが今現在、世界中で回収されている【種】と呼ばれている品であるなどとは。
ばらまかれた種にはもう一つの特徴がある。
すなわち。
種を介して生みだされた【ゾルディ】。
それは産み手の魂の一部を有し形を得る、というもの。
つまりは…第三者が【ゾルディ】を攻撃し倒したとすれば、それを生み出した【核】ともいえる存在もまた傷つき、
そして…魂を傷つけられた存在達はその生命活動を維持できずに…命を落としてしまう。
よもや誰が想像できるであろう。
異形の存在と愛する存在の魂が同一であり、相手を倒せば愛する者もまた死んでしまう、などと。
これこそが、【組織】が世界に放ったもう一つの混乱。
自分達が他者を死に至らしめたと知った時…もろくも心は崩れ壊れ

る。
それを狙っての行動。
それを狙っての行動。

悲劇はゆっくりと、しかし確実に世界を侵食しはじめてゆく……

「……魂の欠片に付属能力として持ち主の魂の割符…どこまでこちらを翻弄すれば……」

どうにかこうにか収集した【魂の欠片】達。
詳しく解析してみたところ、それらを手にしてい存在の思いを核とし、
さらに実体化するにあたり、持ち主の魂の四分の一を奪って器を成しているらしい。
そのことが検査報告として告げられ、再び頭をかかえてしまう。
その事実が暗に示していること。
すなわち、それは生み出した核となるべきものがそれを倒さずに他者が倒した場合、
核となった存在はどこかで確実に命を落とす。
たとえ命が助かったとしても魂の大半を失った以上、普通に生活ではきしない。
むしろその虚ろに逆にゾルディが入り込み、喰らい尽くす結果ともなりかねない。
それをいち早く見抜いた妖精王達は自らの体を結界の核として起動させることにより、
全ての界から一時期遮断し自分達の眷属を守ることとした。
王が結界の核として身動きとれない以上、妖精達は実体化することもままならない。

それぞれが本体である植物や他の存在として過ごすしか方法はない。

「…この事実を機動部隊に知らせるべきか、知らさないでおくべきか……」

知らせばおそらく、人々を守るために力をふるっていた彼らは絶対に指揮がおちる。

逆に知らさなければ知らず知らずのうちに誰かを殺していたことを知らないままになる。

後者の場合はいずれは後に知ってしまうであろう事実。

しかしどちらがいい、とは一概には絶対にいえない。

だからこそ悩む。

「…は～。魔界側のほうは？」

「精霊界側は自業自得、というので割り切るそうです。魔界側もしかり」

つまり、優柔不断はここ、天界側だけ、ということか。

そう確信し、幾度となく吐きだしたため息を大きく吐き出し、

「…魂の割符の可能性を全ての場所に通知するように…」

『はっ！』

どの界も自己責任、という言葉のもとに行動するのならば天界側もそれに従うまで。

ゼウスの言葉をうけ、報告をもってきていた兵士の一人があわてて部屋をあとにしてゆく。

「…さて、ヤツラはいったい、何をおこそうとしているのだ？」

そんなゼウスの問いかけに答えてくれるものは…この場には…いない……

光と闇の楔　～女神と大侯爵と生徒達～（後書き）

生徒達がうけている精神攻撃?それらの光景は各自のご想像に任せます。

あの表現きちんといれたら、残虐描写あり、にしないといけませんので（自覚あり

というわけでかなりオブラートに外からの視点でかいております。

・・・今日はなんかねむいのでまだ早いけどひとまずアップしてからも、ねます…

まだ全部打ち込み住んでいないのに、なろうさんにＷＧの前半部分を投稿してます。

もっとも、まだイベント?を打ち込みしていないので次回はだいぶ先になる予定。

イベントを二つくらい済ませてからまた2話くらいにして投稿しようとおもってます。

かわったところで区切っている理由は至って単純。

その後でさらり、と精霊王達や主人公の正体が第三者に深く考えればわかるようになってるからです

光と闇の楔　～神々の黄昏の威力～（前書き）

最近、うちこみしてるのに、うちの猫がキーボードと体の間にはさまって、素直に打たせてくれません（汗
かまって、かまって、というのはいいんですけど…キーボードの前でねないでほしい・・・
今もまた、キーの前でねてるのでどけてもすぐにもどってくるという状況。
見難いなりにどうにかこうにか打ち込みしている今現在……
最近、異様にべったりになってきているうちの猫達…なんだかなぁ～……

光と闇の楔　～神々の黄昏の威力～

「…今度は何をつくったんだ？」

彼の作りだす様々な道具の便利性はわかっている。
いるがときおり、かなり困った作品を作りだすのがたまにきず。
天界、魔界における合同会議。
光と闇のバランスが保たれているのか、それぞれの状況を説明するための定期会議。
そんな中でにこやかにある品物を新たにつくった、と報告している一人の天界神。
その笑みからして嫌な予感がするのはその場にいる彼らの気のせいか。
「今回は力作だよ？何と、その名も『神々の黄昏（ラグナログ）』。
能力的には、神や魔王といった魂を分断、もしくは複製することができて、
さらに元となった存在にはまったく無害。意図的にそれらに属性をつけることも、
制約をつけることも可能。これさえ使えば面倒…いや、自らの力をわざわざ裂いて、
それぞれ影や分身を作りだす必要性がなくなるってことで」
いって、にこり、と手にしているなぜか杖のような代物を手にし、そして。
「ちなみに、作りたい相手にこの先端をむければ誰でも使用可能にしてみたよ♪」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

目の前のこの美青年は何をいっているのだろう。
というか思わずその場にいる全員が頭を抱えてしまう。

「…というか、それっておもいっきり使いようによっては危険だろうがっ！！」
思わず誰ともなく叫んでしまうのは仕方がない。
絶対に。
つまりはそれを手にしていれば誰の分身をも作りだすことが可能、というわけで……
「昔、この地上にあった、という立体的コピーを参考にしただけだよ？
　ただ能力複製とかもそのまんまつけてるだけだし」
「十分だろうがっ！というかそんな危険なものつくりだすなっ！」
「まあまあ、ゼウス殿。…で、ロキ殿？…その、作りだしたそれらに意識とかはあるのか？」
ただの抜け殻なのか、それとも当人の意識を反映することができるのか。
「ああ、それも杖をむけたときにつける制約によって、いろいろできるよ？
　たとえば意識をもたないただの人形にすることもできるし。
　個々に別の人格をもたせて戦わせ…もとい、いろいろと競わすこともできるし」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って、まていっ！！』
何やらさらり、と重要なことをいわなかったであろうか。
この目の前の神は。
「実験で補佐官様につかってみたけどさすがにできなかったよ～。
　あ、だけど、ゼウスやサタンにこっそり使用してみたらきちんと発動したよ？」
邪気のない笑みではあるが、その笑みに屈託のない悪戯心が見え隠

れしている。
「…って、まて」
「…いやちょっとまて。ロキ殿。その我らのその複製はいったい……」
そんな存在がほいほいと歩いていたら絶対に騒ぎになる。
というか、ものすごく嫌な予感がするのは気のせいか。
ゆえに声をかすれつつもその予感が外れてほしい、と願いつつも問いかける。
「能力と力の一部のみを複製するように作ってみたけど、魂はそのあたりにただよってた子供の魂いれてみた。んで、地上にとりあえずほうりだしといたよ？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『ちょっとまていいいっっっっっっっっっ！！』

ものすごく重要なことをさらり、といわれ、その場に集まっていた神々、そして魔王達の絶叫がしばしその場にて響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～神々の黄昏の威力～

「ここまで威力があるとは……さすがに発明神ロキともいわれていることはある」
しかも、絶対神が封印していた、という代物。
始めは眉唾の話し、とおもっていたがその威力は絶対的なもの。
今まで自分達が努力していてできなかったことが、
たったひとつの杖もどきで何でもできるようになっている。
魂の欠片の周囲を覆う殻の状態にして自分達の思念をも複製しておいた。
発動時に思念にふさわしき器に乗り移れるようにして。
しかし、ここまでうまくことが進むとはおもわなかった。
王国の主要の地位についているであろう、もしくはそれに連なるものであろう。
そういった存在達に【欠片】を様々な手段をもってして受け渡していた。
【神々の黄昏】は使い手がその杖にはめ込まれている宝玉に自らの力を保存することにより、
どんな世界に移動していても、呼べば必ず手元に出現する、という特性をもっている。
王宮に入り込み、種をばらまき、そして【種】の一斉発動。
殻の状態で思念のみを飛ばしていた状態ではあるが、本体には自らの思念体の光景は手にとるように把握できていた。
右往左往としている中で、たまたま魂を失ったとある器に自らの思念体を乗り移らせた。
あとはかもう単純きわまりない。
王の姿を【杖】にと模倣し、本物の王は幽閉し、王の操り人形を作りだし、自分達の傀儡と成した。
人の王国はとてももろい。
あっさりとこうまでも単純に国が手にはいるなどとは。
国には守護精霊、というものも存在しているが、それも杖の力にて退けた。

そもそも、同一以上の力をもつ相手と戦い精霊が無事でいられるはずがない。
すでに北と南の大陸にある聖殿は制圧には程遠いが地上界においては封印に成功した。
と報告を受けている。
四大大陸、と呼ばれている大陸にはそれぞれ国が存在し、
一つの大陸が一つの国であったり、二、三の国にわかれている大陸もある。

「ユグルの地にはさすがに入り込むことはできなかったようだが……」
それでも、天界などに入り込めたのはかなり大きい。
すでに国も三つ手の内に入ったも同然。
「あとは…地上界におけるギルド協会本部のある、テミス王国を手にいれれば、
我々の目標、世界制覇もすぐそこに……」

国、という立場をつかい、他国に攻め込む。
兵士達が難色を示せば、道具を使い、新たな戦力をつくりだせばいいだけのこと。
神々といった存在ですら複製をつくりだせる【神々の黄昏(ラグナログ)】。
力もよわい地上界の存在達など複製することはたやすいこと。
「別名、ラグナログ…神々の終焉…か。まさになの通り、だな」
天界や魔界においては実力ある存在達の姿を模倣して自らの戦力にしはじめている。
力も能力も相手のそのままに、自分達に素直に従う戦力。
戦う相手側からしてみれば厄介なこと極まりない。
さらにいえば、複製で作りだされた新たな【器】達はといえば、
基本となった当事者が倒さないかぎり絶対に消滅、もしくは死ぬこともない不死性をもっている。

当事者が攻撃し、致命傷を与えた場合のみに、その力はそのまま当事者の中にと還りゆく。

「神竜ヴリトラに試してみた存在もいたが、アレはなぜか複製がつくれなかったからな……」

どうやらあまりに力が強すぎるものは【道具】の役目を果たさないらしい。

しかし、すでに昔話ともなっている伝説によれば、魔界の実力者サタンや、

天界の実力者ゼウスといった存在達の複製はこれにより作りだせることが可能だ、とわかっている。

一番いいのはそんな彼らの能力などをそのまま複製した輩を自らの戦力の一兵士として起用すること。

そのためには、中枢部に入り込む必要がどうしてもでてくる。

「しばらく騒ぎをおおきくし、中枢部に関係する存在をとにかく表にひっぱりだせば…」

そうすれば、隙をつき、【杖】を使い相手を模倣することができる。

そのためには。

「地上界、天界、魔界、霊獣界。四界のみ、というのもさみしいが、同時に攻撃を開始するとするか」

同時に襲撃が開始されることにより、必ず中枢部の存在達がやってくるはず。

全てはそこが狙い目。

自分達の手のうちに、【神々の黄昏】がある以上、自分達の勝利は間違いないのだから――

「…つ…つかれた……」

アスタロトことアシュタロスとアテナの授業が開始されてもうすぐ一月が経過する。
たしかに知識に関してはそれぞれ各段に各階位の生徒達も向上してきている。
だがしかし、それに比例して半ば狂乱しそうになりかけはじめる生徒もでてきているのも事実。

「恐怖に絡められた生き物の感情を喰らのはおいしいから私はいいけど」
何やらさらっととてつもない重要なことをいっているヴリトラ。
霊獣界にてその界の神として行動しなければいけないのは情勢的にわかってはいるが、
それでもやはり気休めは大切。
というわけで、その身を二つにわけ、一つの身は霊獣界にそのままとめおき、
もう一つはここ、テミス王国にまた戻ってきていたりするこのヴリトラ。
ヴリトラにとって命あるものが発する【負の心】は食料に過ぎない。
そもそも彼女の根本となった核たる感情がそれらの【念】という事実もある。
「組や階位は違えども、まあたしかに。
　ヴリちゃんに任せとけば狂う輩もいなくなるのも事実だからねぇ」
ぱたり、と授業がおわり、ほとんど抜け殻状態になってぼやいているケレスににこやかにいっているディア。

基本的に、全ての階位においてクラス全て合同で授業を行っているアテナ達。
アテナの実戦的授業はいまのところほとんどが基礎体力作りという授業に対し、

アスタロトの行う実戦的授業は自らの心の恐怖の克服、といったあるいみ必要不可欠な授業内容。
確かに始めはアスタロトの幻影により、
各生徒達の心の恐怖が実体化し生徒達に襲いかかっているだけにすぎないが、
生徒達の恐怖がある一線を超えることにより、それらによって生徒達は自ら【ゾルディ】を生み出す結果となっている。
始めはただの幻との戦いであったものが、次の瞬間には実戦的な戦いへと変化する。
幻による攻撃は、精神的なダメージはうけるものの、肉体的なダメージははっきりいって受け付けない。
が、しかし、【ゾルディ】という器と化した恐怖の権化は当然、肉体的なダメージをも与えてしまう。
それから逃れる方法はただ一つ。
自力で発生した【ゾルディ】を撃退するより他にない。
一月も同じような授業を行っていた結果、生徒達の中には幻と実体の区別がつくようになってきている存在もいる。
上の階位の生徒達にいたっては、【ゾルディ】が発生する理由。
それらを自分達なりに考えて、ある真実に迫っている存在達も多々といる。
ただ教わるだけでなく、自らが経験し目にすることにより身にしみてわかることもある。
必要以上の恐怖や不安は逆にそれらを増幅するに過ぎない、と。
必要以上の不安や恐怖心はそのまま【ゾルディ】の発生条件にと当てはまる。
そしてまた、核となった存在の恐怖や不安が薄れることにより、【ゾルディ】の力は削がれる。
それはそのあたりに発生している【ゾルディ】すべてにいえること。
恐怖に呑みこまれてしまった生徒達の【心】はヴリトラが喰らうことにより、

生徒達の発狂は今のところ防がれている。
また、ヴリトラが戻ってくるまで発狂しそうになった生徒達には、
ディアが浄化を施してことなきを得ている。
つまるところ、どちらの授業においても、授業が終わり次第、
ヴリトラとディアはそれぞれ分担し、
異変があった生徒達を介抱する、という状況がここに出来上がっていたりする。

「でも何だってあそこまでする必要があるの？
　そもそも私たちはただの生徒なのに。基礎体力作りとかむちゃくちゃだし……」

亜空間に移動させられ、ひたすらに雷の獣に追われ走り続ける授業や、
何やらものすっごく重たい視えない塊を背にのっけられた腕立て伏せや、
瞬時に交互に移動しないと体全体が痺れ意識をうしなってしまう道具の上での腹筋や。
はっきりいって一生徒がそこまでする必要があるのか？
といった内容の基礎体力作りが多いアテナの授業。

「根性と体力はつくからいいんじゃない？というかあのくらいで根をあげてたらもたないわよ？」

ディアからすればそれらの授業は何てことはない代物。
そもそもそれらを教えたのもほかならぬ【ティアマト】。
彼女が行っていた訓練は今行われている授業よりももうすこしレベルが高い。
ゆえに、ディアの目からしてみれば、
今、アテナが行っている授業はまるで幼子に対する微々たる代物に

過ぎない。
「まあ、心身ともに健康で強くなければ何ごとにも対処ができないしね」

事実。
いまだに誰も気づいていないようであるが、彼らはこの王都を狙っている。
しかもすでにいくつかの国をある程度乗っ取り、すでに自らの駒と化している。
天界や魔界などにおいては、実力あるものたちの傀儡を作りだし、あえてその元の存在のフリをすることにより、機会をうかがっていたりもする。
おそらく近いうちに、彼らはあの道具の別の使い道にも気づくであろう。
そのときが彼らとの決戦のときともいえる。

【神々の黄昏（杖）】の別の使い道。
つまりは、【神々の黄昏】はその【杖】の中に【疑似門】が元々埋め込まれている。
つまり、正規の【門】であるソト・ホースを通らなくても、簡単に【移動】ができる。
かの道具が作られた本当の理由を知るものは少ない。
単純な理由で作られた、という理由を知れば、ほとんどのものがあきれるであろう。
何しろ、かの【神々の黄昏】は、子供たちが父や母を一人占めにしたい。
という要望から生まれた品であり、また大きくなりすぎ始めた長男達を危惧した神々が、
他の界の責任者にしてはどうか、という話しがでてきたゆえに、そのようなものを埋め込みした。

万が一、そのようなことになっても、簡単にそれぞれが守るべき界にすぐに移動でき、
本来は常にいつも家族が過ごせられるように。
彼にとって何よりも大切だったのは家族が共にあること。
しかし、今、かの道具はその用途とはまったく別の使われ方をしていたりする。
…その使い道が、彼の子供たちにさらに懸念を抱かせる行為になっている、と知るよしもなく……

「というか、何でディアはそうけろっとしてるのよ……」
毎回思うが、絶対ディアは謎すぎる。
あのような授業をうけて平気でいられること自体が不思議でならないケレス。
そもそも、彼女が何かに対峙しているのかどうかすら不明。
アシュタロス教師いわく、心がつよければ自らが行う幻影の術に惑わされることはなく、
ゆえに幻影にとらわれることもない、とはいっていたが。
普通に考えて悪魔が行使するような高度な幻影に普通の人間が抗えるとはおもえない。
しかし、実際、ディアは毎回この授業のときにはのんびりとアスタロトと雑談していたりする。
その雑談内容は当然、幻影に捕らわれている生徒達には聞こえるはずもないが。
もしも聞こえている者がいればその内容に旋律するであろう。
何しろ魔界の情勢や天界の情勢などの上層部でしか知りえるはずのないような会話をしているのだからして。
「そりゃ、お姉様だし」
そんなケレスの疑念にさらっといいきっているヴリトラ。
そもそも、ディアにどうこうできる存在など、この【惑星上】には存在しない。

強いていえば彼女と同等たる存在達か、それ以上の存在達くらいしかいない。
そして…そんな【かれら】存在を当然、ケレスが知るはずもない。
ディアの姉妹達、といっている人々がそのような存在だと知るはずもない。
「私的にはロトちゃんの今つかってる幻影ごときで心が壊されるようじゃ、後が怖いとおもうけどね。
　というか出来たら全世界の命ある存在達にこれうけて耐性つけてもらいたいのが本音だけど」

もしも、もしもである。
代替わり時期に宇宙空間内の粒子が変動し、その波動により【心】がより強く表れる結果となったとき。
今行っている各界に隔てて簡易結界を施した状態。
この状態でそのような波動は防げない。
そして、そうなった場合、生命体を問わず、何かしらの影響を全ての命あるものたちがうけるであろうことは明白。
今、ここギルド協会学校にかよっている生徒達は文字通り、未来を担う新たな種族、ともいえる。
彼らが卒業したのちに代替わりが発生するか、もしくは在学中に発生するか。
それはまだ定かではない。
しかしどちらにしても、【命あるものたち】の未来を決めるのは彼ら、といえるであろう。
今を生きている存在達もまた、今現在、多々とばらまかれている【欠片】の影響で、
どこまで自身の心に強くなれるか。
それにより今後のこの世界の行方もまた決まってくる。
自分の全てを受け入れ、そしてそれを認め昇華すること。
それこそが【魂】の格をあげうる最適な方法、なのだから。

「まあ、ケレスも文句を言う前に。私の浄化をうけなくても正気を保てるようにならないとね」
「う～……」
毎回、毎回、慣れているつもりでも恐怖に負けて自らを見失っている。
ゆえにディアの言葉に言い返せない。
「いつになったら全員複合授業が行えるのですかねぇ～……」
いまだに個人個人がそれぞれの課題を昇華しきれないでいる。
アスタロトとすれば次の段階に移り、個々の精神にみせる幻影、ではなく。
現実に見せる幻影により、【ゾルディ】のもつもう一つの特性をその身をもって教え込みたいのが本音。
いまだにほとんど知られてはいない。
【ゾルディ】が生みだされた元となる存在の魂の欠片を要することもある…というその事実。
欠片を有したゾルディを害せば、元となった存在もまた傷つく。
今、現在、実際にすでにそのような光景が世界の多々という場所にて見受けられている。
まだ幸いなのか不幸なのかはわからないが、この王国ではそのような光景はみうけられてはいないが。
真実を自らの身をもって知ること。
それによりそれぞれが本当の真意を見極める。
それがこの授業を行っている理由。

「まあ、まだ個人課題がクリアできていない時点で次にいっても確実に死者、植物人間が多発するでしょうね」
アスタロトの言いたいことを察し、さらっといいきるディア。
「…クロノス殿に頼んで時間設定を空間ずらしてもらいましょうか？
そうでもしないと次の段階になかなか進めそうにありません…

…」

時を操る能力。
ある程度の時は彼…アスタロトとて操れる。
しかしそれは自分の時、限定。
他者の時をいじるまでは滅多にできるものではない。
自身を含め、よくて十名までが限度、である。

「まあ、彼らがせめてくるのが早いか、皆が心に強くなるのかが早いか。どちらか、ね」
「？ディア？先生？何の話し？」
そんな二人の会話にまったくケレスとしてはついてけない。
そもそも、すでにディアとアスタロトが常に傍にいて話している。
というのはこの授業中においては見慣れた光景となってしまい、ゆえにもはやつっこむ気力もない。
いつのまにか浮足だった噂は、アシュタロスがディアの従者、もしくは使いっぱしり、
のように定着してしまい、恋人だのといった噂は払拭されている。
…もっとも、従者だの使いっぱしりだの、という噂はあるいみ的を得ている、とはいえるのだが。
しかし相手はまがりなりにも悪魔、として認識されている教師。
そのような噂を流す生徒達もあるいみ根性がある、といえるであろう。
下手をすれば噂を流した、というだけで魔界送りにされてもおかしくはないのだから……

「……？ここ…どこ？」

先ほどまで壊れた瓦礫の中に立っていたはず。
身に降りかかった巨大な地震。
ぼんやりと歩いていた。
自分を育ててくれた母が治療のかいもなくあの世へと旅立った。
「…みゅ～ちゃん。ここってどこなの…かな？」
こんな緑豊かな大地があの日本に残っていた、とは思えない。
こういった光景は【立体映像（ホログラフ）】の中でのみ、その風や感覚を感じていた。
昔、地球上を襲ったという巨大地震。
結果、分かれていた大陸の移動が起こり、日本、という国はとある大陸と陸続きとなった。
地下より噴き出した巨大な【力】は当時、生きていた人々を翻弄し、残った人口はごくわずか。
そんな中で【霊力】と呼ばれる力が発見された。
中には魔力とも呼んでいた輩もいるらしいが。
生きとしいけるものの全てには、魂があり、その魂に力を与えているのが霊力。
そういう概念が根付き、その力を扱った様々なそれまでになかった力が扱えるようになった。
その結果、今まで以上に科学が発展した地球。
しかし、その発展は地球の力そのものを狂わす結果となったらしく、再び地球上を大異変が襲った。
…そこまでは在宅通信教育で習っている。
このようにみずみずしい木々が残っている場所など…今の地球上にはなかったはずなのである。
すくなくとも、全ての木々が変異し、普通の木、というべきものは、今では映像の中でしかみられなかったはず。
なのに、では目の前に広がっているこの光景は何なのか。
「みゅ？」
先月、ふらふらと病院からもどる最中、拾った子猫。

放射線が含まれている、という雨だとわかっていても、傘もささずに歩いていた。
…母の命がもう長くはない、ときかされて。
何も覚えていなかった自分。
地震の跡地で記憶もなくさまよっていた自分を拾ってくれた大切な【母】。
その母に楽をさせたくて今まで頑張ってきていた。
しかし…努力もむなしく、母は旅立ってしまった。
母に身内はいない。
自分を引き取ってくれたのも、その地震で自分の子が死んでしまったからだ、と後からしった。
自分は我が子の身代りだったのだ、とわかっていても、それでも育ててくれた恩にはかわりがない。
「みゅ～ちゃんのこともあるし。…とりあえず、どこか人のいるところをさがさないと……」
拾った子猫は放射線による突然変異種であったらしく、
通常の猫が食べたり呑んだりする物が主食ではなかったらしい。
普通にミルクなどは呑みはすれども、好むのは【霊力】。
無意識のうちに、彼女の【霊力】を吸っているらしく、指をしゃぶっているだけで満腹状態になっている。
肩のあたりで切りそろえられている漆黒のさらさらの髪に漆黒の瞳。
服装もまた上下ともに真っ黒の服は、母の葬儀が終わった直後ゆえ。
今いる自分の場所がわからない。
それでも、守るべき小さな命がある。
それゆえに意を決して歩きだす。
…よもや、この地が今までいた場所とはまったく異なる【太陽系】だとは夢にも思わずに……

光と闇の楔　～神々の黄昏の威力～（後書き）

ふふ。ようやくキー、となるべき人物？がでてきましたよvええv

あれ？とおもったひとは、もう展開は読めたかと（笑

光と闇の楔　～襲撃と最中の覚醒？～（前書き）

今回のお話は、合間、のようなものです。
なので物語は進んでおりません。あしからず。
次回より急展開？の予定です。

つまり、今回のは別に読んでも読まなくとも、展開については問題ない・・かな？
ちょこっとはぶこうとおもったシーンを入れてみただけなので・・
あしからず・・・

どくん。
「な…何…こ、この感じ……」
何、といっても信じたくはないが、覚えている。
あのときと同じ感覚。
自らの身、すなわち惑星全体が震えるようなこの感覚。
気のせいであってほしいが、気のせいではない。
自らの内にいるべきはずのない気配。
異なる気配が一つと、そして他の【惑星】の子供らしき気配が一つと。
「…………………………………」
・・・まさか・・・・・」
先日の会話が脳裏をよぎる。
もし、もしも、今の状態で、【器】がここに移動してきたとすれば？
「…なんでこうも重なるのよぉぉっ！」
対処を間違えれば【ここ】の未来はない。
「…ケレス！わたし、今日は急用ができたから、ロトちゃんにつたえといてっ！」
教師でもあるアスタロトに伝言することによりうまいぐあいに言い訳など学校側にしてくれるはず。
「え？ち、ちょっと、ディア…って、えええ！？」
それだけいうと同時、ディアの姿は瞬く間にその場。
すなわち、学校に続く道筋から瞬時に溶け消える。
そう、まさに溶ける、という表現がふさわしいほどに、姿がさっと周囲に溶けるように消え去ってゆく。
いきなりといえばいきなりのこと。

目の前でディアが消えたのをうけ、ケレスはただただ驚くしかない。
当然であろう。
何しろ目の前で友達、が消えたのだから。
「ち…ちょっと、何がどうなってるのよぉっ！？」
転移が使えるのはしってはいる。
いるが転移の術といわれている代物はこのように溶けるように消えるものではなかったはず。
すくなくとも事前の現象などを踏まえて転移しなければならないはず。
なのに、これは一体？
一人、いきなりのことでパニックになりつつも、ただただ叫ぶケレスの姿が、
テミス王国の首都テミスの道の一角においてしばし見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～襲撃と最中の覚醒～

状況はあまり芳しくない。
なぜかわからないが、いくつかの国の上層部の存在達がいきなり【堕ちて】しまったらしく、
それまでは徹底して【共同宣戦】を掲げていたのに手の平を還すように反旗組織へと寝返った。
寝返った国の現状は伝わってくるだけでそれはもうひどいもの。
民は必至に保護をもとめ、他国に逃げだしている今現在。
以前よりも野に現れる魔獣や【ゾルディ】の数が膨大に増え、
村や町などがそれらに襲われる数も格段に増えている。
国としては民を守る必要がある。

ゆえに必死にどうにか国をあげて保護活動や駆除活動を繰り広げるものの、まるでいたちごっこ。
つまりは終わりのない無限ループのごとくに。
今現在、どうにか安定を保っているのは、テミス王国と闇の国と、そしてユグル国のみ。
他の国はすでに王都の中に突如として出現したといわれている【ゾルディ】達に襲撃をうけているらしい。
他界からの派遣員も加わり、必死にどうにか駆除活動をしているものの、
他界においてもどうやら同じような現象が起こっているらしく、人員が裂けないのが実情。
ゆえに各国のいまだに陥落していない上層部の存在達はただただ頭を抱えるしかない。
民を守るのに精いっぱいで他国に援助や救援をむける余裕もない。
「…こういうときに、王の加護が発生しませんかね……」つい先日起こった、神の奇跡。
あの現象をどうしても期待してしまうのは、この状況では仕方がない、といえば仕方がないのかもしれない。
あのときもこのような状況になっていた。
異なるのはあのときは、国の中というか城の内部まではそれらが入り込んでいなかった。
ということ。
今回の襲撃は、いきなり城の内部に襲撃者が現れる、ということはざら。
ゆえに城内の警戒も怠れない、ましてや城下の警戒も必要。
警備にあたる兵達はすでにもはや疲れもピークに達している。
さらにいえば仲間であったはずの兵士が突如として襲いかかってきた、という事例も報告されている。
「奇跡、というものは幾度もおこらない。ゆえに奇跡、というのだ

ろう……」
それでも、奇跡を願ってしまう。
このままではおそらく誰もが疲弊しいずれは全て呑みこまれてしまうであろうことが容易に予測がつく。
『は～……』
愚痴をいってもどうにもならないのはわかっている。
だけども愚痴の一つもいいたくなる。
それが今現在置かれている彼らの立場。

「最近は学生達が頑張ってくれてるのでどうにかなっていますがねえ～……」

ここ、テミス王国がいまだに無事、というのは魔界と天界からの使者であり、
臨時教師をしている二人の存在がかなり大きい。
上位神である戦女神アテナと、公には公表されていないが魔界の大侯爵であるアスタロト。
そこいらの存在がそんな二人にかなうはずもなく、
いともあっさりと【敵】は彼らの【影】に撃退されているここ、テミス王国。
噂では、敵の傀儡となり下がってしまった王国がここに攻め入る準備をしている。
というものもある。
どこまで真実なのかはわからない、しかし嘘だともいいきれない今の現状。
数か月前の平和な日常がとても懐かしい。
ほんの数月で世界の情勢は瞬く間に変化した。
全てはかの【大会】をきっかけに変化していったようにも思えなくもない。
道をあるけば、魔獣、もしくはゾルディと必ず遭遇する。

いったいどうしてこんな世の中になってしまったのか。
おそらく、全ては時空神クロノスがいっていた、【神々の黄昏】と【邪神ロキ】の魂が関係しているのであろう。

「先日、ヴルド王国に例の二人が現れたらしく、今現在、王国は混乱に陥っているようです」

次なる報告にあがったのは、率先して攻撃をしかけていたヴルド王国に対するもの。
突如として王の間に少女と狼が出現し、瞬く間に城は陥落してしまったとのこと。
城そのものは朽ちはて、すでに原型をとどめていないらしい。
風の精霊よりの報告なのでそのあたりの情報はまず間違いなく正確。

「…となれば、かの国での【欠片】は回収された、とみて間違いないか？」
「おそらく……」

冥王ヘルと氷の覇王フェンリル。
かの二人が父の魂の欠片の回収に回っていることはすでに周知の事実。
彼らに攻撃をしようものならば、氷の覇王に全ては氷漬けにされ、冥王ヘルにより、全てのものは朽ち果てる。
基本、向かってくるもの以外には手をださない方針らしく、残されたものは茫然自失となり果てる。
少し前までは恐怖の対象として伝わっていた二人であるが、ここにいたり、彼らが登場すればすくなくとも自体が好転する、と判った存在達からは、
彼らが出現すると逆に喜びをもって迎えられているらしい。
人、とは状況に応じてころころと態度を変化させる。

そして都合がわるくなれば自分達を救ってくれたものを排除しようとする。
まさにそれが謙虚に現れている例、ともいえる。

「神の奇跡、か。本当、もう一度、神は施しをしてくださらないだろうか？」

一度奇跡を味わった存在は二度、三度、と甘い汁を吸いたくなるもの。
しかし奇跡というものはそれぞれが努力をした結果どうにもならないときに施されるもの。
そもそも、今世界にはびこっている魔獣やゾルディの大量発生はすくなくとも、
そこに生きる存在達がその心を恐怖に染めてしまい自らが作りだしてしまったに過ぎない。
それぞれが自分の中で心とむきあい恐怖に対抗する術を身につければ、
ゾルディ達も力をつけることなく、逆に弱体化してゆく。
今の状況は、どんどん彼らは力をつけていっている。
すなわち、人々、否、心ある存在達の心がどんどん恐怖に彩られていき、自らが処理をしようとしていない証拠。
ギルド協会学校に通う生徒達はといえば、
そのあたりのゾルディ発生の仕組みを身をもってここしばらく経験していた。
ゆえに、各地に実習授業の一環で派遣されたときに人々にその理由を解いてまわっている。
しかし子供のいうこと。
大人たちは素直に聞き入れない。
さらにいえば、子供が出しゃばることではない、と聞く耳をもたないものも大多数。

そのような考えだからこそ、世の中にさらに魔獣がはびこっていってるのだ、と彼らは気づかない。
そして、そういう輩は近いうちに必ず、自身が取り込まれ、【堕ちた存在】と成り果てる。
その心の負の力に負け、自らが負に取り込まれた結果、おこりうる現象。
地上界における現状はまるで地獄絵図、といってもいいような状況になっているが、
天界や他の界においても現状はにたようなもの。
少なくとも、魔界などにおいては常に乱闘、もしくは戦闘がおこる日常が繰り広げられている。
暴力を好まない種族はただひたすらに耐え、戦闘を好む種族は嬉々として参加する。
普段、暴れれば処罰の対象となるゆえにあまり暴れることのできなかった存在達が、
ここぞとばかりに暴れており、魔界に関してはゾルディの被害よりも、
それらの存在達が暴れた結果に対する被害のほうが逆に多い。
それもまた魔界の特性、といえば特性なのであろう。
「いまだ、各界が融合、もしくはまじりあうということになっていないのは、
　門がしっかりとしているからなのであろうな」
すくなくとも、【門】までもが相手の手のうちに堕ちてしまえば世界は混沌と化すであろう。
全ての世界がまじりあったとき、どのような状態に陥るのか、彼らの思考力では理解不能。
かつては様々な【界】はあっても認識できない状態であった、ともきく。
それはもはや伝説の中のお伽噺。

しばし、今現在の対策と、今後の対応、そして少しばかり今現在の愚痴を含めつつ、
ここ、テミス王国の要ともいえる王城の玉座の間にてそんな会話が繰り広げられてゆく……

許せなかった。
何よりも自分自身が。
噂はいろいろと聞いていた。
しかし、自分がその対象になるなど夢にもおもっていなかった。
愛する人のことで話しがある、と呼ばれ出向いたその先でまさかあのようなことがまっているなど。
いったいどうして予測できただろうか。
出された飲み物を呑んだあと、記憶がない。
意識を取り戻したのはなぜか寝具の上。
そして顔色を変えて飛び込んできた愛する人の姿。
ぼんやりとする思考がゆっくりと覚醒し、自分が置かれている現状がだんだんと理解できてくる。
おそらく、何かの薬を盛られた、のであろう。
体の自由がきかない。
だけどこのままでは自らの身が危ういのは理解できる。
どうにかしなければとおもっていた矢先、飛び込んできた最愛の人。
もう、何も考えられなくなった。
彼は自分を軽蔑するだろうか。
だから…全ての力をもってして、自らの魂も体も全て閉じ込めた。
誰が悪い、といえばおそらく自分が悪いのであろう。
出かけるときに不安そうにしていた息子や娘の顔が脳裏をよぎる。
一緒にいく、といったのに一人でも大丈夫だから、といってやって

きた自分。
噂はよく聞いていたはずなのに、油断していた自分が情けない。
噂は噂であり真実ではない、と心のどこかでおもっていた。
だから、【ロキのことで大切な話しがある】といわれ、子供たちを留守番させて一人で出向いた。
…まさか、それが相手の思うつぼだった、など夢にも思わずに。
自分の体のことなので、ぎりぎり意識を取り戻したのが間にあったというのはわかっている。
最悪の状態にまでは持ち込まれていなかった、というのも。
だけども、自分で自分を許せない。
もう少しで愛する人を自分の意思ではないにしろ裏切りそうになってしまったこの身が許せない。
…いつか、自分を許せる日がくるのかもわからない。
自分の思いに区切りがつくまで、私は眠りにつく。
ごめんなさい。
愛する子供たち、そして…愛する、あなた。
願わくば、私が眠りについた後も貴方達に幸せがあらんことを……

「……あれ？補佐官様？」
ものすごく久しぶりに出会うような気がするのはおそらく気のせいではない。
ねむい目をこすりつつも見ればそこに浮かんでいるのは両親と同様尊敬してやまない補佐官の姿。
「久しぶり。ヨルちゃん。調子はどう？」
ヨル。
そう呼ぶのは彼の家族と彼女くらいなもの。
「こちらは代わりありません。最近は意地悪な神達も来ませんし」

時折、自分の存在が悪だ、と理不尽にも攻撃をしかけてきていた神々。
ここしばらくはそういった襲撃はまったくない。
自分は何もしていないのに一方的に攻撃をうけるいわれはないとおもうが、
すくなくとも彼自身は戦いなどという代物が好きではない。
その巨大な体をその場に満ちる【海】へと横たえ、鎌首をもたげて問いかけに返事をかえす。
「しかし、わざわざ出向かれてきた…というのは、最近、兄上達からの連絡がないのと何か関係が？」
一人でいる自分を気にして常に様子を見にきていた姉と兄。
しかしここ最近というかここ数日、その姿をみないような気がしなくもない。
もっとも、この空間自体が他の界と時間率が異なっているので気のせい、といえばそれまでだが。
ここの時間軸はそのときどきによって変化する。
今現在の時間軸がどのように変化しているのかまでは彼にはわからない。
時折、この空間に滞在していたがゆえに、元いた界にもどれば数百年は軽く経過していた、
ということも度々起こっている。
この空間を管理しているわけでなく、
ただこの空間に満ちる【海】にその身を置く彼にとってはどうでもいいこと。
暗くて冷たくて、そしてさみしい。
それでもさみしさを埋めているのは自らの体内にいる母の存在ゆえ。
いつも守られてばかりだった。
そんな自分が母を守っている。
その使命感のみが彼をさみしさからどうにか奮い立たせている。
「ちょっとね。それより、中にはいってもいい？」

「…？かまいませんけど。まだ母上様は目覚めてはおられませんよ？」

そもそも目覚める気配の兆候すらない。

あれからどれだけの時がたったのかもわからない。

自らの体もあのときよりもかなり大きくなったと何となくだが自覚している。

この空間内において大きさはさほど問題にもならないのであまり気にしてはいないが。

おそらく他界に出向くことがあれば本来のこの姿ではおいそれと行動もできないであろう。

以前、父より教わった変化の術を用いれば様々なところに出入りは可能であろうが。

父が眠りについた後、母だけでも目覚めないかとおもって母を体内にて守りつつ、

様々な世界にいってみたことがあった。

しかし母の反応はまったくなく、あれからずっと自らの殻に閉じこもっている状態が続いている。

兄達いわく、母は自分自身が許せないゆえに心のやりばを他者にむけないためにも自らの身を封じた。

そういっていた。

そしてそれは補佐官もまた同じ意見であったがゆえに、ならばいつか目覚める両親のために、

と兄弟が話しあい、それぞれが身守ってゆくこととなった。

いつか、かつてのように家族そろって笑いあえる風景が戻ってくることを信じて。

「それはわかってるわ」

本当ならば自然に目が覚めるのを待つつもりであった。

もう少し、彼女自らがその気配に気づいて覚醒するのを待つつもりであったのも事実。

しかし、しかしである。

かの【気配】がこの惑星上に現れた以上、そう悠長なことはいってはいられない。
すくなくとも、各界にほぼかの【魂の波動】は行き渡った。
しかし彼の体内にいる彼女にはその波動は伝わらない。
もう少し波動が全ての界に広まればこの空間にまでその波動が伝わり、彼女の目覚めのきっかけとなるであろうに。
悠長なことをいっていればどうなるかがわからないのが今の現状。
だからこそ、あの気配を察知し、現状を把握したのちにここにとやってきた。
「では母上様によろしくお伝えください」
自分達の声は届かない。
しかし、彼女の声は届いているのは知っている。
そもそも、殻に閉じこもった母を助けたのもまた彼女に他ならない。
害を成す存在ならば問答無用でその魂ごと喰らいつくすが、彼女は別。
自分達の味方だと昔から知っている。
天界のはずれに住んでいた自分達家族を昔から気にかけていた天界の補佐官、ティアマト。
自分達の母は、彼女のことを【意思様】と呼んでいたが。
それが意図する意味は彼ら兄弟にはわからなかった。
父と母はしかしそれで意味が通じていたらしい。
いいつつも、その大きな口をぱかり、とあける。
真っ赤な口に鋭い牙。
二枚に別れた舌先がちろちろと紅く燃えるようにと動いている。
その大きな鎌首の中にはかるく大の大人が数名以上すっぽりと入れるほど。
「最近、何かと物騒だから気をつけてね？ヨルちゃんも」
そんな彼に注意を促し、その場より溶け消える。
目指すは、彼の体内に眠っている彼女の元。

温かな体内の中でまどろんでいる小さな塊。
繭状のその殻はいまだかつて誰にも穢されてはいない。
「さて…と。アングルホダ。もう少しまどろんでいてもよかったんだけど。
　どうもそうはいってはいられなくなったから。あなたの力を借りるわね？」
自分が出向くよりも、彼女に出向いてもらったほうが話しは早い。
意識を覚醒させる方法は至極簡単。
簡単であるが今までしなかったのは彼女の自主性に任せていたがゆえ。
そっと繭に手を触れ、自らが視ている光景をそのまま繭の内部にと流し込む。
彼女ならば気づくはず。
否、気づかないはずがない。
彼女にとって大切な人の波動が世界に満ち溢れ始めている、その事実に。
そしてまた、その魂の欠片が悪用されている、という現実。
どくっん。
光景が流し込まれたその直後。
これまで微動だにしたことのない繭がどくり、と鼓動を打ち始める。
これはきっかけ。
心の檻に閉じこもっていた存在が、目覚め始めるその兆候。
しばし、その場においてその繭の中で眠る存在が目覚めるまでたたずむディアの姿が見受けられてゆく……

「…って、これっておもいっきり反則じゃないのっ！」
思わず叫んでしまうのは仕方がない。
絶対に。
相手が厄介な代物をもっている、とは聞かされていた。
いたが、まさか自分達に対抗するために、自分達の能力を複製した輩を作りだしてくるとは。
能力は自分達と全く同じ。
しかし相手には意思がない。
それだけがあるいみ救い、といえば救いではあるが。
「…こ、これは…精霊神様がどうにか結界を張ってくださっていなかったらここも危ないわ……」
ここを攻めてきている存在達。
それは、自分達、精霊王達を模倣した傀儡達。
能力は全く同じでありながらも、反旗組織側の戦力となっている自分達のあるいみ分身のようなモノ。
そんなモノが自分達に対して攻撃をしかけてきているのである。
あるいみ、自分と戦っているようなもの。
相手に意思がないがゆえにどうにかこうにか退けることはできるものの、
それでも苦戦は必然。
「少なくとも、相手から神々の黄昏を奪わない限り、これはどうしようもないわ。
　シルフ。あなたはその特性を生かして本体より黄昏の杖をどうにか回収してきて！」
こちらは一人に対して、あちらは同じ能力をもつものが数名。
一対複数。
苦戦は必至。
相手側に【神々の黄昏】がある以上、相手の戦力はどんどんと増えてゆく。
まずはその戦力の根源を断つ必要性が生じている。

周囲の大気を水と化し、どうにか応対している水の精霊王ウィンディーネが、
同じく大気を駆使して敵を退けている大気の精霊王シルフにと語りかける。
ここ、精霊界。
精霊界もまた、【神々の黄昏】によってつくられし存在達に翻弄され、じわじわと侵略されている。
このままでは精霊界全体が相手の思うつぼになりかねない。
今はまだ精霊神ユリアナがどうにか結界を強固にしているがゆえに食い止められてはいるが。
戦力によもや四代精霊王達の傀儡が使われるなど、いったい誰が想像していたであろう。
「…で、こんな大変なときに、火の精霊王サラマンダーはなんて。もどってきてないのよぉおっ！」
誰ともなく思わず叫ぶその声に思わずその場にいる全員がうなづいてしまう。
なぜか精霊界が大変だというのにいまだに地上界において旅にでた、という火の精霊王は、
ここ精霊界にともどってきてはいない。
地上界において反旗組織とおもいっきり鉢合わせ、そちらはそちらで戦っているのだが、
しかしその報告はいまだ彼らには届いていない。
情報系統の混乱。
伝達の混乱は各界においてさらなる混乱を引き起こす。
そして…この混乱は、ここ精霊界だけでなく天界などにおいても同じことがおこっている。
あきらめることなく徹底して自らできることをする。
そうでなくては、加護は得られない。
先日の王の奇跡のこともある。
このたびの襲撃のことについて【意思】がどう思っているのか彼ら

は知らない。
ただ判るのは、今この現状をどうにか突破しなければならない、ただそれだけ……

太陽系。
第三惑星地球の内部において混乱が続くその最中。
「…三の姉様より連絡があったけど……なんか、不安が的中したって……」
「…みたいね…大姉様が絶叫してたわ……」
それぞれの【意思】のみで【念派】にて会話している【各惑星の意思】達。
先日の話しあいの中でででてきたとある可能性。
しかしまさか本当に起こりうるとは。
「…本当に誰か試練うけてない？ねえ？」
そうでなくては運が悪すぎるとおもう。
切実に。
どうして広大な世界の中でここが選ばれたのか。
ランダムなのか、はたまた試練なのか、それはわからない。
「…器とはいえ本気になったらこんな小さな恒星群くらいあっさりと消滅できるしね……」
しかも、いまだ惑星内で動乱が起こっている三の惑星に移動している、というのも気にかかる。
まだ別の惑星ならば生命体は少ないものの全体的に落ち着いている、というのに。

しかし、起こってしまったことは仕方がない。
出来ることは、全力をもってして器を安全にかの地から迎えがくるまでこの地にて保護するのみ……

光と闇の楔　～真偽と邪神～（前書き）

ふふふ。後半になり、一気に物語は進んでゆきます！（の予定
ちなみに、移動してきている女の子、
この作品自体が別に考えてるオリジナル話しの番外のようなものなので、
そちらの主人公になってたり（苦笑

光と闇の楔　～真偽と邪神～

「…あ…あぶなかったわね……」
思わずそんな声がもれたのは仕方がない。
「そもそも、亜次元起動装置なんて代物の発明。なんでほうっておいたのよ？」
しかも、その装置の原動力は、いまだに彼らの科学力では解析されていない、【真空素粒子】。
思考錯誤をしている最中、偶然にそれらを扱う術を発見した人類は、まるで珍しいおもちゃを見つけたかのようにその効力に飛びついた。
それまでも多々と暗黒物質などといった代物は研究されていた。
宇宙の真理を突き止めるきっかけになるはずの代物。
不確定とはいえ多少扱えるようになった…かもしれないそれを利用しよう、という動きに至るまで、
さほど時間はかからなかった。
まだテスト段階であったそれは、ある人類達が数名で創り上げたプログラム。
彼らいわく【神々の悪戯】により、壊滅的な被害を受けてしまった。
あのままほうっておけば、まちがいなく、この惑星だけでなく、この太陽系、否、
この銀河そのものすらをも呑みこんでその装置は暴走してしまっていたであろう。
ゆえに、だした結論はそれらを含めて全てを【無】とすること。
彼らが粒子、と呼んでいたそれらが何たるかがわかっていたからこそできた技。
「私のところも同じようなの作りだして、文明といわずもののみごとに地上そのものが壊滅したからねぇ」

過去を思い出し、しみじみとつぶやく。
「誕生してたしか数億年経過したころだったっけ？二の姉様？」
「それをいうならこちらはこちらで大地を不毛の地にかえてしまったからねぇ。
　今のこっているのはその不毛の地で生き残った変異種達だし」
「ツァトゥグラだっけ？たしか生き残った生き物は？」
「それはその中の一つの生命体よ。生き残った種族の名称は、ツァト。
　三の姉様のところでいうならば種族は蛙？になるのかしら？」
地下に住まう性質であったがゆえか、唯一、その種族だけ生き残った。
かつての文明の名残はすでにない。
かろうじて荒廃した大地にかつて文明があった名残の遺跡が残るのみ。
「…なんで、ここ私たちのところはこうもきちんと育たないのかしら？私のせいなのかなぁ？」
こうもうまく生命が発展しないと自分の力がないのでは、と情けなくなってしまう。
「…それより。また新たな生命体の誕生を促す、としても。
　また同じようなことがおこったときのために、対処法を考えたほうがいい、とおもうの」
一番外に位置しているからこそ見えるものがある。
たしかに自主性にまかせているのもかまわない。
むしろそのほうが自然で問題はないであろう。
が、しかし、暴走を始めてしまった生命体を押しとどめることはいくら自分達とて出来ることと出来ないことがある。
「…なら、今いる私たちの力の一部を取り入れた魂を生みだして、
　いざとなったらその存在に動いてもらう、というのはどうかしら？
　三番目も面白いことをやろうとしているみたいだし」

今、三番め、もしくは三の姉、と呼ばれた女性はとある【理】を考えている。
それは自らともいえる【惑星】に関する新たな【理】であり【掟】。
「ああ、それはいいかもしれないわね。…とりあえず、その存在は私たち全員で面倒をしばらくみて、
　成長を促した後、それからどうする？」
「…う～ん、今私たちの場所にはほんと多種多様の生命体はいないし。
　そもそも、過去の記憶を元に再生させるほどの力ものこっていないし」
本来ならば自らのうちで誕生していた生命達の記憶は全て残っているがゆえに、
その気になれば同じ存在を創りだす、もしくは誕生させることは可能。
ちなみに過去、幾度か壊滅した文明を再生してみたところ同じような結果になってしまっている。
ゆえにこの方法はあまり滅多ととられることはない、あるいみ彼らにとっては最終手段。
「では、三番目に預けることにしましょう。どちらにしても多々といた生命体をひとまず保管、してるようですし」
中には他の場所に送り出した【精神体】もいるようだが。
それでも、基本的にそれまで生きていた【命】全ての【精神体】を自らのうちに保管しているのは事実。
「…大姉様、私の意見は無視、ですか？」
「当たり前です」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・了解しました」
どうやらこの決定はすでに覆らないらしい。
どちらにしても、全員を巻き込みかねなかったのは事実なので強く拒否もできない。

そもそもは自分があくまでも傍観の立場を貫いていたがゆえの結果なので文句もいえない。
「というか、それって面白そう、という思いがはいってません？」
「まあ、何ごとも挑戦よ。ね？みんな？」
『そうそう！』
「…みんなして、絶対に面白がってる……」
全員に同時にきっぱりいわれ脱力することこの上ない。

この日以後、ここ、太陽系、と呼ばれている全ての惑星群における力の一部をそそがれ、
一つの新たな【精神体】が誕生することとなる。

確かに何かあったときのため、という名目はあるが、一番の理由は、やってみたら面白そう、という意思達の意見がまとまってしまったからに過ぎない。
――彼の本質。
そのときすでに生みだされていた一部の存在達とそして彼の魂の元ともなった【意思】達のみ……

光と闇の楔　～真偽と邪神～

「…これはまた、厄介だな……」
かつて、第一級神達を模倣して大騒ぎになったことがあった【神々の黄昏（ラグナログ）】。
効能はとても面白い、となぜか両の補佐官達が大絶賛し面白がっていたようだが。

しかし、面白いという理由で世界を大混乱に陥れたのはついこの間のように感じられる。
当時は、第一級神だけでなく第一級魔すら模倣して世界に放たれてしまった。
彼曰く、やってみたら出来た、というのだからタチがわるい。
創ってみたはいいものの、使い道がなかったので適当に世の中に放った行為は…まあ判らないくもない。
せっかく創りだしたのであり、行き場を失った幼子達の魂をそれらに組み入れたことにより、
新たな道を彼なりに迷い子達に示したかったのであろうことも何となくわかる。
が、しかし、与えた器の大きさが大きさ。
元々、迷子になっていたようなまだ自我もはっきりとしないような幼子達。
つまり…手に入れた力を面白半分に使い、それを悪い、とはおもわない存在が大多数を占めていた。
結局、あのときは【王】がそんな子供たちに新たな転生先を用意し、確実に【家族のぬくもり】が持てるように采配し、模倣された【人造人間(ホムンクルス)】のようなそれらは、
それぞれの元となった存在達にと融合された。
その結果、力が元々一であったのが同じ力が加わり、倍の力を有することとなったりもしたが。
それは今ではいい思いで。
その後、あまり強い存在の【複製】をそうほいほいと創っては世界が乱れる、という補佐官の意見も手伝って、
さすがにその混乱以後、第一級の位置に所属している存在達の複製はできなくなった。
もっとも、二級以下の存在にはいまだにその効力は健在、なのだが。
「能力を四つにわけたことにより、精霊王達の実力的には第二級以下に分類されるからな……」

精霊神ならまだしも、各属性の精霊王達の存在的立場は、
彼…アスタロトのような第一級魔とは異なり、第二級精霊分野に当
てはまる。
それは精霊神となった、否生みだされたユリアナが彼らの能力をさ
らに細かく分断し、
それぞれの眷属を創りだしたからに他ならない。
放っていた諜報によれば、精霊界では精霊王達がそんな自分達の姿
を【模倣】された存在と戦い、
何やら苦戦しているらしい。
もっとも、それを乗り越えれば、彼らもまた今までもっている実力
より二倍の力を得れるのだが。
自らと同じ能力、力をもつ存在と戦うことなど、彼らは滅多とない。
唯一、対抗できるとすれば、暇だから、といっては自身で分身を創
りだし、
日々努力を怠っていなかった火の精霊王サラマンダーくらいであろ
う。
この地は自分とそしてアテナの張った結界により今のところ問題は
起こっていない。
むしろ【欠片】、もしくは【ゾルディ】が発生しようとすればすぐ
さまその結界に反応がでる。
ふわふわと町の空中にと浮かびつつ、周囲を見渡しながらも報告を
うけているアスタロト。
と。
「あれ～？なんでここにアスタロトがいるの～？」
何とも間の抜けた声がそんな彼の耳にととどいてくる。
何となく脱力しそうになるが、この声には覚えがある。
ゆえにため息ひとつつき、そちらのほうへと視線をむける。
黒い髪に紅き瞳。
少しばかりとがった耳。
背中に生えている羽は折りたたまれており、服装についている飾

り、とも見えなくもない。
「なんで、ではないだろう。というか、リュカ殿はどうしてこんなところへ？」
のほほんと、なぜか空をパタパタと飛んできたかとおもえば、目の前で突如として人型になった【彼】にと問いかける。
ちなみに飛んできたときの姿は小さな羽の生えた動物のようなもの。この世界においては一般的に【蝙蝠】と呼ばれている動物の姿だったりするのだが。
「なんでって～。主様からのお使い頼まれたんだよ～。
とりあえず各国の代表者に伝達するように～って、
あ、アスタロトから面倒だからここにはつたえてくれる？」
主、そう彼が呼ぶのは世界広し、といえども彼は二人…否、一人しか知らない。
彼の脳内においては確実に、光と闇の王は同一である、と認識されている。
それを確かめる手段がないだけで。
何よりも、この目の前の存在は、どちらの王も同じように呼んでいる。
さらに彼が【補佐官】と【王】が同一なのではないか、という疑念を抱きはじめたのは、
彼の言動にも由来する。
何しろ彼は、【王】のことも、【補佐官】のことも、どちらも【主】と呼んでいる。
物心ついたころから彼はすでにいたので彼もまた自分達と同じ、もしくは別な目的をもって生みだされた存在なのだろう。
そう彼なりに解釈しているのだが。
…よもや、【大異変】の最中、唯一、突然変異を起こし生き残った生命体だのどうして想像できようか。
彼が知っているだけで定期的にその器ともいえる体が変わっているようにも思えるが、

彼に以前聞けば、あきたら新たな【器】を【王】よりもらっているらしい。
…それだけでも、彼が特異な存在だ、というのが理解できる。
「…【王】より？一体……」
行方不明になってからこのかた、【王】の気配を実質感じたのは先日の【奇跡】が行使されたときのみ。
「んとね～。『今後のこともあるので、ラウフェイを目覚めさせます』だって～。
僕としては、その名だと絶対に誰にもわからない、とはおもうんだけどね」
その名はたしか、邪神ロキの真名のはず。
ゆえにはっきりいってその名をしっているものはほぼいない。
むしろ初期に生み出された彼らくらいしか知らないであろう。
「…ロキを？」
確か、今の彼はその肉体と魂を分離して眠りについているはずである。
…もっとも、その魂が盗まれてしまい、このような事態に陥っているのだが……
「うん。『嘆きの女神』をも引きもどすから、欠片については問題なくなるっていってたよ？」
嘆きの女神。
その名がもつ意味を理解しているもののもまたごくわずか。
空に浮かぶ白き月。
かつて、大異変のときに人類が起こした混乱により一時期は消滅してしまったかつての【月】。
しかしその【月】も【意思】の力により、再生を果たし、今では空に二つの月が浮かんでいる。
「…なるほど。【月の抱擁】を目覚めさせる…か。…わざわざ【王】が動いたわけは？」
わざわざそのようなことをしなくても、以前のようにその力を発揮

すればあっさりと解決するであろうに。
わざわざ彼らを今まで自力で目覚めるのをまつ、といってほうっておいたその真意がわからない。
「それは僕の口からは何ともいえないよ～？んじゃ、そういうことなんで。
あ、でも欠片のほうはどうにかなっても【悪夢】のほうはどうにもならないからね～」
悪夢。
それは今現在、じわじわと、しかし確実に世界に氾濫しつつある【ゾルディ】の事だと瞬時に理解する。
いいたいことだけいい、バイバイ、とばかりに軽く手を振り。
次の瞬間、ぽんっという音とともにその姿は突如として再び変化し。
そのままその場を飛び去ってゆく黒き影。
そんな彼の後ろ姿を見送りつつも、
「…どうやら、王が動いた、ということは、今回の組織以外にも何かおこっているのか？」
彼の本質をしっているがゆえにそう疑念を抱かずはおられない。
すなわち…この【世界】だけでは対処できない【何か】が起こっているのではないか。
未来予知をも得意とするアスタロトであるからして自分の直感にはかなりの自信をもっている。
「…なんか、ここ最近は、毎日が充実してるような気がするな……」
常に何ごともない日々が数百年以上続けば毎日が平凡で、少し休めばかるく千年経過していた。
ということもすくなくなかった。
しかし、最近はほんの数カ月に満たない間に様々なことがおこり、何となくではあるが、自分は確かに生きている、というのをより強く実感する。
そしてふと、
「…そういえば、リュカ殿は王の命令でたしか反旗組織に間者とし

てはいりこんでたんじゃあ？」
…しまった。
詳しくあちら側の動向を聞けばよかった。
そうは思うが後の祭り。
どちらにしろ、
「…【月の抱擁】と【連立の楔（ラウフェイ）】が目覚める…か。
…あいつらの怒り、おさまってるのか？」
まずそこに疑問がいく。
自力で目覚めたのでないのならば、その怒りはいまだに健在、という可能性は高い。
「…ま、いざとなれば、ゼウスとオーディンのやつを生贄にさしだせばいいか」
そもそもの発端はあの二人なのだ。
自分達には関係ない。
当人達が聞けば薄情ともいえるような台詞をその場にてつぶやくアスタロト。
しかし彼は悪魔の中の悪魔、大侯爵アスタロト。
自分の犯した過ちは自分で償え。
それは悪魔全体におけるあるいみ共通した認識。
…その考えは、かつてのことを知っている存在からすれば、まちがいなく、アスタロトの考えに同意するであろう。
時が経過しようと、いまだにあまり反省していない彼らにとっては自業自得、といえるのだから……

「母上！？」
目の前の光景が信じられない。
どくん、と確かに自らの体内にて鼓動を感じた。
次の瞬間、目の前の空間が歪んだかとおもうと、そこに現れた二つ

の影。
その一つの姿を目にして信じられないとばかりに驚愕の瞳を見開き思わず叫ぶ。
その巨大なる体もまた驚愕に震えているのが垣間見え、
巨大な体ゆえに震えに合わせて周囲の【海】もまた振動している。
「…ヨル？」
最後にあったのは自分が家を出かけていったあの日だったとおもう。
あの当時はかなり小さな子供だったというのに、目の前の彼の姿は見渡せど全体が見通せない。
だけども、子供を判らない親はいない。
記憶の中の愛し子よりも大きくなってはいるものの、我が子を見間違えるはずはない。
「ふ…ふえええええっん」
今まで我慢していた心が、ぷつっと母の姿と、そして懐かしい声をきいたとたんにぷつり、と切れた。
鳴き声は超音波となり、周囲の空間をゆらしてゆく。
「え？え？ちょ、ちょっと、ヨルちゃん！？」
目の前でいきなり巨大な蛇が泣き始めれば動揺もする、というもの。
ましてやそれが記憶の中では一番甘えっ子だった末っ子ならばなおさらに。
さらりと伸びた身長よりも長い黒い髪。
金色の瞳が宿す光はどこまでも優しく温かい。
しかし、永きにわたり一人で母をまもっていた彼のうれし涙ともいえるその声はおさまる気配をまったくみせない。
「ごめん。ごめんなさいね。ヨルちゃん……」
そんな末っ子が泣く様子をただただなだめるしかできない自分がもどかしい。
しかしそれ以上どうすればいいのかもわからない。
子供たちを残して自らの心に閉じこもったのは間違いなく自分。
責められはすれども、泣かれる、というこの行為はさすがに精神上

よろしくない。
「あ～。まあ、ヨルちゃんは図体は大きくなったけどいまだに甘えん坊のままで育ってるからねぇ」
基本的に、父と母が眠りについたあのときから、三兄弟の性格はさほどかわっていない。
強いていえばしたたかになったくらいであろう。
それぞれが話しあい、別々の場所で両親を守ることにきめた彼ら達。
あれからいったいどれくらいの時が経過したのかすでに彼らもよく覚えていない。
ただ、毎日、毎日、いつか両親が目覚め、かつての家族団らんを取り戻す。
それが彼らが頑張れた心の支え。
泣きやまない末っ子であるヨルムンガルド。
なぜかいまだに、長女と次男はどちらが姉か兄かでもめているようだが。
実際問題として、確かに同時に誕生したのは事実なのだがそれでもめる、というのも変わっている。
次男もまた姉と呼び、長女もまた兄と呼ぶ。
どちらでもいいじゃないか、とは長男談。
しばし界を隔てている【門】のある空間にて、何ともいえない悲鳴のようなそれでいて切ないような、
そんな【声】が響き渡ってゆく……
「……アル？」
永い夢をみていた。
自分が許せなくて、どうしようもなくて。
結果として世界を巻き込んだ戦いになってしまったが後悔はない。

後悔があるとすれば、残された子供たちと、眠りについてしまった愛する人のこと。
口元に温かな懐かしい感覚を感じ、意識が浮上した。
ゆっくりと分かれていた魂と肉体が融合するのを感じ、開いたその目に映ったのは、
何よりも愛しき存在。
「お…お父さん!?」
いきなり母が訪ねてきたのにも驚いた。
だけどもようやく目覚めてくれたのだ、と喜びのほうが強かった。
「父上!?」
「お父様っ!!」
目の前の出来事が信じられず、思わず目を丸くする。
それはその場にいる三人とて同じこと。
本来の姿だと移動に差し触りがある、というのでそれぞれが一応姿は変えている。
「…というか、我々がいくらやっても両親とも目覚めなかったのに……」
おもわず愚痴をぽそっとつぶやく目の前の小さな黒犬の言葉は何も責められるものではない。
何しろこれまで散々、三人で両親が目覚めないかいろいろと手をつくしたというのに。
まったくもって目覚める傾向はなかった。
それが母の接吻一つで目覚めるとは……
何となく脱力してしまう気持ちもわからなくもない。
目覚めた母とともに、この場にやってきたのは、その姿を小さな蛇にと変えたヨルムンガルドと、
そして母が目覚めた、という報告をうけここ、氷の大地にとやってきているヘル。
確かに欠片の回収も大事なれど、彼女達にとって最も大切なのは両親に他ならない。

しかも、自分達が集めていた欠片もまた、父が目覚めると同時に瞬く間に同化、吸収された。
元々、この地にて父の器である肉体をまもっていた長男であり巨狼であるフェンリルとすれば、
その思いもひとしお。
何しろずっとこの氷の大地で父の体を守っていた。
妹は冥界にて父の魂を、そして弟は母を。
いつかは目覚めるであろう、両親を協力してずっと守ってきていた。
その両親が今…ずっと願っていた何よりも愛する両親が今、目の前にたしかに存在している。
声にならない、とはこういうのをいうのであろう。
が、長男であるフェンリルからしてみれば、目覚めの方法も父らしいというか何というか。
昔から両親の仲の良さは嫌でも見知っていたが…久しぶりにみれば何となく脱力してしまう。
「…ごめんなさい。ごめんなさい。ラウ……」
「アル…僕のほうこそ、ごめん。君を守りきれなくて…」
「ううん、私のほうこそ……」
・・・・・・・・・・・・・・
何やら子供たちそっちのけで二人の世界に入り始めているこの二人。
永き時を眠りについていたとはいえどうやら基本的な性格はまったくもってかわっていないらしい。
「あ～。こほん。二人とも、とりあえず、二人の世界に入るのは後にしてくれるかしら？」
そんな二人に対し呆れた口調でいいつつも、その声そのものには優しさがにじみ出ている。
「…って、三の意思様！？」
「…あ、す、すいません……」
その場にいる人物が【誰】かに気づき、思わず叫ぶラウ、と呼ばれし男性とは対照的に、

顔を真っ赤にして謝っている女性。
「とりあえず、久しぶり。というべきかしら？ロキ。とりあえず緊急事態がおこったので、
　本当ならばあなた達の自主性にまかせて目覚めを待つつもりだったけど。
　そうはいっていられなくなったから、二人には強制的に目覚めてもらったわ」
そんな二人に対し、にこやかに語りかける。
「…緊急事態？…この恒星群に何かがあったんですか？」
というか、どうして各地で自分の波動を感じるのだろう。
それもまた気にかかる。
「？恒星？お父さん？」
きょん、とその意味がわからずに首をかしげる黒い子犬に、
「うっうっ。父上と母上が目覚めた…うわぁぁっん！」
「…ヨル。あなた、相変わらず泣き虫ね……」
小さなヘビの状態でその身をくねくねとくねらせて泣いている様はあるいみかわいらしい。
そんな【彼】にと冷静にそれでいて苦笑しつつもいっている少女。
「フェンリルに、ヘルにそれにヨルムンガルド？…どうして愛しいお前達三人が全員ここに？」
彼らがここにいるのがいまだによく理解できない。
というか多少いまだに頭の中にカスミがかかったような気がするのは、彼の気のせいか。
「フェイ。それは子供たちには酷、というものよ？この子達はあなた達のことをずっと心配していたんだから」
事実。
両親が眠りについてこのかた、彼らはひたすらに両親を守っていた。
それぞれが孤独になりながらも、両親を守ることを何よりも優先事項にし。
「…三の意思様。その…僕が眠ってからいったいどれほどの時が経

過してるのでしょうか？」
「そんなことより。とりあえず今の現状を説明するわね」
地球時間の経過の説明よりも、今は何よりも現状を説明するのが先決。

しばし、三の意思とよばれし少女…ディアによる、フェイ、と呼ばれた青年。
災厄の三兄妹、と呼ばれし彼らの父であり、神界における立場は邪神ロキ。
そんな彼に対してしばし、現状の説明がディアによってなされてゆく……

「…さて。と」
今起こっている事情は全て、【三の意思】より伝え聞いた。
「…というか、ものすっごく危険な現状になってませんか？それって？」
目覚めて驚いたのが、目の前にいる愛する人と、愛する子供たち。
そしてその背後にいる【意思】の姿。
彼女に会うのは自分が魂と器を分離させたとき以来だとおもうのでかなりの年月がおそらくたっているのであろう。
それくらいは容易に予測がつく。
「だから、あなたを先に目覚めさせたのよ。
本当は自力でゆっくりと養生して自ら復活してほしかったけどね」
それは本音。
他者が力を加えるのではなく、自分の意思で乗り越えてほしかったのもまた事実。
すくなくとも、
彼の力を考えればそのほうが今後もそのほうが彼にとっても最善の

結果をもたらしたであろうに。
もっとも、世界の再生時からしばしして創られた身としては時間の概念、というのもがだんだんとおぼろげになっているのも事実。
「しかし、アレを使っているとは…何でそんなものを渡したんですか？」
自分が確かにアレをつくったのには違いないが。
というかいまだにアレがここにあるとはおもっていなかった。
てっきり他の惑星に回されているとばかり思っていたのだが……
「代替わりが近づいている以上、のんびりとしてるわけにはいかなかったからね。
　なので【力ある道具】を欲望に満ちている彼らに渡せば絶対に行動起こすのは目に見えてたし」
そのついでに、ロキの魂を利用するであろうことは容易に予測がついたので
そのあたりの設定も多少いじっておいた。
「それにいい加減、アンにも目覚めてもらわないとそれぞれの進化がとまってるままになってるし」
月の抱擁、という別名は伊達ではない。
彼女は月の加護を司るもの。
彼女が眠りについている最中、月の加護が完全に発揮されず、地上における生命体は最低限の加護のもと生活せざるをえなかった。
ゆえにあのときからさほど劇的な進化を遂げている生命はほぼいない。
「そ…それは……」
自分のことのみに頭がまわり、周囲のことまではおもっていなかった。
たしかに自分の存在意義は自分一人の問題ではないのは判っていた。
いたがあのときは、そこまで思考がまわらなかった。
それがわかっていたからこそ、ディアは彼女の意思にまかせること

にした。
…当然、きっかけをつくった二人に対してはお灸をしっかりと据えはしたが……

「…？お母様達、何の話しをされてるのかしら？」
「父上も母上も、目覚められたばかりだ、というのにさすがです！」
「…ヨル。お前、両親至上主義なのはわかるが、もう少し周りに目をむけたほうがいいぞ？」
何やら話しこんでいる三人の会話の内容は子供たちにはさっぱりもって理解できない。
約一人、まったく違う場所で感動している者がいたりもするが。
少し離れた場所にてちょこん、とすわりトライアングルを描くように座っている彼ら三兄妹。
傍からみれば、美少女が一人と、小さな…といっても一メートル前後はあるであろう蛇と、
そして子供が抱っこできるほどの大きさの黒犬。
そんな彼らが会話している姿をみて、彼らが本当の兄妹である、と理解できる存在はさほどいない。
「でも、ようやく、また家族で過ごすことができますよね！」
「だな。ほんと、永かった……」
「結局、お父様達が目覚められるまでに私の体の腐食を直す方法は見つかってないけど……」
出来れば目覚めるまでに完全に治したかった。
これればかりはどうも肉体と魂の力の差がありすぎるがゆえになかなか改善されないらしい。
何やらいまだに会話をつつげる両親と補佐官とは別に、
こちらはこちらで兄妹達による会話が繰り広げられてゆく――

光と闇の楔　～真偽と邪神～（後書き）

そろそろとラストに近づいてきたこともあり、前半部分？のフラグ？回収が目立ってきます。
神々の悪戯？何それ？それは番外編、もしくは伝道師の回を参考まで（初期の初期
しかも、二十話前後にでてきた複線？がようやくここで一つ回収ってなんなんだろう？
まあ、ラストの方で複線回収しまくり、というのはこの話しの特徴の一つでもあるんですが（自覚あり

光と闇の楔　～反旗組織と魔聖具～（前書き）

ぱたぱたと、メモ帳にかいてた設定をまともに編集してたら、
いつのまにかかなり時間が経過……
なので打ち込み遅れました……

光と闇の楔　～反旗組織と魔聖具～

「…あら？」
こんなところにどうして？
ふといつものように見回りにとでていた。
ふと目にはいったのは、ふらふらと歩いている一つの人影。
全身真っ黒な服を着ているのもきになるが、気配からしてみてもどうみても人以外の何ものでもない。
みたところまだ子供らしく、しかも何も武器防具らしきものはまったくもってもっていない。
よくよくみればその服の中から小さな顔がちょこん、とのぞいているのがみてとれる。
バサッ。
このままでは惨事は免れない。
ゆえに、その背の真っ白い翼をはためかせ、眼下の少女にむかって舞いおりてゆく。

「…きゃっ！？」
どこを見渡しても町らしきものはまったくみえず、自分がどこにいるのかもわからない。
見上げる空にかかっている太陽は見慣れたもの。
地震の影響で多少なりとも空間に歪みが生じてどこかに飛ばされたのかもしれない。
そんなことを思いつつもとにかく誰かを探さないと、とおもって歩いていた。
しかし、こんな自然豊かの場所が今現在の地球上にあったであろうか？
という疑念はつきない。

マダガスカル島の辺りか、もしくは南国の島々か。
何かの声がきこえたような気がした。
しかも何か動物の唸り声のようなもの。
道らしきものがあることから絶対に誰か人は住んでいるとはおもうのだが。
いったい自分はどこに飛ばされたのであろうか。
伊達に魔科学、という代物が発達していたわけではない。
時折、世界の魔力…霊力、とも言われているが。
ともかくむそれが歪み、突発的に別の場所と繋がる現象が起こることは証明されている。
ゆえに、今の自分もその現象に巻き込まれたのだ、と思っているのだが……
「みゅ～！」
ふと、懐に入れている子猫のみゅ～が空を見上げて何か訴えかけてくるように鳴きはじめる。
「みゅ～ちゃん？何が・・・って…嘘…」
言われて見上げたその視界にはいったのは…ありえるはずのない、黒い月と…白い月。
月が二つある、など聞いたことがない。
ここってまさか、地球上ではないの？
ありえない。
というか誰かの悪戯で月が二つあるように視えているだけだ、と信じたい。
混乱する思考の中、その場にしばし立ちつくす。
…真っ白い残像が彼女の元に羽ばたきの音とともに舞い降りる……

ふらっ……

さすがに力を常に出し続けて入れば精神力が涸渇してくる。

自らの分身ともいえる【彼ら】であるが、同時に侵攻してくれば疲れもするというもの。

それでなくても今はある出来事がおこるかもしれないのでさほど力は使えない。

自らの力が弱まれば、すなわち、世界における精霊…つまり目に見えない物質的な力が涸渇する。

大気の中の成分や、この世界に蔓延している成分のほとんどは自らの管轄のうち。

「あ。いたいた～、ユリアナ～」

精霊界の中心部においてその力全てを界全体に注ぎ込んでいた。

そんな矢先、何やら間の抜けた声が聞こえてくる。

「…リュカ殿？」

パタパタと飛んでくる黒い蝙蝠から発せられている声はあきらかに、意思につかえる【リュカ】のもの。

おそらく中心地にいるであろうと予測をつけて飛んできたら案の定。

精霊界の神でもあるユリアナは中心の聖なる場において結界を張るべく力を注いでいた。

「うん。僕～。あのね。あのね。主様からの伝言だよ～。

『今後のこともあるので、ラウフェイを目覚めさせます』だっ

てさ～。確かにつたえたよ～？」

ラウフェイ。

それは今、このような状態に陥る原因ともなった、邪神ロキの真名。

今のこの現状は彼の創りだした魔聖具によって産みだされた傀儡的な意味での精霊王。

彼らが敵の駒として攻めてきているからに他ならない。

さらにいえば、精霊界にも【ロキの魂の欠片】はいくつか入り込んでいた。

もっとも、異物はすぐさまに察知し、すばやくヘル達にと引き渡してはいるが……

「では…もう少し頑張ればどうにかなる…のですね……」

この現状をみて、彼が何もしない、とは思えない。

というか、むしろ絶対に逆に行動を起こすであろう。

…まあ約二名ほどその対象外になる可能性のある神はいるが。

それはまあ彼らの自業自得。

と。

「…あれ？あ、目指せ覚めます。でなくてもう目指せさせたみたい～」

感じる波動はあきらかに、懐かしいもの。

さらに今まで薄かった月の加護の気配もまた濃くなっている。

それに気づき、先ほどの伝言を訂正している蝙蝠ことリュカ。

「…月の力が…？では、嘆きの女神も目覚められたか……」

おもわずほっとしてしまうのは仕方ないであろう。
精霊達もまた月の力に左右される存在。
かつて新たに創りなおされた【月】は全ての力を照らし、そして先を照らす役目をもっていた。
その力が月の女神である彼女が眠りについたことにより涸渇していたのはいうまでもない。
【世界】全ての力を反射し、隅々までその力を行き渡らせる。
それが【月】がもつ本来の役割。
そのように、かつての大異変のときに壊れた月は創りなおされた。

「…って、月の力が回復したら、テケリもハスターも行動をやめるかな？
　ううん。それはないか。だまって報告にまわってるからなー。
また間者にもどらなきゃ。それじゃ～ね～」

いまだに組織に入り込む、という任務は終わっていない。
ゆえに伝えるだけ伝え、パタパタとその場から飛び去るリュカ。
そんな彼の後ろ姿を見送りつつ、

「では…私ももうすこしがんばりますか」

月が回復したのならば今まで以上に頑張りがきく。
ゆえに、気を引き締めて、あらたに界全体にとその力をもってしての結界を施してゆく――

「誰だ！？」

突如として目の前に現れたとある青年。
その整った容姿からしてただものであるはずはない。
だがしかし、ここ、組織の本部には仲間にしかはいれないように結界が施してあったはず。
その結界をやすやすと越えられる存在、といえばかなりの実力者に限られる。
柔らかな薄い金色の髪に金色の瞳。
その瞳に光があたるたびにゆらゆらとその色が変化しているようにも垣間見える。

「うん。君が今代のショゴス？また今代はかなり若者が代表者になったものだね～」

思わず素直な感想を漏らす。
大体、この組織においても、もう一つの組織においても不思議と代表となるのはいまだに若い存在達。
つまりはあまり年をかさねていない存在が大多数。
若いがゆえに自分の力に盲信し、絶対的な力を持ちえている、と勘違いしている輩が少なくない。
闇に所属しているとはいえ、その髪は明るいまでに金色に輝いている。
その背には白き鳥の羽のような翼が垣間見えていることから、鳳翼種とも呼ばれるどうやら天界人らしい。
その白き羽が多少くすんでいるのをみれば、光の住人であるがゆえにその心に闇を宿し、
ここ、魔界にやってきたのであろう。
光が強ければ強いほど、その心が闇に閉ざされたとき、より闇の濃さは増す。
そして、闇を打ち払うにはそれ以上の光が必要となる。
それは必然の理。

警戒を崩さない羽を有した青年に語りかけている男性は気を抜けば同性でも見惚れてしまうほどの整った顔立ち。
何の心構えや自分自身に防御の術を常に張り巡らせていなければ、彼のもつ独特な雰囲気に呑みこまれ、まちがいなく見惚れてしまう。
それも男女問わず、種族問わず。

「ウボ・サスラの欠片を取り込んで組織のトップに立つまではまあいいとして。
　とりあえず、品物は返してもらうよ？」

自らが組織のトップだ、と目の前の男は理解しているらしい。
しかし敵意も何もみえないようにみえる。
みえるが仲間、とは到底思えない。
むしろ何となく嫌な予感のほうが先にくる。
そんなことを思っていると

「Ｒａｓｓｅｍｂｌｅｚ－ｖｏｕｓ　ｄａｎｓ　ｍａ　ｍａｉｎ」
――我が手に集え

「Ｕｎ　ｓａｉｎｔ　ｅｔ　ｕｎ　ｄｉａｂｌｅ　ｅｔ　ｕｎ　ｂ？ｔｏｎ　ｄｅ　ｌ'ｉｎｔｅｒｖａｌｌｅ」
――聖と魔と狭間の杖よ

「Ｍａｉｎｔｅｎａｎｔ　ｉｃｉ」
――今、ここに

突如として目の前の青年が不思議な旋律を紡ぎだす。
…しまった、精霊の歌か！？
そうは思うがすでに遅し。
次の瞬間。

「……な！？」

目の前の男性の手に突如として握られた杖をみて思わず驚愕の声をあげる。

しっかりと保管していたはずの、彼らにとっては聖なる杖がこともあろうに、

目の前の不法侵入者の手にしっかりと握られていたりする。

ありえない。

そもそも、アレにはきちんと登録をしておいたはず。

他者の意見を簡単にきくような代物ではないことは彼は使用してみたがゆえに理解している。

「まあ、これを使うな、とはいわないけどね。

だけど。使い方がちょっと気にいらないのも事実なんだよね」

これを本来創った目的とはかけ離れた使い方を彼らはしている。

多少の混乱を招くだけの悪戯目的でつかうのは構わない。

しかし、大切な【家族】を引き裂く使い方を目の前の彼らの組織はしていたりする。

何よりも【家族】という絆を大切にしている【彼】にとってその使い方は許せない。

「さってと。Ａｕ　ｃｈｉｆｆｒｅ　ｑｕ'ｉｌ　ｄｅｖｒａｉｔ　ｙ　ａｖｏｉｒ　ｏｒｉｇｉｎａｉｒｅｍｅｎｔ（本来あるべき姿へ）」

目の前の美青年、としかいいようのない人物がそうつぶやくと同時、彼の手の中にあった杖が瞬く間に光輝き、その形状を変化させてゆく。

その先端についていた水晶が光輝き、その形は花のようにと変化す

る。
さらに杖の色も茶色いどこにでもある色から銀色へと変化をとげ、杖の先端ともいえる先もまたまるで三日月のごとくに形状をかえてゆく。
これこそが、本来のあるべき【神々の黄昏（ラグナログ）】の姿。
今まで彼らがつかっていた杖の能力はあくまでもほんのごくわずかに過ぎない。
この姿に変化し始めて杖は本来の力を完全にと発揮する。
「…杖が…まさか…まさか、邪神の関係者か！？」
可能性として、氷の覇王フェンリルか、はたまたまどろみの覇者ヨルムンガルドか。
いくら何でも冥界の管理人ヘルということはないであろう。
目の前の青年はかなり奇麗な分野にはいるとはいえどうみても男。
わざわざ少女であるはずの冥界の管理人が男性に姿を変えている、とはおもえない。

「関係者、ねぇ。まあ、似たようなものかな？さってと…ねえ、知ってる？」

無邪気にその手に変化した杖をもちつつも、くるくるとまわしつつ、屈託のない笑みを浮かべて問いかける。

「知ってる？イチカケルイチはあくまでもイチでしかないけど、
　イチカケルフクスウは、そのフクスウの数字になるってこと？」
「何を……」

目の前の青年が何をいいたいのかわからない。

刹那。

「？ l' existence que pouvoir ou un grand nombre de pouvoir devraient avoir le chiffre du chiffre comme pour le pouvoir
――力は姿　姿は力なり　数多な力はあるべき存在へ

カッ！！

青年が新たな言葉を紡ぐと同時、杖全体が光輝き、
その光は彼らのいる建物を突き破り、空に一直線に向かったかとおもうと次の瞬間。
まるで光の螺旋階段のような模様を描きつつ、きらきらと周囲に光の粒を降り注ぐ。
光の螺旋階段はいくつにも枝分かれし、その枝分かれした先は突如として空間内にととけきえる。
何のことはない、その階段の先は【裏門】を通じ各界にその光を描き出す。
反旗組織のリーダーでもある彼は気づかない。
この光がどのような意味をもつのか、ということに。
そして…さきほど、青年がいった、イチカケルフクスウはフクスウになる、というその意味にすら……

「…何だ!?あれは!?」
きらきらきら……
空に突如として出現した真横に伸びる光の螺旋階段のような代物。
その光の階段らしきものからは、地上にむけてきらきらと粒のよう

な光が舞い落ちてくる。
それと共に、その場にいた【傀儡】達の体もまた突如として光輝きはじめ、
そしてまた、

「な…何だ!?」
傀儡の元となったであろう、それらと同じ姿をしている存在達の体もまた光りはじめる。
光はやがて呼応するかのように呼び合いはじめ、点滅を開始しはじめる。
「…これは、黄昏の威力の本領が発揮された…のか?」

本来、かの道具がもつ意味合い。
それは、自分達の力を高めるためにも利用できる、というのをかつて聞いている。
先刻よりあきらかに強くなった月の気配。
それが意味すること、すなわち嘆きの女神が目を覚ました、ということに他ならない。
そして彼女が目をさました、ということは、おそらく【ロキ】もまた目覚めるであろうことは容易に予測がついた。
しかし、嘆きの女神がじつは月の化身でもある存在だ、と知っているのもはごくわずか。
ゆえにいきなり月の気配が増したことに戸惑いを隠しきれない存在のほうが大多数。
しかし、しかしである。
「よっしゃぁぁっ!これで問題はなくなるっ!」
「ず…ずるい!複製の数の分だけたしか力を増すはずでしょ!?これって!!」

この光に覚えがあるがゆえに思わずそんなことを叫んでいる精霊王

達。
そう、彼らは知っている。
この光を。
今だかつてこの光を三度、その身にうけたことがある。
永き時を得て忘れかけていたが、この感覚は忘れようがない。
この光は、元となった存在と、そして複製された存在。
それらを再び融合させるための光。
しかし、ただの融合、というわけではない。
融合することにより、元となった存在の力が融合する存在の数だけ少しづつではあるが増してゆく、という効果をもっている。
元となった存在と複製された存在の光の呼応。
それらは互いの力を微々たる量とはいえ高めてゆく。
つまり、本来あるべき存在に同じ存在が複数、複製されていたとする。
しかしその複製はこの光によって元となる存在へと同化が可能となる。
この力の使い道はそこにある。
より多く分身を創りだすことにより、あまり苦労もせずに自信の力を増やすことが可能。
この仕組みは、ロキが娘の体を直さんがために創りだした仕組み。
肉体の強度がたかくなれば力に呑みこまれることはないのではないか？
とおもい、杖を創ったときに効果を付属してみた。
しかし、肉体における強度だけでなく力まで増してしまったがゆえに結局は失敗に終わったのだが……
今の今まで自分達の複製である傀儡のような人造人間達に翻弄されていた精霊王達。
彼らはこの光を浴び、その状況を一気に好転させてゆく。
自らのその身に自分達の複製を取り込み、その力を増し、その力をもってして悪意あるものを駆除してゆく。

しばしそんな光景が、精霊界において見受けられてゆく……

「ディア!?どこにいってたの!?」

いきなり空にと現れた光の螺旋階段のようなもの。
そして空より降り注ぐ、光の粒。
きらきらと降りてくる様は確かに奇麗ではあるが、その光に触れても何も起こらない。
そもそもこの光は複製された存在とそして、複製の元になった存在。
それらの存在達にしか効果はない。
ゆえに他の存在にとってはただの光の粒、でしかない。

「ちょっとね。って、ケレス、どうしたの?」
何やらケレスの様子がただ事ではないような気がするのは、ディアの気のせいか。
「先生がディアのことを探してたから、私も探してたのよ」
「?先生?」
ケレスがいっている意味がよくわからない。
「ああ、先生っていってもアシュタロス先生でないわよ?担任が探してたの」
「ヘスティア先生が?何かしら?」

別に呼び出しをうけるような理由は今のところないはずである。
そもそも今の状態なので授業にでていなかったり、という理由での呼び出しはないであろう。
実質問題として重要な授業はこのたびの攻撃もどきがおこってからは行われてはいない。

むしろほとんど生徒たちもまたほぼ実戦授業が主とあいなっている。
よもや、ロキ達を目覚めさせて、さらには今後の話しあいをしていました、と正直に話すわけにはいかない。
ゆえに言葉を濁し、さらっとどこにいっていたのかは追求されないようにさくっと話しをすすめるディア。

「とりあえず、職員室にいって…って、気配は職員室ではないわね。
これは…町の外の陣営？」

町の外に設けられている避難民のための仮の陣営。
どうやらそちらから担任であるヘスティアの気配を感じる。
さらにいうなればその傍にはアテナの気配もまた感じ取れる。
少し目をつむり、そちらにと意識をむけることしばし。
そして……

「……げ！？」

まあ、アテナだけならいい。
いざとなれば以前のように記憶を閉じ込めればいいだけのこと。
しかし、しかし問題は一緒にいる別の気配。
あからさまに自分の中にいるはずのない気配が傍からしてくるのはこれいかに。
「ディア？」
その場にて思わず立ちすくんだディアの様子をみて首をかしげつつも問いかけるケレス。
ディアがこのように立ちすくむ、などケレスはいまだかつてみたことがない。
ゆえに不思議な表情をしてディアの顔を覗き込む。
そんなケレスの表情に気づくことなく、しばらくの間その場にて完全に硬直するディアの姿が見受けられてゆく……

「…困りましたね。私たちと会話が通じない、というのは……」

通訳の術をかけてみてもダメだった。
というかどういうわけか目の前のこの少女には自分達の術はまったくもって通用しないらしい。
懐にいる子猫にも試してみたが右に同じ。

「ですね。私はかろうじてところどころは理解できるのですけどね」

それでもまったくできないよりはましだったとしかいいようがない。
そもそも、自分が空より降り立ったとき、この目の前の少女は目を見開いて驚いていた。
言葉が通じないことから念波を試みてみたがそちらもどうやら通じることはなく、
そもそも、全ての力を目の前の少女ははじく体質らしくまったくもって効果がない。
それでも何となくではあるがかろうじて多少の言葉は理解できたがゆえにどうにかここまで連れてきた。
あのままではあまりに危険、というのもあり、どうにか保護したのはつい先刻。

「術がだめならば、言霊ではどうでしょうか？」

言霊は術の分野にあらず。
自然界の力を言葉にしたものであるがゆえに、どの種族にも通用する、ともいわれている。

一説には外の世界にも通用するといわれているがそれがどこまで真実なのかはわからない。
しかし、自分達の言葉がまったく通じない少女。
着ている服装もまったくもって視たことがない。
そもそもこのような布地はいまだかつておそらく発明すらされていないであろう。
継ぎ目のまったくない布地は均等に染められており、しかも服からは多少なりとも魔力を感じる。
よくよく視てみれば服に小さく何かの陣らしきものが編み込むようにして縫われているのが見て取れる。
しかしその流れはほんのわずかであり、その陣もかなり小さなものであるからしてぱっと見た目にはわからない。

「ああ。たしか言霊使いの少女っていう子のこと？
　そういえば私、直接その子ときちんと出会ってないように思うわ」

気にかけているはずなのに、授業にいざ突入する前にそのことを奇麗さっぱりと失念する。
その現象が教員としてここにきてから後、ずっと続いている。
まるで何かに邪魔されているかのごとくに、認識ができない状態がつづいている。
実際問題として、ディアが周囲の気配とまったく同じに同化しているので気がつかない、というのがあるのだが。
彼女が自分に気がつけば、まちがいなく平穏な学生生活は望めない。
それがわかっているからこそ、彼女には気配も何もかも隠している。
一度、彼女の前に姿を見せたのは、その心の奥底に確実に鍵をかけるため。
その鍵をディアが握っているかぎり、彼女はディアの姿を認識することは愚か、話しかけることもままならない。

「この子と会話がかろうじて通じるのは、アテナ様だけのようですから。
　では、アテナ様はこの子のことをよろしくおねがいいたしますね。私はディアさんを探しにいってきます」

言霊使いのディアならば、少女のことが何かわかるかもしれない。
そんな期待をこめつつも、ディア達のクラス担任であるアスティアは、迷子の少女を女神アテナに託し、
その身を王都の中にと踊らせてゆく。

おそらくは、王都のどこかで日々何かトラブルを起こしては解決してあるであろう生徒を探して――

光と闇の楔　～反旗組織と魔聖具～（後書き）

ちなみに、今現在、個人的あることでとある人と話しあい中…

……もう思えばあれから半年以上たつ……

というのにまだどこかで信じきれていない自分がいます…

…

このたびの震災でもそうですが、人の別れ、というのはほんといきなり、ですよね……

…天国からでもいいので、夢でもいいから会いに来てほしいです…

切実に……

光と闇の楔　～動揺と状況説明？～（前書き）

前々からいっていた、ついでに前日にもいっていた設定集をひとまずあげました。
基本用語等のみをまとめたものですので、こまかなところまでは編集しておりません。
とりあえず基本的なことがわかればある程度の裏設定は理解できる、かと……
しかし、この話し。…大震災前に考えついていたのもあるけど…
今の今で震災だのといった表現でてくるのがあるいみ不適切のような気も…
これ、思いついたのが二月なんですよね…んで設定しきつめてって…
投稿始めたときにはすでにもう物語は脳内完結してる状態だったからなぁ…
いまだに被災地は大変ですが…何もできないのが心苦しい…
さて、ちょっと個人的なことをば。
…せっかくの週に一度のお休みだったのに、ちょっと横に…
とおもって横になったら気づいたらすでに夕方…わ…ワタシのオヤスミ…
…疲れてるんだなぁ…切実に……

※５１の題名が中心にこないのでいじってたらおかしくなったのであげなおしました・・・

光と闇の楔　～動揺と状況説明？～

一瞬、目を疑った。
視界にはいったのはどこまでも青く輝く、写真やテレビで見慣れた代物。
自分自身が宇宙空間に出向いてみているようなそんな錯覚。
いきなり翼が生えた女性が空から舞い降りてきたことにも驚いた。
言葉が通じずに戸惑っていると頭の中にと響いてきた声。
完全には理解できなかったものの何となくではあるが理解ができた。
というか、何でフランス語？
という突っ込みは確かにあるが。
母をたすけたくて自力でいろいろな勉強はしていた。
それに何より、日本語、英語と並んでフランス語は必須科目でもあった。
とはいえ学校で習う語学なので完全ではない。
流暢に話すその言葉を全部理解できるわけではない。
ここは危ないから、と諭され、つれてこられたどこかの避難地らしき場所。
空を飛ぶのにはもはやあまり驚かなかったが。
そもそも、住んでいた場所による交通手段は主にすでに飛行が主流となっていた。
…もっとも、自力で空を飛ぶ、という方法はどこかの研究者が研究していたらしいが、
いまだに日の目をみていなかったが……
抱きかかえられて移動する間、わかったことがただ一つ。
ここはまちがいなく、自分が住んでいた惑星ではない…ということ。
そもそも、月が二つ…どうやら誰かの悪戯で立体映像（ホログラフ）とかが浮かん

でいるわけではなさそうだ。
時折、そういった愉快犯もいたのでそれを期待していたのだが……
たどたどしいながらもどうにかフランス語にて意思疎通ができたのが唯一の救いといえば救い。
というか、子猫用のミルクとかないって…
連れてこられた場所にいた人々の服装をみるかぎり、どうやら魔科学などといった代物はないらしい。
というか文明そのものが中世のような感覚をうける。
連れてきた翼の女性の名前をきいたときは驚いた。
アテナ？
しかも、天界からの使者？
確かアテナってあの神話にでてくるゼウスとヘラの娘の戦女神、だったはず。
…ギリシャ神話ですか？といいたかった自分は間違っていない。
絶対に。
彼女は何でも忙しいらしく、別に話しが通じる人をつれてくる、といわれたのがつい先ほど。
どこかの教師らしい女性とともにやってきた一人の少女。
年のころは自分よりも少し下、といったくらいなのだろう。
ごしごしと目をこすると先ほど一瞬垣間見えた地球の姿はどこにもなく、
そこにたっているのは白っぽいような銀色のような髪の色をした一人の少女。
…うん、もう、何をみても私はおどろかない。
というか、色彩豊かな髪の色の人間がいる、という時点でもうここは地球でないことは確定。
…歪みに巻き込まれて異世界トリップ！？…信じたくないがそう、らしい……
…ライトノベルなどの小説や映画などでよく話題にのぼってはいたが…

…もしかして、これまでの歪みに巻き込まれひとの行方不明者って…どこかにトリップしてたのでは……
元の惑星に戻れるのか、どちらにしてもすでに身よりもないのでさほど思い入れはない。
気になるのはよくしてくれた友達達だけど。
…あの巨大地震だったからな…無事であるかどうかも不明。
そもそも、最後の記憶が崩れてゆく大地、だったのだから。
…私、これからいったいどうなるのだろ？
とにかく、みゅ～ちゃんだけは守らないとっ！

光と闇の楔　～動揺と状況説明？～

楽しい。
かつて戦いの場に出向いていったときは悲しみのほうが強かった。
母が眠りについてしまい自分達の声も届かなくなってしまったあのとき。
父の嘆きをみているほうがつらかった。
そして母を守り切れなかった自分達が許せなかった。
補佐官様よりあれほど注意するように、と申し使っていたというのに。
だけども、今は違う。
母は永きにわたる不在の調整をするために月にと出向いていっているが、
それでも傍に母のぬくもりをしっかりと感じる。

「さすがは狭間の孤島。楽だよね～」

のんびりと横では待ち焦がれていた父がそんなことをいっている。
それが何よりも嬉しく、力がみなぎってくる。

「ヨル。ヘル。フェン」
『はいっ！！』

子供たちがそんなことを思っている最中、
その手に三日月状の杖らしきものを手にしている青年が、背後にいる三人にと声をかけてくる。
この場において彼らは姿を変える必要性はまったくない。
ゆえに本来の姿、巨大なる狼、巨大なる蛇、そして年若い少女。
巨大な生物の間にふわふわと少女が一人浮かんでいる様子もあるいみ異様といえば異様に見えなくもない。

「とりあえず、界全体に散らばっていた欠片は全て今、扉を通じて回収したことだし」
この場はもっとも、【門】に近い場所。
そしてまた。
「…あいかわらずの力、だな。ロキ。しかしようやく目覚めた、か。
お前達が眠りについてたらどれだけ大変だったとおもっているんだ……」

上空の何もない空間よりそんな声が投げかけられてくる。
よくよくみればゆらゆらと揺れる不安定な空の上に巨大な【何か】が垣間見えているにはいるが。

「ソト・ホースも相変わらず固いよね～。でもまあ、門の役目としては仕方がないのかな？
そうはいうけどさ。あのとき僕としてもどうしようもなかったしね～」

あのままだと確実に全てを破壊しつくしてしまっていた自覚はある。
なので、自らの肉体と魂をわけた【意思】の判断はある意味正しい。
自分の力に呑みこまれ、そのままこの恒星群すらをも呑みこみかねなかったかつての自分。
あのときの悲しみと怒りはそれほどまでだった、と今では自覚している。
完全に怒りがとけた、というわけではない。
しかし、愛する存在は傍にいる。
それだけでも心は安定する。
そして愛する子供たち。
ずっと自分達を守っていてくれた、ということに申し訳なさと愛しさが入り混じる。
純粋に自分を慕うその心をどうして踏みにじることができようか。

「とりあえず、ヨルは妖精界において入り込んでいる【ゾルディ】を喰らってきて。
フェンは精霊界にてユリアナの補佐と【堕ち存在】の処理。
ヘルは体が心配だから僕ととりあえず地上界、だね。
冥界のほうはハデスが霊界ともどもどうにかしてるみたいだし」

冥界、霊界において器をもっているのもはほぼ皆無。
ゆえに、あるいみ【心の結晶】ともいえる【念】にはかなりもろい。
しかし、【念】も裏を返せばそれもまた一つの【魂】のようなもの。
それに意思があるかないか、ただそれだけの違いに過ぎない。
伊達に創世時当時、神として同時にゼウスとともに創られたわけではない。
光の属性、闇の属性、両方をハデスは持ち合わせている。
強いていえば、弟であるゼウスのほうが光の属性が強かったがゆえに天界に残ったのではあるが。

兄であるハデスのほうは光と闇のバランスが常に保たれているがゆえに冥界に移動したのだから。

「お父様？霊獣界のほうはよろしいのですか？」

「あっちはみたところ、ヴリトラがおもいっきり暴れてるから問題ないでしょ」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なるほど』

さらっといわれ、思わずその言葉に納得する子供たち。

事実、霊獣界においては、ここぞとばかりにヴリトラが暴れており、逆に竜族の長たるシアンはその後始末に追われているのが現状と成り果てている。

ある意味、他の界と違う意味で霊獣界は今現在、混乱に陥っている、といっても過言ではない。

「とりあえず、さくさくっと事はすませるよ！…どうも、面倒なことになってるみたいだしね」

【空間の揺らぎ】を確かに感じる。

相手がどこにいるのかまでは特定できないが、しかし確実に【揺らぎ】は存在している。

それも規模がかなり大きい。

自身の中の力を全てそそいだとしてもその【揺らぎ】には到底かなわない、と本能が告げている。

今現在、【各界】における【ゾルディ】の大量発生は、あきらかに人為的なもの。

心の不安をあおり、それらを発生させたのは、二界におけるこの仕組みに対する反感をもつ、反旗組織、と呼ばれる存在達。

「しかし、彼らもある意味役立ってはくれたよね」

全ての欠片をこの地にて集めたがゆえに判る。
いくら小さな自らの【魂の欠片】だとはいえ、その数も膨大になれば取り込む力もまた膨大。
今までの力が一だとするならば、今の力はかるく五十を超えている。
どうやら彼らは彼らでかなりの数の複製を魔聖具【神々の黄昏（ラグナログ）】にて作成しばらまいていたらしい。
その意味では彼らも役にたった…といえなくはないのかもしれない。

「さて。と、それじゃ、ソト・ホース。子供たちをきちんと無事に送り届けてね。
さ、ヘル。僕たちは地上界に向けて出発だよ」

「はい！お父様！」

「…ずるい。ヘル姉さん……」

きらきらと瞳をかがやかせていうヘルと呼ばれた少女とは対照的に、その巨大なる鎌首をしょぼん、と下げて小さくつぶやいている蛇が一体。

「…ヨルムンガルド。それは仕方ないだろう。我々の中でヘルが一番体が弱いのだからな」

産まれたときから常にその体の崩壊と共にあった妹、ヘル。
父が今手にしている魔聖具を創ったのは、表向きは自分達に対して一人一人接するため、
とかいってはいるが、実際は妹の体と魂をいくつも複製することにより、それらを融合し、
妹の体の腐食と崩壊がとまらないか、と思って創ったことを長男である巨狼フェンリルは知っている。

「これが住んだら家族でどこかにいこうね」

「は…はいっ！」

先ほどまでうなだれていた巨蛇がその言葉をきき、ぱっとその鎌首をもたげる。
「では…門を開くぞ？まあ、お前たち家族が動けばこのたびの騒動もすぐに収まるだろう……」
もっとも、災厄の兄妹とまでいわれている伝説ともいえる三人が動くことにより、
逆に不安をあおるかもしれないが。
それでも今の現状よりははるかにまし、であろう。

ロキとアングルホダの子供たちである彼らは【念】を喰らう能力をも持ち合わせている。
すなわち、【ゾルディ】として発生してしまったそれらの器と、それに至るまでの念。
それら全てを喰らい尽くすことが可能。
ゆえに彼らが動けば今の事態は大きく好転する。
それこそ、【王】自らが再び奇跡のようなことを起こす必要性もなく。
全員がこくり、とうなづいたのを視てとり、
ゆっくりと【ソト・ホース】と呼ばれていた【門】はその扉を開いてゆく。
門が開いたその先に視えるのは、真っ暗な空間。
その先にそれぞれの界に続く道があり、そこから様々な界へと移動することとなる。
しばしそんな会話をかわしつつ、この場において一時期彼ら四人はそれぞれ別行動をとることに――

「…え…え…えええ～！？」

【言霊使い】の能力をもつ生徒がいる、とは聞いていた。
これまでの授業で彼女のクラスを受け持ったことはあったが、実際に直接会うことはなぜかなかった…とおもう。
ギルド学校の教師であるヘスティアに連れられてやってきたディアの姿をみて思わず叫ぶアテナの姿。
本来ならば、ディアはその身に不可視の術を纏っているのだが、傍にいる存在が存在。
その場に本来ならばいるはずのない、黒髪の少女の【力】により、全ての術や力は無効化されてしまう。
…もっとも、黒髪の少女自身にはまったくもってそのような自覚は皆無、なのだが……
両親以上、ましてや育ての親以上に誰よりも憧れている存在。
いくらその容姿が多少かわろうと、その気配は間違いようがない。

「Ｊｅ ｄｅｆｅｎｄｓ ｑｕ'ｉｌ ｆａｓｓｅ ｕｎｅ ｒｅｍａｒｑｕｅ ｓｕｐｐｌｅｍｅｎｔａｉｒｅ ｄ'ｕｎｅ ｃｈｏｓｅ ａｕ ｓｕｊｅｔ ｄｅ ｍｏｉ」
――我に関する事を付言するのを禁ずる

これ以上、何か問題発言をする前にひとまずけん制。
…ティアマト様!?どうしてそのようなお姿でこのような場所に!?
そういいかけるアテナの声は声にはならず、ただただ口をぱくぱくさせるのみ。

「ディアさん。この子が先ほど説明しました言葉の通じない女の子です。
　あなたの能力ならばどうにか会話が成り立つのではないか、とおもいましてね」

道すがら、言葉の通じない少女のことは、

横にいる担任教師でもあるヘスティア＝アルクメーネより聞かされている。

「あ…あの？あなたは……」

連れてこられた少女…つまりディアの姿をぱちぱちと目をさせつつ凝視したのち、

戸惑い気味にと問いかけてくる黒目黒髪、さらにいえば上下とも黒服に身をつつんでいる少女。

この服装についてはディアは覚えがある。

かつてとある大陸の中の国にて【学生服】ともいわれていた代物。

しかも、今目の前の少女が語った言葉は……

「に…日本語！？」

思わず突っ込みをいれたディアはおそらく間違ってはいないであろう。

今ではもはや使うものは伝道師の一部のみくらいになっているその言語。

「に…？ディアさん？この子のいっている言葉がわかるのですか？」

ディアの言葉をうけて、横で首をかしげているヘスティア。

「え…ええ。と、とりあえず、しばらく私に任せていただけますか？」

どうして日本語なのか、というかどうしてこの御方がこんなところにきたのか。

疑問は尽きない。

しかもみたかぎり、当人は自分のことに気付いた様子もみえない。

どうやらその本質は一瞬見抜いていたようではあるが、それでも本質がわかたわけではなさそうである。

そのことからどうやら目の前のこの【器】となるべき【御方】は自分のことに関しても、

また力に関しても完全に覚醒を果たしていないらしいことは容易に

予測はつく。
…たしか、覚醒していない器ほど厄介だっていわれてなかったっけ？
おもわずかつて聞いたとある伝承が心をよぎる。
とりあえず、当人に自覚がない以上、普通に接する以外に方法はない。
それゆえに。

「えっと。はじめまして。とりあえず今はディア、と名乗ってはいますが、正式な名前は別にありません。
かつてはアースとか色々と呼ばれてはいましたが。好きに呼んでくださって結構です。
恐れ入りますが、あなたのお名前を聞かせていただけますか？」

とりあえず、ディア、という名はあくまでも偽名というか一つの仮初めの名。
自分達に正式な名前はない。
いくら何でも当人に自覚がない、とはいえ【器】である【意識体】に嘘はつけない。
それゆえに無難な自己紹介をかねて問いかけているディア。

「に…日本語!?よかった～。私、フランス語苦手で……。
あ、はじめまして。私、佐藤美希、といいます。というか、名乗ってるとか、正式な名前がないって…
あの、というか、ここ、どこなんですか？…私がいたところでは確実にない、とおもうんですけど。
そもそも、ここにも日本語があるんですか？」

聞きなれた言語をききほっとしつつも、
ディア、と自己紹介してきた少女に問いかける佐藤美希、となのった黒髪の少女。

「あの、あと気のせいかもしれませんけど、何であなたに関することをいわないように、
　とかいきなりこちらの女神さんにいってたりしたんですか？」
いくら何でも彼女にとっては神話の中の人物と同じ名前の女性。
ゆえに、名前を呼び捨て、というのも悪いような気がして、無難な呼び方で落ちつけている。
「あ～。すこし色々とありまして。彼女、暴走したら面倒なんですよ。
　周りが見えなくなる、というか自分の世界に浸る、というか。
そのためのまあ処置、と思ってください」
「・・・・・・・・・よくわかりませんけど。何となくは理解しました」
自分の世界に浸り、周りがみえなくなる、という友人は彼女、美希にもいたのでよくわかる。
あまり突っ込まないでほしい、という気持ちもよくわかる。
何しろ妄想などに突入してしまったかの友達を現実に引き戻すのにどれだけの動力を使ったことか。
…その友人も幾度も続く世界異変によって起こった噴火に巻き込まれて命を落としたが……
不幸であった、としかいいようがない。
彼女ののっていた飛行機がよもや噴火の余波に巻きこれまたのは。
噴火の兆候があるから、というので国から脱出の指示があり、避難していた矢先のことであった。
ふと今はもういない友人のことを思い出しつつ、はっと我にと戻り、
「とりあえず、そのことについてはあまり聞かないことにして。
　あなたも日本語を話せるんですか？というかここにも日本があるんですか？」
まずそれが聞きたい。
日本語がある、ということ自体がとても嬉しいが、しかしここでは

日本語ではあっても日本語、
というのではないのかもしれない。
すでにもう、女神だの何だのという存在がいる以上、ここが地球ではないとは自覚している。
それゆえの問いかけ。
そういえば、別の同じような進化を遂げていた惑星に彼女はいたって大姉様がいってたっけ……
ふと先日の会話を思い出し、彼女が多少なりとも勘違いをしていることにと思い当たる。

「とりあえず、詳しく説明しますね。あ、えっと、美希様は宇宙の仕組みをどれくらい理解されてますか？
　とりあえず、いえるのは、今美希様がいるここは、美希さまがおられた銀河系ではなく、
　別の銀河系であり、同じような進化をおそらくは遂げてはいるとはおもいますが。
　ここもまた、太陽系とよばれる恒星群にあたります」
この世界の文明レベルから見ても、宇宙だの銀河だのといった言葉がでてくるとはおもわなかった。
それゆえに多少目を丸くしつつも、
「銀河団までは私たちの惑星では把握していましたけど。
　というかそこまでは自由に旅も可能でしたし。他惑星への移住もできてましたし。
　ここにも銀河とか宇宙とかという概念があるんですか？」
とりあえず自分のもっている常識を説明したのちに、疑問におもっていたことを問いかける。

「ああ。これは私のような存在や、一部の存在しかそういった概念はもっていません。
　とりあえず……」

いいつつ、その場にかがみこみ、
ふっと手をかざしたその先にちょっとした小さな棒のようなものを虚空から取り出すディア。
そのまま地面にいくつかの円のようなものを描きつつ、その円をいくつか書いたのち、
その円もまた巨大な円と成り果てる。
「ここが、私たちの存在している銀河系です。ここはこの銀河の端の部分における恒星群、です。
　もっとも誕生してからまだ約５０億年しかたっていませんが。
　ここの宇宙が誕生したのが約１５０億年といわれてますから、まだまだ若い銀河なんですけどね」
地面に描いた一つの円を指し示しつつも、佐藤美希、と名乗った少女に説明してゆくディア。
「宇宙地図とかはないんですか？」
「とりあえず、用途がないので私は今手持ちにはないのですが……
　とりあえず、大姉様を通じてならば手にはいる可能性はあります。
　ですがおそらく、あなた様が今までいたという銀河の地図はこのあたりにはない、とおもいますよ？」
おそらく、元いた場所の地図とこのあたりの地図を見比べて帰る方法でも摸索しようとしているのであろう。
そう予測をつけたがゆえに説明するディア。
元々、惑星であるディアは地図などといった代物は用をなさない。
そもそも、基本的に遠くに出向くとしても意思が惑星を離れる、ということは、
その間、惑星における意思が涸渇することにより、下手をすると惑星事態の衰退にもつながりかねない。
まだ同じ太陽系内部ならば移動しても問題はない。
基本となるべき核たる太陽の加護をうけている空間内ならばどれだ

け移動しようが問題はない。
が、加護が届かない場所においては、確実に自らの器である惑星に何らかの影響がでる。

「ともあれ、ここの説明に移りますね。ここには確かに昔、日本、という国は存在していました。
　でも今から四億年前。人類が愚かにもちょっと間違いを起こしまして。
　一度全ての地上における生命体はほとんど死滅してしまったんです。
　その後、新たな理を元にして今の仕組みの元に世界は再生したんですけど。
　今現在のこの惑星…あ、ここも一応、かつては地球、と呼ばれてはいましたけど。
　とにかくここには、今現在、天界や魔界、といったかつては神話、として人類に伝わっていた伝承。
　それらを元にした世界が実際に存在するような形になっています」
「？…あ～。もしかして、昔、この地にもギリシャ神話とかといった代物があったんですか？」
ならば背後にいる女神アテナ、となのった人物のことも納得はいく。
…あまり納得したくはないが。
「人類における空想力は目を見張るものがありましたからね。
　いろいろとありましたよ。クトゥルに北欧にギリシャに悪魔論に……
　もっとも、今ではそのことを知っているのは私のような【存在】達と、一部における【存在】のみですけどね。
　その一部の存在、というのは伝道師、とこの地では呼ばれています。
　彼らはかつて過ちを起こしてしまった人類の代表者です。

　二度と同じ間違いを起こさないために、その魂に枷をつけて理をもって楔でつないでありますよ」
その説明で理解できるかどうかはわからないが。
しかし一応説明しておく必要性はある。
そのような説明をうけつつも、ふと
「…さきほどから、私のような【存在】とか、何かあなたは人ではないような言い回しをされてますが…？
　それに、女神さまの反応もきになるんですけど…？」

文明が発達しているのならばまだわかる。
しかし、今、たしか目の前のディア、と名乗った少女は一度、人類はおろか、
生命体は全て死滅した、といっていたはず。
なのにどうしてそこまで詳しく説明できるのか、それがわからない。
しかも先ほどからの言い回しだと、どうも人ではないような印象をうける。
気のせいなのかもしれないが、何となく、目の前の少女の姿をしている人物は人ではない。
そのような気がして仕方がない。
始めて目にしたとき、その姿が一瞬、地球そのものにみえたのにも起因しているのかもしれない。

「まあ、隠していても仕方ありませんし。ええ。私は人、ではありませんよ？
　あくまでもいまは人のフリ、をしていますが。【器】は大切ですしね。
　私には実体があるようで実体はありません。私はこの惑星の意思、そのもの、ですので」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

一瞬、目の前の少女のいっている意味がわからない。
ゆえに、佐藤美希、と名乗った少女はしばし目を点にしその場にて固まってゆく……

「？ディアさん達は何を話されているのでしょうか？」
「…さ、さあ？」

いきなり判らない言葉を話し始めた目の前の二人。
ヘスティアからしてみれば生徒がいきなり意味不明な言葉で話し始めたにも気にかかる。
すくなくとも、ヘスティアにとって、ディアは守るべき担任している生徒の一人。
どうやら言葉の通じなかった少女に敵意はないようなので危険はない、とはおもうが。
それでも心配なものは仕方がない。
一方、アテナのほうはといえば気が気でない。
そもそも、どうして天界の補佐官であるティアマトがその髪の色と瞳の色を変えてこの地上界にいたのか。
言霊使い、とは聞いていた。
しかし、ティアマトならば全てのつじつまがあう。
というか、言霊使い、なのではなくて全てを統治する立場にいるティアマトならば全てが従って当然。

「…あ～…だから、大侯爵様が使いっぱしりをさせられていたのか……」

ここにいたり、学校の中で聞いていた噂をふと思い出す。
いわく、大侯爵、と知られてはいないものの、アスタロトことアシュタロスと名乗っている魔界の実力者。
その彼が一生徒にしか過ぎない少女にほぼ使いっぱしりのようにあつかわれている、とはきいていた。
よくよく話しをきけば、ヴーリ、と呼ばれる少女と、ディア、と呼ばれる少女によく使われているようではあったが。
当人に確認してみても、言葉を濁すばかりでラチがあかなかったが……
ヴーリという少女は、学校側からも竜族、と説明をうけたのですぐにピン、ときた。
というか、神竜様は何名前をかえてわざわざ学校にきてるんですか！？
という思いが先にたったのはいうまでもない。
しかし、傍にいるであろうディア、という人物が、実は補佐官、なのば全てのつじつまがあう。
アスタロト大侯爵もまた天界の補佐官に対し尊敬と畏怖の念をもっているのはアテナとて知っている。
彼女に命じられれば彼はまちがいなく動くしかないであろう。
基本、悪魔という存在は力が全て。
つまり実力のある存在には絶対に逆らえない。
本来ならばかなり意識が高騰し舞い上がること間違いなしのこの現状で、
どこか冷静でいられるのは、先ほどの補佐官、ティアマトの言葉による枷が利いているのだ、と理解できる。
あの言葉には、感情すらにも枷をかける効果があったらしく、ある程度までの感情はたかぶれど、
それ以上の感情の高ぶりは見受けられない。
しかし…しかし、である。

「…ほんと、何を話されているんでしょうか…？」

言葉の通じなかった少女。
その少女とまともに話している補佐官ティアマト。
補佐官ならば自分達の知らない言葉知っていても不思議ではない。
ないが話しの内容がきにかかる。
そもそも、地面に描いたいくつもの円は一体何を意味するのであろうか。
二人してそれぞれそんな思いを巡らせているそんな中。
「アテナ様！ここより下った先の町にてゾルディが大量発生した模様ですっ！」
突如として伝令兵が緊急事態が起こったことを告げにやってくる。
補佐官のこともきにかかる。
しかし、今自分のやるべきこと。
「わかった。ヘスティア殿。では私はいってきますので、後はよろしくおねがいします」
後ろ髪を引かれる思い。
とはまさにこういうのをいうのかもしれない。
しかし、憧れの補佐官にいいところをみせる機会には違いない。
ゆえに、気を取り直し。
「あいわかった！私が直接にでる！皆は民の避難を優先するようにっ！」
『はっ！！』
凛とした姿勢でその場にいる兵士達にと指示を飛ばすアテナ。

何やら話しこむ、ディアと美希とは対照的に、襲撃の一方をうけた避難地、
と美希が感じていたが、実は被害における対策を施すための陣営の一角。

そんな一角においてそんな光景がしばし見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～動揺と状況説明？～（後書き）

宇宙、銀河誕生の定義は、定説よりも多少プラスしてある年代にしてあります。

例：宇宙誕生歴／１３７億年↓１５０億年

例：太陽系形成／４６億年前＋４億年↓５０億年

このような形で変えております。あしからず※現代宇宙論の最新定説を元にしてあります

まあ、器である美希には嘘はいえない、というか言ったら恐ろしい（まて）ので、

さらっと真実暴露しているディアだったり（力が力…ですからねぇ…しみじみ…

もっとも、二人は日本語で話しているので周囲にその認識は不可能、です。

美希という人物は、あるいみこの物語のもう一人の主人公でありヒロインさんｖでもあります。

まあ人物設定の紹介でおもいっきりネタバレしてますけどね（苦笑

さてさて、今回で襲撃？にまでいけるとおもったけど容量的に次回に回します。

光と闇の楔　～集いし存在達?～（前書き）

すいません。更新、かなり遅れました…
理由、先日より、DとXとFのキーがおかしかったんですけど…
打ち込みしてたらXのキーが外れ、さらにはDもまたおかしい状態に…
猫が歩き回ってるせいなのか…汗
ノートパソなのに修理にだすしかないのかなぁ（汗
キーが外れて打ち込みできなくなってまい、四苦八苦してどうにか応急処置…
何かなあ状態です・・・…

光と闇の楔　～集いし存在達？～

「…サクラ？どうかしたのか？」
ふと、その場にて立ち止まる仲間に気づき声をかける。
そもそも、先刻、ロキ神こととラウフェイ神が目覚めた波動を感知したばかり。
その前にものすっごくきにかかる波動を感知したのもまた事実だが……
「今、私の多次元空間感知システムに引っかかった波動があったのよね……」
かつて、自らが発明したとある装置。
先祖の考えだした定説が真実である、とがむしゃらに研究した結果、もう少しで実用化のめどがついていた。
その仕組みを使えば他惑星にもすんなりと移動ができる。ということからかなり注目をあびていた。
「…代替わりが近い、といってたからその関係じゃないのか？」
同じ黒眼、黒髪だとはいえ、出身地は彼と彼女とでは異なる。
とはいえ、彼女の先祖に日本人がいたことから、あるいみ同郷には違いないのだが。
「意思様が、このシステムにも問題があった、と指摘してたから。
あれから私も私なりにこうして研究を重ねてはいるんだけどね。
とりあえずこの銀河の全てにおける波動は感知できるようにはなったし」
伊達に約四億年、研究を重ねていたわけではない。
というか他惑星より高度なシステムを用いたコンピューターもどきの道具…
しかも、小さなブレスレット形式で全て打ち込み等が可能、という

代物を渡されたとき。
自分達がいかに小さい科学力しかもっていなかったのを思い知らされた。
しかし、彼女が開発していたその装置はある意味、太陽系の存続にもかかわるかもしれない、
というので研究の継続を求められて今に至っている。
数いる伝道師の中でも彼女はあるいみ性格も、またその存在も希有だ、といって過言でない。
ほとんどの伝道師が自分達が起こした、もしくは開発してしまった様々な事柄に対し、罪悪感を抱く中、
悲劇がおこったにしても、自分の理論は正しい、と時が経過してもいまだにその信念を貫いている。
確かに、彼女の研究自体はそう悪いことではなかった。
ただ、その研究がいまだ不完全のまま実用化されそうになり、
それが実験として許可されてしまったことから、あの悲劇はおこったともいえる。
一研究員にしか過ぎなかった彼女には国を止める手段はなかった。
まだ研究が完全ではない、といっても聞き入れなかった国。
そして…汚染されてしまったプログラム。
「あなた達が、神々の悪戯を創らなければ、あんなことにはならなかったんだけどね?尚人?」
「うっ…ま、まだいうか!?サクラ!」
サクラ＝フラクタル。
かつて先祖が発見、導入した幾何学の概念、それがフラクタル。
それらを発見、導入したフランスの数学者、ブノワ・マンデルブロの身内の一人が、
彼の死後、国の指示のもと、
その功績を後世に伝えるためにと、フラクタル、という名字を名乗ることとなった。
彼女はその子孫の一人。

フラクタル幾何学の中には、フラクタル次元、と呼ばれていた代物もあり、
彼女の一族…つまり、フラクタル姓を名乗ることになった彼らにより日々研究が重ねられていた。
そして、彼女の代になり、その構想が形となり、不確定ながらも実用化されようとしていた。
フラクタル次元、といわれていたそれは、より細かなスケールへと拡大するに辺り、
ぞれだけ完全に空間を満たすことができるか、という形を示す統計的な事柄を指し示す。
そして…幾多とある世界の構成にその原理をつかい道をつくることに簡易的ながらも成功した。
いまだ完全でなかったそれは、とあるウィルスプログラムにより暴走するきっかけとなってしまったが……
あのとき、世界がすぐさまに壊滅したのは何も世界中にあふれていた化学兵器だけの責任ではない。
そのことを彼女、サクラ＝フラクタルはよく理解している。
「とりあえず、ラー様にお伺いたててみるわ」
「…つうか、太陽のことをラー、と呼ぶの、お前くらいだよな～」
「あら？ホルンって呼んでる仲間もいるじゃない？」
「…だから、なんでエジプト理論?!」
何なら論議がずれているような気もするが、それは彼らゆえ、なのかもしれない。

伝道師。
永きにわたる時を生きているせいか、
そのあたりの概念がどうも多少の感覚とずれてきているのかも…しれない……

ゆらゆら。
巨大な体が空を舞う。
正確にいうならば、空を泳いでいるのであるが。
「だけど、ほんと、結構入り込んでるんですねぇ」
思わず感心した声が漏れ出してしまう。
眼下にはいる大地のいたるところにと入り込んでいる【心の欠片】達。
それらは【ゾルディ】へと変化しているもの、もしくはまだしていないもの。
中にはそこいらに生えている草木に乗り移っているもの。
そこにある姿は様々なれど、元をたどれば何ということはない。
それらがいまだに完全に力を発揮できないのは、この世界そのものが今現在、
あるいみ就寝状態、もしくは仮眠状態になっているからに他ならない。
この界における王夫婦が眠りについたことにより、ここ、妖精界もまた完全にとあるいみ眠りについている。
その結果、入り込んだ【念】達も力を発揮することなく、いわば放置状態となっていた。
ずるずるずる……
世界を取り囲むかのようにどぐろを巻きつつ空を呑みこまんばかりにその巨体を空に横たえる。
彼の本体ともいえる体はすでに惑星全てを巻き込みかねないほどに成長しているがゆえに、
こういった小さな妖精界などに関してはあっというまに掌握が可能。

彼の体より、念を寄せ付ける、もしくは引き寄せる【気】が発せられ、
まるでふらふらと罠にかかった獲物のごとくに
この妖精界にと散らばっている【念】の全てが空にと舞い上がり、
引き寄せられる。
ゆっくりとその巨大な鎌首をもたげると同時、また一つ、引き寄せられるように、
念の一つがゆっくりと彼の元にと近寄ってくる。
そのまま、あむっと鎌首をさげて呑みこむ様は、あるいみ恐怖を抱かせるには十分すぎる光景。
何しろ彼が鎌首を軽く振るだけで、恐怖の対象ともなっているゾルディなどがゆっくりと、
抵抗すらできずにふらふらと近寄ってゆく。
どこぞの言葉に、ヘビににらまれた蛙、というものがあるが、まにこの光景はその通りといえよう。
相手が蛙、でなくて【ゾルディ】となっている【念】達、という違いを覗けば。
シュ～……
彼は意図しないまでも、
静かに舌をちろちろと出す音のみがここ、妖精界の全ての空間へと響き渡ってゆく……

「ウォォオッンっ！！」
全てに響き渡るかのような遠吠え。
ぴりぴりと空気そのものが振動する。
念はあくまでも意思がないが、本能、といった代物は一応存在している。
その声に含まれている巨大なる力。
ゆえに、【念】のみの存在である【ゾルディ】や、【念】にその体を乗っ取られている存在達は、

その声をきき思わずその場にて硬直してしまう。
それは彼らの本能がつげる危機。
それと同時、同時にいくつもの黒き影が硬直したそれらの周囲を駆け巡る。
刹那。
硬直していたソレラは駆け巡った影にまるで蹴散らされたかのように瞬時にと消え去ってゆく。
いったいぜんたい、何がおこったのか理解不能。
その黒き影が小さな犬のような姿をしている、と認識できた存在がいったいどれほどいるであろうか。
「あいかわらず、合理的、ですねぇ。フェンリル殿は」
思わず感心した声をあげてしまうのは仕方がない。
自らのその身をいくつもの無数の小さな体に変化させ、一気に精霊界全体に解き放つなど。
普通では考えつかないこの戦法。
相手を叩き伏せるのではなく、あくまでも喰らうことを目的にしているので何の遠慮もする必要がない。
ゆえにフェンリルとしては手っ取り早い方法をとったに過ぎないのだが。
フェンリル達、三兄妹達はその身をもってして、念と精神体を分けることが可能。
ゆえに、体内に取り込んだ後にそれらを別々に分離すれば何の問題もない。
「我としては、面倒なのでそのまま精神ごと喰らいたいのが本音だがな。
　しかし、それだと困るであろう？ユリアナ？」
わざわざ体内でそれらを分離させ、正常な状態の精霊達のみ取り出す。
それはあるいみ面倒、といえば面倒。
やってやれないことはないが、そのまま精霊ごと喰らったほうが楽

なのは疑いようのない事実。
「今の状況が状況、ですらかね。
　すくなくとも精霊達を新たに生み出すのには多少の時間がかかります。
　それで力がなくて世界が疲弊しては何の意味もありませんし」
それでなくても先刻感じた空間の揺らぎ。
事態はおもったよりあまりいい方向には向かっていないらしい。
代替わりの時期より前によもや面倒事が舞い込んでくるなど夢にもおもっていなかった。
このたびの騒動と今後におこるであろう面倒事を比べれば、
今の騒動のほうがはるかにかわいらしいものにみえるのは疑いようのない事実。
応援にとよこされた、邪神ロキの息子であり、氷の覇王、ともよばれている巨狼。
そんな彼、フェンリルにと語りかけている精霊神、ユリアナ。
彼の吐息は魂すらをも凍らせる。
それは形をまだ成さない【念】とて同じこと。
彼がその気になれば凍らせられないものは一つもない。
唯一、あるとすれば【意思】のみくらいであろう。
「まあ、我はさくっとここを片づけて、父上達と合流するつもりであるからな」
せっかく永き年月を得て再開できたのである。
少しでもはやく父や母の傍に向かいたい、とおもうのは仕方がないといえば仕方がない。
何より、妹と父が一緒にいれば、父がどれだけ暴走するか…それが多少気にかかる。
何しろ、あの父は妹に近づく異性に容赦がない。
それはもうひたすらに。
母の一件があってのちにその行動はさらなるエスカレート具合をみせている。

もっとも、彼とて似たようなことがいえるので、第三者がみればどっちもどっち、と断言するであろうが。
父に言い寄る異性はまあ、いいとして。
あの父は自らに向けられる好意にとことん疎い。
それでも周囲に愛想をふりまくものなので、あるいみプレイボーイ、とまでいわれているが。
当人はいたってあるいみ天然極まりないのである。
見ているほうがはらはらするほどに。
「とりあえず、氷と化した精霊達は吐きだしておくゆえ、あとはまかせたからな」
「…まあ、それくらいなら私のほうでどうにかしますよ……」
理不尽にも穢されてしまった精霊達。
それらの精霊の魂すらフェンリルは念と分断させ、目の前に氷の塊として吐きだしている。
それらを復活させるくらいならばユリアナとてさほど力を消費しない。
しばし、精霊界においてそんな二人の会話が繰り広げられてゆく……

それぞれの場所でそれぞれの子供たちが与えられている役目を果たしているそんな中。
「お父様、はやく、はやくっ！」
傍に父がいる、ということがうれしくてしかたがない。
そんな彼女の思いに呼応するかのごとくに、
彼女が踏みしめた大地において新たな草花の芽が顔を出す。
基本、彼女が司っているのは【死】ではあるが、それは逆に【生】をも司っているともいえる。
「ヘル。力が漏れ出してるよ？」
そんな愛娘の姿がいとおしくて仕方がない。
ずっとさみしい冥界に一人きり。
自分の魂を守っていた大切な娘。

正確には、彼女が冥界に向かうにあたり、ハデスが彼女に付き添ったらしいが……
ハデスの人のなりはロキとてきちんと把握している。
弟であるゼウスとは対照的にまじめ一筋で、さらに義理がたい性格の彼のこと。
おそらく、弟の所業を申し訳なくおもい、
罪滅ぼしの意味をもかねて彼女を守ってくれたのであろうことは容易に予測がつく。
「あ。いけな～い」
父にいわれて、力がただ漏れになっているのに気付き、ぺろり、と舌を出す様は、
年相応の女の子、としかみえない。
透き通るかのごとくの白い体に柔らかな髪質をもっている見た目十代そこそこの少女。
一体誰がそんな少女の姿をみて予測がつくであろう。
この少女がその気になれば、かるく全ての世界が腐食し朽ち果てる、などと。
彼女がもたらす【死】は腐食によるもの。
その腐食は物質的なものだけにとどまらず、魂などといった精神体にも効果を発揮する。
元々、冥界を創る、という話しは出てはいた。
しかし管理するものが決まらずにそのまま天界と魔界において輪廻部門を作成し管理していた。
冥界という界ができたのは、天界大戦争より後のこと。
つまりは、ロキ達が眠りに就いたことをきっかけに、
ヘルが冥界の番人となることを希望したからに他ならない。
「しかし、ずいぶんとこれまた、地上界もよく汚染されたものだよね～」
思わず感心してしまう。
門をでてさほど経過していない、というのに、出くわす出くわす、

魔獣にゾルディ。
挙句は堕ち者。
ひどいところなどは、そこにある森一つ、完全に瘴気に冒されていた地もあったりした。
仕方がないのであっさりとロキがその力をもってしてその森そのものを完全に消し去ったりもしたのだが……
その後、ヘルが能力をつかい、その森を新生させた。
時がたてばそこにはあらたな森が芽吹くであろう。
新生、といっても元の姿に戻すわけではない。
ヘルの力はあくまでも、再生であり、新生。
死は終わりであり、そしてまた新たな再生の道でもある。
それらを司る力をもつもの、それが冥界の番人たるヘル。
「月の調でもつかって一気に全体を眠りにつかせたいところ、だよね。ここまでだと」
月の調べ。
それは天空より奏でられる聖なる歌のこと。
その歌い手となるべきものは、ロキことラウフェイとアングルホダの二人。
彼らが奏でる調べは惑星上における全ての存在に影響を及ぼし、また全てを眠りにつかせる効果をもつ。
さらに詳しくいうなれば、この惑星だけではなく、この太陽系全体においてその効果を発揮することが可能。
もっとも、そのような行動は今まで一度しか試したことはないが。
その試したときもまた、試しにやってみてと意思達にいわれ、実験的に行ったに過ぎない。
そんな父の台詞に、
「私、まだその調べ聞いたことがないけど。きっと奇麗なんでしょうね。
　だってお父様もお母様もとってもきれいな声をしてるものっ！」
きっぱりはっきり断言していいきるヘル。

実は、ロキに関してはその音程が多少ずれているのだが…そのズレは、
世界を構成している物質に影響を及ぼす効果をもっている。
アングルホダとともに歌うことにより、その効果はよりよく正確に発揮されるのだが。
「とりあえず、まずは意思様との合流が先、だね」
「そういえば、補佐官様って、今現在、人間のフリして地上界で生活なさってるんですって？」
時折、突拍子もないことをする補佐官の行動はよく耳にはしていたが、
今回もそのように行動しているとは思わなかった。
以前はたしか、姿を消した、とおもったらどこぞの界でたしか植物をやっていたこともあったときく。
「まあ、あの方はおもいついたら即実行、の方だからね～」
…だから自分のような存在ができた、といっても過言でないのだろう。
そう彼…ロキとしては思っている。
ある意味その通りであるが、それは彼女だけのせいではない。
むしろ、この【地】における全ての【惑星達の意思】の気まぐれと好奇心によって誕生した、
といったほうが正しいであろう。
「とにかく、こちらにおられるのは確かみたいだから。いくしかないでしょ」
「は～い」
ほのぼのとした会話を交わしつつ、
しかし襲いかかってくる魔獣やゾルディ達をあっさりと消滅させつつも、
美青年と美少女、といっても過言でない二人はしばしのんびりと道なき道を歩いてゆく……

「…ん…んきゃぁぁっ！！」
どさっ。
いきなり何かにひっぱられた。
いや、何か、というのはおこがましい。
こんな真似というか行為ができるのは、世界広し、といえども限られている。
「いたぁぁっい……ううっ。いきなりの呼び出し、何なんですかぁぁ～……」
おもいっきり尻もちをつきもはや涙目。
腰のあたりまで伸ばしている長い髪。
長い髪の理由は研究にあけくれていて切りにいく暇すらなかった、という簡単な理由なのだが。
うるうると潤んだ漆黒の瞳が涙を浮かべてその場に座り込み、何やら抗議の声らしきものをあげてくる。
うるうると潤むその視線で周囲をざっと見渡してみれば、見慣れぬ人々の姿と、
なぜかものすっごく違和感を感じる少女が一人と小さな猫。
そして。
「……今度はそんな格好をして何なさってるんですか？」
思わずその姿を垣間見て素直な感想をもらす彼女のその問いかけはおそらく間違ってはいないであろう。
そもそも、彼女達がしっている姿はといえば、青き髪に青き瞳であったはず。
それ以外は、黒き髪に黒き瞳に、金色の髪に金色の瞳。
まかり間違っても、銀色に近いような髪質の姿はいまだかつてみたことがない。
「気にしないの。それより、サクラ。あなたにはこの子の面倒をみてほしいの。
この世界において彼女と会話が成り立つのおそらく貴女くらい

しかいないしね」
彼女はその研究の性質上、魔力などにおける代物も研究をかさねている。
実際問題として彼女が開発した魔科学は魔界や天界においてかなり重宝している代物となっている。
いきなりその場に落っこちてきた…としかいいようのない、二十代後半であろう女性ににこやかに話しかけているディア。
「？ディアさん？あの？こちらの方は？」
いきなり現れたような気がするのは気のせいであろうか。
というかどうみても空かに落っこちてきたように見えるのは目の錯覚か。
もしくは本当に空からおちてきたのかもしれない。
どうやら目の前の教え子ディアの知り合いのようではあるらしいのだが…
ヘスティアからすれば不思議でたまらない。
というか、このディアさんの人脈っていったいどこまで広いのかしら？
そんな疑問がふと脳裏をよぎる。
そもそも、竜族に知り合いがいる、というのもあるいみすごすぎるのである。
さらには、悪魔…しかも、魔界の大侯爵とも知り合いらしい。
いくらディアが【言霊使い】だとしても、
それまでどういった生きざまを経験すればそんな人物達と知り合いになれるのか。
疑問はつきない。
「あ。先生。えっと。この子…でなかった、この人は。
サクラ＝フラクタル。一応日系二世なんですけど…っていっても意味がわかりませんよね。
とりあえず、こちらの美希様の面倒を見てもらおうとおもいまして。

呼び出してみました」
さらっと何でもないように言い放つディア。
もしも、ヘスティアが伝道師の名前を全て把握していれば、その名を聞いて驚愕していたであろう。
しかし、フラクタルの名は魔界や天界では知られてはいるが地上界においてはあまり知られてはいない。
ゆえに多少首をかしげただけにどとまるヘスティア。
「…様づけ?…あ、あの?…主様?」
何となく嫌な予感がして思わず問いかけるサクラの気持ちは間違ってはいないであろう。
そもそも、目の前の少女…この惑星の意思が実体化している彼女が【様】づけで呼ぶ相手。
それだけで目の前の黒眼黒髪、くろずくめの少女がただ存在ではない、と物語っている。
おもわず、素で主、と呼んでしまってもおそらく誰も責められはしない。
サクラ、と紹介された女性が多少声を震わせてそう問いかけたその矢先。
「Ａｓｓｉｓｔａｎｔ（補佐官様）～!!」
元気な声が辺りにと響き渡る。
ふとみれば、ぶんぶん手をふりつつもこちらにかけてくる少女が一人。
そしてまた、
「こら!ヘル!いきなり走ったら危ないだろう!?」
そんな少女の後ろよりかけてくる青年が一人ほど。
「……って、なんでこんなところにヘルちゃんとロキ様がぁぁ!?」
その姿をみて思わず叫んでいるサクラ。
「…いやあの、え?…ヘル?それに…ロキ?え…え?」
何やら聞き覚えのあるような名である。

ヘルといえば冥界の番人の名のはず。
さらにロキといえば今問題になっているはずの邪神ロキの名前ではないであろうか。
ゆえに戸惑いを隠しきれないヘスティア。
いくら何でも同じ名をもつ者が二人もそろってここにくるなどありえるのであろうか。
ゆえにヘスティアの思考は混乱する。
「あ～。先生。別に混乱しなくても大丈夫ですよ。彼らは別に敵意もってませんから。
　それより、ヘルちゃんは体のほうは大丈夫？」
「はいっ！ところで…そちらの女の子は？はじめまして！私、ヘルっていいますっ！」
人懐っこい笑みを浮かべ、そこにいる少女、美希にと自己紹介をしているヘル。
そんなヘルの笑顔に多少ほっとし、
「え？あ、はじめまして。私は佐藤、美希、といいます。この子はみゅ～、です」
「みゅ～！」
紹介され、ちょこん、とその懐から顔をのぞかせる子猫の姿。
「か…かわいいっ！！」
何やら子猫の姿をみて盛り上がっているヘル。
「Ｖｅｕｉｌｌｅｚ　ｌ'ｅｘｐｌｉｑｕｅｒ　ｃｏｍｍｅ　ｑｕｅｌｓ　ｔｏｕｒｓ　ｄｅｈｏｒｓ～！！」
話しがまったく見えない。
ゆえに、何がどうなっているのか説明してください！
と叫ぶサクラの姿がしばしその場において見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～集いし存在達?～（後書き）

片っ端からユーザーページを改めていろいろと見ていたら、一括設定、という項目発見。
ん?もしかして?とおもってみたら・・・あったぁ！
というわけで（何が?）なろうさんにおいても行間感覚設定がようやく…
…三月に投稿始めて今きづいた私っていったい…（自己嫌悪…
とりあえず、これである程度は見やすい設定になるかな?
…ビルダー編集ではそのようにして打ち込みしてるので……
背景の色は薄緑が目にやさしいから、真っ白よりはそちらのほうが見やすいし。
ともあれ、今のところ投稿してる作品さんは全部ひとまず設定変え終了です（汗

光と闇の楔　～反旗組織の要と始祖?～（前書き）

前回は、キーボードによる大問題発生したがためにあまり進まなかった自覚あり（汗
本当は前回で襲撃最中までいく予定、だったんですけどねぇ……
ちなみに、日本語打ち込みしてるので、さすがにXやらDやらFが使えないと、
打ち込みにもかなり苦労します（汗
今のところDは問題なしですが、XとFがまだ不安定…
どうもキーのしたについてるハメコミシキのやつがきちんとはまっていない模様…

「…何がおこったというんだ！？」
自分達の計画は完璧だったはず。
なのに、この状態はいったい全体どういうことなのか。
「ヤツラの説明と違うではないか！」
彼らがいっていたのは、かの品を使えば敵と同じ能力をもつ味方をえることができる。
そういって自分達にあの品が受け渡された。
たしかに、しばらくは問題なかった。
だがしかし、先日より突如として分けたはずのそれぞれの複製達が、オリジナル…すなわち、基本となった存在にと吸収されていったと報告があがってきている。
さらにいえば、複製達を吸収したオリジナルともいえる彼らはさらなる力を得たようでもある、とも。
やはり、始めからだまされていたのか。
そんな疑念も脳裏をよぎるが、
「それが、あちら側も今現在、情報収集に追われているらしいです。
　リュカを向かわせて確認しましたところ、彼らもその【能力】は把握していなかったらしく……」
複製【品】を本家が吸収すればそれだけ本家が強くなる、というのはどうやら相手も知らなかったらしい。
しかし、本家側はそのことを知っていたらしく、それが計画の狂いを生じさせている。
「…で、その肝心要なリュカはどこいったぁぁっ！！」
各界の状況を随時把握できる彼の存在は組織にとって必要不可欠。
だというのになぜか彼の姿はみあたらない。

「それなんですけど、姿がみえないんですよねぇ～……」
「あれ？何かいつのまにかそこに手紙らしきものがおいてありますよ？」
ふと気づけばいつのまにか、机の上に白い封筒らしきものがおいてある。
表には、丁寧に、【テケリ・ショゴス様御中】と書かれていたりするのだが。
ぴらり、と裏を返してみれば、そこには【リュカ】の名が記されている。
「手紙？……」
・・
・・・・・・・・・・・・・
ぴらり、と封筒をあけてみれば、その中には新たにもう一つの封筒が入っており、
そこには、
【脱会届＆退職届】
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
『なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？』
しばし、その言葉を垣間見たメンバーの全員の目が点になり、
次の瞬間、何ともいえない叫びが彼らの本拠地の中にと響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～反旗組織の要と始祖？～

「ううぅっ！大主様、人扱いがひどいっ！！」
思わず愚痴をいいたくなってしまうのは仕方がない。

絶対に。
そもそも、いきなり、三の意思より、大姉の元にいくように、と言われたとおもえば、
目の前に広がるは無数の異形の存在達。
「というか、何だってこんなに【バイアクヘー】もどきがいるんですか!?大主様っ!!」
愚痴をいいつつも、その手から発生させる光の光線のような代物でそれらを次々倒してゆくリュカ。
しかも、どうみても、ここの【ハスターの使い】…という感じではなさそうである。
確かに、この【地】否、【太陽系】にも同じような輩は存在している。
それらの外見をあげるとすれば、鳥でもなくモグラでもなく、ありや蝙蝠ではなく、
それらを融合したような複合した体が腐乱したいわゆる【合成獣(キメラ)】のようなもの。
しかし、しかしである、目の前にひろがる様々な色合いの異形の存在達は、
どうみてもここには存在しない生き物も混じっているようにと垣間見えるのは気のせいか。
「突如としてこの太陽系に侵攻してきたのよっ!こいつら!
とにかく、頑張って!リュカ!あっちが片づいたらロキ達も応援にくるはずだからっ!」
侵攻というよりはむしろ侵略に近い。
狙いはわかっている。
だからこそここで食い止めなければ自分達の未来はない。
文句をいわれつつも、その身すらをも実体化してそれらに対し応戦している大主、
ともよばれている、この太陽系の要たる太陽の意思。
「…だからって、何で僕がこんな物騒やヤツラと戦わないといけな

いんですかぁぁっ！！」
いきなりの呼び出しであったので、とりあえず退職願というか退職届はだしておいたが。
正確にいえば届をそのまま手紙の形にしてそこに移動してもらうように三の意思に頼んだのはつい先ほど。
いくら、いくら自分がかの異変時に突然変異をした種族とはいえ、宇宙空間にいきなり呼び出さないでくださいっ！
…そんなリュカの心の叫びを聞くものは…いない……

「そもそも、アース様、いきなり呼び出しておいて、さらには、この子が次代様!?」
もはやもう、頭の中は混乱している、といってもいい。
いきなり呼び出されるのはもう慣れた。
しかし、しかしである。
きょとん、としている表情をしている少女が【次期マァト】だと聞かされて混乱しないほうがどうかしている。
「あら、懐かしい呼び名」
「懐かしい、でなくて！で、私を呼ばれた理由は何ですか？」
そんな彼女の台詞にのんびりとそんなことをいってくる目の前の意思たる存在の言葉に
思わず突っ込みをいれつつも、理由を聞かなければ先に進まない。
そう判断して問いかける。
「この美希様なんだけど。前にいたところから当人も気がつかないうちにここにきてしまったらしくて。
…まあ、理由は判るけど。大姉様から聞いていた情報によれば、たしかこの御方がいた世界って魔科学とかが発展した魔力に満ちた世界だったはずなのよね」
魔科学などといった代物を完全に理解し、説明できる存在といえば、彼女、サクラほど適任者はいない。

かの地と比べてどこまで魔科学力が追いついているかどうかはわからないが、
すくなくとも、何もわからないままにここに【移動】した佐藤美希、と名乗った少女の道しるべくらいにはなる。
「というわけで。しばらくサクラ。あなた、この御方の付き添いね」
「何が、というわけなんですか！？」
「仕方ないでしょ？
そもそも、次代の【移動】は当人の無意識下と、【当代の意思】によって行われているもの。
かといって、この世界にこの次代様を一人で行動させるわけにもいかないし」
自分の意識はあくまでも、惑星、としての意識でしかない。
どうやら当人は自らを人、と信じて疑っていない。
そもそも、惑星の意思だ、と名乗ったときに唖然としていたことからも、
惑星などといった代物に意思があり形を成せる、とはゆめにもおもっていなかった、という感情が読み取れた。
本来ならば、【器】たる【次代】の感情は絶対に読み取れない。
しかしそれが読み取れた、ということは当人の感覚的には完全に人のそれと変わりがなくなっている。
ということに他ならない。
いつ覚醒するかどうかもわからない以上、
やはり、【人】としての心をもった存在を傍においておいたほうがよい。
何よりも少しでも話しが通じる相手がいることにより、彼女の気が休まれば、という思いもある。
「でも、補佐官様、なんで学校にかよってるの？」
二人の会話を横できききつつも、きょとん、と首をかしげてといかけているヘル。
「…まあ、いつもの気まぐれ…イエ、ナニデモナイデス」

そんなヘルに続き言いかけたロキに対し、横目でにらむとボウヨミで明後日のほうを見始めるロキ。
「あ、あの？ディアさん？この方たちはいったい？」
いきなり現れた美青年といっても過言でない青年と、美少女の部類に入る少女。
その名もロキにヘル…どこの北欧神話ですか？ねえ？
そんなことを思いつつも、事態についていけずに茫然としている美希。
いくら言葉が違えども、彼らは彼らでどうみてもフランス語で会話している。
ゆえに名前くらいならば把握は可能。
美希としても自分がおかれている立場と状況がまったくもってのみこめない。
そもそも、先ほどきいた、この惑星の意思が実体化している、というのも信じがたい。
だがしかし、彼女の知っている最新の研究結果においても、どうやら星にも意思がある、という研究結果は証明されている。
その意思がどのようなものなのかまではいまだに証明されてはいなかったが……
そんな茫然としている美希に代わり、戸惑い気味にとディアに問いかけているヘスティア。
伊達に教師、という立場についているわけではない。
不測の事態がおこっても、絶えず冷静に対処するように、との教育はうけている。
まったく状況が理解できない。
それゆえに問いかけるヘスティアの判断はおそらく間違ってはいない。
「…ロキ様にヘル様まで……しかも、なぜにサクラ教授まで？」
教授、とはサクラが自分のことをそう呼んでほしい。
と魔界、天界の存在達にいっている呼び名。

伝道師であることには違いがないのだが、自分はあくまでもいまだに研究者でありつづけている。
ゆえにこそ、そのように呼び方も徹底しているサクラ＝フラクタル。
そんな彼らの会話を聞きつつも、ぽそっとつぶやいているアテナ。
どうやら、補佐官に関すること以外ならば口にだせるらしい。
そのことに気付き、はっと口元にと手をあてる。
「そういえば、ロキはしばらく眠ってたから今の現状はあまりわかってないでしょ？
　アンと一緒に学校にかよってみる？今地上界における常識とか身につける手っとり早い方法だけど」
ディアがそういったその刹那。
「…三の姉様、それ、無理です。大姉様からの伝言です。
　次代様の気配に気づいた輩が襲撃してきた模様です」
「「「…………………………………」」」
ふわり、といきなりその場、彼女達の頭上にいきなり浮かぶ一つの人影。
「ええ！？偵察隊じゃなかったの！？アレら！？」
とりあえず、リュカを向かわせたのでどうにかなった、とおもっていたのだが。
いきなり現れた第三者に驚き、ディアとロキ以外はその場にて驚きを隠しきれない。
全員が全員、空に浮かんでいる子供らしき人物を唖然として眺めていたりする。
「ええ。偵察隊、ですね。…おそらく、波動を感知してやってきたのでしょうけど……
　私たち全員でどうにか対処しなければ、危険、との大姉様の判断です」
「…あ～…まあ、そりゃねぇ…こんな弱小な場の力じゃ、危険なのはわかるけど……」

世界の理に反対する輩は、何もこの世界における問題ではない。
そもそも、銀河そのものの存在すらをも不服としている輩も存在している。
つまり、完全なる滅びと終焉を願っている輩もいるのである。
そして…そういった輩が狙うのは、【器】である次代のマァト。
次代、という仕組みをとっている銀河において、器が死ねばやがてあらたな器が誕生する前に、
問答無用で銀河空間は疲弊し、下手をすればそのまま力が暴走し消滅してゆくこととなる。
彼らは常に空間の歪みを察知しては、それらに偵察隊を向かわせているらしい。
しかし、その偵察隊にここにその【器】が移動してきた、と知られるわけにはいかない。
絶対に。
ならば、今すべきことは……
「アテナ！あなたはロキとヘルに協力して！ラウ、こうなったら悠長なことをいっている暇はないわ。
…いっきに、始祖となった元を呼び出して、彼らの【思い】を一度駆逐しなさい」
すっと立ち上がりつつも、その場にいる、アテナ、ロキ、ヘルをそれぞれ一瞥したのちに、
きっぱりはっきりと言い放ち、
そして。

「Laissez vrai pouvoir de toi detacher maintenant ici et, comme pour la chose de moi intention, faites－le」
――我が意思のもと今ここに汝らの真実の力を解放せん

次の瞬間。
空気を震わさんばかりのそれでいて空気に溶け込まんばかりの不思議な旋律が、
辺り一帯にと響き渡る。

『C'ｅｓｔ　ｕｎ　ｃｏｅｕｒ（御心のままに）』

その声をきき、その場にてぴしっと自然と姿勢を正し、うやうやしく礼をとるアテナとロキ。
この【声】に彼らは逆らえない。
否、逆らうことすら畏れ多い。
旋律とともに、自らにかけられていた力の枷が完全に解放されたのを瞬時に理解する。
そのようなことができるのは、世界広し、といえどもアテナが知る限り一人しかいない。
いつもは、代理、として補佐官がその意思を伝えていた。
今回もそうなのか、しかし、声にふくまれていた力はいつも【天界】で感じていた巨大なる力そのもの。
少し冷静になれば疑問に思うであろうに、その力があまりに圧倒的すぎて疑問に思う間もない。
そしてヘルに至っては驚愕に驚きに目を染め、それでいてあわてて礼をとっていたりする。
この【声】は【補佐官】のものではない。
むしろ…どちらかといえば…
そのことに思い当たり、驚きをかくしきれない。
その可能性はありえるのかもしれない、とは予測していた。
時折訪ねてきていたアスタロトやノルンからも話しはきいていた。
自らが様々な知識を習得していった過程でもその可能性にはつきあたっていた。
しかし、こういった場でその自らの予測を裏付けることができるな

ど、夢にもおもっていなかったが。
「では、ヤツラをおびき出すのに、アスタロトも利用しても？」
「彼も退屈してるでしょうし。かまわないでしょ」
何やらさらり、ととんでもない会話をかわしているディアとロキ。
ヘスティアがその会話の意味を理解すれば、まちがいなく止めていたであろう。
「では、場が必要となりますね。とりあえず、今のところ結界が完全なのは、テミスのようですから。
　そこをエサにしておびき寄せますか？お父様？」
伊達にディアやアスタロト、さらにはアテナが滞在していたわけではない。
今、この地上界の中で一番強い結界が張られている場といえば王都テミスより他はないであろう。
自分達がうみだした場では相手も絶対に警戒するのが目にみえている。
しかし、元々ある地ならば彼らもそうは罠、とはおもわないであろう。
「ヤツラは絶対に入れないようにいじっておくから、そのあたりは任せたわ。
　それと、サクラ！」
「は…はいっ！」
何だかとても恐ろしいような会話を交わしているような気がするが、しかし口をはさむ立場ではない。
久しぶりにきいた、【意思たる声】に威圧されつつも、思わずその場にて硬直していたサクラであるが、
名前を呼ばれ、はっと我にと戻り、あわてて返事をかえす。
「あなたは、そこの先生と、あと次代様をつれて、とりあえず王都テミスへ。
　そこで次代様の護衛をあなたにたのむわ」
「は…はい！わかりました！…って、護衛ぃぃ！？」

何やらとてつもない任務をいわれたような気がする。
それはもうひしひしと。
ゆえにその場にて思わず叫ぶサクラをさくっと無視し、
「先生。すいません。なんかちょっと面倒なことになりそうなので。
　先生もとりあえず先に王都に戻っていてください」
「え？え・・？ディア…さん？！」
何が何だかわからない。
直後。
ディアが軽く手を動かすと同時、
その場にいるヘスティアを含む普通の人々の体が瞬く間にと輝きだす。
「…Ｔｒａｎｓｆｅｒｔ（転送）」
刹那。
ディアの言葉をうけ有無を言わさず、その場にいる普通の存在達全員がその場より消え去ってゆく……

ゆらゆら。
空中に浮かぶは二つの影。
一つは椅子らしきものに座った黄色いマントを全身に着込み、
その体には黒き帯状の、それでいていくつもの目らしきものがついているそれらが幾多も巻きついている。
それらのいくつかはゆらゆらと、浮かぶその体よりしたにむかって下がっており、
黒き帯状についている目がぎょろり、とせわしなく動いているのが見て取れる。
名状しがたきもの、とはよくいったもの。
そしてまた。
巨大などろどろとしたねっとりとした液体のようなまるでアメーバのような体をもちながら、

その体らしきもののいたるところには、目や鼻、そして口、といった代物が無数に浮かび上がっている。
いくつかの目や口らしきものは、ねっとりとした触手のようなものをその体より伸ばし、
その先に目や口を移動していたりするのが見て取れる。
形なき反逆者。
その呼び名が示すとおり、それにとって形、とはどうにでもなる不安定であり不定期な代物。
「…な、なんだ!?あれは!?」
「うわぁっ!?」
何やら背後からは誰ともなくそんな悲鳴が上がっているようではあるが。
「で、ロキ。こいつらはどうする?」
四億年、という年月はどうやら伊達ではないらしい。
しかもこれらにいたっては正確にいえば五十億年、という時間を蓄積して産まれた、といっても過言でない。
少しばかり、【補佐官】としての気配を解放したように見せかけた道具を彼らに渡した。
ただ、それだけ。
しかし、あっさりと【相手】はそれにひっかかってきた。
彼らの一番の標的は王であり、補佐官の抹殺。
計画が挫折しかけている今であるからこそ、トップを殺せば全ては丸く収まる。
その考えのもと、面白いまでにこの場にやってきた、二つの組織の主たるメンバー達。
さすがに自分達だけの力ではかなわない。
そう判断しているがゆえに、切り札、ともいえる輩を召喚している反旗組織のリーダー達。
彼らの組織のトップにたったものは、彼らの力の源となっている存在を呼び出すことが可能。

その存在の意義を知らないまでも、彼らはそんなそれらを自分達の始祖となりえた力、とあがめている。
事実、たしかに似たような存在であるので、その考え方は間違っている、とは言い難いのだが。
王都における頑丈な防壁。
国を守るためにぐるり、と王都全てを取り囲み張り巡らされている城壁の一部。
その要塞の頂上部分。
そこにつづく足場に出てきていた兵士達が空中にその姿を認め思わず叫びをあげる。
もしもそのまま【ソレ】に攻撃をしかけると、
それぞれから触手が伸びてきて攻撃してきた対象者を有無を言わさずに取り込んでしまう。
いきなりロキが訪ねてきたのにも驚いたが。
一番驚いたのは、敵のせん滅を好きにしていい、といわれた、ということであろう。
しばらく、生徒達のみを相手にしていたので少しばかり暴れ足りない…もとい、遊び足りな…
…でなく、何かも少し濃い行動がしたかったのも事実。
補佐官…否、王の命令でなくてもその案にすぐさま彼は同意したであろう。
「…な、なんなんですか!?アレはっ!?」
一人、それをみて驚愕の声をあげているアテナ。
彼女はソレをみるのははじめて。
まあ、神々の中でソレラの姿を見知っているものなどごくわずかなのだから仕方がない。
といえば仕方のない反応なのかもしれないが。
「何でもクトゥル神話といわれていたソレを参考にして創られた存在らしいぞ」
あまり形式が奇麗でないのでその容姿はあまりアスタロト的には好

きではない。
逆にしかし、ベルゼブブはその容姿をかなり気に入っていたりする。
「あっちの肉の塊がショゴス。形なき反逆者、とも呼ばれている存在。
　この地上においてそういった念を抱いていた輩の全てが実体化した存在」
世界に反逆心を抱く念は蓄積されていっていた。
世界が一度滅びかけてもその念が浄化されたわけではない。
どちらかといえば、ちょうどいいのでそれをも利用しよう、としてそれに器が与えられ、生み出された。
知性があるかぎり、どうしても反発心、というのは産まれてしまう。
ならばそれらを吸収する存在を簡易的に創れば多少なりとも安定するであろう。
かつて、伝道師、と今では呼ばれている人々が話し合いの結果生み出した一つの存在。
ちなみに、それの元、となったのはクトゥル神話、と呼ばれていた物語にでてくる、
元奴隷が反逆を企てた、という存在。
その話しを元にして創られた。
そこまで詳しく説明しないまでも、淡々と驚愕しているアテナに説明しているロキ。
今、この場にディアはいない。
他の惑星の意思と共に、惑星の外にて行動している。
「あのショゴスはひたすらに、周囲の生き物や魂などを取り込む性質をもつから気をつけるように」
「…って、そんなのがなんでだからこんなところにいるんですかっ!?」
むしろ、それはもはやもう、神話級といっても過言でない存在なのではなかろうか。
かつての天界大戦争においてたしか似通ったものが出てきたとお伽

噺ではきいている。
「補佐官様の気配を感知して、確実に息の根をとめるためにヤツラが呼び出したにきまってるでしょう？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
さらっと言われればそれ以上突っ込みようがない。
「生理的に私はショゴスは受け付けないから。私の相手はあちらのハスターでよいか？ロキ殿？」
幾度みても、アレはどうも生理的に受け付けない。
否、受け付けられない。
どろどろとした感覚はまあいい。
しかし、あの腐ったような匂いとぬるぬるとした感覚がどうも触りたくない。
いくら魔界の大侯爵とよばれ、実力者でも、嫌なモノは嫌であり、むしろ悪魔だからこそ好き嫌いがはっきりしている、といって過言でない。
「…ハ…ハスタ…って……」
天界の反旗組織のグループの名、ハスター・ホテップ。
その名の由来になったという、とある存在の名前。
天界のお伽噺にもでてきて、あるいみなじみの深いその名前。
さらにいうならば過去にあった天界大戦争においてもその存在は出現し、
天界のほぼ全てを壊滅状態にまで陥らしたらしい。
そんなとんでもない存在の名前がどういて今ここで、大侯爵アスタロトの口から発せられるのか。
ものすごくいやな予感がアテナの脳裏を駆け巡る。
間違いであったほしい。
そんな切実な彼女の願いもむなしく、
「名状なきもの、たしか彼の別名は死の使い。だけどアレは私には関係ない」
きっぱりといいきっているヘル。

いくら目の前のソレが実力ある存在だとしても、ヘルの力には到底かなわない。
それでなくても、先刻、【王】より彼女の本来の力の枷が解き放たれている。
彼女の体が崩壊しないのは、かつて補佐官ティアマトにもらったお守りがあればこそ。
「な、何？いったい、何が起こっているの？！」
この場で唯一、状況をしっかりと理解していないのは…おそらく、アテナ、ただ一人……

「な…何がおこったの？！というか、何これ！？」
気が付いたら、なぜか学校の校庭。
周囲にいる兵士達もまたざわめきを隠しきれない。
「…すご～い。これって瞬間移動？私のいたところでも瞬間は無理だったのに。
　よくて転送だったのに」
外、すなわち宇宙空間から特定の場所に向けての移動手段は確定されていた。
主たる施設などに移動する手段としてもその方法は用いられていた。
どうやら今度は自分だけでなく、周囲にいた人々もまた同じく移動していることからそう結論づけける。
「転送法式がもう確定されていたのですか？そちの世界では？」
おもわずそんな美希にと問いかけているサクラ。
研究者、としての心が騒ぐ。
未知なる知識はより知的好奇心を刺激する。
「え？あ、はい。サクラさんっておっしゃいましたよね？そうです。
　あの、ところで、さきほど、あの少女がいっていたことなんですけど……」

どうやら目の前の女性は日本語で会話がつうじる。
そのことにほっとしつつも、気になっていたことをといかける。
「え？ああ。三の意思様のことですか？とりあえず、改めて自己紹介をいたしますね。
　とりあえず、三の意思様こと、アース様…あ、アース、というのは私たちが以前、
　この惑星をそう呼んでいたから私がそうあの方も呼んでいるだけなんですけど。
　アース様よりあなたの護衛の依頼をうけました。サクラ＝フラクタルと申します。
　かつてこの地に普通の人間として生きていたときは、日系二世、です。
　私の母が日本人だったもので。次代様のお名前をお聞かせねがいますか？」
？じだい？ナニ、それ？
その意味が彼女、美希にはわからない。
だがしかし、とりあえず相手が丁寧に自己紹介をしてきた以上、こちらも丁寧にかえさなければ礼義に反する。
それゆえに。
「あ、私は佐藤美希といいます。あの、じだいって何ですか？」
「次代様は次代様、です。しかし、今は美希様、とおよびしますね。
　美希様はいったいどうしてこの地にやってこられたのですか？」
「それが、私にもわからないんです。母の葬式がおわってふらふらと歩いていたところ、
　いきなり巨大地震が起こりまして……」
大地が裂けたところまでは覚えている。
気づいたときには、別の大地に立っていた。
空から翼をもった女性が舞いおりてきたのも驚いた。
しかし、言葉が完全に通じる、というのは気分的にも安らげる。
何より、目の前のサクラ、となのった女性はどうみても見た目は日

本人そのもの。
もっとも、目鼻の顔立ちが整いすぎている、という感は否めないが……
二人がそんな会話をしている最中。
「あ、あの!?いったい何がおこったのか説明していただけませんか!?」
…一人、いまだに混乱しているヘスティアが、そんなサクラにと問いかけてくる。
おそらく、この現状をただ一人、きちんと説明できるのは彼女であろう。
そう判断しての問いかけ。
あるいみ、教師という立場上、人を視る目は確か、のようである……

光と闇の楔　～反旗組織の要と始祖？～（後書き）

明日の更新、もしかしたらかなり遅くなるかもしれません・・・

とりあえず、ようやく外（惑星外）の襲撃？も出せ始めた今日この頃…

さて、あと何話打ち込みしたら終わるかな？

ともあれ、クライマックスにむけてがんばります！

光と闇の楔　～伝道師サクラによる状況説明?～（前書き）

さてさて、なろうさんで毎回みてくださっている方々、ありがとうございますv
最近、日々の閲覧者が増えてきているのにちょっとびっくり（汗
話数がある程度すすんで物語もラストにちかづいてきたからかなぁ?
ともあれ、みなさんに感謝です!
さて、今回も頑張っていくのです!
さて…いつもの容量でどこまですすめるかな?ううむ……

光と闇の楔　～伝道師サクラによる状況説明？～

いったい何がおこった、というのだろうか。
常に誰かの念を取り込んでいた。
この世界は、念にあふれているので取り込みにはさほど問題はなかった。
しかし、自分達を視れるものと視れないもの、人間達は霊感、とかよんでいたが。
かつて自分達もまた人であったはず。
しかしその心はすでになきにも等しい。
かろうじて少しばかりのこっている自我において、ひたすらに他の念を取り込み巨大化していっていた。
自分の気に充てられて、気がくるったり、もしくは人生を狂わせたりする人々をみるのが面白かった。
動物などにいたってはどうやら自分が視えているようではあったが。
どれだけ長い年月をどこともなく存在していたのかすら覚えていない。
気がつけば、存在していた、という感覚。
しかし、今現在、視界というか感じる光景はいったいぜんたいどうなったというのであろう。
大地は裂け狂い、いたるところにてマグマが噴き出し、空にはゆらゆらと光のナニかがかかっている。
『あなた、という存在をこのまま消し去りますか？それとも、新たな生を望みますか？』
ふと聞こえてきたとある声。
声はすれども姿はみえず。
だけども、なぜか判る。

この声は、この【大地】といわず『星』より発せられている、と。
このまま消える？
自分が？
…まだ楽しみ足りないのに？
……我は……
『あなたという存在は、ここにいきた生物達のいわば心の証。
　再びこのような惨劇にならないためにも、あなたの望みをかなえましょう』
その瞬間。
我の意識は、深い、深い暗闇にと呑みこまれてゆく。
…次に目覚めたとき、自らの体が実体化している、ということに驚くことなど今はまだ知るよしもない…

光と闇の楔　～伝道師サクラによる状況説明？～

「えええええ！？」
というか、何、その報告！？
思わず突っ込みをいれたくなってしまうのは仕方がない。
絶対に。
「どういうこと！？大姉様！？」
「超新星が爆発して、ガンマ線バーストが大量に発生してるみたいなのよ。
　それらをどうにかこちらの『力』で緩和するのが精いっぱいなの。

なのであなた達個々の力に任せるしかないのよ」
下手をすれば自分の体にも影響がでるほどの、巨大な力。
「…最近、不安定になってきてない？空間の動き？」
ここ最近、そのようなことがたびたびおこっている。
まだ自分達のこの区域は若い分野にはいるのはわかっているが、
それでも、この連続しておこる、恒星や超新星などの爆発はただ事ではないとおもう。
「ここのマァト様が言われるには、主体となる代替わりがそろそろ近いのでは、ということみたいよ……」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え゛？』
誕生したときに、その概念は自然とその身にきざまれている。
正確にいうならば、自分達の体を恒星している全ての物質の一つ一つにその情報が組み込まれていた。
ゆえに、その報告をうけて固まるしかない【意思】達の姿。
どちらにしても、意思であるカレラにできること。
ただ、時が過ぎ去り、経過を見守るしかない、のだから……
「……おもえば、あれが全てのきっかけのような気がするわ……」
目の前にこれでもか、と広がっている襲撃者もとい、偵察隊と思われる物体の数々。
「何回想にひたってるのよ！三の姉様！」
「おおかた、以前の器誕生によりおこったことを思い出しているんでしょ？
　まだ、三の姉のところはいいわよっ！あれのせいでうちの生物はことごとく死に絶えたしっ！」
あの当時。
一つの隕石だけが飛んできたのではない。
流星群のごとくに、ここ太陽系に隕石は降り注いだ。
それはもう、有無をいわさず。

当時、とある生物が徘徊していた三の惑星はいうまでもなく、
他の惑星においてもそれなりに文明や生命体は発展をとげていた。
しかし、その出来事をきっかけにして…他の惑星においてめまぐるしい生命体の進化と発展は見られなくなった。
それほどまでに、流星群として降り注いだ隕石群の被害は惑星そのものの環境すらをも変化させた。
まだ、三つの隕石のみが降り注いだ第三惑星はまだましであった、としかいいいようがない。
外惑星達がその身をもってして、またそれらの惑星にいた文明がどうにか流星群を破壊しようとし、
極力被害は最小限にと食い止められたかつての出来事。
しかし、最小限、といえども完全に防ぐことはできなかった。
通常ならばそれくらいの流星群はこの太陽系内に入ってくるまでに撃退することが可能であった。
しかし、その直前。
宇宙空間全てを襲った時空震。
惑星を構成している物質そのものに影響を及ぼし、惑星としての器を保つことに必死となっていた。
その矢先の出来事。
それだけならまだしも、その直後に正体不明な侵略者にこの地は襲撃をうけた。
後からそれは、器を探す世界に反旗を翻し、混沌へと還りゆく目的をした輩の仕業だった。
とはわかったが。
「ふたりとも！昔のことをなつかしんでないで、今はとにかく、この偵察隊を撃退するのが先でしょ！
　こいつら、ほっといたら、確実に全てを無に還そうとしはじめるわよっ！」
彼らの特性に、自分達の体をもってして、その体当たりしたものを無に還すという性質がある。

これがまた厄介な代物で、どうにかあがけたとしても、かなり力をそがれるのは必然。
力がなければ、そのままその自爆に巻き込まれ、体当たりされた存在は文字通り消滅してしまう。
全ての存在を原初たる無の世界へ。
それらが彼らの究極の目的、ときいている。
しかし、どうにか必死で生きようとしている輩にとってはそれは迷惑きわまりない。
たしかに、今は感傷に浸っている場合ではない。
「…ああもうっ！面倒！かといって大姉様が一気に力を解放したら私たちにまでとばっちりがくるしっ！」
当時、あまりにしつこい彼らを撃退するために、大姉であるこの星系の要ともいえる太陽。
その力を解放しそれらを撃退できたはいいものの、その熱と力の余波により、
太陽を取り巻く全ての惑星においてさらなる被害が発生し、一つの惑星などは完全に干上がってしまった。
それまでいくつかあった小さな惑星群などもそのときの余波により奇麗に燃え尽きた。
ゆえに、あまり無理はいえないのはわかっている。
わかっているが文句の一つもいいたくなってしまうのは仕方がない。
「仕方ないでしょ。私たち十惑星の意思でどうにかしないと」
とりあえず小競り合いは小惑星群の意思達にと任せている。
自分達にできること。
今は、ただ、ここ、太陽系の外より侵入してこようとしている輩のすなわち、撃退と駆除。
一つでも撃退しそこねて、こちらの情報が相手につたわるようなことになれば、
ここは確実に全ての銀河を巻き込んだ戦乱の地と化すであろう。
それだけは何としても避けねばならない。

だからこそ。
「わかってるわよ！そもそも、何でいつも三番目の私のところにくるわけ！？
　他の姉様のところでもいいとおもうのにっ！」
「それは仕方ないでしょ。今この地において、三番目のあなたのところが一番生命力豊か、なんだから」
さくり、と一番目の姉よりそうきっぱりいわれれば三の意思である彼女とてそれ以上文句のいいようがない。
「でも、わざわざこんな小さな恒星群にこなくてもいいでしょうにね～」
『…十の意思。それは誰もがおもってるってば……』
すでに、三の惑星に『次代』がやってきていることは伝えてある。
ゆえにこそ、一致団結して偵察隊の駆除を行っている、十の意思達。
十の意思。
それは、この太陽系を中心としたそこそこの力をもつ、惑星達の意思――

「え…ええと……」
説明してください。
といってくる人物の表情はとても真剣そのもの。
しかし、しかしである。
どこまで話していいのかがわからない。
そもそも、どうしてこの惑星の意思が生徒なんかになっているのかも理解不能。
「ですから、私のクラスの生徒である、ディアさんとあなたの関係と。
　それと、あのやってきた美青年と美少女の関係。それと！一体何がおこってるんですか！？
　ディアさんのあの力は、いくら言霊使い、とはいえ普通では考

えられないのですけど？」
大概の力は言霊使いであるからこそ理解ができた。
しかし、しかしである。
ただの一言のみで自分、ましてやあの場にいた全ての存在を移動させる力など、絶対にありえない。
物事には絶対、ということはありえないのはわかっている。
しかし、人一人が持ちえる力ではないとそれだけは確信をもっていえる。
「え。ええと。とりあえず落ち着いてください。えっと…たしか、あなたは。
　総合科Ｃ組Ａ担任教師、ヘスティア＝アルクメーネさん、ですよね？」
彼女、サクラの知識では、淡い金色の髪と緑の瞳をしている見た目二十代にみえるが、
その実、軽くゆうに百歳を超えている獣人族に属するギルド協会に所属している教師の一人。
彼女の得意とするものは担当している学科からも判断できるとおり、総合職に関係するもの。
ギルドの中には、様々な知識などを統合した総合ギルド、というものも存在し、
またそこに所属している存在は数多のギルドにおける定義や知識、そして実力を有する必要がある。
どうやら話しを総合するに、意思のことは【言霊使い】と勘違いをしているらしい。
視た限り、意思もまた、彼女に自分の正体は話してはいない模様。
ならばここで自分が彼女の正体を話す必要はまったくない。
とはいえ説明を何もせずにおく、というわけにもいかないであろう。
それゆえに。
「とりあえず、自己紹介をさせていただきます。私はサクラ＝フラクトル。

とりあえず、天界と魔界における技術担当を担っています伝道師の一人です」

『で…！？』

伝道師。

その言葉をきき、その場にいたヘスティアだけでなく、ざわついていた兵士達も驚愕の声をもらす。

それはそうであろう。

彼らにとって伝道師、とはまさに神にも等しい存在、としてあがめられている存在達。

いきなり、自分は伝道師です、といわれて驚かないはずがない。

そんな彼らの動揺をさらっと無視し、

「先ほどやってこられたのは、つい先日より問題になっていました、ロキ神当人と、その娘であるヘルさんです。どうやら自らの魂の欠片が勝手にばらまかれたのをうけて、

当人自らが出向いてこれらたみたいですけど」

ロキの魂と肉体が分離し、眠りについていたなど知るものはごくわずか。

というか、地上界においてその事実をしるものはまずいない。

ゆえにそこまで説明する必要性はない。

この場にクロノスより説明をうけた代表者がいれば詳しく説明する必要もでてくるであろうが、

すくなくとも、この場にいるのは、詳しく内容を聞かされていない存在達ばかり。

「私とあの御方の関係は、そうですね。昔なじみ、です。

いつもいきなり呼び出されたりするんですけどね。まあ別にいいんですけど。

あの御方はかなり様々な方面に顔が利きますし。その関係でロキ神とかとも知り合いですし」

正確にいえば、ロキなどを生み出したのもまた【意思】なのだが。

それをこの場で言う必要性はさらさらない。

「それと、こちらの美希様ですけど。どうやら、別の惑星。
まあ、簡単にいえば異世界よりどうやらこの世界に迷い込んでこられたみたいなんですよ。
ちなみに、どうして私と言葉が通じているのか、あの御方と会話が通じていたのか。
という点においては、この世界にもかつて、この美希様がつかわれている言語が存在していたからです。
私たち、伝道師の中にもその言語を扱っていた種族のものがいますし。
大異変…今でいう神話創世期、でしたっけ？とにかくそれ以前の文明の言葉です。
このかたがやってきた異世界にもどうやら同じ言語の文明があったらしく、それで言葉がつうじているんですよ」
とりあえず、相手からいろいろと質問をされるまえに一気にすばやく説明する。
一気にいろいろということにより、相手からの質問や疑念をまったくもって受け付けない、という方法。
それは完全に意図的に計算され、それゆえに一気に説明しているのだが。
しかし、説明されたほうとしては、余計にさらなる混乱をましてゆく。
神話創世期より前の文明だの何だの、というのはまあ、伝道師…という言葉がでてきた時点でわからなくはない。
しかし、天界と魔界の技術担当！？
しかも伝道師！？
さらに異世界！？
何やら混乱するような言葉ばかりが出てきているような気がするのは、ヘスティア達の気のせいか。
さらにいえば、顔が広い…とはいっていたが、そもそも、神々と顔見知り？！

いや、でも、魔界の大侯爵とすら顔見知り…しかも、完全に視た限り、相手はディアに敬意を示している。
それを考えれば考えるほどわけがわからなくなってくる。
と。
「あ～。サクラ様だ～。お久しぶりです～」
ふわり。
突如としてその場における一角が光り輝き、
次の瞬間、大地より湧き出るかのように小さな少女が姿を現す。
その姿は薄い蝶のような羽をもっており、くりっとした丸い瞳がとても印象深い。
見た目は二歳か三歳くらいにしか視えない幼い少女。
しかし、その姿は淡く光輝いており、その少女が普通の人ではない、というのを物語っている。
そもそも、その背に羽が生えていることからして、普通の人族ではない、というのは明白なのだが。
「あら？ティミじゃない。久しぶり。って姿を現したってことは、頼まれたの？」
可能性として、意思に頼まれたという理由がしっくりくる。
本来、彼女のような守護精霊達は滅多に人前に姿を現すことはさらさらない。
「ティ…！？」
ティミ、と今、この伝道師、となのったサクラ、という人物は呼ばなかったであろうか。
ティミとは、ここ、王都テミスを守護している守護精霊の名前では！？
さきほどから何だか信じがたい言葉ばかりきいているのでさらに思考が混乱してゆく。
「守護精霊たるもの。私の役目は役目ですし。
あ、はじめまして。私、ここの国の守護をしています精霊、ティミと申します。

お目にかかれて光栄です。とりあえずお母様にも頼まれましたので、
ひとまず安全な場所、寮へと案内いたしますね。
とりあえず、部屋でゆっくりと落ち着いてもらったほうがいいだろう、との意見ですので」
【外】に意識を向ける前に、ティミにそのように伝言をことづけていたディア。
「…よ…妖精!?」
まるで物語にでてくるかのごとくに光かがやく虹色の羽。
思わずその姿をみて目を丸くして叫んでいる美希。
「妖精、でなくて、私は精霊、ですけどね。でも日本語、ですかぁ。
尚人様達がよくその言語で話されていますよね」
しみじみとそうつぶやくティミの言葉に、
「いや、ティミ。それは美希様にいっても通じないとおもうぞ?」
思わず突っ込みをいれているサクラ。
確かに、尚人、といってもおそらく美希にはわからない。
というかわかったほうがすごいとしかいいようがない。
「しかし、寮?」
「はい。そこが今のところ一番安全とのことです。まあ、今からここの外では、
ロキ様達の攻撃が本格的に始まるでしょうし。
たしかにどこかの建物の中にはいっていたほうが正解ではあるとおもいますよ?」
いくらティミとて、本気をだしたアスタロトやロキ達の力を防げるはずもない。
この地には、ディアによる不可視の結界が張られているがゆえにここを利用することを了解したディア。
しかし、守護をまかされている立場のティンとしては、その決定は寝耳に水。
とりあえず、今優先すべきなのは、なぜかこの地にやってきたとい

う次代の保護。
「いや、私が聞きたいのは、寮、とは？」
「え？ああ、そこまでまだ知ってはおられないのですか？
　えっと。今現在、ギルド寮に入られているのですよ。あの御方達」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何をなさってるんだ？あの御方は？」
おもわず、ぽそっとつぶやくサクラの気持ちはおそらくディアの正体をしっているものが聞けば、
全員が全員、同意するであろう。
「お母様をおって、ヴリトラ様もここに簡易的に滞在されてますしねぇ」
「……ティミ。お前、かなり苦労してないか？」
「あ…あはは。でも、うれしいですよ？だってすぐそばにいられるだけで！」
それは本音。
たしかに気苦労はあるかもしれない。
だけども、いつも感覚でしか感じられない【母なる存在】を常に近くに感じることができる。
これほどうれしいことはない。
「…あ、あの？ヴリトラ？…それって……」
とある神話にでてくるあの邪竜？
ふと気がつけば、サクラ、となのった女性と、精霊、となのった幼女の会話が聞き取れる。
自分にもわかる言葉、すなわち日本語で話しているのだ、と理解したのち、
ふと気になったことを問いかける。
そもそも、ロキにヘル。
それだけでも北欧神話にでてくる神々の名前であったはずなのに。

いったいぜんたいここはどうなっているのかわからない。
「あ…あの?さきほどから、何を会話して…というか、守護精霊様まで……」
あまりに驚いてたのでよくよく確認がしきれなかったが、
たしかに、彼女のしっている守護精霊ティミそのもののようである。
彼女の知っている姿は手の平に乗るほどの小さな姿であったがゆえに、
いきなり現れた二歳くらいの女の子とその情報が結び付かなかった。
少し考えれば、精霊達には姿というか形はあってなきがごとしなので、
どのような姿にも形にもなれる、というのがわかったであろうに。
それほどまでに動揺し混乱している証拠、ともいえる。
「えっと。まあ、簡単にいえば、屋外は危険なので、屋内に入ってください。と守護精霊はいってます」
今の会話の全てを説明する必要性はまったくない。
それゆえに完結に説明し、
「先生達も危険なので、一応、屋内に避難しておいたほうがいいですよ?」
サクラがそういったその矢先。

どおおっん!!

大地を揺るがす轟音が、辺り一帯にと響き渡ってゆく……

「さすが、意思様の簡易結界!暴れてもまったくもって問題がないし!」
久しぶりに体を動かせるのが何となく楽しい。
おもいっきり魔力を全開にして攻撃をしかけても、
首都にかけられし結界はびくともしていないのがみてとれる。

永きにわたり眠りにつき、さらには魂と肉体が別々になっていた。
いまだにまだ少しばかり、魂と肉体がしっくりこないが、しばらく力をつかっていれば自然となじむ。
それゆえに、手加減などするつもりはさらさらない。
ロキの攻撃をうけ、その場にうかんでいた肉の塊もどきは、その体に大きな穴をあけるものの、
じゅぐじゅぐと音をたて、すぐさまその穴は肉によってふさがれてゆく。
「さすがはお父様。私も頑張らないと」
そんな父の姿をみつつも、すっと目の前に無数に出現した様々な生命達の融合体。
そんな体をもった干からびたミイラのような合成獣がヘルの目前にと飛来する。
ふっと手を正面にかかげるヘルの手に握られているのは一冊の本。
「我、今ここに、聖なる裁きをいざなわん」
ヘルが主に使用する武器、それは禁書、ともよばれているとある本。
死霊秘宝、ともよばれることもあるそれは、
あるいみ禁断の書物として三代書物の一つとして名を知られている。
ヘルがそうつぶやいたその刹那。
目の前に浮かぶ数多の合成獣もどきが一瞬のうちにその肉体を崩壊させ、瞬く間にと塵と化し、
さらにその塵もまた粒子ごと消滅し、やがてその姿は全ての源たる素粒子へと変質し、
そのままそれらはヘルのもっている本のほうへと引き寄せられる。
「……ネクロノミコン、か。では、我も久しぶりに力を発揮するとするか」
ヘルが禁断の書とも言われている書物、ネクロノミコンを使っているのならば何の遠慮もいらないであろう。
そもそも、手加減はしなくてもいい、とお墨付きをもらっている。
「久しぶりに、この私を楽しませてもらおうか？ふふ」

ずっと執務ばかりやっていたので暇で暇で仕方がなかった。
なのでわざわざ正体をかくしてこのたびの大会にまで参加していた。
しかし、大会の中にも彼を楽しませるような存在は見当たらなかった。
魔界の実力者であるアスタロトを楽しませるような実力をもっているものなどそうはいない。

「…いったい、何がおこっているんだ?」
轟音のみは聞こえてくる。
だけども、敵の姿があるときを境に奇麗に書き消えた。
そしてまた、対峙していたであろう人物達の姿も。
彼らは気づかない。
その攻撃と行動が彼らの視界に入らないほどに早いがゆえに、姿が消えたように映っている。
というその事実に。
そしてまた、自分達の王国の目の前でとてつもない戦いが繰り広げられている、というその事実に……

光と闇の楔　～伝道師サクラによる状況説明？～（後書き）

案の定、というか、いつもの容量では説明だけでおわってしまった今回の回…

あ、ネクロノミコン、はいうまでもなく、これもまたクトゥルさんの神話にでてくる禁断の書物の一つです

・・・ちょうどきりのいいところでくぎったので今回は１７Ｋと短いです

光と闇の楔　～光と闇と戸惑いと～（前書き）

ようやく、邪神三兄弟も参加ですけど、戦闘シーンはオブラートｖと明言しています以上、さらっと流しております。
まあ、ゼウスには尊い生贄になってもらっている、という認識で間違いないです（まて

光と闇の楔　～光と闇と戸惑いと～

「ふぅ……」
どうにかなったことに安堵する。
とりあえず、全ての命あるものに、無意味な恐怖を抱かないように。
と念波で伝えた。
かの存在…ゾルディの発生源、
それは何よりも強い恐怖や悲しみ、そして苦しみといった感情が核となる。
中には狂気の心を元にして産まれる輩も多々とはいるが、
大概、そういった存在は魔界によく発生する。
世界各地にばらまかれていた、【魂の欠片】はどういうわけか、
今まで誰も、彼の子供たちが呼びかけても反応がなかったというのに。
永き眠りから目覚めた彼自身がどうやら自らの魂の欠片をどうやったのか集めたらしい。
…おそらく、『神々の黄昏』を完全な状態で使用したのであろう、
というのが上層部の意見。
ゾルディ発生はいつものことなので、別段問題なかったものの、
今現在、もっとも問題となっていたのは、かの【種】の存在であった。
「…というか、ロキが目覚めたのはいいのか、悪いのか……」
おそらく、この一件が終われば彼による何らかの行動があるであろう。
以前のように世界を巻き込んだ争いにならなければよいが。
そのためには、自分と彼とで誠心誠意、とにかくひたすらに謝る必要性があるのであろう。

「…ただ、あのロキが大切にしている彼女を味見してみたかっただけなんだがなぁ…」
そうつぶやくあたり、いまだに完全に反省している、とはいえないであろう。
全ての欠片の反応が消えた、と報告があったのがつい先刻。
ゆえに、思わず執務室の椅子にとおもいっきり体を預けたその刹那。
どくっん。
間違いようのない感覚がその魂を震わすほどに感覚全てを巻き込んで、空気そのものが振動する。
「…こ…この波動は…王!?」
しばらく姿を消していた彼らの王。
先日の力の行使からどこかにいるのは判ってはいたが、それがどこかまでは特定できなかった。
波動はゆっくりと、世界に広がっているのか、とある一点より波打つように広がってきている。
「…発生源は…地上界!?」
今までいくら捜索隊を向けても発見できなかった、というのに。
しかし、この力の波動は王以外においては、補佐官しか扱えない。
扱えないどころか、他の存在が不用意にこの力に触れるとまちがいなく魂そのものから消失してしまう。
「ゼウス様!今!」
ばたん!
扉をあけて走ってくる数名の天界人達。
「わかっている。とにかく、我は王を迎えにいってくる」
どこにいるか、はたまた力の発生源がわかればどうにかなる。
万が一、姿を隠して力を隠していたとすれば、自分以外の存在だと見つけにくいであろう。
何より気にかかるのは、かの波動を感じて反旗組織に所属する存在達が黙っている。
とは思えない。

彼らの究極の目的。
それは、王を害し、自らが王になり変ることなのだ、と彼は見抜いている。
それゆえに。
「あとはホルスにまかせる！我はポセイドンとともにでる！」
『はっ！！』
一人で行動していても、まちがいなく隠れるつもりならば撒かれてしまうのは先刻承知。
ゆえに、常にその身を様々な界においている兄であるポセイドンと共に行くことをきめる。
彼ならば万が一、見つけたとして界を渡って移動したとしても、その能力でその波動を感知することは可能。
それゆえの決定。
と。
「ほぅ。今の波動はお前も気がついたか」
ふと気がつけば、いつのまにか目の前に背の高い一人の男性がたっている。
「ポセか。あれを気づかないほうがどうかしてないか？」
「はは。違いない。で、我とお主でかの御方を迎えにいくつもりなのだろう？」
「・・・・・・・・・ああ」
この兄は自分の考えを手にとるようにわかるのか、毎度のことながら先を、先を読んでくる。
たまには出し抜いてみたい、とは昔からおもっているが今までそれが成功した試しはない。
…唯一、ある、といえば自分が月の抱擁を手にいれようと行動を起こした時くらいであろう。
もっとも、それはそのまま世界の混乱に結び付いたのだが……
「では、いくか」
「あとは任せたぞ。ホルス」

いつのまにかその場にやってきていた光と闇を司る神であるホルスにそう宣言し、
そのまま、二人の姿は、オリュンポス山の頂上に位置している、彼ら主たる原初の神々、そしてまた神々に連なる存在達が生活しているとある宮殿より姿がかき消える。

彼らが王、と仰ぐ存在は、秩序宇宙の代弁者、ともいわれている崇高なる存在。
その意思は彼らが生きているこの【惑星】とも同意語とすらいわれている。
しかし、彼らはよもや、
王の意思そのものが、この惑星の意思そのものであることをいまだに知るよしもない……

光と闇の楔　～光と闇と戸惑いと～

ドォォッン！
バリバリバリっ！
空を切り裂かんばかりの轟音と、白き稲妻と黒き稲妻。
それらが同時に上空より発生し、その場にたゆたう二つの影にと直撃する。
『ほぅ…これは…』
『どうやら、我々の目的の一つがやってきましたね』
手を結んだ段階ですでに意思疎通はできている。

今、彼らがその身に取り込みたい存在。
それは、王はむりだとしても、補佐官、そしてまた、側近達。
精霊達に関しては、一度そのありようを堕とさなければ、自らの身に融合させることはできない。
自分達の駒である組織のトップに呼び出された。
自分達を呼び出すこと、それはすなわち、自分達に取り込まれることだ、と彼らが理解していたかどうか。
一度取り込み、その体を吐き出して、今では完全なる自らの駒とかしている組織の頭首達。
一度、体に取り込んだものは、取り込む前の姿のままに吐き出すことも可能。
しかし、一度取り込まれた存在は絶対的な服従を強いられる。
自我などを保ったままであるがゆえに、中には自らの身を消滅してくれるように、
力ある存在に願うものも多々といる。
…もっとも、大概は彼らを召喚する前に彼らのことを自分なりに調べ、
その危険性を察知し、それにささげる贄を用意して召喚するのが常、なのだが。
どうやらこのたびのそれぞれの組織の首領達はそういったことまで考えが回らなかったらしい。
つまり、自分達そのものが一度彼らに取り込まれ、完全なる僕として存在する形になっている。
…もっとも、その僕、という事実に気づいていない、というのもまた事実なのだが……
「…こちらの楽しみを奪わないでほしいんだけど。
　それはいいとして、ここであったが百年目！ゼウス！覚悟！」
「って、まてぃぃっ！今はそんな場合ではないだろうがっ！！」
ちらり、とその攻撃を仕掛けてきた存在の存在を一瞥しただけで確認したのち、

すっとその手にしっかりと銀色に光る杖を持ちながらも、
そこに浮かんでいる人物にむかって攻撃を仕掛けるロキ。
そんなロキに対してあわてて何やら叫んでいるゼウス、と呼ばれた男性。
「いや、ゼウス。それはキサマの自業自得だ」
そんな彼の横で、漆黒の十二枚の翼をはためかせ、冷めた視線をむけつつも、
淡々といいきっている一人の青年。
「お父様、あいつの体、腐らせてもいい？」
そんな彼の横で、何やらとてつもないことをいっているような気もしなくもない、ヘルの姿がみてとれる。
「…サタン殿。何であの色情魔と一緒にこられたんですか？」
彼がここに出向いてくれれば、彼ら父娘の反応がどうなるか。
目に見えていたであろうに、その場に浮かぶ、漆黒の翼をもつ青年にと問いかけるアスタロト。
「…え？え？って、今度は、天界と魔界の側近代理たち！？
　というか、何でこんなところにお父様が！？」
一人、いまだに状況が完全に理解できないらしく、いまだにパニックになりながらも、
それでいて、周囲にぽこぽこ、といって過言でない、ひたすらに空間より出現する異形の存在達。
それらを相手にしていたアテナはその場に現れた二つの人影をみて思わず叫ぶ。
一人は、魔界の実力者、王と補佐官に次ぐ実力者と名高い、暁の魔王。
そして、もう一人は、彼女の父であり、王と補佐官に継ぐ実力者、娘の目からみても、女癖が悪すぎると断言できる雷神ゼウス。
そんな父である雷神は、現れたと同時、
ロキとヘルにより同時攻撃をうけている。
雷でどうにか防いでいるようにもみえなくはないが、おそらく確実

に負けるであろう。
といって、援護する気はさらさらない。
「アスタロトか。というか、ここから王の気配を感じたのだが……
お主、何かしらぬか？」
ここにきた理由。
それはここ、地上界、しかもテミス王国付近から間違えようのない王の力の波動を感じたがゆえ。
視界の端のほうにおいては、

「って、話しをきけえっ！」
「問答無用っ！」
「女の敵！覚悟！」

何やらロキ親子に追いかけられているゼウスの姿がみえなくもないが、
そんな光景はさくっと無視し、淡々とそこにいるアスタロトにと語りかけている翼をもつ男性。
麗しい、といっても過言でないほど整った顔立ちは、老若男女、全てのものを虜にするほどの美貌の持ち主。
ロキと並んで天界、魔界ともに断言できる美貌の持ち主。
「ああ。それなら、これが原因、だ。補佐官様より預かったこの品の波動だろう。おそらく」
いいつつも、ふわふわとその場に浮かんでいる小さな球体を指し示すアスタロト。
そこには、黒と白、白き光と黒き光。
交互に光を放つ小さな球体が一つ浮かんでいたりする。
その珠より発せられている力の波動は紛れもない、彼らの【王】の気配を示す波動。
「補佐官様…って、ルシファー様がここにおられるのか！？
というか、どこに！？いきなりルシファー様と王が消えられて

我らがどれだけ混乱しているかっ！」
さらっというアスタロトの台詞に思わずくいつくサタンであるが。
「そういわれても。私も詳しくはしりませんよ。
詳しくしっているのはおそらく、王国の中にいる伝道師サクラ殿くらいでしょう。
詳しくしりたければ、サクラ殿に聞いてみるのですね」
もっとも、彼女に物ごとを乞う場合、実験体になってしまう可能性を考慮して問いかけねばならないが。

「父上、我らも協力します！」
「きさま！ゼウス！全ての元凶！」

何やらふと別の声が聞こえてくる。
声のしたほうをみてみれば、巨大な蛇と巨大な黒き狼もが加わって、二人と二匹による攻撃がゼウスにと繰り出されている光景が視界の端にはいってくる。
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
一瞬、その光景をみて思わず無言になるものの、
「サクラ殿が？…う、それはまあ、実験体になるのが嫌なのでおいとくとして。
ところで、どうしてお主やアテナ殿がここでこうしてハスターとショゴスと戦っている？」
まさか彼らの組織の始祖ともいえる存在がここにこうして出てきている、とは思っていなかった。
さくっと何やらいまだに攻撃の音と悲鳴が聞こえてきているような気もしなくもないが、
とりあえずそちらに関しては完全に無視することにし、今の状況を把握するためにも問いかける。
先ほどまで攻撃をしかけてきていた二つの存在もまた、
いきなり自分達そっちけので戦い始めたとある存在達のほうをしば

し眺めつつ、
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・そういえば、かつてかの存在の妻をあの色情魔が襲ったといったか？』
『そもそも、月の抱擁に手をだそう、とは雷神も馬鹿、ですよね』
何か別の意味でどうやら彼らにすら呆れられているらしい雷神ゼウス。
彼らもまた、そちらの攻撃に加わる気はさらさらないらしい。
数多とあった念の集合体。
それが自分達の存在のありようだ、と自覚している彼らだからこそあるいみ冷めているところは冷めている。
それでも、彼らが生まれた経緯は全てを無に、という概念が基本となっている。
かつての大異変のとき、消滅を選ばなかったのはほかならぬ自らの意思に他ならない。
暗闇に意識が呑みこまれ、次に目覚めた時、今の肉体を得ていた。
幾度も悲劇が起こるのならば、静かに眠りについていればよい。
それが、ハスターの考えであり、そしてまた、ショゴスの考え方としては、
全てが一つの意思のもと、強制的に統治されていれば悲しみも苦しみも関係はなくなる。
そのような概念のもと、彼らは今の今まで存在している。
それでも、かつての自分という形を構成していた数多の【念】はすでになりをひそめ、
それらの念はすでに昇華されて久しい。
ゆえにこうして、新たな念や意思を取り込むことでその体を保っている【ショゴス】と【ハスター】。
ハスターが僕として使用している【バイアクヘー】も、
ハスターが取り込んだ【念】に新たな器を与えているに過ぎない。
念波で会話を交わす、ハスターとショゴスとは対照的に、
実質、四対一で逃げ回っているゼウスの姿が見て取れる。

しかし、そんな彼に力をかそう、という奇特な存在はこの場にはみあたらない。
むしろ、
「しかし…あるいみ、組織の始祖であるこの二つの存在がここにいる。
　というのはあるいみ好機、か？今ここで一度浄化してしまえばしばらくは身動きとれなくなるだろうし」
今できること。
王や補佐官がどこにいるかも気にかかるが、何より今は目の前の彼らをどうにかするのが先決。
伊達に、暁の魔王といわれ、側近代理を務めているわけではない。
淡々と現状を簡単に把握したのちに、今後の対策を打ちだすサタンに対し、
「まあ、我らは補佐官様より遠慮はいらない、と申し使っているからな。
　この背後の王都に関しても、補佐官様が簡易的に結界を張られているから問題はないとおもうぞ？」
事実、簡易的な結界、と当人はいっているが、その結界を解除できるものなどいはしない。
いるとすれば、彼女…否、意思と同等たる存在か、もしくはそれ以上の存在のみ。
中にいる【次代の器】がその気になれば簡単に解ける代物ではあるが、
その当事者である【器】の美希がその方法を知らないのだから実質、この結界が解除される恐れはない。
「そうか。では、遠慮なく我もまたいかせてもらおう。
　ショゴス。そしてハスター。古の契約にのっとり、お前たちのその身を一時浄化するっ！」
契約。
それは彼らがうまれたときにつけられている聖訳。

その契約の内容をしっているのは、初期に生み出された魔王や神々、
といった存在達のみ。
『我らも我らとていじがある』
『今度こそ、暁の魔王、その身を我がうちにっ！』
何やら、またまた話しについていけないアテナを置いてけぼりにし
つつ、
周囲に意識を保っているのすらやっと、というほどの殺気と威圧感
が膨れ上がる。
「…あ、あのぉ？…私、王国の中で人々守ってもいいですか？」
このままここにいたらまちがいなく自分の身が危うい。
戦乙女という役職にあれど、実力差などは嫌でもわかる。
そもそも、この場にいれば自らの存在すら確実に消滅してしまいか
ねないほどの圧迫感。
「ん？ああ。そうだな。とりあえず、サクラ殿達の護衛をたのむ」
「は、はいっ！」
この場から離れられることにほっとしつつも、ちらり、といつのま
にか大地にころがり、
びくり、とも動かない父の姿を傍目に収めつつ、
「…ま、自業自得、だし」
そういいきり、すっと結界の中、すなわち王都テミスの中にと戻っ
てゆくアテナの姿。
アテナが王都に入ると同時。
王都を中心とし漆黒の空間が出現する。
それらは瞬く間に王都すらをも包み込み、周囲は漆黒の空間にと包
まれてゆく……

光と闇。
聖と魔。
それらは全て表裏一体。

片方が偏っていれば確実にどこかに歪みが生じてしまう。
それは唯一、数多の生命が残った惑星だから試せる事柄。
「…連絡係りに【ミ・ゴ】がやってきていなかったら、すぐさま対処ができなかったわね……」
他の太陽系、すなわち、ここことは別の恒星群より、この地にたまたま鉱物採掘にやってきていたとある存在。
かの存在の報告によりこの地に偵察隊がやってきているのが事前に判明した。
それが功を奏した、といえばそうしたのであろう。
完全に恒星の引力圏内に入る手前での攻防がどうにかこうにか繰り広げられている今現在。
かの存在はこの地に採掘にやってくるときの拠点として、
冥王星…すなわち、第九惑星における小惑星にその身をおいている。
彼らの呼び方において、第九惑星の呼び方は、【ユゴス】。
彼らは独自の進化を遂げており、ここ太陽系の言い方でその容姿を言い表すならば、
甲殻類が進化した、菌類の一種、としか言いようがない。
もともと、彼らの種族は菌とよばれし存在から進化しており、
しかし彼らもまた独自の科学力を発展させ、それゆえに数多とある恒星群にいろいろと出張を果たしている。
ここ、太陽を中心としている恒星群においては、彼らにとって貴重なとある鉱物がとれるらしく、
昔から定期的に彼らの種族はこの恒星群へとやってきている。
彼らが移動する際に用いる【次元の門】をヨグ＝ソトース、といい。
かつて地球上で発表されたクトゥルフ神話の【門にして鍵】の元となった存在でもある。
その、神話の概念は、今の地球上の理に反映され、【門】こと【ソト＝ホース】を生み出すきっかけともなっている。
ミ＝ゴが生息している恒星群の力はここことは比べ物にはならないほど。

恒星群の力は、そこに生息する命の数で決まる、といっても過言でない。
命が発する様々な感情。
それらが惑星を維持する力となりえる。
生きようとする意思。
そして未来へ続こうとする意思。
全てがあわさってこそ、初めて、【惑星】は【星】たるものとなる。
かつて人類が起こした過ちのこともあり、ある程度人類の抑止力も必要。
という意見が出て生みだされた一つの神。
「ナイアルの力も今回は役にたった、としかいいようがないわね」
「たしかに。アレを創りだしたときには、いろいろと意見でたけどね」
基本的に自ら積極的に【世界】とかかわりをもち、
人類が自ら破滅にむかうように暗躍する神として生み出された存在。
千あまりの体を有し、その体の端末はこの恒星群の広範囲においてちりばめられている。
別名、這いよる混沌。
確かに今までも人類という知的生命体による破滅が訪れかけていたのは事実。
惑星一つならまだしも、空間そのものすら危機に瀕する結果となりえた行き過ぎた文明と科学力。
それらを抑制する目的で、この恒星内においてのみその能力が発揮するようにと創られた。
…よもや、その存在がこうして活躍しようとは、今の今まで夢にもおもっていなかったが……
【ナイアルラルトホテップ】。
かの存在はこの恒星群そのものを守る最後の砦。
全ての惑星の意思が同意したときのみにその姿を現し、その力を有効に発揮することができる存在。

「とりあえず、このたびの偵察隊は全部駆逐し終えたみたいね？」
どこをどう探索しても、不純物が入り込んでいる気配はまったくもって感じられない。
偵察隊が出向いてくることは時々ある。
ここで彼らを撃退しても、すぐに本隊がくる、というわけではない。
そもそも、かの偵察隊は大概どの銀河などにも派遣されている、ときく。
駆逐されるのはいつものことなので、相手がそれに関して気にとめているかどうか、が問題となる。
ただの観察目的ならば、別のその偵察部隊が全滅させられたとしても、相手の本体は気にもとめないであろう。
おそらくは、不純物を撃退した、という認識だけにとどまるはず。
しかし、万が一、ここにかの存在が移動してきたという歪みを感知していたのならば全力をもってして、
この地に対して攻撃をしかけてくるであろうことは明白。
「とりあえず、三番目は今の内乱をどうにかはやくおさめなさいね。
私は私のほうでここの【マァト】様にお伺いを立てにいってくるから」
念派で問いかけられるような生易しいものではない。
かといって代理をたてられるものでもない。
ならば、自らの意思を分離して、自らが報告にいき指示を仰いできたほうがはるかに早い。
「大姉様。ミ＝ゴさんにたのむの？」
彼が出向いてきたのは、【次元の門】を通じてのはず。
その門をつかえば、すぐさまにこの太陽系を含む、全ての源。
この銀河の中心部にたどり着くことも可能。
「それしかないでしょ。とりあえず、各自、警戒はおこたらないように。
ナイアルには常に警戒態勢でいてもらいましょう」
力が及ぶ範囲外と範囲中。

それら全てにかの体ともいえる意思を配置し常に警戒は怠らないようにほどこしておく。

太陽系と呼ばれし恒星群の引力圏が及ぶぎりぎりの場所。
その境目、ともいえる空間において、実体化した意思達の会話がしばし繰り広げられてゆく――

ばたっ。
「「え？」」
いきなり、目の前の空間が揺らいだかとおもうと、突如としてそこに小さな物体が落ちてくる。
次の瞬間。
その物体は瞬く間に人型にと変化し、くたっとその場に倒れ伏している一人の青年の姿にとかわりゆく。
「…って、リュカさん！？」
そこに現れた青年に見覚えがあるがゆえ、思わず叫ぶ。
とりあえず安全な場所に、というのでディアの部屋でもある寮へとティミの案内をうけて移動していた矢先。
いきなり現れた正体不明の人物に思わずその場にて警戒態勢をとるヘスティアや兵士達とは対照的に、
迷わず倒れている青年のほうへとかけよっているサクラ。
見れば彼にしては珍しく、その体のいたるところに傷らしきものがあり、
しかしその傷はどうやら今では完全にふさがれているらしい。
傷らしきもの、とおもったのはどうやら、服にいくつもの傷が入り、ところどころ破れ、さらには血液らしきものが飛び散っている様がみてとれる。
「うう…サクラちゃん？…つ…つかれた…ごめん。ちょっとここでねらして……」

かけられた声に覚えがあり、かすむ目をどうにかこらし、
駆け寄ってくる人影の姿をみとめつつ、そのまま、くたり、と意識を手放す。
大主様達、人使いあらすぎっ！
そう心の中で叫びつつ、意識を失う彼の心理はこの場にいる誰もが知るはずもなく。
「って、ええ！？リュカさん！？ちょっと！ここで気をうしなわないでください！
　あなたがここにきたってことは、意思様達からの伝達をもってきたんじゃないんですか！？
　ちょっとぉぉっ！」
彼がいきなり現れる、ということは大概、意思達の伝達を伝えるためであることが多い。
それでなくても、何がおこっているのかよく理解できないこの状況で、
少しでも早く現状を把握したいサクラにとって、願ってもない情報源。
しかし、その情報源ともいえるべき存在はそのまま、くたっと気をうしなっていたりする。
それゆえに叫ぶサクラの気持ちもわからなくもない。
そんなサクラとは対照的に、
「？…あ、あの？この人は…いったい…？」
この人も、今いきなり現れなかった？
ここって瞬間移動が定説になってる世界なのかな？
すこしどこかずれた感覚を抱きつつも、戸惑いの声をあげている美希。
彼女の知っている移動方法は、出現する前と後に必ず光の粒子がその場に発生する。
しかし、どうみてもそんなものは発生していない。
すなわち、

わざわざその肉体の構造を【変える】ことなく移動しているのだ、
とおぼろげながらも理解ができる。
先ほどまで日本語で会話していたがゆえに、叫んでいるサクラの言
葉もそのまま日本語。
ゆえに、美希には何をいっているかは通じているが、
共に歩いているヘスティアやその他の兵士には何をいっているのか
理解不能。
「あ。ごめんなさい。この人は、私の知り合いで、リュカっていう
の。とりあえず」
「すいませ～ん。ヘスティア先生達、この人を運びたいので、
手伝ってもらえます？ひとまず背負ってでもつれてかないと目
覚めそうにないですし」
実際問題として、目を固く閉じたまま、リュカはまったく目覚める
気配をみせない。
おそらく、この服の破れ具合やこびりついている血の状況から何か
が起こっているのは疑いようがない。
首をかしげ不安そうにといかけてくる美希にとひとまず返事を返し、
後ろについてきているヘスティア達にと呼びかけるサクラ。
何がおこっているのか今いちよく理解しきれないがゆえに、
サクラ達がギルド寮にむかう、といったところ、詳しく説明を求め
られ、
結局のところ、ギルド寮に向かいがてら簡単に説明するハメになっ
ているサクラ。
とはいえ、サクラも詳しいことを知っているわけではない。
今現在における、魔界と天界における定義ならば説明は可能だが。
ゆえに、自分のことなどを踏まえて言葉を濁しつつ、説明しながら
進んでいたその矢先。
いきなり突如として目の前の空間より出現した青年。
その青年もまた伝道師、と名乗った女性の知り合いらしく、ヘステ
ィア達としては戸惑いを隠しきれない。

そもそも、伝道師、という存在がかかわってきた以上、何がおこっても不思議ではない。
そう心のどこかで覚悟していたが、こうも続けざまにいろいろと起これば状況把握より先に、
どこかあきらめた境地に陥りかけているのも事実。
「…え？運ぶ？…とは？」
そんな最中、いきなり声をかけられ戸惑いつつも、思わず問い返すヘスティア。
「このまま彼をここに寝かしておくわけにはいかないですし。
　ティミが案内してくれるディアさんの部屋にひとまず運びますので」
三の意思が今ここでディア、という名を名乗り、生徒をしている、というのはティミの情報で知りえた。
こちらが意思だの主だのというわけにはいかず、ゆえに呼び名を改めているサクラ。
今、サクラがむかっているのは、ディアが今現在拠点としているギルド寮の中にある彼女の部屋。
とりあえず、ただ入るだけならばその部屋の異常性に気づかれないであろう、とはティミの談。
何しろかの部屋は各場所につづく亜空間もどきが設置されている。
見た目は普通の他の寮の部屋と変わりないのだが、その奥に続く扉からは
どの界にも自在に移動ができるようになっていたりする。
さらにいえば、界、だけでなくどの惑星にも移動可能となっている。
そんな空間を普通の人が目にすればどのような反応をするかわからない。
もっとも、そのあたりの空間においては
完全なる真空の空間なので人でしかない存在は滞在することすらかなわないのだが。
「とりあえず、彼は私が背負っていきますので。手をかしてもらえ

ます？
　一人では完全に意識を失っている彼を背負うのはむりですし」
「は…はぁ……」
サクラがいっていることはたしかに一理ある。
あるが…やはりどこか納得しきれないのも道理。
しかし納得できないまでも、言われれば従うしかない。
少なくとも、伝道師云々というのが事実かどうかは不明であるが、
守護精霊ティミと普通に話している以上、目の前のサクラ、と名乗った人物が普通の存在ではない。
というのは明らかなのだから……

光と闇の楔　～光と闇と戸惑いと～（後書き）

ちらり、とでてきたナイアラルホテップ～！
かの神はかなりたしかに使い勝手がいいですよね（しみじみと
こちらのお話しでは、太陽系を守る要、として創られた、とい
う形にしておりますv
なんか、最近クトゥルフの神々がでばってるような気がひしひ
しと…（自覚あり

光と闇の楔　～踊らされし存在（もの）～（前書き）

ひっぱるだけ引っ張って、さくっと収束する不可思議な襲撃回
まあ、彼らは所詮、あて馬、なのですよ。ええ（始めからそのつもりだし
ククル？あれ？どこかできいた？とおもったひとは、初回の初回。
ククル村での依頼、にでてきたあのククル村、です。

光と闇の楔　～踊らされし存在（もの）～

「…襲撃もいきなりだったが、収束もまたいきなり…としかいいようがないな……」
おもわずぽそり、と本音がもれる。
このたびのきっかけは、一体何が原因だったのか。
おそらくは、反旗組織のものたちが、表だって動き始めたのが原因なのはわかる。
しかし、彼らの組織の工作は今に始まったことではない。
むしろ世界が新たに構築された直後から彼らの組織は存在している、そうきかされている。
手元に届いた報告によれば、妖精界、精霊界共、落ち着きを見せ始めているらしい。
何でも、ロキ神の子供たちが遣わされそこに存在している【念】の全てを喰らったらしい。
シアンとて念の浄化ができないわけではない。
むしろ、黄竜にしかできない、といっても過言でない。
彼の能力は基本、悪意に染まった念を浄化し、新たな道をつなげること。
それらを核として様々な力が使えるように創られている。
それが、全ての自然を従えし黄竜、という存在の定義。
心に感情があるかぎり、どうしても、負の念、というものは発生する。
かつての地上においてはそれらの念が勝手に暴走し、
能力あるものたちにより、その念は消滅させられるか、もしくは封じられるか。
そのどちらかの道をたどっていた。

しかし、今の地上というかこの惑星においては、それらの念は一度【ゾルディ】という器を得る。
器をえることにより、それらの念の感情をよりすばやく浄化することができる。
もっとも、浄化を願う念は簡単に自らを昇華するが、
そうでないものは仲間を増やそうとする性質をもつ。
【黄竜】という存在はそういった輩の安定を保つ役割をももつ。
気になるのは、地上界において【王】の気配が完全に察知されるように解放されたこと。
その結果、どうやらハスターとショゴリそのものがかの地に降臨したらしい。
その気配をうけて、後は任せた。
とばかりに、彼らの神であるヴリトラもまたこの場からいきなりかききえたのではあるが……
「…いつになったら我は静かに休息がとれるのだろうか……」
ようやく産まれた次なる黄竜もいまだ幼い。
どうやらこの気苦労は当分続きそうである。
それをおもうと気が思い。
されど。
「…さて、意識を界の全てに溶け込ませて一気に【念】の浄化をはかるとするか……」
もしも彼らにこの地に攻め込まれでもしたら、自分はともかく、
力のない存在達はことごとく彼らに取り込まれてしまうであろう。
それは避けなければならない。
だとすれば、彼らの力の源となる【念】は今ここで完全に駆除しておいたほうが能率がよい。
あまりこの能力は自身の力の大半を使うので使いたくはないが今はそうはいってはいられない。
「しかし…生きとしいけるものに心があるかぎり、【念】は必ず絶えず発生するからな……」

そうつぶやく黄竜、シアンの声はただただ霊獣界の空気の中にとかき消えてゆく……

光と闇の楔　～踊らされし存在（もの）～

「…って、先生!?」
バタバタと廊下に響く足音と、そしてまた、手前の扉が開く音。
向かい側の部屋の借主がもどってきたのかとおもい、部屋の扉をいきおいよくあける。
しかし、目にはいったのは総合科C組Aの担任であり、混合科目の担当でありヘスティアの姿。
混合科目、とは様々な知識をよりよく上手に組み合わせるすべを教える学科。
「たしか、ケレス＝アストレアさん、でしたね。
あなた達A組は確かククル村に出向いていたのでは……」
たしか、ヘスティアの記憶では、A組の生徒達は、ククル村付近に派遣されていたはずである。
ゆえに今ここにいること…すなわち、寮にもどってきていること自体がありえないと思うのだが……
自分がディアを呼んだときにはまだ彼女達は出発していなかったとはおもう。
ゆえに、学校に伝達してディアを呼んでもらうようにいったのはほ

かならぬ自分。
「それが、黒い十二枚の翼をもった男性が、私たち全員をここに飛ばしたみたいなんです。
　そうこうしていたら、何か外のほうで大きな音がしはじめますし……
　何より、ここから出ようとしても出られないんです」
ディアに伝言をした後に、クラス全体でククル村へと移動した。
何でもその付近にゾルディが大量発生した、とのこと。
到着してすぐに、黒き服装に身をつつんだ美青年がやってきた。
いまだに何が何だかわからない。
わからないが、判っていることはただ一つ。
この寮から外にでようとしても外にでられない状態が続いている。
それは、この場にいる寮に住まう存在達の安全を考えて、ティミが施している措置なのであるが。
説明もされずにそのような状態になれば、ここにすまう存在達は不安を募らせる他はない。
この場においては、入ることは可能でも、
ティミの許可がなければ外に出ることは不可能、という状態となっている。
それゆえに、ここに入るときすんなりとヘスティアを含む、
美希、サクラ、ヘスティア、そして護衛の兵士一人とサクラが背負っているリュカ。
その五人はすんなりとこの寮の中にはいることができている。
「黒い？ああ、サタンがきてるんだ。まあ、当然といえば当然かな？」
何しろ三の意思様、アスタロト達に自身の力を込めた珠を渡してたし。
その波動を感知してやってきても不思議ではないわね。
そんなことをふとおもい、おもわずつぶやくサクラ。
「…え？あ、あの？…サタン？…それって、暁の魔王…のことでは

ないですよね？」
何となくものすごく聞きたくはないが確認せざるをえないような気がして恐る恐る問いかける。
そんなヘスティアに対し、
「そうですけど？まあ、サタンがきたならゼウスもくるだろうし。
あ、ゼウスがくるなら、ロキ達の相手はまあ彼一人で十分か」
彼女とて、かつてのゼウスの所業を許しているわけではない。
むしろ同じ女として徹底的に処罰を！と思っている一人でもある。
「…あの？先生？というか、先生がどうしてここに？ディアに何か用ですか？
ディアはまだかえってないみたいですけど……」
どこにいっているのか、ケレスは把握していない。
たしかヘスティアが呼んで呼ばれていった、ということは知っている。
しかしあれから後、姿をみていないのが気にかかって仕方がない。
何かがあったのでは、と内心危惧しているものの、ディアに限ってそれはない。
とおもう自分もあって、常にディアが帰ってくるかどうか気にかけていたケレス。
「いえ、それは判ってるんですけど……」
ヘスティアとしても何といっていいのかわからない。

攻防、といえば攻防。
一寸先すら見えない闇の中、黒き光と白い光が交錯する。
バリバリとした音のみが真っ暗な空間の中に響き渡る。
そんな中。
ふっと突如として深遠の空間が一瞬のうちにと解除される。
自らの術の中で最高峰ともいえるその術を無とできる存在など限られている。

それゆえに。
「「…って、補佐官様!?」」
その声はほぼ同時。
予測していたその姿を視界の先にと認め、思わずさけんでいるサタン。
その姿を認め、同時に叫んでいる一人の少女と巨狼と巨蛇の三人組。
そしてまた、ある物体に対し攻撃をしばし繰り出していたロキもまたその声に気づき思わず振り向く。
なぜかぼろ布のようになっている物体はともかくとして、
その場にてハスターとショゴスと対峙していた彼らの声が思わず重なる。
今の【ディア】の姿は、いつもの認識誤差を起こすものではなく、むしろ認識誤認がおこりうる気配となっている。
つまりは、視る存在にとってもっともありえる姿にその様子は写り込む。
それが意味すること、それすなわち……
「ロキ達だけでなく、アスタロトはまあいいとして。わざわざゼウスとサタンまでやってきてるの?
とりあえず、さて。と、久しぶり、というべきかしら?ふたりとも」
攻撃をうけ空中に浮かんでいたその体は大地にその一部をつけている状態となっている。
そんな彼ら、ハスターとショゴスにむかって話しかけるディア。
『お…おまえは…っ!?』
その気配は忘れようがない。
ゆえにディアの姿を認識し同時に叫ぶハスターとショゴス。
どうしてこのような存在がここに器という仮初めの形をえて姿を現しているのかがわからない。
しかし、自分達の力では、この存在に勝てない、ということも理解している。

彼らの心の目に移りこんだその姿は、人間の少女、の姿ではなく、宇宙空間に浮かぶ真っ青な惑星、そのものの姿。

「アスタロト。例の珠を」

「は、はっ！」

いきなり名前を言われて、先ほど預かっていた品をディアにと手渡すアスタロト。

サタンとしては何がどうなっているのかいまだに現状についていかれない。

そもそも、どうしてここに補佐官ルシファーがいるのか、という疑問もある。

聞きたいことは多々とあるのに、

その独特の雰囲気と威圧感に圧倒されうまく言葉にならないのも事実。

「さて…と。本来ならあなた達にはもうすこし泳いでいてもらいたかったんだけど。

　そうもいってはいられない状態になりかけてるから、一度また眠りについてもらうわ」

アスタロトから受け取った珠を、ふわり、とその片手のうちにとふわふわ浮かべ、

そして、次の瞬間。

「Faites un sommeil dans mon corps; un coeur de la tristesse

　Il n'est pas enveloppé dans un adoucissez maintenant」

――我が体内に眠りし嘆きの心　今ひとたびの安らぎにつつまれん

ディアが周囲の空間すらをも震わせるごとくの言葉を紡いだかと思ったその刹那。

目の前にて驚愕しているのか身動きとれなくなっている二つの物体

の周囲の空間がゆらり、と歪む。
『…なっ！これは…また我らを閉じ込めるというのか!?母なる意思よっ！！』
自分達の意思を残していたのもかの意思であり、そして封じたのもまたかの意思。
その本意がわからない。
だからこそ思わず叫ばずにはいられない。
「本当ならばゆっくりと、不安要素を全部吐き出させたかったんだけどね……」
それは本音。
しかし、今はそなん悠長なことはいってはいられない。
とりあえず、この太陽系内にむかってきていた偵察隊は駆逐した。
しかし、しかしである。
今、この場に次代の器がやってきているのもまた事実、なのである。
余計な不安要素はないほうがいい、というのはいくらディアとて理解している。
万が一、彼女が無意識のうちに、この地の消滅を願えばその願いどおり、
有無を言わさず、この太陽系といわず銀河系そのものは瞬く間に消滅するであろう。
それがわかっているからこその、仮初めの処置。
彼らを新たな使うにしろ、解き放つにしろ、今この問題を解決してからでも問題はない。
時がたとうとも、心ある存在達がその心に野心のような感情を抱くかぎり、
彼らのような存在はどうしても必要となってくる。
いつの日か、
まったく【ゾルディ】たる念が発生することなく日々を過ごすように生命体が発展すれば、
そのときこそ、彼らは本当の意味でその存在ごと昇華されることと

なる。
しかし、今の現状はそうは問屋がおろさない。
むしろ、彼らの力をより強大にする【心】…すなわち【念】が世界には渦巻いている。
急激にその存在のありようが、何かに吸収されるごとくに奪われてゆく。
傍から見れば、それらの体が小さな粒子の光と成り果て、
ディアが手にする球体にまるで吸い込まれるかのごとくに
それらの粒子が吸い込まれていっているように垣間見える。
事実、彼らのもつ力、存在のありよう。
それらの全てが形をかえ、ディアの手にしている球体にと取り込まれていっているのだが。
『…なっ！ま…また、我らを封じ…ぁぁぁっっっ』
以前も目覚めたとき、このようにして封じられた。
いつも気がついたときにはいつのまにか封印から解き放たれていた。
そのときは、外部からの干渉があり解き放たれたのだ、と把握するが。
彼らを解放するためには、彼らの血族の力、その意思を引き継ぐ輩達の力が必要となる。
彼らにとってこの休息は安らぎとなるのか、それとも苦痛となるのか。
それすら今の彼らの【心】ではわからない。
ゆっくりと、だが確実に目の前の二つの物体の姿がかすんでゆき、
その姿はやがて半透明となりはて、
最後のあがきのような、それでいて哀れさを誘う悲鳴のような声をあげつつも、
やがて彼らの存在そもものが、全て球体の中にと吸い込まれてゆく。
いきなりのことで何がおこったのか理解不能。
自分達が毎回、毎回、苦労していたのが何だったのか。
とおもう光景。

「…そういえば、以前、ヤツラが表にでてきたとも、補佐官様が球体に封印していたな……」

今の今まで忘れていた。

というか、毎回、毎回、封印後、彼らがどうやって封印されたのか、どん存在もその事実を覚えておらず、不思議にはおもってはいたが、そんなものだ。

とどこか心の中で納得しており、誰も調べようともしなかったことに思い当たる。

それらは全て【意思】より干渉をうけているがゆえのことなのだが。

彼らからしてみればそのような事実をしるはずもない。

ふとみれば、互いの組織を率いていた頭首達、であろう。

おそらくそう、と思われる物体が二つ、その場に転がっているのがみてとれる。

どうやら意識はないらしく、ぴくり、とも動かない。

しかし、その体から発している生命力からみるにあたり、どうやら死んではいないらしい。

ぽそり、とつぶやくサタンに対し、

「ルシファー様。それで、こいつらはどうしますか？」

伊達にしばらく教師と生徒、という立場でこの地で過ごしていたわけではない。

慣れ、とは怖いもので、

今、ディアから発せられている威圧感を多少のものともせずに問いかけるアスタロト。

この地にいるのは、天界と魔界の関係者のみ。

ゆえに別にその名を呼んでも差し支えはないであろう。

もっとも、王国の中においては、この名は滅多と呼ぶことはまかりならなくなっているが……

「審問官であるロトちゃん、あなたがきちんとした裁きを受けさしなさい。

このまま彼らを拘束して連れてもどってしかるべき処置を」

「はっ！」

天界においても、魔界においても、罪を犯せば必ず、審問員を通すこととなる。

その罪の大きさにより、魔界、天界とわず裁くこととなるが、魔界の審問部はより大きな罪を裁く場でもある。

大概小さな罪などは天界でも裁かれることはあるが、ほとんどの犯罪者は魔界に送られ、

そこにて裁きをうけることとなる。

もっとも、それらの裁きを嬉々として行うとある悪魔、暗黒大公メフィストフェレスがいるのだが。

彼女自身も犯罪者を自ら死をもって裁く位置に所属している女性形体の悪魔。

彼女が主に裁くのは、なにかしらの罪を犯していたり、悪い考えを持つ者ばかり。

これまでの反旗組織のメンバーもまた、彼女の手にかかり命を落としたものも少なくない。

もっともそれらは今この場ではあまり関係ない、といえば関係ないのだが。

アシュタロスがうやうやしくお辞儀をしたその刹那、パチン、と指をならす。

それと同時、彼の足元にと今までなかった彼の影が浮かび上がり、その影が瞬く間にと形をなす。

そこから現れる一つの人影。

「およびですか？大侯爵様」

その影は瞬く間に女性の姿を形どり、その場に膝をついて頭をたれる。

「うむ。我はこの罪人達をつれ魔界に戻る。お前はこの場のあとのことを任せる」

彼女ならば補佐官の傍にいても違和感はないであろう。

というかむしろ、彼女もまた補佐官親衛隊の一人である。

それをしっているからこその召喚。
「…はっ！…って、サタン様！？…って、えええ！？ルシファー様！？どうしてこのような場所に！？
　はっ！？私、まだ今日はお風呂にはいっていませんのにっ！」
アスタロトの言葉をうけて、さらに深く頭をさげたのち、
この場に彼以外の人物がいるのに気付き、そちらに視線を向けた後、
一瞬硬直したのち、その直後おもいっきり叫ぶその女性。
どこか叫ぶ内容がずれているような気もしなくもないが、それはまあいつものこと。
「……メフィ。毎回いうけど、
　召喚される前にいつもお風呂にはいろうとするのはどうか、とおもうわよ？」
おもわずそんな現れた女性…メフィストフェレスに対し苦笑まじりにいっているディア。
すでに先ほどまでこの場に満ちていた圧倒的なまでの圧迫感はどこにも感じられない。
とはいえ、いまだに全身を押しつぶすような圧迫感が周囲に満ち溢れている。
おそらく今、この場に普通の存在が介入したとすれば、その気に耐えられず、
まちがいなく気絶するか、下手をすれば死にいたるであろう。
それほどまでの威圧感。
ちなみに、彼女の基準からして、
上司であるアスタロトに呼び出しをうけるときには、身だしなみを整える程度。
さらにその上の存在、特に補佐官や側近であるサタンに呼び出されるときには、
なぜかその前に必ず全身を清めるといって長い風呂にはいって召喚に応じていたりする。
以前もアスタロトが召喚するたびにその都度風呂にはいっていたの

だが、
延々としたアスタロトの説教…というか説得によりどうにかそれはやめたらしい。
ちなみに、理由は簡単。
しばらくの間、風呂にはいっても無駄だ、とおもわせるほどの仕事内容を押し付けたからに他ならない。
その結果、仕事の後に風呂にはいればいい、という考えに落ち着いた。
「では。ルシファー様、私はこの者たちを連れて尋問するために一度もどりますゆえ」
「お願いね。さて。と、サタン」
「…は、はっ！！」
いきなり名前を呼ばれ、はっと我にと戻るサタン。
聞きたいことは山とあるのに名前を言われれば言葉にならない。
というか意見することすらおこがましいほどの、圧倒的な存在感がそこにある。
「とりあえず、ここにて立ち話も何だから、町の中にはいるわよ。メフィもいらっしゃい。
　それと…いまだにあのぼろ布を相手に攻撃してるあの子供たちとめてきて」
いいつつも、ちらり、といまだにころがっている何かに攻撃をしかけている三つの影。
とはいえ、元々の姿ではその巨体だけで周囲を覆い尽くしてしまいかねないがゆえに、
どうやらその姿を多少なりとも小さくしているようではあるが。
その影を視界にいれつつも、サタンにいっているディア。
「はっ！どこまでもおともいたしますっ！」
一方においては、
補佐官ルシファーに直接命令をうけた、というのもあり感極まっているメフィストフェレス。

「…あの御子様達を止められると思うのですか……」
「…どちらかといえば、私も彼らに参加したいのですけど……」
「それは好きにしていいよ？メフィ。久しぶり」
「ロキ様！相変わらずお目麗しき。お目にかかれて光栄です」
三者三様。
おもわず本音をぽそり、とつぶやくサタンに、三兄妹達に参加したい、と本音をいっているメフィスト。
そしてまた、ディアがこの場に戻ってきたことをうけいつのまにか近くによってきているロキ。

何やら多少、【混沌（カオス）】、ともよべる光景がこの場においてしばし見受けられてゆく……

ざわざわ。
突如として町の周囲が暗闇にと包まれた。
しばらく真っ暗闇に包まれ、何がおこったのかわからずに混乱していた。
明るい最中、突如として真っ暗になれば人といわず誰しも不安になる、というもの。
それまで見えていたはずの空も何もみえなくなり、見上げる空はひたすらに真っ暗という現象。
街並みはかろうじて不思議と光っているのか確認することはできたものの、
町から外にでることもかなわずに、何がおこっているのか説明もされず人々の不安は増すばかり。
そんな暗闇の中で垣間見える、黒き稲妻と白き稲妻の光。
雷を扱える存在など限られている。
精霊や妖精といった存在は、雷、という属性は扱えない。
扱うことが許されているのは、悪魔、そして神々といった存在達の

み。
ありえない真っ暗な空。
そして、ありえない黒い雷。
つまり、町の外で悪魔、もしくは神々が何かしらの攻撃を仕掛けている、
というのは何となくだが理解できる。
さらにきこえてくる爆音のようなもの。
町にいつ被害が及ぶか判らない中で、人々は不安に包まれていた。
それがいつまでつづくのか。
ひたすらに暗闇の中、稲妻が光輝いていたかとおもいと、突如としてさぁっと、
まるで霧がはれるかのごとくに暗闇であったはずの空が元通りの姿にもどり、
それまで空を裂かんばかりの雷鳴もまたぴたり、と収まりをみせた。
「一体……」
茫然としつも、町の出口を守る門番がそっと一歩そとに足を踏み出してみると、
それまで何か見えない壁に阻まれていたはずの町の外にと出ることができた。
ふと気がつけば、何やら数名の話し声が空気にのって聞こえてくる。
その内容は何をいっているのかはわからないが、
すくなくとも、数名、どうやら町の近くにいるらしい。
声のするほうへいって状況を確認したいのは山々なれど、
自分はここの門を守る役目がある。
ゆえに自らの役目と状況把握との狭間に揺れ、しばしその場にて苦悶する一人の男性。
彼がしばらく悩んでいる最中。
やがて門に近づいてくる数名の人影が目に入る。
一人はかなりの美少女、年のころは十代そこそこ、であろうか。
一人は二十代前半とみうけられる、なぜか執事服のようなものを着

込んだ青年。
少女の手の中には小さな黒い犬が抱かれている。
その姿をみれば、子犬をだいた美少女であり、はっきりいってみる人がみればかなり癒される。
そしてスタイルもこれでもか！というばかりの胸とくびれた腰をもつなぜか露出度の高い服の上に軽く前で止める形式のローブを纏っている女性。
その横には、男女とも見惚れてしまうかのごとくの美貌をもつ青年が二人。
そしてそんな彼らの前をあるく少女の姿に見覚えが。
「…あれ？ディアちゃんじゃないかい？」
すでに幾度も町からでるたびに顔見知りなっているがゆえにその姿を見間違えるはずもない。
背後の人物達については見た記憶がさらさらないが、ディアの姿のみならば彼とて把握は可能。
「こんにちわ。マティルドさん。お仕事お疲れさまです」
見慣れた門番の姿を目にし、ぺこっと頭を軽く下げて挨拶しているディア。
そんなディアの姿をみて、背後のほうでは約二名、なぜか硬直していたりするのだが。
「まあ、仕事だからね。って町の外からやってきたってことは、さっきの異変。
ディアちゃん、何かしらないかい？いきなり町が暗闇に覆われたかとおもったら、
暗闇の中で稲妻が鳴り響くし。というかよく無事にここにまでこれたね。
後ろの人達に護衛…というか、彼らもどこからかの難民か誰かかい？」
どうみても強そうにはみえない。
見た限り、どこかの村からの避難民をディアが誘導してきた、と考

えるのが無難であろう。
よもや目の前にいる人物達が、暁の魔王や邪神とよばれている存在であるなどわかるはずもない。
「そういえば、先ほどアテナが町に入っていったとおもいますけど」
とりあえずそんなマティルド、と呼んだ門番の問いかけはさらっと流し、話題を変えてといかけるディア。
「ん？ああ。彼女ならギルド学校にいくとかいってたよ？」
彼女の正体は国のもの全てに教えられていない。
彼女が女神である、としっているのは国の上層部の一部のもの、そして学校関係者のみ。
ゆえに、この門番もよもやあのアテナが戦女神その当人だとは夢にも思っていない。
「そうですか。とりあえずもう外は安全のようですよ？」
「そうなのかい？」
「ええ。ここにくるまで別に問題ありませんでしたし」
というかさくっとディアが瞬く間にカタをつけた。
それまで苦労していたアスタロト達の行動が一体何だったのか、とおもうほどに。
「まあ、あとで周辺の捜索は警備隊達にでもたのんで安全を確認してもらうとして。
それはそうと、その後ろの人達はどうするんだい？」
「とりあえず、彼らも疲れてるでしょうから、いちど私の部屋につれていって。
それから後のことはまた後のこと、ですね」
難民にしろ今後のことは国の指示を仰ぐことになるであろう。
それゆえに、ディアの言葉に納得しつつ、
「まあ、さっきまでの異変で人々も不安になって何があるかわからないからね。
あまり刺激しないようにね」
ディアならばそのあたりのことはここに住み始めてある程度はたつ

ので理解しているであろうが、
背後の数名はおそらくこの地にくるのも初めてであろう。
ゆえに、彼らの身の安全性を高めるためにもひとまず忠告を促すマティルド。
…もっとも、彼らに対し、何かしでかそうとした者のほうが身の危険を感じるであろう。
「とりあえず、はいってもいいですか？」
「…そういえば、あの愚か者はどうします？」
「ほうっとけばいいわよ」
いまだに地面につっぷしているある存在はほうっておくことにし、さくっとサタンの言葉を返すディア。
その言葉にその場にいる他のものがうんうんと同意をみせる。
まあ、彼とてまがりなりにも雷神。
自己修復機能はついている。
あまりに目覚めないようならば、彼の妻が回収にくるであろう。
そう判断してのディアの意見。
何だかなくとなく聞くのがはばかられるような内容のような気がしつつも、
しかしここはたぶんあまり深く追求しない方がいいであろう。
そう判断し、
「ああ。かまわないよ。…さて。と、仕事にうつらせてもらおうか。
　ようこそ！我がテミス王国の首都、テミスへ！」
いつものごとくに元気よく、門番の役目である歓迎の言葉をはっするマティルド。

門番とヤケに親しそうな補佐官の姿に戸惑いつつも、
とりあえず、ついてくるように、といわれた以上、それに従うより他にない。
ゆえに、いらないことはいわずにそのままディアの後についてきているサタン達。

そのまま、彼らはディアとともに、首都テミスの中へと入ってゆく

――

光と闇の楔　～踊らされし存在（もの）～（後書き）

思わせぶりにでてきた、ハスターとショゴス。
さくっとディアにより、いつものように水晶の球体の中に封印です。
ちなみに、彼らは毎回、毎回このようにして現れてはディアによって封印されてたりv
彼らが王を取り込みたい、とおもっているのもその運命から逃れたい、という思いもあるんですけどね。
まさか、意思が王だなのと彼らはいまだに理解してませんので。
まあ、自分達の器をあたえた惑星の意思がよもや王なんてものをやってる、
とは普通はおもいませんよ…ええ、普通は……
しかし、容量的にアテナの暴走、にまでいけなかったなぁ……
ちなみに、アテナとメフィスト。
んでもってリュカがでてきましたけど、彼女達のやり取りが次回に入ります。が。
ようやくここで！初回にでてきた「ロッコリ」伏線回収がっ！
な…長かったなぁ…アレを詳しく表記したのは、あのためでもあったんですけどね……
ロッコリ？何それ？ほんとのほんとの三話以内にでてきた食材さんのことですよ～

光と闇の楔　～悪魔と女神と補佐官と～（前書き）

ろっこり～♪

そういえば、ふととある場所できいたんですけど。

何でもブロッコリーを利用した悪質詐欺さんがあるそうですよ？

…ブロッコリーが水をはじくのはあたりまえ、なのに。

水をはじくのは農薬つかってるからなので、この浄水器をつかえば！と勧誘するのが…

いやあの？ブロッコリーは農薬つかわずともふつーに水はじくぞ？

おひ？

それでだまされて浄水器売ってる人…どんだけ知識がないんだろう？

というか、普通にプランターとかでも作ろうとおもえばつくれるんだが？ブロッコリー…

そのひとって…ブロッコリーとか食べたことがないのかなぁ？

それとも、わかってて浄水器説明にブロッコリーをもちだしてるのなら、

あるいみ、何かんがえてるだろ？それでだまされるひとがいるのか？とおもったり…

世の中、いろいろとわけわからん常識的なことを知らず？に馬鹿やってるひとが多いようです。

みなさんも変な勧誘などにはだまされないようにしてくださいね…

…

「え～と……」
どう対応したらいいものか。
「ヘスティア先生！リュカさんの具合はどうなんですか！？」
ギルド協会学校に出向いたところ、ヘスティア達はギルド寮に移動した、と話しをきいた。
その道中でリュカ、という男性を保護し連れて行ったと話しをきいて行き先をきき。
広い寮内のうち、気配を頼りに管理人に断りをいれて寮にとはいった。
しばらく進んでゆくと、何やら聞きなれた声がきこえ、
そちらのほうにむかってゆくと、そこに見えるのは数名の人影。
案の定、というべきか、先刻見知った人物と、そして伝道師サクラの姿。
「あれ？アテナ？あ～、もしかして、あちらの攻撃についていかれずにこっちに回された？」
聞こえる音はどうみてもアテナごときで太刀打ちできるような力ではないであろう。
もっとも、ごとき、というのは気の毒かもしれないが。
何しろ彼女とて神界においては実力者の一人として名が通っている。
しかし、今現在やってきている存在はそもそもその核から異なる。
「ついていかれないので私はこちらの護衛にまわりました。
　というか、どうしてここにリュカさんが！？」
彼がここにいる、というのがかなり気にかかる。
先日出会って別れ、それ以来あっていない。
服装もかなり破れているらしく、ぱっとみため、かなりの重傷のようにみえなくもない。

「あ、あなたは」
やってきた女性…アテナに気づき、ぱちぱちと目をしばたたかせる美希。
いきなり消えたとおもったら、こんどもまたいきなり現れた。
もはやもう何があっても驚かないつもりではあるが、
こうも続けざまに事がおこれば逆に冷静にもなってくる。
人間、極限の状態にまで追い込まれれば逆に冷めた視線で物事を視ることが可能。
つまり、美希も今そのような状況になりかけていたりする。
と。
バタン。
いきなり目の前の扉が開き、
「ほらそこ！そんなところで立ち話してないで！お姉様の部屋にはやくはいって！
『あ、はじめまして！次代様！私はヴリトラといいますっ！』」
突如としてその目の前の扉から一人の少女が出てきたかとおもうと、いきなり叫び、それでいて美希の姿をみとめ、にこやかに笑顔をむけてかるくお辞儀をする。
「え？ヴーリちゃん？いつもどってきてたの？」
いつのまにかいなくなり、そしてまたいつのまにか戻ってきているヴーリの姿をみとめ、
思わずその場にて目をぱちくりしているケレス。
ケレスはいまだに何がおこっているのかまったくもって理解していない。
判っているのは、目の前にいつのまにか里帰りしたというヴーリと、そして臨時教師であるアテナ。
そしてC組担任のヘスティアがこの場にいる、というその事実のみ。
『ヴリトラ…って…も、何があっても、私驚かないわ。ね。みゅ～ちゃん』
神話の一つにでてくる邪竜。

さらには幾多のゲームにもその存在は多様されていた。
ゆえにもはや驚かないことに決め、ため息まじりにつぶやく美希。
そんな美希のつぶやきに答えるかのように、
「みゅ～」
その場に何ともそぐわない、かわいらしい子猫の声が廊下中にと響き渡ってゆく……

光と闇の楔　～悪魔と女神と補佐官と～

「…ディアさんの交流関係って一体……」
担任教師として生徒をよくしるのも務め、とおもっていた。
しかし、しかしである。
目の前の女神にしろ、伝道師にしろ、さらには魔界の大侯爵にしろ。
どうしてそんな大物とたったのまだ十三程度の少女が交流をもっているのか。
伝道師、というだけでは絶対に理屈は通らない。
「それより。サクラ様。何だって補佐官様がこのような場所におられたのですか？」
おそらく、ヘスティアには知られたくないのか、はたまた隠しているのか。
おそらく後者。
それゆえに、天界共通語にてサクラに問いかけているアテナ。
「それは私も詳しくはしらないけど。尚人からきく限りでは、ここの学生やってるらしいわよ？」
「…えええ！？補佐官様とあろうお人がどうして！？」

サクラの言葉はあるいみ驚愕でしかない。
ゆえに思わず叫ぶアテナは間違っていない。
絶対に。
「あのぉ？それより、この人、かなり気になるんですけど…大丈夫なんですか？」
顔色が極端に青白いように感じる。
どうやら会話が通じる、サクラ、という人の知り合いのようであるが、
何もわからない以上どうしようもない。
「Ｔｈｉｓ　ｐｅｒｓｏｎ。Ｉｓ　ｉｔ　ｓａｆｅ（この人、大丈夫なんですか）？」
今度は今度で英語らしきもので話している二人に対して思わずといかけている美希。
天界共通語。
それはすでにこの世界では失われた、かつて英国英語、とよばれていた言葉。
授業にて英語はひとまず必須科目であったがゆえに多少の読み取り、または聞き取りは可能。
ほとんど聞き取りのできないフランス語で話されるよりはある程度は気が楽ではあるが、
やはり聞きなれた言葉のほうが精神的にも落ち着くとおもってしまう。
それでも相手が英語らしきもので話しているのをきき、美希もまた英語でとりあえず問いかける。
美希のいた世界においては、英語は話せて当たり前、ともいわれていた必須科目。
フランス語は主にそれなりの職、もしくはお偉いさんになったときに必然的に必要となる語学であった。
ゆえに簡単な英語ならば美希とて使用は可能。
一度日本語で問いかけたものの、相手が英語であろう、と判断をつ

け言い直す美希。
ある意味、臨機応変がきいているといえばきいている。
そんな美希のほうをみてしばしぱちくり、と目を大きく見開き瞬きをしたのち、
「Ｉｔ　ｗａｓ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ（驚いた）。あなた、天界共通語、話せるの？」
驚きの表情で美希にといかけているアテナに対し、
「…もしかして、そちらの世界でも、この言葉、英語、として流通してました？」
何となくではあるが予感がして別の意味でといかけているサクラ。
そんなアテナとサクラの問いかけに対し、
「？天界共通語とか意味がわかりませんが。お二人が話しているのは、英語、ですよね？」
これまた英語で問いかける。
「ええ。となると、美希様が話せるのは、英語と日本語の二ヶ国語でいいのでしょうか？」
「ですから、何で様づけ……。とりあえず、英語は日常会話の一つのたしなみ。
　としても教育をうけていますので難しいものでなければ日常的なものくらいならば。
　でも、やはり完全ではないので日本語のほうが助かります」
美希に話しかけるがゆえに、先ほどの天界共通語でもある英語から、日本語にと言語を変え、
美希の目をしっかりみつつも問いかけるサクラ。
ちなみに、彼女達の今の状態は、部屋の中央に寝かしているリュカ。
どこからかヴリトラが持ってきた布団にリュカは寝かされている。
そんな彼を取り囲むようにして座っているアテナ、サクラ、美希、
そしてケレスにヘスティア。
ヴリトラはなぜか部屋の中をうろうろし、まったくもって落ち着きをみせていない。

ある意味、けが人？の横でそんな会話をしなくても、と思えなくもない。
しかしいつ彼が目覚めるかわからない以上、この場を離れるわけにはいかないであろう。
それゆえにこのような体制で会話をつづけている彼女達。
「え、えっと。とりあえず、あのおかたの担任をされてるんでしたよね？ヘスティア先生は」
どうしても、あの御方、と言ってしまうのは仕方がない。
直接当人を確認してしまった以上、
以前のように、普通の生徒のようにディア、と名を呼ぶわけにはいかない。
まだ完全にその容姿を確認していなかったので、名前を普通に呼んでいただけに過ぎない。
しかし知ってしまった以上、呼び捨てなど言語道断。
「？いきなりディアさんに対して丁寧語になってませんか？アテナ様？
…まあ、気持ちはわからなくもないですけど。ええ。しかし、ディアさんっていったい……」
補佐官と知り合いである、ということからも、丁寧語に変えて対応することにしても不思議ではない。
伝道師達は、天界においても崇高なる存在だ、として敬われている、ときいている。
ゆえにこの反応は別段おかしくないであろう、そう彼女の中で結論づけているヘスティア。
実際は伝道師サクラの存在はまったくもって関係なく、ディア当人の正体が問題であるがゆえに、
アテナの口調が変化したのだ、とはゆめにも思っていない。
何やら話しはじめているサクラと美希、となのった少女とは別にそんな会話をしているヘスティアとアテナ。
と。

「あ、お姉様がおもどりになったみたい！」
ふとその気配に気づき嬉しそうな声をあげ、ぱたぱたと扉のほうへむかってゆくヴリトラ。
そして、そのまま扉を開け放ち、
「お帰りなさい！お姉様！…あれ？なんでサタンやロキ家族までいるの？
　あ、メフィちゃんだ～。ひさしぶり～！！」
その扉に先にいる人影を目にし嬉々とした声をあげたのちに、
きょとん、とした声をあげる。
そんなヴリトラの視界にはいってきたのは、ディアの姿はともかくとして、
なぜこの場にいるのかよくわからない、暁の魔王サタンと、邪神ロキ家族。
そしてまた、悪魔メフィストフェレス。
そんな彼女の姿を垣間見て、
「…なっ！？神竜様！？」
思わず驚愕の叫びをあげているサタン。
…よもや、ここにいたり、こんな場所で神竜ヴリトラと邂逅するとは思っておらず、
いわば不意打ち。
それでなくとも補佐官の傍にいることで緊張していたというのに、
さらにとんでもない存在がそこにいる。
となれば…その緊張度もピークに達する。
「あいかわらず、ヴリトラは無茶してるのかい？」
ざっと世界を見渡したゆえに彼女がどんな行動をしていたのか知っている。
ゆえに苦笑しつつも問いかけているロキ。
そしてまた。
「あ、ヴリトラ様。おひさしぶりです」
ぺこり、と頭をさげている執事服に身をつつんだヨルムンガルドに、

「…補佐官いるところ、常に神竜あり、だな」
どこか悟ったようにつぶやいている小さな黒い子犬の姿に姿を変えているフェンリル。
「ん？あれ？もしかしてこの中、他にも誰かいるの？」
中に他の気配を感じ、そんなことをつぶやいているヘル。
その一つの気配はかなり見知った気配のような気がするのはヘルの気のせいか。
「お、お久しぶりでございます。ヴリトラ様」
目の前にいきなり人間形態で現れた神竜ヴリトラに驚きつつも、すぐさま礼をとりその場にざっと膝まづいたのちに言葉を発しているメフィストフェレス。
「ヴリちゃんのほうも終わったみたいね。とりあえず。
積もる話もあるでしょうし。中にはいりましょ」
そんな彼らの様子はさらっと無視し、そのまますたすたと部屋の中にはいってゆくディア。
そんなディアとヴリトラに続き、戸惑いつつもその後ろにつづく彼ら達。
そもそも、彼らにとって、補佐官の命に背く、というのは王の命に背く、ということであり、
自らの存在意義すらをも否定する行動にもつながる。
ゆえに素直にそのままディアにつづいて部屋の中へと入ってゆくことに……

「あら？皆してここに集まってたの？」
ぞろぞろと連れ立ち、とりあえず寮に全員の気配が集まっているのを感じ直接に移動してきた。
町にはいるところまでは普通に歩いていたが、さすがに美青年二人に美少女二人。
ついでに容姿端麗、ともいえる露出度の高い女性が一人。

さらにはなぜか執事服を着こんでいる青年もいれば嫌でも目立つというもの。
ゆえに普通に町にはいるフリをして、その手前の空間を少しばかりいじり、
自らの部屋としている寮の前の廊下にその空間を繋げたのはつい先ほど。
いろいろと説明を受けたいのは山々。
されど突如として空間をいじられ、別の場所に移動したがゆえにいまだに話しを聞けていない。
おそらく一番状況を理解していたであろうアスタロトは魔界へと戻り、
かの存在達のおそらく裁判の準備をしているところであろう。
それゆえに思わずその場にてため息をつかざるをえないサタン。
扉から出てきた神竜であるヴリトラがここにきているのはディアは気づいてはいた。
いたが別にそれは説明することでもないので言わなかっただけ。
案の定、向こうのほうから扉をあけて廊下にでてきたヴリトラの姿。
一言、二言かわしつつ、そのままひとまず全員を伴い部屋の中へ。
扉をあけて部屋の中にいるのは、ヘスティア、ケレス、そしてアテナにリュカに美希と子猫が一匹。
いまだにリュカは意識がないのかそのままその場にて横にさせられているようではあるが。
兵士達はといえば、彼らもいまだに役目途中であるがゆえに、気になるものの、
それぞれ自分達の役目を果たすべくこの場よりたちさり、今はいない。
ぞろぞろと連れ立ち、入ってきたディアの姿を確認し、
「Ａｓｓｉｓｔａｎｔ（補佐官様）！！」
「三の意思様」
同時にさけんでいるアテナとサクラ。

そしてまた、
「ディアさん!?戻ってきたのですか?というか、詳しい説明をお願いしてもいいでしょうか?」
ディアの姿をみてホッとすると同時、おそらくこの事態を説明できるのは彼女しかいない。
そう判断し、ディアにむかって問いかけているヘスティア。
たしかに事実を正確に説明できるのはこの場において彼女以外にはいないであろうが。
そしてふと、そんな彼女の背後から一緒に入ってきた人物にと視線をむけ、
「……まさか、とはおもいますけど、そちらの方々もとんでもない方とはいいませんよね?」
その場にいる美少女と美青年、なぜこの場にいるのかわからない黒い子犬。
執事服を着こなしている青年はディアさんの執事なのかしら?
そんなことを思いつつも、先刻、美少女と美青年には短い間ではあったがあっている。
もっとも、その後に、サクラより彼らが噂の邪神ロキ当人である、とは聞かされたが……
「先生?先生もどうしてここに?まあ別にいいですけど。
とりあえず、サクラ、お疲れ様。ってアテナもここにきてたんだ」
一瞬、ディアが部屋にはいってきたとき、全ての視界が真っ暗になり、
一瞬その目に青き球体が映り込んだような気がするのは目の錯覚か。
おもわずごしごしと目をこすったのちに叫んだアテナに対し、さらっといっているディア。
この場に美希がいる以上、常にディアが纏っている認識阻害の力は無効化される。
つまり、視る存在の受けてによってその姿は変化して相手の都合の

ように見えるようになっている。
もっとも、美希はそのような能力を発揮している、というのはまったくもって無意識極まりないのだが。
名を呼ばれたことにより、相手が補佐官ティアマトだ、と認識したがゆえに、
今のアテナの視界において、ディアの姿は天界の補佐官ティアマトの姿、として映り込んでいる。
サタン側からしてみれば、もともと魔界の補佐官ルシファー、という認識であったがゆえに、
一時、青き惑星に目を奪われたものの、すぐさまにその意識をディアにとむけ、
今のは何の白昼夢だろうか?と多少首をかしげていたりする。
「って、メフィストちゃん!?」
ふとそんなディアの背後に見慣れた姿をみつけ、思わず目を見開いて叫ぶアテナ。
この場に絶対いるはずのない人物の姿をればおもわず叫んでしまっても仕方がないであろう。
「って、アテナちゃん!?どうしてあなたがここに!?」
ある会を通じ、顔見知りであるがゆえに思わずこちらもまた驚愕の表情をうかべるメフィストフェレス。
そんな二人を交互にみつつ、
「?あの?すいません。ディアさん、といわれましたよね?その後ろの方々は?」
戸惑いながらもおそるおそる問いかけている美希。
やはり、部屋にはいってきたときに見えたのは宇宙空間に浮かぶ青き星。
先刻、説明された惑星の意思そのもの、という言葉がより信憑性を増してくる。
…といっても、その意思が形を成して自らの中に生息している生命達にかかわるのか。

ということを思えば…疑問視せざるを得ないのだが。
「ああ。こっちはさっきもあったとおもうけど。ロキとその娘のヘル。
　あとはその息子達よ。それでこっちはシャイターンとメフィストフェレス」
あえて、幼名であり愛称でもある名で紹介するディア。
この場にはヘスティアも滞在している。
サタン、という名はあまりにも有名。
魔界においてこの名をもつものは他にはいない。
しかし、シャイターン、という名はその強さにあやかって時折似通った名をつける魔族もいたりする。
ゆえにあるいみ無難、といえば無難な紹介の仕方。
「まあ、とりあえず、立ち話も何ですし。
　あれ？ヴリちゃん。座布団もだしてないの？しょうがないわね。
とりあえず座布団だしますので皆さん、すわってくださいね」
いいつつも、少しばかり部屋の奥にひっこみ、いくつかの座布団をその手にもって戻ってくるディア。
そのままリュカと少し離れた場所に座布団を置き、その場にいる全員に座るようにと促し、
そして戸惑いつつも全員がその場に座ったことを確認し、にこやかにほほ笑みつつ、
「とりあえず、この場でそれぞれの自己紹介、としましょうか。
　あ、その前にとりあえずみなさん、飲み物でもどうぞ？」
いってにこやかに、いつのまに用意していたのか、紅茶カップを差しだすディア。
コップに紅茶を注ぎつつ、
「それより。先生は学校のほうに戻らなくてもいいんですか？」
おそらく今、学校側もギルド協会側も混乱を極めているであろう。
先刻の暗闇と、そしてまた、
各界の地において、手こずっていた念の集合体たるゾルディ達が突

如として消滅した。
その報告をうけ、おそらく今ごろは事実確認に翻弄していることは明白。
これから話す内容はどちらかといえば人間であるヘスティアに聞かれてはあるいみ困る内容。
というか、そもそも地上界の言葉で話す気はさらさらない。
あとあと詳しく説明するのもまた面倒。
ゆえに彼女のほうからこの場から立ち去ってくれれば話しは早い。
それゆえにさらっと話題を変化させつつも、にこやかにヘスティアにといかけるディア。
サタン達はといえば、補佐官自らが入れた紅茶を断るわけにもいかず、
恐縮しつつも、コップを受け取っている様子がみてとれる。
「いや。私は事実確認をする義務がある」
きっぱりはっきりいわれれば、それ以上、無理を言ってこの場から退去させるわけにはいかない。
ゆえに、軽くため息をつきつつも、
「わかりました。とりあえず、『Ｔｏｕｔ　ｌｅ　ｍｏｎｄｅ　ｅｓｔ　ｄｉｆｆｉｃｕｌｔｅ（皆御苦労さま）』」
『意思』たる意思をもってその場にいる全員を見渡しひとまずねぎらいの言葉をかける。
それと同時に、ざっと敬礼しているサタン達。
ディアが何をいったのかヘスティアには理解できない。
しかし、周囲の人々の反応からして何かをいったのであろうことは明白。
ねぎらいの言葉をかけただけでここにいるみなさんの反応って…
そんな様子に思わず唖然、としている美希。
たしかに、少し冷静になった頭で考えれば、彼女がこの惑星の意思だとして、
その意思よりねぎらいの言葉が直接かけられる。

それはかなり彼らにとって『母』でもある彼女に優しい言葉をかけてもらえれば
…考えなくずともうれしいはず。
そのことにすぐさま思い当たる。
自分とて、母に褒められればうれしかった。
怒られても、自分を思ってくれていたからこそなのだ、と理解していた。
その母も今はもういない。
彼らの存在が、事実、悪魔や女神、さらには神々、といった存在ならば、
すくなくとも、それらを生み出したのは、その『母なる意思』に他ならないのであろう。
つまり、親にほめられてうれしくない子はまずいない。
しかし、ふと気になることが一つある。
さきほど、一人の名前をシャイターン、もう一人のなぜかかなりスタイルのようポンキュッポン。
といっても過言でないスタイル抜群の女性のことをメフィストフェレス。
そう彼女は紹介したはず。
その名はたしか、サタンの別名、アラビア語の呼び方じゃなかった？
メフィストフェレスなんておもいっきり悪魔の名前だし。
とある漫画では女性であったが、伝承では男性と女性、どちらのバージョンもあったはず。
…とあるアニメではたしか、男、として描かれていたが。
そんなことをふとおもう。
それを踏まえてどうしてもこれだけは聞いておきたい。
どうしてこうして、
女神であるアテナと、悪魔であるメフィストフェレスが親しそうにしているのか、ということを。
ゆえに、

「That ?I'm sorry. Are couple's relations good? Do though it is an anti－attribute?」

――あの？すいません。お二人は仲がよろしいんですか？反属性なのに？

何しろ女神と悪魔。

天と地。

光と闇。

聖と魔。

完全に対局に位置している存在達である。

光があれば闇があるように、闇があるからこそ光もまた認識できる。

それはわかっている。

いるがどうしても聞かずにはおられない。

そもそも、定説としては聖と魔は相いれないもの、と彼女の世界の伝承などでも伝わっていた。

物語などにおいても然り。

おそらく先ほど英語で話して通用したので英語ならば通じるであろう。

ゆえに英語で戸惑いつつも、自分の横に並んで座っているアテナとメフィストに対して問いかける。

そんな美希に問いかけに対し、二人は顔を見合わせ、

「だって…」

「私たちは」

「「Parce que c'est un membre Gardes du corps de l'assistant（補佐官親衛隊会員ですからっ）！」」

きっぱりはっきり、二人の声が同時に発せられる。
まるで申しあわせているかのごとくに。

「…補佐官って…何？」
思わずその言葉をきき、ぽそっとつぶやく美希は間違ってはいない
であろう。
聞きなれない言葉ではあるが、すぐさまに思い浮かんだのは某ゲー
ム。
補佐官ってあの補佐官？
つまり、補佐官って偉い人を補佐する立場…の人のことよね？
…何で星の意思が補佐官ってよばれるわけ？
一人、ぐるぐると思考をめぐらせるそんな美希に対し、
「あ。すいません。次代様。いってませんでしたっけ？
　私、とりあえず自らのうちで、それぞれの属性の王と補佐官の
両方を務めているんですよ」
さらり。
どうやら混乱しているらしき美希にとさらっと説明しているディア。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・はい？」
さらっと日本語で説明され、本日いく度目かもわからない唖然とし
た声をもらす美希。
さもあらん。
誰しもいきなりそのようなとんでもない、しかもかなり重要度の高
いことをきかされれば、
思考がおいつかなくてもしかたがない。
そもそも、属性の王？何それ？
というか王と補佐官兼用！？
というか異様に息があってない！？
ねえ！？

しばし二人の反応に対しさらに混乱を隠しきれない美希。
説明をうけて、余計に混乱する美希の姿がしばしその場において見受けられてゆくそんな中。
「さて。と。…とりあえず、先生のほうは眠っていただけたようですね」
ふとみれば、ヘスティアの紅茶にのみ睡眠効果があるように細工しておいたがゆえに、
いつのまにか座ったまま意識を失っているヘスティアの姿が目にはいる。
彼女の口からギルド協会側に話しが伝わってもおもしろくない。
それゆえの処置。
あとから記憶のほうは少しばかり改善しておけば問題ない。
「さてと。ロキ。彼女をとりあえずペットにはこんどいて。
　さて、それじゃ、とりあえず簡単な状況説明に入るとしますか」
少しばかり悪戯が成功したかのようなほほ笑みをむけたのち、
その場にいる全員ににこやかに笑みをむけ、そして。
「それはそうと、リュカがまだ目覚めないのねぇ。とりあえず、ロッコリを取り出して…っと」
そうディアがつぶやくと同時。
ふいっとどこからともなく栄養が高いといわれている緑黄野菜の一つ。
ロッコリ、という野菜を虚空より取り出すディア。
ちなみに、ロッコリとはこのあたりでは定番の野菜の一つ。
ゆでても煮ても焼いても重宝する野菜の一つでもある。
ちなみに生でもたべられるしその花はすこし甘みをおびており、ちょっとした甘味にもなる。
ゆえに庶民の味方、としてかなり普及している野菜の一つにあげられる。
どうしてそのような野菜を突如として取り出したのか、この場にいる一名以外知るよしもなく、

ゆえに、
「「補佐官様？」」
「三の意思様？」
思わず同時に聞き返している、ロキ達家族、そしてまたサタン達。
一方で、
「…そういえば、リュカさんってロッコリに目がないんでしたっけ……」
伊達に彼に育てられているわけではない。
彼が好んでそれらを食べたり液体状、すなわち飲み物にして飲んでいたことを知っている。
ゆえにおもわずぽそっとつぶやいているアテナ。
「性格にいうならば、今のリュカの体がこれに含まれている成分と非常に相性がいいから、なんだけどね」

今のリュカの器となっている肉体の元となっている種族は基本的に草食。
つまり、緑黄色がより含まれている植物などは彼にとってはあるいみこのたびにおけるぜいたく品。
このロッコリ、という品は彼のこのたびの体にあわせて『意思』自らが生み出した野菜であり、
ゆえにその栄養素のバランスは、彼のためにつくられている、といっても過言でない。
もっとも、その事実をしるものはリュカ以外では『意思達』しかいないのだが。

アテナも好んで彼がこの品を食していた、ということしかしらない。
ふわり、とリュカの口の上にロッコリが浮かんだかとおもうと、
それは瞬く間にまるでミキサーにでもかけられかのように液体と化し、
それらはゆっくりと、液体状のまま、まるでストローを通すかのよ

うに一本の線となり、
ゆっくりとリュカの口の中にと吸い込まれてゆく……

光と闇の楔　～悪魔と女神と補佐官と～（後書き）

初回も初回、初めのころにでてきた、とある食材、ロッコリさん。
実はリュカのためにディア自らがつくった野菜だったり。
そのために初期の初期に世間一般にでまわってますよ～
というのをだしたんですけどね（ようやく複線？もどきの回収完了・
・・
次回でゼウスも合流予定、です。

光と闇の楔　～光と闇の戸惑い～（前書き）

最近、どうもこれ、楔のラストが頭の中で反復されてます。
あとは、なぜか魂さんのほうくらいかな？
といっても最近打ち込みしてるのは、これとＷＧ、ときおり魂くらいですけど。
なんか脳裏で反復されまくるので、
一番の要、ともいえる主要なる心を前振りにもってきたり。
…いつになったら、【次代の意思】の覚醒にたどりつけるんだろう……（汗

光と闇の楔　～光と闇の戸惑い～

幾度も繰り返される、記憶の再生と初期化。
それらは全て必要なもの。
この地をこのまま継続するか、それとも終息にむかわせるか。
全ての決定は一つの意思にとゆだねられる。
だからこそ、ゆっくりと世界を視て回る必要性がある。
一つの方向性しかしらないままで継承しても、うまく世界は廻らない。
だからこその処置。
初期化されるたびに増えてゆく、あらたな意識体。
それは場所によっては人格、とも、意思ともいわれている代物。
世界の終焉を願うものもいる。
終焉は新たな始まりではあるが、その地にいきている存在にとっては全ての終わり。
どちらを選ぶかは、それは個々の意思。
しかし、その意思を押し付ける輩がいるのも事実。
それら全てを踏まえて、きめる。
…新たな次代は、安定か、それとも発展か、…それとも、終息…か。
我にいずれは集う存在達よ。
愛しき子供たちが選ぶべき道は我は介入するつもりはない。
されとて…我もまたいまだに発展途中。
全てを知り終えたのちに、自らの使命に準ずるのが我の存在意義、
なのだから――

ヘスティアがなぜかその場に倒れてしまい、心配するケレスに対し、心配ない旨を伝え、
さらには、どうやら疲労がたまっているらしいヘスティアをこの場でしばらく休ませる。
その旨をギルド協会に伝えてほしい、そうケレスにと頼みこんだディア。
かなり不本意ながらも、しかしギルド協会に説明にいかないわけにはいかないであろう。
あとでしっかりと説明してくれるようにと話しをつけ、この場を後にするケレス。
後に残されたのは、このたびの一件のあるいみ関係者、と呼べる存在達ばかり。
ある意味、この場に残されたもので完全に状況を確実に把握しているのは、
多少その認識の誤差はあれど、次代が何たるかを完全に理解しているサクラ、のみ。

「…補佐官、親衛隊会員？」
何かものすごく聞きなれない言葉をきいたような気がする。
というか、そもそも、女神と悪魔がどうしてこうして仲よくしっかりと手をあわせて異口同音に叫んでいるのかもわからない。
というか、ディアが今いきなり出現させたのは、
彼女のよくしっているブロッコリーによく似ているような気がする。

というかむしろほぼ同じ。
多少の違いはあれど、同じように見えるのはおそらく気のせいではないであろう。
強いていうならば、菜とワラビとブロッコリー。
この三つをかけあわせてできているようなそんな物体。
「食べ物に関してはともかくとして……というか、二つの属性の王と補佐官…って……」
どうにか混乱する思考をまとめつつも、横にいるディアにといかける美希。
戸惑いつつも、ディアに語りかけたその直後。
「う……あれ？ここは…」
先ほどまで完全に意識を失っていた横になっていた男性がゆっくりと目を開く。
ぼんやりとした思考で今、僕どこにいるんだろう？
そんなことをふとおもうが、やがてゆっくりと思考がはっきりと明確になってくる。
そして見慣れぬ…否、幾度か見慣れたことのある天上と、
横に視線をむけてみれば、なぜかこの場にいるのは自分だけではなく。
「…あれ？…って、ええ！？主様！？というか、サタちゃんたちまで！？」
思わずそのままの姿勢でがばっと起き上がり、いきなり叫ぶ。
そんなリュカに対し、
「リュカ。あなた、最近栄養補給してなかったでしょ？あれしきで倒れてたなんて」
思わず呆れ口調どそんなリュカにと話しかけているディア。
「いあ、主様！あれしき、とはいいますけどね！あれは無理ですよっ！
　というか、いきなり外に出向いていって偵察隊と戦えなんて無茶もいいところでしょ？！」

思わずそんなディアの台詞に突っ込みをいれるリュカはおそらく間違っていないであろう。
世界広し、といえども【三の意思】に突っ込みがいれられる存在はそうそういない。
そんなリュカの言葉に多少眉をひそめつつ、
「…【外】？もしかして、補佐官様。この世界の外で何かありましたか？」
一応、ときどき他の意思もやってくることもあり、世界がここだけではない、というのは彼ら上層部の存在達はしっている。
「それについては私が説明します～！
三の姉様、とりあえず、外側は今のところ問題なしみたいですよ？」
かちゃり。
突如として部屋の奥にある扉が開き、そこからでてくる一人の少女。
歳のころならば十三程度。
その橙色の長い髪をポニーテールにし、
その髪になぜか柊の葉で編み込んだサークレットをつけている。
服装は上下ともに続いている薄橙色のワンピース。
その腰回りには今度は花であしらったベルトのような鎖のようなものをつけている。
瞳の色は茶色。
がちゃり、と奥の扉をあけて入ってきた人物に対しちらり、と一瞥したのち、
「五の姉様、いきなりそこから出てくるのはどうか、とおもいますけど？」
たしかにあの扉は全ての【場】と繋げてはいる。
いるが部屋の奥から出てきた、という説明を求められればどう対応

するつもりなのであろうか。
この五の意思は。
そんなことをふとおもうディアはおそらく間違ってはいないであろう。
「いいじゃない。細かいことは気にしない、気にしない。
ここにいるのは天界と魔界の関係者達ばかりみたいだし。
『あ。はじめまして。次代様。私は五番目の惑星の意思にあたります。
おそらく、次代様が先日までおられた惑星では、木星、と呼ばれていた惑星にあたります』」

あちらの恒星群の成り立ちというか仕組みも大姉より報告はうけている。
異なるのは、あちらには十番目の惑星が存在しておらず、しかも、なぜか九番目の惑星すら三番目の惑星の人類から恒星群の惑星の仲間から排除されたらしい。
そのあたりの詳しいことまではわからないが。
とりあえず、どうやら同じような惑星が誕生していた、という報告はうけている。

「…木星…も、ほんと、私、何があっても驚かないわ……」
月が二つある時点で自分が住んでいた惑星とは異なるが、そういうものだ。
とわりきるしかない。
世界には平行世界、といもうのも存在している、といわれている。
もしかしたらここもそうった存在の一つなのかもしれない。
「そういえば、三の姉様。外でなんでか転がってた雷神みつけたから連れてきたけど。
何かあったの？」
いいつつも、ひょいっとその小柄な体からは思えない力を発揮して、

まるで猫の子をつかむようにその首根っこをつかんでぶらぶらと…
正確にいえば、ずるずると、だが。
とにかくずるずると何かボロキレのような物体をひこずっているのがみてとれる。
そんなディアと五の意思、と名乗った惑星名、かつて人類が呼び称していたところの木星の意思。
彼女とディアの会話はこの場にいるリュカ以外には認識されてはいない。
彼女達が今会話しているのは、惑星の意思達のみの間で使用されている特殊な言葉。
あるいみ、言葉のようで言葉ではない。
心と心をつないで直接に会話する念波のようなもの。
リュカはその性質上、それらを感じ取ることができるので一応、二人の会話は耳にはいっている。
強いていうならば、彼女達の会話は一種の超音波に近いものがある。
それゆえにリュカも理解が可能なの。
「…え～と、そのひこずられている男性は？」
十代の少女に大の大人がずるずると首根っこをつかまれてひこずられている様はあるいみ悲しい。
むしろ、男性の哀れさをよりよく強調しているようにもみえなくもない。
ゆえに内心、すこしばかり、ずるずるとひこずられている男性に同情しつつ、
首をかしげてといかけている美希。
「む。ゼウスではないか。すっかり失念していたな」
というか奇麗さっぱり忘れていた。
その姿をちらりとみて思わずうなっているサタンに対し、
「お父さま！？…は！？まさか、そちらのかたにまた不埒な真似をして返り討ちに？！」
どうやら娘にすらまったく信用されていないらしく、別の思考に陥

り、思わずさけんでいるアテナ。
「何でぼろきれ状態に?…あ~。なるほど。ロキ達がいるのか。納得~。
　というか、久しぶり~。ようやく目がさめたんだね。ロキ君達」
そこにいるロキ達家族に気がついて、いつものようにほんわかと語りかけているリュカ。
全員がかろうじて、英語で話しているがゆえに、美希も漠然とその会話の内容は理解ができる。
できるが、状況把握するまでには至らない。
「というか、あなたもかわりばえしませんねぇ。リュカ殿?」
自分がたしか眠りにつく以前からこの調子。
彼と話していればいつのまにか脱力してしまうことはざら。
ゆえに、リュカの言葉に苦笑交じりに答えているロキ。
「さて。と。リュカも目覚めたことだし。とりあえず、サタン。
　今からリュカをも含めた簡単な状況説明を開始するから、ゼウスに雷でも直撃しといて」
「はっ!」
補佐官ルシファーに直接何かを頼まれることは何よりも誇らしいこと。
ゆえに、感極まりつつ、その場につくっとたち、礼式をとるサタン。

・・・室内で雷ってでるの?
そんな男性の様子を横目でみつつ、どこか違う突っ込みを心の中でしている美希。
次の瞬間。
ばりばりばりっ!
突如として出現した黒き稲妻が一瞬のうちにその場にころがっている物体もどき。
すなわち、ひこずられている物体…もとい、雷神ゼウスを直撃する。
「ぎゃぁっ!?」

何か短い叫びとともに、
その体からぷすぷすと黒い煙のようなものがでているように見えなくもないが。
やがてゆっくりと、体全体から黒い煙のようなものをゆらゆらとたなびかせつつ、
「…って、サタン！いきなり攻撃はないだろうっ！」
気づきざまにおもわず叫んでいるその男性。
そしてふと、その場にいるディアにと気づき、一瞬硬直し。
「あああ！？補佐官様！？いったいどちらにいかれていたのですか！？」
その視界に一瞬うつったのは、どこまでも真っ暗な空間そこに浮かぶ一つの青い球体。
そしてまた、もう一つ、茶が様々な色に変化している不思議な球体。
おもわずぱちくり、と目をこらすと先ほどの光景は幻のごとくにかききえ、
彼の視界にはいってきたのは、黒き髪に黒き瞳の、彼らが敬愛している補佐官ティアマトの姿。
それぞれがそれぞれに、異なる姿で視えているがために、
ゼウスとサタンがどちらとも補佐官、とよんでも誰も違和感を感じてはいない。
そもそも、補佐官が直接、他界に出向くことは幾度かあった。
二界の補佐官が並んでいる様はまさに圧倒的な威圧感があったとまことしやかに噂されている。
もっとも、ディアからしてみれば、その体たる器をいくつ出現させたところで問題ない。
基本的に、ディアの意思は惑星そのものであるがゆえに、
その媒介ともなるべき【アンテナの役割】をしているだけにすぎない器はいくつでも表すことが可能。
どちらの界にも、それぞれの王と補佐官が姿を消したことが伝わっている。

もっとも、事が事だけに、
上層部の一部のものしかしらない重要機密扱(トップシークレット)いではあるが。
「さて。と。ゼウスも気がついたことだし。とりあえず現状説明と報告にうつりましょうか。
　さて、リュカ。反旗組織にてつかんだことをこの場でとりあえず彼らにも説明してね」
有無をいわさないディアの言葉。
「はぅっ……。いいですけどね、いつも主様が唐突なのはいつものことですし。
　それはそうと、そちらの方は…もしかして？」
この場のものではない気配の持ち主。
この場にいるこの少女とその懐に入って小さくなっている子猫はあきらかにこの【場】の気配ではない。
この恒星群の内部において発生した様々な命は独特の気配をもっている。
ゆえにどのような姿になっていても、内部のものかどうか、というのはわかるようになっている。
しかし、しかしである。
目の前の少女達からは異なる気配をかんじる。
どちらかといえば、意思達よりも遥かに大きな、全てを包み込むようなそんな感覚。
恐る恐るといったふうに戸惑いつつもディアに問いかけるそんなリュカに対し、
「ああ、説明してなかったかしら？こちらの方がなぜかここにやってこられた次代様よ。
　『えっと。美希様。こちらはリュカといいます。彼も日本語は話せますので安心してくださいね』」
伊達に永く『生きて』いるわけではない。
彼もまた、日本語は完全に把握している。
実際問題として狭い部屋のはずなのに、ここまでいろいろと集まっ

ても狭く感じないのは、
この部屋そのものの空間をディアがいじっているがゆえに他ならない。
「えええ!?やっぱりこの御方が次代様!?
『え。ええと、改めて自己紹介させていただきます。
僕はリュカといいます。一応、意思様の間者もどきをやってます!』」
「…リュカ。何よ、その自己紹介は……」
おもわずそんなリュカの自己紹介に思わずつっこみをいれているディア。
「え?だってこの説明のほうがしっくりきません?」
どうやら本気でそういっているらしい。
それゆえに、かるくため息をついた後、
『とりあえず、彼はまあ、私の手足になって動いてくれる存在という認識でいてください。
私とて常に行動ができるわけでもないですし。あまり動くと世界が崩壊しかねませんし』
それは本音。
というかそもそもすでにもうかかわりすぎているような気もしなくもないが。
それでも、力はほとんどだしていないのでどうにかなっている。
彼女が本気をだせば、一瞬のうちに、この惑星上に存在している全ての命は死に絶えるであろう。
「は…はぁ。とりあえず、改めまして。私は佐藤美希といいます。この子はみゅ〜です」
「みゅっ!」
しかしここまで大人しい子猫、というのも珍しいであろう。
先刻からずっと美希の懐にはいったままで大人しくしている様が何ともかわいらしい。
ふわふわ、もこもこの子猫が甲高く鳴く様はあるいみ見ていてほほ

えましくおもわず和む。
とりあえず相手のほんわかとした雰囲気に今まで張り詰めていた緊張が少しばかりほぐれてくる。
「あの？少しきになったんですけど。さきほど私の聞き間違いでなければ、
　補佐官親衛隊とかいってませんでした？それっていったい……」
とりあえず疑問を一つづつ解決していかなければ話しにならない。
そんな美希の問いかけに対し、
「？補佐官様？こちらの方はいったい？我らにも判らない言語…
　伝道師様達が使われている言語によく似ているようにも思いますが…？」
いまだに完全に美希の紹介をされていないゼウスが首をかしげつつも、
それでいて恐れながら、といった感じでディアにと問いかけてくる。
「え？ああ。そうね。とりあえずこの場にいる全員にも一応改めて紹介しておかないと。
　それに、このかたの今後のこともあるし」
とりあえず、大姉の話しの結果によってはしばらくここに滞在することになるかもしれない。
しかし、彼女が次代の器、次代のマァト、という事実をいうわけにはいかない。
ならば、彼ら…
天界と魔界の実質的な実力者であるゼウスとサタンに説明できること、といえば限られてくる。
それゆえに。
「彼女は、別の世界からここにやってきた、いわゆる異なる世界からやってきたお客様。
　今後どうなるかはわからないけど、おそらくしばらくはこの地に滞在するようになるとおもうの。
　それで、ゼウスとサタンには彼女の後見人、という形で推薦状

をかいてほしいのよ」
「「・・・・・・・・・・は？」」
異なる世界。
たしかに、自分達が存在している世界よりも他に数多の世界がある、とは聞かされている。
しかし、しかしである。
そのような存在がやってくるときは、必ず門に何らかの事前現象がおこりうる。
さらにいえば、時空神クロノスがそんな空間の歪みを察知していないはずがない。
この地はかの大異変の後に、そういったところにもかなり敏感に反応するように創られた。
そうきかされている。
「あなた達の疑問もわからなくもないけど。
クロノスの管理する空間にも引っかからないで迷い込んでくる。
そういうこともありえる、ということよ。だけどこの方はこちらの常識も何も知りえないし。
ならば、学校にかようことによってある程度の知識を身につけてもらっては、とおもってね」
彼女を一人で行動させるわけにいかない。
万が一、彼女の身に何かがおこりかけ、無意識のうちに彼女の力が発動すれば、
それこそこの太陽系どころか銀河は消滅してしまう。
「…まあ、これはまだ当人に確認はとっていないんだけど。
そうなったら二人には改めてその旨をお願いするわね。さて…と」
いまだにその場にてなぜか固まるサタンとゼウスをそのままに、
「では、改めて、現状説明にうつるとしますか。
あ、美希様は先ほどからみるかぎり、英語がいけそうですね」
「え？あ、はい」

「なら、これより、共用語にて会話することにしましょう」
英語で語りかけた後、それにたいし反応が帰ってきたことに安堵し、その場にいる全員を見渡し、うながしているディア。
「英語かぁ。まあ、いいけど。
あ、えっと。次代様。先ほどの疑問だけど。
この世界には、主神と魔神に仕えている存在である補佐官様達の親衛隊、というものがあるの。
二つの世界において二人をひと組、として親衛隊組織なんてものができてね。
んで、そこのアテナちゃんとメフィちゃんもその組織の一員。
ちなみに、発起人はヘラさんだよ～。あ、ヘラっていってわかる？」
「……判りたくないけどわかります。たしか大神ゼウスの妻、ですよね？」
どこまで神話の神々がでてくれば気が住むんだろう？
北欧神話にギリシャ神話。
…まさか、クトゥルフ神話までででてくる…とはいわないわよね？
そんなことをふと思う美希。
しかし、美希はまだ知らない。
実際問題としてかの神話にでてくる神々もこの地には存在している、ということを。
おそらくこの中で彼女に違和感を感じさせずに説明できるのは自分のみであろう。
そう判断して説明しているリュカ。
当然、美希が頭の中で夢物語といっても過言でない神話の神々の名がでていることに戸惑っている。
などとは夢にもおもっていない。
「さすがリュカっち。でもたしかに、次代様も混乱してるよね。記憶もないみたいだし？」
次代の器である存在なのでどこまで威圧感漂う存在なのか身構えて

いたが、
どうやら、当人は今のところ【次代】、という認識すらないらしい。
おもわずぽそっとつぶやくヴリトラに対し、
「あの？神竜様？その次代とかって何ですか？」
先ほどからどうも気になって気になって仕方がない。
そもそも、彼女を保護してから、そのような台詞は幾度もきいている。
それゆえにといかけているアテナ。
「ん～、何、といわれても。次代様は次代様、だし。
　それより、天界と魔界のほうの反旗組織の撒いた種はどうなってるの？」
何と説明していいものかわからずに、さらり、と話題をかえているのはいかにもヴリトラらしい技。
わざと話題を変えられたことに気づくことなく、
「とりあえず、魔界においては、
　そちらのフェンリル殿のおかげで全ての念は不本意ながら回収できています。
　第三者の力を借りての騒動の収束…不覚としかいいようのない失態ですっ！」
自分達のみで解決できなかったことを悔いているらしく、強い口調でいいきるサタン。
何しろ魔界にはびこっていたある一定以上の力をもつ【念】の全て。
その全てがフェンリルたったひとりの手により完全に駆除された。
彼らが様々な手をつかって四苦八苦していたというのにもかかわらず。
いくら彼らの能力に【念】を喰らう力があるとはいえ、さすがにへこむ。
ゆえに悔しさがどうしても表にでてしまうのは仕方がない、といえば仕方がないのであろう。
さらに、魔界をあるいみ平定したのち、

フェンリルは天界にも移動し、同じようなことをしでかしている。
つまり、天界と魔界。
どちらの界においても、フェンリル、という一つの存在の力により、人為的にばらまかれた【念の種】ともいえるそれらがすべて駆除された。
念の形は様々。
それらが害意をもつのか善意をもつのか見極めて攻撃をしかけていた彼らと異なり、
基本的に、フェンリル達は、全てのある特定の力以上をもった【念】を喰らいつくす。
それこそ、善意や悪意、といったものにはまったくもって関係なく。
「妖精界のほうはそこのヨムちゃんこと、ヨルムンガルドがはびこる念を駆除してくれたみたいだし。
　私の方の霊獣界も面倒だけど全部の念を取り込みおわったし」
ちまちまと本当ならば行動して多少なりとも暴れたかったが。
どうもそうはいっていられない事態と判断し、しかたなく力の全てを世界にゆきわたらせ、
そこにはびこる全ての【念】を我が身に取り込んだヴリトラ。

念、とは強気意思であり、強き心が一人歩きして形を成したもの。
ほうっておけば、害ある存在に姿をかえるか、はたまた誰しもに幸運を授ける存在に変化するか。
それはその念の性質しだい。
片方は、いまやゾルディ、と呼ばれ、片方は、ロア、とよばれている存在たち。

この場に集っているのは、魔界、天界、そして霊獣界に属する存在達。
あるいみ、王以外で考えるならば、三界の実力者がこの場に集っている、といっても過言でない。

「まあ、僕の子供たちならばそんなことは簡単だけどね。
　それより。補佐官様？僕ら家族はのんびりとしててもいいの？
それともやっぱり何か役目あり？」
きになっていたのはそこ。
次代の器たる存在がこの場に来ている以上、何となくどんな役目を
言い渡されるかは理解している。
いるがやはり、直接確認しておきたい、というのもある。
できうれば、妻と子供たちとのんびりと過ごしたい、
とおもう彼の気持ちはおそらく間違ってはいないであろう。
誰しも、離れていた家族が共に過ごせるようになったならば、
まちがいなく動乱の中に身をおくよりも、家族との安らぎを選ぶ。
しかし、このたびの出来事は、家族を優先したばかりに、
家族が安らげる場所すら失いかねない重大な出来事にと発展してい
る。
「とりあえず、
　ロキ達家族は、アンの神殿でもある、月の神殿にしばらく住ま
わっていてくれたら助かるわ。
　そこから引力圏全てにおいて結界の維持、それとこの惑星の周
辺の空間結界。
　あの神殿からならばどの界にも自在にゆくことは可能なので、
さほど問題はないでしょう？」
月の神殿。
月の抱擁でもあるアングルホダの聖殿でもあり、彼女が本来住まう
べき場所。
しかし、彼女はロキと恋に落ちた後、その身を天界にと置いていた。
もっとも、その結果として色情魔、としかいいようがないゼウスに
目をつけられてしまったのだが……
「なら、僕はとっととアンのもとにいってもいい？彼女、きっと一
人でさみしいとおもうんだ～」
「お父さま！私もお母様のもとにいきたいです！」

「わたしも！」
「僕も！」
そんなロキの言葉をうけて、その場にいる少女と青年、そして子犬のような狼が同時に言葉をはっする。
「邪神ロキとその三兄弟……」
たしか、北欧神話では、彼らがラグナログの要の存在だったような気がするけど。
だけどどうやら同じ名の神々がいる、というだけでその神話の世界感が繁栄されているわけではないみたい。
何となくこの三人と一匹をみていれば、
かつて中古本や配信レンタルでみたとある話しをおもいだしてしまう。
まあ、あれも元々は北欧神話の邪神ロキに焦点をあててた話しだったし。
それゆえの親近感みたいなのがあるのかな？
あるいみ、のろけともとれる邪神ロキ、と名乗った青年の言葉と、彼の子供たち、と説明をうけた二人と一匹をみつつどこか冷静にそんなことを思っている美希。
そんな美希の心を知ってか知らずか、
「なら、さっそく、お願いしてもいいかしら？いつまた厄介なことになるかわからないしね。
　さきほどの偵察隊による仮初めの襲撃はナイアルラルホテップによってどうにかなったけど」
ぶっ！
さらっといったディアの言葉に思わず口にしていた紅茶を吹き出しそうになってしまい、
おもわず、
「ごほほっ！」
その場にてむせ込む美希。
いやあの、その名前ってクトゥルフ神話の中でも有名な神の一角で、

さらには様々な物語などにも多様されている神の名前じゃぁ！？
そんな美希の心の動揺をものともせず、
「あ～。なんかそうみたいですね。とりあえず、では、僕たち家族はこれにてひとまず失礼しますね。
あ、次代様。今後ともよろしくおねがいしたします。
できましたら、うちの娘と仲良くしていただけるとありがたいです。
何しろこの子は妻ににて、ものすごく引っ込みじあんで、でもものすっごく優しくて……」
何やら延々と子供自慢が始まっているような気がひしひしとする。
そんなロキの姿を横目でみつつ、
「…あいかわらず、子煩悩だな。お前は」
思わずあきれた声をだしているサタン。
彼の子煩悩差はあるいみ、天界においても魔界においても有名すぎるほどに有名であった。
…すこしばかり、子供をからかったものでもいれば、父親である彼がでむき、
その存在をてっていてきに懲らしめた…という話しも多々とある。
ゆえに、ロキの家族にはかかわるな。
それが様々な界において暗黙の了解ともなっていたのだが……
その暗黙の了解を破ったのが、オーディンとゼウスに他ならない。
「はいはい。子供自慢はいいから。それじゃ、後何かあったらまた連絡するわね」
まだ言い足りないのに。
そんな不満そうな表情を一瞬うかべるものの、
「それでは、我ら家族はこれにて。さ、いくよ。皆」
「「「はいっ！」」」
いいつつも、先ほど五の意思がでてきた扉にむかって歩きだすロキ達家族。
おそらく、彼女がでてきた、ということはあの扉はそれぞれの場に

繋がるはず。
そう確信しての行動。
そのまま、扉をあけて、その向こうにはいってゆき、
やがて、パタン、と静かに扉がしまりゆく。
しばしその後ろ姿を見送りつつも、はっと我にと戻り、
「あ、あの？あの扉の向こうって…どうなっているんですか？」
さっきも見知らぬ少女…当人は、木星の意思、と名乗っていたが。
とにかく見知らぬ少女が出てきたことからして、どこかに繋がっている可能性は遥かに高い。
もしくは、その扉の先に転移するための装置があるのかもしれない。
彼女の住んでいた世界においても、転移装置、というものはいくつかあった。
惑星間における移動などは主にその装置を使って行われていた。
もっとも、いまだに一般的に普及しておらず、一般家庭に普及するまでには数十年はかかるであろう。
とはいわれていたが……
「ああ。ただ他の場所と自由に繋がるように設定してあるだけですよ？」
「だけ…って……」
もう、ここは私の常識が通用するような場所ではない。
そう確実に割り切らないといけない…んだろうなぁ～……
さらっといわれ、どこか脱力しつつも、そんな自分の思考に陥る美希。
たしかに、かつての常識に捕えられていては、どうにもらないであろうことは明白。
かといって、すぐに状況になれる、というわけでもない。
どうやらしばらくは、戸惑いつつも帰る方法がわかるまでここで御厄介になるしかない…みたいだし？
そんなことをおもいつつも、自然と深くため息をつき、
「……とりあえず。すいません。ここでの常識。あと何がおこって

いるのか説明ねがいます……」
まずは状況把握。
どうやら目の前にいる全員が全員、自分に害をなすつもりはまったくもってないらしい。
それだけはなぜかわかる。
ゆえに、自分の置かれた状況を今一度確実に把握するためにと、おそらく全てをしっているとおもわれるディアと名乗った【地球の意思】にむかい、
しっかりとその視線をむけてといかけてゆく美希の姿が見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～光と闇の戸惑い～（後書き）

ううう…話しがまたまた進んでない……
次回でさらっと美希に状況説明。
んでちょっとしたアテナ達の暴走気味？を入れた後。
ようやくまたまた学園生活再開、ですね。
ようやくラストまであとすこし！のところまできましたよ。ええ。

ロキ家族も月の神殿にむかったことだし。
おそらくここまでくれば、ラストのイベントはみなさん予測は可能かと・・・

光と闇の楔　～【美希（次代）】の入学～（前書き）

利用規約がかわったようですけど、自身のＨＰに平行掲載してる場合ってどうなんだろう？
まあ、あちらにもきちんと、こちらに投稿してる旨はかいてるから問題ないのかな？
どっちにしても、あるいみ問題なし？のような気もしなくもなし……
ちなみに、ＨＰのほうはなろうさんに上げて数日後に数話、まとめてＵＰしてたり。
まあ、うちにくるひとは基本的に二次さん目的の人がおおいので、オリジ小説のほうを閲覧してるひとはごくわずか、と認識してますけどね（苦笑

※人物設定にサクラ伝道師の設定を追加いたしました

光と闇の楔　～【美希（次代）】の入学～

かつて、この地上は人類によって破滅にと突き進んでいた。
絶えず破壊されてゆく自然。
自然をないがしろにした発展、という名の文明。
そしてその文明はいつの日か、世界そのものを変えるほどの発明を生み出した。
そのまま不安定ともいえる発明のまま研究がすすんでいれば、
地球とよばれていた惑星を中心として空間が歪み、
さらには空間を構成している全ての粒子そのものが消滅し、
銀河の存在そのものが危機となっていたであろう。
しかし、そこに至るまでに人類は愚かなるとあるプログラムを開発した。
神々の悪戯、と開発者によりつけられたそれらは、
絶えず全ての情報をよみとり、より進化してゆくプログラム。
そして…そのプログラムの暴走により、人類が開発、管理していた全ての装置。
コンビューター、と呼ばれしものに管理させていた全てのものが狂った。
その結果…大地にはいくつもの当時いわれていた化学兵器、といもうものが飛散した。
その後の結末は…いうまでもなく。
電磁波すらをも研究していた装置がそのプログラムに汚染されたことにより、
地球を取り巻いていた大気の電磁波が一時途絶えた。
さすがにこれ以上被害が及ぶとなると再生がおぼつかない。
そう判断した惑星の意思が表にでることを決意し、一時、惑星上の

時間は全て停止した。
自転すら止めた一時的な措置。
そして、惑星を壊滅状態に陥った存在達の魂を保存、管理し自らの罪を背負わすことにした。
…それらの新たなる名前は【伝道師】。
二度と、かつてのような過ちを犯さないために、世界に設けた楔。
一つの種族のみが突発して発展したがゆえに、かの悲劇はおこった。
そう判断したがゆえに、光と闇に属する存在を生み出すことにした。
それにより参考にしたのは、
それまで大地で文明を気づいていた存在達があがめていた神々、
そして魔王達といった神話や伝説、といった代物。
実際、魔王という存在は、一部のものには認識されてはいたが、
次元を隔ててたしかに地球上に存在していた。
それを知る存在はごくわずか、ではあったが。
それらもすべて再構築し、あらたに全ての存在に認識できるように生みなおした。
様々な種族も同時に新たに構築しなおし、世界は新たな道を歩み始めた。
そのときに新たに【意思】が設けたのが、各【界】という代物。
様々な界にはそれぞれに異なる種族が住まい、またそれぞれがそれぞれに役目をもつようにした。
それは今は昔。
その当時のことを知る存在はほぼいない。
いるとすれば、再生時期、もしくは新創世記、ともよばれた時期にすでに存在していた、
伝道師と、そしてその当時にうみだされた神竜。
そして…惑星そのものの意思達、くらいであろう。

すでにだれもが口にすることのない、あらたな世界の創世記。
しかし、それが真実であり、全ての始まり……

「…なんか信じられませんけど、ですけどある意味納得しました」
この世界における、自分が住んでいた場所との類似点。
おそらく同じような進化をたどってきていたのであろう。
異なるのは、かつてこの地上において、魔力、という存在が発見されなかったこと。
美希が住んでいた惑星上においては、科学も発展し、
また、物質をまとめる視えない力にも重点をあてていた。
いわゆる精神力とも、霊力、ともよばれていたそれは、科学とともに発展をとげていた。
ゆえに、魔科学、というものが発展し、様々な分野にそれらが普及していっていた。
しかし、この世界においてそういった存在はあくまでも一部の力、として普及しなかったばかりか、
場所によれば、それは異質なもの、として排除もされていた。
排除するか受け入れるか、それによりどうやら進化の道が異なったらしい。
魂が不滅というか死は消滅である、という概念は美希の住んでいた惑星には存在しない。
中にはそのようにいっている輩もいるが、
実際に魂を視れる装置が開発されてからは意義を唱えるものはいな

かった。
もっとも、以前その装置が暴走してしまい、地上にいきている存在全てがそういった類なる存在。
それらを視る力がついてしまい、それらに対抗する組織ができていたのもまた事実。
しかし、この惑星はどうやらそういったことはおこらずに、逆に意図的に認識できるようにと細工したらしい。
おおむね、日本語で美希には説明が成されたがゆえに、ゼウスやサタン達は何を言っているのか理解できていない。
しかし、それは世界の根柢にもかかわることなので、彼らにおいそれと教えていい類のものではない。
万が一、自分達の存在意義を疑うようなことになればそれこそ本末転倒。
…もっとも、そうなった場合、即座に【意思】は対応し、【再生】させる気満々なのだが。
もともと、意思が願っていたのは全ての存在が共存できる世界。
いずれは、世界の隔たりも関係なく、全てのものが手を取り合い生活できれば、とおもっているのも事実。
そうすることにより、よりこの惑星だけでなく、この太陽系群全てが新たな一歩を踏み出せるであろう。
それは確信。
サクラとリュカと、そしてディアによる三人からの説明。
サクラからは伝道師の立場からみた今までの成り立ちを。
リュカからしてみれば第三者的な視点から。
そしてディアからは当事者的な視点での説明。
三者の視点より説明されれば、ある程度のこの世界の成り立ちとありようがみえてくる。
どうやらこの世界、美希のいた世界では完全なるファンタジー世界。
物語やゲームの中でのみで語られていた世界が現実のものとなっていると認識して間違いなさそうである。

もっとも、美希が暮らしていた世界には、バーチャルゲームというものもあり、
その精神体のみをゲームの空間にとおき、簡易的な異世界を堪能することも可能、ではあったのだが。
ここしばらくつづいた世界規模の異変により、それらを管理する会社そのものが運営上の問題で、
一時休んでいたりしたことはあったにしろ。
何しろいつ異形…つまり、敵意をもった霊体などに襲われるかわからなかった日々。
ゆえに学校の教育の一環として、それらを利用した実質的な戦闘科目もうけざるをえなくなっている。
それらがここでどこまで通用するかはわからないが。
もっとも、美希は母の入院費などを捻出するためにほぼアルバイトにあけくれていたので、
そういったゲームなどはしたことがなく、学校もいわゆる通信教育がほとんど。
それでも、母が最後を迎えた病院に移ったときに、その病院は完全看護が主体となっていたがゆえ、
ほんとうに数年ぶりに学校にかよえるようになっていた。
その学校もあの大地震の影響でどうなったかはわからない。
大地が裂け、沈む感覚。
あの地にいない以上、どれほどの被害がでたのかはわからない。
火山帯であったことから、休火山が噴火しない、ともかぎらない。
それでなくても、日々、火山活動には注意するように、と上よりお達しがあったばかり。
ふと、いつ戻れるのか、それとも二度ともどれないのか。
今まで暮らしていた場所のことを思い出し、顔を伏せる美希。
そんな美希に対し、
「それで、美希様はどうなさいます？この地に滞在するか。
それとも他の惑星に移動してみますか？

他の惑星、といってもこの太陽系の惑星のうちのどこかになりますけど。
ですけどいまだに他の惑星にはここのように数多な生命は誕生していませんが」
人類と呼べるものは確かに誕生を果たしている。
いるが、地球人とはまた異なる進化をとげているのも確か。
海中で生活するのに特化した人類が誕生している惑星もあるにはある。
もしくは、微生物などが進化し、知能をもった文明等。
いきなり見知らぬ姿のものの中に一人放り込まれてパニックになってもらってもかなり困る。
ちょっとしたきっかけでいつ何どき無意識の力が発動するかわからない。
それほどまでに、【次代の力】、というものは未知数極まりない。
「これは一つの提案なのですけど。まだ美希様はこちらの世界のことも詳しくないですし。
それに言葉も日本語と英語…あと少々フランス語の聞き取り？しかできないみたいですよね？
日本語とここでの言語の違いを教えますので、ここに住まわって、
ここに存在している学校に通ってみる、というのはどうでしょう？
ここで生きるにしろ、様々な資格をとるにしろ。とりあえずギルド協会学校に通い、
必要最低限の力などを身に付けたほうがいいとおもいますし」
日本語にて美希にディアが提案しているそんな中。
「しかし、補佐官様が…学校に？」
「何を考えておられるのか我は理解できかねる……」
何やらしみじみと唸るようにしてつぶやいているサタンとゼウス。
彼らは気づいていない。

自然と、名前ではなく、【補佐官】としか呼んでいないことに。
それはディアが干渉しているからに他ならないのだが。
ゆえに、互いが互いに補佐官、と呼んでいても、
サタンからしてみれば、
ゼウスが補佐官、と呼んでいるのは魔界の補佐官ルシファーであるからそう呼んでいる。
そう解釈し、ゼウスからしてみても、
サタンがそのように呼んでいる、というのは天界の補佐官ティアマトだからであろう。
そう解釈しているので、互いの疑念に気づくはずもない。
そもそも、本来ならば、天界の、魔界の、をつけて補佐官、と呼んでいるのだが。
今、この場では互いにその敬称すらつけていない。
同一の存在である、と認識されると後々面倒極まりないので、多少彼らの魂に直接干渉しているディア。
当然、ディアにより生み出された魂である彼らはその干渉に気づくはずもない。
ゆえに、それぞれが違和感を抱くことなく、互いが互いに、
この場にいるのは互いの界の【補佐官】一人のみがいる。
そう認識していたりする。
もっとも、その干渉にリュカとサクラは気づいてはいるが、わざわざそれを説明する義理はない。
というか、下手に説明して後からお仕置きをうけるほうが彼らにとってはかなり問題。
ゆえに、この場は黙って彼らが勘違いしているままにとしていたりする。
一方で、
「ええ!?アテナちゃん、ずるいっ!補佐官様と同じ学校にかよってるの!?
…私もいこうかなぁ……。ここは親衛隊会員として、やはり同

じクラスになるべく裏工作をっ！」
何やら別の意味で盛り上がっているアテナとメフィストフェレス。
「ずるいっ！メフィストちゃん！私だって補佐官様と同じクラスがいいわっ！
　ああ、補佐官様とクラスメート、そしてめまぐるしい麗しき日々……」
何やら自分の世界にはいりかけているアテナの姿が見て取れなくもないが。
まあ、彼女が自分の世界に入り込み自分に酔うのはいつものこと。
それゆえに、いつものごとく、父であるゼウスとて完全無視を決め込んでいる。
「そういえば、学園側には、補佐官様の親衛隊というかファンクラブはあるの？」
「聞いたことがないわ」
「ならさっそくつくらないと！」
「そうね！ああ！でも、私も生徒になるべきか、それとも教師をつづけるべきかっ！」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』
そんなこの場の雰囲気とは別の意味で盛り上がっている二人の会話に一瞬無言になりつつも、
「……主様、頑張って」
ぽそっと思わず同情の声を発しているリュカ。
「あの二人、ほうっておいたらどこまでも暴走しそうね〜。
　というわけで、リュカ。あなたも転入してきなさい」
ぽそっと同情の言葉を紡いだリュカに対し、にこやかな満面の笑みを浮かべつつもさらっと言い放つディア。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・って、えええええ！？」
何やら、さらり、とこれまた重大なことをいわれなかったであろう

か。
思わずその場にて叫ぶリュカは間違っていない。
絶対に。
「なら、私も学校に所属するようにしたほうがいいですかね？三の意思様。
　次代様が学園に通うようになれば、いろいろとフォーローも必要となってくるとおもうんですよ。
　伝道師の特権で多少のことはごまかせますし。
　何より記憶改竄装置はすでにもうどの界のものでも使用可能の域に達していますしね」
永い年月の間、自らの研究の果てにそのような装置をも開発しているこのサクラ。
「「…いやあの、ちょっとまってください！」」
思わず何やらかなり問題極まりない会話をしているような気がするのは錯覚か。
ゆえに、共通語にて会話するディア、リュカ、そしてサクラの会話を小耳にはさみ、
思わず同時に突っ込みの声をあげているサタンとゼウス。
「あら？何かしら？サタンもゼウスも。
　ここに、異なる世界、外の世界から何もわからないままに迷い込んできた方がいるのに。
　そんなおかたを他人任せにして役職にもどれ、とはいわないわよね？」
それ以上、抗議の声をあげようとする二人に対し、さらっと有無をいわさずにたたみかける。
「うっ…そ…それは…」
「たしかに…いや、でも……」
しかし、それはわざわざ補佐官自らが行うことではないような気がする。
しかし確かに、異なる世界からの訪問者ともなれば何か不安定要素

が起こっても不思議ではない。
おそらくそれらに素早く対処できるのは、まちがいなく補佐官以外にはいないであろう。
それだけは確信をもっていえる。
「私も意見に賛成～。そもそも、他の惑星だと、きっと次代様、混乱しかねないもの。
　何しろ次代様と同じ容姿の人類、いまだに発展してないし」
異なる発展をとげている生物はいるにしろ。
しかし、それらも、地球時間でいうところの四億年前に、
三の惑星より基本となる素を譲り受けたからに他ならない。
この時間の概念は、他の惑星によって大きくことなる。
それらは個々の惑星の自転率に比率する。
「二の姉様も心配だからくるっていってたし」
「ええ!?二の姉様が!?」
さらっという五の意思の台詞に思わず叫ぶディア。
その惑星における直系や質量的なものから、二の惑星とは昔からいろいろと協力しあってきている。
かつてとある存在が、第二惑星のことを双子惑星、姉妹惑星等。
と呼び称していたが、たしかにそれは的を得ていた、といえよう。
それらが狂ったのは、器の誕生時。
同じように発展していたかの惑星は、そのときの衝撃により、大地を覆っていた海を失った。
結果として、三の惑星とは異なる進化の道をたどる結果となってしまったのだが。
それももう、今は昔。
ゆっくりとではあるが、新たな大気を形成し、すくなからず海を形成しはじめている二の惑星。
二の惑星の大気は、基本、二酸化炭素より形成されていた。
しかし、大異変の際、三の惑星より、二酸化炭素を糧とし、別の物質を生み出す生物を移住させた。

そのことにより、第二惑星は新たな進化の道をたどり始め、結果として、分厚い大気の層の下に、新たな世界がひろがりはじめていたりする。
それらの生物は熱につよく、ゆえに五百度を超える二の惑星の気圧にも耐えぬいた。
元々、かの惑星においては、その惑星における大陸の高度、五十ｋｍ以上からは、
気圧と気温が第三惑星と酷似していた。
例えるならば、
たとえば高度５２，５ｋｍと５４ｋｍの間における気温は３７度から２０度の間であり、
高度４９，５ｋｍにおいての気圧は第三惑星における海抜０ｍとほぼ同じであった。
ゆえに、古代文明においても然り、第二惑星のその層に植民を行おうという声もあったほど。
いずれ、あちらの惑星が安定すれば、こちら側の存在を一部移住させてみようか。
という話しも前々から一応あがってはいる。
もっとも、それは意思達の間のみで交わされている会話であり、
ゆえに、他の存在がしるよしもない事実。
彼女達いわく共通語、しかし美希にとってはおもいっきり英語。
そんな彼女達の会話をききつつ、
「…学校？それに…ギルド？」
ギルドって、あの、ゲームの中とかではかなり定番の、あのギルド？
そんなものまであるの？
たしかに学校に通ってみないか、という提案はとても魅力的。
しかも、言葉は目の前のディア、となのっている惑星の意思がどうやら教えてくれるつもりらしい。
先が見えない以上、自力で帰る方法をみつけるかどうかしなくてはいけない。

といって、誰もたよるものがいないのも事実。
郷に入れば郷に従え。
それは日本のことわざにもあった。
ゆえに。
「私なんかがその学校にかよってもいいんですか？」
恐る恐るといいかける美希。
不安はあるが、未知なる知識に興味もある。
すくなくとも、誰しも、天界や魔界などという存在が存在している世界において、
まず確実に思うのは、魔法もあるであろう、ということ。
女の子ならば誰でも一度はあこがれる。
いわば、魔法少女。
美希達の世界においては、そうった類の分野ではなく、霊力、というものが主体となっていた。
…もっとも、それだけでもかなり魔法に近い活躍をしていたといえばしていたのだが……
「そのあたりは大丈夫よ。サタンとゼウスが後見人になってしまえば誰も文句はいえないから」
何しろ、天界と魔界における実力者二人の後見人ともなれば、ギルド協会がわも無視はできない。
よもや異界よりの迷い子、とは説明できないにしろ。
名目は多々とある。
詳しく明記しないまでも、地上界における勉強のため、と追記しておけばさほど追求はされないはず。
下手に詳しく突っ込み知ろうとすればとんでもない事実につきあたることがある。
それは今までの経験上、ギルド協会側とてよく知っている。
ゆえに、そのあたりはあるいみ暗黙の了解、と化している。
アテナが学校の臨時教師をしていたり、アスタロトが臨時教師をしているのもそれにあたる。

すなわち、藪をつついて蛇を出すな、の諺が示すごとくに、下手に追求すればロクなことがない、と彼らは知っている。
ゆえに二人の貢献と推薦があるだけでも、さくっと話しは早くまとまる。
ゼウスやサタンからしてみれば、補佐官には自分達の界にと戻ってきてほしい。
しかし、そこまでいわれて、否、といえるはずもない。
「いいんでしょうか…？」
何か彼らの意見を完全に無視して、進めているような気もするけど。
いつも常に人から一歩退いていたがゆえに、どうしても気おくれしてしまうのは仕方がない。
そんな美希に対し、
「いいも何も。あなた様に何かあったらこちらも困りますし。
と、いうわけで、サタン、ゼウス。これにサインしといてね」
「「って、すでに入学届を用意されてるんですかっ！！」」
すっと突如として目の前に突き出されたとある紙をみて思わず再び同時に叫ぶサタンとゼウス。
用意がいい、というか何というか。
用意周到。
たしかに、補佐官は常にそのようなところがありはする。
するが…つまり、ずてにこれをも用意している、ということは、絶対に断ることは許されない。
そう暗に示しているから性質がわるい。
「さて。じゃ、私はとりあえず、美希様にこのあたりの様子を説明しにいってくるわね～。
あ、ヴリちゃんもいらっしゃい。リュカはとりあえずそこの二人の暴走頑張って止めておいてね。
サクラは二人がさぼらないように見張ってて。五の姉様もご一緒にいかがですか？」
いまだに、アテナとメフィストは補佐官のファンクラブを創るだの、

同じクラスに行くためにはどうしたらいいだの。
何やら空想世界ともいえる彼女達の世界にひたり、話しを盛り上げている。
いまだに何やらわめこうとするゼウス達をそのままに、
「え、え？あ、あの？」
「とりあえず、美希様の服をかいにいかないと！」
「あ、三の姉様、私も選ばせてください！」
戸惑う美希をそのまま有無を言わさず立ち上がらせ、
そのまま部屋からでてゆく、ディアとヴリトラ、そして五の意思、と呼ばれている少女。
何が何だかわからない。

戸惑う美希とは対照的に、
「みゅ～～～♪」
どこか楽しそうな子猫、みゅ～の声がしばし響き渡ってゆくのであった……

「そういえば、美希様は何か得意なものとかありますか？」
「いえ、あの…その、何で様づけ？」
どうして自分のことを様づけで呼ぶのかわからない。
それでなくても、さきほどから、ジダイだの何だのよくわからないことをいわれている。
そもそも、時代って…何？
もしかして時代ごとに異世界からの訪問者とかがあって、迷子の名称だったりして？
そんなことを思いつつも、まさかね、と
心のどこかで否定しディアの問いかけに戸惑いの声を発する美希。
ジダイ様、という呼び方も、いくら呼び方をかえてください、とい

っても、
ヴリトラ、と名乗った…どうみても、神話にでてくる邪竜にはみえない少女の答えはといえば、
「次代様は次代様だもん！」
の一言で簡単に却下されてしまっている。
「別にないですけど。…あ、ただ周りがいうのは異様に運がいい、ということでしたが」
美希としてみれば運がいい、とは思わないのだが。
懸賞という懸賞全てにあたっていたり、または、お金がたりなくなって、
宝くじを購入し、目標額が必ず当たる、これぞ運がいい、といわず何というのであろうか。
もっとも、母一人、子一人であったがゆえに、無料の懸賞には応募できたものの、
宝くじといった代物はどうしても先立つ資金が必要となるので、
何かのイベントなどでもらったクジがあたっていたのだがる
「「あ～…なっとく」」
思わずそんな美希の台詞に、ディアと
…当人いわく、テル、と呼んでほしいといってきた五の意思の声が重なる。
何しろ美希当人の自覚がなくても、その魂そのものは次代のマァトの器。
つまり、全ての願いはマァトの意思となり、ゆえに、全てが達成されることとなる。
いわばどのような理不尽なことでも…世界の理に反しない限り、絶対に実現することとなる。
ゆえに思わずそのことを大姉より聞いていたディアとテルは思いっきり納得してしまう。
ちなみに余談ではあるが、
五の意思もまた、女性形態をとっている以上、その容姿は普通より

もかなり目立つ。
つまり、いわゆる美少女の分野に思いっきり入る。
しかも美希の容姿もこれまた目立つ。
そこに小さな少女であるヴリトラが加わり、三人と小さな子供連れ。
そんなメンバーで王都を歩いていて目立たないはずがない。
もっとも、先刻まであった正体不明の轟音や、いきなり光という光がかき消えた漆黒の空間。
それらの動揺もいまだに町の人々の中ではおさまっていない。
町の至るところには兵士達がばたばたとどうやら現状を確認すべく走り回っているらしく、
せわしなく動いている様子がみてとれる。
「大切なお客様ですから」
事実を当人にいって混乱させるわけにはいかないので、ひとまず無難な説明をしているディア。
「服はどのようなものがお好みですか?動きやすものとか、それともフリフリのフリルの服とか…」
「いえ。普通の!でおねがいします!」
切実に願う。
フリフリの服、というのをきき、思わず過去のトラウマを思い出す。
小さな子供が珍しかったとかいうので、とある場所にて着せ替え人形とされた幼少時の記憶。
お人形さんみたい、かわいい!
と言われ続けてほぼ着せ替え状態であったかつての記憶のような状態になるのだけは断じて避けたい。
それでなくても、学校に通いだし、簡易的な服しかきていなかった美希に対し、
周囲のクラスメート…なぜか特に上級生達がこぞって美希にかわいい服をきせようとした。
という事実もあったりした。
ゆえにこそ、それだけは経験したくない、とばかりにすぐさま返事

を返す美希。
「？美希様はかわいらしいとおもいますけどね。
　まあ、希望がそうでしたら、普通の、それでいてしっかりとした服を選ばせていただきますね！」
「いや、ですから安いので……」
どうやら美希の意見はあまり聞き入れてはもらえないらしい。
といっても、この世界でどのような服が普通なのかはよくわかっていない。
おそらく美希のいた世界のような服装は、どうみても、この世界には材質からして存在していないっぽい。
街並みをみても、中世あたりのような感じをうけなくもない。
事実、戦闘において剣だのつかっているところをみれば、
まだまだ発展途上、なのであろう。
一度、疲弊した世界が一からやり直す、ということはよくあること。
それでも、他から手を差し伸べてくれれば元の状態に戻すことは可能なれど、
世界規模でそれがおこれば、もはやもうそれは不可能に近い。
「私も学校に通おうかなぁ？私がいてもいなくても、あちらは別に問題ないし。
　何かあれば自分の中のことなのですぐにわかるし」
「それは構わないとおもいますけど。でも五の姉様、すぐにボロをだしそうですよね」
「うっ！」
確かに、十の意思の中においても、一番素直、とまでいわれている五の意思である。
万が一、存在そのものが、惑星の意思の化身だ、とわかったときの人々の対応というか反応…
考えただけでもかなり怖い。
というか考えたくもない。
かつて、それを知られたときに、宗教なるものが出来上がり、

そのまま宗教戦争に突入し、文明というか大陸ごと滅んでしまった経緯をもっていればなおさらに。
「とりあえず、まずは美希様の通学服、ですね。学生服なども買わないと」
「あれ？でもお姉様、私服でもたしかいいですよね？」
「おそらく、美希様はきちんと学生服があればそれを着こなす性格だとおもうのですけど。
　ちがいます？」
「…いえ、そのとおりですけど……」
何でわかったんだろう？
たしかに決められたことは従わないと何か自分が悪いことをしているようで心苦しくなってしまう。
説明してもないのに性格を見透かされ、首をかしげつつも肯定する美希。
でも、学生服か。
…向こうの世界の学生服と同じようなものかな？
そんなことを思いつつ、そのままディア達につれられ、しばし美希は王都を探索してゆく――

光と闇の楔　～【美希（次代）】の入学～（後書き）

ふふふ。ようやく学園生活?の意味がわかってきたかと。
学校に入学してくるのは、当然、次代の器である美希だけではありませんよ?ふふ♪
まあ、生徒や先生達にはこれからちょっとした騒ぎに巻き込まれてもらう予定です

光と闇の楔　～転校生と留学生～（前書き）

・・・なんか、最近仕事おわって家にもどったら、打ち込みしてたら異様に眠く…
・・・そのうちに、眠気にまけて毎日更新…滞りそうです…すいません（汗
さて…世間様では連休にはいるが、毎年のごとくにお休みはなし・・・
このたびは１０日連続勤務、です…ま、いつものことといつものこと……

「…え～と……」
提出というか送られてきた書類をみて思わず絶句。
絶句する以外、何と表現すればいいのであろうか。
それすら言葉がみつからない。
「…まあ、何だ。このたびはいろいろと試練、とおもってがんばってくれたまえ」
ギルド協会の会長より呼び出しをうけた。
それはいい、いいのだが。
渡された書類をみてその場に立ちすくんでしまうのは仕方がない。
絶対に。
送られてきた、というその書類渡されたとき、まず始めに感じた感想。
何？この冗談？
というのが本音。
それでなくても、今現在、すでに魔界の大侯爵に天界の女神。
さらには竜族の少女をうけいれて、今までにない状況になっている、というのに、である。
「とあり人物の入学依頼って…しかも、後見人が雷神様と暁の魔王様！？」
そう。
問題は、入学届とともに届けられた一つの書類。
聞いたことのない学校名が記されていることから、おそらくどこかの界に所属している人物か、
はたまた、それとも個人経営していた学校からの転校生なのか。
それはわからない。

しかし、その人物の後見人、として
きちんと正式に天界と魔界より書類がとどいたのだからたまったものではない。
さすがに邪険にできる内容ではないがゆえに、こうして学校の理事長を呼び出した。
そこには、この学校にて常識を学ばせてほしい旨が簡潔ではあるが記されている。
しかし、どうして自分達のギルド協会に?とおもうのは仕方がないであろう。
何しろ協会が経営している学校の支部はいたるところに存在している。
たしかに、地上界において本部のあるこのテミス王国の学校は、地上のどこよりも様々な分野を学べる場として起動してはいる。
いるが、常識を学ぶのならば、別の界において学んでもいいはずである。
それがなぜに、ここ、地上界?
その意図がわからない。
天界の関係者なのか、はたまた魔界の関係者なのか。
妖精界の関係者…という可能性もなきにはあらず。
「…まさか、妖精界の補佐官ミルッヒ様…ということはないですよね?」
「…それはわからん……」
かの妖精界の補佐官はどのような姿をしているのか、いまだに様々な分野において意見がわかれている。
何でも育てた存在の影響をうけその姿を変える、とは伝えられている。
どうやって産まれるのか、それをしるのは妖精達のみ。
何でもその産まれを公表すれば、産まれを阻止しようとする愚か者がでるかもしれないから、
というのが基本的に隠されている理由らしい。

しかし、妖精界の補佐官は、妖精達を守るべく様々な知識を吸収することが義務付けられている。
ときく。
「しかし、妖精界の補佐官様ならば、精霊王か精霊神からの推薦があってもおかしくはない、がな」
推薦、もしくは後見人。
基本的に、妖精と精霊は仲がよく、互いに互いが必要不可欠ともいえる存在である。
ゆえに、天界と魔界が介入してくるよりは、精霊界のほうから介入があったほうがよりしっくりくる。
しかし、だからといってその可能性がない、とはいいきれない。

彼らは知るよしもない。
…よもや、その届け出にあった少女が他の銀河よりの来訪者であり、そしてまた…この地を含む全ての銀河を抱擁している、主たる銀河。
その次代となるべく器【マァト】であることを……

しばし、その届けられた書類を前に、頭をかかえるギルド協会の役員達の姿が見受けられてゆく……

光と闇の楔　～転校生と留学生～

「なんかもう、何でもあり、ですよね。ここ……」
ここが特殊すぎるのだ、と、いまだに他を知らないがゆえに、この世界が全てこのようなものだ、と勘違いしてしまっている美希。
結局のところ、とりあえず同居人、という形でディアの部屋にと居

候することに決まったのだが。
もっとも、なら部屋が必要ですね。
といって、さらっとディアがこれまた美希の部屋を一瞬のうちに具現化させた。
元々、住んでいた家の構造などをきき、とりあえず紙に簡単に書いてもらい、
本来ならば、水晶にでも念じてその映像をだしてもらおうか、ともおもったが、
何しろ相手が相手。
自分の意思で力のコントロールができていないと確信が持てる以上、力がヘタに暴走しかねない方法はとらないほうがいい。
それゆえに、紙に書いてもらう、という方法をとったディア。
その結果、美希の説明と、紙にかいてもらった形を元にして、
元いた場所とほぼたがわない場所を創りだしたディアもさすが、といえばさすがであるが。
この世界にはいまだに普及、というか発明すらされていない冷蔵庫や暖房器具。
美希の住んでいた世界においては、
世界に満ちている魔力と、そして太陽エネルギーを利用した力において、
それらがきちんとほぼ全世界に普及していた。
…もっとも、その自然に満ちていた力の使いすぎで世界の安定が狂いかけていたのも事実、なのだが。
本来は狭いはずの寮の一室。
しかし、この部屋においては、ディアが空間をいじっていることからも、ちょっとした屋敷程度の広さはある。
もっとも、普通に入口からはいったときにみえるのは、他の部屋と変わらないようにしているが。
それらの部屋に入るためには、部屋に設置してある、扉をくぐる必要性がある。

ちなみに、その扉も本来ないものであるからして、壁に絵画のようなものを飾っているようにみせかけ、
その絵画が扉替わり、となっていたりする。
この場にディアこと、『補佐官』が残る、といったのは仕方ないにしろ、
それでも、やはり彼らとしては【王】と直接連絡がとれるのは彼女しかいないがゆえに、
どうにか戻ってきてほしい、と頼みこんだ結果、
何かがあれば、こちらに使いをよこすように、ということで話しはまとまった。
ちなみに、最後の最後まで、サタンもゼウスも、それぞれがそれぞれに。
自分達の【界】の補佐官である、と信じ切っていたことは、互いが互いともに気づくことはなかった。
まあ、滅多なことで手を患わすようならば、それなりの対処を考えなければならない。
と遠回しにきちんと説得しているがゆえに、滅多とこちら側に話しをもってくることはまずないであろう。
「いやいや。次代様、これ、お姉様だからだってば。普通はここまで文明科学も発達してないよ～」
もっとも、ディアがこの場にて創り上げたものを科学技術、というのかどうかは不明だが。
全て自然の力を利用しているに他ならない。
何しろこの世界に満ちている自然そのものは、ディアそのもの、といっても過言でない。
ゆえにそれらの力の一部をとある特定のモノに利用するなどディアにとってはたやすいこと。
もっとも、手っ取り早く、無制限ともいえる力を宿した特殊な【石】を創りだし、
形を模したそれぞれの道具にそれらを組み込んでいる。

ゆえに、ディアがこの場にて美希のためにと具現化された品々にはそれらの【石】が埋め込まれている。
当然、力の涸渇などあるはずもなく、いわばあるいみ安全極まりない動力源、といえるであろう。
思わずつぶやく美希に対し、横のほうですかさず突っ込みをいれているヴリトラ。
いまだに霊獣界のほうは落ち着いていないものの、そちらのほうは竜王シアンに任せていれば何とかなる。
そもそも、あまり神である自分がおいそれと出向いていれば、それこそ力の強さゆえに、
その【場の力】のバランスが崩れて特殊な歪みが発生しかねない。
伊達に、かつての生き物達の心を元にして創られている以上、
かつて発達していた文明などといった代物も、伝道師達からも聞かされているがゆえに、
一応、ヴリトラは理解はしている。
その気になれば自分自身を構成している様々な【念】に意思をむければ、
それぞれの個々の【念の記憶】すら垣間見ることが可能。
もっとも、面倒なのでそれはやったことはないにしろ。
何しろ神竜ヴリトラを形成している念の数は一つや二つ、ではない。
当時、生きていた全ての生命体における存在達の念。
それらの集合体、といっても過言ではない。
それは、人類だけではなく、自然界の全てにおける生き物において彼女の核となりえている。
それら全ての記憶を昇華吸収し、今のヴリトラ、という【個の意思】が出来上がっている。
「さて。と。とりあえず、美希様の今後、ですけど。
とりあえず、美希様も合意されたことですし、ギルド協会学校、通称学園に通うことになりますが。
この学園の定義をひとまず説明いたしますね。

まず、この世界において生きてゆくために、またいろいろ事業などを起こすにあたり、
資格、というものが必要不可欠、となります。
…このあたりは美希様がおられた世界でもあったのでは？」
実際、霊体専門とした特殊な仕事もありはした。
それらも資格が必要となり、様々な修業を成し終えた、そして能力に優れた存在達がそれに携わっていた。
各専門技術職においてもまた然り。
ゆえに、資格云々、というのは美希とて何となくわかる。
資格をもっていなければ、とある仕事にはつけない、というのはいわばもはや暗黙の了解ともなっていた。
もっとも、資格をもっていないものは、その職につきながら、その資格を所得するために、
こつこつと勉強、もしくは修業をこなしていくしかなかったのだが。
「そうですね。資格がなかったらたしかに、決まった職とかにつくことはできませんでしたね。
何しろ無知というものはものすごく危険、ですから」
きちんとした知識をもたないものがその職についた場合、とんでもない間違いを犯すこともありえる。
それゆえに、どうしても、資格、というものは必要最低限の条件、とされていた。
職につきながら修業を行う、という場合でも、
必ず教える立場の…いわゆる、師、と呼べるものがいてこそ成り立つ仕組み。
それはどの世界でもいえること。
無知とは究極の罪だといいきれる。
知識をきちんと知らないばかりに、何かを傷つけ、また何かを壊す。
そしてまた、無知であるからこそ、知能を得た存在達は、
自分達の力ならばそれらを管理できる、と思い込んで愚行に走る。
「そう。それで、この世界では、それらの資格を全て、ギルド協会

で取り仕切ってます。
　ギルド協会とは様々な生活に必要な技術や能力、それらを取り仕切る総合部署のようなもの。
　たとえば建設ギルドなどというのもあれば、商人ギルド、というものもありますし。
　職人ギルドや医学ギルド、総合医療ギルド、といった特殊なものもあります。
　冒険などに関してならば、探究ギルド、というものや、傭兵ギルド、文字通りそのまま、冒険ギルド。などですね」
そこまで説明し、相手が疑問をおもっていないのを確認し、
「建設や商人、というのは今さらおそらく美希様には説明する必要がないかとおもわれます。
　医学は文字通り、治療などに関する特殊科目を学ぶギルド、ですね。
　そして総合医療ギルドにはいるには、医学ギルドが発行する特殊な資格が必要となります。
　探求ギルド、とは様々なことを追求、研究する存在達の集いのようなものであり、
　冒険ギルドは、その言葉どおり、様々な場に自由に出入りし、また何かに縛られないギルドでもあります。
　もっとも、資格が必要ないのは、冒険ギルドと傭兵ギルド、ですね。
　この二つだけは、簡単にギルド所属が認められます。もっとも、それからの後は自己責任ですが」
淡々と説明されてゆくその内容は、大まか、美希がファンタジー小説や、
数多とあるゲームなどでよくつかわれていたものと大差ない。
さすがに母と娘二人きりで、さらには母が病弱で、常にアルバイトをしていた美希にとっては、
そういった類のゲームなどはあまりする機会はなかったが。

それでも、そんな頑張る二人にプレゼント、とばかりにそういった品を送ってくれる人々はいた。
当人達に断わりをいれて、家計の足しにしていたりしたのもまた事実、なのだが……
「で、それら全ては、協会、という一つの組織から成り立っていまして。それがギルド、ですね。
そして、それらの根柢ともいえる最低限の知識やそれ以上の知識。
もしくは資格を有するための知識と実力を学ぶ場。
それがギルド協会が設立しているギルド協会学校。通称、学園、となります」
長々と説明されて大体大まかなことろは納得する。
どうやら、全ての資格などは一つの組織がまとめて司っているらしい。
このあたりは、あるいみ評価できるといえば評価できる。
様々な機関が別々であれば、内容を引き継いだりするときに必ず申請漏れが起こってしまう。
実際、きちんと引き継ぎが行われずに幾多と問題になっていた世界であったからこそ美希はよくわかる。
そもそも、あの世界は様々な組織があったわりに、どうもそのあたりの情報収集力がかけていたともおもう。
その分、個人的にそういったかけた部分を埋めるための組織がまた立ちあがったりもしていたが。
「大体のところはわかりました」
「そうですか。さすがです。
それでは、今度は日本語とこちらで使われている地上語との変異性、ですね。
とりあえず、一覧にしてみましたので、これを参考にしてみてください」
いつのまに用意したのか、そこには分厚い一冊の本がディアの手に

握られている。
もういきなり物が突発的に具現化したりすることにはもう慣れた。
慣れた、とはいえ慣れとは恐ろしいわよね…そんなことをも思う美希だが。
美希とてその気になれば自力で何かを具現化どころか創造することすらできるのだが…
美希はそのことをまだ知らない。
気づいていない。
当人が理解し自覚するまで、ディアとて説明する気はない。
下手に説明し、自らの力の扱い方も理解できていないときに誰かにその力を利用されたりでもしたら、
それこそ世界に未来はない。
否、世界、というかこの超銀河全てにおいて未来はない、といえるであろう。
「ひとまず、日本語、というのもありますし。
五十音表にて文字の違いと読み方を示してあります。
あとこちらは美希様のおられた世界にあったかはわかりませんが、
日本における国語辞典版の相違版、です。こちらにも言語の違いなどを載せてあります。
ちなみに、イラスト付です」
こちらはこちらでさほど厚さがないようにも思えるようなきがするが、だが、しかし。
「…あ、あの？この表面の五十音の『あかさたな、はまやらわん』は一体……」
なぜか見開きのページにその文字が書かれており、その他のページはどうやっても開かない。
「ああ。まず始めにそちらの中から、知りたい行の文字を選んでなぞってください。
それによって、その行にかかわるイラストと文字と説明が出る

ようになっています」
「…あ～、電子辞書みたいなものですか……」
どうせならば、そのまま電子辞書のような形、つまり薄い板のような形にしてほしかった。
小さな板ならば持ち歩いてもかさばらないが、本だとそうはいかない。
「ちなみに、板のような形にできはしますけど。
この世界にはそのようなものは普及していませんからね。
天界や魔界などで使用しているのもほとんど水晶などを通じた【「Ｕｎｅ　ｖｉｓｉｏｎ幻影】。
それがまかり通っていますし。本の形状であれば不思議にはおもわれど、
違和感をもつものはまずいません」
もっとも、本そのものが貴重でもあるのだがそれはそれ。
普通の人が持てないほどの代物ではない。
「とりあえず、それで知りたいことを調べつつ、何かわからなかったらいろいろと聞いてください」
しばし、ディアによる、美希の為の勉強会もどきが繰り広げられてゆく……

「ず…ずるいっ！メフィストちゃんっ！」
「んっふっふっ。何とでもいって！これぞ悪魔の特権よっ！」
「…いや、それ特権、というか職権乱用？」
思わずそんな彼女達の台詞に突っ込みをいれてしまう。
いや、いれるしかない。
どうしてこうして、目の前にいるのはどうみても十代と少しという姿に変えたメフィストフェレス。
そしてまた、結局のところ、教師を事態して学生になる！

と駄々をこねまくったアテナをどうにか職務の途中で投げだすとは何ごとだ！
としばらくお説教をかねたお仕置きを施してどうにかあきらめさせたリュカ。
ちなみに、今のリュカの姿もまた、いつもの青年の姿ではなく、なぜか子供の姿に変化していたりする。
基本、彼の本来の姿は、人型のそれではない。
ゆえにその意思により自在にその姿を変化させることは可能。
「それより、リュカ殿。はやくいきましょ？」
「…いや、ユリアちゃん。何で君まで……」
脱力せざるを得ない、とはまさにこのこと。
なぜか、結局のところ、彼女まで学校に通うことにする！
といってきたのか、どこまでこの子達は僕の仕事を増やすつもり！？
そんなことを思いつつ、ぽそっとおもわず本音をつぶやく。
ちなみに、ユリア、と呼んだその少女は…どうみても、八歳かそこら。
ヴリトラの人間形態といい勝負というかおもいっきり同い年にしか垣間見えない。
本来持ちえていた七色の髪は今はおとなしめの、それでも薄い桃色を奏でており、
その瞳はどこまでも透き通るほどの青色を有している。
「あら？だってここに主様がおられる以上、当然、でしょう？
大丈夫ですっ！私が精霊神だなんて絶対だれもわかりませんから。
あの神竜ヴリトラ様だって気づかれていないんですもの」
「・・・・・・・・・・いや、そういう問題じゃないから……」
どちらにしても、【意思】の手を煩わせるわけにはいかないので実質的に自分が覚悟するしかない。
それはわかっている。
いるのだが…それでなくても、暴走しがちな、アテナとメフィスト。

その二人を止めるのにどうしようか、とおもっていたら、なぜか精霊神ユリアナまでこの地にやってきた。
いわく、【意思】様だけの手をわずらわすわけにはいかない、とか何とかという理由で。
しかし、リュカは知っている。
絶対に、興味本位、そしてまた好奇心から行動を起こしている、というその事実を。
そもそも、この地にそれでなくても、悪魔や女神、さらには神竜に精霊神。
あげくの果てには、惑星の意思たるディアに次代の器であるマァト。
…これだけとんでもない存在がそろっている、というのにも関わらず。
悩みの種を増やしてほしくない、というのがリュカの本音。
「文書は偽造…でなかった、きちんと用意してあります！
精霊界からの留学、という形をとっていますので大丈夫ですっ！」
しかも、肩書は派遣見習いのための留学。
派遣、とは様々な界より他の界に使者を使わした存在のことをまとめてそう称する。
使者、もしくは派遣員、として一般的に知られているそれらの存在達は、
様々な界のことをよりよく知るために、それぞれのギルド協会学校に所属することも多々とある。
その制度を利用してのもぐりこみ…というか留学生という立場をとって学校に侵入する気まんまんの精霊神。
ゆえにリュカとしては頭をかかえるより他はない。
「……ウィンの気の毒さがいまさらながらによくわかるよ……」
おそらく、彼女が突如として地上界に出向いてしまった今、
かの精霊界の秩序を問答無用でまかされることになっているであろう、水の精霊王に心底同情する。

「…くれぐれも、メフィストちゃんも、ユリアちゃんも下手な真似などをして正体がばれないようにね？
…いっとくけど、主様のお怒りに触れても僕は助けられないよ？」
それは事実。
ゆえにとりあえず入るのは構わない。
というか絶対に断ってもいろいろ手段をもちいて入り込むであろう。
ならばまだ目が届く範囲にいてくれたほうがはるかにまし。
しかし、先に牽制だけはしてこく必要性がある。
『うっ！！』
その言葉にその場にいる、リュカ以外の全員が思わず絶句しその場にて硬直する。
いくら何でもディア、となのっているかの御方の怒りに触れれば無事とは到底おもえない。
いつもはその柔らかな笑顔で誰しも抱擁するような優しい雰囲気をもっている彼女ではあるが、
しかし、ひとたび怒ればどうなるのか、それぞれかそれぞれに身をもって知っている。
「…ま、いいけどね。とりあえず、ならいこっか…は～…気が重い……」
どこをどう調整したのか、もしくはいじくったのか。
それは判らない。
もっとも、同じクラスにしなかったのは、おそらく【意思】の力が働いたのであろう。
そう確信をもっているリュカ。
おそらく、同じクラスになってしまえば、彼女達は絶対にボロをだす。
それだけは断言できる。
もっとも、学園に通うことになった以上、彼女のことを言えないようにおそらく制限はかけられるであろう。

当人達はそのことに気付いているのかいないのか。

しばしそんな会話をしつつも、リュカ、アテナ、メフィストフェレス、そしてユリアナ。

彼ら四人はそのまま、ギルド協会学校の理事長室へとむかってゆく……

ざわざわ。

先日の騒ぎは何だったのか。

ようやく、騒ぎの収束宣言はでたものの、しかしいまだに油断することなく、

警戒態勢の中であることは変わりがないらしい。

いまだにいきなり異形の存在、すなわちゾルディが発生した、という報告は絶えることがないが。

しかし、しかしである。

「…あれって、どうもそれぞれの個々の思いが強かったら発生するって説明したほうがいいのかな？」

伊達にアスタロトの授業を実戦的に受けていたわけではない。

自分の体から、異形のそれらが発生する様をまじまじと見せつけられていれば、

理解もする、というもの。

ゆえに、様々な村や町などでそれらが発生した、

という話しをきいたほとんどの生徒達の心情は穏やかではない。

しかし、その事実はおそらく経験してみなければわからないこと。

そしてまた…人、とは異形のソレを生み出した人物すらも堕ち者と判断し駆除してしまう。

一般の人にとっての堕ち者という存在は、絶対に救えないもの。

一度、堕ちたものは二度と元の姿には戻ることはできない。

そうなぜか信じられていたりする。
実際は元の姿にもどることもできるし、
ただゾルディなどといった心の悲鳴が強くなりえて生みだされる元となった核となる存在。
その核たる存在は別に堕ちているわけでも何でもない。
いわばあるいみ無知と勘違いにより無実のものを排除しているに過ぎない。
実際、それを知るまで、生徒達も育った町や村でそれが正しいこと、と教わって育っているゆえに、その心は穏やかではない。
そのときに、教師アシュタロスより言われた言葉がつきささる。
『知は知らねば無知。無知は時として罪を生み出します。しかし罪は罪。
　知らなかったから罪にはならない、ということはありません。きちんとした裁きはうけるでしょう』
実際問題として、今までにも罪なき存在を殺した存在達は、きちんとした審問によりそれぞれのふさわしき【地獄】にと落とされている。
それぞれの罪をきちんと自覚し、また同じ痛みを知りえる場へと死してなお苦しむこととなる。
「はい。みなさん。席についてください。今日はみなさんに新しい仲間を紹介いたします。
　とりあえず、まだこちらに不慣れのようですからみなさん、いろいろと協力してあげてくださいね」
一応、美希の正体は、ヘスティアは知らされている。
といっても、異世界よりの訪問者、という立場の事実のみ、ではあるが。
しかしそれを他のものにいうわけにはいかず、その事実は一部の上層部の存在、
もしくは関係者のみが把握している今の現状。
ヘスティアは美希が保護されたすぐ後に彼女にあっているのである

程度の事情は聞かされている。
伊達に総合科の教師をしているわけではない。
彼女とて天界共通語は一応マスターしている。
ゆえに、美希が英語を話しても、ヘスティアと会話は通じる。
…もっとも、さすがに日本語まではヘスティアとてマスターしておらず、
その存在そのものも把握していなかったりするのだが。
「彼女はちょっとした特殊な事情でこちらで通用している言語はいまだに勉強途中です。
　離れ小島に住んでいたらしく、そこでは天界共通語が主流だったらしいですので。
　とりあえず、みなさんもこれまで天界共通語は学んでいますよね？
　いい機会です。彼女との交流でみなさんもきちんと天界共通語を学んでください」
美希の設定は、離れ小島で住んでいた小さな集落よりの転校生。
その設定でゆくこととなっている。
この世界、大きな大陸のみが表だって授業などでも説明されているが、
小さな島々も幾多か存在する。
それらの島々では独自の文明などをもち、自給自足という生活を送っている民も少なくない。
ざわっ。
天界共通語。
その言葉にクラスにいた生徒達がおもわずざわめく。
「詳しくはディアさんに聞いてくださいね。ディアさんの親類らしいですので。
　それでは、美希さん。入ってきてください。『Ｍｉｋｉ，ｐｌｅａｓｅ　ｅｎｔｅｒ』」
生徒達にむけ、そしてまた扉の向こうにいる美希にむかい語りかけ

るヘスティア。
総合科Ｃ組Ａ。
いきなり知らない人々の中に放り込むわけにはいかない、というので、
ディアと同じクラスに在籍させよう、という話しにまとまった。
ゆえに、今から美希が通うのは、ディアと同じ総合科であり、同じクラス。
Ｃ組Ａの担任であるヘスティア＝アルクメーネの言葉に従い、
ゆっくりと扉をあけて教室の中にとはいってゆく美希。
長いその黒髪はミツアミにしてその後ろで一つに束ねられている。
ちなみに左右にも編みこみのミツアミがほどこされており、
きちっとまとまった頭は美希の容姿をよりよく引き立てている。
漆黒の瞳はどこまでも澄み切っており、みるもの全てを一瞬魅了させるのではないか。
という雰囲気すらもっている。
特質的なのは、この教室ではあまり着られていない、ギルド協会が奨励している制服をきていること。
「「わっ！美人っ！！」」
誰からともなくそんな声が発せられ、
しばし、教室の中が一気に騒がしくなる。
「はいはい。とりあえず美希さんの席は、ディアさんの横ですね。
　ヴーリさんはとりあえずディアさんの後ろに移動してくださいね。
　とりあえず、美希さん、みなさんに自己紹介のほどをおねがいしますね。
　えっと……。Ｉｔ　ａｓｋｓ　Ｍｉｋｉ　ａｎｄ　ｅｖｅｒｙｂｏｄｙ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｓｅｌｆ　ｉｎｔｒｏｄｕｃｔｉｏｎ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｔｉｍｅ　ｂｅｉｎｇ」
こちらの言葉はまだよくというか理解していないらしく首をかしげる美希に対し、

とりあえず天界共通語で言い直すヘスティア。
ヘスティアが紡ぎ出した英語の言葉をうけ、ようやく何をいっていたのか理解し、
「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ。Ｉｔ　ｉｓ　ｓａｉｄ　Ｍｉｋｉ　Ｓａｔｏ．。Ｉｔ　ｗｉｌｌ　ａｓｋ　ｓｕｉｔａｂｌｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｆｕｔｕｒｅ。
　Ｉｔ　ｗｏｕｌｄ　ｂｅ　ｇｒｅａｔｌｙ　ａｐｐｒｅｃｉａｔｅｄ　ｉｆ　ｉｔ　ｃｏｕｌｄ　ｔｅａｃｈ　ｖａｒｉｏｕｓｌｙ　ｗｈｉｌｅ　ｓｔｉｌｌ　ｓｔｕｄｙｉｎｇ　ａ　ｗｏｒｄ　ｈｅｒｅ」
【はじめまして。佐藤美希といいます。これからよろしくおねがいします。
　こちらの言葉はまだ勉強途中ですのでいろいろと教えていただけたら幸いです。】
英語で自己紹介することは多々とあった。
ゆえにこういった自己紹介は一応慣れている。
ゆえに生徒達にむかい流暢な英語で語りかけ、ぺこり、と頭をさげる美希。
あまりにも流暢すぎるその天界共通語の使用に対し、
その場にいる生徒達のざわめきがさらに大きくなってゆく。
パンパン。
そんな生徒達に対し、
「はいはい！騒がない、騒がない！彼女の住んでいたところはこれが通常だったんです。
　とりあえず。席はディアさんの横にお願いしますね」
すでに話しあいにおいてディアの横の席に座ることは決定していた。
ゆえに何をいっているのかわはらかないが、視線で席を促したことをうけ、
そのまま、もう一度クラス全体をみわたし頭を下げたのち、
美希は見知ったディアの横の空いている席のほうへとむかってゆく。

これは始まり。
美希にとって、そしてこの第三惑星とこの太陽系においての新たな始まり――

光と闇の楔　～転校生と留学生～（後書き）

ちなみに、ＷＧさんはまだ１１Ｋの打ち込み途中なのでしばらくまってください・・・

ようやく学園中心とした騒乱のとっかかりまでこれました・・・

７０まではいかない予定（打ち込みしてみないと何ともいえませんがあまりもう長くはありません）

光と闇の楔　～意思と次代と親衛隊～（前書き）

とりあえず、前回もさらっとだした親衛隊結成？もどきの閑話みたいなものをば。
んでラストにようやく最終決戦？ともいえる複線をば・・・
※しばらく更新時間が０時すぎ、でしたがおそらく毎日更新するばあい、
しばらくの間１時前後になるとおもわれます…ご了解ください・・・
また、眠気にまけた場合、更新は翌日にまわります（汗

光と闇の楔　～意思と次代と親衛隊～

ギルド協会学校。
通称、学園。
こちらでの言語は今まで習っていた様々な言葉より、
どちらかといえば、文字の感覚もどちらかといえばルーン文字っぽい。
まあ、基本の五十音の呼び方を把握すれば、どうにか拙いながらも会話は可能にはなるが。
それでも、やはり日常的に使用していた日本語と、そして英語のほうが話しやすいのは仕方がない。
ちなみに、なぜか専門分野においては、なぜか英語が優先され、
専門技術職などにおいては日本語が今まで住んでいた場においては優先されていた。
何でも日本語は、同じ言葉でも様ザまな使用方法があるので
特殊技術などに使用するのに便利だとか何とかという理由で。
まあ、確かに。
はし。
という文字に関しても、川にかかる橋に、部屋の端っこに、さらには食事用の箸。
この三点がひとつの言語だけで示される。
言葉のアクセント具合によってはいろいろと意思の疎通が間違ったりもしたりしたが、
それでも、基本的に細かな作業が得意でもあったらしい…おそらく、島国根性、とでもいうのであろうか。
とにかく、ひたすらに細かな作業が特異であったあの国は
特殊技術部門において世界の中でトップを誇っていた。
魔科学に関しての研究もかなり進んでおり、かつて資源不測などに陥っていたかの地を救ったのも、

またその魔科学の技術発達によるものだったらしい、とそう習っている。
この世界においては、始めから精霊の力を借りた術があり、契約の元、それらを使用することが可能、らしい。
まあ、たしかに、ほいほいと誰もが力をつかってたら自然界の力のバランスが壊れるわよね。
そんなことをふと思う。
「もっとも、原理としては、美希様達の世界でも一般的だった科学記号。
　それらに基づいていますけどね。原子などの呼び方が変化している、というだけですし」
さすがに、元素記号を用いて説明されればある程度の納得がいった。
卵だの何だのといわれてもまったくもって意味不明ではあったが。
話しを聞く限り、この世界の文明もかつて同じように進化していっていた、ということもわかった。
もっとも、この世界には魔科学、というものは発展せずに、そのまま文明の身勝手ゆえに、
滅びの道を歩むことになってしまったらしいが。
この惑星の意思が具現化している、というディアに基礎となるべきことを教わっている美希。
知識はあったにこしたことはない。
元の世界に戻れなかった場合、この世界でいきてゆくしかない、のだから――

「…は～……」

いく度目のため息であろうか。
思わずため息がでてしまうのは仕方がない。
絶対に。
「…ディアさん、大丈夫ですか？」
傍から見ていても、彼女がなぜため息をついているのかわかりやすすぎるがゆえに、
思わず戸惑いつつも心配して声をかける。
「すいません。美希様にまで心配をかけてしまって…まったく、あの子達ときたら…
　…いちど、その根性を初期化…もとい叩き直さないとだめなのかしら……」
何やらさらっと何かとてつもないことをいっているような気もしなくもないが。
当人達が聞けばその場にて震えあがり、その場で土下座をしていたであろう。
…もっとも、土下座をしただけで今行っている計画を中止する、とは思えないが。
「…何かいま、とてつもない不穏な言葉が聴こえたような気がしましたけど……
　ですけど、あの方たちも悪気があってやっている、とはおもえないのですけど……
　…多少行き過ぎのところはある、とは私も思いますが……」
「に～」
結局、部屋に子猫を一人きりにさせるわけにもいかない、というので、
学校にも常に子猫、みゅ～をつれてきている美希。
もっとも、種族によっては常に【相棒】を持つ種族もいるので問題視はされていない。
「そうそう。全ては次代様とお姉様のためでもあるんだよ～！」
そんな二人の横に空気をまったくよんでいない、といえばいいので

あろう。
のんびりとそんなことをいいつつも近づいてくる少女が一人。
「ヴ・リ・ちゃん？そもそも、発案者はだれ、なのかしらねぇ～？」
「い、いたい、いたい！お姉様、いたいっ！！」
ぐりぐりとそんな近づいてきた少女の頭をがっしりつかみ、
ぐりぐりと左右からその両手を握りこぶしにて、ちょっとしたげんこつをくらわしているディア。
傍から見ればかなりあるいみほほえましいといえばほほえましい光景であるが、
その拳に込められている力は並大抵ものではない。
むしろ、ヴリトラであるがこそ無事であるだけで、普通の存在がそれをうければ、
まちがいなく頭ははじけ飛んでしまうであろう。
「…そもそも、何であのようなものをつくろう、という話しになったんですか？」
美希とて当事者。
ゆえに戸惑わずにはいられない。
というか、何で自分まで巻き込まれなければならないのか、それがかなり不思議ではある。
「ううっ。お姉様、いたいよ～。えっとね。次代様。
それはね。お姉様が先日の大会の戦闘部門で優勝したこともあり、
この学校の中でもお姉様の人気はこっそりと上昇中であったの。
そこに、一応人間とおもわれる次代様が、
神聖、ともいわれている天界共通語を流暢に話されてるでしょう？
しかも、お姉様と並んでいれば、これぞもう絵にかいたような光景！
というわけで、ならばこれを利用してお姉様達の親衛隊組織をつくろうとっ！」

「だから！どうしてそこで親衛隊なんて言葉がでるわけ！？
　そもそも、ヘラにあの組織を作ろうともちかけたのもたしかヴリちゃんだったわよね？」
そういうディアの目は笑っていない。
むしろ完全に据わっている。
「ファンクラブっていう名前じゃ、なんか軽い感じがしたし？」
「したし、じゃないのっ！…まったく……どこをどう育て間違えたのかしら？」
思わずぽそっというディアの心はまさしく本音。
たしかに、あのときに生きていた全ての子供たちの結晶ともいえる【ヴリトラ】を慈しんでいたのは事実。
しかし、しかしである。
このような性格に育つなどとは、【意思】とて予測していなかった。
もっとも、他の意思いわく、
『それは仕方がない』となぜか異口同音で同じ返答が戻ってきたりしたのだが。
ディア自身はそう甘くしていたつもりはないが傍から見ればかなり甘やかしていたのは事実。
そもそも、自らの子供たちである生命体達に好き勝手させていたことからも、
彼女は甘い、と他の惑星に認識されていた。
多少のお灸をすえるために自然を狂わせ自然現象、という形で試練をあたえたりはしていたが、
それでも、全体からみれば壊滅的、という手段はあまりとらなかったディア。
当時生きていた全ての【魂】を保護したことからも、甘い、といわれているゆえん。
そもそも、それまで生きていた幾多の【魂】の記憶をもディアはきちんと保管していた。
魂が浄化し新たな輪廻に回れるように手ほどきをもしていた。

子供たちの願いがなるべくかなうように、心残りがないように。
始めて誕生した自らの子供がかわいかったのは事実。
その成長を見守ることがとても嬉しかった。
ゆえにかなり甘やかし、ともいえる状態になっていたのだが…他者から指摘されても、
ディアからしてみればかなり厳しくしていたつもりなのでまったくもってその自覚は皆無。
あるいみ、親が親ならば子も子、といえるであろう。
「……えっと。ディアさん？そんなことといっても平気なの？」
いくら日本語で会話している、とはいえどこで聞かれているかわからない。
ディアがこの惑星の意思が具現化している存在であり、
またヴリトラ達といった全ての生命体にとっての【母】である、というのは
普通の存在には知られていない事実らしい。
ゆえに心配しつつもつぶやく美希。
「もし聞かれてたらそのあたりの記憶は改竄するから平気ですよ。
　これ以上暴走させないように、リュカを幹事に回したほうがいいかしら……」
ヴリトラが提案した、【ディアと美希を崇める親衛隊】なる組織は、日を追うごとにいつのまにかその会員数を増やしていったりする。
こっそりと町の住人もその会に参加していたり、
あげくはなぜか協会関係者すらも会員になりたい、といってきている、とのこと。
そういった敬意があり、ディアはひたすらに愚痴をこぼしているのだが。
ちなみに、裏の名称はそのようなあからさまな名前ではあるが、
通常の組織の名称はといえば、【崇高なる理想組織】…何ともよくわからない名の付け方、ではある。

いうまでもなく、崇高なる存在、とはディアと美希のことであり、
暗に【第三の意思】と【次代の器】を崇めている内容となっている。
理想、とはそれらの存在そのものが生きとしいけるものの究極の理想であることから、
そのような名がつけられているらしい。
しかし、しかしである。
当事者にとってはハタ迷惑なこととこの上ない。
それでなくても、ディアとすれば、天界より発生してしまった【補佐官親衛隊】なる組織が、
今や全ての界においてほとんどの主要な役職についている存在達が隠れ隊員になっている、
という全てをなかったことにしたくなるような現状になっているのを知っているだけに、
これ以上厄介事を増やしてほしくない、というのが本音。
こっそりと補佐官の姿を模した様々な品々などが作成されていたりするのだが、
さすがにそれらは【意思】の仮初めの姿を模したもの。
ゆえに代用品とはいえすぐさま【意思】にと伝わり、
もののみごとに形ものこらずに塵と化すように設定してある。
そのせいか、なぜか他の品を用いて比喩するようになっていたりするようなのだが…
そもそも、補佐官、という立場もあまり知られれば面白くないのも事実。
ふとしたはずみで王と補佐官が同一、とばれないとも限らない。
もっともそのときには全ての記憶を消してしまえばいいだけなのではあるが。
かつてのように自分が直接にかかわらず、見守るだけの存在でありつづける。
というのは今の現状においては好ましくない。
とりあえず、各界の代表者がしっかりとしてくれない以上、今の仕

組みを変えるつもりはない。
しかし、【人】としての模倣品にそれを施せば、
普通の存在ではない、とあからさまにいっているようなもの。
ゆえにそれらの品を止める手段はなきに等しい。
「というか、普通に英語を話しているだけで、何で神聖視されるんでしょうか……」
そのあたりの常識の違いもいまだに慣れない。
なぜか伝道師サクラもまたどういった手段を用いたのか、
この学校の保険医に入り込んでいたりする。
ちなみに、もともといた保険医はといえば、各村や町などで多発しているけが人達。
それらの人々の往診と治療をするために、ギルド協会側からの依頼で様々な場所へと出むいていっている。
そんな状況であったがゆえに、治療を行えるというサクラの存在は、協会側からしてみればまさに願ったり、かなったりの申し出であった、といえる。
「まあ、英語を天界共通語に設定した、というか、
　ゼウス達があの言語をきにいっちゃったからねぇ～……」
彼らを生み出した当時、伝道師達は様々な言語で会話をしていた。
意思はといえば、その心を通じて念波で彼らにその心を伝えていた。
精霊言語の元となっているフランス語。
フランス語を【戒めの旋律】にする、ということはすでに決定していた。
しみじみと日本語…
傍から見れば、意味不明な言語で会話をしているディア達を不思議そうにみているクラスメート達。
と。
「ディアさん！次の新しい隊員用の会報誌にぜひともディアさんの日常をとりあつかわせてくださいっ！」
ばたん！

いつのまにやら、学校の内部において、親衛隊広報係、というものまで出来てしまい、
日々、いつのまにか記者係りでもある生徒に追いかけ回されている日々。
もっとも、ディアからしてみればかれらをまくことはいともたやすいこと。
記者達はどうやって追跡をまかれたのかすらわからないまま、毎度途方にくれている。
しかし、しかしである。
ヴリトラがなぜか提案し、そして始めはただの同好会のような扱いであったそれは、
今や大半の生徒や教師が面白がって、ということもあり参加している組織になりあがっていたりする。
その間、わずかほんのひと月もたっていない。
何しろ理解不能ともいえる、現象が多々とおこっていたそんな中。
あるいみ娯楽ともいえるようなものがとびこんでくれば、人はまず好奇心や少しばかりの平穏をもとめ、
すぐさまそれらに飛びつく傾向をもっている。
王都の中においては、突如としてゾルディなどが発生する、という現象はいまだに起こっていないものの、
王都の外においてはそのような現象はいまだに多々とおこっている。
王都の中でそれらの現象が起こらない理由は至って単純。
王都に仮初めとはいえ滞在しているヴリトラがつまみぐい、とばかりに
それらの強くなりはじめている念を喰らっているからに過ぎない。
美希がこの学校に通い始めてはやひと月。
それなりにクラスメート達ともなじみはじめ、カタコトながらもこちらの世界の言葉を話せ始めている。
まあ、美希が住んでいた場所のことを聞かれても、正確に答えられるはずもなく。

そもそも、異世界、すなわち他の惑星、さらにいえば他の異なる銀河よりやってきた。
と説明してもおそらく絶対に理解不能、であろう。
ここに住まう存在達はそういった概念をもっていない。
むしろ、どちらかといえば夜空に輝く星々は意思をもっており、生きている、という概念をもっている。
ある意味、正しい、といえば正しいのではあるが……
まさか人がその技術のみでその【星】にたどり着けることができる、など誰も夢にもおもわない。
そういったことができるのは、選ばれた力ある存在達のみ、そう思っていたりする。
完全に智能る存在達が傲慢な考えなどを抱かないようになったときこそ、
その方法もありえるのだ、とその考え自体にかけている枷を取り除くつもりではある。
彼らは自分達の思考に枷がかかっている、とはゆめにもおもっていない。
しかし、その枷は必要不可欠なるもの。
未熟な知識と技術で事を行えば必ずその先には失敗がまっている。
それも惑星規模で。
惑星規模の範囲に入らないものならばその枷は稼働しないように設定されている。
それらは魂にかけられている、いわば楔。
いつの日かその楔が取り除かれたとき、この恒星群に住まう存在達は、
あらたな恒星群へと進出してゆくことも可能。
今はまだ、それぞれの場所より使者として使いもののもがきているだけに過ぎないこの地。
このまま発展してゆくか、それともそのまま発展せずに平凡極まりなくすすんでゆくか。

それはこの【太陽系】に生きている存在達へのあるいみ試練。
「は～…また、その話し？
　じゃあ、このたびはとりあえず、魔界における存在達の説明で我慢しておいて。
　前回はたしか霊獣界の特性と主たる生体を話したわよね？」
ちょうどいい機会、ということもあり、きちんとした知識をこの機会に訂正しておこう。
という意味合いをこめて、なぜか世界の様々な【理と仕組み】についてこれまで説明しているディア。
その内容があまりに濃い内容であるがゆえ、また隊員でなければ会報を手にすることはできないゆえに、
逆に隊員を増やしていっているハメになっている、とはゆめにもおもっていない。
「とりあえず、このたびはじゃあ、魔界における主たる悪魔達の話しでもしましょうか。
　あと地獄界における定義と理と……」
普通は知りえるはずのない知識。
しかしその知識全てをなぜかこのディアという学生は知っている。
それだけでもかなり興味をひかれてやまないというのに、当人はそのことにさっぱりもって気づいていない。
ディアからしてみれば、それら知識は当然であり、
そもそもそれらを創ったのは他ならないディアでもある。
ゆえに、知らないほうがどうかしている、といっても過言ではない。
とりあえず誰から聞いたか、ということに関しては、アスタロトやアテナから聞いている。
ととりあえず無難なところを説明していたりする。
もっとも、彼らからきいた、というのではなく、
『アテナ達に……』
といって言葉を濁しているがゆえに、それを聞いた相手側が都合よく解釈しているに過ぎないのだが。

しばし魔界についての説明を記者達に話しているディアから少しはなれ、
「…なんか大騒動になってるのってこういう説明も原因じゃないのかなぁ？
　って私はおもうんだけど、気のせいとおもいます？ヴリトラさん？」
「ううん。おもわない。お姉様ってそういうところかどこか抜けてるんですよ」
ぽそっとそんな会話をしている美希とヴリトラ。
おそらく、ディアが普通は知りえるはずのない情報をこれぞ好機、とばかりに、
これまでも幾度通達してもまた伝承しても正確に伝わらなかった世界における真実の理。
いくら何でも記録として残る代物に書かれた以上、その知識が湾曲してつたわることはまずありえない。
それをみこしてのディアの行動。
しかし、その行動は逆にディアに対する興味を協会側からにしろ、国側からにしろもたれている結果になっているなど…ディアはまったくもって気づいていない……
そんなディアをみていると、ふと亡き義母を思い出す美希。
その天然さというかどこか抜けている様は、何となく義母をおもわせる。
そう、あの出会いのときを――

ここ、どこ？
ふときづけば見知らぬ場所。
それどころか、自分がどうしてここにいるのかもわからない。
見渡せばあるのは壊れた瓦礫の山と迫ってくる炎と煙。
どこからともなく絶えず聞こえてきている嗚咽と叫び声。

何をいっているかも理解ができない。
『…おじょうちゃん、ひとりなの？』
ふと自分にむけて声をかけられた。
気がつけば、自分の目線に腰をおとした目を少しばかり腫らしている女性。
それにより、自分の背がかなり小さいことを自覚する。
自分がかなり小さいのだ、とそのときに初めて理解した。
普通に考えればどうしてそんな常識的なことすらもわからないのか、とおもえるであろう。
しかし、本当に何もかも、自分の名前も自分がどのような姿形をしているのか、すら。
本当に何も覚えていなかった。
そんな自分に手を差し伸べてくれたその瞳に涙を少しばかりうかべている一人の女性。
後に知ったことではあるが、そのとき自分がいた場所は大地震により壊滅した町であり、
地盤も鎮火しさらには火山も噴火して生存者は望めないであろう。
そう呼ばれていた場所であった、ということ。
場所、というのは違和感があるかもしれないが、その異変は惑星規模でおこっていたらしく、
ゆえに、その小さな島国においてもその異変は躊躇なく襲いかかった。
そんな状況の中、娘の生存を信じ、探し続けいてた一人の女性。
頭ではわかってはいた。
助けられなかった愛する娘。
仕事先から娘を迎えにったその先で、目の前で娘が預けられている園が突如として消失した。
…正確にいうならば、地下より噴き出たマグマにと一瞬のうちにと飲み込まれ、
地面ははぜわれ、痕跡すらものこらなかった。

直後に割れた大地は元にもどったものの、しんじたくなかった。
否、信じられなかった。
どこかに避難していてほしい、その願いをかけてずっと娘を探し続けていた。
そして見つけた一人の少女。
彼女の娘とほぼ同一といっていいほどのその容姿。
心のどこかで違う、とはわかっていた。
だけども心のよりどころがほしかった。
だから…彼女を自分の娘、として育てることにした、美希の養母。
美希もその話しをきき、彼女が保護してくれなかったら自分は今生きてはいない、と自覚している。
養母はいつもどこかが抜けていた。
しっかりしているようで、重要なことがすっぽりと抜けていた。
その都度、その穴埋めをほとんど美希がしていたようなものなのではあるが。

その養母の行動と、今のディアの行動は規模が違えどよく似ている。
だからこそ、なのだろう。
どこか傍にいたら安心できるのは。
自分に対し、包み隠さず真実を話してくれた、という感謝の気持ちも心のどこかにあるにはある。
しかし、美希もまた自分の気持ちの全てが理解できるわけではない。
その気持ちが一体何を示しているのか…

全てを理解したそのとき、美希は美希ではなく、【器】として完全に覚醒することとなる――

『…ちっ！ここも違ったか……』

波動は確かに感じたというのに。
しかし、どうやらここも外れ、だったらしい。
『仕方ないだろう。何しろ波動はどこにでも満ち溢れている』
思わず愚痴をこぼす仲間に対し、冷静に突っ込みをいれる。
ふわふわといくつも浮かぶ光の球体。
様々な色彩のそれらは、それぞれがそれぞれに意思があり、そして
また一つの生命体を成している。
『通常時間でいったいどれだけかかれば見つかる、というのだ？』
『そういうな。まだ銀河は一週もしていないぞ？』
そう、いまだにまだこの銀河の回転速度は一週もまわっていない。
もっとも、中にいるちょっとした銀河系などにおいてはようやく二、
三度ほどの周期を終えたころであろう。
『しかし、はやくしなければ、器が継承の儀を終えればどうにもな
らないぞ？』
もしくは覚醒してしまえば彼らとて手だし不可能になってしまう。
それでは意味がない。
『全てを深遠なる空間にゆだねること。それらが我らの主の願いで
もあるからな』
そもそも、器となるべき場所があるから様々な思いも産まれ、新た
な命もうまれゆく。
しかし、始めから何もなければそのような思いをすることもない。
彼らの主いわく、そうなれば彼らは苦しみも悲しみも何も感じるこ
となく、
常に平穏に在ることができるらしい。
ゆえに、彼らの主につき従うものは少なくない。
『とりあえず、偵察隊をも使ってはいる。新たな情報がはいってい
る。
　偵察隊を撃退した区域の銀河群が千、銀河団がひとまず百、と
いうことだ』
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・』

確かに偵察隊そのものにはさほど力はない、といってもいい。

しかし、多少の力をもっている偵察隊を駆逐できる銀河ともなればそれなりに強い意思達が守っていることとなる。

『ヴォイド様はそれらをどうとらえているのだろう?』

『ヴォイド様はそれらを全て把握されている。何しろヴォイド様、だからな』

そう。

彼らが主、としてつかえしものは、彼らにとっても崇高なるもの。

そしてまた、どこにでも存在しえる存在。

この銀河を構成している命を管理するものが【マァト】であるならば、

何もない無の空間を管理しているのが【ヴォイド】といって過言でない。

かつてどこかの世界の研究者と科学者たちがいっていた。

銀河系等の集合した超銀河団は、何も存在しない空間……

すなわち、超空洞を取り巻くように膜状に連なって形作られている。

ちょうど石鹸を泡立てた時のように幾重にも泡が積み重なって、宇宙の大規模構造を構成している、と。

銀河団の分布はいわば石鹸水を泡立てたときの泡の分布に近い、と発表したとある文明の科学者。

あるいみマトをえているといえば得ているその発表。

さらに詳しくいうなれば、それら全てを一つの集団としてまとめている意思が【マァト】であり、

そして泡の中の空洞、それこそが【ヴォイド】といって過言でない。

その科学者はそれら全てに【意思】が宿っている、とはゆめにも思ってはいなかったらしいが……

そう。

だからこそ彼らは【主】につき従う。
どちらにしても、いずれは、全ての膜は内部の空洞に取り込まれ…
やがて消えてゆく。
それが定め。
そこに何らかの力が加われば、新たな命の灯ともなる。
安らかなる何ものにも邪魔されない理想郷。
そのためにも次代の器であるまだ覚醒していない、
その【意思の力】を扱えないうちに、【ヴォイド】のうちにと取り込み消滅させる必要がある。
そうでなければ、覚醒後では、各膜の力が強さをまし、しばらくまた手だしができなくなるであろう。
これまでは、ちまちまと小さな銀河団の中に存在している銀河を消滅させることを主としていた。
しかし、今回だけは勝手が違う。
うまくすれば一つの意思を葬ることにより、長年にわたる祈願が達せられる。
だからこそ、全ての銀河に偵察隊を放ち器の誕生の波動を感じたあのときより監視を続けている。

それでもいまだに器が見つかった、という報告はいまだない……

光と闇の楔　～意思と次代と親衛隊～（後書き）

あれ？ヴォイド？
何それ？
とおもった人はＷｉｋｉ参照。
宇宙の大規模構造におけるとある超空洞、のことです。
ラスボスでてくるまでここまでかかるって・・・
ま、ラストのラストにでてくるお話ではありましたけど
脳内完結まであとすこし！
・・・気が向きましたら最後までお付き合いのほどをよろしくおねがいいたしますｖ

光と闇の楔　～強い心と強き意思～（前書き）

副題と内容があまり再びあってない件・・・
今回は、前回も閑話みたいなものでしたが、
事件?のきっかけにいくまえのとある会話をば。
・・・いあ、会話と、いままでのおさらい的なものをいれてたら、
容量的に２０Ｋいったもので…
なので次回からようやくラストエピソードへのとっかかりです

光と闇の楔　～強い心と強き意思～

いつのころだったであろう。
ふと何と表現したらいいのかわからない感覚が到来したのは。
自ら以外には何もない。
そう、何も。
ただ、灰色に近い空間にただただたゆたっていた。
ふと、何のきなしに何かよくわからないが、とにかく何か自ら以外の何かを。
そう思うと、突如として周囲の景色がかわった。
自らの意思により、変化してゆく。
それに気づいて、いろいろと繰り返した。
しかしそれでも、自分に気づいてくれるものは誰もおらず…
小さな物質、と名付けたそれらからならばあらたに別のものをうみだせば。
本格的な意思をもたせた器を思い描き…そして、それらは誕生した。
それは今は昔。
しかし、多々と意思ある存在が生まれてゆく過程でわかったこと。
自分はただ…
子供ともいえるそれらは自分を敬ってくれている。
違う、違うのだ。
そうじゃない。
ただ……ただ、我は自らと対等なものがほしかっただけ……

生きとしいけるものは、あるいみ強い。
様々な困難や混乱の中においても、きっちりと恒例通りに事を成し遂げようとする。
日常が人々の心の安定になりえる、ということもあり、
どのような混乱時に関しても今まで普及している仕組みをどうやら変える予定はないらしい。
混乱の中で執り行われた第六月・ウルルの資格試験。
このたびは受験者達の受験理由はかなり切羽詰まっている。
とはいえ町や村を一歩でれば野生のゾルディや魔獣に襲われる可能性があるここ最近の現状。
ゆえに、あらかじめ試験をうけたい受験生は別の場所においてわざわざ受験会場にまでいかずとも、
試験をうけられるようにこのたびは配慮された。
もっとも、それらが可能になったのも、
他の界よりの使者がそれらに協力してくれたからに他ならないのだが。
もっとも、平常心が保てない中での試験、というのにも意味はある。
世の中、突如として何がおこるかわからない。
特に人の命などに関わる資格や、人の生死にかかわる資格などをも取り扱っているこの試験。
逆境の中でもどれだけきちんと冷静さを保てるか、というのもあるいみ一つの試験、といえるであろう。
第二月・アイヤル以後、なぜか落ち着いた情勢ではないのは誰しもおもっていること。
全てはあの大会の後から世の中が少しずつ狂い始めた、とだれもが認識している。

おそらく、あの大会は一つのきっかけにすぎなかったのであろう。
何しろかの大会の会場にすら異形の存在が出現した。
あの空間は害意あるものが入れないはず、というのにもかかわらず、である。
あのときは、神の奇跡、としかいいようのない力が加わり、ことなきをえたが。
奇跡、というものは幾度も発生するものではない。
幾度も奇跡があれば人だけでなく、生きとしいける存在はいずれその奇跡にたよりきってしまう。
それは、彼らが物心ついたころから言い聞かせられている事柄。
確かに困難な状況下ではあるものの、試験は年に二度と決められている。
伸ばすにしても、この情勢ではいつ落ち着くかわからない。
ゆえに試験は強硬することにしたギルド協会。
それでも、それぞれ危機意識が高まっていたのか、
いつもより何の混乱もなく滑らかに試験進行は行われた。

そして……

「は～。月日のたつのは早いわね～」
おもわずしんみりとそんなことをつぶやいてしまうのは仕方がない。
ここ最近はいろいろあった。
人によれば人生の大半の神経をつかった、というものもいるであろう。
毎日が急がしく感じればそれなりに日々も早く過ぎ去るような錯覚に陥ってしまう。
「なんか最近、いろいろとあってあっというま…という感じ、よね」
つくづく思う。
というかもう非日常的な光景も慣れた自分がかなり怖い。
そんなことを思いつつも、学校の中に備え付けられている学食にお

いてそんなことをいっているケレス。
「だいぶ、美希様も慣れてきたっぽいですしね」
横にすわっている美希にとにこやかにそんなケレスの台詞をさらっと流し語りかけているディア。
「慣れる、というか、ここの暦ってなんでバビロニア歴なんですか？毎回おもうんですけど……」
まだマヤ履歴でないだけましとおもうべきか、はたまはたエジプト暦でないだけましとおもうべきなのか。
バビロニア歴を使用している、というのがわかったときには、なんでそんなマイナーな代物を、
と一瞬おもってしまったのもまた事実。
「その、バビロニア歴って何？」
よく耳にする言葉であるが、ケレスはまったくもって理解不能。
もっとも、ここ数カ月においてこの世界の言語について、
とりあえず日常会話的には話せるようになった美希はさすがとしかいいようがない。
「この世界でいうところの、大異変より前。
古代文明滅亡時期に栄えていたとある文明で使われていた暦のことよ。
もっとも、今この世界でそれらを理解しているのは伝道師達くらいでしょうけどね」
首をかしげ頭にハテナマークをとばしているケレスに代わって説明しているディア。
「そうなんだ。というか美希さんっていろいろと物知りよね。
そのわりに当たり前のことをしらなかったりしてるし」
とりあえずあまりにしつこいこともあり、ケレスには美希が別の場所よりやってきたことは伝えてある。
もっとも、それが外の世界、とはケレスとて夢にもおもっていないのだが。
まあ、かろうじて今だに交流がない小さな島の出身者であろう、と

いう認識程度。
幾度か異世界人、というのを聞いたことがあるのだが、そんなことがありえるはずがない。
という規定概念も手伝ってか、聞かなかった、もしくはさらっと聞き流している今の現状。
そもそも、ニホン、と呼ばれている島、という認識で捕えていることもあり、
また、実際に美希が住んでいのもあるいみ島国。
ゆえにその勘違いも仕方がない、といえば仕方がない…のではあるが……
しかし、もう少し歴史をきちんと勉強していれば、おそらく少しは疑問におもったであろう。
「というか。ディア。あなた、二回目の薬学免許試験においてさくっとA級を所得するってどうよ？」
そう。
ディアが学校に通い始めていまだにまだ一年もたっていない。
にもかかわらず、
二度目の試験でさくっとかなりの難問、ともいえるA級資格を所得してしまったディアは、
あるいみさすがといえばさすがであろう。
何しろA級は他の級と異なり、その問題がきっちり百点となるように問題が掲載されている。
そして、合格するためには全ての科目において完全満点を取らなければはならない。
そもそも、A級資格は一つの科目が百点以上求められる。
つまり、一つの科目が全て百点に作られている試験問題において一つも間違いは許されない。
だからこそそんなディアにたいし呆れた言葉をかけざるをえないケレス。
ディアのあるいみ規格外、といってもいいようなその力は近くから

みているがゆえに理解している。
しかし理解しているつもりでも、やはり現実としてあっさりと、難問、といわれている試験をあっさりとクリアされてはあるいみ悔しい。
永年にわたりその資格に挑戦し諦めているものも多々といる中、あっさりと資格を保有してしまったディア。
まあ、当然、といえば当然なのだが。
もっとも、世情が混乱していたがために、その異常さに触れるものはまずおらず、
ゆえにそのことで今のところ騒がれてはいない。
もっとも、とある組織はかなり盛り上がっているようではあるが。
そちらのほうはもはやディアからすればある意味諦めモードと化している。
いわく、言っても無駄。
あまりに行き過ぎるようならばそのときに多少何かしらの制裁というかお仕置きを加えてはいる。
「たしか、あの試験って年に二回、執り行われるんでしたよね？」
ふと確認するようにケレスの言葉に割って入る美希。
「ええ。第一月のニサン。第6月のウルル。
基本この月に年二回のみの試験は執り行われることになってます。
この学校の卒業資格がそれぞれの分野において最低でもC級所得をすること。ですし」
そんな美希に丁寧に説明しているディア。
免許の等級は当然のことながら、一番下位であるG級から、最上級であるS級まで存在している。
最高級ともいえるS級にもランクがあり一番最高峰はS級十位、と呼ばれている。
この資格所得者は各国々にも数名しかいまだに存在しておらず人々の憧れの的となっている。

いわばこの世界におけるあるいみ常識中の常識。
そんな二人をちらり、とみつつ、手元にあるコップを口にとはこびつつ、
「アルナとフラウは実家のある町に一時里帰りしてる状態だけど。
　この学校もだいぶ人がもどってきているのか、少なくなっているのかよくわからない状態よね」
とりあえず、美希に対する常識の定義云々はさらっと流し、
この場にいる生徒達をぐるっとみわたし思わずつぶやくケレス。
今から半年以上前ならばこの学食は座る場所がないほどに込み合っていた。
第８月・アラフシャムヌ。
かつての美希の住んでいた場所の暦でいうならば、今の暦は十月にはいったばかり。
ディアがこの学園に通い始めたのが、第十二月・アダル。
周囲からしてみればもっと長く在籍していたようにも感じられるのだが、
実質的にはいまだに八カ月にはいったばかり。
もっとも、ディアが入学してからこのかた、様々なことが立て続けにおこったことにより、
そういった概念が人々の脳裏から失念しているのもまた事実、なのだが。
大会より後、各町や村などで突如として魔獣やゾルディなどが発生する事件が多発している。
ゆえに、冒険ギルド所属の冒険者や、傭兵ギルドなどに所属している腕に覚えのあるものたち。
彼らはそれぞれ、主要ともいえる村や町に滞在しその場の攻防をまかされている。
すでにいくつかの小さな村などは壊滅的な被害をうけた、という報告もあがってきている。
これはこのテミス王国だけにとどまらず、他の国においても同じよ

うなことが起こっているらしい。
「そういえば、ウルド王国、国王がいきなり病死したって発表があったけど……」
この世界にはいくつかの国があり、その中でもその国はあるいみ独裁主義。
自分達が信仰している神以外は神ではなく、全て格下であり、
全ては自分達に従って当然、という思考の持ち主。
国民もまたそんな国の気質を引き継いでいるのか、それらが当然、
とばかりに捕えており、
戦争、といえば普通は生死を伴う非情なる行いだというのに、彼らにとってはそうではない。
彼らいわく、それは聖戦、であり、神に認められた自分達が起こす戦いは全てにおいて正義、
というとてつもない困った認識をもっている。
ふと噂話しでそういったことを小耳にはさみ、不安そうにつぶやく美希。
魔獣やゾルディなどといった異形なる存在。
それだけでもこの世界は平和でないような気がひしひしとするのに、
そこにさらに戦争のきっかけにもなりかねない不穏な国。
実際問題としてこのたびの混乱に紛れ、いくつかの国などにかの国は侵攻をしかけていたらしい。
魔獣などによる襲撃のあと、かの国の兵士がおしよせ、
なすすべもなく支配された、という話しも多々とある。
生き残った人々いわく、魔獣達の群れは何かに操られているかのごとくに統制がとれており、
ヴルド王国の兵士にはまったくもって傷一つつけることがなかった、という。
通常な現状ならば、かの国が何らかの力を得た、もしくは魔獣を操る術をみにつけたか。
その可能性に気付いたのであろうが、そのとき、各国は自国におけ

る被害の対応に追われていた。
ゆえにそこまで気がまわらなかったのも事実。
もっとも、ある時期を境に、魔獣達は突如として誰かれ構わず攻撃を仕掛けはじめ、
魔獣等における被害が壊滅的に増えていった。
一時、ゾルディが減ったようにもおもえたが、すぐさまそれらは勘違いなのか逆に数は増えていった。
人々が不安を抱くかぎり、ゾルディなどといった念の集合体ともいえる生物は発生してしまう。
しかし、人は自分の恐怖からそれらが発生した、とは信じたくはない。
恐怖等といった感情を生み出した当人がそれらを全て受け入れる心の強ささえあれば、
それらは別の形をとることなく、それぞれの心の中においてのりこえられていたことであろう。
「ああ、あそこは。病死、というか。さくっと国王がすり替わってたからねぇ。
　正確にいうならば、欠片を埋め込まれた国王がそのまま傀儡と化していたわけだし。
　ロキが欠片全てを回収したのち、魂すら呑みこまれていたただの抜け殻となった国王をみて、
　さすがに突然死した、としかみえなかったんだとおもいますよ？」
しかもかの地はかなりの重鎮達が同じように欠片を埋め込まれ、組織の傀儡と化していた。
それら全てが突如として第三者の目からみれば突然死したのうに垣間見え、
さらに抜け殻となった器はそれらを目撃した人々の恐怖の念の器となり、堕落者と成り果てた。
その結果、それらが城の中より騒ぎ始め、被害が内部より広がって

いった。
そもそも、守護精霊であるルゥトの忠告を無視し、自分達は選ばれた民なのだから平気だ、
といってそれらにむかっていき余計に被害がおおきくなった、という現実がある。
さすがにそこまでいくと、いくら何でもルゥトとてさすがにあきれ、
自分達がイタイメをみなければおそらく自覚しないだろう、というのでそれらに関してはほうっておいた。
ルゥトが設置した安全な避難所以外においては何ともいいようのない光景が広がりをみせていった。
もっとも、その被害が国外にまで広がらないようにルゥトにより結界が施され、
それらの被害はウルド王国内のみにとどまってはいるのだが。
数か月経過しその被害もようやく沈静化をみせはじめている。
さすがに、目の前でいくども堕落者やゾルディが多々と発生してゆく様をみれば、
ルゥトが説明した、強い思いが形となってそれらが発生する、という現実。
それらをうけいれざるをえなかった、というべきか。
もっとも、それらを完全に信じるにいたるまで、体の内部からゾルディを生みだしたように見えた輩は、
堕落者、と判断され問答無用で周囲の人々より捕えられ、その命を落としていった。
そこまで詳しく説明する必要性もないがゆえに、
さらっと主たることだけ何でもないようにいっているディア。
「どこからそんな情報を…って、ああ。精霊族だっていうユリアちゃんから？」
ユリアナは、ユリア、という名を名乗り、ヴリトラと同じようにこの学園に通い始めている。
一応、精霊族の一員であることは学校側にもつたえてありはするが、

よもや精霊神だということまでは知られていない。
もっとも、知られればかなり大事になるのは間違いないであろう。
精霊族といってもその種族には様々な形がある。
姿がみえない形をしているものから、固定の姿をもっているもの、
とそれぞれ。
もっとも、人型を成せる者はそれなりの実力があるもの、として知
られてはいる。
例をあげるならば、年月を経過し周囲の霊気などを取り込んだ無機
物生命体が、
その身にとりこんだ力のみで自ら実体化するように。
真珠の精や木の精、など種族は様々。
空気中に漂っている存在だけが精霊、ではない。
精霊は自然界のどのような存在にも宿っている。
さらっと重要すぎるあるいみ国家機密ではないのか？
ともいえる事柄をいっているディアの言葉に驚きつつも、
ふとおもいあたり、ゆえに自己完結して納得しているケレスの姿。
今、この場にて食事を共にとっているのは、ディア、ケレス、そし
て美希。
その横にはヴリトラとユリアナ、そしてなぜかメフィストフェレス
まで同席していたりする。
とてつもない会話をしている、というのにも関わらず、この場にい
る他の生徒達は、
それぞれ自分達の現状などにおいて話しをしているがために、
ディア達の会話の内容にはまったくもって気づいてはいない。
もっとも、ディア達のすぐ近くには、親衛隊の広報部の記者が常に
張りついている現状であるがゆえ、
そんな彼女達の会話に聞き耳をたててはいるが。
その内容をきき、逆に記者である生徒達が背筋に冷や汗を流しつつ
固まっていたりする。
もっとも別に聞かれても問題ないどころか逆に今の状況を伝えるの

に便利、
ということもあり、こんな場所でさらっと説明しているディア。
何しろ今現在、ほとんどの国などにおいて情報隠ぺいなどが行われている。
それは人々を余計に混乱させないため、ではあるが。
何がおこっているのか実際に知らないと逆に不安になることもある。
事実を知ることでより正しき行動を行う結果ともなりえる。
どうも国の上層部におけるものたちはそのことにすらきづいていない。
しかし、情報の大切さ、というものの重要性はギルド協会側はより理解している。
協会側にとって情報は何よりも命ともいえるもの。
ゆえにこそ、
「そういえば、今度はどこに派遣なんだっけ？お姉様？」
ある程度の正確な知識を持ちえるギルド協会員に関しては、
ギルド協会側より今現在、様々な場所に派遣されていたりする。
ディアに関しては、実力もさることながら、知識もしっかりしており、
ギルド協会側からしてみれば、なぜかディアに任せれば、
そこにすまうものたちが、より【ゾルディ発生の真実】にゆきつく、
ということもあり、
数多とそれらが発生している地域への出張依頼がここ数カ月の間に繰り返されている。
もっとも、出張、といってもディアは一瞬でその場に移動することができるがゆえに、
普通の協会員達がかなりの日数をかけるところをほんの数刻もかからない。
「今度はロキア大陸、ね。それはそうと、ヴリちゃんのほうは落ち着いたみたいね」
ロキア大陸。

テミス王国がある大陸とは正反対の位置にあり、そしてまた、斜め側に位置している大陸。
文字通り、海を挟んだ反対側の大陸であり、普通ならば空路にしろ海路にしろかるく数カ月は必要。
「…なら私はいかないほうがいいか……」
あの大陸の民の竜族に対する信仰心は半端ない。
下手についていって方ぐるしいまでの歓迎をされてはたまったものではない。
彼らは竜族特有がもちえる【気】の色を区別することができ、ゆえにどんなに気配を隠していても、普通の一般的な竜族などはさすがに気の色まで変化することは不可能。
何よりもヴリトラがかの地にいきたくない理由はそれ以外の理由があるのだが……
「？めずらしいですね。ヴーリさんがディアさんについていかない、なんて」
常にいつもディアについて行きたがっている彼女の台詞とはおもえない。
ゆえに首をかしげてといかける美希。
そんな美希に対し、
「それはですね。あの地は昔……」
「あああ！メフィスト！それはいわなくていいのっ！と、とにかく。なら私はそうだなぁ。ウルド王国のほうの現状を確認にでもいくかな？」
ほどよい念があの地には満ちている。
すこしばかりつまみ食いするにはもってこいの場ではあるであろう。
そんなことをおもいつつもそんなことをつぶやくヴリトラに対し、
「そういえば。かの地は昔、面倒だから、というのが本来の理理由だったとおもいますが。
偶然にも助ける結果となってしまった地でしたわね」

ふと一万年前のことを思い出し、しみじみと当時のことを思い出していっているユリアナ。
今から一年前の出来事。
一万年、という年月を得て、どうやらかの地ではその伝説はさらに脚色が入り、
ヴリトラからしてみれば、あるいみ鳥肌者ともいえる伝説へと変化していっていたりする。
「たださ～。つまみ喰いしただけで、
　何であんな伝説にかわってなきゃいけないのか、と私としてはおもうのよね～」

かの地に伝わる伝説。
大地に異形のものがはびこり、いきとしいける者たちすべてが絶望にかられたとき、
天より飛来した聖なる神が地上にいきるものたちを憐れんで異形のものたちを消滅させ。
かの神はその地にすまうものたちに強き力をさずけ、そのまま天へともどっていった。
かの神の神々しい姿をわすれることなかれ。
かの神の慈愛の心を忘れることなかれ。
かの神は竜の姿をして我らをすくいたもわん。
竜はかの神がつかわせし、我らへたいする使途である。
ゆえに竜族がいるかぎり、
我らの繁栄は何ものにも邪魔されることなく未来永劫つづいてゆくであろう。

簡単にまとめればそのような伝説がかの地にはのこっており、
ゆえに可の地にすまうものたちは、竜族全体を神の使い、としてあがめたてまつっている。
ちなみに、事実はまったく異なる。

あまりにたまりまくる執務内容が退屈であったヴリトラが気分転換をかねて、
ちょうど全ての界の中において【ほどよい念】がたまっている地に降り立ったに他ならない。
いわば疲れたときに甘いものが食べたくなる人の真理と同じようなもの。
一万年前の人々は今のようにさほど文明の発展は遂げてはおらず、ほぼ全てものが自給自足をしていた、という次代。
その当時、人々はまだ自然の声をきける力はもっていた。
人の姿を模して降りても逆に人々から不思議がられるのはわかりきっており、
それより、様々な種族のものと仲良くしていた当時の情勢から、ちょっとした小さな竜の姿にかえてヴリトラにとっての間食…
……すなわち、その場に満ちる念を喰らった。
その行為をみていた人々がなぜか都合のようように解釈し、そして今にいたっている。
その間食のせいで大地の半分が海に沈んだなどといった事実は奇麗さっぱり削除されていたりする。
普通に喰らうのは面白くない、というので相手…すなわち、当時産まれていたゾルディ達を相手どり、
いわゆる【鬼ごっこ】もどきをしながら楽しんでいたヴリトラ。
その行為の結果…大陸の大半ともいえる大部分が海に同化してしまったのだが……
当然、その後、きっちりと【意思】によりお仕置きをうけ、
しばしのあいだ、その地において力全てを封じられ復興携わるようにさせられたりもした。
それも今や昔。
今ではその地にいいように解釈された竜に対する伝承と神話がのこっているのみ。
何しろかの地にすまうものたちは、竜族がいうことならば盲信的に

つきしたがう。
たとえば冗談をいったりすればそれをすぐさま本気にしたりする、という厄介極まりなかったりする。
…結果、あまりに面倒なので竜族は可の地にはあまり近づかないようにしていたりするのだが。
「私はアテナちゃんのお手伝いに出向く予定になっていますけど。
　そういえば、ケレスさんは確か、お母様より実家の呼び出しかかっていましたっけ？」
「うっ。メフィストちゃん。それはいわないで……
　お母様が、実家で管理している地に発生しているゾルディ
　全てを駆逐しろっていう手紙をよこしてきたのよ……」
管理している地、全てなど、絶対無理にきまっているが、しかしあの母のこと。
できない、といえばお仕置きがまっており、逆に時間がかかれば時間がかかりすぎ。
といってさらなるお仕置きがまっており、聞かなかったことにする…となれば、
死を覚悟するほどのお仕置きがまっている。
…どれをとっても必ずしもお仕置きは免れない。
たまたまかの地に用事があるというラケシス教師とともに出かけることとなっているケレス。
その間、ラケシスより効率のよい方法を一応習う予定ではある。
「秋の大型連休…か～」
この時期、学校は十日間の休みを擁している。
その理由は、この時期、各種の事業などにおいていろいろと業務が重なる。
それゆえの配慮。
ゆえに休暇を有効利用してギルドからの依頼をこなしたり、もしくは実家にもどったりなどもしている。
今、この学食に生徒が少ない、という理由の一つにそういったこと

もある。
学校の全面休校は明日より。
ゆえにすでに学校を出ている生徒もすくなくない。
そんな彼らの会話をききつつも、ずずっと手にしているお茶をのみつつしみじみとつぶやく美希。
日本茶がおちつく、という話しをきき、ディアが美希のためだけに用意している品。
ゆえに常にいつも美希の鞄の中には日本茶のティーパックが常に常備されている。

いつもの光景、といえばいつもの日常。
しばしたわいのない会話が、
ここギルド協会学校の学食の一角において見受けられてゆくのであった……

光と闇の楔　～強い心と強き意思～（後書き）

しかし、脳内完結の中でもあるいみ短い部類（三十分程度）のお話しが、
ここまで続く…となると、今別にメモに打ち込みしてる話しはどうなる?とかなりの不安が…
いや、数部にわかれてて、一部が一時間くらい回想かかるんですが（汗
まあ、あちらはのんびりまったりと打ち込みするとして。
…いい加減にWGだけでも打ち込み完了しないとなぁ…

※当日の更新遅れてもうしわけありませんでした
さて・・今から次の話の打ち込み開始予定です…
眠気にまけなければ、ど・・どうにか・・・

光と闇の楔　～しのびよる『超空洞（ヴォイド）』～（前書き）

なんか、今回もまた、ヴォイドのたくらみ？をいれるにあたり、ほとんど現代宇宙論の論説みたいになってしまった罠…（汗

光と闇の楔　～しのびよる『超空洞（ヴォイド）』～

『……ふぅ』

「…いかがなさいました？」

おもわずもれでたその思考がどうやら完全に【声】にでていたらしい。

『何でもないわ。それより、【後継者】はまだみつからないの？』

そろそろ周期が一周する。

誕生すると同時に発生した歪み、ともいえる空洞。

その中に吸い込まれていった、次代の魂。

「はい。手をつくしてはいますが…おそらくは、引き継ぎも何もないままに、

　その存在意義の定義にのっとり、内部を視察しているかとおもわれます」

この【地】における、【意思】の定義。

それは、次なる【営み】を紡ぐべきかどうか、

それぞれの【意思】が判断するためにと誕生当初に決められた【理】。

この誕生当初に決められた【理】は絶対的なものであり、【母】に誓いを立てることと等しい。

『最近、どうもヴォイドのほうも行動が活発化しているみたいだからね。…はやくしないと……』

何もしらない状態で彼らに捕えられ、そして間違った道を選んでしまえばこの場の未来はない。

おそらく、永久にこの【身】を深遠なる母の内部で眠りにつかせることになるであろう。

まだ反発する力が少しでも意思として残っていれば、
それは新たな命の卵の誕生へのきっかけにもなりはするが。
『闇は光に、光は闇に…そして、有と無は表裏一体……
だけども、有は有であり、無は無であるがゆえに有にはなりえず、
また有も有であるがゆえに無はなりえない……』
同じようでいて根本的に異なる。
しかし、互いが互いにその心を理解しているのもまた事実。
「わかっております。
おそらくこの地のヴォイドも自らの半身の欠片の波動を探していることでしょう。
半身の元である貴方様が先にかの姫君をみつけなければ、
おそらくこの地の全ては虚無、と化すことも」
そもそも【ヴォイド】…とは、全ての意思に共通している、意思の心のうちにある相対する心の結晶。
なにごとも、異なる方面から感じる心をもってこと、正しき道を進むことができる。
これは、この世界…母なる胎内においての絶対的な【理】――
数多な光が渦巻くとある空間。
摩訶不思議としかいいようのない空間内部にて、
【姿のみえない】とある存在同士の会話が繰り広げられてゆく――

光と闇の楔　～しのびよる『超空洞（ヴォイド）』～

くっ…！
いきなり、いきなりだった。
それこそ唐突。
まさに、その言葉がふさわしい、といえるであろう。
『……ダメです。主が取り込まれました……』
がくっ。
その報告に意思が砕けそうになる。
そもそも、自分達は、主がいなければいずれは死滅してゆくしかないであろう。
自分達には自ら光を発し燃ゆる力はない。
内部のいまだに冷めやまないたぎる力を利用したとしても、主の力には到底及ばない。
さらにいえば、主の意思を取り込んだそれは無意味に膨張を繰り返し、
それらは主の引力内にいた全ての【意思】に影響を及ぼす。
そして全てを取り込んだ後、一気に全てを飲み込むかのごとくに収縮しやがて重力崩壊を引き起こす。

本来、主軸となる主系列星となる恒星が誕生する際、
様々な事情によってその場に核となる【意思】がまず誕生する。
やがてその意思の周囲には圧縮された密度の高い空間が出来上がり、
それらによって意思の重力が強くなり、周囲に満ちている様々な物質を引き寄せるようになる。
それらを繰り返し、重力を意思の力にて操りながら、加速的に密度を高く形成してゆく。
重力によって発せられているエネルギーが熱にと返還され、それにより温度が上昇し、
熱放射が始まり、そこにおいてようやく【器】となるべく原始たる主系列星が誕生する。
そしてそれは徐々にではあるが意思の判断によって収縮しつつ、

重力によって発生している力を熱に変えて中心の温度を上昇させてゆく。
やがて中心の温度がある一定の温度を超えると、
水素がヘリウムへと換される核融合反応が起こり始め、それによって発生する大きな力により、
器の収縮は押しとどめられ、ここにおいてようやく主系列星としての器を形成することとなる。
主系列星とは、その重力により様々な意思をもつ惑星を従えている【星】のことを指し示す。
彼らは基本的に、その場において【主】などと呼ばれており、
核融合反応が激しくなると膨張して温度を下げて反応を弱め、
逆に反応が弱くなると全体を収縮させて反応をつよめてゆく。
それらの判断はすべて、【主系列星】ともいえる【恒星】たるものの【意思】の判断によるもの。
しかし、【意思】にも限界がある。
自身を保つべく物質が涸渇したとき。
そのときこそ終焉のとき。
やがて物質が涸渇し、重力が崩壊し、［
膨大な量の力が解放されると同時に恒星全体が吹き飛ぶこととなり、
それらの現象のことをある存在達は【超新星爆発】とも呼んでいた。
【恒星の意思】は一生のうち約９０％の時間を【主系列星】として過ごし、
ゆえにその間、自らの重力圏内にいる【意思】達を束ねる役目をも兼任している。
しかし全ては【意思】により管理されている仕組み。
その意思の衰退。
すなわち、管理するものがいなくなった後の【恒星】においては衰退の一途をたどるより他にない。
質量が大きい恒星では密度が比較的小さいために

中心核が縮退することなく核融合反応が進んで次々と重い元素が作られ、
最終的に鉄が生成されたところで核融合反応はぴたり、と停止する。
何よりも鉄原子は安定している原子であるためにそれ以降は核融合反応が進まない。
それゆえに重力収縮しながら温度が上がっていく。
さらにその中心温度が約１００億度に達すると鉄の光分解という吸熱反応が起き、
中心核の圧力が急激に下がって重力崩壊を起こす。
重力の崩壊。
すなわちそれは完全なる【恒星の意思の死】を意味している。
その死を新たな命に繋げてゆくか、どうするかは、意思が死する前に決定する事柄。
しかし、何事にも例外、というものは存在する。
そう、【意思】達の内部に位置している空洞ともいえる特殊な空間。
器たる惑星はそれらの空洞をあるいみ取り囲むようにして存在しているに過ぎない。
だからこそ、内部からの干渉を強くうけてしまう。
それでも、【意思力】がつよければそれらの干渉もはねのけられはするのだが……

『・・・・・・・・・・・・・・・せめて、他の場所にこのことを・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・ですね。我々はどうしますか？』

【ヴォイド】そのものが直接活動を開始しはじめた。
それはあるいみ脅威、といえば脅威。
しかし、裏をかえせば、今の【マァト】の意思の寿命が残りわずか、ということに他ならない。

『私たちの子供たちまで巻き込むわけにはいきません。
私たちは私たし達の手で自らの後始末をつけましょう』

彼らにこのまま取り込まれてしまえば、
自分達の内部に芽生えた生きとしいける存在たちの未来はない。
何しろかの存在に取り込まれたものは魂すらそのまま虚無、すなわち無にと転換されてしまう。
…それだけは、何としても避けなければならない。
そう、何としても。
…たとえ、まだ普通に何もしらずに平和にいきている子供たちを自らが行動を起こすことにより、
全てを死滅させる結果となろうとも、…魂が消滅するよりははるかにまし。

…この日、ひとつの恒星群こと、一つの小さな太陽系がしずかにその痕跡を消してゆく…
それもそれぞれの惑星における内部の熱の暴走、という形で、全ての惑星が自ら自爆した。
最後の【惑星の意思】達の力において、自らのうちにそれぞれ誕生していた魂のそれらを、
別の場所、すなわち別の空間たる恒星群に未来を託し飛ばしたのは…
死を選んだかれらのみ知る事実……

「ふわぁぁ～～～……」
思わず大きな声がもれだしてしまう。
「そういえば。ふとおもったんですけど。やっぱり惑星も夢とかみるんですか？」
目の前の少女の実体が実はこの惑星の意思である、ということからもといかける。
そもそも、始めは半信半疑ではあったが、さすがに星の記憶をみせられて、
さらには同時にいくつも仮初めの器の具現化を発生させたのを目の

当たりにすれば信じざるを得ない。
この地に迷い込んできた当時はなかなか信じられなかったが今では恐ろしいとはおもうものの、
人は慣れる生物なのだ、とあるいみ納得してしまっている美希。
事実、ほんの数カ月の間に美希はこの地にかなりなじんでおり、
この惑星上の仕組みといわず太陽系の仕組みも一応把握した。
「みますよ?古代文明を栄えさせたとある種族は、
　私が思いだす過去の出来事を、【星の揺りかご】と言い表していたようですけどね」
別名、星の瞬き。
物事は一瞬であり、振り返ることのできない貴重な時。
過去をやり直すにはそれなりの代価を必要とする。
最近、なぜか時折、覚えのない目がさめたらさみしくなるような夢を垣間見る。
そんなことがあるはずがない、というのに。
自らの意思がこの場に産まれたときに、すでに主系列星である恒星は形をすでに形成していた。
自分達はいわば、主系列星の子供たちのようなもの。
かの惑星が誕生したことにより、ひきよせられた物質の集合体。
おそらく、その夢の記憶は今の姿になる以前のもの、なのであろう。
普通、自分達のような【意思】は以前のことを魂そのものには記憶するものの、
それらが表の記憶、としてでてくることは絶対にない。
それはこの【空間】における暗黙の了解。
「揺りかご…ですか?」
「ええ。ある意味そのとおりではありますけどね。
　そもそも、星そのものが命の揺りかご、ですし」
惑星に誕生する生命体にとって、星は命の揺りかごといっても過言でない。
もっとも、その基本的なことすら忘れてしまい暴走してしまった種

族もかつては多々といた。
惑星云々、という定義はともかくとして、
今のこの惑星上においては各界そのものが【命の揺りかご】、という認識をもたせている。
下手にこの大地が一つの惑星…すなわち、球体のようなものであることをしれば、
いまだにまだ未完成な技術や能力、知能などを持ちえない生命体は、まちがいなく再び過ちを犯す。
それゆえの措置。
「たしかに。そうですね。まあ依存しない生命体も多々といるのも事実ですけど。
　そういえば、ここにはそういった生命は存在していないんですか？」
宇宙空間にのみ生息している生命体も多々といるのは美希の知識としては常識中の常識。
「ここはまだそこまでの生命が発達するほどの力を持っていませんからね」
そういった生命体はある程度、その星系に力が満ち溢れたときに誕生する。
もしくは、主系列星にかなり余力がある場合に誕生するか、そのどちらか。
「ここはまだそういった類のものはいませんね。
　そもそも、私たちのような惑星、そして小惑星を維持するのが精いっぱいのようですし。
　初期のころには数多に他にも惑星は存在していたんですけどね。
　しかし、【力】と【安定】が定まらずにいくつもそのまま惑星になりきらずに、
　もしくは、そのまま成長しきらずに意思をもたない塊、になったものも多々といますし。
　まあ、一番の原因はかつてこの地を襲った大量の流星群、です

けどね。
　それによって数多の星が消滅したり、
　もしくは起動がずれてそのまま保護下でなくなり死をむかえたり。
　この地も例外ではなく、それでもまだここはましではあったとおもうしかないんですけど。
　当時、私たちの力もある理由で意思力が低下していまして、
　それらを食い止める力が涸渇していましたからね。
　その結果、この大地に二度にわたり隕石を迎え入れる結果になってしまいまして……」
自分達の感覚からしてみれば、たかが数十万年、という年月は一瞬ともいえるもの。
今こうしていることもまた、永い生の中における一瞬の夢。
力が及ばなかった、としかいいようがない。
それでも、一度目のときにはどうにか他の降り注ぐ隕石はふせぎきった。
とはいえ、一つは力およばずにそのまま地表に落下してしまったが。
一度目に大地に降り注いだは、直径十キロほどの隕石。
今はなき大陸、メキシコのユカタン半島と呼ばれていた沿岸付近にその痕跡を残していたそれは、
かつて文明を栄えさせていた人類いわく、【チクシュルーブ・クレーター】と呼んでいた。
そのさらに約三十万年後、今度は直径約四十キロに及ぶ隕石が再び落下してきた。
それらの痕跡はかつて海底に直径五百Kほどのくぼみを作り出していたものの、
一度表面全てを海にと還し、
再び大陸を生み出した今の世界にその痕跡はまったくもって残っていない。
強いていうならば、その【シバ・クレーター】があった位置に、【

聖地】ができている。
聖地の広さもまたそのクレーターとほぼ同じ形式をとっている。
それはかつて自らが抑えきれなかった外からの被害を、
自分自身に戒めるためにその地に【意思】が設けたにすぎない。
「恐竜滅亡、ですか。そのあたりの歴史もどうやら同じようなんですね。
どこから私のすんでいた地球とここは歴史というか歩みがかわったんでしょうか？
太陽系の構成具合もほぼ同じ、歴史もほぼ同じ。にもかかわらず。
この地は私のすんでいた地球と異なり、
物語やヴァーチャルの世界等でしかみることのなかった、
様々な神話級の生命があふれていますし」
どちらかといえば、あまりに直視するのもはばかれるような存在よりも、
そういったまだどこか救いがあるような類の部類が視えていたほうがまだよかったかもしれない。
しかし、どの世界においてもよい部分と悪い部分は存在する。
文明が発達するのがはたしてよいことなのか、悪いことなのか。
実際問題として美希の住んでいた世界とて全てがよかったわけではない。
移住した先で先住民とトラブルになり、侵略者のような行動をとった開拓星時代。
最近でこそきかれなくなってはいたが、根本的にそういった類の問題点は解決していない、
とそう習ってはいた。
「…さて、と。とりあえず、つきましたけど。寒くないですか？」
「それは平気です」
今、二人がきているのは、南極、とよばれし南に位置する氷の大地。
この地はどの大陸にも属しておらず、基本的に滅多と他種族のもの

は立ち入らない。
この地にいきるは、大自然とともにいきる種族のものか、もしくは動物たちのみ。
本来ならば北の地でもよかったのだが、
たまたまこの近くに用事があったからこちらにしたにすぎない。
それでも、その地をみてみたい、という美希の要望もあり、この地にともにやってきたディア。
「でも、何があるんですか？」
いきなり、すこし気になることができたので、美希に先にもどってほしい。
そういわれたのはつい先刻のこと。
そういわれても、なぜか美希もいかなければならないような気がし、こうしてともにやってきた。
「それが、わからないんです。大姉様達も異変を感じ取ってはいるようなんですけど……」
【外】…すなわち、自分達が存在しうる宇宙空間。
その空間が最近震えているとの報告。
本来、宇宙空間の物質安定値は、
暗黒物質ともよばれるダークマターを含めた物質が約三十パーセント。
そして暗黒エネルギーが約七十パーセントの割合となっている。
それはどの宇宙空間…すなわち、真空空間内部においてもいえること。
その安定値が狂えば、文字通り【宇宙空間】そのものが狂う。
下手をすれば、物質が物質として存在できなくなってしまう。
【宇宙】の形は、物質と反物質とにより構成されている、といっても過言でない。
本来ならば圧倒的大部分において物質がまさるのだが、
どうも最近その法則に変化の兆しがみえるらしい。
最近、反物質の影響力が日増しにたかまってきている、との報告を

もうけている。
さらには、とある主系列星を含む銀河系においては、反物質が突如として膨れ上がり、
またたくまに銀河そのものを消滅してしまった、という報告もはいってきた。
どうやら本格的に、【超空洞ヴォイド】が活動を活発化してきているらしい。
そしてその波動はどうやらこの地にまで及び始めている、とのこと。
表からだけの結界では裏からの干渉にどうにもならない。
いくら表面部分を強化しても、その膜ともいえる空洞との境界線。
その【境界線】を強化しなければまちがいなく根柢から仕組みそのものが崩されてしまう。
境界線の膜を作り出しているもの、それはそれぞれの惑星に存在している自転軸の存在。
自転することにより、自らの表面に強力な特定の磁場をつくりだし、
特定の膜を表面上につくりだし、また逆に宇宙空間からにおける干渉を防ぐための膜をも作り出す。
この自転軸による磁場形勢がなくなってしまえば、おのずからそれぞれの惑星は【宇宙】に漂う、
もしくは降り注ぐ数多な物質の影響を直接うけ、まちがいなく進化することなく死滅してしまう。
いいつつも、自らの心臓、ともいえる自転軸となっている点にとたち、
外と内部の安定性を調べ始めるディア。
こういった些細な違いは直接触れてみなければわからないことが多々とある。
しかし、ディアにとって些細なことでも、
惑星上にいきる生命体にとっては重大な問題になりかねない。
「…これは…やはり、内からかなり干渉をうけている結果…
…外、からの偵察が無理、と判断してこんどは内より偵察を仕

掛けてきたみたいですね……」
どうやら、内部より子どはこちらに仕掛けてくるつもりらしい。
たしかに、外からの襲撃というか偵察隊は全て撃退したが、
よもや内部より仕掛けてくる、とはおもわなかった。
基本的に、自分達といった存在は真空の深淵なる空間に物質と反物質の安定性をもってして、
存在しているに他ならない。
それらの安定が崩れれば、いかに太陽の重力圏にいたとしても、
すぐさま安定を崩し惑星の存在自体も危ぶまれてしまう。
そもそも、太陽そのものが同じ場所に存在することすらできない現象もおこりえる。
ヴォイド、と呼ばれし存在は、宇宙にはびこる暗黒物質を自在に操ることも可能。
滅多にそのような行動をすることは多々とないのだが。
今まで確認されているうちでは、それぞれの銀河や一つの主系列星における意思は一つであり、
大概は、超銀河などといった一つの【塊】に一つの意思、そのように認識されている。
どうやら数多の命が誕生する過程で、
それぞれの場所の【空洞たる意思】にもまた個々の意思が芽生えるらしい。
「…うちから？」
「つまり、外の宇宙空間を形成している暗黒物質。
　それそのものに悪意をもったものが仕掛けてきているみたいですね。
　このままでは、この太陽系内部の重力場と安定値が狂うことになってしまいます」
何やらさらっととてつもないことをいっていないだろうか。
目の前のこの【惑星の意思】は。
安定値が狂う、すなわちそれは惑星を存続しうることが難しい、と

いっているにも等しい。
「って、何ですか!?そんな物騒な攻撃をしかけてきている輩はっ!?」
さらっといったディアの言葉に思わず叫ぶ美希は間違っていない。
絶対に。
もしもそんな攻撃をしかけられるものがいるとすれば、
それははっきりいって無敵、といっても過言でない。
どちらにしても、宇宙があり、惑星が存在し、
逆をいえば惑星は宇宙の海の中に浮かんでいる個々の物質にすぎない。
そして宇宙の海を構成しうる物質は暗黒物質であり、ゆえにその物質を操るものがいるとすれば、
それらは自らの意思において、どのようにも世界を創ることも、また滅ぼすこともできるであろう。
なぜそこまでぱっと脳裏に詳しく内容がうかぶのかは美希とてわからない。
しかし、脳裏にそれが真実だ、となぜか伝わってくる。
否、伝わってくる、というよりは知っていなければおかしい、そんな感覚が満ちている。
「これはしばらく、磁場をより強力にするしか対処法はなさそうね。…あ～、まあ、各界の代表にはその旨をつたえとかないと……ま、地上界は空に多少のオーロラが発生する程度でどうにかなるでしょ。きっと」
「いやあの!それってかなりの大ごとですから!何そんなにおちついてるんですかっ!?ねえ!?」
磁場が狂えば自然と大規模な自然現象が必然的に巻き起こる。
下手をすれば世界規模の異変が起こらない、ともいいきれない。
「ですけど。美希さん。私は自らともいえる大地をとるか、それとも命をとるか、といわれれば。
まちがいなく、大地をとりますよ?もっとも時と場合、状況に

もよりますが」
彼らの魂を保管してあらたに再生すれば彼らの魂そのものは救うことができる。
たしかに、今の状況のまま生きてゆくことは難しいかもしれないが、それでも魂が消滅しないかぎり未来はある。
生きる力とその気力と意思がつよければ、逆にそれはそれぞれの器の進化のきっかけにもなる。
かつての生命体達はそのようにして自らの器を変化しつつ、そしてその命を未来に紡いでいっていた。
今の生命体にはそういった根性にもちかい気力がかけている。
それはこの仕組みを創りだしてしばらく世界を見守っていて始めに感じたこと。
どうやら完全に守られている、という安心感は
逆に個々の生命体の進化の気力を奪ってしまったらしい。
そのことにたいして多少の焦燥感はあるものの、しかし完全にそれらは失われたわけではない。
かつてのように劇的な変化は遂げていないものの、ゆっくりと、ゆっくりと、
今度は様々な周囲の現状を読み取り、
精神的にも、そして器的にも進化を遂げていっているのはわかっている。
この調子でいけば、いつかはかつてのような過ちをおこさず、
全ての命を大切にする、という概念のもと、いずれは星の海に出向ける日もくるであろう。
そうなれば、自らもかつてのように、
こっそりと生命体に紛れて周囲と同じように生きてゆくことも可能。
かつてはときおりそのようにして気を紛らわせていた。
もっとも、【意思】がまぎれて存在するにあたり、
それにより世界にかなりの影響を及ぼしたのもまた事実。
しかしその事実をしっているものは、はっきりいってディアと同じ

ような存在達しか存在しない。
…時には、その行動がきっかけで世界に戦乱を巻きおこすきっかけとなったとしても、それはそれ。
惑星の意思にとってはそれらはすべて、幻のごとく一瞬の夢に過ぎない。
中には意思として存在しつづけることを憂いて自ら死を選ぶ意思もいるときく。
しかし、せっかくこうして【意思】として存在している以上、やはりいろいろとやってみるのも一つの経験、だとディアからしてみればおもっている。
どうしてなのか、意識が浮上したころよりそう確信がもてている。
それはなぜなのかわからない。
おそらくはもしかしたら自分が今の自分になるまえに何かがあったのかもしれない。
しかし、それが何なのか当然ディアにはしる術はない。
「……まさか、真空原子がこの地上というか大気中に紛れ込むなんてことはありませんよね？」
とある惑星でそのような現象がおこった事件を美希は知っている。
その結果、その星にすまう【息が必要な生物】全て死に絶えた、ということも。
「まさか。そこまで今の私の力は衰えてませんよ？
　まあ、いざとなれば、胎内にいる全ての子供たちの力をかりることになるかもしれませんけどね？」
美希の問いかけに悪戯っぽくほほ笑み、何かをたくらんでいるかのような含んだいい方をするディア。
胎内の子供たち。
すなわち、それは第三惑星に生息している全ての生命体のことを指し示す。
遠回しな言い方ではあるが、その事実に気づき、
「……全生命エネルギーを利用しなければならない力って……」

たしかに、少量の力でも数が増えれば多大なる力にと変化する。
おそらくそれをいざ、というときに利用するつもりなのであろう。
その利用方法はどういった手段かは美希にはわからない。
されど、とてつもない威力のものだ、というのは理解ができる。

しばし、自らの自転における磁場形勢の構成組み換えをするディアと、
何やら考え込む美希の姿が、その場において見受けられてゆくのであった――

光と闇の楔　～しのびよる『超空洞（ヴォイド）』～（後書き）

アテナ達の活躍の場がそろそろ…かな?活躍、ともいえない活躍のような気も。
さて、世界と太陽系すべてにおいてをまきこんだ動乱まであとすこし！
というわけで残りもあとすこし！・・・のはずなのに、
・・・打ち込みしたらあと何Kあるのだろうか?かなりなぞ・・・
なんか最近、疲れてるのか朝もぎりぎりまでねているし、
さらには夜は風呂からでたらそのままぽたっと横になってたり・・・
・・・・連休にあたり、忙しいから、という理由で公休日がひきのばしになってます
・・・まあ、いつものことですけどね。
まあ、それでも１０日後にはお休み（一日だけ）でもあるからまだまし。と。
年末は数カ月休みなし、というのはざらですからね・・・
ともあれ、これからも気がむきましたらよろしくおねがいいたしますv

光と闇の楔　～大異変の兆候～（前書き）

さてさて、そろそろいい加減に現代宇宙論に対する？つらつらとした世界説明さん。
ある程度主たるところは説明しおわったので（物質のパーセンテージなど）。
そのあたりを説明してあるのとないのとでは、やはり？度あいが違う、とおもいますしね。
何でいきなり星が危機になってるの？とか意味不明になる可能性より、
あらかじめ説明しておいたら科学的（？）根拠からしてもある程度は納得できる形にをば。
そもそも、主人公だけの説明では詳しいところまでは説明できませんしねぇ。
説明しても、おそらく、主人公に説明うけるサイドの人々は？状態ですよ。この世界では。
何しろ、原子だの粒子だの、そういった概念が全てなくなってる世界ですからね…
それらの概念はすべて、精霊、という形にすり替わっているこの世界…

ようやくお仕事もあるいみひと段落？したので通常通りに頑張って打ち込み再開です

主。
ヌシ、アルジ、シュ、呼び名は様々。
されど、呼び方は異なれど相手を敬わっていることに代わりはない。
中継点たるその感覚をひろげつつ、自らの分身であり、次代の器であり、
そしてまた、感覚的には【後継者】であり、【娘】を探すべく。
男だの女だの、自分達にそういった性別はない、が感覚的に自分がどちらに属するのか。
それはなぜだか理解ができる。
もしかしたら、このような立場になる前、自分がそのように在ったのかもしれない。
この世界における【命】は【心】であり、【意思】である。
そして【意思】は【精神体】であり、そして【魂】そのもの。
魂における器がおおきければ大きいほど、その意思が司る世界はより大きく発展をとげてゆく。
されとて…その器を守りきるためには並みならない精神力が必要となる。
だからこそ、代替わり、などという制度を生み出した。
新たな歴史を紡ぐために、【世界】を確実に導いてゆくために。
いつのころからこの制度があるのかわからない。
ただ、そのように自らが在ることこそが、全ての真実。
だからこそ。
『私の力がつきるまえに……次代の後継者よ。我が意思に答えてその呼応を……』
意思たる力、精神力がつきてしまえばこの【世界】はまちがいなく

呑みこまれる。
儀式さえすませれば、その意思の一部を広げ様々な中継点に出向くことも可能。
無意識における集合体となることも可能となる。
しかし、今の自分にそこまでの力はもはやない。
今あるのは、ただ、【虚無】になさんとする【無の心】に抗うだけの力しかのこっていない。
我が後継者たる、かの地より選ばれし人の子の器の広き魂よ。
今、あなたはどこにいるのですか？

光と闇の楔　～大異変の兆候～

唐突、といえば唐突。
突如としてなぜか全ての命ある存在達の心に直接響いてきたようなその言葉。
『ひと時の幻。世界は光に包まれん』
それが何を意味するのかまったくもってわからない。
しかし、それは確かに、全ての存在にどうやらその【声】は聞こえたらしい。
どこかできいたことのあるような、それでいてとてもなつかしいその声。
しかし、なぜかその声を聞いたものたちは心のどこかで安堵したのも事実。
まるで何かを探していた子供がその何かをみつけたときに感じる安

心感。
そのような感覚や感情を全てのものが抱いたりもした。
いえることはただ一つ。
その声は【世界】より【世界】の中でいきている自分達に向けられた何かのメッセージなのだ。
ということ。
それはほぼ直感。
誰に説明をうけたわけではない。
だけども、なぜだか【判る】。
聞こえてきたその声は自分達が存在しうる【世界】からのものだ、と。
かつてこの【声】を聞いた覚えがある。
しかし…それがいつのことだったのか、誰も思いだせない。
それは、遥かな昔。
今、この地にあふれている命はかつてこの大地に根付いていた生命達。
彼らの命が途絶えてしまったときに、意思が直接彼らの魂を救いあげた。
魂に刻まれた記憶は決して消えるものではない。
――　新たな命を願うか　このまま安らかな眠りを願うか　愛し子達よ　選ぶがいい
地表が一時、生命がすめなくなるほど壊滅的ダメージをうけたときに惑星が発した言葉。
当時、ほとんどの【命】が新たな命を願った。
だからこそ…今、数多の生命体達は、新しき理のもと、こうして今、ここにいる――

「「お…王は何を考えておられるんですかぁぁっっっっ！！」」
ぜいぜい。
思いっきり開口一番、叫んだかと思うと二人同時、息もたえだえ状

態にと成り果てる。
叫びもしたくなる、というもの。
全ての命あるものに響いたあの声。
あれはまさに【世界】の声。
王がその意図を知らないはずがない。
しかし、自分達にはまったく事前連絡もされていない。
ただ、磁場を強くする。という報告がぽんっと心の中に浮かんだのみ。
磁場をいきなり強くする、ということは生態系に何らかの影響を及ぼしかねない。
それはどの界においてもいえること。
王と繋ぎをとれない以上、補佐官である彼女に文句…否、問い合わせる他はない。
ゆえに、今現在、どの位置にいるのか探索し、そしてそれぞれ降りてきた。
しかも、どうやら磁場を変更させるのは補佐官の役目であったのか、彼女達がいたのは、北と南、それぞれの地軸点、ともいわれ、自転軸、とも一部ではよんでいる重要な聖なる場。
ゆえにその姿を確認したとき…思わず叫んでしまった彼らを一体誰が責められようか。
補佐官たる彼女がその場にいる、ということは
おそらく王より何らかの命をうけて行動しているのであろう。
そう簡単に予測がつく。
つくからこそ思わず叫んでしまうのは仕方がない。
そもそも地軸、とも呼ばれている世界の回転軸、
そこに手をくわえる、というのがどういう結果をもたらすのか。
昔、少しそれらを移動しただけでかなりの被害が各界において発生した。
それゆえに叫びもするというもの。

地軸をいじるにあたり、自らの器ともいえる体を二つにわけ、ちょっとした遊び心をかねて、『補佐官』の姿をそれぞれに纏ってみた。
ティアマトとしての横には美希が同行し、そしてまたルシファーの姿のほうには地軸をいじる。
そうきいたヴリトラがこの場に同行していたりする。

叫ばれた声は、北と南、とある軸上においてほぼ同時。
「サタン（ゼウス）あまり叫んだらこのあたりの氷が解けかねないでしょ？」
ひとまずやってきたそんな彼らにひとまず同じく同時ににこやかに答え、
それでいて彼らの周囲のみの空間をちょっぴしいじるディア。
「「ぐっ！！？」」
それにより、その場、すなわちその地に満ちる氷に縫い付けられ、さらにはそのままずぶずぶと氷の中にと埋め込まれている【何か】の姿がみえていたりする。
北の地点と南の地点、二つの地点においてサタンとゼウス、それぞれが氷の中にと埋もれてゆく。
本来ならば彼らの力をもってすれば両極に発生している氷などどうってことはない代物。
しかし、しかしである。
彼らの周囲に発生している【氷】は普通の【氷】ではない。
あきらかに見た目は周囲の氷と大差ないのに、特殊なそれは、
もののみごとに、彼らの肉体だけではなく、その魂すら完全に氷の楔によって拘束してゆく。
そのままその体といわず【魂】そのものすら氷で覆われ身動きできなくなった彼らをさくっと無視し、
「さってと。とりあえず、少しばかり地軸をいじって磁場を強化するとしますかね」

いいつつも、同時にそっと地軸の点となっている場に手を添える。
そんなディアの姿をみつつ、
「というか、どうしていきなり姿をその黒髪にかえたんですか？」
たしかに自分は黒髪であるが、目の前のディアが黒髪にする理由がよくわからない。
「本当はこの姿をとらずとも、変更は可能、なんですけどね。
とりあえず、何もないままに変更したらさすがに不思議がられますし。
ついでなので、この身を二つ具現化させて
【私たち】が変更しているように見せかけようとおもいまして。
ちなみに、こちらの姿は天界の王、主神の補佐官をしていますティアマト、といいますけどね」
目の前のこの【惑星の意思】がそれぞれ、天界と魔界の王と補佐官をしている、
というのは一応、美希は説明をうけている。
受けてはいるが実際にそれを目の当たりにしたわけではないので、
理解はしているつもりでも感情はいまだにおいついていない。
まあ惑星の誕生時期より今にいたる光景を、
ざっと簡単ではあるが視せられれば、嫌でも信じるしかなかったが……
その【記憶】は美希にとってもある意味考えさせられるものもあった。
幾多とおこった宗教戦争、人種の違いよる差別。
そして自らとは異なる姿をしたものたちへの差別。
そして…未知なる力をもったものへの恐怖と畏怖。
それによって行われた大量虐殺。
小さなぬくもりは確かにあったはあったのであろう。
しかし、人類が発生してから後、同じような過ちばかりを人類は繰り返している。
だからこそ、この【理】を創ったのだ、と【意思】はいう。

空想の中ではなく現実として認識させることにより、数多に存在していた概念を取り払った。
認識できる形でそれらを配置していない場合、
三度が三度とも人類は同じような過ちに陥り、そして自ら破滅の道を進んでいった。
このたびの措置は四度目の措置。
美希の住んでいた世界において、仏の顔も三度まで、という諺があったが、
さすがにその【星の記憶】を視せられれば、この仕組みも納得せざるを得なかった。
あまりといえばあまりの暴挙ともいえる行動。
そもそもその暴挙をとめるどころか
この惑星にて誕生していた人類はさらに加速していったらしい。
しかもそれが三度も。
さすがにつづけば、惑星の意思とて規制をかけたくなってしまう気持ちはわからなくもない。
そもそも、小さな一つの種族のせいで星そのものが壊滅してしまっては意味がない。
確かに人、は愚かだとはおもう。
しかしそれでもどこかで立ち止まり考える力をもっているはずなのに、
どうやらそれらが欠如していたらしいこの世界の過去における人々。
今はディア、と名乗っている彼女が少しばかり心配症になってしまうのもまた仕方がない。
「でもよく気づかれてませんよね？
　たしか話しでは髪と瞳の色をかえているだけ、といってましたよね？」
たしかそのようにきいている。
「ありえるはずがない。という思い込みもあるでしょうけど。
　まあ、こちらが不都合、と感じたらその記憶もまた改竄してい

ますし」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
さらっと人の記憶を改竄しているなどいわないでほしいものではあるが、
しかし、おそらく目の前の少女の姿をしているこの存在は自分がおもっているよりはるかに力があるのであろう。
そうでなければ惑星、という物体そのものを存続しうることはできない、となぜか思う。
そんな美希の思いを何となく察し苦笑しつつ、
「まあ、美希様もそのうちにわかりますよ。時としてそういうのが必要となる、というのが」
彼女が次代として覚醒し、また継承の儀を執り行えばそれらの概念も自然と理解するであろう。
そしてそれは自分とは異なり、時として切り捨てなければ他をたすけられない、という場にも遭遇する。
自分はなかなかそのようなおもいきりができなかったがゆえにいくつも悲劇を生んでしまっている。
なぜか自らの意思でそのようなことをしたくなかった。
どんな存在であれ大切な子供たちである数多の命。
たとえそれが自らの身を滅ぼそうとしていても、愛しい子供であることに間違いはなかった。
ただ、見守ることしかできない自らがはがゆかった。
しかし、見守ることが大切、だとなぜかおもっていた。
自らが行動を起こせば結果はどうあれ、多大な影響を与えてしまうのがわかっていた。
だからこそ、今は、仮初めとはいえ身代り的な立場をつくり、惑星の意思が干渉しているのではなく、意思の意向をうけた【王】が干渉している。
そのように少しばかり異なる認識を各界全ての存在にもたせている。
「…犠牲の上になりたつ命、ですか…理解はしてるんですけど……」

そもそも、人、という種族そのものが数多の命を糧にして生きている種族である。
毎日のように食している食べ物もいくつもの命の犠牲の上になりたっている。
命は命をいかし、そしてその命が死すことによりあらたな命の糧となる。
それはこの宇宙全体において絶対的な理。
そもそも、銀河、という存在自体も寿命を終えた星による超新星爆発。
それによって生まれ出た数多な物質が次なる銀河の元となる物質を生みだしてゆく。
そんな会話をしている最中にも、やがて【意思】による磁場構成の組み換えが完了し、
『さて。と、虹防壁展開』
惑星における北と南のとあるまったく対局の位置において、
ティアマトとルシファー、その器を二つに具現化せさている【第三の意思】の声が同時に発せられる。
それと同時。

どっん！

刹那。
惑星そのものが重い何かにのしかかれたような衝撃をうける。
全ての界がその振動によって生じた波動に翻弄され、
これにより各界の混乱がいたるところでみられるようになるであろう。
磁場重力の変更。
それは、いいかえれば惑星そのものにかけている重力の変更、といっても過言でない。
それでも、普通ならば突如として重力場が変化すればすぐさま生命

体に影響が及ぶ。
しかし、【意思】はあらかじめ全ての生命体に特殊な膜状の強化を施している。
すなわち、重力が変化しても耐えられるだけの措置をすでにしかけてある。
しかし、そのことに気付いているものは…ごく、わずかにしかすぎない……

？

突如として体が重くなったような感覚。
気のせい、とはおもったがどうやらそれは自分だけではないらしい。
周囲の人々をみれば全員が全員、なぜかその場にうずくまっているのが見て取れる。
空を飛んでいた鳥達もまた同様なのか、突如として一斉に地面に舞い降りてきているのが見て取れる。
「な、そ…空が！？」
ふと誰ともなく振り仰いだ空をみて思わず叫んだのはいったい全体誰なのか。
おそらく誰が叫んだかはわからないであろう。
何しろ同じく空を見上げたほとんどの存在が同じ思いを抱き叫べばなおさらに。
先ほどまで広がっていた青空には虹色の光の雲というか布のようなものがかかっている。
それらはゆらゆらと幻想的にゆらぎ、その光は太陽の光と重なって、不可思議な光景を生みだしている。
この光景は地上界だけでなく、全ての界における上空にておこっている現象。
先日、突如として【心】に響いてきたあの言葉の意味がこれを指し示していたのか。

となぜかそれらをみた存在達は心のどこかで説明をされることなく納得する。
その現象を、奇麗、と感じるのか恐怖、もしくは畏怖、と感じるのか。
人それぞれ。
自然界に近しいものはそれが異常なことではあるものの、
星そのものが行った対策だ、と感じることができる。
だがしかし、自然の心を知る術のないものは、いきなり現れた空の光のカーテンに戸惑いを隠しきれない。
いくら先日、全ての生きとしいける存在の心に直接【何ものか】がこの現象を伝えていたとしても、である。
いきなりの磁場の変更は当然のことながら自然界に影響をあたえる。
いくら様々な界に隔てている、とはいえ基本的【核】となっているのは他ならない、第三惑星そのもの。
『磁場が多くなったよ』
『外よりの力が増え始めたの？主様の対策？』
耳を澄ませば大気中において漂っている精霊達がそんな会話をしているのが聞き取れる。
しかしその【声】を聞けるものはごく限られている。
『大地の精は大丈夫？』
『重力はどうにか保たれてるけど、海のほうが心配』
いたるところにて精霊達の会話が繰り広げられているそんな中。
それらの声が聞こえない存在達は、しばらく空にうかぶ光のカーテンに動揺していたものの、
光が空を覆ったところで別段、すぐに何かあるわけでもない。
ゆえにそのままいつもの日常にともどってゆく。
人々は判っていない。
地表を覆う磁場が狂う、というのがどのような影響を及ぼすか…ということを……

外、すなわち宇宙空間と地表との壁ともいえる要。
そのためにこの界は創られた。
それは判っている。
判ってはいるが……
「ホルス！何がどうなっている！？」
光と闇を司る存在。
空に光の帯が出現すると同時、地表に降り注ぐ太陽よりの力が格段に増した。
降り注いでくる太陽よりの力もまた確実に増えている。
ホルスは太陽の意思と繋がりをもつ存在。
ゆえにかの神にきくより他にない。
「ゼウス様はどこいったぁぁ！？」
「それが、補佐官様にあいにいかれるといってまだもどってきてませんっ！」
神々の住まうこの神殿。
この現象がただならぬこと、と察し、神々が対応におわれ右往左往している様が見て取れる。
「さきほど太陽神より連絡がありました！何ものかが【干渉】を始めたもよう！
　我らが位置する物質世界とは対局している【空洞】よりの干渉の模様です！」
ざわっ。
彼らとて自分達の世界が、あるいみ無ともいえる空間に浮かぶ世界だ、と認識している。
そしてそれら何もない空間のことを総称して【空洞】と呼ぶ。
伝道師達はその空間のことを宇宙空間、もしくは暗黒物質空間、ダークマター、などと表現しているが。
しかし呼び方はどうあれ、全ては一つの事実を指し示している。
いくら自分達がどうあがこうと、そちらの安定が崩れれば世界は確実に存続を許されない。

世界、というよりも惑星そのもの、この星系そのものが消えてしまいかねない。
「なぜに突然に！？」
彼らにとっては突然、としかいいようがない。
だがしかし。
「あ～。やっぱりこっちも混乱してるみたいだね～」
聞き覚えのある声がしてその場にいた神々全員が思わず振り仰ぐ。
ふとみればその場に先ほどまではいなかったはずの人物が一人。
特徴的なのはひたすらに白で埋め尽くされている、といっても過言でないその姿。
肌の色も果てしなく白に近く、その髪の色もまた白。
服も真っ白いローブのようなものを着込んでおり、そんな中、その青き瞳がとても目立っている。
『フォルミ様！？』
その姿に心当たりがあるがゆえにその場にいる神々全員が同時に声を発する。
そこにいるのは、彼らもよく知っている伝道師の一人。
かつて素粒子物理学を完全に解読し、そして実用化にこじつけた科学者は、
今現在、伝道師の一人、として存続している。
「とりあえずこの処置は【王】の指示のもとでもあることを伝えようとおもってね。
　これをやらないと、外よりの超振動の波動で惑星の存続すら怪しくなっているからね」
【超空洞（ヴォイド）】よりの干渉。
それは全ての物質における反物質。
それよりも厄介極まりない、物質を壊しかなねない超振動を起こしてきている、という事実。
まだ反物質という代物だけならば対象方法はある。
それに付随する対局する物質をぶつければ相対し対消滅を起こす。

しかし、振動派を使われてきてはなかなか対処のしようがない。
すぐさまそれらに対局する振動派を起こせるか、といえば答えは否。
出来うることは限られる。
すなわち、それらの振動派を中和することくらいしか対処法はない。
光のカーテン、すなわち磁場が狂ったときにできるオーロラは、
この第三惑星上だけにとどまらず、太陽系全体においてみうけられている。
もし、今現在、惑星の外より太陽系全体を見渡せば、
この周囲が光のカーテンに覆われているのが判るであろう。
太陽より発生させている磁力もまた変化させ、このたびの襲撃に備えている。
ゆえに太陽風とそれに伴う磁場の変化により、宇宙空間にもオーロラが出現していたりする。
「いや、あの。それはいったいどういう……」
伝道師であるフォルミより説明をうけてもまったくその説明の内容すら把握しきれない。
そもそも、科学的な説明をして彼ら神々がわかるはずもない。
科学的な知識は彼ら神々は詳しくない。
下手に科学的な知識があれば逆に間違った方向に使う可能性がある。
そう判断したさ第三の意思の考えによって彼らは簡単なことしか教えられていない。
戸惑いの声を発する光の神、ホルスの台詞に対し少し困った表情をうかべ、
「ま。とりあえず。神々における皆にはそれぞれの分野の力を全力で発揮して、
　それぞれの分野における司るべき【もの】を全力で保護してくれる？
　【襲撃による干渉】はどうにか主様方がどうにかされるらしいから」
すでに太陽系全体における意思達による共同作戦が取られる算段は

ついている。
一か所に重点的に守りをおけばそこに何かがある、と相手に悟られかねない。
ゆえにあくまでこの地を守る存在達が防御している形をとりつつ、干渉してきている【超空洞（ヴォイド）】と決着をつけるしかない。
それが太陽系全十惑星における意思達がだした結論。
「こちらはこちらで超振動の解析しないといけないからね～」
とりあえず解析する場の拠点は月と決まっている。
黒き月と白き月。
それらを対局に配置し、簡易的な惑星の重力を安定させたのち、そこより惑星にかかっている【超振動】の解析を行う手筈。
一つ間違えば死を許されない身であるフォルミとてその身の安全は保障されていない。
それでも精神体のみになってもやらなければまちがいなく、この太陽系は消滅してしまう。
先日の偵察隊など目ではない。
完全に相手もあせっているのかこのような行動をしてくるなど思ってもいなかった。
【外】よりの襲撃はいろいろ対策を練ってはいたが、よもや【内】より攻撃をしかけてくるなど。

しばし、天界において神々と伝道師フォルミのやり取りが見受けられてゆく――

「審問長様！どうなさいますか！？」
いや、どうなさいますか、といわれても。
どうしようもない、というかどうしろ、というのであろうか。
はっきりいって自分達で考えろ！と思うのは間違ってはいない。
絶対に。

「そもそも、この現象はおそらく、王や補佐官の意思によるものには間違いはないのだから。
　これによって生じる混乱を収めるのがそれぞれの部署の役目であり。
　また役目放棄などにおける提訴もまた何がおこるか判らない以上。
　しばらくあまり重要とはおもえない提訴は受け付けないようにするしかないだろう」
サタンも出かけたっきりいまだにもどってきていない。
偵察していた【眼】によれば、補佐官の手によりおもいっきり絶対凍土の中に埋め込まれていた。
まあ、彼の実力からしてしばらくすればそこから抜け出してくるではあろうが。
そもそも、【補佐官】の機嫌があまりよくないことは【眼】の報告をうけていたゆえに知っている。
そんな中であのような時に出向いていったサタン達は愚か、としかいいようがない。
その機嫌が悪かった原因も、先ほどついに判明した。
「…というか、なんで世界の根柢にもかかわっている、という【超空洞（ヴオイド）】
　それがここにしかけてくるんだ？」
それは彼…アスタロトにもわからない。
しかし、言えることはただ一つ。
おそらく、補佐官やリュカ、さらには伝道師達がいっていた【次代】。
おそらく、この惑星に迷い込んできた、というあの少女にかかわりがあるのであろう。
何しろ王が直接動いているような事態がおこっているのである。
自分達のような一悪魔にすぎない存在に詳しいことがわかるはずがない。

できることは、ただ一つ。
何かあったときにすぐさまに対応できるようにしておくこと。
ただ、それだけ、なのだから――

「【超空洞（ヴォイド）】とはすなわち、虚無であり、また混沌の仲間。
暗黒物質を主としそこに形あるものは存在しない空間の総称。
しかしそれらがあるからこそ、星々は変化することなく存続することができる」
淡く全体が光をおびている球体を眼下に見据えつつ、
死の空間というよりは静寂の空間、といったほうがいいであろう。
月の神殿において兄達に説明している一人の少女。
「とりあえず、私は大地を纏ったほうがいいんでしょうか？」
安定させるためにあえて自らの身において【惑星】そのものを絡めとる必要性。
今まで感じたことのない、何かの振動。
確かにこの地、否このあたり一帯にむけられているのは感じ取れる。
せっかく家族で過ごせるようになったというのにこの現象はいったいぜんたいどういうわけか。
その器ともいえる体そのものを全て解放し姿を現わせば確かにそれは可能であろう。
しかしその姿では家族とともに暮らすことはできないがゆえに、常にいつも自らの姿は調整している。
今はとにかく父と母達の役に立ちたくて、人の姿を形どっているこの現状。
「太陽系全体における結界はひとまず施してはいるけど…アン。君は大丈夫？」
まだ目覚めて間がない。
ゆえにその体が心配でたまらない。
それを言うならば彼もまた目覚めて間がないという分野においては

同類、なのだが。
「私は大丈夫です。とりあえず天界と魔界。
　それらの力を照らし出し、他の界にむける力を増やしておかないと」
月は全ての力を照らし出し、また反射させる【力】をもつ。
だからこその【月の抱擁】。
全ての界にそそがれている力は【月】によって反射された力により安定が保たれている。
すべての界は月の揺りかごに乗っかっている、といっても過言でない。
「わざと結界の一部を開けておいてそこから襲撃者を捕らえるというのはどう？お父さん？」
「うん。それもいいかもね。だけど、フェンリル？その先頭にたって戦うとかいわないよね？」
うっ。
父であるロキに見透かされ思わず言葉につまってしまう。
しかし、彼のもてる力をつかえば、その結界の隙間に自らの口をあててておけば、
侵入者は自然と彼が喰らうことになり、絶対にこの【内部】までは入り込めない。
それが出来るが故の提案。
しかし、親とすれば子をそんな危険な目にあわせたくないのもまた事実。
「そうよ。フェンちゃん？あなたの気持ちはうれしいけど。
　だけど今まであなた達にはかなり苦労をかけたんだから。
　こういうときぐらいは私たちをたよってね？
　ヨルちゃんも。あまり心配しなくても大丈夫よ」
これ以上、子供たちに負担をかけさせたくはない。
それでなくても永き年月、子供たちは自分達をまもり、それぞれが孤独に耐えていた。

だからこそ、今度は親である自分達が子供たちの分まで動く番。
「アンの言うとおり。大丈夫。伊達に僕の二つ名があるわけじゃないんだからね？」
連立の楔。
この太陽系全体における全ての干渉における出来事に対して防壁をもたらす。
伊達に全ての力ある惑星より力を分け与えられて誕生していない。
地上界、天界、そして魔界などにおいて混乱を極める中、ここ、月の惑星においても、
しばしそのような会話を繰り広げてゆく家族の姿がしばし見受けられてゆく――

空に光のカーテンがかかる中。
全ての界にとわず、この太陽系全ての惑星内において同じような混乱が見受けられていたりするのだが。
当然のことながら、第三惑星における存在達がその事実を知るよしもない……

光と闇の楔　～大異変の兆候～（後書き）

ユニーク総合ＰＶがもうすぐ五千にいきそうです。５／３現在。みていてくださっている方々、ありがとうございますｖ

しかし、時期をおいてうちこみしてたら、なかなか打ち込みスピードがすすまない…

やはりこういう打ち込みは一気にいったほうが打ち込みものってさくさくいきますね（しみじみ…

最近は、なぜか魂さんのほうの番外編が頭から離れなかったり…

まあ、それはそれとして。

ようやく太陽系規模の異変に突入！…な…ながかった…

ここまでくるまですでに６０話超えってどうだろう（汗

脳内ストーリーはさほどこれかからないんですけどねぇ・・・

謎…

（脳内ストーリー。文章＆映像の形で脳内にて映画のように作製しております）

光と闇の楔　～攻防戦開幕の序曲?～（前書き）

時期があいてすいません・・・
なんかバタバタしてたのどうにかおわったのにパソで打ち込みする気力にならず・・・
なんか毎回、ラスト近付いたらこういう衝動になるのはこれいかに（汗

光と闇の楔　～攻防戦開幕の序曲？～

ここはいったい何なのか。
すでにいくつか掌握したというのに、この恒星群はなかなかしぶとい。
強い力を感じる場所からまずは堕としていった。
闇につつまれたかの場所はいずれすべての光を失い、そのまま死へとむかってゆくであろう。
死をまつものよし、自ら物質そのものを放棄するのもよし。
どちらにしろ一度とりこんでしまった以上、それ以上の力をもってしなければ脱出することは不可能。
「我が欠片が直接にでむく価値はある…というわけか」
少しばかり周囲の情報を読み取れば、この恒星群はいまだに若い。
誕生してこのかたさほど経過していないにもかかわらず、全ての星に少なからず命が宿っている。
こういう場はかなり珍しい。
大概、恒星群においても二、三も命が誕生し進化していればその場所はかなりの力をもっている。
といっても過言でないのに。
しかしここは主たる惑星の全てにおいて大なり小なり命が存在しているらしい。
「力は力を呼び込むからな。…さて、次代の器がここにいればいいのだが……」
力のない場に力あるものがいればそれだけで目立つ。
器が誕生してこのかた探し続けているがいまだにみつけられない。
もしかしたらこのたびは異なる姿をしている可能性も否めない。
ようやく【マァト】の力が弱まり、自分がこうして表にでてこれているこの機会を逃す手はない。

いつも、【マァト】に取り込まれ、そのまま自らは眠りについた状態にとなってしまう。
わかってはいる。
仲間を求める、ということ自体がさみしい、という感情からきている、ということは。
そしてそれらを包み込むもの、それが【マァト】ということも。
光の中でまどろんでいる時は確かに安定しているが、それでもやはり始めから何もないほうが安心する。
それがなぜ、なのかはわからない。
おそらく、何もなければ失うこともない、というのが前提にあるのだ、というのは漠然とはわかっている。
しかしだからといって自分の目的を変える予定はさらさらない。
だからこそ、仲間をつのり、世界を深淵なる虚無へ導くためにと行動しているのだから……

光と闇の楔　～攻防戦開幕の序曲？～

「そういえば、三の姉様」
「何？六の姉様？」
攻撃は外部と内部から。
全員の力をもちいて【太陽】の力が及ぶ範囲、すなわち重力圏においてその境目の場にと結界を施した。
今現在、全ての惑星は六紡星の位置に存在し、内部における三つの惑星は三点の位置につき、
太陽を取り囲む形にて周囲を廻っている。

さらには小惑星達の協力も得て簡易的とはいえ結界を三の惑星付近にほどこしてある。
それでも、この区域に全員の【意思】が集まりどうにか対処している今現在。
「三の姉様って、自らの【仮初めの器】いくつまで持続できるの？
　あれってけっこう生命力つかうし、私はかろうじて三つが限度だけど……」
ふと今まで気になっていたことをこの機会とばかりにといかける。
確かに、六番目の惑星である【土星】とも呼ばれし彼女からしてみれば、
三番目の惑星である【地球】である彼女が、
常にその仮初めの器をいくつも同時に創りだしていたことを見知っている。
だからこその問いかけ。
「そんなの数えたことないから判らないわよ？あ～でも今のところ疲れたことはないわね～」
いわれてふと気づく。
昔から様々な形でいろんな場所に欠片ともいえる分身を創りだし出向いたりもしていた。
しかしそれで自らが疲れを感じたことは一度もない。
またそれによって惑星が疲弊したりしたこともまったくない。
「まあ、多分慣れじゃないかしら？」
そもそも、【雨】などといった代物をふと思いついた生みだしたのもまた【三の意思】自身。
それから海が出来上がり、そこに微生物といった生命体ならいけるかな？
とおもってこれまたその形を仮初めに生みだして欠片として生息してみたのもまた意思自身。
…さらにはそれらの内部に【ミトコンドリア】といった代物を取り込んだのもまた意思自身。

「……けっこう思いつきでやったのが後にいろいろと進化の手助けになってたりしたからね～」
胎内で栄養素を創れるようになった単細胞生物はやがて多細胞生物にと進化し、
そしてそれらは数多な生物へと進化していった。
その都度、暇という理由と同じ時間を共有したい、という思いからその意識の一部をそれぞれの生命体として誕生させて様子をみていた三の意思。
誰に教わったわけではない。
それは【三の意思】自身が自らの意思において行動していたこと。
そんな彼女の真似をして他の意思達もまた同じように行動を開始していたりした事実もあったりした。
「そんなもの？」
「そんなものでしょ？きっと」
さらっといわれればそういうものなのかもしれない、と納得せざるを得ない。
が、かなりの力をつかう行為であるにもかかわらず、そういった力に慣れるものなのか。
という疑問は尽きない。
しかし時を同じくして誕生した大切な【家族】でもある【三の意思】が他から知識を得ていた記憶はまったくない。
もしかしたら、今の姿になる前の魂における記憶がそういう行動をとらせているのかもしれないが。
前世ともいえる魂の記憶を知る術など誰にも持ち合わせてはいない。
特に、自分達のような【星の意思】の前世に関してはいまだにもって謎に満ちている。
星が星のままとして意思をもっているのか、もしくはかつては別な【何か】であったものが、
星の意思として意思をもつ星として誕生することになるのか。
おそらくそれらを知っているのは宇宙を統治する立場にいる【マァ

ト】くらいであろう。
主系列星である【恒星】ですらおそらく知りえない事柄。
「…今、三の姉様はいくつ実体化してるわけ？」
その奮う力に淀みはまったく感じられない。
しかし聞かずにはおられない。
何しろかの地には次代の器が滞在している。
ここにこうしてきているのは三の意思の意識の分身ともいえる存在だと理解はできる。
分身であるからこそ全ては一つであり、ゆえにどのような場にいても基本は一つ。
ゆえに全ての分身の意識は一つであり、どのような場合においても意識は共有。
「今現在は、天界と魔界。あと地上界。それと大姉様のところでしょ。
　あとひとまず念のために月と。冥界のほうはハデスに全力で結界はらせてるし。
　あとは気になるから六つの結界拠点にもひとまず意思の欠片はおいてるけど」
それだけの自らの意思の分身でありまた拠点を創りだしているにもかかわらず、
三の意思に疲れはまったく感じられない。
おそらく、意思となっている魂の器の大きさが異なるのであろう。
それくらいは理解できる。
できるがこうもあからさまに自分との落差を見せつけられれば何となく負けたくない、
という気持ちがわき上がってくるもの事実。
三の意思からしてみればそれは自分にとっては当然のことであり、できることを全力で、という思いは今も昔も変わらない。
「…って、そうこういっているうちに、きたわよっ！」
ふとみれば、ゆらり、と結界の外部の空間、すなわち深淵なる空間

が突如として歪むのが見て取れる。
そこより出現してくる異形の姿をした【何か】としかいいようのない存在たち。
しかし、それらを内部にいれるわけにはいかない。
彼らは【物質】を喰らう性質をもっている。
それがわかっているからなおさらに。

誰の目にも触れることのない主系列星の加護が届くか届かないか、という最果ての地。
その地にて惑星の意思達による攻防戦が今、ここに開始されてゆく
――

いまだに先日、空にかかった光のカーテンは収まっていない。
さすがに夜といわず昼もその光景が続いていれば、人、というものは慣れるもの。
しばらくの間、騒いでいた人々も今ではその光景にあるいみ慣れ始めている今日この頃。
それでも、大多数の土地において地震の回数が増えたりしてはいるが、
それらが起こる前にそれぞれの土地における守護精霊達より神託が下り、
人々は今のところ地震による大規模な被害は免れている。
この世界において、精霊達が意思をもっている、ということが自然現象における何よりの強みとなる。
精霊達の意思により、ある程度の自然現象は緩和することが可能。
しかし、精霊達の力でもどうにもならない事柄も当然のことながらあるわけで……
「…あ、あの？いいんですか？」
戸惑いつつも問いかける。

そもそも、彼女が傍にいてくれることは心強いが、しかし不安は募る。
隣にいるディアに気をつかいながらもといかける美希。
「何がですか？」
「何が…って……」
そんな美希の問いかけに、きょとん、と首をかしげて問い返すディア。
美希とすれば、ディアのこの落ち着きようが気になって仕方がない。
先日、この惑星における磁場を少し変更したことは、美希も同じく同行していたので知っている。
その後、魔界と天界…この世界におけるあるいみお伽噺や神話レベルの話しに慣れはした、したが。
ともあれ、そのあと、天界と魔界よりやってきた、という代表者が一時氷に閉じ込められたものの、
それぞれの界の安定が不安定になったとかで【補佐官】に意見をききにきたらしい。
ということも。
その閉じ込められた瞬間を目の当たりにしていたために知りたくはないが一応知ってはいる。
ディアいわく、何でもかんでもすぐに頼ってくる。
だから進歩がない、とぼやいていたが。
惑星における磁場を変更したのは何もこのたびが初めてではない。
かつて一度ほど同じように多少変化させたことがあった。
そのとき行ったことを参考に、それ以上力を注げばいいだけなのに、
それすに思い当たらない管理者ともいえる上層部の存在として創っている存在達。
そのままほうっておいたら確実に魔界と天界のバランスが崩れるのは明白であるがゆえ、
近いうちに戻る、と確かディアは言っていたような気がするのは気のせいか。

なのにいまだにこうしてここにいることが不思議でたまらない。
それゆえに美希としては気になってしかたがない。
自分の傍にいてくれることは心強いが、自分のために無理をしているのではないか。
という少しばかりそんな負い目すら思ってしまう。
そんな美希に対し、
始めは何を美希がいいたいのか察することができずにしばし首をかしげていたものの、
「ああ。もしかして【あちら側】のことですか？大丈夫ですよ。
　この体はあるいみ仮初めのものですし。いくつでも同時に存在させることは可能ですからね。
　とりあえず、天界と魔界にも【私】はすでにいっていますよ？
まあ、重力圏外で侵入者と攻防戦を繰り広げている【私】のほうは常に気が抜けませんけど」
美希の言いたいことを察し、にこやかに答えているディア。

実際、こうしていても全ての【自分】よりそれぞれの状況が伝わってくる。
それはどの【場】における【自分】とておなじこと。
どの場所にいるのも自分自身にはかわりがない。

そんな美希とディアに対し、
「？また判らない言葉で話してる。というか、たしかニホンゴ…とかいったっけ？それ？
　でも伝道師様達が扱う言語を使えるなんて美希ってすごいわよね～」
横にて意味不明な会話を始めた二人に対しそんなことをいっているケレス。
時折、二人はケレスには意味不明な言葉で話しこむことがある。
ケレスも簡単にその言語を習ってはみたが、その言い回しなどが難

しく、いまだに習得までには至っていない。
そもそも、一つの言い回しだけでもいくつも意味がある言語、ということ自体がケレスからすれば理解不能。
人はなかなか慣れ親しんだ言葉以外のものを学ぶとき、どうしても先に先入観。
というものが先立ち、なかなかそれより先に進めない傾向がある。
例をあげれば、たとえば自分は苦手、とおもうとなかなかそれらを習得することなどできはしない。
逆に興味をひかれて絶対に覚える気があるならば時間は関係なくさくっと覚えることも可能。
話しこんでいる美希とディアに対して話しかけているケレスとは対照的に、
「ふふふ。任せてください！何があってもお守りしますからっ！」
一方で何やら異様に気が高揚しているっぽいアテナ。

三者三様。
とはまさにこういうことをいうのかもしれない。
実際、この場にいるのは四人、なのだが。
それぞれの反応からしてみても、その諺が何かしっくりくるわよね。
そんなことをふと思う美希。

今、彼女達がいる場所は王都より少し離れた場所にあるとある平原。
先日、空に光のカーテンがかかってしばらく後に突如として魔獣が大量発生したと報告がはいった。
偵察隊を王都より仕向けてみれば魔獣、と認識されていたのはどうやら堕烙者であったらしく、
かつて魔獣であったそれらはすでに完全に【死の念】にと取り込まれてしまっていた。
死を恐怖するあまりに発生した念により誕生する【ゾルディ】は文字通り、

死に対する恐怖心より発生する存在であり、その姿も様々。
さらにいえば死から連想される形に姿を変化させることもあり、
はっきりいって直視したくない存在の一つにとあげられる。
「というか、なんでゾンビ？これ創りだしたのが誰か予測ができる
ゆえに呆れるしかないんだけど……」
平原の先にある村より要望がきて、ギルドに登録しているディアが
出向くこととなり、
美希もまた自分に何かできることがあれば、というので同行するこ
とに相成った。
それを聞きつけたケレスもまた同行する、と言い始め。
さらにその話しを小耳にはさんだアテナが自分が護衛にあたる！と
いいだし…そして今に至る。
アテナいわく、教師が生徒を守るために同行するのに説得はいらな
いというか怪しまれない。
とはいってはいるが。
アテナからしてみれば、補佐官であるディアの役に立ちたい、とい
うのがある。
髪の色と瞳の色は変えてはいるが、自分達が尊敬する補佐官ティア
マトにかわりはない。
もっとも、いまだに補佐官と【王】が同一である、というそちらの
事実については、
ディアにより強制的に意識すらできないように、また認識すらでき
なくなっていたりする。
それでも特別講師としてやってきているアテナがディアに構ってく
るのはかなり目立つ。
まあ、名目上は大会の優勝者が狙われる可能性があるのでその保護
をかねて。
ということになってはいるが。
「あ～…アテナ。気を張りすぎて空回りしないようにね～。どこか
いつも抜けてるし。あなたは」

彼女は一つのことに夢中になると他のことがみえなくなる性質があるらしくそれでよく失敗を犯す。
まあこのあたりの性格はおそらく母であるヘラに似たのであろう、と容易に予測はつくが。
「まかせてください！ゾンビごときにこの私が負けるとでも！？」
すでに今から出向く場所に沸いてでてきている魔獣の慣れの果て。
堕烙者の大まかな特徴はギルドを通じてディア達にも伝えられている。
死に切れない存在に対して有効なのは聖なる力。
死の力に反する力は【生】なる力。
死が終焉の闇であるならば、【生】は希望の光。
光の属性によって死を蹴散らす、ということもできなくはないが、今回は少しばかり異なっている。
アテナの所属は確かに戦乙女、という部類ではあるが、彼女はまた愛の女神でもある。
光により死から救いだし、その愛により捉えられているであろう【魂】を冥界へと導く。
そのためにこのたびは一応、アテナが戦うことに関してディアは許可をだしている。
もっとも、そんなアテナとディアのやり取りは当然のことながら一緒にいるケレスには判らない。
そもそも天界共通語は在る程度は習っているもののかなり難しく、いまだに完全理解までにはおいつかない。
「……植物系のゾンビが苦手だったの誰だったっけ？」
ぽそっ。
びくうっ！
ぽそり、とつぶやくディアの言葉に傍から見ていてもわかるほどにその場にて固まるアテナ。
「？ディアさん？アテナさんはいったいどうなさったんですか？」
そんなアテナをみて首をかしげている美希。

ちなみに、子猫みゅ～は危険なので部屋にて留守番させようとしたのではあるが、
みゅ～が嫌がったがゆえに、
結局のところ美希の腰にとつけている小さなポシェットの中に大人しく収まっている。
みゅ～ちゃんとて見知らぬ土地で一人ぽっちで留守番、というのは不安なのでは？
というのはアテナ達の言い分。
しかし何となくこの【みゅ～】が普通の子猫ではないことを察しているディア。
しかし確信が持てない以上、それを説明する必要性はないであろう。
ゆえにそのことについてはいまだに誰にも話していない。
「アテナね。昔、蜘蛛においかけられたことがあって、
　そのときにロキが実験してた食虫植物に喰われたことがあるのよ」
ちなみにその実験とは腐食と生体における安定度を測るもの。
娘の体を治すための実験に植物といわず様々なものにおいて実験を繰り返していたロキ。
もっとも、お守りを渡している以上、それ以上体が蝕まれることは絶対にありえなかったのだが。
「……クモ？それに食虫植物…って…」
何となく予測したくはないが予測がついてしまう。
「その全身をほとんど腐敗させながらぬるぬるとした蔓でアテナの足をつかんでね……」
「…すいません。それ以上は言わないでください。というか想像させないで！」
とあるゲームにでてきた肉食植物のことをふと思い出す。
あのようなモノが実際に目の前にきたら…絶対に卒倒する。
まあ卒倒していたら確実に餌食になってしまうのでひたすらに逃げるしか方法はないであろうが。

「まあ、今回これを行ったのはどうも残党の一味らしいけどね……」
今は【門】であるソトホースの力も多少緩んでいる。
彼の力は基本、この地における磁場と共鳴している、といって過言でない。
磁場が強くなったことにより逆に彼の力が突如として一気に膨れ上がり、
結果として力を完全に制御できるまで多少力を落として【門】を管理している今現在。
一時、門の監視が緩んだ隙をつき、いつか界を抜けようとしていた輩達はその隙に界を脱出した。
「…ディアって。どこからそういう詳しい情報を得てるわけ？
…まあ、何かディアがアテナさん達のことを敬称つけて呼んでたら
相手が固まったりするので仕方ないかもしれないけど……」
ディアがアテナやアスタロトのことを【先生】呼ばわりしたときに、あからさまに二人して固まったことは記憶に新しい。
周囲にどうにか二人とも気づかれないようにしていたらしいが、顔が引きつっていたのをケレスは見逃してはいない。
何でもディアいわく、伝道師にもツテがあるのでそのあたりの関係でしょ。
と軽くケレスの問いには答えていたが。
おそらく絶対にそれだけではない。
断じて。
言霊使い、という存在そのものがあるいみ伝説上ともいわれていたことからそのあたりの関係なのかな？
ともおもうがそうでないような気もひしひしとしている。
しかし不思議とディアが【人】ではない、という可能性に思い当たらないのはケレスがケレスであるゆえん。
特に彼女は思いこみが人一倍激しい性格でもあり、
ゆえに一度ディアを普通の【人】として認識してしまっている以上、

よもや【他界】の関係者かもしれない、という可能性は奇麗さっぱり失念されている。
その一番始めの思いこみなどがなければ、【大会】中における理不尽な現象も、
その後起こった現象も全ては【一つの可能性】に結び付いたであろう。
もっとも、よもや【惑星の意思】そのもの、までは予測不可能、ではあろうが。
「情報は常にどこからでもはいってくるものよ？
というかその気になれば誰しもその程度のことは知ることは可能なんだけど。
たとえば、この辺りに漂っている大気中にいる精霊達だけど。
彼らには【門】はあってなきがごとし。だから、常に【窓】を通じて行き来してるし。
なので【他界】の情報などは彼らにきけば在る程度はわかるものよ？」
実際、基本的に精霊達は【惑星内】に存在しているわけであり、ゆえに【界の区別】はなきに等しい。
そもそも彼らには【器】という体が存在していない。
ゆえに自在に行き来することは可能。
もっとも、それぞれの界における精霊達がそれぞれの界に自在に出入りができている。
というのを知っているものもまたごくわずかの存在しかいないのもまた事実。
「あ、あの？それより、ディアさん。残党の一味…って、一体？」
何か話題がさらっとずらされたような気がする。
さきほどディアがいった一言はかなり重要なような気がするのに。
なぜか精霊の話題にいつのまにか話しはすり替わってしまっているように感じるのは美希の気のせいか。
「え？ああ。そういえば説明していませんでしたっけ？どうもこの

たびの大量発生。
【ハスター・ホテップ】と【テケリ・ショゴス】側の残党達が裏にいるみたいなんです。
まあ、組織のトップともいえる代表者はすでにショゴスとハスターに取り込まれてしまってますけど」
かの存在は各時代に存続しうる頭首達当人を取り込むか、もしくはその感情を取り込むか。
それにより力をつけていた。
このたびは当人そのものを一度取り込んだようではあるが。
しばらく時が経過すれば【意思】により封じられた二つの存在の内部より、
それぞれの元頭首達はそれまで抱いていた【強き心】を無くした状態で再び世界に再臨する。
「って、残党!?それって大ごとなのでは!?」
さらり、というディアの言葉をきいて思わず叫ぶアテナ。
先ほどのディアの言葉により過去のトラウマを思い出し、しばらく落ち込んでいたアテナだが、
残党、ときいてふと意識が浮上する。
ディアこと補佐官ティアマトのいっていることなのだからおそらく間違いはないであろう。
しかし、しかしである。
こういう場でさらっと重大ともいえることをいってもいいものなのか。
自分達にとっては重大とおもえることでも、もしかしたら補佐官からしてみれば重大でも何でもないのかもしれない。
様々な思いが心をよぎるが、今はとにかく正確な情報が必要といえる。
何よりも今この場には、補佐官だけでなく、異世界よりの来訪者もいるのである。
異世界よりの来訪人がどれほどの力をもっているのかはわからない。

しかし、補佐官の対応をみるかぎり、下手に刺激しないほうがいいのであろう。

というのは何となくではあるが容易に予測はつく。

「彼ら自体にはさほど問題はないわよ。ただね～。

どうも【超空洞（ヴォイド）】の欠片、というか端末が影響してるみたいで。

簡単にいえばソレが彼らに力を貸しているみたいなのよね。

彼らの心の【闇】を媒体にしてどうもこの【内部】に入り込んできたみたいだし……」

他者の【闇】にも入り込めることができるのは【超空洞（ヴォイド）】の特性、といえば特性になるであろう。

何しろ【超空洞（ヴォイド）】は知られていないだけでどこにでもあり、またどこにもない存在。

逆をいえば、どこにもないがゆえにどこにでもある、それが【超空洞（ヴォイド）】という存在。

美希が共についてきている状態で、もしも【超空洞（ヴォイド）】に美希が【何】なのか気づかれれば。

おそらく激戦は免れないであろう。

それは覚悟の上。

【自らが取り込むこと】ができればそれにこしたことはない。

しかし、事はこの【世界】の根柢にもかかわること。

自分が行うよりは、おそらく美希がそのことに気付かなければならない。

なぜだかそう漠然と思う。

全てを守ること、それはすなわちどのような存在であっても全てを抱擁すること、に他ならない。

全てを包み込む、無類なる【慈愛の心】。

それらが【マァト】には求められる。

そのことに気付いたとき、美希は本当の意味で、【次代の器】としての継承の儀を終えたこととなり、

その時、どんな場所にいても自然と全てを受け継ぐこととなる。

しかし、彼らは気づいているのであろうか。
【超空洞(ヴォイド)】が求める理由の根柢にある心。
心があるからこそ他者を求め、そして終焉を願うわけであり。
しかしその根柢にあるのは、自らの心の安定。
しかし…しかしとおもう。
心があれば、そこにあるだけでどれだけ苦痛になるのか…おそらく彼らは気づいてはいないのだろう。
どうしてそう思うのかそれはディアにもわからない。
しかし、心があればそれだけ感じる世界もまた多種多様、というのだけは紛れもない事実。
その多様なる姿によりどれだけ心が救われるかも…おそらく、【超空洞(ヴォイド)】は気づいては…いない。

光と闇の楔　～攻防戦開幕の序曲？～（後書き）

最近、並行打ち込みしてた「魂」さん（メモ帳のみ）の番外編が頭からはなれず。
・・・・・まあ、とりあえずこれとＷＧを完結させるのが先、ですけどね。
ともあれ、どうにか気力奮い立たせつつ頑張ります・・・
いつもなら２０ｋくらいだと一時間ちょいでもあれば打ち込み可能なんですけどね・・
気力さえのってれば（汗

光と闇の楔　～【ヴォイド】との邂逅～（前書き）

今回の敵さん、「マーレラ」…何それ？
という人はＷｉｋｉを参照にしてくださいな。
美希がその正体というか元になった生物さんのことを一応話してはいますけどね（汗
あと、今回は、あるいみグロ！？注意です！
というか、節足動物苦手、という人は絶対に想像はしないでくださいね！！（汗
というか、
今回の敵さんたちの容姿は絶対！に！想像しないに限ります…切実に……
あ、まあべ〇ード様関連は問題ないとおもいますよー？
というか、あるいみ有名どころですしね。アレは……
ただし、幹部さん達の容姿は絶対に想像したら負けです。いやほんと。
…下手したらうなされます（自覚あり

※毎日投稿ができなくなってすいません。
なんでかラストに近づくたびに打ち込み気力がのらなくなっている
薫です・・・
読んでくださっている方々には感謝、です！

あと、台詞と情景の合間を今回はあけてみてます。
どうもなろうさんで確認するのにあけたほうがみやすい・・・かな？ううむ・・・

光と闇の楔　～【ヴォイド】との邂逅～

何だ？ここは？
久方ぶりに命あふれる惑星にと降り立った。
しかし、何か違和感がある。
どこがどう、というわけではない。
他の惑星などでは見受けられない、独特な違和感。
しかもざっと確認しただけでかなりの実力をもった存在がこの惑星上にはかなりいる。
惑星全ての生命体の力を使っているのではないのか？というような存在もいれば、
よくわからないがとにかくひたすらに独特な力に特化したものもいるらしい。
らしい、というのは確実に確認していないからであり、またわざわざ確認しよう、ともおもわない。
自分を楽しませてくれる存在ならばよいがそうでなければ確認するだけ無駄というもの。
しかしこの違和感が気にかかる。
何がどう、というわけではない。
知っているようで知らないようで、とにかく常にひっかかる類の違和感であることは間違いない。
「…まあいい。まずは、間者としても使用できた人形がいっていた人間を探してみるか」
この惑星上の大会にて優勝したという人間の少女。
その精神そのものに入り込んで情報をすべて把握した。
この世界はいくつかの【界】という部類にそれぞれ特定の種族が住まう地を分けているらしい。

一番惑星にもっとも近いともいえる地上界。
そこは惑星の表面上にあたり、空中にあるより惑星の力をもっともうける場所でもある。
ちなみに天空には天上界というものがあり、また地下には魔界、といったものもあるらしい。
何だかどこかの世界のお遊び感覚でつくられている
【小説】とかいう輩に似ていなくもないような気がするが。
彼とてそういった類を全て把握していたわけではないので詳しくはしらない。
知っているのは一時彼の配下になったものがそういうのに詳しかったがゆえに、
多少の知識を得ているにすぎない。
しかし、探す、といっても地上界もかなり広い。
力が強きものを探せばいいもかもしれないが、普通力がつよいものはその力を隠す傾向がある。
すぐに見つかる、とはおもえない。
ならばこちらから何かしかけて相手からでてくるのをまつべきか。
それとも力あるものを取り込んで自らの器として利用して相手をおびき出すか。
「まあ、まずは人形達からもう少し詳しく聞きだすか」
目指すは人形と化している輩達が集う場所。

彼は知らない。
その場にこの惑星の【意思】たるディアがいる、ということを――
彼が感じている違和感。
それはこの惑星そのものにおける特殊ともいえる事情によって誕生している現状。
それが違和感の正体である、ということはいまだ誰も気づいては…いない……

「ほう。まさか大会優勝者が出向いてくるとは好都合」

目の前にいるのはなぜかその半身をうねうねとうならせている、
どうみても下半身が節足動物なのではないか？
というような容姿をしている存在。
ちなみに、うぞうぞうごめく下半身から出ている肢は軽く見積もっても十本以上。
いくつもの固いような小さな毛におおわれたそれらの肢は大地を踏みしめるのと同時、
半分はまるで獲物を求めるかのごとくに腹？の前で組まれている。
あからさまに人ではありえないその容姿は巨大なとある生物を彷彿させる。

「あ～。かつてここでは【マーレラ】って呼ばれていた奴に酷似してるわ。あれ」
思わずその姿をみてぼそっとつぶやくディアに対し、

「？たしかそれって、古生代カンブリア紀にいたとかいうバージェス動物群の一種のですか？
　でもたしかあれは全身が二センチにも満たなかったとおもうんですけど？」

伊達に生物学をも学んでいたわけではないがゆえにそのあたりのことは少しばかり詳しい美希。
正確にいうならばここに迷い込んでくる直前にだされていた課題が古代生物に関するものであった。
昔のことに興味があったので美希は古代生物を選んでいろいろと調べていたにすぎない。
しかし、しかしである。
一体どのような進化を遂げたらこのように変化することが可能なのか。
その容姿ははっきりいって異様、としかいいようがない。
頭とおもわしき部分には二対の鋭い棘があり…
もっとも、その棘はどうみても角、のように見えなくもないが。
人の顔らしきものがはりついている…せいかくにいえば、埋め込まれている、
もしくは首から上がはめ込まれているように見える、といったほうがいいであろうか。
ともかく、本来ならば甲殻に覆われているはずの部分には確かに人の顔らしきものがあり、
しかしその頭には二対の鋭くとがった角。
それでいて耳があるはずの部分から伸びているこれまたいくつも鋭い棘がついている触手のようなそれは、
体よりも大きくおもいっきり地面にまで伸びているのがみてとれる。
口から垣間見えるこれまた小さな触角のようなソレからは、
おそらく人でいうところの舌の部分にあたるのか、
とにかくびっしりと毛におおわれたブラシ状となっている。
胴体そのものはどちらかといえば細くもなく太くもなく、といったところなのではあろうが、
しかしどうみてもその胴体らしきものかいくつものたい体節にと分かれており、
ちなみにその体全体もどうみても固い甲殻のようなものでおおわれ

ているのが見て取れる。
人でいう腰のあたりからその甲殻は二つに分かれており、それらがどうやら足代わりになっているのか、
その分かれた二対の甲殻から無数の肢らしきものが生えており、
それの大半はほとんど大地を踏みしめている。
もっとも、胴体を構成している部分らしき甲殻からも無数の肢らしきものが出ており、
それらはぴっしりと毛のようなものに覆われてうぞうぞと気持ち悪いほどにうごめいているのが見て取れる。

「ああ。進化の過程はやはりどうやら同じ道をたどっていたようですね。
　今までいた場所でも同じような存在がいたんですか？」
「ええ。もっとも化石から復元させたバーチャルシステムで
　生きている様を経験することは可能、でしたけど」

何やらのんびりとケレスやアテナにはまったくもって意味のわからない会話をはじめているディアと美希。
おそらく、二人にバーチャルだの何だの、といってもまったくもって意味不明、であろう。

そんな何やらのんびりと会話を始めている二人に対し、
「というか！何ディアも美希ものんびりとあれをみて平気でいられるわけ！？」

その姿をまのあたりにし思わずさけんでいるケレス。
まあ、普通、このような存在をみて冷静でいられるはずはない。
そう、普通ならば。

「いろんな容姿をもつ存在は見慣れてますし……」

そもそも、美希のいた場所そのものが宇宙空間との交流をすでにもっている場ともいえる。
ゆえに様々な姿をした一応、それこそ【宇宙人】という一言でくくられる異形の存在には結構なれている。
…もっとも、美希としてはそういう存在とかかわり合いをもつ機会はまったくなかったが。
常に情報というか映像上では見慣れているがゆえに多少の異形なる姿には動じない。
それに何より、霊力、という力が開発され、人類もまた力をえたものは姿をかえていたものもいた。
ある場所などではそういった輩にたいして差別が起こっていたりもしたようだが、
しかし世界情勢がそれどころではなかったのも事実。
すくなくとも、地球上においては大異変の後始末に追われそれどころではなかった。
もっとも、そんな地上を見限り宇宙にでてゆく人類もまた多かったのも事実のようだが。
しかし、それらは特定のお金持ちにかぎること。
普通に生活していた人々にそんな余裕があるはずもない。
ましてや美希は母一人、子一人のいわば母子家庭。
しかも母は常に病弱で美希がどうにかアルバイトなどをこなし生活費などをも稼いでいた。
そんな状況で宇宙移住などできるはずもない。
もう少しお金があれば母の病気もどうにかなったのかもしれない。
しれないが…それは今さらいってもしょうがないこと。
そもそも、最先端の魔科学においても母の病気は治せなかった。
霊力が涸渇している、とも病院ではいわれた。
その理由を美希は知らない。
本来ならばすでに死んでいるはずの人物であるがゆえに、ゆっくり

と体が衰弱していた、などと。
一体だれが想像できようか。

「私もなれてるし……」

目の前にいるソレをみてもこちらもまた動じることなくこいつがきたのね。
などとのんびりと思いつつもさらっといいきっているディア。
そもそも、魔界においても然り、天界においても然り。
様々な容姿をもつ存在は幾多といる。
たかがこの程度で混乱するような精神は持ち合わせてはいない。
おそらくこの場で人間的な感性をまともにもっているのはケレスただ一人、であろう。

「あれは…っ！おまえは、【ハスター・ホテップ】の幹部の一人！マルマラ！」

そのような容姿をもつものは限られている。
ゆえにその姿を確認し思わずその場にて叫んでいるアテナ。

「それより、ディアさん。私としてはその後ろのモノにかなり違和感があるんですけど……」

それでなくても一人？だけでもかなり印象深いとしかいいようのない、マルマラ、とよばれた存在。
その後ろにちょっとした人間の大人くらいの大きさはあるであろう黒い艶やかな塊があるのは気のせいか。
しかも、わさわさと音をたてて足踏みしているようにも感じなくもない。
というか気のせいだ、とおもいたい。

切実に。

そんな美希の儚き思いもむなしく、
「ほお。これは戦女神のアテナがでむいてくるとは。
　つまるところそちらの人間の女の護衛に天界から遣わされた、
というところか？」
わさわさと地面にはいつくばるようにしている黒き塊からそのような声がもれでてくる。

「…にゅぅぅ～……」
ぴょこっと美希の腰につけているポシェットから顔をだし、
その姿を目の当たりにして少しばかりかぼそい鳴き声をだしている
子猫のみゅ～。

ひききっ。
何となくものすっごく嫌な予感がする。
ひしひしと。
背後の黒き塊はただの塊であってほしかった。
切実に。
目の前にいる信じられない異形の存在。
その姿を目の当たりにしてその背後にいる黒き塊は絶対にアレではない。
そう自分自身に言い聞かせていた。
いたのに、今の声は紛れもないその黒き塊から発せられていたような気がする。
気のせいだ、といってほしい。

だがしかし。
「…あ〝～。そういえば、魔界においてはなんでかアレがあのように進化したのよね……」

その容姿をみて思わずぽそっとつぶやくディア。
まあ、たしかにあの種族は強い生命力をもってはいた。
なので永らく生きていたがゆえに、かつての姿のままによみがえらせた。
結果としてかつてとは異なり、なぜか知能をもった輩が発生したりもしたがそれはそれ。

「いやあの！さらっと怖いことをいわないで！ディア！
　というか、アレってやっぱりアレなわけ！？」
「あ～。まあ、あの種族は基本的に生命力強いし。始めはたかが数十センチだったんだけどね～」
「それも怖いからっ！というか始めって何！？始めって！！」

事実、この惑星上においては、かつて石炭紀と呼ばれていた時代に九センチほどの大きさをほこる種族もいた。

「大丈夫よ。基本、あれらの種族は森林などに住まう種族なんだし。
　ただ人間社会に溶け込んでいるものはそれなりに対応進化しただけの存在だから」
「それ答えになってないぃぃっ！」

ケレスにとってもっとも嫌いであり嫌悪する対象のソレらしきものがそこにいる。
…しかもかなり巨大な姿で。
あまり巨大すぎるのでその可能性を否定したい。
切実に。

「テケリ・ショゴスに所属する【フレイン】ね。
　というかそれぞれの二大勢力の幹部がわざわざどうしてここに

？」

二大勢力、といっても実質的にはすでに彼らの組織の頭首はすでに頭首たる存在ではありえない。
彼らの【念】が完全に喰らい尽くされた今、
彼らはあるいみ抜け殻ともいってもいい状態となっている。
彼らのもっていたあるいみ【野心】ともいえるその【念】はすべて【ハスター】と【ショゴリ】。
それらにそれぞれ吸収されている。
アスタロトにより審問にかけられるべく連れ去られている二大勢力の頭首たる存在達は、
いまだにその自我すら取り戻してはいない。
何やら現実逃避を全力でしたいがゆえに半ば叫んでいるケレスをさくっと無視し、
目の前にいるその二つの存在にと話しかけるディア。

そんなディアの台詞をきき、

「ほう。少しは我らのことを知っているようだな？…というか、きさま、何ものだ？」

感じる気配は人のそれとは異なり、完全に周囲の気配に溶け込んでいる。
自分達の頭首が忽然と姿を消し、自分達なりに情報を収集してみれば、
頭首達はなぜか審問官につかまり、今は裁きをうけている最中、らしい。
幾度か助け出そうと間者を紛れ込ませてはみたがことごとくその間者達すらつかまってしまった。
実力があるものでなければおそらくその【場所】にたどり着くこと

さえ不可能であろう。
カサ…カサカサカサ……
左右あわせて六本ほどある肢をわさわさとすり合わせつつ、
その半身を少しばかり上にとむけてこちらを見据えていってくるソレ。

「私はみていない、みていない、これは気のせい、そう、気のせいよ、気のせい……」

横ではなぜか完全に現実逃避を始めているケレスの姿があったりするのだが。
さもあらん。
何しろ嫌悪しているというか完全に嫌っている【いきもの】がしかも巨大なすがたで、
さらにいえばその黒き輝きをもつ巨体から人の言葉が発せられていれば現実逃避をしたくなるというもの。

「あ～。あなた達がこのゾンビ達を生みだしているわけ？
まあ道具にするにしても、餌にするにしても貴方達からしてみれば一石二鳥なんでしょうけど」

彼らの主食は主に死体。
ゆえにこの光景もあるいみ納得できる。

今、ケレス、ディア、美希、そしてアテナがいるこの場の周囲には、どうみても腐っている、としかいいようのない様々な容姿をした動物などの姿がみてとれる。
それらがそれぞれに死体のまま動いているその様は、はっきりいって【ゾンビ】といっても過言でない。
ついでにいえばところどころ人型、のようなソレらも交じっている

ように見えるのは
おそらく気のせいではないであろう。
周囲にあったはずの木々はすでに朽ち果てており、
それらの木々もまたまるで意思をもったかのように根っこをずるずると這わせてさまよっている様がみてとれる。
かなりあるいみこの世のものとは思えない光景が確かに今この場においては広がっている。
もっとも、こういった光景は魔界などにおいては日常的な光景の一つなので
見方によっては異様とは言い難い。

この場に彼らがいるというのは予測はついていたというか知っていた。
自らの内のことである。
知ろうとおもえば全てを知ることも可能。
しかし、ディアからしてみれば気になるのはそこ、ではない。

「……それで？いつまで二人の中に隠れているつもりなんですか？
【超空洞（ヴォイド）】の【欠片】さん、といったほうがいいのかしら？」

自らが産みだしたともいってもいい存在達ならば内にいても違和感はない。
しかし、そこに異質なものが混じっていればすぐさま把握は可能。
それゆえの問いかけ。

「え！？それってどういう…！…って、何やつ！！」

アテナですら気づけなかった気配。
ディアの言葉とともに、

目の前にいる二大勢力の幹部達の体より黒き煙のようなものが噴き出し周囲を覆い尽くす。
しかしそれらはディア達にたどり着く前にもののみごとにかききえる。
まるで何かの意思がはたらいてかき消されたように。
黒き煙がある程度収まったそこにいるのは、真っ黒い姿をした何か。
しかしそれから感じる感覚はアテナもまったく未知、としかいいようのないもの。
補佐官や、また上司、そして父達から感じる感覚とはまた違う。
どこがどう違う、というのかはわからない。
しかし圧倒的な力の差をすぐさま感じ取り、その場にて警戒態勢を強めるアテナ。
もしも、ディアのいった言葉の意味をきちんとアテナが理解していれば、
警戒どころかとんでもない相手がこの場に出向いてきた、と理解できたであろう。
しかし、幸か不幸かアテナはその事実を知らない。
否、まだ知らされていない、といったほうが正しい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ベアード?」

思わずその姿を目の当たりにしてぽそっとつぶやく美希。
どこをどうみても、自分達のいた場所ではかなり知っている人はしっている
妖怪の類の姿のような気がするのは気のせいではないであろう。
何しろ真っ黒な球体のようなものにいくつかの棘らしきようなものがあり、
強いていうならば、巨大な真っ黒い棘の塊。

そこにぽっかりと光るような二つの目が異様に大きく存在している。
もしもこれが目が一つで口があれば確実に、某妖怪のベアードだ、とそれらを知っているものがいれば断言したであろう。
しかし、なんだろう。
それから受ける感覚はどこか懐かしく、それでいて悲しい。
悲しくて…そしてさみしくて、どこか何かぬくもりをもとめている。
そんな印象をぱっとみただけでふと抱く。
どうしてそのような印象を抱くのかそれは美希にはわからない。
しかし、なぜだか判る。
それはほぼ直感とでもいうのであろうか。
――自らを否定せずに受け入れてほしい。
そう心の奥底で願っているその心がなぜだか視ているだけで伝わってくる。
何?この感じは?
それはまるで…母からよく伝わってきた感覚とよく似ている。
私の傍からいなくならないで。
もう、二度と。
大切な私の……
自分を亡くなった娘の身代りに見立てていたことはしっていた。
母から時折流れ込んできていた心の感情。
どこかそれに似通ったさみしくて、それでいて受け入れてもらえないのならば全てをなかったことに。
どこか極端であり、しかしどこか理にかなっているようなそんな感情。
どうしてそんな感情がその黒き塊らしきものをみただけで流れ込んでくるのか。
しかしそれがなぜか当然だ、とおもう自分もそこにいる。
戸惑いはすれども、しかしどこか冷静な自分がいる。
ゆえに、的外れかもしれないが思わずどこか間の抜けたつぶやきをもらしている美希。

まあ、巨大な例の生物の姿にも驚愕したが、もはやこの世界は【何でもあり】とあるいみ割り切っている。
まだその容姿がいわく、【オオゴキブリ】と呼ばれていた輩であることが救いといえば救いであろう。
もっともそれでもやはり嫌悪という感情は先にくるが、
しかし、一時友人に誘われてやったことのあるゲーム内において同じような敵と遭遇したことがある。
ゆえにそちらについての耐性は少しは美希としてはついている…つもりである。
まあ、あんな巨大なソレを目の当たりにしてケレスが現実逃避をしている理由もわからなくはない。
おそらく耐性などまったくなかったであろうことは容易に予測がつく。

「…ベアードもどきに、さらにはゴ○モドキ…マーレラもどき…
ほんと、異形としかいいようがないし……」

さらにいえば周囲にはどうみてもゾンビもどきとしかいいようのない存在も多々といる。
よくこれで私、正気を保っていられるなぁ～…
どこか自分が自分でないようなそんな感覚を抱きつつも、
おもわずぽそっとそんなことをつぶやいている美希。

そんなケレス、アテナ、そして美希の様子をちらりとみてとりつつも、

「まさか直接、【欠片】で出向いてくるとは……。
でもあなたのような大物がどうして
わざわざこんな辺境の何もない小さな惑星に何か用事ですか？」

おそらくソレがその気になれば間違いなく、大姉様の元…すなわち、この太陽系を構成している要ともいえる恒星から先にせめるであろう。

しかし、【欠片】は直接、ここ第三惑星にとやってきた。

なぜかはわからない。

しかし知識として知っていたが、他の家族、すなわち同じ惑星達ほど脅威を感じない。

本来ならば目の前にいる存在はそれだけの力をもっている。

それはわかっている。

しかし実際にそれが【欠片】そのものである、と理解してもどうしてかディアの中には脅威、

といった感情はまったくもって産まれない。

むしろどこか冷静にそれを分析している自分に多少驚いていたりする。

そんなディアの反応に少しばかり興味を抱いたのか、

「…？ただの人では……ん？この気配…なるほど。そういうことか。めずらしいな。惑星の意思が人の姿をとって具現化している、とは」

ディアの気配のそれは周囲のそれと全く同じ。

それがわからない【超空洞（ヴォイド）】ではない。

しかし、この感覚は何なんだろうか。

惑星の気配とは異なる、何か。

確かに目の前にいる人間の少女の形をしたソレから感じる。

しかしそれが何かはわからない。

惑星の意思が具現化。

その言葉を聞きその場にて思わず意味を計りかねて一瞬固まっているアテナ。

ケレスに至ってはいまだに現実逃避中であるがゆえに
そんな【超空洞（ヴォイド）】の言葉は聞こえていない。

「それはそちらとて同じでしょう？わざわざ何でそんな黒き球体？
その気になればどんな姿すらあなたは可能でしょうに」

なぜか判る。
なぜかはわからない。
無は有であり、有は無である。
基本無である超空洞は何もないがゆえに何にでもなれる。
もともと形、というものは存在しない。
その意思一つでどのような姿にもなりえるもの。

――そうして今の【世界】は出来上がっていったのだから……

ふとディアの心にそんな言葉が浮かんでくる。
その意味はディアにはわからない。
しかし、ふとそれは全ての始まりであり、きっかけでもあった。
ということだけはなぜだか理解できる。
本当になぜだが。

「それは我がききたいことだな。この惑星の意思たる存在よ。
わざわざ人の姿を模してまで何をなそうとしている？
命あふれる地であるこの惑星における意識体にしては汝の力は
普通より強いぞ？」

そう。
今までみてきたどこの存在よりも、目の前の【意識体】の力は格段
に違う。
おそらく、当人は判っているのかいないのか。

この【場】を構成している【主系列星】にあたる【あれ】よりも力は確実に…上。
普通はありえない。
構成している主たる星よりもその意識体の力が上、というのは。
なぜかそう感じるのは【超空洞(ヴォイド)】の気のせいか、はたまたそれが本質なのか。
それとも、この惑星における違和感がそのように感じさせるのか。

何やら知り合いのような会話をしている目の前のベアードもどきとディア。
そんな二人の姿を交互にみつつ、
「？あの？ディアさん？お知り合いですか？」
とりあえず無難な質問を投げかけている美希。

「あ～。まあ、私のようなものは必ず知っている輩ですし。アレは」

どうやら惑星の意思たる存在達の間では有名な存在であるらしい。
ディアの言い回しにそういう存在なんだ、とどこか違う部分で納得してしまう美希。
あるいみこの世界にきて在る程度感覚がマヒしてきている、といってもいいのかもしれない。
しかしそのマヒしている、という自覚が美希にはない。
それはいいことなのか、悪いことなのか、それは誰にもわからない。

美希における雰囲気とディアにおける雰囲気はどことなく似通っている。
だからこそ気づかない。
【超空洞(ヴォイド)】ともあろう存在が。
目の前に探し求める存在がいる、というのにもかかわらず、である。
【超空洞(ヴォイド)】もその意識をディアに向けているがゆえに気づかない。

もしこの場にて気づいていれば確実に行動を起こしている。

「……なるほど。そういうことか」

「つまり、我らが主はキサマに封じられた、とおもっても過言ではないようだな？

よもや【意思】がここにこうしている、とはな。あるいみ好機！！」

意思を葬れば自分達が惑星そのものを把握することも可能。

彼らはそのようにどこか勘違いをしていたりする。

確かに、彼らの目的は補佐官であり、そして各界の王ではあった。

しかし、しかしである。

自分達が存在する惑星の意思たる存在がそこにいれば話しは別。

【意思】になり変ることができれば、すなわち世界を掌握することも夢ではない。

むしろそのほうが手っとり早い。

【意思】の思いは世界の流れ。

【意思】の決めごとは世界の理。

何ものも【意思】の決めることには逆らえない。

それはその【惑星内】における全ての【理】に通用する。

ヴォイドとディアの会話をききつつ、目の前の人間の少女が一体【何】なのか理解し、

その口調に歓喜すらうかばせてそれぞれにいってくる【マルマラ】と【フレイン】。

しかし、二大勢力の幹部でもある彼らは気づかない。

【意思】とは惑星そのものであり、

ゆえに【意思】の消滅は惑星の消滅そのもの、である、ということ

に。
いつの時代もその知識を完全に理解していない輩は存在する。
そう、今の彼らのように……

「あ～。アテナ？とりあえずケレスを守っておいて？とりあえず結界だけは張っておくから」
「え？あ、は、はいっ！！」

硬直している最中、いきなり話しかけられ思わず直立不動で姿勢を正す。

補佐官ティアマトのことをたしかに目の前の黒き塊は【惑星の意思の具現化】と呼んでいた。
…それはすなわち、
惑星の意思をうけて王が行動していた、という仮説は奇麗さっぱりと否定されたも同意語。
そしてそれが示すこと、すなわち。
…前々からある存在達の間にてささやかれていた噂。
すなわち、補佐官は王と同一なのではないか…というその噂。
たしか、魔界においても同じようなことがいわれていた。
…つまり、それが意味することは…？
アテナの思考はかなり混乱ぎみ。

しかし、何よりも尊敬してやまない補佐官の言葉に従わないわけにはいかない。
今は自分の混乱する思考よりも命じられた職務をこなすのみ。
ゆえにそれらの疑念をどうにか振り払いつつ、

「補佐官様の命ですので。私はあなたの守護にまわります。ケレス

さん」
「・・はぃ？」
先ほどまで現実逃避に陥っていたケレスには今の事情がまったくもって飲み込めない。
しかしそれはあるいみ幸せとしかいいようがない。
何しろ目の前でおこっている事情は世界に通用している常識を全てひっくり返す出来事、なのだから……

光と闇の楔　～【ヴォイド】との邂逅～（後書き）

ようやく美希にしろ、主人公ディアにしろその本質がちらほらとｖラストまであと少し！
気がむきましたらラストまでお付き合いいただけましたら幸いです。

Ｐｓ：ユニーク総合が五千を超えましたｖありがとうございますｖ

光と闇の楔　～意思と次代とヴォイドの真実～（前書き）

ついにラスボス!?登場です!
前回でおそらくディアが本当は【何】なのか気づいた人は多いでしょうね。
というか、あ～、やはり薫だな～。とあるいみ納得された人もいるかと（苦笑
さて、ディアが意味ありげにいっていた子猫のみゅ～ちゃん。
あのかわいい子猫にも当然設定はありますよ?ふふふv
今回は主に美希と子猫とディア達の周囲…になる…かな?
とりあえず打ち込みしてみないとどこまでが２０ｋなのか皆目不明・・・
しかし、ここまできたら、あれ?もしかしてこの設定の参考にされたのって…
とおそらく気づいている人もまた多々といるかと。
基本的に私の場合はあの設定というか昔から特有の設定で脳内ストーリー創ってますし。
小さいころから…
なので某ゲームや某小説などはおもいっきり壺です!
自身の空想に近いものが実際に出た（発売された）時の感激は何ともいえませんよっ!（力説

光と闇の楔　～意思と次代とヴォイドの真実～

ヴォイドの欠片が動いた。
どうやらこのたびはいくつかの場所にて同時にその力を具現化させて実体化しているらしい。

「どうなさいますか？王」

管理するはこの超銀河の安定と発展。
滅びも誕生も全てはその心一つ次第。

「…私もこの身をいくつかに分けて実体化いたしましょう。
……そこに、私の【娘】となるかの存在がいるかもしれませんしね」

この【超銀河系】においては全てが自分の意識の下にある。
逆をいえば銀河全てに自らの力…すなわち無意識は行き渡っている。
無意識の自我の欠片をそれぞれの場所にて形にするなどいともたやすい。
いくら、今現在、
新たな誕生を促すほどの力が涸渇しかけているとはいえ、それくらいの力はまだのこっている。

「御意。ではそのようにそれぞれの銀河の代表者には伝えておきます」

全てを一人で抱え込むのはとても大変であるということはよくわかっている。

だからこそ、この【場】はまず始めにそれぞれ補佐するものを生み出すことにした。
まず王である【マァト】が誕生し、その王を補佐する存在が誕生し、そしてそれぞれの小さな銀河系などを治める別の小マァト達がそれぞれに誕生していった。
今の自分の代でたしかすでにもう二百五十七代目の【マァト】にあたる。
永きにわたりずっと一人で世界を支える、というのはどうしてもいつかその力と精神に苦痛がくる。
だからこそ、
ある程度力が涸渇し始めた時期に新たな【次代】を選ぶ道を誕生時に選んでいるこの【場】。
全ては母なる意思のもと、自分達はそんな母なる意思の一部にすぎない。
それでも、大切な存在を守りたい、と思う心はまやかしのものではない。
まやかしなどといった単純なものでは世界を見守りつづけることなどできはしない。

「後継者もそこにいたらいいけど……」

気配が酷似しているがゆえに、直接視なければ皆目不明。
それが次代の器と自らの共通点、というのは自分がこの【マァト】を継いだときに理解している。
彼女はこの世界というかこの【銀河】をどのように導いてゆくのか。
それはわからない。
もしかしたらこのまま発展させずに死滅へとむかわせるかもしれない。
しかしそれは、次代に選ばれた魂が選ぶことであり、自分には何の権限もない。

どちらにしてもこのままでは自らの力がつきてしまい、
この【世界】の発展も維持も難しくなってくる。
維持ができなくなる。
すなわち、バランスが完全に狂い
世界を構成していた力は崩壊し全ての銀河はその形をとどめることができなくなってゆく。
そしてまた、全ての【星】については生命をはぐくむ力すらなくなってゆく。
そして全ては中心の力にと飲み込まれ、最後に残るは静寂なる空間のみ。
その後、新しい空間…無から有なるのか、それともそのまま無の空間のままになるのか。
それはわからない。
全ては母なる意思のままに。
小さくつぶやきつつも、声のみがきこえていた空間よりゆらり、と一つの人影が出現する。
その人影はそのまま、周囲に溶け込むようにそのまま溶け消えてゆく。
目指すは、幾多も発生している欠片達の元。

彼女は知らない。
そこで出会う【存在】達のことを。
そしてまた、そこは全ての終わりであり、始まりである、ということを……

光と闇の楔　～意思と次代とヴォイドの真実～

周囲の光景は先ほどのまま。
しかし、何かが違う。
強いていうなれば、今まで感じていた風、とでもいうのであろうか。
大地の匂いは確かにここにあるのに、感じるはずの【風】がない。

「…あ、あの？アテナ先生？一体何がどうなって……？」

なぜかはわからないが、周囲にいるどうみても【死体】としかいいようのない存在達。
おそらくは、死した体が【念】に乗っ取られ、【堕ちた存在】として操られているのであろう。
伊達にこれまでギルド協会学校でいろいろと学んでいたわけではない。
ましてやアスタロトの授業において、【念】の本当の正体とその発生の仕方。
それは嫌、というほどに叩き込まれた。
何しろ自らの中から…正確にいえば自分以外には誰もいないはずの空間にて、
しかも自分が心の奥底で恐れている存在、その姿を模したゾルディが目の前に発生すればなおさらに。
おそらく他の生徒達も同じような目にあったのであろう。
あれ以後、生徒達による【ゾルディ】や【ロア】といった疑問というか畏怖は感じられなくなったような気がする。
…まあ、方法がとことん追い詰めて死ぬか生きるか、という状況下に置いたのち、
それぞれの心の感情を爆発させてそれらを生み出す、という荒療治ともいえる授業であった、

という感は誰しもがうなづくところ。
アスタロトいわく、きちんとした知識をもっていないのは、無知と同等であり、
知識があってこそ対処できるものがある、とのこと。
たしかにその通り。
その通りなのだが…
しかし、ならば今のこの現状はいったいぜんたいどういう理屈になるのだろうか。
だからこそ問いかける。
そっと手を伸ばしてみれば、そこに視えないが【壁】らしきものが存在しており、
どうやら自分達は【外】…すなわち、ディアや美希とは隔てられているらしい。
おそらく説明できるのは目の前にいる戦女神でもあるアテナだけであろう。
視界にはいる真っ黒いよくわからない、しかもどうやらアレでも意思があるらしく、
うねうねとうごめきつつも何やらディア達と会話しているらしき声らしきものが聴こえてくる。
しかしその会話の意味はまったくもってケレスには理解不能。
そもそも、惑星だの、意思だのといった言葉に何の意味がある、というのであろうか。
ついでにいえば、ぞわわわ、と鳥肌がたつ、としかいいようのない異形の存在達。
どういう理屈なのかはわからないが、
【声】を発している人類にとっては嫌われ者といっても過言でないとある生物。
それの巨大化版。
なぜ二本の後ろ脚らしきもの肢らしきものでその半身をうかびあがらせつつも、

その棘にみちた口もとをもごもごとうごかして【言葉】をディアにむけて放っているのか。

アレはとにかく、ゾルディの一種、と思い込むことでどうにかその嫌悪感を抑えつつも、
動揺をどうにか押し殺しつつもアテナにといかけるケレス。
そんなケレスに対し、

「すいません。ケレスさん。…私にもどう説明していいのかわかりません。
しかし、これだけはいえます。…あの黒き塊は尋常でない力を持ち合わせています」

自分ではまったくもって手も足もでない。
それはもう直感として理解できる。
みているだけで竦んでしまうような【何か】があの黒き塊にはある。
そもそも、【超空洞（ヴォイド）】の欠片、とはいったいどういう意味なのか。
説明を求められてもどういう反応をすればいいのかがわからない。
そもそも、アテナの脳内もいまだに混乱ぎみ。
以前にこのような経験をしたような覚えがある。
それがいつだったのかはわからない。
しかし、なぜだろうか？
以前にも、補佐官と王が同一であり、魔界の王と天界の王が同一かもしれない。
その疑念が持ち上がり、気がついたときにはその疑念はいつのまにか考えることすらなくなっていた。
今思いだしてもそれはおかしい、としかいいようがない。
まるで何かの【意思】が働いたかのように。
しかし、あの黒き塊がいっていたように、
【補佐官】と【惑星の意思】が同一、というのならば全てが理解で

きる。
【王】がどちらの界、すなわち魔界においても天界においてもまずその姿をみたものが補佐官しかいない。
というその不可解なる事実。
一説にはその姿をみただけで【王】のもつ力に耐えられずに存在そのもの、魂そのものが押しつぶされ、
下手をすれば消滅してしまうほどの力をもっているからであろう。
そのように考えられていた。
またおそらくそれが真実であるがゆえに、補佐官が王の言葉を代行し全てを取り仕切っていたのであろう。
それが二つの界における常識ともなっていた。
補佐官と惑星の意思が同一であるというならば、
まちがいなく、王とも同一である、ということに他ならない。
惑星の意思とはすなわち、自分達が存在しうる大地そのものを指し示す。

大地があるからこそ様々な界は存在する。
一応、世界が【球体】である、ということは
主要たる役職についている神々、そして魔王達は説明をうけている。
正確にいうならば、
【世界】の【外】より自らの住まう惑星を【魂の奥底の記憶】に【視】せられている。
魂の奥底に眠っているその記憶は普通は表にでることなく普通は過ごす。
それこそ【王】の何らかの【意思力】が働かない限りはほとんどのものはその事実にすら気がつかない。

惑星の意思である補佐官と、そしてあの黒き塊。
その関係はアテナにもわからない。
まあ、二大勢力の幹部である【フレイン】と【マルマラ】は【意思】

には絶対にかなうはずがないが。
そもそも、彼らがその場にいる、ということ自体が【意思】に【認められている】からであり、
【意思】が認めない【存在】はそもそも存在することすら許されない。
それは絶対ともいえる【理】。

アテナは知るよしもないが、全ての【惑星】においていえる絶対的な【掟】であり【真理】。
アテナのそんな心の動揺を知るよしもなく、

「強い力…って、ディア達が危険なんじゃぁ!?
　というかなんであの異形のものたちすらディア達のほうを取り囲んでいるんですか!?」

自分達のほうには目もくれていない。
自分ならばまだ火の精霊王の加護のもと、火の力を扱うこともできるがゆえに、
ゆえに火の精霊王の力をかりて【浄化の炎】を操ることも可能。
もっとも、力を行使している間、その詠唱を止められればそこまでだが。

「それは…ともかく。私がするべきことは。ケレスさん。あなたを守ることですから」

どうして美希をも守るように、といわなかったのかはきにかかる。
しかし、ディアと名乗っている補佐官が美希のことを【様】づけしていることからして、
おそらくかの少女も普通の存在ではない、とうすうすは察している。
この場で普通の【人】でしかないのはまちがいなくケレスただ一人。

美希が常に傍においている子猫も気にはかかるが、あの子猫もかなり不思議な存在としかいいようがない。
そもそも、その姿はそのまま子猫でしかないのに、ここにきてしばらくたつというのに、
まったく成長する気配の欠片すらみせないのはどういうわけか。
すなわち、いまだに三か月程度の子猫の姿のままで今現在に至っている。
普通、子猫は六カ月で成猫とほぼ同じ大きさにと成長する。
しかし、かの子猫は美希を保護したときと同じ容姿のまま今現在に至っている。
美希は不思議とそれに対して違和感などを感じていないようだが、それは気づいていないのか、はたまた完全にそのことにたいして疑念を抱く暇すらないのか。
おそらくそのどちらか、なのであろう。
…普通ならば、成長しない、というのにいささか疑問を抱くのが普通。
そう、普通なら。
よもや、美希のいた【場所】では【世界】の力が歪み、成長が遅れる存在が多々と増殖していた。
などと知らないアテナからしてみればそれこそ理解不能。
まだ、神族や魔族、そして竜族といった長命族ならばその成長の遅さも理解はできる。
しかし、別の世界からの来訪者。
その事実しか知らないアテナからしてみれば、美希もそして子猫のみゅ～もまさに範囲外、
としかいいようのない、自分の常識が通用しない相手でもある。

ケレスの問いに正確に答えるすべを持ち合わせないアテナからしてみれば精いっぱいの返答。

「だから、何でわたし…」

どうして自分だけがこうして別の場所にあるいみ隔離されているような形になっているのか。
いや、隔離、という言葉は正しくはないかもしれない。
たしかに壁のようなものは手を伸ばせばたしかに感じる。
しかし、その向こうにある光景も声もたしかに聞こえてきてはいる。
動けばその壁も同様に自分についてきているのがわかる。
すなわち、これはそういうこと。
自分を中心にしてこの【視えない空気の壁】は存在している。
創ったのは、目の前のアテナか、それとも、信じられないが言霊使いの能力によってディアが生み出したものか。
ケレスがさらに問い詰めようしたその刹那。

ドッン！！！

周囲を震わすばかりの轟音が辺り一帯にと響き渡ってゆく……

「「…あれは……」」

そこに今までいなかった人影を視てとり思わず同時につぶやいているアテナとケレス。
自分達に何もできないのが歯がゆい。
正確にいえばアテナは自分がうごいたとしても、ティアマトの足手まといでしかない、と理解している。
ケレスは動きたいのに自らの周囲を取り囲んでいる視えない壁のせいなのか、
呪文…正確にいうならば契約の言葉を紡ぎだしても炎の一つも具現化しない。
それもそのはず。

この場は【第三の意思】によって産みだされている特殊な空間。
【彼女】の…【意思】の許可がなければどのような力も扱うことなどできはしない。
というか、先ほどまでそこにいたはずの【ディア】の姿が見当たらない。
否、見当たらないのではない。
姿が異なっている。

「ここ、でないと私もこの姿になれませんしね」

気がついたのは、次代の誕生の余波をうけたとき。
自らの内にとある何か。
自らの深層意識の中に潜っていき、この【力】にと気がついた。
あきらかに、大姉様達よりも強い巨大な力。
どうしてたかが第三惑星でしかない自分にこれだけの力があるのか。
おそらくは、今の第三惑星、という意思になる前の自らの【在り方】に関係しているのかもしれない。
しかし、どこか怖かった。
この力が知られれば、自分は【家族】から違う思考でみられるのでは。
という思いがどこかにあった。
だからこそこの姿は常に自らの【内部】でのみ扱うことにした。
いつもの【器】の姿では、目の前の【欠片】に簡単に敗北してしまうであろう。
それだけは避けなければならない。
自分の愛し子達を危険な目にあわせるわけには断じていかない。
さらり、と伸びている銀色の髪。
そしてどこまでも吸い込まれそうなほどの漆黒の瞳。
そう、一言で言い表すならば紛れもなく漆黒としかいいようがない。
人の姿ならば必ずある瞳孔や角膜、というモノは一切存在しない、

ただそこにあるのは漆黒の瞳のみ。
漆黒のその瞳はどこまでも吸い込まれそうであり、光がないはずなのにどこか光を宿している。
服装はどこかゆったりとした淡い光を放つ布のようなものでできた継ぎ目のない一枚の布。
としかいいようのないもの。
そこにいるだけで、全てを包み込み、
また消滅できるのではないか、というほどの圧倒的な存在感がそこにある。

「…ディアさん、その姿は……」

知らないはずなのに、だけども、知っている。
そう、この姿はまさに……
ふっと脳裏に浮かぶその情報。
ゆえに驚愕を隠しきれない美希。
どうして自分はそのような情報を知っているのか。
過去のことは何もしらない自分。
それはまだ幼かったからだ、とおもっていた。
だが…それは、本当に?
ディアとすればこの姿がどういった意味をもつのかよくわかっていない。
正確にいうならば思いだそうとしても思いだせない。
一つだけいえるのは、自らの意思でその情報に枷がかかっている、というその事実のみ。
おそらく今の惑星の意思になるにあたり、そのときに枷をかけたのであろう。
それくらいのことは予測がつく。

「?私のこの姿の真を知っているのですか?…まあ、美希様なら知

ってもおかしくはないですけど」

おそらく、次代に選ばれた時点、正確にいうならばその次代となることを了解したそのときに、基本的な知識はすでに【次代の器たる魂】そのものに刷り込まれているはずである。

それが自らが抱擁することになるであろう【世界】のことならばなおさらに。

「…様…づけ？…ふ…ふはははははっっっっっっっっっ！！！」

惑星の意思が敬称をつけて呼ぶ相手というのはごくごく限られているはず。

ましてやこのような【力】を行使できる存在が敬う相手といえばおのずと限られてくる。

だからこそ笑わずにはいられない。

「そうか…そういうことか！何の力もないたかが人間の姿となっていたとは！

さがしたぞ！次代の器よっ！」

いきなり狂ったように笑いだし、目の前にいる美希に対して忽然と言い放つ、

【超空洞（ヴォイド）】の【欠片】と呼ばれしもの。

そんな彼らの会話にまったくもってついていかれない【フレイン】と【マルマラ】。

そもそも、こうして自分達が存在としての自我を保っているのすら限界としかいいようがない。

それほどまでな圧倒的な【力】が確かに目の前の【意思】たる存在

からは発せられている。
自分達がどれほどまでに小さい輩なのか思い知らされてしまうほどの圧倒的な存在感。
それがたしかにそこにある。
自分達程度の小さな自我や意識ではその【意思】の【器】を乗っ取ることはまず不可能。
そう、としかいいようがない。
しかし、だからといってあきらめるわけにはいかない。
すでにもう事は動き始めているのである。
自分達の長が捕えられてしまった以上、功績をあげたものが次なる長となる。
一番いいのは頭領達をたすけだすことではあるが、おそらく助けだしても以前の彼らではないであろう。
ゆえに、だされた結論は、助けだすことも視野にはいれてはいるが、次なる組織の頭領となるべき存在。
幹部会議において、一番功績をあげられた存在が次なる頭領になる、という話し合いはついている。
だからこそ諦められない。
否、諦めるわけにはいかない。
こうして行動を起こした以上、自分達にまっているのは幽閉か、もしくは消滅か。
おそらくはそのどちらか、であろうことがわかっているがゆえにあきらめられない。

「とりあえず、次代様に傷をつけさすわけにはいきませんし。
もっとも、ここではたとえあなたといえども力をふるうことは不可能に近いですよ？
ここではおそらく、あなたの本体との接触も断たれているはずですし」

そう。
それだけは確信していえる。
ここは彼女の許可がない限り、外部との連絡は一切断たれている場所。
よくて敵意のないものならばここに迷い込んでくることはおそらく可能であろう。
しかしこの場に満ちている【力】に耐えられれば、という注釈がつく。
おそらく、いくら神であるアテナとはいえディアの張った結界がなければこの空間の【力】には耐えられない。
そのまま力に呑みこまれるか、よくて気絶するか、そのどちらか、であろう。

「…そのよう、だな。本当に何ものだ？きさまは……
もっとも、このような小さな惑星の意思になり下がっているのはおそらくキサマの意思によるものだろう。
元々そこまでの力がありながら、なにゆえにこのような小さな意思にとなりさがる？
おそらく、予測するに、キサマはどこかの銀河のマァトかそれに準ずる意思といったところか？」

それだけでは自分の力すらをも抑え込むこの力の理由にならないような気がするが。
しかし、彼とて全ての【マァト】達を知っているわけではない。
むしろ今自分が意思として存在しているこの超銀河空間。
ここよりも大きな空間はおそらく多々とあるであろうことは容易によそくはつく。
もしもそこの【マァト】が転生してきているのならばこの力にも納得がゆく。
次代のマァトとなるべき器と、かつておそらくはどこかのマァトで

あったであろう意思。
これほどまでの希有としかいいようのない存在がそろっているなど普通はありえない。
そう、普通なら。
たしかに目の前のディア、と呼ばれていた少女の言うとおり、意識を本体である【超空洞（ヴォイド）】全体にむけてみても読み取れない。
完全に欠片である自分と本体は切り離されている。
つまりは目の前のこの【惑星の意思】は、自らの本体に匹敵する力をも持ち合わせているという可能性も捨てきれない。

「さあ？私も前が【何】であったのか知りませんし。
というか私たちのような存在は前のことは覚えていません。
それは制約によって決まっていること。それくらいはあなたとてご存じでしょう？
【超空洞（ヴォイド）】の欠片よ。…いえ、元【クェーサー】といったほうがいいですか？」

ホワイトホールとブラックホールの元ともいえる存在。
そしてそれらの元意思が形をかえて超空洞（ヴォイド）となっている。
それがこの【場】における【超空洞（ヴォイド）】の真実。
この空間に引っ張り込んだ時点で相手の情報は全て把握済み。
なぜかこの空間に入ってきた存在に関しては全てを知りうることが【第三の意思】には可能。
そして、その法則は当然、なぜかはわからないが次代の器である美希にもあてはめられている。
もっとも、どうやらその制約が緩み突発的に何かを思い出す存在も多少はいるようではあるが。
そう、今目の前にいる超空洞（ヴォイド）のように。
そのことに多少戸惑いつつも、それを口にすることなく、淡々と目

の前の黒き塊に言い放つディア。
すでにその容姿はかつて、ディア、となのっていた少女のものではない。
あまり違和感を感じさせては、というのでディアがとっていた年相応の姿を一応形どっている。

「…クェーサー？原初の宇宙の初期に誕生する、というあの…？」

知識としてなぜはわかる。
しかし、ならばつじつまがあう。
ここに入ってきたと同時に自らの中に流れ込んできた様々な知識。
どうしてそのような知識が流れ込んできたのかはわからない。
正確にいうならば思いだした、としかいいようがない。
突如として自らの魂の奥底から様々な情報が心の中にと流れ込んできた。
だからこそ戸惑いつつつもつぶやかずにはいられない美希。

そして…その、彼の元となった魂。それは……

「……さみしかった、んですね」

ぽつり。
誰ともなくそうつぶやく。

「なっ！何をきさま！」
いきなり場違いなことをいわれ思わず叫ぶ【欠片】はおそらく間違ってはいないであろう。
よもやそのようなことを言われるなどいったい誰が予測できようか。

「戸惑い、恐れ。それらが形になってしまった原初の心。

その心は無から有へとなり、そして今のあなたがある。
……あなたが本当に望んでいるのは、世界の終焉？それとも……
ともにあること？」
悲しい、さみしい。
誰か傍にいて。
自分が何なのか、このままいてもいいのか。

……本当に自分が【世界】を創りだすことができるのか。
――　それは、初代の心が生み出した影ともいえる存在。

そして、初代とは、この空間そのものである意思そのもの。
意思は自らをゆだねられる器を選び、そしてゆだねた。
母なる意思の許可のもとに。
選ばれし器は全てを受け入れた。
母なる慈愛の心を持って。
全ては愛する【世界】のために。
ゆっくりとわれ知らず黒き塊のほうへと歩み始める美希。
本来ならば止めるべきなのであろう。
しかし、ディアは判っている。
この行為は止めるべきではない。
第三の意思としては止めるべきなのであろう。
それは十分に理解している。
相手はまぎれもない、世界を虚無に導こうとしている【超空洞（ヴォイド）】の欠片。
そして、美希はこの世界の新たなる器となりえる存在。
器、とは【王】であり、【王】はゆえに【マァト】とも呼び称される。

「…アージェントの心によって安定していた貴方の【心】。
だけどあなたはまだ癒されていないの？ヘデンヘルグ……

…新しい【生】を受け入れることなくあなたは今まだここにいる」

ヴォイドの心は確かに【マァト】によって浄化されてはいる。
しかし、無へと導く心は簡単に消え去るものではない。
その心は別の心を呼寄せあらたなヴォイドの意思となる。
…そうして、二百五十七代にわたり、この連鎖は繰り返されてきた。
今、ヴォイドの意思を構成しているのは、
かつて【ヘデンヘルグ】と呼ばれし存在の孤独なる心。
【マァト】の内部により、常に繰り広げられてきている別の連鎖。
全てを浄化できうれば一番いいのだが、それだけ守るべき【世界】は広く、
心も多種多様。
だからこそ、いくら【マァト】の深き心においても全てを浄化しきることなどはできはしない。
一つ浄化を遂げてもどこかで別の【強き念】は誕生してしまう。

流れてくる知識から感じるのは彼の孤独なる心。
なぜか彼の本来の意思たる名前も知識として流れ込んできた。
だから、いいたい。
あなたは一人ではないよ?
と。
どうしてそう思うのかわからない。
だけども孤独のさみしさは美希とてよくわかっている。
だからいいたい。
彼に…あなたは、一人ではないのだ、と。

――…だからこそ、ディアはこの惑星上においてこのような仕組みを作り上げた。
念そのものに【器】を与え、惑星内で産みだされる【念】の処理だ

けでも施そう、と。

ただそこに在るだけで感じ取れるこの場にいる全ての存在の心。
ここが【内部の空間】であるがゆえにそれは当然、といえば当然なのかもしれない。
しかし、美希の心まで流れ込んでくる、という現象が今いちディアにはよくわからない。
…しかし、それが当たり前、とおもう自分もいる。
いろいろと考えることは多々とあれど、今は何よりも、美希の動向に注目せざるを得ない。
…もしも、相手が拒否を示し攻撃をしかけるようならばこちらからも行動せざるを得ないであろう。
少なくとも、相手を【拘束】するくらいは許されるはずである。

――…それはおそらく、【試練】の邪魔にはあたらないはず。

「…よ…よせ！ちかづく…なっ！」

攻撃をしかけようにもなぜか力が発揮されない。
ありえない。
というか力を繰り出そうにもどこかでそれを止めている自分の心に驚愕せざるを得ない。
やがてゆっくりと、美希が黒き塊である超空洞（ヴォイド）の元におもむき、そっと無意識のうちにそれを抱きしめる。
もっとも、抱きしめる、といっても当然、美希が両手を広げてもヴォイドの欠片ともいえるそれがとっている黒き球体のほうがはるかに大きい。
それでも美希はどうしても伝えたい。

――　あなたは、一人ではないのだ、と。

――　時は満ち足りた。

「みゅ～～～～！！」

刹那。

場違い、ともいえる子猫の甲高い声が空間全体にと響き渡ってゆく

……

光と闇の楔　～意思と次代とヴォイドの真実～（後書き）

ラストのラストでみゅ～ちゃんの本質があらわに！
というか、今回、おもいっきり美希と【ディア】の正体に主にほとんど触れてたり？
ちなみに、そろそろ名前が連なってきたことで予測出来ている人は多々といるかとv
いうまでもなく、ヘデンベルグ輝石が元ですよv
というわけで、
これに関してでてくる名前シリーズは主に鉱石というか鉱物シリーズですv
それと混合して小惑星シリーズ、となっておりますv
今までこれに気付いた人は何人ですかね？
まあ、名前シリーズは私のあるいみオハコ？ですしねぇ
このお話は珍しく、混合シリーズとして名前を組み合わせてみました

なんか空気になってるケレスとアテナ（自覚あり
さてさて、次回で現マァトの登場です

光と闇の楔　～【マァト】の覚醒～（前書き）

キリがいいところで、とおもったら今回はひさかたぶりに１８Ｋさん。
ようやく今回にて美希の覚醒＆引き継ぎですわ。
…んでもって、ディアの本質をもちらほらとだしてみたり（マテあとのこりわずか！
…これの番外は多々とあるけどどうするかは今だに自分の中では不明、です…
今は別な話しで脳内が埋め尽くされ始めてるからなぁ……
ともあれ、今回もゆくのですｖ

光と闇の楔　～【マァト】の覚醒～

まどろみ垣間見るのは全ての光景。
自らの夢は形となり現実となる。
しかし全ては幻であり、だけどもそれは真である。
夢幻の世界なり、とは誰が紡いだ言葉だったのか。
おそらくは【自ら】の心を無意識に感じ取ったのかもしれない。
ゆえに我はまどろむ。
全てを垣間見ながら――
それが我であり、我が我である所以であり、自らが確かに在る、という証でもあるゆえに――

あ～…何だか変な夢をみた。
そもそも、夢をみる意思体ってなんなんだろう？
つくづく思う。
…大姉様達はそのようなことはない、といっていた。
この間、自らの内に不可思議な力を見つけて以後、よくみるこの手の夢。
まあ、所詮は夢。
きっとおそらく、今の今まで地上に紛れ様々な生物になったりして遊んでいたせいだろう。
そう自分自身にと言い聞かせる。
しかし、それより今、問題なのは……
「……この世界、どうしよ…？」
とりあえずこのままでは生命という生命体は死滅してしまう。
今とにかく頑張っている生命体だけは維持しなければならないとつくづく思う。

というか、すこしばかりまどろんでいる最中に二度も隕石衝突ってどういうこと!?
という思いはどうしても捨てきれない。
外による歪みの訂正と内部の訂正。
…それでも、どうにか生命体がのこっているのはどうやらこの惑星のみになってしまっているらしい。
…というか、他の姉様達、耐えきれなかったんだ……
まあ、連続して歪みなども発生しまくってたしなぁ……
そうはおもうが、今はともかく自らのことが重要。
「……あの小さな種族達だけでも繁栄させるように仕向けないとこりゃ、まずい、かな?」
しかしかの種族はいずれは人類、ともよべる種族にまで再び発展してゆくであろう。
もしもそれらが再び過ちを犯したとき自分はどうすべきなのか。
それはわからない。
そもそも、大地を闊歩している巨大なる生物達もまたかの人類による手がくわわったがためである。
彼らからしてみればよかれ、とおもってしたことが全ては彼らの破滅を導いた。
そしてそんな彼らもまた二度の隕石の衝突によって一部を残して死に絶えた。
かろうじて残っている存在達はその自らもてる力の全てをもってしてどうにか【結界】の中にと閉じこもった。
いずれ世界が安定してゆけば彼らは結界の中より再びでてくるであろう。
「ま、とりあえず。あの子たちの進化を見守るとしますか♪」
進化の過程をみているのはとても楽しい。
自分が少し意思をむけて道を示すだけで様々な方向性へと地上はむかってゆく。
…在る程度命が再びあふれたら、他の姉様のところにも【魂】達を

移動させる、という手もありよね。
何しろ他の姉様のところは魂ごと消滅している場所も多々とあるっぽい。
…外に意識をむけていたがゆえに、内部のことにまで手がまわらなかったとかいっていたが。
…普通、外に意識をむけていても、内部のことも全ては平等にできるんじゃあ？
……もしかして、私だけが特別なのかな……謎……

光と闇の楔　～【マァト】の覚醒～

「…何だ？」

何、とはいわないが、しかし感じるのはいつもよりも濃い気配。

「おそらくどこかで王が実体化されたか、
もしくは補佐官様が力を扱われているか、のどちらかでしょう」

空といわず大気そのものが力に満ち溢れているのを感じる。
それは魔界においても、天界においても、そして他の界においてもいえることであり――

「……ゾルディ達が震えて固まっているってどけだけの力なんですか！？」

目の前に無数に存在していた害ある念によって誕生していた存在。

それらがその【気配】を敏感に感じ取り、その場において完全に竦んでいるのがみてとれる。
所詮、下っ端でしかないしがないあまり力のない存在がそんな上司達の声に対して思わず叫ぶ。
それはある程度は仕方がないといえば仕方がないのかもしれない。
そんな部下達の驚愕は何のその、

「前回このように力が大気全てに満ち溢れたのはいつだったかな？」
「…ぼけましたか？サタン殿？確か最近では今から五千年前ではなかったですか？
　先日の力の解放らしきものでは大気そのものまでここまで力があふれませんでしたし」

前回意図的に解放された力とはまたことなる力。
逆をいえば大気そのものが力に満ち溢れたことにより、
それらを糧ともする彼らもまた格段に力を向上させる。
所詮、神族も魔族も、そして他の界における数多の種族もまた【惑星】上における力に比例する。
つまり本来常に受けている【力】よりもさらに【濃い】力をうけることにより、
いつもよりも数倍の力を発揮することが可能。

「アスタロト。お前、人間界の臨時教師をやりだしてから容赦なくなってないか？」
「おかげさまで。伊達に補佐官様と共にいるわけではありませんよ」
「・・・・・・・・・まあ、常に傍にいたらそれは気がぬけないのは事実だろうがな……」

どうでもいいが、どうしてこの上司達はのんびりとそんな会話をしているのであろうか。

というか指示をまっている自分達にこれからどうすればいいのか、次なる指示を飛ばしてほしい。
切実に。
しかし、相手はこの魔界の実力者であり、自分達はしがない一兵士に過ぎない。
ゆえに何やら場違いともいえるそんな上司達の会話がすむのを大人しくまつしかない。
ぴりぴりと自らの力すらをも向上させるほどの濃い力。

「…これが…王の…力？」

先日のあの力とはまた異なるこの力。
あのときの力は全てのゾルディを一気に駆逐した。
しかしどうやらこのたびの【力】はどうやら【生命体】全てに力を分け与える効果があるらしい。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

いまだ産まれて間がない下っ端の魔族達はその圧倒的な力を肌にて感じ取り、
ただただその場にて固まるしか術はない。
しかしそんな情景に陥っているのは何もここ、魔界だけではない。
それは天界においても同じこと。

そしてまた……

「あれ？これって、お姉様？…というか、お母様、久しぶりに元々の姿をとられたのかな？」

自らの力が制御不能となったときにこの波動は感じたことがある。

もっとも、おそらくあの姿をしっているものはごくわずか、であろう。

「どうりで気配というかこの【力】で数多とした堕ちた輩が消滅していったのか～」

先日、突如として霊獣界の中において、堕ちた存在が多々と増え始めた。
どこから入り込んだのかわからないが、あまりよくない【念】達が霊獣界の存在達の中に入り込み、
そしてそれらは堕ちた存在として普通に暮らしている存在達にと襲いかかった。
このたび、この霊獣界の中に入り込んだ念の属性はどちらかといえば【無】としかいいようがない。
つまりは、全てを無とする強き意思により誕生した【念】と言って過言でないであろう。
しかし、いくらそれらの念が強くても、この地…すなわち、この惑星内部にいる限り、
どうしても惑星の力には引っ張られてしまう。
ましてやそれが巨大な力であれば、その意思の力とその念がもつ力とどちらが強いか。
それは比べるまでもない。

「妖精界のほうはリュカがいってるみたいだし。お姉様、本気で一気にカタをつける気、かな？」

この気配を解放した、ということはおそらくそういうことなのであろう。
いずれおそってくるといっていた【超空洞】。
次代たる存在がこの惑星上にいる限り、その衝突はいずれさけられ

ない。
知識だけは知っている。
この宇宙の成り立ちの仕組みは、伝道師達からも聞いている。
もっとも、伝道師達とて【超空洞】に意思があったり、
あげくは銀河そのものにも【意思】があったり、というのは生前しらなかったらしく、
そのことを苦笑まじりに話してもいた。
そんな当時のことがありありと思いだされる。
この気配になったときの【第三の意思】の【力】と、他惑星の【意思】の【力】。
自分の存在が力に敏感にできているがゆえに嫌でもわかる。
それでなくても、三の意思たる彼女の力の底はヴリトラでもわからない。

「ま、とりあえず、後始末が面倒なんだけどね～……」

いっそのことこのまま、霊獣界における存在全ての記憶捜査をしたほうが手っとり早いかも。
多少、あるいみ恐ろしいことを思いつつぽそりとつぶやき、

「さて。とりあえず、後始末といきますか！」

すでに突如として発生した【念】の具現化でもある【堕ちた存在】達は存在していない。
むしろ体を乗っ取られていた存在達がその場にてそのまま倒れ伏している。

「シアン！とりあえず、倒れている存在達の介抱を。
まだ意識があるものが多少いるみたいですからね。
それと、他のものは朽ちてしまった場所の浄化！」

『はっ！！』

凛としたヴリトラの言葉はその場にいる竜族達に威圧感を伝え、反射的に肯定の言葉を紡ぐ。

「武将達はそれぞれの部隊を率い、霊獣界のそれぞれの場所を確認すること。

それぞれが自らの役目を果たすことを期待する！」

いつもどこか役目放棄をしているように見えるヴリトラではあるが、いざとなればその役割をきちんと果たす。

もっとも、そのイザというとき、というのが多々とあってもまた世界はこまるのだが。

竜王シアンとてヴリトラの言葉に意義を唱えるつもりはさらさらない。

ゆえに、竜王、竜族の長として部下達にと指示を飛ばす。

しばし、獣霊界においてそんな彼らの様子がみうけられてゆく――

三者三様。

正確にいうならば、他所様々、といったところか。

様々な場所においてそれぞれがそれぞれに思うことはあるものの、感じることは皆同じ。

すなわち【世界】を構成している、といっても過言でない【聖なる力】。

その力が今現在、いくら鈍いものでもわかるほどに満ち溢れている。

そしてその力はそれぞれの存在達により強き力をもたらす感覚をももたらしている。

何がおこったのか、また何が起こっているのかを知らないものはただただ戸惑うばかり。

と。

パアアッ……

突如として全てが淡き金色の光の中にと包まれてゆく……

「ここは……」

先ほどまでいた場所とはまた異なる。

否、異なってはいない。

ただこの場にて別の力が具現化しただけのこと。

ゆらゆらと輝く銀色の空間に、新たに追加された淡く金色に光る特殊ともいえる空間。

どこか温かく、それでいてどこか冷たい。

ディアこと【第三の意思】が深層意識の中においてよく使う力の空間によく似ている。

そんな中、上下も左右もないであろう空間の中、ぽつり、と座っている小さな姿が一つ。

「みゅ～…ちゃん？…いえ、卵の欠片、といったほうがいいのかしら…？」

小さな子猫の姿は、今現在、

淡き光につつまれ、先ほどまでの子猫の姿とは雰囲気からして異なっている。

『――　…ここに来た理由がわかりました……。

しかしおそらく今はそれはいわないほうがいいのでしょうね…

…』

どこからともなく響いてくる優しい声。
しかし、ディアはこの【声】を知っている。
いつ知ったのか、というのはわからない。
わかるのは、ただ知っている、という事実のみ。

「？それはそうと、美希様は……」
『…次代の後継者は今は卵の空間の中にはいられました』

卵の空間。
それはいわゆる引き継ぎの空間、ともわいれている特殊なる空間。
それはそもそも、宇宙を守る意思と、宇宙を構成している意思が異なる場合に産まれた仕組みであり、
卵、とはまさに宇宙を構成している意思が自らの心を形にしている様を現している言葉に他ならない。

「そう…なら、ついに始まるのね。新しい歴史が……」

彼女が選ぶのは、この【世界】の存続か、はたまた【消滅】か。
それは彼女の意思が決めること。
今はただ、ディアとしてみればその決意をここにて静かに見守るより術はない。

「あ～。他の姉様達にも伝えて、
　あとは各界の責任者にも動揺しないようにそれとなく伝えとかないと」

この金色の光はこの地だけではない。
この空間だけでなく、この太陽系そのもの、否、銀河系そのもの。

正確にいうならば、【マァト】が管理している宇宙の全て。
それら全てに降り注いでいる。
この【地】が時が止まらずに普通にすごせているのは他ならない、
【三の意思】の力が強いがゆえ。
他の場所においては完全に【時】が止まり、世界は今現在、制止している状態と成り果てている。
しかし、それはディアにとってはどうでもいいことであり、またそこまで気にかけるつもりはない。
もっとも、ディアが意思の疎通を図ろうとしても、他の惑星。
すなわち、太陽を含んだ全ての惑星の意思の時間そのものも制止しているがゆえに、
ディアの言葉に対し答えることはできないのだが。
この光の中、普通に行動できているのは、ディアの意識下にいる存在に限られている。
すなわち…【第三惑星】内に存在している数多の生命体のみ……

突如として光に包まれた。
しかしこの光は違和感を感じるものではない。
むしろとても心地よく、そしてまたよく知っているはずのこの気配。

「……ようやく、あえましたね。リーナ・イノ・アルデュイナ」

ふとどこかで聞いたことのある声が聴こえ、思わず振り向く。
振り向いたその先にみえるのは、その金色の長い髪を身長よりも伸ばした優しい雰囲気をもつ女性。

「……アー…ジェン…ト…様？」

先刻、脳裏に浮かんだ、というよりは思いだした、といったほうがいいであろう。
世界を守りし聖なる存在。
世界、とは銀河そのものであり、そしてこの目の前の女性は銀河をいくつか統べる存在であり、
そしてまたそれらの銀河構成を一人の意思において支えている存在。
リーナ。
それは美希の本来の名。
今の自分を構成すべく魂の真なる名。
真名と決められたモノには必ず何かしらの制約と力がかかる。
この真名は美希にとっては存在そのものとしての名を示す。
この名であったとき、この【銀河】の意思によって新たな次代として見出された。
それをうけるかどうかは当人の意思次第。
しかし、当時、美希であったリーナはその申し出を受け入れた。
何よりも彼女の住んでいた惑星は【マァト】の力の涸渇により敏感な位置にと存在した。
日々、朽ちてゆく惑星そのものの力。
ゆっくりと力を失ってゆく太陽。
そして次なる次代の器となりうる魂が存在するまで、世界がもつか、といえば…答えはおそらく否。
次代となりうる魂は簡単に生まれるものではない。
ましてや同じ世界内で産まれる確率などなかなか難しい。
今の【マァト】であるリージェントの意思の力でどうにか世界が保てても、
次代が誕生するまでにいくつもの世界こと銀河が消滅するのは目にみえていた。
だからこそ、星が消滅の危機におちいり、その【意思の声】を聞き…その申し出を受け入れた。
そのときから、リーナは自らの名を失い、世界を視てまわるために

幾多の世界に降り立った。
全てを受け入れる覚悟。
たとえそれがどんな存在であっても受け入れられる心がマァトには必要不可欠。
その心をはぐくむために。
そして…今。
【ヴォイド】を受け入れたことにより…その条件は満たされた。
相手がいくら抵抗しようとしても、その本質にある心にはかわりがない。
そもそも、仲間を求めていること自体が自分を認めてほしい、という心の裏返し。
だからこそ、美希はヴォイドに対して問いかけた。
それはどうしていいかわからない幼子のようであり、だからこそ何もいわずに抱きしめた。
慈愛の心は全てをつつむこむ。
そしてその心こそが世界を存続させ安定させうる力となる。

「どうやら間にあったようですね。…あなたの覚悟はきまりましたか？リーナ？」

自分もかつて歩んだ道。
マァトの役目を次代に引きついだ存在はそのまま別の場所に降り立つか、
それともそのまま転生を果たすか。
そのどちらかを選ぶこととなる。
もっとも、しばらくは新米マァトとなった存在の補佐をする形となりうるのですぐに、というわけにはいかないが。

「はい。リージェント様。…お待たせしました。私は…私は皆を、世界を守りたい。

その思いは今も…昔から今まで変わっていません」

誰かがなさなければならないこと。
永き時を引き受ければ過ごすこととなる。
それもわかっている。
引き継ぎのときに世界そのものを一瞬再生させることも可能。
しかし、それはしたくない。
すわわち、再生させるということは今まで生きていた全ての存在を
一時とはいえ消し去ることに他ならない。
誕生があれば死もある。
それはこの世界における常識。
この【超銀河空間】もいずれは消滅の時を迎えるであろう。
そのとき、銀河における数多の命を存続させるか、それとも他の場
所に受け入れてもらうか。
それを決めるのはその当時の【マァト】の意思。
そして…それは、そのまま自分に当てはまる。
今代のマァトであるリージェントが短い期間でその力を使いはたし
てしまったのも、
超銀河空間の中心となる場の力が衰えてきているからに他ならない。
だからこそ、強き意思の心が必要となってくる。
強き意思の心は時と場合によってあらたな核をも生み出せる。
親が子を産み落とすがごとく。

「では……」
「はい。私、リーナ＝イノ＝アルデュイナは二百五十八代マァトに
なることをここに誓います」

右も左も上下も左右もない淡く金色に光る特殊なる空間。
この場にいるのは、金色の髪をもつ優しい表情をしている見た目二
十代程度の女性。

そしてまた、十代後半であろう少女である美希。
今、ここに制約の儀が…執り行われてゆく――

気がついたときには何もない空間に漂っていた。
否、正確にいうならばまばゆいばかりの空間に、といったほうがいいであろう。
そして…理解した。
自分の意思により、ここがどのようになってゆくか、ということを。
かつてのことなどはわからない。
ただわかるのは、自分の存在意義。
このまま全てを吸い尽くす空間となるか、はたまた命を数多と誕生させうるか。
それは自分の意思一つにてゆだねられている決定事項。
かつてこの場にあったであろう数多の生命体の意思はこの場にはいない。
この場にあるのは、ただ虚無なる空間であり、また再生の空間のみ。
このまま無を選べばこの空間は周囲の数多なる命を吸い込んで、
やがて無の空間を広げてゆくこととなるであろう。
自らよりも強き意思が自らを取り込まない限り、それはあるいみ永遠に続く枷となりうる。
だけども、自分の心はそれは嫌だ、と訴えている。
数多の命があってこそ、自らは輝けるものであり、そしてまた力をつけられる。
そしてそれは…母なる意思の願いにそったものとなる、ということが漠然と理解できる。
自分達の存在。
全ては母なる意思のたゆたう夢のごとく。

――　きゅうううっ……

だからこそ、願う。
自らの力と意思をゆだねられる存在を。
自らとともにあゆめる存在を。
…世界をその慈愛の心にて包み込める聖なる心の持ち主を。

そして…その願いは母なる意思にとどき、
この地に【マァトの卵】たる魂を誕生させるきっかけとなる。
自らだけの力ではどうしても力が及ばず小さな空間しか維持できない。
しかし、一つの力だけでなく二つの力が交われば、そしてその力が増幅し合う属性であれば、
世界はより発展してゆく。

この銀河の始まりであり、そしてまた、数多な銀河系が産まれるきっかけとなった原初たる光景。
空間の卵でもある意思はやがてその意思をそれぞれ自らの内部に分身を生み出してゆく。
それは無意識の欠片ともいえるべき存在達。
そして同じく、マァトとなりえた存在もまた、自らの無意識を世界全てにひろげてゆく。
少しのほころびも逃さぬよう。
全てが幸せであるように。
翻弄されるほどの光の濁流。
流れ込んでくる数多の記憶とその心のありかた。
少しでも油断すれば自らの意思もまたその奔流に呑みこまれそうなほどの巨大な光の塊。
小さな鼓動に心をそわし、全てに意識をむけること。
そう。
マァトとなるべく次代の試練をうけることにきめたときに現マァト

より言われた言葉。
見つけるのは元となっている卵の本体。
自らはリーナであると同時に美希でもあり、
そしてまた今まで降り立った世界において請け負った名、全てが自分であり
全ての人格もまた自分自身。
これまで様々な世界に降り立った。
その都度、自らの性格は根柢はかわらないままも周囲の状況によって多少変化はあったとおもう。
命あるもの、知識あるものの醜悪もこれまで数多と見知っている。
自分のことしかかんがえない知能あるもののもいるのも判っている。
それでも…守りたい。
大切だ、とおもえる存在達がいる世界だからこそ。
名もなき命が日々を必死に生き抜いているのをしっているからこそ。

「――　……マリティマ」

この場における、【世界】こと【超銀河】を構成しうるに当たる意思たる名。
真名をみつけそれを呼ぶことにより、その意思の卵を見つけることが可能となる。
そしてまた、意思を全てに同調させることにより、その真名を読み取らなければ継承の儀は成功しない。

この名はとある世界…否、美希がかつていた世界、そしてまたディアが意思を務めている世界。
それらの世界において、かつてはこの呼び名はとある意味をもっていた。
ドイツ語において、【海の上】…まさに全てを現している名、ともいってもいいであろう。

美希のつぶやきと同時、美希の手の平に小さな卵が舞い落ちてくる。
その卵はゆっくりと光につつまれ、やがて新たな産声をあげる。
その産声はまた新たな光の奔流となり、世界全てを包み込んでゆく
――……

光と闇の楔　～【マァト】の覚醒～（後書き）

ここまできたら、ラストのオチはみなさんおそらく予測してるかと。
おそらくみなさんのご想像通りです。
ここまで読んでくださっている方々に感謝です！
気がむきましたら最後までおつきあいくださいｖ
ではまたｖ

ｐｓ：最近なんか打ち込み気力というかパソつける気力がなくなっている薫です・・

光と闇の楔　～新たなる邂逅～（前書き）

今回の副題は、どちらかといえば、決意、というか再起？の意味合いです。
なので副題をどうしようかな？といろいろ悩んだ末に、
この話では邂逅もひとつの軸なのであえてこの言葉を選びました。
今回は、光につつまれたそれぞれの感想、というか光につつまれたもの達が感じた出来事、です。
次回からようやく本編にはいります。

※今回は短めの１８ｋｂです

自らの力の限界を感じるのはふとしたきっかけから。
それまでは抑えられていたはずの負の力が表にではじめたときから、
次代となるべき器を探すことになる。
世界を安心してまかせられる器たる魂、という存在はそうそうありえない。
しかしそれでも、純粋に全てを守り慈しみたい、という存在はいる。
この世界においてはたまたま、女性の率が高いのみで、
今まで【マァト】として即位したのは全て女性。
ゆえに、ある場所では女王陛下、とも呼ばれている。
しかし、あくまで世界を見守り、導くためだけに存在しているにすぎず、
世界を治めたりとかそういうことにはいっさい関与していない。
なので、陛下、というのは少しばかり訂正があるとおもう。
だけど、ようやく次代となる器に全てを引き継ぎおえられる。
やっと肩の荷がおりるときが近づいている。
だけども、ごめんなさい。
リーナ・イノ・アルデュイナ。
あなたにはこれから永き時を私と同じ孤独を味わいつつ世界を見守ることとなる。
マァトでなくなってしまった私の寿命は普通の精神生命体と同じく時が限られてしまう。
【マァト】となりえた存在の時間の流れは他者の時間の流れと激しくことなる。
全ては【マァト】を置いて逝ってしまう。

自分のことを覚えていない、かつての仲間達。
いくら惑星の意思達と交流を深めようとも、惑星の寿命がつきればそれはそこまで。
これから強き意思が必要となってくる。
あなたがその強き意思に自らが耐えられるようになるまで私は私なりに傍にいるつもり。
今までの私の【マァト】としての意見が、あなたの役に立ちますように――

光と闇の楔　～新たなる邂逅～

全てが幸せでありますように。
誰もが幸せでありますように。
温かな光が世界全てを包み込む。
それはこの惑星上にとどまらず、すべての銀河。
否、超銀河と呼ばれている空間そのものが、
いつもは銀色に輝いている色が淡き金色の光に包まれている。
あるものは空を振り仰ぎ、そしてあるものはその場にて膝まづく。
このような現象がおこることは一つしかありえない。
しかしその事実をしっているのもは、【世界】の構成にかかわる一部の存在達のみ。
重力に縛られていない数多の浮遊惑星における意思達もまたその歩みをとめ、
その温かな光の中に自分自身の身を一時ゆだね浄化を図る。
この光は全ての力を正常な方向にと浄化する効果をもっている。

とはいえ、それぞれの存在により、何が正常か、何がよくないのか、というのは異なっている。
それぞれが正常、とおもうものが昇華されよりよくなり、よくないもの、とおもわしきものは浄化され光の中にと吸収される。
それはいわゆる【マァト】からの祝福、と呼ばれしもの。
この現象がおこるとき、
すなわち、それは次代の【マァト】が目覚め、その力を継承したに他ならない。
全ての命在る存在達は邪念を捨て、この光の中にその魂そのものを一度ゆだね、
その魂そのものの昇華と浄化を無意識のうちにとはかることとなる。
そして、それは当然、かの地にもいえることで――

温かい。
突如として温かな淡き金色の光に包まれた。
言葉のあやでも何でもなく、本当に。
広大なる宇宙空間。
その本来ならば漆黒であるべきはずの空間すべてが淡く金色にと輝いている。
黒き漆黒は優しい金色へと変化し、そこにある全ての命そのものを包み込む。

ふわふわとした感覚はおそらく気のせいではないだろう。
どこか懐かしい。
淡き光につつまれ、しかしこの感覚を自分達は知っている。
――　…あれは……
自身の体がそこにあるようでそこにない、精神体のみで何かを視ているような不思議な感覚。
おそらく、実際に視ているのであろう。
懐かしき、遥かなる古の光景、を。

『う～…？』

まどろみの中から目がさめれば、そこは温かな淡き銀色の空間。
きょろきょろと周囲をみれば同じように今誕生したばかりの仲間達の姿。
始めに発した言葉は言葉ともいえない、小さなうめきのようなもの。
ああ、そうか。
これは自分達が誕生したときの……
それぞれの視点において、自分達がこの世界に【生】をうけたときの記憶。

「あなた達の名前は……」

そういって優しく問いかけてくるその声の主の姿はよくみえない。
しかし、この空間そのものがその声そのものだ、と漠然と理解した幼き日。

「あなた達はいずれ、聖と魔。それぞれの代表として、天界と魔界。
それらを創りだした後にその世界において責任ある立場として存在してもらいます。
もっとも、今のあなた達の魂は新しく産まれたばかり。
今はその身に慣れるべく仲間達とともに在ることを優先させること」

天界だの、魔界だの、といわれてもよくわからなかった。
しかし、なぜかするっとその言葉は理屈ではなく理解ができた。
それはどうやら周囲にいた他の仲間達。
数でいえば自分をいれて十二名。

それぞれが相反する属性をもっている、と無意識のうちに理解する。
自分と同じ属性をもつものが六名、そして反する属性をもつものが六名。
そのうちの一人は二人で一人なのかその身の中に二つの精神を宿しているのが視てとれる。
しかし、二つの精神、とはいえ基本は同じ精神が二つに分かれているらしく、

「時がくれば、あなた達の身は二つにわかれるでしょう。……ハデス。そしてゼウス」

名前。
それぞれに振り分けられたその名を与えられることにより、より強き力が満ちてくるのがわかる。

「あなた達がある程度育ったらあなた達の親を創りだしますかね」

…そういえば、自分達の親たる存在は自分達より後から創られたのだったな。
すっかり永き年月の間のそのことを忘れ去っていたが。
それはかつての記憶。
自分達が誕生して間もないときの幼き日の記憶。
そして…思い出す。
あのとき、それぞれが自分自身がどうあるべきか、それぞれに考えて日々を過ごしたことを。
そして……それぞれの界が創られ、責任ある立場として出向いていったその日のこと。
遥かなる過去の出来事であったがゆえに記憶のかなたに飛んでいたある日の記憶。
それが今こうして目の前にてなぜかその光景が記録映像のごとくに

再生されている。
自分達の精神体はどうやら周囲の空間に溶け込んでいるらしく、外側からかつての出来事を視ている。
そんな感覚がうけとれる。

【汝、初心を忘れることなかれ】。

そういわれ、それぞれが役目に熱意と誠意をもって挑もう、そうおもったあの若き日。
あのときの熱意は失われてはいない、とはおもう。
しかし、初心を忘れていないか、といえばそれは忘れてません、とは言い難い。
役目はあくまで役目であり、あのとき自分達が目標とした初心、それは……
『母なる意思の手助けとなること』
それは今も…根本的のその意思は変わっていない。
そういえば、いつだっただろう。
母なる意思のもと、がいつのまにか【王】の意思のもと、にすり替わったのは。
それはごくごく自然のようなことにおもえて疑問も抱かなかった。
しかし、【王】の意思は【母】の意思、とまったく疑わなかったのもまた事実。
素直な魂そのもので見つめれば答えはすぐそこにあった、というのに。
常に、母なる意思は【王】として自分達を見守っていてくれたのだ、というその事実が――

「ゼウス。ハデス。ポセイドン。ヘイムダル。シヴァ。クロノス。
……あなた達が光の属性。
サタン。ベルゼブブ。アスタロト。リバイサアサン。アスモデ

ウス。ベリト。…あなた達が闇の属性。
　そしてシヴァ。ベリト。あなた達はそれぞれ異なる属性を持ち合わせる。
　属性。それはあなた達全てがそれぞれ得意とするもの。そして…司るもの」

あのときから、自分達が司る力が決定された。
そして…その力は、今も変わっていない。
世界が成長すれば自分達が司る力も比例するかのごとくに大きくなる。
それが自分達と世界との関係。
その関係をきちんと把握していない輩もたしかに増えてきてはいる。
……汝、初心を忘れることなかれ、か。
この光は…その初心を自分達に確実に現実にその光景を見せることにより思い出させている。
この光の祝福は、王の…母なる意思のもとか、それともさらに大きな意思のもとなのか…
おそらく、これはどちらの意思もあわさって、のものなのだろう。
今はただ…過去の記憶にただただ我が身をゆだねるのみ……

ほぎゃぁぁっっっっ！
あらあら、元気なこと。
どこか懐かしい声がする。
ほわほわとした温かな感覚。
ゆっくりと目をひらくと同時、自分のありようがすんなりと世界から入り込んでくる。
あれは……全ての命あるものがその姿を垣間見る。

母から生まれ出る子は自らの誕生を、
そしてまた、力が満ち溢れ存在しうる精霊達は自らの誕生の瞬間を。

命あるものには必ずといっていいほどに、誕生の瞬間とそれに伴う出来事、というものが存在する。
光に包まれ、全ての命あるものが垣間見ているのは自分達が世界に生まれ出た瞬間の出来事。
自分達がどのようにしてうまれ、そしてどのように育ったか。
それらはまるで走馬灯のように命あるものたちの目前において繰り広げられる光景。
それぞれの意識はそこにあり、それでいてそこにはない。
各自の意識は周囲に完全に溶け込んでおり、客観的な視点からその光景を眺めているに過ぎない。
それは自分自身のことでありながら、どこか他人のことのような気もしなくもない。
自分からみた視線と外からの視点とでは視た印象も感じる印象もまったくもって異なっている。
かつて、当時はわからなかった親の思い。
そういったものが理解できるようになっている年齢の存在は自分達の過去に思いをはせ、
そしてまた、基本成長というものがない精霊達などは自分達の誕生と、
そして新たなる命の誕生とを照らし合わせ、今の世界の情勢を比較する。
自分達が産まれたときと今の世界とでは同じようでいてどこか違うところもある。
世界は常に変動している、というのがより強く認識させられる。
無機質を核とする精霊にとっては本体が消滅、もしくは壊れないかぎりその生が終わることはない。
あるいみ不老不死、ともいえる存在。

その精神体を輪廻に回したい場合、力あるもの。
すなわち、黄竜である竜王にその自らの器と精神体を分離させてもらうしかない。
そしてそのような行為ができるのは、竜王、もしくは神竜。
そして…魔界と天界における補佐官、ごくごく数は限られている。
それでも、精神体をうしなった核たる無機質にもいずれ力がみち新たな命が宿り世界はめぐる。

命は始まりであり、そしてまた終わりでもある。
この世界においてはその命の循環がより判り易く形式化されているので迷うことはない。
浄化され終えた魂はこの【世界】より【外】にいくことはあれど、過去の記憶は覚えていない。
記憶をもったまま輪廻に回される存在は何らかしらの役目をもって産まれることとなる。
誰の目にも明らかにすることにより、死にたいする恐怖を和らげた。
そしてその仕組みはどのような存在にも言えることであり、
その命がたとえ精霊であろうと人であろうと、行き着く場所は必ず同じ。
そしてまた、新たに誕生するのもまた同じ種族、とはかぎらない。
新たな命が芽吹いてゆくように、魂もまた新たな道を歩みその魂の質をあげてゆく。
いずれ、完全に魂が昇華された力ある魂はどこぞの惑星の意思になりえたり、
もしくは銀河の意思となりえるマァトともなりえる器となる。
別に意識してこの仕組みを作り上げたわけではない。
しかし創ってみればこの仕組みは世界に優しい仕組みだ、と自分なりに理解できる。
自分の中において様々な命あるものが自ら産まれおちてからの光景を視ている。

それは瞬時に理解できる。
しかし、それだけ、ではない。
その光景はこの惑星内だけではない。
この惑星外。
太陽系内におよばず、銀河そのものにおよびその光景が及んでいる、
そう漠然と理解する。
外より今この地をみればこの銀河は金色に輝いており、やがてその
光は年月をかけ、
別の惑星にその光をとどろかすであろう。
それこそ、超新星爆発、とどこぞの人類がいっていた強き光のごと
くに。
しかし、この光は生みだすだけの光ではない。
力を失いかけていた惑星群にとってはあるいみ救いの光でもある。
そのまま光にのみこまれ消滅していっている惑星の数も多々とある。
消滅していった数多のわくせいの命はやがて別の命となり新たな生
をむかえることとなる。
命はどのような存在であっても必ずめぐっている。
終わりがあれば始まりがあるように。
死は終わりであり、そしてまた始まり、でもあるのだから――

覚えているのは、新たな【世界】が出来る、というその言葉。
この【世界】を構成しうる【マァト】より投げかけられた言葉。
かつてその場には別の銀河系が存在した。
しかしその銀河は寿命を迎え、永き年月の果てに新たな再生を果た
した。
その中の一つの【世界】を自分に任せる、という強き意思の意向。
自らがしっかりすればそれに伴い、力は力を呼び寄せる。
主系列星として自らの存在が決まった以上、意思を強くもたなけれ
ば世界は発展しない。

そしてまた、自らの意思に伴い、自らの器となるうる【形】もまた決まってくる。
大きすぎず、かといって小さすぎず。
いくつかの惑星を維持できるほど程度のよい大きさ。
それがどれくらいがいい、なんてものは判らない。
それはあくまで勘であり、一度核をつくり、そこから発展させてゆくより他にない。
しかし核を確定してしまえばそれ以上の成長は見込めない。
だからこそ、他者の同じく主系列星となった意思達の意見を伺いつつ、自らの行く末をきめてゆく。
自分が核を纏い、形をつくるにつれ、周囲にあつまってくるそれぞれの物質。
自らの力に引かれあつまってきたそれらは、やがて原始太陽系、ともよべる姿をとる。
いくつもの惑星ができかけては消滅し、それらは互いにぶつかりあっては新たな物質をまき散らし。
そして…自らの器が完全に固まったのと同時、
自らの力が及ぶ範囲に存在しうる惑星は十ほどとなっていた。
まだそれらの惑星は産まれたばかりであるものの、どうやらすでに意思は遣わされてきているらしい。
すなわち、惑星の意思たる魂がすでにそれらには存在している。
その魂が目覚めるか否かはこれからの自分の実力次第。

「……これは……」

自らの感覚を通じて視える光景。
自らの器である太陽、そこから視える淡く金色に輝く空間に視えるのは、
自分が誕生し、そして自らが守るべき意思達が存在しはじめた始まりの時。

自らの内部に一時存在した生命体は自らの力に耐えられず、
近くの惑星、すなわち、第一惑星へと降り立った。
第一惑星から第二惑星へ、そした第三惑星へ…
順調に全ての惑星の連係がとれるように生命が移動しては発展し、
それぞれが同じ仕組みで発展しそうであったのに、その文明が突如
として暴走。
正確には自分達の力を過信するあまり、自分達の滅びを招いた、と
いっても過言でない。
そこからあらたにそれぞれの惑星の意思達が自分達の力によって生
命を発展させていった。
惑星の意思達にとってはとある時間軸でいうと五十億年と少し前の
出来事。
そしてまた、自らにとってはさらにそれより前の出来事。
始まりがあるからこそ今がある。
そしてそれはこれからもかわることがない。
やがて自分達の寿命もつき、この世界は光に包まれ虚無と化すであ
ろう。
しかし、そこには無だけでなく、新たな有も存在しうる。
一度消滅した世界の仕組みは無意識ながらも次にその場に誕生する
世界にと受け継がれる。
そしてそこに生きていた生命体達の意思の力が強ければ強いほど、
いってみれば念の力がつよければ強いほどその力は繁栄される。
だからこそ今の自分達はここにいる。
話しには聞いたことがあったが、実際に経験してみると、自分を顧
みるいい機会、だとつくづく思う。
今までの出来事がまるで走馬灯のようによみがえる。
忘れていた小さな出来事までも、しっかりと意思の中にと刻まれる。
過去の失敗、そして成功、その全て。
忘れていないつもりでも忘れていた出来事は多々とある。
この光はそれら全てを思い出し、より初心に還るきっかけを与えて

くれる。
それこそ、今新たに生まれ変わったかのごとくに。
これが世界を守り慈しみ導いてゆくべき【マァト】の力。
強制的な【力】によって捻じ曲げるのではない。
あくまでも当事者達の意思力に働きかけ、初心を思い出させる、神聖なる力。
自分もいつかこの域にまで達することができるであろうか。
せめて、自分とともにあることを選んでくれた十の意思達の終わりにはこれくらいの力を与えたい。
重力にとらわれず、浮遊惑星となっている数多の惑星の意思達にも。
それにはまだまだ自分は精進すべきであり、今後もいろいろと学んでゆくこともあるであろう。
その結果、失敗し、数多の惑星に迷惑がかかるかもしれないが。
しかし、失敗を恐れていては先にすすめない。
その行動をおこすときにはあらかじめ意思達に伝えることにより、その影響は最低限に抑えられるはず。
そこまでの力はすでに十の意思達は身につけている。
だからこそ…思う。
いつか、自分も惑星達の寿命がつきたとき、ここまでの力ではないにしろ、
その浄化の光にて彼らを無事に送り出すことができるように…と。

ふわふわとどこかに漂っている感覚。
だけども漂っているのではない。
漂わせている、というほうが正しいか。
自分、という存在の意義。
それは第三惑星における意思、ということには違いない。
だけどもこの空間には覚えがある。

というよりは、むしろとてもいとおしい。
何か重要なことが抜け落ちている。
だけどもそれは自らが決めたことなのだからこれでいいのだ、という思いもある。
本来ならばこの光にて自らが誕生した瞬間から生命の発展に至るまで。
それらの記憶を金色の空間に映し出されることにより、あらたに振り返る、はずなのに。
なぜだろう。
あるのは、ただ金色の空間の中にある銀色の空間。
先ほどまでこの空間内には自分と、次代の器である美希と、
そしてこの超銀河の意思ともいえる欠片のみゅ～。
そういえば、アテナとケレスもいたようだが、この光の奔流の中に取り込まれ、
気がつけばそれぞれあるべき場所に戻っている状態になっているはず。
それぞれが本来、あるべき姿へ戻り、還りゆくこと。
それがこの【光】の特性の一つ。
そのように取り決めた。
全ての命あるものが、自分自身を顧みて、己を振り返る。
それは別に悪いことではない。
むしろ、それはとてもいいことであり、悪事にそまっていた存在ですら、
己の過去の記憶を目の当たりにし、今の己がそれでいいのか、という自己問答をするきっかけとなる。

「さてと…そろそろ、全ての引き継ぎが終わるころ…かしら…ね？」
漠然とだが、なぜか判る。
だからこそ。

「全員がそろうのはあの地がいいでしょうね。やっぱり」

美希が初めてこの地に降り立った、いわばこの【地】にとっても始まりの地。

かかわった存在達をその場に移動するように少しばかり細工し、そのまま意識を周囲に溶け込ませる。

ずっとこのままこの光の中、否、光を感じていれば思いださなくていいことを思い出してしまう。

それは第三の意思として思いださなくていいことなのだ、となぜか理解している自分がいる。

しかし自らの直感は今の今まで外れたことがない。

生命達による進化にしても然り。

そのために不都合がおこりそうなときには、神託のような形で多少口をはさんでいたが…

その結果、かつての地上ではいくつかの宗教、というものが産まれてしまい、

それをきっかけに聖戦、とは名ばかりの宗教戦争が多発してしまっていた。

すべては自らの意思のもと、その言葉を受け取った存在達が行動したに過ぎない。

しかしその教えは歪められ、その教えに沿わないものは異端、とされ。

かつては自らの力の一部をつかえるものたちを異端児として裁判にかけ、

力もつかえない存在達ですらその財産目当てに処刑する、ということもおこってしまった。

ゆえに、新たな世界の後世にあたり、そのような勘違いが芽生えないように、

誰の目にもあきらかのように、神々や魔王達といった力あるものたちを創りだした。

確実なる対象者がいることにより、かつてのような宗教を盾にした戦乱は今のところおこってはいない。
もっとも、そうなりはじめたときに、利用されそうになった存在が粛清に及ぶこと。
そのように理に定めている。
…もっとも、とある国があがめている存在が存在だけに粛清すべき対象者である存在が、
自分には関係ないから、とあるいみ傍観を決め込んでいるので不干渉となってしまっている国もあるが。
かの国の首都を守護するは【門】の子供でもある。
ゆえに信仰の対象者であるヴルトゥームが不干渉でもさほどひどいことにはならなかった。
…このたびの、反旗組織による介入によって他国にまで攻めこむ。
という何ともいいようがない暴挙にでてしまったが、しかしそれらは彼らの本意ではない。
無意識のうちに操られ、そしてそのままいいように道具とされてしまったかの国の上層部達。
すでに操られていた原因たる核は浄化され残ってはいないが、
かの国では国王を始めとした主要たる権力者達がこぞって道具にさせられており、
ゆえに今は自国の混乱を他者に気づかれないようにすることに全神経を使っている。
もっともその情報は筒抜けでしかないのだが、今の今まで自国にしか目を向けていなかったがゆえ、
そういった諜報活動の成果、というものをかの国はあまり判っていない。
しかし頭のかたい存在達が一斉に消えたことにより、かの国も新たな歴史をこれより生み出すであろう。
「かの草原に関係者を全員移動させるとしますか。
…とりあえず、大姉様達の精神体も呼んでおいたほうがいいか

しら？」

本来ならばこの光の中でそのような思考をもつことはまず不可能。
自らを省みるにあたり、自由に行動などできるはずがない。
しかし、三の意思でもある【ディア】にとってそれは些細なこと。
そもそも、どのような【力】でも【かの意思】をとどめることなど
まず不可能、なのだから――

光と闇の楔　～新たなる邂逅～（後書き）

ふとおもうことあり。
ふとおもったんですけど、普通の小説においても然り、原稿用紙にしても然り。
一行４０文字なんですよね…
だいたいその前後目指してやってはいるものの、
完全に４０行以内で収まるように打ち込みしてみようかな？とかおもったり…
以前はきちんとそうしてたんですけどねぇ（苦笑
今回は、それぞれのあるいみ本当の意味？での邂逅（回想）みたいなものです。
前回の光につつまれたときのそれぞれの心情、とでもいいますか。
これがすんだらあとはラストにむかって一直線ｖ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3097r/

光と闇の楔

2011年8月25日20時03分発行